現代日本文學全集
XXXII

近松秋江集

久米正雄集

杉浦非水装幀

改造社版

久米正雄氏近影↓

↑近松秋江氏近影

「近松秋江集」目次

巻頭寫眞（照影）
序詞（筆蹟）……四
別れた妻……五
舞鶴心中……四三
疑惑……七二
黒髪……一一〇
子の愛の爲に……一八八
年譜……二三八

「久米正雄集」目次

卷頭寫眞（照影）
序詞（筆蹟）……二四二
破船（前篇）……二四三
破船（後篇）……三五八
和靈……四三五
受驗生の手記……四五九
三浦製絲場主……四九二
地藏教由來……五三〇
阿武隈心中……五四三
年譜……五六四

近松秋江集

わが藝術に對して深き
自信なきは予の最も
不幸とするところなれども
書きたることは悉く自己を
欺かざるを信ず

秋江

別れた妻

拝啓
お前――別れて了つたから、もう私がお前と呼び掛ける權利は無い。それのみならず、風の音信に聞けば、お前はもう疾に嫁いてゐるらしくもある。もしさうだとすれば、お前はもう取返しの付かぬ人の妻だ。その人にこんな手紙を上げるのは、道理から言つても私が間違つてゐる。けれど、私は、まだお前と呼ばずにはゐられない。どうぞ此の手紙だけではお前と呼ばしてくれ。また斯樣な手紙を送つたと知れたなら大變だ。私はもう何うでも可いが、お前が、さぞ迷惑するであらうから申すまでもないが、讀んで了つたら、直ぐ燒くなり、何うなりしてくれ。
――お前が、私とは、つい眼と鼻との間の同じ小石川區内にゐるとは知つてゐるけれど、丁度今頃は何處に何うしてゐるやら少しも分らない。けれども私は斯うして其の後のことをお前に知らせたい。いや聞いて貰ひたい。お前の顏を見なくなつてから、やがて七月になる。その間には、私には、種々なことがあつた。

一緒にゐる時分は、ほんの些とした可笑いことでも、悔しいことでも即座に打ちまけて何とか彼とか言つて貰はねば氣が濟まなかつたものだ。またその頃はお前の知つてゐる通り、別段に變つたことさへなければ、國の母や兄とけ、近年ほんの一月に一度か、二月に三度ぐらゐしか手紙の往復をしなかつたものだが、去年の秋私一人になつた當座は殆ど二日置きくらゐに母と兄とに交る〳〵手紙を遣つた。

けれども今、此處に打明けようと思ふやうなことは、母や兄には話されない。誰れにも話すことが出來ない。唯せめてお前にだけは聞いて貰ひたい。――私は最後の半歳ほどは正直お前を恨んでゐる。けれどもそれまでの私の仕打に就いては隨分自分が好くなかつた、といふことを、十分に自身でも承知してゐる。だから今話すことを聞いてくれたなら、お前の胸も幾許か晴れよう。また私は、お前にそれを心のありつたけ話し盡したならば、私の此の胸も透くだらうと思ふ、さうでもしなければ私は本當に氣でも狂れるかも知れない。出來るならば、手紙でなく、お前に直に會つて話したい。けれどもそれは出來ないことだ。それゆゑ斯うして手紙を書いて送る。

お前は大方忘れたらうが、私はよく覺えてゐる。あれは去年の八月の末――二百十日の朝であつた。お前は、

「もう話の着いてゐるのに、あなたが、さう何時までも、のんべんぐらりと、ずる〳〵にしてゐては、皆に、私が矢張しあなたに未練があつて、一緒にずる〳〵になつてゐるやうに思はれるのが辛い。少しは、あなただつて人の迷惑といふことも考へて下さい。いよ〳〵別れて了へば私は明日の日から自分で食ふことを考へねばならぬ。……それを思へば、あなたは獨身になれば、何うしようと、足纏ひがなくなつて結句氣樂ぢやありませんか。さうしてゐる内にあなたはまた好きな奥さんなり、女なりありますよ。兎に角今日中に何處か下宿へ行つて下さい。さうでなければ私が柳町の人達に何とも言ひやうがないから。」

と言つて催促するから、私は探しに行つた。

二百十日の蒸暑い風が口の中までジャリ〳〵するやうに砂塵埃を吹き捲つて夏劣けのした身

體は、唯歩くのさへ怠儀であつた。矢來に一處あつたが、私は、主婦を案内に空間を見たけれど、假令何樣な暮しをしようとも、これまで六年も七年も下宿屋の飯は食べないで來てゐるのに、これからまた以前の下宿生活に戻るのかと思つたら、私は、其の座敷の、夏季の間に裏返したらしい疊のモジャ〳〵を見て今更に自分の身が淺間しくなつた。それで、

「多分明日から來るかも知れぬから。」

と言つて歸りは歸つたが、どう思うても急に他へは行きたくなかつた。といふのは強ちお前のお母さんの住んでゐる家――お前の傍を去りたくなかつたといふのではない。それよりも斯うしてゐて自然に、心が變つて行く日が來るまでは身體を動かすのが怠儀であつたのだ。加之錢だつて差當り入るだけ無いぢやないか。歸つて來て、

「どうも可い宿はない。」といふと、

「急にさう思ふやうな宿は何うせ見付からない。松林館に行つたら屹度あるかも知れぬ。彼處ならば知つた宿だから可い。今晩一緒に行つて見ませう。」

と言つて、二人で聞きに行つた。けれども其處には何樣な室もなかつた。其の途中で歩きながら私は最後に本氣になつて種々と言つて見たけれど、お前は、

「そりや、あの時分はあの時分のことだ。……私は先の時分にも四年も貧乏の苦勞して、またあなたで七年も貧乏の苦勞をした。私も最早貧乏には本當に飽き〳〵した。……假令月給の仕事があつたつて私は、文學者は嫌ひ。文學者なんて偉い人は私風情にはもつたいない。私もいゝよもやに引されて、今にあなたが良くなるだらう、今に良くなるだらうと思つてゐても、何時まで經つてもよくならないのだもの。それにあなたぐらゐ猫の眼のやうに心の變る人は無い。一生當てにならない……。」

斯う言つた。そりや私も自分でも、さう偉い人間だとは思つてゐないけれども、お前に斯う言はれて見れば、丁度色の黒い女が、お前は色が黒い、と言つて一口にへこまされたやうな氣がした。屢く以前、

「あなたは何彼に就けて私をへこます。」と言ひ言ひした。私は「あゝ濟まぬ。」と思ひながらも隨分言ひにくいことを屢々言つてお前をこき下した。それを能く覺えてゐる私には、あの時お前にさう言はれても、何と言ひ返す言葉もなかつた。それのみならず全く私はお前に滿六年間、

「今日は。」

といふ想ひを唯の一日だつてさせなかつた。それゆゑさうなくつてさへ何につけ自信の無い私は、その時から一層自分ほど詰らない人間は無いと思はれた。何を考へても、何を見ても、何をしても白湯を飲むやうな氣持もしなかつた。……けれども、斯樣なことを言ふと、お前に何だか愚癡を言ふやうに當る。私は此の手紙でお前に愚癡をいふつもりではなかつた。愚癡は、もう止さう。

兎に角、あの一緒に私の下宿を探しに行つた晩、

「あなたがどうでも家にゐれば、今日から私の方で、あなたのゐる間、親類へでも何處へでも行つてゐる。……奉公にでも行く。……好い緣があれば、明日でも嫁かねばならぬ。……何時迄だつて、女の三十四では今の内早く何うかせねば拾つてくれ手が無くなる。」と言ふから、

「ぢや今夜だけは家にゐて明日からいよ〳〵さうしたら好いぢやないか。さうしてくれ。」と私が頼むやうに言ふと、

「さうすると、またあなたが因緣を付けるから……厭だ。」

「だつて今夜だけ好いぢやないか。」
「ぢやあなた、一足前に歸つていらつしやい。私柳町に一寸寄つて後から行くから。」
私は言ふがまゝに、獨り自家に戻つて、遲くまで待つてゐたけれど、お前は遂に歸つて來なかつた。あれッきりお前は私の眼から姿を隱して了つたのだ。
それから九月、十月、十一月と、三月の間、繰返さなくつても、後で聞いて知つてもゐるだらうが、私は、お前のお母さんに御飯を炊いて貰つた。お前も私の癖は好く知つてゐる。お前の洗つてくれた茶碗でなければ、私は立つて、わざ〳〵自分で洗ひ直しに行つたものだ。分けてもお前のお母さんと來たら不精で汚らしい、そのお母さんの炊いた御飯を、私は三月――三月といへば百日だ、私は百日の間辛抱して食つてゐた。
お前達の方では、これまでの私の性分を好く知り拔いてゐるから、あゝして置けば遂に堪らなくなつて出て行くであらう、といふ量見もあつたのだらう。が私はまた、前にも言つたやうに、自然に心が移つて行くまで待たなければ、何うする氣にもなれなかつたのだ。
それは老母の身體で、朝起きて見れば、遠い井から、雨が降らうが何うせうが、水も手桶に一杯は汲んで、ちやんと縁側に置いてあつた。顏を洗つて座敷に戻れば、机の前に膳も据ゑてくれ、火鉢に火も入れて貰つた。
段々寒くなつてからは、お前がした通りに、朝の焚き落しを安火に入れて、寢てゐる裾から靜と入れてくれた。――私にはお前の居先きは判らぬ。またお母さんに聞いたつて金輪際それを明す譯はないと思つてゐるから、此方からも聞からともしなかつたけれど、お母さんがお前の處に一寸々々會ひに行つてゐるくらゐは分つてゐた。それゆゑ安火を入れるのだけは「あの人は寒がり性だから、朝寢起きに安火を入れてあげておくれ。」とでもお前から言つたのだらうと思つた。
それでも何うも夜も落々眠られないし、朝だつて習慣になつてゐることが、がらりと樣子が變つて來たから寢覺めが好くない。以前屢くお前に話し〳〵したことだが、朝熟く寢入つてゐて知らぬ間に靜と音の立たぬやうに新聞を胸の上に載せて貰つて、その何とも言へない朝らしい新らしい匂ひで、何時とはなく眼の覺めた日ほど心持の好いことはない。まだ幼い時分に、母が目覺しを枕頭に置いてゐて、「これッ〳〵。」と呼び覺してゐたと同じやうな氣がしてゐた。
それが最早、まさか新聞まで寢入つてゐる間に持つて來て下さい、とは言はれないし、假令さうして貰つたからとて、お前にして貰つたやうに、甘くしつくりと行かないと思つたから頼みもしなかつた。が、時々其樣なことを思つて一つさうして貰つて見ようかなどと寢床の中で考へては、ハッと私は何といふ馬鹿だらうと思つて獨りでに可笑くなつて笑つたこともあつたよ。
で、新聞だけは自分で起きて取つて來て、また寢ながら見たが、さうしたのでは唯字が眼に入るだけで、もう面白くも何ともありやしない。……本當に新聞さへ澤山取つてゐるばかりで碌碌讀む氣はしなかつた。
それに、あの不愛想な人のことだから、何一つ私と世間話をしようぢやなし。――尤も新聞も面白くないくらゐだから、そんなら誰れと世間話をしようといふ興も湧かなかつたが――米だつて惡い米だ。私はその朝無闇に早く炊いて、私の起きる頃には、もう可い加減冷めてボロボロになつた御飯に茶をかけて流し込むやうにして朝飯を濟ました。――間食をしない私が、何樣なに三度の食事を樂みにしてゐたか、お前がよく知つてゐる。さうして獨りでつくれ

んとして御飯を食べてゐるのだと思つて來ると
むら〳〵と逆上げて來て果ては、膳も茶碗も霞
んで了ふ。
　寢床だつて暫時は起きたまゝで放つて置く。
床を疊む元氣もないぢやないか。枕當の汚れ
たのだつて、私が一々口を利いて何とかせねば
ならぬ。
　秋になつてから始終雨が降り續いた。あの
古い家のことだから二所も三所も雨が漏つて、
其處ら中にバケツや盥を竝べる。家賃はそれで
も、十日ぐらゐ遲れることがあつても拂つたが、
幾許直してくれと言つて催促してもなか〳〵職
人を寄越さない。寒いから障子を入れようと思
へば、どれも破れてゐる。それでも入れようと
思つて種々にして見たが、建て付けが惡くなつ
て何れ一つ滿足なのが無い。
　私はもう「えゝ何うなりとなれ！」と、パタリ
パタリ雨滴の落ちる音を聞きながら、障子もし
めない座敷に靜として、何を爲ようでもなく、何
を考へようでもなく、四時間も五時間も唯呆然
となつて坐つたなり日を暮すことがあつた。
　何日であつたか寢床を出て鉢前の處の雨戸を
繰ると、あの眞正面に北を受けた縁側に落葉交
りの雨が顏をも出されないほど吹付けてゐる。

それでも私は寢卷の濡れるのをも忘れて、其處
に立つたまゝ凝乎と、向の方を眺めると、雨の中
に遠くに久世山の高臺が見える。そこらは私に
は何時までも忘れることの出來ぬ處だ。それか
ら左の方に銀杏の樹が高く見える。それがつい
四五日氣の付かなかつた間に黃色い葉が見違へ
るばかりにまばらに瘦せてゐる。私達はその
下にも住んでゐたことがあつたのだ。
　そんなことを思つては、私は方々、目的もな
く步き廻つた。天氣が好ければよくつて戸外に
出るし、雨が降れば降つて家内にぢつとしてゐ
られないで出て步いた。破れた傘を翳して出步
いた。
　さうしてお前と一緖に借りてゐた家は、古い
のから古いのから見て廻つた。けれども何の家
の前に立つて見たつて、皆な知らぬ人が住んで
ゐる。中には取拂はれて、以前の跡形もない家
もあつた。
　でも九月中ぐらゐは、若しかお前のゐる氣配
はせぬかと雨が降つてゐれば、傘で姿が隱せる
から、雨の降る日を待つて、柳町の家の前を
行つたり來たりして見た。
　家内にゐる時は、もう書籍なんか讀む氣には
なれない。大抵猫と遊んでゐた。あの猫が面白

い猫で、あれと追駈ツこをして見たり、樹に逐
ひ登らして、それを竿でつゝいたり、弱つた秋
蟬を捕つてやつたり、ほうせん花の實つて彈け
るのを自分でも面白くつて、むしつて見たり、
それを打つけて吃驚させて見たり、そんなこと
ばかりしてゐた。處がその猫も、一度二日も續
いて土砂降りのした前の晩、些との間に何處へ
行つたか、ゐなくなつて了つた。お母さんと二
人で種々探して見たが遂に分らなかつた。
　そんな寂しい思ひをしてゐるからつて、これ
が他の事と違つて他人に話の出來ることぢやな
し、また誰れにも話したくなかつた。唯獨りの
心に閉ぢ籠つて思ひ耽つてゐた。けれどもあの
矢來の婆さんの家へは始終行つてゐた。後に
は「また想ひ遣りですか。……あなたが、あんま
りお雪さんを虐めたから。……またあなたもみ
つちりお働ぎなさい。さうしたらお雪さんが、
此度は向から頭を下げて謝つて來るから。……」
などと言つて笑ひながら話すこともあつたが、
あの婆は、丁度お前のお母さんと違つて口の上
手な人でもあるし、また若い時から隨分種々な
目にも會つてゐる女だから、
「本當にお雪さんの氣の強いのにも呆れる。…
…私だつて、あゝして四十年連れ添うた老爺さ

まと別れは別れたが、あゝ今頃は何うしてゐるだらうかと思つて時々呼び寄せては、私が狀袋を張つたお錢で好きな酒の一口も飮まして、小遣ひを遣つて歸すんです。……私には到底お雪さんの眞似は出來ない。……思ひ切りの好い女だ。それを思ふと雪岡さん、私はあなたがお氣の毒になりますよ……」

と言つて、襦袢の袖口で眼を拭いてくれるから、私のことと婆さんのこととは理由が全然違つてゐるとは知つてゐながら、

「ナニお雪の奴、そんな人間であるもんですか。……それに最早「何うも嫁いてゐるらしい。此度それに逢ひない。」と言ふと、婆さんは此度は思はせ振りに笑ひながら、

「へー……奴なんて、まあ大層お雪さんが憎いと思はれますね。まさか其樣なことはないでせう……私には分らないが……お雪さんだつて、あれであなたの事は色々と思つてゐるんですよ。……あの自家の押入れに預かつてある茶碗なんか御覽なさいな。壞れないやうに丹念に一つ一つ紙で包んで仕舞つてある。矢張しまたあなたと所帶を持つ下心があるからだ。……あんなに細かいことまでしやん／＼とよく氣の利く人はありませんよ。」と、斯う言ひ／＼した。

私は、私とお前との間は、私とお前とが誰れよりもよく知つてゐると知つてゐたから婆さんがそんなことを言つたつて決して本當にはしやしない。隨分度々、お前には引越の手數を掛けたものだが、その度毎に、茶碗だつて何だつて丁寧に始末をしたのは、私も知つてゐる――尤も後になつては、段々お前も、「もう茶碗なんか、丁寧に包まない。」と言ひ出した。それも私はよく知つてゐる。また其れが、いよ／＼別れねばならぬことになつて、一層丁寧に、私の所帶道具の始末をしてくれたのも知つてゐる。

それでゐて、私は柳町の人達よりも一層深い事情を知らぬ婆さんが、さう言つてくれるのを自分でも氣安めだ、と承知しながら、聞いてゐるのが何よりも樂みであつた。私は寄席にでも行くやうなつもりで、何か買つて懷中に入れては婆さんの六十何年の人情の節を付けた調子で「お雪さんだつて、あれであなたのことは思つてゐるんですよ。」を聞きに行つた。

さうしながら心は種々に迷うた。何うせ他へ行かねばならぬのだから家を持たうかと思つて探しにも行つた。出歩きながら眼に着く貸家には入つても見た。が、婆さんを置くにしても、小女を置くにしても私の性分として矢張し自分の心を使はねばならぬ。それに敷金なんかは出來やうがない。少し纏まつた錢の取れる書き物なんかする氣には何うしてもなれない。それなら何うしようといふのではないが、唯何にでも魂魄が奪られ易くなつてゐるから、道を歩きながら、フト眼に留つた見知らぬ女があると、浮々と何處までも其の後を追うても見た。

長く男一人でゐれば、女性も欲しくなるから、矢張し遊びにも行つた。さうかと言つて錢が無いのだから、好くつて面白い處には行けない。それゆゑ錢の入らない珍らしい處を／＼と漁つて歩いた。ならうならば、何もしたくないのだから、家賃とか米代とか、お母さんに酷しく言はれるものは、據なく書き物をして五圓、八圓取つて來たが、其樣な處へ遊びに行く錢は、「あゝ行きたい。」と思へば段々段々と大切にしてゐる書籍を凝乎と、披いて見たり、捻つて見たりして「あゝこれを賣らうか遊びに行かうか。」と思案をし盡して、最後にはさて何うしても賣つて遊びに行つた。矢來の婆さんの處にも度々古本屋を連れ込んだ。さうすれば、でも二三日は少しは心が落着いた。

その時分のことだらう。居先きは明さないが、一度お前が後始末の用ながらに婆さんの處

へ寄つて、私の本箱を明けて見たり、抽斗を引出して見たりして、

「まあ本當に本も大分賣つて了つてゐる、あの人は何日まで、あゝなんだらう。」と言つて、それから私の夜具を戸棚から取出して、襟を摘つて、縁側の日の當る處に乾して、婆さんに晩に取入れてくれるやうに賴んで行つたことをも聞いた。

まあさういふやうにして、ちよび〳〵書籍を賣つては、錢を拵へて遊びにも行つた。けれども、それでも矢張し物足りなくつて、私の足は一處にとまらなかつた。唯女を買つただけでは私の心の濟む處がないのだ。私には一人樂みが出來なければ寂しいのも間切れない。何かさうしてゐる内に、遂々一人の女に出會した。

それが何ういふ種類の女であるか、商賣人ではあるが、藝者ではない、といへばお前には判斷出來よう。一口に藝者でないと言つたつて——さう馬鹿には出來ないよ。遊びやうによつては隨分錢も掛かる。如何な女だつて銘々性格があるから、藝者だから面白いのばかしとは限らない。

その時は、多少纏まつた錢が骨折れずに入つた時であつたから、何時もちよび〳〵本を賣つては可笑な處ばかしを彷徨いてゐたが、今日は少し氣樂な贅澤が爲て見たくなつて、一度長田の友達といふので行つた待合に行つて、その時知つた女を呼んだ。さうするとそれがゐなくつて、他な女が來た。それが初め入つて來て挨拶をした時にちらと見たのでは、それほどとも思はなかつたが、別の間に入つてからよく見ると些と男好きのする女だ。——お前が知つてゐる通り私はよく斯樣なことに氣が付いて困るんだが、——脱いだ着物を、一寸觸つて見ると、着物も、羽織も、ゴリ〳〵するやうな好いお召の新らしいのを着てゐる。此の社會のことには私も大抵目が利いてゐるから、それを見て直ぐ此女は、なか〳〵賣れる女だな。」と思つた。

よく似合つた極くハイカラな束髮に結つて小肥な、色の白い、肌理の細かい、それでゐて血氣のある女で、——これは段々後になつて分つたことだが、——氣分もよく變つたが、顏が始終變る女だつた。——心もち平面の、鼻が少し低いが私の好きな口の小さい——尤も笑ふと少し崩れるが、——眼も平常はさう好くなかつた。でもさう馬鹿に濃くなくつて、柔か味のある眉毛の恰好から額にかけて、何處か氣高いやうな處があつて、泣くか何うかして愛ひに沈んだ時に一寸々々品の好い顏をして見せた。そんな時には顏が小く見えて、眼もしをらしい眼になつた。後には種々なことから自暴酒を飲んだらしかつたが、酒を飲むと締らない大きな顏になつて、三つ四つも古けて見えた。私も「どうして斯樣な女が、さう好いのだらう。」と少し自分でも不思議になつて、終には淺間しく思ふことさへもあつた。肉體も、厚味のある、幅の狹い、さう大きくなくつて、私とはつりあひが取れてゐた。

で、その女をよく見ると、「あゝ斯ういふ女がゐたか。」と思つた。それが、その女が私の氣に染み付いたそも〳〵だつた。さうすると、私の心は最早今までと違つて何となく、自然に優しくなつた。

前と女の指——その指がまた可愛い指であつた、指環も好いのをはめてゐた——を握つたり、もんだりしながら、

「君は大變綺麗な手をしてゐるねえ。さうして斯う見た處、こんな社會に身を落すやうな人柄でもなさゝうだ。それには何れ種々な理由もあるのだらうが出來ることなら、少しも早く斯

様な商賣は止して堅氣になつた方が好いよ。君は何となしまだ此の社會の灰汁が骨まで浸込んでゐないやうだ。惜しいものだ。」斯樣な境涯に身を置く人に同情があるならば、私は何の女に向つても、同じことを言ふ理由だが、私は其の女にだけそれを言つた。さう言ふと、女は指を私に任せながら、默つて聞いてゐた。

「名は何といふの？」

「宮。」

「それが本當の名？」

「え丶本當は下田しまといふんですけれど、此處では宮と言つてゐるんです。」

「宮とは可愛い名だねえ。……お宮さん。」

「えツ。」

「私はお前が氣に入つたよ。」

「さうオ……あなたは何をなさる方？」

「さあ何をする人間のやうに思はれるかね。言ひ當てて御覽。」

さういふと、女は、しを〳〵した眼で、まじまじと私の顏を見ながら、

「さう……學生ぢやなし、商人ぢやなし、會社員ぢやなし、……判りませんわ。」

「さう……判らないだらう。まあ何かする人だらう。」

「でも氣になるわ。」

「さう氣にしなくつても心配ない。これでも惡いことをする人間ぢやないから。」

「さうぢやないけれど……本當言つて御覽なさい。」

「これでも學者を見たやうなものだ。」

「學者！　何學者？……私、學者は好き。」

本當に學者が好きらしう聞くから、

「さうか。お宮さん學者が好きか。此の土地にや、お客の好みに叶ふやうに、頭だけ束髮の外見だけのハイカラが多いんだが、お宮さんは、ぢや何處か學校にでも行つてゐたことでもあるの？」

學生とか、ハイカラ女を好む客などに對しては、その客の氣風を察した上で、女學生上りを看板にするのが多い。――それも商賣をしてゐれば無理の無いことだ。――その女も果して女學校に行つて居つたか、何うかは遂には分らなかつたが所謂學者が好きといふことは、後になるに從つて本當になつて來た。

斯う言つて先方の意に投ずるやうに聞くと、

「本鄕の××女學校に二年まで行つてゐましたけれど、都合があつて廢したんです。」と言ふから、「ぢや何うして斯樣な處に來てゐる……」と訊いたら、斯うしてお母さんを養つてゐると言ふ。お母さんは何處にゐるんだ？」と聞くと、下谷にゐて、他家の間を借りて、裁縫をしてゐるんです、と言ふ。

私は、全然直ぐそれを本當とは思はなかつたけれど、女の口に乘つて、紙屋治兵衞の小春の「私一人を賴みの母樣。南邊の賃仕事して裏家住み……」といふ文句を思ひ出して、お宮の母親のことを本當と思ひたかつた　――否、或は本當と思込んだのかも知れぬ。

お前が斯樣なことをしてお母さんを養はなくつてもほかに養ふ人はないのか？」と訊くと、

「姉が一人あるんですけれど、それは深川のある會社に勤める人に嫁いてゐて先方に人數が多いから、お母さんは私が養はなければならぬ、」としをらしく言ふ。

「さうか。……ぢや宮といふ名は、小說で名高い名だが、宮ちやん、君は小說のお宮を知つてゐるかね？」

「え丶、あの貫一のお宮でせう？　知つてゐます。」

「さうか。まあ彼樣なものを讀む學者だ、私は。」

「ちやあなたは文學者？　小說家？」
「まあ其處等あたりと思つてゐれば可い。」
私もさうかと思つてゐましたわ。……私、文學者とか法學者だとか、そんな人が好き。あなたの名は何といふんです？」
「雪岡といふんだ。」
「雪岡さん。」と、獨り飲込むやうに言つてゐた。
「宮ちやん、年は幾歳？」
「十九。」
十九にしては、まだ二つ三つも若く見えるやうな、派手な薄紅葉色の、シッポウ形の友禪縮緬と水色繻子の狹い腹合せ帶を其處に解き棄てゝゐたのが、未だに、私は眼に殘つてゐる。
暫時そんな話をしてゐた。
それから、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、。私は、さうしてゐる束髮の何とも言へない、後部の、少し潰れたやうな黑々とした形を引入れられるやうに見入つてゐた。
さうして長襦袢と肌襦袢との襟が小さい頸の形に圓く二つ重なつてゐる處が堪らなくなつて、、、、、、、、、、、、、、。
「おい何うかしたの？……何處か惡いの？」と言つて、掌で背をサアッ／＼と撫でてやつた。
すると、女は、
「いえ。」と、輕く頭振を掉つて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、」
、、、、、、、、、、、、。、、、。
私は、最初から斯樣な嬉しい目に逢つたのは、生れて初めてであつた。
水の中を泳いでゐる魚ではあるが、私は急に、そのまゝにして置くのが惜しいやうな氣がして來て、
「宮ちやん。君には、もう好い情人が幾人もあるんだらう。」と言つて見た。
すると、お宮は、眼を瞑つた顏を口元だけ微笑みながら、
「そんなに他人の性格なんか直ぐ分るもんですか。」甘えるやうに言つた。私は性格といふ言葉を使つたのに、また少し興を催して、
「性格！……性格なんて、君は面白い言葉を知つてゐるねえ。」と世辭を言つた。――兎に角漢語をよく用ひる女だつた。
さうして私は、柔かい可愛らしい精神になつて、蒲團を疊む手傳ひまでしてやつた。
他の室に戻つてから、
「また來るよ。君の家は何といふ家？」
「家は澤村といへば分ります。……あゝ、それから電話もあります。電話は浪花のね三四の十二でせう。それに五つ多くなつて、三四十七、三千四百十七番と覺えてゐれば好いんです。」と、立ちながら言つて疲れて、顳顬の邊を蒼くして歸つて行つた。
私は、何だか仄かに樹木に芽が吹いて來たやうな心持がし出して、――忘れもせぬ十一月の七日の雨のバラ／＼と降つてゐた晩であつたが、私も一足後から其家を出て番傘を下げながら――不思議なものだ。その時ふと傘の破れてゐるのが氣になつたよ。種々な屋臺店の邊を

個も並んでゐる人形町の通りに出た。濕とりとした小春らしい夜であつたが、私は自然にふい／＼口淨瑠璃を唸りたいやうな氣になつて、すしをつまうか、やきとりにしようか、と考へながら頭でのれんを分けて露店の前に立つた。

その錢が入つたら――例の箱根から諠しくも言つて來るし、自分でも是非そのまゝにしてゐる荷物を取つて來たり、勘定の仕殘りだのして二三日遊んで來ようと思つてゐたのだが、私はもう箱根に行くのは厭になつた。で、種々考へて見て箱根へは爲替で錢を送ることにして、明日の晩早くからまた行つた。さうして此度は泊つた。――斯ういふ處へ來て泊るなんといふことは、お前がよく知つてゐる、私には殆ど無いと言つて可い。

續けて行つたものだから、お宮は、入つて來て私と見ると、「さては……」とでも思つたか「いらツしやい。」と離れた處で尋常に挨拶をして、此度上げた顏を見ると嬉しさを、キュッと紅をさした脣で小さく食ひ締めて、誰れが來てゐるのか、といつたやうな風に空とぼけて、眼を遠くの壁に遣りながら、少し頸を斜にして、默つてゐた。その顏は今に忘れることが出來ない。好い色に白い、意地の強さうな顏であつた。二十歳頃の女の意地の強さうな顏だから、私には唯美しいと見えた。

私は可笑くなつて此方も暫く默つてゐた。けれども、私はそんなにして默つてゐるのが嫌ひだから、

「そんな風をしないでもつと此方においで。」と言つた。

待つてゐる間、机の上に置いてあつた硯箱を明けて、卷紙に徒ら書きをしてゐた處であつたから机の向に來ると、

「宮ちやん、之れに字を書いて御覽。」

「えゝ書きます。何を？」

「何とでも可いから。」

「何かあなたさう言つて下さい。」

「私が言はないつたつて、君が考へて何か書いたら可いだらう。」

「でもあなた言つて下さい。」

「ぢや宮とでも何とでも。」

「……私書けない。」

「書けないことはなからう、書いてごらん。」

「あなた神經質ねえ。私そんな神經質の人嫌ひ！」

「……………。」

「分つてゐるから、……あなたのお考へは。あなた私に字を書かして見て何うするつもりか、ちやんと分つてゐるわ。ですから、後で手紙を上げますよ。あゝ私あなたに濟まないことをしたの。名刺を貰つたのを、つい無くして了つたの。けれど住所はちやんと憶えてゐます。……××區××町××番地雪岡京太郎といふんでせう。」

斯樣なことを言つた。私に字を書かして見て、何うするつもりかあなたの心は分つてゐます、なんて自惚も強い女だつた。

その晩、待合の湯に入つた。「お前、前入つておいで。」と言つて置いて可い加減な時分に後から行つた。、、、、、、、、、、、、、、、、

尚ほ他の室に行つてから、

「宮ちやん、お前斯ういふ處へ來る前に何處か嫁いてゐたことでもあるの？」

と、具合よく聞いて見た。

「えゝ、一度行つてゐたことがあるの。」と問ひに應ずるやうに返事をした。

日毎、夜毎に種々な男に會ふ女と知りながら、また何れ前世のあることとは察してゐながら、私は自分で勝手に尋ねて置いて、それに就いて返事を聞いて少し嫉ましくなつて來た。

「何ういふ人の處へ行つてゐたの？」
「大學生の處へ行つてゐたの。……卒業前の法科大學生の處へ行つてゐたんです。」
私は腹の中で、「ヘッ！　甘いことを言つてゐる。成程本郷の女學校に行つてゐた、といふから、もしさうだとすれば、何うせ野合者だ。さうでなければ生計しかねて、母子相談での内職か。」と思つたが、何處かさう思はせない品の高い處もある。
「へえ。大學生！　大學生とは好い人の處へ行つてゐたものだねえ。どういふやうな理由から、それがまた斯樣な處へ來るやうになつたの？」
「行つて見たら他に細君があつたの。」
「他に細君があつた！　それはまた非道い處へ行つたものだねえ、欺されたの？」大學生には、なか〳〵女たらしがゐる、また女の方で自分たらされもするから、私は、或は本當かとも思つた。
「えゝ。」と問ふやうに返事をした。
「だつて、公然、仲に立つて世話でもする人はなかつたの？　お母さんが付いて居ながら、大事な娘の身で、そんな、もう細君のある男の處へ行くなんて。」
「そりや、その時は口を利く人はあつたの。ですけれど此方がお母さんと二人きりだつたから甘く皆なに欺されたの。」
私は、女が口から出任せに譃八百を言つてゐると思ひながら、聞いてゐれば、聞いてゐるほど、段々先方の言ふことが眞實のやうにも思はれて來た。さうして憐れな女、母子の爲に、話の大學生が憎いやうな、また羨ましいやうな氣がした。
「ひどい大學生だねえ。お母さんが――さぞ腹を立てたらう。」
「そりや怒りましたさ。」
「無理もない、ねえ。……が一體如何な人間だつた？　本當の名を言つて御覽。」
女は枕に顏を伏せながら、それには答へず、「はあ……」と、さも術なさうな深い太息をして、「だから、私、男はもう厭！」傍を構はず思ひ入つたやうに言つた。「私もその人は好きであつたし、その人も私が好きであつたんですけれど、細君があるから、何うすることも出來ないの。……温順しい、それは深切な人なんですけれど、男といふものは、あゝ見えても皆な道樂をするものですかねえ。……下宿屋の娘か何かと夫婦になつて、それにもう兒があるんですもの。」
「フム。……ぢや別れる時には二人とも泣いたらう。」
「えゝ、そりや泣いたわ。」女は悲しい甘い涙を憶ひ起したやうな少し浮いた聲を出した。「自分でも私はお前の方が好いんだけれど、一時の無分別から、もう兒まで出來てゐるから、何うすることも出來ない、と言つて男泣きに泣いて、私の手を取つて散々あやまるんですもの。――その女の方で何處までも付いてゐて離れないんでせう――私の方だつて、ですから怒らうたつて怒られやしない。氣の毒で可哀さうになつたわ。――でも細君があると知れてから、隨分抓んで苛めてやつた。」
人を傍に置いてゐて、さう言つて獨りで忘れられない、樂い追憶に耽つてゐるやうであつた。私は靜と聞いてゐて、馬鹿にされてゐるやうな氣がしたが、自分もその大學生のやうに想はれて、さうして苛められるだけ、苛められて見たくなつた。
その男は高等官になつて、名古屋に行つてゐると言つた。江馬と言つて段々遠慮がなくなるにつれて、何につけ「江馬さん〳〵。」と言つてゐた。

それのみならず、大學生に馴染があるとか、あつたとかいふのが此の女の誇で、後になつても屢々「角帽姿はまた好いんだもの。」と口に水の溜まるやうな調子で言ひ〳〵した。

すると、お宮は暫時して、フッと顔を此方に向けて、

「あなた、本當に奥様は無いの？」

「あゝ。

「本當に無いの？」

「本當に無いんだよ。」

「男といふものは眞個に可笑いよ。細君があれば、あると言つて了つたら好ささうなものに此方で、「あなた、奥様があつて？」と聞くと、大抵の人があつても無いといふよ。」

「ぢや私も有つても無いと言つてゐるやうに思はれるかい？」

「何うだか分らない。」人の顔を探るやうに見て言つた。

「僕、本當はねえ、あつたんだけれど、今は無いの。

「そうら……本當に？」女はにや〳〵笑ひながら、油斷なく私の顔を見成つた。

「本當だとも。有つたんだけれど、別れたのさ。……薄情に別れられたのさ。……一人で氣樂だよ。……同情してくれ給へ！ 衣類だつて、あれ、あの通り綻びだらけぢやないか。」

「それで今、その女は何うしてゐるの？」お宮の瞳が冴えて、兩頰に少し熱を潮して來た。

「さあ、別れたツきり、自家にゐるか何うしてゐるか、行先なんか知らないさ。」

「本當に？……何時別れたんです？……ちやんと分るやうに仰しやい！ 法學者の處にゐたから、曖昧な事を言ふと、すぐ弱點を抑へるから。……何うして別れたんです？」氣味惡さうに聞いた。

「種々一緒にゐられない理由があつて別れたんだが、最早半歳も前の事さ。」

「へッ、今だつてあなたその女に會つてゐるんでせう。」探るやうに疑つて言つた。

「馬鹿な。別れた細君に何處に會ふ奴があるものかね。」

「さう……でも其の女のことは矢張し思つてゐるでせう。」

「そりや、何年か連添うた女房だもの、少しは思ひもするさ。斯うしてゐても忘れられないこともある。けれども最早いくら思つたつて仕樣がないぢやないか。宮ちやんの、その人のことだつて同じことだ。」

「……私、あなたの家に遊びに行くわ。」

本當に遊びに來て貰ひたかつた。けれども今來られては都合が惡い。

「あゝ、遊びにお出で。……けれども今は一寸家の都合が惡いから、その内私家を持たうと思つてゐるから、さうしたら是非來ておくれ。

私は、その時初めて、お前のお母さんの家を出ようといふ氣が起つた。自然に心の移る日を待つてゐたらお宮を遊びに來さす爲には早く他へ行きたくもなつた。

さう言ふと、お宮はまた少し嘲笑ふやうに、

「都合が惡い！……へッ、矢張しあるんだ。」と微笑んだ。

「ある處かね。あれば仕合せなんだが。」

「ぢや遊びに行く。」

「……………。」

「奥様がなくつて、ぢやあなた何樣な處にゐるの？」

「年取つた婆さんに御飯を炊いて貰つて二人でゐるんだから面白くもないぢやないか。宮ちやんに遊びに來て貰ひたいのは山々だけれど、その婆さんは私が細君と別れた時分のことから、知つてゐるんだから、少しは私も年寄りの手前を愼まなければならぬのに、僅許半歳經つと言

つたつて、宮ちやんのやうな綺麗な若い女に訪ねて來られると、一寸具合が惡いからねえ。屹度變るから變つたらお出で。」

すると、「宮ちやん〳〵」と、女中の低い聲がして、階段の方で急しさうに呼んでゐる。

二人は少しはつとなつた。

「何うしたんだらう？」

「何うしたんだらう？……」二三秒して、「えツ？」と女中に聞えるやうに言つた。「一寸行つて見て來る。」

お宮は、そのまゝ出て行つた。

四五分間して戻つて來た。「此の頃、警察がやかましいんですつて。戸外に變な者が、ウロウロしてゐるやうだから何時這つて來るかも知れないから、若し來たら階下から『宮ちやん〳〵。』ツて聲をかけるから、さうしたら着衣を抱へて直ぐ降りてお出でツて。……ちやんと隱れる處が出來てゐるの。……今燈を點して見せて貰つたら、ずうつと奥の方の物置室の座板の下に疊を敷いて座敷があるの。……」

さう言つて大して驚いてる氣色も見えぬ。また私も驚きもしなかつた。

やがて廊下を隔てた向の間でも、ドシ〳〵と男の足音がしたり、静かな話聲がしたり、衣擦れの音がしたりして段々客があるらしい。

自家に歸れば猫の子もゐない座敷を、手探りにマッチを擦つて、汚れ放題汚れた煎餅蒲團に一人燒棄者のやうになつて寢ねばならぬのに斯うして電燈の明るい室に、湯上りに差向ひで何か食つて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、私はもう一生待合で斯うして暮したくなつた。

「……………。」私は何か言つた。

廊下の足音が偶に枕に響いた。

「……誰れか來やしないか。……一寸お待ちなさい。……そら誰れか其處にゐるよ……」手眞似で制した。警察のやかましいぐらゐ平氣でゐるかと思つたら、また存外神經質で處女のやうに臆病な性質もあつた。

夜が更ければ、更けるほど、朝になればなつても不思議に、、、美しい女であつた。

きぬ〴〵の別れ、といふ言葉は、想ひ出されないほど前から聞いて知つてはゐたが元來堅仁の私は恥づべきことか、それとも恥とすべからざることか、それが果して、何ういふ心持のするものか、此歳になるまで、自分ではつひぞ覺えがなかつたが、その情は生れて初めて成程これが「朝の別れ」といふものかと懷かしいやうな殘り惜しいやうな想ひがした。

「また、おや切りがないから、もう歸りますよ。」と言つて歸つて行つた後で、女中の持つて來た櫻湯に渇いた咽喉を濕して、十時を過ぎて、其家を出た。

午前の市街は騷々しい電車や忙がしさうな人力車や大勢の人間や、眼の廻るやうに動いてゐた。

十一月初旬の日は、好く晴れてゐても、弱々、靜かに暖かであつたが、私には、それでもまだ光線が稍強過ぎるやうで、五體に何とも言ひやうのない好い心地の怠さを覺えて、少しは肉體の處々に冷たい感じをしながら、何といふ目的もなく、唯、も少し永く此の心持を續けてゐたいやうな氣がして浮々と來合せた電車に乘つて遊びに行きつけた新聞社に行つて見た。

長田は旅行に出てゐなかつたが、上田や村田と一しきり話をして、自家に戻つた。お宮が昨夜あなたの處へ遊びに行くと言つた。それには自家を變らねばならぬ。變るには錢が入る。何うして錢を拵へようかと、そんなことを考へながら戻つた。

それから二三日して長田の家に遊びに行くと、長田が――よく子供が歯を出してイーとい

ふことをする、丁度そのイーをしたやうな心持のする嶮しい顔を一寸して、

「此間櫻木に行つたら、此の頃屡くいらつしやいます。泊つたりしていらつしやいます。』……お宮といふのを呼んだと言つてゐた。……僕は泊つたりすることはないが、……お宮といふのは何んな女か、僕は知らないが、……」

その言葉が、私の胸には自分が泊らないのに、何うして泊つた？と言つてゐるやうに響いた。私は苦笑しながら黙つてゐた。長田は言葉を續けて、

「此間社に來て、昨夜耽溺をして來た、と言つてゐたと聞いたから、はあ此奴は屹度櫻木に行つたなと思つたから、直ぐ行つて聞いて見てやつた。」笑ひながら嘲弄するやうに言つた。

私は、返事の仕様がないやうな氣がして、

「うむ……お宮といふんだが、君は知らないのか。」と下手に出た。

他の女ならば何でもないが、此のお宮とのことだけは誰れにも知られたくなかつた。尤も平常から聞いて知つてゐる長田の遊び振りでは或は疾にお宮といふ女のあることは知つてゐるんだが、長田のことだつてつい何でもなく通り過ぎて了つたのかとも思つてゐた。……初めてお宮に會つた時にもう其樣なことが胸に浮んでゐた。それが今、長田の言ふのを聞けば、長田は知つてゐなかつた。知つてゐなかつたとすれば尚ほのこと、知られたくなかつたのだが、既う斯う突き止められた上に、惡戯で岡妬きの強い人間と來てゐるから、此の男の遊び方では早晩何とか爲ずにはゐまい。もしさうされたつて「賣り物、買ひ物」一それを差止める權利は毛頭無い。また多寡があゝいふ商賣の女を長田と張合つたとあつては、自分でも野暮臭くつて厭だ。もし他人に聞かれでもすると、[illegible]外聞が悪い。此處は一つ觀念の眼を瞑つて、長田の心で、ならうやうにならして置くより他はないと思つた。

が、さうは思つたものゝ、自分の今の場合、折角探しあてた寶をむざ／＼他人に遊ばれるのは身を斬られるやうに痛い。と言つて、「後生だ、何うかしないで置いてくれ。」と口に出して頼まれもしないし、頼めば、長田のことだから、一層惡く出て惡戯をしながら、黙つてゐるくらゐのことだ。

と、私はお宮ゆゑに種々心を碎きながら、自家に戻つて、此の心をお宮に知らせる[illegible]はないかと思つた。

[illegible]もなく、[illegible]自家で沈み込んでゐる時分には、何[illegible]して心[illegible]に好きな女でも見付かつたならば、[illegible]るであらう。さうしたら自然に[illegible]になるだらう。讀み書きをするのも何[illegible]でも自分の職業とあれば、それを[illegible]せねば[illegible]立たぬ、と思つてゐた。すると女は[illegible]も見付かつた。けれども見付かると同時に、此度はまた新らしい不安心が湧いて來た。[illegible]く沈んでゐた心が一方に向つて強く動き出したと思つたら、それが樂しいながらも苦しくなつて來た。女からは初めて、心を[illegible]ふやうな、悲しんで訴へるやうな、[illegible]つた手紙を[illegible]。私の心は何時も彼も忘れて了つて、唯其方の方に迷うてゐた。

錢がなければ女の顔を見ることが出來ない。が、その錢を拵へる心の努力は決して容易ではなかつた。——辛抱して錢を拵へる間が待たれなかつたのだ。

さうする内に[illegible]から荷物が屆いた。長く彼方にあるつもりで[illegible]たから、その中には、私に取つて何よりも大切な書籍もあつた。それは[illegible]りは何んなことがあつても賣るまいと思つてゐたが、お宮の[illegible]を見る爲に、それも賣つて惜し

くないやうになつた。
　興味のない紺青の、サンタヤナのライフ・オブ・リーズンは五冊揃つてゐた。此の夏それを丸善から買つて抱へて帰る時には、電車の中でも表紙を披いて見た。オリーブ表紙のサイモンズの伊太利紀行の三冊は、もう幾年来憧れてゐて、それも此の春漸く手に入つたものであつた。座右に放さなかつた、アミイルの日記と、サイモンヅの譯したベンベニュトオ・チェリニーの自叙傳とは西洋に誂へて取つたものであつた。アーサア・シモンスの七藝術論、サンド・ブーブの二名士と賢婦の肖像などもあつた。
　私は其等をきちんと前に並べて、獨り熟々と見惚れてゐた。さうしてゐると、その中に哲人文士の精神が籠つてゐて、何とか言つてゐるやうにも思はれる。或はまた今まで其等が私に嘘を吐いてゐたやうにも思はれる。
　私がそんな書籍を買つてゐる間、お前はお勝手口で、三十日に借金取の斷りばかりしてゐた。私、もとよりそんな書籍を買つて來て、書箱の中に並べ立てて、それを誇と眺めてさへゐれば、それでお前が、私に言つて責めるやうに、「今に良くなるだらう。」と安心してゐるほどの分らず屋ではなかつたが、けれども唯お前と差向つてばかりゐたのでは何を目的に生きてゐるのか、といふやうな氣がして、心が寂しい。けれどもさうして書箱に、そんな種々な書籍があつて、それを時々出して見てゐれば、其處に生き效もあれば、また目的もあるやうに思へた。私だとても米代を拂ふ胸算もなしに、書籍を買ふのでもないが、でもそれを讀んで、何か書いてゐれば、今に良くなるのだらう。」くらゐには思はないこともなかつた。
　これはお宮の髮容姿と、その興味のない、知識らしい氣高い「ライフ・オブ・リーゾン」や「アミイルの日記」などと比べて見て初めて氣の付いたことでもない。
　いや、お前に、私もよもやに引かされて、今にあなたが良くなるだらう、今に良くなるだらうと思つてゐても、何時まで經つてもよくならないのだもの。」と口に出して言はれる以前から自分にも分つてゐた。「良くなる。」といふのは、何が良くなるのだらう？　私には「良くなる。」といふことが、よく分つてゐるやうで、考へて見れば見るほど分らなくなつて來た。
　私は一度は手を振上げて其の本に「何だ、馬鹿野郎！」と、拳固を入れた。けれども果して書籍に入れたのやら、それとも私自身に入れたのやら、分らなくなつた。
　私は、ハツとなつて、振返つて、四邊を見廻した。固より誰れもゐなかつた。誰れもゐやう筈はない。
　身體は自家にゐながら、魂魄は宙に迷うてゐた。お宮を遊びに來させる爲には家を離りたいと思つたが、お前のこと、過去のことを思へば、無惨と、此處を餘處へ行く事も出來ない。お母さんの顏には日の經つごとに「何時までもゐるつもりだ。さツ／＼と出て行け！」といふ色が、一日々々と濃く讀めた。またそれを口に出して言ひもした。私も無理はないと知つてゐた。さうでなくてさへ況して年を取つた親心には、可愛い生みの娘に長い間、苦勞をさした男は、讐もなく、唯、仇敵よりも憎い。お母さんで見れば、私と別れたからと言つて、それならお前を何うしようといふのではない。唯暫時でも傍へ置いときさへすれば好い。それが仇敵がさうしてゐる爲に、娘を傍に置くことが出來ないばかりではない、自分で仇敵に朝晩の世話までしてやらなければならぬ。老母に取つては、それほど逆さまなことはない。
　けれども、私の腹では、假令お前はゐなくつても、此家に斯うしてゐれば、まだ何處か緣が

繋がつてゐるやうにも思はれる。出て了へば、此度こそ最早それきりの縁だ。それゆゑイザとなつては、思ひ切つて出ることも出來ない。さうしてゐて、たゞ一寸逃れにお宮の處に行つてゐたかつた。

四度目であつたか――火影の暗い座敷に、獨り机によつてゐたら、引入れられるやうに自分のこと、お前のこと、またお宮のことが思はれて、堪へられなくなつた。お宮には、錢さへあれば直ぐにも逢へる。逢つてゐる間は他の事は何も彼も忘れてゐる。私は何うしようかと思つて、立上つた。立上つて考へてゐると、もうそのまゝ坐るのも億劫になる。私は少し遲れてから出掛けた。

櫻木に行くと、女中が例の通り愛想よく出迎へたが、上ると、氣の毒さうな顏をして、

「先刻、澤村から、電話でねえ。あなたがいらつしやるといふ電話でしたけれど、他の者の知らない間に主婦さんが、もう一昨日から斷られないお客樣にお約束を受けてゐて、つい今、お酉さまに連れられて行つたから、今晩は遲くなりませうツて。あなたがいらしつたら、一寸電話口まで出て戴きたいつて、さう言つて來てゐるんですが。……」

私は、さうかと言つて電話に出たが、固より「えゝ〳〵。」と言ふより仕方がなかつた。

女中は、商賣柄、「まことにお氣の毒さまねえ。今晩だけ他な女をお遊びになつては如何です。他にまだ好いのもありますよ。」と言つてくれたが、私はお宮を見付けてから、もう他の女は振ぢ向いて見る氣にもならなかつた。

まだ淺い馴染とはいひながら、それまでは行く度に機會好く思ふやうに呼べたが、逢ひたいと思ふ女が、さうして他の客に連れられてお酉さまに行つた、と聞いては、固より有りうちのことと承知してゐながらも、流石に好い氣持はしなかつた。さういふ女を思ふ自分の心を哀れと思うた。

「いや！　また來ませう。」と其家を出て、そのまゝ戻つたが、私は女中達に心を見透かされたやうで、獨りで恥かしかつた。さぞ悄然として見えたことであらう。

戸外は寒い風が、道路に、時々輕い砂塵を捲いてゐた。その晩は分けて電車の音も冴えて響いた。ましてお酉さまと、女中などの言ふのを聞けば、何となく冬も急がれる心地がする。

「あゝ詰らない〳〵。斯うして、浮々としてゐて、自分の行末は何うなるといふのであらう？」

と、そんなことを取留めもなく考へ込んで、もつとで電車の乘換へ場を行き過ぎる處であつた。心柄とはいひながら、夜風に吹き曝されて、私は眼頭に涙を滲ませて歸つた。

それでも少しは、何かせねばならぬこともあつて、二三日間を置いてまた行つた。私は電車に乘つてゐる間が毎時も待遠しかつた。さういふ時には時間の經つのを忘れてゐるやうに面白い雜誌か何か持つて乘つた。

その時は三四時間も待たされた。――此間の晩もあるのに、あんまり來やうが遲いから、來たら些と口說を言つてやらう、それでも最う來るだらうから、一寸寢入つた風をしてゐてやれ、と夜具の襟に顏を隱して自分から寢た氣になつても見る。するとそれも、ものゝ十分間とは我慢しきれないで、またしても顏を出して何度見直したか知れない雜誌を繰披いて見たり、好きもせぬ煙草を無闇に吹かしたり、獨りで焦れたり、嬉しがつたり、浮かれたりしてゐた。

火鉢の佐倉炭が、段々眞赤に熾くなつて、冬の夜ながらも、室の中は濕とりとしてゐる。煙草の烟で上の方はぼんやりと淡靑くなつて、黑の勝つた新らしい模樣の友禪メリンスの小さい幕を被せた電燈が朧ろに霞んで見える。

「學生なの。……それもなか／＼出來ることは出來る人なの……」低い聲で獨り恥辱を辯解するやうに言つた。其男を惡く言ふのは、自分の古傷に觸られる心地がするので、成るたけ靜として置きたいやうである。

「ふむ。文學士。學生……大學生の前から……」私は獨語のやうに言つて考へた。

女も、それは耳にも入らぬらしく、再び机に體を凭して考へ込んでゐる。

「それでその人とは今何ういふ關係なの？……おや大學生の處に、欺されてお嫁に行つたといふのも嘘だつたね。……さうか……。」私は輕く復た獨語のやうに言つた。さうして自分から、美しう信じてゐた女の箔が急に剝けて安ッぽく思はれた。温順しいと思つた女が、惡擦れのやうにも思はれて唯聞いただけでは少し恐くもなつて來た、

「えゝ、嘘なの。……私にはその前から男があるの。……はあッ！」とまた一つ深い、太息をして、更に言葉を續けた。「私は、その男に去年の十二月から、つい此間まで隱れてゐたの。……もう分らないだらうと思つて、一と月ほど前から此地に來てゐると、一昨日また、それが、私のゐる處を探り當てて出て來たの。……私、明後日までにまた何處かへ姿を匿さねばならぬ。……ですから最早今晩きりあなたにも逢へないの。……あなたにこれを上げますから、これを記念に持つて行つて下さい。」と言葉は落着いて温順しいが、仕舞をてきはきと言ひつゝ腰に締めた、茶と小豆の辨慶格子の、もう可い加減古くなつた、短い縮緬の下じめを解いて前に出した。

「へえッ！」と、ばかり、私は寢心よく夢みてゐた樂しい夢を、無理に搖り起されたやうで、暫く呆れた口が塞がらなかつた。けれども、しごきをやるから、これを記念に持つて行つてくれ、といふのは、子供らしいが、嬉しい。何といふ懷かしい想ひをさする女だらう！ 惡い男があればあつても面白い！ と、吾れ識らず棄て難い心持がして、私は、

「だつて、何うかならないものかねえ？ さう急に隱れなくたつて、……私は君と今これッきりになりたくないよ。も少し私を棄てないで置いてくれないか。……何日かも話した通り、此の土地で初めてお蓮を呼んで、あまり好くもなかつたから、二十日ばかりも足踏みしなかつたが、また、ひよッと來て見たくなつて、お蓮でも可いから呼べと思つて、呼ぶと、蓮ちやんがゐなくつて、宮ちやんが來た。それから後は君の知つてゐる通りだ。宮ちやんのやうな女は、また容易に目付からないものだ。」

さう言つて、私は、仰けになつてゐた身體を跳ね起きて、女の方に向いて、蒲團の上に胡坐をかいた。

お宮は、沈んだ頭振を掉つて、

「いけない！ 何うしても隱れなくッちやならない！」堅く自分に決心したやうに底力のある聲で言つて、後は、「ですから、あなたには御氣の毒なの……。私の代りにまたお蓮さんを呼んであげて下さい。」と言葉尻を優しく、愛想を言つた。さうしてまた獨りで思案に暮れてゐるらしい。

私は、喪然して了つた。

「何うでも隱れなくつてはならない！……君には、其樣な逃げ隱れをせねばならぬやうな人があつたのか。……それには何れ一と通りならぬ理由のあることだらうが、何うしてまあ其樣なことになつたの？……そんなことは知らず、僕は眞實に君を想つてゐた。――尤も君を想つてゐる人には、まだ他にも澤山あるのだらうが――けれども、さういふ男があると知れては、幾許思つたつて仕方がない。……ねえ！ 宮ち

やん!……ぢや、せめてお前と、その人との身の上でも話して聞かしてくれないか。……もう大分遲いやうだが、今晩寢ないでも聞くよ。私には扱帶なんかよりもその方が好いよ。……私もさういふことのまんざら分らないこともない。同情するよ。……それを聞かして貰はうぢやないか。……えツ?宮ちやん!……お前の國は本當何處なの?」私は、わざと陽氣になつて言つた。

何處かで、ボーン〳〵と、高く二時が鳴つた。するとお宮は沈み込んでゐた顏を、つい と興奮したやうに上げて、私の問ひに應じて口數少く、その來歷を語つた。

一體お宮は、一口に言つて見れば、單へに譃を商賣にしてゐるからばかりではない、その言つてゐることでも、その所作にも、何處までが眞個で何處までが譃なのか譃と眞個との見界の付かないやうな氣持をさする女性だつた。年も初め十九と言つたが、二十一か二にはなつてゐたらう。心の恐ろしく複雜んで、人の口裏を察したり、眼顏を讀むことの驚くほどはしこい、それでゐてあどけないやうな、何處までも情け深さうな、たより無氣で人に憐れを催さすやうな、譃を言つてゐるかと思ふと、また思ひ詰めれば、至つて正直な處もあつた。それ故その身の上ばなしも、前後辻褄の合はぬことも多くつて、私には何處までが眞個なのか分らない。

お宮といふ名前も、また初めての時、下田しまと言つた本當の名も、皆その他にまだ幾通かある、變名の中の一つであつた。

「だから故郷は栃木と言つてるぢやないか。」お宮はうるささうに言つた。

「さうかい。……だつて僕はさう聞かなかつた。何時か、熊本と言つたのは譃か、福岡と言つてゐたこともあつたよ。……それらは皆知つた男の故郷だらう。」

「そんなことは一々覺えてゐない。……宇都宮が本當さ!」

「何時東京に出て來たの?」

「丁度、あれは日比谷で燒討のあつた時であつたから、私は十五の時だ。下谷に親類があつて、其處に來てゐる頃、その直ぐ近くの家に其男もゐて、遊びに行つたり來たりしてゐる間に次第にさういふ關係になつたの。」

「その人も學校に行つてゐたんだらうが、その時分何處の學校に行つてゐたんだ?」

「さあ、よく知らないけれど、師範學校とか言つてゐたよ。」

「師範學校?師範學校とは少し變だな。」私は、女がまた出鱈目を云つてゐるのか、それとも、さう思つてゐるのか、と、眞個に教育の有無をも考へて見た。

「でも師範學校の免狀を見せたよ。」

「免狀を見せた。ぢや高等であつたか尋常であつたか。」

「さあ、そんなことは何方であつたか、知らない。」

「その人は國は何處なんだ。年は幾つ?何と言ふの?」

「熊本。……今二十九になるかな。名は吉村定太郎といふの。それはなか〳〵才子なの。」

「ふむ。江馬といふ人と何うだ?」

「さうだなあ、才子といふ點から言へば、それや吉村の方が才子だ。」

「男振は?」

「男は何方も好いの。」と、普通に言つた。私は、それを聞いて、腹では一寸妬けた。

「何うも御馳走さま!……宮ちやん男を拵へるのが上手と思はれるナ。……そりやまあ、學生と娘と關係するなんか、ザラに世間にあることだから、惡くばかしは言へない。が、其の吉村といふ人とそんな仲になつて、それから何

……いふ理由で、その男を逃げ隠れたりするやうになつたり、またお前が斯樣な處に來るやうな破目になつたんだ？」私は、何處までも優しく尋ねた。

「吉村も道樂者なの。」と、言ひにくさうに言つた。「あなたさぞ私に愛想が盡きたでせう。」

「ふむ……江馬さんも温順しい、深切な人であつたが、下宿屋の娘と食付いたし、吉村さんも道樂者。……成程お前が、何時か、男はもう厭！と言つたのに無理はないかも知れぬ。……私にしたつて、斯うして斯樣な處に來るのだから矢張り道樂者に違ひない。……が、併しその人達は何ういふ道樂者か知らないが、道樂者なら道樂者として置いて、君が斯樣な處に來た理由が分らないな。私には、私だつて、つき合つて見れば、此の土地にゐる女達も大凡何樣な人柄かくらゐは見當が付く。先達て私の處に初めて寄越した手紙だつて、……、多くの人は、妾その悲境をも知らで、侮蔑を以つて能事とする中に、流石は、同情を以つて、その天職とせる文學者に初めて接したる、その刹那の感想は……——ねえ、ちやんと斯う私は君の手紙を暗記してゐるよ。——その刹那の感想は[illegible]て、あんな手紙を書くのを見ると、何か……女學生[illegible]といふ處だ。何うも君の實家だつて、[illegible]悪い家だとは思はれない。星之宮ちやは本當に品位が高い。隨分大勢女もゐるが、皆な平氣で商賣してゐるのに君は自分が悪[illegible]にゐることをよく知つてゐて、それほど侮蔑を苦痛に感じるほど高慢な人が、何うして斯樣な處に來たの？……可笑いぢやないか。えッ宮ちやん？」

けれどもお宮は、それに就いては、唯、人に饒舌らして置くばかりで、默つてゐた。さうして此度は其の男を辯護するかのやうに、

「そりや初めはその人の世話にも隨分なつたにはなつたの。……あなたの處に送つた、その手紙に書いてゐるやうなことも、私がよく[illegible]を使ふのも皆其の人が先生のやうに教育してくれたの。……けれど、學資が來てゐる間はよかつたけれど、その内學校を卒業するでせう。卒業してから學資がぴつたり來なくなつてから困つて了つて、それから何することも出來なくなつたの。」

「だつて可笑いなあ。君がいふやうに、本當に師範學校に行つてゐて卒業したのなら、高等の方だとすると、立派なものだ。そんな人が、何故自分に手を付けた若い娘を[illegible]に來なければならぬやうにするか。……十五で出て來て間もなくといふんだから、男を知つたのもその人が屹度初めだらう？」

「えゝ、そりや其の人に、、、を破られたの。」

と、それを取返しの付かぬことに思つてゐるらしい。

「はゝゝ、面白いことを言ふねえ。もし事實師範なら、成程學校で卒業して、東京に出たから、ばれるといふこともあるかも知れぬが、今二十九で、五年も前からだといふから、年を積つても可笑い。師範學校ぢやなかろう。……お前の言ふことは何うも分らない。……けれど、まあ其樣な根掘り葉掘り聞く必要はないわねえ。……で、一昨日は何うして此處に來てゐることが分つたの？」

「下谷に居つた家があつて、其處から一昨日は電話が掛かつて、一寸私に來てくれと言ふから、何かと思つて行くと、其處に吉村が、ちやんと來てゐるの。それを見ると、私ははッと思つて本當にぞつとして了つた。」

「ふむ、それで何うした？」

「私は、はッとしたけれど、[illegible]……、何うして默つてゐると、お前は非道い奴だ。俺を[illegible]何と思つてゐる[illegible]

ゐしい標語で言ふから、「何と思つてゐるツて、あなたこそ私を何と思つてゐるの？」と私も鋭く言つてやつた。此方でさう言ふと、此度は向から優しく出るの。さうして何事これまでのやうになつてゐてくれといふの。……私は、嫌だ……」と言つてやつた。其様なことを言ふんなら、私は今此處で本當に殺してくれと言つてやつた。……惡い奴なの。」と、さも〳〵惡者のやうに言ふ。

「さういふと、何う言つた？」

「けれども、何うもすることは出來ないの。……元は能く私を嫌つたもんだが、それでも、此度は余程弱つてゐると思はれて、何うもしなかつた。」お宮は終を獨語のやうに言つた。

「何うして分つたらうねえ？ お前が此處にゐるのが。」

「其處が[illegible]なの、私本當に恐ろしくなるわ。方々探しても、何うしても分らなかつたから、口髭なんか剃つて了つて、一寸見たぐらゐでは見違へるやうにして、私の故郷に行つたの。さうすると、家の者が、皆目何處にゐるか知らない、と旨く言つたけれど、田舎者のことだから間が抜けてゐるでせう。すると、誰れも一寸居ない間に、古村が狀差しを探して見て、その中に私が此處から送つた手紙が見付かつたの。よく〳〵さう言つてあるのに、本當に田舎者は仕様がない。」

「ふむ。お前の故郷まで行つて探した……まあ、餘程深い仲だなあ。……さうして其の人、今何處にゐるんだ？ 何をしてゐるの？」

「さあ、何處にゐるか。其様なこと聞きやしないさ。……それでも私、後で可哀さうになつたから、持つてゐたお錢を二三圓あつたのを、銀貨入れのまゝそつくり遣つたよ。煙草なんかだつて、惡い煙草を喫つてゐるんだもの。……くれて遣つたよ。私」と、ホッと息を吐いて、後は萎れて、しばらく默つてゐる。

「身裝なんか、何様な風をしてゐる？」

「そりや淺い身装をしてゐるさ。」

「どうも私には、まだ十分解らない處があるが、餘程深い理由があるらしい。宮ちやんも少し何うかして上げれば好い。」

「何うかしてあげればいつて、何うすることも出來やしない。際限がないんだもの。」と、お宮は、怒るやうに言つたが、「私もその人の事にはこれまで盡せるだけは盡してゐるの。何あに此方が世話になつたのは、何う風に思はうしてゐる。何倍此方が盡してゐるか知れやしない。……つまり自分でも此の頃漸く、私くらゐな女は、何處を探しても無いといふことが分つて來たんでせうと思ふわ。何う見ても、私は、本當の心は好いんですから、それや私くらゐ盡す女は滅多にありやしないもの。……ですから其の人の心も、他の者には解らなくつても、私にだけは分ることは、よく分つてゐるの。」と、しんみりとなつた。

「うむ〳〵。さうだ。お前の言ふことも、私によく分つてゐる。……宮や二人で餘程苦勞もしたんだらう。」

「そりや苦勞も隨分した。[illegible]の一件で[illegible]もするし……私、終には月給取つて働きに出たよ。」

「へえ、それやえらい。何處に？」

「上野に博覽會のあつた時に、[illegible]に[illegible]といふ葉茶屋があつたでせう。[illegible]に出て[illegible]會計係になつても出るし、それから[illegible]の[illegible]賣店の[illegible]になつて出てゐたこともある。……博覽會に出てゐた時なんか、[illegible]い時分に、私は[illegible]、[illegible]、自分で帳面を書いて、私が[illegible]居なくつても好いやうに[illegible]出て行く。その後で、[illegible]に遅くなつて歸つて見ると、家では、朝から[illegible]ッかりして、何にもしないやうなんですもの。……」

「酒飲みおや仕様がない。　酒亂だな。……えゝ酒亂なの、だから私、斯様な處にゐても、酒を飲む人は嫌ひ。……湯島天神に家を持つてゐたんですが、私、一と頃生傷が絶えたことがなかつた。……そんな風だから、私の方でも、終には、あゝもう厭だ。と思つて、何か氣に入らぬことがあると此方でも負けずに言ふでせう。さうすると、貴樣俺に向つて何言ふんだ、と言つて、煙管で撲つ、ビールの空壜で打つ、煙草盆を投げ付ける。……その煙草盆を投げ付けた時であつた。その時の傷がまだ殘つてゐるんです、此處に小い痣が出來てゐるでせう。何痣なんか、私にやありやしなかつた。」と、言つて、白い額の柔和な眉毛の下を遺恨のあるやうに、輕く指尖で抑へて見せた。それは、あるか、無いかの淡青い痣の痕であつた。

私は、黙つてお宮の言ふのを聞きながら、靜と其の姿態を見成つて、成程段々聞いてゐれば、何うも賢い女だ。標致だつて、他人には何うだか、自分にはまづ氣に入つた。これが、まだそんな十七や八の若い身で元は皆心がらとはいひながら、男の爲に、眞實にさういふ所帶の苦勞をしたかと思へば、唯いぢらしくもなる。自分で氣にするほどでもないが、痣の痕を見れば、寧そ其れがしをらしくも見える。私は、「おゝ」と言つて抱いてやりたい氣になつて、

「ふむ……それは感心なことだが、併しそれほど心掛のよい人が何うして、とどの詰り斯ういふ處へ來るやうになつたんだらうねえ？」

と、またころりと横になりながら、心からさう思つて、餘りうるさく訊くのも、却つて女の痛心に對して察しの無いことだから、さも餘處の女のことのやうに言つてまたしても斯う尋ねて見た。さうして、つい身につまされて、先刻からお宮の話を聞きながらも、私は自分とお前とのことに、また熟々と思入つてゐた。「お雪の奴、いま頃は何處に何うしてゐるだらう？本當に既う嫁いてゐるか。嫁いてゐなければ好いが。嫁いて居ると思へば心元なくてならぬ。最後には自分から私を振切つて行つて了つたのだ。それを思へば憎い。が、元を思へば、皆な此方が苦勞をさしたからだ。あゝ、悪いことをした　彼女も行末は何うなる身の上だらう？淺間しくなつて果てるのではなからうか？」と、しみ〴〵と哀れになつて、斯うして靜としてはゐられないやうな氣がして來て、しばらくは、私達が丁度お宮等二人のやうに思はれてゐたが、「いや〳〵お雪が、お宮と同じであらう道理が無い。自分がまた吉村であらう筈もない。私に、何うして斯ういふ女を、終に斯様な處に來なければならぬやうにするやうな、そんな無慘なことが出來よう！」と、私は少しく我れに返つて、

「けれども其の人間も隨分非道いねえ。そんなにして何處までも、今まで通りに夫婦になつてゐてくれといふほどならば、何故、宮ちやんが其様なにして盡してゐる間に、少しはお前を可愛いとは思はなかつたらうねえ？　お前が可愛ければ、自分でも確乎せねばならぬ筈だ。況して自分が初めて手を付けた若い女ぢやないか！」と、人の事を全然自分を責めるやうに、さう言つた。

お宮はお宮で、先刻から默つて、獨りで自分の事を考へ沈んでゐたやうであつたが、

「ですから私、何度逃げ出したか知れやしない。……その度毎に追掛けて來て捉へて放さないんだもの……はあッ！　一昨日からまた其の事で、彼方此方してゐた。」と、またしても太息ばかり吐いて、屈託し切つてゐる。私には其大學生の乾度江馬と吉村と女との顛末などに就いても、面白い筋があるに違ひない、と、それを探るのを一つは樂しくも思ひながら、種々と腹の中で

考へて見たが、お宮に對つてはその上強ひては聞かうともしなかつた。唯、「で、一昨日は何と言つて別れたの？」と訊ねると、
「まあ二三日考へさしてくれと、可い加減なことを言つて歸つて來た。……ですから、何うしたら好いか、あなたに智慧を借りれば好いの。……」と、其の事に種々心を碎いてゐる所爲かそれとも、唯私に對してさう言つて見ただけなのか、腹から出たとも口前から出たとも分らないやうな調子で言ふから、
「……智慧を借りるツたつて、別に好い智慧もないが、ぢや私が何處かへ隱して上げようか。」
と、女の思惑を察して私も唯一口さう言つて見たが、此方からさう言ふと、女は、
「否！　何うしても駄目！」と頭振を掉つた。
「ぢや仕樣がない。よく自分で考へるさ。……あゝ遲くなつた。もう寢よう。君も寢たまへ。」
と、言ひながら、私は欠伸を嚙み殺した。
「えゝ。」と、お宮は氣の拔けたやうな返事をして、それから五分間ばかりして、
「あなたねえ。濟みませんが、今晩私を此のまま靜ツと寢かして下さい。一昨日から何處の座敷に行つても、私、身體の塩梅が惡いからツて、皆な、さう言つて斷つてゐるの……明日の朝ねえ……はあツ神經衰弱になつて了ふ。」と萎えたやうに言つて、横になつたかと、思ふと、此方に背を向けて、襟に顏を隱して了つた。さうして夜具の中から「あゝ、あなた本當に濟みませんが、電燈を一寸捻つて下さい。」
「あゝ〳〵、よくお寢！」
　と、私は立つて電燈を消したが、頭の心が冴えて了つて眠られない。
　また立つて明るくして見た。お宮は眠つた眼を眩しさうに細く可愛く開いて見て、口の中で何かむにや〳〵言ひながら、一旦上に向けた顏を、またくるりと枕に伏せた。私は此度は幕で火影を包んで置いて、それから腹這ひになつて、煙草を一本摘んだ。それが盡きると、また立ち上つて暗くした。お宮は熟てぐつすり寢入つたらしい。……私は夜明けまで遂々熟睡しなかつた。翌朝、お宮は、
「精神的に接するわ。」と、一つは神經の疲れてゐた所爲もあつたらうが、ひどく身體を使つた。
「ぢや、これツ切り最う會へないねえ。何だか殘り惜しいなあ、お別れに飯でも食べよう。……何が好いか？　かしはにしようか」と、私は手を鳴して朝飯を誂へた。
　お宮は所在なささうに、
「あなた、私に詩を教へて下さい。私詩が好きよツ。」と、言つて自分で賴山陽の「雲乎山乎」を低聲で興の無ささうに口ずさんでゐる。
　その顏を、凝乎と見ると、種々な苦勞をするか、今朝はひどく面窶れがして、先刻洗つて來た、昨夕の白粉の痕が靑く斑點になつて見える。
「……萬里泊舟天草灘……」と唯口の前だけ聲を出して、大きく動かしてゐる下腮の骨が厭に角張つて突き出てゐる。斯うして見れば年も三つ四つ老けて案外、さう標致も好くないなあ！と思つた。
「ねえ！　教へて下さい。」
　と、いふから、「ぢや好いのを教へよう。」と氣は進まないながら、自分の好きな張若虛の「春江花月夜」を教へて遣つた。「これに書いて意味を教へて下さい。」といふから卷紙に記して、講釋をして聞かせて遣つた。「……昨夜閒潭夢落花、可憐春半不還家。江水流春去欲盡……」といふ邊は私だけには大いに心遣りのつもりがあつた。
　飯は濟んだが、私はまだ女を歸したくなかつた。
　お宮は、心は何處を彷徨いてゐるのか分らな

いやうに、懐手をして、果然窓の處に立つて、
つま先きで足拍子を取りながら、何か[illegible]
口の中で言つて、目的もなく戸外を眺めなどし
てゐる。
「あなた、一寸々々。」
と、いふから、「えッ何？」と、立つて、其處
に行つて見ると、
「あれ、子供が體操の眞似をしてゐる……見
てゐると面白いよ。」と、水天宮の裏手で子供
が遊んでゐるのを面白がつてゐる。
私は、「何だ！ 昨夜はあんな思ひ詰めたやうな
ことを言つて、今朝の此のアハノヽとした顔
は？……」と元の座に戻りながら、不思議に思つ
て、またしても女の態度を見返した。
すると、女は、フッと此方を振向いて、窓の
處から傍に寄つて來ながら、
「あなた、私を棄てない？……棄てないで下さ
い！」と、言葉に力は入つてゐるが、それでゐ
て口の前から出るのやら、腹の底から出たのや
ら分らぬやうな調子で言つた。
「[illegible]」と、私も[illegible]やうに返事し
た。
「[illegible]棄てない……」[illegible]
た。
[illegible]う言はれると、此方もつい釣込まれて、
「[illegible]乾度棄てやしないよ。……[illegible]君の方
が棄てないか？」と、言つたが、[illegible]に腹から
「棄てないで下さい！」と言ふのだ[illegible]、思ひ切
つて、何うかして下さい、とでも、も少し打明
けて相談を持掛けないのであらうと、それを歎
かはしく思つてゐた。
さういふと、女は默つてゐた。また以前の通
り何處に心があるのやら分らなかつた。すると
また暫く經つて、「一定つたらあなたに手紙を上
げますから、さうしたら何うかして下さいな」
とさう言ふ。此度は此方で「うむ！」と氣のない
返事をした。
戸外は日が明るく照つて、近所から、チーン
チーンと鍛冶屋の音が強く耳に響いて來る。
何處か少し遠い處で池を掃るやうな[illegible]の音が
する。今朝は何だか濕りつ氣がない。
[illegible]勘定が大分濟んだらう。[illegible]長く居るつ
もりではなかつたから、固より持合せは少かつ
た。私は突然に好い夢を破られた失望の念と共
に、[illegible]しても勘定が不足になつて[illegible]になつて、
[illegible]してゐた[illegible]、[illegible]とも面白くなかつた。
私にはまだ自分で待合で勘定を付けた經驗は
なかつた。お宮を早く歸さねば濟まないと分
つてゐたが、それは出來なかつた。又假令これ
限りお宮を見なくなるにしてもお宮のゐる前で
勘定の不足をするのは何ほ堪へられなかつた。
[illegible]思つて先刻から、一人で神經を惱ましてゐ
たが、ふッと、今日は、長田が社に出る日だ、
彼處に使ひを遣つて、今日は最う十七日だから、
今日書いた今までの分を借りよう。――それは
お前も知つてゐる通りに、始終行つてゐたこ
とだ。――と、さう氣が付いて、手紙の表には
牛込區喜久井町、長田と書いて車夫に、彼方
に行つてから、若しも何處から來たと聞かれて
も、牛込から來た、と言はしてくれと女中に頼
んだ。
暫時して車夫は歸つて來たが、急いで封を切
つて見ると、錢は入つてゐなくつて唯、
「主筆も編輯長もまだ出社せねば、その金は
渡すこと相成りがたし。臥。」
と、長田の[illegible]、汚い新聞社の原稿紙
に、いかにも素氣なく書いてある。私は、それを
見ると、錢の入つてゐない失望と同時に[illegible]
[illegible]を打たれた。成程編輯者が丁度向に行つた
頃か十二時時分であつたらうから、主筆も編輯
長もまだ出社せぬといふのは、さうであらう。
[illegible]、その金は渡すことは相成り難く[illegible]とある

お宮はスッ、と降りて行つたが、直ぐ上つて來て、默つて坐つた。
「おや、もうお歸り。」と、いふと、
「さうですか。ぢやもう歸りますから……種々く御迷惑を掛けました。」と、尋常に挨拶をして歸つて行つた。
その後から、直ぐ此度は、若い三十七八の他の女中が、入り交りに上つて來て、
「本當にお氣の毒さまですねえ。手前共では、もう一切さういふことはしないことにして居りますから、どうぞ惡からず思召してねえ。……あの長田さんにも隨分長い間、御贔屓にして戴いて居りますけれど、あの方も本當にお堅い方で。長田さんにすら、もう一度も其樣なことはございませんのですから。……況してあなたは長田さんのお友達とは承知して居りますけれどついまだ昨今のことでございますし」
と、さも氣の毒さうな顏をして、黄色い聲で、口先で世辭とも何とも付かぬことを言ひながら追立てるやうに、其處等のものを片端からさつさつと片付け始めた。
「えゝ、ナニ。それやさうですとも。私の方が濟まないんです。私は今まで斯樣な處で借りを拵へた覺えがないもんですから、それが極りが惡いんです。」と、心の十分の一を言葉に出して恥辱を自分で間切らした。
「あれ、極りが惡いなんて。些ともそんな御心配はありませんわ。ナニ、斯樣な失禮なことを申すのぢやございませんのですけれどねえ。」と、少し低聲になつた眞似をして、「帳場が、また惡く八ヶ間敷いんですから、私なんか全く困るんですよ。……時々斯うして、お客樣に、女中がお氣の毒な目をお掛け申して。」
「全く貴女方にはお氣の毒ですよ。……いや、何うも長居をして濟みませんでした。」と、私はそんなことを言ひながらも、
「あの女は、もうゐなくなるさうですねえ。……自分ぢや、つい此の間出たばかりだ、と言つてゐたが、そんなことはないでせう。」
と聞くと、
「えゝ居なくなるなんて、ことは、まだ聞きませんが、隨分前からですよ。此度戻つて來たのは、つい此間ですけれど、初めて出てから、もう餘程になりますよ。」
と、言ふ。私は「彼女め! 何處まで譃を吐くか。」と思つて、ます〳〵心に描いた女の箭が褪めた思ひがした。
私は、あの古い外套を膝に置いて、櫻木の人口を出たが、それでも、其れを着てゐれば目に立たぬが、下には、あの、もう袖口も何處も切れた、剝げちよろけの古い米澤琉球の羽織に、着物は例の、燒けて焦茶色になつた秩父銘仙の綿入れを着て、堅く腕組みをしながら玄關を下りた時の心持は、我れながら、自分の見下げ果てた狀態が、歷々と眼に映るやうで、思ひ做しばかりではない、女中の「左樣なら! どうぞお近い内に!」といふ送り出す聲は、背後から冷水を浴せ掛けられてゐるやうであつた。
昨夜は、お宮の來るのが、遲いので、女中が氣にして時々顏を出しては、「……いえ。あの娘のゐる家は、恐ろしい慾張りなもんですから、一寸でも時間があると、御座敷へ出ますものですから、それで斯う遲くなるのです。……本當にお氣の毒さまねえ。でも、もう追付け參りませうから。」と詫びながら柔かいお召のどてらなどを持つて來て貸してくれた。私はそれを、悠然と着込んで待つてゐたのだが、用事のある者は、皆な、それ〴〵忙しさうにしてゐる時分に、日の射してゐる中を、昨夜に變る、今朝の此の姿は、色男の器量を瞬く間に下げて了つたやうで、音も響も耳に入らず、眼に付くものも眼に入らず、消え入るやうに、勢も力もなく、電車

に乗つたが、私は切符を買ふのも氣が進まなかつた。

喜久井町の自家に戻ると、もう彼れ是れ二時を過ぎてゐた。さて詰らなさゝうに戻つて見れば、家の中は今更に、水の退いた跡のやうで、何の氣もしない。何處か、其處らに執り着く物でもゐるのではないかと思はれるやうに、またぞつと寂しさが募る。私は、落ちるやうに机の前に尻を置いて、一ほうッーと、一つ太息を吐いて、見るともなく眼を遣ると、もう幾日も〳〵形付けをせぬ机の上は、塵埃だらけな種々なものが、重なり放題重なつて、何處から手の付けやうもない。それを見ると、また續けて太息が出る。「あゝ！」と思ひながら、脇を向いて、此度は、背を凹ますやうに捻ぢまげて何氣なく、奥の六疊の方を振返ると、あの薄暗い壁際に、矢張りお前の簞笥がある。其れには平常の通り、用簞笥だの、針箱などが重ねてあつて、その上には、何時からか長いこと、桃色甲斐絹の裏の付いた絲織の、古らい前掛に包んだ火熨斗が吊してある。「あの前掛は大方十年も前に締めてゐたのであらう！」と思ひながら私は、あの暗い天井の隅々を、一遍ぐるりッと見廻した。さうして、また簞笥の方に氣が付くと、あの火熨斗も、下の方の、お前の僅ばかりの物で、重なるものの入つてゐさうな處は、最初から錠を下してあつたが、でも上の二つは、――私の物も少しは入つてゐるし、――何か知ら、種々なものがあつて、錠も下さないであつたが、婆さんがしたのか、誰れがしたのか、何時の間にかお前の物は、餘處々々しく、他へ入れ換へて了つて、今では唯上の一つが、抽き差し出來るだけで、それには私の單衣が二三枚あるばかりだ。……

「一體何處に何うしてゐるんだらう？」と、また暫時く其樣なことを思ひ沈んでゐたが、……お宮も何處かへ行つて了ふと、言ふ。加之今朝のことを思ひ出せば、遠く離れた此處に斯うしてゐても、何とも言ふに言へない失態が未だに身に付き纏うてゐるやうで、唯あの土地を、思つても厭な心持がする。ナニ糞！と思つて了へば好いのだが、さう思へないのは矢張り心が殘るのであらう。と、ふつと自分が可笑くもなつて、獨り笑ひをした。

後はまた、それからそれへと種々なことを取留めもなく考へながら、果然縁側に立つて、遠く〳〵の方を見ると、晩秋の空は見上げるやうに高く、清淨に晴れ渡つて、世間が靜かで、冷やりと、自然に好い氣持がして來る。向の高臺の上の方に、何處かの工場の烟りであらう？　細く立迷つてゐる。

それ等を見るともなく見ると、私は、あゝ、自分は秋が好きであつた。誰れに向つても、自分に秋が好きだ〳〵、と言つて、秋をば自分の時節が回つて來たやうに、その靜かなのを却つて樂しく賑かなものに思つてゐたのだが、此の四五年來といふもの、年一年と何の年をも、出して見ても樂しい筈であつた其の秋の樂しかつたことがない。毎年も唯そは〳〵と、心ばかり急がしさうにしてゐる間に經つて行つて了ふ。分けて此の秋くらゐ、斯うして斷條なに寂しい思ひのするのは、初めて覺えることだ。何よりも一つは年齡の所爲かも知れぬ。白髮さへ頻りに眼に付いて來た。加之段々、樂觀してゐたことが、實際とは違つて來るのに、氣が付くに連れて、世の中の事物が、何も彼も大抵興が醒めたやうな心持がする。――昨夕のお宮が丁度それだ。あゝいふ境遇にゐる女性だから、何うせ清淨なものであらう筈も無いのだが、何につけ事物を善く美しう、眞價のやうに思ひ込み勝ちな自分は、あのお宮が最初からさう思はれてならなかつた。すると昨夕から今暁にかけて美しいお宮が普通な淫賣になつて了つた。日の暮

きやうからして次第に粗末な口を利いた。自分の思つてゐたお宮が今更に懷かしい。——が、あのお宮は眞實に去つて了ふか知らん？——自分は何うも夢を眞實と思ひ込む性癖がある。それをお雪は屢々言つて「あなたは空想家だ。小栗風葉の書いた欽哉にそつくりだ。」と、戲談ふやうに「欽哉々々。」と言つては「そんな目算も無いことばかり考へてゐないで、もつと手近なことを、さつ〱と爲さいな」と、たしなめたしなめした。本當に、自分は、今に、もつと良いことがある、今に、もつと良いことがある、と夢ばかり見てゐた。けれども、お雪を空想家だ空想家だと言つた、あのお雪がやはり空想勝ちな人間であつた。「今にあなたが良くなるだらう、今に良くなるだらう、と思つてゐても何時まで經つても良くならないのだもの、」と、あの晩彼女が言つたことは、自分でもつく〴〵と思つたことであらうが、私には、あ、言つたあの調子が[illegible]なやうに思はれて、何時までも忘れられない。彼女も私と[illegible]に、自分の[illegible]運を[illegible]を見てゐたのだ。[illegible]は[illegible]の[illegible]本當にしてやることが出來なかつた。七年の長い間のことを、今では、さも、詰らない事をして年齢はかり取つて了つた、と、[illegible]で居るであらう。[illegible]

どく顏の皺を氣にしては、
「私の眼の下の此の皺は、あなたが拵へたのだ。私は此の皺だけは恨みがある。……これは、あの音羽にゐた時分に、あんまり貧乏の苦勞をさせられたお蔭で出來たんだ。」
　と、二三年來、顏を見ると、時々それを言つてゐた。……そんなことを思ひながら、フッと庭に目を遣ると、[illegible]の傍の、笹混りの草の葉が、[illegible]葉するのは、して、何時か枯れて了つてゐる中に、ひよろ〱ツと、身丈ばかり伸びて、勢の無いコスモスが三四本わなしさうに咲き遅れてゐる。
　これは此の八月の初めに、[illegible]、彼女が後の女中の心配までして置いて、あの關口臺町から此家へ歸つて來る時分に、彼女の庭によく育つてゐたのを、
「あなた、あのコスモスを少し持つて行きますよ。自家の庭に植ゑるんですから。」と、それでも樂しさうに言つて、簞笥や蒲團の包みと一緒に荷車に載せて持つて戻つたのだが、誰れが植ゑたか、[illegible]に植ゑるやうにしてあるのが、今時分になつて、漸つ〱數へるほどの花が[illegible]開いてゐる。
　ああ、さう思ふと、あの戸袋の下の、塀際にある秋海棠も、あの時持つて來たのであつた。先達て中始終秋雨の降り朽ちてゐるのに、後から後からと蕾を付けて、根好く咲いてゐるな、と思つて、折々眼に付く度に、さう思つてゐたが、其れは既う咲き止んだ。
　六月、七月、八月、九月、十月、十一月と、丁度半歳になる。あの後、何うも不自由で仕方が無い。夏は何うせ東京には居られないのだから、旅行をするまでと、言つて、また後を追うて此家に暫時一緒になつて、それから、七月の十八日であつた。いよ〱箱根に二月ばかし行く。それが最後の別れだ、と言つて、立つ前の日の朝、一緒に出て、二人の白單衣を買つた。それを着て行かれるやうに、丁度盆時分からかけて暑い中を、私は早く寢て了つたが、獨り徹夜をして縫ひ上げて、自分の敷蒲團の下に敷いて寢て、敷伸しをしてくれた。朝、眼を覺して見ると、もう自分は起きてゐて、まだ寢衣のまま、詰らなさうに、考へ込んだ顏をして、靜と坐つて煙草を吸つてゐた。もう年が年でもあるし、小柄な、瘦せた、標致も、よくない女であつたが、ああ、それを思ふと、一層みじめなやうな氣がする。それから[illegible]
暫時の[illegible]窓[illegible]、別に[illegible]

ともなかつた。私の方でも口を利くのも怠儀であつた。

「斯うしてゐても際限がないから、……私、最早歸りますよ。ぢやこれで一生會ひません。」と、傍を憚るやうに、低聲で强ひて笑ふやうにして言つた。

私は「うむ！」と、唯一口、首肯くのやら、頭振を掉るのやら自分でも分らないやうに言つた。

それから汽車に乘つてゐる間、窓の枠に頭を凭して、乘客の顔の見えない方ばかりに眼をやつて、靜と思ひに耽つてゐた。――彼地に行つても面白くないから、それで、またしても戻つて來たのだが、斯うしてゐても、あの年齡を取つた、血氣のない、悧巧さうな顔が、明白と眼に見える。……あれから、あゝして、あゝしてゐる間に秋海棠も咲き、コスモスも咲いて、日は流れるやうに經つて了つた。……

それにしても、胸に納まらぬのは、あの長田の手紙の文句だ。歸途に電車の中でも、勢ひその事ばかりが考へられたが、此度のお宮に就いては、惡戯ぢやない嫉妬だ。洒落れた唯の惡戯は長田のしさうなことではない。……碌に錢も持たないで長居をするなどは、誰れに話したつて、自分が惡い。それに就いて人は怨まれぬ。が、あの手紙を書いた長田の心持は、忌々しさに、打壞しをやるに違ひない。何ういふ心であるか、餘處ながら見て置かねばならぬ。もし間違つて、此方の察した通りでなかつたならば、其れこそ幸ひだが　それにしても、他人との間に些とでも荒立つた氣持でゐるのは、自分には斯ら靜と獨りでゐても、耐へられない。兎に角行つて樣子を見よう。自家にゐても何だか心が落着かぬ。

と、また出て長田の處に行つた。

長田は、もう一と月も前から、目白坂の、あの、水田の居たあとの、二階のある家に越して來てゐたから、行くには近かつた。――長田は言ふに及ばず、その水田でも前に言つた△△新聞社の上田でも、村田でも、其の他これから後で名をいふ人達も、凡てお前の一寸でも知つてゐる人ばかりだ。――

長田は、丁度居たが、二階に上つて行くと、平常は大抵此方から何か知ら、初め口を利くのが、その時は、長田に似ず、何か自分で氣の濟まぬことでも、私に仕向けたのを笑ひで間切らすやうに、些と顔に愛嬌をして、

「今日も少し使者の來るのが遲かつたら、好かつたんだが……明日でも自分で社に行くと可い。」と言ふ。

「うむ。なに。一寸相變らずまた小遣が無くなつたもんだから。」と私は、何時も屢くいふ通りに言つて、何氣なく笑つてゐた。すると、長田は、意地惡さうな顔をして、

「他人が使ふ錢だから、そりや何に使つても可い理由なんだ。……何に使つても可い理由なんだ。」と、私に向つて言ふよりも、自分の何か、胸に濟んでゐることに向つて言つてゐるやうに、輕く首肯きながら言つた。

私は「妙なことを言ふ。ぢや確適と此方で想像した通りであつた。」と腹で肯いた。が、それにしても、彼樣なことをいふ處を見れば、今朝の使者が何處から行つたといふことを長田のことだから、最う見拔いてゐるのではなからうか、とも思ひながら、俺が道樂に錢を遣ふことに就いて言つてゐるのだらう、それは飲み込んでゐる、といふやうに、

「はゝ。」と私は抑へた笑ひ方をして、それに無言の答へをしてゐた。けれども何處から使者が行つたかは氣が付いてゐないらしい。

けれども、お宮はあの通り隱れると言つたから、本當にゐなくなるかも知れぬ。若し矢張り

ゐるにしても、ゐなくなると言つて置いた方が事がなくつて好い。無殘々々と人に話すには、惜いやうな昨夕であつたが、寧そ長田に話して了つて、悶鬱きの氣持を和げした方が可い。と私は卽座に決心して、

「例のは、もう居なくなるよ。二三日あと一寸行つたが、彼女には惡い情夫が付いてゐる。初め大學生の處に嫁に行つてゐたなんて言つてゐたが、まさか其樣なことは無いだらうと思つてゐたが、その通りだつた。その男を去年の十二月から、つい此間まで隱れてゐたんだが、其奴がまた探しあてゝ出て來たから二三日中にまた何處かへ隱れねばならぬ、と言つて記念に持つてゐてくれつて僕に古臭いしごきなんかをくれたりした。……少しの間面白い夢を見たが、最早覺めた。あゝ！　あゝ！　もう行かない。」

笑ひ〳〵、さう言ふと、長田は興ありさうに聞いてゐたが、居なくなると言つたので初めて、稍同情したらしい笑顏になつて、私の顏を珍らしく優しく見戍りながら、

「本當に、一寸だつたなあ。……さういふやうなのが果敢き緣といふのだなあ！」

と、私の心を咏歎するやうに言つた。私もそれにつれて、少しじめ〳〵した心地になつて、唯、

「うむ！」と言つてゐると、

「本當にゐなくなるか知らん？　さういふやうな奴は屡くあるんだが、其樣なことを言つても、なか〳〵急に何處へも行きやしないつて。……さうかと思つてゐると、まだ居ると思つた奴が、此度行つて見ると、もうゐなくなつてゐる、なんて言ふことは屡くあることなんだから。」と、長田は自分の從來の經驗から割り出したことは確だと、いふやうに一寸首を傾けて、キッとした顏をしながら半分は獨言のやうに言つた。

私は、凝乎と、その言葉を聞きながら顏色を見てゐると、「その內是非一つ行つて見てやらう。」といふ心が歷々と見える。

「或はさうかも知れない。」と私はそれに應じて答へた。

暫時そんなことを話してゐたが、長田は忙しさうであつたから、早く出て戾つた。

自家に戾ると、日の短い最中だから、四時頃からもう暗くなつたが、何をする氣にもなれず、また矢張り机に凭つて掌に顏を支へたまゝ靜としてゐると、段々氣が滅入り込むやうで、何か確乎としたものにでも執り付いてゐなければ、何處かへ奪はれて行きさうだ。さうして薄暗くなつて行く室の中では、頭の中に、お宮の初めて逢つた晚の、あの驚くやうに、、、、、、。深夜の朧に霞んだ電燈の微光の下に、、、、、、、、、、、、、、、、、、。それから今朝、精神的に接するわ。」と言つた、あの時のこと、その他折によつて、種々に變つて、此方の眼に映つた眉毛、目元口付、むつちりとした白い掌先、くゝれの出來た手首などが明歷々と浮き上つて忘れられない。……それが最早居なくなつて了ふのだと思ふと、尙ほ明らかに眼に殘る。

私は、何うかして、此の寂しく廢れたやうな心持を、少しでも陽氣に引立てる工夫はないものか、と考へながら何の氣なく、其處にあつた新聞を取上げて見てゐると、有樂座で今晚丁度呂昇の「新口村」がある。これは好いものがある。これなりと聞きに行かう、と、八時を過ぎてから出掛けた。

さういふやうにして、お宮に夢中になつてゐたから、勝手に付けては、殆ど每日のやうに行つてゐた矢來の婆さんの家へは此の十日ばかりといふもの、パッタリと忘れたやうに、足踏みしなかつたが、お宮がゐなくなつて見ると、また矢張り婆さんの家が戀しくなつて、久振り

に行つて見た。婆さんは何時も根好く狀袋を張つてゐたが、例の優しい聲で、
「おや、雪岡さん、何うなさいました？　此の頃はチットもお顏をお見せなさいませんなあ。何處かお加減でも惡いのかと思つて、をばさんは心配してゐましたよ。」と言ひながら、眼鏡越しに私を見戍つて、「雪岡さん、頭髮なんかつんで、大層綺麗におめかしして。」と、尙ほ私の方を見て微笑つてゐる。
「えゝ暫時御無沙汰をしてゐました。」
と言つてゐると、
「雪岡さん。あなた旣う好い情婦が出來たんですつてねえ。大層早く拵へてねえ。」と、あの婆さんのことだから、言葉に情愛を付けて面白く言ふ。私は、ハテ不思議だ、屹度お宮のことを言ふのだらうが、何うしてそれが瞬く間に此の婆さんの家にまで分つたらうか、と思つて、首を傾けながら、
「えゝ、少しやそれに似たこともあつたんですが、何うして、それがをばさんに分つて？」
「ですから惡いことは出來ませんよ。……チャンと私には分つてゐますよ。」
「へえ！　不思議ですねえ。」
「不思議でせう。……此の間お雪さんが柳町へ來た序に、また一寸寄つた、と言つて、私の家へ來て、『まあ、をばさん。聞いて下さい。雪岡は何うでせう、旣う情婦を拵へてよ。矢張りまた前年のやうに濱町か蠣殼町らしいの。……あの人のは三十を過ぎてから覺えた道樂だから、もう一生止まない。だから愛想が盡きて了ふ。』ツて、お雪さんが自分でさう言つてゐました。……雪岡さん、本當に惡いことは言はないから淫賣婦なんかお止しなさい。あなたの男が下るばかりだから。」と思ひ掛けもないことを言ふ。
「へーえッ……驚いたねえ！　お雪が、さう言つた。不思議だ！　譃だらう。をばさん可い加減なことを言つてゐるんでせう。お雪が其樣なことを知つてゐる理由がないもの。……」
「不思議でせう！……あなた此の頃、頭髮に付ける香油かなんか買つて來たでせう。ちやんと机の上に瓶が置いてあるといふではありませんか。さうして鏡を見ては頭髮を梳いてゐるでせう。」婆さんは、若い者と違つて、別段に冷かすなどといふ風もなく、さういふことにも言ひ馴れた、といふ風に、初めから終まで同じやうな句調で、落着き拂つて、柔らかに言ふ。
「へーえッ！　其樣なことまで！　何うしてそれが分つたでせう？」
「それから女の處から屢く手紙が來るといふではありませんか。」
「ヘッ！　手紙の來ることまで！」
私は本當に呆れて了つた。さうして自然に頭部に手を遣りながら、「氣味が惡いなあ！……お雪の奴、來て見てゐたんだらうか。……彼奴屹度來て見たに違ひ無い。」
「否、お雪さんは行きやしないが、お母さんが、お雪さんの處へ行つて、さう言つたんでせう。……さうして此の頃何だか、ひどくソハ／＼して、一寸々々泊つても來るつて。歸ると思つて、戶を締めないで置くもんだから不用心で仕樣が無いつて。」
「へーえッ！　あの婆さんが、さう言つた。譃だ！　年寄に其樣なことが、一々分る道理が無いもの。」
「それでも、お母さんが、さう言つたつて。お母さんですよ。違やあしませんよ。……あれで矢張し吾が娘に關したことだから、幾許年を取つてゐても、氣に掛けてゐるんでせうよ、……何うしても雪岡といふ人は駄目だから、お前も、もう其の積りでゐるが好いつて、お雪さんに、さう言つてゐたさうですよ。」

「へーえッ！　さうですかなあ！　本當に濟まないなあ！」私は眞から濟まないと思つた。
「ですからお雪さんだつて、あなたの動靜を遠くから、あゝして見てゐるんですよ。嫉いてなんかゐやしませんよ。」
「さうでせうか？」
「さうですよ。それに違ひありませんよ……此の間も私の話を聞いて、お雪さん、獨りで大層笑つてゐましたつけ……私が、『お雪さん、雪岡さんがねえ』時々私の家へ來ては、婆やのやうに、をばさん〳〵と、くさやで、お茶漬を一杯呼んで下さいと言つて、自家に無ければ、自分で買つて來て、それを私には出來ないから、をばさんに燒いて、むしつてくれつて、箸を持つてちやんと待つてゐるのよ、と言つたら、お雪さんが、『まあ！　其樣なことまでいふの？　本當に雪岡には呆れて了ふ。をばさんを捉へて私に言ふ通りに言つてゐるのよ。』と獨りではあいはあ言つて笑つてゐましたよ。」と婆さんは、言葉に甘味を付けて、靜かに微笑ひながら、さう言つた。

　私も「へーえ、お雪公、其樣なことを言つてゐましたか、」と言ひながら笑つた。

　淫賣婦と思へば汚いけれどお宮は、ひどく氣に入つた女だつたが、彼女がゐなくなつても、お前が時々、矢來へ來て其樣なことを言つて、婆さんと、蔭ながらでも私の噂をしてゐるかと思へば、思ひ做しにも自分の世界が賑かになつたやうで、お宮のことも諦められさうな氣持がして、
「矢張り何處に居るとも言ひませんでしたか。」
と、訊ねて見たが、婆さんも、
「言はないッ！　何處にゐるか、それだけは私が何と言つて聞いても『まあ〳〵それだけは。』と言つて何うしても明さない。」
と、さも〳〵其れだけは、力に及ばぬやうに言ふ。

　さうなると、矢張り私の心元なさは少しも減じない。それからそれへと、種々なことが思はれて、相變らず心の遣りはに迷ひながら、氣拔けがしたやうになつて、またしても、以前のやうに何處といふ目的もなく方々歩き廻つた。けれどもお宮といふ者を知らない時分に歩き廻つたのとはまた氣持が大分違ふ。寂しくつて物足りないのは同じだが、その有樂座の新口村を聽いてから、あの「……薄尾花も冬枯れて……」と、呂昇の透き徹るやうな、高い聲を張り上げて語つた處が、何時までも耳に殘つてゐて、それがお宮を懷かしいと思ふ情を誘つて、自分でも時々可笑いと思ふくらゐ心が浮ついて、世間が何となく陽氣に思はれる。私は湯に入つても、便所に行つても其處を口ずさんで、お宮を思つてゐた。

　明後日までに何とか定めて了はなければならぬ、と、言つてゐたから、二日ばかりは其樣な取留めもないことばかりを思つてゐたが、丁度その日になつて、日本橋の邊を彷徨しながら、有り合せた自動電話に入つて、そのお宮のゐる澤村といふ家へ聞くと、お宮は居なくて、主婦が出て、
「えゝ、宮ちやん。さういふことを言ふにや言つてゐたやうですけれど、まだ急に何處へも行きやしないでせう。荷物もまだ自家に置いてゐるくらゐですもの。……ですから、御安心なさい、また何うか來てやつて下さい。」と、流石に商賣柄、此方から正直に女から聞いた通りを口に出して訊ねて見ても、其樣な惡い情夫の付いてゐることなんか、少しも知らぬことのやうに、何でもなく言ふ。

　兎に角、さう言ふから、おやお宮といふ女奴、何を言つてゐるのか、知れたものぢやない、と思ひもしたが、まだ何處へも行きやしないと

いふので安心した。斯うしてブラ〳〵としてゐても、まだ心の目的の樂しみがあるやうな氣がする。けれども其處にゐるとすれば、何れ長田のことだから、此の間も、あの「本當に何處かへ行くか知らん？」と言つてゐた處を見ると、遣つて行くに相違ない。その仲間より種々な嫖客に出る。これまでは其樣なことが、さう氣にならなかつたが、しごきをくれた心が忘れられないばかりではない、あれからは女が自分の物のやうに思はれてならぬ、と思ひ詰めれば其樣な氣がするが、よく考へれば、その吉村といふ切つても切れぬらしい情夫がある。自分でも「いけない！」といふし、情夫のある者は何うすることも出來ない。と言つて、あゝして、あのまゝ置くのも惜しくつて心元ない。錢がうんと有れば十日でも二十日でも居續けてゐたい。

「あゝ錢が欲しいなあ！」と、私は盜坊といふものは、斯ういふ時分にするものかも知れぬ、と其樣なことまで下らなく思ひあぐんで、日を暮らしてゐた。

そんなにして自家に獨りでゐても何事にも手に付かないし、さうかと言つて出歩いても心は少しも落着かない。それで、またしても自動電話に入つてお宮の處に電話を掛けて見る。

「宮ちやん、お前あんなことを言つてゐたから、私は本當かと思つてゐたのに、主婦さんに聞くと、何處にも行かないといふぢやないか。君は譃ばつかり言つてゐるよ。君がゐてくれれば僕には好いんだが、あの時は喪然して了つたよ。」

と恨むやうに言ふと、

「えゝ、さう思ふには思つたんですけれど、種々都合があつてねえ。……それに自家の姉さんも、まあ、も少し考へたが好いといふしねえ。……あなたまた入らしつて下さい。」

「あゝ、行くよ。」

と、言ふやうなことを言つて、何時までも電話で話をしてゐた。行く錢が無い時には、私は五錢の白銅一つで、せめて電話でお宮と話をして蟲を堪へてゐた。電話を掛けると、大抵は女中か、主婦かが初め電話口に出て、「今日、宮ちやんゐるかね？」と聞くと、「えゝ、ゐますよ。」と言つて、それからお宮が出て來るのだが、その出て來る間の、たつた一分間ほどが、私にはぞいゝくぞくとして待たれた。お宮が出て來ると、毎時も、眼を瞑つたやうな靜かな、優しい聲で、

「えゝ、あなた、雪岡さん？ わたし宮ですよ。」

と、定つてさう言ふ。その「わたし宮ですよ。」といふ、何とも言ふに言へない句調が、私の心を溶かして了ふやうで、それを聞いてゐると、少し細長い笑渦の出來た、物を言ふ口元が歷々と眼に見える。

「ぢやその内行くからねえ。」と、言つて、「左樣なら。切るよ。」と、言ふと、「あゝ、もし〳〵。雪岡さん！」と呼び掛けて、「切らせない。此度は、さよなら！ ぢや、いらつしやいな！ 切りますよ。」と、向から言ふと、私が、「あゝもし〳〵、もし〳〵。宮ちやん〳〵、一寸々々。まだ話すことがあるんだよ。」と何か話すことがありさうに言つて追掛ける。終には、わざと、兩方で、

「左樣なら！」

「さよなら！」

を言つて、後を默あつてゐて見せる。私は、さうして交換手に「もう五分間來ましたよ。」と、催促をせられて、そのまゝ惜しいが切つて了ふこともあつたが、後には、あとからまた一つ落して、續けることもあつた。白銅を三つ入れたこともあれば、氣にして、十錢銀貨を入れたこともあつた。私は、始終白銅を絶やさないやうにしてゐた。

珍らしく一週間も經つて、櫻木では、此の間

のやうなこともあつたし、元々其家は長田の定宿のやうになつてゐる處だから、また何様なことで、何が分るかも知れないと思つて、お宮に電話で、櫻木は何だか厭だから、是非何處か、お前の知つた他の待合にしてといふと、それではこれ〳〵の處に菊水といふ、櫻木ほどに淸潔ではないが、私の氣の置けない小い家があるから、と、約束をして、私は、ものの一と月も顔を見なかつたやうな、急々した心持をしながら、電話で聞いただけでは、其の菊水といふ家もよく分らないし、一つは澤村といふ家は何様な家か見て置きたいとも思つて、人形町の停留場で降りて、行つて見ると、成程蠣殼町二丁目十四番地に、澤村ヒサと女名前の小い表札を打つた家がある。古ぼけた二階建の棟割り長屋で、狹い間口の硝子戸をぴつたり締め切つて、店前に、言ひ譯のやうに、數へられるほど「敷島」だの「大和」だのを竝べて、他に半紙とか、狀袋のやうなものをも少しばかり置いてゐる。ぐつと差し出した軒燈に、通りすがりにも、よく眼に付くやうに、向つて行く方に向けて赤く大きな煙草の葉を印に描いてゐる。「斯ういふ處にゐて働ぎに出るのかなあ!」と、私は、穢いやうな、淺間しいやうな氣がして、暫時戸外に立つたまゝ靜と内の様子を見てゐた。

「御免!」

と言つて、私は出て來た女に、身を隱すやうにして、低聲で、「私、雪岡ですが、宮ちやんゐますか。」と、言ひながら、愛想に「敷島」を一つ買つた。「あゝ、さうですか。ぢや一寸お待ちなさい!」と、次の間に入つて行つたが、また出て來て、「宮ちやん、其方の戸外の方から行きますから。」と、密々と言ふ。

私は何處から出て來るのだらう? と思つて、戸外に突立つてゐると、直ぐ壁隣の洋食屋の先きの、廂合ひのやうな薄闇りの中から、ふいと、眞白に塗つた顔を出して、お宮が、

「ほゝ、あはゝゝゝ。……雪岡さん?」と懷かしさうに言ふ。

變な處から出て來たと思ひながら、「おや! 其様な處から!」と言ひながら、傍に寄つて行くと、「あはゝゝゝ暫くねえ! 何うしてゐて?」と、向から寄り添うて來る。

其邊の火灯で、夜眼にも、今宵は、紅をさした脣をだらしなく開けて、此方を仰くやうにして笑つてゐるのが分る。私は外套の胸を、女の胸に押付けるやうにして、

「何うしてゐたかッて?……電話で話した通りぢやないかッ……人に入らぬ心配さして!」

女は「あはゝゝ」と笑つてばかしゐる。

「おい! 菊水といふのは何處だい?」

「あなたあんなに言つても分らないの? 直ぐ其處を突き當つて、一寸右に向くと、左手に狹い横町があるから、それを入つて行くと直き分つてよ。……その横町の入口に、幾個も軒燈が出てゐるから、その内に菊水と、書いたのもありますよ。よく目を明けて御覽なさい!……先刻、私、お湯から歸りに寄つて、あなたが來るから、座敷を空けて置くやうに、よくさう言つて置いたから……二疊の小さい好い室があるから、早く其室へ行つて待つていらつしやい。私、直ぐ後から行くから。」と嬉々としてゐる。

「さうか。ぢや直ぐお出で!……畜生! 直ぐ來ないと承知しないぞッ!」と、私は一つ睨んで置いて、菊水に行つた。

お宮は直ぐ後から來て、今晩はまだ早いから、何處か其處らの寄席にでも行きませう、といふ。それは好からうと、菊水の老婢を連れて、藥師の宮松に呂淸を聽きに行つた。

私は、もうぐつと色男になつたつもりになつて、蟇口をお宮に渡して了つて、二階の先きの方に上つて、二人を前に坐らせて、自分はその

背後に横になつて、心を遊ばせてゐた。

此間、有樂座に行つた時には、此座へお宮を連れて來たら、さぞ見素ぼらしいであらう、と思つたが、此席では何うであらうか、と、思ひながら、便所に行つた時、向側の階下の處から、一寸お宮の方を見ると、色だけは人並より優れて白い。

その晩、

「吉村といふ人、それから何うした？」、聞くと、

「矢張りそのまゝゐるわ。」と、言ふ。

「そのまゝツて何處にゐるの？」

「何處か、柳島の方にゐるとか言つてゐた。……私、本當に何處かへ行つて了ふかも知れないよ。」と、萎れたやうに言ふ。

私は、居るのだと思つてゐれば、また其樣なことをいふ、と思つて、はつと落膽しながら、

「君の言ふことは、始終變つてゐるねえ。も少し居たら好いぢやないか。」と、私は、斯うしてゐる內に何うか出來るであらうと思つて、引留めるやうに言つた。けれども女は、それには答へないで、

「……私また吉村が可哀さうになつて了つた。……昨日、手紙を讀んで私眞個に泣いたよ。」

と、率直に、此の間と打つて變つて今晩は、染々と吉村を可哀さうな者に言ふ。

さう言ふと、妙なもので、此度は吉村とお宮との仲が、いくらか小憎いやうに思はれた。

「ヘッ！　此の間、彼樣なに惡い人間のやうに言つてゐたものが、何うしてまた、さう遽かに可哀さうになつた？」私は輕く冷かすやうに言つた。

「……手紙の文句がまた甘いんだもの。そりや文章なんか實に甘いの。才子だなあ！　私感心して了つた。斯う人に同情を起さすやうに、同情を起さすやうに書いてあるの。」と、獨りで感心してゐる。

「へーえ。さうかなあ。」と、私はあまり好い心持はしないで、氣の無い返事をしながらも、腹では、フン、文章が甘いッて、何れほど甘いんであらう？　馬鹿にされたやうな氣もして、

「お前なんか、何を言つてゐるか分りやしない。ぢや向の言ふやうに、一緒になつてゐたら好いぢやないか。何も斯樣な處にゐないでも。」

さういふと女は、

「其樣なことが出來るものか。」と、一口にけなして了ふ。

私は、これは、愈々聞いて見たいと思つたが、その上强ひては聞かなかつた。

お宮のことに就いて、長田の心がよく分つてから、以後その事に就いては、斷じて此方から口にせぬ方が可いと思つたが、誰れの處といふことなく寂しいと思へば、遊びに行く私のことだから、……先達てから二週間ばかりも經つて久振りに遊びに行くと、丁度其處、饗庭――が來てゐた。これもお前の、よく知つた人だ。――が來てゐたが、何かの話が途切れた機會に、長田が、

「お宮は其の後何うした？」と訊く。

私は、なるたけ避けて靜として置きたいが、腹一杯であつたから、

「もう、お宮のことに就いては、何も言はないで置いてくれ。」と、一寸左の掌を出して、猪む眞似をして笑つて、言ふと、長田は唯じろじろと、笑つてゐたが、暫時して、

「あの女は寢顏の好い女だ。」

と、一口言つて私の顏を見た。

私は、その時、はつとなつて、「ぢや愈々」と思つたが强ひて何氣ない體を裝うて、

「ぢや、買つたのかい？」と輕く笑つて訊いた。

「うむ！　……一生君には言ふまいと思つてゐたけれど、……此間行つて見た。ふゝん！」と嘲笑ふやうに、私の顏を見て言つた。

「まあ可いさ。何うせ種々の奴が買つてゐるんだからね……支那人にも出たと言つてゐたよ。」

私は固より好い氣持のする理由はないが、何うせ斯うなると承知してゐたから、案外平氣で居られた。すると、長田は、

「ふゝん、そりや其樣なこともあるだらうが、知らない者なら幾許買つても可いが、併し吾々の内の知つた人間が買つたことが分ると、最早連れて來ることも何うすることも出來ないだらう！……變な氣がするだらう。」と、ざまを見ろ！好い氣味だといふやうに、段々恐い顏をして、鼻の先で「ふゝん！」と言つてゐる。

「變な氣は、しやしないよ。」と避けようとすると、

「ふゝん！それでも少しは變な氣がする筈だ。……變な氣がするだらう！」負け吝みを言ふな、嘘だらう、といふやうに冷笑する。

それでも私は却つて此方から長田を宥めるやうに、

「可いぢやないか。支那人や癩病と違つて君だと清淨に素性か分つてゐるから。……まあ構はないさ！」と苦笑に間切らして、見て見ぬ振りをしながら、一寸長田の顏を見ると、何とも言へない、執念深い眼で此方を見てゐる。私は、慄然とするやうな氣がして、これはなるたけ障らぬやうにして置くが好いと思つて、後を默つてゐると、先は、反對に、何處までも、それを追掛けるやうに、

「此の頃は吾々の知つた者が、多勢彼處に行くさうだが、僕は、最早あんな處に餘り行かないやうにしなければならん。……安井なんかも、屢く行くさうだ。それから生田なんかも時々行くさうだから、屹度安井や生田なんかも買つてゐるに違ひない。生田が買つてゐると、一番面白いんだが。あはゝゝ。だから知つた者は多い。あはゝゝ。」と、何處までも引縮んで厭がらせを存分に言はうとする。生田といふのは、自家に長田の弟と時々遊びに來た、あの眼の片眼惡い人間のことだ。……あんまり執拗いから、私も次第に胸に据ゑかねて、此方が初め惡いことでもしはしまいし、何といふ無理な厭味を言ふ、と、今更に呆れたが、長田の面と向つた、無遠慮な厭味は年來耳に馴れてゐるので尙ほ靜と耐へて、

「君と靑山とは、一生岡燒をして暮す人間だね。」と、矢張り笑つて居らうとして、ふッと長田と私との間に坐つてゐる右手の襲庭の顏を見ると、襲庭が、何とも言へない獨り居り場に困つてゐるといふやうな顏をして私の顏を凝乎と見てゐる。その顏を見ると自分は泣き顏をしてゐるのではないか、と思つて、悄氣た風を見せまいと一層心を勵まして顏に笑ひを出さうとしてゐると、長田は、ますます癖の白い齒を、イーンと露して嬲り殺しの止めでも刺すかのやうに、荒い鼻呼吸をしながら、

「雪岡が、、、奴だと思つたら厭な氣がしたが、ちえッ！此奴姦通するつもりで、、、、れと思つて汚す積りで、、、、つた。はゝゝは。君とお宮とを侮辱するつもりで、、、、つた。」とせゝら笑ひをして、惡毒く厭味を言つた。

けれども私は、「何うしてそんなことを言ふのか？」と言つた處が詰まらないし、立上つて喧嘩をすれば野暮になる。それに忌々しさの嫉妬心から打壞しを遣つたのだ、といふことは十分に飲込めてゐるから、何事に就けても嫉妬心が強くつて、直ぐまたそれを表に出す人間だが其樣なにもお宮のことが燒けたかなあ、と思ひながら、私は長田の嫉妬心の強いのを今更に恐れてゐた。

それと共に、また自分の知つた女をそれまでに羨まれたと思へば却つて長田の心が氣の毒な

やうな氣も少しは、して、それから、さういふ毒毒しい侮辱の心持でしたと思へば、何だかお宮も可哀さうな、自分も可哀さうな氣分になつて來た。私はそんなことを思つて打壞された痛い心と、面と向つて突掛られる荒立つ心とを凝乎と取鎭めようとしてゐた。他の二人も暫時默つて座が變になつてゐた。すると饗庭が、

「あゝ、今日會ひましたよ。」と、微笑としながら、私の顔を見て言ふ。

「誰れに？」と、聞くと、

「奧さんに。つい、其處の山吹町の通りで。」

すると長田が、横合から口を出して、「僕が會へば好かつたのに。……さうすれば面白かつた。ふゝん。」といふ。私は、それには素知らぬ顔をして、

「何とか言つてゐましたか。」

「いえ。別に何とも。……唯皆樣に宜く言つて下さいつて。」

すると、また長田が横から口を出して、

「ふゝん。彼奴も一つ俺れが口說いたら何うだらう。はゝツ。」と、毒々しく當り散す。

それを聞いて、假令口先だけの戲談にもせよ、ひどいことを言ふと思つて、私は、ぐつと癪に障つた。今まで散々種々なことを、言ひ放題言はして置いたといふのにお宮は何うせ賣り物買ひ物の淫賣婦だ。長田が買はないつたつて誰れが買つてゐるのか分りやしない。先刻から默あつて聞いてゐれば、隨分人を嘲弄したことを言つてゐる。それでも此方が強ひて笑つて聞き流して居ようとするのは、其樣な詰まらないことで、男同志が物を言ひ合つたりなどするのが見つともないからだ。

お雪は今立派な商人の娘と、いふぢやない。またあゝいふ處にも手傳つてもゐたし以前嫁いてゐた處もあんまり人聞きの好い處ぢやなかつた。あれから七年此の方、自分と、彼なつて斯うなつたといふ筋道を知つてゐるが爲に、人を卑んでそんなことを言ふが、假令見る影もない貧乏な生計をして來ようとも、また其の間が何ういふ關係であつたらうとも、苟めにも人の妻でゐたものを捉へて、「彼奴も、一つ俺が口說いたら何うだらう。」とは何だ。此方で何處までも溫順しく苦笑で、濟してゐれば付け上つて蟲けらかなんぞのやうに思つてゐる。いつて自分の損になるやうな人間に向つては、其樣なことは、おくびにも出し得ない癖に、一文もたそくにならないいやくざな人間だと思つて、人を馬鹿にしやがるないツ。

と、忽ちさう感じて湧々する胸を撫でるやうに堪へながら、向の顔を凝乎と見ると、長田は、その淺黑い、意地の惡い顔を此方に向けて、じろじろと視てゐる。

「彼奴も俺が口說いたら何うだらう。」と、いふその自暴糞な出放題な言ひ草の口裏には、自分の始終行つてゐる蠣殼町で、此方が案外好い女と知つて、しごきなどを貰つた、といふことが嫉けて嫉けて、焦れ〳〵して、それで其樣なことを口走つたのだといふことが、明歷と見え透いてゐる。

さう思つて、また凝乎と長田の顔色を讀みながら、自分の波のやうに騷ぐ心を落着け〳〵してゐたが、饗庭は先刻その長田の言つた言葉を聞くと、同時にまた氣の毒な顔をして私を見てゐたが、二人が後を默つてゐるので、暫時經つてから何と思つたか、

「あの人可いぢやありませんか。私なんか本當に感服してゐたんですよ。感服してゐたんですよ……」と、誰れにも柔かな饗庭のことだから、平常略ぼ知つてゐる私の離別に事寄せてその場の私を輕く慰めるやうに言ふ。

「えゝ、何うもさう行かない理由があるもんですから。」と詳しく事情を知らぬ饗庭に答へてゐる

ると、また長田が口を出して、
「ありや、細君にするなんて、初めから其樣な氣はなかつたんだらう。一寸家を持つから來てくれつて、それから、ずる〳〵にあゝなつたんだらう。」
と、にべも艶もなく、人を馬鹿にしたやうに、鼻の先で言つた。
私は、成程、男と女と一緒になるには、種々な風で一緒になるのだから、それで可いのだが、饗庭が、假令その場限りのことにして、折角さう言つて、面白くも無い、氣持を惡くするやうな話を和けようとしてゐるのに、また面と向つて、そんなことを言ふ、何といふ言葉遣ひをする人間だらう! と思つて、返答の仕樣もないから、それには答へず、默つてまた長田の顏を見たが、お宮のことが苛々しさに氣が荒立つてゐるのは分り切つてゐる。さう思ふと、後には腹の中で可笑くもなつて、怒られもしないといふ氣になつた。で、それよりも寧そ悄氣た照れ隱しに、先達ての、あのしごきをくれた時のことを、面白く詳しく話して、陽氣に浮かれてゐた方が好い、他人に話すに惜しい晩であつた、と、これまでは、其の事をちびり、ちびり思ひ出しては獨り嬉しい、甘い思ひ出を樂しんでゐたが、斯う打ち壞されて、荒されて見ると大事に藏つてゐたとて詰らぬことだ。——あゝそれを思へば殘念だが、何うせ斯うなるとは、ずつと以前「直ぐ行つて聞いて見てやつた。」と言つた時から分つてゐたことだ、と種々なことが逆上つて、咽喉の奧では咽ぶやうな氣がするのを靜と堪へながら、表面は陽氣に面白可笑く、「二人のゐる前で、前言つた、しごきをくれた夜の樣を女の身振や聲色まで眞似をして話した。

柿

東中野から落合のあたりは柿の木の多い處である。以前農家の籬落にまじりて朱き熟柿の色、田圃の寂びたる晩秋に情景を點出してゐたものである。今は東京の人の住宅地の垣の中に取り入れられて、その粗朴な樹の形、初夏の頃滿枝の嫩葉は暗綠色の涼蔭を軒端につくつてゐる。柿は最も多く私をして田園の粗朴なる生活を聯想せしめる。一つは、自分の故鄕の家に柿の古木が屋敷のまはりに四五本もあつて、幼少の時、晩秋木の葉は殆ど枝から落ちてしまつた時分、高い處にある梢頭に攀ぢて烏とともに熟柿を取つた田園の樂しみを思ひ起すからであらう。去來が嵯峨の落柿舍の侘びたる生活も偲ばるゝは郊外の籬落にまじれる柿の實の紅である。秋闌くるにつれてこの色倍々冴え、その味いよ〳〵甘熟する。

私は三坪ばかりの庭に似合ふほどの柿の木をも一本植ゑた。それは甘い實の成る柿であると先の持主は云つてゐたが、私は味を目的としない。五月の頃の柔かい嫩葉の綠蔭をめで、晩秋の頃の冴えたる朱丹の色を愛でてである。

東中野の郊外は秋寂びたる庭に柿の實の赤く夕陽に照つてゐるのを見るに必ずしも不適當の地ではないが、京都の嵯峨の在所の侘びたる田園には比べられぬ。東京の郊外は京都の近郊ほど人を落着かしめぬからでもあらうか。

(『秋江隨筆』の「郊外小景」より)

舞鶴心中

上の卷

一

今日限りといふことで、お京が楓家から暇を出されたのは十一月の初であつた。

段々若旦那との關係が皆なの目にあまるやうになつたので、多勢の男女を使つてゐる家では他の者の示しが付かぬといふので、欽之助には女中頭のお仲の口からよく納得出來るやうに父の意見を話さした。

四月の末に欽之助が東京のある私立大學の理財科を卒業して歸つた時に女中の多くは若旦那には初見參であつた。お京もその中にゐた。

まだ十六にしかならぬので客座敷の方には出さないで、奥の小間使に遣はれてゐた。

長い間の學生生活を終つた欽之助は、漸と自家に居着くことの出來る體になつたのである。

最後に東京を引揚げて歸つた時には、妹や弟はその頃京都にはまだ稀しかつた護謨輪の俥を連ねて七條のステーションまで出迎へに行つた。

東京からの物といへば、ボール函の空がらでも大事にして仕舞つて置く女中どもにまで三越から買つて來た土産をそれ〲分けて與つたり、二三軒親しい處に額出しをしたりして夜を更した。

翌朝父は自身、欽之助の寢てゐる枕頭に來て目を覺さして、出立する旅客の勘定などをさした。

楓家旅館は春李の旅客で本館も別莊も滿員であつた。欽之助の母親は四年前四十六で腦膜炎で亡くなつたのであるが、父は本妻が存命の頃から自分の家に置いた女中に手を付けて二人の妾を持つてゐた。母親が亡くなつた後はそれらの妾達が本館と別莊とを取締つてゐた。

欽之助の眞實の同胞とては妹と弟とがあるばかりだが、異腹の弟妹は二人の母親に四人づつあつた。東京の學校が休暇になつて、久し振りに京都の自家に戻つて來ると、歸る度に父の妾は赤兒を抱へて出迎へるやうなことがめづらしくなかつた。

人一倍母思ひの欽之助には、それを見るのが苦々しかつた。まして母の亡くなつたあとの吾が家は何だか居心地のよくない水臭い處のやうに思はれた。それでも父の方では息子が學校を卒業して歸つて來たのをひどく悦んで、始終息子を遠くから見張るやうにして、これまで自分のして來た旅館の業務に習熟させようとした。

帳場には古くから勤めてゐる熟練な支配人がゐて客の見立てから通す室の選定などをした。欽之助は帳簿の元締めと金錢の出納をしてゐる外に爲ることがなかつた。

金地に群青の雉を描いた大きな衝立を置いた玄關の横に折れた小さい部室に、欽之助と支配人は電話機などの載せられた書卓を中に挾んで向ひ合つてゐた。

そこから廣い玄關の土間を見通しの利くやうに壁に六角形の小窓が切つてあつた。

綺麗に頭の手入れなどをして羽二重絞りの帶など締めて欽之助は遊びながら家業の手傳をするのが仕事であつた。

歸つた當座は猶豫をしてゐた徵兵檢査のこ

となして落着く間もなかつた。その方は一寸した吃の癖があるので免役になつた。五月の初には東京の學校の卒業式があるので、自家に二十日ばかりゐてまた東京に出て行つた。五年の間學校で机を竝べて特別に親しくしてゐた友達と名殘を惜しんで鎌倉や江の島などに遊んだりして一週間ばかりゐて、歸途にはまた名古屋の友達の處を訪れて、開催中の共進會の見物などをして其處でも二三日遊んだ。名古屋から戻つて來ても欽之助は暇な身體を持て餘して日を消した。陰氣な欄家の家族は殆ど交る〳〵のやうに伊勢參宮、大和めぐり、和歌の浦といふやうに京都の周近を遊び廻つたり、家中で變つた料理などを食べに行つたりして日が經つた。

欽之助は夜京極などを散歩する時妹や弟と一緒によくお京を連れて歩いた。何時の間にか二人は多勢の目を忍ぶやうになつてゐた。

欽之助が東京から歸つて間もない時分、お京が、

「私若旦那好きや。」

と言つたのが、多勢の女中達のわらひ草になつた。

「まあ、まあ。お京どんは油斷なりまへんえ。」

いづれもお京よりは年かさの女中達は、さう言つて呆れた。

女中達は二階の一室に多勢で一處に寢ることになつてゐた。十二時すぎて家の中が寢靜まつてから年かさの女中がよく寢入つてゐるお京をつゝき起して、

「さあ、お京どん若旦那の處いおいきんか。みんなもう寢てしまあはつたえ。」

さう言つて目を覺してやると、

「さうどすか。もうお仲はん寢やはりましたか。」

よく寢てゐたお京は、目を覺し〳〵階下の欽之助の寢室に忍んで行つた。

たまに起き番の女中などに見付かることがあつても若旦那のことだから一同默つて奥やお仲の手前だけを隱してゐた。

二

けれどもそれは何時までもお仲などにも知られずにはゐなかつた。お仲に知られればお仲の口からまた父の耳に入るのは分つてゐる。父はそれを知つてゐても知らぬ顏を裝うてゐるらしかつた。親がわが家に置いた女中に手を付けて、それを二人までも妾にしてゐるのを目にしながら、自分がまたさういふことを仕出來してゐるといふのが欽之助には心苦しかつた。父が自身でもその缺點を知つてゐて、それが爲に息子の自分に何にも言ひ得ないでゐると思へば、父の心が氣の毒でもあつた。

お仲にしてもまたさうであつた。彼女も自身の身分を考へれば主人筋の若旦那に向つてさういふことについては何ともいひ難かつた。

妹の芳子ばかりは欽之助に面と向つてお京と手を切るやうに勸めた。欽之助は一方ならぬ妹思ひ、芳子はまた一方ならぬ兄思ひであつた。母親が亡くなつてから亡き母に對する彼等の追慕の情は一層二人を親しがらせた。

ある晩、欽之助は妹と弟と京極の方を散歩して歸つた後、一と間に入つて親しい雜談に夜を更したあとで妹の芳子は欽之助に向つてお京と手を切るやうに忠告した。

「兄さん、あんなもん、綺麗に手を切つておしまひやすな。」

「何にも知らん癖に默つといで、」

と、欽之助は答へたが、家中の者が一同でお京をよくない者のやうに言つて疎じてゐるのを思ふと、まだ十六の小さいお京が多勢の中で一人嬲られてゐるのが可哀さうであつた。それにお京はこの三四日身體の加減が惡いと言つて寢

てゐた。

欽之助は、自分がお京とさういふ仲になつてゐるのを自分で氣を咎めてゐないではないが、父の妾とはいひながら雇はれ者のお仲やお八重などの口からお京と自分との間がうるさくなつたと思へばそれが不平であつた。

さうなくてさへ近頃欽之助は、なにかにつけて神經の興奮するやうなことがあつた。

十一月の初であつた。欽之助は朝から頭痛の氣持で自分の室に定めてゐる四號室に寢てゐると、三四日前から我儘のことをいつて女中を困らしてゐる滯在の客が、その日もまた何か無法な叱責でも言つたらしく、受持の女中の泣く聲がしたので、彼は耐りかねて起上つて、今にも客に立退きを請求しようとしたが、父はそれを制して彼を宥めた。

「客がどんな無理なことをいうてもそこが商賣や、堪忍せんならん。」

「いくら商賣やかて、餘り侮辱してゐる。立退いて貰ふ。」

「まあ〳〵、そんなこと言はんとき。此方から事を荒立てゝはようない。お前もなんや、何處ぞへ行て、ちいと保養でもして來たらえゝやろ。みんなを連れて舞鶴にでも行て遊んで來いや。」

さういつて父は慰めた。本來彼は旅館といふ商賣を好まなかつた。腰の低い父が玄關の間の柱に凭つて坐りながら客の出入り毎に女中どもと同じやうに頭を下げて辭儀をするのを家業と心得てゐるのが自分の氣に染まなかつた。さうして軈てはそれを自分が繼いで行かねばならぬのが名狀し難い屈辱であつた。

客は、そんな標致の惡い女中の給仕では御飯が食べられないから代りに藝者を呼んで來いとか、料理が不味いとか勝手放題なことを言つて受持の女中を困らせてゐるのか、一つ〳〵帳場に通じてゐた。

するとまた女中が廊下を泣いて行く聲が、寢てゐる欽之助の耳を鋭く刺戟した。嚇とし易い欽之助には、氣六ケ敷い客に難題をいはれて口惜しい口惜しい目に逢つてゐるのが、自然にお京を不憫に思ふ悲しい愛情に移つて行つた。

人目を忍ぶには都合の好い廣い家ながら、家中にお京とのことがぱつとなつてからは、二人は一つ家の中にゐながら思ふやうに逢つて話をすることが憚られた。彼が客のことで憤慨したのもその奥底にはお京とのことに關係した不平が絡んでゐるのが父にはよく解つてゐた。けれども父は流石にそれをば露はに口に出すことを遠慮して、丁度さういふことがあつたのを機會に、暫く欽之助に家を留守にさして、その間にお仲から角の立たぬやうにお京に暇を與ることにしようと思つたのであつた。

欽之助もそれと察したので、早速翌日舞鶴に行く決心をすると、芳子や小さい弟などと一緒に行くことにして、序に芳子には斷然お京を思ひ切ることを打明けた。

三

その夜もまた遲くお京は欽之助の部屋に來た。

「明日舞鶴にお行きやして、いつお歸りやすの。」

「一週間ほど居たら戻つて來る。……それよりなあ、お前に聽いてもらふことがあるんや、自家で一同が喧しいことをいうて仕様がないよつて、お前も此家にゐてはつらい思ひするばかりやさかい、一寸此家を出て行とくれ。さうして姉さんかお父さんの處にでも行てゐとくれ。」

欽之助は體よく別れ話を持ち出した。

「そんなえゝやうにいうて、若旦那、私が邪魔におなりやしたんどすやろ。」

「さうやないけど、お前も此家にゐるのはつら

いつらいいうてゐたやろ。そやよつて自家では都合が惡いさかい、外にゐて逢ふ方がえゝと思うてさういふのや。」
欽之助は、口では斯ういつてゐるものゝ、いろいろに思ひ亂れてゐた。眞實ならこれ限り思ひ切つて女と別れてしまひたかつた。既に妹の芳子に「お京とは別れる」と斷言した時には全くその決心を語つたのであつた。どうせ妻にする氣のない女と何時までも關係してゐるのは雙方の爲に善くないことだ、屹度別れねばならぬ、さうして別れるなら是非今の内に別れてしまはう、と、思つてゐるのであるが、さていよいよ思ひ切らうと思へば、なか〳〵容易く思ひ切られなかつた。
寢物語りにお京に因果を含めて、明日限り自分の家を暇を取らすやうにいつてゐる心の奥底には體よくいつて女と切れようといふ薄情な量見も潜んでゐるのであるが、その實今自分の口で女にいつてゐる通り、これ限りになつてしまふことはどうしても忍びなかつた。
「姉さんの處へ行てゐいとおいひやしたかて、楓家の家暇を出されたら、私行く處あらしまへん。私が此家を暇を出されましたら私に何ぞ惡いことでもあるのや思うてお母はんにまたきつう叱られます。」
お京には眞實の兩親は無かつた。詳しい素性は誰れも餘り知つてゐる者はなかつた。生母はたしか祇園で藝者をしてゐてお京を産んだのであるが、實父になるその客が何んな人間であつたかお京はもとより知らない。さうして其の母親は後に加茂川か何處かへ身を投げて死んでゐるのを發見された。その時お京はまだ二つか三つであつたのを、扇職人の今の養父が拾ひ兒同樣にもらつて來て大きくしたのであつた。養父母は元から金にするつもりでお京を育てたのであるから、何處かへお京の身を賣つて纏まつた金に代へたいのであるが、お京はそれを嫌つて自分から口を求めて茶屋奉公をしい〳〵またしては身賣りを勸める養父の處を一時免れに逃げてゐた。最初暫く万亭に小女を勤めてゐて、後に楓家へ出更つて來たのであつた。
「ほしたらまたお父つあんが身を賣れいうて、喧しういふやろしなあ。」
欽之助もそれを知つてゐるので、自分の家を出て行つた後のお京の身の上を思ふと、此のまゝ打棄つてしまふのが可哀さうでならなかつた。
「そやから僕が舞鶴から歸つて來るまで暫く姉さんの處にでもいといでといふのや。」
「ほんならさうしますよつて、きつとどすツせ。私捨てられたら怨みますツせ。」
話は、それからそれへと名殘はいつまでも盡きなかつた。二人は曉近くなるまで話しつゞけてゐた。
お京が二階へ歸つて行つてから、微睡としたと思ふ間もなく欽之助は早く起上つて支度をそこそこに妹弟四人づれで二條驛から舞鶴の別莊に立つた。
京都の西郊は、丁度今鮮麗な秋の色に寂しく彩られてゐた。汽車は、嵯峨野を過ぎてやがて隧道を一つ通りぬけると保津川の絶壁の上を馳つてゐた。稀に見るやうな深い杉木立に燃えるやうな紅葉の點綴した嶮岨な山と山とに挾められた溪の底を、青く澄んだ清流は岩に激して白い泡沫を飛ばして流れてゐる。
芳子や小さい弟達は皆な車窓から顏をその方に出して見馴れた景色ではあるが、飽かぬ奇景に聲を立てて悦んだ。欽之助は、自分達の連中で殆ど車室を獨占してゐる二等室の腰掛の上に凝乎と身を凭せながら一人遣る瀬のない哀愁に胸を塞がれてゐた。僅かばかりの他行とはいひながらお京と縁を切つて出て來たことが、こ

れ限り遠く京都を去つてしまふやうな悲しい感情をそゝつた。先刻玄關を出る時多勢が見送つた中にお京も後の方から此方を見ながら眼顏で別離を告げた、その悄然とした姿が何時までも強く眼に殘つてゐた。

今日、自分の出た後でお仲に體よく因果を含められて家を出て行くであらう。奉公人とはいひながら、楓家にゐれば兎も角も派手な生活の中に立ち交つて陽氣な一日々々が經つて行くのに、今日からはまた見る影もない裏長屋に侘しく燻つてしまはすのが慘めでならなかつた。

行末妻にするといふ當のない戀をするほど果敢ないことはなかつた。本來情に脆い欽之助は、お京の前にもまだ中學校に行つてゐる時分からさういふ女があつた。京極邊で雜貨店をしてゐた娘を多勢の競爭者と張り合うて自分の物にした。それならば親達も知つてゐて、强ひて楓家の總領の嫁にして出來ないこともなかつたのであるが、女の養母が眼前の利欲に深い思慮もなく、まだ親がかりの欽之助を袖にして初は本人の厭がるのを無理に納得さして外國人の工業家の妾にした。それは、祇園のお雪が二萬圓でモルガンに落籍された噂が、京中の女を羨ましがらせてゐた時分であつた。欽之助はその時初めて男女の間の思ふまゝにならぬ苦しい味を知つた。その後彼は東京の學校に行き、女も外國人に從いて東京に住居することになつて、二人はその西洋人の目を忍び／＼逢引を續けてゐたこともあつたが、仕舞にはそれが主人に知られて嫉妬心の强いその男は二人の間を割く爲に、九州の方の鑛山に從事することになつたのを幸に女を遠くに連れて行つてしまつた。一時思ひつめてゐたその戀も、外國人の旦那といふ水が注されてからは、徒に、愛情の凋れた欲望を充たすに過ぎなかつた。

欽之助にはさういふ經驗があるから、お京との關係のどうせ終を全うしない日のあることを覺悟しながら、何ほどうしても別れねばならぬ哀れさに惱まされた。

欽之助が思ひ沈んでゐる間に、汽車は今隧道の暗に隱れたかと思へば、また忽ちにして棧道の上に現れ、三十分ばかりの間に保津川の峽谷を通りぬけると、龜岡の平地に出た。山の中に開けた村落には最う深い秋が來て寂しくなつた田圃の切株に弱い日がさし渡つてゐるのが滅入るやうに一入うら悲しさを誘うた。窓外の眺望はます／＼人里を遠ざかつて、汽車は秋の色に滿ちた山と山とを分けて進んだ。

思ひ疲れた欽之助は空蟬の形骸に等しい身體を姉弟と一緒に汽車から船に運ばれてその日の正午ごろに舞鶴の別莊に着いた。海には風が出て波が高かつた。皆な海岸に遊びに出て行つた後で欽之助は獨り連夜の睡眠不足の疲れで點燈頃までぐつすり熟睡した。

夕飯の後は姉弟と一處に雜談に夜を更して床に就いたが、他の者の寢靜まるにつれて欽之助は獨り眼が冴えて、女と別れた後の物足りない寂しさに襲はれて遲くまで眠ることが出來なかつた。

翌日は海が凪いだので一同で釣に出て、晝飯に戻つて來ると、京都の家から電話が掛つて朝鮮の貴族の一行が來泊して多忙だから直ぐ歸つて來るやうにいつて來た。お京のことを始終念頭に忘れかねてゐた欽之助は、その報知を得たのを却つて好い機會にしてそゝくさ支度をして妹や弟を後に殘して獨り夕方の汽車で立つた。

四

お京は、昨夜欽之助から堅い約束の言葉を聽いて覺悟をしてゐた通り、みんなが立つた後でお仲から、一時暇を取つて宿へ下るやうに言ひ

渡された。
「あんたにえらいお氣の毒やけどなあ、坊々もだん〳〵大けうならはるし、奥でもあんたにゐてもらはいでも手は足るよつて暫く家へいんでておくなはい。
からいはれて、お京は少許の衣類や頭の道具などを取纏めて、その日の暮れ方に樅家から出て昨夜欽之助と相談をして置いた姉の家に行つた。
姉といつてもやつぱり眞實の姉ではないので、今の養父の姪が洛外の大黒町で僅かばかりの青物や荒物などを商つてゐる男に嫁いでゐた、そこがお京の請人になつてゐた。
「まあ、お京はんやないか。今時分どうおしたんえ？」
冷い風に寂しく暮れた場末の店頭に立つて近處のお内儀に物を賣つてゐた姉は不意に訪ねて來たお京を見て不思議さうに聲を掛けた。
「私、樅家はんから暇もらうて來たん。」
二人になつてからお京は口ごもりながらいつた。
姉がその理由を訊かうとするのをお京はただ顔を紅く染めるばかりで明かに答へかねてゐた。
「若旦那が自家にゐんと、他で家を持たしてやるいうてくれはるの。そんでにちよつとの間姉さんのとこへ行て、おいてもろたらえゝいうてくれはるさかい……若旦那今日舞鶴の別莊に行かはつたけど、直き歸らはるさかい。ほしたら此家へ訪ねて來てくれはるの。」
「まあ、あんた、そんなことしてどうするつもりやな。」
姉は呆れた顔をしていつたが、強ひてそれに就いて訊かうとはしなかつた。
お京は自分と一處に俥に載せて來た柳行李と風呂敷包を隅の方におしよせて、二三日其家に置いてもらふことにした。
欽之助は舞鶴から前の晩遲く歸つて來ると、翌日は午前中朝鮮の貴族の案内をして俥を連ねて方々歩き廻り、午後からそれを見送りかたがた大阪まで行つた。序に暫く會はない東京の同窓の知人を二三人訪ねたりして夜の八時頃に京都に歸つた。
昨夜から忙しかつたのでつい氣が間切れてゐたが、一人きりになるとお京のことが思はれた。
さうして五條で京阪電車の停車場を出るとそのまゝお京の行つてゐる筈の大黒町の姉の處を訪ねて行つた。
お京は果して其處に來てゐた。
「まあ、まあ。若旦那どすか、ようおこしやしとおくれやしたえなあ。お京はんが、もう永いこと、お世話さまになりまして。」
姉は欽之助に初對面の挨拶をした。
「この人もなあお父つあんか、いろ〳〵無理なことをいはりますさかい、氣の毒や思うて私も心配して居りますのどつせ。昨日遲うになつて不意と來やはつたよつて、わけを聞くとかうかうやちうて。どうぞまあえゝやうにお頼まをしますさかい。」
「えゝ、私も此の人が可哀さうやよつて、出來るだけどうかしようと思うてゐます。」
「それでもあんたはんも、直き奥樣お貰ひやはんとなりまへんのどすやろ。」
ちよつとした浮戯な心から離れ難い關係になつたのが、段々眞面目な相談に進んで行くのが欽之助には苦痛であつた。彼には亡母の生前から話があつた、神戸でやつぱり一流の旅館を營んでゐる親類の娘と許嫁になつてゐた。
「それもさうどすけど、かうなるとこの女の事も放つておけまへんさかい。」
暫くこんな話をした後姉は留守をお京に賴

んでおいて洗湯に行くといつて外に出た。亭主もまだ外から戻つて來なかつた。

二人ばかりになると、火鉢の傍に竝んで坐つてゐたお京は嬉しい顏をして男を見ながら、

「よう來とおくれやした。」

優しく笑つていつた。その言葉尻が泣聲になつて、白い面にさつと濃い紅が潮した。と思つたら、堪へかねたやうに涙をハラ〳〵と溢した。

欽之助は、俯向いて赤い繻絆の袖口で眼をおさへながら啜泣きをしてゐるお京の頸筋の搖れるのを見たまゝ默つてゐた。

「何處ぞちつちやい借家か好え明き間でもないやろか。」

稍々あつて欽之助は元氣をつけるやうにいつた。

「……さうどすなあ。何處ぞえゝ處探さんなりまへん。」

お京も漸く涙の顏を上げた。

二人は家の者の留守中、家を持つ樂しみなどをそれからそれへと語つてゐた。

五

二三日して欽之助は用事の暇にまたお京を訪ねて、二人で大黒町から建仁寺町の裏通りや五條坂の方の閑靜な處を見て歩いた。けれど何處にも俄に思ふやうな處がなかつたので、姉の近所に間借りをすることにして、お京は一人で其處に移つた。

欽之助は、自宅の用事を濟してから毎晩のやうに、夜遲く皆なの寢靜まるのを待つて密と家を忍び出てお京の處に通うて行つた。

裕福な仕舞た家や大きな老舖などの多い中京の冬の夜は最う十二時近くなると、何處の家でも早く大戸を下してゐるので、古風な家並の建つゞいた街區は寂しく更け靜まつてゐた。欽之助は小屋町の家を出て三條の通りを眞直に東に歩い[illegible]、心急々大橋を渡つて行くと頰を切るやうな冷たい風が川上から颯と吹いて來た。夕涼みの夏の床には、遠い夢の跡のやうに寂しく取拂はれて、暗い河原に瘦せ細つた川瀬の音が夜の靜けさを破りつゝ流れてゐる。比叡山も東山も暗い夜の暗に懷かしい姿を沒して、唯[illegible]い中[illegible]に[illegible]々の燈火の[illegible]きしてゐるのは[illegible]なまさうに[illegible]るばかりである。[illegible]の[illegible]あると、[illegible]らには參差として立ち並んだ[illegible]また[illegible]と見えて岸に並つた大きな[illegible]に凍えたやうな火影の映つてゐるのが見えた。

ぞく〳〵と肌に浸み徹る夜風ながら、欽之助はお京が待ち煩らうてゐるであらうと思へば、寒さもさまで苦にならぬのであるが、橋を向へ渡ると勸めるまゝに辻俥に飛び乘つて、繩手通りから大和大路を一直線に大黒町に走らすのである。

さうしてお京の傍に曉方まで殆ど彼此ともさせられないで、朝五時頃に迯きぬけに歸つて來ると、午後になつて三時間も四時間も晝寢をすることがあつた。

どうかして少し行かないでゐると、すぐお京の機嫌が惡かつた。一度二三日間をおいて行くと、お京は八口から懷中に手を插入れたまゝ、鉢の傍の柱に凭りかゝつて鬱ぎ込んでゐた。欽之助が上つて行つても默つて口[illegible]利かなかつた。

「どうしたんや？」欽之助は機嫌を取るやうにいつたが、それでも默つてゐた。

欽之助は邌乎と[illegible]着いてから結[illegible]と思はれて、[illegible]溜つて、平生[illegible]く見えた。

欽之助はまたかと思ひながら、自分も暫く默つてゐたが、やがて機嫌を取るやうに、
「なんや、むづかしい顔をして。」
と、いひながら笑ひかけた。
「あんたはん、私の處に來るのがもう厭になつたんどつしやろ。そんなんやつたらもう來てもらはいでもえゝわ。」お京は突如こんなことをいつた。
欽之助は意外の思ひをしながら、
「なにいうてるのや、そんなことというたかて、自家が忙しうて毎日々々此處へ來られへんやないかい。」
「あんたはんは家におゐやすと、そら賑かで面白うおつしやろけど、私は一人やさかい、此處に靜としてると寂しうて〳〵叶ひまへんわ。」
「ふん、寂しいことは寂しいやろけれど、そら堪へて辛抱して貰はんならん。何時までもこないにしとかへんよつて。」
欽之助が斯うしてお京に小さい家を持たして置く金の出處といつては別に無かつた。僅かに自分の小遣の中から辨ずるので、まだ親係りの身ではさういふ祕密の小遣の出處はなかつた。思ふやうになるものならば、まだ年の稚いお京を獨り置いて水仕事をさせたり、寂しい日をさせたりしたくはなかつた。さういふ不如意を思ふにつけ、家で少しも不自由といふことを知らずに毎日笑ひさゞめいて面白い日を立てゝゐるお仲やお八重を初め彼等と父との間に出來た異腹の弟妹などの幸福な境涯に引比べてお京が可哀想であつた。そして自身の身さへ哀れに果敢なく思はれた。
欽之助の考では、自分はどうせ餘り遠くない内にかねて許婚になつてゐる神戸の政子と結婚することになる。結婚をして自分の身が固まつてしまへば金錢上の自由も出來て來る。さうすればお京の事も少し自分の思つてゐるやうにしてやられる。それを考へれば政子との結婚を急ぎたいのであるが、さうするには自分が結婚をする前に兄の責任としても妹の芳子を嫁けてしまはねばならなかつた。その頃芳子はある溫泉場で顔を見知つた大阪のある病院に勤めてゐる醫學士との間にぼつ〳〵緣談が持上つてゐた。
彼はそんないろ〳〵な華やかな話の間に日が過ぎて行く自家の者を思ひ浮べてゐた目でまたお京の凋れてゐるのを見ると、拗ねてゐるのがひとしほ慘めなやうに思はれた。
欽之助で初めて男といふ者を知つたお京の稚い心には、唯男に傍にゐてもらひたいより他に慾も得もなかつた。朝まだほの暗い時分に欽之助が起き出て歸ると、直ぐその日が暮れて夜の來るのが待たれるばかりであつた。
それを二日も三日も來てくれなかつたので、若い心の一と筋に思ひ焦つて、此度來たかて口も利いてやらへん、といふ氣になつてゐたのであるが、それが今來て傍に坐つてゐられると、不思議に男の力に滅入つた心を引立てられて、お京は柔かい嬉しい心持に身體を包まれてゐるやうで、機嫌を惡くしてゐた顔を上げて欽之助の顔を見た。すると、まだ楓家の家にゐる時分から、時々厭なことをいふお仲さんや、妹の芳子さんや、その他多勢の自分より年上の女子衆のゐる中で、それ等の目を忍び〳〵逢つてゐた若旦那の獨り優しかつたことが思はれて、今見ると矢張りその優しい若旦那である。
「ほゝゝ、お寒おしたやろ。」
さういつて、お京は漸と身體に勢が付いたやうに炬燵を取直した。そして火鉢に炭を繼いで、茶を煎れたりした。
やがてお京は立ち上つて押入れの中から蒲團を取出して寢床をのべた。深々と底冷えのする室の中に、欽之助が好みで新調した縮緬の柔かさ

うな友禪めれんすの夜具が炬燵の形に高く盛れ上つたのに電燈の光が美しく映えてゐた。

六

間もなくその年も暮れてお京は十七、欽之助は二十六の春を迎へた。二人の關係は同じやうに續いて日が經つた。すると一月の末時分になつてお京の身體の樣子が違つて來た。若い男女は最初は不安の中に惑うてゐたが、どうしてもそれに違ひなくなつた。

欽之助にはそれが胸に枷を置いたやうに思はれた。お京はそれが爲に自分の身が確かになつたやうにも思はれたが、どうかすると、それよりも頼りない心配の方が先に立つて欽之助の顏を見ると氣を回して怨んだり泣いたりするやうなことが多くなつた。

それに伴れて欽之助にはいろ／＼考へることがあつた。假令外に隱して置くにしても今までの通り殆ど毎晩のやうに夜家を明けてゐては、何時かは自家の者に分らずにはゐない。もう既に多勢の女中や下男などには、若旦那は今夜もまたお京さんの處　といふことが知れてゐるのであるが、餘人ならぬ欽之助のすること故彼等は互の內密話にはすることがあつても、愼み深く口を噤んで女中頭のお仲や、妹の芳子などの耳には入らぬやうにしてゐた。

「若旦那は好えお方や。」

とは、お京のやうな關係のない他の多勢の女中達でも皆ないつてゐた。

「若旦那にまた何ぞ買うてもらをやおへんか。」

夏季暇な時分身體を持て餘してゐるやうな時に女中達の間にさういふ相談が始まると、たれかが帳場の欽之助の處に行つて、

「若旦那、今日は、まあ、きつう暑いことやおへんか。」さういふと、

「うむ、暑いなあ。」

「暑うて、睡たうて、睡たうて。仕樣がおへんわ。」

「うむ、睡たいやらう。ほんまに睡たいやろ。」

「睡たうおすわ。何ぞ奢つとおくれやすな。」

かういつて請願ると、

「あゝ、奢つてやろ。何が好え。」

「何でもよろしいわ。若旦那が好え物買うとくれやす。」

「ほんなら菓子買うといで。內證やぜ。」

と、いつて內の者やお仲などの見て居ない間に五十錢銀貨を一つ出してやる。

何につけてもさういふ風なので女中達も若旦那の事ならお京との事をも氣を利かして奧へは祕するやうにしてゐる。

朝早く欽之助がお京の處から戻つて來ると、勝手口から家內の樣子を覗ひ／＼其處に居合す女中に、

「どうや？」と、訊ねて、

「あ、まだ寢てはります。」と、いつて女中が確めるのを待つて祕と廊下を忍んで階下の自分の部室にはひつて、昨夜から寢てゐたやうにしてまた寢直すのであるが、どうかするともう奧でも起きてゐる時分に歸つて來ることがあつた。ある寒い朝であつた。しかも雪まじりに降る雨の中を傘を翳して欽之助は歸つて來た。毎時のやうに勝手口から覗いて家內の具合を訊かうとすると、間惡く丁度お仲が其處に來かゝつた。其處にゐた女中はそれと見ると　自分の身體でお仲と若旦那との間に立ち塞がるやうにして胸の處で小さく掌を振つて目配せした。欽之助はそのまゝ傘で身を隱して靜と身をかはした。さうしてお仲が用を達して奧に引込んで行くと、

「今、早う／＼。」

彼はその間に家に入つた。

「まあ、若旦那が、寒い寒い雨の中を……」と、

女中達は欽之助を痛はしがつた。そんなことは

と書いたんどつしやろ。そやけど、これがほんまどしたら、まあ、お京さんも恐い女やおへんか。お父さんも、さういうとゐやすのどす。あんたはんもこの十一月には政子さんと婚禮をおしやすのやよつて、そのつもりでゐて貰はんならん。そら、せんどもなあ、お京さんのやうな女があつても、ちよつとも構やへん、そんなこと喧しういふやうなお嫁さんやつたら、來てもらはいでも可えいうとおゐやしたんどつせ。そやけどこの手紙をお讀みやして、こんな悪い者に關係してゐてはどむならんさかい、あんたはんの方でもよう考へと見やすやうにと、そない言うとゐやすのどす。」

默つて聽いてゐる欽之助の頭には種々な思想が混雜に群がつた。一體誰れが斯んな手紙を越したのだらう。さうしてお仲の話の口振では父もお仲も自分が外にお京を隱してゐることを夙に氣付いてゐたらしい。それにしてもお京が自分の目を盗んでそんな悪いことをしてゐるだらうか。この手紙によつて強ひて疑へば疑はれぬこともない。もしこれが眞實であつたなら、一思ひに彼女を棄ててしまふ。去年の秋楓家から出す時にも寧そ綺麗に別れてしまはうか、と、幾度考へ直したか知れなかつたのを、矢張り未練が殘つてゐて、後日の難儀と知りつゝも、どうしても思ひ切ることが出來なかつた。今まで父やお仲の手前を巧みに隱しおほせてゐるとばかり思つてゐたのに、それがいつの間にかすつかり分つてゐたのさへ面目ないやら、腹が立つやら。それのみならず今お仲のいふのを聽けば、父は妻のあるのを喧しくいふやうな嫁なら來て貰はいでも可えと言つてゐたといふけれど、父の身にしては自分がお京を外に圍うて置くのを不可とは言ひ難からう。またお仲にしても何の事はない、お京と自身とは同じ境遇である。それ故に父もお仲も自分のしてゐることを知つてゐて知らぬ風を裝うてゐたのである。父は口でこそお仲にそんなことをいつてゐても、それは本心で言つてゐるのぢやなからう。自分だつて妻の外にお京のやうな女があるのはいづれに對しても愛情が眞實にならなくつて、自分で不愉快だ。神戸の政子は好きでもないが、厭でもない。あの純潔な政子と結婚をするのにお京があつては何だか將來の永い自身の今後の一生の幸福が取留めもなく散亂されるやうな氣がする。……

こんなことを、それからそれへと考へ纏うてゐると、欽之助の胸の隅には、お京に對して薄情な心持が潜んでゐるのが、またしても自分ながらあり／＼と認められた。

「あんたはんも、後でお靜かにようお考へやしとお見やす。」

欽之助は堅い顔をして何時までも默つてゐるのでお仲は慰めるやうにいつた。

「僕が悪かつた。よう考へて決心するさかい、あんたから、お父さんに心配せんとおいてもらふやうによう言うといておくなはい。」

欽之助は素直に答へた。

二

その日は一日家にゐたが、父が何も彼も知つてゐながら、自身面と向つては何事も言はず、さも／＼そんなことは一切知らないやうに平常の通りにしてゐるのが欽之助には恰も眞綿で首を締めてゐられるやうで何とも言へない壓迫を感じた。さうして日が暮れるのを待つてお京の處に行つた。

紺屋町の通りからお池を西に折れて高石通をちよつと上つた左側の狭い露路を入ると、その狭い露路を、また半分に仕切つた板塀が立つてゐて、その左側に五軒つゞきの低い長屋がある。その三軒目にお京は一人で住んでゐるので

ある。六疊と四疊半との二間に沿うて僅に體の通れるばかりの細い土間があつて、便所の横の狹いじめ〳〵した庭は前の家の大きな土藏の剝げた壁で日の目も見られなかつた。

外から入つて行くと、むうつとするやうな晝間の火照のまだ殘つてゐる暗い部屋で、お京は電燈の紐を鏡臺の上に引張つて行つて、鳴海絞りの浴衣の肌を脱いで眞白い皮膚を出しながら湯上りの化粧を凝らしてゐた。

「ほ、おこしやす。」

「おう。暑。」

欽之助は急がしく扇を使ひながら、熱くなつた疊の上に腰をおろした。

去年の秋初めて大黑町に家を持たしてから、少しづつでも絕えず何か知ら入るに任せて買ひ調へてゐるので、狹い家の内が何となく落着いて來たやうに思はれる。欽之助は凝然と其處等を見廻した。お京が生命よりも大切な簞笥の中も一枚づつ物の數が殖えて來た。欽之助は元來着物や帶の縞柄を見分けたりするのが好きでもあり上手でもあつた。お京に行つてゐる時分にも歸京る時には、芳子や、以前に長く關係してゐた女などに三越から種々な中形などを何反も買つて來た。

「もうお夕飯お濟みやして。」

漸く化粧をはつたお京は、まだその後を兩掌でぴた〳〵顏を叩いて、尙ほその上に濡れた手拭で頰を撫で廻しながら、浴衣の肌を入れた。

欽之助は返辭をしようともせず、柱に凭れて脚を投げ出しながら女の祕密を覗き出さうとでもするやうにお京の姿態を見守つてゐた。

餘所目に立つ六月のお腹を赤い扱帶で大きく締めた腰の周圍から、べつたりと坐つた膝前が亂れてゐるのが欽之助の嫉妬を唆つた。去年今時分まだ肩上げをして自家にゐた頃に比べると、一つは丸髷に結つてゐる所爲もあらうが見違へるほど大人びて來た。ちやうど一年前の祇園祭の宵宮の夜であつた。妹や弟などは多勢で表の通りへ街の賑ひを見物に行つた時、平常はお京をも伴れて自分も一緒に外に出馴れてゐたのに、その晩に限つて一人家に殘つた。自分も行かなかつたから、お京をも誘はなかつた。芳子が、兄さんどうしてお往きやへんのどす、と、いつて不審さうに訊ねたのを體よく何かに託けて外した心の奥には惡戲な欲望が强い力で潛んでゐた。

「お京さん、僕三階に行てゐるよつて、あんた後でアイスクリームを取つて來てんか。」

若旦那であつても、妹の芳子などと遊び、欽之助は女中達を呼ぶにも每時さん、を付けて呼んでゐた。

さうして何でもない事にでもよくお京さん、お京さん、と、いつて、欽之助はお京に用事を命じてゐた。

お京は返辭をしようと思つて、何の氣なく欽之助の面を見ると、自分の心の影か、その時に限つてハッと可恐しいものに近づくやうで躊躇ふ氣になつたが、すぐ思ひ直して、

「へえ、へえ。」と、早口に返辭をした。

三階の涼臺に出て籐椅子に橫つてゐる欽之助の處へ、お京はすぐ後からアイスクリームを三つ盆に載せて運んで來た。その時お京は一度降りたのにまた後で上つて來た。

標致からいつたら先の京極の女の方が美人であつたかも知れぬ。東京の學校に行つてゐる頃から餘分な學資をもらつてゐても茶屋遊などは餘りしない方で、非常の潔癖で感情の脆い所爲か、果敢しい弱い女を見付けてはそれに深くなつた

欽之助はお京を見てゐると、そんなに好い標致ではないが、素直な好い毛が水氣を含んだや

うに濡れてゐて、淡紅色の手絡をかけてゐるのが、色白のまるぽちやの顏によく映つてゐる。さうして整然と化粧をして見ると、芳子が惡口をいつた鼻の高くなかつたり、額が少し出てゐたりするのが、そんなに邪魔にならぬ。が、さういふことよりも一年の間馴染を重ねて來たといふことが自分達の體に最うどうすることも出來ない深い因緣を結んでゐるやうで、彼は絕ち難い愛着を感じた。

これが役者と關係してゐる？ それが眞實だつたら、どうしてやらう。欽之助は、

「はあツ」と、太息を吐いて横になつた。

「どうおしやしたの。さつきから默つて、何をそないにしゆんどゐやすの。」

お京は甘えるやうにいつて、ぼうツとなつた顏を向けてこちらをぢつと見た。

「面白うないことがあるよつて。」

「なにがそないに面白ないのどす？」

お京は欽之助の頭の傍により添つて、上から覗くやうにして微笑んだ。

「暑いツ。」と、邪慳にいつて欽之助は、それを手で拂ひ退けた。

「ほ、何をそないに怒つとゐやすの。」

「何も怒つてやへんけど、僕はもうお前の處に來いでもえゝやろ思うて。」

欽之助はさういひながら起き直つた。

「まあ、何どすいな。」

欽之助の顏が戲談でもなささうなので、お京は訝しさうに見戍つた。

「眞實のことをいうとくれ。お前、僕に隱してゐることがあるやら。」

「まあ、まあ、怪體な。なにを私があんたはんに隱してゐますいな。」

「ほんまにさうやつたら、僕はなにもいはんけど、詭いはんと、いうとくれ。隱してゐることがあるやろ。」

「何を隱してゐますいな。その隱してるちふこと、早ういうて聞かしとくれやす。」

「ほんならいふがなあ。今朝家へ歸つてると、お仲がちよつと話があるからいうて、僕を誰れもゐん處へ呼んでこんな手紙を見せたんや。」

さういひつゝ欽之助は、今朝の手紙を取出してお京に讀んできかせた。

「お前、ほんまにこんなことがあるのか。あるのやつたら、あるというとくれ。」

「まあ、厭らしやの。だれがそんなてんごういははつたんやろ。私、なんぼ阿呆やかて、そんなことするやうな女子と、あんたはんに見えますか。」

お京は恨めしさうに手紙を取上げて見てゐた。

「そら分らんな。僕が何時も此處に來て番してゐいんさかいな。」

「ほんなら、あんたはんもさうお思ひやすの？」

お京は、きつぱりといつた。

「思ふちふこともないけど、私にはお前の心が分らんさかいな。」

「そやつたら、やつぱり疑ははんのやわ。そんなこと好えやうにいうて私を棄てよう思うとゐやすのにちがひおへん。そらさうどつしやろ。私のやうなせうむない者が付いてては政子さんと婚禮おしやすのにお邪魔どつしやろ。」お京は鳴海絞りの袖でしく／＼涙をおさへて鼻を啜つた。

「政子のこと、何も今いうてやへん。この手紙、誰れが、こんなことしたのか分らんけど、何ぞお前に惡いことがあるのやろ。……お前、よう役者の繪葉書をたんと持つてゐたやないか。」

「役者の繪葉書を持つてるのが、なんどすいな。あんたはんもよう買うとくれやしたやおへんか。お仲さん、どうして私をそないに憎まはるのやろ。私が、やゝこと二人で死んでしまへば、

あんたはんかて宜しいやろ。」
　お京は畳に俯伏しに泣いた　前の合はせ襟先から赤いものが見えてゐる。
「そんな無茶をいうたてあかへん。
「どつちやが無茶どすいな。」お京は絞るやうにいつた。
　天井の低い、壁も襖も煤けた狭い室の中を、赤つちやけた電燈の光が鬱陶しいやうに照してゐる。その光の下にお京の頭髪がぶる〳〵と顫りなさうに慄へてゐる
　欽之助はそれをば好い氣持で凝と瞻つてゐたが、いくら自分を惚く考へても、まさか腹の中の子が他の男のものとは信じられない、とうかといつて父やお仲なとが此の手紙を企んでしたこととも思はれない。胎兒は自分の子に疑ひはなからうとは思ふが、もとはほんの一時の戯れに手を出したに過ぎないのだから、これまでも幾度も考へ直した通り、なるべくならばこれを好い機會に手を切らう、それが可い、と、努めて心を鬼にする氣になつた。さうして今晩に限つたことではないと思つたが、
「おい、泣くのはもうお止め、泣いてゐては話が出來へん。……僕も此の手紙のとほりやとは思はへんけどなあ、どつちやにしても、お前と僕とはこれから後何時までも一處になられんのやよつて、いゝ口が出來るまでに世話をするさかい、ほしたら諦めて別れと。……
　かういつて彼は、女に聞かすよりも自分の胸の中を口に出した。
　女はそんなことは聞えぬもののやうに泣きつづけてゐた。彼も思ひあまつて歎息を吐くより他はなかつた。鬱陶しい家の中に暫くお京の歔欷するのばかりが聞えてゐた。女に泣かれる時は男は唯默つてゐるより仕方のないものであるが、それを他から見てゐる者があるとしたら、當人は見つともないやうな、羞しいやうな、困つてゐるやうな氣持になるであらう。欽之助が丁度それであつた。
　お京は、伏しながら、胸の中で種々なことを思つてゐると思はれて、癇の高い聲を立てて強か泣いた。
　お京がもう少し年を取つてゐるか、或は男ずれでもしてゐたら却つて始末が好かつたかも知れぬが、茶屋奉公をして來たとはいひながら、まだ本當の生女で慾も得もなかつた。自分には役者と關係したといふやうな、そんなことは少しも身に覺えのないことである。單純な彼女の心には、初めから欽之助を爲になる人だと思つて今のやうになつてゐるのではない。唯若旦那が[illegible]好きだから、若旦那に逢ふのを樂しみに待つてゐるのである。それを赤兒を產んでいくらかお金を貰つて、それつきり戀しい人に別れてしまふ。別れてしまつて他人になつて、もう一生會はないのだと思ふと、前後の思慮もなく、只その別れて他人になるといふことが一途に情なくなつて、つまらなくなつて、生きてゐる空はない。
「私、死にます。……あんたはんのやうな薄情なお方、私知らん。私死んで怨みを晴らす。」
　お京は思ひつめたやうに泣聲を立てた。
　欽之助は手が付けられないやうな氣がした。
「まあ、ええ、泣かいでも好えが。
　欽之助は女の泣くのを止めさせようとした。
　けれどもお京は、泣きながら聞いた欽之助の言葉が氣に入らなかつた。あゝいつて別れてくれといふからには若旦那の心はそのつもりでゐるのは分つてゐる。既うそんな氣になつてゐるのなら、それを聞いただけでも棄てられたと同じことだ。それでなくても、此の十一月の五日には神戸の許嫁の女と結婚の筈になつてゐる。口では、なに妻は妻だ、お、お前はお前だ、[illegible]子が來たからとて、お前は今までの通りにして

置くばかりぢやない、漸次もつと好くしてやると何度も聞かされてはゐるけれど、眞實の腹は分らない。

「嫁はんもらうたら、私のこと今までのとほりに思うておくれやへん。から思ふとやう／＼涙を拭きながら起き直つたのが、また後から悔しい胸がせき上げるやうに遣る瀬なく心細くなつて來て、涙は留めどがない。

若旦那と關係して楓家を出てからは、先に奉公をしてゐた時分よりも餘計に金をもらつて、それは毎月お養父さんの方に取られてゐる。今もし若旦那に別れられて、手切れ金をもらつたにしても、それもまた養父母に取上げられて、その上にまだ無理なことをいはれるに定まつてゐる。金などは貰つても貰はなくても同じことだ。

「私、どうしまへう。」

泣聲で獨言をいひながら、側に欽之助のゐるのは忘れてさも思案に暮れたやうに喪然となつて遠くを見てゐる。その目は涙に霞んで部屋の燈光がチラ／＼する。

その姿態を見てゐると、欽之助も元々憎く思つてゐるのではないのだから、つい誘はれ氣味にいぢらしくなつて來た。あゝさうだつた。そんなら何處へ相談の持つて行く處もない、たつた一人の女であつた。その體を自分が自由にして、こんなに丸髷に結はして、あんなに大きな腹になつてゐるのだ。

そんな考が浮んで來ると、先刻はあまりに泣かれて厭な心持になつてゐたのが、今度はまたわけもなく可哀想になつた。もし自分が棄てたら、それから先きどうするであらう。欽之助の頭にはふと骨屋町の貧しい家で世智辛く朝から扇の骨を削つてゐる女の養父母の生業に窶れて人間らしい艶の失せた姿や、暫くそこにゐてまた新らしい奉公口のあるのを待つてゐる見すぼらしいお京の形が見えた。自分との縁が切れたら、今度はどんな男にこの丸髷を結つた色白の身體を任すことだらう。今こんなに身も世もないやうに泣いてゐても、その内にはまた他の男に、丁度今自分に心を打込んでゐるやうに靡いて行くであらう。別れてしまへばさうなつても仕方がない。けれどもこんなに泣くのは自分が好くつて、よくつて泣いてくれるのだ。欽之助は、お京の姿態を見てゐる間にまた甘い悲しさに胸を引締められるやうな心持になつた。

「そやさかい、その好きな役者の處へいたらええやないか。」

彼にはまだ嫉みと疑ひとが殘つてゐた。そして可哀さうな女をもつと泣かして焦らして見ねば氣が濟まなかつた。

「私、もあんたはんの心よう解つてます。」

お京は泣き／＼いつて、ついと立ち上つて、そのまゝ何處かへ出て行かうとした。

「おい、何處へ行くのや。」

「どこへ行たかてえゝやおへんか。」

「こら、待て。」

欽之助は、後を追うて立ち上つた。

「そこ、放しとくれやす。」お京は、欽之助が摑んだ浴衣の袖を振り放さうとして跪いた。

今夜のやうな話をした時ばかりではない、何か人に言はれて腹が立つことがあると直に私死んで怨みを晴らすといふのが稚いお京の癖であつた。

「そこ放しとくれやす。」お京は剛情に捉られた手から放れようとした。出て行つたらどんなことをするか知れぬので、欽之助は一生懸命に引留めた。壁一重を置いた隣家に氣を兼ねつゝお京を抱くやうにして元の處に連れて來て坐らした。

「そんなこと無いのやつたら、それでえゝやないか。」さういつて汗を拭き／＼、まあ何といふ

ことになつたかと心の中で歎息した
一ほ、よういはれること。あんたはん、今私に別れて欲しいおいひやしたやおへんか、もうどないなつたかて構やしまへん。私死にますさかい。」
「お前は何ぞいふと、すぐ死にます死にます、いふけど、そんな無茶いうたかてあかん。」
欽之助はその夜お京を一人置いて自家に歸ることが出來なかつた。

三

昨夜夜中殆ど眠らないで漸くの思ひで女の機嫌を取直した欽之助は朝早く戻つて來て毎時の通りぐつすり寢直した。一寢入りして八時頃に眼を覺すと昨日から土用に入つた京都の暑さは格別で、朝からじり／＼と照りつけた。彼は睡眠不足やら、手紙の一件からの煩悶やらで、頭は重いし自家にゐて父やお仲と顏を會はすのが不愉快でたまらなかつた、それで俄に思ひ立つて大阪から神戸の方に行つて見る氣になつた。暫く振りに政子の兄にも會つたり、大阪の芳子に會つて昨日からの事情を打明けて相談をしたらまた何とか好い智慧も出たり氣も晴れるだらうと思つて出掛けることにした。

明け放した車窓から青田の上を渡つて來る風がそよ／＼と疲れた頭を吹いた。今朝起きたままだ朝飯前であつたので、食堂車に入つて行つて二三品食べる物を取つてサイダを飲みながらまた昨日からのことを思ひつゞけた。

先刻から傍の食卓に凭つて頻りにビールを飲んでゐた坊さんと、若い西洋人とは大阪の手前で出て行つた。大阪を發車すると此度は丁度自分と同じ年頃の粋な浴衣がけの若い男が透綾を着た藝者らしい女と入つて來た。

二人仲好ささうにひそ／＼と話をしてゐる樣子では宮島から別府あたりへでも行くのらしい。いづれも親達の目を盜んですることであらう、と、さういふのを見るにつけ欽之助はそゞろに自分の今の身が思はれた。かうして汽車に乘つて旅行らしい氣持になつて見ると、昨日自家でお仲にいはれて厭な思ひをしたり、昨夜徹夜お京の機嫌を直すのに手古摺つたりした苦しみは漸次忘れたやうに薄らいで、たゞ矢張りお京が可哀さうなものに思はれた。神戸に行つて政子や兄に會つて見ようといふのも、そんなら會つてどうすると定まつた思慮もないのだが、お京とはどうしても別れなければならぬやうでもあり、さうかといつて無殘に棄てるのも忍びないやうな氣もする。許嫁の政子はどんな調子の女で、どんな風采をしてゐたか、かねてよく知つてゐるわけだが、尙ほよく見なほしたら、それが爲にお京のことで千々に碎けてゐる胸に決心がつくかも知れぬ。

神戸の家では海岸通りの本館と諏訪山の別館とで盛大に營業をしてゐる。その日は兄も妹も別館にゐて久し振りに訪ねた欽之助を款待してくれた。政子はお京よりも一つ年上の十八であるが、すべてがお京よりもずつと子供じみてゐた。標致は優れてゐる方ではないが何處か艶かな家に育つた生娘い上品な顏をしてゐる。兄と話してゐる座敷にも出て來た。欽之助は格別厭とは思はぬが、その嘗て不幸といふことを知らぬ身に對して少しも愛情が起らなかつた。

もとから同情心が深くつて小說などを耽讀してゐる上に女といふものをも相應に知つてゐる欽之助には、政子のまだ生な苦勞なげな處が何だか物足りなかつた。そして自分がこの女と結婚しないでも政子は決して幸福に事を缺かない、親もあれば兄弟もある、富もある、といふことが彼の情を惹かなかつた。それに比べるとお京はどうしても慘めである。可哀さうな

稚い女を因果を含めて手を切り、さうして此の幸福さうに生きてゐる政子を妻にすると考へると欽之助は堪らないやうにわけなく哀れであつた。

そんなことが始終頭の中を往來してゐるので、何か話して見たいやうな心持で神戸までやつて來たのが、さて何も話すことがないので、泊つて行けといふのを強ひて斷つて呆然其家を辭して歸つた。さうして大阪の妹の處に寄つた。芳子の家は天王寺の近くにあつた。訊ねて行つて見ると、その日芳子は丁度欽之助と行き違ひに京都に行つた留守であつた。

その晩は何處かへ泊るつもりで出たのであるが、神戸では何だか氣が落着かないし、たゞ芳子に會つて少しも早く頭の中のもやもやを打明けたら胸がいくらか透くやうに思はれて、暮方に氣の進まぬわが家へまた戻つて來た。

「まあ、兄さん。入れ違ひになりまして。そやけど早うおしたえなあ。」

芳子は懐かしさうに奥から出て來た。

「今日はきつう暑うおしたやろ。繁さんにお會ひやして。政子さんも御機嫌よろしうおすか。」

「ふん、會うた。皆機嫌えゝ。どや、お前のとこも皆機嫌えゝか。」

芳子が嫁いてからまだ二た月ばかりにしかならぬのであるが、彼等は互に長く會はなかつたやうに思はれた。

その晩は奥の座敷で父の淨瑠璃の稽古上げがあつたので、二人は隣座敷でそれを聽きながら久しぶりに打解けた話をして親しい夜を更した。

いづれも六疊の次の間を控へた落着いた十疊の二た間を鍵の手に長い回緣がつゞいてゐた、狹いながら數寄を凝らした閑濕とした庭の樹蔭から涼しい風が通うて、端近に座を占めてゐる浴後の白衣の肌に心地よく觸れた。軒に吊した岐阜提燈の灯影も淸らかである。

「政子にも會うたが、相變らず子供で仕樣がないなあ。僕はもう政ちやんの結婚を斷らうかと思うてる。」

欽之助は氣のなさゝうにいつた。

「何故どす?」

「何故といふわけもないが政ちやんは、あんまり淸淨すぎるし、僕はあんまり感情が荒びすぎてゐるやうな氣がする。」

「そんなことおへんわ。そら兄さんはあんたは男どすもの。政子さんの淸淨なのは女子として當然どすわ。」

「そらそやけど、僕は、今からあんな妻にして入らん心配するより、も暫く一人でゐた方が氣樂でえゝもの。」

欽之助は何度もお京のことを打明けようとして口の先まで出かゝつたが、芳子の手前は去年の秋暇を出した時を最後に、お京のことは綺麗に思ひ切つたことにしてあるので、今更關係をつゞけてゐることを話るのは、假令妹に話すのであつても極りが惡かつた。

「そら兄さんがさうお思ひやすのやつたら、ようわけをいうて暫くお延しやしたら、よろしいやおへんか。まだ何方も遲いのやないさかい、そないに急がいでもよろしいわ。」

かういつた芳子が、その日に大阪から京都の實家まで兄に會ひに來たのにも理由があつた。

芳子の嫁いてゐる醫學士とは、最初何處かの温泉場で兩方で顏を見知つたのがもとで緣談が調つたのであるが、さて行つて見ると聞合したのとは相違があつて、大分借金などのあるのが分つた。小口のものは芳子の持ち合せで始末をしたが、段々返濟期に差迫つた巨額の請求書が來たりした。

結婚前から長く關係してゐるらしい女と芳子に祕して手紙の往復を續けてゐるのも發見さ

「アイと、お俊が、とも／＼に。暫し此世を假蒲團、薄き親子の契りやと枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更行く鐘も哀れそふ。」

と、いふ濕やかな節廻しの合の手の處になると、彼は、絶えず胸の底に蟠つてゐる不快な感じが譃のやうに一時に忘れられて、お京のことがそんなに苦にならぬばかりか自分達も丁度、今語つてゐる淨瑠璃の中の男女のやうに悲しい美しい境遇にゐる人間のやうに思はれた。

そして與次郎の道化た仕草や詞の處になると芳子や好郎と一緒にどつと笑つた。

欽之助は終の猿舞しの處の合の手を殊に面白がつて、自分でも口拍子を取つて聽いてゐたが、やがて一段濟むと、浮々した調子で書齋から帝國文庫の近松の淨瑠璃集を取つて來た。

「お前達近松をよう讀んど見や。」

さう言つて、三人枕を竝べて寢床に横はりながら遲くまで芳子や弟にそれを讀んで聞かした。

欽之助の眼が疲れて本を措く頃になると、少し前から靜かにしてゐた芳子も好郎も微睡となつてゐた。

「もう寢たんか、早いなあ。」

妙に頭の靜まつて來た欽之助は、何だかも一度浮戲[illegible]に見たいやうな氣になつてゐた。そして[illegible]手をやつて、臑の[illegible]で掛けてゐる芳子の手をちよいと指尖で突いて見た。

「ふゝ、眠どつせ。兄さん、眼覺して。」

と、いつてゐたが、欽之助が徒戲をやめぬので、それが芳子からまた好郎の方にも傳はつて行つた。さうして後にはみんなしてキヤア／＼笑ひながら他の寢ようとする枕を取つて遠くの方へ投げたりして、とう／＼十二時過ぎるまでも目を覺してゐた。

四

翌日は芳子には芳子の朋友が訪ねて來たり、欽之助もまた何か知ら用があつたりして二人は一日顏を合さなかつた。

一人になつて見ると欽之助は矢張りお京のことが考へられた。そして成るべくなら、さつぱりと手を切つてしまふに如くはないやうに思はれる。[illegible]夜になつてまた行つて見る氣で日の暮れるのを待つてゐた。外は宵宮で三條の通りは殊に賑かである。丁度出掛けようとする處へ中學校の時分から一番親しくしてゐる粟田といふ友達が久し振りに入つて來た。

「やあ、長いこと。」

「どだい、暑うなつたなあ。」

「元氣えゝか。」

「おほきに……どうや、今暇なら、一緒にそこらブラ／＼歩いて屏風でも見やへんか。」

「そやなあ、歩いてもえゝが。」と、言つて欽之助はちよつと考へてゐたが、「僕少し君に聞いてもらひたいことがあるのや。他に用がなけら、ちよつと上つてんか。」

急しさうに少し吃りながら言つて、彼は粟田を誘うて例の三階の涼臺に連れて出た。

粟田は欽之助よりは年も一つ上であるが、[illegible]平した男で、まだ二人が中學校に行つてゐる時分、何方かの家に遊びに行くと、行つた先のお母さんは、よく二人に牛肉などを取つて御馳走をしてくれた。欽之助が途中何かの事情の爲に一年後になつて、粟田は先に卒業すると矢張り東京のある私立大學の商科に入つた。それからは以前ほど二人の顏を合はす機會は少くなつたが、ちよつと[illegible]つた粟田は、亡くなつた欽之助の母親が[illegible]の好い京都風の優しい婦人であつた處に懷かしい記憶が殘つてゐるので、自[illegible]その亡母の生前からさういふ風であるの

に多少反感を持つてゐるし、楓家に行つても以前ほど面白くないから、二人がまた京都に歸るやうになつても、あんまり交通はしなかつた。
　欽之助は其處にある籐椅子を栗田に勸めて、自分も腰を掛けた。
　よく見ると欽之助は不愉快な顏をしてゐるので栗田は、不思議に思ひながら、
「何や。話ちふのは？」
　突け〳〵と蟠りのない口を利く彼は訊ねた。
「僕、實は内の女中に關係してゐるのやが、もう手を切らうと思うてるが、どうしたらえゝやろ？」
　彼は腹に思つてゐるほどにはない、口ではさう困つてゐるさうもなささうに淡白にいつた。
「そら、面白いこつちやないか。女中て、何れや？」
「うむ、つまらん女や。自家に今ゐるのと違ふ。外にゐるよ。」
「そりや君が手を切る氣ならわけないこつちやないか。」
「一處がさういかんのや。女が喧ましうて、なかなか別れようといはんので叶はんのや。」
「そんなんやつたらそのまゝ外に圍うて置いたらえゝやないか。君のお父さんかて同じこつちやないか。」
「いや、そらいかん。僕はそれは不贊成や。」
　さういつて、欽之助は男が女に戀する樂みは妻を持つまでのことで、妻を持つて後も尚ほ他の女に關係するのは妻を迫害するやうなものである、また自分の熱情よりも女の熱情の方が高くなつた時はその女と別れる時である、といふ意見を栗田に向つて話した。それは一つは彼が亡母の面白からぬ心の内をよく知つてゐて、亡くなつた人に對する悲しい同情から、自分は斷じて父の眞似はしまいと決心してゐたからでもあつた。
「そやけど、その話け君が直接に遣つては甘く行かんやろ。誰れぞ然るべき人間を仲に立てて話してもろたらえゝやろ。もしさうする氣があるなら僕でよけら僕が話してもえゝけど、他に誰れか適當な人間があるやろ。」と、いつて栗田は考へてゐたが、「けどそんなことわざ〳〵他人に賴まんかて、いつそ君のお父さんがえゝやないか。君のお父さんは、よくさういふ事の譯の解つてゐる人で吾々よりも技倆がある。兎に角一遍お父さんに打明けて話して見たらどうや。」
「親爺に言はんかて、親爺はもうちやんと知つてる。」さういつて、欽之助は、一昨日一通の無名の密告書が父の許に來た事情を語り、「親爺は、女のあるのを喧ましういふやうな嫁やつたら來てもらはいでも好えいうてるさうや。けどそれは親爺がさばけた風していうてるので、ほんまに解つてゐるのやない。僕は不贊成や。妻を迎へて尚ほ他の女子と關係するのは罪惡や。また親爺がその意見を直接に僕に話さんのは、親爺自身は弱點がある爲に自分でいはんとお仲に話をさすのやと思ふと、親爺に對して氣の毒にもなる。僕は何も親爺に面當てに自家の女と關係したのやない。唯自然にさうなつただけや。そら親爺の身になつて見ると不贊成かて不贊成やとはいひ惡いやろ。言ひにくいのは尤もや。僕はそれを思ふと氣の毒やよつて親爺を煩はさんと僕自身で解決するつもりや。もしまた親爺が直接に僕に話するやうやつたら、きつう叱らんと優しう意見してもらひたい。あんな知つてて知らん顏をしてゐられるのは眞綿で首を締められるやうで痛うて叶はん。僕、平生家の親爺のすることを見てると恐うなる。料理番など何かぶつ〳〵言ひよると、そんな者は出て行けと、ぱあつと放り出しといて、自分で下りて行て、さつ〳〵と庖丁執つて料理をしよ

る。そんな風やさかい、默つといてどんなことを始めるか分らへん。」

こんな會話をしてゐる處へ弟の好郎は如露を持つて上つて來て、物見に置き並べた數多の盆栽に熱心に水を注いだ。それで二人ははたと口を噤んだ。

「好郎さん、えらい熱心やな。」

「うむ、好郎はこの頃植物を熱心に研究してよるのや。」籐椅子に凭れかゝつた欽之助は氣を換へていつた。

やがて好郎は水を注ぎをはるとまた默つて降りて行つた。

「それやつたら、お仲さんかお八重さんに話してもろたらどうや。あの女達かて同情がある譯や。君自身が、向に相對の話では颯々と解決が付きにくいやろと思ふ。」

栗田は、暫く默つた後でまた口を切つた。

さういふと欽之助は、

「お仲やお八重、あんな奴等にそんなことといふのは不見識や。」語氣荒く、言の下に排斥した。

それでまた二人とも稍暫く沈默してゐたが、

「こんな時にお母はんが生きてゐるのやつたら何もいふことないのやがなあ。」

欽之助は染々とした調子で獨語のやうな歎息を洩らした。

栗田はその聲に動かされて、つい、電燈の灯影に欽之助の顏を瞻ると、その眼はいとゞ涙ぐんでゐた。

栗田は、一緒に表に出て見ようぢやないかと誘つたが、欽之助は、ちよつと他に用があるからといつて出なかつた。さうして少し後れて一人で外に出た。外は宵宮で多勢の人通りだ。深い憂に沈んだ欽之助は家々の表に飾られた珍藏の金屏風も技巧を凝らした生花も立ち止つて見る氣はしないで、自分一人だけが世の中の面白いことや樂しいこととは遠く懸絶れてしまつたやうな心地になつて、往來の喧騒を聾者のやうな、心地で聞きながら、とぼ／＼とお京の家に歩いて行つた。

歩く道々、幾度か考へ直したことをまた思つて見ても、お京とはさつぱりと別れてしまつたに越したことはない、それは明かに分つてゐる。ぜひさうせねばならぬ。が、ぜひさうせねばならぬのであるけれども、誰れを見ても戀の上では他人ばかりの世界に唯一人心の底に深く馴染んだお京とこのまゝ別れて、明日の日から他人になつてしまふのだと思ふと、欽之助には餘りに男と女との現世の緣が薄いもののやうで、たゞ哀れつぽくて耐らない。お京と今まで優しく解け合うてゐた、祕密の心や體の關係は、懐かしい亡母のかたみの芳子にも求められない。まして神戸の政子に對しては少しもさういふ心持は起らない。別れようと思へば思ふほど果敢なくて仕樣がない。別れる方がいゝにきまつてゐる女が、別れようと思へば、どうして斯う厭な氣持になつて、胸が迫るのであらう。そんなら家も親の意見も棄ててしまつてお京と公然一處になつたら、どうだらう。と、ふつと空想して見たがそれはしたくない。けれども悲しい思ひをして別れたくない女と何故別れねばならぬのであらうかと思ふと人間が窮屈でならぬ。畢竟生きてゐればこそ色々下らぬ世間體があつたりして一旦深い關係になつた女とまた他人になつてしまはねばならぬ。それが何ともいへず物足りない。

そんなことを考へてゐると、欽之助はどうしていゝか、わけが分らなくなつた。さうして昨夜遲くまで妹や弟に讀んできかした近松の「曾根崎心中」や「天の網島」の中の男女が生きてゐては所詮遂げられぬ戀を、死んで後の未來永劫までも續けようとしたのを道理あることと思つた。生半肉體が存在すればこそ悲しい別離を

見なければならぬ。肉體さへ滅してしまへば戀する心と心とは自由に永久に一緒になつてゐられるのだ。

お京の家に行つて見ると、餘處の女は皆な賑かな、宮の街に出て歩いてゐるのに、お京ばかりは何處にもゆかずに家にゐた。

「街が賑かどすやろ。私外に出て見たうても出られしまへん。一緒につれていとおくれやすな。」

此の間買つてもらつた浴衣を縫つてゐた覺束ない針の手を留めて、懐かしさうにさう言つて、欽之助を見上げた。

「ふん、いてもえゝけど、僕何や知らん氣が詰つて、氣がつまつて叶はん。」さういつて欽之助はどかりと腰をそこに落した。

「また旦那はんかお仲さんに何にかおいはれやしたんどすか。」

お京は心配さうに欽之助の曇つた顔容を見まもりつゝ訊いた。お京としても心は少しも浮かぬのだが、さうかといつて誰れに打明けて聞いてもらふやうな者もないので稚い思案で我れと我が心を引き立ててゐるより他はなかつた。ほんとに考へれば考へるほど、自分ほど頼りの無い者はない。御飯を食べるにも何をするにも頼りきり斯んな寂しい月日を送つてゐるのは何をあてにさうしてゐるのやらう。唯若旦那一人の心を生命の綱とも思うてゐればこそやないか。それに若旦那に此の間のやうなちよつとも自分で覺えぬ無體なことをいはれてはほんまに自分の立つ瀬がない。こんなんやつたらいつそ一と思ひに死んでしまうた方がえゝ。お京には死ぬるといふことは恐ろしくも何ともなかつた。

「いんえ。あれから何も言はへんけど、お父さん唯默つてそんなこと、ちよつとも知らんちふやうな顔をしてゐられるのが、何ぞいはれるよりも氣がづつなうてなかなか叶はんのや。」

「私のやうな者が付いてゐるさかい、あんたはんがそんな心配おしやすのや思ふと、私も氣の毒で、氣の毒でほんまにどないしたらえゝやろ思ひますわ。」

一昨夜は思ひもかけぬ疑ひを言ひかけられたのでお京は眞氣になつて腹を立てたが、あれから獨りになつて若旦那の心をしみじみと考へて見れば、全く氣の毒でもあつた。

「今更そんなこといはんかてえゝ。」

欽之助は打消すやうにいつた。

「なんぼ考へたかて同じことや。」欽之助は獨語のやうにいつて、

「どうや、ほんなら一緒に出て見ようか。」

「出で見まひよう。」

それでもお京は嬉々として其處らに散らかつた仕事のしさしをとり片付けて箪笥から派手な中形を出して着た。それは欽之助がわざわざ東京に註文して取寄せた品であつた。着物を着更へてもう一遍鏡臺の前に坐つて見て、それから立ち上つたお京の姿はすらりとして脊が高かつた。

遠くの街から單調な懐かしい祇園囃の鉦や笛の音が喚るやうに響いて來た。

そして出かけようとしてゐる處へ、ガラガラと表の格子の明く音がしたので、お京はそのまゝ行つて見ると、

「欽之助が來てやへんか？」

と、聲を掛けて入つて來たのは、どうして此處を聞いて知つたか、思ひ掛けない父の欽造であつた。

「お越しやす。へえ、おこしやしといやす。」

お京は、おどおどしながら、さういふより他にいひやうがなかつた。欽之助は聲を聽いてすぐそれと分つたか、もうどうすることも出來なかつた。

欽造は、つかつかと奥に通つて欽之助の其處にゐるのを見ると突如頭から、

「阿呆め、大抵にして目を覺さんかい。」
と、叱りつけながら、隅の方に極まりわるさうに小さくなつてゐるお京を振返つて少し聲を和げて、
「お京、長いことやな。……お前も家の欽之助を大切にしてくれるのは難有いかな、これも最う此の十二月には嫁を持たすことになつてるよつて、何時までも、いつまでもそんな極道さしとけんさかい、え丶加減にして諦めとくれ。」
さういつてまた欽之助の方に向つて、
「あの手紙をよう見たやろ。こんな者に係り合うてゐたらどむならん。お前は騙されてゐるのが氣が付かんか。私等のやうな古い者はもう仕様がないが、新らしい教育を受けたお前等はもつと確乎してもらはんならんやないか。……」
さういふ父は何處までも差出人の分らぬ手紙に書いてある通りを眞實と思ひ込んでゐるらしい。
それを靜と聽いてゐるお京は、もう〳〵一と思ひに死んでしまひたくなつた。
「お京、お前もそのつもりでゐとくれ。今後一切欽之助を此處へ來さんよつて。……」
「ほんまに旦那さまに申わけおへんどす。」お京は啜り泣きしながら一と言いつた。
「せうむない。此女にはまた後でえ丶やうにするさかい。お前も一緒に歸りいな。」
「え丶。」
と、欽之助は澁々返辭をしたが、起たうとはしなかつた。
「さあ、歸ら〳〵。」
「僕、ちよつと後から歸ります。」
「そんなこといはんと一緒に往の。」
欽造は無理やりに自分と一緒に連れて歸らうと言ひ張つた。
さうなると欽之助も子供ではないから、先刻から頭ごなしに阿呆呼ばはりをして怒鳴りつけられてゐたのが、恐い、極りが惡いといふのを通りこして親父ながらも辱かしめられたやうな感じがして勃然となつた。親ならば、そんなにがみ〳〵言はんともつと優しく言つてくれてもよささうなものだ。何も阿呆ぢやの極道ぢやのといはんかて、自分とてもいつまでも愚たらなことでは楓家といふ京都一流の旅館の名に對しても恥かしい、父に對しても濟まぬ。どうか父には餘計な心配をさせぬやうに自分で始末をして女と綺麗に別れてしまひたいと、いろ〳〵と胸を碎いてゐるのを察しもしないで智慧の足りないもののやうに口汚く罵られるのが痛いやら情ないやらで、腹が立つ。こんな時になるとまたしても死んだ優しいお母さんが懷かしくなる。それを思ふと生きてゐる父親よりも、亡くなつたお母さんの傍にゆきたい……
性來感情の激し易い欽之助は、こんな考が、むら〳〵と頭に浮んだ。
「往にますいうたら、直き往にます。」強く言つた。
「さうか、それではきつと戻りや。」さういつて置いて欽造は、一足先に歸つて行つた。
お京はそれを格子口まで送つて、急いで欽之助の傍に戻つて來ると、
「旦那さんが、あんなにきつうおいひやすさかい、あんたはんにもう來てもらはれしまへん。私もう死んでしまひます。」聲を上げていひながら、そのま丶其處に突伏した。
「いゝ、やゝこがあんたはんのと逆ふか逆はんか私死んだらよう解ります。」さういつて強く泣いた。
欽之助は、それを見てゐると、誰にも明かさず、廣い世界に二人きりで互に心配し合つて胸を痛めてゐながらも、それでもせめて氣を晴らさうと思つて、嬉しさうにいそいそと宵宮の賑ひを見に出ようとして樂しんで着

物も着更へ、頭髪も綺麗に撫で付けてゐたものをと、父の仕打ちの口惜しさが思はれるとともにお京のさめ〴〵と泣いてゐる姿形のいぢらしさが一入募つた。さうしてこんな可愛いものの爲になら、自分の身はもうどんなになつても少しも厭はぬといふ氣になつた。そして髻を顫はして泣いてゐるお京の背を靜と撫でて、

「もうそない泣かんとおゐや。私も死ぬよつて、お前もほんまに一緒に死んどくれるか。」

お京は泣きやめなかつた。

「さ、もう泣かんと、僕も死ぬさかい一緒に死の。」

欽之助はきつぱり決心した聲でいつた。

お京はそれを聽くと泣顏をあげて、

「ほんまどすか。誰と逢ひますか。ほんまに死んどくれやすか。」

「何で譃いふかい。ほんまに死の。」

「さうどすか。ほんまに私と一緒に死んどくれやすか。」

さういつて、お京は涙で赤くなつた眼で、まぶしさうに欽之助の顏をぢつと注視つて、嫣然と何ともいへない寂しい笑ひを洩らした。

「死ぬ、死ぬ方がえゝ。死ぬのはちよつとも痛いことない。お倹傳兵衛やかて、小春治兵衛やかて皆な心中したのやさかい。」

さういつて欽之助も寂しく微笑んだ。

しかしさうして二人の心が心中することに決つてしまふと、先達てから重荷を背負つたやうに苦しかつた欽之助の胸は一時に輕くなつた。

「ほんなら、親父あんなに喧ましういふよつて、今夜は自家往なんとわるいさかい、一遍いんで支度して來るわ。お前もちんと支度して待つといや。」

「さうどすか、ほんなら、どうぞさうしとくれやす。明朝早うに來とくれやすや。」

お京は歔欷しながら殘り惜しげに欽之助を格子口まで送つた。

外はまだ群集の出盛る最中である。欽之助は何といふことなく昔懷かしい夜の燈にしめやかに輝く金銀の屏風の立ちつらなつた街を歩いて行くと、太い絹房で絞つた家々の定紋を染め出したまん幕や、目の覺めるやうな美しい毛氈の色や綺麗に飾られたその店頭に坐つてゐる男や女などが、何か自分が其處にゐて、今は永く忘れてゐたある遠い時のことを思ひ起さしめるやうで、もう一度其處へ早く行つて見たいやうな氣がした。そして先刻歩いた時とは全く違つた落着いた悲壯な心持になつてゐた。

自分を信頼して今では、これまで父自身でしてゐたことを何も彼も自分に任せてゐる、その心を察してゐればこそ不孝な行ひをしてはならぬと、お京の處に行くのもつらい思ひをして隱れ〳〵行つてゐた。それをばあんなに蓋も身もなく突き暴いて、恥かしめられては、もう父に對する人情は冷めてしまつたばかりでない。さういふ自身が自分以上の行跡をしてゐるのぢやアないか。

さう思ふと、欽之助はどうしても死んで、後で皆なに悲しがらせてやる、といふ決心を探通さずにはゐられなくなつた。

自家に歸ると自分の簞笥の中から着更の單衣を取出して目立たぬやうに小形の手提鞄の中に入れておいた。

五

翌朝、銀行の執務時間の始まるのを待ちかねて、欽之助は金庫の置いてある部室に入つて行つて、その中から預金の通帳を取出した。そして三條烏丸角の第一銀行支店に行つて三百圓引出して懷中に入れ、一旦また自家に戻つて通帳を元の處に納め、昨夜用意して置いた鞄を持つと、そのまゝ家を出てお京の處に行つ

た。人目が多ければ多いだけに誰れもそれに氣のつく者がなかつた。

お京は昨夜、あれから獨りきり稚い胸をいためながら覺悟を決めて待つてゐた。

早速あり合ふ信玄袋の中にお京の上等の夏物ばかりをあるだけつめて、そこ〳〵に其處を片付け、二臺の俥を呼んで來て、それに乘ると幌をおろして道を急がした。やがて俥を南禪寺に行く道を祇園の方に回つて、石段下の、とある寫眞屋の處で止めさして、二人はこの世の名殘に一緒に竝んで寫眞を寫した。それから南禪寺の境内にある檀家代々の墓に參つた。

そこには四年前に死んだ母の墓碑がまだ新らしく立つてゐた。この春亡くなつた祖父の眠つてゐる頭の上には土がこんもりと盛り上げられて、白木に記した戒名の墨の跡が鮮かに讀まれた。

「これが今生の京都の見納めや、よう見ときや。」

「ほんまに、さらどすえなあ。」

そんなことをいひつゝ二人はやゝ暫く、人氣のない綠の木蔭に立つて涼しい松風の音を聽きながら、餘念なく若王寺から銀閣寺の方の山を眺めつゞけてゐた。それから二人はまた俥に乘つて直ちに二條驛に走らした。

妹の芳子は大阪から出て來た二十二日の晩會つたきり、二十三日はかけ違うて一日顏を合はさず、二十四日も朝から兄の姿を見なかつた。その日の頃外の出先から電話が掛つて來て、芳子に一人で寂しからうけれど、友達と一緒に飯を食べるから、晩には歸るから、待つてゐるやうにと言つて來たのを、女中が聞取つてゐて、後になつて知つた。けれども二十四日は夜になつても兄は遂に歸つて來なかつた。

その翌日も一日待つてゐたけれど晩になつてもやつぱり歸らなかつた。それで家の者も、ちや昨日からの友達と一緒に何處かへ遊びに行つたのだらうといつて放つてゐた。が、その夜遲くなつてもまだ歸つて來ないので、時々欽之助の使ひをしてお京の家をよく知つてゐる下女をやつて訊ねて見さすと、入口は閉まつて家は留守になつてゐた。すると何處かの人が二十四日の朝二人を二條驛で見たといふ話も傳はつた。それで欽之助の部室を見たが別に變つたこともない。金庫を調べて見ると預金の通帳で三百圓受取つたことが初めて分つた。

「ほんならお京さんと一緒に何處ぞへお行きやしたんどつしやろ。」

「阿呆やなあ。心配せえでもえゝ。あるだけ使うて、金がないやうになつたら、また歸つて來よる。」

父はさういつて棄てて置かした。

下の巻

一

二人の者は、首尾よく知人にも會はず、祇園祭に賑ふ京の街を後にして、二十四日の午後、二條驛から汽車に乘つて舞鶴の海岸へと志した。

初めは伊勢の方にしようか、それとももつと遠く宮島か或は沼津か鎌倉か、金のある間はこの世の名殘りに遊び暮して、その上で死ぬことにしようと、そのつもりで女の衣類なども餘分に用意して出たのであるが、一旦覺悟をきめると、そゞろに死ぬのが急がれて、追手のかゝるのも氣がかりになり、また淺間しい死骸となつてからの後始末のことなどをもちへて、やつぱり舞鶴の自分の家の別莊に行つて、心を落着け、海に身を投げることにした。

欽之助は千筋大名の細上布の單衣に紺博多の角帶をしめ、細の鐵無地の羽織を着て麥藁帽子をかぶり、お京は薩摩上布の荒い黑絣に白地に墨繪で芭蕉の葉を大きく染め出した羽二重の丸帶を涼しさうにしめ、結ひなほしてゐる暇のなかつた丸髷を念入れに取繕うて網の手がらをかけてゐた。それが仲よく二人並んで一つ膝掛の上に腰をかけてゐる様子は、いかにも樂しい若夫婦の避暑旅行のやうで、餘處目にはどうしてもそれが明日をも待たぬ心中にゆく死出の旅路にゐるものとは見えなかつた。

やがて汽車は京都の郊外をめぐり、藪疊みの蔭を映せ、花園、嵯峨の停車場を過ぎてこれから小倉山隧道に進み入らうとすると、欽之助に寄り添うてゐたお京は忽ち男の肩に凭れかゝつて泣き崩れた。

今までは汽車の窓から、夏木立の間に十七年の間見馴れた、諸方の山の形や寺々の高い屋根や五重の塔などが見えてゐたが、もう此の隧道を向に抜けてしまへば、再びそれらは見ることは出來ぬ。さすがに覺悟はしてゐるものの、ずつと前に龜岡から保津川を舟で下つたことがあるばかり、生れて京都の土地より外に遠く出たことのないお京は隧道の暗に入るとさすがにはりつめてゐた氣が、にはかに弛んで悲しさが一時に込上げて來たのである。

それを欽之助に窘められたり慰められたりしてゐる間にいくつもの隧道をぬけたり、目の覺めるやうな碧い深淵の上を通つたりして、美しい保津川の峽谷を向へ出放れてしまふと、お京には初めて見る、知らぬ山や田がつゞいてゐた。そして淋しい山の裾に藁屋根の家が二三軒立つてゐて、大原女のやうな風俗をした赤いものを身に着けた若い田舍の女が青田の畦に立つて何かしてゐた。お京は引入れられるやうな心地で白布で眼をおさへ〳〵そつちの方を見てゐた。

二

楓家の別莊は舞鶴の街から海の上をまだ一里あまりも乘り出した香が崎の海岸にあつた。その晩二人はわざとすぐ別莊の方には行かず舞鶴の街の旅館に泊ることにした。

やがて女中の案內する風呂へつゞいて入つて、今朝から汗や汽車の煤煙に汚れた體を流して來ると食膳を運んで來た。

「私ら勝手に食べますよつてお給仕はよろしおす。」

さういつて女中を遠ざけたが二人とも進んで箸を取るほど空腹を覺えなかつた。

お京は湯上りの浴衣姿で化粧袋から懷中鏡を取出して濡れた前髮や鬢をなほしてゐた。

「あんたはん御飯おあがりやしまへんのどすか。」煙草を吹かしながら横になつてゐる男の方を振返つた。

「食べたうない。」

「私も欲しいことおへんわ。」

これまで欽之助は、お京の處に行つても大抵夜遲く行つて朝早く歸るので、落着いて一緒に膳に向ふやうなことは滅多になかつた。

「大事おへんか。ちよつとお邪魔をさして戴きます。」

さういつて、番頭が宿帳を持つて入つて來た。

欽之助はそれに自分で妻京と記した。

番頭は宿帳を受取りながら、

「へえ、おほきに。……明日は宮津の方へでもお越しになりますので？」

かういつて訊ねたけれど、

「いゝえ。」と、欽之助はたゞ頭振を振つた。

暫くして女中が膳を下げに來た時に、女は男の膝の上に丸髷の頭をおしつけて泣いてゐた。二人が驚いて、はつと飛び退くと、入つて

來た女中は間のわるさうな顔をして膳の方を見たが、少しも箸をつけた樣子はない。

「あゝまだちよつとお早うおしたか。」

「えゝ、もうよろしおす。どうぞ引いとくれやす。」お京は外方向いたまゝ細い聲でいつた。

そして女中が行つてしまふと、

「そんなことおいひやして、あんたはん、また政子さんや、家のことや思ひだしとゐやすのどつしやろ。」

「なんにも政子や家のこと思ひだしてへんけど、晩にはかへるいうといたんやさかい、後で芳子がきいたらさぞ落膽するやろ思うて、ちよつとさういうて見たんや。」

「私、神戸の政子さんだけにはほんまに濟みまへんわ。芳子さんやかて、どなたやかて皆な私一人を惡いやうに思うとゐやすのやもん、私が、どんなに怨まれますやろ思ふと死んでも恐うなりますわ。」

「死んだあとで誰れが怨んだかて、構はへんやないか。私とお前と二人で死んだら、それほど心丈夫なことはないやないか。」

「さういうとくれやすと嬉しおすけど、あたし、あんたはんにほんまに濟みまへんわ。」

「なんで？」

「私、生きてゐたかて、貧乏人の女房ですけど、あんたはんは良えとこの若旦那やさかい、生きておゐやしたら、どんな面白いことでも、これからたんと出來ますのんに。」

「今更そんなこというたかてあかへん。もうそんなこといはんとき。金がなんぼあつたかて仕樣があらへん。それよりも愛する者の心と愛する者の心と一緒になつて離れんとゐると思うたら、それほど樂しいことはない。何十萬圓の金よりも貴いのや。」欽之助は自分の意見を洩らした

「そないいうとくれやすと、私なほのこと濟んまへん。どうぞ勘忍しとくれやす。」

お京はまた男の膝に顔を伏せて、力を込めて忍び音に泣き續けた。

欽之助も柔かいその背をぢつと抱へて泣いた。

「お京、私お前が可愛い。私とお前とは夫婦やぜ。いつまでも別れまいなあ！」

さういつて、欽之助は熱い頬を女の豐かな鬢にすり寄せた。

「若旦那！……あんたはん！……」

お京は胸の底から小さい聲を出した。

「ふん、なんや？……なんや？……」

二人は顔と顔とをぴつたり押しつけた。そして何もかも忘れて、自分の肉體が互の肉體にこのまゝ溶けて消えこんで仕舞へばいゝといふ氣になつた。

蚊帳の中に入つてからも短い夏の夜のやがて明け白む時分までも尚ほ語りつゞけてゐた。

三

そして翌日の午頃になつて、わざと自分の名をいはず別莊の番人の處へ電話をかけさして、もし誰れか來てゐるものはないかと訊いて見た。けれども誰れも來てゐないといふ返辭であつた。それで安心して其方へ渡つて行つた。

「六さん、また來た。」

外から元氣よく聲をかけつゝ欽之助は玄關から石段を上つて來た。

「おゝ、若旦那でございますか。」

別莊番の六藏は早速出迎へた。そして欽之助の後から從いて來た美しい丸髷姿のお京の方へ不思議さうにちよつと目をやつた。

「よう來ておくれやした。今日はどだい暑うおましたやろ。京都では、どなたはんも別にお變りおまへんどすか。」樸實な言葉で改めて挨拶

した。
「あゝ、皆な無事や。どや、六さんも機嫌えゝか。」
「へえ、私もお蔭さんで。……暫くまた此方に御逗留どすか。」
「あゝ一週間ほどまた世話になるよつて、どうぞ頼んます。」
そこから舞鶴の入江は、湖水のやうに一眸に見渡された。
初めて海といふものを見るお京は、先刻此方へ渡つて來る窮屈な通舟の日蔽ひの隙間から碧凄く澄んだ水がちらりと眼に入つた時、慄然としてその中へ引込まれるやうな恐怖に襲はれたが、別莊の緣側に立つと海の上を渡つて來る寒いほど涼しい風が、ハラ〳〵と鬢の後れ毛を吹きなぶつた。
入江の周圍を取卷いて、段々遠くの方に行つて高くなつた山と山とに鎖された輝く水の上を白い小形の蒸汽船が黑い烟を揚げて緩く滑つて行つた。それは宮津の方に出て行くのであつた。對岸の小山の裾に雛段のやうに切開かれた畑の傍に家が五六軒立つてゐるのが頼りなささうに見えた。
「まあ、まあ。好え處どすえなあ。」
餘念もなく海の上を見てゐるお京には此處が自分の生命を棄てる恐ろしい場所といふやうな心持はしなかつた。
淺い潮水は別莊のすぐ下の岩疊みを輕くなぶるやうに洗つてゐた。
お京は着物を着更へると、欽之助と連れ立つてそこらの磯ぶちを歩いて見た。人家はその邊になかつた。
「六さん、鰡網を引くよつて、手傳うてんか。」
欽之助は座敷の物置きから網を取出して來た。
夕刻その網をあげて見ると、尺八寸ばかりの大きな鰡がかゝつてゐた。
「あ、ほんに大きなんどすなあ！」
お京は子供のやうに悅んだ。欽之助はそれを提げて歸ると自分達で料理つて、夕飯は樂しさうに快く食べた。

四

夜は早くから奧の八疊に入つて襖を閉めたまま外に出なかつた。
二人は、いつまでも盡きぬ名殘りを惜しみつつ夜の更けるをまつて、やがて眞夜中と思ふころ寢床を起きいでて欽之助は玄關脇に寢てゐる番人夫婦の目を覺さぬやうに窃と足音を忍んで二人の履物を取つて來て、緣側に置き、それから雨戸を音のせぬやうに一枚繰つた。外は眞暗である。
お京は小紋形の鳴海絞りの寢衣の上に青と赤との碁盤の派手模樣を織つた伊達卷を堅く締めなほし、欽之助は白毛斯綸タオル織の單衣の上に鼠縮緬の兵兒帶を卷き、自分は昨日舞鶴の宿で女中に買つて來さした一反の晒木綿を取上げ、お京は出間締めて來た羽二重の丸帶と緋縮緬の扱帶とを一緒にして抱へ、緣側から庭先に出て小砂利の上をサクリ〳〵と靜に踏みながら海端に降りて行つた。そして晩にそのつもりで波打際に繫いでおいた別莊所用の猪牙舟の傍に步いて行つて、それに先づお京を乘せると自分もつゞいて乘り、なれた手付で櫓を操つて、やがて五六町沖へ漕ぎ出した。
月のない時分である上に、夜になつて雲が出て來たと思はれて星屑さへも見ることが出來ぬ。空も海も一面に墨を流したやうに黑み渡つて居る中に、たゞ遠くの沖に漁火の影が暗闇の底に見えたり隱れたりしてゐる。風が死んでゐるので波は壓付けられたやうに靜つてゐるが、それでも鹽氣を含んだ冷い夜風がひや〳〵と氣

味惡く寢起きの肌に觸れた。

「もうこゝらでよろしいがな。私恐いわ。」

欽之助は、昨夜舞鶴の旅宿で書置きに書いて置いた通り、死んだ後では二人一つ處に葬つてもらひたいので、死骸を引上げてもらふ都合からもあんまり沖の方へは行きたくなかつた。

彼はそこらで櫓を漕ぐ手をとめて、その櫓を舟の上に引揚げた。そして女の傍に行き、

「何も恐いことあらへん。僕と一緒にゐるのやもん。」

さういつてお京をいたはりつゝ、互に體と體と犇と抱き合ひたる上を、持つて來た狎二重の帶で卷き、その上を白木綿の晒布を解いてグルグルと幾重にも卷きつけ、その端をお京の背で十文字に固く結び、尙ほ未來永劫離れじと欽之助の右の手とお京の左の手とを緋縮緬の扱帶で強く括り合はした。

「お腹のやゝこが、どないしますやろ。私こはい。」

お京は身を顫はして男の肩に喰入るやうに泣きついた。

欽之助はそれを左の手で確と抱へて、

「もうそんなこと言はんとき。かうしてお母さんの處に行かう。」

と、いひつゝもろともに舟べりから水底深く身を投げた。

五

六藏は夜中にふと目が覺めたので次の間を通つて便所に行かうとすると、奥の八疊の襖が三尺ほど明いてゐて、ランプの燈は消えてゐるのに蚊帳がひどく吹き捲くられてゐるのが微明にもよく見えた。不思議に思うて窺いて見ると緣側の雨戸が一枚明いてゐて、そこから磯臭い濕つぽい夜風が颯と吹き込んでゐる。蚊帳の中を透かして見ると二人の寢てゐる姿は見えぬ。

戸の明いた處から顏を出して、

「若旦那はん！　若旦那はん！」

庭の方を透して呼んで見たが其邊に居さうな樣子はない。

自分の部屋に戻つて婆さんを呼び覺して、

「若旦那、寢苦しいよつて外へ涼みにでも出やはつたんやろか、家にゐやはらん。」

「さうどすか、今時分涼みに出やはらしまへんやろになあ。」

六藏は表の入口を明けて石段を降りて行つて波打ち際に立つて見渡した。海も空も眞暗である。小山の麓に沿うた軍港に往ふ里道を東に行つたり西に行つたりして見たが、人のゐさうな氣配もせぬ。舟の置いてある處に行つて見ると、果して舟がない。さうかうしてゐる内に短い夏の夜はいくらか微白くなつて來た。海の上を透して見てゐると、人の乘つてゐない小舟が一艘波に搖られて岸の方に流れ寄つて來た。まちかねてよく見るとそれはまぎれもない別莊の舟で、櫓はちやんと揚げてあるが、中に男女の下駄が脫ぎ棄ててあるばかりであつた。

六藏は、それを見るとアッとばかりに仰天した。

その朝早曉、舞鶴の漁夫が十名ばかり香が崎の沖合に鯖を漁するために地曳網を引くと、その網の目に、まだ生きてゐるとしか思へない綺麗な男女の死骸が、金の指輪をはめた手で抱き合ひたるまゝ引きあげられた。

疑惑

それは惱ましい候の頃であつた。私がお前を殺してゐる光景が種々に想像せられた。晝間はあんまり明る過ぎたり、物の音がしたりして感情を集中することが出來ないから、大抵蒲團を引被つて頭の中でお前を殺す處や私が牢に入つた時のことを描いては書き直し、描いては書き直してゐた。何處に嫁いてゐるだらうと、それを探し出すことを考へながら、丁度呼吸を詰められたやうな氣持で毎日々々同じことを繰返して想像するより他にしようと思ふことがなかつた。疲れた體を蒲團の中に横へてお前を殺す前後のことを思ひ續けてゐるのが、まだしも一番慰藉であつた。

そして色々に狼狽へた。警察署に家出人捜索願を出して見た。けれどもさういふことは、警察でも他にそれよりもつと重大な事故が多いのだから、冷淡に取扱つて、

「一度調べて見よう。」といふに過ぎなかつた。

ある分署では、

「四十二年の秋に居なくなつたものを四十四年の四月になつて捜索願を出すといふのは、どういふ理由だ。」

と言つて訊いた。少し氣に留めて聞いてくれる所でも、そんな事より他に注意を拂はなかつた。私もお前の事を警察にまで持ち出すといふのは、自分の所爲に對して恥辱を感じてゐたのだ。それが思ひ切つてさういふ事を爲るやうになつたのは、よく／＼棄て鉢になつたからだ。

けれども警察では迚も分らう筈は無いと思つてゐた。それを知つてゐながら自信のない事を持ち出して頼んだのは、さうでもしなければ靜と氣を落ち着けてゐられなかつたからだ。思案に能はぬ時におみくじを抽いて見るやうなものだ。私はつひぞおみくじを眞心になつて抽いて見た事はなかつたが、そんなにまで馬鹿になつてゐた。そして警察ばかりでも安心が出來ぬから、ある新聞社の祕密探偵に頼んだ。それとても平常は、何だ、無智な愚民を好い加減に欺いて新聞屋が金を儲ける仕事だと冷笑するくらゐに思つてゐたのだが、私はそんな事をすら頼みにする氣になつて、鳶を質に入れて五圓をこしらへ、それを持つてその新聞社に行つた。そして自分の想像や心當りを探偵の參考になるやうにと思つて、明細に話した。けれども私はそれを話してゐる間に、祕密探偵なんて駄目なものだと愈々思つた。その男は五十餘りの、人相から言つたら以前は警察の探偵でもして居つたかと思はれるやうな顏をしてゐたが私に對して問ひ質すことが型に嵌つてゐて、

「ぢや、男を拵らうとするんですな。」

といふやうなことを言つた。

「否、さういふ質の女ぢやないんです。」

と私は答へながら、更に委しく說明をした。

それでも此方のいふことが明確に向うの頭に通じない。そして私の言葉が少し途切れた隙を見ては、

「ぢや五圓だけ頂いときます。」と二度も、靜かに催促するやうに言つた。そして私から受取つた五圓札をポケットに藏ひながら、

「事情によつてひどく手數が掛かるやうでしたら、また此の上に幾許か御貰ひするかもしれませんが、差當りこれだけ受取つて置きます。」

と言ひながら、勿體ぶつた祕密探偵券とか受取證とか誌した證票のやうなものを二枚渡し

た。私は腹の中で可笑しく思ひながら、子供だましのやうなものを受取つて紙入れに藏ひ、

「幾日ぐらゐかゝりませう？」

と效果の無いことを承知してゐながら、自分で氣安めに訊ねた。

「まあ、二週間ですなあ。都合によつたら、その沼津あたりへでも行つて見なけりやなりませんから。」

五圓を受取つて了ふと一段心の融けたやうな口を利いた。

「安心して少し氣長く待つていらつしやい。……いや、早晩屹度探し出してお目に懸けます。」

私が子供か或は神經を病む病人かなぞのやうに、愚にも付かぬ事を執拗く訊くので、好い加減にしてお歸りなさいと言はぬばかりに言つて、向うから腰を上げた。

私は何といふ馬鹿だらう。今初めて會つた人間に、私の複雜な秘密の、その唯一部分のみを摘んで、話して、それで向うがちやんとその秘密の鍵を握つてでもゐる神のやうに、此方から何處に行つてゐるでせうとか、何日ぐらゐしたら分るでせうとか言つて訊くやうな、そんな愚に還つて了つたのだ。

私は二週間の間を、十年は愚か百年もかゝるやうな惱ましい思をして待ちあぐんだ。そして二週間目の二十六日の日にけ違はず新聞社に行つて見た。けれども何で分るものか。例の男は、

「そゝそんなに、さう……」といふやうなことを、穩かに半分いつて、私を宥めるやうにした。

それで到頭私は人頼みは止めた。そしてそゝこそ雲を摑むと言はうか、それよりももつと當ての無いことだが、自分で日光に行つて見ようと決心した。

前の手紙にも言つたやうに、私はどうかしてその新さんの處にある日光の團扇か杯か見たいと思つたが、それは手に入らない。それで斯う思つた。去年の夏日光に行つたといふから、その團扇は多分宿屋から、貰つたものに違ひない。それとも日歸りに行つたとすれば、泊つた宿はない譯だ。さうすれば買つて來た團扇や杯かも知れぬ。併しさういふ男と一緒に日光に行つて泊らずに歸る筈はない。何處かの宿に泊つたに違ひない。去年の夏と言へば、七月か八月頃であらう。今から既に一年近くも前の事だが日光中の宿屋の宿帳を一軒々々探して見たら、どうかすると宿帳に名を誌してゐるかも知れない。泊つたとすれば誌してある筈だ。

書籍といふ書籍は、少し價のある洋書はもとより、義太夫百番の本まで賣つては小遣にするやうにして本を讀むとか物を書くとかいふやうなことは少しもする氣になれない。お前を探し出してお前を見るより他に何の目的もないのだから、私はそんな頼りのないことをせめても心當てにして日光に行つて見るのが、私の此の世に縋つて生きてゐる心の綱として何樣に大事であつたかしれない。

日光に行く旅費としてまた五圓の金を拵へるに、頭が全然疲れて亂れてゐるから、三日も四日も掛つて僅かに十枚ばかりのつまらぬ物を書いて、それで懇意な本屋の主人に拜むやうにいつて貸して貰つた。

そしてそれを借りると直ぐその足で神樂坂の雜誌屋の店頭で旅行案内を繰つて見て上野のステーションに驅けつけ、三時何十分かの汽車に乘つた。それは五月の四日であつた。

それまでも、お前の知つてゐる通り私は可なり方々に行つた。が日光に行くのはそれが初めてであつた。その汽車は特に日光行であつたから、汽車の中には日光見物に行くらしい西洋人の男や女が大分乘つて居て、通譯と話してゐた。さういふ場合に何も二等に乘らなくても

善いのだが、靜とお前達のことや、その他それに關係した種々なことを思ひ耽るには、なるたけ客の乘つてゐないのがいゝから、それで一等に乘つたのだ。毎時もの旅行とは違つてゐるのだ。日光と言へばまだ行つた事がなかつたが、其の内ある夏には長い間行つてみようと思つてゐたのに、さういふ景色の好い、言はば樂みに行く處を此度のやうな事で初めて行つて見ようとは思はなかつた。私にはさういふやうに何につけ彼につけ怨みの種になつた。斯うして當てもないことを當てにして日光に行く。人が聞いたら笑ふばかりではない。自分だつて少しく心を落着けて考へて見れば、馬鹿なことに精も根も疲らしてゐるのだ。これは是非男らしく思ひ諦めねばならぬと思ひながらも、やつぱりお前のことが思はれて、つまらなくて仕方がない。そして勉強するのが何だ？　勉強といふことは西洋人の書いた小説を讀んだり、自分でも小説を書いたりすることだらうか、それが其樣なに高尚な職業だらうか、私には、それよりもお前の行先を搜すことが、生きて行かねばならぬことの唯一つの理由である。さう思つて、名譽や外聞を憚る心や、人に笑はれて恥しいと云ふ心を嘲るやうに抑へつけて置いて、お前のことに血道を上げてゐた。日光に行く汽車の中でも、また徒らにそれを思ひ起しては掻き消してゐた。

汽車が日光の山深く入つて行くにつれて、長い五月の日も早や暗くなつて來た。何物かを藏してゐるやうな男體山の眞黑い姿が、私の弱くなつた胸を威嚇すやうに思はれて、先達て中思ひ疲れて病み上りのやうになつてゐる體が、深山の嵐氣に襲はれて、ぞく〲と身に惡寒を感じた。遣る瀬ない涙が眼に滲んだ。それでも私は、草を分けても搜し出さずには置くものか。」と、矢來の婆さんの所で何度も齒を喰ひしばつた決心を夕暮方の寒さと共にます〲強く胸に引締めて、宿屋に着いて夕飯を濟ますとすぐ警察署に行つた。

警察では、どう言はうかと思つて、すこし心後れがしたが、努めて氣を勵まして、

「家出をして行方の不明になつた者がございますので、それは確か去年の夏時分、此の日光に來て泊つたらしい形跡があるのでございますが、誠に御面倒をかけまして恐入りますが、警察の方にまゐつてゐます宿屋の宿帳を調べて頂くことは出來ますまいか。」

私は思ひ切つて悄然としたやうな言葉でさう言つた。日光といへば、さう、家出人とか行方の分らなくなつた者とかの跡をくらます本場のやうになつてゐるので、また華嚴の瀧に投身した者を搜してでも來たかと思つたらしく、私の顏をじろ〲見守りながら心を察して呉れたやうに稍々言葉を和げて、

「男か女か。」

帶劍を解いた制服の巡査が煙管で煙草を吸ひながら訊いた。

「へい、女でございます。」

「女だ。幾歳になるんだ。」

「　去年で三十になりますんです。」

たゞ普通に夫と日光に來て泊つたものならば何でもないのだが、私がわざ〲自分から家出をした女だなどと言つて警察を煩はしてゐるので、お前のために年數もないと思はれはしないかと、贔屓目に五つも年を若く言つたが、一つは、警察で私をその女の亭主と思つた場合に、今年三十六になる女の後を追ひ廻してゐる心の中を見透かされて笑はれはしないかと、自分で自分を恥ぢてさう言つたのだ。それでも巡査は、

「三十？……もう歳を取つてゐるんだな。」

「へい……年寄りでございます。」

「去年の夏？」巡査は繰返して言つて、再び私の顏をじろ〳〵見ながら、「隨分古いことだな……とても分らないだらう……」と絶望的にいつた。

「分りませんでせうか？」私は心細い聲を出して哀願するやうに言つた。その上尚ほ聲を出したら全く泣き聲になるのであつた。「分りませんでせうか。」と哀願するまでもない、何の事はない、私は自分で事件を持ち上げて置いて、少しも委しく事情を知らう理由のない新聞社の祕密探偵だの、警察だのに向つて向うのよく知つてゐる事を尋ねでもするかのやうな、そんなに私の心が弱つて、他人に對して空賴みが強くなつてゐた。

巡査は暫く默つてゐたが、更に言葉を續けて「それに此の警察では宿帳はその晩宿屋から持つて來たのを、一度眼を通して檢査が濟むと檢印を捺して宿へ下げて了ふものなんだ、だから警察には宿帳は一と晩きり留めて置かない。それに何の宿屋にでも宿帳といふものは甲と乙とあつて、今晩甲のを警察に持つて來て置いといて、明日は乙のを持つて來たときに、甲のを下げて行くといふやうになつてゐる。警察ぢや一度見たらもう用のないものだから、宿屋によつては下げて了ふと直ぐ解いて了つて反故にするなり、何にするなり、無くして了ふ家もある。そりや一と月か二た月は藏つて置くかも知れないが、去年の夏と言へばもう半歳以上も前だから、保存してゐるかナ？　取つてゐる宿屋もあるかも知れん……」

斯う言つて委しく事情を話して聞かして、仕舞に小首を傾げながら、

「さういふ譯だから、そんな古いのは警察にはない。大變に面倒なこつたから、此方で一々調べて上げる事は出來ない……」齒切れよく言つて、巡査は稍々暫く默つた。

「へい……」私は聞いてゐながら一喜一憂した。

「併しお前が自分で宿屋に行つて調べて見ようと思へば、それは差支へない。警察に行つたら此處でさう言つたと言つて、自分で行つて調べて見たら好いだらう。警察でさう言つたと言へば見せてくれるから……併しもう大抵潰すかどうかして無くしてゐるだらう……」深切に注意を與へて呉れた。

「それから此處に丁度今來てゐるものもあるから……それに去年の夏の處があるかないか分らぬ、多勢宿泊人のある家とない家もあるし、帳面は何月から何月までを一冊にするといふ警察からの制規はないのだから、宿屋の勝手に何月間用ゐても差支へないのだ。だから家によつては二年も三年も同じ帳面を用ゐてゐるのもある……さういふ譯だから、こゝに來てゐるだけは今調べて見ようと思へば調べて見ても可い。」と、言ひながら、給仕の方へ目配せして、「おい、あれを彼方の机の方へ持つて行つてやれ！　此の男が見るんだ。」

それから私の方に向いて、

「彼方へ行つて見るが可い。あれだから隨分あるよ。」

さう言つて巡査は直ぐ火鉢の方に向いて行つて、同僚と何か雜談に加はつた。

給仕は其處にあるだけの宿帳を一尺くらゐの高さに二た重ね抱へて、向うの机の上に置いた。私はその宿帳を細かに一つ〳〵調べた。日光の町だけでも宿屋は二十軒の餘あるといふ巡査の話だつたから、今夜の中に其處にあるだけは見落さないやうに眼を通さうと思つて、自分の眞面目な研究物でも調査する時のやうに手帳を出して一々何といふ宿屋は何月までは眼を通して濟んだといふやうに、表のやうなものを急いで作つた。自分が職業上の勉強をするよりももつと自然に熱心になれた。私に職業と

云ふものは何だらう？ 私の飽きに飽き、疲れに疲れた生活力の衰殘はどうかしてお前が何處に行つてゐるかを探し出さうとする一念に集つてゐるのだ。

けれども其處にあつた宿帳には心當りの者もなかつた。一人スマといふ同名の女があつたが、それは茨城縣の者で五十何歳と書いてあつた。若し去年の夏日光に泊つたとしても、よもや假名は書きはすまいと思つたが、雲を摑むやうな果敢ないことをしてゐるので、何度自分を顧みて意志が鈍つたか知らない。自分を冷笑する氣になつて、もう搜すのを止めようと思つたけれど、お前を憎み、お前を愛み、お前が今此度の男と何うしてゐるといふやうなことを强く思ひ起して、何處までも搜して行くといふ感情を旺んにした。搜さずにそのまゝにしてゐたら、私は一層ぢつとしてはゐられない。

翌朝は早く起きて日光中の宿を搜し廻つた。警察署で注意して吳れた通りに、

「警察に行つたら、直かに宿屋に行つて見せて貰へといふことでしたから、來たのですが……あの、行方の分らなくなつた女がありますので、それを搜しにわざ〳〵日光まで來たのですが……去年の夏時分此の土地に來て泊つたらしいのです。誠に御面倒を掛けて濟みませんが、御家に、まだその時分の宿帳がそのまゝに殘つてゐますなら、一寸此處で見せて戴けますまいか……」

私はどの宿に行つても大抵同じやうに、かういふ事を言つて、今少しで泣きさうな心持になりながら賴んだ。

さうすると、宿屋でも、さういふ事は始終ある事なのだが、好奇心で、

「へえ？ 女がゐなくなつたんですか。若い女ですか……」といふやうな事を言つて訊く家が多かつた。

さういふやうにして一軒々々調べて行つた。

何の宿でも同情したやうな應對振りで心安く出して見せてくれたが、ずつと神橋の方に寄つた一番大きな旅館では、丁度二組か三組かの客を送り迎へしてゐる處で、忙しさうにしてゐたが氣後れのするやうな廣々とした立派な帳場先に突立つて、さう言つて賴むと、其處に居合せた番頭らしい印半纏を着たのが、

「高橋さん、此の人が去年の夏時分の宿帳を見せて吳れと言つて居るのですが、あるでせうか？」といふやうな事を言つて、嚴めしく一段高く造つた卓を構へた帳場に腰を掛けてゐる羽織の支配人らしいのに聲を掛けた。支配人は今立たうとして廣い土間に下りて立つてゐる赤皮の靴を穿いた客に、これから行く先の新潟か何處かの宿屋の紹介狀を認めて、詳しく案內をして居るらしかつた。一と通りその方が濟むと、此方を向いて、私の方を見た。私はまた同じ事を一層言葉を卑うして哀願するやうに言つた。

昨夜警察署で調べ、自分の泊つた宿のも調べ、今朝から道側の宿屋と言ふ宿屋は落なく見て歩いた。が、心當りは見付からなかつた。それに今まで搜した宿は、何だか泊りさうにない家が多かつた。この家ではどうかして見付かるかも知れぬと思つたから、私は其處では念を入れて調べたいと思つた。

支配人は私がさう言ふと、

「駄目だ。そりやあとてもわからない。」

と不愛想に言つて、また何か書きものをしてゐるらしい。この大きな旅館では警察でさう言つたからと言つた位では、何とも思つてないらしい。私は取りつく島もないやうな氣がして、またしても泣き出しはせぬかと、自分で氣遣はれさうになるのを、凝乎と淚を飲み込むやうにして、暫く其處に立ち盡してゐた。支配人は漸

い間忘れたやうに矢張り何か書いてゐたが、稍々あつて頭を上げて、私の方を見向くでもなく、

「私の處は多勢の客だから、去年の夏泊つた客なんか、とても分りやしない。」

「えゝ、そりや分らないでせうが、誠に御面倒ですけれど、その時分の宿帳がまだ保存してありますれば、一寸貸して頂くと、此處で御邪魔で濟みませんけれど、私が自身調べて見ますから、あるなら鳥渡でようございますから、見せて頂けますまいか。」と私は再び哀願した。

「さあ、宿帳が取つてあるか知らん。」と言つたまゝ、支配人はまた何かしてゐる。

「私も折角東京からこの日光まで探ねてまゐりまして、他の宿屋さんでは皆な見せて頂きましたのに御家のやうな御繁昌な家の宿帳を見ないで歸つては、誠に心殘りですから、ほんの一寸でようございますから見せて貰へますまいか。」私は氣後れをしてまた默つて向うの動靜を注意してゐたが、媚びるやうに、さう言つて頼んだ

支配人に私の言ふことを聞いたのか聞かぬのか、筆を耳に挾んで何處かへ行つて了つた。

先刻から其處にゐた下番頭は暫く默つてゐたが、彼方に草臥れたやうにして突立つてゐる私に、

「まあ、此處へお掛けなさい。今探しに行つてゐますから。」と言つてくれた。

私はそれを機會に腰を下して疲れた脚を休めた。

稍々暫くして支配人は突當りの大きな螺旋形の階段の後から幾册かの宿帳を平掌に載せて持つて來て、

「宿帳はあるのはあつたが、調べて見ようと思へば調べて見たら可いでせう……とても分りやしない。」

と棄てるやうに言つて、帳場に引返して行つた。私は先刻から絕えず種々の客の多勢出入する忙しい店先に隅の方に小さくなつて、

「さうですか、どうも誠にお忙しい所をお手數をかけまして濟みません。」

と、禮をいひ〳〵宿帳を繰り始めた。去年の夏時分から隨分宿泊人の名が記載されてゐたが、それらしいのは其處でも遂に見當らなかつた。

私は體が萎えたやうになつた。そしてさういふ當てのないことをしてゐる自分の愚さを省みる元氣すらも失せて了つたやうになつた。昨夜の暗の中とは違ひ、今朝は男體山の大きな山姿が手に取るやうに仰がれる。五月の初めとはいひながら、まだ茶褐色の冬枯の山巓には、薄化粧をしたやうに殘雪を置いてゐる。當に高山を慕ふ私は、さうして間近に見上げることの出來る男體山を懷かしみながら、屈託した顏を俯向けて、神橋の方に歩いて行つた。烈しい神經衰弱と、睡眠不足とで疲勞した脊筋にじわ〳〵と心地の惡い寒氣を感じて、春遲い深山の冷い空氣が皮膚に觸つて冷々する。また局部が腫れたのかも知れぬ。私は折角初めて日光に來たのであるからと思つて、東照宮の方に上つて行きかけたが、落着いて見物などをしてゐられさうにないので、すぐ降りて中禪寺湖道を少し先まで行つた。もし清水の方の旅館に泊つたとすれば、其處を探さずに歸るのは心殘りだと思つたのであつたが、またしても自分のしてゐることを批評して見て、懷中の乏しいのに其處まで行つて見るほど意志は強くなかつた。心に思ふことさへなければどんなにか愉快な氣分で暫く遊んで行くことが出來るだらうにと、そんなことを考へたりなどしながら、私は神橋の手前の交番に立寄つて、當てもないのに其處でも同じやうなことを言つて訊いたりした。そして便所を借りた。歸途には前と反對の側の宿屋を

一軒々々調べて行つた。その側には宿も多くないし、またしても今してゐることを省みて次第に意志が鈍つた。そして幾度ももう止して歸らうと思つた。が、そんなら若しこのまゝ歸つたつて何うするであらう？ とても落着いて安心してゐられはせぬ。後少し見殘して歸つた事がまたどんなに心に掛かるか知れない。さう思つてまた續けて調べに行つた。それでもまた馬鹿らしいといふ氣分がして來た。そこへ薄寒く曇つた空からぼつりぼつりと大粒の雨が落ちて來た。私はもうこれまでと諦めてステーションの方へ急がうとした。やがて十二時に近いのに、もし晝飯でも食べたら三等の汽車で東京に歸ることも出來ぬ、さう思つて、暫く廣告などで見覺えのある名前の可成り大きな旅館の前を行過ぎようとしたが、あゝ此家へも寄つて見ようと思つて入つて行つた。

さうすると、何處の宿よりも深切に、女中頭らしい女が、「おや左樣でございますか。それはさぞ御心配でございませう。一寸お待ち下さい。見て參りますから。」

と言つて、氣輕に立つて行つた。女中が座蒲團や茶などを運んで來てくれた。

先の女は間もなく宿帳を持つて來て、

「去年の七月八月の處は只今居りませんので、一寸分りかねますが、此處には六月の處までしかございません。これでは分りませんでせう……ステーションまで鳥渡行くといつて出ましたから、もう直き歸つて參ります、これで分りませんやうでしたら、一寸一服喫つてお出でになれば直きに歸つてまゐります。」

「あゝ、さうですか。でも一寸見せて頂きませう。いろ〳〵御面倒をかけて相濟みません。」

こんなことをいひながら六月までの所を見たが、ない。去年の九月から今日までは此の家のは昨夜警察署にあつて、見たのだ。

「矢張りありませんやうです。」

「さうでございますか。もう暫く御待ち下さいまし、三十分ばかりしたら歸ると申して出ましたのですから……あの、御婦人はお若い方で御座いますか、お年を召した方でございますか。」

女中は小首を傾げるやうにして訊いた。

「えゝ、三十餘りの女でござんす……いや、とても覺えてはゐられませんでせう。」

「え、もう手前どもでも多勢のお客樣でございますし、それに只今のやうですと、まだ此の通り寂しう御座いますが、七月八月はもうどの部屋も一杯ですから、時々矢張りさういふ行方の分らなくなつた方を搜ねてお見えになる方がございますけれど、此方もつい忙しいものですから、一々お客さまのお顏を何ういふ方であつたか覺えてをりませんやうなことで、その度每に本當にお氣の毒に思ふのでございますけれど……あら！ 歸つて來ましたやうです。」

女中は奧の人聲を聞いたか、「あら。」と言つて、自分で喜んだやうにいつた。其處へ番頭らしい男が愛想笑ひをしながら小急ぎに、

「何か宿帳が御覽になり度いんですつて？」

と丁寧に言つて、女中の横に坐つた。

「え？ 今お家にある分だけは見せて貰つてゐるんですが、去年の七月八月だけがないのださうです。」

「去年の七月八月の處を……あるか知らん……どういふお搜ねで？」優しく訊く。

「御婦人の方が行方が分らなくなつて、去年のその七月八月頃に日光に來てお泊りになつたらしいんですつて。」

と、女中は私に代つて番頭に說明した。

「あゝ、さうですか、鳥渡お待ち下さい。よく見て見ませう。」番頭は氣輕に立つて行つた。

「暫くお待ち下さいまし。」さう言つて女中も立つて行つたが、やがて茶を入れ換へて來た。

雨が本降りになつたらしい。ぞく／＼する寒氣と共に、私は絶え入るやうな心持になつたのを凝乎と堪へて、こゞえたやうに火鉢に靜と兩手を翳して待つてゐた。

「ありました／＼。」番頭が奥の方から景氣よく呼びながら出て來た。「無くしたかと思つてゐましたが、土藏の奥の方に仕舞つてゐました。これでせう……」と言つて帳簿を私に渡した。

「ありましたか。」と言ひながら先の女中頭もまた出て來た。

私は禮を言ひながら、宿帳を手に取つて披いた。それは去年の七月と八月だけで一冊になつてゐた。注意して七月の處を眼を通したが、無い。つゞいて八月の二日の處を何の氣なく見ると、自家にゐた、

「兒島欣次郎」

といふ字がふつと私の眼に映つた。

「おや、あの兒島が日光に遊びに來たと見えるな。」

と思ひながら、すぐ次の行に眼を移すと、

「同 スマ」と書いた字がピカリと私の眼を射た。私はジーンと全身が痺れたやうになつて、呼吸が詰つたかと思つた。

「同 スマ――三十」と書いてある。五つも歳を若くしてある。

「はあッ殘念だ！ おのれ畜生。愈々さうであつたか。さうだと思つたに違ひなかつた……」

私は煮立つやうになる胸を凝乎と堪へて、

「あッ、有りました／＼。これです／＼。」と口に出していつた。

私がたゞならぬ氣色で、眼を打ちつけたやうにして其處を凝乎と見入つた樣子を、傍で見守つて居た女中と番頭はほつとなつたやうに、「ありましたですか？」と聲を揃へてほゝ笑んだ。

「えゝ、これです／＼。ありました／＼！」

と私は力を入れて嬉しさうにいつた。さういひながら尚ほよく見ると、

「兒島欣次郎――學生――二十三」としてゐる。兒島は去年確かに二十一であつた。片方は三十五になるのを三十として、兩方から歳を少しでも餘計に違はないやうに若くしたり古くしたりしてゐる。十四も違ふのを七つしか違はぬやうにしてゐる。二人で相談して宿帳に書かしたのだらう。そんなに仲よく年を隱し合つたりして、夫婦のやうにして此處に來て泊つたか……

あゝ、さう思ふと、また急に今に今お前の肉體が愛しくて堪らない。

兒島欣次郎に並べて同じくスマと書いてある。同といふのは彼女がもう全然心も身も從順にあの歳下の兒島に任して了つて、滿足して自分から喜んで同と書かしたのだらう。

私はその同といふ字を、まるで齒を吐いて[illegible]ゐるやうな心持がしながら、凝乎と見詰めて嫉ましく考へ込んだ。

「これです。……ハアッ！ 到頭見付かりました。」私は微笑しながら、續けざまにひとりで首肯いた。

「昨日遲く日光に來て、昨夜直ぐ警察署に行つて彼方に行つてゐる分だけ調べ、今朝は早くから此の日光中の宿屋を一軒々々調べて廻つたのです。それでも無ささうでしたから、もう諦めて歸らうかと思つて、お家の前は通り過ぎたのを後戻りして見せて頂いたのです。……有難うございました。……私は東京です。……先刻行方不明の者といひましたが、これ御覽なさい、此のスマといふのは私の妻です。それが――家出を言はないと分りませんが、――此の兒島といふ私の家に置いてゐた學生と、もう一昨年から一緒に姿を隱したのです……」

私は悔しさと嫉しさとに身が燃えるやうな心持がしながらも、今この一時に二年越しの鬱結が解けたやうに思はれて、嬉し涙を滲ませな

がら深切な女中と番頭とにくど〳〵と繰返し繰返し禮を言つた。

でもよく假名にしてゐないでよかつた。正直に、一度宿帳に金次郎と書いてあるのを、後からまた欣といふ字に□に書き直さしてゐる。その通り手帳に寫し取らうと思つて何ほよく見ると、宿所といふ處に、

東京牛込區若松町何百何十何番地

と書いて、二人一緒にゐたらしい。見るに付け我々で堪らない。

「かうして寫し取つて置きますれば、後日の證據になります。お蔭で今までのことがもう何も彼も全然解つて了ひました。どうぞ宿帳は暫く保存して置いて頂きたうございます……。」

私は繰返して禮をいつて其の家を出た。急いで彼等の居る所を突きとめねばならぬ。斯うなればもう占めたものだ。見當は大方ついてゐる。

さう思ふと、これまでの疑念が悉く解けて了ふと共に、俄に自分の生活に理想が出來て來たやうに思はれた。そしてまた嬉しさが、むら〳〵と込み上げて來た。今まで人前で堪へつけてゐたのが街道に出ると、急に堪へられない涙がハラ〳〵と溢れて、歔欷させられた。口の邊から頬にかけて自然に劇しい痙攣が起つた。頭から冷い雨に濡れながらステーションの方に歩いて來る途中、歔欷と顔面の痙攣が止まないので、道を行く人に恥ぢて、それを留めようと思つても、何うしても止まない。

飛ぶ翔けるやうに種々な思想が頭の中に渦を捲き起した。「あの畜生め！ 今に見て居やがれ！……かうして人にも話されない苦勞して、昨日から普通の旅行ならば威張つて泊ることの出來る旅館に、二十軒の餘もある宿屋を一々泣いて賴むやうにして搜ねて廻つた效があつて、一番最後の宿屋で推量に違はず、甘々と二人で泊つてゐた處を見出したのは、雲を攫むやうに心細く思つてゐたのに、全く不思議のやうだ。」

さう思ふと、私は氣が勇んで天にも翔けるやうな心地がした。そのまゝ其處に潜伏して、讎といふものがあるなら讎を摑みたいやうな氣に成つた。今の番頭や女中の深切な心を思ふにつけて、今朝のあの大きな旅館の支配人の無情な仕打が思はれて、無念と嬉しさとが一緒になつて胸に込み上つた。それといふのもお前の居る所を探し出したいばかりに、種々な屈辱を忍んだのだ。あゝ、さうと知つたら、あの時何故もつと深く疑はなかつたらう。……あの時疑つてさへ置けば、二年の間詰らない月日を送らずに濟んだものを。……今五月だから丁度滿二年になる。……二年の間甘々と騙されて、つい眼と鼻の牛込と小石川にゐながら、それを知らずにゐた。併しもう東京には居ない。一緒に國に行つてるのだ。二百里遠方に行つて隱れて安心して枕を高くして寢てるだらう……沼津か靜岡あたりの五十前後の年取つた人間の處に再縁してゐるのだらうと思つて、つい今の先までその男の顔形をマザ〳〵と眼に浮べながら、宿帳を見て廻つてゐた。自分が幻の人間を作つてそれを嫉んでゐた。それは自分で勝手に拵へた人間であつたから可いやうなものゝ、その人間に對して濟まない。

去年原に行つてゐる時分に……確か九月の末であつた……兒島が東京の學校を止めて郷里に歸り、一實業に就く、在京中は一方ならぬお世話になつた。その御高恩は生涯忘れぬ。自然岡山の方へお出でになることがあつたら、是非お訪ね下さい。歡迎します。」と言ふやうな長い手紙で禮狀を寄越したのが、關口駒井町の加藤の家から附箋をして此處まで廻送して來た。その時は、兒島といふ男は穉いに似ず、自

家に置いてゐた時から義理堅い人間だと思つてゐた。

畜生！　今斯うして日光に來て、おい〳〵聲を揚げて泣かない許りに情けない日や痛い思ひをしてゐる間にも、二百里離れた岡山では、夫婦の通りに樂んでゐるだらう。去年の手紙には岡山と書いてゐた。兒島は岡山から少し離れた處の田舍で大きな醤油の釀造家だと聞いてゐる。多勢番頭や男衆を使つて父親は大阪の北濱や堂島に半歳は來詰めで、京にも大阪にも女を圍うて派手な生活をしてゐるといふことも聞いた。その息子の兒島が父親のすることを見習つて、お前を圍ひ物のやうにして岡山に隱して置いて、始終自家から通つて來て入り浸つてゐるのだ。、、、。：：：金の齒を入れたのも、お召の着物を買つて遣つたのもみんな兒島の不自由のない小遣錢で思ふ通りに仕たことだ。：：岡山ではどんな家を借りてゐるだらう。何處にゐるだらう。大方小じんまりとして綺麗な家を借りてゐるだらう。女中を置いて奧さん奧さんといはして、大きな丸髷を結つて、兒島とさう歳が違はないやうに、厭らしい若づくりにしてゐるに違ひない。自家にまだ一緒にゐた時だつた。「お前はあんまり身裝を構はない。少し小綺麗にしな！」と私が笑つていつたら、「否ん、貴方なんかに：：：」と素氣なく言つた。あの時はもう兒島が自家に來て大分になる時分であつた。：：：兒島の爲に氣に入るやうに氣を付けて綺麗に飾つてゐるに違ひない。私の家や、兒島が東京で學生でゐて餘處の家に同居してゐる時などと違つて一と通り諸道具の調つた落着いたやうな生活をして、彼女がいひ暮してゐた通りに、差當り何の不足もなく氣樂さうに一日を欠伸をするやうに消して居るのだ。「私にはこの朝寢をするのが一つの病弊です。」と言つて屡く朝寢の心持の快いことをいつてゐたが、今ぢや晝飯時分までも寢てゐるかも知れぬ：：：。

さう思つてゐると：：：、、、落着いた小さい部屋に簞笥があつて、火鉢があつて小ざつぱりとしてゐて、裕福さうに見える。冬ながらもう疾くに太陽は高く昇つてゐるので、十七八の健康さうな小女が效々しい襷がけでお勝手の方で何かこと〳〵いはしてゐる。何處かに、雨後に清淨に足駄を洗つたのが齒を上に向けて置いてあるのが眼に映る。：：私の家にゐるときに一寸々々着に仕舞つておいたあの紅絹裏の柄の好い紡績の絣の袷などを惜氣もなく寢衣に着下してゐるであらう。それを着て何時までも寢てゐるところが見える。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。：：、、：：、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、：：：、、、、、、、、、、、、、、、、、？、、、、、、、、、、、、、！

若松町にゐた時分のことが思はれてならぬ。兒島の奴二十や二十一の癖に酷い酒の好きな奴だつた。兒島が學校を早く終つて歸るのを待ち兼ねて、手器用に酒肴の用意をして直ぐ間に合ふやうにしてゐる。お前の兄弟も母親も酒の好きな系統でお前も飲まうと思へば飲める口であつたが、私のところに來てから私が飲まぬから少しも飲まなかつた。：：：それが兒島が自家に同居するやうになつて、つい飲むやうになつた：：あの關口臺町の自家にゐた時、夜の間に

續いた奥まつた二疊の部屋で、飾臺に向ひ合つて、兒島が趺坐をかいて、もう大分好い氣分になりながら、

「奥さん、どうです、一つ。」

といつて、杯をさし付けてゐる處へ、私がどうかして這入つて行つたら、お前が坐つて燗の世話をしてゐるらしかつたが、

「えゝ、まあ貴方も一つお上んなさい。」

「まあ一つお上んなさい。まあ〳〵。」兒島は强ひるやうに杯をお前の手に取らしてゐた。

お前は私がそこに立つてゐるのを見て、

「兒島さんに酒を飲むなら外では馬鹿らしいから、自家でとつて置いて上げますから、自家でお上んなさいと、此の間からさういつてゐたのです。」

といひながら、兒島の抑へるやうにして注いだ酒杯を一口口に持つて行つて飾臺に置いた。

「あゝ、飲み給へ〳〵。僕も飲めると好いんだがなあ！」私は氣輕に笑ひながらさういつて、一寸慈姑の甘煮を一つ立つたまゝ摘んで、

「甘い〳〵！」

「あんはゝゝゝ。もう遠慮をせずにやつてゐます。雪岡さんも一つお飲みなさい。……酒を飲まんといけません。」兒島は執拗く私に杯を獻さうとした。もう大分調子が外れて、兒島がさういふ時に極つて笑ふ、「あんはゝゝゝ」と云ふ、まだ二十やそこいらに似ぬ、如何にも氣の平な腹の太い罪のなささうな笑ひやうをした。

「うむ！　僕は今書きかけてゐることがあるから、飲むのは止さう。」

「此の人は仕事をしてゐるから今いけないの。まあ兒島さん一人で足るほどお上んなさい。」といつて、お前が德利を持つた。

「さうですか、本當ですか……さうですか、本當ですか。」と、同じことを繰返しながら上機嫌になつて、私の顏を見上げて、「あんは、はつはゝゝ」と、またしても哄笑をした。

私もお前も、はあ〳〵いつて笑つた。

兒島の留守の時に一度、お前が何かしらお勝手で立ち働きながら、兒島の噂をして、

「兒島といふ人間は恐しい氣の平な男だ。若いものぢやないやうだ……どうでせう、あの氣の好ささうな笑ひやうは可愛い顏をするぢやありませんか。」眞實に可愛らしくつて堪らないやうにお前はいつた。

「うむ。よく人の好い老人にあんな『あんはつはゝゝ』といふやうな笑ひ樣をするのがあるよ。」

さういつて、私は兒島の笑ふ眞似までして、私達二人は同じやうに兒島を賞めた。

あゝ、あの時分は既うお前の心の中には、唯普通に兒島のことが思はれてゐたのではなからう。それ所か一緒に兒島をよく賞めた。甘甘と二人に目を拔かれたのが返す〴〵も口惜しい。

「欣さんは中學校に居つた時分から氣前の好い人間であつたとよく繁さんが言つてゐました。恐しい氣前の好い人間だ。」こんなこともお前は口にすることがあつた。

若松町に一緒にゐて、飾臺を中央に向ひ合つて酒を飲んでゐる處が眼に見える。其處では私といふものが居ないから、もう天下晴れて好きなことをしてゐたらう。……、、。、、、、、、、、、、、、、、……

私は吾れを忘れて日光の町外れの道端に暫く突立つて、凝乎と空虚を見詰めてゐた。口の端が仕切なしに痙攣けて、いくら口脣を噛ひ締つても何うしても止まらない。胸が壓し詰められてゐるやうだ。私は火のやうな太息を吐いて、

仕舞には堪へられなくなつてシク〳〵泣きながら、薄ら寒い雨の中を歩いた。街頭を行く人目を恥ぢながら、到頭制し切れずして本當に泣き出した。

―東京に歸つて直ぐこれから、畜生！　見てゐやがれ！……岡山に行つてやる。あゝ、私がいま此處に斯うして情けない悔しい想ひをして大切な時を潰してゐるのは愚なことだ。愚なことであるが、此の心持の快い、嫉ましい、憎い意趣を晴らすことが止められるか、止めるものか。

それにつけても憎いのは、あの椅子屋の新吉だ。早く東京に歸つて、何よりもあの椅子屋に急いで行つて、思ふ存分怨みを言つて〳〵、ギユウ〳〵いはしてやらう。これまでの苦勞や悲しい日を誰がさしたのだ。悉く皆彼奴等の企んでしたことだ。……私は始終貧乏ばかりしてゐるものだから、皆なして金のありさうな兒島にお前をおつ着けて、私からお前を捥ぎ取りやがつた。金がない許りに、斯んな情け情け、情けない目をさせられたのだ。あの、あの伊庭の奴にお君を取られたのも、伊庭が何より金があつて思ふやうに自由が利いたからだ。なにが、あのお君が金に清潔なも糞もあるものか、一口に伊庭が金に不自由しなかつたからだ。假令表面はさうでないやうに思はれても、大根はさうだ。何かにつけて私に金のないことは見え透いてゐた。間貫一が唯金ゆゑの怨恨が骨に浸みて、高利貸にまでなつて人間の無念を晴さうとしたのも無理はない。貫一は無理はなかつた。」

私は獨言を言ひながら、今更に貫一の爲に泣いた。そして氣が狂つたやうに道を歩いてゐた。

新吉の奴め、あの時何と云つた。「義妹にもしそんなことがあつたら、雪岡さんに代つて私が十分に成敗する。」と高言を吐いたぢやないか。……それに此の間矢來の婆さんの話に、「もし雪岡さんがおスマさんはどうしたと訊ねたら、もう嫁づいたと言つて呉れ、さうしたら雪岡さんも諦めるから。」と、言つてゐたといふことを聞いた。先達て三月の末に來た時にも、二人が俥で新橋に立つて行つた後で、「だから女は幾歳になつても廢りはない。おスマさんは效性者だ。」といつてゐたとも聞いた。

これまで長い間にあつたこと見たことが、熱を病んでゐる時惡い夢に見てゐるやうに、後から後から頭の中に湧き起つて、私は思ひ亂れた。

自家では、奥さん〳〵。といつてゐたのを、いま岡山では誰に遠慮も無く「おスマ、お前……」とか、何うしろ斯うしろとか、わがものにして呼んでゐるであらう。それに對しておスマは、從順に言ふ事を聞いてゐるだらう。……私と初めて一緒に家を持つた日に――あの時に小日向臺町のあの家であつた――二人であちらこちら座敷の中を立廻つて、睦じさうに相談しい〳〵、釘を打つたり戸棚の掃除をしたりした。あの時遠くから「ねえ、あなた、ねえ、あなた！」と、あなたと呼び掛けるものが出來たのが、さも〳〵嬉しいやうに耳に立つほど呼んだ。それを私が後日になつて言ひ出して、戯弄つて笑つたことがあつた。あの時分は仲が善かつた。

自分でひとりでスマスマといつてゐたものを、誰にも手を觸らさなかつたものを、あの兒島が、玩具のやうにして、、、、、、、、、、、、と思へば、無念で癪に障つて堪らない。……歳は十四も違ふ。息子が東京に修行に來てゐて關係つて連れて歸つてゐる女を、兩親が承知して家に入れて女房にさす氣遣ひはない。さうすれば妾だ。妾にして隱して樂しんでゐるのだ。繁もいつたとかいつて、お前が、「兒島

さんのお父さんは、京にも大阪にも自家のお妾さんに隱して女を置いてゐるんですつて。」といつて、話してゐた。

「それで時々家が揉めて困るつて、兒島さんもいつてゐました。」と言つて、お前が私のゐない時に兒島と二人でするらしい雜談の端々を、また私と二人きりの時にして聞かす事があつた。

兒島は固より、父親がそんなことをしてゐるのを、さながら大盡を極めるのが近頃の紳士のやうに心得て、それで自分の親が好い所と交際をしたり、京大阪を始終のやうに往來をしてゐるのを外見のやうにお前等に話してゐるとしか私には受取れなかつた。お前もまた兒島の實家の派手な生活をさも羨しさうにして話してゐた。矢張り常識が高尙でなかつたのだらうか？……妻にしてゐるのだ……あゝ私の貧しい生活に取つては大切な妻であつた。自分は決して肉のことばかりに……そんな卑しいものにはお前を待遇はなかつた。それ處ではない。あんな教育の乏しいものには珍しく、私の爲る仕事のことを飮込んでゐて、私と同じやうに喜んだり心配したりしてゐた。私の書いたものを讀んで、可いとか不可いとか屢々言つてゐた。わたしの書き方がくどいといつて、「あなた、それぢやいけない。」と言つて、屢々讀んで聞かすのを聞いてゐて、文章や言葉を直し〳〵した。東京言葉をよく敎へてくれた……。私の文章が以前よりも遙かにすら〳〵として來たのは、他人の書いた物のくどいのがひどく眼に障る癖のついたのは、確かにお前に何度も「それぢやいけない。」といつて、氣を付けられたからだ。わたしはそれをよく知つてゐる。それに違ひない。きゆつと、あるかないかと思はれるやうに、小さく口を結んで、絲屑を銜へながら、あの喜久井町の奥の六疊で解き物かなんかしてゐたのが、今はつきりと眼に浮ぶ、蒼白い纖細工のやうな頸筋の横のところが見える。私が「おい！此處のところをどうだらうな？讀むから聞いてくれ。」と言つて、その室に入つて行く時にその頸筋の横が見えた。黑い髪の毛がそこに垂れてゐた。世帶の始末が好かつた。空いた炭俵の底に入つてゐる屑炭の曲つたやつを乾して置いて、それを焚きつけにするために縁根の上で出刃で叩き切つてゐた。襷がけでさうしてゐるのが見える。それから矢張り襷がけで、ついでに兒島の下駄まで洗つてやつてゐた。

何彼につけて喧嘩をして、打つたり毆つたりすることがあつても、内助の妻と思つて、此方から甘垂れるやうな心持でゐた。それをば、あのことばかりに惱んでゐる。からしてゐても自分の何處かが酷く汚れてゐるやうで堪らない。お前と私と二人の長い間の聖い關係が泥足で踏み躙られたやうだ。お前は汚れにもう一生取り返しがつかなくなつた。あゝ、あの時疑はなかつたのが口惜しい。あの時疑つても既うあの時より前から何うかしてゐたんだらう。何時の頃からさうしてゐたらう？あの時疑つても疑ふ數は既うなくなつてゐたかも知れぬ。初めてさうなつたのは何時だらう？それが知りたい。その時は何ういふやうにしてさうなつたらう。大方長い間に兩方の氣持が自然にさうなつて來たのだらう。最初はあの酒を飮んだりして兩方で戲談のやうな事を言ひ合つてゐたりしたのが、その戲談の中にも、何方も眞實の心持が何處かに頭を擡げてゐるのを知つてゐて、わざと戲談らしく笑つて言つてゐる内に何うかした時に言ひ合せたやうに實行になつて了つたのだらう。その心持を早く知つて何うかする事は出來なかつたらう〳〵。それが知りたい。

さう思へば兒島を自家に同居さすのではなか

つた。
斯ういふやうな悔恨と追憶と妄想とが一寸した繋續から迅速に聯想せられては叢生し、繰返してば搔き消えて、其れ等を凝乎と纏めようとして思ひ詰めた。

お前と兒島がさうなつた徑路が思ひ返された。――兒島は甥の繁雄と岡山の中學校にゐる頃からの朋友であつた。二人とも素行が善くないので、五年になる時落第したが、四年をも一度繰返すのが厭で、東京に出て來て早稻田に入つてゐた。それはその前の年の秋であつた。私は一月ばかり居た箱根から歸つて來てそれを知つた。その時二人は鶴卷町の素人屋の二階にゐた。繁雄は初め文科に入るつもりで豫科に入つたのださうだが、文學をやるのは國の親や兄が不賛成であつたので、自分もその氣になつて專門部に變つて經濟學の講義錄などを讀んだりしてゐた。二人とも眞面目な學生らしい所は失せてゐた。長い間には、東京の學生に倍して田舍の中學生の惡ずれてゐるのが私に分つて來た。私はそれが爲に時々齒の浮くやうな心地がした。繁雄には顏を見る度に、自分の中學校を卒業しなかつた爲に一生の目的を踏み違へた後悔を述懐したり、若いものは今の內にそれに氣が付けば、後になつて非常に幸福を感ずる日があるといふやうなことなどを話して、中學を中途にして私立學校の專門部などに學籍を置いて怠けてゐるものの不心得を罵倒することも度度であつた。兒島にも、甥から家元の噂などを聞いてゐて、それなら寧ろ早稻田の實業學校に入つた方が、自家營業をするのには却つて便利であらうといふやうなことをいつて、たゞ深切な心から勸告したことなどもあつた。

學科の方では可也優れてゐた繁雄は半年ばかりぶら／＼してゐて、自分でも心から覺つたと思はれて、

――……歸つて中學校をやり直して來る……東京にゐては朋友と酒ばかり飲んで錢がいつて詰らんから。」さう言つて繁雄は潔く故鄕に歸つて行つた。それは來た翌年の三月一日であつた。その日のことはまだ覺えてゐる。私は二年近くもゐた本城元町の家の小店を望む人があつて賣り、丁度其の日に其店を立退いた。繁雄は朝の間は來て一寸移轉の手傳などもして行つた。兒島もその時繁雄と一緒に來てゐて、

「お手傳をしませうか。」と言つてゐたやうに記憶してゐるが、彼はまだ兒島の顏さへ碌々に見てゐなかつた。その冬半月ばかり伊豆の方へ行つてゐた留守を帳場に來て消らしてゐたから、私の居ない時分に時々繁雄の處に來て、お前と口を利いたこともあつたのだらう。お前は自家に來る男とでも女とでもよく捌けた口を聞く女だつた。私の居ない時には、來るものは、層親しんでお前に何でもよく奧底を打ち明けて話したらしい、お前は人に能く內證な話をさし易い、細い人情や推察力を天性持つてゐた。私の家は私もお前も來るものに家の中の隅まで明けつ放しのやうにしてゐた。……だからあの時兒島が一寸した挨拶をいつたのも、私にいふよりもお前にいつたのだらう。

でも何うかして、一二度私のゐる時分に丁度繁雄が來てゐて、それを兒島が訪ねて來たことがあつた。その時分は、よく岡山あたりから來る田舍出の學生が着てゐるやうに、安物の茶つぽい双子の羽織を着て、それに似たやうな矢張り双子の袴を穿いてゐるのが、身體が小さいから、肩揚げを除つたのがまだ眼に立つやうに思はれて、溫順しさうに學生帽を冠つてゐるのが、頸窪のところまで不恰好に深く被さつて、色氣もなささうで初心に見えた。お前と二人私達の對坐つてゐる鼻先の狹苦しい所を窮屈さうに遠慮して、私どもの方には顏をも見せないや

らに、直ぐ二階に上つて行く後姿は鳶の歩いてゐるやうで、まるで未だ少年であつた……少年と思へばこそ自家に置いた。そんなことまで思へば殘念でたまらない。

後に兒島が自家に同居してから、何時だつたか、お前が私に笑つて話したことがあつた。

「兒島さんが、この間さういつてゐました。『奥さん、あなたの名はおスマさんといふんでせう。』といつて、いひ惡さうにして聞くから、『えゝ、さうです。それがどうしました。』といつたら、『いいえ、どうもしませんけど、あなたは何處にかういふ普通の家ではなく、何處か遊つた處にゐたことがあるでせう。』といふから、『えゝ、ゐました。兒島さんそれを知つてゐますか。』といつたら、『えゝ、知つてゐます、あなた怒つてはいけませんよ。言つて見ませうか。』つていふから、『ナニ怒るもんですか、そんな事を。』といふと、おや言ひます。あなた芙蓉亭にゐたことがあるでせう。』といひますから、『えゝ、芙蓉亭に居りました。あなたそれを聞いて、私に愛想が盡きたでせう。』といつたら、『ナニ愛想が盡きるなんて、そんな事があるもんですか。この間わたしの朋友が、君のゐる家の細君の名はおスマといふんだ。歸つて聞いて見ると可い。芙蓉亭のおスマさんと言つて評判の女だつたからといつてゐましたから、それで聞いて見るのです。』といつてゐました。わたしが『評判の女だつて、さういふの。大方貴方と私とあの時分のことを何處かで聞いたんでせう。それから、『あゝ、それでよく分つた。あなたの赤城の元の家に居られた時分、どうもあなたが普通の奥さんのやうに見えなかつた。』私が普通にしてあなたのところへ來た細君のやうに、何うしても見えないんですつて。……から苦勞人のやうにもあるし、さうかといつて女郎ぢや無論ないし、藝者をした人だらうかとも他の朋友といつて見たことがあるが、どうもさうでもないやうな所もあるし、さうかといつて全くの素人でもないやうだし、末廣に君の叔父さんの細君は何處から來たんだ、田舍の人ぢやないだらうと言つて何度訊いても、繁さんは何時もそれを訊かれると惡い顏をして默つて了ふんですつて。『それで解つた。ナニ愛想が盡きるなんていふことがあるもんですか。』と言つてゐました。……私があなたの所へ普通の家の娘で嫁に來たものとはどうしても見えない。藝者かなんかしてゐたもののやうに見えるんですつて。兒島さんがさういつてゐました。」といつた。兒島にさう言はれたのを餘り惡い氣持ではないやうな口振で話してゐたことなどもあつた。

繁雄の歸る時に、此度の家は廣くつて二人きりでは寂しくもあるしするから、兒島が來る氣があるなら來ないかといつてくれといつて置いたのであつた。

すると三月の中旬になつて、兒島は實業學校の方に轉校したから、保證人になつて判を捺してくれといつて來た。その時末廣君もさういつてゐましたから、明日から來ますからといつて歸つた。

私達は玄關の奥の四疊半を兒島の部屋に定めた。兒島の靜かな性質はまづ私の氣に入つたのであつた。書かうと思ふことが思ふやうに書けないので屈託し切つて、陰氣な顏をして、兒島の來る前まで茶の間にしてゐた四疊半に入つて來ると、補綴物をしようにも、その小布れさへ思ふやうに買へないので、お前はいつも手持無沙汰に詰らなさうにしてゐた。「こんな大きな家に入つて、詰らない。赤城で十圓の家賃さへ困つてゐたのに、あなた月々出來ますか。もう今度私に借金のいひ譯をしたら、私はもうあなたのところにはゐませんよ。」

かういふことが、二人きりで差向ひになると、

またしても二人の間を面白くないものにばかりして行つた。
「今度は四圓高いんですから、一層先より骨が折れますよ。貴方大丈夫ですか。」と、さういふ苦勞に充ちたやうなお前の顏は、私の不安の胸を怯かすやうに思はれた。
「分つてゐるよ。」さういはれる度に私は神經質な荒い言葉で一口に打ち消さうとしたけれども、それはお前にいふよりも自分に向つていふやうなものであつた。私の不安は何かに付けて病的に鋭敏になつて行つた。そしてこれまで自分の職業と思つてゐた文學藝術に關する自信と誇りとが失はれて、それが空な空想であつたとしか思へなくなつた。生きることの愉快さが滅切り傷つけられて來た。前の年の丁度その頃から病み始めた病氣が、一年經つても未だ根治しないでゐた。私達にはその病氣があるからばかりではない、既う長い間の習慣で、部室を別々にして寢てゐた。
　兒島を置いたのも、年中二人で差向ひでゐては、餘裕のなくなり勝な氣分を陽氣に浮立たせようと思つた許りでなく、家賃の足しにする考もあつたのだ。さうしながらも、同居などを置くことがひどく自分の誇りを傷つける原因となつた。
　兒島は自家で飮む許りではない、矢張り外からも好い機嫌で歸つて來ることもあつた。
「あなたは思つたよりも陰氣な人だ！」と、私に向つて言つてゐたお前には、酒で陽氣になる男が珍しくつて面白かつた。
　そこに來るまで二年の間賣れもせぬ小店に一人で闕づらつてゐて、湯にさへ落々行くことの出來ないまで身體の自由を縛られてゐたのを察してゐたから、私は机の前に閉ぢ籠つてゐるやうな時には、安心して兒島と一緒に近所の寄席などに出してやつた。小遣に不自由のない兒島は平常世話になるお禮だといつて、お前には少しも使はせず、電車に乗つて、日本橋や淺草あたりの、幾らか餘分に錢のかゝる小芝居のやうな處へも行つて、遲く歸つて來ることなどもあつた。
「遲くなつたでせう。……兒島さんが、『構はないから江戸川亭で二十錢も使ふほどなら、少し出して曾我廼家を見に行きませう。』といひますから、新富座に行つて來ました。……面白いんですよ、滑稽芝居、わたし久し振りにお腹の皮を撚つた……私達がゐないと家の中が靜寂としてゐて、よく書けていゝでせう。……あなたも今書いてゐることが濟んだら、一遍見に行つてらつしやい！」久し振りに生命の洗濯をして來たやうに浮き浮きして其處に坐りながら云つた。
「俺は曾我廼家は嫌ひだ。……まあよかつた。兒島は？」
「兒島さんは貴方に土産を買つて來るからといつて、一足あとになりました。……兒島と云ふ人、不思議に氣の付く人間だ。それで少しも生意氣でないの。
　そこへ兒島が温順しく歸つて來て、懷中から新聞の包みを取出して私の前に置きながら、
「どうも遲くなりました。……お上んなさい。」と口數少くいつた。
「あなたの好きな櫻ずし。……赤貝の紐があるでせう。お召んなさい。あなた家にゐて書いてゐて、これを土産に貰つた方がいゝでせう、兒島さんもお召んなさい……私お茶を入れて來ます。」
　ひと仕切り芝居の話などをして夜を更かした。
　お前が大日の縁日を歩いて來たり、寄席に行つたりするのを、丁度子供のやうに歡ぶので、私は兒島を付けては二人を出してやつた。さう

すると、毎日も兒島が小遣を使つては戻つて來た。

後には兒島に連れて行かれるやうな形になるのを、私は心苦しく思つた。

「あなた、兒島さんに、度々お錢を使はしてはあなたに氣の毒だ。さうして出る度にあゝしてあなたはあなたで土産を買つて來るし、あなたは自分ぢや飲まないんだから、料理屋ぢや錢ばかりかかつて詰らない、自家で酒肴を拵へるから、兒島さんは酒さへ好いのがあれば可いんだ。一遍兒島さんに足るほどお飲ませなさい。」

「あゝ、さうしよう。」

私達でかういふ話をすることなどもあつた。

「昨日兒島さんにまた一寸小遣を借りたんですよ。それで丁度五圓になるんですよ。……あなたも少し精を出してくれないと困る。」神經質な顔をしてそんなことをいふこともあつた。私は次第に侮辱と壓迫とを感じた。

「あなたは何をいつても知らん顔をして、私が勝手に借りたもののやうに思つてゐる。」

私が返事をしないので、さう言つて責め付けた。私は苛々して唯太息を洩してばかりゐた。

忘れもせぬ四月の五日であつた。一寸した書いてゐるものも濟んだので、お前は魚屋が何か置いて行くと、一人で種々なものを拵へてゐた。

目白の寺の櫻花が眞白く咲き盛つて、もう熱いやうな日の色が空に滿ちてゐた。私は奥の自分の書齋から出て來て、通に向いた格子を覗いて見たり、臺所に顔を出したりしてゐた。何處からともなく蜜蜂の唸る聲が微睡を誘ふやうに物憂く聞えて來る、少し奥の女子大學の生徒などが群れになつて、ぞろぞろ電車の方に降りて行くのが見える。「今日は僕が一升買ふよ。度度兒島君におごらして濟まない。」

兒島が學校から歸つて來て、和服に着替へてゐる部屋に入つて行つて、私は面白さうに言つた。

「そんな事はありませんけれど、……それは御馳走ですな。」

中の六疊の間に餉臺が運ばれて、二種三種の酒肴が竝べられた。お前は酒の燗に氣を付けて、嬉々と起つたり坐つたりした。

「お前も今日は飲むが可い。」

「お代んなさいナ、奥さん。」兒島はさういつて、何度目かの杯をまたお前に差した。

「私一人で飲むと、折角御馳走になつてゐても少しも甘くありませんもの。……あんはツはゝゝ……少しも甘くないことはないんですよ。甘いことは甘いんですけれど、どうも斯うして御馳走になつてゐるのに、私一人ぢや惜しいんです。」兒島の笑ふ癖はすぐ始まつた。

お前も私も機嫌よく笑つた。

「お前もお飲み。……お前は一體どれほど飲めるか、飲んで見ると可い。」

「さうです。飲んで御覽なさい。……貴女飲けるんでせう。」兒島はまたお前に杯を差した。

「えゝ、此女は飲めるんですよ。」

「譃ですよ。あなたそんなことをいつて。……兒島さん譃ですよ。飲めないんですよ。」さういひながら杯を口にあてて顔を顰めた。

「あなたも今日は少し飲んで？」はツと笑顔をして、さういひながら私の顔を浮いた調子で覗いて見た。「あなたお酒が厭なら肴をお召んなさい。此のぬたをお召んなさい。甘いでせう。」

「これをお召んなさい。」兒島はまだ箸を付けてゐない一皿を私の方に押した。

「いゝのよ、兒島さん。それはあなた召上んなさい。この人はまだ臺所に澤山あるの。……あなた御飯が好ければ御飯を召上んなさい。」好い機嫌になつて私を見て舐めるやうにいつた。

私は、

「あゝ。」と返事をして、母親の傍で子供がするやうに、むしや〳〵御飯を食べて了つた。私には酒が少し長くなるやうに思はれた。それで急がすやうに、

「おい、お前飲んで見い。兒島君、これは飲めるんだから飲まして見給へ。」私は面白がつていつた。

「飲んで見ませうか、本當に。」

「飲んで御覽なさい。」

「あゝ、飲んで見いよ。」

「あゝ、飲んで見いよ。」さも〳〵私が可愛くて堪らないやうに、私の口眞似をして身體をふらふら搖つた。「あなた私が醉つたら介抱してくれて?」

「あゝ、する。」

「介抱して上げますさ。」

「本當に介抱してくれて? おほゝゝ。」可笑しな笑ひやうをした。

「するよ、介抱。‥‥飲んで見い、早く。」私は手づから餉臺の上の杯に滿々と注いだ。

「あなた本當に介抱してくれて? 醉つてもよくつて? おほゝゝ。」と赤い顏をして止め度のないまで笑つた。

「介抱するから飲めよ。」私は强ひて景氣を付けるやうに言つたが、これまで長い間に一度もそんなことがなかつたので、兒島の手前をも恥しく思つたのであつた。

「あなた本當に介抱をしてくれて? 譃ぢやなくつて? 本當に? 本當に? おほゝゝゝほ。」

執拗く同じことを繰返した。次第に居ずまひが崩れて、身體が激しく搖れた。

私はそんな不態をもみ消すやうに、わざと陽氣に笑つてゐた。

「兒島さん、あなたお酌をして頂戴。あなたも私を介抱してくれて? おほゝゝ。」充血してちら〳〵したやうな眼をして兒島の顏を見た。

まだ昨今の兒島は餘りのことに呆れて、濟まぬ顏をして苦し氣な笑ひ樣をしてゐたが、さう言はれて酌をするのを遠慮するやうにした。

「君、もう飲まさない方が可いよ。醉つたんだ。」

「えゝ、もうお召んなさらん方がよろしい。」兒島に自分の醉も何も醒めて了つたやうに眞顏になつて岡山言葉を出した。

「おほゝゝ。おほゝゝ。私醉つちまつた。あはゝゝゝ。苦しい。」笑ひながら到頭そこに倒れてしまつた。

「あゝ苦しい！」

私は兒島の手前を恥ぢて打棄るやうに、

「醉つたんだから大丈夫だよ、君。」

けれども兒島は心配して臺所に行つて早速金盥に水を入れて來た。お前は緣日の方に頭をして横になつた。

「あゝ、苦しい。おほゝゝゝ。貴方私の胸を擦つて頂戴。」息も絶え〳〵にいひながら、そこに坐つてゐる私の方を、寢轉びながら正體の亂れた手で招き寄せるやうにした。

私は默つたまゝ手を出すのも恥ぢてゐた。

兒島はひどく氣の毒さうな顏をして、

「奧さん、私擦りませう。こゝが苦しいでせう。」といひながら遠くに畏まつて及び腰になつて、愼しやかに胸のところを撫で下した。私なんかもう始終覺えがあるんです。自分でも斯ういふやうにして貰ふ事があるし、人にしてやることもあるし。私本當に吃驚しましたぞナ‥貴方が奧さんに飲めと言はれるから、もう少しはお召んなさるのかと思つて、わたしも安心して杯を差したんです。」

兒島は恐しさうに胸を擦つてやりながら、私に向つて詫びるやうに言つた。

「いや、折角君の興を覺して氣の毒だ。もう抛つて置きたまへ。酒に醉つたんだ。性が知れてゐるから今に醒めるよ。」私は羞恥を感じて、どうしても手が出せなかつた。

「あゝ苦しい！」時々唸るやうに言つた。「貴方も擦つて頂戴な、もつと此方へ寄つて！」萎えたやうな手付きで私の膝にしなだれるやうにして、

「あなたは深切のない人ねえ。兒島さんの方が餘程深切だ。おゝゝゝ。」と、泣くやうに言つて唸つた。

「撫でて頂戴な。撫でないの？　貴方は不深切だ。貴方より餘程兒島さんの方が深切だ。」同じことを何遍も繰返して、亂りがはしく乘り上つて、私に抱き付かうとした。

「馬鹿！　靜と寢てゐないか。」

「奥さん、動いてはいけません。」

兒島は極り惡さうにはら〳〵してゐた。「貴方は酒をお飮んなさらんから、この苦しい味をお知りなさらんけえど、私なんか覺えがありますから。それは苦しいもんですよ……奥さん、なるだけ吐いて御覧なさい。」

兒島は兩方の掌を几帳面に揃へて、遠くから恐る〳〵撫でてゐた。

醉つた者は次第にとろ〳〵となつて行くやうであつた。

「兒島君、もう好い加減にして置いてくれ給へ。」さういつて、私は毎日午後から行くことになつてゐる早稻田の方の病院に出て行つた。

それでも心配しながら歸つて來た時には、もうお前は兒島のゐる四疊半に移されて、兒島の夜具を着せられて、眞蒼な顏を男枕に打付けたやうに髮を亂して寢入つてゐた。

「これは君の蒲團ですか。」

「他の所を明けるのはどうかと思ひましたから、私の蒲團をかけて上げました。汚れてゐるんですけれど……」

「君にはいろんなことをさせましたなア。」

「そんなことは構ひませんけえど、私本當に吃驚しました。すぐ醉はれるんですもの。」兒島は氣疲れがしたやうになつてゐた。汚れ物の金盥なども清淨にして形付けられてゐた。

でも夕方には最早起き上つて、けろ〳〵したやうな顏をして、「まだ頭が痛い。」といひながら、晩の支度に立働いてゐた。「馬鹿が……面白かつた。あなたは不深切だ。」私は憎らしさうに口眞似をしながら、たしなめるやうにいつて、嗤つた。

「不深切だなんて、そんなことを私いふもんですか。」極りが惡いのを甘垂れて打消すやうにいつた。

「いつたとも〳〵。『貴方より兒島さんの方が深切だ……あなた介抱して頂戴な』かういふ手付きをした。」

「そりや言つたでせう。あなたより兒島さんの方が深切だといふことは。そりやいつたかも知れないが、そんな手付きをするもんですか。」

「したとも〳〵。……女の癖に醉狂なんかして。……ねえ兒島君、したねえ。」

酒の上とはいひながら、そのいひ草が憎々しく思へた。

「醉狂するもんですか。」

「醉狂ぢやないか、あれは。……ねえ兒島君。」

「えゝ、醉狂ですなア。」兒島は四疊半から出て、靜かに言葉を出したが、矢張り濟まぬ顏をしてゐる。

「……あなたといふ人は深切のない人だ。」本氣らしくいつた。

私も本氣で不快に思つた。

「馬鹿いへ。女房が酒に醉拂つてゐる奴を眞面目に介抱なんか出來るもんか！　……ねえ兒

島君。」

「えゝ。」と、たゞ口重く言つたまゝ、兒島は傍に居て困つてゐた。「まあ酒なんかあまりお召んなさらん方がよろしいなあ。」

「あなたが飲め〳〵といつたんぢやありませんか。」怒るやうに照れ隠しを言つた。

その後兒島は自家ではあんまり飲まなくなつた。「私もう自家ぢや飲みませんぞな。あんなことがあつては濟みませんから。」と言つてゐた。すると一度外から酷く醉つて戻つて來たことがあつた。兒島の歸りの遲くなる時など玄關を締めて置いて、庭の潰れ木戸から座敷の縁側を廻らすことにしてゐた。

「奥さん！ 奥さん！」といふ兒島の聲をきゝつけて、お前は「おかへんなさい。」といつて、起きて戸袋の所を一枚明けた。兒島はぐでん〳〵になつてゐた。飲むと言つても、これまでそんなことはまだなかつた。

何んな人間に對しても取廻しの上手なお前は、さういふ時には分けても取扱が巧みであつた。ひやりとした縁側に直ぐ横倒れにならうとした兒島の兩手を取つて持ち上げるやうにしながら「兒島さんどうするの？ 其處で寢てはいけません。」可愛らしさうに笑ひかゝつてゐた。

「あゝん！ 醉つちまつた！」同じことを執拗く繰返しながら、却々手にをへなかつた。私まで起きて行つて座敷に引入れた。と、兒島は突如そこにあつたお前の寢床の上に仰向きにごろりと倒れて了つた。「あゝん！ 今日は貴女に介抱して貰ひます。」

私達は笑つて兒島を引立てようとしたけれど、兒島は正體もなささうであつた。

「兒島さん！ 彼方へ行らつしやい！ こゝは貴方の寢床ぢやないの。」兒島の顏のうへに口をやつていひながら、お前は笑ひ〳〵私の顏色を見た。

「さあ、彼方へ行つて本當にお休みなさい。醉つてゐるでせう。さあ、醉つてゐるから彼方へ行きませう。私負つて行つて上げますわ。」逐遂賺し〳〵負ふやうにして四疊半に連れて行つて寢かした。

兒島の遲くなる時には臥床などを延べてやつてゐた。私はさういふことをするのを好まなかつた。が、お前は、「そんなことをいつたつて、何にも手數のかゝらないことですもの。男が獨りで可哀さうだ。」さういつてよく世話をした。

私は時々自分の學校に行つてゐる時分の不自由であつた事などをいつて、學生にはそれを當然のやうに言つてゐた。

それでも私が二人を一緒に遊びに出すことは餘りはなかつた。誰もゐない家の中で、戸外の人通りや遠くでする市街のどよみを靜かに聞くともなく聞きながら、私は獨りで讀んだり書いたりしてゐた。

その時分であつた。一度私は兒島を誘うて鬼子母神の方から雜司ケ谷の田圃を散歩した。眼の覺めるやうな若葉が繁つて、青い麥の葉に涼しい風が長い浪を立ててゐた。それが何ともいへず氣持好かつた。鬼子母神の境内で一と休みして、そこで食べた團子の殘りを、私が、これを自家へ持つて行つてやらうかといつたら、兒島が、「えゝ、私が持つてかへりませう。」といつて、少し買ひ足して懷中に入れて戻つた。私は歸ると雜司ケ谷の方の好かつたことをいつて、その内兒島と一緒に是非行つて見るやうに勸めた。そちらの方に行くのは小遣や着物に氣が張らなくつていゝ。二三日經つて二人は歩いて來た。さうして今度は私に苺を買つて來た。

その頃、兒島の頼みで國の中學校の朋友が今

度中學を卒業して高等商業の入學試驗を受ける爲に出て來て、暫く兒島と一つの部屋にゐることになつた。そして神田の英語の學校に通つてゐた。その細井と兒島とが學校に行つてゐる留守の時にお前と私と差向つて御飯を食べながら、「兒島さんが此の間怒つてゐた……『細井は失敬なことをいふ。』つて、私が兒島さんと一緒に散歩に出歩いたりするのを細井さんが嫉むんですつて。」さういつて、お前はぽつと顏を紅に染めて笑つた。私は御飯を喰べながら睦じい氣分でその話を聞いてゐたが、その顏の一寸紅くなつたのが、何となく私に變な氣持を起させた。けれどもそれが何ういふ變な氣持であつたか、明瞭に口に出していふことが出來ぬ。ただ私はどうして顏を紅くしたらうと思つただけで、最う嫉んでゐるやうに思つてゐる自分の妻が若い學生等にさういふ心持を起さしめる原因になるかと思ふと、妻が新らしい刺戟を私に與へて、また更に愛しくなつたやうに思つた。

「へえ！　細井がそんなことをいふの？」

「さういふんですつて。……兒島さんは、私が他人のやうに思へない、何だか斯う自分の姉さんかなんかのやうに思はれるんですつて。兒島のお母さんが矢張し私のやうに小さい人なんですつて、それで私がお母さんのやうにも思はれるつて、そんなことをいつてゐました。」

かういふ話などすることもあつた。さうすると、私はお前と一緒に二人で夕方など歩いて見度くもあつて、近くの大日の縁日などに誘ふことがある。

「今晩夕飯が濟んだら大日の縁日に行つて見ようぢやないか。兒島なんかに留守をしてもらつて。」私がどうかした氣分の機でいふと、

「貴方一人で行つていらつしやい。」

「何故？」

「何故つて。……この間もあなたが何處かへ私と行かないかといつた時に、『兒島さんに今晩一寸あなた方に留守をして貰ひませうかといつたら、兒島さんは、『よろしい行つておいでなさい。』といつてゐたが四疊半に行つて細井にその話をしたと思はれて、暫く經つてから、細井が、『僕等留守なんかさせられては困る』といつてゐるのが聞えたから。あの時は何處へ行かうといつた時だつたか覺えないが、そんなことを細井がいつてるから、私と一緒に出るのはお止しなさい。行くなら、あなた一人でいらつしやい。」

「ぢや、俺も止す。」私は詰らない心持がした。

私の詰らないのはそればかりではなかつた。兒島一人の時はそんなではなかつたが、細井が來てからお前は二人の世話で體が忙しくなつた。そしてぶつきらぼうの細井は素人下宿にでもゐるかのやうに心得てでもゐるのか、そんな心持の見える口吻が何彼につけてお前から私の耳に入ることもあつた。兒島も細井が來てからは私に調子を合せて散歩に行くやうなことも殆んどなくなつた。私は一人奧の書齋に孤立してゐなければならなかつた。夕飯の時など支度が出來ると、一つしかない餉臺に載せられて眞先に二人の部屋に運ばれた。私が、

「おい！　夕飯にしてくれ。」

といつて奧から出て來ると、

「まアお待ちなさい。お鉢が彼方に行つてゐるから。」

「腹が減つたもの。」

「ぢや、あなたお何んなさい。茶碗を持つて行つてよそつて來るから。」

「いや、お前と一緒に食べよう。」

「私は忙しいから、あなたまア一人で先にお何んなさい。」

私は自分の家に居てゐながら、落着いて細君に給仕をして貰ひながら御飯を食べることが出

來なくなつた。お前と私との間も何となく氣が散らけたやうになつて來た。そして私だけ先に御飯を濟まして奧に入つて行つて、また暫く經つて退屈して出て來ると、その三疊の部屋で、後になつて一人御飯を食べてゐたお前の所に兒島が來てゐて、煙草を吹かしながら話し込んでゐることは稀しくなかつた。

「……お摘みなさいナ、兒島さん！」

何を話してゐたのか、私の顏が現れたので、一寸途切れてゐた言葉の繼ぎ穗をそこへ持つて行つて、お前は筍の甘煮を盛つた自分のお菜の皿を此と餉臺の上で押すやうにした。

「えゝ。」

といつて、兒島はそれを一つ摘んだ。

後は三人とも暫く默つてゐた。私が入つて來ても、誰も口を利いてくれるものがないやうな氣がして何となく居惡く思はれた。

「あなたは彼方の自分の部屋に入らつしやい、ねえ兒島さん。此處は私の部屋だ。」

お前の性質の德で笑ひながら戯談をいつた。固より私には殊に遠慮がなかつた。永い間の同棲で、さういふ氣心は十分飲込んでゐながら、私はその時何となく其處にゐるのが二人の家に行つてゐるやうな心持がした。そんなら何うしてさう思はれるのか、その原因を深く考へて見る心は勿論生じなかつた。自分に對して親みのある不遠慮をつけ〳〵口に出すお前が氣に入らずにはゐられなかつたのだ。そして私は照れ隱しに自分でも筍を一つ摘んで、

「あゝ甘い〳〵。さあ彼方に行かう。」

と素直にいつて八疊に戻つた。私は自分の職業に對して、その頃盛んに自己に鞭を加へてゐた。自分の爲すべき事に心が追はれてゐたのだ。後日に小さい本に纏めた私の評論集の中で多少重要なものは、凡てその四月と五月とに書いたものばかりであつた。私は顧みてその時分くらゐ緊張した心持で評論の筆を執つてゐたことはなかつた。

それでも兒島などの學校に行つてゐる留守の間には、毎時二人差向つて晝飯を食べた。その時はお前が妻らしく、自分の物に思へて、しみじみした心持になつた。私は食べたものが身に着くやうに思はれた。二人はいろんな話をした。

「……兒島さんがまた怒つてゐた。……」

「どうして？」

「細井さんが兒島さんに、『欣さん、君は、、、、、、、、、、、、。』つて、さういふんですつて。……」

お前は微笑しながら話した。

「へえ？」私は自分に何の關係もない、緣の遠いことでも聞くやうに、唯好奇心の眼を向けてお前に笑つた。「どうしてそんなことをいふのだらう？」

「……今朝起きて謙さんが欣さんにそんな事をいつたといつて、欣さん、『謙公失敬なことをいふ。』つて、怒つてゐた。……昨夜寢てから夜中に謙さんが眼を覺して、何か欣さんに話をしようと思つて、欣さん欣さんて、兒島さんを呼んで見ても返事をせぬから、また手を遣つて兒島さんの頭の所を探つて見たんですつて、それでも頭が手に觸らなかつたから、、……」

「へえ！」と、私はまた同じ事をいつて、四疊半の若い連中が唯他愛もない戯談をいつてゐるのを可笑しがつた。

「それで兒島さん、失敬なことをいふ。」といつて、怒つて私に話してゐました。……大方知らずに戯れて頭の方と足の方と、あべこべに寢てゐたんでせうよ。……屢くそんなことがあるもんだから。……」お前は人事のやうに笑つて話

した。
「あゝ、さうだらう。」私は事實に於て自分の愛妻にそんなことがある理由がないと信じてゐたから。

その間に私の生活は又しても困難になつて行つた。定つた收入のない上に、僅かに新聞の文藝欄などに評論めいたものを書いて取る錢は、一月に拾圓の上を出なかつた。それではどうしたつて二人の口が糊して行けやうがなかつた。お前の内職にしてゐた小商で、二年ほどの間は、店に竝べた物を賣り食ひにして何うか斯うか繰り廻してゐたのが、この二月ばかり、それを止めてから、見る〳〵日々の小遣錢に差支へを生じた。私が奥の八疊で何を讀書きしてゐようとも、それではどうしても臺所を樂にすることは出來なかつた。

「あなたくらゐ意氣地のない人はない。松下さんなんか御覧なさい。よく書くぢやありませんか。毎月一つか二つ何處かの雜誌に小說の出てゐないことはないぢやありませんか。……兒島さんだつてお父さんの家から表向きに來るのが毎月三十圓づつ、それからお母さんの所から内證で時々貰ふのを合はすと、一月に四十圓になるんですもの。あなたよりいくら樂だか知れはしない。」

かういつて私に竝べ立てることも度々であつた。私は次第に腦神經の疲勞が劇烈になつて來るのを覺えた。夜半に突然に眼が覺めて見ると、今まで少しも寢てゐなかつたやうに頭に疲れを感じた。そして眼が覺めると、生活の取り着き場のないやうな心細い氣がして、再び寢付かれぬ體に心地の惡い汗がジワ〳〵と滲み出てきて、取留めのない雜念が湧いて起つた。

「あなた、今月は何うしても兒島さんの借金を拂はなければなりませんよ。」

お前が身を斬られるやうに額を顰めていつた。

「どうして？」

「どうしてつて、あなた、借りたものを返すのは當然ぢやありませんか。……だから同居人に金を借りるのはいやだ。……あゝ、いやだ。」

お前は何事か兒島にいひ掛けられでもしたやうに、さも堪らなさうに身を苦めるやうにしていつたことがあつた。「そりや、返すさ。」といつたが、その理由はお前も詳しく言はなかつたが、私もつい書齋の事に心を奪られてゐて、深く訊ねもしなかつた。

それは細井が兒島の枕頭に手をやつて見たと云ふ話のあつたより大分前の事であつた。

でもさういふ話を聞いてから私は、一同別別の部屋に入つてこれから寢ようといふ時、

「こゝを少し明けとかうかな。」

私は戯談のやうにいつて、自分の寢部屋の八疊と、お前の寢る六疊との間の襖を少し明けて置かうとすると、

「そんな所明けとかなくつてもようござんすよ。」と怒るやうにいつて、ぴしやりと閉めた。そんなことを私達がいふのを聞いて、四疊半では二人が何かいつて笑つてゐた。

私達は、晝も夜も漸次心と心とが離れて行くやうであつた。そして兒島や細井と私との離れて行くことも次第に距離が倍して來るやうに思へた。兒島とは、細井の來ないまでは屢々私の方から誘つて湯などにも行つたが、

「兒島と湯に行かうか。」

と私がお前にいふと、

「お止しなさい。」

「なぜ？」

「なぜでも。……兒島さん、あなたと一緒に行くのを嫌ふから。」

それを聴いて私は一寸不思議に感じた。何故かお前は段々私と兒島との間に這入つて、垣をするやうに思へた。が、その理由は解らなかつた。また强ひて知らうとも思はなかつた。後日には一つ家に居ながら、私は兒島などと顏を合すことさへ少なくなつた。――今から思へば、兒島自身私に對して新らしく、ある原因から嫌惡と嫉妬を感じて、私の顏を見るのが氣持が惡かつたのかも知れぬ。そして敏感なお前が早くも兒島のその心持を飲込んでゐたのかも知れぬ。

兎に角一同、私獨りと遠ざかつて行くやうな氣分がありありと家の中の間每を支配した。その爲に私は勉强も出來た。

さういふ晝と夜との續いた後のある日のことであつた。私は奥の書齋で例の通り讀んだり書いたりしてゐたが、その時もいゝ加減飽いた時分になつて、散歩かたがた醫者に行くつもりで起つて水藥の瓶を濯がうとして何の氣もなく臺所の方に步いて行つた。

先刻座敷にゐて、兒島が學校から歸つて來て、例のやうに裸體を拭くために水道の水をじやあじやあ流してゐる音は遠くでそれとなく聞いてゐたが、兒島が戻つたな、くらゐのほか別に氣にも留めずにゐた。

すると、私が障子を明けて板の間に出ると――其處から三疊の間は直ぐ見える。その三疊の間にお前が蒲團の代りに袷衣を額の所まで引被いて假睡をしてゐた。兒島は先刻汗を拭き取つた裸體のまゝ猿股一つでその傍に寄添うて矢張り仰向きに寢ころんでゐた。

かういふことは後日になつて私が頭の中で纏めて見たので……私の足音が板間にするのを聞くと、吃驚したやうに二人は腰から上跳ね起きた。今まで讀書をしてゐた極めて平靜な氣分でゐた私の方が、却つてその擧動の爲に驚かされた。染め返した不斷着の仕立下しの紅絹裡をひるがへして押し遣りながら、私の顏を知らぬやうな顏をしてチラリと見たお前の眼が、さながら體中の血が亂れてゐるかと思はれるやうに赤く充血してゐた。一寸私の顏を見ると、直ぐ兩方の指先でその寢腫れた眼を擦つて欠伸を一つした。兒島も私を見たが二人とも默つて居た。

私は一家の妻女ともあるものが、假令何事もないにせよ、さういふ風に狹い部室に二人竝んで横臥べつてゐるのを不體裁だとは思つたけれど、自分の妻は捌けてゐて洒落だから、そんな事には平氣でするのだ、自分も妻がさういふことをしてゐても何とも思はぬくらゐ妻を信じてゐたから、私は唯あんまり好くない風體で晝寢をしてゐると思つたばかりで、そのまゝ默つて、水道の水を藥瓶に入れて、二三度振りすゝいで戸外に出た。今まで讀んでゐたサント・ブーブのディデローの評論のことを思ひつゞけながら、例の通り胸突坂を下りて早稻田田圃まで步いて來た。すると何ういふ心の機であつたか、私ははッと不意に息詰つたやうに胸が苦しくなつた。

二人はどうかしてゐるのぢやないか？……と思はれた。さう思ふとお前がをしくなつて、却つて何うかしてゐれば好いといふやうな肉情を唆る殘酷な興味に刺戟せられた。「……さうかも知れぬ……」

と、私は前後のない言葉を獨語にいつて、一寸突立つて小首を傾けた。さう思ふと、私はまた俄に胸が堰き上げるやうに悲しくなつて、「可哀さうなことをした。彼女が其樣な事をしたらうか。若しさうであつたら、自分は何うしようか？　かけ換へのないものに取返しの付か

ぬ汚點が付く。」からも思へた。さうしていひやうのないほど、自分の從來の妻に對する自信が傷けられたやうな氣がした。自分はお前を信じてゐる。口では假令何とか彼とかいふことがあつても、心の中ではお前ほど私の腹心を打ち明け、お前ほど安心して自分の體や心を任せてゐるものは廣い此の世界に他には一人もない。それほど安心して信じ切つてゐるものにさういふことがあらう筈がない。假にさうだつたら何うだらう。こんな取留めのないことが考へられた。それを思ふと醜く自分までが汚されたやうで耐へられない。さういふ醜いことがあらう筈がない。斯う考へるとまたお前が確乎した女のやうに思はれて、私は變なことを思つてゐた、恥づべき端ないことを思つてゐた……と、省みて自分を誡めながら、ついまた他のことに頭を使ふともなく使つて醫者に行つた。

また暫くして戻つてきて、自家に近づくと、また先刻の疑惑が頭に浮んだ。今になつて、彼の時引返して樣子を伺つて見ればよかつたと思つた。けれども何處までも追窮して見なければならぬほどの強い疑惑は起らなかつたのである。疑が起らなかつたばかりではない、そんな疑惑は唯それを思つただけでも自分の自尊心を傷け、お前との關係に何とも言ひやうのない汚い物を打掛けたやうな厭な心持がした。

で、二人はどうしてゐるだらうかと思ひながら竊と門に入ると、お前は毎日よくその時刻にするやうに襷掛けをして玄關に水を撒いてゐた。その樣子が、私の疑念の所爲か、わざと何氣ないことを裝うてゐるらしく横着さうに見えた。けれども私は疑つて見るほど深い疑を持たなかつた。

私の病氣はいつまでも治らなかつた。

「兒島さんがいつてゐた。『あなた、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。』兒島さんのお父さんの病氣が、、、、、、に傳染つて、もう十年も治らないのですつて。五年も病院に通つたんですつて。」

お前達二人は、さういふ事まで話すこともあると思はれた。女といふものも、自分の夫以外の男と隨分立ち入つた話をするものであるといふことを承知してゐるので、私は別段さういふ話を二人がしてゐることに怪みは抱かなかつた。そんなことを若い男と話すお前の無恥と不見識とを思つて見ないでもなかつたが、他に話す對手のないお前が氣の置けない身の上話でもするには、その頃兒島にでもするより仕方がなかつた。男と女との間の下らない、それでゐて大きな意味を有つてゐるやうな事は肉身の者に話せるものではない。

「この間、私のことを話したら兒島さん、さういつてゐた。『あなた、まだ籍が這入つてゐないんですか、さうですか。まだ籍が這入つてゐないんですか。』つて、呆れてゐた。六年も一緒にゐて、それで何故籍を入れてゐないんですつて聽くから、私と雪岡とは後には別れるんですと言つても、兒島さん眞實にしないの。」

「そんなことを兒島なんかと話さなくつてもいいぢやないか。」

「話さなくつてもいゝぢやないかつて、あなた私が何を言つたつて、『まあ可いさ、まあ可いさ。』といつてゐるばかりぢやありませんか。……譃ぢやない本當に別れるんですといつたら、兒島さん、ぢやあなた、今までどういふ考へで雪岡さんのところにゐたんです。つまらないぢやありませんか。奥樣にして籍にも入れない。六年も七年も一緒にゐて、それで後には別れるなんて、そんな詰らないことはないぢやありませんか。あなたほどの人がもう自分の歳の事を考へないでもないでせうし、一體どんな考へで今まで唯居たんです。……さういつてゐた。兒島

さんばかしぢやない。誰だつて私のことを話したら呆れて了ひます。どう考へて見たつて、私が斯うしてあなたの處に先々の目的もなく歳を取つてゐる、こんな馬鹿らしいことはないんですもの、それも若い二十か二十一のものなら、そりやまた浮氣でさうしてゐるといふ場合もありませうさ。私とあんたなんかは既う浮氣でかうしてゐる歳ではありませんもの。……」

苦勞性の先走つた考へを、またしても私に話してゐた。兒島にいろんなことを言はれるので、お前は自分の今の境涯を益々詰らないもののやうに思つて來たのだらう。それには生活の困難が私達にはどういふやうに身を置き變へても着き纏つてゐた。店を讓つた二百圓の錢は、その當座に拂はねばならぬ處に拂つた殘りが、もう百圓餘りしかなかつた。その百圓は、もしも別れる時の用意にお前の物にして置いた。お前はそれを姉の處に預けた。先月の末にはその内から貳拾圓、ある口實の下に取つて來られて、矢張り月々の支拂ひの方に融通せられた。

「先達ても貳拾圓取つて來る時に、新さんが、おスマさん何にするのですと不審を打つたのを、甘く欺して取つて來たのですもの。もう此度はいつていきやうがありやしない。」

私が他に工面が盡きて、仕方なくその錢のことをいひ出すと、お前は本氣になつて拒んだ。

「困つた時には、少しは小錢の融通でも出來るやうな處から女房を貰ひたい。」

戲談らしくいふ斯んな愚癡が刺のやうな鋭い侮辱をお前に與へた。薄手に出來たお前の顔の皮膚がそれを聽かされると、ピリ〳〵と顫へるやうに思はれた。私はそれを見て殘酷なやうな憐憫を感じたけれども、さういつて突掛つて行くより他に當り場がなかつた。

それから間のないことであつた。私もお前も焦燥した面白くない心持で日を暮らしてゐるのが、些とした口の利きやうが氣に障つたのが原因で、蹴つたり嚙み付いたりするやうな喧嘩になつた。

「貴樣のやうな奴は、もう歸りやがれ。」

私は突然兩手でお前の肩先を突いて突き倒した。どんと仰のけに疊の上に倒れたお前は、起き直ると其處に突伏して、襷を掛けてゐた兩方の袂でしく〳〵眼を拭いた。小さい體が一層小さく見えた。

「『草なんか取るもんか！』……何もそんな口の利きやうをしなくたつて可いぢやないか。私は門の外が清淨になつてゐたから、それで、これはお前が草を取つたのだなと思つたから、唯『草を取つたのかえ？』と訊いて見ただけぢやないか。『草なんか取るもんか。』そのいひやうは何だ。」

泣いてゐるのを見ると、可憐しいやうでもあつたが、この日頃の面白くもない窶れた面が胸を嚙むやうで、

「歸りやがれ！」

坐つてゐる奴をまた一つ蹴倒した。お前は横ざまに轉びながら、傍に寄つて行く私を兩足を上げて無暗に蹴退けた。後には私の方で惡戲をしかけたやうに手足で構つてゐたが、お前は起き上つて勝手の方に行つた。

丁度其處へ母親が水口から入つて來た。洗ひ物の仕殘りをしてゐたお前は、その顔を見ると、

「あツお婆さん、好い處へ來た。私、今日歸るかられえ。一寸新さんを呼んで來ておくれ。」

氣分の癇走つた機會に、飛び付くやうにさういつて呼びかけた。婆さんは有無をも言はずに直ぐ出て行つた。

私は新吉を呼びに遣つたりしては面倒だと思つたから、それを戲談にするつもりでぷいと外に出て了つた。久し振りで訪ねた先は居なかつ

たり、ゐた知人の家では面白くなかつたりして、夕暮れ方もう氣分が和いでゐる時分と思ふ頃を見計つて、私はこつそり戻つて來た。
「あなたが出ると間もなく新さんが來ました。……さうして怒つてゐた。『何だ、婆さんが息を急いて遣つて來て、話があるから直ぐ來てくれといふもんだから、急ぎの仕事を打遣つて來て見れば、肝心の雪岡さんがゐないなんて。一體どうしたんです。』つて訊いたから、私はもう此處の家を出て歸る積りですつて、いろ〳〵話しました。……何處に行つたのか、晩には雪岡も歸つて來るでせうからと、いつたら、また、晩に仕事を濟ましてから出直すといつて歸りましたから、また晩には來るでせう。あなたも何處へも出ないで、よく話して下さい。」
學生達は早く夕飯を濟まして出て行つたらしい。何時ものやうに私に夕飯を食べさせながら、脅すやうな口調でいつた。
「新さんが怒つたつて、何も私が呼びに遣つたんぢやない、お前が婆さんを勝手に遣つたんぢやないか。新さんが晩に來たつて、別に私には話すことはない。」
「あなたは、またそんなことをいつて、話を他へ外らさうとする。今日、あなたは私に歸れといつたぢやありませんか。……まあ可い。あなたと私とぢや何時まで話してゐたつて、これまで話に極りの着いた例がないんだから。……晩に新さんが來ますから。」
晩になつてまたやつて來た新吉の前でお前は味方を得たやうに、能辯に任せて私の生計むきの不如意なことを竝べ立てた。
「まあそんなにおスマさんばかり口を利いてゐたつて仕樣がない。雪岡さんの言ふことも少しは聽かなけりや。」
最初に成るたけ穩便に事を治めようとするやうな口を利いてゐた新吉も、段々とお前の話すことに耳を貸して來た。
「これまで六年も七年もゐる間、此處の家の生活がどんなに困つてゐるといふやうなことを、姉にだつて、貴方にだつて、委しく話したことはありやしません。……困るといつたつて、貴方の家の困るといふのとは違ふ。……それは、たつた拾錢のお錢さへ無いことが幾日も續くやうなことは始終なんですもの。」さういつて、お前は一も二もなく私の無能をあからさまに竝べたてた。
「それぢや仕樣がない。」新吉も呆れて太息を洩らした。
「そりや、これまでも雪岡さんのことに就いて種々とおスマさんから聞くこともあつたけれど、そんな拾錢の錢にも困るやうなことは今初めて聞く。……今日の話は今日の話で何とか形を着けねばならぬが、……雪岡さんも、も少し元氣を出さねば不可ません。吾々のやうな教育のない人間だつて、あゝして仕事を引受けてゐれば、――おスマさんさうでせう、それだけの責任を果すだけのことはしてゐるんだから、其處になると、雪岡さんなんかお錢のかゝつてゐる身體だ。そんなことぢや貴方のお國に對したつて濟まない。」
新吉は、私達の身の上に何か事が持ち上つた話しに來た時に、これまでも度々言つたやうな尤もらしい口を利いた。
「さうですよ。私もそれをいふんですけれど、私のいふことなんか聞かないんですから。……」
「きかないんぢやない。身體が惡いから思ふやうに出來ないんぢやないか。」私は口元ではさういつたが、腹の中では處世の困難：分けても文壇に生活するものの排擠、嫉妬の險しさを思ひ出して、苦惱を感ぜずにはゐられなかつたが、お前のいふことを無理ばかりとも思はなかつた。

「そんなことを言ひ合つてゐたつて果しがない。それで今日の話は、どうするんです？」新吉は話を急いだ。
「どうするつて、私はもう歸るんです。」怒つたやうな語調でいつた。
「いや、歸さない。」
私は生活の不如意の爲に別れねばならぬ自分達の慘酷な境遇を自分で憐まずにはゐられなかつた。私の胸は種々な憤懣の情に充ち滿ちた。いろんな關係から自分を害せるもののことが、さう言ふ話をしてゐる間にも、私の目に浮んだ。
「あなたが歸さないと言つたつて、私は歸る。籍に入つてゐないんだもの。私の身體さへ持つて行けばいゝんだ。歸らうと思へば今が今だつて歸れるんだ。」お前はます／＼意地になつていひ張つた。
私は先刻から何とも名狀し難い屈辱に胸を締めつけられてゐた。そしてこれまでも珍しくない、さういふ紛紜の持ち上つた時のことを思つて、初めから見くびつてゐたとは案外に、お前の決心の底に何だか不思議に冷い物が潛んでゐて、それはもう私の力では何うともすることの出來ぬもののやうに感じられた。
これまでは何んな口爭ひをしたつて、何方かが半日も外に行つて來れば、夕飯は復た毎時のやうに無事に食べられたのであつた。
子供の頃夏季河に泳ぎに行つて、脚の達かぬ青い深淵の底にもぐつて行くと、其處には上層を流れてゐる水と違つた冷い水があつて、それが肌に觸るとぞつとするやうな戰慄を覺えた。私はお前の今度の決心の底に丁度さういふものを聯想した。そしてその冷くなつてゐる心を感ずると、急に何とも言へない孤獨の寂寞に襲はれた。屈辱と寂寞とは私をしてその晩初めから私の口數を少くせしめた。
「別れるんなら別れるんでいゝから、私が斯んなに困つてゐる時に別れなくたつて、今にも少し何うかなつて、それから別れたら可いぢやないか。」
私は二人に哀願するやうにいつた。私は眞から別れる氣はなかつた。
「今に、も少しどうかなる／＼つて、あなたは年中言ひ暮してゐて、今まで一度だつてどうにもなつた例が無いんだもの。私はもうあなたに何うにもして貰はうとは思はない。それよりあなたも一人になつて、もつと名を賣るやうに勉強なさい。さうして貰ふ方がいゝ。私は又私でどうにかしたら、女一人食べてゆけないことはないだらう。」
話は一仕切二人の間に激するかと思へば、また和かになつて行つたりした。私のどうしても別れないと言ふに對して、
「ぢや籍をお入れなさい。」お前は言ひ張つた。
「あなたは籍にも入れない、そんな自分に都合のいゝことばかり考へてゐるんだもの。少しは私の身のことも考へて御覽なさい。」
「さうぢや無い。籍を入れないたつて、なにもさういふわけで入れないんぢやない、そんなことは何時だつて半紙に字を書いて判を捺しさへすれば濟む。そんなことで心を繋いだり切つたりする足にはなりやしない。國の家で何と思つてゐるか分らないたつて、何とも思つてゐたつて、いくらゐたら、六百圓でも七百圓でもお前に店を出す錢を出してくれる理由がないぢやないか。」
その晩は新吉の仲裁で、兎に角月の末まで、あと十五日間私の考へる餘裕を殘すことに話を定めた。
「さうおスマさんのやうに一人定めに前後の考へのないことをいつたつて仕樣がない。何とい

つたつてこれは雪岡さんの考へが肝心だ。男の顔も立てねばならぬから。」
新吉はさういつて兩方を宥めた。
「前後の考へがないことはありません。この人が假令何と思つて居ようとも、私はもう歸るんですから」お前は何處までも本氣になつて緩みのない決心を言ひ張つてゐた。
それから十五日ばかりはまた平常の通りの日が經つた。私には改めて考へなほすこともなかつた。たゞさうしてゐる間に、お前の心が自然に和ぐのを待つより他はなかつた。けれどもそれは無駄であつた。
「兒島さんが話は何うなりましたつて、時々心配して聞いて呉れる。」お前はそんなことをいつてゐた。
私には兒島が蔭で相談對手になつてゐるらしい心持がしないではなかつたが、それを明瞭と心に思つて見るのも何となく不快であつた。
月末になつて新吉は、お前から行つて話してでも置いたものと思はれて、約束の通りに話しに來た。
私の方ではもうこの間二人のいひ度いだけのことは十分聽いてゐるし、此方の意見も述べてあるんですから、今日はもう雪岡さんの決心が何う着いたか、それを聽きさへすれば可いんですから。」
新吉とお前とは、私が別れないのならば、直ぐ國元へ入籍の手續きのことを言つて遣るやうにと迫つた。
私の話はこの前の時と同じやうになつて行かうとした。
「あなたが幾許別れないと言つたつて、私は別れる。もう籍なんか入れて貰はなくつて可い。却つて身體を縛られて不可ない。」お前は、いきり立つて言ひ張つた。
「ぢや私が出て行く。あなたが歸さないと言つたつて、私が勝手に出て行つて隱れたらどうします。まさか私の身體をあなたが綱で縛り着けて置くことも出來ないでせう。……何時だつて私は隱れようと思へば隱れられるんだ。あなたが始終私の傍に付きつきりでゐることも出來ないでせう。」
三人で圍んでゐる大きな瀨戸の火鉢の縁に兩手で獅嚙み付くやうにして、一念を徹さうとした。
「そんな自暴なことがあるもんか。……これまで私に何んな落度があつたにしても、お前これまでのことを考へて見ろ。いくら不足があつても、兎に角六年といふもの一緒に食つて來たぢやないか……」
「食ふくらゐの事は女一人何處にゐたつて食へる。何ぞいへば食はしてやつた食はしてやつた。女一人好き自由にして、食はすくらゐ當然だ。私の方ではその代り無駄な年を取つた。」
「それが自暴だ。」
「自暴ぢやない。もう長う短ういつたつて同じ事だ。兎に角あなたが何と言つたつて大臣を呼んで來たつて、博士を呼んできたつて、どうしても私は歸る。」
掌で火鉢の縁を叩いていきり立つた。
「あなた、自分の家内が惡いことをしてゐるのが氣が付かないんですか?」
焦れ〳〵して、私に喰ひ付きさうにしていつた。
先刻から默つてゐた私はハッと胸を打たれた。
「知つてゐる。」私は中音で煮え切らぬ言ひ方をした。
「知つてゐるつて、何を知つてゐるんです。……何を知つてゐるんです。……さア言つて御覽なさい。何を知つてゐるんです?」引絡んで毒づいた。

「お前が今自分で言つたことを。」私は口籠りつゝ疑ひを持つた調子で言つた。その場合になつてもまだ、私はお前を汚して考へることがどうしても出來なかつた。

「お前が今自分で言つたことつて、何の事です。それを言はなきや分らないぢやありませんか：：はゝはゝ。あなたの言つてゐることは些とも分りやしない。」自分の惡事の發覺を恐怖してゐるもののやうに、空々しく私を冷笑した。

長い間沈默してゐた新吉も理由解らずにそれに連れて笑つた。

「ぢや、兎に角歸れ。」稍しばらく押默つてゐたあと、さういつた。私はそんなに心の遠く離れてゐるものを強ひて引留めても仕方がないと思ひ諦めた。

その晩も兒島は留守にしてゐた。細井は夜學に行つてゐた。

お前はさうと決心すると、母親の所へ歸つて其方で二人の學生の世話をすることを前から言つてゐた。

翌朝私は目を覺して、流元へ顏を洗ひに出ると、お前は竈の前に蹲んで、飯の煮える番をしながら煙草を吸つてゐた。兒島はその傍に同じやうに並んで、左の手でお前の背中をぢつと抱へ込むやうにしてゐた。私が其處へ顯れると靜と手を引いて兒島はすうッと四疊半に入つて行つた。兒島が向うへゆくとお前は白ばくれた聲をして、

「昨夜の話はどうなりましたつて、兒島さんはよく心配して訊ねてくれる。あなたなどよりか何程私に同情して居てくれるか分らない。」今の二人の素振りを押隱すやうに言つた。

「昨夜の話はどうなりましたつて、お前の言ふ通りになつたんぢやないか。」私はさう思つたが、横擦りを銜へながら、まだ十分目覺めた氣持になり切らないので、それを口にするのも控へた。

二人を學校に送り出して置いて、お前は一人で、ごて／＼と今日持つて歸る自分のものを取り纏めてゐた。荷物は日の暮れ方に椅子屋の小僧が荷車を持つて來ることになつてゐた。

私は、お前が朝から一人で大きな蒲團の包みを縛つたり、自分が持つて來た瀬戸物を選り分けたりしてゐるのをみじめなやうな殘酷な心地で唯打遣つて見てゐた。

「かうして形付けて見れば大抵私の物だ。後にはもう書籍と雜誌の這入つた行李ばかりだ。」

お前は座敷の中央に疲れた脚を投出して煙草を吸つてゐた。

私は、簞笥をにじり出した跡だの、がら明きになつた幾つもある戸棚などをつまらなさうに覗いて廻つた。

「それでもお前、長い間よくしてくれたなア。」私は戸棚に頭を突込んだまゝさう言つた。

「今になつてそんなことをいつたつて仕樣がない。」お前は跳ねつけるやうに言つた。

兒島と細井は銘々荷物を一つ車力に積んで、一足先に出て行つた。

「あなたの方のランプは私が後から持つて行つて上げます。お前は骨身を惜まぬやうにいつた。

それから十日ばかり經つて、私は行つて見たくなつて喜久井町の家に行つて見た。その家は丁度一年ばかり前まで私達の住んでゐた家であつたのを、私達が他へ移る時、もう度々の引越しが億劫だからといつてお婆さんだけがそのまゝ其處に居殘つてゐたのであつた。

私が門を入つて平常お婆さんの部屋にしてゐた玄關の左手の四疊半の縁側から、何の氣もなく、

「お婆さん、今日は。」

と言ひながら上つて行つた。するとお婆さん

は少し急いたやうな、大きな聲を揚げて、
「おい、お出でなすつたよ！」
と呼びかけた。
私は、
「何處にゐるの？」
と言ひながら、その四疊半にもゐないので、その部屋を通り拔けて、臺所の板の間に續いてゐる襖を明けて奥の六疊に這入つて行かうとすると、私がまだその襖に手をかけぬ間に、突然内からお前が其處を明けて出て來て、部屋の内を押隱すやうに後手に直ぐぴしやりと音を立てて襖をしめ切つた。そして自分は襖に背を付けて立ち塞がりながら、寢起きの充血した眼を兩手でこすつてゐた。其處はその奥の六疊から臺所に出入りする三尺の口になつて、襖は一枚きりであつた。私はその樣子を見て、はツと變な疑念が胸に浮んだ。これは可怪しいと思ひながら、默つて一寸の間お前の樣子を見てゐた。お前は寢ぼけたやうな聲をして「おいでなさい。」と一口言つた。眼をこすつてゐるからまだ私の顏を面と向いて見ないのだ。わざと長く眼をこすしてゐて、靜と慌てた心を取直してゐたのかも知れぬ。
それから私は直ぐ後に引返して、四疊半から玄關の二疊に廻つて、表の六疊の方から行つて見た。其處では頓馬な細井が大きな聲を揚げて英語の音讀をしてゐた。
すると兒島が奥の六疊から、、、、、、、、、、、、、、、、、、出て來て、
「おいでなさい！」
と、變な顏をして愛想笑ひをしながら言つた。
その時、その六疊と六疊との境の襖が元から明いてゐたか、明いてゐなかつたか、私もそれは氣が付かなかつた。もし締つてゐても私が其方へ廻つて行く間には兒島が明ける時間は十分にある筈だ。
私は何か兒島に一口返事をしながら、そのまま兒島と入違ひに奥の六疊に這入つて見た。
、、、、、、。、、、。、、。、、。
するとお前は其處へ戻つて來て立つてゐたやうであつたが、私には直ぐには何とも言はなかつた。私も何にも言ふことが出來なかつた。で、私が突立つたまゝ氣味惡さうにそこを何時までも見入つてゐるので、それを見て取つたお前は、矢張り默つたまゝさあらぬ風をして、、、、、、、、、、、、、、、。
私はどういふ譯か、先刻から氣になつてゐたことに就いては、そんなに心を奪られてゐながら、何も口に出さなかつた。出すことが出來ないくらゐ獨り胸の中で思ひ詰めてゐたのだ。はしたない事を口に出して、學生等に對して私自身の自負を傷けるのも心苦しい。
それから私は、靜かに縁側に立ち出て庭の方を見廻した。六月初旬の鬱陶しいほど繁茂つた青葉が、この頃から滅切り強くなつた太陽の光を遮つて、一面に青苔の着いた古い庭土に柔かい緑の陰影を幾筋となく縞のやうに繪してゐる。掃除のよく行きとゞいた庭には木の葉一つ落ちてゐない。
「清淨だなあ！……實に清淨だ！」
私はしみ〲庭に見入つた。借家とは言ひながら、私達が其家に住みはじめてから五年越しになる。お前が私の處から出て戻つて、自由な獨身を老母の家に落着けると、自分のものを

大切にするやうな心持で、其處等を小綺麗にしてゐる。私の處から此の間自分の簞笥や蒲團の包みと一緒に荷車に載せて持つて戻つたコスモスなども庭の垣根に植ゑてゐる。

私は一人あとに殘つて不自由な想をしてゐる自分の家のことを思つて、お前らがそんなに氣樂さうにしてゐるのを不當なやうに思つた。そして唯何となく心が樂まなくなつて、私はつまらない氣分になりながら、

「どれ、もう歸らう。」

と言つて、重い足で出て戻つた。お前は、

「さう、おやまたお出でなさい。」

と言つてゐた。

自家に戻つて見ると、大きな家の中が薄暗いやうに思はれて、ラムプを點すのも怠儀だ。今日は通ひの婆さんも來てくれなかつた。朝お茶の湯を沸かす爲に火をおこした燃料が、そのまま手もつけられぬやうに、流し元や土間のまはりに散らばつてゐる。私はそのまゝ又外に出て夕飯を食べて來た。

その夜、私は夜半にフツと目が覺めた。氣が付いて凝乎と考へて見ると、家の中には自分獨り寢てゐるだけだ。さう思つてゐると、晝間の喜久井町の家で見て來たことが、冴えて疲れた頭の中に微細い處まで明瞭と浮び上つて見えた。さうしてゐると、今日の二人の顏や形が暗の中に見えて、「お前等は「、、、、、、、。」と思へた。さう思ふと今までお前がいつたこと、また私の眼に觸れたことが、何も彼もそれを證明してゐるやうに思ひ做されて、私はむら／＼と嫉妬に胸が燃えて來た。私は靜と落着いて寢てゐられなくなつた。さうして起き上つて蒲團の上に坐つた。意志が鈍つて自然に開いた口の中から火を吐くやうな熱い太息が出た。

―あゝ、さうだつたのだ。さうだ／＼。それに違ひはない。それに違ひはない。それに違ひはないものを、こゝにゐる間にどうして疑はなかつたらう？―

何とか彼とか不足がましいことを、面と向つては年中いひ暮してゐながら、元々お前の懷中に入つて行つて甘つたれるやうに、何も彼も投出して信賴してゐる自分が、當初にも妻にさういふことがあることを、たゞ思つて見るのさへ何とも言へず厭な氣持がした。あんな二十になるかならぬくらゐの學生と妻がそんなことになるのが、自分達の、永い間に深く／＼結ばれてきた二人だけの祕密な、思つても樂しい、安心な關係をば、全然虛僞にして了つたやうな氣がした。

四月以來幾度か疑へば疑はねばならぬ場合があつたのを、お前を信じ、お前を庇ふ心持が始終自分の心に纏綿としてゐたものだから、強ひて疑ふことをなし得なかつたのだ。疑ふのがお前を汚すやうな心持がしたから、疑ふのが厭であつたのだ。さう思ふと頭がクラ／＼として、今にも心の調子が狂ひさうで氣懸りでならぬ。獨りでゐて、もし卒倒するとか氣が狂れるとかいふやうなことがあつたら、どうしようと思ふと、何とも言ひやうのない寂寞が暗黑の中から慄然と身を襲うて來る。此處で斯んな遣瀬のない思ひをしてゐるのに、喜久井町では丁度今時分何んなことをしてゐるか、それが暗の中に瞭と見開いた眼に活動寫眞でも見てゐるやうに纏りもなく種々に映つて來る。

「さうだ。それに違ひない。」

私は齒を食ひ締めながら腹の中でいつた。そして何處までもお前を淸淨なものに思ひたいのを、意地惡く強ひて疑ふやうに殘忍な心持になつて、意志を強めようと努めた。

さう思ふと、もう寢てはゐられなくなつた。私はひとり暗中に首肯きながら起き上つて、枕頭のラムプを點し、手早く着物を着、机の上の

ナイフと、火鉢の處に行つて火箸を取つて袂に入れた。それから鳶を被つて水口から靜と戸外に出た。頭の心が火を入れたやうに火照つてゐるのが、梅雨模樣の濕つぽい夜の空氣に觸れて冷々とする。一向時刻が分らぬが、二時を少し過ぎてゐるやうに思はれた。夜の二時と三時との間が一番寂しい丑滿時だといふことを思ひ起して、ぞつと五體に寒氣がしたが、吉岡喜久井町の奥の六疊で眼に映つたことか、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、早く其處に行つて見るのか、靜い處に蹲つて見るやうな、また何とも名狀し難い本能的の興味を刺戟するやうで氣が急けた。

五月雲の黑い雲が蔽被さるやうに低く垂れ下つて、田中家の嚴しい石塀の外は、死んだやうに闃寂と靜り返つて、塀の上から暗を照してゐる電燈の光で狐疑するやうに上から凝乎と樹の下暗を覗いて見たけれど胸突坂には誰も上つて來るものはないらしい。私は元氣を出して降りて行つた。自分の足音がいろんな響を立てて鳴つてゐるのが分る。江戸川端に出ると、早稻田田圃に一面にふり蒔いたやうに蛙の啼き聲がしてゐる。

やがて早稻田町の通りまで來ると、向うからコツ〱と靴音を立てて巡査がやつて來た。私は初めて吾れに返つたやうになつて「これは惡い處で出會した。どうしよう？後に引返さうか。」と思つたが、それでは却つて好くなからうと思つて、颯々と傍を通り過ぎた。そして一二間行くと、

「こら……おい！」

と巡査は振返つて呼び止めた。

私は、

「はあ」と立停つて、其方を振向いた。

巡査はツカ〱と私の傍に寄つて來た。そして此度は言葉を丁寧にして、

「今時分何處に行きます？」

「えゝ、家内の老母が急病だといつて來たものですから、其處へ行きます。……夜中に急病人が出來て誠に困つて了ひます。」

澱みもなく言つて除けた。

私は巡査が何處に行くかと訊ねてゐる間に、これだけのことを思ひ付いた。さうは言つたが、若し袂を檢べられたら何うしようかと心配した。ナイフは差支へないが火箸まで持つてゐるのがよくない。私はそれで戸をコヂ明けようと思つたのだ。

「あゝさうですか。……病人が居るのは何處です？」

「すぐそこの喜久井町二十番地です。」

「貴方は何處から來ました？」

「私の家は小石川の關口臺町です。」

「何方を通つて來ました。」

「田中さんの脇の胸突坂を下りて早稻田田圃を通つて來ました。」

「あゝ、さうですか。それぢや宜しい。」

と言つて、巡査はまた向うをむいて歩き出した。私はホッと思つた。

喜久井町の家の門は毎時も締めつ放してあつた。けれども氣が咎めてその時はそれを明けるのさへ音を盗むやうにして靜と明けた。そして庭の方を廻つて、戸袋の所の鉢前の傍に行つた。かねて古耄けた戸といふことを熟く知つてゐるから、戸と戸との間にその火箸を差し込んで、密とコヂ明けようとして見たが、方々種々にして見たけれど、どうしても明かない。

私は五體中冷い汗が滲んだ。そして暫く其處に突立つて、何か家の中で言つてゐないか、お前と兒島とが密々言つてはゐないかと、呼吸を殺して靜と耳を澄したが、何にも聞えない。遠くの方で地蟲の啼く聲が微かに連續して聞えてゐるのが、一層夜を靜かにする。さうしてゐる

ると、何處とも知らぬ遠くの方で、ドーンといふやうな鈍い太い音が一つした。それから益々夜は寂静としたやうに思はれた。

　戸袋の方に奥の六疊がある。其處にお前が寝てゐるに違ひない。兒島と細井は隣りの六疊にゐるのだ。二人とも今其處に寝てゐるだらうか、寧そドン〳〵戸を叩き起して、このまゝお前の處に泊つて行かうか。自家ぢや獨りで寂しくつて、とても睡ることが出來ない。どうしても寝られないから、わざ〳〵起きて此處まで來た。どうぞ傍に寝かしてくれ。さう言つてお前を起して賴んで見ようか。と、私は泣きたいやうな賴ない心持になつたが、何だか晝間の通りに兒島が其處に寝てゐるやうに思はれる。

　さう思ふと、矢張り叩かずに、そつと音を盗んで家の中の樣子が探りたくなつて、再び火箸で戸の間をコヂた。廻り緣になつてゐて、戸は十枚もあつた。庭を彼方へ行つたり此方へ來たりして方々の戸の隙をコヂて見た。自分が其處に住つてゐた時分には、何時も不用心な戸締りだといつてゐたが、戸外から明けようとすると、なか〳〵明かない、戸袋が緣側の端と端とに二つあつた。其處のところには心張り棒がかつてあつた。さう思つて戸袋の處の隙間に火箸を插入れてその棒を撥ね落さうとして種々にして見たが、それも外れない。段々あぐねて仕舞には大きな音を立てた。すると、

「あれ！　貴方起きて下さい。何か來た。」

　お前が自身の六疊から叫んだ。私ははつと吃驚してそのまゝハタと手を休めた。

「えツ！　何うしたんです。」

　表の六疊から呼び返した。私はそれを聞くと覺えず逃げ足になつて少しく後に寄つた。その聲は兒島の聲らしかつた。兒島は自分の寝床に寝てゐる。さう思ふと今まで息苦しいまで苦しかつた胸が俄に輕くなつた。そして若し戸を開けられてはと思つて、そのまゝスタ〳〵駈出した。後から追駈けて來はせぬかと氣遣はれて、三つ四つ角を曲るまで後をも見ず、一息に走つた。短い夜がそろ〳〵白みかゝつて來た。歸途は迂廻して音羽の處まで來ると早出の牛乳屋に出會つた。

　自家に戻つたが、留守は何事もなかつた。まだ早い。それから、兒島が別の部屋から聲を立てたので少し疑念が晴れたやうな心持になつたので、それを思ひながら強ひて安心して快く寝ようと思つて急いで蒲團の中に入つたが、神經が極度に興奮してゐて、少しも眠られない。唯非常に身體の疲勞を感ずるばかりである。

　時計がないので分らないが、七時近くになつてたうとう一睡もせず起き上つた。昨日の晩、樣子を見て歸つてから、椅子屋に手紙を遣つてあるので、向うが何とか言つて來るかも知れぬが、氣が苛立つて今朝其處へ行つて見れば、此のまゝ斯うしてゐたのでは、何をすることも出來ぬ。過勞して眠ることさへ出來ぬ。唯起きてゐるのが氣怠くつて苦しい。

　椅子屋に行つて見た。正直な姉は何事か持上るのを氣遣つてゐるやうな顔をして、積み重ねた西洋家具の間から出て來た。

「今朝、あなたの手紙が着きました。小僧に今おスマの處に持つて行かして、おスマにも見せてゐるのです。自家でも怒つてゐます。」

　私を宥めるやうに言つた。

　私は、そのまゝ直ぐ新吉に面と向つてさういふ話をするのが面伏せなやうな氣がして、

「さうですか、まあ私も一寸喜久井町に行つて歸途に寄りますから、さう言つて置いて下さい。」

　さう言つて置いて喜久井町に行つて見た。二人がゐる處へ行つて見れば、どうしても氣が濟まない。私が門に入る處を、婆さんは早くも

認めて、
「そら來たよ！」
と、まるで惡漢が押掛けて來たのを警告するやうな語調で叫んだ。
その恐怖を帶びた言葉を聞くと、私の方でも自然に惡漢になり了したやうな氣持がして、凝乎と狙ふやうに家の内の動靜を窺つて、四疊半の縁側の前に突立つた。疊んだ雨傘の轆轤のところを覺えず強く握つて、斜に構へた。
すると老婆さんの聲を聞いて、奧からお前が姿を現した。そして私の穩かならぬ樣子を見ると、四疊半の奧の方から、用心したやうに立つたまゝ覗いて、「あゝ、來てゐる！……」と氣味惡さうにジロ〳〵此方を見てゐたが、突然白い齒を見せ、眼を剝いて、「イー……イー……鬼！鬼、鬼々々。」口が怠くなるまで、ヒステリカルにいひ續けた。
そして奧の方に引返して行きながら、「あなたが新さんの處に言つて寄越した手紙はもうチヤンと見てゐる。讀んで聽かさうか。此處にある。」
と憎々しげに言つて、六疊の簞笥の方にツカツカと入つた。私はそれに續いて上つて行つた。
お前は用簞笥の抽斗からその手紙の疊んだ奴を取出しながら、
「さあ！ 讀んで聽かさうか、貴方がたもお聽きなさい。」戲談にしようとするやうに照隱しらしう讀みかけた。
兒島は其處の奧の六疊の縁先に趺坐を搔いて煙管を持つてゐた。恐怖に顫へたやうな眞青な顏を此方に向けて、白い齒を露はして何とも言へない苦笑をしてゐるのが、銳く私の眼を射て、嫉妬の疑念を刺戟した。あんな顏をしてゐるのは大方今まで其處に二人で差向つて坐つてゐたのだらう。自分に惡いことがあるからだ。
細井は表の六疊で机に寄つてゐるらしい。
私は自分達の端ないのを二人の前で見せるのを恥ぢて、「おい、こら！ 讀むのは止めなさい！」
あわてて詫びるやうに制した。自分でそんなことを持ち上げてゐながら、いよ〳〵といふ所になつて私は意志が弱い。
お前は私がさういふやうに下手に出るのをわざと嵩にかゝつて、手紙の肝心な所を少し讀んで、「私と兒島さんと喰付いてゐるんですつて。」と、他人の空事のやうな大きな聲で强ひて笑ひながら言つた。
兒島は先刻から趺坐のまゝ丁度其處に打付けられたやうに、靜として動かずにゐる。極度の驚愕に度膽を拔かれて聲も出せないのである。そんな場合にも兒島の樣子に注意の眼を怠らなかつた私は、十分に疑惑の眞相を看破つたと思つた。さう思ふと疑惑が事實であつたと云ふ意識が苦しく私の胸を締め付けた。と、同時に兒島のその聲をも出せないまでに驚いて、アングリと齒を露はしたまゝ恐怖の神經の顫動してゐる顏を此方に向けてゐるのを見ると、それが私の弱い心を衝いて何となく哀感を生ぜしめた。
「兒島君には濟まない。君には關係はない。此女に言つてゐるんだから……」私は弱くなつて、道理の通らないことを言つた。
「兒島さんに何故關係がないんです？……兒島さんに何故關係がないんです？」
お前は左樣いつて言ひ掛つた。
「うむ……」私は何にも言へなかつた。すると隣室から細井が顏を出して、
一何を言つてゐるんだ？一田舍臭い東京言葉で私に喰つて掛るやうに言つた。細井の事は關口臺町の自家にゐる時から二人ぎりの時、お前は屢く私に向つて、「細井はプッキラ棒の間拔け

だ。」とか、「まだあれこそホンの世間知らずの書生ッぽだ。」とか、「細井の家は兒島の家ほど良かないんですよ。」とか言つて噂をしてゐた。　私も細井は好まなかつた。

　その細井などに、つい二三日前まで自家に置いて貰つたことをも思はないで、無禮な口の利きやうをされると癪に障つたが、かねて自分の甥を初め中學生の生意氣な奴の態度や口吻には嘔吐を催すほど嫌つてゐるのだから、こんな奴と血相變へて口を利くと思へば、ひどく自分の誇りが傷けられたやうな氣がして、私はそれには默つてゐた。暫くして半ばその場を靜めるやうに、

「まあ可い〳〵。これから椅子屋に行くんだ。見てをれ！」と言つて、出ようとした。

　お前は、私の强ひて言はない態度を見て氣が强くなつたやうに、わざと冷笑しながら私の後を追うて來て、

「何だ。人の家にツカ〳〵上つて來て。……何にも言ふ事がないだらう。」

「……前には貴方がゐた家でも、その後は私が二年も家賃を拂つてゐたから私の家ですから……」

　お婆さんも一緒になつて、くど〳〵言つた。

　それから、椅子屋から二度も三度も小僧を迎へに遣つてもお前が我儘を言ひ張つて、どうしてもやつて來ないのを遂々仕舞に强ひて連れて來さした。二階で姉夫婦と私達と四人で話をした。

　私は三人の前で昨日喜久井町で見たことから、まだ關口臺町にゐた時分の疑念のかど〳〵を言ひ竝べた。奥の三疊で晝間浴衣を被つて寢てゐた時のことを話しかけると、默つて聞いてゐたお前は、

「譃々〳〵々……」と、ヒステリカルに口を尖らして、私の言ふのを自棄に言ひ消さうとした。

「お前は默つて聽いてをれ！　姉さん達二人に聽いて貰ふんだ。……細井が夜半に眼を醒まして兒島を呼んで手で探つて見てもゐなかつたので、翌朝その事を兒島に話したら、兒島が怒つてお前に話したと言つて、お前がまた私に話したぢやないか。今でこそ斯んな見ともないことを言つて來たが、よく覺えてゐる。あの時お前と二人きり差向ひで御飯を食べながら、お前が其の話をした時に、私は唯笑つて、『さうかさうか。』と聽いてゐて、これつぱかりも疑はなかつた。今から思へばお前は唯戲談のやうに言つて、私が何とか思つてやしないかと思つて、私の氣を引いて見たのだ。」

「そりやア其樣なことを言つたかも知れん。けれどもその時は大方寢入つて暴れて頭と脚と反對になつてゐたんだらうと言つたら、貴方もさうだらうと言つたぢやありませんか。」

「そりや私は知らぬから、そんな事だらうと言つたのさ。だから少しも私は疑はなかつたと言つてゐるぢやないか……」

「そんなら疑へばよかつたに……」とお前は茶化すやうにいつた。

「何だ。……そんなら疑へばよかつたに。……そんな自棄な事を言ふな。私は疑つて可い場合は幾許もあつた。けれども私はお前といふものを疑ふ氣にはどうしてもなれなかつたのだ……」

「ナニそんな遠慮は入らない。そんな疑ふ場合が多かつたら疑つたらよかつたと言つてゐるぢやありませんか。」人を馬鹿にしたやうに鼻の先で嘲つた。

　お前は何時でも私との間に何か事件が持上つて姉夫婦の前に出ると、まるで駄々兒のやうに氣が强くなつて、自棄ばかりを言つた。

「自棄糞をいふな。」

「ほゝ誰も自棄糞を言つてやしない！」

―關口臺町にゐた時分のことも、昨日喜久井町であなたが見たといふことも、唯あなたがさう思つただけでせう。」姉は和かに宥めるやうに言つた。

　私は自分の想像の放縱なことを思つて見て、さういはれるとちよつと自分の眼で見たことを疑つて見る心になつたが、どうしても疑ひを容れない事實である。

　私は眞實に相違ないものを、見す〳〵架空なことのやうに言ひ消さうとせられるのが無念で堪へられない。暫くは何にも言へなかつた。

「あなたも少し考へて物をお言ひなさい。……幾歳になると思つてるんです。既う三十を疾うに通り越した男子ぢやありませんか。兒島さんだつてお國は立派な家の息子さんといふぢやありませんか。あなたとは十も十五も違ふ、まだ學生を對手に迂闊した口を利いてゐると、あなた方で立派な家の息子さんに傷を付けることになりますよ。……私のやうなこんな不幸なものは何と言はれて傷を付けられたつて、どうせ最う出世の出來ないやうに生れて來てゐるんだから、どうでも可いが、兒島さんも國に歸つてお父さんの家督を繼げば、明日の日にも、お嫁さんを貰はねばならぬ人だ。親達に倅に傷を付けられたと言はれたら、貴方はどうします。……貴方の家だつてさうぢやありませんか。國のお母さんや兄さんが、あなたが東京にゐてそんな詰らないことに掛つてゐて何事もせずに遊んでゐると知つたら、貴方申し譯がないでせう。あの小間物店を私にさすと言つた時だつて、私は何にも言はないのに、貴方が勝手で自分で國に行つて來て六百圓も七百圓も貰つて來て、さあ店を出して、品物は賣れない、段々店の物を賣り食ひにして、擧句の果てにはあんな賣女を引張つて來たりして。……國ぢやお母さんだつて兄さんだつて、遠くで事情が分らないから貴方が惡いやうには思つてやしない。皆な私が惡いやうに思つて、私の所爲にしてゐる……」

　お前は生得の明晰な東京辯で、日頃溜つてゐることを一時に言つて仕舞はうとするやうに饒舌りつゞけた。それを新吉が、

「まあ〳〵おスマさん、此處でそんなことを言ひ出したら話が擴がつて仕樣がない。……」

「……人を淫賣婦と一緒に置いたりして、……それで店がいけなくなつたのを私の所爲にして……」

「誰もお前の所爲にしてやしないぢやないか。」

「してる〳〵〳〵。……」またヒステリカルに大きな聲を出して叫んだ。

「まあ〳〵、そんな大きな聲を出さぬやうに。」先刻から默つてゐた新吉が初めて口を出して制した。「あなた方のお蔭で毎日私の自家が騷擾所へ風の惡い思ひをする。話は靜かにしたつて解る。……此方がいくら貧乏してゐるつたつて、吾々だつて人に賴らないで獨立してゐる人間だ。おスマさんの身だつて親や兄弟が付いてゐて見れば、これから先だつて何うでもいゝとは行かぬ。お前さんの身體だつて傷を付けられては、さうかと言つてそのまゝにしては置けない。また雪岡さんだつてまんざら無いことを有ると言つては來ないでせうから。……おスマさん、お前さん何うしたのです？そんな亭主にあるものが若い男と、假令どんな事がないにもせよ、竝んで寢轉んでゐるといふ法はない。雪岡さんが言ふやうにさういふことがあつたんですか。」新吉はおスマの顏を見て言つた。

　利口らしい緊張した顏をして、新吉のいふことの一言一句に顫動を感じてゐたお前は、最初は自分の肩を持ちさうであつたのが、少しく相違したのを不滿さうに、

「そんなことがあるもんですか。皆な此の人が好い加減なことを言つてゐるんです　自分獨り

になつて不自由なもんだから、何か言ひ掛りを拵へて、また私の所へ轉げ込んで來ようと思つてゐるんだ。」

お前はさういつて、言ひ消した。新吉夫婦もそれに荷擔した。私は何の事はない、言ひ掛りを言つて行つたやうに言はれた。その時私は無念の胸を擦つて堪へた。でも到頭私は兒島や細井とお前とを一緒に置くことに異議を言ひ張り、私はまたお前の家に這入つて行つて二月ばかりゐた、そして八月の末にお前は家出をして、遂に私の目から姿を隱して了つたのであつた。

あれから滿二年になる。今初めて長い疑ひが解けた。併しその疑ひは事實であつた。汽車の進行をもどかしく思ひながら、私は窓に面を向けて人目を忍んで劇烈に歔欷した。さうして魂はもうお前達が遠く身を隱してゐる岡山の空へ飛んでいつてしまつた。彼奴等は確に岡山にいつてゐるに違ひない。…

芭蕉

芭蕉をぜひ植ゑたいと思つたが、その植木屋になかつたので、何處かにありはせぬかと心掛けてゐるうちに幸ひほかの家にあつたのを分けてもらつて植ゑた。これも思ひのほかよく生育して、三株の莖から伸びる芽が、初は棒の如く長く卷葉をぬき出て、それが半日一日のうちにも眼に見えて成長し、柔かい薄みどりの卷葉はやがて二尺から二尺五寸ぐらゐになると、そこで初めて固く卷いてゐた葉を少しづつ端の方から披いた。そして一旦披きはじめると、一日のうちにすつかり濶葉を披いてしまふ。柔かい涼しい緑の葉は五尺から六尺くらゐに伸びて少しの風にも大きな青い葉は輕く煽られてゐる。九十五度六度の炎暑に惱殺されてゐる時に緣先に芭蕉の青葉が搖れてゐるのを見るのが何よりの慰めであつた。しかし私はその芭蕉を夏日の慰めとしてよりも來る秋の雨夜の樂みとして植ゑたのである。此の間は今年はじめてのひどい野分がした。まだ殘暑がきびしいといつても郊外の夜はもういくらか涼味を覺えるやうになつて、夜の掻い卷の肌觸り心地よく、折から時雨の音づれる聲にふと眼を覺ますと、雨戸のすぐ外なる芭蕉の葉に降りそゝぐ雨が聽えるのであつた。

　野分して盥に雨を聽く夜かな

の古句の味のしみゞゝと思はれるのもこの頃である。秋やうやく闌けるにつけ、いづれの夏の花樹よりも纖弱なる芭蕉は秋を傷むのも早い。

　芭蕉葉の何となれとや秋の風

つれなく吹く秋の風は終日芭蕉の葉を吹き搖すつてゐる。やがてさしもに夏の緑を緣先一ぱいに翳してゐた濶葉の端から、だんだんに末枯れてゆく頃、軒端に淅瀝たる秋の聲にぢいつと獨り思ひ入る日を待つてゐる。

（『秋江隨筆』の「郊外小景」より）

黒髪

一

……その女は、私の、これまでに數知れぬほど見た女の中で一番氣に入つた女であつた。どういふ所が、そんなら、氣に入つたかと訊ねられても一々口に出して説明することは、むつかしい。が、何よりも私の氣に入つたのは、口のきゝやう、起居振舞ひなどの、わざとらしくなく物靜かなことであつた。そして、生まれながら、何處から見ても京の女であつた。尤も京の女と云へば、どこか顏に締りのない感じのするのが多いものだが、その女は眉目の邊が引締つてゐて、口元なども屢々彼地の女にあるやうに弛んだ形をしてをらず、色の白い、夏になると、それが一層白くなつて、じつとり汗ばんだ皮膚の色が、ひとりでに淡紅色を呈して、いやに厚化粧を賣り物にしてゐるあちらの女に似ず、常に白粉などを用ゐぬのが自慢といふほどでもなかつたけれど……彼女は、そんな氣どりなどは少しもなかつたから……多くの女のする、手に暇さへあれば懷中から鏡を出して覗いたり、鬢をなほしたり、又は紙白粉で顏を拭くとかいつたやうなことは、つひぞなく、氣持ちのさつぱりとした、何事にでも内輪な、どちらかといふと色氣の乏しいと云つてもいゝくらゐの女であつた。

　そして、何よりもその女の優れたところは、姿の好いことであつた。本當の脊はさう高くないのに、ちよつと見て高く思はれるのは身體の形がいかにもすらりとして意氣に出來てゐるからであつた。手足の指の形まで、すんなりと伸びて、白いところにうす蒼い靜脈の浮いてゐるのまで、一入女を優しいものにしてみせた。冬など蒼白いほど白い顏の色が一層さびしく沈んで、いつも銀杏がへしに結つた房々とした鬢の毛が細おもての兩頰をおほうて、長く取つた髱が鶴のやうな頸筋から半襟に被ひかぶさつてゐた。

　それは物のいひ振りや起居と同じやうに柔和な表情の顏であつたが、白い額に、いかつくないほどに濃い一の字を描いてゐる眉毛は、さながら白沙青松ともいひたいくらゐ、秀でて見えた。けれど私に、何時までも忘れられぬのはその眼であつた。いくらか神經質な、二重瞼の、飽くまでも黒い、賢さうな大きな眼であつた。彼女は、決して、人に求めるところがあつて、媚を呈したりして泣いたりなどするやうなことはなかつたけれど、どうかした話のまはり合せから身の薄命を省みて、ふと涙ぐむ時など、ぢつと默つてゐて、その大きな黒眸がちの眼が、ひとりでに一層大きく張りを持つてきて、赤く充血するとともに、さつと露が潤んでくるのであつた。私は、彼女の、その時の眼だけでも命を投げ出して彼女を愛しても厭はないと思つたのである。その頃は年もまだ二十を三つか四つ出たくらゐのもので若かつたが、商賣柄に似ぬ地味な好みから、頭髪の飾りなども金あしの簪に小さい翡翠の玉をつけたのをよく插してゐた。……

二

　それは、その女を知つてから、もう四年めの夏であつた。夏中を、京都に近い畿内のある山の上に過した。高い山の上では老杉の頂から

白い雲が、碧い空のおもてに湧いて、八月の半ばを過ぎる頃には早くも朝夕は冷い秋めいた風を身に覺えるやうになり、それとともにそゞろに都會の生活が懷かしくなつてきた。夏の初、山に行くまで、東京から京都に來ると、私は一ヶ月あまりその女の家にゐたのであつたが、又近いうちに山を下りてゆくといふことを云つてやると、女からは簡單な返事が來て、少しく事情があつて、まだ自由な身でないので、內證の男を自分の處に置いとくことは方々に對して憚りがある、夏の時は、一年半も會はなかつたあとのことで、あれは格別に主人の計らひで公けにさうしたのであつたが、度々といふわけにはゆかぬ、そのうち此方から何とか挨拶をするまで、京都へは來ないで、すぐ東京の方へ歸つて居つてもらひたいといふのであつた。

けれども私は、どうしてもそのまゝすぐ東京へ歸つてゆく氣にはなれなかつた。そして九月の下旬に山を下りて紀伊から大阪の方の旅に二三日を費して、侘しい秋雨模樣の、ある日の夕ぐれに、懷かしい京都の街に入つてきた。

夏の初、山の方に立つてゆく時は女の家から立つていつたので、長い間情趣のない獨り住居に飽きてゐた私は、暫くの間でも女の家にゐた間のしつとりした生活の味が忘られず、出來ることならば直ぐ又女の處へ行きたかつたのだが、女は九月の初に、それまでゐた餘處の家の二階がりの所帶を疊んで母親はどこか上京邊の遠い親類にあづけ、自分の身が自由になるまで、少しでも餘計な錢の入るのを省きたいと云つてゐた。そのくらゐのことならば、私の方でも心配するから、夏のをはりに、自分が又山を下りてくるまでお母さんは、やつぱり此處の家へ置いて、所帶もこのまゝにして居るやうに云ひ置きもし、手紙でも度々そのことを繰返しいつて寄越したにもかゝはらず、たうとう家は一時仕舞つてしまつたと云つて來てゐたので、私は懷かしさに躍る胸を抱きながら、その晩方京都に着くと、荷物はステーションに一時あづけにして置き、まづ心當りの落着きのよささうな旅館を志して上京の方をたづねて步いたが、どうも思はしいところがなく、さうしてゐるうちに秋の日は早くも暮れて、大分蒸すと思つてゐると、曇つた灰色の空からは大粒の雨がぽつり／＼と落ちてきた。

どこか親し味のある取扱ひをして泊めてくれるやうな處はないだらうか。女はなぜ、あの二階借りの住居を疊んでしまつただらう。自分は、五月から六月にかけて一ヶ月ばかり彼女の處にゐる間に健康を增して、いくらか體に肉が付いたくらゐであつた。しかし、もうあそこにゐないと云へば、これから行つてみたところで爲方もない。母親はどこにゐるのだらう。尤も女に逢はうとおもへば、すぐにでも會へないことはないが、さうして逢ふのは、つまらない。

そんなことを考へながら、ともかくも、これから暫くゆつくり滯泊するところが求めたいと思つたけれど、そのほかに心あたりもなく、爲方なく又奧まつた處から、電車の通つてゐる方へ出てくると、その電車は丁度先に女のゐた處の方にゆく電車であつたので、今はそこにゐても居なくても、やつぱりそつちの方へ引着けられてゆくやうな氣がして、雨も降つてくるので、そのまゝ電車に飛び乘つた。そして東山の方をずつと廻つて祇園町の通りを少しゆくと、そこに彼女の居た家があるので、その近くの停留場で電車を降り、夏の前暫くゐて勝手を知つてゐる、暗い路次の中に入つていつて見たが、門は締つてゐて、階下の家主の老女もゐる氣配はせず、上の、女のゐた二階——自分もそこに一ヶ月ばかり女と一つ部屋にゐた——は戶が締

つて火光も洩れてゐない。
「まあ、しかし、それは明日になつてからでもよい。」
さう思ひながら、なるたけそこに近い處に宿を取りたい、暫くの間でも好きな女と一緒にゐた、懷かしい場處から遠く離れたくない氣がして、そこから少し東山よりの方へ上がつていつた處にある、とある旅館にいつて泊ることにした。それといふのも、その旅館へはその女とも一緒によく泊りにいつたことのある馴染ふかい家であつたからだ。そのあたりは、そんな種類の女の住んでゐる祇園町に近いところで、三條の木屋町でなければ下河原といはれて、祇園町の女の出場所になつてゐる洒落れた土地であつた。それは東山の麓に近い高みになつてゐて、閑雅な京都の中でも取り分けて閑寂なので人に悦ばれる處であつた。

三

その前の年の冬に東京から久しぶりに女に逢ひにいつた時にも、矢張りその家へ泊つたが、私はその時分のことを忘れることが出來ない。急に會つて話したいことがあるから來てもらひたいといふ手紙を、女から寄越したので、一月の中ごろであつた、私は夜の汽車で立つていつた。スチームに暖められた汽車の中に假睡の一夜を明かして、翌朝早く眼を覺ますと、窓の外は野も山も、薄化粧をしたやうな霜に凍てて、それに麗かな茜色の朝陽の光が漲り渡つてゐた。雪の深い關ケ原を江州の方に出抜けると、平潤な野路の果てに遠く太陽をまともに受けて淡蒼い朝靄の中に霞んで見える比良、比叡の山が湖西に空に連らなつてゐるのも、もう身は京都に近づいてゐることが思はれて、ひとりでに胸は躍つてくるのであつた。そして、幾ら遠く離れてゐても、東京に靜としてゐれば、諦めて落着いてゐる筈の、いろ／＼の思ひが、汽車の進行につれて次第に募つてきて、はては惱ましいまでに不安に襲はれてくる。
「女はいゝ鹽梅に家にゐるだらうか。此間中から大阪などへ行つてゐて留守ではなからうか。大阪には一人深くあの女を思つてゐる男があるのだ。……自分が女を初めて知つた時の夏であつた。その男に招ばれて、女が向うの座敷にいつてゐる時、ちやうど上の木屋町の床で、四五軒離れた處から、二人とも今湯を上がつたばかりの浴衣姿で、その男の傍に女が來て坐つてゐるところを、遠見に見たことがあつた。その時さながら身を熬るやうな惱ましさを覺えたことがあつた。それを思うても、何が苦しいといつて戀の苦しみほど身に徹へるものはない。……どうか家に居つてくれて、すぐ逢へればよいが。昨夜は、かうして、自分は汽車に一夜を明かして、はる／″＼の東京から逢ひに來たのである。女はどこへ、どんな人間の座敷に招ばれていつたらうか。まだ朝は早い。朝の遲い廓では今ごろはまだ眠つてゐるであらう。」
そんなことが綿々として、後からあとから思ひ浮んで、汽車の座席にぢつとしてゐるに堪へられないくらゐになつた。私はそのあたりから賴信紙をとり出して、「十一時までには必ず加茂川べりのある家に行き着いてゐるからといふ電報を打つて置いた。そして京都驛に着いたのはまだ八時頃であつたが、どんよりとした曉靄は朝餉の炊煙と融合ひ、停車場前の廣場に立つて、一年近くも見なかつた四圍の山々を懷かしく眺めわたすと、東山は白い靄に包まれて清水の塔が音羽山の中腹に夢のやうにぼんやりと浮んで見える。遠くの愛宕から西山の一帶は朝暾を浴びて淡い藍色に染めなされてゐる。私は足の踏み度も輕く、そこからすぐ先刻電報で知らして置いた加茂川べりの、とある料理屋を志してい

つたが、そこも廓の中にある家のこととて、家の前に行つた時、やう〳〵店の者が表の戸をあけかけてゐるところであつた。やがて階段を上がつて、河原を見晴す二階の座敷に通り食べる物などをあつらへてゐるうちに、靄とも烟ともつかず、重く河原の面を立ち罩めてゐた茜色を帯びた白い川霧がだん〳〵中空をさして昇つてくる朝陽の光に消散して、四條の大橋を渡る往來の人の足音ばかり高く聞えてゐたのが、ちやうど影繪のやうな人の姿が次第に見え渡つて來た。靜かな日の影は麗々と向岸の人家に照り映えて、その屋並の彼方に見える東山はいつまでも靜かな朝霧に籠められてゐる。

女中に、少ししたら女の聲で電話がかゝつてくるかも知れぬからと頼んで置いて、私はひとり暖かい鍋の物を食べながら、

「あゝいつて、委しい電報を打つて置いたけれど、丁度いゝ鹽梅に女が家にゐるか、ゐないか分らない、とり分け氣ばたらきのない、悠暢な女のことであるから……尤もその、しつとりして物靜かなところがあの女の好い處であるが……たとひ折よく昨夜の出先きから今朝もう家に戻つてきてゐたにしても、あの電報を見て、早速てきぱきと、電話口に立つてゆくやうなことはあるまい。ほんとに、人の心も知らないといふのは彼奴のことだ。」

と、そんなことを思つて、不安の念に惱んでゐると、ものの一時間ともたゝないうちに、女中が座敷に入つてきて、

「あの、お電話どつせ。」といふ。

私は、跳ね上がつたやうな氣がしながら、すぐさま立つて電話のところへ下りていつた。

「あゝ、もし〳〵私。」と聲を掛けると、向うでも、

「あゝ、もし〳〵。」と呼ぶ聲がする。何といふ懷かしい、久し振りに聽く女の聲であらう。振顧つて考へると、それは去年の五月から八九ケ月の間も聽かなかつた聲である。手紙こそ月の中に十幾度となく往復してゐるが、去年の五月からと云へば顏の記憶も朧ろになるくらゐである。

「あゝ、わたしよ。電報を讀んだの？」

「えゝ、今讀んだとこどす。」

「よく、家にゐたねえ。こちらは分つてゐるだらう。」

「よう分つてゐます。」

「それぢやすぐおいで。」

「えゝ、いても、よろしいけど、そこの人知つとる人多うおすさかい。私顏がさすといけまへんよつて。あんたはん、今日そこから何處へおいでやすのどす。」

「どこへ、とは？　泊るところ？」

「えゝ、さうどす。」

「それは、まだ定めてゐない。あんたに一遍逢つてからでもいゝと思つて。」

それから、兎も角そんなら東山の方のとある、小隱れた料理屋で一應逢つてからのことにしよう。二時から三時までの間に雙方でそこまで行つて待合はすことにして互に電話を切らうとすると、女は、念を押すやうに、

「もし〳〵、あんたはん違へんやうにおしやす。」

いくらか嗄れたやうな女の地聲で繰返していふ。私はいきなり電話口へ自分の口をぴたりと押付けたいほどの氣になつて、

「戯談を。そちらこそ違へちや可けないよ。私はねえ、京都の地にゐる人と逢ふんだよ。ゆうべ夜汽車で、わざ〳〵百何十里の道をやつて來たのだよ。氣の長い人だから、時間が當てにならない。待たしたら怒るよ。」さういふと、電話口で、ほゝと笑ふ聲だけして、電話は切れた。

やがてもとの座敷に戻つてくると、女中はく

たくた煮える鍋の傍に付いてゐたが、
「來やはりしまへんのどすか。」と訊く。
「こゝへは來ないやうだ。」
　さういつて、私はそこ〳〵に御飯にしてしまつた。南に向いた窓から河原の方に眼を放すと、短い冬の日はその時もう頭の眞うへから少し西に傾いて、暖い日の光は、さう思うて見るせゐか四條の大橋の彼方に竝ぶ向岸の家つゞきや八坂の塔の見える東山あたりには、もう春めいた陽炎が立つてゐるかのやうである。私は約束の時間をちがへぬやうに急いでそこを出ていつた。京都の冬の日の閑寂さといつたらない。私はめづらしく、少しの酒にやゝ陶然となつてゐたので、そこから出るとすぐ居合はす俥に乗つて、川を東に渡り建仁寺の篠籔の蔭の土塀について裏門のところを曲つて、段々上りの道を東山の方に挽かれていつた。そして靜かな冬の日のさしかけてゐる下河原の街を歩いて、數年前一度知つてゐる心あたりの旅館を訪ふと、快く通してくれた。それを緣故にして、その後も度々いつて泊つたが、そこの座敷は簡素な造りであつたが、主人が風雅の心得のある人間で、金目を見せずに氣持よく座敷を飾つてあつた。私は厚い八端の座蒲團の上にともかくも坐つて、女中の靜かに汲んで出した暖い茶を呑んでから、先刻女と電話で約束した會合の場所か、そこからすぐ近いところなので、時計を出して見い〳〵遲刻せぬやうにと、ちよつと其處までといひ置いて、出て行つた。そこらは、もう高臺寺の境内に近いところで、蓊鬱とした松の木山がすぐ眉に迫り、節のすなほな、眞青な竹林が家のうしろに續いてゐたりした。
　私は、山の方に上がつてゆく靜かな細い通りを歩いて、約束の、眞葛ヶ原のある茶亭の入口のところに來て暫く待つてゐた。そこは加茂川ぞひの低地から大分高みになつてゐるので、振顧つて向うの方を見ると、麗かに照る午さがりの冬の日を眞正面に浴びた愛宕の山が金色に輝く大氣の彼方にさながら藍霞のやうに遠く西の空に渡してゐる。そして、あまり遠くへゆかぬやうにしてそこらを少しの間ぶら〳〵してゐるところへ、此方に立つて、見てゐると細い坂道を往來の人に交つてやつて來るのは、まぎれもない彼女である。それは、去年の五月以來八九ヶ月見なかつた容姿である。だん〳〵近くなつてくると、向うでも此方を認めたと思はれて、嫣然してゐる。銀杏返しに結つた頭髮を撫でもせず、黒い衿卷をして、お召の半コートを着てゐる下の方にお召の前掛などをしてゐるのが見えて、不斷のまゝである。
「私をよく覺えて、ゐたねえ。」と、笑ふと、
「そら覺えてゐますさ。」
「今そこで宿をきめたのだ。知つてゐるだらう、すぐそこのあの家。あそこが早く氣が付くと、すぐあそこへ來てもらふんだつた。まあ、いゝ、入らう。」さういつて、私は先に立つて、そこの茶亭に入つた。
　そして、庭の外はすぐ東山裾の深い竹林につづいてゐる奥まつた離室に通つて、二三の食べる物などを命じて暫く話してゐた。
「こんな物が出來てえ。」と甘えるやうな鼻聲になつて、しきりに額の小さい面皰のやうなものを氣にしてゐる。
「私、ちよつと肥りましたやろ。」
「うむ、えゝ血色だ。達者で何より結構だ。そして急に話したいことがあるから來てくれと云つたのは何の事だい？」
　さういつて訊いても女は默つて答へない。重ねて訊くと、
「それは又後で話します。」と、いふ。
「ぢや、これからそろ〳〵宿の方にゆかうか。」
といふと、

「私、今すぐは行けまへんの。あんたはん先き歸つてとくれやす。夜になつてから行きます。」

「なぜ今いけないの。一緒にゆかうぢやないか。」さういつて勸めたけれど、今は一寸餘處のお座敷をはづして逢ひに來たのですぐといふ譯にはいかぬといふので、堅く後を約束してそこの家を連れ立つて一緒に出て戻つた。そして旅館の入口の前で別れながら、

「一緒に御飯を食べるやうに、都合して成るたけ早くおいで。」

「えゝ、さうします。」といつて、女はかへつて去つた。

冬の夜は靜かに更けて、嚴しい寒さが深々と加はるのを、室内に取付けた瓦斯煖爐の火に温まりながら私は落着いた氣分になつて讀みさしの新聞などを見ながら女の來るのを今か〳〵と待ちかねてゐた。女はなか〳〵やつて來なかつたので、たうとう空腹に堪へかねて獨りで、物足りない夕食を濟ましてしまつた。さうしてゐても女はまだ〳〵やつて來ないので、微醺氣分でだいぶ焦れ〳〵してきて、氣長く待つ氣で讀んでゐた雜誌をも遂々そこに投げ出して、煖爐の前に褞袍にくるまつて肱枕で横になり、來ても假睡した眞似をして默つてゐてやらう、と思つてゐると、十時も過ぎて、やがて十一時ちかくになつて、遠くの廊下に靜かな足音がして、今度は、どうやら女中ばかりの歩くのとはちがふと思つてゐると、襖の外で何かいふ氣配がして、女中が外から膝をついて襖をそうつと開けると、そこに彼女のすらりとした姿が立つてゐた。そして、先刻とちがひ頭髮の容もとゝのへ薄く化粧をしてゐるのでずつと引き立つて見えた。かうしてみると、たしかに佳い女である。この女に自分が全力を擧げて惚れてゐるのは無理はない。こんな女を自分の物にする悦びは一國を所有するよりももつと強烈なる本能的の悦びである。

女は悠揚とした態度で入つてきながら、

「えらい遲なりました。」と、一と口云つたきり、すこしもつべこべしたことをいはない。夕飯は濟んだかのと訊くと、食べて來たから、何も欲しくないといふ。翌日は一日、寒さを恐れて外にも出ずそこで遊んでゐたが、彼女は机に凭れて、遠くの叔母にやるのだといつて頻りに卷紙に筆を走らせてゐた。櫻の花びらを、あるかなきかに、ところ〳〵に織り出した黑縮緬の羽織に、地味な藍色がかつた薄いだんだら格子のお召の着物をきて、ところ〳〵紅味の入つた羽二重しぼりの襦袢の袖口の締まる白い纖細い腕を差伸べて左の手に卷紙を持ち、右の手に筆を持つてゐるのが、賤しい稼業の女でありながら、何となく古風の女めいて、どうしても京都でなければ見られない女であると思ひながら、私は寢床の上に樂枕しながら、女の容姿に横からつく〴〵と見蕩れてゐた。……

その時は、その晩遲い汽車で、女に京都驛まで見送られて東京に戻つてきた。それから一年ばかり、手紙だけは始終贈答してゐながら、顏を見なかつたのである。

四

その女が、自分の外にどんな人間に逢つてゐるか、自分に對して果して、どれだけの眞實な感情を抱いてゐるか。近い處にゐてさへ賣笑を稼業としてゐる者の内状は知るよしもないのに、まして遠く離れて、しかも一年以上二年近くも相見ないで、たゞ手紙の交換ばかりしてゐて、對手の心の眞相は知られる筈もないのであるが、そんなことを深く疑へば、いくら疑つたつて際限がなかつた。時とすると堪へ難い想像を心に描いて、殆ど居ても起つてもゐられないやうな愛着と、嫉妬と、不安のために胸を

焦すやうなこともあつたが、私は、強ひて自から欺くやうにして、さういふ不快な想像を掻き消し、不安な思ひを胸から追ひ拂ふやうに努めてゐたのであつた。

そして、三四年につゞいてゐる長い間の此方の配慮の結果、あたりまへならば、もうとうに女の身の解決は着いてゐる筈であるのに、それがいつまで經つても要領を得ないので、後には自分の方から隨分詰問した書面を送つたこともあつたが、女はそれについては、少しも、此方を滿足せしめるやうなはつきりした返事を寄越さなかつた。たうとう又、やうやく一年半ぶりに女に逢ふべく京都の地に來てゐながら、私は、たゞ、あたりまへの習慣に從つて女に逢ふのが物足りなくなつて、この前の時のやうに手紙や電報で合圖をしても、それに對して一向滿足な手紙をよこさないのであつた。たゞ普通の習慣に從つて逢はうとすれば直ぐにでもあへるのであるが、女の方から進んで何とか云つてくるまでは暫く放棄つておかう。これを假りに人の事として平靜に考へてみても、向うから進んで何とか云はなければならぬ義理である。百歩も千歩も讓つて考へても、いくら卑しい稼業の女であつてもそんな譯のものではない。

さう思ひ諦めて、暫くの間、氣を變へるために私は、晩春の大和路の方へ小旅行に出掛けていつた。そつちの方は、もう長い間行つてみたいと思つてゐたところであつたが、この四五年の間私の頭の中は全部その女の爲に占領せられて、ほかのことは何も彼も後まはしにして置いた。事實のこと、私は、その女を自分のものにしなければ、何も欲しくないと思つてゐるのであつた。名譽も財寶も入らぬ、たゞ、あの、漆のやうに眞黑い、大きな沈んだ瞳、おとなしさうな顏、白沙青松のごとき、ぱらりとした眉毛、ふつくりと張つた鬢の毛、すらりとした容姿。あらゆる、自分の心を引着ける、そんな美しい部分を綜合的に持つてゐる生き物を自分の所有にしてしまはなければ、身も世もありはせぬ。隨分身體を惡くするまでそんなに思ひ詰めてこの數年を、まるで熱病にでも罹つてゐる如き狀態で過ぎて來たのであつた。

それゆゑ私が、美しい自然や古い美術の寶庫である大和の方の晩春の中に入つて行つたのは、丁度ウェルテルが悲しく傷んだ心を美しい自然の懷に抱かれて慰めようとしたと同じやうなものであつた。

そして一と月近く大和の方の小旅行をして再び京都に戾つて來た時にはもう古都の自然もすつかり初夏になつてゐた。惱ましい目の色は、思ひ疲れた私の眼や肉體を一層懊惱せしめた。奈良からも吉野からも到る處から繪葉書などを書いて送つて置いた。女から何とかいつて來るだらうと思つてゐたが、依然として知らん顏をして何のたよりもして寄越さなかつた。たうとう又根負けして此方から出かけて行つて爲方なく普通の習慣に從つてある家から自分といはずに知らすると、女はちやうど折よく內にゐたと思はれて早速やつて來た。一年半の間見なかつたのである。この前冬見た時よりも氣候の好い時分のせゐか、それとも普通に招かれたお座敷にゆくので美しく化粧をしてゐるせゐか、ずつと肉が付いて身體が大きくなつたやうに思はれ、もとからすらりとした容姿が一段引き立つて、脊が更に高く見えた。彼女達がそんな不意の座敷に招ばれてゆく時の風俗と思はれ、けばけばしい友禪の襦袢のうへに地味な黑縮緬の羽織を着てゐる。彼女は、階段の上り口から私の方を見たが、顏の表情は微動だもせず、ぬうつとして落着いたその態度はまるで無神經の人間のやうであつた。そして傍へ來ても、「お久しう。」とも何とも云はずに默つてそこへ坐つたま

までである。どんなことがあつても彼女は決して深く巧んだ惡氣のある女とは認めないが、對手のいふことがあまり腹の立つやうなことを云つたり、くどかつたりする時にはさながら京人形のやうにその綺麗な、小さい口を閉ぢてしまつて石の如く默つてしまふのである。その氣心をよく知つてゐるので、私は、こちらでも稍や暫く默つて、わざとらしく、じろ〳〵女の顏を見てゐたが、やつぱり遂に根まけして、

「京人形、京人形の顏を二年も見なかつたので、今そこへ來た時にはほかの人間かと思つた。」戲弄ふやうにさういふと、彼女はそれでも微笑もせず、反對に、

「あんたはんかて餘りやおへんか。」

彼女は美しい眉根を神經質に顰めながら憤るやうにいふ。私は「えらい濟まんこと。」くらゐはいふであらうと思つてゐたのに、向うからそんな不足をいふので、何といふ勝手な女であらうと思つて、腹の中で少し勃然となつたが、又、そんなぺたつくやうな調子の好いことをいはぬのが却つて好くも思はれる。

「一年と半とし見ないんだよ。そして一體どんな話になるのだい？　こんなに長い間顏を見たいのを堪へてゐたのも、後を樂しみにしてゐるからぢやないか。」

さういつて、今まで手紙の度に幾度となく訊ねてゐる彼女の境遇の解放について重ねて訊ねたが、女は、たゞ、

「そのことは又後でいひます。」といつたきり何にもいはうとしない。

「また後でいひますもないぢやないか。何年それを云つてゐると思ふ。」

二人はちやんと坐つて向ひ合ひそんな押問答を暫く繰返してゐたが、彼女は默つて考へてゐた擧句、謎のやうに、

「こゝではそのことも云へまへんから、私、かへります。」と、いふ。

私は、少し眼の色を變へて、

「妙なことをいふ。こゝで云へないて、どこでそれをいふの？」

「あんたはんがようおいでやす下河原の家へこれからいて待つてくれやす。そしたら私あとからいきます。こゝの家から一緒にゆくのは此處の家へ對して可けまへんやろ。それから私一遍家へ去んで、あつちやから往きます。」女の持前の愛想のない調子でそんなことをいふ。

私は又女のいふことにいくらか不安をも感じたが、本來それほど性情の善くない女とは思つてゐないので、段々疑ひも解け、その氣になり、

「ぢや、さうするから、きつとあそこへ來なければ可けないよ。」と、根押しをして、その上もう餘り諄くいはぬやうにして、そこの家は體よくして、二人は別々に出て戻つた。

それから私は又、いつかの下河原の家へ行つて待つてゐた。それは日の永い五月の末の、まだ三時頃であつたが、彼女は容易にやつて來なかつた。悠暢な氣の長い女であることはよく知つてゐるので、そのつもりで辛抱して待つてゐたがしまひには辛抱しきれなくなつて、いひやうのない不安の思ひに惱まされてゐるうちに、高い塀に取り圍まれてゐる靜かな坐敷にそろそろ日が影つて、植木の陰の方が薄暗くなり、暖かつた陽氣が變つてうすら寒く肌に觸るやうになつてきた。それでもまだ女の顏は見られなかつた。不安のあとから不安が襲つてきて、いろいろに疑つてみたが、あんなにいつてゐたからよもや來ないことはあるまい。そんな背を向けて欺き逃げるやうな質の惡い女ではない筈である。そんなことをする女を、おめ〳〵と四五年の長い間一途に思ひ詰め、焦れ惱んでゐたとしたら、自分はどうしても自身の不明を恥ぢね

ばならぬ。義理にもそんな薄情な行爲を爲向けられるやうな事を、自分は少しもしてゐない。……今に來るにちがひない。不安の念を、さう思ひ消して待つてゐた。

しかし、それは何ともいへない好い晩春の宵であつた。この前の冬の時と同じやうに女の來るのを待つてゐる心に變りはないが、あの時とちがひ今は初夏の頃とて、私は湯上りの身體を柔かい褞袍にくるまりながら肱枕にして、寢そべり、障子を開放した前栽の方に足を投げ出して靜と心を澄ましてゐると、塀の外はすぐ圓山公園につゞく祇園社の入口に接近してゐるので、暖かい、ゆく春の宵を惜んで、そゞろ歩きするらしい男女の高い笑ひ聲が、さながら歡樂に溢れたやうに聞えてくるのである。花の季節はもう疾うに過ぎてしまつたけれど、新緑の薫が夕風のそよぎとともにすうつと座敷の中に流れこんで、何處で鳴いてゐるのか雛蛙の鳴く音がもどかしいほど懷かしく聽えてくる。それを聞いてゐると、

「あゝ、喰ひ付いてやりたいほど好きでたまらない女は、しまひには本當に自分の物になるのか知らん。いつまでこんな不安な悩ましい思ひに責め苛まされてゐなければならぬのであらう。もう何時までもこんな苦しい思ひをさせられてゐないで早く安らかな氣持になりたい。」

そこへ長い廊下を遠くの方で足音が靜かに聽えると思つて見ると、やがて女中が襖の外に膝まづきながら、

「えらい遲うおすなあ。御夕飯はどない致しまへう、もうちよつとお待ちになりますか。」

と訊く。そんなことが二三度繰返された後、私はたうとう待ち切れなくなつて、腹立ちまぎれに、又いつかの時のやうに、先き一人で食べてしまつたら、きつと來るだらう、早く顏を見せるまじなひに先き食べてしまはう、と思つて、

「持つてきて下さい。」と命じた。その自分の心持には、ひとりでに眼に涙のにじむやうな悲しい憤りの感情が込み上げてきた。それは卑しい稼業の女に飽くまでも愛着してゐる、その感情が十分滿足されないといふばかりでなく、どうして此方のこの熱愛する心持が向うに通はぬであらう。こちらの熱烈な愛着の感情がすこしでも靈感あるものならば、それが女の胸に傳はつて、もつと、はき〳〵しさうなのに、彼女はいつも同じやうに悠暢であつた。

そこへ女中が膳を運んできた。

「おほきにお待ちどほさん。」と、いひつゝ餉臺のうへに取つて並べられる料理の數々。それは今の季節の京都に必ずなくてはならぬ鰉の燒いたの、鯡の子膾、明石鯛のう鹽、それから高野豆腐の白醬油煮に、柔かい卵色湯葉と眞青な莢豌豆の煮しめといふやうな物であつた。

私は、口に合つたそれらの料理を、むら〳〵と咽へこみ上げてくる涙と一緒に吞込むやうにして食べてゐた。さうしてもう濟みかけてゐるところへ廊下にほかの女中とはちがふらしい足音がして、襖の蔭から女がぬつと立ち顯はれた。彼女は先刻とちがひ、餘處ゆきらしい薄い金茶色の絽お召の羽織を着て、いつものとほり薄く化粧をしてゐるのが相變らず美しい。

「今まで待つてゐたけれどあんまり遲いから食べてしまつた。まだ？」

「えゝ……」

「おや、お今さん、すぐこしらへて下さい。このとほりでいゝ。」女中に命ずると、女は、

「入りません。食べんかてよろしい。」

「まあ、そんなことをいはないで、一緒に食べよう。待つてゐる。」

女は、私の方へに答へず、女中に向つて、

「姉さん、どうぞ、ほんまに置いとくれやす。」

といつて斷つたが、ともかくも調へて持つて來させた。けれども、彼女は箸も着けようとせず、餉臺の向側に行儀よく坐つたまゝでゐる。そんな近いところから見てゐても、ちやうどこんな清々しい初夏の宵にふさはしいばらりとした顏であつた。匂やかな薄化粧の装ひが鮮かで、髪の櫛目が水つぽく電燈の光を反射して輝いてゐる。

女はたうとう並べた物に箸をつけなかつた、女中が膳を引いてゆく時、

「姐さん、えらい濟んまへんけど苺がおしたら、後で持つてきとくれやす。」

自分で註文しておいて、やがて女中が退つていつたあとで、女は先刻から默つて考へて居るやうな風であつたが――尤も彼女はいつでも、いふべき用のない時は無愛想なくらゐ口數の少い女であつた。自分は、それが好きであつた――やがて又、彼女の癖のやうに、べちやべちやとその理由をいはないで出拔けに、

「あんたはん、私、ちよつと歸ります。」と、謎のやうなことをいふ。

私は思はず胸をはつとさせて、凝乎と女の顏を見ながら、

「歸りますつて、お前、やつと今來たばかりぢやないか。何故そんなことをいふの。先刻の袖菊へいけば、あそこでは話がしにくい、此家へ行つてゐてくれと、あんたがいふから、私はこゝへ來たぢやないか。一體お前の體のことはどうなつてゐるの？ 私ももう四年五年君のことを心配しつゞけて上げて、今日になつても、五年前と同じやうに、やつぱりずる〳〵では、とても私の力には及ばない。私は、先日うちから幾度も手紙でいつてゐるとほり、今度もあんたと遊ぶ爲にかうして今日は來たのではない。そのことを訊かうと思つて來たのだ。君はいつまで商賣をしてゐる氣でゐるの？」

私は腹を立てたやうな、彼女の爲に憂ひてゐるやうな、なんどりした口調で訊ねるのであつた。けれど彼女は、口ごもるやうにして、それには答へず、

「それは又あとで解ります。」と、困つたやうに爲方なく笑つてゐる。

「あとでいひます云ひますつて、それが、あんたの癖だ。もうそれを云つて聽かしてくれてもいゝ時分ぢやないか。」私も爲方なく笑ひにまぎらしてとひ詰める。

「こゝではいへまへん。」子供かなんぞのやうに同じことをいふ。

「こゝでは云へんて、こゝで今云へなければ、いふ折はないぢやないか。何故かへるといふの？」

さういつて、問ひつめても、女は碌に譯をもいはずたゞ頑强に口を噤んでゐるばかりである。

明るい電燈の光をあびてゐる彼女の容姿は水際立つて、見てゐればゐるほど綺麗である。そして、ふつと氣が付いてみると長い間見なかつた間にさうして坐つてゐる樣子に何となく姉さんらしい落着きが出來て、何處といつて口に云へない顏のあたりがさすがに幾らか年を取つたのがわかる。それはさうである。はじめて彼女を知つたのが五年前の丁度今の時分で、爽かな初夏の風が柳の新緑を吹いてゐる加茂川ぞひの二階座敷に、幾日もいくかも彼女を傍に置いて時の經つのを惜んでゐた。座敷から見渡すと向の河原の芝生が眞靑に萌え出でて、そちらにも小棲などをとつた美しい女達が笑ひ興じてゐる聲が、花やかに聞えてきたりした。彼女はその頃よく地味な黒縮緬のたけの詰つた羽織を着て、はつきりした、すこし荒い白い立縞のお召の袷衣を好んで着てゐたが、それが、一層女のすらりとした姿を引立たせてみせた。でもそ

の顔は今から見ると女の三十といふ年から餘り違ざかつてゐない若さがあつた。私自身にとつても、この女の爲に……まさしくこの女のためのみに胸苦しく思つてゐる間に、十年といふ歳月は昨日今日と流れるごとく過ぎてしまつて、彼女は今年もう三十七になるのである。さう思つて又そつとその顔を見てゐると、うすい水淺黄の襦袢の衿の色からどことなく年増らしい、しつかりしたところも見える。
　女は、女中が先刻持つてきた白い西洋皿に盛つた眞紅な苺の實を銀の匙でつゝきながら、音なしく口に持つていつてゐる。
「今夜ぜひ逢ふ約束でもしてゐる人があるのか。」私はさういつて訊ねた。
「ちがひます。」
「逢ふ約束の人がなければこゝにゐたつていゝぢやないか。手紙でこそ時に變りなく話はしてゐたけれど二年近くも逢はなかつたのだから私にいろんな話したいことがあるのはあんたもよう解つてゐる筈だ。」
「そやから歸つてから、後でいひます。」
「あんた、何をいつてゐるのか、私には少しも解らない。かへつてから後にいふとは。そんなら今此處でいつたら可いぢやないか。」
「ほんなら、私歸つて直ぐあとで使ひに手紙を持つてこさします。」
「折角こゝへ來て、すぐ又歸るといふのが私には解らないなあ。あんた、もう私に逢はないつもりなの？」
「ちがひます。私又あとで逢ひます。」
「なあんの事をいつてゐるのだか、私には少しも合點がゆかぬ。しかしまあ可い。それぢやお前の好きなやうにおしなさい。どんなことをいつてくるかあんたの手紙を持つてくるのを待つてゐるから。必ず使ひを寄越すねえ。」
「えゝ、これから二時間ほどしてから俥屋をおこします。ほんなら待つてとくれやす。」
　さういひ置いて、彼女は靜かに立ち上つて廊下の外に消えるやうに歸つてしまつた。私は又變な不安の念ひを抱きながら、あまり執拗に留めるのも大人げないことだと思つて女のいふがまゝにさしておいた。開放した濡縁のそとの、高い土塀で取り圍んだ小庭には、こんもり繁つた植込みのまはりに、しつとりとした夜霧が立ち白んだやうになつて、いくらか薄暖かい空氣の中へ爽かな夜氣が絶えず山の方から流れ込んでくる。私は食べ物の香の殘つてゐる餉臺の處から身體をずらして、そちらの小庭に近い端の方へ行つて又ごろりと横になり、わけもなく懷かしい植物性の香氣の立ち籠つてゐるやうな夜氣の流通を呼吸しながら、女の約束していつた二時間のちのたよりを、それがどんなものであるかといふ不安で堪らない中にもいひ難い樂しみに充ちた期待を以つて待つ心でゐた。
　あたりは靜かなやうでも、さすがに一歩出れば、すぐ繁華な夜の賑の街に近いところのこととて、折々人の通り過ぎるどよみが遠音にひびいてくる。しかし、その爲に一入靜けさを增すかのやうに思はれる。あんまり快い氣持なので、私は肱を枕にしたまゝ、足の先を遠く延し樂にしてゐるうちに、うつら〳〵となつてゐた。そこへ女中が入つてきて、
「お風召すといけまへん。もうお床おのべ致しまへうか。……あの、どこか一寸おいきやしたんどすか。」
「あゝ、お今さんか。あんまり好い心地なのでうと〳〵してゐた。……いや、ちよつと、もう少し待つて下さい。」
「さうどすか。そやつたら、どうぞえゝ時およびやしとくれやす。」お今さんは、そのまゝ又靜かに退つていつた。
　時刻は段々移つて、障子開けてさうしてゐる

くなつたくらゐに力を落してゐる。叔父叔母といつても、いづれも母方の親類で、しかも母親とは腹の異つた兄弟ばかり。父親の親類といふのは何處にもなく、生命の綱とも杖とも柱とも頼んでゐた弟に死なれてからは本當の母ひとり娘ひとりのたよりない境涯であつた。彼女は、ほかの事はあまり云はなかつたが、弟のことばかりは腹から忘れられないと思はれて、懐かしさうによく話して聞かせた。私は、そんな身の上を聽くと、すぐさま自分の思ひ遣りの性癖から「天の網島」の小春が「私ひとりを頼みのお母さん、南邊に賃仕事して裏家住み。死んだあとでは袖乞非人の餓ゑ死にをなされようかと、それのみ悲しさ。」と喞ち嘆くところを思ひ合はせて、いとゞさらにその女が可憐な者に思へたのであつた。

もとは父親の生きてゐる時分から上京の方に住んでゐたが、廓に奉公をするやうになつて母親も一緒に近い處に越してきて、祇園町の片ほとりの路次裏に佗しい住ひをしてゐた。そこへ訪ねていつて初めて母親に會つた。そして後々の事まで話した。彼女はこんな女にどうしてあんな鶴のやうな娘が出來たかと思はれる、むくつけな婆さんであつたが、それでも話の樣子には根からの廓者でない質朴のところがあつて、

「ほんまの親一人子ひとりの頼りない身どすさかい、どうぞよろしうお願ひいたします。」といつて、悲しい鼻にかゝる聲で、今のやうに零落せぬ、まだ一家の困らなかつた時分のことなどを愚癡まじりに話してきかせた。その話によると、彼女の家はもと同じ京都でも府下の南山城の大河原に近い笠置山下の山の中に在つたのであるが、二三十年前に父親が京都へ移つてきた。故郷の山の中には田畑や山林などを相當に所持してゐたが隨分昔のことで、その保管を頼んでゐた人間が借金の抵當に入れて、すつかり取られて無くしてしまつた。

「あれだけの物があればこの子にこない卑しい商賣をさせんかて、あんたはん結構にしてゐられますのや。」母親は心細い聲でそんな古いこと泣いつてゐた。

女もそこに坐つて、默つて母親と私との話を聽いてゐたが、大きな黒い眼がひとりでに大きくなつて赤く充血するとともに玉のやうな露が潤んだ。

「もう古い事どすやろ。」と、彼女はたゞ一口音無しく云つて、母親の話もそれきりになつた。

その後夏の終り頃までも京都の地にゐる間偶に母親のところへも訪ねていつてその度ごと女の後々の事どもを繰返し話してゐたのであつた。振顧つて指を折つてみると、もうあの時から足かけ五年になる。

「おかあはん、あなたがどうして居られるか私、始終、心には懸つてゐたのです。手紙の度にあなたのことを訊ねても何處にゐるのか、少しも委しいことを知らないものですから、一向不沙汰をしてゐました。」

「滅相もない。私こそ御不沙汰してます。あんたはんが始終無事にしとゐやすちふこと、いつもあの娘から聞いてゐました。ほんまに何時もお世話になりまして。お禮の申樣もおへんことどす。」

月の下の夜道をそんなことを語り合ひながら私達はもう電車の音も途絶えた東山通を下へしもへと歩いていつた。そして暫く行つてから母親は、とある横町を建仁寺の裏門の方へ折れ曲りながら、

「こつちやへおいでやす。」といつて、少しゆくと、薄暗いむさくるしい路次の中へから〱足音をさせて入つていつた。私はその後から默つて蹤いてゆくと、すぐ路次の突當りの門をそつ

と扉を押開いて先きに入り、
「どうぞお入りやして。」といつて、私のつゞいて入つたあとを門を差してかた〳〵締めて置いて、又先きに立つて入口の潛り戸をがらりと開けて入つた。私もつゞいて家の中に入ると、細長い通り庭が又も一つ、やう〳〵體の入れるだけの小さい潛戸で仕切られてゐて、幽かな電燈の火影が表の間の襖ごしに洩れてくるほかに眞暗である。母親はまたそのくゞりをごろごろと開けて向うへ入つた。そして同じやうに、
「どうぞ、こつちやへずつとお入りやしとくれやす。暗うおすさかい、お氣付けやして。」
といつて中の茶の間の上り框の前に立つて私のそつちへ入るのを待つてゐる。私は手でそこらをさぐりながら又入つて行つた。と、そこの茶の間の古い長火鉢の傍には、見たところ六十五六の品の好い小綺麗な老婦人が靜かに坐つて煙草を喫つてゐた。母親はその老婦人にちよつと會釋しながら、私の方を向いて、
「構ひまへんよつて、どうぞそこからお上がりやしてくれやす。お婆さん、どうぞ御免やしとくれやす。」といつて、自分から先きに長火鉢の前を通つて、すぐその三疊の茶の間のつきあたりの襖の明いてゐるところから見えてゐる階段の方に上がつてゆく。私はそれで、やつと段々解つてきた。
「これは、此の品の好い老婦人の家の二階を借りて同居してゐるのだな。」と、心の中に思ひながら自分もその老婦人に對して丁寧に腰を折つて挨拶をしつゝ、母親のあとから階段を上がつていつた。すると、階段のすぐ取付は六疊の汚れた座敷で、向うの隅に長火鉢だの茶棚などを置いてある。そして、その奧にもう一間あつて、そちらは八疊である。
母親は階段を上がるなり、
「おいでやしたえ。」とそつちへ聲を掛けると、今まで暗い處を通つてきた眼には馬鹿に明るい心地のする電燈の輝いてゐる奧から女が先刻のまゝの姿で靜かに立つて來た。まるで先程の深く考へ沈んでゐる樣子とは別人のごとく變つて、打ち融けた調子で微笑みながら、
「お越しやす。先程はえらい失禮しました。こんな、むさくるしい處に來てもらうて、濟んまへんけど、あこより此處の方が氣が置けいでよろしいやろ思うて。」と、彼女はお世辭のない、生な調子でいつて、八疊の座敷の方に私を案内した。

私はもう、それで、すつかり安心して嬉しくなつてしまひ、座敷と座敷の境の閾のところに立つたまゝ、そこらを見廻すと、八疊の右手の壁に沿うて高い重ね箪笥を二棹も置き竝べ、向うの左手の一間の床の間には一寸した軸を掛けて、風呂釜などを置いてゐる。見たところ、もう住み古した粗末な座敷であるが、それでも八疊で廣々としてゐるのと、小綺麗に掃除をしてゐるのとで何となく明るくて居心地が好ささうに思はれる。座敷のまんなかに隔物の大きな火鉢を置いて、そばに汚れぬ座蒲團を竝べ、私の來るのを待つてゐたやうである。私は、つくづく感心しながら、
「これは好い處だ、こんな處にゐたのか。いつからこゝにゐたの。まあ、それでも此樣なところにゐたのならば、私も遠くにゐて長い間會はなくつても、及ばずながら心配して上げた效があつたといふものだ。うゝ好い箪笥を置いて。」
私はさういひながら尚ほ立つてゐると、
「まあ、どうぞこゝへお坐りやして。」と、母子とも〴〵して云ふ。
やがて火鉢の脇の蒲團に座を占めて、母親は次の間の自分の長火鉢の處から新しい宇治を煎れてきたり、女は菓子箱から菓子をとつて

すゝめたりしながら暫く差向ひでそこで話してゐた。
「長いことあんたはんにもお世話かけましたお蔭で私もちよつと樂になつたとこどす。」
　自分でもよく口不調法だといつてゐる彼女は、たら〳〵しい世辭もいはず、簡單な言葉でそんなことをいつてゐた。
　私はいくらか咎めるやうな口調で、
「そんならそれと、なぜ、もつと早く此處へ來てくれ話をするとでも言つてくれなかつたのだ。もう一ケ月前此方へ來てからばかりぢやない。もう今年の桃の頃から、あんたにやい〳〵喧しいことをいつて寄越したのも、それを知らぬから、入らぬ餘計な憎まれ言をいつたやうなものだつた。かうして來てみて私は安心したけれど。」
　すると、母親も次の間の襖の蔭から聲を掛けて、
「この子がさういうてゐました。おかあはん、私は口が下手で、よういはんさかい、あんたから、お出でやしたら、ようおいうてえやちうて。……此家のことも、もつと早うにお返事すりや好うおしたのどすけど、この子が二月に一と月ほど、ちよつと心配するほど患ひましたもんどすさかい、よう返事も出しまへなんだのどす。」
　私はそちらへ頭を振向けながら、
「いや、もう、かうして來て見て、思つてゐたほどでなかつたので安心しました。」と、そちらへ聲を掛けた。
　ちやうど氣候の加減が好いので、いつまで起きてゐても夜の遲くなつてゐるのが分らないくらゐである。
　やがてまた母親が、
「もう二時を疾うに過ぎたえ。……あんたはんもお疲れやしたろ。お休みやす。」
　といつたので、やうやく氣が付いて寢支度をした。

六

　そこがあまり居り心が好かつたので、何年の間といふ長い獨棲生活に飽いてゐた私は、さうして母子の者の、出來ぬ中からの行きとゞいた待遇ぶりに、つひに覺えぬ、温い家庭的情味に浸りながら一ケ月餘をうか〳〵と過してしまつた。その間に、まだ春の寒い頃から傷ねてゐた健康をも、追々暖氣に向ふ氣候の加減も手傳つて、すつかり回復したのであつた。
　女は用事を付けてその月一ぱいだけは一週間ばかり家にゐたまゝ休んでゐた。どこかへ一緒に歩いてみようかといつて誘つても、
「ほんとに商賣を廢めてしまうてからにしますえ。」とばかりで、夜遲く近處の風呂にゆくほかは一日、靜かにして家にとぢ籠つてゐた。そして稚い女の子の氣まぐれのやうに、ふと思ひ出して風爐の釜に湯を沸かして、薄茶を立てて飲ましたりした。そして、そこにある塗り物の菓子箱を指して、
「わたしが二月に病氣で寢てゐる時これを持つて見舞ひに來てくれた人が、その時私を廢めさすいうてくれたんどつせ。」
「へえ、そんな深い人があるの。」
「深いことも何もおへんけど。」
「そして引かすといつた時あんたは何といつたの。」
「私、すこし都合がおすさかいいうて斷りました。」
「その人はどんな人？　何をする人。」
「やつぱり商人の人どす。」
「まだ若い人？」
「若いことおへん。もうおかみさんがあつて、子供の三人もある人どす。」
「そんな人爲方がないやないか。」

「そやから、どうもしいしまへん。」
「でも向うではお前が好きなのだらう。」
「そりや、どや知りまへん。」
母親のゐない時など私達二人きり座敷で遊んでゐて、そんなことを話すこともあつた。女はいつも無口で眞面目なやうでも打融けてくると、よくとぼけた戯談を云つた。
母親がどこかへ行つてゐない時、宵のうちから私が疲れたといつて、床を取つてもらつて樂枕をして横になつてゐる傍にきて彼女は坐つてゐたが、急に眞面目になつて、
「私、あんたはんにはまだいひまへなんだけど、本當は一人子供が出來たんどつせ。」と、いふ。
私は初は疑ひながら、凝乎と女の本當らしい眼の處を見て、
「譃だ。」といふと、
「うゝ」と、女は頭振りをふつて、「ほんまどす。」といふ。
「それは、そんな商賣をしてゐたつて、全く例のないことでもないから。本當?」
「ほんまどすたら。」
「へえ。」と、いつてゐたが、私はむら〳〵と眞氣になつてきて、體中の血が凍るやうな心地になり、寢床の上に腹這ひに起き直つて、
「いつ? 近いこと?」と追掛けて訊ねた。
すると女は、いよ〳〵落着いて、
「えゝ、ちよつと半歳ほどになります。」
「ぢや、私が一年半も來なかつた間のことだな。」といつたが、私は自然に聲が上づつたやうになるのを、わざと心で制しながら、「ぢや、おかあはんも喜んでゐるだらう。どんな人間の子? お前にも覺えがあるの?」
「お母はん、悦んではります。」
「さうだらうとも。それが、いつか話したお前の病氣の時廢めさすといつて來た人のこと?……そしてその赤ン坊は何處にゐるの? どこかへ里子にでも預けてあるの。」
私はもう、何も彼もさうと自分の心で定めてしまつた。さうすると、胸が無性にもや〳〵して、口が厭な渇きを覺えて堪らない。そして、さう思ひつゝ、寢ながら改めて女の方を見ると、いつもの通り、しつとりした容姿をして、なりも繕はず、不斷着の茶つぽい、だんだらの銘仙の格子縞の袷衣を着て、形のくづれた銀杏返しの鬢のほつれ毛を撫で付けもせず、すぐ傍に坐つてゐる顏の蒼いほど色の白い、華奢な圓味を持つた頤のあたりがおとなしくて、可愛らしい。私は心の中で、
「どんな男が、この私の生命と同じい女に子を生ましたのだらう。何故私の子が生まれなかつたか。そんなことが萬が一にもあるかも知れぬからこそ、一日も早く商賣を廢めさしたかつたのだ。いよ〳〵可けないことになつてしまつた。」
と、そんなことを思つてゐると、女は、
「その子を見せまよか。」といふ。
「うむ、見せてくれ。どこにゐる。男の子か女の子か。」
「女の子どす。ほんなら伴れて來ます。」と、いつて女は立ち上がつた。
何處から伴れて來るだらうと思つて、私は女の背姿を睨むやうに見守つてゐると、彼女は重ね箪笥の上に置いてあつた長い函を取り下ろして、蓋をあけて、その中から大きな京人形を取り出した。
「何あんだ、人を馬鹿にしてゐる。」私はそれで、一杯に詰まつてゐた胸が忽ち下がつたやうに輕くなつて、大きな聲で笑つた。
女もほゝと、柔和な顏をくづして靜かに笑つた。
「えゝお人形さんどつすやろ。」
私は「うゝ。」と、たゞ答へたが、その人形や

塗物の菓子器の彼方にいろ〳〵な男の影が見えるやうな氣がした。
　女はよく二つ並べた簞笥の前に坐つて鍵をがちやがちやいはせてゐたが、
「あんたはんに見てもらひまよか。」といつて、衣裳戸棚の中からいろんな衣類をそこへ取擴げて見せたりした。大島紬の揃つた物やお召や夏の上布の好いものなどを數々持つてゐた。
「大變に持つてゐるぢやないか。それだけあれば澤山だ。」
「それら皆、あんたはんに頂いた物で拵へましたのどす。」母親もゐて、次の間から此方を見ながらさういつてゐたが、さうばかりでもなささうであつた。
「これもあんたはんので……」と、いひながら彼女は一枚々々脇へ取除けてゆくうちに、つい此の間の夜着てゐた金茶の絲の入つた新調らしいお召の袷衣に手がかゝつた時、私が、
「それも？」といつて、訊くと、何故か、彼女も母親もそれには默つてゐた。
「こんなに持つてゐれば安心ぢやないか。」さういふと、母親は、
「まだ〳〵あんたはん、たんと持つてゐましたのどすけど、上京から祇園町へ來るやうになつた時、みんな賣つてしまひましたのどす。人のために災難に罹つて、持つてた物を悉皆取られても足りまへんので、此の子にたうとうこんな處へ出てもらはんならんやうになつてしまひました。」母親の悲しさうな愚癡が又始まつた。
「こつちやへ來てからかて、來た當座にはまだ大分持つてゐましたえ。」
「あんたはん、この子何でも人さんに物を上げるのんが好きどすさかい、今のとこへ來た時、あんなところへ來るやうな人皆な困つた末の人達どすよつて、ひどい人やと、それこそ着たまゝの人がおすさかい、なんでも好きなもんお着やすちうて、持つたもの皆な上げてしまひましたのどす。」
「初めてそこへ來た時わたし、人が恐うおしたえ。」
「それはさうだつたらう。づぶの世間知らずが、何方を向いても性の知れない者ばかりのところへ入つて來たのだから。……それでも體さへ無事でゐればまた先きで好い事もある。」
「ほんまに體一つ殘つてゐるだけどつせ。」彼女はさういつて笑つた。「殘つてるのは、あの古い長火鉢と、あの掛硯だけどす。」
　私は又そこらを見廻した。簞笥の上には、いろんな細々した物を行儀よく並べてゐたが、そこには小さい佛壇もあつた。私はそれに目をつけて、
「あの佛壇は？」
「あれも新しいのどす。お母はん、こつちやへ來る時古い佛壇を賣るのが惜しうて。」女はさういつて又柔和に笑つた。
　私も笑ひながら立ち上つて、その小さな佛壇の扉を開けて中に祭つてあるものをのぞいて見た。一番中央に母子の者の最も悲しい追憶となつてゐる、五六年前に亡くなつた弟の小さい位牌が立つてゐる。そして、その脇には小さい阿彌陀樣が立つてゐられる。私は何氣なく、手を差伸べてそれを取つてみようとすると、その背後に隱したやうに凭たせかけてあつた二枚の寫眞が倒れたので、阿彌陀樣よりもその方を手に取り出してよく見ると、それは、どうやら、女の死んだ父親でも、又愛してゐた弟の面影でもないらしい。一つは立派な洋服姿の見たところ四十恰好の男で、も一枚の方は羽織袴を着けて鼻の下に短い髭を生した三十ぐらゐの男の立姿である。私はそれを手に持つたまゝ、
「おい、これは何うした人？」と、女の着物を疊んでゐる背後から低い聲をかけた。

すると女は、すぐ此方を振顧りながら立つて來て、
「そんなもん見てはいけまへん。」と、むつとしたやうに私の手から其等の寫眞を奪ひとつた。

七

二人の男の寫眞は佛壇の中から發見されたのである。それが、もう現世に居ない人間であることは、ひとりでに分つてゐるのだが、かうして、死んだ後までも彼等が永へに、彼女の胸に懷かしい思出の影像となつて留まつてゐると思へば、やつぱり、私は、捕捉することの出來ないやうな、變な嫉妬を感じずにはゐられなかつた。そして今、何人にも妨げられないで、彼女を自分ひとりの所有にして樂しんでゐる限りなき歡びが、その爲に忽ち索然として、生命にも換へ難い大切な寶がつまらない物のやうな氣持になつた。しかし、また思ひなほすと、彼等は、どのくらゐ女に思はれてゐたか、私よりは深く思はれてゐるか、さうでなかつたか、わからぬにしても寫眞を佛壇に祀られるやうになつたのでは、結局この私よりもあの男達は不幸な人間であつた。さう思ふと、死んだ人間が氣の毒にもなつた。

「そんなに隱さないで、ちよつと見せたつていいぢやないか。それは好きな人の寫眞だらう。どうせ此處へ祀つてあるくらゐだから、死んだ人に相違ない。生きてゐる頃世話になつた人なら、祀つて上げるのが當りまへだ。」さばけた氣持でさう云つて、私は寫眞の面影を偷ほ追ふやうな心持になつたが、女は瞬く間に、數の多い、どこかそこらの箪笥の小抽斗にそれを隱してしまつた。

羽織袴を着けてゐる三十恰好の男はくりくりした二重瞼の、鼻の下の髭を短く刈つてゐたりするのが、あとの四十年配の洋裝の男よりも安つぽく思はれた。そしてそれが、ずつと前から、ちよい／＼私の耳に入つてゐた、女と大分深い關係であつたといふ男のやうに直感させた。ある日本畫の畫家で女と噂の高かつた男が去年の夏頃死んだといふことを聞いてゐたので、それを思ひうかべた。

「和服を着てゐる人間は、何だか活動の辯士のやうぢやないか。」私は幾らか胸苦しい反感をもつてさういふと、

「何でも構ひまへん。あの人達が生きてたら、私、もう疾うにこんな商賣してえしまへん。」

女は向うをむいて、せつせと、取り攤けた着物を疊みながら、こちらの言葉にわざと反抗するやうに、さう云つてゐる。私は、そんな言葉を聽かされると、又、あまり好い心地はしなかつた。そして腹の中で、

「それぢや、四五年も前から、自分ばかりに、身體の始末を付けてもらひたいやうにいつて賴んでゐたのは、みんな嘘であつたかも知れぬ。」

と思つたが、女の厭がるやうなことを、くどく追窮して訊くのは却つて好くないと思つて、默つて置いた。

けれども、もう此間から訊かう／＼と思つて、幾度もいひ出しかけては、差控へてゐた、女の借金が今どうなつてゐるか、又自分が長い間仕送つた金が、その借金を減らす爲に、どういふ具合に有效に使用せられてゐるか否かを明細に訊きたいと思つた。女は、その事を突込んで訊かれるのが、痛い處へ觸られるやうで、なるたけ訊かれずに、そうつとして置きたい風があるのは、今年のまだ正月時分から、その金の使途について、急にやかましく、私から訊ねてよこした再三再四の手紙に對する返事で一向要領を得なかつたので、それがわかつてゐるし、今度京都に來て、先日から、祇園町の茶屋で久し振りに逢つた時にも、それを云ふと、妙に話

を脇へそらすやうにするし、さうかといつて、女のいふまゝに下河原の旅館の方にいつて要領を得た話を訊かうとしても、そこでも成るべくそんな話はいひ出さないやうにして、一寸遁れに遁れて居りたいのが見えてゐた。そして、あの晩たうとう自分を此の二階に伴れて來たのであつたが、かうして、暫くでも女と一緒にゐて、母親にも共々に大事にせられてゐると、長い間自分の望んでゐた願ひが叶つたやうなものであるが、女の身體が今におき、やつぱり、借金の爲に廓に繋がつてゐるのであつては、目前の歡樂はうたかたの如く果敢ない。

「着物がそんなに出來たのも好いことだが、あんたの借金の方は一體どうなつてゐるの？ 着物は、あんたの身が自由になつた後に、ぼつぼつ出來る。それよりも急ぐのは今の商賣を廢して、綺麗に脚を洗ふことぢやないか。」

暫くしてから私はなんどり訊いてみた。すると女も母親も默つてゐたが、私が繰返して、

「ねえ、どうなつてゐるの。」といふので、女は、

「借金はまだ大分あります。」といふ。

「大分ありますて、どのくらゐあるの。」

「さあ、まだ千圓ちかくありますやろ。」

彼女は、わざと陽に反抗の意を表はして、誠意の籠らないやうな口吻で、さういふ。それで私は又勃然となり、

「千圓？」自分の耳を疑ふやうに、重ねて、言葉を強くして訊いた。

けれども女は默りこくつてゐる。

「まだそんなにあるの？」私の聲は、自然に上づつてきた。「そんなにある筈がないぢやないか。私があんたを初めて知つた四五年前にそのくらゐあると云つてゐた。そしてそれだけの物は私から、一度に纏めてではないが確に來てゐる。あれから四五年も稼いでゐて、そのうへそれだけの金も手に入つてゐて、今になつても矢張り四五年前と少しも借金が減つてゐないといふやうなことで、それで、あんた、どうするつもりなの？」――私は、次の間の長火鉢の處にゐる母親にも聞えるやうに、疊み掛けて問ひつめた。

すると女は又棄て鉢のやうに、

「そやからもうあんたはんのお世話になりまへん。私自分で自分の體の解決をつけますよつて、どうぞ心配せんとおいとくれやす。」

私は呆れた顏をして、そんなことをいふ女の顏を暫くぢつと見てゐた。

「もうあんたはんのお世話になりまへんて、それぢやお前、今までどんな氣で私にいろんな事を頼んでゐたの。あんたの體の解決をする爲に、私も出來るだけのことをしたのぢやないか。今になつてそんな事をいつては、何のことはない、まるで私を騙つてゐたやうなものぢやないか。」

さういふと、女は返答に窮したやうに默つて焦れ〳〵しながら、肩で大きな息をしてゐるばかりである。

「ねえ、私の送つて上げた金は一體何に使つたの。……そりや、こんな着類をこしらへるにも入つたらうが、私自身にも欲しい物や買ひたいものが幾らもあるのを、そんな物より何より私は、唯々お前と云ふ者が欲しい爲に、出來ぬ中から私の力に能ふ限りのことをして來たのぢやないか。まとまつてゐないといつても、二百圓三百圓と纏つた金を送つたこともある。それは、あんたも覺えてゐる筈だ。私にとつては血の出るやうなその金を、これと云つて使ひ途のわからぬやうなことに使つて、今になつてもまだそんなに借金がある。……私はかうしてあんたに逢ふのも、何度もいふとほり、去年の一月から丁度一年と半歳ぶりだ。始終この

京都の土地に居付いてゐるわけぢやないから委しいことは知らぬが、あんたが私から貰ふ金をほかの人間に貢いでゐるといふ噂を、ちら〳〵耳にしたこともあつたけれど、私はそれを眞實とは思はないが、どうも、借金が尙ほそんなにある筈はないと思ふ。もつと私の納得するやうに本當のことをいつて聽かしてもらひたい。私が今までお前に盡してゐる眞心がお前に解つてゐるなら、もつと本當のことを打融けて聽かしてくれてもいゝと思ふ。」私は、それでも成るべく女の氣に障らぬやうに、言葉のはし〴〵を注意しながら、さういつた。

すると彼女は、愈々云ふことに詰つたと思はれて、疊んでしまつた着物をそこに積み重ねたまゝ、簞笥の前に凭れかゝつて靜としてゐたが、ヒステリックに、黑い、大きな眼を白眼ばかりのやうに赫と睜いて、

「わたし何も、引いてからあんたはんのところへ行く約束した覺えありまへん。」と、早口にいつた。

そのあまりに凄まじい相好に私は吃驚して、そのまゝやゝ暫く口を噤んでゐたが、

「今になつてそんなことを云つてゐる。」と、言葉を和げていふと、女もすぐ靜かな調子になつて、

「あんたはんが、たゞ自分ひとりでさうお思ひやしたのどすやろ。」

「私が自分ひとりでさう思つた？……あんたの體を解決することを。」

「えゝ、さうどす。」

「私が自分ひとりでさう思つたつて、あんたの方でも依賴したから送る物を送つてゐたのぢやないか。いくら私がお前を好いてゐたつて、そつちでも賴まないものを、どこに、自分の身を詰めてまで仕送る道理がない。」

「そやけど、あんたはん、初めの時分は、私にさうおいひやしたやおへんか。自分はお前を可哀さうや思うて惠んでやるさかい。後になつて私の處にお前が來る氣があつたら來てもえゝ、その氣がなかつたら來てもらはいでもえゝ。……私そのつもりでゐました。」彼女は靜かな調子ですこし人を戲弄ふやうにいふ。

なるほどさう云へば、ぼんやりしてゐるやうでも、女がよく記憶してゐるとほりに、彼女に、ずつと初に金品などを吳れてやつた時分には、そんなことを云つたやうに思ふ。それは、女にどんな深い關係の人間があるかわからない爲の、此方の遠慮であると同時に、又自分の方へ彼女を牽き寄せようとする手もまじつてゐたのであつた。けれども女の方でも後には、そんな考へでのみ此方の扶助を甘んじて受けてゐなかつたことは、長い間の經緯で否應なしに承知してゐる筈であつた。

「うむ、それは、あんたのいふとほり、初はそんなことを云つてゐたことも覺えてゐる。けれどもお前も段々、そんなつもりばかりで私に長い間依賴してゐたのではなかつたらう。」

さういふと、女はそれに何といつて應へたらいゝかと、ちよつと考へてゐるやうであつたが、

「そないに金々て、お金のことをいはんとおいとくれやす。」と、また口を突いていつた。

それで、大分心が平靜に復つてゐた自分は又感情が激してきて、

「金のことをいはんと措いてくれて、私は好んで金のことをいひたくはない。けれども出來ぬ中から無理をして出來る限りの事をして上げたといふのは、そこに、とても一と口では言ひ盡すことのできぬ私の眞心が籠つてゐるからぢやないか。何も金が惜しいのでいふのぢやない。」

女はやつぱり簞笥に凭りかゝりながら、

「それはよう解つてます。……そやからお金をお返ししますいうてます。何ぼお返ししまよ。」
「いや、私は金が返してほしいのぢやない。今お前がいふやうに、私がこれまで爲たことが、よう解つてゐるなら、少しも早くその商賣を止めてもらひたい。」
女はそれに對して確答を與へようとはしないで、
「お金をお返ししさへすりや、あんたはんに、そんなに心配してもらはんかてよろしいやろ。」
私の靜まりかけてゐる心は又しても女の云ひやうで激してくるのであつた。
「お前は、お金をどれだけか私に戻しさへすれば、それで私と今までの事が濟むと思つてゐるのか。」
私は金を返さうと主張する女の心の奥に潜んでゐる何物かを窃乎と疑つてみた それで、さうなれば、どんなに金を山ほど積んでも倍々、金では濟まされないといふことになる。けれども、そんな者が、若しあつては、彼女が私に對してとかく眞實のある返答を避けようとするのもその筈である。可矣、それなら此方にもそのつもりがある。
一私は金が取り戻したいなどとは少しも思つてゐない。けれども、あんたが實意を打ち明けて、私の處に來てくれようといふ心が全く無いものなら、私も有り餘る金ではないから、それで濟ますといふ譯には行かぬ。金でも返してもらふより爲方がない。」
「ほんなら何ぼお返ししまよ。」
女は本當に金を返す氣らしい。
さうなると、やつぱり自分は元々金よりも女の方に飽くまで未練があるので、口の中で云ひ澱んでゐると、女は重ねて、
「なんぼでよろしい。」と、いつて、此方の意向を測りかねたやうに私の顏を見守りながら、
「私もさうたんとのことは出來まへんけど、何ぼくらゐか、云うてみとくれやす。」
女が金で濟まさうとするらしい意向が見えればみえるほど自分は、この女に金錢などには替へられない、自分にとつては何物にも優る、欲しい物品であるのだと思ふと、どんなにしても自分の所有にしたい。
一私は金は返して欲しいとは思はない。けれどもあんたが金を返して私との約束を止めようといふのなら、私は初から上げた金を全部返してもらふ。」
「初からの金て、どのくらゐどす。」
「それは、あんた自分でも知つてゐる筈だ。いつかの手紙にも書いたくらゐはあるだらう。」
すると、女は勃然として、
「わたし、そんなに貰うてえしまへん。」と白々しさうに云ふ。
「いや、たしかにそれくらゐは來てゐるけれども幾度もいふとほり私は金は一文も返してほしくはないのだ。たゞ、あんたが私の處に來てくれぬといふなら、それを皆な戻してもらはねばならぬ。」
すると、女は又棄て鉢のやうになつて、
「もうあんたはんの心はよう解りましたから、ほんなら返します。私も御覽のとほりどすよつて、一度にはよう返しまへんけど追々にお返しします。……おかあはん、これ、あそこへ持つていとくれやす。」と、ぷり〳〵しながら、突然起ち上つて、やけに箪笥の抽斗をあけて、中から唐草模様の五布風呂敷を取り出してそこに積み重ねてゐた衣類をそれに包んだうへに、またがちや〳〵箪笥を引き出して、ほかの品物まで入れ足さうとする。どこかへ持つて往つて直ぐ金を融通しようといふのであらう。
私はすこしも金など欲しいとは思はないので、飛んだ事になつたと、はら〳〵しながら、

眉に皺を寄せて宥めるやうに、

「これ、何をするの。そんなことはしないが可い。さうして折角出來てゐる物をそんなことをしないでもいゝぢやないか。私はお前から金を戻してもらひたくないのだ。」

と、手に差出して女の手を握らんばかりにしていふと、彼女はそれには答へず、

「おかあはん、これ直ぐ持つていとくれやす。」

と、荒々しく風呂敷を包んでゐる。

私は、母親はどんな心持でゐるのかと、そつちを振顧つてみると、母親は次の間の火鉢の傍で人の好ささうな顔をして、微笑しながら娘のすることを默つて遠くから見てゐるばかりである。そして、女が幾度も急き立てるやうに、

「持つていとくれやす。さあ今すぐ持つてとくれやす。」といふのを、母親は「えゝ〳〵。」とばかりいつて、起たうとはしない。

私は母親の火鉢の前に立つていつて、

「おかあはん、どうぞ持つていかないやうにして下さい。」

といふと、母親はうなづきながら、

「えゝ、心配せんと置いとくれやす。又あとであの娘にようい(ひ)ますよつて。」と、事もなげに笑つてゐる。

彼女はまるで母親と私と二人に向つてだだを捏ねるやうに、なほ暫くの間、

「はやう持つて往とくれやす。」と、幾度も母親を催促してゐた。

女の機嫌を傷けてしまつたので、どうか、そんな衣類の入つた大風呂敷などを外に持ち出すやうな淺間しいことをしてくれなければよい、此處へ初めて來た夜彼女がいつたやうに、長いことあんたはんにもお世話かけましたお蔭で、私もちよつと樂になつたとこどす。といふのが本當ならば、折角いくらか幸福になりかけてゐる彼女の境遇を、そんなことをして、又情けない思ひをさせたくない。それにしても、自分から少しに樂になつたといつてゐるのだから、もう借金もさう多くある筈がない。何故この女は私に眞實の心を明かさないのであらうか。

それで、私は暫くそこにゐない方が女の焦立つた氣分を和げるによからうと思つて、重ねて、母親に風呂敷包などを持ち出さぬやうにいひ置いて、そのまゝ外に出ていき、東山の方をぶらりと一とまはりして歸つて來た。

八

唐草模樣の五布の風呂敷はそのまゝ箪笥の上に載せてその後三四日は目についてゐたが、私の知らぬ間に、外に持ち出したのか、それとも中の物を又箪笥に藏つたのか、やがていつもの處に見えなくなつた。そして、それに懲りて私は、彼女の體の解決の事については、幾ら心に思つてゐても口には出さなくしてゐた。母子の間ではどんな話をしてゐたか知れぬが、女の氣持もすぐ又もとのとほりになつた。それのみならず、そのことがあつた夜、母親が遠く外に出ていつて歸らなかつたので、風呂敷包を持ち出したのかと思つて氣を付けると、それは無事にあるので、さうでもないと思つて安心してゐた。すると、その翌日母親は、娘がちよつと主人の處へ歸つてくるといつて、出ていつて留守になつてゐる間に、

「昨日はえらい、お氣の毒どした。」と、次の間の長火鉢の處から聲をかけた。私は、

「お氣の毒て、何のことです。」と、そちらを振向くと、母親は、微笑しながら、

「あの娘があんな我儘いうて、あんたはんにえらい濟まんことどした。」

「なに、そんなことはちつとも心配いりません。機嫌さへ直ればいゝです。」

母親はそれでも腹から憂はしげな顔をして、

「わたし、もう心配で。あの娘が、あのとほりあんまり我儘いうて、あんたはんに後で愛想盡かされるやうなことがありやしまへんか思うて、心配でならんどすさかい、昨夜あとであちらの主人のところへ相談に往て來ましたのどす。そしたら、あちらの姐さんのおいひやすには、お母はん、なんもそないに心配することはない、そんなことというて、あんたはんに甘えるんやさかい、構はんと置きやすいうてくりやはりましたけど、私はそれが心配になつて、ゆうべも、よう寝られしまへんのどす。ほて、お母はん一遍本人を越しやす、私からよう云うて聽かすさかい、いうておくれやすので、それで今日あの子もちよつと屋形へいとります。又姐さんから、あんじやう云うて聽かしとくれやすやろ思うてます。」

私は、母親が正直さうにさういつて心配してゐるのを聽くと、一入打解けた好い氣持になつて、

「どうぞ、そんなに心配しないで下さい。だだを捏ねてゐるのはよく解つてゐるんです。」

といつて、自分も一緒に笑つてゐたが、そのついでに前日女に向つて訊いたやうなことを重ねて母親に話しかけてみたけれど、

「さあ、どないなつてゐますことどすか、私はかうしてあの娘に養うてもらうてる身どすさかい、何も彼もあの娘がひとりで承知してるのどすよつて、あんたはんから、又機をお見やしてよういうて聽かしとくれやす。」といつて、彼女自身では、娘の體のことについての金錢の出入のことなど委しく知らぬやうな口振であつたが、

「屋形の主人さんもあんたはんの事を昨夜もさういうてはりました。おかあさん、その方大事にしてお上げやす。自分で來ずと、金だけ長い間送つて越すといふのは餘程量見が廣うないと出來んことやさかい。そない云うてはりました。」

母親はさういつて、私を喜ばすやうなことをいつてゐた。私もそのとほりに聽いてゐた。

今日はついでに花にでも行くのかと思つてゐたら、女はその晩屋形から早く戻つてきたが、昨日から何となく沈んで眉根を顰めたやうにしてゐたのが、歸つてくると、遽に打つて變つたやうに好い氣分になつてゐた。

私も、二人が大事にしてくれるからといつて、餘り好い氣になつて、何時までも其處にゐては外聞もあるし、母子の者が迷惑するであらうとは思ひながらも、居心が好いので、すつかり心が落着いてゐた。女も打融けて、よく、私が凭つてゐる机の傍に來て坐つて、自分もそこで樂書きなどをしたりしてよく話してゐた。そして、そこが居心地の好いことを私が又しては繰返していふと、

「そんなによかつたら、こゝをあんたはんのまあにしときまへうか。」

「まあとは。‥‥あゝ間か、あゝどうぞ居間にして置いてもらひたい。」

などといつてゐたが、日は瞬く間に經つて、そこに來てから半月ばかりして、私は六月の中旬暫く山陰道の方の旅行をしてゐた。けれど、梅雨の頃の田舍は悒鬱しくつて、とても長くは辛抱してをられないので、京都の女のゐる二階座敷の八疊の間が、廣い世界にそこくらゐ住み好い處はないやうな氣がするので、いづれ夏には紀州の方の山の上に行くつもりではあるが、一週間ばかりして、又其處へ舞ひ戻つて來た。

その日は鬱陶しい五月雨の濕々と降りしぶいてゐる日であつた。ステーションから直ぐ俥で女の家に歸つて來て、薄暗い入口をはひつて、玄關から音なふと、階下の家主の老女はもとよ

り、上も下も家中みんな留守と思はれるほど閑そりとしてゐる。それでも默つて上がつて行くのは厚皮しいやうで、二三度大きな聲を掛けると、やがて階段を下りて來る足音がして、外から開かぬやうに、ぴたりと閉めた奥の潛戸の彼方で、

「どなたはんどす。」といふ、母親の聲がする。

「私、わたしです。」といふと、潛戸をそつと半分ほど開けながら母親が胡散さうに外を覗くやうにして顔を出した。そして、その瞬間、先達て中の待遇から推して期待してゐたやうな、あまり好い顔をして見せなかつた。

「私です。今歸りました。」といふと、

「あゝ、あんたはんどすか。」といつたが、「さあお上がりやす。」といふかと思つてゐると、「一寸待つてくれやす。今ちよつとお客さんどすよつて。」

といつて、丁度留守で居ない階下の家主の老婆の表の六疊の座敷に案内して、「どうぞ一寸こゝでお待ちやしてとくれやす。」といつて、私をそこに置いといて、間の襖をぴしやりと閉めて、自分は二階に上がつて行つた。

すると、暫く待つ間もなく母親と入れちがひに女がそこへ入つて來て、笑顔を作りながら、

「おかへりやす。」と懐かしさうにいつて、私の膝の前に近く寄つてぺつたり坐つた。そして二言三語口をきゝ交はしてゐるうちに、客といふのが襖の外の茶の間を通つて、中庭から歸つてゆくと思はれて、母親も後から入口まで送つて出たらしい。私は、何の氣もなく、どんな人間が歸つてゆくのかと思つて、一寸起ち上がつて縁側の障子を開いて、小さい前栽と玄關口の方の庭とを仕切つた板塀の上越しに人の歸るのを見ると、蝙蝠傘を翳して新しい麥藁帽子を冠り、薄い鼠色のセルの夏外套を着た後姿が、肩から頭の方の一部分だけ僅かに見えたばかりで、どんな人間かよく分らなかつた。

そこへ母親も入つて來て、

「お歸りやす。」と、今度はいつかのとほりに愛想のよい調子で、更めて挨拶をしながら、「今一寸知つた呉服屋さんが來てましたので、あんたはん又顔がさすと惡い思うて、ちよつと此處で待つてもらひましたんどす。……階下のお婆さんも今日は出やはりましてお留守どす。さあ、どうぞ二階にお上がりやして。」

と、母親は、先刻私が入つて來た時、潛戸の中から覗いた時の樣子とは、まるで違つた調子でいふ。

私は、たゞ何といふこともなく、先刻のその顔色が氣になりながら、

「へえ、有難う。上がります。　何もこんな雨の降る日に戻つて來なくとも好いのですけれど……」といひかけると、母親は、妙に感疑つたか、

「あんたはんのお留守の間に誰か來てゐる思ひやして？」と、笑顔しながら云ふ。

「いや、そんな事はちつとも思つてやしませんけれど、こんな雨の降る日に戻らなくつても可いのですけれど、田舍は何としても蚊がゐる、蠅がゐる、とても辛抱出來ませんから……」

母親とさうして口を利き交はしてゐると、娘はそれきり默つてしまつた。それから私は二階の八疊に上がつて來て母親が今云つたことから妙に氣がさしたので、それとなく注意してよく見ると座敷の中央に今まで人の坐つてゐた夏座蒲團が、女もそこにゐたらしく二つ火鉢の傍に出てゐて、火鉢の中には敷島の吸殼が澤山灰の中に插してあつた。私は腹の中で、たゞ呉服物の用ばかりで來てゐた客かどうかと自然に疑つてみる氣になつた。が、勿論そんなことを口には出さなかつた。

そして、又こゝへ舞ひ戻つて來て暫く厄介を

掛けることのさぞ迷惑であらうといふことを繰返して詫びて、女には、私には少しも構はず、主人の思惑もあるから店に歸つて勤めの方を大事にするやうにいつた。

　私が田舍に往つたあとは、私のゐる間いろいろ氣を使つたために疲れ鹽梅で、あれからずつと休んでゐたので、

「今日久し振りに店へかへります。ほんなら一寸いてきます。」

といつて、出て往つたが、女は、その晩からかけて翌日の晩も戻つて來なかつた。それから半月ばかりして、私が山の方に出立するまで彼女は多くは主人の方にいつてゐたが、立つ前には又二三日休んで、私の爲に別れを惜んでくれたのであつた。

九

　あれほど母子二人して歡待して置きながら、今度居處を變つたのに、何故知らしてくれないであらうと、少なからず淋しい氣持になつて、せめてこの鬱いだ心を慰めるには、明るく溫い感じのする、行きとゞいた旅館に往つて泊るのが何よりよいと思つて、その家へ投宿した。すると丁度古い馴染の、氣の利いた女中が出て來て、氣持よく世話をしてくれた。私は先刻ステーションに着いてから鬱陶しい空模樣と同じやうに殆ど泣き出したいばかりに悲しくなつてゐたのが、やつと、その爲にいくらか心をまぎらすことができた。そして心地の好い風呂に入つて柔かい蒲團の中に横はつて、都會的情趣に浸りながら早くから寢に就いた。七月の初から殆ど三ケ月に近い、高い山の上の枯淡な僧房生活の、心と體との飢渇から、すつかり蘇生したやうな氣持になつた。外では夜に入るとともに豪雨にひどい嵐が吹き添つて來たと思はれて徹宵荒れ狂うてゐたが、私はそれとは反對に却つて安らかに眠に陷ちた。

　翌日は午前はまだ暴風雨の名殘りがつゞいてゐたが、午過ぎから風も次第に歇み、雨も晴れた。女のことは始終念頭にあつたけれど、實は餘りにそのことばかり長い間思ひ續けて、思ひに疲れてゐるので、偶にはほかのことで氣を晴したく、その頃丁度東都から京都に來てゐた知人の處を訪ねたりしてその日は一日消した。

　その翌日は、昨日の暴風雨の名殘りは痕跡もなく綺麗に拭ひ取つたやうな朗かな晴天になつた。紺碧の空は高く澄み渡つて、一昨日の豪雨に洗ひ清められた田園の景色が、暑くも寒くもない初秋の太陽の光を一杯浴びてゐるのが、平常でさへ美しいその街の眺めを、今日は恰も玻璃の中の物を窺いて見てゐるやうに明麗であつた。

　今日は一つ女の先に居た家の樣子を見て來よう。——無論女からの手紙を信じてもう其處にはゐないものと思つてゐたから——と思つて、私は午少し前に衣服を更めて、旅館からは直ぐ近い處に在る、電車通りを向うに渡つた横町にある路次の中に入つて往うてみた。すると、その日は好い鹽梅に階下の家主の老婆が内にゐたので、私は玄關の上り框に腰を掛けながら、老婆と久し振りの挨拶を交はして、暫く話してゐた。すると、そこへ女の母親が、寺詣りでもするらしい巾着をさげて入つて來た。

「あゝ、おかあはんお久しう。私、一昨日の晩紀州から歸つて來ました。この頃はもう此處にゐないんですつて。」

　といつて、訊くと、母親もそこに腰を掛けながら、もう先月の末から其處の所帶を疊んでしまつて、自分は上京の方の親類の家に厄介になつてゐるやうなことを云つてゐた。私は、そこでも、そんな親類の家に厄介になつてゐるより

も、何とかして私が自分で適當な家を一軒借りて京都に住みたいから、そしたら、おかあはんに、そこへ來てもらひたいといふやうな意向を洩すと、家主の老婆も傍から、

「さうおしやしたら、ほん宜しいがな。」といづて、口を添へてゐたが、母親はいつも愛想よくにこ／＼とはしてゐたが、

「そのこともあの娘がどない云ひますか、あの娘の腹一つにきまることどすさかい。」と、いつて、毎時のとほりに何も彼も自分では要領を得た返事をしなかつた。

それでも私は、一昨日雨模様の鬱陶しい晩方に此の街にかへつて來て、こゝの路次を覗いて見た時とちがひ、もう此處にはゐないと思つてゐた母親に偶然また會つたので、さながら彼女に會つたと同じやうな喜びを感じたのであつた。

「今日は死んだ息子の命日どすよつて、ちよつとお墓詣りに來たついでにこゝのお婆さんとこへもお寄りしましたのどす。」といつてゐる。

「さうですか、今日はちやうどお寺詣りに好い彼岸びよりだ。私も一緒にまゐつてもいゝな。」と、私はひとりごとのやうにいつたが、母親には又會つて話す機會もあるだらうと思つて、その時はそのまゝ家主の老婦人の處を出て戻つた。

そして、女に會はうと思へば、どこかへ行つて知らしさへすれば會へるのだが、こちらの心はそれではないので、それから一二度女を電話口まで呼び出して話したことがあつた。紀州の方の山から歸つてきた、この間おかあはんにも先の家でちよつと遭つた、此處へ來てもらひたい、來ないか、と云つたけれど、そのうち都合して行きますと云つたきり、向うから電話を掛けてくれるやうなこともなく、毎時こちらの云ふことを柳に風のやうに受け流してゐるやうであつた。後には、帳場に近い處で、女中や番頭などの耳に入るのが厭で、外の自動電話にいつて呼び出したりしたこともあつたが、いつも返事は同じことで、少しも要領を得なかつた。何だか、池の水の中に泳いでゐる美しい金魚か何ぞのやうに、餘り遠くへ逃げもせず、すぐにも手に捕まりさうで、さて容易に捉まらないといふやうな心地のするのがその女であつた。

どちらにしても纏つた金を幾らか調へてからでなければ、たとひ會つてみたところで、今までのとほりであると思つて、格別會はうともせず、たゞ、籠の中に飼はれてゐる鳥のやうに、番をしてゐないからとて、滅多に、居なくなることもあるまいと、常に心には懸りながら、強ひて安心して、せめて同じ土地の、しかも女のゐる處とは目と鼻との近い處にゐるといふので滿足してゐた。そして、夏の前居た、女の家の路次の中が何となく戀しくつて、宿からは近い處ではあるしするので、時々階下の深切さうな老婦人の許を訪ねて往つて、玄關先きで話して歸ることがあつた。家主の老婦人は、

「あれから姉さんにお會ひしまへんのどすか。」

といつて訊いてくれるのであつた。

「えゝ、まだ逢ひません。」といふと、

「さうどすか。」と、老婦人は呆れるやうにいつて、「何であんたはんに會はんのどつしやろなあ。こゝで、私の處で一寸お會ひやしたら宜しがな。」と、同情するやうにいつてくれるので、私は、その老婦人には、夏の前その二階がりの女の處に一ケ月あまり居る時分にも話したことのなかつた、女との長い間の入譯を打明けて愚痴まじりに聽いてもらふこともあつた。

母親にもその後又そこで一二度出會つたことがあつた。彼女は、一寸そこまで來たついでに立寄つたといふやうな樣子であつた。私は母子の言葉を信じて、無論もうその二階には八月以來

ゐないのだが、娘の奉公してゐる處がそこから近いので、そんなにして、すぐ隣家へでも行くやうにして會ひに來た足ついでに、以前厄介になつてゐた此の老婦人の處へも立寄るのだと思つてゐた。

「あんたはんの此の間おいひやしたこと、あの娘に話してみましたら、あの娘のいふのには、あんたはんが又上京の方へおいでやしたら、一遍話しに寄せてもらひます云うてゐました。」母親は、私が家を持つから、そこへ來てもらひたいといふ話を、顏を見るたびに云ふと、そんな返事をしてゐた。

その間に月が變つて十月になり、長い間降りつゞいた秋霖が霽れると、古都の風物は日に日に色を增して美しく寂びてゆくのが冴かに眼に見えた。それとともに、街の灯の色は夜毎夜毎に明麗になつてきて、まして瀟洒とした廓町の宵などを歩いてゐると、暑くも寒くもない快適な夜氣の肌觸りは、そゞろに人の心を唆つて、ちやうど近松の中の、戀と小袖は一模樣、身に引締めて抱いて寢ねてこそなつかしいといふことが思はれて、どうかして一と目なりとも彼女の姿が見たいと思つて、私は折々女の勤めてゐる家の前を、宵暗にまぎれてそつと通つてみることもあつたが、一度も途中で出會はなかつた。

その内にも秋は次第に闌けて旅寢の夜の衾を洩れる風が冷たく身にしむやうになつてくるに伴れて、いつになつたら、果てしの着くとも思はれない愛欲の滿たされない物足りなさに、私はちやうど移りゆく四圍の自然と同じやうに沈んだ心持に胸を鎖されてゐた。さうして一と月ばかり詰らない日を過してゐるうちに高い山に圍まれた京都の周圍には冬の襲うてくるのも早かつた。旅館の二階の緣側に立つて遠くの西山の方を眺めると、つい此間まで麗かに秋の光の輝いてゐたそちらの方の空には、もういつしか、わびしい時雨雲が古綿を千切つたやうに夕陽を浴びてぢつと懸つてゐる。陰氣な冬はそこから湧いてくるのである。この四五年來その事のみを思ひつゞけて、ほと〲思ひ疲れてしまつた私は、どうかして女のことをなるべく思ふまいとして、いくら搔き消すやうにしても綿々として思ひ重なつてくる女のことを胸から追ひ拂ふやうにして、洛中洛外をさまよひ歩いて、時としては人氣のない古い寺院などに入つていつて、疲れ爛れた腦を休めるやうにしてゐた。

十

十月の末から私はまた一と月ばかり中國の方の田舍に歸つてゐた。心に浮かぬことがあるので田舍は少しも面白いこともなかつたが――尤も面白からうと思つて往つたのではなかつたけれど――ことに、この年は初めて惡性の世界的流行感冒が流行つた秋のことで、自分もその風邪に罹つたが、幸ひにして四五日の輕い風邪で濟んだ。けれども、その年はそんな惡性の風邪が流行するほどあつて、例年ならば美しい小春日の續く頃に、每日じめ〲とした冷たい雨ばかり降りつゞいてゐたので、私は、京の女のことが每日氣に懸りながらも、暫く故鄕の生まれた家に滯留してゐた。田舍でも四圍の山々が日々に紅に色づいて、そして散り落ちていつた。私は何となく、氣忙しくなつた。その年の五月から六月にかけて、女の家に居て以來、もう何處へ往つても彼女の傍にゐるくらゐ好い處はなかつた。彼女と一緒にゐる處のほかは自分の滿足して住むべき世界はないやうな氣がするのであつた。

私は冷たい冬雨の降りそぼつ中をも厭はず、又田舍から京都に出て來た。そして今度は先に

ゐた旅館には行かず、ずつと上京の方の、氣の張らない、以前から馴染のある家に往つて滯泊することにした。そこは、先の下河原の方の意氣な都雅な家とは打つて變り、堅氣一方の、陰氣な宿で、さうなくてさへヒポコンドリイのやうに常に氣の鬱いでゐる自分の症狀に對しては倍々好くないと思つたけれど、先達て田舍に往く前に一寸女と自動電話で話した時にも、「上京の方の氣の張らん宿にお變りやしたら、私一ぺん寄せてもらひます。」
と、女が云つてゐたので、女を宿に訪ねて來さしたいばつかりに、そこへ宿を定めたのであつた。欲しい女が思ふやうに自分の所有にならぬためにそんなに氣が鬱いでゐるせゐか、その頃私は一寸したことにも直ぐ感傷的になり易くなつてゐた。田舍から出て來て宿に着いたその晩も、さうして京都に出て來てみると、暫く滯留してゐた田舍の事などが、胸に喰ひ入るやうに哀れに感じられたりして、私は、どうすることも出來ないやうな漂泊の悲哀と寂寞とに包まれながら、やうやくの事でその宿で第一の夜を明かしたのであつた。

そして明けても暮れても女の事ばかり一途に思ひ詰めてゐると氣が苦しくなつて爲方がないので、かねてから此の秋に、見頃の時分をはづさず高雄の紅葉を見に往きたいと思つてゐると、幸ひ翌日はめづらしい朗らかな晩秋の好晴であつたので、宿にそれといひ置いて、午少し前からそつちへ遊山に出掛けていつた。時は十一月の二十四日であつた。電車のきく北野の終點まで行つて、そこから俥で洛西の郊外の方に出ると、そこらの別莊づくりの庭に立つてゐる楓葉が美しい秋の日を浴びて眞紅に燃えてゐるのなどが目に付いた。それから仁和寺の前を通つて、古い若狹街道に沿うてさき／＼に斷續する村里を通り過ぎて次第に深い溪に入つてゆくと、景色はいろ／＼に變つて、高雄の紅葉は少し盛りを過ぎてゐたが、見物の群衆は、京から三里も離れた山の中でも雜沓してゐた。私は、高い石磴を登つて淸洒な神護寺の境内に上つて行き、そこの掛け茶屋に入つて食事をしたりして暫く休息してゐたが、碧く晴れた空には寒く澄んだ風が吹きわたつて、茶褐色のうら枯れた木々の落葉がちやうど小鳥の翔るやうに高い峰と峰との峡を舞ひ上がつてゆく。愛宕の山蔭に短い秋の日は次第にかげつて、そこらの茶見世から茶見世の前を、破れ三味線を彈きながら、哀れな聲を絞つて流行唄を歌ひ、物を乞うて歩く盲ひた婦の音調が悲しく腸を斷たしめる。侘しい心には何處に行つても明るく樂しい處がなかつた。

十一

田舍へ往つてからも二三度手紙を出して、今、惡い風邪が流行つてゐるが、變りはないかと訊ねて遣したりしたが無論何とも云つて來なかつた。京都に出てくると、その晩すぐ手紙を出して、今度はかういふ處にゐるから、一度訪ねて來てもらひたいと云つてやつたけれど、例のとほりに何ともいつて來なかつた。そして、今度の宿は、先の處とちがひ氣の張らないだけに、土地柄からいつても、何からいつても陰氣で、氣が晴れ／＼としないので私は部屋の中に凝乎としてゐるのが居堪らなくつて、高雄の紅葉を見にいつた翌晩祇園町の方に出て往き、夜にまぎれて女の勤めてゐる家の前をそうつと通つてみた。

すると、不思議ではないか。入口の格子戸の上の處に、家に置いてゐる妓の名札が濃い文字で掲げてあるのに、しかもその女の札は、もう七八年もそこに住み古してゐるので、七八人も竝んで札の掛つてゐる一番筆頭であるのに、何

故か、そこの處だけ、丁度齒の脱けたやうになつてゐるではないか。察するところ、札を外してからまだ幾日も日が經ぬのでまだ名札をはづすだけはづして後を揃へず、そのまゝにしてゐるのらしい。私は寒い夜風の中に釘付けにされたやうな氣持で、そこへ突立つたまゝ、「はて、不思議だ。どうしたのだらう？」と、思つた。彼女を知つてから五年の長い間、不安に思ふ段になれば、隨分不安な譯であつた。日夜數知れぬ多くの人に名を呼ばれてゐる境涯の身であれば、商賣を廢めるからとて、一々馴染の客に斷つて往くわけのものでもない。けれども自分は、初めから度胸を据ゑて、女は私に默つて、そこから姿を消して往かないと信じてゐた。百に一つ、そんな場合がありはせぬだらうかと、遠く離れてゐて、ふと不安に襲はれることがあつても、何となく、そんなことは滅多になささうに思はれたのであつた。しかるに、今、まぎれる方もなく、明かに彼女の名札が取れてゐるのを見ると、近いうち此處にゐなくなつたに相違ない。籠に飼はれた小鳥と同じく容易に逃げて居なくなる氣づかひはないと思つてゐたのは、もとより此方の不覺であつた。そんなことがありはせぬか、せぬかと不安に思ひながら、今まで無かつたから、あるまいと思つてゐたら、たうとう籠の鳥は、いつの間にか逃げてしまつた。

私は、そこに棒立ちになつたまゝ、幾度か自分の眼を疑つて、札の取れてゐるのが、どうぞ惡い夢であれかしと念じたが、たしかに札は取れてゐる。餘程思ひ切つて、そのまゝその家へ入つて行つて訊ねてみようかと思つた。彼女に自分といふ者が付いてゐるのは、此處の家でもよく知つてゐる筈である。構ひはしないだらうと思つたが、自分は、彼女と關係の出來た最初から、何處までも蔭の者になつて、そつと自分の所有にしてしまふつもりであつたので、今更、女がゐなくなつたといつて、そこの家へ訪ねて往き、自分のほかに、もつと深いふかい男があつて、その男に落籍されたのに、此方が、男は自分ひとりのやうな顏をしてゐて、裏にうらのある、そんな稼業の者の眞唯中に飛んだ恥を曝らすやうなことがあつてはならぬ。自分は、彼女をこそ、生命から二番めに愛してゐたけれど、それとともに自分の外聞をも遠慮しなければならぬ。

と、焦燥く胸をぢつと抑へながら急いで、そこの小路を表の通りに出てきて、そこから近い、とある自動電話の中に入つて、そこの家の番號を呼び出して訊ねてみた。いつも、その女の本姓をいつて電話をかけたので、電話口へ出た婢らしい女に、こちらの名をいはず、それとなく、

「もし〳〵、あなたは松井さんですか。藤村さんはお出でですか。」といつてきくと、いつでも、その松井の家の定つた返事の通りに、婢は、

「藤村さんは今留守どす。」といふ。

これまでとても、彼女が家にゐてさへ一應はそんな返事をするのが常なのであつたが、札が取れてゐるのでは、留守であることは問はずとも知れてゐる。それでも、女がその家にゐる時分と同じやうに、いつもの「留守どす。」で、返事を濟ませてゐる。勿論此方が誰であるか、知つてゐる筈もないのだが、もし知れてゐたならば、一層不愛想な返事をしたかも知れぬ。私は、ひたすら紙よりも薄い人情の冷たさを、夜の冷氣とともに身に沁みて感じながら、重ねて委しいことを訊かうとする氣力も抜けてしまひ、胸の中が空洞になつたやうな心持で、足の踏み度も覺えず、そのまゝ爽然として電車に乗り、上京の方の宿に戻つてきた。とてもその夢で取

つて返し、その家に訪ねていつて、名札の取れて、もう居なくなつてしまつた事情を訊ねてみる力は失くなつてしまつたのである。そして足掛け五年の間眞實死ぬほど思ひ詰めた擧句が、こんなことになつてしまつたと思ふと、何より自分といふ者が可哀さうになつて來て、冬の夜の寒い電車の中にぢつと腰を掛けてゐてさへ、ひとりでに悲しい涙が流れ出た。

名札が取れて女が居なくなつたにしても、もとより何處を當てに訊ねる譯にも行かず、況してそれが他の男に落籍されてしまつたのであるとすれば、今頃は、こちらの事を——もし知つてゐるとすれば——「阿呆め。」とでもいつて、好い心持になつてゐるであらう。それを思ひこれをおもひ、此の冬の寒い夜風の中を氣狂ひになつて飛びまはつても爲方がない。今夜はこのまゝ宿に歸り、哀れな自分を劬りながら、どうか凝乎と寝ながら熟く考へよう。

さう思つて、宿にかへり、自分の部屋に通つて、火鉢の傍に一旦坐つて、心を落着けようとしてみたが、とても、もつと委しい事情を訊き糺さねばそのまゝに寝られるどころではない。それで、その宿には電話がないので、いつも借り付けになつてゐる、近處の家まで出ていつて、又彼女のゐた祇園町の家へ電話を掛けてみた。

すると、初はやつぱり先刻と同じことをいつてゐたが、こちらの名を明かして、實は、先刻そちらの前を通りかゝつて、ふと見ると、藤村の名札が取れてゐるのを見てはじめて氣がついたのであるといつて、

「留守ぢやない、もうあんたの家にはゐないんだらう。」と訊ねると向うの嬶衆は、

「ほんなら一寸待つてくれやす。」といつて、暫くして今度は變つた、すこし年をとつた女の聲で、

「藤村さんは、もう内にゐやはりやしまへんのどつせ。」といふ。

「どうしてゐなくなつたの。だれかお客さんに引かされたの？」

「さあ、わたし、そんな事、どや、よう知りまへんけど、病氣でもう疾うに引かはりました。」

「そして、病氣で癈めて、藤村さんのおかあはんが連れて去つたの？」

「ちがひます。小父さんが來て連れていかはりました。」

小父さんが來て連れて往つた。どんな小父さんか知れたものぢやないと思つたが、それ以上、電話でそんな嬶衆などに訊いても委しいことの知られよっわけもなく、又眞實の事をいつて明かす筈もないと思つて、私はそれで電話を切つてしまつた。そして、假に誰にしても……[illegible]にちがひないゝ思ふが……病氣で癈めたといふだけのことに、せめて幾らか慰みの綱が繋がつてゐるやうな氣がして、それだけに心に少し勢ひが付いて、宿にとつて返し、夜の寒さに風邪を恐れながら、思ひ切つて厚着になり、又祇園町へと出掛けていつた。今から二た月前の九月の末、紀州の方の旅から京都に歸つて來て、久し振りに會つたばかりの、多年東京で懇意にしてゐた知人がつい二十日ばかり前、自分も田舍に往つて流行風邪で臥せつてゐる時に流行感冒で敢なく死んだといふことが強く胸に刻み付けられてゐるので、不幸なる自分が又風邪にでも罹つて、このまゝ死にでもしたら、どんなに悲惨であらう、そんなことがあつたら執念が殘つてとても死にきれはせぬ。

そんなことまで考へながら又祇園町まで出て來ると、十一月末の夜は闌けてゐても、廓の居まはりはさすがにまだ宵の口のやうに明るくて、多勢の抱へを置いてゐるうへに、お茶屋を兼ねてゐる松井の内では今が丁度潮時のやうな

いそがしさである。
　小父さんといつても、何だか分りはせぬ。ほかの男に引かされたものを、よく恥し氣もなく、商賣してゐた女の廢めた後を探ねて來る阿呆な男と笑はれはせぬかといふ氣が先きに立つて、心が後れるのを、そんなことを恥しいと思つて、引込み思案でゐては、倍々自分の身一つを苦しめるばかりであると思ひ直して、勇氣をつけ、松井の入口に立つて、その夏の初、女の家にゐた頃ちよつと顔を見て、言葉を交はしたことのあるお繁さんといふ婆さんにお目にかゝりたいと、そこに出て來た婢衆に取次ぎを頼むと、お繁婆さんは、すぐ奥から出て來た。
　それはもう五十を少し過ぎた女であつたが、何でも聞くところによると、もと此家の女あるじと同じく今から二三十年前にやつぱり祇園町で商賣に出てゐたことのある女で、松井の主人お運の好いのに反して、この方は運が悪かつた。そして以前朋輩であつた人間の内へ女中頭のやうな相談對手のやうにして住込んでゐるのであつた。松井の女あるじの今猶ほ一見、二三十年前此の土地で全盛を謳はれたことを偲ばしめるに反して、お繁婆さんの方は標致もわるく、見るから花車婆さんのやうな顔をしてゐた。それでも話してみると、譯は割合によく解る方で、お繁さんは笑顔で、
「おこしやす。えらいお久し振りどす。」と、いつて、打ち融けて挨拶をして、
「えらい端の方でお氣の毒さんどすが、今ちよつと奥が取り込んでゐますよつて、こゝで失禮いたします。」と、いつて、婢衆に座蒲團を持つて來さして、私にすゝめる。
「えゝ、もう、どうぞ構はないで下さい。」と、私は小さくなつて、そこの玄關の二疊の間に差向つて坐つた。
　そこで、先刻電話で聞いた女の事を改めて問ひ糺すと、お繁さんは、率直な調子で、
―お園さんはもう半月ばかり前にひどい病氣になりまして、それで引きました。」
―はあ、ひどい病氣で……―私は、さういつて、すぐ心の中ではあの纖細い彼女の美しく病み疲れた容姿を思ひ描きながら、
「この土地に長くゐると、そんな事になるだらうと思つてゐたのだ。だから……」と、ひとり言のやうにいつて、もう、私の眼には涙がにじんで來た。
「そして、ひどい病氣とはどんな病氣でした？」
靜かに訊いた。私は、彼女の體質や容姿から想像すると、多分肺でも悪くなつたのではあるまいかと思つた。そして、もしさうであつたならば、一層可憐で堪らないやうな氣がしてくるのであつた。
　するとお繁さんは默つて意味ありげに笑ひながら、私の顔を見るだけで、その病氣が何であるかと云はうとしない。それで、これは眞實は病氣ではない。病氣といふのは僞で、やつぱり旦那にでも引かされて、今頃はどこか其處らに好い氣持で納まつてゐるのだなと感疑りながら、こちらも、つとめて心を取り亂さぬやうにわざと平氣に笑ひにまぎらして、
「譃でせう、病氣といふのは。」重ねて訊くと、
「いえ、病氣はほんまどす。」といつて、まだ笑つて眞相を語らうとせぬ。
「どんな病氣です？」私は、今度は、商賣柄恥しいひどい病氣でもあるのかとも思つた。
　すると、お繁婆さんはやつぱり笑ひながら、
―お園さん、氣狂ひになつたのどす。」と率直にいふ。
「へえ、氣狂ひになつた！」私は、暫く呆然として對手の顔をぢつと見詰めてゐた。
「一體どうして、そんなことになつたのです。」
　お繁婆さんが話して聽かすところによると、

先月の末か今月の初頃、彼女も、瞬く間に流行してきた流行感冒に襲はれて一時は三十九度から四十度近い發熱で心配するほどであつたが、熱は間もなく下がり、風邪も一週間くらゐで癒るにはなほつたが、すつかり熱が除れて、やうやう起き上がることが出來るやうになつた時分に、ふつと間違つたことを口に言ひ出した。初は皆なも、平常から、あんな溫順しいに似ず、どうかすると、よく輕い戲談などを云つたりすることもあるので、

「お園さん、何いうてはるのや。」と、笑つて、いつもの戲談かと思つてゐると、本人は飽くまでも眞顔でゐるので、これは、どうも毎時とは少し樣子が違つて變だなと思つてゐると、彼女は段々妙な違つたことをいふやうになつた。そして眼付がおそろしく据つたやうになつて、さうなくてさへ、平常から陰鬱になりがちの顏が、一層恐い顏になつた。家にゐる他の妓達は又それを面白がつて、對手になつて戲弄ふと、彼女は生眞面目な顏をしてそれに受け應へをしてゐるといふ有樣である。

　お繁さんは可笑しさうに笑ひながら、

「そんな具合でもう氣の毒で見てゐられしまへんがな。ほて、もう、わたし、あんた方、そんな詰らんこと云うてお園さん戲弄らんと置いとくれやすいうて、小言いうてました。」

　私は、それを聽いて身にしみて悲慘を感じながら、ぢつと涙を飲み込むやうにして、

「飛んだことになつてしまつたものですなあ。」と、あとの言葉も出でずに默つて太息を吐いてゐた。

「もう、どだい、いふことが成つてへんのどすもの。」お繁婆さんは變なハイカラの言葉に力を入れていふ。

　そんな有樣で、とてもこの先續けて商賣など出來さうにないところから、母親のほかに西京の方にゐるといふ母方の叔父にも來てもらつて、話を着け、お繁さんが附添うて管轄の警察署へ行つて、營業の鑑札を返納して來たといふのである。お繁婆さんは倘ほ可笑しさうに、

「警察へいても、お園さん眞面目な顏をして役人に怒鳴り付けるやうなことをいふもんやから、わたし傍に附添うてゐてはら〳〵してました。」

　私も思はず寂しい笑ひを洩らしながら、

「なるほどさういふ譯ぢや爲樣がありませんな。そして、今何處にゐるでせう。」

「さあ、その時叔父さんに伴れられて歸つたきり、何處に居るのかそれなりで一寸も音信がないさうにおす。わたしもそれから用事で大阪の方に往てきまして、今日歸つたばかりのとこどすよつて。今日も、あんたはんから訊かれる前に、お園さん、ちよつとも音信がないなあ、どないしてはるやろ云うて噂してましたところどす。」

　成程叔父のあることに前から知つてゐたけれど、私は倘ほもその叔父さんといふのは果して眞實の叔父さんに違ひあるまいかと疑つたので、念を押すやうに、

「叔父さんといつて、その實旦那ぢやありませんか。こんな土地ぢや、かう申しちや、何ですが、裏にうらがあるのが習はしですからな。」と、揶揄けた調子で、對手の口うらを引いてみたが、お繁は言下に、

「あの人旦那なんてありやしまへん。そりや本當の叔父さんどす。」

「その叔父のゐる處は何處でせう。あんた知つてゐませんか。」

「さあ、それも、わたし何處や、よう知りまへんけど。」と、小頸を傾けるやうにして、「何でも三條とか、油の小路とか聽いたやうに思ふけど、委しいことは、よう知りまへん。」と、眞實

知つてゐなさうである。

　私は尙ほ、もつと委しい事を、あゝもからもと訊ねたいと思つたが、家の內が急がしさうにしてゐるのと、向うが果して誠意を以つて話してくれてゐるのか、どうか半信半疑なので、いい加減にして出て戻らうとして、まだ立ちにくさうにしながら、

「いろ〳〵有難うございました。あなたにお眼にかゝつて、樣子が一と通り分りました。」

　私は、この上にも尙ほ向うの誠意を要求するやうな心持で丁寧にお禮をいつた。幾度思つてみても、全く自分の生命にも換へ難い女である。その女の故ならば、いかなる屈辱を敢てしても決して厭はないと思つてゐたのである。

　お繁婆さんは、

「あゝそれからあんたはんのお手紙が來てゐるのも知つてます。たしか二度來てたかと思つてます。前のはお園さんが自分で受取つてたしか見てゐました。後のはこゝに居らんやうになつてから來ましたよつて、私が預つて置きました。」

　といつて、彼女は奧に立つて往き、三四本の、女にあてて來てゐる封書を、私から遣したのと一緒に持つて出てきた。それを見ると、中の一つは自分のちよつと知つてゐる、ある男からの文であつた。私は、それを一目みると何とも云へない厭な氣持になつて、「あの人間が！」と、丁度ウロンスキイが、自分の熱愛してゐるアンナの夫のカレニンの風貌を見て穢はしい心持になつたと同じやうな氣がして、その瞬間忽ち、自分が長い年月をかけて寶玉の如くに切愛してゐた彼女が終生いかんともすべからざる傷物になつたかのやうに思はれて、又もやがつかり失望してしまつた。女が居なくなつたことが既に自分には生命を斷たれたと同じ心地がしてゐるのに、自分が一面識のある人間とも知つてゐたのかと思ふと、私はあまりに運命の神の冷酷やら皮肉やらを悲み且つ歎かずにはゐられなかつた。しかし、それも、皆な自分の愚かゆゑである。かうした賣笑の女に戀するからは、それは有りがちの事である。西鶴も疾うの昔にそれを云つてゐる。今こんな事があると知つたのを好い思ひ切り時に、いつそ此處で、これつきり女を綺麗さつぱりと思ひ斷つてしまはうか、さうすると、此の心の惱ましさを解脫することが出來て、どんなに胸が透くであらう。そして決然として直ぐにも東京へ歸つて行つて、多年女故に怠つてゐる自分の天職に全心を傾倒しよう。どうかして、さういふ心になりたい、と思ひながら、私は、膝の前に置かれたそれ等の男からの手紙を凝乎と見つめながら、封の中にどんなことを書いてあるのか、出來ることならば、封を切つて中を讀んでみたいやうに思つた。差出した處を見ると、何處か地方に行つてゐて、その旅先から出したものらしいから、その男も、女が氣が變になつて商賣を廢めて、この土地から消え失せたことは知らずにゐるのであらう。……私がさうして、ぢつとそれ等の封書に見入つてゐるので、お繁はどう思つたか、

「この人はほんの五六度知つてるだけどす。私も一寸顏を見て知つてます。あれは何處のお客やつたか。」と考へるやうにして、

「たしか、井の政のお客やつた思ふ。去年の春からのお客どした。……かうして人さんの手紙どすさかい、中を讀んで見ろわけにもいきまへんしなあ。」と、私を慰め顏に云ふ。

「いえ〳〵、なに此の手紙を見たいと思つてるわけぢやありません。……たゞお園が、叔父さんに連れられていつたきりで今何處に居るのか、私も、あなたも御存じのとほり、もう長い間心

配してゐた、あの女の事ですから、ぜひ一遍會つて、病氣の樣子を見たいと思つて……」と、私は、どこへ取りつく島もないやうな氣がして、さういふと、お繁婆さんも、さすがに同情のある調子でうなづきながら、

「え丶/\、あんたはんの事は、皆な、もうよう知つてます。何處に居やはるか、此處に居らんやうになつてからでも、もう半月くらゐになりますよつてなあ。」

私は何ほも繰返して、「そのうちにも自然居處が知れるやうなことがあつたら、是非知らしてほしいとくれ/″\も歎願するやうに頼んで置いて、やう/\其處を出て戻つた。

十二

外に出ると、もう十二時を過ぎてゐるので、お茶屋へ往交ふ者のほかは人間も疎らになつて、冷たい夜の風の中に、表の通りの方を歩く下駄の足音ばかりが、凍て付いた地のうへに高くひびいてゐるばかりであつた。

そして、氣が狂つて叔父に連れられて、何處へ往つたとも分らなくなつた女の身の上が、今は可愛い、いぢらしいといふよりも、その可愛い、自分にとつては、自分が此の世に生存してゐる唯一の理由でもあり樂しみであると思つてゐた女が、自分が一度會つたことのある男とも知つてゐたのであつたのであつたかといふことのみが、胸の中一ぱいに蔓つて、これほど愚かしいことはない、何の因果で、あの女が思ひ切れぬのであらうと、自分の愚かしさを咎めつつも、やつぱり思ひ切ることが出來ず、その愚かしい煩惱に責め苛まれる思ひをしながら、うかうかと道を歩いてゐた。

そこから祇園町の一郭をちよつと出はづれると女の先にゐた處までは直ぐなので、たとひ今はもう其處にゐなくなつたにしても、その階下の家主の老婦人は性格の良い女性であるから、その人に會つて訊ねたならば、もしや知つてゐるかも知れないと思つて、一旦戻りかけた足を又そちらへ向きかへて、そこの暗い路次の中に入つてみたが、門は堅く締つてゐて、四邊はいづこもう寢靜まつてゐる。

「あ丶、われながら愚かしい。今時分この邊に起きてゐる家もない筈であつた。」と、心付いて、「ともかく今晩は歸つて寢て考へよう。氣が狂つたといふへに、今晩になつて、はじめて氣が付いた譯でもないが、知らぬうちこそ清淨だが、段々あとからいろ/\な事が分つてくると、この先まだ/\厭な思ひをしなければならぬ。自分に強い意思があるなら、今晩といふ今晩こそ、彼女を潔く思ひ切つて、彼女をはじめて知つて以來、足かけ五年の間片時も心の安まらなかつた苦患を免かれて、快い睡眠を得ることが出來るのだが……今、あんな人間から來てゐる手紙を見たのは、冷酷で皮肉と思はれる運命の神がその實深切に、自分に忠告してくれたのかも知れぬ。……それにしても、運命は餘りに皮肉で惡戯な事をする。」と、私は氣ちがひになつた、憐れな彼女を愛しようとしても、皮肉な惡戯な惡魔がゐて、愛することを妨げられてゐるやうな、何ともいへない辛い思ひに胸を拉がれながら、やつと終ひ際の電車に乘つて、上京の方の宿に戻つて來た。

その夜は殆ど微睡もせずに苦しみのうちに明かして、翌日は幸ひ氣候も暖かであつたので、ゆうべ一と夜寢ずにあゝかうと考へてゐた順序に從つて、朝飯の箸を置くとそのまゝ出て往き、どこよりも先づ祇園町の裏つづきの、女が先にゐた家にいつて、階下の家主の老婦人の許を訪ねてみたが、今朝は宅にゐる筈だと思つてゐたのに、昨夜のとほりにやつぱり門に鍵がおりてゐる。仕方なく路次の入口の店屋で、

くと、
「お婆さんは、上京の方の親類とかに病人があるとかいうて、一週間ほど歸らんいうてお往きやして、さうどんなあ、それがもう二三日前のことどす。」といつてくれる。
私は、そこに突立ちながら、「三四日前。」それなら何といふ殘念なことをしたらう。田舍から京都に戻つたあの翌日高雄へ紅葉を見に行かずに、此處へ來たら、何とか女の樣子も分つたらうに、と、思つたが爲方がない。それにもう此處には三月も前から居なくなつてゐるのだから、家主のお婆さんが居たとて委しい事は分らないかも知れぬ。昨夜松井の内のお爨婆さんの話の端に、叔父さんといふのは、油の小路とか三條とかに云つてゐた。それに、ずつと以前に女から一人の叔父は油の小路とかで悉皆屋とか糊屋とかをしてゐると聞いてゐたやうに思ふ。母親が上京の方の親類に同居して厄介になつてゐるといつたのも、其處かも知れぬ。姓も彼女の姓とは異つてゐる、名も知らないが、もし神といふ者がこの私の眞心を知つてくれるならば何とかしたら分るすべもないこともあるまい。これから油の小路に往つて、悉皆屋と糊屋とを一軒々々探ねて歩いてみよう。さう決心して、それから直ぐ油の小路に廻つていつた。そして三條四條を中心にして、その上下を幾回となく往きつ戻りつして一々兩側を歩いてみたが、もとより雲を掴むやうな話で、悉皆屋と糊屋とは幾らもあるが、手がかりのあらう筈もない。そして殆ど半日以上も一つところをお百度を踏むやうにして、終に歩き疲れて屈託しながら一とまづ宿まで引揚げて來た。
その又翌日、無暗に探ね歩いても爲方がない、何とか好い思案はあるまいかと一日外へ出ずに考へてゐたが、暮れ方になつて、やつぱりあの先にゐた路次の中の家主の處に行つてみるのが可いやうに思はれるので、一日內にとぢ籠つてゐるよりもと思つて出掛けていつたが、一週間ほど不在といひ置いていつて、まだ三四日にしかならぬのであるから、老婦人はまだ歸つて居ない。相變らず門の扉にはさびしく錠がおろしてある。するとその路次の中に立つてゐると、そこへ路次の入口の米屋の女房が共用水道の水を汲みに出てきたので、そのおかみは東京者で、一度も口をきいたことはなかつたが、夏の初以來、顏だけ見知つてゐたので、勿論先きでは、これが、あそこの二階にゐる女の旦那と思つて、こちらよりも一層注意して見てゐたかも知れぬ。それで、そのおかみに、
「こゝのお婆さんはお留守でせうか。」と、昨日も出口の店屋で訊いてゐるので無駄だと知りつつも、さう云つて訊ねると、おかみは、バケツを提げたまゝ、
「あの、あそこの二階にゐたお婆さんですか。」と、門の外から女のゐた二階の方を指しながら訊き返した。それで私は腹の中で、階下のお婆さんのことを訊ねたのだが、それを訊くのも、やつぱり階上にゐた女の母親の母を訊ねようとてであるから、これは、巧い具合だと思つて、
「えゝさうです。」と、いふと、
「あのお婆さんは、つい五六日前に、すぐそこの、安井の金毘羅樣のあちら側にお越しになりました。」といふ。
私は、心の中で肯いて、それぢや、八月の末に此處の所帶を疊んで終つて母親も居なくなつたと云つたのは、皆なこしらへ事であつたかと、合點しながら、さあらぬ風に、
「あゝさうですか。五六日前に變りましたか。」
「えゝ、つい此の間です。澤山に荷物を持つて。お婆さん、私にも挨拶をして下すつて、今までは二階借りをしてゐましたけれど、今度は自

分で一軒借りました。氣兼がなくなりましたから、どうぞ遊びに來て下さいといふて行かれましたけれど、私もわざ／＼行く用もありませんから、まだ往つては見ませんが、なんでもすぐ其處の橫町の通りから一寸入つた、やつぱり路次の中ださうです。」

私は、はつと胸を刺すやうに思ひ當つて、自分でも、顏から血の氣が一時に失せたかと思つた。今までは二階借りであつたけれど、今度は一軒借りきりで、氣兼がない。假令病氣といふに譃はないにしても、背後に誰か金を出す者が付いてゐるに定つてゐる。……心の中ではそんな事が梭の如く往來する。それを凝乎と堪へて、

「はあ、一軒借りて。……」と、私は思はずその一事に滿身の猜察力を集中しながら、獨言のやうにいつてゐると、委しい譯を知らぬおかみは、多分夏の初そこに私の姿を時々見てゐた以來、私達の關係に變りのないことと思つたのであらう。

「もしお出でになるなら、あそこの俥屋でお訊きになると、直ぐ分ります。あそこの俥屋が荷物を運んでゆきましたから、よく知つてゐます。」

と、親切に教へてくれたので、私は幾度も禮を繰返しながら、路次を出て、橫町の曲り角の俥屋にいつて訊ねると、俥屋の女房がゐて、自分は行かないが、そこをどう行つて、かういつてと、委しく教へてくれた。きけば、なるほど直ぐ近い處である。

私は、心に勇みがついて、その足で直ぐ金毘羅樣の境內を北から南に突き拔けて、繪馬堂に沿うたそこの橫町を、少し往つて更に石疊みにした小綺麗な路次の中に入つて行つて見ると、俥屋の女房は小さい家だと教へたが、三四軒並んだ二階建の家のほかには、なるほど三軒つづきの、小さい平家があるけれど、入口の名札に藤村といふ女の姓も名も出てゐない。それで又引返してもう一度俥屋にいつてもつと委しく訊くと、その三軒の平家の中央の家がそれだといふ。

「あゝ、さうですか？」と、いつて、俥屋の女房には、逆らはずそのまゝ又もとの路次の方に引返したが、今の先き見たところでは、その中央の家には、なるほど、まだ白木のまゝの眞新しい名札が出てゐたが、それには飯田とのみ誌してあつた。私は不審さに小頸を傾げながら、もう一度路次に入つて來てその飯田といふ名札の掛つてゐる中央の家の前に立つて、暫く考へてゐた。

あゝ讀めた！……飯田といふのは旦那の姓であらう、かうして、この旦那は、可哀さうな私とは正反對に好きな女をうま／＼と自分の持ち物にし了せて、この新しい表札を打つたのであらう、と、向うの、その嬉しい氣の內を想像するだけ、自分は恐ろしい修羅に身を燃しながら、もう生命懸けで飽くまでも自分の運命に突撃してゆかうとする涙ぐむやうな意地になつて來た。

三尺を又半分にした、やう／＼體の這入られるだけの小さい潜戶は、まだ日も暮れぬのに、緊く閉切つて、留守かと思ふほどひつそりとしてゐる。

「もし／＼、御免なさい。」と、二三度聲をかけると、やがて、內から、

「どなたはんどす？」といふ聲がする。たしかに母親の聲である。ぢや、此の家がそれにちがひなかつたと思ひながら、

「私です、わたしです。」と自分の名をいふと、母親はそうつと、五六寸潜戶を開けて、內から胡散さうに戶の外を窺いて見たが、そこには私が突立つてゐるので、

「あゝ、あんたはんどすか。」と、氣まづい顏を

していひながら、がらりと潜戸を開けて外に出るや否や身體で入口に立塞がるやうな恰好をして、後手にぴしやりと潜戸を閉めてしまつた。

そして五歩六歩入口を遠ざかりながら、

「あんたはん、私がこゝに來てゐるのがよう分りました。どなたにお訊きやした？……こゝは人さんのお家どすよつて。私一寸雇はれて來てゐますのどす。」といふやうなことを、辯解がましくいひつゝ、なるたけ私を家の前から遠ざけるやうに、路次を歩いて出ようとする。

私は、つい一と月ばかり前時々會つてゐた時と打つて變つたやうなその、あまりに餘處々々しい樣子に、さうなくてさへ失望のあまり、ひどく弱くなつてゐる心を押潰されたやうな心地がしたが、努めて氣を勵ましながら、

「お母はん、お幾さんが飛んでもない病氣になつたといふぢやありませんか。」と、まるで泣きかゝるやうな調子で言葉をかけた。

すると母親ももう鼻聲になつて、

「私、あの娘にあんな病氣しられて、もう、どないしようかと思うてます。同じ病氣かて、糞屎の世話をするくらゐどしたら、わたし何ぼか嬉しいか知れしまへん。あの娘の病氣の世話やつたら、どないに私骨が折れたかて、ちよつとも厭やしまへん。私もあの娘と一緒に死んだかて本望どすけど、あんたはん、何の因果であんな病氣になりましたか思うて私、もう此處半月ほどの間といふもの、夜も碌に寢られやしまへんのどす。ちよつと油斷してる間にどんなことをするか知れまへんよつて。」母親は悲しい聲で立てつゞけに泣きごとをいふ。さういふ顏をよく見ると、成程娘の病氣に心痛すると思はれて、顏に血の氣は失せて眞青である。

私は一々うなづきながら、一昨日の夜から、病氣といふことをはじめて聞いて、居處が知れないために殆ど京都中を探して歩いてゐたことを怨みまじりに話して、

「そして、今少しは良い方なのですか、どんなです？　私も一遍樣子を見たいです。」と、いふと、母親は、それを遮るやうな口吻で、

「今もう誰にも會はしてならんとお醫者さんがいははりますので、何方にも會はせんやうにしてゐます。仲の好い友達が氣の毒がつて、見舞ひに行きたいいうてくりやはりますのでも、みんな斷りいうてるくらゐどすよつて。あの病氣は藥も何も入らんさかい、たゞぢつと靜かにしてさへ置けばえゝのやさうにおす。この二三日やつとすこし落着いて來たとこどす。」

「あゝさうですか。何にしても心配です。……そして、今ひとりで靜かに寢てゐますか。」私は、どうかして、餘處ながらにでも、そうつと樣子を見たさうにいふと、母親は、又一生懸命に捲し立てるやうな調子で、

「ほて、今、京都に居らしまへんのどす。」

「えツ、あそこに寢てゐるんぢやないんですか。そして、何處にゐるんです？」

「違ひます。あそこは、あんたはん、餘處の金持のお婆さんがひとりで隱居しておいでやす處どす。もうお年寄りのことどすさかい、此の間からえらい病氣で六かしい云うて息子はん達心配してはります處へ、知つた人さんから頼まれて私が付添ひに來てますのどす。そしてあの娘は遠い處の親類に預けてしまひました。」母親がおろ〳〵聲で誠しやかにさういふので、私は心の中で、道理で、取つても付かぬ飯田といふ表札が出てゐるのである。そして、そんな精神に異狀のある、たつた一人きりの娘の傍に付添うてゐないで、他人の年寄りの病人に付添うてゐるのを不思議に思ひながら、

「遠い親類に預けた！……あんた、そして又何故傍に付いて介抱してやらないのです？」

「あんたはん、私が傍に付いて介抱してやり

たうても、あの娘がそんな病氣で、たんとお金がかゝりますよつて、私が人さんの家へ雇はれていてでも少しくらゐのお錢を儲けんことにはどもならしまへんがな。」母親は泣くやうにいふ。

　私はつく〴〵と彼等母子の者の世にも薄命の者であることを思ひながら、眉を顰めるやうにして、

「あんた、錢を儲けなければならないなんて、それは何とか出來るぢやありませんか。あんた唯だ一人きりの大切な娘がそんな一通りならぬ病氣をしてゐるのに、傍に付いてゐて介抱してやらないといふことがありますか。」と小言をいふやうにいふと、母親は、少し顏を和げて、

「えゝ、私も付いてゐてやりたいは山々どすけど、今いふとほり、醫者に見せることも入らん、藥も飮まないでもえゝ、たゞ靜かにして居りさへすりや好えのやさうにおすさかい、親類のおかみさんが、お母はん、もうちよつとも心配することはない、確かに癒してあげますよつて、安心しといでやすいうてくりやはりますので、そこへ委せてあります。」

「遠い親類て、どこです？」

　さういつて訊ねても、母親ははつきり何處といふことをいはずに、たゞ、

「ずつと遠いところどす。田舍の方どす。」といふ。

「田舍て、どこの田舍です？　お母はん、あなたにも、あんなにいうて居つたぢやありませんか、私と一處に家を持つて、お幾さんが癒めるまで待つてゐませうつて。そんな病氣をなぜ私に知らしてくれなかつたのです。」

　私が、怨言まじりに心配して訊くので、母親も返事を否む譯にも行かず、折々考へるやうにしながら、「あんたはんにも一遍相談したい思ひましたけど、さうして居られしまへんがな、そんな病氣どすよつて、田舍といふのは京から二三里離れたお百姓の家どす。私の弟の家どすさかい、そこの嫁はんが、ほん深切にしてくりやはりますよつて。」

「二三里の田舍ぢや、あんまり遠い家でもありません。」

「私も、二三日前に一寸行つて來たきり、此方の御隱居さんが病院に入らうかどうしようかいうてはりますくらゐで、少しも手が引けませんよつて、一遍あとの樣子を見に行かんならんと思うてもまだ、あんたはん、よう往かれまへんがな。私も、あんたはんがお出でやしたんで、今家を默つて出て來ましたよつて、早う去なんと、年寄りの病人さんが、用事があるといけまへんさかい……」

　母親は鼻聲で、あつちも此方も心のせくやうに云ふ。私は一層同情に堪へない心持で、

「いくら、あんた、親類に預けて安心だといつて、一人の親が一人の娘の病氣の世話をしないで、餘處の他人の介抱に雇はれてゐるといふことがあるものですか。まあ、今此處で委しい話も出來ませんから、何とか繰合して暇ができたら、お母はん一遍今度の私の宿まで來て下さい。そして、もつとくはしい病氣の樣子も訊きたいし、色々な御相談もしませう。」

　さういつて、宿の名と處とをくはしく敎へると、母親は少し考へるやうにして、明日はちよつと都合が惡くてゆけないから明後日はきつと訪ねて行きますといふ。その約束を堅めて、

「あんたはんも又風邪ひかんやうに早う往んでお休みやす。」

「お母はんも餘り心配せんと。そのうへ自分が又患つたら困りますよ。」

　挨拶を交はして、そのまゝそこで立ち別れた。日はもう、とつぷり暮れて、寒い〳〵乾いた夕風が薄暗の中を音もなく吹いてゐた。

十三

母親の居處が知れて、まづ一と安心はしたものの、路次の出口の女房のはなしでは、つい五六日前に先の二階借りの處から引移つて行つたといふ。それを母子の者は何故私に對して隱してゐたか、考へて見ると水臭い爲打ちである。それに先刻飯田と表札を打つた家の潛り戸を開けて母親が中から出て來ながら、丁度此方が押入つてゆかうとするのを先揺りをして入れまいとでもするやうな樣子をしたのが疑つてみればみる程變である。まあ、しかし、そんなことを惡どく根問ひせぬ方が美しくつていゝ、委細は明後日宿へ訪ねて來た時に、よく解るやうに、なんどりと話してみよう、と、それからそれへと、疑つてみたり、又思ひなほして安心してみたりしながら宿へ歸つて來た。

それから中一日置いて、約束の明後日になつて、今に來るかくるかと一日どこへも出ず晩まで待つてゐたけれど母親は訪ねて來ないので、たうとう待ちあぐねて、日暮れ方に又此方からそこまで出掛けて往つてみた。と、一昨日見た飯田と誌した表札は取りはづしてしまつて、相變らず潛戸は寂然と閉まつてゐる。やゝ暫くそのまゝそこに佇んで思案をしてゐると、すぐ左隣りの二十七八のおかみさんが、入口から顏を出して、

「お隣りはもうお留守どつせ。」といふ。

「あゝ、さうですか。もうお留守で、誰もゐないのですか。」と重ねて訊くと、

「えゝ、私どや、よう知りまへんけど、何でも病人さんが、えらい惡うて入院してはりますとかいうて、お婆さんも昨日付いて行かはりまして、今何方もゐやはりやしまへん。何や知らん、お婆さん此の二三日えらい忙しさうにいうてはりました。」といふ。

私は、何だか狐につまゝれたやうで、茫然としてゐたが、さういへば、母親が一昨日話してゐた隱居のお婆さんが入院したといふのかも知れぬと思ひながら、猶ほそこを立ち去りかねて、一二度表から潛り戸を引張つてみたり、櫺子窓の磨り硝子の障子の隙から家の中を窺いてみようとしたけれど、隣家の女房が見てゐるので、押してさうすることもならず、そのまゝ引返して路次を出て來た。そして猜疑は又雲の如く湧き上つた。けれども、母親のいつたやうに付き添うてゐる隱居の婆さんと、自分の娘と二人の病人を持つてゐるのが眞實ならば、急しい道理である。今日は私を訪ねるといふ約束が一日二日延びても無理はないと、また思ひ直して、悄然として宿の方に戻つてきた。

その翌日、たしかに當てにはならぬが、もしか今日は來はせぬかと、又一日外へ出ぬやうにして心待ちに待ちながら、不安と疑ひとに惱まされて鬱ぎ込んでゐると、二三時頃になつて、宿の者が、お年寄りの御婦人の方がお見えになりましたと知らして來たので、たうとう來たなと、すぐ通してくれるやうにいつて待つてゐると、表の方から、長い廊下を傳うて部屋に入つて來たのは、母親の外に今一人、嘗て見も知らぬ、人相が甚だ好くない五十餘りの、脊のひよろ高い、瘠ぎすの男である。見ると蒼白い顏色に薄い痘痕がある。

私はその男の樣子を見ると同時に、はつとした感じが頭に閃いた。それで、ぢつと心を落着けて、態度を崩さぬやうにしながら、平らやかな顏をしてわざと丁寧に一應の挨拶を交はしてみると、その男は懐中から一枚の名刺を取出して私の前に差出しながら、

「私はかういふ者です。」といふ。

「あゝさうですか。」といひつゝ、それを手に取り上げて讀んでみると、「京都市何々法律事務所

事務員小村何某」と仰山に書いてゐる。私は、一あゝさうですか。と重ねてうなづいて見せたがこんな男が二人や三人組んで來たくらゐで、びくともするのぢやないが、それにしても一昨昨日の晩、母親と立ち話をして別れた時にも、自分は何處までも人情づくで、眞實母子二人の者の身を哀れに思つたのであつた。そして、哀れに思へばこそ一人愛しんで長い間盡してゐたのである。それゆゑ假令精神に異狀を來して居ようが氣狂ひであらうが、あんな纖美しい女が狂人になつてゐるとすれば、そんな病人になつたからといつて、今更棄てるどころか、一層可愛い。いかなる困難を排しても女を自分の手中の物にして、病氣をも癒してやらねばならぬと思つてゐるのに、もし、自分の此の體たらくを見知つてゐる者があつて、自分を癡呆とも醉狂ともいはば云へ、自分ながら感心するほどの眞實を傾け盡して女の事を思つてゐるのに、斯樣な男を同伴して來る母親の心が怨めしい。何故自分のこの胸の内が母親には分らぬのであらう。自分一人で來て打融けた談合をしようとせずに、訊くまでもなくもう底意は明かに見えてゐる。その母親の心が、もうすつかり私と絶縁してゐるといふことが、慘めに私の胸に打擊を與へた。

それを思ひながら、私は黙り込んでゐると、その男は、

「僕は、此の藤村の親類の者に依賴せられて今日來たのだが、君がこの藤村の娘を大變脅迫したために、精神に異狀を來したといつて、ひどく立腹をして居る。それで、君がどうしても女が欲しいなら、錢を五百何十圓出してもらはねばならん。」と、横柄な調子でいふ。

私は、それを聽くと、もう、むら〳〵なつた。そして、腹の中で、「何を吐しやがる。盗人猛々しいとは、その言ひ分である。」と、思つたが、それは凝乎と抑へて口には出さず、

「はあ、私が藤村の娘を脅迫したために精神に異狀を來したといふのですか。……何ほ、女が欲しいやうなら、錢を五百何十圓出せ？　私にはよく合點がゆかぬ。」と、言葉は、なるべく靜にしながら、屹となつて問ひ返した。

するとその男は、

「自分はたゞ賴まれたので、委しい譯は知らんが、君が當人をひどく嚇かしたのが原因で氣が狂つたさうぢやないか。その爲に親類一同の者が大變君を怨んでゐる。」と、頭から抑被せようとする。

それを聽いて私は、餘りの腹立たしさに聲が痙攣するかと思ふほど硬くなつたのを、强ひて笑ひながら、

「戲談をいつてゐる！」と、語氣を强めて吐き出すやうに云つた。「なるほど今年の一月以來、……それまで、もう何年といふ長い年月の間私の方から散々盡して心配してゐることが、いつまで經つても少しも埒があかぬので、一體どうなつてゐるかと、隨分嚴しいことを、手紙でいつて寄越したことは度々あります。しかし、それは私としては當然のことで、勿論、あんな商賣をしてゐる女に山ほど錢を入れ揚げたつて、それは入れ揚げる方が愚ではあるが、假令幾ら泥水稼業の女にしても、たゞ無闇に男を騙して金を捲上げさへすれば可いといふ譯のものでもありますまい。私がこの藤村の娘に對して仕たことを最初からずつとお話をすると斯うなのです。まあ聽いて下さい。」

と、いつて、對手が妙に生噛りの法律口調で話しかけるのを、此方は、わざと捌けた傳法な口の利き樣になつて、四五年前からの女との經緯を、その男には、口を插入れる隙もないくらゐに、二時間ばかり、まるで小説の中でも話して聽かすやうに、ところ〴〵惚氣まで交へて、立

てつゞけに話してきかせた。私の顏は熱して、頰には紅が潮してきた。
するとその男は、段々私の話に釣込まれてしまひ、初めの嫌に四角張つてゐた樣子はいつか次第に打ち融けて、私の話が惚氣ばなしやうになつて來ると、堪らず噴き出しながら、
「君は女に甘い。君は下手だ。そんな君、女にたゞ遠方から金を送るといふことがあるものか。さういふ時には君が自分で金を持つて京都に來て、さあ、金はこゝに用意して有る、廢めて自分の方に來るかどうするかと向うの腹を確めて、此方のいふ事を聽くなら、金を出して遣らうといふ調子で行かにや駄目ぢや。」と意見をするやうにいつて、笑つてゐる。
私は又、半ばはわざとさうして見せるところもあつたが、男が笑つてゐるのを見て、勃然となり、飽くまでも眞劍な調子で、
「いや、笑ひ事ぢやありません。又惚氣を云ふつもりでもありません。他人から見れば馬鹿と見えるくらゐ、凡そそれほどまでには、私は、相手を信じ切つて話して來たことをお話するのです。惚氣を聽かすやうですが、それも私達の間がそれほどまでに打ち融けて居つたことを説明してゐるのです。それにも係はらず、……」
と、尙ほ後を繼がうとすると、その男は、一層笑ひ出して、
「いや、君は馬鹿だ。はゝゝ君、出てゐる女は君、君一人だけが客ぢやない、ほかにも多勢そんな男があるもの……」と笑ひ消してしまふ。
母親も傍から口を出して、
「世話になつた人はあんたはんばかりやおへん。まだ〳〵もつと他に、いふに云へんお世話になつたお人がありますのどす。」と、その男にも聽いてくれといふやうにいふ。
「うむ、そりやさうやろとも。」その男は尤もといふやうにうなづいてゐる。
私は、それを不快に思ひながら聽いてゐたが、
「そりや、私のほかに、もつと世話になつてゐた男があるかも知れない。何も自分一人が色男のつもりでゐた譯ぢやないが、自分も此の年になつて、女に引掛つたのは、これが初めてぢやない。隨分女の苦勞は東京にゐて度々して來てゐるんだ。しかし今度のやうな御念の入つた騙され方をしたのは初めてだ。それに何ぞや、私が嚇かしたために氣が狂つたなぞと、聞いて呆れる。それどころぢやない、私の方で彼の女の事を思ひ詰めて患はぬが不思議なくらゐに自分でも思つてゐるのです。私が嚇かしたためにそんな病氣になつたといふ苦情があるなら私の方で悅んで引取つて癒してやりませう。しかし、先刻のお話で錢を五百圓出せといふのはどういふ譯です？」
きつぱり、さういふと、その男は又うなづいて、妙な東京辯を交へながら、
「うむ、そりや君の心持も私にはよう解つてゐる。だから、病氣になつた事については、情狀を酌量して、どうしてくれとは云はぬから、女の事は諦めてもらひたい。それでも、どうしても君の方へ連れて來たいといふなら、五百五十圓か、それだけの金を君の方から出してもらはねばならん。その錢が出來るか。」
人を馬鹿扱ひにして宥めるやうな、又足許を見透して輕蔑したやうなことをいふ。私は、情狀を酌量するもあつたものではないと心の中でその淺薄な言ひ草を腹を立てるよりも笑ひながら、
「へえ、五百何十圓！ それはどうした金です？」と訊き返しながら、今まで散々人を騙して、金を搾れるだけ絞つて置きながら――尤も本人は何にも知らずにゐるのかも知れぬが――

何處まで蟲の好いことを云ふと思つた。

　すると、母親は又興奮した顏で傍から口を出して、

「その金はどうした金て、あんたはん、まだ松井さんにあの娘の借金がおすがな。あんたはんも私の處におゐやした時に、何度もあの娘に訊いておゐやしたやおへんか、まだたんとの借金おした。その金を返さんことには、あんたはん松井さんかて、あの娘を廢めさしてくりやはりやしまへんがな。」眞顏でいふ。

「その借金を五百五十圓今度親類から出してもらつたのだ。」傍の男が後を受取つて云ふ。

　私には、どうも、はつきり腑に落ちぬ。

「へえ？……しかし、此の間私が松井へ行つて、お繁さんに會つて訊いた時には、そんなに借金はもうなささうな口振りであつたが。」

「あの人何も知らはりやしまへん。無いどころか、まだ仰山あつて、あの娘はそんな病氣になる……親一人、子ひとりの私の身になつたら、あんたはん、泣くに泣かりやしまへんがな。それで南山城の舊い親類に賴んで、證文書いて、それだけの金を今度貸してもらうたのどす。」母親は、傍の男にも訴へ顏にいふ。

　私は、默つてそれを聽いてゐたが、成程彼女達の先祖はもと府下の南山城の大河原といふ處であつたとは、自分が女を知つて間もない時分から聞いてゐることであつた。その大河原といふのは關西線の木津川の溪流に臨んだ、山間の一驛で、その邊の山水は私の夙に最も好んでゐる所で、自分の愛する女の先祖の地が、あんな景色の好い處であるかと思ふと、一層その邊の風景が懷かしい物に思はれてゐたのであつた。そして女の祖父に當る人間が、彼女の父親の弟分にして、も一人他人の子を養子にしてゐたが、祖父が死に、今からざつと三十年も前に父親が一家を擧げて京都に移つて來る時分に、所有してゐた山林田畑をその義弟の保管に任して置くと、彼はその財産を全部失くしてしまひ、自分は伊賀の上野在の農家に養子に行つて、猶ほ存命である。ほかに兄弟とてなかつた父方の親類といへば云はれるのは其處きりで、血こそ繋がつてゐないが今でも親類づき合ひをしてゐるのであつた。……それだけの事は度々母子の者から聽かされて自分も知つてゐるが、その他に南山城に、不斷親しい往來をしないでゐて、突然金を貸してくれるやうな處がありさうに思へぬ。

「へえ？……そんな親類があるのですか。伊賀の上野にはあると、あなた方から私もかねて聞いてゐたが。」と、私が訝しさうにいふと、母親は、引つ手繰るやうな調子で、

「あんたはん、そんな委しい事知らはりやしまへん。そんな親類ありますがな。」といふ。

「へえ？　何といふ親類です？　やつぱり大河原の？」と重ねて訊くと、傍の男は、又それを受取つて、

「自分で、藤村の親類で、やつぱり藤村利平だといふ者だといふとつた。その人間がわざ〳〵私の處に來て依賴して歸つた。」

「あんたはん、あんな遠い處からその事で出て來てくれたのどす。」二人は調子の合つたことをいつてゐる。

　私も、心の中で、あゝいふのだから、そんな親類があるのかも知れぬと思つた。

「ぢや、私がその藤村利平といふ人に一應會つて話しませう。」

「いや、もう此の間一寸來て、すぐ歸つてしまうた。」といつてしまふ。

　終に、どちらのいひ分も要領を得ずにそんな取り留めのない話になつたが、私の心は、どうあつても女を思ひ絶たない、女に會はなければ承知しないが腹一ぱいで、たとひ此の天地

が摧けるとも女を見なければ氣が濟まぬのである。それで、たうとう三四時間も話込んでゐる内に暗くなつてしまつたので、その男は、忙しいといつて立ちさうにするのを、私は何處までも一度女に會つて、差向ひで納得するやうな話をしなければ何といつても此のまゝに濟ます譯にはゆかぬといひ張つた。すると、母親もその男も遅くなつて心が急くの兩方で、

「そやから、病氣さへ良うなつたら、あんたはんにも會はせますいうてるやおまへんか。」

「きつと會はせますな。」

といふことにして、二人は歸つた。

十四

此の間母親と一緒に來た小村といふ男が、十日か十五日經つたら會はせませうと受合つたので、自分もそれで幾らか安心して、なるべく他の事に氣をまぎらすやうに努めながら、その十日間の早く經つのを待つてゐた。そして約束の十日が過ぎると、もうそのことばかりが考へられて心が急くので、宿から餘り遠くない處と聞いてゐた、その小村の家を訪ねて往つて、此の間母親と一緒に來た時に聽き殘した、もつと委しい事をあれ是れと訊ねてみた。そして、金を出したのはやつぱり南山城の大河原字童仙房といふ處の藤村利平といふ人間であつて、その人間が、自分の事務に携はつてゐる室町竹屋町の法律事務所にわざ〳〵訪ねて來て、親戚關係の藤村の娘の事を依頼していつたのである。大河原の童仙房といふ處にさういふ人間があるかどうか、自分は委しいことは知らぬが、事務所の方には四五年前に他の事件を依頼して來たことがあるので、今度はその縁故で來たのである、といふ。

私は、それを、此の間はじめて聞いた時から幾度となく疑つてみた。そんな親類があつて、此度それだけの金を出してくれるくらゐならば、そも〳〵あんな苦しい境涯に身を沈めない前に泣き付いて行く筈である。けれども、さういふ親類があるといふから、或はさうかも知れぬ。そして、

「もう、あれから暫く經つたから、病氣も大分良くなつたでせう。私自分で一遍往つて樣子を見て來たいと思ふんですが。」といふと、小村は口をきくよりも先きに頭振りをふつて、

「いや〳〵まだなか〳〵そんな處でない。母親の話ではどうも良くないらしい。」といふ。

「とにかく、それでは私が自分で往つてみませう。」といつて、女の靜養してゐるといふ山科の方の在所へ往く道順や向うの處を委しく訊ねると、小村は、君が獨りで往つたのではとても分らない、ひどく分りにくい處だといつてゐたが、それでも強ひて此方が訊くので、山科は字小山といふ處で、大津ゆき電車の毘沙門前といふ停留場で降りて五六町いつた百姓家だといふ。娘はときくと、さあ娘は、自分も一度母親に連れられて一度行つたきりでつい氣が付かなかつたが、やつぱり藤村といつたかも知れぬといふ。

まるで雲を摑むやうな當てのないことであるが、私はそれから小村方を出て、寒い空に風の吹く砂塵の道を一心になつて、女に食べさすために口馴染の祇園のいづ宇の壽司などをわざ〳〵買ひとゝのへて三條から大津行きの電車に乘つた。小村のいつた毘沙門前の停留場といふのは、大津街道の追分からすこし行くと直ぐなので、そこで電車を降りて、踏切番をしてゐる女に小山といふ處へ行くのはどう往つたらよいかと訊ねると、女は、合點のいかぬやうに、

「小山はこゝから五六町やきゝまへんなあ。あこに見えるのが小山どすよつて、一里もつとお

すやろ。」といつて指す方を見ると、田圃の向うの逢阪山の峰つゞきにあたる高い山の麓の方に冬の日を浴びて人家の散らばつてゐる村里がある。私は、あそこまでは大變だと思ひながら、

「さうですか、毘沙門前の停留場を降りてすぐ五六町ときいたのですが。」と、私は繰返して獨言を云つてみたが、踏切り番の女は、ただ、

「ちがひますやろ。」

とばかりで爲方がない。そして、自分ながら阿呆な訊ね樣だと思つたが、もし京都から斯々の風體の者で病氣の靜養に來てゐる者が此の邊の農家に見當らないであらうかと問うてみたが、それもやつぱり、

「さあ、氣が付きまへんなあ。」で、どうすることも出來ない。

爲方がないから、私はそこから大津往來の街道の方に出て、京都から携へてきた壽司の折詰と水菓子の籠とを持ち扱ひながら、雲を摑むやうなことを云つては、折々立ち止まつて、そこらの人間に心當りをいつて問ひ〳〵元氣を出して向うの山裾の小山の字まで探ねて往つた。十二月の初旬の頃でところ〴〵薄陽の射してゐる陰氣な空から、ちらり〳〵雪花が落ちて來た。それでも私は兩手に重い物を下げてゐるので、じつとり肌に汗をかきながら道を急いで、寂れた街道を通りぬけて、茶圃の間を横切つたり、藪垣の脇を通つたりして、遠くから見えてゐた、山裾の小山の部落まで來て、そこから中の人家について訊ねたが、さういふ心當りは何處にもなかつた。それでも猶ほ諦めないで、そこから又引返して、殆ど、山科の部落といふ部落を、ちら〳〵粉雪の降つてゐるにも拘はらず私は身體中汗になつて、脚が棒のやうになるまで探ね廻つたが、もとより住所番地姓名を明細に知つてゐる譯でもないので遂に何處にもそんな心當りはなく、在所の村々が暗くなりかけたから爲方なく、斷念して、失望しながら歸路についた。

あとで小村といふ男に會つてそのことを話すと、彼は「一人往つたのでは、とても分らん。」といつてゐたが、母親が近いうちに又その話で來ることになつてゐるから來てくれといふので、少しは好い話をするかと思つて、樂んでその日に往くと、母親の調子は此の前會つた時より一層險惡になつて、此方が、女に未練があるので、どこまでも下手に優しくして物をいふと、彼女は、理詰めになつて來ると、終には私に向つて散々ばら惡態を吐いた。

そして、山科に娘を預けたといふのは、謔であらうといふと、もう、そんな處に居るものか、遠くの親類が引取つたとか、又かういへば、私が東京へ歸つて行くとでも思つたか、世話をする人が家内にするといつて東京へ連れていつたなどといろんなことをいつてゐた。たしかに南山城に行つてゐるとも思へないが、母親が、何時よくいふとほりだとすれば、或はさうかも知れぬ。あの女が、自分の索り求められる世界から外へ身を隱した、もう、とても何うしても會ふことも見ることも出來ぬと思へば、自分は生きてゐる心地はせぬ。そんな思ひをして毎日ぢつとして鬱いでばかりゐるよりは、當てのないことでも、往つて探してみる方がいくらか氣を慰めると思つて、私は、十二月のもう二十九日といふ日に、わざ〳〵そちらの方へ出掛けていつた。木津で、名古屋行きに汽車を乘換へると、車内に何となく年末らしい氣分のする旅行者が多勢乘つてゐる。一體木津川の溪谷に沿うた、そこら邊の汽車からの眺望は夙に私の好きな處なので、私は、人に話すことの出來ないが、しかし、自分の生きてゐる殆ど唯一の事情の縺れから、堪へがたい憂ひを胸に包み

ながら、其等の旅客に交つて腰を掛けながら、せめても自分の好める窓外の冬景色に眼を慰めてゐた。車室がスチームに暖められてゐるせゐか、冬枯れた窓外の山も野も見るから暖かさうな靜かな冬の陽に浴して、溪流に臨んだ雜木林の山には茜色の日影が澱んで、美しく澄んだ空の表にその山の姿が、はつきり浮いてゐる。間もなく志す大河原驛に來て私は下車した。

かねて南山城は大河原村の字童仙房といふ處の親類に引取られてゐると聞いてゐたので、大河原の驛に下車すると、そこから村里まで歩いて、村役場に就いて、先づ親類といふ人間の姓名をいつて、戸籍簿を調べてもらつたが、村役人は、「そんな名前の人は心當りがありませんが。」といつて、帳簿を私に見せてくれた。そして、童仙房といふ處は、此の大河原村の内であつても、こゝから車馬も通はぬ險惡な山路を二三里も奧へ入つて行かねばならぬといふ。そんな遠い山路を入つていつても童仙房といふ處にそんな人間がないならば無益なことである。

そして、そんな姓名は此の大河原村にはない。それと同じ姓は、此の隣村の何がし村の聞き違へではないか、その村には藤村といふ姓が多いといふ。しかしその村もやつぱり鷲峰山といふ高い山の麓になつてゐるので、そこまで入つて行くには、どちらからいつても困難であるが、まだ此處から行くよりも、こゝから三つめの停車場の加茂から入つて行つた方がいゝが、それでも五六里の道である。そちらからならば俥が通ふかも知れぬといつて教へてくれた。

大河原といふことは、今度の場合に限らずこれまでも度々母親の口から聞いてゐるので、そんな人間が實存するなら大河原にちがひはなからうと思つたが、あの連中の云ふことには、どんな虚構があるかも知れぬ。もしや、その隣村ではあるまいかと思案して、こゝまで乘り掛つたついでに、何處までも追究せずにはゐられない氣がするので、私はそこまで探ね入つて行く決心をした。南山城の相樂郡といへば殆ど山ばかりの村である。そこに峙つてゐる鷲峰山は標高はやうやく三千尺に過ぎないが、嶮岩絶壁を以て削り立つてゐるので、昔、役の小角が開創したといはれてゐる近畿の靈場の一つである。その麓を繞つて、殆ど外界と交通を絶つたやうな別天地が開けてゐるのである。

私は此の寒空にそこまで入つて行くことの容易ならぬことを思つて、幾度か躊躇して、長い太息を吐いたが、女がもしその深い山の中に行つてゐるとしたら、自分もそこまで入つてゆかねば會ふことも見ることも出來ぬのであると思ふと、それを中止するのも何だか心殘りである。さう思つて、大河原驛から又笠置、加茂と三つ手前の驛まで引返して戻つた。そして、加茂驛に下車して停車場の出口で、そこに客待ちをしながら正月のお飾りをこしらへてゐた二三人の車夫に、何がしの村まで、これから行つてくれぬかといふと、彼等は、呆れた顔をして、笑ひながら、

「とつても……」と、一口いつたきりで、頭を横に振つて對手にならうとせぬ。尚ほよく訊ねると、泥濘が車輪を半分も埋めるので、俥が動かない、荷車ならば行くといふ。

私は、思案に暮れて暫くそこに突立つて考へてゐたがさうかといつて、斷念する氣にはならぬので、必ず行くといふ決心はなかつたが爲方なく驛路の、長い街つゞきを向うへ〳〵と何處までも歩いて行つた。やがて村道も行くと、街道はひとりでに高い木津川の堤に上がつていつた。木津川も先きの大河原驛あたりから、こゝまで下つて來ると、汪洋とした趣を備へて、川幅が廣くなつてゐる。鷲峰山下の村に通ふ街

道は、そこに架した長い板橋を彼方に渡つてゆくのである。私は、ゆかうかゆくまいかと思ふよりも、行けるかどうかを氣づかひながら、ともかくその長い板橋を向うに渡つていつた。それでも、なか／＼交通が頻繁だと思はれて、相應に人が往來してゐる。私は長い橋の中ほどに佇んで川の上流の方を眺めると、嶮岨な峰と峰とが襟を重ねたやうに重疊してゐる。時によつては好い景色とも見られるであらうが、午後から何だか、寒さが增して陰氣な空模樣に變つたと思つてゐたら、雪花がちらり／＼散つて來た。私は、長い橋の上に立つて空を見上げながら、「この空模樣で、膝を沒する泥濘道では、とても覺束ない。」と又思案をしたが、ともかく橋を向うに渡つて猶ほ歩いてゐると、そこへ後からがらがら空車を挽いた若い男の荷馬車がやつて來た。私はその男に聲を掛けた。

「その荷馬車は何處まで行く？ 何がしの村まで行かぬか。」

と訊ねると、その途中まで歸るのだといふ。

「君、その荷馬車に乘せてもらへないか。」と頼むと、

「あゝ、乘つて行きなはれ。」といひながら、彼はずん／＼行く。

それは、何か貨物を運搬した歸りと思はれて、粗雜な板箱の中は汚くよごれてゐる。私はそれを見て心を決しかねて、尙ほ後からついてゆくと、彼は暫く行くと、馬を停めて置いて、道傍に有り合はした藁塚から藁を抜き取つて來て、それを箱の中に敷いて、

「さあ、乘んなはれ。」といふ。

私は、心に、若い馬子の深切を謝したものの、さすがにその荷車に乘り兼ねた。自分は、何の因果であの女が諦められぬのであらう、と感慨に迫りながら行く手の方を見ると、灰色空の下に深い山又山が重疊してゐる氣勢である。

「いや、もう、止さうか。」と、若い馬子にいつて、私は到頭斷念して引返した。そして又木津川の長い板橋を渡つてくると、雪を含んだ冷い川風が頰を斬るやうに水の面から吹いて來た。

十五

それから又懊惱と失望とに毎日鬱ぎ込みながら爲すこともなく日を過してゐたが、もし京都の地にもう女がゐないとすれば、去年の春以來歸らぬ東京に一度歸つてみようかなどと思ひながら、それもならず日を送る内一月の中旬を過ぎたある日のことであつた 陰氣に曇つた冷い空つ風の吹いてゐる日の午前、内にばかり閉籠つてゐると氣が鬱いで堪へられないので、又外に出て何の當てもなく街を歩いてゐたが、やつぱり例の、女のもとゐたあたりに何となく心が惹かれるのでそちらへ廻つて行つて、横町を歩いてゐると、向うの建仁寺の裏門の處を、母親が、こんな寒い朝早くから何處へ行つたのか深い頭巾をして此方へ歩いて來るのが、遠くから眼に付いた。私はそれを一目見ると、心にうなづいて、

「この機會を何時から待つてゐたか知れぬ。」と心の中に小躍りしながら、そこの廻り角の處で何方に行くであらうかと、ほかに人通りのない寂しい裏町なので此方の板塀の蔭にそつと身を忍ばせて、待つてゐると、母親はそれとは氣が付かぬらしく、その廻り角の處に來て、左に折れた。……そこを左に折れると、先々月の末に探しあてて行つた例の路次裏の方へ行く道順である。私は、母親をやり過して置いて、七八間も後れながら忍び／＼跟いてゆくと、幾つもある廻り角を曲つて段々此の間の家の方へ近づいて行く。そして、たうとう、やつぱりその路次を入つていつた。母親の姿が路次の曲り角を廻つて見えなくなると、私は、小走りに急い

で後を追うてゆくと、母親は、やつぱり過日の三軒竝んだ中央の家の潜戸を開けて入つてゆくところであつた。そして入つたあとをはたりと閉めてしまつた。

　私はこちらの路次の入口の處に佇立まつて「ははあ。」とばかりその樣子を見ながら、心の中で、「今まで言つてゐたことは何も彼も皆な譃ばかりであつた。やつぱり女も此の家にゐるにちがひない。」と獨りでうなづいて、

「もう斯うして居處を突留めた以上は大丈夫である。これから一と思ひに踏込んでやらうか。」と思つたが、いや〳〵長い間の氣の縺れに今は精神が疲勞し切つてゐる。今すぐ、あの戸を叩いては、又仕損じることがあつては可けない。あの家の中に女が潜んでゐると知つたら安心である。敢て急ぐには及ばぬ。ゆつくり心を落着けて、精神の疲勞を回復した上で話に取り掛つても遲しとせぬ。さう思案をして、そのまゝ靜と路次を引返して表の通りの方へ出て來た。そして早く一應宿へ歸つて、積日の辛苦を寛げようと思つて電車の方に歩いてくると、去年の十二月の初から、空漠とした女の居處を探す爲にひよつとしたら憔悴の極、喪失して病死しはせぬだらうかと自分で思つてゐた、その居處を突留めた悦びやら悲しみやらが一緒に込み上げて來て、熱い玉のやうな涙がはら〳〵と兩頰に流れ落ちた。そして神經が無暗に昂つて、胸の動悸が早鐘を撞くやうにひゞく。寒い外氣に晒れて頰のまはりに乾き付く涙を、道を行く人に憚るやうにしてそつと拭きながら、私は心の中で、

「やつぱり初から彼處にゐたのだ。それを、あの母親の云ふことにうま〳〵と騙されて、ありもせぬ遠くの方ばかし探してゐた。今の處に變つて來る前先の時もあの路次にはもうゐないといふから、さうかと思つてゐると、やつぱり彼處にゐたのであつた。今度も亦さうであつた。一度ならず二度までも輕々と、あの母親のいふことを眞實に受けて、この貴重な腦神經を、どんなに無駄に浪費したか知れぬ。」と、口惜しさと憤りとで頭が赫となるやうである。

　それから二三日の間はつとめて心をほかの事に外らして氣を鎭め、神經を休めてから今度は餘程の強い決心をして又その路次に入つて行つた。そして入口の潜戸の處に立つて引張つてみたが、やつぱり晝間でも中から錠を下ろしてゐると思はれて開かない。

「ご免なさい。」

と、聲を掛けてみた。すると、入口の脇の櫺子窓をそつと開けて母親が顏を出した。

「おかあはん、やつぱり此處にゐるんぢやありませんか。」と、私は、何處までも好きな女の母親に物をいふやうに優しい調子でいふと、母親は、それでもまだ剛情を張つて、「こゝは私の家と違ひます。先から、さういうてるやおへんか。」と、飽までも白ばくれようとする。

私も心で勃然としながら、

「いや、もう、そんなに隱さない方が可いです。あなた方は初から此處に居たのけ分つてゐるんだ。お幾さんはどうしてゐます？」

　さういふと、母親もさすがに包みかねて、聲を柔げながら、

「今まだ病氣が本當にようありまへんさかい。ようなつたら、あんたはんにも會はせますいうてるやおへんか、どうぞ今度また會うてやつとくれやす。」

　と調子のいゝことをいふ。

「そこに居るんなら、今會つたつていゝぢやありませんか。」

「今一寸留守どすさかい。又加減がようなつたら、私の方から、あんたはんにお知らせしますもう暫くの間待つてとくれやす。」

窓の内と外とで立ちながら、そんな話をしたが、母親は入口を開けて私を家の中へ入れようとせぬ。そして終には、呆れて應答も出來ないやうな野卑な口をきいて毒づくのである。そもそも女に逢ひ初めた時分、それからつい去年の五月の頃、女の家に逗留してゐた時分に見て思つてゐた母親とは、まるで打つて變つた醜婆らしい本性を露出して來た。

それにつけても、まだ女の家にゐた頃、女が、私と二人ばかりの時、

「內のお母はん、一寸慾の深い人どすさかい。」

と、一と口いつたことのあつたのを、ふと想ひ起した。それを質樸な婆さんと見たのが此方の誤りであつたか……そんなことを思つた。

私の心の中を正直に思つてみれば、もう、女の顏を見たいが一心である。ともかくも一度どうかして本人の顏が見たい。振顧つてみると、母親にこそ近頃度々會つてゐるが、本人の顏を見たのは、もう、去年の七月の初彼女の處から山の方に立つていつた、あの時見たきり七八ケ月といふもの見ないのである。流行感冒から結核に異狀を來たして長い間患つてゐたといふから、どんな容姿をしてゐるか、さぞ病み細つてゐるであらう。どうかして一度顏を見たいものである。そして出來ることなら母親に內證で、此方の胸をそつと向うに通ずる術もないものかと、いろいろに心を碎いたが、好い方法も考へ付かぬ。毎日そこの路次口にいつて立つてゐたなら、風呂に行く時にでも會はれはせぬかと思つてみたが、一月から二月にかけて寒い最中のこととて、あまりに無分別なことをして病氣にでもなつたら、此の上に尙ほ詰らぬ目に會はねばならぬと思ふと、そんなことも出來ぬ。そして時々路次に入つていつて入口の處に立つて家の中の樣子に耳を澄ましてみるが、人がゐるのか、ゐないのか、ことりといふ音もせねば話聲も洩れぬ。そつと音のせぬやうに潛戶を引張つてみても、相變らず閉め切つてゐて動かない。入口の左手が一間の櫺子窓になつてゐて、自由に手の入るだけの荒い出格子の奧に硝子戶が立つてゐて、下の方だけ擦り硝子をはめてある。そこから、手を插入れて、試みにそつとその硝子戶を押してみると五六寸何の事もなくすうつと開きかけたが、ふつとそれから先戶が動かなくなつたのが、どうやら誰か內側からそれを押へてゐるらしく思はれたので、此度は二枚立つてゐる硝子戶の左手の方を反對に右手に引かうとすると、それも亦抑へたらしく開かない。どうしようかと思つて一寸考へたが、一旦押す手を止めて置いて、その出窓が一尺ほどの幅になつてゐるので、此度は隣りの家の入口の方に廻つて、その橫手の方から、一と押しに力を入れて、ぐつと押すと、此方の力が勝つて、硝子戶は一尺ほどすつと開いた。そして內側をふつと見ると、向うの窓の下の處に、嬉しや、彼女が纖細い手でまだ硝子戶に指を押しあてたまゝ私の方を見て、默つてにつこりとしてゐる。その顏は病人らしく蒼白いが、思つたよりも肥えて頰などが圓々としてゐる。近いころ髮を洗つたと思はれて、ばさばさした髮を束ねて櫛卷にしてゐる。小綺麗なメレンスの掛蒲團をかけて置炬燵にあたりながら氣慰みに絲刺しをしてゐた處と見えて、右手にそれを持つてゐる。私は窓の橫から覗きながら、

「お幾さん。」と低い調子で深い心の籠つた聲をかけた。

と、そこへ、その物音を聽き付けて、次の間から母親が襖をあけて出て來て、

「なんで、そない端の處に出てゐるのや、早うこつちお入りんか。そな處にゐるからや。」と、ひそひそ小言をいひながら、力なげに起ち上つた彼女の背後に手を添へて奧の間の方へ推し隱

してしまつた。そして硝子戸を今度はぴつしやり閉めてしまつた。折角好い鹽梅に顏を見ることが出來たのに、一と口も口を利く間もなかつた。

けれども、長い間戀ひ焦れて、たつた一と目でもいゝから見たい〳〵と思つてゐた女の顏を見ることができたので、ちやうど、長い間冬威にうら枯れてゐた灰色の草原に綠の春草が芽ぐんだやうに一點の潤ひが私の胸に甦つてきた。病後の血色こそ好くないが、腫んだやうに圓々と肥つて、につと此方を見て笑つてゐた容姿には、決して心から私といふ者を厭うてはゐないらしい、毒氣のないところが表はれてゐた。あゝして小綺麗なメレンス友禪の掛蒲團の置炬燵にあたりながら縫刺しをしてゐた容姿が、明瞭と眼の底に映着いて、いつまでも離れない。それにしても、あれは、何人が、あゝさして置くのであらう? よもや背後に誰も付いてゐないで、氣樂さうにあゝしてゐられる筈がない。

そんなことを思ふと、身を煎られるやうな惱ましさに胸の動悸が躍つて、殆ど居ても起つてもゐられないほど女のことが思はれる。

そして、もう惡性の流行感冒に罹つても搆はない、もし、そんな事にでもなつたら、却つて身を棄て鉢に思ひ切つたことが出來る、生半に身を厭へばこそ心が後れるのだ、誰か男が背後に付いてゐるにちがひないとすれば大抵夜の八時九時時分には女の家に來てゐるであらうと、その頃を見計らつて、殆ど毎夜のやうに上京の方から遠い道を電車に乘つて出て來ては路次の中に忍んで、女の櫺子の窓の下に凝と立つてゐた。そして、家の中から男の話聲が洩れはせぬか、その男の聲が聽きたい、どんなことを話してゐるであらう? と冷い黑闇の夜氣の中に暫く凝乎と佇んでゐても、家の中からは、ことりの音もせぬ。そつと例の硝子戸に觸つてみるけれど、重い硝子戸は容易に動かない。誰も居ない留守なのかと思つてゐると、居るにはゐると思はれて、疊の上を人の歩く足音がする。それが母親であつたら勝手が惡いと思つたが、試みに、誰とも分らないほどに低い聲で、

「今晩は〳〵。……ご免なさい〳〵。」

と聲をかけてみると、すつと内から硝子戸が一尺ばかり開いてそつと、白い顏を出したのは、中の電燈を後に背負つて、闇がりではあるが、たしかに彼女である。そして、默で外の闇の中を探るやうにしてゐる。

「お幾さん。」

と、私は思はず櫺子窓に寄り添ふやうにして力の籠つた低聲で呼び掛けながら手に物を云はせて、おいで〳〵をして見せると、彼女は、聲の正體が分つたので、そのまゝ默つて、急いで硝子戸を閉めてしまつた。どうすることも出來ない私はちやうど猿が樹から落ちたやうな心持になつた。向うで幾らかその氣があるなら、何とか合圖くらゐのことはしてくれさうなものであるのに、少しもそんな樣子のなかつたのは、すつかり心が離れてしまつてゐるからである。さう思ふともう心に勢が脱けて、その上つゞけて寒い闇の中に佇んでゐる力がなくなり、落膽と悲憤とに呼吸も絶え〴〵になりさうな胸をそつと搔き抱きながら空しく引返して戻つてくるのであつた。

それ以來硝子戸を固く釘付けにでもしたと思はれて、夜の闇にまぎれて幾ら押してみても引いてみても開かなくなつてしまつた。相變らず出掛けていつて窓の下に佇んで家の中の物音に身體中の神經を集めて耳を澄ましても母子の者の話す聲さへせぬ。何とか家の中を窺いて見る方法はないかと思つて、硝子戸を仰いで見ると、

下の方は磨き硝子になつてゐるが上の方は普通の硝子になつてゐるので、路次の中に闇にまぎれて、人の通るのを恐る〳〵そこらに足を踏み掛けて密と櫺子格子に取り付いて身を伸び上つて内を窺くと、表の四疊半と中の茶の間と兩用の小さい電燈を茶の間の方に引張つていつて、その下の長火鉢によりかゝりながら彼女が獨りきりでいつかの絽刺しをしてゐるのが見える。そして身體が三分の一ばかり手前の襖に隠れてゐるので、その蔭に母親もゐるのか分らない。とにかく靜かで、たゞ絽刺しの針を運ぶ指先が動いてゐるだけである。こちらが窓に伸び上つてゐる物音でも聞えたら、ついと振向きさうであるが、それも聞えぬのか、まるで石像のやうに靜かにしてゐる。ついでに内の中の様子を見ると、此の間は氣が付かなかつたが、すぐ取付の表の間には壁の隅に二枚折りの銀屏風を立て、上り口に向いた處には又金地の衝立などを置いてゐる。

「あんな、いろんな家具などを買込んでゐる。」と、それに何となく嫉妬を感じながら、心急き急き偸よく見ると、内は三間と思はれて茶の間のも一つ奥が一枚襖を開いたところから、そちらは明るく見えてゐる。そしてそこに寢床を布いてあるのが半分程見えてゐる。私は神經が凝結したやうになつてそちらを、なほぢつと見ると、木賊色の木綿ではあるが、ふか〳〵と綿の入つた敷蒲團を二三枚も重ねて敷き、そのうへに襟の處に眞白い布を當てた同じ色の厚い掛蒲團を二枚重ねて、それをまん中からはね返して、もう寢さへすればよいやうにしてある。そちらの座敷が明るいので、よく見える。私はもう身體中の血が沸き返るやうである。

「旦那が來てゐるのだらうか？」と、小頭を傾けてみた。

旦那らしい者があると思つて見るさへ、何とも云へない不快な氣持がするが、いかに慾目でそんなものは無いと思はうとしても家の中の様子では、それがあることは確かである。果して自分の他にまだそんな者があつて、今その世話でかうなつてゐるとすれば、どう、自分の身びいきといふ立場を離れて考へても不埒である。たとひ賣女にしても、容易にそんな事が出來る譯のものではない。しかし、それは彼女の自分の意思でさうなつたものか？ 本人の心底をよく訊いてみなければならぬが、「二三日前の夜一寸額を覗けた時、素氣なく硝子戸を閉めたことと云ひ、そののちからして硝子戸を開かなくしたことなどを思ひ合しても女には私の事にふつつり氣がなくなつてしまつたのではなからうか？ 何とかして此方の懊惱してゐる胸の中を立ち割つたやうにして見せたいものだ。母親の言つた詐りごとを眞に受けて、あの十一月の初の寒い日に、山科の在所といふ在所を、一日重い土産物などを兩手にさげて探し廻つたこと、それから去年の暮のしかも二十九日に押迫つて、それも母親のいふ通りを信じて、わざわざ汽車に乗つて、南山城の山の中に入つて行かうとしたこと、又京都中を探し歩いたこと、そんな心勞を數へ立てていふ段になつたら幾らいつても盡きない。……女は硝子戸一枚隔てたすぐ眼の前にゐながら、此の心の中を通ずる術もない。

私は櫺子格子からやつと手を放して地におり立ちながら、「旦那が來てゐるので、あゝして寢床までちやんと用意してあるのだらうか。それとも自分の寢床かしらぬ？」

そんな者が來てゐるなら、あゝして自分獨り默つて絽刺しをしてゐる筈もない、すると、あれは、これから自分の寢る床であらうか。どうかして旦那が來てゐる處を突留めたい。それが、どんな人間であつても自分はそれに遠慮し

て手を引くのではない。自分より以上深い關係の人間かほかにあらうとは思へない。……

さうして心の中は瞋恚の焔に燃えたり、又堪へ難い失望のどん底に沈んでしまつたやうな心持になつたりしながらも又ふと思ひ返してみると、女は長い間の苦界から今漸く脱け出でて、あゝして静に落着かうとしてゐるところである。それを無残に突き崩さうとするのはみじめのやうでもある。さうかと思ふと、又自分と云ふ者を振返つてみると、どうであらう。この眞冬の夜半に寒風に身を曝して女の家の窓の下に佇みながら家へ入つて行くこともならぬ。しかも此方は彼女の爲に、長い間殆ど自分の凡ての欲求を犧牲にして出來る限りのことを仕盡して來てゐるのではないか。あゝして温々とした寝床などをしてゐるのに、自分はどうかといへば、これから宿に歸つて冷い夜具の中に入つて寂しく寝なければならぬのである。すると、又どう考へても道理に合はない母子の勝手至極を憤らずには居られない。

「よし。どうあつても、これは此のまゝには棄てて置かないぞ。」と思つたが、あまりに心が疲勞してゐるので、その晩はそのまゝ悄然として宿に戻つた。

十六

でも、どうかして女だけに此方の心を通じたい。亂暴なことをして、女の心が、もし、自分から離れてゐなかつたとしたならば、その爲に却つて、自分を遠ざかつてゆくやうなことがあつてはならぬと思ひ、胸はいろんな思ひで一杯になりながらやつぱり思ひ切つたことを爲得ないでゐたが、もうさうしてゐるのに耐らなくなつて、二三日過ぎた晩同じやうに窓の下に立つてみたが、相變らず靜寂としてゐる。男が來てゐるかゐないか分らないが、來てゐれば、かうすれば聞くであらう。その女には、こんな者が付いてゐるぞと思はせようと思つて、潛戸の處に寄つて、臆せず、二つ三つ、

「今晩は！」と高い聲を掛けた。

すると、

「どなたはんどす？」といひながら、母親が硝子戸を開けて顏を出した。

「今晩は、私です。」

「あゝ、あんたはんどすか。あなたはんには、もう用はない。」と、いつて、そのまゝぴしやりと硝子戸を閉めてしまつた。

さうなると、もう、耐へにこらへぬいてゐる憤怒が赫と込み上げて抑へることが出來ない。私は、わざと夜遲く近處合壁に聞えるやうに、潛戸をどん〳〵打ち叩いて、

「今晩は〳〵〳〵。」とやけに呼んだ。

すると、家の中でも默つてゐるわけにゆかず母親に又硝子戸を開けて顏を出して、少し先よりも低い聲で、

「何か用どすか。」といふ。

「何か用どすかもないもんだ。用があるから呼んでゐるのです。話があるからこゝを開けて下さい。」

「開けられまへん。こゝは私の家と違ひます。」

「あゝ、もう、そんな何時までも白ばくれたことをいひなさんな。幾ら口から出まかせをいつて、人を騙さうとしても、此方が正直なもんだから、應は騙されてゐるが、騙されたと知つただけ餘計腹が立つ。私を一體何だと思つてゐるんだ。お前さん達に、いつまでもいゝやうにされてゐる子供ぢやないんだぞ。東京でもう散々ばら騙を嘗めて來てゐる私だ。今までこゝの女に焦れてゐればこそ馬鹿にされ放題馬鹿になつてゐたが、かう見えても丹波や丹後の山の中から出て來た人間とは人が違ふんだ。」私は、自分ながら少し下品だと思つたが眞暗な夜のこと

はあり、人の往來もない、深く入り込んだ路次の中とて、母子に聽かすよりも、もし男でも來てゐたら、それに聽かすつもりで、そんなことを癇高い調子でいひ續けた。そしてもし、男が來合せてゐるならそこへ顏を出せば丁度いゝと思つた。

　すると、母親は、いつもに似ず私の劍幕が凄じいのと、近處隣りへ氣を兼ねるので、いつもの不貞腐れをいひ得ないで、私をそつと宥めるやうに、

「まあ、あんたはんもそんな大きい聲をせんと置いてくれやす。あんたはんも身分のある方やおへんか。あんたはんの心は私にもよう解つてますよつて、あの娘が病氣が好うなつたら又會はせます。」

「病氣が好くなつたら會はせますつて、もう好くなつてゐるぢやありませんか。」私も少し聲を低くした。「私が、どんなに、あなた方二人の身の事を長い間思つて上げてゐるか、――決して恩に被せるのではないが――その事を少し思つてみたなら、假令今までのやうな商賣をしてゐた者でも、私に譃が吐かれる筈がない。……いや山科のお百姓の家に出養生をさしてゐるの、いや南山城の親類が引取つたのといつて、みんな眞赤な譃ぢやありませんか。あなたはよく金神樣を信心してゐるが、何を信心してゐるのです。」私の言葉は段々優しい怨み言になつて來た。

　母親がそれについて何かいはうとするのを、押被せるやうにして言ひ捲つた。

「えゝ、よう解つてますよつて、今夜はもう遲うおすさかい、又出直して來とおくれやす。あんたはんの氣の濟むやうにお話しますよつて。」

「あゝ、さうですか。それぢや又近いうちに來ますから此度、又、もう話すことはないなどと云つては承知しませんよ。」さういつて、私は、音無しく振返つて歸らうとすると、母親は、さういつた口の下から、すぐ、

「勝手にせい。此度來たら寄付けへん。」と、棄てぜりふを、私の背後に浴びせかけながら、ぴしやりと硝子戸を閉めた。

　私は、「そら又、あのとほりの惡たれ婆だから始末に可けない。」と心の中で慨歎しながら、後戻りをして、も一度戸を叩いて、近處へ恥しい思ひをさしてやらうかと思つたが、いつものとほり失望と悲憤との餘り息切れがするまで精神が消耗してゐるので、靜と胸の動悸を抑へるやうにしてそのまゝ路次を出て來た。

　しかし、もう、さうなると、今までのやうに、女の氣を測りかねて、差控へてばかりゐられなくなつた。何とかして家の中へ這入り込んでゆく方法はないものかと樣々に心を碎きながら、好い機の來るのを待つてゐた。すると、いつもの通り夜九時頃になつて櫺子窓の下に立つて聞くと、めづらしい人が來てゐると思はれて男の話聲がする。はつと、私は胸を躍らしながら、ぢつと耳を澄ますと、來てゐるのは一人だけでないと思はれて女の話聲も交つてゐる。どんなことを話すかとなほ聞いてゐると、

「ほんならもう歸りまへうか。」と四五十ばかりの女の聲がして、

「あゝ歸りまへう。」と、それに應ずる男の聲がする。その晩は家の中も明るい。それで急いで又そつと格子に取り付いて伸び上がつて、ちらと家の内を窺ふと、一番奥の、たしか六疊の座敷に、二三人の客が丁度今立ち上がつて歸らうとするところである。私は急いで格子を滑り下りて、すぐ左手の隣りの家ではまだ潛戸を閉めずにあつたので、それを幸ひと、そこの入口に身を忍ばせて上り框に腰を掛けながら、女の家から人の出てゆくのを遣り過してゐると、

「えらい御馳走さんどした。」と口々に禮をいつ

て、何か彼か陽氣な調子で話しながら、ぞろぞろ出て來た。こちらは堅くなつて息を詰め、兩方の家の中から幽かに洩れてくる灯の明に、路次の敷石をから〳〵踏み鳴しながら歸つてゆく人影を見張つてゐると、闇がりでよく分らぬが、女はお茶屋のおかみらしく、中央に行くのが男で、脊が高い。はてな、旦那ならばからして一緒に歸つてゆく筈もなからうと思つてゐると、一番後の女と竝んで、何か密々と話しながらゆくのは母親である、私は、

「あゝ、母親のやつめ、出てゆく。そこの路次の出口まで客を送り出すのであらう。きつと、すぐ歸つてくるので、潛戸を開けたまゝにしてゐるかも知れぬ。

と、早速氣が付いて、それ等が闇がりに路次の角を曲つたのを見濟まして置いて、入口の處に來てみると、果して潛戸を開け放しにしてゐる。

私は、巧く仕て遣つたりと心にうなづきながら、つゝと內へ入りながら、中から潛戸を閉めて置いて狹い通り庭をずつと奧へ進むと、茶の間と表の間との境になつてゐる薄暗い中戸の處に、そこまで客を送り出したものと見えて女がひとりで立つてゐる。

そして出し拔けに私が這入つて來たのを見て、

「あゝ！」と愕えたやうに中聲を發して、そのまゝそこに立ち竦んだ。

私は、いゝ氣味だといふやうに強ひて笑ひながら、

「お幾さん、一遍あんたに會ひたいと思つてゐたのだ。」と、つとめて優しくいひつゝ、私はそのまゝ茶の間へ上がつて、火鉢の手前にどつかと坐つてしまつた。

女はそこらを形付けてゐたらしかつたが、もう、おづ〳〵しながら爲方なく自分も上にあがつて、向うの方に膝を突きながら、

「あんたはんが今此處へ來ておくれやしたんでは、私、どない云うてえゝかわかりまへん。」と悄然としてふるへ聲にいふ。その眼は何ともいへない悲痛な色をして私を見てゐる。

私は、氣味がいゝやら、可愛いやらである。

そこへ、がら〳〵と表の潛戸の開く音がして、母親が戾つて來た。

十七

私は、入つて來た時、よつぽど、あの潛戸の猿を落して、母親に閉め出しを食はしてやらうかと思つたが、それも、あんまり意地が惡いやうで、それまでにはし得なかつた。それといふのも、さうまでになつても、私の心の內は、やつぱり何とかして、母子の心が、自分の方へ向いてくるやうに優しく仕向けたいからであつた。

母親は通り庭から中の茶の間の前に入つてくると、思ひがけなく、火鉢の向うに私が來て坐つてゐるのを見ると、吃驚して忽ち狂氣のやうになつて怒り出した。

「あんたはん、何でこゝの家へ入つておいでやした。此處は私の家とちがひます。」と、いひながら上り框をあがつて、娘に向つて、

「お前もどうしてるのや、よう氣いお付けんか。あんたが入れたんやろ。」と、小言をいふ。娘は靜とそこに坐つたまゝ、

「わたし、そんなことをしいしまへん。この方が自分で入つておいでやした。」と尋常な調子でいつてゐる。

私は凝乎と兩腕を組んで、その場の光景を見ながら、母親から何といはれても、太々しく默り込んで、身動きもせずに坐つてゐた。すると、母親は、さすがに手出しはし得なかつたが、今にも打ちかゝつて來さうな氣勢で、まるで病

犬が吠えつくやうな狀態で、すこし離れた處から、がみ〳〵いつてゐる。

「あんたはん、何の權利があつて此處の家へ默つて入つておいでやした。こゝの家は私の家と違ひまつせ。」と、いひつゝ肱を突張つて段々私の傍に橫から擦り寄つて來て、

「默つて餘處の家へ入り込んで來て、盜人……盜人！」と、隣り合壁に聞えるやうな、大きな聲を出して我鳴りつゞけた。

「警察へ往てさう云うてくる。警察、警察。さあ警察へうせい。警察へ連れて往く。」と、母親は一人で端たなくいきり立つたが、私が微塵も騷がうとせぬので、どう手出しの爲樣もない。本人の娘はむすめで、これも何うしていゝか當惑したまゝ、そこに坐つて口も利かずに母親の騷ぐのをたゞ傍見してゐるばかりである。私は小氣味のよさゝうに、飽くまでも泰然としてゐた。すると母親は、急を呼ぶやうに聲を揚げて、

「兄さん！　にいさん！」と、左手の隣家の主人を呼んだ。その隣家は、去年の十一月の末、はじめてその路次の中へ女の家を探ねて入つていつた時から折々顏を見て口をきゝ合つてゐたのであつたが、先達て中から又度々私が出掛けていつて、母親と大きな聲でいひ諍つたりするのを見かねて、もう七十餘りにもなる主人の母親といふのが雙方の仲に入つて、ちよつと口を利きかけてゐたのであつた。旅館や席貸などの多いその一郭を華客先きにして、そこの家では小綺麗な仕出し料理を營んでゐたが、兄さんと呼ばれた主人はまだ三十五六の脊の高い男で、その主人とは私はまだ顏を見ただけで一度も口を利いてゐなかつた。母親がさういつて大きな聲で呼んだので、越前屋といふ仕出し屋の若い主人は印の入つた襟のかゝつた厚子の鯉口を着て三尺を下の方で前結びにしたまゝのつそり入つて來た。

さうして吟々いつてゐる母親と私とのまん中に突立つたまゝ、「まあ〳〵、どちらも靜かにおしやす。」と、兩方の掌で抑へる形をして、

「丁度好いとこどした。此間から私も見て知らん顏はしてゐましたけど、一遍お話を聽いてみたい思うてたのどす。」といつて、そこに腰を下ろすと、母親は隣りの主人が入つてきたので氣が强くなつて、一層がみ〳〵云ひ募つた。主人はそれを宥めて、

「お母はん。まあさういはんと、話はもつと靜かにしてても解りますよつて。」といつて、此度は私の方に向ひ、

「兄さん、えらい濟んまへんが一寸あんたはん私のとこへ往とつておくれやす。……いえ、私も及ばぬながらかうして仲に入りましたからには此のまゝには致しまへんよつて。」と、いふ。

けれども私は、今までもう幾度か、いろんな人間が仲に入つたにも係はらず、其等は皆母親に味方して、邪魔にこそなれ、此方の要求するとほり、一度だつて、肝腎の本人に差向ひに會はしてくれて納得のゆく話をさする取計らひをしてくれようとはしなかつた、それを思うて、私は幾度か腹の内で男泣きに泣いて、人の無情をどんなに憤つたか知れなかつた。これまでは、自分の熱愛する女がさうせよといふなら、もう一生京都に住んで京の土になつても厭ひはせぬとまで懷かしく思つてゐたその京都を、それ以來私はいかに憎惡して呪つたであらう。出來ることなら、薄情な京都の人間の住んでゐるこの土地を人ぐるみ焦土となるまで燒き盡してやりたいとまで思つてゐるのである。他人は悉く無情である、自分のこの切なる心を到底察してはくれない。そんな他人に同情してもらつたり、憐んでもらつたりしようとはかけても思はぬ。自分の大切な〳〵魂の問題である。その爲に假し病つて死んだつて、又恥づべき名

が世間に立たうとも自分ひとりの事である。何人にもどうしてくれといひたくない。それ故にこそ、實に一口に云はうとて云へないくらゐ、様々に胸の摧ける思ひをして、やつと今晩といふ今晩、またと得られない機會を捉へて斯うして女の家に入り込んだのである。今までの母親の仕打からいつたならば、此機會を逸したが最後二度と再び此樣な好い都合なことはないのである。私は隣家の主人に向つていつた。

「有難うございますが、今までちよい〳〵御覧のとほりの次第で大抵私の恥しい事情はお察しであらうと思ひますが、今晩はどうあつても、この本人の意向を、私自身で訊きたいと思つてゐるのですから。」

と、私は、傍で先刻から口の絶え間もなく狂犬のやうに罵つてゐる母親には脇眼もくれず、向うに靜かにして坐つてゐる女を指しながら堅い決意を表はした。さうして久し振りに見れば見るほど女が好くつて堪らない。

すると主人は、

「そやから、このまゝにはしまへんというてゐます。姉さんには私が必ず後で逢はせますよつて、一寸私の家へ往とつておくれやす。」と萬事飲込んだやうにいふ。

それで私も物解りよく素直に、

「それでは貴方におまかせして置きます。」と、きつとした調子でいつて、起ち上がりかけると、彼女は何う思案したものか、靜かに坐つたまゝ、やつと口を切つて、

「あんたはん、ほんなら、これから松井さんへ往て話しとくれやす。」と、きつぱりした調子でいふ。

それで、私は一旦起ちかけた腰をまた下ろしながら、

「うむ、それもよからう。松井さんへ往けといふなら、彼處へ往つて、あそこの主人に話を聴いてもらふのもわるくはないが、あんたも私と一緒に往くか。」

さういつて訊くと、女はそれきり又默つてしまつて返事をしない。

「お前が一緒に往くなら私も往く。さあ、どうする。」

傍にゐる越前屋の主人は、その時口を入れて、

「それがよろしいやろ。ほんならさうおしやす。私も何や、途中から入つて、前の委しいことは一寸も知らんのどすさかい。お隣りにゐて、默つて見てもゐられまへんよつて、何とかお話をしてみようと思うたのどすけど、松井さんやつたら、よう、今までの事も知つてはりますやろから。」

「わたし後で往きますよつて、あんたはん先き往とくれやす。」と、やつぱり落着いた調子でいふ。

私は頭振りをふつて、

「それぢやいけない。私を先きに出し遣つて置いて、こゝから又閉め出さうとするのだらう。今晩はもうその手は喰はないんだから。」

「そんなこと爲いしまへん。あんたはん一足先きいてとくれやす。わたし一寸遲れて往きます。」

「あゝさうか、たしかに來るね?」

「えゝ往きます。」

隣家の主人も、長い間の入譯を知つてゐる、以前の主人の處に往つて話を聴いてもらふのが一等可からうと云つてすゝめるので、私はその氣になつて起つて庭に下りようとすると、先刻からまるで狂氣になつて、何か彼かひとり語をくど〳〵と繰返して饒舌りつゞけてゐた母親は、私が立つて上り框から庭に下りようとするのを見て、

「貴樣ひとりで、勝手にさつ〳〵とうせえ。内の娘はそんな處へ出て往く用はない。」といつ

て、又いつもの悪態を吐く。
　それを聞くと、私は、とても箸にも棒にもかからぬ没分暁漢だとは、承知してゐるので、もう、なるべく母親とは、何をいはれても、口を利かぬ、對手にもせぬやうにして居らうと堪へてゐても、やつぱり堪へきれなくなつて、私は、上り框に下りかけたまゝ、
「何をいふ。」と、そつちを振顧つて、「きつと、そんなことだらうと思つてゐるのだ。よし、そんならもう可い。もうどんな事があつても此處を立ち退かないのだから、何時までも此處に居据つてゐませう。……お隣りの親方、御免なさいよ。」と、いつて、私は又もとの座に戻つて坐つた。
　すると越前屋の親方は、
「まあ、ほんたら、兄さん一寸私の處へ往こことくれやす。私が引受けて一應お話をしてみますよつて。お母はんも、もう、ちよつと靜かにしてとくれやす。隣家が近うおすよつて。その事は私が、後でよう聽かしてもらひます。」
　と、いつて、雙方を宥めようとする。
　それで私は又、物解りのよい子供のやうに素直に、隣家の主人のいふことを聽いて、
「それでは一寸お宅へ往つてお邪魔をしてゐますから、どうぞ宜しく頼みます。」といつて出てゆかうとしながら、ぢつと女の方を向きざま、見ると、平常から大きい美しい眼は、今にも、ちよつと物でも觸れば、すぐ泣き出しさうに、一層大きくこちらを見張つて、露が一ぱい溜つてゐる。私はその眼に心を殘しながら、合壁の隣家へ入つていつた。

十八

　そこの家も、女の家と同じ造りで三間の家であつたが、もう此間から、その事で、ちよいちよい顔を見合はして、口も利いてゐる七十餘の老婆に酒が好きと思はれて中の茶の間の火鉢の前に坐つて、手酌でちびり〳〵酒を飲んでゐた。もう大分上機嫌になつてゐたが、見るから一と癖も二た癖もありさうな、癇癪の強いぎよろりとした大きな出眼の、額から顳顬のあたりが太い筋や皺で拘攣つたやうになつて、氣むづかしいのは、云はずと知れてゐる。
　そこには、その老婆のほかに主人の、若い女房がゐて庭に立ち働いてゐたり、主人の妹らしい三十くらゐと二十餘の女か來合はしてゐたりして、廣くもない座に多勢の人間がゐるのが、私には自分の年配を考へて、面伏せであつたり遠慮であつたりした。そして、近づきのない京都三界に來て、さうした點でそんな家の厄介になつたりするのが何ともいへず鬱屈であつたが、それも思ひつめた女ゆゑと諦めてゐた。
　私は悄然としながら、案内せられるまゝにそちらに通ると、座蒲團を持つて來てすゝめたり、手焙りに火を取り分けて出したりしながら、
「どうぞそないに遠慮せんと、寒うおすよつて、ずつと大きな火鉢の方に寄つとおくれやす。」と苦なしていつてくれる。
　これも何だか半分氣狂ひではないかと思はれさうなそこの婆さんは、酒狂の癖があると思はれて、ひどく興奮してしまつて、此方から禮を厚うして挨拶をしてもそれに應答しようともせず、變に、自分ほど偉い者はないといつた、頭の高い調子で、いつまでも、ちびり〳〵飲んでゐる。いつか聞くところによると、婆さんは、西郷隆盛などが維新の志士として東三本樹あたりの妓樓で盛に遊んでゐた頃舞妓に出てゐて、隆盛が碁盤の上に立たして、片手でぐつと差上げたことなどあつた。婆さんはそれを一つばなしに今でも折々人に話して聽かすのであつた。私は、何の事はない、ちやうど、毛剃九右衛門の前に引出された小町屋宗七といつたやうな恰好で、

その婆さんの前に手を突いて、
「いろ〳〵飛んだ御厄介をかけます。全體あなたに昨日一應話をおねがひして置いたのですから、その返事を待つてゐればよかつたのですが、今晩自分が勝手に隣の家へ入り込んで來て、こんなことになつたものですから。」
何によらず對手の仕向けが少し氣に入らないと、すぐ皮肉に横へ外れて出ようとする風の老婆と見たので、昨日の朝も、向うから、及ばずながら、仲に入つて話してみませうといつてくれたのを幸に一寸賴んで置いたゆきがかりがあつたから、さういつて一言いひ譯をすると、婆さんはぎよつと顏中を顰めたやうに意地の惡さうな眼をむいて、
「いゝや、こんな事に年寄りの出るところやおへん。」と一應さうに、わざと仰山に頭振りをふつたかと思ふと、
「內の倅は年はまだ若うおすけどな、こんなことには私がよう仕込んでますよつて、お爲にならんやうには取計らひまへんやろ。」と、何處までも偉い者のやうにいふ。
しかし私は、女さへ自分の物になるならば、何處まで阿呆になつてゐても辛抱できるだけ辛抱する氣で、婆さんが、どんなに偉さうなことをいつたり、凄じい氣焰を吐いても、たゞ「へいへい」して、ぢつと小さくなつて其處に坐つてゐた。そして、今の此のざまが、見も知らぬ人間の前でなかつたならば、自分にはとても、かうして我慢してゐられないであらうと思ふと、それが東京と遠く離れた京都の土地であるのが、せめてもの幸ひであつた。婆さんは六ケしさうな顏をして膳の上の肴をつゝきながら、ぶつぶつひとり言をいふやうに、
「まだ何處の何方とも一向お名前も承はりまへんけど、出てゐる者に金を取られるといふことは、世間に何ぼもあるならひどすよつて、……茶屋の行燈には何と書いておす、え、金を取ると書いておす。かうお見受けしたところ、あんたはんも、まんざら物の出來んお方でもおへんやろ。向うは人を騙さにや商賣が成り立ちまへん。それを知つて騙されるのは此方の不覺。それを又騙されんやうでは、遊びに往ても面白うない。出てゐた者が引いた後まで、馴染のお客やからいうて、一々義理を立ててゐては、今日その身が立ちまへん。……何處の何方はんかまだお名前も知りまへんが、こりやあ、わるい御量見や。」婆さんは一語々々に尤もらしう力を籠めて說諭するやうにいふ。
私は、まだ名前を承はらぬと、厭味をいはれたので、それには聊か當惑しながら、
「それは、まつたく私の不行屆でした。つい此度の事に心を取亂して申し忘れてゐました。私はなにがしと申す者でございまして、生國は何處ですが、もう長く東京に住んで居ります。」
さういつて初めて本名を語ると、婆さんは何處までも皮肉らしく、
「いや、それを承はつても私共には御用のないお方でございますやろけど。」と、酒盃を口にあてながらわざと切り口上に云つて、
「さだめしあんたはんにも親御達がござりますやろ。わたくしの處にも、役には立ちまへんが、あゝとほりまだ若い倅が一人ごはります。もう此の間から、あんたはんのお出でやすとこを見るにつけ、私はほかの事は思ひまへん。これがわたしの處の倅であつたら、わたしはどないな氣がするやろ思ふと、この胸が痛うなります。」
婆さんは、さういひながら、さも〳〵胸の痛みに觸るやうに皺だらけの筋張つた顏を一層顰めて、そつと胸に手を當てる形をした。「あんたはんはそりや、御自分の好きな女子の爲に勝手に自分の身を苦めておいでやすのやろさかい、ちつとも私、構ひまへんで。そやけど親御の身に

なつたら、どないに思ふか。わたしは、あんたはんの顏を見るのが辛い。もう、わたしは、あんたはんが此處の路次へ入つて來るのを見るのが厭どす。見たうない、見せておくれやすな。」

婆さんは一人で、きかぬ氣らしく頭振りを振りながら言ひ續けるのである。私は、揉手をせんばかりに、はい〳〵して、

「あなたの仰有ることは、一々御尤もです。けれども私にとつては又一と口に申すことの出來ない深い譯があるのですから……」

「あゝいや、もう、その譯がようない。それは聽かいでも解つてます。まあ、倅が何んとか埒の付く話をしてゐますやろ。どうぞ遠慮せんと待つといでやす。」いくらか氣を鎭めてさういつてゐるかと思ふと、婆さんは、しきりに酒氣を吐きながら、肴の皿を箸で舐めまはして、

「當年これで七十一になります。年は取つてますが、倅で話が解らなんだら、わたしが出て話します。私がかうといふたら後に寄りまへん。」

婆さんは、皺だらけの腕を捲つてみせて、「まだまだ若いものでは仕樣むない。每日私が小言のいひ續けどす。」まるで何を云つてゐるのか、拘攣したやうに變なところに力を籠めて空談を卷いてゐる。

合壁一つ隔てた女の家では、いつまでも母親ががみ〳〵我鳴る聲ばかりが聞えてゐた。すると、やがて、越前屋の主人は、どうしたのか、その母親を宥め賺しながら連れて戻つて來た。そして優しい言葉で、

「お母さん、どうぞ此方へ。長うお手間は取らしまへんよつて、ちよつと此處でお待ちやしてとくれやす。」といつて、主人は自分で手まめに次の間から座蒲團などを取つて來て、母親にすすめた。

私は、母親の入つて來たのを見ると、まるで敵同志なので、ぷいと立つてそこを外さうとすると、主人は、

「あゝ、兄さんもどうぞそこに居てとくれやしたら宜しい。構しまへんがな。さあ、どなたはんも寒うおすさかい、遠慮せんと、ずつと火鉢の傍に寄つて當つてとくれやす。……お母はんも、どうぞ私の處ではもう何んもいはんと置いとくれやす。お話は又後でゆつくり聽きますよつて。」といつて、私の方に向ひ、「兄さんも、どうぞそのおつもりで。」と、顏に多く物を云はして、主人は再び隣りへ引返していつた。

主人がさういふのに連れて、ほかの者も狹い茶の間の一つ處に母親や私を坐らした。見ると母親は先刻の激昂した樣子は幾らか和いで、それでも越前屋の者に對しては尖り顏をしながら、それでもまだ愚癡つぽく、

「えらい遲うから兄さんもお急しい處皆樣にお世話掛けてほんまに濟まんことどす。……あんたはん、昨日こちらのお婆さんにお頼みやしたやおへんか。その返事もまだ聽かんうちから、餘處の家へ默つて入つてきやして、警察へ訴へに出たら、あんたはん罪人やおへんか。あの家は私の家とちがひます。旦那はんが今日は來てゐやはらんからいゝけど、もし旦那はんでも來てゐやしたら、どないおしやす。」母親はまだ先刻の驚きと激怒の餘熱の殘つてゐるやうに、くどくどと一つことを繰返していつてゐる。私は、もう母親を對手に物をいひかけると、此方までが自分でも愛想の盡きるほど下劣な人間に成り果てるやうな氣がしてくるので、もう、どんな氣に障るやうなことをいひ出されても、ぢいつと腹に溜めて居らうとしても、「旦那はんが來てゐたら……」などといはれたので、又、頭が赫となるほど癪に障つたので、

「旦那が何です。私のほかにそんな者があらう筈がない。そんな男がもし來てでもゐたら默つて引込んでゐる私ぢやない。そんな者があるな

ら、今晩それが來合はして居ればよかつたと思つてゐるんだ。いつでも對手をしてやる。
私は堪へかねて、母親の方に向き直つて云ふと、生醉ひに醉ばらつた越前屋の婆さんは、眼と眼との間に額中の皺を寄せて、さも〳〵氣色の惡さう、
「あゝもう、うるさい。喧嘩をするなら、私の家の中でせんと、どうぞ戸外に出てして貰ひまへう。今倅があれほどいうて往きよつたのに、倅の顏を潰さんやうにしてとくれやす。」
そんな調子で私と母親とで睨み合つてゐるところへ越前屋の主人は又戻つて來て、
「おかあはん、えらいお待ち遠さんどした。さあ、もう濟みましたよつて、どうぞ歸つとくれやす。ほんまにえらい濟まんことどした。」主人は撫でるやうに優しくいふと、母親は內の人達に繰返しくりかへし禮をいひつゝ、やがて自分の家へ歸つていつた。

十九

そして、母親が出て歸つたあとの入口を、主人は何度も氣にして振顧つて見ながら、その時まだ庭に立ち働いてゐた女房が、
「もうお歸りやした。」といつたので、安心したやうに、私の方を見て、
「さあ兄さん、えらいお待たせして濟みまへん。どうぞ、もつとずつと火鉢の傍にお寄りやす。夜が闌けてきつう寒うおす。」と、いつて自分も火鉢の向うに座を占めながら、「あのお母はんが傍に付いてゐると、喧しうて話が出來しまへんよつて、それで一寸此方へ來てもらうてました。」主人は落着いていつた。
その顏をよく見ると、主人の眼は泣いたやうに赤く潤んでゐる。そして火鉢の正座に坐つてゐる老母と、横から手を翳して凭つてゐる私との顏を等分に見ながら、低い聲に力を入れて、
「お婆さん、わたし、今姉さんから話を聽いて呆れた。……」越前屋の主人は、あとの句も續かぬやうに濕つぽい調子になつてゐる。
「なんでや？」
「なさぬ仲やの。……」と、聲を秘めていつて、
「私、今はじめて聽かされた。そんなことがないか知らん思うとつたんや。やつぱりさうやつた。」と主人は、ひどく人情につまされてゐる。
婆さんは、それを聽くと、これは又傷ましさに耐へられないやうに仰山に顏を顰めて、
「可哀さうに……」と、呆れた口を大きく開いて一句々々力をこめていつて、うなづきながら、「さうか。それで皆讀めた。……成さぬ仲やと……」二度も三度も思ひ入つたやうに、それを繰返して、尤もだといふやうに、「……いや、さうでもござりますやろ。……これでは話が又一層やゝこしうござります。」
と、やうやく我に返つた調子で、ひとり話のやうにいつて沈吟してゐる。
私は暫く口を噤んで二人の話をぢつと聽きながら最初は自分の耳を疑つて訊き返してみた。
主人は、
「えゝ、眞實の子やないのやさうにおす。」と、私に答へて置いて、「姉さんそれで今えらう泣いてた。私も一緒に泣かされた。」
婆さんは深い歎息まじりに、しんみりとした調子で、
「いや、世の中は廣うおす。世の中は廣うおすわい。……實の子やつたら、あの商賣はさせられまへん。本當の親にそれがさせられよつたら、鬼どす。鬼でなうて眞實のわが子にそれがさせられるものやおへん。」と、つく〴〵と感じたやうにいつてゐる。
私は、心の中で、それを、いろ〳〵に疑つてみた。果して血を分けた母子の仲でないとす

ると、自分に對する考へも彼女と母親との腹は一つでないかも知れぬ。
「それを彼女が自分で、からだといふのですか。」
「えゝ、姉さんさうおいひやした。……今のお母はんには何度も子供が生れても、みんな死んでしまうて、大けうなるまで育たんので、自分はまだ三つか四つかの時分に今の親に貰はれて來たのどすて。それで生みの親は何處かに有るちふことだけ聽いてはゐるが、どこにどないしてゐるかわからんのやさうや。それやよつて、二人の間がいつも氣が合はんので年中喧嘩ばかりしてゐるけど、何でも自分の心を屈けて親のいふことに從うて居らんならんいうて、姉さん今えらう泣いてはりました。私もほんまに貰ひ泣きをしました。」
越前屋の主人はさういつて、屈強な男の眼に眞實涙を潤ませてゐる。そして尚ほ言葉を繼いで、私の方を見ながら、「それぐらゐやよつて、此度の事も少しも姉さんは自分の本心でさうしてゐるのやない云うてはります。」
で、
　暫くぢつと聽いてゐた婆さんは又口を插んで、
「それが本實でござりますやろ。」といふ。
「さうでせうかなあ。」私も小頭を傾けながら、「さうだとすると、事譯が大分解るのですが。……」といつて、まだずつと以前初めて女に案内せられて、祇園町の、とある路次裏に母親に會ひに往つた時の最初の印象を思ひ浮べてみた。その時既に妙に似てゐない母子だなと思つたのであつた。その後も、去年の夏の初の頃、彼女達母子の傍に、一ヶ月あまりも寢泊りしてゐる時にも、時々ふつと二人の顏容から態度などを見比べて、どうも似てゐない、娘には自分もこれほど心から深く愛着してゐながら、これがその母親かと思ふと、さすがに思ひ込んだ戀も、幾らか興が醒めるやうな氣がするのであつた。そして心の中で、どうか、これが眞實の母子でなくつてくれたら好い、何か然るべき人が内證の落胤とでもいふのであつたならば……といふやうな空想を描いたことも事實であつた。が、さう思ふたびにいつでもそれを、さうでないと、語つてゐるかのごとく、私に考へさするのは二人の耳の形であつた。それは、二人とも酷く似た殺ぎ耳であつて、その耳の形が明かに彼等の身の薄命を豫言してゐるかの如く思はれてゐた。
　そして今、越前屋の主人が女から聞いて來たとほりに眞實なさぬ仲であるならば、これまでに幾倍して一入可愛さも募る思ひがするとともに、今人手に取られたやうになつてゐる女を自分の手に取り返す見込みも十分あるのであるが、主人の聞いて來た話によつて、私はやゝ失望の奈落から救ひ上げられさうな氣持になり、かげながら、さうなると又一層不安な思ひに驅られて何だかあの耳一つが氣に懸つてくる。
「さうですかなあ……なるほどさういへば、顏容に何處といつて一つ似たところはないのですが。」と、いつて私は心に思つてゐる耳の話をして、「始終親子でいひ諍ひすることのあるのは、私もよく見て知つてゐますが、その口喧嘩の僞振りから見ると、どうも眞實の母子でなかつたら、あゝではあるまいかと思はれることもあります。」
私は、彼女の家に逗留してゐた時分の二人の屢々物の言ひ合ひをしてゐた樣子を、つとめて思ひ起すやうにしてみた。そして、その眞僞如何に彼女自身のいふことの眞僞如何が係つてゐると思つた。越前屋の主人は、
「さあ、そんな以前のことは、私も、どや、よう知りまへんけど、姉さんは今自分でさういうてはりました。……うたがや、どつちでも疑へ

ますけど、姉さんが泣き〳〵いふのをみると、やつぱり貰はれたのが本間どすやろ。しかし酷いことをする親もあるもんどすなあ……そんなの藝子にはめづらしい事もおへんけど、あの商賣にそんな酷いことをする親はまあたんとはおへんなあ。」主人は肝腎の話を忘れて頻りに思入つたやうにいふ。

「わたし聞きまへん。この年になるけど初めてや。」と、強く頭振りをふつて呆れてゐる。

主人は更に涙に濕つた聲をひそめながら、

「もう此間から何かこれには深い譯があるにちがひないから、母親の居らん處で、とつくり姉さんの腹を一遍訊いてみたいと思うてたら 私の想像したとほりやつた。」と、分らなかつた謎がやつと解けた時のやうな氣持でいつて、又私の方に顔を向けながら、

「ほて、姉さんはかういうてはります。……わたしは、あんたはん――××さんといふ人の事は一日も忘れては居らん、毎日々々心の中ではあの人は今時分は何處にどないしておゐやすやろ思うて氣に懸つてゐたのやいうてはります。此度の事には一口にいへん深い事情があつて、自分の疾うからかうしようと思うてゐたこととは、ちやうど反對したことになつてしまつたいうて、きつう泣いてはりました。」といつて、主人はしんみりとした調子で話した。

私は、主人が先刻から何度も繰返していふ、姉さんがきつうそれで泣いてはりますといふのを聞かされるたびにその、女の泣いてくれる涙で、長い間の自分の怨みも憤りも悲みも凡て洗ひ浄められて、深い暗い失望のどん底から、すつと輕い、好い心地で高く持ち上げられてゐるやうな氣がしてきた。そして今まで凝乎と耐へてゐた胸がどうかして一ところ緩んだやうになるとともに、何ともいへない感謝するやうな涙が清い泉のやうに身體中から温く湧いてくるのが感じられた。私は、その涙を兩方の指先に拂ひながら、

「あゝさうですか。それで今ほかの人間の世話になつてゐるといふのですか。」私は早く先きが訊きたくて心が無暗と急いだ。

主人はうなづいて「それを姉さんいうてはりました。今世話になつてる人といふのは、一緒になるといふやうな見込みのある人とちがふ。おかみさんもあるし、子供も二人とか三人とかある人で、これまでにもう何度も引かしてやらう云うてたことはあつたけど、姉さん自身ではもう××さんの處に行くことに、心は定めてゐたんやさうにおす。そこへ去年の秋のあの風邪が原因でえらい病氣して自分は正氣がないやうになつてゐるところを付込んで、お母はんは目先の慾の深い人やよつて、今の人がお母はんに金を五百圓とか遣つて姉さんの身を引受けよう、ほんなら、どうぞおまかせしますといふことに、自分の知らぬ間に二人で約束してしまうて、醫者から何からみんなその人がしてくれて、お蔭で病氣も追々良うなつたのやし、今となつては向うの人にも深い義理がかゝつて××さんの方ばかりへ義理を立てる譯にもゆかんやうになつた。それで今急にどうするといふことも出來んさかい、こゝ半歳か一年待つてゐてもらひたい。その間に好い機があつたら又此方から手紙を出すか、話をするかするさかい……」

「それで半歳か一年待つてくれといふのですか。」

「まあ、さういうてはるのどす。今急にあんたはんの處へ行けんことになつたよつて、それを私から××さんによう斷りいうてくれるやうに、姉さんからくれ〴〵も頼んではりました。……そんな譯どすよつて、あんたはんももう好い時節の來るまで餘り氣を急かんと置きやす。この話急いたらあきまへん。私も御縁でこし

て及ばずながら仲に入つて口をきゝました以上は決して惡い話には致しませんつもりどすよつて。」と、賴母しさうに私を慰めてくれて、

「それにしてもあの母親は、姉さんも、お母はんといふ人目先の慾の深い人どすいうてはつたが、ひどいことをする婆さんどすなあ。たゞ一時金貰うたかて見込みのない人やつたら爲方がないやおへんか。」繰返してそれを呆れてゐる。

「いろ〳〵お骨折り有難うぞんじます。」

と、私は主人の前に頭を下げて心から禮をいつたが、さうして無殘々々人の樂みにさして置くのを承知しながら、今すぐにも自分の方へ取戻すことの出來ぬのが堪へ難い不滿であり、今までの長い間の、とてもいふに云へない自分の、その女の爲に忍んで來た慘憺たる胸中を考へれば考へるほど、そんな破滅になつてしまつたのが餘りに理不盡であるやうに思へてどうしたら此の耐へがたい胸を鎭めることが出來るかと思つた。それとともに、向うの人間にどれだけの恩義を被てゐるか、それは分らないにしても、又たとひ、果して彼女のいふことを信じて母親に對して成さぬ仲の遠慮といふことを認めるにしても、あまり女の心のいひ甲斐なさと賴りなさとが焦燥しかつた。そしてその向うの人間といふのは、いつか彼女が自分で話して聽かした去年の二月にも病氣の時引かしてやらうといひ出したその人間のことであらう。その人間ならば決してさう深い譯はなかつた筈である。それに此の間の夜松井の女主人の處へたづねて往つて會つた時の話にも、此度病氣で愈々廢業する時にももう女の身に付いた借金といふ程のものも無かつたといふし、そんな深い客のあつたことは知つてゐる樣でなかつた。松井の女主人のいふのでは、あの佛壇の阿彌陀樣の背後から出てきた羽織袴を着けた三十餘りの男こそ前にも後にも唯一人きりの深い男であつたが、それはもう今からいつて一昨年の夏の末に死んで終つた。松井の女主人は、先夜會つた時にその死んだ男のことをいつて、長火鉢の前で多勢ほかの妓のゐる傍で私を、冷笑する樣な調子で、

「あんたはんお園はんには三野村さんといふ夫婦約束までした深い人がおしたがな。三野村さんが今まで生きとつたら、もう疾うに一緒になつてはる。」さういつて三野村といふ、彼女の方からも一と頃は深く思ひ又向うからは變らず深く思はれてゐた男のあつたことをいろ〳〵いひ出して、そんな深い男のあつたのも知らずして、好い氣で遠くの東京の空の果てにゐながらたゞ一途にその商賣人の女を思ひ詰めてゐたばかりか、かう成りゆいた今までも潔く諦めようとはせずにやつぱりその女に想ひを殘してゐる男の呆氣さ加減のあまりに馬鹿らしいのを、些の同情もなく冷たく笑つてゐた。その時の女あるじの口うらなどから細かに推察してみても、どうも、今の世話になつてゐるその人間が女とさまで深い譯があつたとは考へられない。それどころではない、もとの女あるじが、

「三野村さんはあつてもお園さんは、あんたはんも好きやつた。三野村さんの死んだあとは、あんたはんの處に行く氣やつたのどすやろ。」と一口いつたことを思つてみても、女の底意は察することが出來るのである。私は、それを思ふにつけても、每度近松の作をいふやうであるが、「冥途の飛脚」の中で、竹本の淨瑠璃に謠ふ、あの傾城に眞實なしと世の人の申せどもそれは此の僻言、譯知らずの言葉ぞや、……とかく戀路には虛もなし、誠もなし、たゞ緣のあるのが誠ぞやといふ、思ふにまかせぬ戀の悲みの眞理を語つてゐる一くさりを思ひ合せてふつとした行きちがひから、何年にも續いて、自分の魂

を打込んで焦心苦慮した事がまるで水の泡になつてしまつたことを慨いても歎いても足りないで私はひとり胸の中で天道を怨み卿つ心になつてゐた。

そして何とかして今直ぐにも女を自分の手に取り返す術はないものかと思ひつゞけてゐた。

「それで今本人はどうしてゐます？　私に會はうともいひませんか。」私は彼女に面と向って怨みのたけを言ひたかつた。

「えゝ、それで姉さん今こゝへ來やはります。……お母はんには、あんたはんは、もう疾うにこゝからお歸りやしたことにして。」と、入口の方に氣を配りながら、越前屋の主人はその前に坐つてゐる婆さんにも聞えぬやうに、そうつと私の耳のところに口を持つてきて押つ付けるやうにしながら、

「それからなほ姉さんがこんなことをいうてはりました。――えらい失禮やけど、もし又あんたはんがお小遣ひでもお入用どしたら、私の手を經て姉さんの方からどうともしますよつて、その事もちよつというといてくれ云うてはりました。」

私は、それをぢいつと聞いてゐて、越前屋の主人の口から靜かに吐き出す温かい息が軟かに耳朶を撫でるやうに觸れるごとに、それが彼女自身の温かい口から洩れてくる優しい柔かい息のやうに感じられて、身體が、まるで甘い戀の電流に觸れたやうに、ぞく／＼とした。

主人が口を離すのを待つて、私は、嬉しさに堪へかねた氣持で、

「あゝ、さうですか。そんなことをもいひましたか。……いや併し、それだけ聞けば滿足です。私ももう何年もの間彼女のことばかり思ひつづけて何をするにも手に付かずお話のならぬ不自由な目をして來ましたが、まさか私一人の用くらゐに事は缺きませんから、そんな心配には無用にしてくれ、それよりも一日も早く自分の決心をしてくれるやうにいつて置いてください。」

私はもう少しも毒のない、優しい心に歸りながら靜かにさういつた。

主人は私のいふことを聞きながら、外の路次の方に氣が懸るやうに、

「姉さんもう來やはりますやろ。」といつてゐるところへ、入口に立つてゐた越前屋の若い女房はそちらから、

「あゝ來やはりました。」と低聲で知らせる。

主人はそれで、表の間の方に立つていつて出迎へながらわざと聲を大きくして隣りの母親に聞えるやうに、

「お母はんえらい濟んまへんが、どうぞ、今お話しましたとほりですよつて、ちよつと姉さんをお貸しやしとくれやす。……××さんはもう先つき歸らはりましたよつて、どうぞ安心してとくれやす。」といつて、そこへ、おづ／＼入つてきた隣りの女をやさしく劬り招じ入れた。

二十

「さあ、姉さん、ずつと此方へお入りやしとくれやす。ほかに遠慮するやうな人だれもゐいしまへんよつて。」

といひつゝ、主人は母親が今まで敷いてゐた蒲團を裏返して、長火鉢に近いところに直した。主人の背後に身を隱すやうにしながら、庭から茶の間の方に入つてきた彼女は、隅の暗いところに立ち竦んだまゝ、へえ／＼と温順に會釋ばかりして、いつまでもそこに居わづらうてゐる風情である。

婆さんも共に聲をかけて、

「姉さん、なんもそないに遠慮せんかてよろしい。さあ／＼そな處に居らんとずつとこちらへお上りやす。きつう寒うおす。」

彼女が、さうしたまゝ、いつまでも家の人達に

口をきかしてゐるのを傍にゐて見かねながら、私もそちらを振顧つて、

「皆さんがいうて下されるのだから早う此方へ上がつたがいゝだらう。」と、聲をかけながら、そこに佇んだ容姿をちらつと見ると、蒼ざめた頬のあたりに銀杏返しの鬢の毛が悩ましく垂れかゝつて、赤く泣いた眼がしを／＼として潤んでゐる。

女は猶ほも面羞さうな様子をしながら、

「わたし、もう、こゝで失禮いたします。」と、口の中でいつて、上がらうとせぬ。

主人も婆さんも、聲をそろへて、

「何故おいひやす、姉さん。そんなとこに居られしまへん。さあ／＼。」と急いだ。

女は、「へえ。」と腰をこゞめながら、それでやつと、「ほんならこゝからどうぞごめんやす。」と泌み／＼云つて、上り框に躙り上がつて、茶の間の板の間のところに小さくなつて坐つた。主人はそれを咎めるやうに、

「姉さん寒いのに、そんなとこに居られしまへんたら、さあ此方へおいでやして、兄さんの傍に來て火鉢におあたりやす。」と、手を取らんばかりに世話を焼いた。

女は幾度もいくたびも催促せられて、まだ泣きじやくりをしながら、やう／＼座蒲團の上まで寄つてきた。

主人は、合壁の隣りに居殘つてゐる母親に氣を兼ねて、聲をひそめ、二人の仲を改めて取り成すやうな口を利いて、

「さあ、姉さん、こゝは私の内どす。もう誰に遠慮も入りまへんよつて、兄さんと心置きなう話したい思うておいでやしたことをお話しやす。」

さういつたが、彼女は、何といはれても、ただ「へえ、へえ。」と、低い聲でいふのみで、憂はしさうに濕つてゐる。

私も、あれほど會ひたい、見たいと思つてゐるながら、さうして面と顔を差向つてみると、卽座に何からいひ出していゝやらいひたいことが有り餘つて、かへつて何にもいひえないやうな氣がして、初心らしくたゞ默つてゐると、主人は、小言のやうに、

「さあ、兄さんも何とか姉さんに言葉をかけてお上げやす。」と言つたが、二人ともそのまゝやつぱり默つてゐた。

そこでかへつて其處にゐて用のない生醉ひの婆さんが傍から又してもうるさく口出しをするのを、彼女も私も同じ思ひで、神經に障るやうに自然と顔に表してゐた。主人はそれを拂ひ退けるやうに、

「お婆さんあんた、あつちい往といでやす。あんた自分で關係せんというとゐやしたやないか。」と、たしなめに置いて、女の方を見て言葉を改めながら、

「姉さん、今いろ／＼あんたはんから聞きました事譯はあらまし私から兄さんにお話しして兄さんも心よう納得してくりやはりましたよつて、それはどうぞ安心しておくれやす……。」といつて、暫く間を置いて一層聲に力を籠めて、

「その代り私がかうして仲に入つて口を利きました以上は、姉さん今度また私にまでも譃をお吐きやすやうなことがおしたら、その時こそ今度は私が承知しまへんで……。よろしいか。」と、念を押すやうに云つた。

彼女はそれで又温順しく、「へえ。」とうなづきながら兩手の襦袢の袖でそつと涙を拭いてゐる。まだ商賣をしてゐる時分から色氣のないくらゐ白粉氣の少い女であつたが、廢めてから一層身装振りなど構はぬと思はれて、可惜、つくれば、目に立つほどの標致をおもひ做しにか妙に煤けたやうに汚してゐる。そのうへ今泣いたせゐか美しい眼のあたりがひどく窶れてゐる。此處のあるじが先きも、戻つて來てからの

話に、
「姉さんがおいひやすのが本間に遊びおへんやろ。自分も好きで世話になつてる旦那があるのやつたら、あんなものやおへん。この隣りに越しておいでやしてからでももう三月か四月になりますけれど、姉さんが綺麗にしておいでやすのを内の者だれかて一寸も見いしまへん。お湯にかて、さうどすなあ、十日めくらゐにおいでやすのを見るくらゐのものどす。」といつて、隣家にゐてそれとなく氣の付いてゐる、女の平常のことを噂してゐたが、今ぢつと女の容姿を打ちまもりながら心の中で、なるほど主人のいふとほり、今の彼女にはつくるの飾るのといふ氣は少しも無いものと見た。そして私もやつと口を切つて、彼女に話しかけた。
「私も一伍一什のことを話して、あんたにとくと聽いてもらひたいことは山ほどもあるけれど、それをいひ出す日になれば腹も立てねばならぬ、愚癡もいはねばならぬ。とても一と口や二た口では言ひ盡せぬし、あんたもそんな病後の事だから、それは又の日に譲つて置く。それで今こちらの親方から聽いたとほり、爲方ない好い便の來るまで辛抱してゐるつもりでゐるから、あんたもその氣でゐてもらはねばならぬ。

私は、あれほど、逢はぬ先は會つたらどうしてくれようと憤怒に驅られてゐたものが、さうして悄然と打沈んでゐるのを面と向つて見ると、打つて變つたやうに氣が弱くなつてしまつて、怨みをいふことはさて置き、かへつて、やつぱり哀れつぽい容姿をしてゐる女を劬り慰めてやりたい心になつた。
すると彼女は私からはじめて物をいひかけられて、どんな氣になつたのか、今までの温順しく沈んでゐた樣子とはやゝ變つた調子になつて、
「あんたはん何で山の井さんへいて、その話をしておもらひやさんのどす。」と、神經質の口調で不足らしく云ふ。山の井といふのは初めて女を招んでゐた茶屋の名である。
私は、女のさういつた發作的の心持を推測しかねて、ちよつと不思議さうに彼女の顔を見たが、
「あんた今、此の場でそんなことをいひ出したつて、爲方がないぢやないか。」といつたが、おほかた彼女の腹では自分の心にもなく今の人間に急に脱ぐことの出來ない恩義を被なければならぬやうになつたのも、自分の知らぬ間に母親とその男との仲に立つて專ら周旋したのがその客で入つてゐたお茶屋の骨折りであつたことを思つて、もう今となつては、一寸拔き插しならぬ破目になつてしまつたも、私が最初からの茶屋を通して話を進めなかつたことの手ぬかりを云ふのであらうと思つた。けれども、さう成り入つた原因をいへば又彼女にもさうした責めがないでもなかつたのだ。
主人も私の言葉につれて、
「姉さん、そんなこともう、今いはんと置きやす。いつでも後になつて、あんたはん達二人で又笑つてそんなことは話せますよつて。」と抑へるやうにいつて、
「――さあ、もうあんまり長うなると、お母はんが又喧しういはりますさかい、姉さんほんならよろしいなあ、どうぞ今夜の約束は××さんでなうて私に對して違へんやうにしておくれやす。」
と主人は重ね〴〵念を押していつた。そして私に向つて、
「兄さん、あんたはんも、もういふことおへんか……ほんならもう、どつちも異存おへんなあ。」
と、言ひ切つて、又氣を變へて、
「さあ、姉さん。えらい御苦勞さんどした。どうぞ歸つてお寢みやしとくれやす。遲うまで濟

みまへん。」
彼女はそれをしほにやう〳〵立ち上がつて、禮をいひつゝ、壁隣りの自分の家に歸つた。

二十一

まだ二月半ばの嚴しい寒威は殘つてゐても、さすがに祇園町まで來てみると明麗な灯の色にも、絶ゆる間もない人の往來にも、何となくもう春が近づいて來たやうで、殊に東京と異つて、京は冬でも風がなくつて靜かなせゐか夜氣の肌觸りは身を切るやうに冷くつても、ほの白く露霜を置いた、しつとりとした夜であつた。私は、その女の勤めてゐた先の女主人に會ふために、上京の方から十一時過ぎになつて、花見小路のその家に出掛けて往つた。

もう去年の十一月の末、女がそんなことになつた時から、直接に女主人にぜひ一度會つて、彼女の勤めてゐた時分の事から病氣で引いた前後の事情を、自分の得心するやうに委しく訊いてみたいと思つてゐたのであつた。誰を商賣とするその社會の者の習ひで、此方が客として今まで外部から知ることの出來なかつた裏面の眞相を、果してどれだけの誠意を披瀝して聽かしてくれるものか、それと知りつゝ、わざわざ笑はれるために行くのも阿呆らしいやうで控へてゐたが、それでも、何時までも女の居る處が知れなくつて懊惱に懊惱を重ねてゐた時分には、もう思案に餘つて愚かになり、女の在所を探し出すことが出來なければ、せめて彼女の話でも、誰かを對手にしてゐたい、それには先の主人に會つていろ〳〵な話を訊いたならば或は手がかりが見付かるかも知れない。さう思つて、その家へ電話を掛けて女主人の都合を問ひ合はすと、いつも留守といふ返事であつた。彼女が勤めてゐた時分にも電話を掛けると、定つて、女衆の聲で冷淡に、
「今留守どす。」といふのが其處の家の癖で、あんな不愛想なことでよく商賣が出來ると思ふくらゐであつたが、女衆の返事では、女主人は晝間から外に出て夜の九時か十時頃でなければ歸らぬといふ。それが何時訊ねても同じ事なので、二度に一度は私といふことを知つて故意と嫌つてさういはしてゐるのかも知れないと疑つてみたりした。頭から會ふのを嫌つてゐるくらゐなら會つたところで奥底のない話をしてくれる筈もない。先の女主人が私を向うに廻してゐるくらゐなら女の話はもう所詮駄目と思はなければならぬ。さう思ふと私は倍々何處へ取り付く島もないやうな氣がして、何方を向いても京都の人間は揃ひもそろつてよくもかう薄情に出來てゐるものだ、いつそ自分の名も命も投げ出して憎いと思ふ奴等を悉く殺してやらうか、殘らず殺すことさへ出來れば殺してやるんだがと思つたこともあつた。けれどもそれも成らず、女主人に會つて見たならばと思ふ望みも絶えて、消え入るやうな乏しい心地になつてゐた。それでもどうかしては又堪らなくなつて、どんな辱を忍んでも厭はないから、一度會つて此方の悲しい眞心を立ち割つて話して見たならば、いかに冷淡無情を商賣の信條と心得てゐる廓者でも、よもや此方の赤誠が通じないことはあるまい。さう思ひ返して時々電話を掛けて都合を訊いたり、自分で入口まで出掛けて往つたことも一度や二度でなかつたが、小面の憎い女衆はよく私の顏を覺えてゐると思はれて、卑下しながら入口に立つた私を見ると、わざと素知らぬ振りをして狹い通り庭の奥の方で働いてゐた。そして幾度も案内を乞ふと、やつと澁澁出て來て、
「太夫どすか、今ゐやはりやしまへん。」といつて、それつきり中戸の奥に又引返つてしまふのであつた。

女主人は今から二十年ほど前まで祇園で薄雲太夫といつて長い間全盛で鳴らしたもので、揚屋の送り迎へに八文字を踏んで祇園街を練り歩いてゐたその頃廓の者が太夫を尊敬して呼び習はした通稱を今でも猶ほ口にして太夫といつてゐるのであつた。

電話で訊くと、今すぐならゐるといふので夜遲く遠くから急いで行つてみると、今まで内にゐたが又何處かへ出て往つたといふやうなことがあつて、私は殆ど耐へがたい屈辱を感じてゐたが、彼等の前にはどんなに馬鹿になつてゐても、それほど苦痛とも思はなかつた。

そのうち女の居所が知れて、本人の心の奧底も分り幾らか自分にも心に張合ひが出來たせゐか、今までよりも少し勇氣づいて、たとひ效の無いことにしてももとの女主人の處にもいつて話してみようといふ氣になつて、又電話で都合を訊くと、「今晩は内にゐやはりますよつてどうぞ來ておくれやす。太夫がさういうてはります。」といふ、いつにない女衆が氣の輕い返事である。尤もその二三日前に私は一寸した物を持つて、たゞ入口まで顏を出したのであつた。

十二時近くになると花見小路の通りは冬の夜ながら妓共の送り迎へに、またひとしきり往來の人脚がつゞいて、煌々としてゐる妓樓の家の中は丁度神經が興奮してゐる時のやうに夜の深けるに從つて冴え返つてゐる。その家の入口に立つて訪ふと、今度は何時とちがつた小婢が取次ぎに出て、一遍奧に引返したが、すぐ又出て來て、丁寧に、

「どうぞお通りやして。」

といつて、玄關から疊敷の中廊下を傳うて、ずつと奧の茶の間に案内していつた。八疊に六疊ばかりの二間つゞきの座敷の片隅には長火鉢を置いて、鐵瓶にしやん〳〵湯が煮立つてゐる。見たと女主人はその向側に座を占めてゐた。見たところ其處は多勢の抱妓達をはじめ家中の者の溜り場にしてあると思はれて緣起棚にはそんな夜深けでもまだ宵の口のやうに燈明の光が明くともつてゐて、眩しいやうな電燈の灯影の漲つたところに、丁度入れ替へ時なので、まだ二人三人の妓達が身支度をして出たり入つたりしてゐる。

私は心の中で今日は不思議に調子が柔かいなと思ひながら、座敷の入口の方でわざと腰を卑うしてゐると、女主人は蟠りのない物の言ひ振りで、

「さあ、ずつと此方へお越しやす。」

と、年はもう五十の上を大分出てゐると聞いてゐるにもかゝはらず、聲はまだ、まるで二十餘りの女のやうに柔和である。顏から容姿から、とてもそんな年寄りとは思へない。これがその昔祇園街で全盛を誇つた薄雲太夫の後身かと思ふと、私は妙な好奇心にも驅られながら、さう打ち融けた言葉を掛けられたのを機會に、

「は、どうぞご免なさいまし。」

といつて、颯と起つて長火鉢の此方側まで進んで小婢のなほした座蒲團の上に坐つた。

色氣のない束髮に結つて、何かしら野暮な物を着た大柄で上品に見える女主人は柔和な顏で「二三日前に持つていつた物の禮をいつたり、今まで何時訪ねて往つても留守がちであつたりしたことを云つて、

「こんな商賣してますよつて、朝は遲うおすし、晝からは毎日お詣りにゆくか、そでなけや活動が好きでよう活動見に往きますよつて、いつも夜の今時分からでないと家にゐいしまへんもんどすさかい。」と、若い聲でいつてゐた。

私は、多年情海の波瀾を凌いで來た、海に千年山に千年ともいふべき、その女主人と差し向ひに坐つてゐると、何だか、あまりに子供じみ

た馬鹿らしいことをいひ出すのが氣恥かしいやうで、妙に自分ながら硬くなつて口ごもつてゐると、そこへ外から今歸つたらしい若い妓が一人出てきて、
「たゞ今。」といひながら長火鉢の傍に寄つた。
女主人はそつちを向いて、
「おかへりやす。」と返事しながら何か二言三言話してゐたが、又私の方を見て、
「あんたはん、此の妓を知つとゐやすやろ。」といふ。
私はちよつと思ひ出せないので小頸を傾けながら、その妓の顏をまじ／＼と見てゐると、向うではよく知つてゐると思はれて、
「よう知つてゐます。」といひながら、私の顏を見て笑つてゐる。十八九ばかりの小柄な妓であるが口元などの可愛い、優しい容姿をしてゐる。女主人も笑ひながら、
「なあ、よう知つてやす筈どすがな。」といつて、私の顏を見てゐる。
私はこんな美しい妓に知つて居られる覺えがないといふやうに、なほも頻りに頭を傾けてゐると、女主人が、
「お園さんと一緒によう、あんたはんに招ばれて往かはりましたがな、若奴さんどすがな。」といつたので、私はやつと思ひ起した。そして四五年前に較べると全く見違へるほど成人した若奴の大人びた容姿を、呆れたやうに見まもりながら、
「あッ、さうだつたか、若奴さんとは一寸氣が付かなかつた。あんたが餘り好い藝妓さんに成つたもんだから、さういはれるまでどうしても思ひ出せなかつた。」さういつて、私は又彼女の顏をしみ／＼と見てゐた。ほんとに四五年前見てゐた時分とはまるで比べ物にならぬくらゐ美しい女になつてゐるのに私は驚いたのであつた。
女主人は機嫌好げに彼女の顏と私の方とを交る／＼見ながら、
「ほんまに好い藝妓さんになりやはりましたでつしやろ。この妓にも好きな人がひとりあるのつせ。」と、輕く弄ふやうにいふと、若奴は優しい顏に笑靨を見せて羞しさうにしながら、兩掌で頰のあたりを擦つて、
「ほんまにあの頃はよう寄せてもろてゐましたなあ。」と、過ぎ去つた時分のことを思ひうかべるやうな顏をしてゐる。私もそれに伴れてその頃の事が又思ひ起されるのであつた。
涼しい加茂の河原にもうぼつ／＼床の架かる時分であつた。[illegible]の過ぎゆく頃から殆ど揚げつめてゐた女がだん／＼打ちとけてくるにつけて、
「なあ、へ、内に、わたしの妹のやうにしてゐる可愛い藝者があるのつせ。」といふから、
「へえ、どんな藝者。」と訊くと、
「そりや可愛い藝者。まだ十四どつせ。」
「十四になる藝者、そんな若い藝者があるの。舞妓だやないの。」
「ちがひます。藝者どす。」
「可笑しいなあ。なぜ舞妓にならないんだらう。」
「さあ、そなことどうや、わたしよう[illegible]に知りまへんけど、初から藝者で出てはります。そりや可愛かはい人どつせ、あんたはんに一遍招んでもろとくれやすいうて、わたし内の姐さんから賴まれてゐました。」
さういふので、招んでみると、女のいふとほりまだ子供の藝者であつた。それから後も時々女と一緒に來て方々外に連れて歩いたりしてゐたが、あれからずつと見なかつたので、まるで別な女になつてゐた。私は、自分の女のことを、あまり正面から女主人に切り出すのを極り

わるく思つてゐたところへ又そんなほかの者が傍に來たのでいよ／＼いひ出しかねてゐたが、若奴と丁度そんな話になつたので、照れ隱しのやうに、
「若奴さん、ほんとに美い藝妓さんになつたなあ。」と、私は又つく／″＼とその容姿に見入りながら、「こんな別嬪になるんだと知つてゐたら、あんな薄情な女に生命を打込んで惚れるんぢやなかつた。」と、わざといつて笑つていつた。
するとお女主人は、自然にそつちへ話を向けてきて、
「お園さんにお會ひやしたか。」といつて訊いた。
「え丶此間初めて一遍會ひました。」
「病氣はどうどす。わたしも一遍見舞ひにいかういから思うて、ねつからよういきまへん。」
「病氣はもう大したこともなささうです。一體不斷から病人らしい靜かにしてゐる女ですから。」
すると若奴も傍から、
「ほんまにさうどす。お園さんは音なしい人どしたなあ。姐さんあんな靜かな人おへんなあ。」
私は段々話をそつちへ進めて、
「病氣で氣が變になつたといふのは、あれは眞實なのですか。」といつて女主人に訊ねた。
「そりや本間どす。」と、女主人は眞面目な顔になつて、「初は私達も熱に浮かされてそんなことをいふのか思うてゐましたが、その頃病氣の方にもう疾うに良うなつて、熱も無いやうになつてゐるのに異うたことをいひ出したので、さあ、これは大變なことになつた思うて心配しました。」
「あんたはんもよう知つとゐやすとほり、あの人達母子二人きりどすさかい、同じ病氣になるのやつたかてまだお母はんの方やつたら困つても困りやうがおますけど、親を養はんならん肝腎の娘が病氣も病氣もそんな病氣になつてしまうて何う爲様もなりまへんもんどすさかい。……そりや氣の毒どした。あれで一生あのとほりやつたら、どないおしやすやろ思うて心配してゐましたけど、それでもまあ早う良うおなりやして結構どす。一時はどないなるか思うてたなあ。」女主人はさういつて若奴の方を振返つて見た。
若奴は同情するやうな眼をしてうなづきながら、
「ほんまに氣の毒どしたわ。皆なほかの人面白がつて對手にしてはりましたけど、姐さんわたし何もよういへしまへなんだ。顔を見るさへ辛うて。」
「さうやつた。眼が凄いやうに釣り上がつて、お園さんのあの細い首が抜け出たやうに長うなつて、怖いこはい顔をして。」
私はさうであつたかと思ひながら、
「そんなにひどかつたのですか。」
といつてゐると、女主人は私の方をぢつと見ながら、
「あんたはん餘程お園さんに酷いことをおいひやしたんやなあ。」とたづねるやうにいふ。
「どうしてです？」
「あんたはんの手紙に警察へ突出すとか、どうとかするいふやうなことをいうてあつたと見えて、そのことを毎時よういうてました。ほかの者も警察のことも巡査のことも何も云うて居らんのに、お園さん、「たら警察から私を連れに來た、警察が來る警察が來る」いうて、警察のことばかりいうてゐました。よつぽどあんたはんの手紙に脅かされたものらしい。」
彼女の言葉は婉曲であるが、その腹の底ではお園が精神に異狀を呈したのも大根の原因は私からの手紙に脅迫されたのだと思つてゐるらしい口振りである。

二十二

なるほどさう思はれるのも全く無根の事實でもない。去年の春まだ私が東京にゐて京都に來ない時分、もう何年にかわたる度々の送金の使途について委しい返事を聞かうとしても、いつも、柳に風と受け流してばかりゐて少しも要領を得たことをいつて寄越さなかつたので、隨分思ひ切つた神經質的な激しいことを書いて怨んだり脅かしたりするやうなことをいつてよこしたのは事實であつた。けれども、そんなことは他人に打ち明かすべきことでないから、自分ひとりの胸の底に深く抑包んでゐたけれど、それ程氣に染んで片時も忘れることの出來ない女を、一年も二年も凝乎と耐へて見ないでゐて、金だけは苦しい思ひをしてきちん／＼と送つてやり、たゞわづかに女から寄越す手紙をいつも懷にして寢ながら逢ひたい見たい心の萬分の一をまぎらしてゐたのではないか。あらゆる永遠の希望や目前の慾望を犧牲にし、全力を擧げてその女を所有するが爲に幾年の間の耐忍辛苦を續けて來たのである。自分でも時々、

「あゝ馬鹿らしい。こんなにして金を送つて遣つても、今時分女は餘處の男とどんなことをしてゐるか……」

と、それからそれへ聯想を馳せると、頭が赫つと逆上して來て、もう居ても起つてもゐられなくなり、いつそ此の金を持つて、これからすぐ京都へ往つて、あの好きな柔和らしい顏を見て來ようかと思つたことが幾度であつたか知れなかつたが、その都度、

「いや／＼、往つて逢ひたいのは山々であるが、今の逢ひたさ見たさをぢつと耐へてゐなければ、この先き何時になつたら首尾よく彼女を自分の物にすることが出來るか、覺束ない。」

さう思ひ返しながら、われと吾が拳固を以て自分の頭を毆つて、逸り狂ふ心の駒を繋ぎ止めたのであつた。けれども流石の私も、後にはたうとう隱忍し切れなくなつて、焦立つ心持をそのまゝ文字に書き綴つてやつたのである。女の方でも、此方の心持はよく知つてゐるので、手紙でいつてやることを、たゞ何でもなく聞いてゐる譯にはいかなかつたのである。それが爲に氣が狂つたといへば當然のやうでもあるが又可憐なやうな氣もする。

私は何となく女主人の顏から眼をそらしながら、

「脅かした譯でもなかつたんですが、私にしてもあれくらゐのことをいふ氣になるのも無理はないと思ふんです。……」と、私はいひさして、彼女がもう此後をすこしくいひ淀んでゐたが、家に居なくなつたのであるから、今となつてそれをいつたところで、格別女主人の氣を惡くさする氣づかひもないと思つたので、自分が疾うから女の借金を拂つて商賣の足を洗はすつもりであつたことを話して、

「こんな事はもう幾十度となく知り飽きてゐられる貴方がたに向つて今更こんな土地に有りうちの話をするも愚癡のやうですけれど、その爲に、私はとても一と口や二た口にいへない苦心をして來たのです。」

私は專ら女主人の同情に訴へるつもりで肺腑の底から出る熱い息と一緒に啣ち顏にさう云つた。いくら冷淡と情とを信條として多勢の抱妓に采配を揮つてゐる此家の女主人にしても物の入譯は又人一倍解る筈だと思つたのであつた。すると彼女は今まで話してゐた調子とすこし變つて、冷嘲するやうな笑ひ方をしながら、

「あんたはんそんなことをおいひやしたかて、お園さんにはもうずつと前から三野村さんといふ人がおしたがな。三野村さんが今まで生きと

つたら疾うに夫婦になつてはる。」
遠慮もなく、ずばりといひ放つた。それを聽くと私はぐさりと心臓に釘を刺されたやうにがつかりした。が、そんな深くいひ交した男があるのも知らずに、自分ひとりで好い氣になつて自惚れてゐたと思はれるのがいかにも恥かしいので、強ひてそんな風を顔色に出さないやうにしながら、私はやゝ暫くいふべき言葉もなかつたが、やがてわざと輕い調子で、

「えゝそんなことも少しは知らぬでもなかつたのですが、そんな人間はあつても大丈夫お園は自分の物になると私は思つてゐたのです。」と、私は飽くまでも信ずるやうにいつた。

すると彼女は、一層嵩にかゝつて冷笑しながら、

「あんたはんだけ自分でさう思ひやしたかて、お園さんあんたはんの處へ行く氣いちよつともあらしまへなんだんどすもの。……その人はもうお死にやしたけど。」といつて、私に語る言葉の端々が妙に粗雜になつてくるに反して、その死んだ人間の事をいふ時にはひどく思ひ遣りのある調子になりながら、火鉢の傍に坐つてゐる若奴の顔を振顧つて、

「なあ、三野村さんとお園さんの事では何遍も揉めたなあ。」と、女あるじはその時分のことを思ひうかべて心から亡くなつた人の身を悲むかのやうに、私が傍に居ることなどてんで忘れてしまつた風で、しんみりとなり、

「三野村さん死なはつたのはつい此の間のやうに思うてたら、もう一昨年になる。さうやなあ、一昨年の夏のもうしまひ頃やつた。可哀さうやつたなあ、あんなにお園さんに惚れてゐても死んでしまうたら爲様がない。」

彼女はたうとう獨言をいひ出した。

私は厭あな氣持で默つてそれを聽いてゐた。私にあて付けて故意にそんなことをいつてゐるのかと思つて氣をつけてゐたが、彼女は眞實三野村といふ男の死を哀れんでゐるらしい。それならば情涙の涸渇したと思つてゐたこの薄雲太夫の後身にもやつぱり人並の思ひやりはあるのだ。たゞ私に對して同情を懷かないばかりなのだ。それにしても私のこれほど血の涙の出るほどの胸の中がどうして彼女の胸に徹せぬのであらう。私は自分で自分の事を思つてみても昔の物語や淨瑠璃などにある人間ならばともかくも今の世に凡そ私くらゐ眞情を傾け盡して女を思ひ詰めた男があるであらうか。……なるほどその三野村といふ男のことは、もう三四年も前に一寸耳にせぬでもなかつたが、たとへ如何なる深い男があつても自分の此の眞情に勝る眞情を女に捧げてゐる者は一人もありはせぬ、それに、自分の觀察したところによると、女は自分の方から進んでいつて決して男に深くなるやうな氣質は持つてゐない。男に惚れるやうな女ならば却つて又手を施すことも出來るのであるが、彼女に限つてさういふ風は少しもなかつた。どうせ卑しい勤めをしてゐるのであるから、いろんな男に近づきはあるにちがひない。どんな男があつても構はぬ。自分は猜疑もしなければ嫉妬もせず、たゞ一と筋に眞情を傾けて女の意のまゝに盡してやつてさへ居れば、何日かは此方の眞情が向うに徹しなければならぬ。殊更にあゝいふ稼業の女はそんな嫉妬がましいことをいふ男に對して厭氣をさすのである。さう思つて私は、三野村といふ男のことも全く知らぬこともなかつたけれど、そんなことは彼女に向つて戲談にもあまり口に出したことはなかつたのである。又私自身にしてもそんなことを思つてみるさへ堪へられない焦燥しさに責め苛まれるので、そんな惱ましい鬱懷をばなるべくそのまゝそつと脇へ押遣つて置くやうにしておいたのであつた。が、今女あ

るじから初めて、入組んだその男のことを聞くにつけ思ひ起したのは、去年の五月の頃女の家にゐた時佛壇の奥から出て來た寫眞の和服姿の男がそれであらうと、さう思ふと、その男と彼女との仲の濃かな關係がはつきり象を具へて眼に見えて來た。私は丁度沸え湯を飲んだやうに胸が燃えた。

女主人は、私の今の胸の中を察してか察せずしてか、今度は私の方を見ながら、

「そりや三野村さん死なはつた時には可哀さうにおしたで。」と、私をまで誘ひ込むやうにいふのであつた。「けども死んだらあきまへんなあ。あんたに惚れてゐて死んでしもて……」

私はもう火を吹くやうな氣持で、

「そしてお園の方でもやつぱりその男には惚れてゐたのですか。」と、言葉だけは平氣を裝つて確めるやうに訊いてみた。

「そりやあお園さんかて惚れてはりましたがな。商賣を止めたらお園さん自分でも三野村さんの奥さんになることに極めて居つたのどす。」

女主人は當然のことを語るやうにいふ。

私の胸の中はます〳〵引搔きまはされるやうになつた。そして、まさかそんな事とは夢にも知らず飽くまでも女を信じ切つてゐた自分の愚かさが、眞面目に考へるには餘りに馬鹿げてゐてこのうへ何ほど、女主人と若い奴のゐる前で腹を立てた顔を見せるのが恥の上塗りをするやうで私は何處までも弱い氣を見せずに、

「だつて三野村にはほかに女があつたといふぢやありませんか。」といつてみた。

自分がはじめて彼女を知つて一年ばかり經つてから女には、京都に土着の人間で三野村といふ繪師で深い男があるといふことを聞いたので、その後京都に往つて女に逢つた時、謎く、「三野村といふ人とは相變らず仲が好いのかい」と、戯弄ふやうにいつて氣を引いてみた。

すると女は顏色も變へずに、

「あの人個あにどす。それに奥さんのある人やおへんか。」と、鼻の先で事も無げにいつてのけたことがあつた。

女と三野村の事をいつたのは後にも前にもそれきりであつたのみならず、自分でもそれつきりその人間のことは考へてもみなかつた。その男の事など物の數にも思はなかつたのである。

さういふと女主人は、

「えゝ、そりやおした。そやけど三野村さんはあの女よりお園さんの方がどのくらゐ好きやつたか知れまへん。……それで揉めたのどす。」といつて、前に溯つて彼等の交情の濃かであつた筋道を思ひ出して話すのであつた。

その男ももとは東京か横濱あたりの人間で畫の修行に京都に來る時一緒に東から連れて來た女があつた。それは以前から茶屋女であつたらしく、京都に來ても京極の路次裏に軒を竝べてゐる、ある江戸料理屋へ女中に住込ませて、自分も始終そこへ入り浸つてゐるのであつた。話の樣子では職人風の繪師によくあるやうな、あまり上品な人間でもなかつた。技術も捗々しく上達しないで死んでしまつたが女の事にかけては隨分があつたらしく、一方その女が喰付いてゐて離れようとしないのに自分ではひどくお園に惚れてゐた。

女主人は今思ひ出しても、三野村がいとしくもあり可笑しくもあるといふやうに笑ひながら、

「あんなに惚れはつて。……なあ、へ私、三野村さんがお園さんに惚れはつたやうにあんなにほれた人見たことおへんわ。」さういつて久榮奴と私に話しかけながら、「三野村さん、あんたお園さんの何處がようてそんなにほれたんどすいうて訊くと、三野村さんもお園さんの、ほんなら何處が好えといふところもないけれど、

たゞかうどことなく、昔馴しいやうな處がえゝいふのどす。」
「おや、男の好きなのは誰の思ふところも同じこつた。」と、私は、その三野村が、女を觀る眼にかけては自分と正しく一致してゐたことを思ふにつけても、なるほどと肯けるのであつた。女主人のいふとほり彼は深い心の底からお園に惚れてゐたのにちがひない。私もやつぱり女の起居振舞などのしつとりとして物靜かなところが不思議に氣に入つてゐるのであつた。そして、三野村の惚れ様が私の見る眼も同情に堪へないくらゐそれは／＼切ないものであつたことを女主人が頻りに繰返していふのを聽かされると、又しても私がその三野村に又輪をかけたほど惚れてゐるのに、それを遺憾なく判らす術のないのが焦燥しかつた。そして、
「私だつてあの女には眞實に惚れてゐるんですよ。」といつたが、幾ら貞節なところを見せようとしても、それをそのとほり受け入れてくれさうにないので、半ば戯談にまぎらして、いつてゐるよりほかなかつた。
女主人は此方の見てゐるとほり、さういつてもたゞ、
「えゝ。」と心にもない義理の返辭をしてゐるに過ぎなかつた。そして、三野村の話をしかけさへすれば好い機嫌で向うから進んでいろんな話をそれからそれへとするのであつた。
「おやその人はこゝへ――あなたの處へ來たのですな。」
「えゝもう始終此處へ來てはつたのどす……
「一と頃よう來てはつたなあ。」女あるじは若奴の方に話しかけた。
「よう來てはりましたなあ。」
私は、そんなことか、既にその男に敵でなかつたことを思つた。自分もずつと以前ならば、惚れた女の抱へられてゐる家へ入り込んで行くくらゐのことをしかねない人間ではあつたが、どこまでも自分の顏を惡くしないで手際よく事を運びたいと餘り大事を取り過ぎたのが可けなかつた。やつぱりかういふことは押しが強くなくつてはいけないのだと今更のやうに心[illegible]きながら、
「さうですか……始終こちらへ來てゐたのですか。」私は思はずそれを繰返して暫く開いた口が塞がらなかつた。
女主人は顎で若奴の[illegible]してゐる長火鉢の横を示しながら、
「よう此處へお園さんと二人で竝んで私とこのとほりに話してはりましたがな。家でもお園さんとよう泊まりやはつた。」
彼女の語ることは向うではその心でなくても言々句々、縦横無盡に私の肺腑を刺した。私は眞實胸の痛みを撫でるやうにしながら、
「さうですか。……しかし私には幾ら惚れてゐてもその女の抱へられてゐる屋形まで押掛けてゆくのは何となく遠慮があつて、それは出來なかつたのです。」私は自分の愼みをいくらか誇りかにいふと、女主人はそんなことは無用のことだといふやうに、
「こゝの内お茶屋どすがな。何も遠慮することあらしまへん。おいでやしたらえゝのに。」
私はその家が揚げ屋をかねてゐることは、その時女主人がいふまで氣が付かなかつた。それと疾うから知つてゐたならば何の遠慮をすることがあらう、それにしても女はどういふ心で私にはそれを明かさなかつたか。舊いことを思ひ出してみても、最初行きつけのお茶屋から彼女を招ぶには竝大抵の骨折りでは、おいそれと來てくれなかつた。それといふのも今になつていろ／＼思ひ合すれば、やつぱりさういふ深い男が始終付いてゐるので滅多な客が自分の家へ直に來ることを好まなかつたのかも知れぬ。

……それにしても五年前から自分と逢つてゐた場合の記憶をあの時はからとさまぐ〳〵思ひ浮べて見ると、それが何も彼もみんな腹にもないことをたゞ巧んで偽たりいつたりしてゐたとばかりはどうしても思へない。……私は凝乎とひとり考へ沈んでゐた。

二十三

若奴も傍から折々思ひ直したやうに口を入れて、

「お園さんも三野村さんのところへよう行かはりましたなあ。

といふと、女主人はうなづいて、

「ふむ、よう通うて行てたあ。」

といつて、話すところによると、彼等が馴染みけじめの時分男は二三人の若い畫家と一緒に智恩院の内のある寺院に間借りをして、其處で文展に出品する繪などを描いてゐた。仲間の中でも彼がひとり落伍者で遂に一度も文展に入選しなかつたが、お園は其間暇のあいてゐる時間を都合して始終そこへ遊びに行つてゐた。そして畫師が畫枠に向つてゐる傍に付いて墨を溶したり繪の具を溶かしたりした。

女あるじは笑つていつてゐた。

「三野村さんあなた、勉強をおしやすのにそないに女を傍に置いたりして能う繪が描けますなあいうて私がきくと、そなことない、お園が傍に付いて居つてくれんと繪が描けんおいひやすのどす。……さうどすか、わたし又何ぼ好きな女かて傍に付いてゐられたりしたら氣が散つて描けんやろ思はれるのに、そんなこというてはりました。」

私は、二人の情交の濃かであつたことを聞けばきくほど身體に血の通ひが止まる心地がしながら、惚れた女を思ふ男の心は誰も同じだと、

「私だつてそのとほりですよ。私は傍に引付けて置くことが出來ぬ代りに遠くにゐてどんなに彼女を思つてゐたか。その人間などはまださうして傍に置いとくことが出來ただけでも埋め合せがつく。」私は溢すやうにいふのであつた。

「三野村さんのよう此處でお園さんが傍にゐる處でいうてはつた。……賴りない女や。私が京都にゐるからかうしてゐるやうなものやけど、東京の方にでも往つてしまへばそれきりやいうて、始終賴りない女やいうてはりました。」

「ほんとにそのとほりだ。そしてお園はそれで聽いてゐて何んといふのです。」

「お園さんたゞ默つて笑ひ〳〵きいてゐるだけどす。……そして、そんなに惚れてゐるくせに又二人でよう喧嘩をする。喧嘩ばかりしてゐた。姉さん、あして私の處へ遊びに來てくれはるけれど、顏さへ見ればいつでも喧嘩や。そして仕舞にはやつぱり禁目までお花をつけることになるから來てくれるたびに金が入つて叶はんいうてはりました。お園さんの方でも、ほんよう喧嘩をして戻つてかといふのに、やつぱり戻らない、喧嘩をしながらいつまで傍に付いてゐる。」

さういつて、女主人が問ほつ[illegible]けに話すのでは、ずつと先の頃[illegible]と仕切りあまりにお園の方から男の處に通うて行くので女主人が氣に逆はぬやうに三野村の處へ遊びにゆくのもよいが、兩方の身の爲にならぬから餘り詰めて行かぬやうにしたがよいといつて、いひ含めたのであつた。すると一寸見はおとなしいやうでも勝氣のお園はそれが癪に障つたといつて一月ばかりも商賣を休んでゐたことがあつた。その後また野村のことで時々そんなことがあつた。女主人[illegible]と同じやうに彼女の[illegible]な惡戯[illegible]な男が付いてゐるのをよく心配して二人の仲を切らうとしているのへ氣を揉んでゐた。それで

暫く三野村との間が中絶してゐたこともあつたが、男の方でどうしても思ひ切らうとしなかつた。いろ／＼に手をかへて母親の情を取らうとすればするほど母親の方では増長して彼を散々にこき下ろすのであつた。そして、一度でも文展に入選したら娘を遣つてもよいとか、東京から伴れて來てゐる女と綺麗に手を切つてしまへば承諾するとか、その場かぎりの體の好いことをいつてゐた。そして母親や女主人の方で二人の間を壞くやうにすればするほど三野村の方で一層躍起になつてお園が花にいつてゐる出先までも附纏うて商賣の邪魔になるやうなことをしたりするのであつた。

女主人は、それでも私が長居をしていろいろ話をしてゐる間にいくらか此方の心中が解つて來たやうであつたが、いくたびも澱むやうに私の顔をぢつと見ながら、

「今やからあんたはんに云ひますけど、眞相はかうやのどす。」といつて、尚ほ委しく話して聞かせたところによると、斯うであつた。

母親や女主人から、三野村のやうな男にいつまでも係り合つてゐては後の身の爲にならぬと喧しくいふのと、お園自身で段々それと解つて來て、その後自分の方からはなるたけ男に遠ざかるやうにしてゐたのであつた。すると丁度その頃初めて私と知るやうになつた。その年春のをはりから夏の半ばまで三月ばかりもゐて私が東京に歸つてからも引きつゞき絶えず手紙の往復をしてゐるうち、秋になつて女から急に體の始末に就いて相談を仕掛けて來た。勿論そのことは此方から進んでさうするつもりであつたから、此方でも必死になつて金の工夫をしてみたけれど遂に思ふだけの金は出來なかつた。それで、自分の方ではさう急にといつてはとても金の策は付かない。甚だ殘念であるが、やつぱりかねて約束して置いたとほり早くても半年くらゐはどうしても待つてゐてもらはなければならぬ。それでも是非とも今に今身を退かねばならぬといふ止み難い事情でもあるなら、ほかに爲方がない、その場合に處すべき非常手段について參考となるべきことを細かに書中にしてやつたのであつた。そして彼女からの手紙は來るたびごとに切なくなつて、ひたすら不如意の身の境遇を喞ち歎いてゐた。此方からそれに應へて遣る手紙もそれに相當したものであつた。

三野村は、前に暫く、祇園町から程近い小堀の路次裏に母親がひとりで住んでゐる頃その二階に同居してゐたこともあつたくらゐで、そこから他處へ出ていつてからもやつぱり時々母親の處へ訪ねて來てゐたが、ある日母子二人とも留守の間に入つて來て其處らを掻き探してゐるうちにふと私から遣つた手紙の藏つてあつたのを目つけて殘らず讀んでしまつた。それには抱ぬしのひどく忌むやうなことが書いてあつた。それまであるじから敵のやうに遠ざけられてゐた三野村は好い物を握つたと小躍りして悦び、早速それを持つて往つて、

「姉さんあんたは私ばかりを惡い者のやうに思つてゐますが、これ、こんなことを二人で相談してゐる。用心しなけりや可けません。」

といつて、私から女にあてて遣つた祕密の手紙をすつかり女主人に見せてしまつた。もし私と彼女と手紙で相談してゐたことが成就したならば、立場は各々異つてゐても彼等は利害を同じうせねばならなかつた。

女主人は又私の方を見て、

「私のとこでもそんなことでお園さんにあの時廢められでもすると困るさかい……それまでは私もあんたはんといふ人があつてお園さんを深切にいうておくれやすいふことは蔭ながらよう知つてをりまして、あんたはんの處へ行くのでも

なるたけ他を斷つてもそこを都合ようしてお園さんを上げるやうにして置いたのに、どうしてそんな私のとこの迷惑になるやうなことをおしやすやろ思うて：：こんなことというてはえらい濟まんことどすけど、そんな手紙を見てから後あんたはんの事を怨んでゐました。それで三野村さんも初は私の方で、お園さんにあんな人を付けて置いては後にお園さんの出世の邪魔になるというて段々二人の間を遠ざけるやうにしてたのどすけど、あんたはんがそんな事をお園さんと手紙で相談しにやすことを知つてから、此度は又私から進んで三野村さんとお園さんを手を握るやうにさしたのどす。それは私の方でわざとさうさしたのどす。」女主人は話に力を入れてさういふのであつた。

その話はもう四五年前のことであつたけれど、今向き付けて女主人から此方の祕密にしてゐたことを素破抜かれては早速何といつてよいか言葉に窮した。自分ももうその時分の委しいことは大方忘れてゐるが、女の方から餘り性急にやい／＼いつて、とても急には調ひさうもない額の金を請求して來て、もし此方でそれだけの金が調はない時には、かねて自分を引かさうとしてゐる大阪の方の客にでも賴んでなりともぜひとも此處で身を引かねば自分の顏が立たぬ、それもこれもみんな私への義理を立て通さうとする苦しい立場からのことであるといふやうなことを眞實こめた言葉でいつて寄越すところから、その際此方で出來る限りのことをして遣つたうへで、それでどうすることもならなかつたら、止むを得ないから思ひ切つて最後の手段に出るより外はなからうといつてやつたのであつた。勿論女からの手紙には、來る手紙にも來る手紙にも此度の抱ぬしの仕打ちに對して少なからず不滿を抱いてゐるらしい口吻を洩してゐた：：私はその時分のことを心の中で又いろいろ思ひ起してみながら、今はじめて聽く、此方ではそれと重きを措かなかつた戀の競爭者の三野村が、さうした極祕密の私の手紙まで女の處から奪ひ去つて、しかもそれを利用して抱主の女あるじの信用を囘復し彼自身の戀の勝利を確實にしたとは！

やゝ暫くして私は、

「えゝ、さういはれればそんな手紙を寄越したことがあつたのは自分でも覺えてゐます。しかしその時彼女から私に寄越した手紙では此方でいろ／＼不平があつたやうなことをよくいつてよこしてゐました。一體どんなことがあつたのです。私の方から、それはどんなことで揉めてゐるのかといつて訊ねても、その內譯は何にもいはずに、たゞ癪に觸ることがあるから母の處に歸つて店を休んでゐる、一日も早く商賣を廢めたいと云つてゐました。」

さういつて訊くと、女あるじは思ひ合すやうな顏をして、

「あゝ、さうや／＼。それが三野村さんのことで私の云ふことが氣に入らんいうてお園さん休んでた時のことどす。」

さういふと、若奴も傍にゐて、

「へえ、さうどした。」といふ。

私はあれやこれやその時の事を更に精しく思ひ出して、

「ぢや、何も彼も私の事が原因で屋形と悶着を惹起してゐるやうなことをいつて手紙を寄越してゐながら、それは皆な拵へ事で眞相は三野村の事が原因だつたのですな：：どうも、さうでせう。私はあんたもご承知のとほりあの年の夏の三ケ月ばかり京都にゐて東京に歸つたきり手紙と金とを送つて寄越すだけで、てんで自分の體は來ないんですもの、私の爲に悶着が起る道理がないのです。みんな譃をいつてゐたのだ。だからかうして話してみなければ眞相

は分らない。それでゐて私こそ好い面の皮だ。三野村自身のことでそんなに揉めてゐるのとは知らず、言つてくるがまゝに身受けの金のことまで本氣にゐてこれだけ心配してやつたか。……それは何もあなたの方の迷惑になるやうなことを初から好んで彼女に勸めた譯ぢやない。自分では何處までも穩便な方法で借錢を拂つて廢業させようと思つてゐたのです。それであまり火の付いたやうにいつて強請んで來るからさうでもするよりほかに爲方がなからうと思つたのです。」

　さういふと女あるじは幾らか此方の事情も分つたやうに、

「三野村さんもずつと前に一度そんなことをお園さんに勸めたことがあつたのどす。そんなことせられては私の方かて默つて見て居られんさかい、それでお園さんを長いこと三野村さんのお花にはやらんやうにしてたのどす。それやあの人のことでは何度も揉めたことがあるのどす。あんたはえらいおいやすが、あの時かて大變どした。お園さんも結局三野村さんのことやいふとあんなおとなしい人が本氣になるのやもの。……」

　私は又その四五年前の當時女から悲しい金の正面を訴へて來た時のことを繰返して思ひ浮べながら、

「しかし、さうであつたかなあ。……」と、その時の女の心底を考へ直してみた。「ぢやその時私が彼女からいつて來ただけの金を調へて送つたら、それで脚を拔いて、そして體は私の方に來ないで三野村の方に往つてしまつたな。」

　女あるじは眞正面に私の顏を見て、

「えゝ、そしたらもう三野村さんの方にいてしまふ氣どしたのどす。」

　それでもまだ私は小頸を傾けて、

「さうでせうかなあ。その時は無論三野村が離れず付いてゐるから、たとひお園の方では自分だけの一存で私に金を賴んで來たのであつても、自由な體になつてしまへば三野村がすぐ浚つて去つたにちがひない。……その時一日に追掛けて二度も寄越した手紙が幾十通となく、今までも藏つて私は持つてゐます。それで見ると、まさか謊ばかりで私に賴んだものとは自惚れか知らぬが、どうしてもさう思へないなあ。」

　私はひとり語のやうにいつて、心の中でその時血の出るやうな苦しい金の才覺をした悲しい記憶を呼び起した。すると女主人も思案するやうな顏をして、

「ふむ――變どすなあ……そやけどお園さんは、えゝやうにいうてお客さんを騙してお金を取るやうな惡い料簡のまはる人やない。私のとこに七年も八年もゐたのどすさかい、あの人の氣性は親よりも誰よりも私が一番よう知つてゐます。商賣かて方々渡つて歩いたりしたこともないし、初めて私のところから出て廢めるまで一つところにゐて、長い間商賣はしてもいつまでも素人のとほりどした。三野村さんかて、お園さんがあんたから貰ふ金で花をつけて遊ぶのどうするのいふことはない、心の綺麗な人どした。……お園さん本當に三野村さんに惚れとつたのやろか。」

　女主人はさういひさして又傍にゐる若奴の方を振顧つた。

　私はそれに口を入れて、

「あの女は自分でもよくいつてゐた。わたし、こんな商賣してゐたかて、まだ一度も男に惚れたいふことおへん。さういつてゐたが、三野村ともそんな悶着が度々あつたくらゐだから無論嫌ひではなかつたらうが、さう魂を打込んで男にほれるといふやうな性質の女ぢやなさうですな。」

「よう此處で三野村さんと喧嘩してはりました

なあ。」若奴がいふ。
「ふむ、よう喧嘩をしてたなあ。あんなに惚れてゐてどうしてあゝ喧嘩したのやろ。」女主人はその時分のことを思ひ出すやうな風で笑つた。
「それは仲が好過ぎてする喧嘩でせう。」
さういふと、女主人と若奴とは口を揃へてそれを否定し、
「いや仲が好過ぎてするのとちがふ。仲が好うてする喧嘩とさうでなうてする喧嘩とは違つてゐます。お園さんと三野村さんの喧嘩は本當に仲が惡うてするやうな喧嘩やつたなあ。」
「えゝさうどす。お園さん、もうあんたはんのやうな人は嫌ひや、もう此處へ來んと置いとくれやすいうて、隨分きついこというてはりました。」若奴がそれに付けていつた。
「男が死んだ時お園はどうしてゐました。ひどく落膽してゐましたか。」
女主人と又若奴と顏を見合しながら、
「死んだ時かて格別お園さんの方では力落したやうな風はなかつたなあ。」
若奴はその時分のことはよく覺えてゐるらしく、
「ちよつともそんな樣子はありやしまへんだわ。……さう〳〵あの時お園さん二三日大阪へ行つてはりました。そして夜遲うなつて歸つて來やはりました。まあ、お氣の毒に三野村さんがお死にやしたのに、お園さんは大方そんなことも知らはらんやろか大阪に往て何處で何してゐやすんやろいうて私内でいうてゐました。ほて、此處へ入つておいでやした時、お園さんの顏を見ると、私すぐ、お園さん三野村さんが死なはりましたと、こつちやは大きな聲でいひましたけど、お園さんはびつくりともしやはらんで、たゞ一と口さうどすかおいひやしたきりどつせ、姐さん。その時私、お園さん薄情な人やなあ思ひました。」
若奴がさういふと、女主人は、
「ふん、さうやつたかなあ、わたしあの時どうしてたか内に居らなんで、あとで聞いた。」
「死んだ時はそりやあ可哀さうどしたで。」
といつて、又追憶を新にする風であつたが、
私はそれよりも自分の目前の境遇の方が遙かに憐れであつた。

西行は俗世を棄てて山林に入つたけれど、人の世の戀や情といふものを知つてゐた。彼は戀をも詩にした點に於ては、彼の生存した武士時代の一つ先の時代たる平安朝の詩人と異らなかつた。が、彼の詩は、前にも言つた通りに、廻りくどい言葉使ひで巧に戯れ言ひ做すといふ弊が少い。戀の哀れと歡びとを感ずれば、その感じたまゝを率直に流露してゐる。平安朝の詩人の多くが歌つたやうに、ある特別の戀人同志の經緯を歌問答にして喜んでゐるのでないから、時世を超越してゐる處がある。それ故に今日の吾等が讀んでも清新な興味を感ずることが出來る。
葉がくれにちり止まれる花のみぞしのびし人にあふこゝちする。

（「秋江隨筆」の「西行の歌」の一節）

子の愛の爲に

五十に近くなつて思ひがけもなく子供を持つた宇治は、それまで長い過去の生活を通して專ら異性の愛慾に向けられてゐた愛情の目的を今度は子供のうへに置くことになつた。それはしかし、彼が故意に努めてさうするのでなく、嘗て自分の戀する女に向つて注いだ時と同じやうな深い本能性に基づくものであつた。

宇治の性質として、これまで女を戀した場合の、彼の氣持や行爲によつてみても、ある一つの目的物に向つて全力の愛情を傾倒してゐる場合には、丁度鹿を逐ふ獵師の眼に山が見えないといふ譬のとほり、その一つの目的物よりほかのものは殆ど考へられなかつたのであるが、長い間幾度かの戀の失意の境遇を經て來て、彼が漸く戀にも異性にも倦み疲れた時分には、彼の精神にも肉體にも戀愛の情火の自然に消滅すべき五十に近い年であつた。そしてちやうど西鶴が萬の文反故の中に、「もはや女房持申候力も御座なく候。」といつてゐると同じやうに、戀をする力もなくなつてゐるところへ以つて來て、不思議の運命は彼に一人の子供を與へたのであつた。さういふわけで、今まで異性に向つて注がれてゐた愛情――その愛情は、溢れるほどの愛情でありながら、不幸なる彼には、いかなる運命の神の惡戲か、その愛情を傾倒すべき目的物を彼に與へなかつた。――を、子供の愛に向つて注ぐやうになつたのは極めて自然の變化であつた。

世俗の習慣からいふと、何故か、異性の愛に溺れることは不道德の行爲であるやうに考へられ、之に反して子供を愛することは、いくら深く愛しても、それは不德でないばかりか、親の慈愛として道德的行爲の如くに考へられるのは矛盾したことと思ふのであるが、とにかく宇治が、そんな成り行きから、愛情の對照を異性から子供の上に移したことは、又自然に彼の世間的の信用をいくらか回復する結果をも持ち來したことは事實であつた。

宇治の生活が、そんな次第で、これまでよりも、世間的の眼で見て、遙に眞面目なものになつて來た事は争はれなかつた。尤も彼自身では以前の生活とても決して不眞面目なものであつたとは思つてゐないのであるが、さうかといつて、今の生活が眞劍であることも、彼自身にとつて一點僞りのないことであつた。彼は、今までとても生命が惜しくないことはなかつたが、年をとつてから、早婚の人間にしては孫といつてもいゝくらゐの子供を持つてみると、これまでよりも一層生命は大事であるといふ事が漸々と感じられた。そして又今までとても錢の欲しくないことはなかつたが、さうして生ひ先の遠い子供の親といふものになつてみると、從來に幾層倍して錢が大事であるといふことも眞劍になつて考へられた。

子供が出來てからの彼の念頭を絶えず往來してゐることは、かういふことであつた。

「四十八で子供を持つて、この先運よく十年生きたにしたところで、子供は、やつと十歳になつたばかりである。慾をいふなら、どうか子供が女學校を卒業するまで生きてゐたいものだが、それは、これから先十七八年もかゝることである。自分の壽命が今後十七年も十八年も保てることは絶望的なことである。すると、いつかは悲しい死別の時が、晩來るにちがひない。同じ

子を持つなら、もつと早く持つことが出來たなら、せめて今少し長く親となり子となつて現世の緣を悅樂することが出來たらうに……」と、仕舞ひには、そんな取越し苦勞もしてみたり、果ては愚癡になつてもみたりするのであつたが、それも結局宇治自身の心得が長くそつちの方へ定らなかつたから、今となつては致方もないことである。またそれを格別後悔もしなかつた。

そして、以前戀に熱中してゐた時分に、藝術は藝術として又異つた意味で、それが彼に取つて大事であつたと同じやうに今は子供の愛情を中心にして生きてゐるのであつても、藝術の大事には少しの違ひもなかつたが、自分の死んだ後で子供とその母親とが困らないだけのことは考へて置かなければならぬと思つた。否、さうなると、甚しく杞憂家の宇治は、もう明日の日にも自分は死にはせぬかといふやうな觀念に脅かされるのであつた。實際こんなことをいふのは、落語にでもあるやうな神經病みのやうであるが、今日の東京市中の交通機關の現狀などを考へ出すと、道を歩いてゐても電車に乘つてゐても、何處に忌はしい運命の神が潛んでゐるか分らないやうな氣がするのであつた。それゆゑに、無事に生きてゐる間に一日も早く自分の亡き後の謀をして置かなければならないと、丁度何ものかに後を追ひ駈けられてでもゐるかのやうに心が急かれるのであつた。

たつた半日東京の市中に出てゆくのでも、自動車にも轢かれず電車の事故にも遭はず、無事に、郊外の自宅に歸つて來る時には、わづかに、停車場から五六町と隔たらぬ道をも、いつもの、子供が風呂に入つて、それから寢床に入る時刻に、どうかして少しでも遲れることがあると、宇治は大抵俥に乘つて道を急いだ。そして、何より先に、

「坊主はどうした。何事もないか。」と、訊いてから靴を脱いだ。

子供の母親のお悅は、

「これがゐるから、今年はもう、あんまり遠いところへ幾日もいつて居られないでせう。」といつて笑つてゐた。

愛樂がそこに集まつてゐる以上は、今のところ、子供の爲に脚止めをされてゐても、格別不滿にも感じなかつた。それに毎年ひどく夏負けのする宇治も今年の夏はそんなことで氣の張つてゐる爲か、いつもほど弱りもしなかつた。丁度暑氣に向ふ六月の初から書き始めた新聞の連載小說はある事情のために中途で止めたが、それでも殆ど七月一ぱいは書いた。盆前の急劇な暑さ、それから土用に入つてからは息をも吐かせないほどの九十度の酷暑にも抵抗しつゝ、來訪者がみんな、このお座敷は涼しいでせうなあ。」といふ、見掛け倒しばかりの、風通しの悪い二階座敷に閉ぢ籠つて、行者が行でもするやうな勇猛心を鼓して机に向つた。搗てゝ加へて、去年と丁度反對に梅雨が空つゆであつた上に土用前後の二十日ばかりといふもの、草も枯れるかと思ふばかりの日照りが續いた。

平素は健康體を自信してゐるお悅も、去年の秋その子供を生んでから、四六時中絶えずその子供の爲に惱まされてゐた。生れて五六ケ月の春の頃には夜半に何度も眼を覺ますので、彼女はその爲に常に睡眠が不足勝ちであつた。それから段々夏になつて、そろ／＼子供が這ひ出す時分になると、今度は、夜はよく寢るかはりに、朝の六時頃から晩の八時頃まで十四五時間の間といふもの、子供は殆ど晝寢らしい晝寢もせず、一ン日母親の膝のまはりに絡まつて絶えず乳房

を銜へてゐなければ承知しなかつた。
「せめて二時間でも三時間、床の上にひとり寢てゐてくれると、私くらゐの女中が一日がかりですることは、さつ／＼とやつてしまふ」
と、彼女は零してゐた。
子供は、生れ出るまで、宇治がいろ／＼に氣遣つたほどでなく、三人ばかりの醫者に健康診斷をしてもらつたところによるも、何處に異狀もない健康な體質であつたが、たゞ一つの缺陷は、よく眠らないことであつた。乳兒は二十時も眠らなければならぬといふに、十二時も完全に眠らなかつた。醫者はそれを遺傳性の神經質であるといつたが、その點は、ちやうど子供の眉毛や眼の切れ目、額の形などが生寫しである如く、明瞭と父親の遺傳をうけてゐたが、母親にもヒステリィ性の不眠性はあるのであつた。
「どうも遺傳とすれば、これは仕方がない」と
いつてゐたが、母親は、その夏の間に見るみる健康が傷けられてゆくのが見えてゐた。宇治は、毎日それを目撃してゐて、親が子を育ててゆく狀態に、何となく或る悽愴味を感じてゐた。生物學者の丘淺次郎博士の言によると、人間は子を生みさへすれば、それで生物としての義務を了るのであつて、子を生めば間もなく死ぬのが本當であると、嘗ていつてゐた。宇治は、母親が、一人の乳兒の爲に四六時中惱まされてゐるのを見るにつけても、屡々そのことを想ひ浮べてゐた。そして、乳こそ與へないが、彼自身も考へてみれば、近頃の自分は、殆ど爲ること考へることが、子供のことを出立點としてゐるのであつた。
「この貪食な蟲めが！」といつたり、「この、親の生命取りめ」といつて、宇治は、一日に何度となく子供の傍に寄つて、ぺつと、圓く肥つた頬を指の先で愛撫するのであつたが、そんなに母親の悽慘として惱まされてゐる有樣を見たり、又自分が今はたゞ子供の將來のことで苦勞してゐることが分つてゐても、不思議にそれが、不滿でないばかりか、却つて愛樂であるやうに考へられるのであつた。
しかしお悦は、口でこそそんなに元氣さうなことをいつてゐたが、事實ひどく疲勞してゐた。半病人のやうになつて子供を持て剩してゐた。ヒステリイのやうに、
「さあ澤ちやんお呑みなちやい、いくらでもお呑みなちやい、みんなお前のだから……可愛いんだからねえ、かはいゝんだからねえ。」と、大きく垂れた乳房をあてがつて添乳をしながら、きゆつと抱締めてゐたりするが、土用の眞晝間、九十度の炎熱にじり／＼煎り付けられながら、やつと少しの晝寢をしかけたかと思ふと、ものの二十分も經たぬ内に、目を覺まして、わあッと泣き出す子供を聽しながら、
「これの爲に體中の精をみんな吸ひ取られてしまふ」
と、母親はこぼし／＼してゐたが、傍の見る眼にもまつたくそんなやうに思はれた。乳兒も八ケ月からになれば、母體から乳を一日に六合から吸收するといふことだが、親の生命力を犧牲にしても本能的に發育してゆかうとする乳兒の生きる力は凄じかつた。
お悦は體内の水分がさうして毎日々々子供の爲に吸取られるからでもあるまいが、連日の旱天のためにも赤裸體内の水分が乾涸れてしまふかと思ふやうに、患はしげな顏を顰めて、恐ろしいやうに照りつゞけてゐる空を絶望的に見上げて、
「雨が降つてくれるといゝがなあ。……どうして今年はかう雨が少いんだらう。」
と、獨言つやうに繰返していつてゐた。新聞の夕刊などには涼しい雨を持つてくる颱風がもう沖繩群島あたりまで來てゐるやうなことを書い

てゐたが、それ等はいつも空頼みにをはつた。

夏には殊に弱い宇治は、いつの年でも降雨に戀ひ焦がれることは一入であつたが、今年は不思議にそれほどとも思はなかつた。それだから幾らか暑氣に對しても抵抗力が出來たのかとも思はれた。そして彼は格別炎天つゞきを零すほどのこともなく、毎日眞裸體になつて、蒸すやうな二階で何か知ら机に凭つて職業の筆を動かしてゐた。

お悦は偶に子供を抱いてその二階に上がつて來ることがあると、

「おゝ暑い。とても階下とは比べられない。……おゝ暑いあつい。」といつて、逃げるやうに直ぐ階段を下りていつた。

い、まめな宇治は、その階段を一日の中に、數へたら、おそらくは四五十遍は上がつたり下りたりした。

お悦は、女中と、

「とても、あの眞似は出來ない。」と、笑つてゐたが、彼女はそこに上がつて行くのが、東京までも出てゆくやうに億劫であつた。

それに宇治の家では、いつも好い女中のないのに困つてゐた。不思議とその居まはりには好い女中が多かつた。中には一つ家に五つになる上の坊ちやんが生まれて間もなくからずつと五年も勤めてゐて、其の三つになる孃ちやんに、

「お孃ちやんは、誰の子？」と問へば、「時の子。」といふほど馴付いてゐるのがあつたり、さうかと思ふと、やつと二十か二十一の小柄の女で、五つを頭に、三つに一つの三人の子供がある家に、これももう四年も勤めて居て、一人を負つて、二人の子供を兩手に引いて、まるで姉のなつたやうな形姿をして、そのうへ遠くへ物を買ひに行つて來たり、そんなによく働いてゐても、そこの細君は女中冥利といふことをまだよく知らぬと思はれて、何か氣に入らぬことでもあると、女中などは上野の公設市場へ行けば降るほどある。」と、そんな棄てぜりふを言ふといふ話も聞いたりした。その他身裝も振りも構はず、せつせと働く女中は、餘處の家には、そこら中に居つた。一つ井戸を使つてゐる相貸家に住んでゐる銀行員の家にも足掛け三年勤めてゐる女中がゐて、傍の見る眼にも感心するほどよく働いてゐた。それにも係はらず、宇治の家では去年の秋子供が生れた時からもう十四五人の女中が、まるで木賃宿か何ぞのやうに始終出つ入りつしてゐた。

お悦は、何よりも餘處の女中のことばかりを、毎日のやうに口に出して羨んでゐた。それで、彼女はそれ等の、女中と子供を抱いて互に表に立つてゐたりして自然に親しい口を利き交はすやうになつた時に、そつと給料などのことを訊いて見ると、何處の家でも、宇治の家で遣つてゐる方々の給料に比べて大抵二圓から五六圓は少なかつた。宇治の家には、子供が生れてからは、中途で一人のこともあつたが殆ど常に二人の女中が居た。宇治が、年を取つて持つた子供の可愛さから、出來るだけのことをして子供に手數を懸けることを厭はなかつた。それにも係はらず、餘處眼に見てゐても、それ等の近所の女中が一人で爲てゐることを、宇治の家の女中は二人も居つて、……又どうかすると、出代りで三人にも重り合つたことがあつたりするが……それほどに働かなかつた。

「何處の家でも、あんな好い女中を何處から目つけて來るんだらう。……ほんとに、内で、どんな非道いことでもしてゐるかと思はれて、始終木賃宿のやうに出たり入つたりして外聞が惡くて仕樣がない。」

お悦は、躍起になつて絶えず零してゐた。食べる物なども、お悦は、毎時

も自分と同じ物を女中に與へて、一つ餉臺で食べてゐた。
　それでも中に一人だけ、働くことは鈍かつたが、宇治の家ではめづらしく一月から來て、八月の藪入りまでやつと六ヶ月だけ居つた女中が、これも、初め來た時には、二三年は居るつもりで銚子在の田舍から出て來たのであつたが、もう來て四五ヶ月めの六月末に、出し拔けに親から本人にあてて手紙が來て、主人の方へは御厄介になつたとも何とも一言の挨拶もなく、この書着き次第嫁にやるから戻つて來いといつて來た。女中がそのことをお悦に話したから、彼女は、女中に、
「それならお前何時歸るつもり？」と訊くと、
「明日歸るつもりです。」と、いつた。
　お悦はそれでひどく心の中で腹を立てたが、
「あ、さう……」といつたきり、それ以上のことはいはなかつた。口に出さずに腹の中に持つてゐるだけ、それだけ彼女の氣持はくしやくしやした。無論そんな、條理の解らない者を、こちらから手を突くやうにいつて、何時までも引留めて、居てもらはうとする氣はなかつたが、宇治の家にとつて間の悪いことは、その女中を自分の郷里から世話をして伴れて來た、二十四五になる一人の婦人が、――これは女中といふ譯でもなく、去年宇治の家に子供が生れた時分から、出たり入つたりして、宇治の家に居つて働いてゐた。それは、宇治が今の家に移つて來る前、やつぱり近い處で、先の家の隣家の細君であつたが、去年の六月頃、そこを離緣にされた。それについて深い事情をよく知つてゐる譯でもなかつたが、その出され方が傍眼にも隨分非道い仕方であつたのと、その婦人が溫順しい性質で臺所まはりのことから、何からよく働く人間であつたために、宇治夫婦はひどく彼女に同情して、いろ〳〵心配したこともあつたのであつた。そして、そのころもう妊娠してゐたお悦のお產のことなどを考へて、宇治の家では彼女に、ずつと當分居つて家事を手傳つてもらひたかつたのであるが、眼と鼻との隣家同志でゐて、まさかそれもならなかつた。だが今度の家は先と大分距離が隔つてゐるので、子供が生れて一月ほど經つてから、――一時震災の後銚子在の郷里の方へ歸つてゐたのであつたが又出て來て宇治の家へ來て手傳つてくれてゐた。彼女は針の方のことも可なりによく出來て、臺所まはりのことを形付けてしまふと、一寸の間でも直ぐ裁板の前に來て坐るといふ風であつた。宇治夫婦は、何處か好い處があつたら、彼女を嫁に世話をしたいと思つてゐた。そのうち年末に迫つて一つ、六つになる男の兒のあるところへ、好ささうな緣口があつて、向うも大分乘り氣になつてゐたが、ある故障からその方の話は、いけないことになつた。すると彼女は、その前から遠緣の從姉妹になる婦人の方で話のあつた、三河島とかへ嫁づく氣になつて、年の二十五日か六日になつて、風呂敷包みを一つ抱へたきりで往つてしまつた。宇治の家では生れて、やつと二ヶ月經つかたゝない赤兒を抱へてこれから冬季に入らうとするのに忽ちその日から困つてしまつた。その緣先きといふのは、お悦が彼女から、ひととほり樣子を訊いたところによると、向うはまだ奉公をしてゐる身體で、此方も嫁に行くといふよりも、何の事はない奉公に行くやうなもので、甚だ彼女の爲に香ばしくなかつたけれど、人が緣があつて、自分が格別不滿も感ぜずに嫁してゆかうとするものを、宇治の家で、ひて留める譯にもいかなかつた。あんまりいふと、宇治の方で勝手でいふと思はれるのを遠慮して、たゞ十分の注意だけを與へておいた。
　その時も、彼女は、自分が去つてしまふと、

宇治の家の手づかへを察して、自分の郷里の方から、ぜひ一人女中を世話しようと思つたのであつたが、出て來ようといふ者が二人もあつたが、どちらも、その間際になつて、掌を返すやうに約束を寸切つた。一度など、彼女は、いよいよその女中に來るといふ者が、あちらを三番の汽車とかで立つて、兩國のステーションに何日の何時に着くから、出て待つてゐてくれ、よろしい迎へに出てゐるから、違へず來てくれといふ約束の手紙を交換して置いて、十二月の十七日の日に、早くから宇治の家を出て兩國の驛について、約束の三番の汽車の到着するのを待つてゐたが、それらしい者の姿は見えなかつた。きつと乘り遲れたのだらうと思つて、四番の汽車を待つても來ない、五番のを待つても終に來ない。十二月半ばの寒空に、燒跡で吹き曝しの兩國驛で、四五時間も立ち盡して、たうとう待ち呆うけを喰はされたことがあつた。

宇治の家では家で、その晩は、――給料は世間並に比べて、不足のないやうに、これ〳〵。出て來る汽車賃も、そちらで持つてもらひたいといふ手紙であつたから、それも持つ。來たら、すぐ渡さうと、もう幾日も前から再三の葉書や手紙で約束をしてあるので、まるで嫁でも來るのを待つやうに宇治夫婦は日の暮れまでには、きつと二人で歸つて來るであらうと、頸を長くして待つてゐた。が、日が暮れて夜になつても二人の姿はおろか、迎へに往つた彼女さへ戻つて來なかつた。始終新聞などで見ることだから、もしかしたら、電車か自動車にでも轢かれたのではあるまいか、と、宇治とお悦は、寂しい電燈の下で、互に不安さうな表情を見交しながら、頻りに氣を揉んでゐた。

「何か間違ひでも出來たのぢやないでせうか。」

「さうだなあ。……あんまり遲い。」

「お咲さんは、これまでも、よく、朝出て行く時には、今晩までには必ず歸つて來ますといつて、さも〳〵歸つて來さうに堅くいつてゐて、千住とか深川とかへ泊つて來ることが多いんだから……でも今日はも一人連れてゐるから。……」

「うむ、今日はそんなことはないだらうと思ふがなあ。」

そんな、同じことを、何度も無駄に繰返してみたが、到頭その夜は戻つて來なかつた。

「あんまり、出て來るに手間が取れて遲くなつたから、二人で千住の從姉妹の處に泊つて、今日は早く歸つて來るでせう。」と、お悦は、その翌朝になつて、手を受けて待つやうな思ひをしてゐたが、その日も晩まで待つたが、又戻つて來なかつた。

「一體どうしたといふんだらう?!」お悦はそろそろ腹を立てて焦れて來た。

すると、お咲は、たうとう二晩泊つて、中まる一日置いた、その翌日の夕方になつて、ふらりと戻つて來た。しかも、田舍から出て來た女も伴れずに、彼女一人で歸つて來た。そして、火鉢の向うに坐つて遲くなつた譯を述べた。それは兩國でいくら待つても來なかつたので、自分も向つ腹を立てたまゝ千住の從姉妹の處に往つたついでに、此の間から話のあつた、自分の方の縁談を、從姉妹に、いつまでも愚圖々々してゐないで、年の内に早く極めてしまへと、喧しく勸められたので、その氣になり、一昨日あの晩、これからすぐ見合ひに往けといはれて、伴れてゆかれて、今日その話がいよ〳〵極まるまで待つてゐたので、えらい遲くなりまして、申譯がありません。といつて、彼女は濟まぬ顏をして詫びた。

それを聽いてゐたお悦も宇治も共にあいた口が塞がらなかつた。

そして彼女は、あと五六日經つて十三日に一寸銚子在の郷里に自分の用事で、いつて來る

つもりだから、その時は必ず誰か一人は伴れて來ますといつてゐたが、お悦はあんまり當てにもしなかつたけれど、

「お咲さん誰でも一人ぜひ伴れて來て下さい。憎みます。」といつてゐた。

そしてお咲は、中一日置いて二十五日には必ず歸つて來ますといつて、二十三日に又郷里に向つて立つたが、二十六日の午頃戻つて來たけれど、やつぱり寂しく一人で歸つて來た。

「わたし、腹が立つて〱。自宅へ怒鳴り込んでいきました。十七日に、あんなに來ると云つておいて人を散々待たして……わたしの家でもお父さんもお母さんもひどく怒つてゐました。あの昨夜までお母さんが、向うの來るといふ娘の家へいつて、お咲の話の家へぜひ往つてもらひたいといつて賴むと往きますと堅く約束をして置きながら、明る朝今日往くといふ日になつて、『どうも行けないから止めにする』といつて斷りに來たんださうです。それで、お父さんも、もうあんな連中は對手にならないといつてゐました。」

それつきりで、お咲さんは一人で歸つて來たが、その二十六日の晩は眞似のやうなことでも一寸そのしるしをするのだといつて、二時間ばかり、居づらさうに宇治の家にゐて、晝飯を食べると間もなく小さい風呂敷包みを一つ抱へたまゝ三河島へ嫁にいつた……のか、女中にいつたのか。

それから間もなく新年狀の葉書を一枚寄越したきり、何のたよりもなかつたが、今年の二月になつてから、間もなく、彼女は一人の娘を伴れて突然宇治の家の勝手口に珍らしく姿を現した。

「まあ、めづらしい、どうしました。」

と、お悦が訊くと、去六日一寸又、田舍の舊のお正月で行つて來ました、丁度此の人が東京へ奉公に出るといふので、一緒に來てもらひましたといふのであつた。

宇治の家では、去年の暮に押迫つて彼女が居なくなり、派出婦などを賴んでどうかからうかやつてゐたが、それも碌な者がないので、又新聞に廣告などを出して、それから二三人の女中が出つ入りつしてゐた場合であつたから、やつと愁眉を開いたやうな氣持がして喜んだ。

そして、お咲自身も、宇治の家で想像してゐたと少しも違はず、三河島の嫁に行つた先が飛んだ氣に入らぬ處であつたので、それから三四月の頃までにたうとう話が切れて、彼女は又宇治の家へ轉げ込んだ。宇治の家では彼女が伴れて來た女中のほかに、もう一人派出婦から女中に雇つて、事情があつて、五十日ばかり置いてくれといつて居つた、よく働く、年増の婢があつたが、丁度三月の中ごろになると、それも暇を取つたので、又候お咲は宇治の家で暫時働いてゐた。その間にも彼女は、宇治の家では女中としては殆ど最高級の給料を與へてゐたにもかゝはらず、もつと金の取れる處にいつてみたくなつて、東京から遠くないある温泉場へ、淺草邊の周旋屋の世話で五六圓の前借をして料理屋のやうな處へ働きに出ていつた。その時も宇治の家では、人の自由意思を妨げはしなかつた。すると、いつてものの五六日も經たないうちに、ある朝早く、彼女は又宇治の家の勝手口に一抱へもある大風呂敷を抱へて姿を現した。それは温泉場からそつと朝暗いうちに、足抜きをして逃げ歸つたのであつた。彼女は乘物にも乘らず、二三里の山道を、風呂敷包みを脊負つて驅け下りて來たので、四五日の間といふもの、足や腰が痛くつてびつこを引いてゐた。宇治もお悦も苦笑したが、そのまゝ又好い[illegible]をして働いてもらつてゐた。温順しい、骨を惜まずよく働く女であつたが、彼女は宇治の家に

一と月靜として働いてゐると、もう何處かへ早く嫁ぎたくなつて、肩で青息を吐いて、針仕事をしながら沈んでゐた。

すると、お悅が、去年以來自分の處へ出入りしてゐる產婆に話してゐたところから、緣談の口があつた。向うは小さい二人の子供を遺して細君に死なれて女手に困つてゐる、生活には困らない、柄の惡くない商人であつた。たうとうその話が極つて宇治の方を假りの親元として、六月の月內に向うへ行くことになつてゐた。そして、一方ちやうどその當日の前日になつて、彼女が折角骨を折つて二月に伴れて來た女中が又、そんな譯で歸るといふのであつた。

年中女中のことでばかり毎時氣を腐らしてゐるお悅は、その、むしやくしや腹を何處へ持つて行き場もなかつたが、傍に居るお咲やその女中の聽いてゐる處で、彼等に當り付けるやうにいつて、滿足な者の一人もない女中の不平を零した。

「わたしの處では、碌に用もない時には、いつも轉々二人も三人もゐて、居なくなる時には、一人も居なくなつてしまふ。みんな勝手なことばかりして。どうしてかう、少し、……せめて一年でも續けて辛抱の出來る女中が居ないんだらう。何處の家でもさうかと思ふと、其處らの女中は何れも三年も四年も居る。そして、二人も三人も子供のある家で安い給料で、又よく働く。」お悅は顏の血の色を變へて愚癡つぽく零したが、それは本當であつた。

翌日暇を取つて向うへ行くことになつてゐるお咲は默つてそれを聽いてゐたが、實際自分の都合の好い時ばかり、何時でも轉げて來さへすれば好い顏をして置いてくれるので、何度といふことなく出たり入つたりしてゐたことを思ふと、神經の鈍い彼女にも隨分耳は痛かつた。

しかし、お悅は、そんなに向つ腹を立てても、今度のお咲の緣談は、自分も一と口を利いてゐる上に、先方では最も宇治の家を信用して、もらひたいといふのであるから、幾ら自分の處で手づかへをするからといつて、それを何うする譯にもいかなかつた。

すると、女中の方に、つい先刻そんな手紙が親元から來たと話してゐるところへ、ある男が宇治の家の勝手口の件から顏を出して、昨日おときさんから手紙が來てゐる筈であるが、自分は、今度の緣談のある男の友達で、今一緒に深川の方に、銚子から船で來てゐる、一寸これから行つて會つてもらひたい、晩までには戾つてもらふからといつて來た。その男は丁度女中が井戶で水を汲んでゐるところへやつて來た。

女中が入つて來てそのことをいふから、お悅は、お咲に向つて、どうしたものであらうと相談を掛けたが、お咲は一寸裏手口から井戶の處に立つてゐるその男を覗いて見たが、見知らぬ人間であつたけれども口不調法な女中のいふことなどから想像しても別條もなささうに思はれたので、

「おや、いつてもいゝから晩までには必ず歸つて來てもらはないと、自家の方で心配するから。」と、お悅は念のうへにも念を押して出して遣つた。でも、その晩歸つて來るには、かへつて來た。

「それでお前向うへどういつて返事をしたの？」とお悅が訊くと、田舍者まる出しの女中は、

「わたし一人で今返事をする譯にはいかないから、歸つてお父さんとよく相談をした上で返事をするやうにいひました。」

「おや、お前歸る氣なの？」とお悅は訊ねた。

「えゝ。」

「いつ？」

「明日歸るつもりです。」女中は澄みたなからい

つた。
　お悦は、それで久緒と頭が燃えるやうに腹が立つた。
「それぢや、私の處で困つてしまふ。」と、いつたが、そんな十八やそこらの、物を知らぬ者を對手にしても仕方がないと思つた。そしてお咲に向つて、その女中の親どもの、あんまり術を知らない勝手を攻撃した。
「あつちの方の者はみな誰もかれも、斯うなんですかねえ。」お悦は、お咲に向つて當り付けるやうにいつた。
　それで、ともかくも、一人代りのあるまでは居つてもらはねば、お咲自身もこゝの家に對して困ると、彼女から話して聞かした。女中は殆どまだ自分の自由意思といふものを持つてゐなかつたが、宇治の家ではそれから必死になつて處處方々へ口を掛けてゐたが、何時になつても代りは出來なかつた。そのうち暑い七月になり、八月になつて、土用が明けてから一層殘暑が酷しかつた。女中の代りはないが、その後も親から度々手紙が來て、早く歸れと迫つて來た。それで田舎は舊暦のお盆なので、お悦もそれまでには必ず返さねばならぬといつて、十日の日にたうとう女中を返した。

　女中が一人も居なくなると、宇治の家では忽ち困つてしまふのは眼に見えてゐた。宇治の仕事が忙しいうへに、あれから一層暑さ負けのしてゐるお悦は、朝六時から夜の八時九時まで一日毎日々々、譯も分らず往獎のはげしい子供の爲に苦しめられてゐた。
　どうかからうか人の顏が分るやうになる三月から半歳ばかり續けてゐた、その女中には子供もよく懷いてゐて、父親の宇治が手を出しても、そつぽうを向いていからとはいはないのに、その女中には、おつぱいをくれる母親と同じやうに喜んで、いつた。祖母といつたやうな年寄りの手のゐない宇治の家ではそんな女中に往つてしまはれるとやつと、少し肩の拔けてゐたのが、又、子供のことはお悦一人に押被さつて來た。
　宇治はもう疾うから、夏になつたら、確りした留守居を賴む者を見付けて、何處かの涼しい處へお悦を子供と女中を伴れて遣つて置きたいと思つてゐたのであつたが、そんな次第で、留守居をしてくれるやうな者はおろか、女中にさへも差支へた。たうとう夏中を何處へも行かずに過して來た宇治は、それでもさすがに八月の中頃になつてからは大分疲勞を感じて來た。それに、その十日に、役に立たぬやうでも半歳もゐて、家の事がやつと飲込めて來たところで女中に去かれてしまつては、一月か二月頃も一た月ばかり出つ入りつして雇つてゐた派出婦を雇つてゐたが、そんな處から來る渡り者には横着な者も多かつたし、そんな通りすがりのやうな者に大事な子供を抱かしたりするのが、宇治にもお悦にも厭であつた。
「一家の中は年寄りといふ者の必要なことを、つくづく感ずる。大抵若い母親などといふものは、子供をお祖母さんに育てゝもらふやうなものだ。」宇治は心からそれをいつて、仕方のないことを零した。
「そりやお祖母さんがあるといゝんですよ。晝の間は大抵お祖母さんが見てくれるから。」お悦もいつたが、何方を向いてみても宇治の方にもお悦の方にもそんなお祖母さんはありはあつても、高齢であつたりそつちにも手が足りなかつたりして役に立たなかつた。
　仕方なくお悦の肩や手を休める爲に派出婦が代つて子供を抱かうとしても、馴染むまでには、どうしても四五日はかゝつた。そしてその四日か五日も居ると、彼等は、多くの場合、その横着

なのに、此方から愛想を盡かして人をさし代へてもらつた。

「私も大分疲れて來た。二三日でいゝ、仕事句切りが付いたら、一寸一週間ばかり何處かへいつて息をついて來たいなあ。それには、好い女中は急に望めないとしても、せめて派出婦に好いのが來てくれないかなあ。」宇治は、早速に低氣壓を望むよりも、むしろその方を待ち望んでゐた。

そして、階下の北に向いた三疊の室に小机を置いて、「それで仕事に寄つてみたりしてゐたが、子供は座敷中を這ひ廻つて、何にでも手を出した。又彼は二階の、定つた場處に驅け上がつた。それでも彼は二十日までには必ず書いて渡さねばならぬ物があるので、やつぱり蒸暑い二階でせつせと筆を動かしてゐた。

二人めに代つて來た派出婦も、五六日居て、横着なところが眼に着くと、お悦は、

「あんた、慣れない仕事で疲れたでせう。疲れたら、暫く他の人に代つて休んでもらつていゝんですよ。」といつて、體よく斷つて返した。

そして、いくら眼に餘るほどの横着者であつても、それが去つてしまふと、あとは忽ち差支へてしまつた。一つ井戸を汲み合つてゐる隣家には、去年の震災後そこに越して來る前からもう足掛け三年も居るといふ、三十ばかりの女中がずつと一人續けて一日よく立ち働いてゐるうへに、そこには十四五の男の子が一人あるきりであつた。細君など滅多に井戸端に出て水を汲んだりすることもなかつた。お悦は、ちつとも靜としてゐない子供に惱まされながら宇治と顏を突合にしてゐると、何といふことなしに、氣が焦々して來るやうであつた。

「こんなに手數のかゝる子供を見たことがない。」

始終口癖のやうに零してゐた。一體お悦は愚癡つぽい女であつた。どうかすると彼女は子供の生れたことすら、よく愚癡を零した。しかし、宇治はそんなことの對手になつてゐなかつた。

「そんなことを今更いつたつて仕様がない。」

宇治は、ない時には子供を望みもしなかつたが、出來た子供を、これが生れなかつたならばなどと、後悔したことは一度もなかつた。そして、子供が生れると同時に、それまで入籍してゐなかつたお悦の入籍の手續きをも濟ました。お悦と宇治とは、これまでの境遇や經歴の相違や、その他の關係から、今後の生涯を共にするのは、必ずしも、どうする[illegible]、お互の將來の幸福であるか、[illegible]、疑問であつたが、しかし、これまで長い間相應に世間といふものを見て來てゐる宇治は、お悦と、宇治に順應して行く氣さへあるならば、彼女を生涯の同伴者とすることに格別不都合を感じなかつたのである。といふのは、教育の程度が低いとか、彼女の實家がどうであるかといふやうなことは、常識などに別條のない限り、宇治は、今となつては、それを兎や角云つてゐなかつた。たゞ彼女が、宇治によつて營まれる、今後の、些やかな家の生活をお互に幸福なものにする上に聰明なる理解を以つて順應し、自分達の老後の生存の安全を保護する方法を立てるうへに就いても宇治の心持をよく飲込んで、和合しさへすればよいと思つた。

すると、お悦の方では、自分と宇治とのつり合をどう考へてみてゐるのか、始終邪推と僻見と猜忌に惱まされた。何時でも宇治の爲に拋り出されさうな氣がしてゐるのであつた。宇治も、もう相當に考へを定めての上のことであるから、自分では少しもそんな氣もなかつたので

あるが、殆ど生來の病的ともいつていゝお悦の、さういふ不安は直らなかつた。宇治は自身で、以前の自身と大分違つて來てゐることを、十分確信してゐるが爲に、お悦のそんな不安を、可笑しくも思つたり、可哀さうにも思つたりするのであつたが、あんまり沒分曉の、お悦のそんな性癖を露骨に見せ付けられると、彼女の生ひ立ちとか教育の不足とか、從來の生活の境遇とかいつたやうなことでなしに、その現前の惡い性癖に手古摺らされて、その爲に、何も彼も我慢してゐるお悦が厭はしくなることが度々であつた。

一度など、宇治が、彼の先輩や友達と五六人で久し振りに親しい夕食の會合を日本橋の方でする筈であつた、彼が衣服を更めてこれから出掛けようとすると、穩かならぬ顏をしてゐた彼女は突如宇治の胸倉に打突つて來て、羽織の紐を千切つたり、宇治が大切にしてゐる結城の袖口を綻ばしたりした。宇治はたとひ藝者遊びに行くのであつてさへ、そんなことを、お悦がするのは可くないと思つてゐるのに、さういふ性質の會合へ出掛けようとする場合であつたから、つくづくお悦の病的な邪推と嫉妬に愛想の盡きる思ひがした。「この女を、大分見違へてゐたな。しかし、自分の不明だから仕方もないが……」と心の中で思ひながら、不快な氣持を胸一杯にして出ていつた。

お悦が突如自分の方から宇治の頭に手を上げて打つて擲つたり、まるで猫のやうに宇治の手だの顏だのを引搔いたりする病的行爲は、先の生傷が[illegible]癒り切らぬ時分に絶えず發作的に始まつた。一度など、お悦は、平常を上げて不意に宇治の額を嫌といふほどひつぱたいたので、宇治は眼から火が出るほどの目に遭つた。その時は、宇治も流石に心から憤つた。

「俺の身體は金がかゝつてゐる身體だ。何の爲にそんな不埒なことをするんだ。……俺の兄弟はみんな田舍にゐるが、それ等の家内に一人だつてお前のやうな者はない。」といつたが、彼は、もう段々年も取つて來たことであるし、際にどうかして靜かな生涯を送りたいと、そればかりを思つてゐるのに飛んだ女に係り合つたもんだと思つた。宇治は彼女に、そんなことを行[illegible][illegible]されても、なほ耐へて置かねばならぬほど、惚れても居なければ氣に入つてもゐなかつたが、さうして、世間體を公然と一旦一緒に棲んでゐる者を、又出すの別れるのといつては、折角年齡相當に、近頃大分落着いて來て、世間からもさう見られてゐる自分の行爲を破壞したり、ひいては多少の信用を傷けるのが殘念さに、どうかしてお悦のそんな厭ふべき性癖を直したいと思つて忍耐してゐた。彼は、今から一と息若かつた先の獨り身の時分と異り、今は自分に浮氣な慾望など殆ど全くといつていゝくらゐ無いことを自分で知つてゐるので、お悦のそんな病的な嫉妬や邪推や僻見に原因する不作法なる亂暴に、一點の割引きをして考へなければならぬところはない、と思ふのであつたが、お悦を出して又ほかの女に取替へるなどといふことは、自分の利害と道德上からは、そんな次第なので、「毛頭差支へないこと」と思ふのであつたが、それを實現するのが面倒臭いと思はれるほど、彼はもう、そんなことを億劫がつてゐたのであつた。そして、何時かは、いくら病的のお悦でも、宇治の日常を觀察してゐる間にはよく彼の心持が解る時が來るであらうと思つてゐた。

けれどもお悦のその性癖は、生來のものと思はれて、とても直りさうになかつた。宇治が少し小言でもいふと、彼女はすぐ、

「氣に入らなければ早く出せ！」といつた。宇

治は呆れた顏をして、
「氣に入らなければ早く出せつて、出すくらゐなら、小言も何もいはない。」
「口から出まかせをいふない。出すには金が入るから、その金が惜しいんだらう。」まるでそこらの印半纏を着た土方か何ぞのやうな口を利いた。
「金が惜しいんぢやない。お前のその惡い性質を直さなければ、その惡い性質で、お前自身、自分の境遇を破壞してゐるやうなものぢやないか。」
「利口ばつたことをいふな。」彼女は栃木訛りでいつた。
宇治はつくづく持て剩したやうに、
「お前といふ人間は、損な性分だなあ。」と腹の底から呆れてゐた。
そんなことは始終のやうにあつた。自分でも、そんな場合には、愚かと知りつゝ、少しも負けて居られない性分の宇治ではあつたが、年を取つて勘辨がつくやうになつたのか、宇治は何時でも最後には自分の方から默つてしまつた。そして、これでは到底駄目なものだらうと、彼は腹の中で考へてゐた。不思議なものといはうか、夫婦喧嘩は犬も喰はぬといふ譬のとほりか、そんな狀態のところへ彼女はいつしか妊娠してゐたのであつた。
普通に結婚した、精神の健全な婦人でさへ、姙娠期には、往々いろんな心理的狀態を來して、泣いたり憤つたり、又は夫を打つたりするものださうであるが、平常でさへそんな病的性癖の強いお悦が妊娠後にそれが一層募つて來たのはいふまでもなかつた。宇治が偶々女中に優しい口を利くのさへ、屢々彼女の神經を刺戟した。宇治は遂にお悦に絕望してゐた。
胎兒についても宇治は、これまでの生活の結果から、自分の體內に有りはせぬかと思ふ病毒の遺傳を甚く氣づかふとともに、母親のそんな病的な精神狀態が胎兒に影響することを、より以上に心配してゐるので、世間的に少しも樂天的な期待などを持つことが出來なかつたけれども、今の場合一人子供が生れたからとて、格別生活上に差支へを生ずるとも思はなかつた。
丁度胎兒が九ケ月の時に、あの恐ろしい大地震があつたが、その頃健康の優れてゐた宇治は、東京市の慘狀を一應見に步きたいと思つたけれども、お悦の不安をすこしでも少なからしめたいと思ふのと、自分が慘たらしい燒死體などを見て來た話などをして、それが胎兒に惡い影響を與へたりすることを恐れて、震災後半月ばかりは何處へも出て往かずに、ずつと家に落着いてゐた。
そして、その翌月の十日に生れた子供は、宇治が心配してゐたよりも健全であつた。これまである不安と不足とに驅られてゐたお悦の境地もそれで一段落ついて、確實なものになつた。
宇治は一日の中にもう何度となく赤ン坊の顏を覗いて、早く子守を付けて幼稚園に遣る時の姿などを空想して、それを口に出してゐた。お悦も一と月ばかりするうちに産後の健康も本に復して、それから冬を越して春になるまで約半年ばかりの間は無事と平和との間に過して來た。そして四月五月頃になると、どうした譯か、又彼女の惡い地金が折々出て來た。ひどくなると、宇治が何か一寸した組織的な小言をいつたのに腹を立てて、突如子供をそこに抛り出しておいて、立ち上つて來て、痩せた宇治の身體を、ぐい〳〵胸倉をとつて小突きながら、壁や襖に押詰めて、處嫌はず嚙み付いた。宇治は時によると指の肉の千切れて下るやうな負傷をさへした。彼は、自分でも、どうして自分はから眞劍に腹が立てなくなつたのであらうと、

不具者に思はれるほど、そんな狂暴なる亂行に對しても勘辨づよくなつてゐた。さうかといつて、お悅には、どんなことをせられても甘受するといふやうに、彼女に惚れてもどうしてもゐるのでは決してなかつた。が、唯ひたすら冷靜な思慮から、子供が可愛さゆゑに何も彼も眼を瞑つてゐた。それでも心の中では、こんな事も度々繰返してゐる間に、いつ、どうした機みに子供を蹴殺すか踏み殺すか又は自分の方でも、もつとひどい負傷をするやうな事がありはせぬかと、それを氣づかつた。

お悅は、宇治よりも腕力が強かつた。大抵十度が十度までお悅の方から先に手を出すのであつたが宇治は仕方なく正當防禦のつもりで、後には好い手を思ひ付いた。お悅が狂暴な眼の色をして、いきなり立ち上つて武者振り付いて來る時、彼は自分の方でも負けずに機先を制してお悅の頭髮を摑んだ。そして、自分の腕の痛いほど、それを掌に縮んで、お悅の攻勢を防いだ。彼女は頭髮を摑まれて、益々猛り狂ひながら隙を狙つて宇治の腕を引搔いたり、嚙み付いたりした。そして足を擧げて宇治の腰を蹴つた。腹を蹴られて、もし内臟に負傷でもするやうなことがあつては大變であると思つて、やつぱり後には宇治の方から手を放して逃げ出すのであつたが、どうかして、うまく頭髮を摑まれてそこに横倒しになつて、ハア／＼肩で息をしてゐるお悅に向つて、彼は、涙こそ流さないが、腹の中では男泣きに泣きながら、何時もいふことを言葉に力を入れて繰返していつた

「實になさけない人間だなあ。……お前は一體何で、そんなことをする。どたばた／＼荒れ狂つて。……近處隣りへ、この物音が聞えずにはゐない。お咲さんやお竹などの手前見つともないぢやないか。……私のいつたり、したりすることに何處に不足がある。この罰當りめ！　私はな、そんなことを今更いはなくつても、お前にも分つてゐるだらう。外に出て唯の一度だつて餘計な小遣錢を使ふではないし……私は此のとほりあんまり健康でない上にもう、いゝ加減年を取つてからの子供だ。運よく十年生きても、私が死んだ後で、まだ十歳かそこ／＼で、父親の亡くなつた子供がそこを歩いてゐる姿が今から眼の先きに見えてゐる。……そんな時のことを思ふと、片時も安心してゐられない。どうかして三人の者が無事の日を暮して、私の死んだ後でも、あとの者が二人路頭に迷ふやうなことがないやうにと思つて私が苦心をしてゐることが解らないのか。……私のすることに何處に不足がある。この罰當りめ！」宇治の聲は涙と憤りとに慄へてゐた。彼はさういひつゝ猶も猛獸の傍を離れるやうに急いで飛び退くと、彼女は又むくりと跳ね起きて躍り掛つて來るのであつた。

「お咲さん、子供に負傷をさせぬやうに氣を付けてゐて下さい。負傷をさせぬやうに氣を付けて下さいよ。」宇治は繰返し／＼、子供を抱いて遠く隱れてゐるお咲に聲を掛けながら、座敷中猛獸を遁げて廻つた。

初めてその光景に接したお咲と女中のお竹とは、何うして可いか、唯はら／＼して仲に入つて引留めてゐたが、後には、そんなことが度重なるので、あんまり爭ひが激しくならない限り、遠くから二人の氣勢に氣を付けつゝも餘所眼に見てゐた。

そして幾らか彼女の鎭まつたところで、宇治は、心の中で、今の自分の年になつて、こんな見ともない粗野な騷ぎをしなければならぬのを、つく／″＼情けなく思ひながら、彼女に向つて、

「一體何が不足だ。……罰當り！」と憤りを含んで叱るやうにいつた。

すると、不貞々々とむ／＼り返つてゐたお悅は、

何處までも惡たれるやうに、

「憚りながら、罰は當らないんだから、……まだ罰が當つて病氣になつたことは、唯の一度もないんだから、……手前こそあの態は何だ。頭痛がして嘔吐を吐いたのは誰のお蔭で癒つたと思つてゐるんだ。」

「そんなことを今更云になつても、よく解つてゐる。お前の療治で癒つたことは、承知してゐるよ。」

「そんなら黙れ！」

「そんなら黙れつて。……そんなことは今關係がない。」

宇治はもうそれ以上對手にしなかつたが、それでも黙つて居られず、もし何か組織的な訓誡めいたことを少しくどく續けていふと、お悦は、狂氣のやうに、

「知らん〳〵〳〵〳〵〳〵。」と、自暴になつて、兩手で耳に蓋をしてしまふ。

宇治は、そんな時よく、彼女に向つて、

「お前は芝居でする鬼怒川の累のやうな解らず屋だ。まるで、憑者でもしてゐるやうだ。」と口に出していつたが、腹の中でも全く、これは何か憑いてゐるのではあるまいかと思ふことがあつた。與右衛門が心の中で男涙に、何といつて掻きつ口說きつ道理たいつて聞かせても、それをいふほど[illegible]の扮した累に凄味になつて、女性に固有の[illegible]と偏見と[illegible]の結晶になつていつた。お悦がそんなもののやうに思はれた。

兩性の立場から見た女のことについては、もう何もかも諦めてゐる宇治は、嘗て一度もお悦について[illegible]潔な不足がましいことを口に出していつたことはなかつた。たゞ日常の生活について相當に細かい注意が行屆きさへすれば、それでよいと思つてゐるのであつた。その點については質素なお悦は節儉をすることを知つてゐれば、又汚れた物を何時までも押入れの中に突込んで置くやうなこともなかつたが、彼女は、宇治が、お悦自身でもよくその用向きを知つてゐる外出先きから歸つて來ても、快く、「お歸んなさい。」と言葉を掛けたこともなかつた。何處から歸つて來ても、そつぽうを向いて、知らん顔をしてゐた。實際、外で無駄な金づかひをせぬ宇治は、用向きの分つた外出のほかには、たゞ銀座の方を散歩するとか、牛込あたりの知人を訪問するとか、又は武藏野の田圃を歩いて來るくらゐのものであつた。一體が細かい事にまめな宇治のことであるから、元から、着物の出し入れから、自分の寢床の上げ下ろしから、[illegible]ことまで、みんな彼は自分手でして、お悦や女中に手を[illegible]はすことはなかつた。

宇治が、子供が出來てから、俄に、泥棒を捕へて繩を綯ふ[illegible]に、出來ぬ中から少しづつ何かの形で金を[illegible]からして、そんな用事などで外を歩き廻つて疲れて内に戻つて來たりした時にお悦の、そんな佛頂面を見ると、思はず憮然とするのであつたが、そんな時でも彼自分の方から先きに言葉を掛けた。それでも彼女は返辭をせぬことが多かつた。

宇治は心の中で、いつも〳〵不貞腐れたやうな顔をして、この女は何が一體不足たんだらうと思つた。紙を張つた支那鞄一つの中に貧しい衣類を少しばかり持つてゐるだけで、銘仙の單衣より上等の物を着たこともなかつたのであるが、宇治は自分がそんな物に趣味を持つてゐるところから、高價な結城縮の單衣だの、薩摩上布などを黙つて買つて與へた。

「わたしなんか、そんな物を着ると、勿體なくつて身體が腫れてしまふ。自分で仕立てて着たらいゝでせう。」といつてゐたが、無論彼女は買つてもらつて、決して悪い氣持はしなかつた。

て翌朝六時頃になつて、階下の座敷で、子供が眼を覺まして機嫌好ささうに、「やい〳〵〳〵やい〳〵。」と、いたいけな聲で譯の分らぬことをいつてゐるのを耳にして、樂んで起き上るのであつた。

殊に今日――二十一日――は、一寸した書きさしてゐる物を完結して、なるべく午前中に自分で向うへ屆けてそのついでに新聞に女中入用の廣告を出さうと思つてゐたので、なほ毎時より早くはね起きて階下に下りていつて、母子の寢てゐる蚊帳の裾をはねて、中に入つた。お悦はまだ仰向けに寢ながら、脇の下から體温器を拔きとつて見たゐたが、

「七度八分ある。」と、ひとり語のやうにいつた。子供は傍で這ひながらひとりで遊んでゐた。

宇治はそれを聞くと、怯えたやうに吃驚した聲を出して、

「そら見なさい。だから言はないことぢやない。醫者に見てもらひなさい〳〵と、毎日のやうにいつてゐるのに、醫者に見てもらはないから可けない。……女中は居ないし、私は仕事が忙がしいし、此のうへお前の身體でも惡くなつたら、お前も困るし、子供をどうするのだ。ひどくならない内に醫者に診てもらつて藥を服まないと可けないぢやないか。」

宇治がそれを繰返して少しうるさくいつてゐると、お悦は仰向きになつたまゝ、もう氣に入らぬやうな調子で、

「藥代を惜むぢやないか。」と、たつた一と口にして罵れた。

それを聽くと、さすがの宇治も一時に憤りが頭に上つたやうな氣がして、頭を一つがんと喰はしたいやうな氣が迸るのを漸と耐へながら、性急に言葉をもつらせて、

「なにが、私が藥代を惜むか。……此の間も私が、それは自分も一寸腹工合が惡かつたから、藥をもらひたいと思つたからでもあつたが、それは付けたりで、わざ〳〵村松さんの處へ行つて、午後此方の方へお出でにいつた序に一寸寄つて診て下さいと頼んで置いたのに、それを後でお前が自分で斷つたとかいふぢやないか。……何の據があつて、この私が藥代などを惜むといふ。そんなことをいふお前の根性が卑しい。」宇治はその時朝むくり起きから眞劍になつて腹を立てた。

それは六七日ばかり前のことであつた。宇治は懇意なかゝり付けの村松醫師の處へいつて、六月頃からどうも食慾が進まない、暑中負けのしてゐるらしいお悦のことが氣に懸つて、無理にそのまゝにしておくと、今に、ぐん〳〵發育盛りの乳兒に惡い影響があるのを氣づかつたので、序に診察してくれるやうに頼んで、今日晩方までに往つて上げますといふ返事を聞いて歸つて來た。そして、晩方になつても村松醫師が來てくれないので、村松さんにも困るなあ、たらしかたなくつて。」と、二度も三度もお悦の前で零してゐた。たうとうその晩村松醫師は來なかつた。そして翌日になつても、そんなことは決して忘れたり、おろそかにせぬ宇治は、尚ほ村松醫師を零してゐた。すると、その時になつてお悦は、はじめて實を明かした。

「昨日神木の酒屋が來た時に、私の方は別に來て頂かなくつても、大したことはないのですから、わざ〳〵おいでをねがはなくても、ようございますと、さういつてくれといつて、此方から斷つた。だから來ないんだ。」

「何だ、人が折角いつて賴んだのを斷つたりして。」

そんなことがあつた。宇治は今又そのことを繰返していつた。

「自分が勝手に醫者を斷つておいて、この私が藥代を惜むとは、何を以つて、そんなことを

いふか。」
　宇治はもう、お悦の三十七度八分の熱よりも、むしろさういふ惡たれた、厭ふべき性情について、心から慨歎するやうな聲を、朝の蚊帳の中で發した。
　するとお悦は何處までも逆に、道理を宇治に託けて自分の非を飾らうとするやうにいつた。
「先月、村松さんの藥代が五圓八十錢あつたといつて、何度も繰返していつたぢやないか。」
　宇治はそれを聽いて、益々心外に思つて憤つた。
「何度も繰返してと、仰山なことをいふな。それはお前が、何時でも、村松さんから貰つて來た藥を、散藥でも水藥でも半分くらゐ服んで、あとを殘してゐるから、折角高價なものを、勿體ないから、さういふのぢやないか。自分の落度を棚に上げて、何も彼も、此の私のせゐのやうにいふ。何といふお前は不心得な女だらう。呆れ返つて物がいへない。」
　尤も、はつきり覺えてないが、此の二三ヶ月前から村松醫師の處では藥價を二三割方引上げたやうである。宇治が時々腹工合が惡いといつて二日分か四日分くらゐ貰ふ藥代も、先の時分に比べて、こんなに金嵩になつてゐるかと思ふやうなことが一寸々々あつた。そこへ持つて來て、七月の末に村松から掛取りに來た時の書付には、お悦の服んだ分が五圓七八十錢になつてゐた。宇治はお悦がその書付を、自分の傍に持つて來て見せた時、
「五圓八十錢。今月はこんなに服んだのか。隨分高いねえ。藥代も馬鹿にならぬ。」といつた。
　するとお悦は、
「えゝですよ。それは私の小遣から出して置くから。此の間貰つたのが丁度そのくらゐある。」
「なに、藥代は私の方で出すさ。」
「えゝんですよ。それは私が自分で出す。」彼女はもうすねるやうにいつた。
「さうか、そんなら、今とにかくさうして置け。又後で私の方から戻せば同じことだ。」宇治はその時丁度晝飯を食べてゐた。
　お悦はそれで、自分の財布からその五圓八十錢の分を取り出して拂つたやうであつた。一體他の商賣や何かとちがつて、主人の職業に女の手を少しも煩はすことのない宇治の[illegible]、は、お悦が自分の働きによつて入る金にはなかつた。彼女は本來、その免許狀も持つてゐるマッサージの技術は確かに上手であつた。宇治の四五年續いて惱まされた痼疾もその爲に癒つたことは事實であつた。彼女は獨立してその職業で自活する筈であつたのが、つひに宇治の痼疾を癒したやうなところから、初は同棲するに至つたのであつた。宇治の身體には、今、帝國大學の病院で眞鍋博士の物理治療科で用ゐてゐる按摩を絶えずやつてゐなければ、十分に健康か保てなかつた。それで宇治は屢々お悦に向つて、
「私の身體には、どうも、これを始終やつてゐなければいけない。私の經濟では女中を二人雇ふのは、精一杯のところだ。子供が可愛いから、それも厭ひはせぬが、尚ほ此の上に毎日一圓の料金を拂つて、按摩をすると、女中二人の費用と一緒にして一ヶ月に百圓に掛る。女中が一人ならば他から按摩を呼ぶが大抵二人居るのだから、お前が毎日やつてくれれば、小遣のつもりで五十錢でも七十錢でも出すよ。」と笑つていつてゐた。
　するとお悦は、
「七十錢でなくつとも、五十錢にまけて置く。」

といつて、自分の氣に向いた時には宇治を揉んでやつたが、それが三日と續くことはなかつた。そして、

「誰だつて、揉まなくつても小遣くらゐは呉れる。」と、我儘をいふのが常であつた。

「そんなことをいふのは可くない。私の身體が少しでも達者でゐて、出來るだけ今の内に勉强して置かぬと、子供が後で困る時が來るのは眼に見えてゐる。金に不自由のない者でも親に早く別れるのは不幸である。况して私などは、今のまゝで死んだら、どうする。」宇治のいふことは毎時そこに落ちてゆくのであつた。

「可くなくつても構はない。もう散々揉んでやつたぢやないか。揉んでやつたから、こんなことになつたのぢやないか。」

「こんなことになつたとは、何がだ？」

「自分で考へてみたら分る。」

お悦は自分が、宇治の女房を無くしたのが、そもそもの原因で、宇治と一緒になつたり、子供が生れたりしたのを後悔してゐるやうな口裏を、何かにつけ零すのが常であつた。宇治は、そんな阿呆なことに對手になつてゐられないと思つて、口を緘むのであつた。

お悦が今、自分の小遣から出して置くといつたのは、その按摩をして宇治から貰つた錢であつた。お悦は、それを、

「もらふんぢやない。取るんだ。」と、何につけても物に角を立てていつた。

宇治は半分戯談のやうにそんな說明を立てて、お悦に小遣を渡してゐたが、夏以來彼女がずつと衰弱してゐるので、そんな錢も溜らなかつた。しかし、宇治は、特別お悦に、區別を付けて小遣錢を渡す必要を覺えなかつた。名目の立つた少し金目の出費は無論宇治の方から出すのであつた。お盆過ぎに、その薩摩上布を、お悦の思ひがけもなく宇治の買つて來た時にも、彼は自分の方が樂しさうに、

「お前に今日、大變な物を奮發して買つて來たよ。」といひ／＼、紙包みを解いて、

「どうだ、此の縞柄は好いだらう。私は金が少ないから負惜みでいふのぢやないが、自分でも絹よりも綿麻の方が好きなんだ。どうだ、これは意氣でゐて、それで素樸な柄だから、お前なんかにも惡くない。……高い金目の物は、かうして私が買ふから、あとの細々した物は、お前が働いて買ふさ。」

お悦はそれに背いてゐたが、たゞその時きりで、後は我儘をいつて、決して從順に宇治の療治をしようとはしなかつた。

それで宇治がさういふと、お悦は飽くまでも負けて居らず、

「あの時の藥代だつて、私が小遣錢を出して拂つたんだ。僭越な事をいつて貰はない。」

宇治はそれを聽いて、つくづくと、もう、斯麼こんな女には何といつて聽かせても駄目だと思つたがやつぱり默つて居られず、

「お前の小遣だの、自分の小遣だのといつて、私の家には、そんな區別はないつもりである。一體私の家では——私の郷里の家でもさうであるが、一家の中にそんな區別のある内證金を女が、ちやら／＼財布の中でいはしたりしてゐるのが、私の死んだ父親からしてさうであつたが、今の兄もそれが大嫌ひだ。私もさう信じてゐる。

又、あの時の藥代云々といつたし、此の間から二三度繰返していつたのは、何もさう金を惜むのぢやない、そんな高い藥をお前が［illegible］で飲まないから、それでさうだつたのではないか。いつだつて半分以上飲み殘して、藥箪笥の上に載せたまゝになつてゐるぢやないか。これほどに誠意を籠めてゐる私の言葉をお前は

一體何を聽いてゐる？―
宇治は暗の中で泣き出したくなつてゐた。對手が、そんな卑しいことを言ひ出せば、自分の方でも、やつぱり、そんなことを口に出さなければならぬので辛かつた。するとお悦は、
「何と思つて聽いてもゐない。うるさい！」といつて、仰向きになつてゐた身體を、くるりと寢返りをして向うにむいて、亂れた頭髮を敷蒲團に押付けてしまつた。
暫くそこにひとりで遊んでゐた子供は又泣き出した。宇治はたゞ啞然として、寝穢なく、伏つてゐるお悦の不貞腐れた樣子に凝乎と見入つてゐた。近頃は、夜中に眼を覺ます子供の爲に起されることが度々あるので、殊にさうであつたが、彼女は、子供のない時からも、朝寢で、宇治より遲く起きることも、めづらしくなかつた。やゝあつて宇治は、心の中にひどく思ひ決するところあつて、蚊帳の裾を跳ねて外に出た。そして自分で井水を汲んで急いで顏だけ洗つて、そゝくさと家を出ていつた。
彼はそれから中野の町まで往つてお悦の父親にあててスグキテモラヒタイといふ意味の電報を打つた。……もう、それまでにも、假令代りがなくつてもどうしても女中を返さねばならなくなつた時、先にも暫く來てゐたことのあるお悦の末の妹を手傳ひに貸してほしいと、彼女から度々いつて遣つたのであつたが、それは何故か貸して寄越さなかつた。毎時借りつ放しで返したこともないのだが、まさかそんなことくらゐで貸して寄越さぬのでもあるまいと、宇治はいろ／＼に氣を廻して考へてみた。確かな留守居も見付からなかつたので、家中で何處かへ暫く避暑にゆきたいと思ふ計畫は成立たなかつたが、
「小さい子供など連れて餘處へ行くより自家にかうしてゐる方が、どんなに氣樂だか知れない。」と、お悦がいふので、
「ぢや、私一人で何處かへ十日ばかり往つて來よう。」
宇治はさういつて、お悦に、彼女がいつかも云つてゐた、何處か旅行でもして宇治が不在になる時には彼女の父親が遊びかた／＼來て居てやるといつてゐたといふ話を思ひ起して、お悦にそんなことを書いて出さしたが、一向むかうからは返事もなかつた。それにお悦が夏中どうも健康が優れないので、宇治自身からも一度遊びかた／＼ぜひ來てくれるやうに再三手紙を遣つたのであつたが、妹も今のところ、何か皮膚病を患つてゐて外に出されないし、父親も多忙で往けないといふ、お悦の母親からの手紙であつた。お悦の母親は假名ばかりの文字ではあるが筆蹟など誰よりも巧みであつた。
宇治はお悦が、そんな譯でとかく從順でなかつたり、眞面目に藥を服まなかつたりするのに毎度手古摺るたびに、中つ腹になつて、
「私はもと他人だからいゝやうなものの、お前はさうぢやない。娘が手不足であつたり身體が惡くつて困つてゐるんだから、誰か一度、あれほど度々手紙を遣つて頼むのだから來てくれればよささうなものだ。私は、自分の方で出來るだけのことをしてゐるつもりだ。」彼のさういふ腹には、親元にゐるお悦の子供に對する仕打ちからいつても決して不足のある筈はないと思つてゐるのであつた。
そして宇治は、電報を打つて戻つて來る途すがらも、先刻からの不愉快な憤怒の餘熱がまだ消えず、生れてやうやく十ケ月、母親の乳よりほかの物をまだ少しもやつたことのない子供を母親の手から離すことの可哀さから、出來るだけ耐忍して來てゐるのであるが、とても手の付けやうのないお悦の悍執にすつかり愛想が盡きてしまつたので、父親が出京するのを待つ

て、これまで嘗て口に出さなかつた彼女の平素の我儘、悍執、狂暴を有體に話して十分に父親から訓誡を加へてもらふつもりであつた。お悦は平素の口吻からも母親はそれほどでなかつたが、父親には感服してゐるらしかつた。父親は郷里のその村でもなかく物の事理の解つた人間で、常に人に依賴されて口を利いてゐるといふことも宇治はお悦から度々聞かされてゐた。もう六十を二つ三つ出た、でつぷり肥滿した人物で、不斷は優しい眼許に始終笑みを湛へてゐた。

宇治はそれで、これまでもお悦の悍執を持て剩すたびに毎時心で呆れながら考へたお悦の親達は自分の娘のこんな惡い性癖を知つてゐないのであらうかと。尤も宇治に對しては常にそんな狂暴でゐて、その癖ひどく小心で含羞性の彼女に、他人の前では、便所の掃除屋にまでも馬鹿丁寧な口を利くのであつた。たゞ一とほりにお悦を知つてゐる者は、彼女にそんな病的な性癖があることを知らなかつた。宇治も、これが人から強ひられたといふのでもなく、相當思慮分別の熟してゐる彼の自由意思でしたことであるから、何とかしてその性癖を直すより他に仕方がなかつた。そして毎時お悦の悍執と狂暴とが募つて持て剩すたびに宇治は、子供を脅かすやうに、

「國から祖父さんに來てもらつて、すつかり話してしまふ。お前の祖父さんは、もつと物がよく解つてゐる筈だ。……——手紙でこの事を書いてやる。」といつてゐた。宇治は單に脅かすばかりでなく、實際腹からさう思つたことも度々であつたが、遂に委しいことは一度も書かなかつた。それでも彼女は、そんなことを父親に話されるのを憚つた。そして、

「何も、こんな下らないことを祖父に話す必要はない。二人のことは二人で話が出來る。」といふのであつたが、宇治は、つくゞ持て剩すたびに眞面目に考へてゐた。

宇治は中野の町の郵便局からの歸途、ひどく興奮した、悲しいとも寂しいとも分らないやうな氣持で、自分はやつぱり長い間通して來たやうに一人で居る方が好かつたのだといふやうなことをも考へながら、パンとバタとを買つて戻つて來た。そして臺所で瓦斯の火でパンを燒いて、好きな番茶を煮じてそれでパンを食べて、奥の蚊帳の中の子供のことは氣にかゝりながら、どんなことがあつても母親の本能として、子供には非道いことはせぬといふ安心があるので、そのまゝ二階に上がつて、今日どうしても午までには淸書して持つて行かうと思つてゐた原稿を急いで書き續けた。そして、自分は何處までも此の仕事を大事にしてさへ居ればよいのだと思つて、不愉快な侘しさを強ひて朗かな心持にして忘れようとしてゐた。一寸した物であつたが、筆はどんく進んで、思つたよりも早く濟んでしまひ、それがすむと、折柄雨天であつたので、宇治は寢衣のまゝの着衣の上へ洋服のうへに被るレーンコートを引掛けて、足駄穿きで停車場へ急いだ。そして丸の内に行つて新聞社へ原稿を屆け、用を達すと又すぐ引返して省電で歸つて來た。その內空も晴れて來た。歸つて臺所の方で泥の着いた足を洗はうとして、そつちへ廻ると、流し元に二十一二の若い女が居て洗ひ物をしてゐた。おゝ、もう派出婦會から代りの女が來たのだなと思つて、ほつとした。そして足を洗つて玄關の方に來ると、門の內に植木屋が來ていつぞや賴んで置いた西日よけの篠竹を持つて來て植ゑてゐた。あゝ、植木屋も來てくれたなと、それにも滿足を感じて、木戸からずつと縁側の方の庭に廻ると、植木屋は、それから賴んでおいた芙蓉を丁度いゝ位置の處に植ゑて土をかけてゐた。

お悦は、朝の蚊帳の中の、寝穢ない不貞た様子は、けろりと忘れたやうな顔をして、子供を縁側で遊ばしながら懇意な植木屋と話してゐる處であつた。宇治は好い機嫌の顔をして、

「どうもご苦勞でした。」と、植木屋に言葉をかけた。それからお悦の方を向いて、

「代りが早速來てくれたな。」といつた。

お悦は機嫌が直つて、

「えゝ、今度のは、なか／＼働けさうです。村松さんの處に五十日も居たんですつて。」

「あゝ、さうか。村松さんにそんなに長く居つたのなら、性も知れてゐる。」

宇治もお悦も、何だか好ささうな派出婦が來てくれたのを、口に出し合つて悦んでゐた。

「まあ、二三日爲ることをよく見て、安心出來るやうだつたら、私も暫く何處かへいつて、も少し仕事を急がなければならぬ。」宇治は、いつてゐた。八月の一日限りにある會社へ少許の繪を纏めて挿込まなければならぬのが、延期してもらつてゐて、どうしても月一杯には遲くも揃はなければならなかつた。

「今度のは好ささうですから、私は大丈夫です。留守になつたら誰も來るものがないから……」

植木屋は芙蓉を植ゑてしまつて、筒一つ二つ芭蕉などの位置を植ゑ替へたりして、綺麗に土をならし、ついでに庭から勇みを抜き取つて、そこらの植木の枯枝を拂つたりしてくれた。

「やあ、どうも御苦勞さま。お蔭で綺麗になりました。」宇治はさも氣持が、さつぱりしたやうにいつた。

「まあ、休んで下さい。」

植木屋は、近いところの柏木の可なりの大地主であつた。

お悦は、女中に氷を取つて來させて、シトロンを注いで植木屋に進めたりした。

お悦が、はじめ、宇治が自分で、折角わざわざ頼んで來た醫者を斷つてやつたりしたのも、一つは彼女自分だけの腹の中では、ひよつとしたら、又もしか妊娠でもしてゐるのではないかといふ輕い疑念も抱いてゐるからであつた。あまりに無智な剛情を張つたのが因で、めづらしくない言ひ合ひを宇治とした時、お悦は毎時の口癖を又はじめた。

「そんなに氣に入らなければさつ／＼と出せ。」

「何も、そんなことをいはないぢやないか。……そんな下等な口を利くのが氣に入らないのだ。」

「いくら云つたつて、これで今まで通つて來たんだから直らない。」泣くやうに怒鳴つた。

「直さうと思はないから直らないんだ。」

「直さない。……こんな處に居ないから直さなくつてもいゝんだ。」

「あゝ。ぢや、お前の好きなやうに出ていつてもらはう。出ていつてくれ。」

宇治は幾度となく、そんな決心を腹の中でしたが、乳兒のことを思ふと、毎時鐵のやうな強い決意が、すぐに錫を熔かしたやうに弱く鈍るのであつた。が、一度そんなことのいひ爭ひをしたあとで、宇治は滅多にない、ひどく決心した顏をしたまゝ、棄てぜりふを殘して、悠々と二階の書齋に上がつてしまつた。あとで、お悦は――その時も丁度、女中も派出婦も來てゐない時であつたが――子供を背中に結付けたまゝ、階下の座敷に泣伏さつて、近所にも響く聲を揚げておい／＼泣いてゐた。宇治は、古人の云つた婦女と小人は養ひ難しといふ金言を今更のやうに思ひ起してみたりしたが、もう同情も可憐も打消されてしまつてゐるので、[illegible]りて[illegible]りをふる氣になつて、そんな愚かしいことに大切な頭腦を疲らせまいと努めた。

そして又少時して宇治が階下におりてゆくと、彼女は、今までの泣き顔を、きつとした表情に更めて身體の異狀について實を明かした。

「これさへどうかしてもらへば、わたし此處に居ないんです。……その方がお互に好いんです。」といつた。

宇治は、初めてそんなことを聽かされて變な氣持がした。そして頻りに小頭を傾けながら、

「さうかなあ！」と二度も三度も繰返していつてゐたが、それがもし、その通りであつたとしても、お悦自からの、常に心の落着かないやうな病的の性癖さへ何事もなくなれば、兄弟友達が、あとも一人くらゐ有るのは、たとひ定命であつてさへも結局早く父親に死別れねばならぬ運命の下に生れて來た子供の爲には寧ろ悦ぶべきことと思つた。

「そんならそれで、早くその事をいはなければ可けないぢやないか。……たゞ、これが、もう一年後だと申分ないんだがなあ。」

「こいつが、こんなに手數がかゝる上に、又そんなことにでもなつたら、とても身體が續かない。……これが可哀さうだ。」といつて、お悦は背からおろした子供を抱きとつて、大きな乳房をあてがつた。

「なんにしても、そんなら直ぐ村松さんに診てもらひなさい。今日でも明日でも急に。」宇治は急がした。

その翌日又宇治が散步の足で頼みにいつて、村松醫師は一度往診のついでに立ち寄つてくれたのであつたが、もつと十分に診なければ何ともいへぬから、一度自宅へ來て委しく診察するやうにいつて歸つた。しかし、お悦は又そのまゝに二三日往かずに居つた。

宇治は、昨夜まで、一寸仕事に何切りがついたのと、今度雇入れた婦人がどうやら安心の出來さうなのとで、いくらか氣持も輕くなつたやうで、これならば、來月の物の執筆かたがた月末まで五六日何處かの涼しい溫泉場へでも行つて來ても差支へないと思つてゐた。そしてさうするには、その前に、もう疾うから話を仕掛けてゐる借地のことを決定して置きたいと思つて、省線に沿うた二つ三つ先の停車場附近まで散步に出ていつた。そして、又盛返して來た九十度の秋暑を汗だくになつて田圃や林の中を步き廻つて戻つた。

お悦は彼の留守の間に、昨日來た女中に子供を預けておいて急いで村松醫師まで行つたといつて、新しい顏に馴染まぬ子供が、蟲の起るほど泣いて持て剩してゐたのを隣家の細君が抱いて賺してくれながら、横町の辻口まで、誰かの歸つて來るのを待つてゐた。

「これは〳〵どうも難有うございました。どうも濟みませんでした。をばちやまに抱つこして頂いて、よかつたなあ。」といつて、宇治が子供を受取つてゐるところへお悦も丁度戻つて來た。

診察の結果は、それが事實であつた。

その晩お悦は又宇治と、つまらぬことからいひ爭ひをはじめた。役に立ちさうな好い派出婦が來てくれて、晝間お悦が村松醫師から聞いて來たところによるも、よく働く確かな者であることが分つたので彼女はそんなことにも一寸安心し調子に乘つたやうになつて、今までの女中や派出婦のどれも〳〵揃つて可けなかつたことを又お浚へして口惜しさうに饒舌つてゐた。腹が立つて〳〵堪らないといふやうに夢中になつて興奮してゐるその聲がだん〳〵高くなつていつたところから、彼女が自分で持て剩しながら、やつとの思ひで折角ぐつすり睡つた子供が又その爲に眼を覺ましてしまつた。宇治も、お悦の、そのあまりに愚かな粗野が堪らなくなつ

て、彼も亦聲を高くしてお悦をたしなめた。すると彼女は、「あ、喧しい。さつ〳〵と二階に上がつていつて寝ろ。」と宇治に向つて又喰つてかゝつた。

「それには一體何といふ言葉だ。……何も今まで居つた女中のあらを此處でお浚へする必要はない。そんなことはいはなくつたつて分り過ぎてゐるぢやないか。用のあることで大きな聲を出さなければならぬことがあるのなら仕方もないが、そんな無用なことに大きな聲を出して、折角寝付いた子供を起すといふのはお前の愚かといふものだ。……お前のやうな下等の人間が居つては女中も居つてはくれない。」宇治は、暑苦しい晩とてまだ開放した縁側に立つて怒鳴りながら、不快に滿たて、どん〳〵二階の自分の室に上がつてしまつた。その後でお悦は一晩中氣分を惡くして寝てゐた。そして、又夜中に起上がつて泣きながら郷里にあてて、長い手紙を書いたりした。それを夜の明けるのを待つて自分で郵便を出しに行つた。

翌日になつて、一昨日來たばかりの派出婦は、朝からひどく齒が痛むといつて優れぬ顔をしてゐたが、お悦は近い處の歯醫者を教へて行つて來させた。女中は間もなく歸つて來て前より一層疼み出したといつて、暫く女中部屋に横になつてゐたが、

「まことに濟みませんが、今日一日だけお暇をいたゞいて宿へ歸らしてもらひます。そして休んでみて明日になつても、まだ可けないやうでしたら早速他の人に代つて來てもらひます。」といふ。

宇治もお悦も、今度こそ折角好ささうな女が來てくれたと思つて喜んでゐたところなので、ひどく落膽しながら、同じやうに、

「今日一日くらゐ何もせずと、家で休んでゐてもいゝから、ぜひ居つておくれ、ちつとも遠慮は入らぬから。」と言葉を盡して留めたが、女中はそれでも、高い給料を戴いた上に一日休ましていたゞいては申譯がないといつて、風呂敷包みを始末して歸つていつた。

宇治もお悦も等しく失望の眼で、女の歸つてゆくのを見てゐたが、昨夜からの不快な氣持が惡い宿醉の如く二人とも殘つてゐるので、彼等はお互に口も利かうとしなかつた。そして又しても年中惱まされてゐる手不足の不安が暗く押被さるやうに彼等を襲うた。宇治は又默つたまま二階に引揚げた。

と、それからものゝ三四時間も經たない、午過ぎになつて、又三十近い他の女が派出婦會から上りましたといつてやつて來た。まあ上がれといつて、上には通したが、そんな者には馬鹿丁寧な口を利くお悦もさすがに暫時は向うから何か話し掛けても返事もせず不機嫌な顔をしたまゝ默り込んでゐた。お悦も宇治も、なるべく今朝行つた女が戻つてくれればよいがと心待ちにしてゐたのが、又もや見も知らぬ者が來たので、自分の家が餘處の家か何ぞのやうに落着かぬ散らけた氣持にならされた。

でも、それから少時して働かしてみると、爲ることは思つたより丁寧であつた。

二三日して宇治は、今度の雇女はどうやら、自分が不在にしても安心出來さうなので、こゝ五六日の間を急ぐ執筆をする爲にいよ〳〵何處かの温泉場へでもいつて仕事をしようと思つてお悦にそのことをいふと、彼女は、

「もう四五日のことだから待つて下さい。この間親父に――彼女は父親を呼ぶに父ともお父さんともいはなかつた。――手紙を遣つてある

んですから、何處へも行かないで親父が來るのを待つて、わたしの事の話を、さつぱり付けて、行くなら、どこへでもいつて下さい。」と、眞顏になつていつた。

つまり暇を取るんだから、その結末を付けてくれといふのであるが、そんなことは、宇治が何か一寸した小言をでもいふと、必ず二の句に彼女の口から出ることであつたから、宇治もめづらしくないことと思つてゐるのであつたが、しかし、そんなことを、何かといふと、すぐに輕々しく口に出すやうなことでは、どんな小さい家庭であつても、此の先到底和樂な一家を續けることは不可能であると思つて、宇治も近頃は、心の中だけで少し眞劍になつて考へてゐた。

するとその晩か翌日お悅の父親から宇治にあてた手紙が來た。それは二三日前宇治からの電報を受取つた後で書いたものであつたが、どうあつても多忙で今のところは出京出來ぬといふのであつたが、そして、その手紙のをはりに、自分の方の孫が此の間百ケ日を濟ましたから、そのことをお悅に傳へてくれと特に書いてあつた。その孫といふのは家をやつてゐる、父親の次男の長男であつた。宇治はそれを見て、何といふことなしに、その子供の誕生の祝ひ物を催促せられたやうな氣がした。かう思つたのは何か祝ひのしるしをしなければならぬと心に掛けながらも、連日の炎暑とお悅の夏病みやら、宇治自身の多忙やらで、ついそのまゝにしてゐるので、その爲に宇治の方で多少邪推したのであつたかも知れぬが、宇治自身としては、何時となくほのかに洩れ聞いてゐる、お悅の次弟に當るその次男が、お悅が先に產んだ女の子を、その弟に世話を掛けながら、勝手に宇治と同棲したり、又、子供を產んだ結果、籍まで移して宇治の處に嫁入りしたりしたことについてはひどく惡感を抱いてゐて、その爲に父親や、妹などが東京に來て偶に宇治の處に客になつたりすることを常に嫌つてゐるといふことを知つてゐるので、子供の厄介を掛けてゐるお悅の立場としても兎も角も、宇治はそんな話を耳にする度に、格別それくらゐのことを氣にも留めなかつたが、しかし、常にそんなことを考へてゐるといふお悅の次弟に對しては少しの好意も持つことが出來なかつた。お悅との同棲が世間普通の婚姻に成つたものでなかつたので、勿論宇治は、お悅の實家も知らなかつたし、東京に定住してゐる彼女の弟妹の他はその次弟などにも會つたことはなかつた。それで、何となく祝ひ物の催促でもしたらしいその文面を見ては、輕い不快を感じたのであつたが、高が縮緬の半反や一反やそこら何でもない宇治は、そのうち序の時で可いと思つてゐた。

その手紙の樣子では、父親に、お悅は又自分で、どんなことをいつてやつたか知らないが、彼女のいふやうに急に出京するらしくも思はれなかつたのと、いつも彼女が口癖のやうに、明日にもすぐ此の家を出て行くといふやうな眞劍したことをいつてゐても、いよ／＼實際となると、そんなことは容易に斷行せらるべきものでもなく、宇治は固より、何より第一に子供の爲にそんな輕擧に出でることを甚だ好まなかつたので、そんな無益な言ひ爭ひに、さうなくてさへ暑苦しいこの頃の日を續けてゐるのが、ほとほと馬鹿らしくなつたので、どうあつても此の五六日の中に是非片付けてしまはなければならぬ執筆の仕事を携へて伊香保の溫泉に往くことにした。晦日のことなども滯りなく、お悅にいひ殘して、彼女は宇治の小道具を入れる手鞄の始末をしたりして、彼は二十九日の朝立つて行つた。

伊香保は宇治の想像してゐたとほり、夏中雜沓してゐた避暑客が丁度月末になつて、殆ど

全部引揚げて去つた後で極めて閑靜であつた。
彼は、好い時に來たと思つて夏中つゞけて氣忙しなかつた體が、はじめて、やつとのんびりとした氣持になつた。さう思つて安心すると、何だか長い間の疲れが一時に發したやうで、却つて妙に神經衰弱に罹つたやうな氣持さへするのであつたが、出來るだけ心を焦らぬやうに四五日の間は、つとめてたゞ湯と散歩とに消してゐた。

それでも空氣が清澄なるにつけ、山々の眺めが美しいにつけ、溫泉の香が懷かしいにつけ、宇治は毎日まだ秋暑の凌ぎ難さを思うて、お悅と子供との無事を心に祈りながら一日に一度は必ず繪葉書か手紙を出してゐた。お悅からは來た晩すぐ宿をしらしてやつてから三日めに、簡單な用事の手紙が來たきりであつた。

そして五日めの午前、宇治はいつものとほり涼しい木蔭の道を散歩して歸つて來て、一浴して汗を流し、座敷に戻つて休息してゐるところへ女中が電報を持つて來た。何處からか、書物の催促であらうと何の氣もなく受取つてみると、表には發信人のしるしもなく、封を切つて讀むと、

オクビヤウキオカヘリタノム

とある。宇治は初め一寸判じかねたが、たつた一人の兄が長く東京に年期を勤めてゐて、つい半月ばかり前にその兄が死んだといつて、ひどく憂ひに沈んでゐた係りの女中が傍でその文句を見て、

「奧樣が御病氣でいらつしやるんでせう。」といつたので、はじめてそれと分つた。さう分ると宇治は、つんと胸を一つ突かれたやうな氣持がした。電文で想像すると、留守を賴む女中が打つて寄越したものらしい。

それから俄に支度を調へて歸途に就いたが、宇治は電車の中や汽車の中で、病氣はどの程度の病氣であらうかと想像してみたが、自分の慾目かそんなに重態のやうには思はれなかつた。それでも歸つて見なければ安心出來ず、心の急ぐほど汽車が遲いやうに思はれ、まだ東京までは二時間もある内に日は遠くの秩父連山の彼方に沈んで窓外の野は暗黑に包まれてしまつた。

そして上野驛からすぐ自動車に乘つて、東京西郊の自宅まで急がしたが、だん／＼道が近くなるほど頻りに氣が焦つて來た。門の外で自動車から飛び下りて、入口を入ると、そこへ立ち現れたのは、お悅の直ぐの弟の慶吉であつた。宇治は玄關に突立ちながら、靴をも脫かず、

「おツ！　あんた何時來た？」

「う、私は今日少し先きに來たばかりです。」

「病氣を知つて？」

「いえ、たゞ何といふことなく、ふらりと來たのです。」

「さうか。それでも、それは丁度好かつた。……

そして病氣はどんな工合かね？」

「何にも分りません。夢中です。」

宇治は庭に突立つたまゝ吃驚してしまつた。そして開いた口を閉ぢる力も拔けたやうに、

「何にも分らない、夢中だ。そんなに惡いのか、そりや大變だ。一體どうしたといふんだ。」

宇治はぶる／＼慄へるやうになる指先に力を入れて急いで靴を脫ぎ棄てて上がつて來た。奧の蚊帳の中ではお悅がまるで狐の憑いたやうな眼を据ゑて又しても起き上らうとするのを弟の慶吉が一生懸命になつて鎭めながら抱いて寢かさうとしてゐるが、すぐ又狂人のやうな表情をして跳ね起きようとする。

宇治は洋服も脫がずに蚊帳の外に突立つたまま、そこに子供を抱いて居る女中を顧みて、

一醫者はどうした。村松さんは何んといふんだ？」と早口に訊ねた。

宇治の立つ四五日前に雇つたその女中は、主人の不在中に突發した急變に、もうおど／＼して、聲を亂しながら發病前後の經過を語つた。

宇治が立つていつて三日めかの三十一日の朝であつたか、お悦は今朝は少し頭が重くつて熱もあるやうだからとて、女中をかゝり付けの村松醫師まで迎へに遣つた。醫師は早速來診してくれたが、心配するほどのことでもないといつて、後から藥を取りに來るやうにいひ殘して歸つた。そして月末の諸拂ひもお悦が寢床にゐて女中に渡して支拂ひをさせた。その翌日の九月一日になつても大した變化もなかつたが、村松醫師は來診してくれた。二日もそのとほりであつた。が、症狀は輕快にはならなかつた。主人から、伊香保にいつてからも繪葉書を寄越してくれ／＼も留守のことを賴まれてゐる女中は氣になるので、村松醫師を玄關まで送つて出ながら、

「旦那さまへお知らせいたしませうか、どんなものでございませう。」と、いつて訊くと、村松醫師は事もなげに笑ひながら、

「いや、そんな御心配はありませんよ。」といつて、歸つていつた。

女中はもうそれまでにも、度々お悦に向つても、

「奥さま、旦那樣にお知らせ申しませうか。」と、相談するやうに勸めてみたのであつたが、平素から自分の健康を信じてゐるのと、宇治が急ぐ仕事をする爲に折角靜養かた／＼行つてゐるところを驚かすのは入らぬことと思つたらしく、

「なに、いつてやらなくつてもいゝんです、わたしは達者な身體なんですから、この頭痛のするのさへとれれば、何でもないんです、と仰有いましたもんですから、早くお知らせもいたしませんでした。」といつて、女中は幾度も詫びた。

するとその翌曉の三時頃になつて、子供のひどく泣く聲に、次の室に寢てゐたお芳といふその女中は眼を覺まして起きて八疊の蚊帳の中を覗いてみると、子供は蒲團の上に抛り出されたまゝ火の付いたやうに泣き入つてゐるにもかゝはらず、奥さんは傍で知らん顏をして寢床の上に半分起きてゐるので、

「お孃さん、どうなさいました。……奥さま、御氣分はいかゞでございます。」と聲を掛けて蚊帳の中に入つたが、奥さんは默つて、眼をきよときよとさせながら、返事もしない。嬢ちやんは割れるやうに泣くばかりである。すると、奥さんは、變な眼付でお芳の方を見て、

「あんた今日國へ歸るんですか。」と、とつてもつかぬことを云つて訊いた。お芳は、その眼許といひ、先刻からの樣子が少し變なので、夜明の肌寒にやゝ悚然と感じながら、

「いゝえ、奥さま、わたしは國へなど歸りません。」と答へると、

「さうですか。でも、あなた今日國へ歸るといつた。」と今度は正面の方を向いて、ひとり語のやうにいつた。

お芳は、これは、いよ／＼大分逆つてゐる、朝になつたら早速旦那樣に電報を打たうと思ひながら、

「さあ、お孃ちやん、わたしが少し負ぶしませう。」と、いつて、背を向けて抱上げようとすると、奥さんは、

「さうですか、どうも濟みません。」といひながら、自分で子供を抱き取つてお芳の背に載せ、結く紐まで掛けてくれた。そして、少しも早く夜の明け放れるのを待つて、此の間旦那が立つて行つた翌日、ほかから又一人來た若い女中にいひつけて、それに電報を打たしに行かしたの

であつた。
「旦那様のお留守を預かつて置きながら、もつと早くお知らせすればよろしかつたのに、そんな譯で遅れて本當に申譯がございません。」
といつて、彼女は又わびた。
宇治はまだそこに坐りもせず、突立つたまゝでそれを聽いてゐたが、
「なに、……あゝ、さうか〳〵。よし〳〵。」といつて頭は宛然電の如くばち〳〵八方に亂れて飛ぶかのやうに、お芳の抱いてゐる子供の方に悲しい慈愛の眼を留めて、
「おゝ、坊主。……それから子供はどうした。乳は？」
と訊くと、母親がそんな工合であるので、一昨日から牛乳にしてみたが、初めの日にやつと一合飲んだきり、昨日もそのくらゐであつたが、今日はその牛乳もどうしても飲まないので重湯に變へてみたがそれも飲まない。
「今日は朝から何にもお上りしませんのです。」
お芳は心配さうにいふ。
「あゝ、さうか。そいつは可けない。子供が干乾しになつてしまふ。……ぢやもう一度新しい重湯をこしらへて。」
と、いひながら、宇治はお芳に抱かれて睡つてゐる子供の額をそうつと覗込んでみたり、額に輕く手を當てて、
「うむ熱はなささうだな。」と、いつたりしながらも、痛心に堪へない表情をして、
「あゝ、これは大變なことになつてしまつたなあ。」と、唸るやうな太息を吐いて、今度は又奥の病人の方に戻つて來て、
「なに、村松さんがこんな急病人を見て、今朝、何でもないといつて歸つた？……何をいつてゐるんだ。何でもないとは何の事だ。あの藪醫者にも困つたものだ。」宇治は、自分の留守の間に起つた家内の急變に手の下しやうもないといつた有様で、やつぱりまだそこに突立つたまゝ暫く考へてゐたが、
「とにかく村松さんを、これから直ぐ誰かいつて呼んで來てもらはう。」
「村松さんは、晩にも又來て診てくれたんです。」
「今日は二度來て下さいました。」
慶吉とお芳が交々いふ。
「あゝ、さうか。晩にも來たのか。それで何といつた？……何時頃？」
「なに、まだ一時間か、二時間にならないくらゐです。」
「それで、何といつた？」
「別に何ともいひませんでした。變りはないんでせう。」慶吉がいふ。
「もし變つたことがあつたら、すぐ使ひをよこしなさいと仰有いました。たゞ氷で頭をよく冷すやうにと、それだけいつてお歸りになりました。」お芳がいふ。
宇治は自分ですぐ村松醫師の處に駈付けて委しい話を聽かうかと思つたが、自分の體もひどく疲れてゐるので、こんな場合又自分でも倒れたら、暗闇だと思つたので、注意しつゝ、すぐ近所の坂下にある別な醫者を迎へに遣つて、來診してもらつた。それは子供を一二度診てもらつた若い醫者であつたが、一と通り丁寧に診た後で、頭を傾けながら、
「まあ何處かへ入院さした方がいゝですな。」
といつて、その序に子供をも診て歸つた。
その醫者が歸つた後で直ぐ又宇治は、どうしても安心出來ないので、使を遣つて村松を迎へた。村松醫師は看護婦を伴れて十一時頃に來てくれたが、病人は、慶吉が始終付きつきりで抑へてゐないと、どんなに寝かしても、すぐ跳ね起きて、何かいはうとするが、口は少しもいふことを利かない。何をいひかけても解る様子もない。たゞ子供が遠くの方で泣いてゐる聲だ

けは耳につくと思はれて、常に子供を寢せてゐた、自分の寢床の脇を、手でそうつと叩く眞似をする。それで明朝新宿の方のある病院の院長に來診してもらふことに相談を定めて村松醫師は歸つた。

それから重湯が出來たので、宇治は、子供を二階の自分の蚊帳の中に入れて、それを飮まさうとしたが、匙で三つか四つ飮んだきり、どうしても餌に付かない。そつと寢かして置くと、十分間も經たないうちにすぐ眼を覺まして泣いた。たうとうその晩は徹宵、お芳が背中に負つたまゝ、自分はまんじりともせずに彼女の蚊帳の中に坐つて一夜を明かした。

宇治はさうなると、今日伊香保から急行程で歸つて來た身體の疲勞よりももう精神の疲勞の方を餘計に感じて、病人は慶吉と看護婦とに任しておいて、自分は二階の自分の室に上がつて綿のやうになつた身體を蚊帳の中に横へたが、すこしく假睡としかけたかと思ふと、すぐ跳ね起きて階下に駈け下りてみた。宇治は、寢てゐても幾度となく唸るやうな太息を吐いて、これは飛んだことになつたものだと思つた。

翌日早く、係り醫の村松醫師が新宿の方の病院の博士を案内して來診してくれた。來診の結果、現在の症狀は腦の疾患から來てゐるものか、或は極度のヒステリイなどの昂じた神經系統に屬する病氣であるか、博士はまだ十分の疑ひを抱いてゐるものの如く詳に語らなかつたが、割合に熱の低いのが腦の疾患ではなささうに思はれたりした。それでもし神經系統の異狀に基づくものとすれば、それは、それで又心配の種であつた。どちらにしても、まるで闖入者に入り込まれたやうな憂慮と不安は去らなかつた。

そして宇治が乳兒にも困つてゐることを話したところ、博士は自分の知合の、牛込の方の小兒科の醫院を紹介してくれて、一時そこへ預けることを勸められたので、宇治は早速先づ子供をそこへ伴れていつて預けることにした。

もうこの三日間――といふよりもその前から幾日の間碌々、食餌を攝取してゐない乳兒は、昨夜徹宵、女中の背中に結付けられたまゝ、夜を明かしたのであるが、朝になつて見ると、ぐつたりとなつて、女中の背に凭れたまゝ、時々元氣のなささうな聲を發して、泣かうとするけれど、その聲も、嗄枯れて泣く力もなく、たゞ烏のやうな聲を出すばかりで、脣の色も白く青褪めてゐる。宇治は、それを見て、まるで、胸がつぶれるやうな氣がした。

とにかく子供の方を先に始末をせねば、病人の方に手が出せないので、宇治は、博士を送り出すと、それから、直ぐ支度をして一人の女中とともに子供を伴れて牛込の小兒科に往つた。外來患者を診察してゐた小兒科の院長は博士の紹介狀を讀むとすぐ宇治に會つてくれて、

「よろしい、分りました。貴方の方のは病人ではないけれど、急に母乳を離れて、手馴れぬので困つてゐるから、これから段々牛乳なり重湯なりで食餌に付くやうにしてほしいといふのですから。……丁度あちらに一室あいてゐますから私の方で確かに御引受け致しました。」見るから精悍な活動家らしい院長は頼母しさうにいつてくれた。

宇治はそれから、家の方が心配なので、一人の女中は先に返して、一人の女中はずつと病院にゐて子供に附添はすことにしておいて、自分は他にその邊に用事があるので、一二ケ處寄つて一時間ばかりして又病院へ戾つて來ると、子供は此の間中の空腹と睡眠不足とのせゐもあつたらうが、大きな寢臺の上に大の字になつてぐうぐう熟睡してゐた。宇治はそれを覗込むやうにして、

「どうした？　よく寢てゐるな。」
「牛乳を一合おいしさうに召上りました。」傍についてゐたお芳は安心したやうにいふ。
「うむ、さすがに專門だ。違ふな。」
「先程先生が御診察もして下さいました。他に變つたことは少しもないけれど、いかにもお腹が空き切つてゐるのだと仰有つてゐました。」
「さうか、可笑々々。」宇治はそれで子供のことは先づ一と安心して、ジリノヽと照りつける九月初めの日中を急いで自宅へ歸つて來た。

朝のうち少し落着いてゐた病人は、歸つてみると又動き出して、弟の慶吉が男の手でいくら抑へても抑へても身を踠いて、何かいひながら跳ね起きようとしてゐる處であつた。その枕頭には郷里から出て來たばかりの父親が趺坐をかいてゐた。

昨夜父親に知らさうかどうしたものであらうといふ相談を慶吉から云ひ出した時、宇治はあたりまへならば、無論知らして遣る筈であるが、夏以來ずつとお悦の健康の優れなかつた事、その他のことについては、ぜひ共一度父親に出京してもらひたいと思つて、再三再四の手紙なり電報なりを以て、さういつてあるにも係はらず、一向それに應じてくれなかつたので、
「それは知らしてやるのも可いが、知らしてやつたつて駄目だ。何度さういつても、その氣にならないんだから……」
といつて、宇治の方からは知らさうともしなかつたが、かうして俄かに出て來たところを見ると、慶吉の方から昨夜電報でも打つたものと見える。

父親は、意外のお悦の重態に驚いたものと思はれ、始終痛心の面をして、頻りに暴れ出さうとするお悦の樣子を凝乎と眼を据ゑてゐたが、
「すこし寢ろ。」と、高い聲で一と口いつた。けれどもお悦には固よりそれが分る筈もなかつた。

さうした場合、子供を手放して他へ預ける事は止むを得ぬことでもあつたし、又、醫者の方でも賴母しく云つて引受けてくれたけれど、宇治は感情の上で何とも云ひやうのない哀憐と寂寞とを感ぜずに居られなかつた。が、又一方理性ある親としての態度を考へると、一時のセンチメンタルな盲愛などに囚はれて、躊躇してはゐられなかつた。

そして宇治は、子供のことだけは、あゝして置けば先づ一と安心だと思ふと、昨日からの自分の精神の疲勞を又頻りに覺えて來た。それはとても三日や五日では癒るものとは思はれないので、宇治は何より、これから先き長い間の計畫を考へて置かなければならなかつた。そのうち病人も又暫く睡眠に落ちたので、そつちの方は慶吉と看護婦とに任しておいて二階の自分の室に上がつて、横になつた。

日の暮れになつて症狀は一層惡化して來た。病人は眼が覺めれば、すぐに起き上らうとして意味の分らぬ單音を發しながら頻りに騷いだ。そして、瞳は上の方の瞼の奧に隱れて、白眼の多くなつた眼は、まるで魂の失せたもののやうに遠くの方を見て据つてゐた。

夕方になつて又來診した村松醫師は、宇治や慶吉や父親の前で、
「どうも此の病人は經過が良くないですなあ。……今の間に通知して置く處があるなら、通知してお置きになつた方がいゝでせう。」
と、恐ろしい運命を宣告するやうにいつた。
宇治は、それを聽いて自分の身體がそこに生つてゐる力を一時に失つたやうな衝動を感じた。

「はあ、經過が良くないですか。」彼は醫者のいうたとほりを、たゞ鸚鵡返しに口の中で繰返してみて、突如として起つた恐ろしい運命について默想してゐた。

慶吉と父親とは、やうやく薄暗くなつて來た向うの座敷の隅で何か絶望的な囁きをしてゐた。

宇治は不斷から口癖のやうに、自分は、長くて、あともう十年生きれば奇蹟であるといつてゐたのであるが、かうなつて見ると、平常健康を、本人自分でも傍でも信じてゐたお悦が先きに死ぬことになつてしまつた。宇治と違つて、嘗て自分の死などといふことを考へたこともなかつた彼女に思はぬ死が見舞うて來た。まだ三十五か六で死ぬる當人の不幸はいふまでもないが、今日小兒科の病院に預けた子供を、母親の死んだ後で、これから長い生ひ先きを誰に賴んで世話をしてもらはう?……宇治はそれを考へると、急に世界が暗くなつて來るやうに思はれた。

しかし宇治は、自分の慾目であるか知らぬが、村松醫師は、恐ろしい運命を宣告するやうにいつて歸つたけれど、自分だけの直覺では、どうも病人は死ぬもののやうな氣がしなかつた。

それで彼は、密々と言葉を交しながら、絶望の色に鎖されてゐる父親や慶吉の前で、彼等の氣を引立てるやうに、

「あんなことをいつたつて、村松のいふことなど當てにならない。……當てになつて死んだら困るが……何だ、つい昨日の朝までは、女中が訊いたら、なに大したこともないと、いつておいて、今日になつて經過が惡いなんて。そりや經過は惡いだらうが、そのくらゐの診斷なら、私達素人にだつて言へることぢやないか。……私は、この病人は死なないと思つてゐるんだ。」

と、樂觀的にきつぱりといつたが、父親や慶吉はそれでは安心出來なかつた。

夜に入つてからは、昨日から二日ぶつ通しの看護に、慶吉も看護婦もぐつたりとなつてゐた。病人の少し靜まつてゐる暇をみては、みんな交代に轉寢をしてゐた。夜の深けるにつれて、仕切りなしに取換へる氷枕や氷袋の氷を碎く音ばかりが臺所の方で寂しく聞えてゐた。宇治も二階に上がつて蚊帳の中に入つてゐたが、やつぱり眠れなかつた。そして、すこしの間うとうととなつて、何か階下の病室の方で高い女の聲がすると思つて眼を覺まして、はつと思ひながら耳を澄ますと、それは、府下の方に嫁いでゐるお悦の妹のお茂の聲であつた。遲くなつてお茂が見舞ひに來たものと見える。さう思つてゐると彼女は、戶を閉め切つた深夜の家の中に鳴り響くやうな泣聲を揚げて、

「姉さん、どうしたんですよう……わたしが分らないんですか。わたしはお茂ですよ。お茂ですよ。……こんなにいつても、ちつとも分らない。……姉さん生きてゐる間に、私のことで散々心配を掛けてすこしもその恩返しをしないうちに私達を遺しておいて……今死んだらどうするんですよ。これ姉さん、氣を確かに持つてゐて下さいよう。死んぢやいけないよう姉さん。」

と、喚いてゐるのが、絹を裂くやうに、切れ切れに耳を劈いた。

宇治は枕から頭を擡げて、その樣子に聞入りながら、お茂が見舞ひに來てくれたのもいゝし、瀕死の姉を悲むのも自然の情であるが、それが爲に、絶對安靜を要する病人に惡い影響を與へなければいゝがとか、その消魂しい女の泣く聲が、深夜の戶を洩れて、近所に聞えたければいゝがとか、そんなことをかたがた氣づか

つてゐた。
　そして、お茂のひと仕切り泣き喚く聲が靜まつた時分に又病室に下りて來た。お茂は慶吉と看護婦に代つて自分で姉の枕頭に付いてゐたが、宇治がそこに出て來たのを見て、いきなり、
「こんなにひどくなるまで何故わたしに知らしてくれなかつたのですか。」と不足をいつた。
「あんまり大きな聲を出して泣いたりすると、可けない。」宇治がさういふと、お茂は、
「誰も泣かないから……」と不貞腐れた。
　宇治は一々それに返答もしなかつた。
　夜はもう彼是れ一時をも過ぎてゐたらうか、晝間はまだ秋暑が堪へがたいやうでも、深更になると、さすがに薄ら寒い冷氣がすうつと肌にしみて來た。
　病人は、お茂の大きな聲に愕かされたせゐでもあるか、もう先のやうに跳ね起きようとする元氣もなく、咽喉の奥の方で微かな音を立てるばかりで、白い眼は全く死相を呈してしまひ、瞳はまるで瞼の下に上がつてしまつた。もう今にも事は切れるものと思はれた。家の中は森として、幽かな電燈の影に一座は悉く深い沈默に鎖されてしまつた。
　宇治はしかし、そんな絶望の淵に立つてゐながらも、素人考へには、眞白に上がつてしまつたその眼の尚ほ動いてゐる有樣が、まつたく息の絶える刹那の樣子とは少しく異つてゐるやうに思はれた。まだ〳〵死にはせぬと思はれた。そんなことを感じながら八疊につゞいた納戸の六疊の方を見ると、父親は悲みの面を隱すやうに向うの壁の方をむいて腹這ひになりながら、幽かな電燈の明りで何か手紙のやうなものを披いて讀んでゐた。宇治はそれを見るともなく、病人の枕頭を離れてそつちに寄つて行きながら何氣なくその手紙の文字に眼を留めてみると、それは、たしかにお悦から父親に遣つた手紙らしく、
「……たつた五圓八拾錢の藥代をさへ吝んで、藥代が入つた〳〵と何度もそのことをいひ、小遣さへ一錢もくれず、その藥代も自分の小遣で拂つたのです……」
といつたやうな意味のところが眼に入つた。
　宇治はそれと氣が付くと、お悦が此の間もいつてゐたことを、自分の思つてゐるまゝに、父親に書いてやつたものと察した。さうして、その無理解と不埓とについて忽ち非常な不快と立腹を感じた。そして、いきなり、「何だ、そんな手紙をやつてゐる！　何で私が藥代を吝んだ！」と激昂の語を發した。
　すると、そこに腹這ひになつてゐた父親は、起き上つて來て趺坐になりながら、きつとなつた顏をして、宇治に向ひ、
「貴方がさういふなら、いふ。私もいふ。……事實に無いことを手紙に書く筈はない。藥代を吝んだと書いてあるのも、貴方が吝んだから、そのとほり書いたものに相違ない。」
　それを聞くと宇治は、此の間も既にそのことで、お悦に對して、ひどく立腹したのであつたが、他のことと違ひ、自から必要と信ずる物を吝んだなどといはれては、それが全然自分の氣持と正反對な言ひ前であるだけに一層腹が立つた。
「何で私が藥代を吝んだ。この私が物を吝むなどと、事實を強ふるにも事に依る。どこにそんな事實があるか。」
　宇治は、お悦に向つていふ如く父親に向つて喰つて掛つた。
　すると父親の方でもます〳〵開き直つて來ながら、
「事實ないことを夫婦の間で書く道理がない。……それに、小遣まで碌に當てがはないといふ

のは、貴方は悦を虐待しとるぢやないか。」と怒鳴つた。

　しかし宇治は、自分の意中に強い自信があるだけに、そんな言ひ分を聞くと、腹の中で稍々可笑しくなつて來た。

「何で私が虐待をしてゐる。何處に私が、彼女に不自由をさせた事實がある？」

「不自由をさせて居るぢやないか。虐待してゐない事實がないものが、何で此の手紙を書く？……追掛けおつかけ、始終此のとほり手紙が來てゐる。」といつて、父親は見たところ十通ばかりの嵩のある手紙を束にしたのを取り出した。それはお悦から遣つたのばかりでなく宇治の方から遣つた物と一緒らしかつた。

「このとほり手紙が來てゐる。」といつてゐたが、彼は興奮の極に達したものの如き有樣で、

「これが虐待でなくて何だ？……。元のとほりの身體にして返せ！」

と怒鳴りながら、手紙の束を疊の上に、ぱたと叩き付けた。

　宇治はその權幕に吃驚呆れたが、その直ぐ後の瞬間、妙に人間として自分の優越を感じた。

　といふのは、宇治自身に何處を突いても兎の毛ほども、さういふ不足をいはれる缺點がないといふ強い確信があるからであつた。事實、宇治はお悦を虐待するどころの騷ぎではない、平素から宇治自身の方がお悦に虐待せられてゐると云つても決して不當ではないのであつた。もう長い間、お悦の病的な狂暴に手古摺るたびに、今度こそは父親に會つて一伍一什の事情を委細打ち明けて懇談しようと思つたことは幾度あつたか知れぬが、何より、毎時勉強の方のいそがしさに、そんな詰らぬことに暇を費してゐるのが億劫で馬鹿げてゐるのと、お悦の缺點を數へ立てるといふことは、取りも直さず、自分がお悦の如き者を入れて妻にしたといふ自己の不明を語らねばならぬことになるので、それが、宇治自身の、相當思慮あるべき筈の年配を省みて出來ないことであつた。そんな時彼は屢々自分と同じ職業の大先輩であるところの瀧澤馬琴の私生活を思ひ出した。馬琴は老境に入りて、無智悍執なる妻の狂暴に苦められてゐた。彼はその事を日記に書いて且つ悔い、且つ慚ち、且つ歎いてゐる。宇治は嘗てそれを讀んで、ひどく、この大家の老後に同情したことがあつた。彼は、馬琴でさへ、無智の愚妻にあつてはそんな困惑をしてゐると思ふと、やゝ諦めも付くのであつた。

　それで、いよ〳〵最近お悦の狂執が募つて、どうにも始末におへなくなつたところから、父親の出京を促して、長い間腹に溜めてゐた顚末を洗ひざらひ話さうと思つてゐたのであつた。それに何事ぞ、お悦の手紙の端に認めたところによると、宇治の方から父親に談じようと思つてゐたことを、それをいはれては、困るところから、彼女自身の方で先括りをして、事實を曲げて、宇治の處置を讒訴してゐるのであつた。宇治はお悦の淺慮な狡智に不快を感じた。

　そして、子に愚かなる父親は自分の娘のいふとほりを眞實だと信じてゐる樣子である。宇治は平素から夙に、お悦の親達は、お悦の此の性情の缺點を知つてゐないのであらうかと思つて、親達の賢愚にまで想ひ及ぼしてゐたのであつたが、かうなつてみると、その土地では、物の解つた人物といはれて立てられてゐるといふ父親の相場も大抵知れてゐる。

　宇治はそれで、父親の、年數もなく興奮した權幕を驚くよりも呆れた顏をして、少しく笑ひを含みながら、言葉をやゝ和げて、

「元のとほりにして返せ。」と、父親のいつたとほりの言葉を鸚鵡返しに一口の中で繰返して、

「……だから、このとほり病氣の手當をしてゐるぢやないか。今、そんなことを此處でいつてゐる時ぢやない……」

と、口を吃らせながら倘何か後をいはうとしてゐるところで突然宇治はぴしやりと頭腦を毆き潰されたやうな氣がして、眼からさつと火が迸つたと思つて、そのまゝ眼が眩んでしまつた。幸ひにして坐つたまゝ倒れはしなかつたが、少時暗くなつて明を失してゐた。

さうして、何だらうと、稍々意識を回復しかけてゐるところへ、再び後から、ぴしやりと、又頭を打つた。それと同時に宇治の背後で慶吉の聲がして、

「この野郎！」と怒鳴つたのが分つた。

それで、宇治は、慶吉が理不盡にも自分の頭を毆打したものであるとはじめて氣が付いた。

宇治は、眞暗から段々明るくなつて來る眼を雙掌で抑へて、これは盲目になるのではないかと氣づかひながら、

「何を爲る！」と、いひさま背後を振向いた。

慶吉は倘手を上げて打つて掛らうとするところを、も一人そこに居る、先に父親の處の使用人で、今東京のある店に奉公してゐる若いものが手を以つて制してゐた。

宇治はまるで蠻人の群に包圍されてゐるやうな不安を感じた。そして忽ち念頭を走つたものは、自分が今こゝで死んだら、今朝病院につれていつた子供を誰が世話するかといふことであつた。そして哀憐の感は湧くやうに胸を突いて起つたが、慌てもせず、そこに確と坐つたまゝ、

「何を爲るんだッ……眼が見えなくなつてしまふぢやないか……私が今死んだら子供をどうすることも出來ないぢやないか……」

と、いひつゝ、そんな兇暴を敢てする自分の伜の行爲を何と見てゐるであらうかと、正面を向いて父親の顏を見ると、彼は、慶吉の無法なる行爲を格別制止しようとする風もなく、二十貫に餘る巨軀を小山の如く大趺坐をかいて微動もしないでゐる。宇治はそれを見ると一層癪に障つた。そして又お悦がそんな宇治に對して背信の手紙を父親にあてて書いた。——自分の非を飾らんが爲に、それを宇治に轉嫁しようとする狡い惡德を憤る念が湯煙の如くに頭を騰つた。

しかし言葉はつとめて穩にしながら、

「私が藥代を吝む、何處に藥代を吝んだ……小遣錢を與へないといふが、何時私が彼女に不自由をさせた？」

宇治は、お悦を蛇蝎の如く憎惡する毒氣を父親に向つて吐いた。すると宇治の背後に倘ほ手を振上げてゐた慶吉が、

「虐待ぢやないか、碌に小遣もやらないで、自分では勝手な事をしてゐるぢやないか。」と、怒鳴つた。

宇治はそれで倍々憤激しながら、斜にそつちを捻向くやうにして、

「私が何處に勝手な事をしてゐる。外に出て餘計な小遣一つ遣ふといふではないし……」假令自分が外で自分の取つた金で藝者遊びをしてさへ何處に遠慮も入らないのだがと、腹の中で思ひながら、急語した。そして又振返つて父親の方の顏を見て、

「何處に私が、彼女に不自由をさせてゐる……たとへば月々の諸拂ひにしても、たゞの一度だつて、お勝手口で晦日に、出入りの商人の勘定の遲れる斷りを言はせたことがあるか……」

宇治はさういひながら、ひとり胸の中で、自分の十年も十五年もの以前の生活と思ひ比べて感慨に堪へないのであつた。

すると、父親が始終沈默してゐるにも拘らず、慶吉が後から顏を差出して、差出がましく又口を出した。

「そりやあお前、いくら物質的に不自由をさせ

ないでも精神的に虐待してゐれば、やつぱり虐待ぢやないか……」と、さも〳〵利口さうに云つた。

　慶吉は小學校だけ卒業したにしては筆蹟なども割合に巧みで、三十二か三にしては世間的の知識にも暗い方ではなかつたが、精神的だの物質的だのといふ言葉を用ゐて理窟をいひ出したので、宇治は本氣で今對手になつてゐる心もしなかつたが、

「精神的に何處に虐待してゐる？」と言葉を返した。そして今こんな苦々しいことが始まるまで氣が付かなかつたが、今日晝間、子供を小兒科に預けて戻つて來た時、後で、お悦の枕頭に父親の趺坐をかいてゐた處へ、宇治が此の間伊香保からお悦に當てて寄越した手紙の開封したのが置いてあつたことを、ふと思ひ浮べた。その手紙は九月の二日に書いて出したもので、

「……留守居があれば、お前と子供と來るとよいのだが。こちらには、何も、ぴらしやらした男や女ばかりも來てゐない。普通のおかみさんや、子供も來てゐる。子供を温泉に入れてやりたいと思ふ。伊香保のぜんまいを少し送つた。よく干して置くといゝ。煮てたべなさい。私が不在中でも時々武藏屋の鰻を取つて食べるべし。滋養をとらねば、母子ともにいけない。ついでに十日頃までも、ゐたいものだが。

九月二日　ひとり娘のお父さん

お悦さん」

と、いつたやうな愛情濃かなる手紙であつた。宇治は、それを晝間お悦の枕頭で見たのであつたが、二日の正午に向うで出したものであるから早くて三日の午前でなければ着かぬ、そしてお悦は三日の早曉から症狀が急變してゐるのであるから、その手紙を自分で開封したか、どうか甚だ疑はしい、多分自分では見なかつたであらう、すると枕頭に開封のまゝ置いてあつたのは、或は慶吉でも臨機に開封して讀んで見て、それを又その日に出京した父親に見せたものであらうといふやうなことを、心の急しく顚倒してゐる場合とて、ゆつくり考へてみる暇もなく、自分の書面であるから、そのまゝ手にも取上げなかつたが、今となつてよく考へてみると、お悦がいろんなことを書いて遣つた手紙によつて、父親等はお悦の言葉を一から十まで信じ、いかにも宇治が、お悦を虐待してゐるかの如く思ひつめて、そんな手紙まで、宇治の不在中に慶吉と二人で取出して讀み返してみたものと思はれた。何處までも虚心坦懐なる宇治は、さういふ邪推と僻見とを以つて物を見てゐる彼等の中にあつて、丁度都人を見馴れない田舍犬に寄つて集つて吠えられてゐるやうな、仕方のない氣がした。

　さう思ひながら、ふと背後の方でお悦が頻りに苦しさうな息を吹返して、何か物でもいはうとしさうに、床に横はつたまゝ身を踠いてゐる樣子が耳についた。宇治は此の場合お悦の不徳を憤り、無智を憫んでいゝか、どうか分らないのであつたが、彼女の、今にも息の絶えんとする苦しい呼吸の音を聽くと、又別の哀憐の感が新しく起つた。そして、先つきまでは眼を白くしたまゝ少しく靜まつてゐた彼女が、さうして又急に身を踠いてゐることを思ふと、彼女は、こちらの方でたゞならぬ物音高聲がするのを半無意識の中に知つてゐて、それで何かいひたい、どうかしたいと思つてゐるのではないかとも察しられた。宇治は、父親と慶吉の間に挾まつてゐた座を突如として起ち上りお悦の枕頭に歩み寄つて、その顔を覗いて見て、他の者の方に向つて、

「あゝ、もう、うるさいッ！……肝心の病人を

打つちやつておいて何の事つた。」と、叱咤するやうにいつた。
宇治は一と言さういつて、自分にも反省すると同時に彼等に向つて、警告を與へたが、自身の憤激の感情は少しも納まらなかつた。そして枕元の座に近く戻つて來ながら、
「私が彼女を虐待してゐるとは、一體どういふ譯だらう、何處に虐待してゐる？」と激昂した。そして心の中で、虐待どころか、お悦の方で平素自分をどんなに待遇してゐるかといふことを、考へ出すと、山ほど言ひたいことが募つて來たが、今眼の前で斷末魔の苦しい呼吸をしてゐる病人の非違を數へる氣には、どうしてもなれなかつた。宇治は苦しい思ひを凝乎と堪へてゐた。
すると、慶吉と病人の裾の方との間に横になつたまゝ自分の子供に添乳をしてゐた妹のお茂が、口を出した。
「姉さんは此處の家に居ない方がいゝんだよ。……居なくつたつて立派に食つて行かれるんだもの。」と擲げ付けるやうにいつた。
宇治はもう、此奴等を對手に物を言ふだけ自分も一緒に愚かになるといふ氣がして、出來るだけ默つて居らうとした。彼等の常識と道德とから判斷すると、食つて行かれりや女は一旦嫁しても勝手に出ていつても一向差支へないものと受取れた。
お茂は、今居る場處が宇治の家であるか、それとも父親や兄の慶吉や姉の居る傍であるから、自分達の家であるとでも思つたのか、さながら家の中に一杯になつたやうな調子で、又疊みかけていひ放つた。
「姉さんは何時か、わたしの處に來て、いつてゐたことがあるよ。……わたし一寸人を見違へてゐたといつて、後悔してゐたことがあつたよ。」
それを聴くと宇治は、何處までも默つて居らうとしても、つい堪へ切れずして、
「ほう人を見違へてゐた。私を見違へてゐた。」
とたゞ中音に聲を發したが、あんまり呆氣にとられた形で言葉に力も入らなかつた。そして又心の中だけで、人を見違へるとは、それは此方の方から先きにいひ出すことであると思つたが、その見違へたのも、自分の不明であつてみれば、現在このとほりの活劇を演じなければならぬ始末になつたのだと思つた。
お茂は又いつた。
「何も彼も聞いて知つて居るよ……此處に居た女中からも聞いたことがあるよ。」ときも／＼宇治の惡い事實を明かに知つてゐるやうにいつた。
「うむ、いろ／＼聞込んでゐる事もある。」親父もその後についていつた。
宇治は又默つてゐられなかつた。
「ほう、何を聞いて知つてゐるか知らないが……」
と、いひさしてそのまゝ後の言葉を呑込んでしまつた。そして又腹の中だけで考へてゐた。
――女中からも聞いて知つて居る。何を聞いて知つてゐるのだ？　お茂が此家の女中と二人ばかりで會つたこともない。又女中から、お茂が聞かされて、それを宇治が迷惑したり、中聞きに差支へるやうなことは露ほどもない。すると記憶の好い宇治はすぐにかういふことを思ひ浮べた。いつであつたか、お悦が宇治と言ひ爭ひをした時、先頃まで半歳居つたといふ女中が、「旦那樣は隨分などいですねえ、昨日渡した金はどれだけ入つたなんて、朝から、お金のことなんか訊いて、」といつたことがあるといつて、お悦が、
「あんなものさへ、そんなことをいつてゐた。」
といつた。その時宇治に、

「何だ、それが。毎日々々聞くのぢやあるまいし、私の方でもあの時一寸都合のあることがあつたから、それでそちらに幾ら小遣が殘つてゐるかと思つて訊いたのぢやないか。あんな半端人間が、たゞそれだけ聞き諮つただけで、私がどんな事を考へてゐると云ふことの大體を知つてゐる譯ぢやないぢやないか。そんなことをいふとお前までも半端人間ぢやないか。……私がかうして無事でゐる間は、まあ今くらゐな生活は、どうかかうか出來る。たゞ食つて通つただけでは私が死んだ後でどうする事も出來ない。」

宇治はその時も、毎時口癖にいふことを云つた。お茂はきつと、そんなことでもお悦から女同志のびちや／＼ばなしに聞いてゐるのかも知れぬと思つてゐた。と、お茂は一人で又口を出した。

「何だ小遣も碌にやらないで。何處に行つたつて、世間にそんな家はありやしない。」

宇治はそれで、默つてゐた口を又切つた。

「小遣をやらないつて、それを大變な不足のやうにいふが、小遣が入るなら、入るだけやるぢやないか。何に使ふといふ使ひ途の分つてゐる小遣をやらない筈はない。それどころぢやない、買つて呉れといはない物をも偶には買つてやつてゐる。……そりやあ、あれも欲しいこれも欲しいといふ段になれば此の家の道具だつて不足だらけだ。……これで私が外で餘計な小遣を無駄につかふといふではないし。

といひかけると、今度は慶吉が又横から利口ぶつた口を出して、

「餘計な錢を使ふぢやないか、病人を放棄らかしておいて、自分は伊香保などにいつて勝手なことをしてゐるぢやないか。」

宇治はそれを聞いて、少しく苦笑ひを含みながら、

「伊香保に行つたのが何で勝手だ。何も病人を放棄らかしていつたのではない。私が家に居ると、二人で互に詰らん喧しいことばかりいつてゐるから、私が少時留守にした方がいゝと思つたのだ。それに自分も夏中疲れてゐたから……

宇治は、そんな自分の一家の事まで立ち入つて口を容れられたり、又此方から、それについて一々說明する必要もないと思つたが、禮儀といふことを知らず、いふべきことの分限さへ辨へてゐない彼等が勝手放題なことをいふのが耳に入ると、彼の性質としてそれを默つてゐては氣が濟まなかつた。そして、今度は先つきから始終澁平と默つてゐる父親の方に向つて、感慨めいた調子になり、

「小遣を碌にくれないとは、一體どういふ考へでゐるのか知れないが、私としては實に出來る限りの暮しをしてゐるつもりだ。彼女にも始終いつて聞かせてゐる筈です。私がかうして生きてゐる間は可い。唯食つて通つただけでは死んだ後で二人の者がどうすることも出來ないから、今の內に少しでも殘す分別をして置かなければならぬと思つて、何も彼も儉約をしてゐる……」

といひかけると、又慶吉が横から利口らしい口を出した。

「平常儉約をしたつて、病氣になるまで儉約をして、それが何の役に立つか。」と、怒鳴つた。

宇治は又それで、言葉の半ばで口を結んでしまつた。さうして少時苦い笑を含んでゐたが、やつぱり言はなければ氣が濟まず、

「何も病氣になるまで、私がどんな儉約をした？」

宇治は、馬鹿共を對手にしてゐると思へば腹も立たないのであるが、さういふことをいはれるとやつぱり、心外で堪らなかつた。そして又心の中で思つた。現に傍に居るお茂などは、去

年お悦よりも三四ケ月早く子供を産んだのであるが、もとより女中一人使つてゐる譯でもなかつた。爪の先に火を點すやうにして小金を殘す一方の堅人である彼女の亭主には一人の母親があつた。その姑は、自分では毎晩のやうに揉み療治をやつてゐても、お茂が始終子供を負ふので肩がいたくつて堪らぬから、一遍療治をしてもらつたらといふと、「なに、若い者はそんなことをしなくつても、私は年寄りだからといつてお茂に療治一つさせなかつた。それを又お茂の亭主は、姑のいふとほりになつてゐた。それで肩の凝りが原因で此の夏は中耳炎を起して、遠くの大森の方から慶應病院に暫く通つてゐた。その時彼等は夫婦連れで來て宇治の處に寄つて休んでゐた。それに比べると、宇治の家では女中は大抵二人で、一人の時は少なかつた。お悦には、氣を置かなければならぬ年寄りといふ者もなかつた。宇治は外で金を使はぬ代りに、家では毎日欲しいと思ふ物を食べてゐた。

——宇治はそれで、小遣をも碌にくれないと、何かに付けて皆ながいふところを少し不思議だと思つて今、こゝにみると、お悦は、なるほど宇治の家に居て、格別日々の事に不自由をしてゐるほどでもないのだが、自分の先に産んだ子供の厄介を掛けてゐる鄕里の次弟の方などへ思ふとほりの義理をすることが出來ぬのを始終心苦しく思つてゐるのではあるまいかと、宇治には考へられた。しかし、それもお悦が、平常眞面目に宇治のいつてゐるとほりを果たしさへすれば何でもないことなのであつた。宇治自身としては、初めから自分の方へ餘り好意を有つてゐないらしい、お悦の次弟の方へまで始終氣を配つて世間並の義理をしなければならないとも考へなかつた。宇治の頭は、それよりももつと大事なことに忙がしかつた。彼は、學生時代から始まつて、ずつと中年にかけて長い間に數千圓といふ金を貰つてゐる自分の鄕里の兄に孫が生れても、自分で氣の向いた時でなければ、改つて祝儀もしなかつた。その代りにどうかすると東京中を探して、田舍の者の眼を驚かすやうな物を買つて遣つたりした。

——前後の口裏では、どうやらそれが、お悦の次弟に二度目の男の兒が生れて、その百ケ日が過ぎても、お悦——宇治——の方で祝儀もせぬのが、お悦に碌に小遣も與へぬといふことが重大な感情問題になつた原因の一つらしかつた。それと察しられると、宇治は一層鬱な氣がした、夏中ひとりで齷齪して暮しを立てた宇治は、そんなことを、もし向うで根に持つてゐるとすれば、いよ／＼以つて仕方がないと思つた。

さうするとお茂が又口を出した。

「姉さんは獨りになつて自分で働く方が好いんだよ。……立派な腕を持つてゐるんだもの……さうしてあちらの子供を自分で育てる方がいゝんだ。……あちらの子供が可哀さうぢやないか……」と、いひながら、仕舞の方の聲は涙に濡れた。

宇治は又それを默つて聞いてゐながら、お茂は自分には亭主があつても、姉のお悦には夫が無くつても可いと思つてゐるのであらうかと思つてゐた。

すると、今まで少時默つてゐた父親は、

「去年子供が生れた時に、悦を此方へ入籍することを承諾したのは、私の方では、貴方に恩惠を施したつもりでゐるんだ。」といつた。その語裏には勿論、自分の方ではお悦をお前の處などへは寄越されないのだが、お前の懇望に任せて寄越した。それにも拘はらず、お悦を虐待するとは何といふことであるといつてゐるやうに思はれた。それで宇治は心の中で、お悦がそんなに勿體ない女であるならば、何時でもお引取り

をねがふのだと考へたが、今止むを得ずして母乳を離したばかりの子供のことに一度思ひ及ぶと、宇治は體中の勇氣が悉く挫けるやうな氣がした。
宇治はさうしてゐるかと思ふと、心は絶えず八方に散らかつてゐるやうに、恰も彈條仕掛けの如く又すつと起ち上がつて病人の枕頭に歩み寄り一寸様子を覗いて見て、
「あゝもう、うるさい〳〵。そんな話は何時でも出來る。今此の死にかゝつた病人を放棄つておいて、そんなことをいつてゐる場合ぢやない。……助かる者をも殺してしまふ。」と、ぶつ〳〵言ひながら又今度は横の方から父親だの慶吉の居る脇に寄つて來て坐つて、
「まるで皆な此處の家を破壞してしまふやうなことをする。」と、沈痛な情を顏に浮べて喞つやうにいつた。
すると、慶吉は、又のり出して來ながら、
「破壞してしまふやうぢやない。もう破壞してしまつてゐるぢやないか。子供なんか死んだつてかまはない。病人はもうあのとほり死んでしまつてゐるぢやないか。貴樣が殺したんだ。貴樣もついでに殺してしまつてやる。」
といつて、そこにあつた瀬戸の手提げ火鉢に手を伸ばした。傍に付いて居たさつきの若い者が又それを制した。
宇治は呆れた眼をして靜とその態を見てゐたが何か一つ自分の方でいひ出せば、何れもこれも妙な道理をこじつけて棄て鉢をいひ出して、果てはこれ以上にどんな兇暴を働かないとも限らないので、もしそのために實際、救かるべき病人を死に到らしめては、悲痛も悲痛である。が、一家の主人として宇治自身の人格と品位をどれだけ傷けるか知れないと思ひ、どんなに腹が立つても凡て後日に譲り、滿腹の耐忍を以つて今はもう一切何にも言はぬことに定めた。そして却つて彼等の淺慮なる興奮を宥めるやうなことをいつた。
「あゝ、よし〳〵。もう皆な分つた〳〵。私が惡いんだよ、わるいんだよ。」といひながら、又座を起つて病人の方に寄つていつた。肝心の病人はその騷ぎに、誰も顧みる者なく、二晩打つゞけの看護に疲れた看護婦などは女中部屋に轉寢をしてしまつて、枕頭にはその日また新しく雇つた雇女が、呆氣に取られたやうな顏をして手持不沙汰に控へてゐた。
病人はいくらか又落着いて、白眼の瞳も元の處に表はれてゐた。宇治はその顏を覗き込んで、
「氷を飲むか。」と訊ねると、微かに肯く色を見せた。宇治はそれだけでも自分も元氣づいたやうな氣になつて、
「あ、氷を飲むといふよ。死にはせぬ〳〵。」と聲を發した。そして小さい氷の碎片を四五度口へ持つていつてやつた。するとお茂もそこに摺り寄つて來た。又氷の碎片を立てつゞけに口に含ませた。
「そんなに無暗にやつても可けない。」
「なに氷くらゐ少し餘計にやつたつて構やしない。」宇治は、お茂のその粗野を厭うて、ついと又座を起ち上がつた。そして、
「この模樣ならまだ死にはせぬ〳〵。」と、ひとりで景氣づいたやうにいつた。
父親は先の處に胡坐を掻いたまゝ、宇治の方を見て、
「二階にいつて少し寢るといゝ。……又惡かつたらさういふ。」といつた。
「惡くつては困る。」といつて、宇治はそのまゝ二階に上がつて來た。
そして蚊帳の中に入つて身體を横へたが、極度の心勞と憤激とに胸の中は焔の如く火照り、呼吸をする力も絶え〳〵に掠れた。宇治は苦し

い息を吐きながら、此の際自分までがもし倒れるやうなことがあつては、何も彼も破滅だと思つて、努めて氣を張り、心を平靜に保たうとして、眠られぬまゝに仰けになつたまゝ、胸を開いて大きな呼吸をつゞけた。さうしてゐると、先刻慶吉に毆打された時したゝか眼に觸つたものと思はれて、ぢつと眼を開いてみると、瞼に曇りが懸つて電燈の灯影がぼんやり霞んで見える。これは、もしかしたら視力を傷けたのではあるまいかといふやうなことが又頻りに氣になつて來た。宇治は、飛んでもない野蠻人の一族に係り合つたものだと思ふと、三十餘年の長い間、ともかくもして今日までストラッグルして修養して來た自分の生涯を、すつかり棒に振つてしまつたやうな氣がした。自分の身體には金錢からも精神からも大變な資本がかゝつてゐるのだといふやうなことも考へられた。いろんな思想が矢の如く往來して神經は一層興奮して來た。彼はそれを強ひて紛らさうとして、うんうん聲を出して深い息と一緒に唸りながら、とろとろと假睡んだ。

　昨夜深更になつて少しく落着いて眠つた病人は、翌曉になると又夢中に眼を覺まして、暴れ出さうとするやうに手を踠いた。それは、いくら灌腸をしても快く通じがないのと、夢中ながらにも、便通を感じながら、床の上ではどうしても思ひ切つて用を達すことが出來ないので、自分で起つて便所へ行かうといふ意思を表はしてゐる動作とも受取れるのであつたが、變に白眼を見据ゑてゐる形相を見てゐると、どうしても憑ものでもしてゐる精神患者とよりほかには思はれなかつた。そして、傍に付いてゐる者が、いくら賺しても說いても應じないで、たうとう自分で起つて便所にいつた。それは、醫者としては、最も嚴禁するところであつたが、その時はまだ宇治も二階の寢所から下りて來なかつたし、傍に付いて居つた看護婦や弟の慶吉ももう散々持てあつかつた後なので、どうせ駄目な病人なら、好きなやうにさせたがよからうと思つたのであつた。すると病人は兩方から扶けられながら途中の緣側で、もう堪へ切れなくなつて、そこへ放尿してしまつた。着物も緣側も海のやうに濡れてしまつた。

　宇治もその騷ぎに眼を覺まして二階から下りて來た。大きな聲をする妹のお茂などが多勢の雇女と一緒に仰山にいつて、病人の穢れた着物や蒲團などを洗つてゐた。

　やつと尿利の通じた病人はそれで又少しは氣の落着いたやうに仰向きになつて、すや〳〵してゐるかと思ふと、すぐに又瞳の隱れてしまつた白い眼を見開いて、何かいはうとするやうに無意味な單調音をたゞ「うゝうゝ」と發するのみで混沌としてゐた。宇治は病人の枕許に獨りで坐つてゐたが、昨夜と同じやうに夢中にそんな氣味の惡い白い眼を見据ゑてゐるにも拘はらず、彼の慾目にか、まだ、これで死ぬ病人とは、何となく思はれなかつた。熱もさう高くはなかつたし、脈も確かであつた。

　父親は朝飯を濟ましてから、又いつものとほり病室の奧の納戸の三疊に來て大きな趺坐をかいてゐた。開け放した北向の肱掛窓から雨氣を含んだ濕つぽい風が流れてゐた。窓の外は、やつと一坪ばかりの空地を殘してすぐ裏隣りとの境の目隱しになつてゐた。そして、そちらの方の屋根の上には、地主の庭の大きな欅の梢が高い空を蔽うてゐた。

　宇治は又そこへ來て無造作にその肱掛窓に凭れかゝつて朝の風にあたりながら、そこに默つて煙草を吹かしてゐる父親の方を向いて、

「病人をどうしたもんでせう。どうも病院に入れた方が好くはないかと思ふ。」さういつた。

昨日の朝新宿の方の病院の河村博士が來て診てくれた時には腦の疾患から來てゐるものか、又は神經系統の病に屬するものか、輕率に診斷を下さないで歸つたのであつたが、宇治が素人で氣遣ふのは、もしそれが神經系統の病であつた場合には、病人自身の難澁はいふまでもなく、實に宇治にとつて殆ど運命的な不幸で、悲慘なことであると思つた。そんなことを、いろいろ胸に描きながら思案に餘つてゐると、病室の方に居つた慶吉がそこへ顏を差出して來て、嘲るやうな荒々しい調子で宇治に向ひ、

「お前そりやあ昨日親爺が此處へ來た時にいふことだ。今それをいふのは遲い。」

と、窓際に寄つてそこら中に響くやうな大きな聲を出した。そこからは目隱し一つ隔てた裏隣りの家でする靜かな話聲さへよく聞えて來るのであつた。

宇治は、又しても慶吉の不作法千萬なる物の言ひざまによつて、昨夜深更あれから、自分の自制力によつて、いくらかなごんでゐた憤怒の感情が、再び赤裸のまゝ神經をつゝかれるやうな氣がして、勃然となつたが、こんな馬鹿者を對手にしてゐると、自分もそれと同じ馬鹿者にならなければならないと思つて、凝乎と沸き返る胸を抑へて、それには知らん顏をしてゐた。すると慶吉は尚も宇治の方へ屈みかゝつて來て鼻の先へ顏を覗けるやうにしながら、

「お前はまるで鬼子母神のやうな人間だ。自分の子さへ大事にすればいゝんだ……」

慶吉がさういふと、先刻から默り込んでゐた父親も又宇治自身も口を開かうとしない前に、そつちの方で自分の子供に乳を飮ましてゐた妹のお茂が横から口を差出した。

「自分の子が可愛ければ、姉さんだつてお父さんにとつては、やつぱり自分の子だから大切だ……」お茂は、そんな明白なことをも宇治が心得て居ないもののやうに大きな聲を出した。

「一昨日お前が餘處から戻つて來てからといふもの、たゞの一度だつて病人の傍に少しは付いてゐて優しく介抱したことでもあるか。それが自分の家内に對する仕方か？」

慶吉は圖に乘つたやうにさういひ續けた。

昨夜は夜も更けて、四隣も寢靜まつてゐたし、戸も閉してゐたので、少しくらゐ高い聲を出しても容易に外へ洩れる氣づかひもなかつたが、早朝開けつ放しにした端近い處でそんな人聞きの惡い、下等な聲を出されたので、宇治は何よりも先きに、それが、すぐ目と鼻との間である隣家へ聞えるのを恥しく思つた。無智で淺慮な慶吉やお茂などがこの混雜の際、一寸一日や二日來てゐて、たゞ皮相な觀察をしただけで、彼等に相當の見解から、からでもあらうと、宇治の心事を見當違ひして僻んでゐるのは、宇治の立場からいふと、それは、むしろ彼等の愚昧と無智とを憫んでいゝことになるのであるが、彼は、其等の者共によつて自分に加へられた卑俗な惡罵を憤るよりも、そんな者等を弟や妹に持つてゐるお悦を自分の妻としてゐることが、自分に對して、いひやうのない侮辱であると思つた。しかし、それも、傍から誰が強ひてさうしたことでもなく、宇治自身の一存でさうしたのであることを思ふと、今更悔んでも取返しの付かぬことであつた。それで、さうだとは諦めて居るものの、お悦もまた其等の弟や妹と甲乙のない愚昧な兄弟の一人であることを考へると、その爲には如何なる事をも自分は忍ばうとするくらゐ可愛くてならない自分の子供に、其等の者共の愚昧で無智で端たない性情の血が繋がつてゐるのだといふやうなことにまで、自然思ひ及ぼし、自分の一命に代へても惜まないと思つてゐる愛するその子供が穢されてゐるもののやうな冷酷な幻滅を感じた。自分の可愛

い子供がこんな奴等の血續であるといふことは何といふ情けない皮肉な運命であらう、と思ふと、宇治は、これから先き子供を育てる希望も興味も大半索然として來て、自分の生きて居る世界が急に暗くなつたやうな氣がした。何の因果で、此等の者共と血液の通うてゐる子供を自分は愛さなくてはならぬのだらうと思ふと、そこに存する矛盾の咎が苛責のやうに辛かつた。こんな奴等の一族と一生の縁を結んだことは、取りも直さず宇治の一生涯を破滅したのも同然であると思つた。

つい昨日まで母親の手から離れたことがなく、母乳よりほかの物をやつたことのない乳兒を他人の手に放任して置くことは、宇治にしては實に斷腸の思ひであつたが、瀕死の病人を抱へて、子供の世話まで自宅でしてゐることは困難であつた。慶吉やお茂等の淺薄な考へから僻んで見ると、それが、宇治は子供の事ばかり心配してゐるもののやうに思はれた。たつた一人で、この降つて湧いたやうな病難に當らなければならぬ宇治は、自分でお悦の枕頭にばかり付つきりでは居られなかつた。

宇治は、慶吉やお茂の顏を見てゐるのも、聲を聞くのも嘔吐を催すやうな不快を感じた。そんな人間が大きな顏をして居る場處が自分の家であるといふことは、宇治にしては全く自殺したいくらゐな侮辱であつた。勿論この上の言葉を交はすさへ厭で堪へられなかつたが、それでも宇治は、やつぱり默つてばかりも居られず、

「自分が一人で八方に心を配らなければならないんだから、私が落着いて介抱などして居ることは出來ないぢやないか……」

宇治がさういふと、それでも父親は年功だけに、さすがに少しはその子供達よりは物が解つてゐると思はれて、

「うむ。」と、たゞ口の中でいつた。

さうしてゐるところへ又村松醫師が早朝から來診してくれた。

病人は先刻尿利が通じたところで、少しは落着いてうと〳〵としてゐたが、やつぱり何か知ら、解らぬ譫語のやうなことを時々いひながら、白眼を仰向けて、「あゝ〳〵。」と單音を發するのみであつた。

醫者は例のとほりざつと診察したあとで、見込のなささうな顏をしながら、

「どうも經過が良くありませんなあ。」といつた。

宇治は、昨夜深更氷の碎片を少しばかり口に入れた時の模樣では、昨日の朝方村松がいつたほど、さう悲觀したものではないと思つてゐたのであつた。そして今朝になつても、そんなに惡化したとは思へなかつた。

宇治は醫者の顏色を見守りながら、

「今朝は早くそのとほり尿利もありました、昨日あたりよりか大分落着いてゐるやうですが、それでも可けませんのですかなあ……？」

「えゝ、やつぱり好い變化は認められませんよ。別に落着いてはゐませんよ。このとほり夢中でゐるんですから。」村松さんは苦笑を含みながら、遠慮のないことをいつた。

父親は慶吉やお茂などと皆な傍に來て居竝んでゐた。

宇治は、醫者がそんなにいつても、まだ直ぐに死んでしまふものとは思へなかつた。

「何處か病院に入れたら、どんなものでせう……？」

宇治の素人考へには、やつぱり精神に異狀を來してゐることを憂へてゐた。たとひ幾らか回復しても、永久に狂人として癈人になられるのが心配であつた。

村松醫師は精神病院に入れることの不可を

唱へた。
「病院に入れると、あんた、こんな病人は却つて惡くなる。あんな處ぢや手や脚を縛りつけたりして、酷いめに遇はすやうなことをする。」
村松醫師がさういふのに嗾かされた父親は、
「病院に入れることは私も反對です。」と、贊成した。
すると妹のお茂もその言葉尻に乘つて、
「わたしも病院に入れるのは好くないと思ひます。」といつた。
勿論宇治にしても、そんな手荒い狂人扱ひをする病院へ入院させることを思つてはゐなかつたが、一昨日の晩から殆ど不眠不休で附添つてゐる看護婦や慶吉の疲れることを思ふと、今の狀態で此の先幾日も手數を掛けさせられたら、傍の者がみんな參つてしまふことが心配になつた。しかし宇治をはじめ素人にも、病人のことは少しも見當がつかなかつたと同じやうに村松醫師にも確かな見極めはつかなかつたのである。醫者はたゞ、この病人は死ぬ病人であるといふことを、婉曲に、どうも經過が良くないといつてゐるに他ならなかつた。けれども宇治にしては、醫者が見放した病人だからといつて、そのまゝ空しく死ぬのを待つても居られなかつた。どうしていゝか實に途方に暮れてしまつた。
「急變があつたら、知らして下さい。すぐまゐります。」といつて、村松醫師は、それから歸つていつた。
病人は相變らず上を仰いで白眼を半ば開きながら、「あゝ〳〵。」と、微かに唸つてゐるばかりであつた。そして夢中に時々譫言を發した。
妹のお茂は、その枕頭に坐つて譫言から何か正氣のことを訊き取らうとした。
「あらッ、あんな人、とても見込みがないといつてゐる。」
病人が、おぼろげにそれと聽き取れるやうな言葉を發したのを、明かにさう解釋していつた。
それが父親にもお茂にも慶吉にも、病人が平常宇治に對して心に思つてゐることが、夢中ながらにも譫言になつて洩れたるものと受取れた。
宇治は、そんな重患者などの取扱ひについて深い思慮も愼みもない無智な、お茂のやうな者が、偏へに婦人の俗情から、瀕死の病人を弄ぶやうなことをするのが、ひどく反對であつたが、それを制止することは、その場合一種の意味で看過してゐない譯にはいかなかつた。その場合もし宇治が、それを强ひて制止しようとしたならば、彼等は、病人のいはうとすることを訊くのが何で惡いと、つまらぬ理窟をいふに定つてゐる。そして、宇治自身が、譫言の間に、自分に都合の惡いことでもいはれるのを嫌つて、それを止めるかと思はれるのが厭であつた。
「あんな人、とても見込みがない……」
そんな、病人の譫言を父親やお茂がもし、彼等の邪推の通りに信じてゐるとしたならば、實に何ともいひやうのないほど、彼等は、身の程知らずであると、宇治は苦い顏をして、堅く口を緘んでゐた。
さうしてゐると病人は又、何か知ら譯の解らぬことを口走つてゐたが、お茂はその中から今度は、次のやうなことを聽き取つた。
「あらッ、よく揃つた二人だといつてゐる。」
お茂は何か深い意味のあるやうな聲でそれをいつた。
宇治は默つて父親やお茂や慶吉の顏をぢつと見わたした。父親はその時枕頭を離れて何時自分の居る場處にしてゐる納戸の方にいつて大胡坐をかいてゐたが、彼は、お茂の饒舌したその

慶吉の眼の中にもお悦の不幸なる境遇を讀み取つてゐるもののやうに、口邊に忿怒の色を浮べながら、鬼のやうな恐い顏をしてそうつと涙を拭つてゐた。

宇治はその時思つてゐた。病人の發してゐる譫言が少しでも正氣が交つてゐるとすればするほど、お悦が平常心の底にいくらか思つてゐることと、彼女の父親や弟妹どもが皆なで思つてゐることとに一點共通した疑惑が潛んでゐるのであつた。それは、宇治が凡ての點でお悦のやうな女を妻にして滿足してゐる道理がないといふことであつた。それは、お悦や彼女の一族の者がさう思ふのが本當であつた。まだお悦に子供の生れない前、彼女が宇治の處に何といふ名目もつかずに同棲してゐた時分、弟の慶吉は妹のお花夫婦と三人で姉のお悦に向つて隨分手嚴しい苦言を呈したのであつた。その時お悦は、

「あの人は今まではどうであつたか知らないが、もう今はそんな氣はないんだ。自分でもさういつてゐる……。」

といつて、宇治を信じてゐるやうなことをいつた。すると慶吉は言下に姉を冷笑していつた。

「馬鹿！ お前は何といふ馬鹿だ。甘いにも程がある。今に放り出されるのを知らないで。騙されてゐることが解らないんだ。」

それにも拘はらず宇治のその後ずつと實行して來たことは、お悦の信じてゐたとほりであつた。しかし、お悦にしても、それがあまりに自分の意外であつたりするところから却つて疑心暗鬼の眼を以て宇治の腹を邪推するやうなことが多かつた。そしてそんな邪推が彼女の不謹愼な言行となつて表はれることが屢々あるので、その爲に宇治の心を驅つて、動もすれば却つてお悦の妄想してゐるやうな方面に向はしめようとする傾きがないでもなかつたが、宇治の方ではそんな關係を鳥瞰的に觀察してゐるのと、彼の長い間の經驗から體得した節制力との爲に、彼は決して自暴自棄には陷らなかつた。宇治は、自分の行爲に一點の非難を容れられざることを確信してゐるのであつた。

それゆゑに病人の譫言から、何か平常お悦が親や兄弟にも打明かすことを憚つてゐるやうな祕密を胸に抱いてゐて、それで苦しんでゐるのではないかといふやうな事實の端緒を得ようとしてでも居るらしいお茂などの淺薄な所作が宇治には腹が立つといふよりも、そんなことがお悦等一族の者相當の知識程度であるといふことを考へて、宇治は、どこまでも嫌惡を感じた。そこで、どうしたら自分の子供を彼等との關係から、さつぱり絶つことが出來るかと思ふと、それは血續上どうあつても出來ないことであるのが、宇治をして厭世的にならしめるのであつた。

父親は、昨夜も取り出して讀み返してゐたお悦の手紙のこと、今夢中に病人が口走つてゐることなどを前後考へ合してみると、たしかに宇治がお悦を非道く虐待してゐるに相違ないと思つた。彼は宇治に對する憤怒とお悦に對する憐憫とで興奮のあまり鬼のやうな恐い顏をぶるぶる慄はしながら、

「これでもし死にでもしたら……。」

といつて、又手巾に涙を拭ひながら、どんなことをしても娘の仇を取るぞといつたやうに、悔しさうに脣を嚙みしめてゐた。

對手が皆な揃つた野蠻人であるだけに、宇治は實際、これでこのまゝお悦が死んだら、面倒なことになると思つてゐた。飛んでもない者に繫り合つたものだと後悔した。

そのうち病人は何かいふのを止めて、又少し睡りさうになつたので、

一あゝ、もうそんなにいろんなことを訊かうとしないで、そうつと眠らさないといけない。」

宇治は、倚枕頭に、覗いて何か話しかけようとするお茂をたしなめた。そして心の中で、全く仕方のない無智な連中だと思つてゐた。

父親は昨日の朝電報を見ると早速飛んで出て來たので、一應お悦の容態を見屆けたらへで、今日はこれから一旦歸國して二三日して又出直すことにしてゐた。そして何處までも不滿に堪へないやうな顏をして凝乎と默り込んでゐた。

宇治は一昨日の晩遲く旅行先から歸つてみるとその騷ぎで、まだゆつくり前後のことを考へてみる間もなかつた。五日不在の豫定で出ていつた自分の留守中月末の諸拂ひや當座の小遣は間に合ふだけお悦に渡して置いていつたのであるが、留守を賴んでゐた女中に訊くと、三十一日の拂ひは、お悦が寢床に居て、まだ自分で金を出し入れしたといふのであるが、それから後のことは一切分らなかつた。少許の證劵や保險證書のやうなものを一包みにしてお悦に藏はしておいたのであるが、そんな物を何處に置いてゐるやら分らなかつた。

宇治は、一昨日からずつと打通しに病人のことゝそれに伴つて子供の始末についてばかり、一方向きに心を奪はれてゐたのであつたが、これから先き病人が何らになるにしても金の準備をして置かなければならぬと思つた。宇治はもう昨日から、時々それを思ひ出してそんな大事な物の藏つてある處を探してゐたのであつたが、押入れの夜具の中にその包みを見出した。

「あゝ、此處にあつた、こゝにあつた。」といつて、宇治はそれを取出しながら、

一別に銀行に金を預けて居る譯でもないし、これでも賣つて金を拵へよう。」といひながら、包の中から數枚の債劵を抽き取つてそこに居た父親に見せた。

父親はそれを見ると、やゝ顏色を和げてゐた。

宇治は心の中で思つてゐた。お悦が父親に宛てた手紙の中には、宇治が碌に小遣さへ與へないで、たつた五圓なにがしの藥代をさへ吝むといふやうな不埒な讒誣をしてゐる文句を、昨夜遲くあの手紙の中でちらりと見たのであるが、宇治の一家の生活にはどんな節約をしても、一ケ月に三百圓から四百圓の金は消えた。それはたつた三人の小家族にしては決して少い經費とはいへなかつた。彼は、お悦が、何の據があつて、そんなことをいひうるかと思つた。そして、夏の中よく、「私には罰なんか當らないんだから、まだ一度も病氣になぞ罹つたことはないんだから。……手前こそ何だ、あのざまは。」げい〳〵嘔吐をついて。」と、お悦が自分に向つて毒づいたことを、ふと思ひ起した。宇治は實際、今度のお悦こそ俺の罰が當つたんだと思つてゐた。

お茂はそこで自分の子供の泣くのを賺しながら、乳を飮ましてゐたが、

一お父さん今度出て來る時、一遍お芳を連れて來て見せてやるといゝねえ。……見じまひだよ。お芳が可哀さうだよ。」と鼻聲を出した。

お芳といふのはお悦が田舍の方に居る時産んで祖父母の手許で育てゝゐる子であつた。

宇治は傍でそれを聽いてゐて、無理からぬことであるとは思つたが、今病人は生死の瀨戸際に立つてゐるのである。少しでもその神經を刺戟させたくない。それが爲に宇治は自分の子供でさへ實に斷腸の思ひをしながら、人手に任せて餘所へ預けてゐる次第なのである。病人はそんなに夢中で、他の事は何をいつても分らないにも拘はらず、一昨日の夜もあちらの室で

子供がひどく泣いてゐると、その聲ばかりは不思議に耳に入ると思はれて、いつも添乳をする時のやうに、自分の寢床の脇をそうつとたゝく眞似をしてゐた。宇治は男涙をぢつと嚙みしめて、そんな感傷的な氣持を抑制してゐるのであつた。

「子供を連れて來たりすることは何うかなあ？」

とお茂のいふことに反對の意向を表はした。

すると慶吉はすぐ宇治に反對した。

「神經を刺戟するのが惡いといつたつて、もう神經も何も無いぢやないか。あのとほり夢中で居る者の處に連れて來たつて構やしない。」

彼は、いかにも尤もらしいことをいふやうに、そんな屁理窟をいつた。

宇治は、こんな連中を對手にしたつて、とても仕方がないと思つて、そのまゝ默つてしまつた。

「一生の別れだ。口は利けなくつても、たゞ一と目見せるだけでいゝんだもの。」お茂は又いつた。

宇治はもう何にもいはなかつたが、心の中では、何を犠牲にしても、今に瀕死の病人の生命を取留めることが第一であるにも拘はらず、思ひ分けのない俗情に構けたことをいつてゐて、それで萬一の事でもあつたら、やつぱり、自分の所爲にして、沒分曉なことをいふにちがひないと思つた。

「子供を傍に置いくと病人に障ると思ふから、病院に預けたのだ。」

宇治は不滿な顏をしていつた。そして、自分がこれほどに感傷的な氣持を腹の中で殺してゐるのに無分別なことをいふと思つてゐた。

するとお茂は又いつた。

「乙女ちやんは宇治さんが付いてゐるから仕合せだよ。お芳は親はあつても無いも同じなんだから可哀さうだよ。」

宇治はもうその相手にはならなかつたが、昨夜からのことを思ふと、どうしても腹が癒えなかつた。父親だ初め弟妹が、お悦が平生宇治に對してどんな仕向けをしてゐるかといふことを、少しも知らないで一途に宇治の人格を無視してゐるのは、何度思つても、彼等の無智蒙昧なる理解力に相當した考へであつたにしても、やつぱり彼にしては、さうまで自分の方だけで料簡を廣くして思ひ分けては居られなかつた。

そこへお茂の子供がわあッと泣き出した。

「あゝ喧しい。……自分の處の子供でさへ病人に障ると思つて此處に置かないやうにしてゐるんだ。」

宇治は大きな聲を出した。そして、自分の家宅が、何だか彼等の爲に踏み荒らされてゐるやうな氣がしてゐた。

暫く默り込んでゐた父親は、その時どう思つたか、憤激した調子で、

「さあ、皆なもう歸らう。」と、蹴立てるやうにいつた。

「あゝ歸らう。」慶吉もお茂も聲を揃へて父親に和していつた。

「それでは困る。」

と、宇治は云つた。彼の本心をいへば、此の連中に居つてもらひたくはないのであつたが、彼等が皆な居なくなつて、もしお悦に萬一の事があつたら、とても始末にならぬことを言ひ掛けるであらうと思つたのであつた。

宇治にやがて又、わざと笑ひを含んだ顏をして、父親の方に向つて、

「どうです、大抵私のいふことは解つたですか。」と言葉を掛けてみた。

「うむ。本人があのとほり口を利かないんだから。」と顎で病人の方をしやくるやうにいつた。

「癒つたら、よく分るですよ。」宇治は又笑ひな

がらいつた。

「今日はまあ一と先づ歸るから。二三日の間に又必ず出て來る。昨夜の話は少し後にしよう。その時は私もあんたに向つて、いひたいだけのことはいふから。」

父親は又殺氣立つた顏をしてさういつた。宇治もそれに對して決して負けてはゐなかつた。

「え丶、」と、宇治は確信の面持をして、つよく首肯いて見せた。「その時は私の方でもいひたいことがうんとある。」

宇治がさういふと、父親はそのまゝ默つてしまつた。宇治は實際いひたいことが山ほど胸に溜へてゐるのであつた。

しかし宇治は、そこばかりに落着いては居られなかつた。昨日連れていつた牛込の病院の子供の樣子も見に行かなければならなかつたし、急にどんなことがあつても、まごつかないだけの金の準備も調へて置かなければならなかつた。少時茶の室の方の用を足しては、又父親等の傍に戻つて來て、決心したやうな顏に微笑を浮べながら、「それでは取つときの債券を三百圓ほど賣つて來るかな。これは私が病氣にでもなるとか、死んだ後でないと手を付けぬ事にしてあつたのだが……」と獨り言のやうにいつた。そしてさういひながら彼はやつぱり落着いて居られぬやうに又すぐ起つて今度は病人の枕頭について、覗いて見ながら、「私の方が先へ死ぬと思つてゐたのに……」といつたが、夢中ですや〳〵としてゐる病人の顏を見ると、さすがに咽喉が塞がつたやうであとの口が利けなかつた。

宇治には、いろ〳〵なことが思ひ浮んで來た、つい此の間頃のことであつた。子供もう生れて十月くらゐになつたので、母乳ばかりでなく少しづつ牛乳を呑ましたり、輕い菓子のやうなものをやつてもいゝのだが、それにはまだ八月で氣候が好くないから、今に涼風が立つやうになつてからにしようといつたりしてゐたのであつた。それが十日も經たぬに、最も健康體であると誰も思つてゐたお俊がこんなことにならうとは夢にも思はなかつた。十月の中旬は滿一年の誕生であるから、その時には、生れた時餘處から祝つてもらつて、まだ仕立てずに藏つてある錦紗の着物をこしらへてやらうなどと母親と二人で話し合つて居たことも、宇治にしては、もう此の先き誰を對手に、子供の爲にそんなことを話し合ふことも、出來ないのであると思ふと、今死なうとしてゐる者に對する憐憫と、母親の死ぬことも知らずに居る幼兒に對する不憫と、そんな哀れみを獨りで味はなければならぬ彼自身の悲しい不幸の感情とが一つに融け合つて、たゞ悲しいと果敢ない氣持が、ひた〳〵と胸に染んで來た。人の生命くらゐ當てのないものはないといふやうな朝露の感がした。

父親はやつぱり元の座に坐りながら、

「病氣になつてから、貴方のしてゐることに異存はない。」といつて、何處までもお俊の發病が宇治の所爲であるのを恨むやうにいつた。

これを聽くと宇治は又、今眞純な感情で病人を悲んでゐた氣持が忽ち消散するやうな反感が起つて來るのを覺えた。病人のお俊が不生さうであつたばかりでなく、彼等の一族は凡て自分達の偏見や邪推によつて、本當ならば感謝しなければならない宇治の尊い感情を傷けてゐるのであつた。

しかし宇治は今はもう何にもいふまいと堅く決心をしてゐた。

そのうち朝からもう落ちて來さうな空模樣であつたのが、ぱら〳〵降つて來た。

「あゝ雨が降つて來た。お父さん急がないと。」

お茂は自分でも歸りを急いだ。

「うむ。」といつて、父親も歸り支度をしなが

ら、

「生命のないものなら、それは仕方もないが：：からなるまでの事が殘念だ。」

といつて、もしこれで死んだならば、たゞ事では濟ます譯にはゆかないといふやうな氣勢を見せて宇治の方を、じろり／＼白眼で睨みつけて、

「今日はまあ一と先づ歸るから。二三日の内に父必ず出て來る。」

「えゝ、どうぞ早く。」

宇治はそれに返辭をしてゐたが、彼にとってはお悦の生死が自分の運命を試す一つの大きな賭博のやうなものであつた。

弟の慶吉を一人だけ手傳ひに居殘らしておいて、父親はお茂と連れだつて立ち出でた。宇治はそれを玄關まで送り出したが、父親もお茂も宇治に向つて左樣なら宜しく賴むともいはずに、膨れつ面をして歸つていつた。

その連中が引揚げて去つてしまふと、家の中がやつと靜かになつた。

病人も今のところ一寸落着いてゐるので、宇治はその間に用を達しかた／＼、昨日あれからどうしてゐるか、子供の樣子を少しも早く行つて見たかつた。

附添ひの女はいろんなことを氣にすると思はれて、「こんな着物を着てゐるのは内のお孃さんだけだ。」といつて、昨日病院へ往く時一緒に送つていつた、も一人の女中が歸つて來てから、女同志で話したらしい、そんなことをいつて聞かしたので、宇治は子供に着せる物などを押入の中から取り出した。そんなことは母親がして居たことなので、何處に藏つてあるのか分らなかつた。宇治はそこら中の入れ場を探しながら、押入の中に顏を突込んでゐると、ひとりでに熱い男涙がぼた／＼と頰に傳うて來た。お悦がいよ／＼死ぬやうなことになると、生れてやう／＼十ケ月しか經たぬ子供を男親獨りの手に抱へて、これから先き、このとほり子供の着物のことまで氣を付けてやらねばならぬのだ。死んで往く者の哀れはいふまでもないが、後に殘された子供は長い生ひ先きにどんなに寂しい思ひをしたり、不幸を喞つことであらう。宇治は他の者に見せぬやうに、いつまでも押入の中を探してゐる風をして、少時黯然としてそこに佇んでゐた。そして昨夜慶吉の爲に眼が眩むほど非道く頭を打たれた時指先が左の眼瞼に觸つた處がいくらか眼球の膜をとがめたと思はれて、涙とともに眼に霞がかゝつたやうで、取り出す着物の夕色をはつきり見分けかねた。

昨日は、急いだので、家で着てゐたまゝを連れていつたのだが、平生着飾つて外に連れ出すことなど殆どないので、別に餘所ゆきの着物もなかつた。お悦は縫ひ針の仕事など達者な方であつたが、いつも子供に手が掛かるので、落着いて仕事などに坐つてゐる間もなかつた。宇治はやつと子供の物の入つてゐる處を探しあてた。その中にはネルの單衣だの、つい此の間仕立てたまゝのモスの單衣などがあつた。それは丁度今の季節にふさはしい紅と水色とのぼかしに秋の七草を染め出してゐた。

今日は雨が降つてきたほどあつて、まだ九月の差入りであるが急に秋涼を感じた。宇治はそのほかに、そこにあつた、ちやん／＼なども一緒に風呂敷に包んだ。それを女中に持たして、自分もすつかり雨具に身を堅めて出掛けていつた。

昨夜からの苦々しい家内の醜狀が嘔吐を催すやうに胸に痞へて、彼は自分の家でありながら、まるで地獄のやうな感じのする其處から一刻も早く遁げ出したかつた。まるで不意打ちを喰つたやうな一昨日からの騷ぎに、二た晩といふもの殆ど熟睡しないで心配をし通しにして

ゐるので、身體は綿のやうに疲勞してゐたが、彼は出來るだけ氣を張つてゐた。本來お悅などと比較にならぬほど虛弱な自分が又今此處で倒れるやうなことがあつたら、それこそ暗だと思つた。そしてまだ何の性根もない子供の立場を思ひやつて考へて來ると、その母親は醫者から見放されて、たゞ死を待つばかりであるところへ、その父親を、一時眼の暗くなるほど毆打つたりする[illegible]を、子供に性根があつたならば、果して何と思ふであらう……しかし宇治は今の場合凡てを穩便にしてゐるより他はないと思つて、凝乎と胸を靜めるやうにしてゐた。

昨夜は子供は病院でどうして一夜を明かしたであらうと、それが氣に懸りながら、いつてみると、診察室に顏を覗けた宇治を見て、院長は快活に、

「やあ、大變好いですよ。よく牛乳を飲みますよ。」と、聲を掛けた。宇治には、それがさながら天國からの響のやうに思はれた。

「あゝさうですか。難有うございます。」と、彼は心からの感謝の辭を洩しながら、それからすぐ緣側づたひに、ずつと奧まつた處にある病室の方に通つてゐた。隨分古くなつた普通の住宅をそのまゝ病室に用ゐてある座敷は、しとしとと降り出した秋雨にいとゞ薄暗くて陰氣であつた。子供は大きな寢臺の上に小さい身體を載せて、すや〱と眠つてゐる處で、その傍には附添ひの女がぽつんと坐つてゐた。宇治はそこへ入つていきながら、

「どうだね。」

と、聲を掛けると、彼女は笑顏で迎へながら、

「いらつしやいまし。今よくお寢みになつていらつしやいます。」

「あゝさうか。そして牛乳はどのくらゐ飲む？」

「牛乳は昨日あれから又夜までに二合召上りました。今日はまだ一度ですけれど、もう又直きお晝の分が來る時分です。先生も看護婦さんも、これから段々多くしてゆくと申されて居ります。今日はおほかた四合か五合くらゐになりますでせう。甘さうによく召上りますから。」

宇治は安心したやうに、

「さうか、可し〱。家に居ては、あのとほり困つたが流石にお醫者さんだなあ。」

「えゝ、私も、こちらに來てはよく召上るのに感心して居ります。」

母乳を離れてからこの間中三晩か四晩どうしても他の物を口に入れないので手古摺つてゐたのであつた。

「寢るのはどうだ、よく寢ないだらう。」

「えゝ、夜はやつぱり時々眼を覺まして泣かれます。」

「そいつは困るなあ。」

そんなことをいひながら、宇治はインコートを脫いで、さも疲勞し切つたやうに、子供の足の方に寢臺の上にどつかと腰をおろした。

そして、ネルの着物を着て、小さい手や脚を投げ出して無心に寢入つてゐる子供の顏をヂッと見入つてゐると、宇治の心は獨りでに子供を愛する氣持によつて、だん〱和らいで來るのを覺えた。それとともに今まで緊張し切つてゐた心に弛みが出て來て、彼はそのまゝ子供の裾の方にぐつたり横はつた。そして心地よいクッションに體を載せてゐると、もう起き上るのが大儀になつて、何時までもいつまでもさうして居たいやうであつた。天地の間に唯子供ばかりが自分の最も親しい道づれであるといふやうな氣がして來た。彼はさうしてゐると何だか引込まれるやうに眠氣を覺えて來て、いつしか前後も知らずにそこに昏睡してゐた。

それから三十分ばかりして、ふつと眼を覺ましたが、家には今死にかゝつてゐる病人の居ることが催促するやうに又胸を突いて來た。
「あゝ疲れた。」と太息を吐くやうにいつて、彼はそこから跳ね起きた。
「ぢや、一寸これから用を達して、又來るからね。」といつて、宇治はそれから秋雨の降る街中に出ていつた。

やがて彼は雨の中を自動車で郊外の家に急いで戻つて來た。

きつと、歸つてみると病人は死んでゐるであらうと思つた。生か死か。それを知るのが恐いやうな氣持で門の外で自動車を飛び降り、玄關に入ると、そこへ出迎へた者に、いきなり、
「どうだ、死んだか？」
と訊ねた。すると、
「いえ、今落着いていらつしやいます。」
といつたので、案外な氣持がしながら、彼はいくらかほつとして、
「あゝ、さうか。落着いてゐるか。」
といひながら、急いで靴を脱いで玄關から病室の方に入つて來た。と、座敷の中は靜閑として、枕頭には看護婦と女中が付いてゐた。慶吉は端の方で轉寢をしてゐた。

なるほど病人は、先刻宇治の出て行く時よりは、もつと落着いて、すや／＼眠つてゐた。
「おゝ、落着いてゐる／＼。あれからずつと此の通りか。」
「えゝ、ずつとお眠りになつてゐます。」
「さうか、それはいゝ。」
宇治は少し安心した。
「お氣はなか／＼確かでいらつしやいます。先ほど、一寸お眼をお覺ましになつて、私に、どうも濟みませんねえ。あちらにいつて少し休んで下さいと仰有いました。」
傍に居た、村松醫師の處から今朝手傳ひに來てくれた女中はさういつて話した。
「あゝ、さうか。そんなことを、あんたに向つていつたか。……うむ、それは確かだ。」
「なか／＼お確かでいらつしやいます。それから、こちらの手に蚊が一匹留まつてゐたのを、からお手をお上げになつて、そちらの手でお打ちになりました。」
「うむ、そんなことをしましたか。そんなことをするやうでは、なか／＼確りしてゐる。今朝まではそんな様子はまだなかつたのだ。」

宇治は、今朝村松醫師がいつたことが、どうやら好い方に外れさうな氣がして來た。
「あゝこの調子なら大丈夫だ。」
宇治はやつといくらか自分の身體になつて來たやうな氣がして、それから二階に上がつて一昨日旅先から歸つたまゝにしてゐた鞄などを片付けて一休みすることが出來た。

その夜も別に變つたことがなくて夜が明けた。

翌朝になつても氣は一層確かであつた。
宇治はその騒ぎにまぎれて、訊いてもみなかつたが、二三日前から臺所の板の上に大きな西瓜がひとつ轉がつてゐるのを知つてゐた。それを今朝になつて漸く、
「これは誰が持つて來たのだらう？」
と訊くと、
「お掃除屋さんとかが持つて來て、これを上げますといつて置いていつたのだとかいつてゐました。」
そこに居つた者がさういつた。
「あゝさうか、分つた／＼。」
といつて、宇治はうなづいた。それは三四里も離れた武藏野の方から便所の掃除に來る百姓があつた。いつも來る時には自分の處で作つ

た野菜を積んで新宿の方の市場へ持つていつた歸りに寄つていつた。お悦はその百姓から新しい青物を買つたりしてゐた。そして緣先で辨當を使つたりする時に土瓶に茶を汲んで出したりして、その百姓を勞つてゐた。

宇治はその大きな西瓜に付いた泥を洗はして、それを両手に抱いてお悦の枕許に持つていつて、

「おい、これが分るか。」と訊いてみた。

すると病人は大分輕い顏をして、

「西瓜でせう。」と、細い聲を出した。

「うむ西瓜だ。これはねえ、便所を汲みに來るお百姓があるだらう。あのお百姓が此の間くれていつたのだ。どうだ大きい、好い西瓜だらう。」

「えゝ、好い西瓜ですねえ。」

お悦も宇治も西瓜は大好物で、夏の中は氷は飮まなくつても毎日のやうに西瓜をたべてゐた。

「どうだ、これを少し食べてみる氣はないか。」

「食べてみませう。」病人は微かにいつた。

それから宇治は又臺所にそれを持つていつて、自分で庖丁をあてた。眞青な皮を割くと、中實は眞紅に甘熟してゐて、何ともいへない西瓜特有の香ばしい匂ひが鼻に通つて來た。それを洋皿に二片ばかり載せて食臺を添へて病人の傍に持つていつて、匙を以つて口に入れた。病人はそれをさも〳〵甘さうにして三角形の西瓜を二片とも綺麗に食べてしまつた。宇治はそれで、もう病人が癒つたやうにひどく勇んで來た。

「おい〳〵西瓜を食べたよ。」と家の中にふれた。

その時病はやつと峠を越したのであつた。

その翌日、大學の博士達の來診を仰いだ結果病人は大學病院に入院させることになつた。

宇治はそれから毎日二ケ處の病院を見舞つてゐたが、どういふものか母親の病院の方には足が快く進まなかつたにも拘はらず、子供の病院へは、丁度戀する者が戀人の處に通つて行くやうな樂しさと慰めとを感じて、そつちの方へは毎時足が輕かつた。片方の苦々しい惡感は、さうして子供の顏を見てゐる間だけは忘れてゐることが出來た。病が癒えてくれなければ困るといふことは分つてゐるにも拘はらず、惱んでいゝか憐れんでいゝか分らぬお悦の病室を見舞ふのは、宇治には重い義務のやうな氣がするのであつた。宇治はお悦の病室を逃れ出ると、すつかり別な氣持になつて子供の處へ急ぐのであつた。そして牛乳臭いにほひのする、汚れた頰ぺたに自分の頰をぺつたり押し當てて、その柔かな皮膚を感じてゐると、宇治は凡ての勞苦をすつかり忘れてしまつて、子供の慈愛に輕く浮き上がるやうな心地がして小さい體をまた犇と抱きしめた。宇治は咽喉の塞がるやうに淚が込み上げて來るのを覺えた。

年譜

明治九年
五月四日、岡山縣和氣郡藤野村大字藤野字田ケ原に生る。家代々農を業とせり。

明治十二年
記憶の最初は紐落し(東京にて七五三の祝ひ)のことなり。祖母に連れられて氏神に詣りしことを記憶す。

明治十五年
滿身に腫物生じて長く惱みしことを記憶す。

明治十六年
春、閭里の小學校に入學す。別に、同郡內、舊藩主池田家累世の墓域を修せる和意谷の山中に住居せる老夫子の、時々山を出でて巡回し、漢學を教授するに就きて『大學』『中庸』『論語』等の素讀を學ぶ。

明治十七年
未だ好學の念萠すに至らず。漸く十歲か十一歲の頃、讀本の教科書なりし『日本略史』の南北朝戰記に於て、初めて讀書の興味を啓發せられたることを記憶す。

明治二十年
この年、小學校の學制改まるに會し、尋常科四年級に編入せらる。この頃より英語を學ぶ。尙ほ好學の念なし。一夜父に叱られて、平掌にて、したたか頭を叩かれたることを記憶す。

明治二十一年
高等科一年級に進み、學課の種類一躍して複雜となりしに伴ひ、はじめて好學の念萠せり。就中地理歷史に最も多く興味を有せり。別に小學校の先生に就き、夜間村內の竹馬の友三四とともに『日本外史』を學ぶ。
十月一日、父の意向に從ひて、僧たらんと志し、四五里隔りたる隣郡の天台宗の山寺の住職たる母方の從兄に伴はれて、その許に赴く。居ること二ケ月許り。其間簡易なる讀經と『日本外史』と習字とを學びたりしも、他に嫁せる姉の反對によりて父の意動くに及び、寺より呼び返さる。
二ケ月小學校を退ける間に一年三回の普通試驗行はれて、予は級の席末に椅子を移されたり。爾來殆ど晝夜兼學し、次の普通試驗に一躍首席を占む。爾後十七歲の三月、高等小學全科を卒業するまで、殆ど一貫して常に首席たり。その間に『日本外史』、『十八史略』、數學、英語を學科以外に修學して、中學校入學試驗の準備をなす。

明治二十五年
岡山縣立中學校の入學試驗を受け、六十人中の第五位にて通過す。父兄大に喜ぶ。然れども、當時のその中學校の一年級の學課は、今日の殆ど中學校の四年級にも比すべく、英原書を用ゐし幾何學、代數、外國歷史等いづれも予の學力には餘りに重き負擔なりしため、最初の普通試驗にて予は五番の席順を滑りて三十何番に落ちたり。
これより後中學校の學課にあまり興味を持たず、多くは德富蘇峰氏の『國民の友』などの雜誌を耽讀す。馬琴の『八犬傳』はその暑中休暇中に讀みたり。

明治二十六年
十二月、中學校を退學す。

明治二十七年
一月、父の許諾を得て市立商業學校入學の

目的を以て大阪に出で受驗準備をなす。傍ら末廣鐵腸の「雪中梅」「明治四十年の日本」等の政治小說を耽讀して大に感激す。

三月、受驗。學課は最も優良の成績なりしも體質虛弱の故を以て入學を許されず。即ち悲觀して、直ちに行李を整へて歸鄕す。

これより父は、予の遠遊を許さず、且つ學問を勸めず。

この夏は岡山市に移り住める父の傍に在りて過し、矢野龍溪の「經國美談」を耽讀す。而かも年少青雲の志は容易に消すべくもあらず。即ち、九月五日、長文の書置一通を父に遺して、決然東都に上り、書を寄せて父の許諾を得て三田の慶應義塾に入る。恰も日清の戰雲正に闌なるの際なり。福澤先生尙ほ生存の頃にて屢々その演說を聽きたり。義塾に居ること僅に二ケ月許。十一月二十四日の夜國許よりの急電に接し、倉皇行李を修めて歸國すれば、父既に亡し矣。

これより、上京の念を抑制して父の遺せる實業の手助けをして岡山市に住むこと一年許。その間少時病床に在りて初めて村井弦齋、尾崎紅葉、泉鏡花等の軟文學を手にせり。鏡花の「なにがし」に興味を感じたることを記憶す。

明治二十九年

一月五日、次兄國治肺炎にて歿す。予も亦た病弱の故に岡山市より鄕里に歸り住む。

この頃よりやうやく軟文學に對して目覺め、「國民の友」を愛讀すること依然たる以外「文學界」「帝國文學」「讀賣新聞」等を閱讀す。かくせる內に「文藝俱樂部」によりて樋口一葉の「にごり江」を讀み、愛讀措く能はず。次いで「わかれ道」「たけくらべ」「十三夜」を讀むに及び、女史に就きて小說家たらんと欲するの念旺となり、九月再度の上京をなせしも、女史の長逝に會ひ大いに失望す。秋、駿河臺鈴木町の下宿屋に居りて神田の國民英學會に英語を、麹町の二松學舍に漢學を學ぶ。

明治三十年

一月の頃移りて麹町五番町に下宿す。五月の頃又病弱の故を以て歸鄕す、鄕里に一夏を過して十月三度上京。

胃腸を害すること既に年あり。且つ何れと堅歷指摘すべからざる人生の理想に惱惑して精神の疲勞を感ずること大なり。ともかくも身體を健康にせざるべからざるを思ひ、內幸町の長與胃腸病院に入院し、居ること六十九日、十二月末退院して東京在學の希望を斷ち、鄕里に歸る。

明治三十一年

鄕里に在つてもまた心に安定を得る能はず、九月初旬四度上京を決し、早稻田大學の前身、東京專門學校文學部歷史科に入學す。その時正宗白鳥と相知る。後一年を經て英語政治科に轉じ、間もなく又英文科に移る。

その在學中初めて高山樗牛を見たり。樗牛は英文科三年級に美學を講じ、二年級に英詩を講じゐたり。

早稻田三年の在學中坪內逍遙博士によりて文學及び演藝に關して啓發せられたること多大なるは云ふまでもなし。又田中王堂氏は、一年より三年まで三年間心理學、倫理學、哲學等を教授し、且つ予は卒業後も氏の私宅に訪問すること屢々にして、氏の談片によりて大に啓發せられたり。

明治三十四年

卒業後、九月十六日より坪內逍遙博士の紹介によりて博文館編輯部に入り、中學世界編輯助手となる。居ること僅に六ケ月にして去る。

[illegible]當時はじめて、田山花袋氏を知る。爾來文學に於ては、氏に聽いて啓發する所亦た多大なり。

是より先き早稻田三年級の時島村抱月氏を知りて、氏の紹介の下に、はじめて「讀賣新聞」の月曜附錄に小說月評の筆を執りたり。

明治三十九年

一月、島村抱月氏「早稻田文學」を再刊するにあたり、予其の下に編輯を司る。居ること一年にして辭す。この頃より正宗白鳥氏の主宰せる「讀賣新聞」の日曜附錄に「文藝評論」「文壇無駄話」を執筆し、相應に讀者の反響ありたり。

明治四十一年

トルストイ原著『生ひ立の記』を英譯によりて翻譯す。會心の文章なり。

明治四十三年

四月、「早稻田文學」に『別れた妻に送る手紙』を掲載す。文壇的には殆んど處女作なり。

大正二年

九月、「新小說」に『疑惑』を發表す。『別れた妻』の續篇ともみるべし。

大正四年

一月、『舞鶴心中』を「中央公論」に發表す。

大正十一年

一月、『黑髮』を「改造」に、その續篇『狂亂』を同誌四月號に、五月、更にその續篇『霜凍る宵』を「新小說」に發表す。

大正十二年

一月より四月まで「國民新聞」夕刊に『二人の獨り者』を連載す。

十月十六日、初めて女兒生る。百合子と名づく。四十八歳の初兒なり。從來長く自己の戀愛經驗を材料とせし作風是に到つて漸く一變するの機に會したり。

大正十三年

十二月號「中央公論」に發表せし『子の愛の爲に』は即ち、遂に戀愛に倦み、戀愛に敗れて、結局今後の殘生を子の愛によつて生きんとせる道程の事情を具さに語るものなり。

大正十四年

五月、「中央公論」に『子の愛の爲に』の後篇とも見るべき『第二の出產』を發表す。

五月二十四日夜、文壇の知人數氏相謀りて、予が爲に生誕五十年祝賀會を帝國ホテルに催さる。來會者七十有餘人。慚愧の至りに堪へず。

七八月、一家を携へて暑を駿河灣興津に避け、感想小說『銀河を仰いで』を草し、「中央公論」に寄す。

大正十五年

二月末より家族を携へて熱海に避寒す。遂に毎年の例となる。

三月、「中央公論」に『燐を嚥んで死んだ人』を寄す。

五月、熱海に在りて處女戲曲『伊豆の頼朝』（一幕物）を草し「中央公論」六月號に寄す。

八月中旬、東中野上の原に小屋新築の工を起し、十二月末移り住む。

この間ただ『舊痕』を「中央公論」十月號に、『無明』を翌年新年號の同誌に寄せしのみ。

昭和二年

夏、長女百合子疫痢を病みて、痛心す。即ち、『兒病む』の實錄を草して「中央公論」九月號に寄す。

「婦女界」九月號より十二月號にわたり、史劇『北條泰時』を寄稿す。

久米正雄集

是までのものはみんな小手調べで、本当の仕事は是からじ。かし何年思つても、私は仕事をし—のみならず人生を続けて来てもか。

さうし—を又是から先何年……

久米正雄

破船（前篇）

第一章

一

鎌倉の海は穏に凪いでゐた。

十二月初めの午後の日が、もう少し赤みを帯びて、西へ傾き加減に煙つてゐるために、右手に突き出た稲村ケ崎一帯は、煙色の陰影になつて、江の島が半ば顔を出しながら、遠く輪郭を蝕せて浮んでゐる海面を、對照的に光らしてゐるだけだつたが、反對の小坪の鼻からかけて、葉山の長者ケ崎を遠望する一方は、明るい橙紅色を含んだ日影を受けて、鮮に、併し強烈ではなく、初期の印象派の畫のやうに照らし出されてゐた。冬の穏な日によくある、中空から上はくつきり晴れ上つて、青空がコバルトを濃く輝かしてゐるが、水平線に近づくに從つて暈され、やがて其下は靄とも霞ともつかぬ褪紅色のヴェールに、粉つぽくうつすらと包まれて了ふ。小春日の靜けさが、澱んだやうな空象だつたので、大島は影も見えなかつたが、併し天際は遙に霽れ渡つた感じを、決して濁してはゐなかつた。

「夜だと、彼處ら邊に三崎の燈臺が、一分間おき位に明滅するんだがね。此頃の荒涼たる夜の海邊で、そいつがちらりと點いて消えるのを眺めると、鳥渡艶な氣がするよ。小野なら、さぞ喜ぶ所だらうがね。」

砂丘の上に腰を下した柳井は、眉深に被つたソフト帽の下から、澄んで寧ろ尖つてゐるやうな、俊秀な瞳で傍の小野を尻目にかけ、細面の顔を揶揄ふやうに突き出して、微笑しながら云つた。

「ふん、馬鹿を云ふな。君だつてひどく老人がつて、南畫趣味や禪味を看板にはしてゐるが、十分感傷的な癖に。人に押しつけるのは非道いよ。」

小野は腰を下ろして後方にそり返つたのを、兩手で突合棒のやうに支へながら、柳井が眼で指した三浦半島の、岬のあたりを遙に望んだ儘、柳井の方を向かずに答へた。が、彼の少し赤みを帯びてゐた顔は、その抗議のために更に赧らんだ。

「それやあ仕方がないさ。兎角、東京に遠く残して來た人があるとね。」

柳井は澄まして、薄く鮮な唇の傍に、強ひて先廻りをして厭味をいふのだぞといふ、微笑の皺を刻んだ。

と、其時まで二人と並んで、日に背いたせゐか暗い顔をして、膝を抱くやうに蹲つてゐた杉浦が、突然その顔を上げた。彼の淺黒い滋味を帯びた圓顔は、併し微笑を帯びると寧ろ可愛らしかつた。彼は傍から突然冷かすやうに口を入れた。

「ふゝん。ぢやあ又、燈臺より遠き人ありと思つたかい。」

それは柳井が、餘技的に作る俳句に、「花火より遠き人ありと思ひけり」と云ふのがあつて、それを頻りに柳井が自慢して、自ら仄にして、艶麗な名句だと稱し、友人間に膾炙させてゐたのを、振つて冷かしたのだつた。

「さうだね。遠花火のやうな女もいゝが、遠く間を置いて、海に瞬く燈臺のやうな人も悪くはないからな。」

さう云ふ應酬では、柳井は決して敗けなかつた。實際彼には、其年の川開きの晩に、人に連れられて行つたある水邊に近い座敷で、相會うた美しい化粧の女があつた。而して此處から東京へ出かけた折には、明るい灯火の下で會つたり、別れては手紙のやり取りをする位迄其間は進んでゐた。其上に彼には、清淨な許婚の人があつた。その遠い燈臺に比された人は、小野も柳井の家で、いつか正月の加留多遊びをした時に、弟妹たちと一緒に來てゐたのを、それとなく紹介された事があつた。その人は彼の家が芝の高輪に在つた時から、家と家とでよく知り合つた、ある中流家庭の令孃で、其人の父と云ふのは、海軍大學出の俊才として、有名な新進の大佐だつたが、日露戰爭の時に、旅順の港外で機械水雷に觸れ、艦と共に水底に沈んで了つて、それから健氣な未亡人の手で、淑しく併し確りと育てられた、若い健康な、どちらかと云へば少し圓顏の、可愛い女學生だつた。柳井は勿論その人に、靜かで仄かな愛を感じてゐた。まだ彼が大學にゐる時分などは、その許婚が大學とは丘一つ隔てた小石川の谷にある、紫色の制服で知られた女學校にゐたために、學校の歸りに丸善へでも行く時などには、わざわざ西片町を下りて行つて、その女學校に近い停留場から、電車に乘つたりしたものだつた。そして小野などはよく欺されて、その相伴をさせられることも間々あつた。それで柳井は其停留場で、一と電車か二た電車待つて、向うの街角から紫色の一隊が、ちらほら現はれるのを遠く望むと、別にその人を物色するでもなく、殆ど直ぐに電車に乘つて了ふのだつたが、彼はそんな仄かな愛の彩りを、「鳥渡いゝだらう。」と云つた調子で、自分も淸純な享樂をすると共に、友人たちにもわざと見せて、そして幾らか自嘲的に微笑みたいらしかつた。しかもその電車の中で、ちら／＼出會つた事は、殆どないらしかつた。が、彼はそれだけの仄かな心持で滿足して、却て直接出會ふなどと云ふ生々しい事は、避けてゐるのだつた。……

小野が柳井の言葉で、考ふるともなくそんな事を考へてゐる間に、杉浦は更に冷かしの語を次いだ。

「成程ね。其上君には、彼處の波打際よりも近い人がゐるからね。」

「誰だい。まさか角の煙草屋の不良少女ぢやあるまいね。あれは由井ケ濱小町と云つて、有名なものなんだよ。」

「白ばくれるなよ。今日も君の學校へ出かけた留守に來て、何か置手紙をして行つたぢやないか。」

「ふうむ。あの人か。あの杉先生のお孃さんなら、そんな事を云つちや不可いよ。あの人もあんな綺麗だのに、身體が弱くて緣遠かつたが、今度横濱のある領事補とかに、婚約が定つたさうだからね。」

「婚約が定つたからつて、どうだか解りやしないさ。」

杉浦は暗い笑みを湛べて、更に突込んだ。

「併し僕は實はあの人の婚約が定つたんで、やつと安心したんだよ。と言ふのはね、僕は實はあの杉先生の家に賴んで、近所に貸間を探して貰つたんだがね。先生の家ぢや僕の事に就て、殆ど身内のやうに世話をして呉れるんだ。そして何と思つてだか知らないが、つい何か用事があると、あのお孃さんを使ひに寄越すんだらう。殆ど三日に一度は、必ず僕の所へ來るんで、又君たちが自惚れが強いと云つて嗤ふだらうけれど、僕はひよつとするとあの人を僕に呉れたいんぢやないかしらと、内心心配してたんだよ。それやあ僕だつて、決してあの人が嫌ひぢやないがね。高輪のがあるんで、鳥渡困るか

らな。されぱと云つて僕には許嫁があると、それとなく面と向つて云ひ切るのも、むざ〳〵向うを落膽させるやうなもので、鳥渡可哀さうだし、僕の方でも亦濟しい氣がするからね。そしたらそんな事になつたんで、僕も安心したんだよ。」

柳井は又挑戰するやうに、わざとそんな事を云つた。

「何を云つてやがるんだい。向うでこそ却て、そんな御心配には及びませんよと、さつさと領事補の事を君に宣言したんぢやないか。」

杉浦は更に皮肉を云つて、くつ〳〵と笑つた。

「兎に角、」柳井も併し敗けてはゐなかつた。彼はわざと顧みて他を云ふやうに、「あの人の字は實にうまいよ。ほんとに古典的だが、水莖の跡つて氣がするからな。僕もあの人の字に惚れた。たゞ字にだけはね。」と、嘯くやうに云つた。

「ふん。だから君の六朝擬ひの突兀たる奴と、搗き合せたら丁度いゝたらう。」

「搗き合せ難いぜ。この餅米は思ひの外に固いからね。それよりか素直な、小野の六朝風となら、まだいゝだらう。」

「小野のとなら、すぐ搗き合さつて了ふさ。此男は。」

柳井と杉浦は其時まで、いつもに似合はず默つて、二人の對話を聞いて微笑んでゐた小野を、圏内へ誘ひ入れるやうに顧みて、他意なげに笑つた。

小野は、それらの話を聞いてゐながら、赤みを帶びた目を受けて、それでなくても細い頬を、併し淋しさうにまじり〳〵と微笑ませて、

「柳井はほんとに軍國多事だね。」と、羨しさうに云つた。

「うむ。君に比べれば幾らかね。」柳井は直ぐ反撥的に先廻りをした。「だが、それは君、たゞ境遇のせゐなんだよ。僕みたいに東京に家があつて、そして家の親類とか、いろ〳〵な知合とかがあればね。自然とそんな工合にもなつて來るんだよ、君なんぞが、幾らか人事匆忙でないのは、やつぱり田舎に家があつて、それから高等學校の寄宿のやうな處にゐて、大學へ來れば殺風景な下宿に居るか、婆さんが片手間にやつてゐるやうな、素人下宿に泊つて居る外ないんだからね。これでは鳥渡した家の、お嬢さん階級の異性とすら、さう接觸する機會は少いからね。會にあれば將來の學士を見込んで、妙に持ちかける素人下宿の娘とか、多情な未亡人と云つた種類のものでね。君の令孃崇拜とか、女學生讚美とか云つたやうなものは、さう云ふ異性に接觸する機會のない所から起る、一種のヒステリックな要求なんだよ。東京の令嬢階級の異性なんて、珍らしくも何ともない者に取つては、冷靜に見ればさう大したものぢやないよ。」

「さうかなあ。――」

小野は柳井から、ありがたくも殆ど致命的とも云ふべき、一種の泣き處に觸れられて、さう苦笑する外なかつた。勿論柳井の言葉のやうな事は、彼自身でも自ら考へてゐないではなかつたが、そんな風にキメつけられて了ふ事は、やつぱり妙に淋しい屈辱を、感じない譯には行かなかつた。

「併し小野には、色々なロマンスがあるからいいさ。此上さう周圍に、べた〳〵そんなお嬢さんたちが居ちやあ、片つぱしから惚れて行つて困るだらう。小野には今の位何にもない方が、丁度いゝんだよ。何しろ、惚れつぽいんだからな。」

杉浦も傍から、少し嚴しくなつて苦笑してゐる小野に、そんな皮肉な冗談を云つた。

「馬鹿云へ、俺だつて、そんなに無選擇ぢやない。」

小野は思はず眞面目になつて、その眞面目になつた事に、更に恥ぢて顏を鳥渡赧めながら、さう正面から受け止める外はなかつた。別な事なら、彼らと敗けずに應酬する事も出來る彼だが、さう云ふ問題に就ては、殆ど初心的に弱かつた。

「だつて君は、君の接してゐる範圍の異性の中で、一番美しいものに必ず惚れて居ると云ふ主義ぢやないか。惚れてゐなければ淋しいと云ふ主義ぢやないか。」

「それやあ俺だつて、自分でも惚れつぽい質だとは思つてゐるし、冗談にそんな事を云つたかも知れんが、決してそんなことがあるものか。そんなことをいやあ今何にもないのはどうしたものなんだい。そんな戀愛主義なんざ持つちやゐない證據ぢやないか。」

「だから、今はそいつ淋しいつて時期なのさ。」

杉浦は其處迄追ひ落して、皮肉に一刀兩斷したのに、自らも滿足して、澁い黑い圓顏に、[illegible]し[illegible]つこい微笑を一ぱい浮べた。彼はさうした露惡的な、友情の表白を喜ぶ傾向が多かつた。

「一成程ね、さう云へばさうだ。」

小野もそれには兜をぬいで、すぐ承引すると共に、心からの笑顏を返さずには居られなかつた。

柳井も笑つた。そして彼は更に惡戲的な笑顏を見せながら、寧ろ半ケ年位年若な癖に、長上らしい口吻を以て、警告するやうに云つた。

「小野。ほんとに君は氣を付けろよ。學校を出て、だん〳〵さう云ふ周圍に接するやうになると、君が一番先に難破しさうだぞ。何處か君の血色のいゝ顏には、溫いが何となく戀の殉教者と云つたやうな、妙な陰影が備はつてるからな。」

「眞實だ」杉浦もつゞいて云つた。「何しろそんな事がないやうにして吳れ。僕が迷惑だからな。」

「ふん。勝手に人を『月評』しやがれ!」

小野は常から出來るならば、作家として立ちたい希望を持つてゐたために、そんな文壇の月々の作品を評する意味で、術語になつてゐる言葉を用ひて、それらの友人の批判に酬いた。

それで其話は、輕い笑ひの中に一段落ついた。

日は、赤く燦つて、傾きながらもまだ中空にあつた。併し砂丘に曳いた三人の影は、うすら寒く長かつた。そしてなだらかな斜面の裾のあたりに、草は半ば枯れたまゝ、朗々と明るく戰ぎ始めた。濱防風の芽か何かであらう、一つ特別に綠を保つて、一點日に透いて煌と光つてゐた。外の波頭が、少し鉛白色の白みを帶びて、先刻より轟きを增した。と、見ると一匹の西洋犬が、何に怖えたのか淋しく啼きながら、波打際を一散に横切つて去つた。

柳井は眉を顰めて、其犬の去つた後を見送つてゐたが、靜に外套の砂を拂つて立上つた。

「さあ、それぢやあ、そろ〳〵停車場の方へ出掛けようか。」

「さうだね。もうそんな時間かい。一體何時頃だらう。」

小野も、これは外套も持たずに、粗末な銘仙の飛白を着てゐたが、その尻の所の砂をはたはたと叩き落した。

「もう四時位だらう。だから是から行けば、四時半の汽車に間に合ふよ。僕がいつも學校が退けて、横須賀から乘る汽車だがね。それで行けば丁度宵の口に、東京へ着くんだよ。」

「どうだい。柳井も一緒に東京へ行けよ。いゝぢやないか。學校の教官の懇親會なんて。」

杉浦が誘ふやうに云つた。

「いや、さうは行かない。何しろ今度の會は、僕が來任したのを歡迎する意味で、開いて吳れるんだからね。そいつを素つぽかす譯には行かないよ。——それよりどうだい。君たちこそもつと此處に殘つてゐてゆつくり遊んで行かないか。」

「いや、日歸りの積りで昨日出掛けて來たのに、君の話し上手にほだされて、つい今日まで居て了つた。今日は又君が學校へ出かけた後を、二人でぼんやり留守してゐて、もう澤山な氣がし出したんだよ。それに何だか東京には、僕の居ない間に何か起つてゐさうな氣がして、妙に里心がついてゐるんでね。なあ杉浦。」

小野はさう云つて誘惑を避けるやうに、さつと勢よく立上つた。

「さうだ。もういゝ加減に引込み時だ。是から東京へ歸つて、熱いハウリスタの珈琲でも飲んだ方がいゝ。君もどうだい。花火でも見に行つちやあ。——」

杉浦も相槌を打つた。が、柳井はやつぱり肯はなかつた。

「まあ、兎に角停車場まで送つて行かう。」

小野と杉浦とは、昨日の金曜日から、かけて、此處の柳井の貸間住居へ遊びに來たのだつた。柳井は家が東京にあるのだが、いゝ成績で大學を出ると直ぐ、横須賀の海軍の學校に、教官の口があつて赴任したのだつた。そして鎌倉にいゝ貸間を見つけて貰つて、其處から學校へ通つてゐるのだつたが、一人の淋しい生活に堪へ兼ねて、よく東京の友人たちに來いと云つて來た。そして當人は土曜から日曜へかけて、東京の家へ必ず歸る事にしてゐたので、小野と杉浦は金曜日から來て、一晩話し暮した上、翌日柳井が歸るのと一緒に、東京へ戻らうと云ふ計畫だつた。ところが、一晩は柳井の泊つてゐる、海濱ホテルに隣つた洗濯屋の、裏の離室で話し明したが、丁度その翌る日曜日に、横須賀の學校の教官たちが、柳井のために歡迎會を小町園で開いて吳れる事になつてゐたため、第二の一緒に歸京する豫定は、自然壞れて了つたのだつた。

遊び疲れ、話し疲れたか、まだ何となく物足りない心持で、二人は停車場に向つた。

小野の心も、夕暮に近い海邊の空氣のためか、妙に淋しかつた。何とはなしに彼女たちの、手を執つて泣く程語つてみたいやうな氣持に、淋しく支配されてゐた。彼は柳井と同じく、其年の七月に文科大學は出たが、まだ目ぼしい職業にもありつけなかつた。杉浦は中途で怠けて、まだ大學にゐる身だからそんな心配はしなくてもいゝのだつたが、同じく彼の親友で、京都の大學を出た池田も、職を求めてゐる大きな新聞社に入り、そして皆は大抵定職を得たから、一方創作に從事しようと心掛けてゐるのに、小野は何の定收入もない上に、果して文學上の創作を以ても、身を立てうるかどうか、甚だ不安定な位置にゐた。そして柳井の云ふ如く、落莫たる下宿屋の一隅に、辛うじて得た安翻譯などをして、其日を暮してゐる哀しい境遇に在つた。その不安と寂寥とが、何けなく快活に語つてゐる彼の背後に、兎もすれば灰暗い影を投げた。彼はその淋しい心持を、今更のやうにこの冬の海邊の、夕暮近い冷たい空氣の中に、ゆくりなくも身に沁みる程感じて、誰に訴へる事も出來ない哀傷を抱いたまゝ、二人の後から從いて行かなければならなかつた。

彼らが後に見棄てた海は、少し風が出て白く泡立つてゐた。

二

停車場に着いて見ると、丁度四時何分の上り列車が、出て終つたばかりのところだつた。そして後の列車が來るまでには、また小一時間ばか

りあつた。
「君たちにもつとゆつくりして行けと云ふ、運命の暗示だよ。いつそもう一晩延ばして、遊んで行つたらどうだい。」
柳井は丁度間の悪い時間に、停車場へ連れて來た照れ隠しに、そんな事を云つてゐた。
「一體だ、どうせ歸るんなら、東京は宵の口がいいからな。それとも僕たちが殘る代りに、君の方の會を犠牲にして、すつぽかして了ふんなら、遊んで行つてもいゝけれど、――」
杉浦も意地悪げに添へた。
「ぢやあそこらを散歩しようか。」
やむを得ず柳井は云ひ出した。
「うむ。八幡様の方へでも行つて見よう。さうすれば丁度いゝ時間だらうから。」
この小野の提言に、三人はそれから鎌倉八幡の方を、一と廻り散歩して來ることになつた。
彼らは先刻來た方とは反對に、停車場前から左手に折れて、大きな松が昔ながらに蒼えた下の、茶店めいた家の竝んでゐる通りを、鶴ヶ岡の方へと歩いて行つた。もう二の鳥居あたりは夕景で、僅な參詣戻りの田舎人が、ちらほらと名殘の姿を行き合せる頃だつた。
三の鳥居を入つて行くと、境内の廣前や石礎には、あかあかと徘し弱い日影がさして、修繕中だつた舞殿の足場は、鳩の羽影も淋しかつた。名高い大銀杏は、もう殆ど黄落し盡して、その梢は荒い箒のやうに、とげとげとうすら蒼い空を刺して聳え、たゞ幹の中頃に、こびりついてゐる僅かばかりの葉が、日に眞つ黄色に輝いてゐるばかりだつた。
三人は下駄を鳴らして、石段を驅けるやうに登つた。
隨身門の古びた丹碧にも、日影は淋しく沁みてゐた。そして本殿の方は、所々斜な夕日がさし込んでゐる外、仄暗い夕影に滿ちてゐた。もう參詣人の影などは、何處にも見えなかつた。鳩ももう地上には散つてゐないで、庇や簷や、又は廊の柱梁の上などに、すつかり上つて了つて、くゝくゝと低く啼き交しながら、もう日の終るのを諦めに待つてゐた。其中の四五羽が、高い奥殿の千木のあたりに、鮮かに夕日を浴びて止つてゐるのが、下からくつきり仰がれた。
小野は小さい時からの癖で、拜殿の前に立つと、丁寧に手を合せて禮拜した。彼は心中ひそかに、自分の文運の隆昌と、それから自分に美しい戀人を與へ賜はらん事を、眞面目に心の底から祈つた。
柳井は微笑して見てゐた。が、杉浦は其様を見ると、
「又かい。それぢやまるで鳩を拜むやうなものぢやないか。」
と云つて冷かした。全く鳩は、目白押しに小野の拜する、頭の上の虹梁に竝んで、彼の鳴らす鈴の音にも驚かず、答へるやうに低く啼き頷いてゐた。
小野は自分の祈りの意味を、彼に見透かされたやうに鳥渡狼狽を撤めた。そして照れ隠しに笑ひながら、頭上を見あげて、
「隨分居るね。是だけ居ると鳩の壓迫を感じるね。」
と云つた。勿論それは誇張だつた。
「うん。それは君が鳩に馬鹿にされてるせゐだよ。」
杉浦は更にそんな事を云つた。
「何處かに豆か粟はないだらうか。馬鹿にされないやうに、是だけの澤山な鳩に、洩れなく蒔いてやりたいがな。」
「粟なら此處にあるぜ。」
少し離れて、一人神殿の屋根の曲線を見上げたり、隨身門の古い複雜な彩を覗いたりして、コツコツと石礎の上に杖を鳴らしてゐた柳井が、

それを聞いてから云つた。見ると柳井の杖でさす門柱の裏に、餌箱が放置されてあつた。それには金網の張つた蓋がついてゐて、中には大きな粟粒を盛つた、鐵葉製の皿が澤山並んで入つてゐた。鳩には取れないが、人は其蓋さへあければ、すぐ其皿を取出せるやうになつてゐた。そして其皿の傍にある木の札に、一皿二錢、錢は箱の穴に投げ入れられたし。」と、それと同じ意味を、英語でも書いてあつた。打見たところ、それは社務所か何かで、片手間に備へたもので、謂はば賽錢箱に、餌皿を備へつけたものと云つた方が、寧ろ正しかつた。

今日は參詣人が少かつたのか、それともそんな無駄なことをする人が少かつたのか、金網の蓋の中なる餌皿は、殆ど空になつてゐなかつた。皿は十位竝べられてあつた。そしてさう云ふ箱が、其處に二つ備へつけられてあつた。

「こいつは贊成。」

小野はすつかり嬉しがつて、自分の財布を探つて二十錢銀貨を一つ見付け出すと、其箱の横の錢入れ口から落し込んで、網の張つてある蓋を開けながら、まづ中の皿を一つ二つ取出した。そして其一つをまづ試みに鳩に見せるやうにしてばら〳〵と石礎へ撒いた。と、彼が箱の蓋を開ける頃から、何となく騷ぎの聲を增して、遠く離れて見てゐた鳩どもは、中にも氣早く窗緣へ下りて、待つてゐたものさへ二三あつたが、いよ〳〵撒いたと見た瞬間に、急に一齊に羽音を立てて、ばさ〳〵と喧の空氣を驚かせながら、まるで雹が斜に吹くやうに、何十羽となく下りて來た。小野は自分の身邊が、思はず灰色に塞されたやうに感じて、吃驚して立つてゐたが、すぐ又第二の皿を撒いた。石礎に下りた鳩どもは、僅か二三尺飛び立つものもあつたが、頻りにあちこちして、其粟粒を瞬く間に拾ひ盡した。

其間に杉浦も、皿を二三枚取出して、又自分の身邊に、さつと同時に霰の如く撒いた。鳩はそれを知ると、半ば軒端へ歸りかけたものも、更に羽音を立てて蝟集した。其中に宮の後の方や、遠くに遊んでゐたものまで、仲間の啼聲や羽音を聞きつけて、更に澤山集つて來た。

小野は其箱の中の粟を、すつかり買ひ占めた積りだつたから、又二皿ほど取出すと、それを彼らの眞ん中で撒かうとして、手に持つたまゝ鳥渡立つてゐた。すると、今度はその鳩どもが、すつかり危險がないと見て取つて、彼に馴れて了つたのか、又は其粟粒の爭奪に、殆ど夢中になつて了つたのか、小野の持つてゐる餌皿を目がけて、まだ撒かない中から、ばさ〳〵と飛び寄つて來た。そして或るものは皿の端に辛うじて足をかけ、或るものは小野の襟首にとまり、或るものは肩に休んで、忽ち小野の身の廻りは、近々と鳩の群で滿たされた。小野は狼狽と共に、非常な嬉しさを覺えた。

「どうだい、柳井。君もやつて見ないか。」

彼は鳩の羽音の中から、向うの朱塗りの門柱に、凭れるともなく其樣を見てゐる柳井に向つて聲をかけた。

「うむ。僕は見てゐるよ。僕は永久の傍觀者でありたいからね。――それにかう飛び立つと鳩の糞臭い。」

柳井はかう云つて、眼を三角に細めて苦笑しながら、鳩に取り卷かれてゐる小野と杉浦を、子供だなと云ひたげに見てゐた。

かうして第一の箱の皿は、忽ち無くなつた。と、杉浦は第二の箱に近寄つて、

「こいつもみんなやつて了へ。」

と、云ひながら、彼は皿を一々持つのが面倒さうに、三つ四つを一度に一皿へ重ねると、兩方の掌で摘み取つて、それを鳩の群る眞ん中へ持つて來た。もう彼の腕や肩は、鳩の爭つて止まる處となつてゐた。

「もう一つにも錢を入れりやあいゝだらうね。」
小野はその第二の箱にも、錢を入れなければ不可ないと思つた。そして又乏しい財布の中を探つてゐたが、杉浦がそれを見て、
「おい、金なんぞ入れなくたつていゝよ。關はないよ。どうせ鳩に對する功德ぢやないか。宮司の懐ろを肥したつて仕方がありやしない」
と、云つて皮肉に押し止めた。彼は强ひてそんな悪德めいた事を行つて、嬉しがる傾向があつた。そして彼は掌中の粟を、鳩のつゝくに任せてゐたが、忽ち一匹の鳩の足を、つと捕へて了つた。鳩は驚いて、二三度ばたばたと翅を鳴らしたが、さうひどく逃げようともしないで、杉浦の手に眼をきよときよとさせてゐた。
「おい、どうだい。こん畜生は!」
杉浦はそれを小野に見せて、そしてその五色の美しい背を愛撫した。
「うむ。可愛いね。俺も捕へてやらう。」
小野もさう云つて、杉浦が只で開いた箱の中から、あるだけの粟粒を取出した。さうしてもう地上の粒を、殆ど拾ひ盡してゐた鳩の群の中へ、しやがんで掌を開いた。忽ち彼の手首や腕や肩に、鳩は爭つて群がつた。中には彼の茶色のソフトの上へ、足を落すものさへあつた。彼は目の前を掠める、五色の翼の羽搏の中から、どれを捉へようかと頻りに物色してゐた。

其時、小野の掌の處へ、首を寄せてはたばたしてゐる鳩の中に、一羽眞つ白なのが交つてゐた。彼はそれを捕へようと思つた。そして餌を一方の掌にのみ移して、一方の手を空にしながら、隙を見てその眞つ白い奴の背中を、ぎゆつと押へて了つた。他の鳩は彼の手の急な動作に驚いてぱつと立ち散つたが、捉へられた白鳩は、翼を上から抑へられて、じたばた動かさうと藻搔いたけれど、無駄な努力だつた。そしてやがてそれも、諦めるやうに靜まつて、小野の手の中に身を竦めて了つた。赤い眼がきよときよとと哀憐を乞ふやうな、そして半ば信賴しながら恐怖してゐる色を見せて、堪らなく可愛い氣を彼に起させた。
小野はその羽毛に包まれた、脹らんだ鳩の胸から翅へ、少し熱した頰を押し付けて見た。冷たい、絹のやうな感觸がそこにあつた。そして何となく靑つぽいやうな、鳩の臭ひが鼻に來た。彼は何故とも知らず、鳥渡性的な思ひに包まれて、いつ迄も沁々と頰を、其白鳩に擦りつけてゐたい氣がした。そして出來るならばこの鳩を、一匹そつと東京まで捕へて歸りたいと思つた。

が、そんな事は氣の弱い彼の、決して爲し得るところではなかつた。彼はあの第二の箱を、只で開けた事にさへ、一種の氣の咎めを感じてゐる位だつたから……
そんな事をしてゐた時、突然向うの石燈籠にゐた鳩が、怪しく啼き交した。と、見る間に地上に下りてゐた鳩は、一齊にぱつと凄じい羽音を立てて、先刻下りた時よりも激しく、先を爭つて舞ひ上つた。その羽と羽とは、互に觸れて相搏つた。そしてその羽叩きに壓搾された空氣は、亂れて小野たちの頰を掠めた。灰色をした羽叩きの擾亂。鳩は一瞬にして庇や梁に、互の位置を爭つて上つたのだつた。
小野は何事が起つたのかと思つた。そしてそれと同時に、自分の掌を離れてゐた鳩か、急に必死と羽叩き藻搔いたので、驚いて手を放した。すると彼の鳩は一番遅れて、眞白な翼を慌しく動かしながら、[illegible]めかけて飛び上つた。
ふと見ると、其時丁度隨身門の閣の上へ、黑い逞ましい一匹の洋犬が、ぬつと顔を現はした。小野は何アんだと思つて、其犬が憎いやうな、又滑稽なやうな感じで、そつと微笑を洩しながら、自分の手から脱れて行つた鳩の行方を、屋根のあたりに見上げた。

門柱のところで、門内へ斜に射し入つた、長い夕日の箭の中を、先刻の騒擾のために、一つ塒の綿毛が脱けて、ふは〳〵舞ひ浮んでゐるのを、ぢつと見てゐた柳井は、其時又、
「そろ〳〵行かうか。」と促すやうに云つた。
それで二人は又、八幡宮の石段を下つた。下りて見ると、もう廣前はすつかり夕影に滿ちてゐた。

三

今度こそ間違ひなく、彼らは汽車に間に合つた。そして小野と杉浦とは、その三等室の一隅に、向ひあつて席を占める事が出來た。
二人は口々に、車窓から柳井に別れを告げなければならなかつた。「ぢやあ左樣なら。」と、小野は云つて、それから沁々した調子で、特に云ひ添へた。「今度の木曜日には、先生の所へ來るだらうね。もう來週には、先生も癒つてゐるだらうから。」
「うむ。大抵行く」と、柳井も窓に近く寄つて、「が、もし行けなかつたら、君から僕の近狀を傳へて、よろしく云つて呉れ給へ。僕も此方へ來てから、詳しい手紙でも差上げなくちやならないんだが、まだ氣が落着かないのと、どうせ今先生に差上げても、病氣で御覧にはなれまいと思ふものだから、つい差上げないでゐるんでね。——だが、先生は來週までに癒つてゐるかしら。」
「さうだね。さう大した事にはないんだらう。いつもの胃なんだらうから。」
「うむ。僕もさうは思つてゐるんだが、又胃潰瘍だと大變だからね。」
「それでも修善寺の際もある事だし、それで死ぬなんて事はあるまい。大丈夫來週位までには、癒つてゐるに違ひないよ。」
「さうだね。」柳井も漸く凶想を打消すやうに相槌を打つた。そして話頭を少し曲げた。「どうだい、此頃の明暗の調子は。悠々としてしかも力一杯に、層々累々と押し進めてるぢやないか。」
「愈々佳境に迫つて來たね。あれぢやあ、先生も後を書かずには死ねまい。」
「全くだ。神も書かさずには殺すまい。」
柳井もそんな風に相槌を打つた。
彼らが先生と云つてゐるのは、當時の文壇から退いてゐるが、その特別の關係ある新聞へ、次ぎ〳〵に大作を發表して、益々堅實老熟な筆致を以て、紅葉歿後の文豪と稱され、數多の門弟に取り巻かれて隱然たる一大勢力をなしてゐる、夏目漱石氏の事であつた。そして氏が嘗て大學教授の職に居た關係から、其門弟といふべきものは、多く赤門關係の人が多かつたが、文科大學にゐた柳井や小野たちも、學校を出る一年ばかり前から、その門に出入して、先生の薫陶を受けてゐた。殊に柳井などは、小野や杉浦や池田たちと一緒に、各自の創作を載せる小さな同人雜誌を發行して、其處で處女作を發表して以來、就中其才を認められて、非常に推稱されてゐたのだつた。小野とても又、先生からは可なり認められ、激勵を受けてゐた一人だつた。其上に柳井と小野とは、其前年の夏、卒業前の休みの間、房州のある海邊へ一緒に行つてゐた中に、滋々と先生と手紙を往復したため、歸つてからは更に非常に親しみを増して、先生の許に出入するやうになつてゐた。先生も必ず、何より先に彼らの新しい創作を讀んで、有益な批評を聞かして呉れる事になつてゐた。加ふるに、先生は其頭に立つて、所謂新人其他の文學靑年をよくに及び、誰よりも一層熱心に、其門へ集る若い人たちに、一々話して聞かす樣になつてゐた。木曜日と云ふのは、その先生の面會日で、その夜は門弟たちが集つて、先生と親しく

談話することになつてゐる日だつた。そして其先生が少し前から、加賀の金澤に居る舊友から送られた、鶫の粕漬を食べて、消化を惡くしたことが、門弟たちの間に傳へられてゐた。――

その事を彼らは話し合つてゐるのだつた。

その中に汽車は發車した。それで三人は、別にその儘先生の病狀を心から危惧するでもなく、

「ぢやあ失敬。」「失敬。」と云ふ中に、別れることになつて了つた。

小野と杉浦は二人になると、對ひ合つて席は取つても、暫くは汽車の動搖に身を任せたまゝ、何の話もなく默つてゐた。二人はもう強ひて話題を見出しても何か話をしなければならないやうな、そんな淺い友人關係ではなかつた。中途に幾らか疎隔はあつたが、高等學校の一年以來、ずつと續けて來た友情は、近來一緒に文藝上の創作などに志して、雜誌を始めたりしてからは、更に濃度を加へてゐた。一兩年前には、同じ下宿の一室に、二人一緒に起居もしてゐた。今は各自の都合で別れ／＼の下宿には居るが、それが可なり近い處にあつて、一日に一度は、必ず何方からか往來してゐた。散歩などは、必ず二人でするのが常だつた。性質から云へば、小野は陽性の快活で、杉浦は陰性の寡默派だつたけれど、その性格の相違が昔からずつと二人を結びつけて、却て友情を堅固にしてゐた。それで嘗て殆ど意見の相違から喧嘩めいたこと一つしたことがなく、今日まで交りを續けて來たのだつた。小野の寧ろ詩人的な吟咏と、杉浦の哲學的な沈默、小野の直感的な理解と、杉浦の瞑想的な批判。小野の時として輕薄に見える程な敏感と、杉浦の暗愚にさへ見える鈍重な意力、その明るい機智と、その澁い皮肉。……

さうしたものが極めて巧みに、喰ひ違ひ相補うて、その裡何處となく二人の氣持は、ぴつたり合つてゐるのだつた。そして二人の關係から云へば、どちらかと云へば小野の方が、先に立つて事を行ふのに默つて杉浦が從いて來る、と云つた風な傾向を帶びてゐた。それも二人の性格に起因することで、又二人の友情をこれまで永く續かせた原因だつた。そして其處に才氣煥發な柳井と重厚な池田とが絡まると、この四人を圍る親友關係は、烏渡類のない程緊密なものだつた。……

柳井との饒舌に疲れて、暫く默つてゐた二人は、大森を過ぐるあたりから、又ぼつ／＼他意ない四方山の話を始めた。それは取止めもないものだつたが、併し其取止めのない中にも、杉浦の語調は何となくはしやいで、毎になく面白がつてゐるやうに、小野には知らず識らず感じられてゐた。何か惡戯をして、それを默つてゐるといつたやうな、妙な祕密の嬉しさを持つてゐるらしかつた。そして何氣なく話してゐる中にも、何かに心を奪はれてゐる風だつた。が、小野は時々さう心の奧では思つても、別に氣を止めて聞くといふ、それほどの異常を感じてゐる譯ではなかつたので、その儘默つて過ぎて了つた。

やがて汽車は横濱を過ぎて、もう暮靄にすつかり包まれて了つた品川の海を車窓にぼんやり蒼く映しながら、灯火の溢れたやうに點きしなの、東京の街の上に走り入つた。電車の走つてゐる街路、明るい二階、廣告燈の明滅、そしてそれらの騷擾を包む、屋根々々の蒼茫たる海……

小野の心にはいつの間にか、何となく歸りを急ぐ焦躁と、妙な里心を催す胸騷ぎが、ひそかに忍び入つてゐた。それは夕景の東京へ、旅から歸つて來る人の、誰でも感じる胸騷ぎかも知れないが。――

「あゝ、何だか俺たちの留守に、東京で惡い事が起つてゐるやうな氣がしてならない。」

小野はそんなことを口に出して言つてみた。

「うむ。なぜだか俺もそんな氣がする。ひよつとすると下宿の婆さんでも、留守の間に首でも縊りやしないかしら。何しろ汽車を下りたら眞つ直に家へ歸らうや。」

杉浦もそんな事を言ひ出した。

それで二人は東京驛へ着くとすぐ、電車に乘つて眞つ直に、本郷菊坂裏の杉浦の下宿へ、一緒に戻つて了ふことにした。そして心急いで、下宿へ歸つて見たが、貧しい五燭の電燈の下で、主人の婆さんは別事なく蹲つてゐた。そして杉浦の歸りを待ち侘びた頓狂な聲で、

「お歸んなさいまし。」と、それから又小野にもすぐ、

「いらつしやいまし。」と疊句のやうにいつて迎へた。

杉浦は先に立つて、急いで二階へ上つた。そして上つて了ふと四邊を見廻して、それから後から來た小野に、妙に生眞面目な顔をしながら突然から言ひ出した。

「あゝ疲れた。これを持つて來たんで、ほんとに疲れた。」さう言つて彼は、何物か懷中に手を入れて押へた。

「何だい。先刻から妙に、懷へ手を入れたまんま、胸を鯱鉾張らしてゐると思つたら。」

小野は聞かざるを得なかつた。

「何だか當てて見ろ。」

杉浦は惡戯的な、妙な微笑を浮べていつた。

小野は其顔を見凝め返しながら、

「まさか鳩ぢやあるまいな！」

と、直覺的に自分の先刻の欲望を思ひ出して、叫ぶやうにいつた。

「うむ。」杉浦の顔には、妙な得意の色があつた。「其通りだよ。そつと一匹掴へて來てやつた。こいつを誰にも分らないやうにして、暴れ出さないやうに用心しながら、此處まで持つて來るのには、全く氣骨が折れたよ。あゝ、疲れて厭な氣持になつた。」

かういつて彼は、內懷を廣くはだけると、足を掴んだまゝ一羽の鳩を取出した。それは瓦色の、ごく普通の奴だつたけれど、永い間人の懷中などに入れられて、しつかり押へられてゐたために、危惧と心痛に身を縮めてゐたらしく、羽叩きもせず藻掻きもしないで、たゞ血走つたやうに赤い眼を、氣味惡げにきよと〳〵させて、杉浦の部屋の中を見廻してゐた。

小野はそれを見て、一種の驚嘆を、杉浦に覺えないでゐられなかつた。杉浦が思ひ切つて、小野などが思つたばかりのことを、不言實行する一種意力の强さと、又その鳩を此處まで持つてくる間の一種の辛抱强い持ち堪へと、それにも増して、そんな神前の鳩を、わざ〳〵盜んできたりする一種の惡魔性とに、彼は目を瞠らずにはゐられなかつた。

「ふうむ、そんなことをしても君は祟りが怖くないのかねえ。」

小野は强ち迷信家でないにしても、そんな風に聞かずには居られなかつた。

「うむ。別に神罰なんざあ怖くはないが、かうして掴へて來た所で、餘りいゝ氣持ちやあない。」

さう云つて、彼は鳩を掴んでゐた手を、遂ひ放つやうに放した。と、鳩は夜の座敷の中ながら、初めて翼を使ふべく解放されたに係らず、眼がさうよく見えないのか、ひどく喜びもしない調子で、大儀さうに翅をばさつかせながら、それでも横飛びに、やつと座敷の隅の遠い隅の所へ行つて、尻込みするやうに暗い隅に身を潜めた。そしてまだ血走つた眼をぱちくりさせて、杉浦と小野の方を眺めてゐた。

杉浦もそれをそつと見詰めてゐたが、やがてくるりと振り返つて、小野に向つて突然言つた。

「おい小野、君と一緒に僕も出よう。そしてどこかへ行かうぢやないか。これから君が歸つた後、此奴と一緒に寢るんだと思ふと、さすがに俺も厭になつた。一緒に何處かへ行つて酒でも飲まう。」

「それ見ろ。祟りだ！」

小野はそれを聞くと、思はずかういつて、併し彼の言葉に贊成して一緒に杉浦の下宿を出ることにした。が、併しその時いつた彼の「祟り」が、それから約一年の間に、どんな形となつて現はれ、以後の小野と杉浦との半生に、どんなに慘澹たる影を投げたかは、彼自身もとより知る由もなかつた。

二人の出た夜の街路は暗かつた。

第二章

一

二人の足は自ら灯火の明るい方へ向つた。

杉浦の下宿のある暗い横町から出ると、さすがに歳末近い本郷通りは、早くも賣り出しの店飾りや紅白の旗なぞで裝はれて、その下に宵の口の徒らに明るい螢光を、怪しく入り亂らしてゐた。そして人々の黑い影が、十二月の寒い街風の中を、アスファルトに下駄を高らかに鳴らして、不安さうに往來してゐた。殊に賣出しの飾り旗がばた〳〵と飜つて、二人に更に落着かない騷音を感じさせた。

「どこかで酒でも飲まうか。」

小野はマントも襟卷もない襟首を、縮めるやうにして四邊を見廻しながら、さう言ひ出した。

「うむ。飲まう。」

さう大して酒を飲めない杉浦も、言下に應じた。

まつたく先刻からの、理由のない、――併し捉へてきた鳩の敵だともいへるが、――妙に湧いてきた不安と焦躁から逃れるには、まづさし當り酒でも飲む外なかつた。

そこで二人は近所の、小さい酒場へ寄ることにした。酒場の中も、明るく騷々しかつた。多くの學生や勤人や勞働者たちが、四字形に裝置された大理石の卓子の上へ、杯の底をかち〳〵いはせて、高聲に話し合つたり、給仕女を呼んだり、腰を浮かせたりして、飲んでゐた。そして向うの、一段高い表摺臺の傍からは、大きな喇叭付の蓄音器が、もう幾回も幾回も掛けた後と見えて、盤の傷みを露骨に軋らせながら、呂昇の「壺坂」か何かを泣かせてゐた。そしてその音に連れられたやうに、給仕女が腰から上を浮かして、四字形の卓子の内側を泳いでゐた。そこには更に騷々しい、明るい、不安な壓迫が在つた。彼等は鳥渡入るのを躊躇したが、その逡巡した顏を見合せると、お互に躊躇したのを恥ぢるやうな心持で、思ひ切つて中へ入つて、丁度その突端の明いてゐる椅子へ、並び合つて腰を下ろした。小野が強ひて勢よく腰を下ろさうとすると、その安價な木製の据付椅子は、くるりと圓い座席を廻轉させた。それが妙に腹立たしく滑稽だつた。

二人は強い酒を命じて、立續けに二三杯づつ呷つた。それで、腹の中は忽ち火のやうに熱くなつた。が、醉はなぜか胸から下を搔き亂すだけで、頭へ上つて來なかつた。いや、血はかつと頰や額へ上つても、どういふものか心から、精神的に醉つて來なかつた。二人は酒盃を前に默り勝ちだつた。

と、その時二人の向うの、一二間離れた處に、その場で隣り合つて知己になつたらしく、二三人の會社員らしいのと學生とが、頻りに杯の交換などをしながら、聲高に肝膽を照し合つたやうな言葉を交したり、握手をしたり、會社員が誘ふやうに、學生唄を唱つたりする一組があ

つたが、先刻からその前に立つて、後の空席に腰を寄せ、斜に身をそらして、呆れたやうな面白がつてゐるやうな、悪戯的な眼で見下ろしてゐた一人の給仕女があつた。さうしてそれは打見たところ、この酒場中では一番綺麗な、どこかセルロイドのやうな薄手な感じのする、狐めいた美人型の女だつたが、前の一組と相手になつて、二言三言冗談などをいつてゐる間に、ちよくちよく此方の沈んでゐる様子を見てゐたらしく、氣にでもなるのか寄つて來て、自信ありげな誘ひの笑みを口の端にちらと浮べながら、

「此方どうなすつたの、もう一杯持つてきませうか。」

と、杉浦の顔を覗き込んだ。

「いや。」が、杉浦は相手にならなかつた。「それより勘定をして來て呉れ。——もう出よう。」

からいつて彼は小野の方を向いた。

「さう。」と給仕女は、鳥渡自信を傷けられたやうに、それでもちつと杉浦の、濃い八の字を寄せた閻魔の顔を、見凝め返した後に呼んだ。

「十四番さん何方？　お會計よ。」

「出よう。」

二人は金を拂つて、重い硝子の開き戸を、ぐいと押して、再び街中へ出た。

先刻から引續いてゐる妙な不安と、何物か求めて得られない焦躁と、それから今飲んだ酒の、陰に籠つた醉ひ方とは、二人に到底その儘で濟まされない衝動を與へた。少し捨鉢な、荒んだ遊蕩氣分が二人の胸に湧いてゐた。彼らは口に出して言はないでも、もうかうなつてはお互に、自分たちのゆく先を知り合つてゐた。

二人は厩橋行の電車に乘つて、淺草の方へ向つた。

雷門で下りて見ると、彼等は妙な光景に出會つた。

丁度吾妻橋の方から、彼等の行かうとする仲店の方へ、何かの不思議な行列が、通りかゝつてゐた。先頭は、もう仲店の方へ曲つて了つて、何か高々と差上げてゐる旗差物に、書いてある字は讀めなかつたが、異様な假裝行列であることは、すぐ知れた。が、その間遠くに叩く太鼓の音と、割合に靜肅を保つた隊伍は、何のためのものだか、まるで見當がつかなかつた。それらの人々は、各々張子の妙な獸の面や首を被つて、お祭に出て來るやうな、象徴的な裝をしてゐた。豚か猪のやうなのもあれば、牛や馬のやうなのもあり、何だか譯の分らぬ牙を持つた獅子虎等の魔物のやうなのもあれば、明かに鬼を現はしたと見える、寧ろ滑稽な子供だましのもあつた。

小野には直ぐに西遊記などに現はれた、もろもろの魔物が連想されたが、その異風な滑稽な、併し何となく妙な氣のする行列に、彼らは暫く足を停めて、目を瞬らずにはゐられなかつた。

どん、どん、と、間の抜けた太鼓の音につれて、その行列はなかなか盡きずに、續いて仲店通りを通つていつた。行人たちは、みんな歩みをとめたり、又はその行列につきながら、雜沓して見てゐた。小野と杉浦は、その雜沓に突つて、さすがに從いてゆきはせずに、暫く行列の過ぎるのを待つてゐた。

「何だらう。」

「何だらう。」

二人は顔を見合せて、見物人たちの話に耳を傾けたが、誰もその謂はれを知つてゐるものは、あたりにゐないらしかつた。

と、その行列が、最後になつたところに、高張提灯を點けた、一人の黒衣の僧形の人がゐた。その人は、まさかに假裝のものではないらしく、行列の後から、監督をしてゐるのだと見えて、幾らか雜沓に揉まれて遲くなり勝ちな人たちに、

「さあ、遲れないで、續いて！」などと、高聲を

振り〳〵華をかけてゐた。

彼らには、益々行列の間が解らなくなつた。で、その最後の僧形の人が彼らの前を通つていつた時、何だか言葉が分らないながらに、從いていつて見ようとする群集心理に壓されて、二人も後から追ひ付きながら、思ひ切つて小野は、つか〳〵とその僧に近寄ると、

「何ですか、この行列は?」

と、進んで訊ねて見る氣になつた。

「え?」とその僧も、少し足を緩めて、振り返つて小野を見たが、彼の樣子が知識階級の、普通の野次の見物と違ふのを見て取ると、少し鼻にかゝつた慇懃な調子で、說明して呉れた。その言葉に依ると、その日は丁度釋迦の出山だつたか入山だつたかの、何百年目に當るとかで、その祭に、「惡魔行列」を行つてゐるのだといふのだつた。

「惡魔行列? はゝあ、成程、さうですか。」小野はふとその僧の說明を、面白く感じて少し微笑みながら、默つて從いて來てゐる杉浦を顧みて、それから僧もいつた。「おやあこれはみんな惡魔なんですね。」

「さうです。百八人ゐるんです。」

「はゝあ。隨分ゐるんですね。」小野はその他の見物人が、自分の代辯に依つて、その僧の說明に耳を傾けてゐるのを、幾らか意識しながら言つた。「で、こんなに深山の惡魔が集つて、これからどうするんです。」

「惡魔問答といふのを演るんです。天帝の前で、釋尊に從つて佛果を得たものと、この惡魔どもとが、互に問答をするんです。そして惡魔がいひ敗けて、退散する仕組になつてゐるんです。」

その僧も自分の宣傳に、滿足したやうな顏付で、幾らか聲を高めに言つた。

「それは誰でも聞けるんですか。」

「えゝ、誰方でも。貴方がたも聞きにおいでなさい。」

「有難う。」小野は禮を述べて、少し引退りながら、もう一度杉浦を顧みて言つた。「どうだい、聞いてゆかうか。」

杉浦の顏にも、捨鉢のやうな氣分の中で、ふいと丁度誂へでもしたやうに、この時宜を得た「惡魔行列」に出會つたので、妙に皮肉な興味を感じたらしく、暗い微笑があつた。

「うむ。」彼はすぐ應じた。「そして君もその惡魔の中へ加へて貰へよ。丁度いゝぜ。」

「なアに、貴樣こそ……全然誂への領分ぢやないか。」

さう小野がいひ返した言葉は、必ずしも杉浦に就て、謂はれのないことではなかつた。杉浦は北越の、ある小さくはない寺の、住職の息子だつた。そして宗教學の、佛教哲學を研究するために、文科の哲學科に入學させられてゐたのだつた。で、彼は、もとより佛書や經典は好きだつたが、併し最近ではすつかり泰西の思想に觸れて、スティルネルやニイチェを好み、一體ならば順當に、印度哲學でも研究して、天晴れその宗旨の僧たちの中、新智識や碩學のやうに仰がれて、大きな一山の住職ともなるべきだつたのに、小野や柳井や池田の仲間に入つてすつかり佛教には叛逆して了ひ、自らそれらの惡魔の子として、ひそかに任じてゐるのだつた。その上、彼らを襲うた當時の、惡魔的な頽廢的な空氣は、彼の幾らか陰鬱な自棄の氣持に影響して、彼には何時となく「惡を通して彼岸へ」といふやうな、一種の惡魔哲學を持つてゐるのだつた。現に彼はさうした思想から、百人の人の小指を作つた鬘をかけることを、婆羅門の惡魔に誓つたために、九十九人の人を殺して、最後の百人目にして釋迦に出會ひ、その手で初めて救はれると云ふ筋の、鳥渡長い戲曲さへ書いた

ことがあつた。

それでさすがの杉浦も、小野の言ひ返しに對しては、承認の苦笑を返したまゝ、

「兎に角、今は何方も惡魔ぢやないか。」

などと言つて、その行列のあとから、笑ひながら從いて行つたのだつた。

彼らが、行列の後から、見やうに依つては怪しい惡の門とも見える、あの大きな仁王門をくぐつて、問答のあるといふ觀音堂の廣場の隅の白煉瓦で建てた佛教傳道館といふのへ、人々に連れて入つて行つた時は、もう館内は一ぱいの群集で、後の方へ立つてゐる外なかつた。が、どうせ妙な興味から、野次半分に來て了つた彼らに取つては、結局その方が却てよかつた。

二人は相並んで、冷たい壁に身を凭せながら、その問答の開くのを待つてゐた。小野はその宗教的な見物にしては、まだ先刻の酒の醉が、かう館内の燈火に照らされては、顏に赤く殘つてゐるのを、誰にともなく恥かしがつてゐた。が、杉浦は淺黑い顏に、八の字鬚と一緒ににやりとした微笑を浮べて、冷嘲したげに舞臺――といふよりは演壇の方を眺めてゐた。

行列はまだ、樂屋に納まり切らないのか、陰氣な、物倦げな、しかし呆けた側の太鼓が、囃子代りに、とき〴〵、間遠に鳴いてゐた。さうして問答はなか〳〵始まらなかつた。

「早くやれ。――やれ、やれ。――紀之國屋！」

土地柄で、そんな懸聲をする野次も、三方の壁側に立つてゐる見物の中にあつた。

それに促されてか、やうやくにして一人の年若い僧が、黑衣に光る袈裟を着け、青白い顏に近眼鏡をかけて、舞臺の横手に現はれた。

「では、これから始めますから、どうぞ暫くの御靜聽を願ひます。これは芝居ではないのですから、その積りで、……」

「イヨ、傳ちやんそつくり。」「十六夜淸心！」

しかしさういふ先から、見物の中の惡魔が、もう混ぜつ返した。人々の哄笑や、しつと叱る制止の聲の中で、その若い僧は眼をぱち〳〵いはせてゐたが、何か聞取れぬ注意を與へて、禮拜するやうに一揖すると、樂屋口に當る入口へ引込んだ。

やがて太鼓の音が、二三度強く打込まれて、場内が靜まるのを待つて、右手の入口から幕をかゝげて、天帝に扮した髯の長い者が、嚴な足取りで現はれて、問答を裁くべき、正面の設けの場所へ、趺坐した。それは稍々滑稽な、子供だましのやうに見えぬでもなかつたが、しかしその儀式が始まると、少し動搖しかけた野次見物も、信者たちの眞面目な叱止に會つたためか、たゞ默つて見てゐた。

續いて一方から、佛弟子に扮した者が、色彩のある法衣を纒ひ、顏を佛顏に彩つて、出てきた。と、同時に他方の口からも、先刻の行列にゐた、鬼の面を被つたものが、足を踏み鳴らして現はれ出た。

すぐ二人の間には、何か譯の分らぬ、問答が始まつた。なんでもその惡魔が、面を被つてゐるために、聲の威勢に似合はぬ含み聲で、それでも頻りに相手に向つて、恐らくは釋尊のことを罵つてゐたらしく、やがてそれを聞いてゐた佛弟子が、四言五言反駁すると共に、自分の用は濟んだとばかりに、言葉も返さず引込んでいつた。さうしてそれと入れ代つて、すぐ又別な惡魔が、大手を振つて現はれた。又問答は始まつた。が、出て來る魔物も出て來る者も、殆どよく解らぬ佛語入りの、それも俄仕込みの白と見えて、時々ぐつと詰つて了つては、後についてゐる僧衣の後見に、付けて貰つて辛うじて言葉を述べた。中にはすつかり上つて了つて、たつた四五言しかない白の、半分位も言へない中に、すつかり絶句して了つて、後から注

意されても何とも言へずに、どんと誤魔化すやうに足を踏み鳴らして、引込んで了ふものすらあつた。問答を始めて見ると、悪魔らしい手強い者は、殆ど一人も見當らなかつた。そしてその言ふことも、ちやんとした哲學的なものででもあると思ひの外、言語だけ厭に綺の文句みたいで、面白くも可笑しくもなかつた。

小野と杉浦とは、暫く辛抱して見てゐたが、初めの皮肉な興味などはすつかり失つて了つて、たゞ間の抜けた悪魔共の科白を、白けた氣持で眺めてゐた。たゞその佛弟子になつた僧の、恐らくはその男が唯一の本役であらう、可なり明快な説教口調に、やゝ歌舞伎式の抑揚をつけて、澱みなく述べ立てるのを、聞くともなしに聞いてゐるきりだつた。もう野次も、呆れたのか黙つて了つた。

「出ようか。」

「出よう。もう澤山だ。」

「……抑々太子悉達多は、頭に精進の兜を頂き、身に忍辱の鎧をまとひ、……」

といふやうな聲が、無意味に館内に響いてゐるのを聞き捨てて、二人はそつと群集の中から、入口を逃れ出るやうに去つた。師走風の吹き立つてゐる、觀音堂の横の廣場には、さすがに人通りも平常より少かつた。

馬鹿らしいやうな、可笑しいやうな、腹立たしいやうな、天の皮肉に對する苦笑感が、暗の中で顔を見合せて、二人を同時に噴き出させた。

「ふゝゝふ、抑々太子悉達多は、頭に煩惱の炎を燃やし、身に愛欲の思ひを焦がし、……か。下らない暇つぶしをした。さあ、何方へゆかう。そこらを一廻りして見ようか。」

小野はそれでも幾らか皮肉に浮立つて、そんなことを言つてゐた。

「いや、もう眞つ直に向うへ行かう。」

杉浦が暗い顔をして、笑ひもしずにさう言つた。

二

そこで二人は公園の方へ出て、そこから更に北の方へ、狭い癖に人通りの多い道を、擦り抜けるやうにして急いだ。明るい、がや〳〵した、誰かに出會ひさうな恐怖のある、そして人力車の激しい往來と、その懸聲とに脅かされ勝ちな街が、しばらくして割合に暗い、小高い土手めいた道へ出ると、やがて彼らの目の前には、怪しい光の城廓が、夜の空を彩つて現はれた。

二人は人々の間に交つて、その廓内へ吸ひ込まれていつた。彼らは殆ど人の流れに從つて、まづ一番手前の横町へ折れた。そして左右に櫛比してゐる、電燈を軒下にずらりとかけ連ねた、建物に威嚇されながら、その下の格子の間から溢れ出る、夥しい電燈や瓦斯の明りを浴びて、その中に蠢く紅紫錯落した化性の者の姿を、それからそれと漁り歩いた。

小野は誰にともなく面映ゆげな心持から、成るべく人々の後に隠れるやうにして、小路の眞ん中から左右を遠く覗き見ながら、立つて格子へ寄つてきたり、坐つたまゝ手招ぎしたり、わざと斜に火鉢に身を寄せて、カン〳〵と煙管の音を響かせたりしてゐる、いろ〳〵な姿態を垣間見た。が、杉浦は寧ろ昂然として、睥睨するやうに正面から覗き込んでは、何かと執念深く物をいひかける妓夫に、皮肉な嘲罵を浴びせたりした。二人は横町を突き當ると、右へ折れまた右へ折れた。そして殆ど卍字形を描いて、あらゆる廓内の通りを、――と小野には感ぜられた。――物色し盡さうとした。もう小野は妙な羞恥と、不安と疲勞とに、いゝ家を見立てて上るなぞといふ甲斐性を、殆ど失つてゐた。どこかへ早く杉浦が、自分たちの落着場所を、見出してくれればいゝと思つて、醉の醒めかゝつ

た顔を、凄風に吹き晒されながら、暗い泣くやうな心持で、人々の後から彷徨して歩いた。が、杉浦は彼の方から、決してそんなことを發議する男ではなかつた。小野はもう荒み切つた心持で、もうどこでもいゝと思つた。

と丁度そこに、中位な店構への、女たちを一體に紫紺色の、高尚めかした服裝に、飾り立ててゐる處があつた。それが小野の眼にはいかにも、腐爛した感じでない素人の處女のやうな印象を與へたので、たゞそれだけのことを理由に、思ひ切つて杉浦に言ひかけた。

「どうだい、こゝは。」

「うむ。」と杉浦は眉を上げて、その格子の中を覗きながら、暗い微笑を浮べて應じた。「いゝぢやないか、小野趣味で。上れよ。」

「君は？」

「俺はこゝを一廻りして、ゴム人形の處へ上る。」

「さうか。ぢやあさうしろよ。俺はもう歩きたくない。」

成程杉浦は、さういふ積りだつたのかと、小野は少し恨みがましい氣がしたが、杉浦の後から同じ樓へついてゆくのが、この際鳥渡業腹の氣がしたので、別れ〲になる決心を定めた。

杉浦の「ゴム人形」といふのは、彼が一兩年前に、ふとした惡友に連れられて行つて、買ひ馴染んだある小店の女だつた。その女は杉浦の、初めてこの場所へきた晩に、物珍らしげにうつかり見て歩いてゐるところを、格子の先で煙管を着物に卷きつけ、ひつ捕へて放さなかつた。杉浦の方でも、その圓い、ちよびつとした、ゴム人形のやうにあどけない所のある女を、稍氣に入つたらしく、その夜初めてそこへ上つた。そして彼はそのときが、殆ど女を知つた初めてだつたので、――彼らはその頃みんなさうして、慘澹たる童貞の最期を遂げたのだつた。――忽ち彼はその女に夢中になつて了つた、それには彼の思想上の破産と、また家庭に對する反抗的な自棄も手傳つた。彼は別人のやうになつて、一時その女の許へ通ひつめた。そして小野を初めいろ〲な友人たちに迷惑をかけた。小野は彼の金がなくて歸れないでゐるところへ、友人の時計を借りて質にいれ、救ひ出して來たこともあつた。小野自身は、さうした世界へ足を踏みいれるや否や、殆ど第一回目に恐ろしい罰を受けたので、一つはそれに懲りて餘り寄りつかなかつたばかりか、杉浦及び彼と一味の惡友たちが、ひどく荒んでゆくのに妙な反抗を以て、決して聖人ぶつてではなく、杉浦のさういふ生活に對して、幾度か忠告めいたことを言つた。そして餘りにその忠言が過ぎたために、二人はあんなに親しかつたのを、一時絶交同樣になつてゐたことすらあつた。そのため杉浦は學校も一年遲れた。そして小野も殆ど愛想を盡かしたやうに、心配しながら放つておく外なかつた中に、親たちが心配して一と夏故郷へ連れ歸られてゐた彼から、同じく歸省中の小野へ宛てて、友情の恢復を願ふ懷しげな手紙が來た。それには青年らしい感激で、今迄の彼の生活から脱離して、再び小野たちの手へ歸りたい由を、涙を以て書かれてあつた。矢つ張りあんな生活をして、強ひて離れてゐる間でも、君が一番懷しかつたと書いてあつた。感動し易い小野は、勿論それを涙なしに讀み得なかつた。彼は杉浦に對する自分の友誼が、やうやく再び通じたことを、心から喜んで返事を出した。杉浦の方からも更に折り返して、更に感傷的な手紙が來た。小野もすぐに酬いた。二人の友情は忽ち復活した。さうしてその九月、新學期が始まつたときは、二人は前にも增して、殆ど一刻も離れないやうな、新しい友誼の中にあつた。二人は同じ下宿の同じ部屋にもゐた。そして決して喧嘩

などをしたことはなく、都合で下宿は分れ〳〵になつても、毎日必ず往來してゐた。その間杉浦はもう、その女の許へも熱中して通ふやうなことはなかつた。二人の友情の復活が、杉浦を生活上の危機から救つた、さうも言へないことはなかつたのだつた。

かうして一二年過ぎた。勿論その間には、時時は杉浦もその女を訪れたが、それは寧ろ昔を忘れ得ぬ美しいことのやうに、小野にも考へられる程になつてゐた。で、彼は今杉浦が、そこへゆかうとすることを、鳥渡厭な氣がしないでもなかつたが、引止める氣は更になかつた。

「ぢやあ、明日の朝、僕の方からいくから、そこで落合ふことにしよう。一人で歸つちや厭だぜ。」

「うむ。ぢやあその積りで待つてるよ。」

二人はかう打合せをして、そして分れ〳〵になつた。

小野は思ひ切つて、一人その店へ上つて、不面目な不安な一夜を、淺い眠りのうちに過さねばならなかつた。それは誇張でもなんでもなく、小野に取つては一種の苦痛の多い一夜だつた。……

翌朝、約束に從つて、小野に杉浦と落合ふために、見知つてゐるその女の樓へ赴いた。そして朝の白々とした光の中に、淺ましく取散らかつてゐる玄關に立つて、その旨を番頭めいた男に通じると、やがて二階から懶げに、ばたりばたりと草履の音を立てて、ゴム人形それ自身がおりて來た。

「お上んなさいよ。今起しますから。」

彼女は小野をさも十年の知己のやうに、そのちよなりとした顏を、親しげににつと笑つて見せて、かう勸めた。で、彼にそんな入口に、立つて待つてゐるよりはと思つて、一とまづ二階へ上ることにした。

上つて、二階の隅の、彼女の本部屋らしい處へ入つて見ると、杉浦はもう既かに起されたと見えて、長火鉢の横で着物を着かへてゐる所だつた。

「やあ。」「やあ。」二人は不面目な顏に、操つた笑みを浮べて、強ひて浮々と挨拶し合つた。

「まあ、お出花でも住し上れな。うちの人の支度ができる間。」

女は長火鉢の處へ、小野を請じてからもてなしたりした。

小野はそこへ坐つて、すつかり無智な好機嫌で、應せさるを得なかつた。

「いや、有難う。――早く迎ひに來て濟まなかつたね。もつと後朝を惜しみたいんで、俺を殺したくはないかい。」

「本當よ。三千世界の鳥を殺してね。」

女も無智な洒落を返した。

「だが、お禮をお言ひよ。俺がこの男を連れて來てやつたんだぜ。」

「有難う。お禮をいふわよ。けれど、どうせ連れて來てくださるんなら、もつと滋々連れて來て頂戴よ。ほんとにこの人つたら、あの後まるで忘れたやうに、一年に一度位しか來ないのよ。七夕さまよりひどいわ。」

女は杉浦の帶をしめ袴を穿くのを、横目でちらと睨んだ。

「あの後つていへば、あの時分二三度、こゝへ杉浦を迎へに來たつけなあ。」

小野もそんなことを思ひ出して、鳥渡感慨深げに四邊を見廻した。大きな、なんのための人形か、硝子箱の中へ大切さうにいれて、簞笥の上にあつた。床柱のやうな處には、市村羽左衞門の助六姿が、舊式の繪葉書插にかゝつてゐた。それらはすつかりそのときと、違つてゐないやうな氣さへした。

「ほんとにあの時分は、面白かつたわねえ。だ

けど杉浦さんは、ほんとに變つた學生さんだつたわ。格子口に立つてゐると、ほんとに口の惡い皮肉なんぞばかり言つて、上つて了ふと、默つてばかりゐるんだもの。そつと床の中で、泣いてたりしたこともあつたわね。初心だつたのよ、あの頃は。私時々思ひ出すのよ。あの頃はほんとに面白かつたわ。」

「ふん。」小野は鳥渡苦い顏をした。「俺たちはお蔭で隨分面白くなかつた。」

「ぢや、ゆかうか。」

杉浦は丁度支度ができて、さう促した。

「貴方、お顏は。」

「顏なんざア家へ歸つてから洗ふさ。」

小野もできるだけ早く、こんな處にゐられないやうな氣持で、すぐ立上つた。そして二人は梯子段をおりて、女や番頭たちの別れの言葉を後にしながら、誰ともないが誰か見てゐやしまいかといふ不安の中に、つと玄關を飛出した。

二人はすぐ電車に乘るのが厭で、暫く歩くことにした。大門を出て、近道の日本堤をすぐ横に切れると、この忌はしい歡樂境の裏の斷面が、鉛色の切小口のやうに、處々に四角い窓を見せて、溝に沿うて立竝んで見えた。二人は見たくないものを見たやうに顏を外向けて、足を急がせた。冬の灰色の靄が、冷たく淡く四邊を罩めて、寢不足に荒れた彼らの頰に、朝の大氣はぴり〳〵と浸みるやうだつた。二人は默りこくつて、互の顏をも見ずに、上野の山の方へ出た。さうして歩くのが、昨夜の惡行の償ひででもあるかのやうに、また何ものにか課せられた罰ででもあるやうに。

彼らが歩いて、本郷の小野の下宿まで歸つてきたのは、もう十時頃だつた。それから二人は、うそ寒い小野の部屋に坐つて、そして默つて顏を見合せた。

「どうだい、湯にでもいつて來ようか。」

「ゆかう。」

二人は女中に、湯に入つてくる間、牛肉を取つておくやうに命じて、そして近所の錢湯へいつた。湯から上ると、幾らか夜來の惡行が洗ひ去られたやうに、二人は淸々して歸つて來た。もう命じたものは、薄笑ひを浮べた女中の手によつて、部屋の中に運ばれてゐた。焜爐に火はかつかと燃えて、薄暗い室內も暖かさうに見えた。

「有難い。」

小野は溜息と一緒に、さう甦つたやうな聲を出して、その火の傍に坐つた。杉浦もいそ〳〵とその向うに座を占めた。さうしてやがてぢゆーつと肉の煮える音と共に、彼らの箸使ひは忙しくなつていつた。

やがて彼らは腹の滿ちると共に、幾らか勇氣を恢復して來た。が、それでもまだ、夜來の惡行の後悔が、重く彼らを壓迫して、曇り勝だつた。どうかした拍子に、

「あの、鳩はどうしたらうな。」

と、小野はふとさう口に出して見た。が、杉浦はたゞ、

「さあ、どうしたらう。」

と、暗い顏をしただけだつた。さうしてまた話は途切れて了つた。

すると、そのときだつた。廊下の方から、ばたばたと女中の急いで走つてくる足音がして、彼らの部屋の前で止るか止らない中に、から呼ぶ聲が聞えた。

「小野さん。お電話ですよ。黑田さんと仰有る方から。」

「うむ。」小野は陰鬱に答へて、黑田が、峻烈な新進の批評家で、矢つ張り勝見先生門下の、彼らと親しい仲であるが、今時分なんの用事があるのだらうと思つて、急いで電話口へ出て見た。

「あゝもし／＼、僕小野ですが。……」
さう言ふか言はない中に、聞き馴れた黒田の、さらでも甲ン高い調子が、少し急き込みがちに、受話器の中できんといふ程鳴り響いた。
「あ、小野君ですか。僕は今勝見家に來てゐるんですがね、先生がもう危篤なんです。あと一二時間持たれるかどうか解りません。」
「はあ、さうですか。」
小野は受話器を耳に當てたまゝ、電光に打たれたやうに驚いた。そして何者にか、いまの自分たちの有様を、叱咤されたやうにはつとなつた。
「君と柳井君とは、木曜日にくる人たちの中でも、特別に先生に親しい方だから、特別にお知らせしろといふので、僕からお知らせします。君からどうか柳井君の方へ、すぐ知らしてくれ給へ。此方から電報を打つてもいゝが、居所が分らないから。……」
「あ、さうですか。分りました。ぢやあ先生の死目に會へるやうに、すぐ其方へ伺つてもいゝでせうか。」
門下生とはいつても、たゞ木曜日に話を聞きに上るといふだけで、他の古い黒田たちのやうに、お宅の方とはさう深い交際もない小野は、それだけの遠慮をしなければならなかつた。
「今からすぐくれば、死目に會はれるかも知れません。先輩や門下の人たちが皆來てゐて、家が狭いから一般には知らしてないんだけれど、君だけ位なら來てもいゝでせう。すぐ來給へ。ぢや柳井君の方は宜しく頼みますよ。」
「えゝ承知しました。――大變な事になりましたな。」
小野は思ひ出したやうに、上づつた聲でさう付け足した。
「兎に角、すぐ來給へ。ぢや左様なら。」
「左様なら。――」
小野は心臓がわく／＼して、思はず慄へる手で受話器をかけて了ふと、慌てて電話室を飛び出した。さうして長い距離でも駈けて來たやうに、妙に息を切らして棒立ちになつたまゝ、杉浦に告げ知らした。
「おい杉浦。大變だ。勝見先生が危篤だつて！ 黒田君からさういふ電話なんだ。僕はこれからすぐに行つてくるから、君も一旦下宿へ歸つて、いろ／＼な用を済まして了つたら、（彼らにはその當時出してゐた同人雑誌の事で、發行人になつてゐる杉浦には、其日いろ／＼な用務がある筈になつてゐた。そしてまた黒田の成るべく一人で來いといふやうな、口向もないではなかつた。事實また杉浦は、柳井や小野に比べれば、先生にさう親しいといふ方でもなかつた。）一度僕に電話でもかけて見て、その都合でやつて來ないか。兎に角僕はかうしちやゐられない。」
「さうか。ぢやあいつて來給へ。後はいゝやうにするから。――さうか。先生もそんなに悪かつたのかなあ、さういへばどうも昨夜から、なんだか胸騒ぎがしてならなかつた。」
杉浦は暗い額に例の八の字を寄せて、驚いてそんな風に歎じてゐた。
「さうだ。この前兆だつたんだ。それに君が鳩なんぞ捉へてくるんだもの。」
小野は眞面目で、袴を締め直しながら、そんなことを言つてゐた。そして袴を締め終ると、あたふたと帽子を取つて、
「そんなら行つてくるよ。――あゝ、ほんとにどうか生きてゐてくれればいゝがなあ。……」
と呟きつゝ、急いで下宿の玄關の方へと出ていつた。

三

先生の危篤！ それは全く今の小野に取つて、晴天の霹靂の如きものであつた。殊に、昨夜は

妙な不安に驅られてゐたとはいへ、あゝいふ人にも言へない惡所にいつてゐて、悔恨に滿ちて歸つて來たところへ、突然受取つたその報知は、凶報そのものの性質と共に、彼の全良心を妙に搖り動かした。彼はなんの理由もなく、自分の昨夜の惡行と、先生の危篤とが、原因結果をなしてゐるやうに、ひそかに思はれてならなかつた。それだけに下宿を出た彼の心は、十二月初旬の薄曇つた、灰色の重い空氣の中で、深い悔恨の色に染められ、重く胸を壓されてゐた。彼は氣の急くまゝに、殆ど半ば駈足で、電車通りの方へ出る間、そのことに思ひ至つては、足を停めるやうな思ひで、心の中でなにものにか詫びた。そしてこの凶報を天の警告と見、先生の叱責とも見て、以後は決してそんな所業を、あんな生活を繰り返すまいと、なにものにとも知れず誓つた。「惡かつた。もう決してしまい。決して。……」そんなことを呟きながら、彼は氣狂ひのやうに足を早めたり、かと思ふと急に緩めたりした。そして五分とたゝぬ中に、その正門前の電車の停留場に着いた。

が、彼は電車に乘る前に、まづ鎌倉にゐる柳井のところへ、電報を打たなければならなかつた。彼は更に急いで、その近所の青塗りの小さな郵便局へ赴いた。さうして賴信紙を乞うて、電文を書きつけた。初め、「センセイキトクスグコイ」と書いたが、ふと思ひ返して、それが向うで誰か柳井以外の人によつて開かれた場合、すぐそれと解るやうにと心遣ひをした上、先生の名が局員の目に觸れれば、幾らか特別な手續きを取つてくれないものでもないと考へ、そのうへに先生の號を書き加へた。そして更にまた柳井が、昨日會つた時の話では、今日彼の歡迎會がある筈なので、彼の家とその鎌倉の料亭とに向け、同文のを二通作つて、その宴席半ばに、飛報に接して驚く彼の姿を、氣が急く中にもはつきり想像しながら、そこの金網口へ差し出した。

併し局員は、全く無感動で受取つて、そして極めて事務的に言つた。

「同文電報ですね。三十錢です。」

小野は懷中を探つて、生憎それつきりしか殘つてゐない、五圓紙幣を一枚取り出した。丁度小錢拂底の頃だつた。

「もつと小さいのはございますまいか。」

小野は嚢底を調べたが、そこには辛うじて、電車賃に足りるか足りぬ程しかなかつた。

「ありません。どうかそれで取つて下さい。」

彼は氣が氣ではないので、嚙みつくやうに言つた。

「此方にも釣錢がないんですが、どうかしてきて頂けますまいか。」

小野は局員が、いかにも無感動なのに、内心ひどく腹を立てた。が、腹を立てても仕方がないので、訴へるやうに調子を和げて、そして言つた。

「今、その電文に書いてある通り、勝見といふ僕らの先生が、危篤な場合なんですからね。僕急いでゐるんです。だから、どうかして下さい。」

局員は、やうやく勝見漱石先生の存在をそのとき認めたらしく、また小野の緊張した顔付にも、少し氣押されたらしかつた。

「さうですか。では電報料は、後でお屆け下さい。打つておきますから。」

「では、さうして下さい。」

小野は急いで郵便局を飛び出すと、向うからくる電車に、間に合ふやうに停留場へ駈けつけた。料金は貸して貰つて鳧はついたものの、郵便局での鳥渡した停滯が、ひどく彼の氣持を急かせてゐた。一體に彼は何事にも、かつと逆上せて了ふ性質だつた。

彼は、電車に辛うじて飛び乘つた。そして心

急く身體を、吊革に縋つて搖られてゐた。併し、さうして心急きながら、彼は四邊の乘客を見廻して、なんとなく先生の危篤であるといふことを、皆に知らせたいやうな氣がした。誰かがゐたら、きつと高聲に、話したに違ひなかつた。見知らぬ乘客たちが、新聞をひろげて、そのとき矢つ張り先生と同じく、危態に瀕してゐたある有名な將軍の、病狀が大きく出てゐるのを、讀んでゐる姿を見ると、彼はなんとはなしに腹が立つた。そのあばた面の、大きな老將軍のことは、彼も決して嫌ひでなかつた。寡默でのつそりした將軍は、かつて日露戰爭の總司令官をしてゐたとき、地圖を擴げてゐるところへ、敵の一彈が幕營のすぐ近くへ、おちて炸裂したことがあつたさうだが、そのとき將軍は思はず地圖の上へ、あの大きな顏を伏せて了つたが、やがてそれが爆發して了ふと、暫くしてゆつくり顏を上げ、「ア、おちたか。」と呆けた調かきで呟いて、その方を見やつたといふ話も、彼が非常に好きな逸話だつた。だからその將軍の容體も、興味を持つて日々の紙上で注意してゐないではなかつたが、今はもつと重大な人のことが、彼の心をすつかり占めてゐた。彼はその新聞を讀んでゐる乘客に向つて、「そんなことではない。もつと肝腎な人が死にかゝつてゐるんだ。」と注意してやりたいやうな氣持でゐた。

　牛込行へ乘り換へるために、松住町の停留場で、一旦下車すると、そこに伊東といふ彼らの高等學校時代の、獨逸語の先生が黑い外套を着て立つてゐた。その姿を見た時、彼はその先生には惡いが、なぜかその小柄な黑い姿に、凶兆といふやうな氣を起した。が、併しすぐその伊東先生も、勝見先生の家へ見舞に行くところだなと思つた。伊東先生は勝見先生と大學の同期生だつた。そしてその先生の現在の住んでゐる駒込の家は、勝見先生の處女作で名高い、例の苦沙彌先生の家だつた。それはもと〳〵伊東先生の家だつたのを、その持ち主が仙臺の高等學校へ行つてゐる留守中、友人の勝見先生が借りてゐたといふ話は、門下生の間にもよく知られてゐた。

　で、この際小野は、高等學校にゐた時分、かなり怖い感じを抱いてゐたのも忘れて、慕はしげに帽を取つて挨拶した。

「先生も勝見先生の所へいらつしやるのですか。」

「えゝ。」伊東氏は小さなきりりとした顏の、黑い聰慧さうな眼をしばたゝいた。「大分惡いと聞いたから、鳥渡見舞に行かうと思つて。」

「もう危篤ださうです。私もこれから參るんですが、死目にお會ひできればいゝと思つてゐるんです。」

「そんなに惡いんですか。」

　伊東氏も最近の急變は、まだ知らなかつたと見えて、小さな顏の中の眼を瞬つた。

　そこへ電車が來たので、小野は伊東氏と一緒に乘り込んだ。その電車は更に混んでゐて、二人は近く相接して、立つてゐなければならなかつた。

「一緒に大學にゐる時分は、勝見もあんな小說家にならうとは、夢にも思つてゐなかつたがね。」

　伊東氏はそんな風に話しかけた。その口調にはなんとなく、官學的な教授氣質で、放肆な創作家といふやうなものに、憐愍を持つてゐるやうだつた。そして殊に在學當時から、小野らの創作的傾向に、さう好意を持つてくれないのを知つてゐるので、彼は幾らか僻んでさう取らざるを得なかつた。

「はアー。」彼はそんな風に應じてゐた。先刻の、人に話しかけたいやうな心持は、なんだか

もう影をひそめて、一人で先生の生涯や業績を、思ひ沁めたいやうな思ひだつた。

併し伊東氏の話は、そんなことから引續いて、最近の先生の創作にまで及んだ。

「……此頃のはなんだか、心理學の講義を聞いてゐるやうで、私らには面白味が解りません。」

「はあ、さうですかなア。」

小野は仕方なしに、そんな風な相槌を打つて、聞いてゐなければならなかつた。彼にはもうなんだか、時間の經つにつれ、電車の緩いのにつれて、さうした批評的な話題に、固執することの出來ないやうな、亂れた氣持が起つて來た。彼は伊東氏の平靜を、羨ましいやうな腹立たしいやうな、焦立つ氣持で眺めてゐた。――彼の氣持は確かに、平衡を失してゐた。

牛込柳町の停留場でおりると、彼の心の中なる焦慮は、先生の家まで歩いてゆく餘裕を起させなかつた。それで、猶も電車をおりてから、

「勝見君が、あゝいふ小説をかけるのも、學問の根柢が深いからですよ。」と訓戒的に話しかける氏を、思ひ切つて離れて、

「なんだか氣が急きますから、失禮ですが俥に乘ります。」と、そこの車夫を呼んだ。

「さうですか。どうせ僕なぞは、今急いで行つたつて仕方がないから、歩いてゆきます。」

「では、お先に、失禮します。」

小野を乘せた俥は、眞つ直に榎町の方へ走つて、それから先生の家のある、狹い横町へ曲り、そこの黑塗りの門前で止つた。

第三章

一

小野は急いで門内へ入ると、果して先生の死目に間に合つたかどうかと、胸をわく／＼させて毎もの玄關口の方へ赴かうとした。と、その勝手口の方へ廻る垣の切れ目に「御見舞の方はどうぞ此方へ」として紙片に指を書いて示してあつたので、さてはまだ大丈夫なのだと思ひながら、その指示のまゝにお宅の横手へ入つて行つた。見ると、そこの茶の間に、先生の知友らしい人々や、主だつた弟子たちが澤山集まつてゐる樣子だつた。それに依つて、小野は更に吻と間に合つた安心を覺えながらも、勝手知らないので逡巡して、そこの緣側へ進み寄つた。何だか彼は自分などが、かう云ふ際に先生の死目に會ひに來る、資格なんぞないやうな卑下を覺えながら。……

その座敷の中には、先生と同輩の親友で、小野たちがこの間まで敎へを受けてゐた大學教授の小菅氏や、高等學校の先生の倉橋氏、住氏、齋藤氏などの顏も見えた。その上見知らぬ童顏の、長者らしい風格の人や、鷹爪らしい髭を生やした學者らしい人などが、眞ん中に切つてある爐を圍んで、默々と坐り合つてゐた。そしてそれらの人々に交つて、大概小野に取つては先輩の弟子たちが、ひそ／＼と心配の囁きを交しながら、何かしら立働いてゐる樣子だつた。小野はその漠然とした壓迫の中に、緣際に立つて誰にともなく、頭を下げて挨拶した。

「あゝ、小野君か。――此方へ來給へ。」

と、やうやく向うの座敷の隅にゐた一團の中から、先刻電話で知らして呉れた黑田が、立つて聲をかけて呉れた。小野はやつと許しを得た思ひで、緣側から上ると、それらの先生たちの後を通つて、恐る／＼その方へ行つた。そこの、簞笥を置いてある間の隅には、弟子たちの中でも、割合に若い人たちが、先輩の中でも一番氣の安い、米田氏などと一緒に集まつて話をしてゐた。

「一體、御容體はどうなんだい。」

小野は固くなつて、そこにきちんと坐り込みながらも、まづ第一にさう聞かざるを得なかつた。

と、黒田が毎もの甲ン高い調子をさすがに低めて、併し乍ら雄辯に語り出した。

「うむ。まだ大丈夫なんだ。が、先刻はもう駄目だといふんで、皆が告別に病室へ入つたんだがね。最後に、殆ど絶望的に、念のためにやつたカンフル注射が效いてねえ、今朝からもう何度やつても反應がなかつたのに、それをやると先生は急に頭を動かし出したんだ。それでやつと又一縷の望みを得て、僕たちは病室から出て來たんだが、僕は何だかもう大丈夫だと思ふんだ。あれで奇蹟的に先生は癒りさうな氣がするよ。現に前にも、修善寺で胃潰瘍を起した時も、やつぱり内出血で危篤に陷りながら、甦つた例もあるんだからねえ。今度も必ず奇蹟的な力が起つて、恢復するに違ひない。この際奇蹟の起ることは決して不自然でない氣がするよ。是は何も僕が、先生に對する愛惜の念からさう氣休めに思ふんでなくて是迄に科學的な手當を盡して來て愈々もう駄目だといふ最後の所まで來た時、殆ど諦めのためにやつた絶望的なカンフルの一本が、思ひがけなく急に效いたといふのは殆ど人力を盡し切つた後に、天の力が働きかけたとも見られるからねえ。もう醫術の上では、凡ゆる方法を講じて了つて、もう後は自然の治癒を待つしかないと云ふ時に、それが現はれさうになつて來たんだからねえ。どうしても僕は先生は助かると思ふよ。先刻から僕の直覺がさう感じてゐる。きつと癒るよ。…」

黒田は眉を上げ、口の端を力を入れるやうに歪ませて、吾と吾が信念に燃えながら、さう小野に説明して聞かせた。彼はさういふことに依つて、何よりも己を信じさせ、そしてその信熱で自分を安心させたかつたのだ、その上、彼のその熱した語調は、周圍を信じさせるに十分だつた。

「僕も何だか先刻から、さういふやうな氣がしてゐた。何しろ修善寺のことがあるんだからなあ。」

米田氏も言ひ出した。氏は前にその場に立會つてゐただけ、今度も又それだけで終るに違ひないと信じてゐるらしかつた。

黒田はなほも説明が足りぬよりか、自分の信念を何處迄も宣傳するやうに言ひ續けた。

「眞島さん（主治醫の名）に聞いた所によると、何しろ先生の身體ほど粘り強い生命力を持つてゐるものは、珍らしいんださうだからねえ。普通人だと死期の脈搏が大抵百二十だといふんだけれど、先生のはもう百三十を越しても、まだ持ち續けてゐるさうだし、又一體人が死期に際しては、脈搏がどん／＼上つてゆくのに反して、體温がどん／＼下つてゆくんで、その表が丁度上るのと下るのとで、十字形に交叉するため、それを死の十字といふんださうだが、先生のはとうにそれを越えて、まだ生命を保つてゐるんだからねえ。その赤と黒との線を先刻温度表で見たんだが、實に凄いやうな氣がしたよ。それに先生は飽く迄意識鮮明ときてゐるんだらう。先刻もその最後のカンフルで、やうやく昏睡から覺めると、すぐ何か食ひたいと仰有つて、一匙赤酒を飲ませて上げたら、『甘い』といはれたさうだからねえ。そしてその間にも、眞島さんに、今死にたくないと洩らされたさうだからねえ。――先生もあゝしてやうやく自分の藝術觀を確定されて、それに『明暗』が未完成の儘では、現世に未練があるといふよりは、藝術上の最高要求で、死ならたつて死に切れないだらう。――兎に角さういふ話で、先生の心臟と頭腦だけは、何處迄丈夫に出來て

ゐるんだか、解らないんださうだから、さうい
ふ粘り強さで、この悪い絶頂まで持ち堪へて
來た以上、この上悪くなりつこはないよ。是
からはきつと下り坂で、自然と順調になつてゆ
くよ。……」
　黒田はなほもその信念を、強調してやまなか
つた。
「さうだね。僕も御病氣と聞いた初めから、決
して先生は死にやしないと思つてゐた。」
　小野も初めて口を插んだ。
「大丈夫とも。死んでゆく人なら、から危篤狀
態が永びいてゐはしないよ。」
　米田氏も、平明な言葉で、黒田の言葉を要言
するやうに言つた。
　座にゐる皆は、うつそりと黙つてゐる書家の
須山氏も、小野より少し遲れて來た大學生の原
口も、又その近處にゐた先輩や知人たちも、みん
な希望を持ちたい／＼と思つてゐたので、この
黒田の確信は、殆ど誰もの心に深く喰入つて、
疑ふ餘地のない事實のやうになつて了つた。
　信じ易い、人の影響を受け易い小野も、勿論
さう信じた。そして心から、先生の蘇生を念じ
てゐた。が、併し先生を死なしたくない熱望に
燃えてゐながら、彼の心の何處かには、先生の
死を庶ふやうな、一種の慾望があるのを、意識
せざるを得なかつた。彼は今先生に死なれるの
は慈父を失ふより悲しかつた。あの何となく嚴
肅でありながら、しかもすつかり包まれて了ひ
たいやうな温容に二度と會へなくなるといふこ
とは、折角先生に親しみを感じ出し、先生の幾
らか特別な愛護を受け始めた彼に取つて、何よ
り悲しむべき事に違ひなかつた。けれども又そ
れと同時に、こゝで先生の死といふ、一つの大
きな出來事に會ふことは、何となく彼自身の人
生を劃す、一大盛儀であるやうな氣がした。そ
して今自分がその文學史上にも特記さるべき、
先生の死に際會して、一人の登場人物であり
得るといふことは、何となく一種の虚榮心を喚
るのだつた。——それは必ずしも先生の死を、
庶ふ譯ではなかつたが、さういふ氣持が少しで
も自分の心内にあることを意識すると、彼は堪
らなく自らを卑しんだ。そして先生の蘇生を、
信じて止まぬ黒田の熱した信念に對して、心か
ら自分を恥かしく感じて、暫く默り込んだまゝ、
下を向いて坐つてゐた。
　その後の、診療に從事してゐた醫師たちが、
病室である先生の書齋の方から、一時に引上げ
て來た。主治醫の眞島氏といふのは、大學病院
でも有名な人だが、もと先生が四國の松山に中
學教師をしてゐたとき、教へ子の一人だつたと
いふので、その後先生が糖尿を病んでからの、
熱心なる主治醫だつた。その醫師は自分の師で
あり、且つ掛け替へのない吾が國の文壇の、生
命を握つてゐる病痛のために、廣い額を蒼ざめ
させ、近眼鏡の奥の眼をしば／＼と瞬いて、
少し前屈みの上半身を窄めながら、茶の間の前
の廊下へ現はれた。つゞいて半白な長い髮と髭
清さうな垂れた顔と、少しも物に動じないやう
な沈毅な近眼を光らした栗氏や、小柄だけれど
もゆつたりと肥つた、圓滿さうな堂本氏らの、
相談のために聘せられた有名な専門家たちが、
相前後して出て來た。その後には更に、近所の信
頼すべき開業醫で、眞島氏を助けて診療に從事
してゐた矢部氏や、眞島氏が連れて來た自分の
助手などが、病床日誌や體温表やノートを携へ
て、ぞろ／＼と此方へやつて來た。醫師たちは
カンフルの反應があつた後の、先生の病態を一
つかり診察して、その取るべき手段を打合せる
ため、茶の間の次なる控室へ集まつて相談する
所らしかつた。
　その主治醫の眞島氏の姿を見ると、先刻から
まだ一人で、先生の快復を主張してやまなか

つた黒田は、早速初めからよい返事を促すやうな口調で問うた。

「どうです、希望を持つてもいゝんでせう。」

「いや、もう偶然を待つばかりです。」

と、併し眞島氏は、沈んだ聲で答へたまゝ、廊下を通り過ぎて控室の方へ行つて了つた。

併し皆は、眞島氏のその言葉を聞いても、それは醫師として盡すべきことをつくした人が、謙遜の言葉でもあるやうに、決して絶望はしなかつた。その所謂偶然がきつと現はれるに違ひないと。――

「なに大丈夫だよ。きつと、」黒田はなほも言つた。「まだあゝして醫師たちが相談に引上げてくる位だから、兎に角まだ大丈夫なんだよ。この小康を得たまゝで、きつと癒るよ。」

そこへ醫師たちの後から、鳥渡間を置いて、先生の夫人が姿を現はした。

小野はそれ迄、整子夫人に會つたことはなかつた。書齋で先生にお目にかゝる以外には、その時まで家の方とは少しも交渉のなかつた彼は、たゞ先生の小説に、色々な形に代へられて、夫人の姿が表現されてゐるのを、想像によつて描いてゐただけで、實際の夫人を見たのは、それが初めてだつた。

夫人は思ひの外に肥つた、脊の割合に低い方だつた。併し、引つめた束髪に結つて、黒い紋付の羽織を着てゐるのが、よく身體と調和が取れて、屡々見受けるある貴婦人型の、女丈夫といふやうな感じを、一と目で小野に起させた。殊にその眼は、一重瞼がはつきり切れて、幾らか強い凝視的な質のものだつたので、何となく初對面の小野にも、意力の強い人のやうに、少し怖く思はれた。が、決して感じは、惡い人ではなかつた。馴れ難いが、馴れれば手頼りになる女。さういふ感じが、その時から既に小野にも起きたのだつた。

夫人は部屋の内へ入つて來て、坐りながらあたりの人々を見廻して訊ねた。

「大寺さんは？」

大寺といふのは弟子たちの中で、先輩では割りに年若い方ではあるが、一番親しく先生の家へ出入し、先生からも一番愛せられてゐて、謂はば文學上の弟子たちの代表的な相談役だつた。それで夫人も何か計るべきことがあれば、まづこの人に相談したり、世話を頼んだり、命令したりするのだつた。

「大寺ですか。大寺はお醫者さん達の方へ、從いて行つたやうですよ。何か御用ですか。」

と、その時傍にゐた、これは弟子の中でも、一番古くから親しいのを以て任じてゐて、先生の家へも可なり親しく出入してゐた上に、宮内省の高い役人をしてゐるので、文學者の弟子たちなぞよりも、ずつと頼みになる世話役を以て、自ら任じてゐる松本氏が、横合から代つて答へた。

「いえ、大寺さんでなくてもいゝんですがね。」

夫人はもう一度皆を見廻しながら、さりげなく言ひ出した。「今、日出新聞社の寫眞部の方が來ましてね、病床の寫眞を撮らして呉れと言ふんですが、どうしませうかと思つて。――」

「病床の寫眞ですつて、まだそれぢやあ新聞社の方では、こんなに惡いとは知らないんでせう。今寫眞を撮らうなんて。そんなことは許せませんよ。」

松本氏はすぐかう反對した。

「奥さん。それやあ勿論おやめになつた方がいいでせう。あの意識のはつきりしてゐる先生に、今そんな寫眞を撮ることが知れたら、急に何とか不快に思つて、病狀が昂進しないとも限りませんからね。」

米田氏もすぐ此方から言ひ出した。

「だが寫眞班なんて、實に亂暴だなあ。今先生

が生死の大切の瀬戸際だといふのに、寫眞を撮つてゆかうなんて。」

黑田も憤慨するやうに言つた。

併し夫人は肯はなかつた。

「でも、私も撮つて置きたいんですよ。記念のためにね。」

さういふ夫人の頰には、淋しい絶望的な、作りつけたやうな微笑があつた。その夫人の諦めたやうな、强い餘裕のあるやうな態度には、みんな壓されたやうに、暫く默つた。

そこへ隣りの間から、話を聞傳へたと見えて、大寺氏が入つて來た。

「ねえ大寺さん。どうかして今の中に、私寫眞を撮つて置きたいと思ふんだけれど。」

夫人の言葉は飽く迄、自分の考へを實行したいといふ、强い響を持つてゐた。

「さうですね。」大寺氏も鳥渡考へたが、すぐ又止めるやうに言つた。

「でも奧さん、今そんなにまでして、寫眞なんぞ撮つて置かなくたつて大丈夫ですよ。もつとよくなつてから、ゆつくり撮つた方がいゝぢやありませんか。」

「快くなつてもならなくつても、何だか私記念に撮つて置きたいんですよ。」

夫人はなほも氣强に主張した。

小野はその夫人の主張を、初めは一種の惡い衝撃の感じを以て聞いてゐた。が、あゝまで言はれるからには、何か思ふ仔細があるに違ひないと思つた。そしてこの際弟子たちの、感傷的な反對を押してまで記念のために撮らうといふ、冷靜な諦觀の態度に、一種の畏敬を禁じ得なかつた。そして少くとも夫人の、その意志だけは尊重するのが、この際の道だと思つた。で、弟子の末座から、差出がましく感じて額を赧めながら、恐る〳〵その時から口を出した。

「解らないやうには撮れないんでせうか。」

「マグネシュームをどかんとやらなくちやならないんでせう。あれをやられちやあどんな病人だつて驚いて了ひますよ。」

黑田が、それにつれて、から言ひ添へた。

「マグネシュームを焚かずに、そつと撮れるかどうか、寫眞部の人に聞いてみたらどうでせう。」

小野は夫人へといふよりも、寧ろ大寺氏の方へ向つて、から提言して見た。

「さうだね。それなら差支へなささうだね。――ぢやあ一つ聞いて見ませう。」

それで大寺氏もやうやくさう承知した。

聞いて見ると、また閃光粉を使かなくても、少し長く時間をかければ、そつと撮れるといふことに定つた。小野は何よりも自分の提言が容れられて、夫人に存在を認められたらしいのが、ひそかに嬉しい氣がした。

その時、小野よりも遲れて來た原田が、まだ夫人に挨拶をしてゐなかつたと見えて、隙を見て進み出た。そして夫人の前へ頭を下げて詫びるやうに言つた。

「奧さん。今度は飛んだ事になりまして。……些とも知らなかつたものですから、早くからお手傳ひに上らないでゐて、失禮致しました。……」

小野もそれを見ると、自分も改めて挨拶すべき時だと思つた。それで原田の後から、同じやうに進み出て、そして原田の挨拶が濟むと、賴むやうに彼に言つた。

「原田君。僕、奧さんに初めてなんだが。……」

「さうかい。ぢやあ、――奧さん。是が小野君です。」と原田はすぐに夫人に紹介して吳れた。

「今度は大變なことになりまして。」

小野はさう曖昧にいひながら、改めて丁寧に頭を下げた。

「あゝ、貴方が小野さんですか。」と、夫人も改めて、小野の顏を見守つたが、ちらと微笑を浮

べて更に言ひ出した。「貴方ですね。この間先生の處へ、呑氣な手紙を寄越したのは。」

「さうです。」小野は思はず赤くなつた。「こんなにお惡いとは、少しも存じませんでしたので、ついあんな呑氣な手紙を差上げたりして、ほんとに濟みませんでした。」

それは五六日前に、病床にゐる先生を慰めようと思つて、自分たちが先生に會へぬ淋しさや、日々新聞へ出る先生の小說「明暗」に對する感想や、自分たちの近況などを、幾らか諧謔的な輕さで通信したものだつた。

「あれを大寺さんに見せましたらね、大寺さんが此奴こんな呑氣なことをいつてゐるから、一つ嚇かしてやりませうよつて、御返事を私の名で上げましたけれど、驚きはしませんでしたか。」

夫人は更にかう言つた。

「驚きましたが、併しこんなにお惡いとは、まだ夢にも思つてゐませんでした。」

小野は詫びるやうに言つた。が、それでも夫人に、自分の存在を認められてゐたことが、更に嬉しいやうな得意なやうな氣だつた。

「奥さん。」原田がその時傍から言ひ出した。

「先生の御樣子を、そつと拜見できないでせうか。」

「あゝ、さうでしたね。貴方は先刻の告別の時には、まだ來てゐなかつたわね。小野さんもさうでせう。――ぢやあそつと書齋へ行つて見ていらつしやい。多分まだ、眠りから覺めないでせうからそつとなら差支へありますまい。」

その夫人の許しの言葉に、小野は原田と一緒に、座を立つて病室の書齋の方へ行かうと廊下に出た。

するとその時だつた。その緣側の端の、手水鉢などの置いてある處へ一人の若い女の人が、斜に上半身を曲げて、病室の方から持つて來たのであらう、手に持つてゐる白いエナメル塗りの洗面器から、湯をそこに滾してゐるのが、ふいと小野の目に入つた。年は十八九位であらう。さう眼の覺める程美しいとか綺麗だとかいふ程ではないが、何となく淸々しい、しつとりと整つた十人並の顏で、顏色も皮膚もさう冴えてゐないが、塗つたといふ程には、白粉も付けてゐないらしかつた。そして心做しか眼の下が、淚で擦り赤めでもしたらしく、陰影を帶びてゐるやうに濕つて見えた。そして極く普通の束髮に、何の飾りも見當らないし、又その着てゐる衣物といつても、平常の通學着でもあるらしく、褐色銘仙の錢型か龜甲形の飛白で、赤い花模樣のメリンスの帶を、幾らか胸高に締めてゐるきり。それと兩袂の八ツ口だけが、赤く仄かにときめいてゐるきりだつた。――何處にも取立てゝ目を敬てるやうな處はなかつた。が、全體のそのしつとりした姿に、淸淨な質素な處女の美が浮き立たないで現はれてゐた。

彼女は洗面器の湯水を、激しい音を立てぬやう靜に、少しづつ傾け滾してゐた。器から落ちる湯は、彼女の手のあたりに、微かな湯氣を立たして、さう太くない線を引きながら、美しく下に碎けてゐた。

小野はそれを見た瞬間、すぐこれは先生の家の、一番上のお孃さんだなと思つた。先生にお孃さんのあることだけは、木曜の面會日に少し早く行つたりすると、その隣室にあるピアノの音が、書齋まで響いて來たりするので、陰ながら知つてだけはゐた。そしてどんな人たらうとは、ひそかに想像を廻らさぬでもなかつた。併し、今先生の病顏を見舞ひにゆく氣持に、さう餘裕もなかつたので、そしてその人には別に氣にも止めずに、原田の後から從いて行つた。前に立つた原田は、その傍を通りぬける時、幾らか親しみを見せて、

「御免なさい。」と挨拶して、その後を通り過ぎた。その令孃は湯を滾しながら、無言で少し身を動かして、わづかに會釋を返しただけだつた。大人しい、淑かな人だなと、たゞそれだけ小野は思つた。そして原田の後から輕く身を屈めただけで、彼も亦その後を通り過ぎた。その人も、小野を別に氣に止めはしないらしく見えた。

一人は先生の寢てゐる、書齋の前に立つて、そこの細長い硝子窓から窓帷の透間を通して、そつと內部を窺つた。外ながらでも、先生の病顏が拜されれば、それで滿足して戾らうと思つてゐた。二人は、その薄暗い病室の中を、先生に決して覺られないやうに、瞳を凝らして窺つた。それは小野には恰も「神聖な偸み見」だと思はれた。

すると中にゐる一人の醫員が、入つても大丈夫だと思つたのか何と思つたのか知らないが、手眞似をして招いて吳れた。それで二人はやつと許された思ひで、その書齋のドアを、音を立てぬやうにガーゼを卷いた把手を、そつと廻して中へ入つた。勿論先生は何も知らずに寢てゐた。それで二人はなほ、遠く先生の枕上の方に坐つて、怖々病床の方を覗き込んでゐると、今度は病體をさすつてゐた看護婦が、極めて小さい聲で「此方へいらつしやい。」といつて自分の橫の席を顎で指し示して吳れた。小野はさうまでして頂かなくてもといふ氣と、又その聲や動作で、ふと先生を目覺ましはしまいかといふ怖れで、少し逡巡してゐたが、二人目を見合せた後、思ひ切つてその近くへ行つて、先生の眠つてゐる顏に面した方の、寢床の左側に揃つて端坐した。そして改めてその病顏を見守つた。

室內は薄暗かつた。もう夕方に近い外の明りは、樺色の窓帷に遮られて、透間から僅かに蒼白い光を洩らしてゐるきりだつた。そしてもう來てゐる電燈にも、黑い布が陰鬱に被はれてあつて、乏しい光が赤ちやけたやうに落ちてゐた。その中でたゞ病床の毛布だけが、白く軟かに仄めいてゐた。見ると先生の顏は、その白い毛布の端から、なぜか座蒲團を二つに折つた枕の上は、光線の加減でてら〳〵光つて赤みをさへ帶びながら、靜に息をついてゐた。雨頰には、病中で剃る間もなかつたと見えて、嘗て見たことのない鬚が、もぢや〳〵と光つて生えてゐた。しかもその銀色の交つた鬚の傍に、先生の顏は言ひやうのない聖さと、嚴かさと尊さとを增してゐた。二人はそれを見て、恭しく禮拜するやうに首を垂れた。そして一二分時にして退出した。

書齋を出ると、曇つて薄ら寒い夕空に、先生が愛植してゐた芭蕉が廣葉の處々裂けたあたりを黃ばまして、婆娑と影を廊下に落してゐた。そしてその中の一二葉は、斜に折れて折口を露に示してゐた。小野はその芭蕉を見上げ、先生の病を思つて、黯然として元の部屋へ戾つた。

もう廊下には、お孃さんの姿も見えなかつた。

三

夕暮近くなると、先生の危篤を傳へられた、親戚や知己の人々を初め、先生の關係してゐる新聞社の人々が、急を知つて集まつて來たりしたので、其處の茶の間は可なり混雜して來た。それで用のない門下の人たちは、米田氏を初め黑田や原田や小野や、其他の人々を一團として、門の傍にある離室の方へ座を移された。其處は八疊と六疊の獨立した家屋で、もとは門番でも住むために作つたのが、今は先生の子供たちの勉強部屋に宛てられてゐる所だつた。

皆打連れて離室へ行つて見ると、其處の小さな六疊の部屋には、先生の長男で今年十一歲に

なる新太郎少年が、曉星小學の金モール章のついた、可愛い二重になつた詰め襟の洋服を着たまゝ、其處に揃へてあつた炬燵の中へ足を投げ入れ、小さな身體を一間張りの机に凭せかけて、ひとりで一生懸命に勳章の繪を畫いてゐた。が、皆の入つて來るのを見ると顏を上げて、

「いやア、恐ろしく澤山やつて來やがつたなア。」と惡口を浴びせた。そして人見知りをしない快活さで、皆の顏をじろ〳〵見廻した。

「いやア、新太郎ちやん一人かい。淋しいだらうと思つて來て上げたんだよ。だからその炬燵に入れて呉れ給へよ。」

先に立つた米田氏が、親愛の心を以てかう言つた。

「あゝ、いゝよ。けれど、僕の邪魔をしちやあ厭だよ。」

少年はかう言つて、再び今まで書いてゐた、金鵄勳章の輪郭を、一生懸命になぞり出した。それは可なりうまく描かれてあつた。

皆は炬燵の周りに集まつて、この少年を相手にいろんな事を揶揄ひ半分訊き出した。

「新太郎ちやん、みんな他の人たちはどこにゐるの。」

ずつと以前から、先生の家に出入して、子供たちとも深い馴染の原田が、心安だてにまづそんな事を訊いた。

「みんなか、姉さんたちは淳二ちやんと一緒に、みんな向うの母屋にゐるんだらう。僕は先刻から一人で此處にゐるんだよ。」

「さうかい。新太郎ちやんは偉いね。それで淋しくなかつたかい。」

「淋しいもんか。」

「ほう。さうかい。ぢやあその御褒美に、眞實の金鵄勳章を上げようか。」

「貰うつけ！ それよりか繪のでいゝから、ほんとに持つて來いよ。嘘つくと承知しないぞ。みんなお父さんに叱らしてやるから。」

「これは參つた。ぢやあ嘘をつかずに、鉛のをきつと持つて來て上げようね。お父さまがお癒りになつたら、すぐね。」

「ぢやあ、きつと持つて來てくれ給へね。」

「あゝ上げるとも。きつと。」――だが新太郎ちやん、先刻お父さんは君に、何と言つたい。何にも言はなかつたかい。」

午前の永訣をしに皆が入る前、急を聞いて曉星小學から歸つて來た新太郎、淳二の二少年は、――共に十一歲と十歲の年子で、上に三人の姉を持つ、先生の末に出來た男子だつたが、――歸つて來るや否や父の枕許へ遠慮もなく、どかりと膝を揃へて坐つた。すると先生はその動靜が枕に響いたのであらう、殆ど半ば昏睡してゐたやうな眼を開いて、枕許なる二愛兒を見上げ、何とも言へぬ靜かな微笑を、にやりと洩らされたといふ事だつた。その感想を、米田氏は今冗談半分に聞かうとしてゐるのだつた。

すると新太郎少年は、尊座に憚りもなく答へた。

「いゝ、おやぢかい――いゝ、おやぢは汚い顏をして寢てゐたよ。何處の爺くたが寢てゐるのかと思つた。」

此の少年の露惡家は、この危急な際を少しも知らずに、平氣で辛辣に自分の父の死顏を批評した。この無邪氣なる惡口兒は、前にも往來で通りすがりの父に向つて、「やい、あばた面！」と呼んで、さすがの先生を苦笑させた話は、門弟の中でも可なり有名な事實だつた。しかも、先生の主義で、伸び〳〵と殆ど自由に育てられた、この愛すべき都會の自然兒は、今その清透な大きい眼を上げて、この生涯の一大事を、かくも輕く無造作に看過した。彼はたゞ喪へて、面變りのした汚い父の顏を見た。そしてまだその顏の背後に、恐ろしい影を作つてゐる死を、まるで見付けもしなかつたのだ。

小野にそ

ッ無邪氣な悲劇に、何とも言へず心を動かされて、涙ぐまない譯にはいかなかつた。が、新太郎少年は飽く迄平氣で、金鵄勳章の仕上げに、たゞ急がしく繪筆を動かすのみだつた。

さうかうしてゐるところへ、下宿で別れて來た杉浦が、小野を尋ねて其處へ來た。彼は皆で出してゐる、同人雜誌の用事や、その他の事を濟まして、遲いながら心配してやつて來たのだつた。櫻井や小野たちよりは、少し親しくない彼は、幾らか遠慮しながらも、小野を訪ねて樣子を見に來たのだつた。

小野は病室から出て、其處のもう薄闇の迫つた門の傍で、杉浦と顏を合せた。杉浦はもう一つ、別な用事を持つてゐた。それは彼は見舞ひ旁、J新聞社に行つてゐる同じく彼らの友人の、池田から、頼まれて先生の病狀を毎日の新聞に掲載するために、聞いて來てくれと依囑されたとの事だつた。それで小野は知つてゐるだけの事を、立話で杉浦に聞かせた。すると杉浦はその話を聞くと、すぐ待つてゐる池田に知らしてやらなければならないといふので、その儘歸つて行つた。もう家の中はごた〳〵してゐて、先生の家の人なぞに會つて、見舞ひを述べる餘裕もない時ではあるし、さう親しいといふのでもない一介の弟子のその際の面會などは遠慮すべき時でもあつたので、小野も強ひて留めはしなかつた。そして池田に知らせて了つたら、すぐ歸つて來いと言つて別れた。勿論その間に先生が、急に死なうなどとは、二人とも思つてはゐなかつた。

小野が杉浦と別れて、又病室へ入つて行つた時、新太郎少年はもう金鵄勳章を書き上げて了つたと見えて、今度はそこの電話器の傍にかけてある、——電話器は病室にあつたのを、病室に近く騒ぐといふのでわざと隣室へ移されてあつたのだが、——心覺えを記すための黒板の前へ立つて、何か白墨で悪戯書をしようとしてゐるところだつた。小野が入つて行くと、少年は急に背後を振り向いて、そして言つた。

「おい君、君、兜の繪が描ける？」

「描けるとも」小野は笑つた。「君の位の時、僕らは加藤清正の兜ばかり描いてゐたんだもの。」

「加藤清正？ 加藤清正のなら、烏帽子ぢやないか。あんなんぢやないんだよ。義經のやうなんだよ。」

「描けるとも。九郎判官義經だつて、八幡太郎義家のでも。」

小野は昔の自分たちが描いた、古風な武者繪を悲しく思ひ出しながら、この少年を出來るだけ悦ばせるために、さうした風に應じなければならなかつた。

「よし。ぢやあ描きつ競をしようか。」

「しよう。君になんぞ敗けやしないよ。」

「赤恥かくな。さあ來い。」

「大丈夫。」

小野は笑つて、新太郎少年と並んで、其處の黒板の前に立つた。

二人は互に兜の繪を書き始めた。小野も古い記憶を呼び起しながら、眞面目に兜の鍬形から、八幡座の形などを丹念に輪郭を取つて行つた。と、新太郎少年も、敗けぬ氣で書き始めたが、そつと小野の方を偸み見て、もとより少年の單純な頭腦と、書き馴れない手とは、小野のに及ぶべくもないのを、自ら知つたらしかつた。彼はそつと小野の畫を見ては、自分の兜に補正を始め出した。初めの少年は、鍬形の尖が複雜に開いてゐない、半月形の單純なものを描いてゐたが、小野のをそつと見ると、慌てて先を太く開かして、その中央の圓い、小野のを眞似て小さな環狀の穴を描き加へてゐた。少年は熱心だつた。そして何もかも忘れてゐる如

く見えた。

その時、醫師たちの言葉でもあつたのか、或ひは家の人の念のための命令か、女中が母屋の方からやつて來て、すぐ二人の傍の、電話をかけ始めた。

「もし〳〵。あの××樣でございますか。（それは先生の家の親類か縁者らしかつた。）……あの、旦那樣が、もうどうしても駄目らしうございますから、すぐにお出で下さいまし。……はい、もうたゞお最期を待つだけなんでございますから。……」

かういふ意味の女中の言葉は、何の遠慮もなく、兜の鍬形を補つてゐる新太郎少年の耳に入つた。と、少年は不意に白墨の手を止めて、小野の方を見返つた。

「お父さんはほんとに死ぬの。」

かう言つて見上げた少年の眼には、先刻父の病顔を汚いと評した、あの犀利な冷觀はなかつた。そしてそれは眞實の危憂と悲哀とに滿ちてゐた。小野はこの少年を、抱きしめて慰めてやりたい位に感じた。そして少しく狼狽して言ひくるめた。

「いえ、大丈夫ですよ。まだ〳〵死にやしませんよ。あれはたゞ念のために、お惡くなる時のためを思つて、人にお知らせするだけなんですよ。」

すると無邪氣な少年の心は、すぐ慰められたともなく、兜の繪の方へ移つた。

「これ何？」

少年は小野のを眞似て、つけ加へた鍬形の尖の中央部にある、小さな環を指して聞いた。彼はそれが何だか知らずに、たゞ小野のにあるから、描き加へたらしかつた。

「それかい。」小野は輕ぐましく吻として、「それはね、その兜の鍬形つていふ此處の形をよく見せる飾りなんですよ。だから大將の兜には、きつと是があるんですよ。そして又頭の方から切りつけられた時、刀を滑らないやうに受けとめる役にも立つんですよ。」

小野もよく分らないので、そんな事を答へる外なかつた。

その時隣りの間の炬燵に當つて、密談に耽つてゐた米田氏は、昨夜來の睡眠不足を休めたいのに、まだ新年號の原稿を書き終へないのを思ひ出して、家が、其處の近いのをたのみに、急に一時歸ると言ひ出した。先生はあれから、ずつと小康を持ちつゞけて、まだ同じやうに持ち堪へてゐるので、それがすぐ急に變らうとは、殆ど誰も思つてゐなかつた。この儘ずつと持ち續けて、癒つて了ふか、惡くなつてもすぐには亡くなるやうな事はあるまい、と、誰もがさう信じてゐたので、それを止めては居なかつた。却つて先生が癒ると、飽く迄も信じて、それをまだ力説して止まない黒田が、これも疲れてゐるので、ひとまづ自分の下宿へ歸らうと言ひ出した。彼の下宿は小野と同じく本郷に在るので、萬一の場合があつても、可なり遠くて間に合はない恐れがあるに拘らず、先生の小康に飽く迄信頼し切つた彼は、若し幾らか容態が變つたら、すぐ電話をかけてくれるやうにと、小野に頼んで歸る事にした。米田氏もそれより先に、急變があつたら近所の酒屋へ、電話で知らしてくれるやうにと、黒板の前に立つてゐる小野に呉々も頼んで行つた。

「若しもの事があつたら、君どうか頼むから、第一に僕ん所の取次の酒屋へ、電話をかけてくれ給へ、何より先に頼むよ。第一にだよ。」

米田氏はかう念を押して、小野の描きかけた兜の繪の上部へ、念のために白墨でその電話番號を、はつきり書きつけた。小野は自分の兜の繪と、宛もそれに附せられた番號のやうな、番町[illegible]といふ數字を見比べながら、やがてそれ

顔を見た、その原田氏が水筆で唇を濕してゐた。後から入つて來た小野は、原田がさうしてゐるのを見て、もう大抵の人々が濟んだのだと思つた。そして自分もさうする資格があると信じて、我とつな無遠慮に吾れを忘れて了ひ、幾らか前にゐた人々を押しのけるやうにして、そつと進み出た。そして夫人の手から水筆を受取つて、改めて先生の最後の顔をぢつと見た。

その顔は、先刻見たのとは、もうすつかり違つてゐた。顏色はすつかり青く、妙な光澤を帯びてゐて、眼は大きく見開かれてゐた。そしてその瞳は、少しも動かずに黒く澱んだまゝ、凝視するともなく、たゞ茫と前方を見据ゑてゐた。それは恰も眼前にある、小野の顔やその他の人人の存在を通り越して、遙か永遠なる何物かを見凝めてゐるやうだつた。

小野は筆で血の氣のない、土蝋色の先生の唇を撫でた。先生はその口を通して、時々引釣るやうな息使ひをしてゐた。小野は水筆を捧げ終ると、夫人にそれを渡し返さうとした。併しぢつと何かを堪へて、正面の空間を見やつてゐた夫人は、その筆を受取らうともしなかつた。小野は静かなる狼狽を感じた。そして改めて注意を促すやうに、夫人の手へその筆を恭しく載せて、そして退いた。

小野の後から、更に先生の同輩の知友たちや、なほ知名な人々が先生に最期の水を供した。小野はそれを見ると、この凡てを蔽ふべき悲しみの中にも、自分の人に先んじた無作法を、心から悔いて腋の下に汗をかいた。が、場合が場合なので、と、から強ひて自ら慰めた。が、彼の悲哀はその時から、妙な形で突き濁されたやうな氣がしてならなかつた。

小野の電話をかけた米田氏が、遅れて、併し息を引取らない中に、急いで到着した。そして人人の最後に、水筆を取つて先生に捧げた。

今はたゞ、皆黙つて、先生の死を見つめてゐるばかりだつた。黒く押し黙つた人垣の中で、先生は白布に包まれながら、時々頤を引きつけるやうにして、苦しい呼吸をゆるく刻んでゐた。時々忘れたやうに呼吸が止まる。そして又思ひ出したやうに、ぎくりと喉を動かし始める。その喉の中で、微かに二三度痰の鳴る音がした。そして呼吸は、だん〳〵數が少く、忘られたやうに静になつて行つた。が、もう消え失せたのかと思ふと暫く經つて、又僅かに喉のあたりが動いた。周圍の人々は只手を拱ねて、今はだんだん微かに、遠くなつてゆく呼吸を、ぢつと此方も息を呑んで見詰めなければならなかつた。

枕邊に近いお嬢さんたちの間からは、堪へ切れぬ歔欷の聲が、たゞ寂寞を破るきりだつた。

一分、二分、かうして時は過ぎていつた。先生の息は益々微かになり、そして有無の限界が分らなくなつた。が、人々はまだ、先刻からの狀態の連續で、もうそれが最後の呼吸だとは、誰も思はずに見凝めてゐた。が、その時病床の右手に坐つて、ぢつと様子を見てゐた眞島氏が、手で妙な指圖を夫人にした。小野にはその意味が解らなかつた。と、夫人は先生の額の上に蔽うてあつた白布を眼の所まで下げて、静かに先生の眼を瞑すべく、幾度かそつと撫で下ろした。それが濟むと眞島氏は、もう一度無言で指圖をした。今度は夫人は先生の口を静かに閉させ始めた。よく見るといつの間にか先生の呼吸は、天地の寂寞の中に泥み入つて、遥けく消え去つて了つてゐた。

眞島氏は聽診器を取り出した。そして先生の胸にかけた毛布を取り除けて、心臓のある胸部の上に、そつとその白い象牙の尖を載せた。そしてぢつとそこから指を放して、静かに器を放置したまゝ、その中の音に聞入つた。それから更にもう一度少し上の方へ、聽診器を移して、

同じやうに闖入つた。その後からは今度は又傍にゐた矢部氏が同じく、聽診器を心臟の上に當てて、二人とも端然と暫く耳を澄ましてゐた。それは醫師の禮法といふよりは、寧ろ宗教上の儀式のやうにさへ思はれた。皆は固唾を呑んで見てゐた。と、もう何の音も聞えなかつたと見えて、やがて聽診器を靜かに撤した眞島氏は、

「お氣の毒でございます。」

と、夫人の前へ頭を下げた。

それを聞くと皆も同時に肅と頭を垂れて、何ものとも知れぬものに禮拜した。

萬事は休したのだ！　先生の頭の上には、雪白な布が蔽はれて、もう温顔を見る由もなかつた。見たところで何にならう。先生には息がないのだ。あの理智と温情とに滿ちた眼は、もう永久に閉されて光を失つたのだ。先生は死んだのだ。今、自分の眼の前で死んだのだ。――小野にはそれが夢のやうな、現實として信ぜられないやうな氣がした。が、現實には違ひないのだ。

小野は暫く呆然として、夫人が、「さあ皆さんどうぞお立ち下さい。」と氣丈な聲で促されても、そこに先生の遺骸を見つめたまゝ立ち盡してゐた。向うの隅では畫家の須山氏が、泣き崩れて立たうともしてゐなかつた。が、夫人に促されて、涙を拭つてやうやく立上つた。小野もその畫家の純粹な涙を見ると、やうやく熱くなつて來た瞼を押へて、そこを立去らねばならなかつた。

戸外はもうすつかり濃い闇だつた。廊下へ出るとその暗い夜の空に、庭の芭蕉は更に陰暗たる惡魔のやうな翅を、しんと四方を蔽ふやうに垂れてゐた。

黒田と杉浦とは、たうとう臨終の間に合はなかつた。鎌倉の柳井も、たうとうそれ迄には到着しなかつた。

第四章

一

先生死後の勝見家は、悲愁と混亂に閉されてゐた。

急を聞き傳へた、各新聞の記者たちが來る。弔問者たちが駈けつける。電話がかゝる……さういふ中に在つて、今師の臨終に逢つたばかりの涙の乾かぬ弟子たちは、各々自分一人の家へ歸つて、悲しい思ひ出に耽るなどといふ餘裕はなかつた。勝見家の人々に勿論だつた。今未亡人となつたばかりの若子夫人も先生の實兄の長三氏も、直ちに臨終の室を出るし、もう其後の色々な準備に忙殺されなければならなかつた。夫人たちは弟子の中の主だつた、大寺氏や松本氏らと一室に集つて、直ちに葬儀の手筈や、遺言に從つて先生の遺骸を大學病院へ解剖に送ることや、「死顔の彫像」を取ることなどを相談し、決した。外の弟子たちも、凡て各々手配を定められて、人手の足りない勝見家の、悲しい用事萬端を手傳ふことになつた。

小野もその一員だつた。遲れて來て、たうとう臨終の間に合はなかつた杉浦も、又自分の妙な確信に油斷して、電話を頼んで鳥渡歸つたために、つい大事な恩師の死目に會へなかつた黒田も、遲れ着いて既に白布に蔽はれた、息のない先生の死顏を拜して、喪の室を出るとすぐその一員に加はらなければならなかつた。小野と杉浦と黒田と、それからまた先刻小野と一緒に生顏を拜した原田とが、取り敢へず受付の役に廻つて、玄關に控へてゐる事になつた。これらの四人は、みな同じ位の年齡で、同じく大學を出たばかりだつたり、もうすぐ出るばかりの連中だつた。が、どうしたのかまた、鎌倉にゐる柳井は、この急な場合に到着しなかつた。彼も

寧ろあれば、必ずこの少壯の一團の中へ、當然加へらるべき人だつた。彼らは先生の門下の中でも、比較的後輩の新進の一團だつた。先生が生前、木曜日毎に面會を許してその書齋に集めては、種々の文學談や雜談をした、所謂「木曜會」に來る弟子たちの中では、最も年少な位置の連中だつた。

尤もこの五人の中でも、時間的に又私交的に見れば、先生及び先生の家と、少しづつ親疎の差があつた。中では、原田が最も古くから、先生の家へ出入りしてゐた。彼はもう五六年前高等學校へ入ると早々、親しく先生の門に入つて、先生に精神的の、物質的の、兩方面から多大の庇護を受けてゐた。殆ど彼は、先生の書生のやうに、親しくその家の人々とも知り合つてゐた。そして先生からも、非常に可愛がられ、大學の授業料が足りないときなどは、先生に出して貰つたりする位までになつてゐた。が併し、原田は元來一種の大事取りと、狡猾さがすると同時に、極めて鈍々しい頭腦の所有者である爲に、文學上の創作やその他の方面には、少しも業績を擧げてゐないので、先輩の弟子や仲間の者どもからは、さう重きをおかれてゐなかつた。早くから先生の門に出入りすることが出來て、定宮氏や佐々木氏や米田氏や大谷氏などの先輩に伍して、文學的に頭角が早熟して了つた彼には、理想だけが先に進んで、今迄なから手腕の方の者、ことに非常に選擇的になつて了つてゐた。今更詰らないものを書いて、先生や弟子たちの信望を、――それと一つにはある譯ではないが、少しもまだ發門に屬する彼のお昔に對する一側さ、自らはつきりさせて了ふことは、たまらなかつた。判の限が開いてゐるだけに、彼の細心な、臆病な、女々しい性質が許さなかつた。要するに彼に先生の指導に依る頭腦だけが進んで、自分自身の實行力の伴はない、最も弟子としての、悲慘なる事に屬してゐた。が、併し彼は敏感な、神經質な一種の秀才には違ひなかつた。白い、弱々しい細面の、似合はない目鼻立ちではあるが、何となく病的な意志の薄弱な樣子と、おどおどしてゐるやうな神經過敏さ、一目で彼の顏容から受取られた。彼の顏の造りな白い鼻は、何故か先の方へ來て、少しくそれに傾いてゐた。それがいかにも彼の、弱い、意氣地のない性質を、象徴してゐるやうに見えた。けれども、前に言つた通り、彼の性格に弱いながらに、善良な優しい深切に満ちてゐた。そして小野もその才能や作品には、さう尊敬と同情とを持ち得なかつたが、彼の深切には常に感謝の意を持つてゐた。彼は初めて小野を先生の許へ連れていつて呉れた人だつた。

……それは御大葬のある時分の、前年の秋のことだつた。小野は一人下宿を出て、その日本郷通りを通過するといふ、見ひる花電車を見ようと思つて、大學前のアスファルト道を散歩してゐた。するとその途上でやつぱり同じく花電車を見に出た原田と、偶然一緒にそこをぶらついたり、佇んで電車を待つてゐる間に、いろいろな話の末、談にたまたま漱石先生のことに及び、先生に對する小野の思慕を聞くと、彼はそれならいつでも先生の所へ連れていつてやるといふやうなことになつたのだつた。そうしてその次の週、小野は直に同志の柳井を誘つて、共に原田の下宿を訪ね、彼に連れられて、初めて漱石山房へ行つたのだつた。

それは併し、外の人々の見る所によると、原田が柳井や小野たちを喜んで連れていつたのは、彼自身の木曜會に對する勢力を、少しでも示さうといふ爲だつたと、後になつていはれたことであつた。といふのは、その時分の木曜會は、殆ど次に述べる幾組の集團、人に依つて占領されてゐるかの有様だつた。そしていつの

間にか原田などは、隅つこの方に僅かな存在を保つてゐるといつた風な形勢になつてゐたからだつた。

黑田は、ある地方の高等學校から、大學へ入るとすぐ、妙に直截明快な論評を以て、「ほとゝぎす」などの誌上へ、堂々たる論文を發表してゐた、新進氣鋭の批評家だつた。そして彼はその誌上に、或時長い漱石論を發表して、それに依つて先生に知られ、一種の感謝狀を貰つて、それ以來先生の許に出入し、知遇を受けることになつたが、彼はその木曜會へ來るや否や、彼のあらゆるものを刎ね飛ばすやうな元氣と、高く響く甲ン高な辯舌とを以て、ひとりで喋舌り一人で先生と應答して、他の人々は唯々彼の辯舌を、ひそかに恐れ、ひそかに輕蔑しながら、彼一人の跳梁に、全然任して置かねばならぬやうな狀態だつた。殊にその頃彼にある癡情を以て有名な中年の作家を、頭から罵倒しつくした上、また「頽廢文學の撲滅」なる一文を以て、その頃流行の頂にあつた遊蕩小說を、眞つ向に論難したため、その論理に幾多の缺點はあつたにしても、その意氣の壯と思想の穩健とを、一種の誤解さへ持たれた程、世間から喧傳され、一時に有名な批評家となつて了つて氣を負うてゐたため、彼は益々木曜會の席上を、常に殆ど一人で切つて廻してゐたかの觀があつたのだつた。

勿論先輩の弟子たちも、時々一人二人づつにその木曜會へ來た。そしてその先輩たちは何といつても一座の、先生に對する弟子の中堅をなすには違ないが、その頃は先輩の弟子たちも常には來るといふ程でなかつたので、一座は自然若い人達が多かつた。そしてその中では何といつても、黑田の勢力に押され勝ちだつたで、黑田よりも古い併しながら同年者の原田が、だんだん自分の勢力が失墜するやうに感じ、ひそかにまた黑田の人もなげた辯舌を苦々しく思つて、それに對抗すべき一種の新人を連れて來ようと、敢て柳井や小野を伴つて來たやうに、他の人たちが觀察したのも、あながち理由のない譯ではなかつた。

が、併し四人は、別に敵視し合つてゐる譯では、決してなかつた。小野も柳井も、黑田の殆ど他人に口を出させない程の、獨占的な饒舌には、蔭ながら苦々しく感じたこともあつたが、併し、やつぱり何といつても、一種同門の友誼が、だんだん雙方の好意を深めていつた。そしてその頃では、殆ど親友同樣に、往來する程にさへなつてゐた。

殊に先生の死は、彼らの間にある小感情を、一時、同一の悲哀を以て濟かして了つた。彼らは今何ら甲乙のない位置を以て、先生の傍に席を占めながら、いろいろな應接にあたる事になつたのだつた。

葬式初め、先輩の弟子たちも、それぞれ各自の割當てられた用務に、心を同じうして忙殺されてゐた。それは恰も、先生の死といふ、一つの大きなオーケストラに、各々心を合せて合奏してゐるかの如くだつた。そしてそれは雜めきながらに、高らかに交響しつゝあつた。奏してゐるのは、悲しみの曲には相違なかつた。併し小野には、その奏手の一人であるといふことが、妙に嬉しい思ひをさせた。彼はさういふ心を、ひそかに自ら恥しめ卑しんだが、併し仕方がなかつた。彼は喜び勇んで先生死後の勝見家の用事のために、骨身を惜まず働く氣になつてゐた。

小野は先を爭ふやうにして、つぎつぎに來る弔問客を、[illegible]に通じ、その命を受けて、通すべき人は先生の死室に招じ、禮を言つて返すべき人にはよく勝見家を代表した禮を述べて、丁寧に應接し續けた。……

二

かうして、小野は玄關と奧との間を立働いてゐる間に、いつしか勝見家の人たちと、自然見知り合ふやうになつた。未亡人、令兄、令嬢、令息たちとも、親しく口をきく機會はなかつたが、顔を合せ擦れ違ふだけながら、だん／＼淡い交渉が生じて來た。向うでは、まだ彼の名も、屬性もよく知らないには相違ないが、併し此方では臨終の間では見分けがつかなかつた令嬢たちの顔も、二人とも同じ年位にしか見えぬ令息の、それ／＼の相違もはつきりして來た。尤もその長男の新太郎少年とは、兜の畫の描きつこをして以來、顔馴染にだけはなつてゐたが。

さうしてまた一番上の令嬢も、病室へ行く途中の縁側で、ちらりと見かけただけで、さう深く印象に止めずに通り過ぎたが、それらもだんだん小野の瞼に、影を濃く落してゆくやうになつた。

殊に通夜の第一夜には、勝見家の家族一同が、親族知己や弟子たちと共に、謂はば一堂に會したので、改めて互の印象を、はつきり刻む機會を與へたやうなものだつた。

夜が更けて、親類や知己の人々の弔問も絶え、さし當りの用務も片づくと、皆は先生の遺骸を安置してある、書齋の方へ集つた。先生の關係してゐた、新聞社の主だつた人々や、親友の大學教授たちや、高等學校の先生たちや、先輩後輩の別なく弟子たちの殆ど凡てが、書齋に隣る客間の隅々に、火鉢を擁し合うて、蕭かに集つた。夜は深く、風は落ちて、外の破れ芭蕉をばさつかす音もなかつた。

未亡人初め、家族の人たちは、一團となつて、先生の遺骸の枕頭の方へ、寄り塊まつて座についた。蝋燭の數を加へて、灯された燈明の明りは、電燈の光の中で靜に搖らめきながら、そこらを悲しくも明るく、隈どつて照らしてゐた。先生が愛玩された、支那の泰山の河床にある、石に彫りつけた六朝時代の字だとかいふ、大きな石摺を貼り合せた、名國別天地といふ大字の屏風が、逆さまに立てられた下には、白布に蔽はれた先生の遺骸が、まだ寢てゐるかのやうに横たへられてあつた。そしてその前には、低い經机の上に、先生の洋服姿の近影が、少し横目で、並み居る弟子たちを睨んでゐた。香爐に今、忙しい用務に、涙を忘られてゐた未亡人の手に依つて、悲しみを新にするやうに插し加へられた、それは美しい線を曳いて、靜にもつれ合ひながら、その前の香爐から立ち騰つた。

小野は客間の片隅の、右の端の座に、黒田や栗田や杉浦と一緒の火鉢を圍んで通夜の末席を占めてゐた。そしてその座は偶然、家族たちがゐる座と、殆ど正面に向ひ合つてゐた。

小野は改めて、興味を持つて勝見家の人々をひそかに注視することが出來た。

一番右の端には、一番末の令嬢が、弟の方の令息と一緒に凭りかゝり合ふやうにして、好奇に滿ちた眼で通夜の客の方をきよろ／＼眺めてゐた。この末の令嬢は、まだ十二三であらう、お下げに結つた髮の下に、小さな惡戲つ兒らしい、くるりとした眼を、まだ寸の詰つた子供らしい圓顔から、此方へ頻りに覗かせてゐた。そしてその都度、隣りの弟に、何か囁いてゐた。その弟の方の令息は、呆けたやうな、きよとんとした、いかにも先生の末子らしい茶氣を帶びた可愛らしい顔で、點頭きながら此方を眺めてゐた。

そしてその傍には、弟と同じやうに、曉星小學の制服を着て、足を斜に投げ出したまゝ、上の令息の新太郎少年が、これは一番上の令嬢の膝の上へ、半ば抱き擁へられながら、同じや

うに此方を、悪戯っ子の微笑を浮べ、二重瞼の大きな瞳を据ゑて、批評的に眺めてゐた。

少年を抱き擁へてゐる一番上の令嬢は、さすがにその弟妹たちのやうに無遠慮に此方を見凝めはしなかつた。彼女はどちらかと言へば、淋しいしつとりした質の顔で、ごく普通の女學生風の束髪を、俯向け氣味に坐つてゐた。そしてやゝもすれば暴れ出しさうに身を動かす弟を、頻りに押へ宥めてゐるやうに見えた。併しその弟たちが、何かそつと悪戯めいた言葉を、囁き合ふに連れて、それでもちらと此方を見やつては、華かでない微笑をそつと洩らした。

その次には、次女らしい令嬢が、同じ年恰好の令嬢――それは後になつて、先生の實兄の娘、令姪であると知られた――や、第三女らしい令嬢と、同じ火鉢に顔を寄せて、睦まじげに語り合うてゐた。その次女なる人は、二皮眼の大きな、派手な顔立ちだつた。頬も豐かに釣合よく下膨れがしてゐて、姉と同じく束髪に結つてゐるが、それがもつと洋風な感じを與へ、全體として艶麗といふ質に、可なり近い容貌だつた。そして性質も快活であるらしく、時々聞える話し振りも、作り聲のやうに金屬性の媚びを含んだ甲ン聲で、よく鮮かに笑つてゐた。

第三女に當る人は、まだ十五六であらう、令嬢たちのどの人よりも悧巧さうな、端麗な顔をしてゐた。面長な、目鼻立の整つた、すつかり釣合の取れた美少女で、少し受け口な頤も、ある種の美人型にあるやうに、一種の貴婦人めいた品を與へた。殊に髪は、前を七三に分けて、後髪の所をすつかり洋風に形よく蜿らせて、後にすつと下げたのが、更によくその怜悧端麗な面差と調和してゐた。彼女は少女にしては、少し氣取り過ぎる位つんとした様子で、口数少に、無愛嬌に點頭くだけで、話に應じてゐる様子だつた。

令姪は、小野の思ひ做しかは知らぬが、これらの令嬢たちと比べると、美しくないことはないが、少し品が落ちるやうに見えた。全體として、可憐な十八九の顔立ちではあるが、額の少し出て廣い下に、眼の少し落ち込んだのが、陰氣な影を作つてゐた。彼女は先生の娘たちに交つて、謙遜さうに身を保つてゐるやうだつた。それは小野にも、何となくいぢらしい、愛憐の心を起させた。

打見たところ、長女である人の容姿は、決して並んだ姉妹の中で、美しいといふのではなかつた。が、併しその姉たる品格と、しつとりした尋常な様子が、いかにも懐しい人柄のやうに、小野には思はれた。どこを、どう好きといふのではないが、静かな、沁み出るやうな思ひで、小野の心はひそかにその人に牽かれてゐた。けれどもその心はその人をどうしようとか、どうして近づかうとかいふのではなかつた。たゞこの通夜の筵の、同じ悲愁の思ひに滿ちた中で、先生が遺愛の娘だといふ一種の尊敬と、そのしつとりした人柄に對して、わづかな情懐に囚はれたに過ぎなかつた。

通夜の座は、多くの若い人々や、家族の子供たちの集りで、いつの間にかだんだん賑かになつていつた。初めは彼らだけで、ひそやかに囁き合つてゐた令嬢や令息たちも、殊に無邪氣な幼い令息たちの言葉から、遠慮なく笑つたり囃したりするやうになつた。此方の弟子たちの間でも、聲高に文學談を交したり、論諍し合つたりする者が出來てきた。

と、向うの令嬢や令息たちの間で、突然笑ひ聲が起つた。見ると、その中心になつてゐるのは、例の長男の新太郎少年で、何か此方の弟子たちに奇警な觀察でも下したらしく、皆此方を向いて、くすくす笑ひを止めないでゐるところだつた。

新太郎少年は、其中で、益々得意になつたやうに、姉の膝の上へ立上りながら、姉の肩へ一方の手をかけ、一方の手を額に翳して、そして中空に此方を眺望する様子をしながら、さも何かの聲色もどきに言ひ出した。

「形勢如何にと眺むれば、……みんな變てこな奴らばかりだなア！」

「あら、新太郎ちやん。そんなこと大きな聲で言ふもんぢやないわ。」

少年を抑へてゐた姉は、さすがに慌てて止めたが、併し少年の平生を知つてゐる未亡人は、等しく笑つてとめもしなかつた。また夜が更けて眠い皆の、少年を起しておくには、その位の悪戯は、許すべきものに違ひなかつた。通夜の客たちも、この無邪氣な少年の發言を、迎へるやうに笑ひ崩れた。

少年は得意になつて、同じやうに言ひ加へた。

「みんな人並の顔をしてゐる奴は、一人だつてゐやしない。同じやうに眉毛を、上へ逆さまに上げてゐる奴ばかりだ。」

と、それを煽つて助長させるのが時宜に適つた處置だと思つたのか、黒田がすぐに應じた。

「何だつて？　新太郎ちやん。もう一度いつて見給へ。誰だつてあそこに寝てゐる、あばた面のお父さんそつくりぢやないか。」

「ふん。」少年は負けてはゐなかつた。「よせやい。七面鳥。おまへの面は、何度も變るぢやないか。眉毛を上げたり、口をそんなに上げたり下げたりしやがつて駄目だぞ。生意氣を言ひやがると」

「こいつは苦手だ。」

黒田は頭を掻く外なかつた。一座の人々も、黒田が力を入れて物を言ふ時に、常に自然と眉を上げ、唇の端を激しく上下することを知つてゐるので、皆々笑ひながら、その機智ある觀察を、賞せざるを得なかつた。

新太郎少年は圖に乘つた。

「それから、その次にゐるのが赤鬼だ！」

さう言はれたのは、明かに小野だつた。小野は全くその言葉通りに眞つ赤な血色と、固い皮膚とを持つてゐた。そして誠實といふよりは、その弱い心とは反對に、武張つた軍人か鍛冶屋のやうな、粗豪な風貌を備へてゐるのを、自ら知つて悲しんでゐた。それをこの少年から今、無遠慮に指摘されると、彼は赤い顔を更に眞つ赤にして、仕方なしに笑ふ外はなかつた。が、彼の内心は、美しい令嬢たちの並んだ前で、泣きたい憂鬱さでゐた。が、少年も一座の人も、その心を知るものはなかつた。

「ぢやアその次は？」

誰かが訊いた。小野の次に坐つてゐたのは、小野の親友の杉浦だつた。二人は殆どいつでも、隣り合つて座を占めるのが常だつた。

皆の目は、浅黒い圓顔に、當惑したやうな苦い笑を浮べて、細い目をわざと睨みつけるやうに、少年を見返してゐる杉浦に集注された。が、新太郎少年は機警な次句が、急に浮ばなかつたと見えて、何か思ひ切つた悪戯な批評を、と、暫く考へてゐるやうに見えた。

その時、別な少年の聲がその隣りの方から叫ばれた。それは弟の淳二少年が、兄の言ひ出さぬ間に、ごく單純な考へから、言ひ出したのだつた。

「黒鬼！」

一座はその言葉にでなく、その場の形勢に興趣を感じて、寧ろ義務的に笑つた。が、その中でまた突然、一つの抗議が出た。

「あら、さうぢやないわ。黒佛よ！　鬼よりいくらか優しいわよ。」

それは、弟の方の少年と、凭れ合つて坐つてゐる、一番末の令嬢が言ひ出したのだつた。皆はまた何遍となく、その正直な抗議に笑

を合せて笑つた。

「おや〳〵。杉浦君には、素敵な同情者がついてゐるんだね。」

一言なかるべからざる黒田が、そんなことを言つて更に笑つた。

が、小野には、なぜか心から笑へなかつた。杉浦に對する漠然たる羨望と嫉妬が、自分の先刻受けた苦痛の尾を曳いて、かすかながら續いたのだつた。

大學の制服を着た杉浦は、たゞまじ〳〵と笑つてゐた。

通夜の夜は、さうした插話の中に、もう曉近かつた。……

三

その翌くる日は、葬式の前の日だけに、勝見家は猶一層の混雜と、哀悼の中にあつた。先生が死去の報知は、各新聞を通じて、可なり詳細に報道されたので、親しく知つてゐると知らざるとを問はず、朝、門を開けるとから、夥しい弔問客が、絶えず玄關に訪れて來た。小野や黒田や原田や杉浦も、殆ど坐る間がない位、その應接に忙しかつた。

その繁忙な受付に從事してゐる間、小野には何ら前夜に感じたやうな、淡いながらの情懷などは、令孃たちに對して持たなかつた。彼は只管忙しく、尊敬すべき恩師の家の爲に、骨を惜まず働いてゐるだけで、他に何らの別な意慾など持つべき筈もなかつた。

が、併し、その間に、自然かの長女なる人との交渉は――小野はその朝まだその名さへ知らなかつた。――少しづつ影を濃くしていつた。

ある時、小野が玄關の取次の間にゐるところへ、彼女は自らやつて來た。彼女は弟妹たちと一緒に、その時母屋の混雜を避けて、離室の方へ行つてゐたのだつたが、そこから庭の泥濘の中へ、足場に掛け渡された木板を渡つて、わざわざ小野のゐるところへ、姿を見つけると、そつと近寄つて來て、靜な聲でいつた。

「小野さん。お電話よ。――」

「え――？」

小野は自分の用などで、令孃がそこに現はれたのでないと思つてゐたので、少しどぎまぎして、聞き返さざるを得なかつた。そして彼女が自分の名を、自分の存在を、いつの間にか知つて呉れたのを、何だか急に嬉しく思つた。

「小吉館から。――お下宿でせう。早くいらつしやい。」

「さうですか。どうも有難う。」

彼女はさう言ふと、踵を返して元の縁側から下りると、また庭に渡した板敷をかたこと鳴らして、先に立つやうに離室の方へ走り去つた。

小野も躊躇してゐる場合ではなかつた。彼はすぐその後から、同じ縁側から下りて、誰のだか分らぬ庭下駄を、爪先にそゝくさと引掛けると、離室にある電話口へ、彼女の後を追うて行つた。

電話器は、すぐそこの入口の處に、取りつけられてあつた。見ると、もう先に歸つた彼女は、その次の間で、――そこは先生の臨終の夕に、新太郎少年がゐた、その間だつたが、――やつぱり同じやうに炬燵に當つて、何かにムツかつてゐる少年を、寢かし付けようとしてゐるらしかつた。そしてその半ばに、小野への電話の鈴が鳴つたので、外に誰もゐないまゝに、わざ〳〵取次いで呉れたのらしかつた。

「あゝもし〳〵。僕、小野です。――誰方ですか。」

小野は自分の下宿にゐる同宿の人か、または小吉館の電話を借りて、誰か自分の宿へ來た客でもが、電話をかけたのだらうと思つた。

もうさら試れてみたのだつた。

「あゝ、小野さんでいらつしやいますか。」受話器の中で、向うの人の異性らしい聲音が、はつきり響いた。「此方はね、小吉館でございます。」

「あゝ、小吉館。小吉館は分りましたが、誰方です。」

「いゝえ、あの小吉館の、主人でございますがね。今度はまた、先生がお亡くなりになりまして、さぞ皆さまもお力を落しになつたでせうと、それで失禮ながら、お悔みにお電話申したのでございます。今朝新聞を見まして、私どもも大變驚きましてね。先生は前に二三度、家へもお見えになつて下すつた御縁故もございますもので、すから、早速お悔みに上らうとは存じてゐるんですが、何分お忙しい最中でございませうし、また私どもが上りましては、却て失禮と存じまして、それで甚だ貴方さまには失禮と思ひましたが、貴方さまに電話をおかけして、貴方さまにもお悔みを申上げ、先生のお宅の方へも貴方さまを通じて、一言よろしくお悔みを申上げて下るやうに、お願ひしたいのでございますが。……」

「あゝさうですか。それは有難う、ほんとにわざわざ……有難うございました。お宅の方にもよろしく申上げます。……えゝ、畏まりました。」

小野は何んだと思ひながら、併し下宿の女主人が、わざわざ電話をかけて呉れたこと、そして下宿の女主人までが、自分たちの先生の死を、悼んでゐて呉れることが、何となく嬉しかつた。そしてその上その電話が、令嬢に依つて偶然に取次がれ、しかもその手を煩はして、人から改めて悔みを受けたといふことが、胸の底を仄暖く感じさせた。彼は満足してそして電話を切つた。

電話口を離れて、何氣なく隣りの部屋を見ると、半ば開け放たれた襖戸の向うに、彼女が炬燵のところから、顔を上げて此方を向いてゐるのに、確と目を合せて了つた。

「有難うございました。」

小野は少し慌てて、からお辭儀を一つした。

「いゝえ。——」

と向うの令嬢も、親しげに會釋をして、そしてなほ此方を向いたまゝ、何か話したげな様子を見せてゐた。

小野も何となく、それだけでは去り難い感じに囚はれた。それで彼は第一言、説明するやうに付け加へた。

「下宿からの電話で、何の用でもないんですけれど、悔みを云つて來て呉れました。そして先生も二三度、前に彼處へいらしつたことがあるとかで、皆さんにも宜しくお悔み申上げて呉れとのことでした。」

「まあ、さうですか。」令嬢は思ひの外に、彼に隔意ない親しみを見せて、それからなほ言つた。「あの小吉館つて、大學の前のお宮の後にある、急な坂の中途の下宿ですか。」

「えゝ、さうですよ。さうして貴女が彼處を知つていらつしやるんですか。」

小野は少し驚いた。そしてそのことが嬉しかつた。

「まア、やつぱり彼處？　貴方も彼處にいらつしやるの。彼處なら、私知つてゐますわ。前に大寺さんがいらした時分、私、何度もいつて泊めて貰つたこともありましたわ。私がまだほんとに小さい時分ですけど。……まあ彼處？　彼處には確かその後で、原田さんもいらしたことがある筈だわ。おやあ隨分、色んな人がゐた家ね。——」

令嬢は僅に微笑を含んで、女學生らしい驚嘆の聲を洩らした。

「さうですか。へゝえ、さうでしたか。」さうと

は少しも知りませんでした。」小野は更に妙な寂しさを覺えざるを得なかつた。その偶然ならぬ、偶然の下宿を同じく知つてゐて呉れたことが、妙に深い印象を彼女に殘したやうに、心の奥で感ぜられたからだつた。

「そして彼處の家の女中さんに、お下げを結つて貰つたり何かしたことがあるのよ。……私、もう一度、行つて見たいやうな氣がするわ。」

「さうですか。——」

だが、小野はその後に浮んだ、「ではまた一度お遊びにでも、いらしつて御覧なさい。」といふ言葉を、さすがに書生の無躾を以てしても、殆ど初對面の令孃に、言ふ厚顔は持たなかつた。たゞ彼は何となく醜くなつて言つた。「でもその時分とは、もうすつかり變つて了つたかも知れませんよ。」

「さうねえ。——」

かう問答しながら彼は、この令孃がまだ十歳前後位の、お下げに結つた幼い姿を、鳥渡想像に描いた。そして今日に昨日の平常着と違つた、木綿物ではあるらしいが、黒紋付の式服を着てゐる姿を、楚々たるものに見て取つた。さう血色のよくない、白粉を刷いたとも見えない顔が、安眠の不眠のために、少し黒ずんで見えるしつとりした眼で、他意なく、此方を見迎してゐる。……

何故かそれをはつきり見返すと、小野はかうしてゐるのが、悪いやうな氣持に襲はれた。暫くかうして話をしてゐたつて、別に何の苦痛をも感ずる必要がないのに、彼の心は何となく息苦しいやうな、位置の自覺を呼び起した。何だかこんな處で、圖々しくさう親しくもない令孃と、いつまでも話をしてゐることは、恥づべきことだと思はれてならなかつた。

で、彼は話題の盡きたのを潮に、殆ど唐突といふ程の間もおかずに、急いで用を思ひついたやうに、もう一度取つて付けた如く、

「では、失禮しました。」

と、言ひ棄てて、彼はその電話室に近い入口から、逃げるやうに母屋へ歸つた。そして再び玄關の間に坐つて、何事もなく直接に從事し續けたが、彼の心の中には、何となく仄かなものが萌してゐるのを、時々意識せずにはゐられなかつた。併しそれはもう〳〵、先生の令孃に對する、戀心などといふべきものではなかつた。たゞ今までの荒野の如き小野の心に、たゞ僅かあれだけの異性との接觸でもが、淡い冬日の光のやうなものを、微かに投げ與へたに過ぎなかつた。それでないとすれば、寧ろ近づくを許されなかつた異國の領に、はからずも他意ない會釋を得たことが、たゞ嬉しい氣を起させたに過ぎなかつた。……

かうしてゐる中に、更にその午後、もう一つの交渉が、小野と彼女との間に起つた。

それは彼女の學校友達が、二人打揃つて、白と淡紅の西洋草花の束を携へて、お悔みに來たことだつた。その人たちは、殆ど絶え間もない位、單色な弔問客が打續いた後で、一つの色彩を玄關先に點じたやうに、生々しい思ひを、受付にゐる小野たちに感ぜしめた。

二人はお揃ひのやうな、藤紫の紋服を着てゐた。そして玄關先まで來ると、中をちらと覗つて、鳥渡立停つたまゝ、暫く躊躇してゐるらしかつたが、その中にきまり悪さを思ひ切つたと見えて、一人がつか〳〵と入つて來て、顔を赧めながら伏目勝に玄關內へ這入つた。

取次には、そこの近くにゐた原田が出た。

「誰方でいらつしやいますか。」

原田は彼特有の、物柔かい調子で、かう促すやうに尋ねた。弔問者の名を聞いて、それを書き留めるのが、彼ら受付の第一の務だつた。

「あの、」併し、その少女たちは、自分たちの名

を名告らなかつた。「冬子さんはいらつしやいますか。」

「あゝさうですか。」と、原田はすぐ合點して、それから後を向いた。「あのお嬢さんのお友達だ。冬子さんはどこにおいでになるかしら。」

小野は鳥渡胸を躍らせて、そして小聲に聞き返した。

「お嬢さんつて、何番目の？」

「一番上のだよ。」

原田は幾らか得意さうに答へた。

「あゝさうか。おやあ多分離室だらう。僕が行つて知らせてきて上げよう。」

小野は巧に機會を捉へた譯ではなかつたが、立つに都合のいゝ場所にゐた所から、すぐ立上つて了つた。それは強ちに、その令孃――冬子といふ名前だとは、その時初めて知つた。――に近づきたいといふ野心からではなかつた。彼はどんなことであらうとも、澁らずに、すぐ用を足さうと思つてゐた上、先刻電話を取次いで貰つた酬いといふのも可笑しいが、さうした一種の義務が、自分にあるやうに咄嗟の間ながら考へたのだつた。そして勿論さういふ交渉が、令孃との間に生じることは、それ自身嬉しいことには違ひなかつたが、併しそれは決して意識的の、後の爲にするところの努力ではなかつた。

小野はまた爪先で、廊下口を引かけるやうにして、板敷の上を驅けて離室に赴いた。

冬子は、其處の垣根のところに、顏を伏せてうとうとしてゐたらしかつたが、小野の足音に眼を醒したらしく、少し恍惚したやうな目を上げて、入口の所に立つた小野を見返した。

「お嬢さん。」さう呼びかけるのは、小野に取つて初めてであり、何となく恥しくもあつたが、彼はさう呼ぶ外なかつた。「今お友達の方が、二人でお見えになりましたよ。」

「あらさう？――どうも有難う。」

彼女は物憂げな聲で言つた。そして少し身繕ひするやうにした。

それだけでは、何となく物足りないと思ひながら、小野は併しそこに、それ以上留つてゐるべきでなかつた。で、彼は更に、「玄關の所に待つていらつしやいますから、どうぞお早く。」

と、餘計な事を此方でだけは言つて、すぐ引返して來た。が、別に彼はそれ以上のことを、何も望んでゐる譯ではなく、その取次に滿足して、玄關の座へまた戻つてゐた。

やがて玄關の前の、先刻の二人が待つてゐるところへ、向うから當の冬子が、生々した顏付をして、やつて來るのが見えた。

二人はそこの玄關先で、女學生流に親しげな挨拶をして、餘所行の丁寧な挨拶を、述べ合つてゐる樣子だつた。が、それが濟むと、冬子はやうやく勸めるやうにして、その二人を、玄關の隅から上げた。女學生たちは殆ど玄關一ぱいに、控へてゐる受付の前を、腰をかゞめて會釋しながら、恥しさうに擦り抜けて、奧の書齋の方へ、冬子自身に伴はれて、導かれていつた。

その拍子に、彼女らの花束から、一葉の水仙の花片が、玄關口に毀れ落ちて殘つた。小野は早速それを認めて、拾ひ上げてどうかしたかつたが、何となくそれが氣恥しくて、彼には敢行することが出來なかつた。他の人もそれを認めたかどうか知らぬが、誰も拾ひ上げようとする者はなかつた。そしてそれは、小野が後で氣づいた時は、玄關先の下駄の泥にまみれて、踏み躙られた樣になつてゐた。

暫くすると、その女學生たちは、先のやうに含羞みはしなかつたが、靜に玄關を通り拔けて、黙つて丁寧にお辭儀をした後、歸つて行つて了つた。と、それを送つて出た冬子に、その女學生たちの姿が少し遠ざかるとすぐ、原田か

親しげに話しかけた。

「冬子さん。あの今の方々は、何と仰有るんですか。弔問者名簿へ付けますから。」

「あら、あの人たちまで付けるの。」

冬子は顧みて言つた。その弔問者名簿は、その時丁度運よくも、小野が付ける番に當つて、彼の前に繰り擴げられてあつた。

「えゝ、全部。」

小野もやうやく發言權を與へられたやうに、早速こう答へた。

「さう？」と、彼女は小野の正面へ、ずつと近寄つて來て、帳面を見ながら、もう一度抗辯した。「でもあの方、私の級の親友よ。私よく覺えてゐるからいゝでせう。」

「さうですね。」小野は併し妙な嬉しさを感じながら、意地惡く言つた。「でも、立派な弔問者に違ひないんですからね。先生の弔問者なら、悉くこの帳簿に載せて置いて、永久の記念に遺して置かなければならないんです。」

「まあ。」彼女は微笑んで、仕方なしに言ひ出した。「ぢやあ、下島文江さんと、藤井はる子さん。」

「お處は？」小野が書きつける傍から、原田が首を差し伸べて聞いた。

「あら、そんなことまで詳しく書くの？」

「禮狀を差上げる都合がありますからね。」

小野も辯解するやうに言つた。

と、その時、奧の方に行つてゐて、ふと戻つて來た黑田が、その問答を聞いてゐたと見えて、傍から高い聲でいひ出した。

「お孃さん〳〵。その不良少年共に、うつかり住所なんぞ言つちやいけませんよ。」

「馬鹿言ひ給ふな。」

小野は鳥渡自分が圖星を指されたやうに、そつと顏を赧めた。

と、その時まで奧の方に、まじ〳〵と默つて笑ひながら、その樣子を見やつてゐた杉浦が、更に皮肉な諷刺の口を出した。

「兎に角、早く住所を明かした方が、あの人たちの爲ですよ。でないと小野なんぞは、是からすぐに後を付けてでも、住所を突止めるかも知れませんからね。」

「馬鹿を言へ。」

小野は少しく色を作して、苦笑しながら怒つた。

「おやあ言ふわ。」と、冬子はそれだけの重圍を受けながら、素直に微笑しながら言ひ出した。

「下島さんは目白の寮舍よ。それから藤井さんの下谷[illegible]八番[illegible]。それでよくつて。」

「えゝ、結構です。——どうも有難う。」

そんなことも小野に取つては、一層の[illegible]いた[illegible]に彼女の[illegible]を、[illegible]に濃くしていつた原因だつた。

第五章

一

二人の淡い交渉に就いては、それからかういふこともあつた。

それは通夜の[illegible]のことであつたが、前日來殆ど不眠不休で、[illegible]の[illegible]に努めてゐた小野たちは、[illegible]いふので、[illegible]な[illegible]に[illegible]、[illegible]通夜に[illegible]された形で、[illegible]るために、交代で寢ることになつた。[illegible]口を過ぎて、弔問者も少くなつたし、[illegible]かつた[illegible]の弟子たちも、[illegible]集つて來て、その人たちの手傳ひも増えたので、小野と原田とは安んじて、後を黑田や杉浦やその他の人々に任せて、[illegible]と定めてある[illegible]室の方へ退いた。

そこの奥の八疊には、——平常は令孃たちの勉強部屋らしく、形ばかりの床の間には、小型な花立や一輪插しなどが、可愛らしく置き捨てられてあつたが、——既にもう弟子の誰彼が、閑を見ては寢に來た後と見えて、所狹きまで亂雜に、蒲團や夜具が敷きつ放しになつてゐた。手當り次第に持ち込んだものと見えて、中には令孃たちのものでもあるのか、裏の赤い派手な夜具や、可愛い括り枕などまであつた。が、他の人たちと同じやうに、小野と原田もそんな事に頓着してはゐられなかつた。彼らはその部屋に入ると、その亂雜な彩りに、鳥渡呆れたやうな顏を見合せたが、殆ど逡巡する餘裕もなく、その中の一つを選んで、着のみ着のまゝ寢なければならなかつた。

小野は早速向うの端の、壁側の一つへ潛ぐり込んだ。そしてもつと誰かが、後から寢に來るのを妨げないやうに、ぴつたり壁側へ寄り付くやうにして、小さくなつて身を横へた。原田もその次の床へ、並んで入り込んだ。かうして二人は、一言二言何か話してゐる中に、さすがに徹夜來の疲れで、不安ながらに深い眠りを、寧ろ肉體的な眠りを、すつかり寢入つて了つてゐた。……

と、眞夜中頃の事だつた。急に部屋の中ががやがやと騷がしいので、眠りからぽつかり眼を覺して見ると、五六人の令孃たちが、向うの入口の襖戸の傍に、一と塊になつて立つたまゝ、部屋の中を見渡してゐた。彼女らも連夜の座から、夜が更けるまゝに解放されて、こゝへ寢に來たに違ひないらしく、亂暴に引摺り出されて、敷きつ放しにされた自分たちの蒲團や、その男子の寄宿舍にもありさうにない亂雜さを、呆れながら感嘆の言葉を發して、呟いたり怒つたりしてゐるのだつた。

「あらまア、こゝへ私たちも寢るの。」

甘つたるい作り聲のやうな、二番目の令孃のとすぐ知れる、聲がかう言つてゐた。寢呆け眼に、近眼鏡を取外してゐるので、そのそれ〴〵の令孃たちの姿は、小野にはまるで見えなかつた。

「さうよ。だつて外に寢る處つて無いぢやないの。」

さう答へたのは少し年嵩の、長女の聲に違ひなかつた。

「あらさう。——私、厭だわ、こんな處へ寢るの。誰か寢てゐるんですもの。」

今度は小さな末の娘の、甲ン高い聲がした。

「それにこれつきりしか蒲團がないの?」

「寒いわねえ」

「きつと風邪を引くわ。」

「私、厭だわ」

かう口々に彼女らは言ひ合つて、そして更に一緒に聲を揃へては、

「ねえ。——」と間投するのだつた。

「姉さん。私は一體どこへ寢るの。」

「どこへでも空いてゐる處へ入ればいゝぢやないの。」

また長女の指圖するらしい聲がした。

「だつて床は一つしかないぢやないの。」

「だから一つのに二人づつ入つてお寢なさい。さうすれば暖かよ。」

「でも私の蒲團がないわ。」

「どれでもいゝぢやないの、今そんな事いつたつて駄目よ。こゝに敷いてある通りに、他人の蒲團で我慢するのよ。私のだつて無いぢやないの。」

「あら、彼方の人が掛けて寢てるわ。圖々しいわね。誰でせう」

また小さな娘の聲がした。

「あら友子さん。そんなこと言ふもんぢやなくつてよ。お客さまの眼が覺めるわ、

長女のらしい窘める聲がした。

小野はもう先刻から、起きてぢつと樣子を窺つてゐたが、その時むつくり首を上げた。氣がついて見ると、彼の掛けてゐた蒲團は、裏の赤い女物だつた。彼は少し起き上るやうにして、突然言ひ出した。

「あ、御免なさい。貴女がたの寢る處を奪つて、大變失禮しました。今、起きますから。……」

小さな令孃たちは、むつくり起き上ると急に、膨れぼつたい赤い眼を强ひてぱち／＼させながら、眞面目腐つてから言ひ出した小野を見ると、默つて顏を見合せたが、やがてすぐくす／＼と笑ひ出した。

が、長女なる人はさすがにかう言つて、その小野の起きようとするのを止めた。

「あら、いゝんですよ、此方にあるんですから、どうぞその儘にしてゐて下さい、お起きにならないでも、大丈夫ですから。……」

さう言はれると小野は、惜しい眠りを破られて、まだ十分に寢足りなかつた際なので、

「さうですか、ほんとに差支へないんですか。」

と、腰を据ゑたい氣持にならざるを得なかつた。

いつの間にか起きてゐた原田も、その時顏を上げて言つた。

「ぢやあ私がこゝを退きませうか。小野君と一緒に寢ればいゝんですから。ねえ、小野君。」

「えゝ、さうし給へ。さうすればもつと餘裕ができるでせうから。」

「いゝえ。」と令孃は併し少し慌てゝ、打消すやうに言つた。「そんな事なさらないでもようございますわ。どうか此まんまで。……困るわ、そんな事しちやあ、原田さん。貴方の寢た後へなんぞ、誰も寢やしないことよ。」

彼女は幾らか親しみと、反感とを以てから窘めるやうに言つた。

「さうですか。では失禮します。」

原田も苦笑して、さう承服せざるを得なかつた。

「ぢやあ御免下さい。」

小野もその言葉をいゝ事にして、再び頭を枕につけた。彼はもつと寢たかつたし、また令孃たちと一緒に、かうして一室に寢ることも、微かな風情と感じないではなかつた。

「いゝえ、此方こそ。折角お寢みになつた所を、お起しして濟みませんでした。――さあ、春子さんも桂子さんも早くお休みなさい。」

「私、此方の端よ。」二番目の令孃らしいのが、甘い派手やかな叫び聲を揚げた。「智イちやん！此方へいらつしやい。」

「あら、私？」その時まで全く控目に、たゞ伴奏的に聲を合せてゐるのみだつた、その智イちやんと呼ばれた令姪らしいのが、かう答へてゐた。「大きい者ばかりぢやア、寒くないこと？」

「大丈夫よ。一緒に寢ませうよ。」

すると小さい方の妹同志も、それに對抗するやうに言つてゐた。

「ぢやア、小姉ちやん、二人で中央の蒲團へ寢ませう。」

「うむ。寢ようかね。」三番目の令孃は、わざと大人ぶつた言ひ方をして、自分のその道化に、にこりともせず濟ましてゐた。「そして大きい姉さんは、一人で彼方の端へ寢かす、と。――」

「あら、厭よ、私、此方の端なんて。」

一番上の令孃も、さすがにその後に殘された床の、原田に一番近い位置を嫌つた。

「いゝぢやないの、姉さん。その代り一人だから。」

「さうね。ぢや仕方がないわ。」

そんな事で、彼女たちも殆ど着のみ着のまま、それ／＼選んだ床に、枕を竝べて眠りに就いた。

小野の方からひそかに窺ふと、その長女の冬子孃は、原田の向うにできるだけ間隔を取つて、一番後から床に就いたが、まだぱちくと眼を開いて、天井のどこかを眺めてゐる、白い横顔がくつきり見えた、小野は併しそれを窺ふと、自ら恥しいやうに感じて、目をそつと外らして了つた。先師の令孃に興味を以て、ひそかにその寢顔を偸み見る、そんな事は許されないやうな氣がしたのだつた。

が、その時、傍に寢てゐた原田が、突然から令孃に話しかけるのを、彼は聞かなければならなかつた。

「冬子さん。お父さんがお亡くなりになつて、是から淋しいでせうね。」

「えゝ。」冬子孃の氣の乘らない、併ししつとりした言葉があつた。「でもそんなでもないわ。もしこれがお母さまだつたら、私たちはどうしていゝか解らないでせうけれど。」

「さうですかねえ。」

それだけの事ではあつたが、小野はさう親しげに冬子孃に向つて、話しかけ得る原田の身を、その時漠然と羨望するの念に、ひそかに囚へられざるを得なかつた。

一旦醒めた彼の眼は、遲いに拘らず暫く眠れなかつた。

二

葬式の日は、爽々と晴れてゐた。

葬儀は齋場やその他の都合で、午前十時から始まる事になつてゐた。それで門弟たちの大部分は、棺に從つて馬車で來べき大寺氏その他の二三の主だつた人々を除いて、殆ど凡て葬場係として、朝早くから青山齋場へ赴く事になつてゐた。小野も勿論その中に加はつて、勝見家に於けると同じく、黑田や原田と共に、受付係を勤める手筈だつた。さうしてその受付には、第二日目になつてやうやく駈けつけて來た柳井も、一員に加はつてゐた。彼は赴任早々の學校の用務を、慌てて片づけて來たのだが、來て先生の死顏に對面し、未亡人に初めての挨拶と弔詞を述べると、もう小野たちと共に、忙中の人とならなければならなかつた。黑いフロックを細い身體に着け、悲しげに髮を額上に亂した、蒼白い彼の風姿は、遲れて加はつたためか、何となく痛々しげに目についた。

皆は出掛ける前に、先生の遺骸に向つて、最後の告別をした。

遺骸はもう棺に入れられて、書齋の一隅に白布に包まれて、安置されてあつた。彼らはその前に立つて、未亡人が恭しく蓋を開いて呉れた後から、順々に頭の方へ寄つていつて、もう二度とは見られない死顏を、ぢつと拜さなければならなかつた。

小野も他の弟子たちと一緒に、柳井の後から靜に進み寄つて、棺の中を恭しく覗き込んだ。先生の顏は、もうすつかり土氣色に變つて、隆鼻はもとのまゝながら、眼蓋の處だけ少し薄白く閉ざされ、頰は歪んだやうに落ち、銀白の疎髯も光りなく、南無阿彌陀佛と書いた細な紙片に包まれて、土で拵へた像のやうに、重たげに仰向けられてあつた。併しそれは明け放れた朝の光と、絶えぬ蠟燭の灯影とで、非常に莊嚴な形に見えた。小野はそれをぢつと見凝め、何とはなしに漂ふ死人の匂ひと、微かな樟腦のやうな香りを深く吸ひ込んで、また恭しく頭を下げた。そして後の杉浦に席を讓つた。

棺の頭の處には、未練がましく佇滯する人々を促すやうに、手で順々に立去る指圖をしながら フロック姿の松本式部官が、監督のやうに立つてゐた。小野はそれでももう最後だと思ふと、場所を讓りながらもう一度振り返つて立停り、松本氏に叱責されるやうな眼を見せられ

ると、不服さうに立去らねばならなかつた。

かうして連れ立つて外へ出ると、まだ消え殘つてゐる曉靄が、うす灰色に四邊を罩めて、見返る庭前の破れ果てた芭蕉に、しら〳〵と朝日がさし初めてゐた。門弟たちは三々五々、[illegible]町の停留場まで歩いて、そこから青山へ行くべく電車に乘つた。

齋場へ行つてみると、そこのがらんとした控所の、大きな爐にはもう炭火が、かつかと熾されてあつた。準備とはいつても、もう葬儀屋の人夫たちが、手早く整へてゐて吳れたので、何ら爲すべき事もなかつた。齋場の中は黑と白の布を以て、悲しくも淸々しく柱を卷かれ、白木作りの祭壇が新しく調へられてあつた。會葬者の席の椅子も、平常より增して、遺漏なげに竝べられ、霜に濕つた前庭も、すつかり掃き淨められてあつた。門弟たちは仕方なしに爐の傍に集つて、色々な雜談を交しながら、時間の來るのを待つた。そして話は會々その場にゐない松本氏のことに及んだ。氏は恰も自分一人が先生の門弟であるかのやうに、殆ど專斷的に事を行ふといふので、端なくも非難されたりした。小野はそれを聞いてゐながら、自分にそれ程にも感じてゐなかつたが、なか〳〵門弟同志の間にも、喧しい排擠に似た感情のあるのを、漠然と感ぜざるを得なかつた。

その中にやがて時間は來て、早い、手傳ひ旁々の會葬者などが、もうちらほら見え出したので、葬場係は各々その部署に就いた。小野はまた黑田や原田たちと一緒に、一方の天幕張りの受付所に立つた。柳井は向ひ側の建物に附屬してゐる受付所に、別れて他の人々と控へた。杉浦は、まだ學生だといふので、車馬の應接と監督に任ぜられて、入口の街路の中央に立つて、人力車や自動車の待つてゐるべき場所を、それぞれ指圖する事になつた。角帽を被り、大學の制服を着た彼は、だん〳〵集つて來る車馬の、乘りすてられた車夫や運轉手に、「どうか彼方で待つてゐて下さい。」などと呼んでゐた。

會葬者はだん〳〵數を增して來た。而して後から後からと來る人々で、兩方の受付は益々繁忙を極めた。それは可なり有名な識者階級の殆ど凡てを集めた觀が在つた。學者、著述家、操觚者、さういふ人々は殊に多かつた。小野は日頃知らぬ、さういふ有名な、殊に作家たちの名刺を受付けると、何となく自分の身が、光榮あるやうにさへ感じて、熱心に應接に從事してゐた。

さうかうしてゐる中に、勝見邸を發した葬列の馬車は、金色の棺を中心にして式場へ着いた。人々の肅然と迎へる中を、棺は下され、導師の僧たち、家族の人々が續いて下りた。未亡人初め令孃たちは、悉く白無垢の喪服を着てゐた。たゞいつもと同じく曉星小學の制服を着た二人の少年が、澤山集つた會葬者を遠慮なくじろ〳〵見廻しながら、手を曳かれて奧の休息所の方へ行つた。令孃たちの姿は純白に裝飾なく裝はれて、いつもより更に楚々たる淸淸しさを帶びてゐた。

時間は迫つて、會葬者は更に一頻り受付の小野たちを忙殺させた。人々はやがて葬式が始まりかけても、陸續と後を斷たなかつた。それで尙も暫く彼らは、受付の事務を打すてゝ式場に赴く事は出來なかつた。既に會葬者たちは、控所から葬場へ入つて行つた。そしてもう綏やかな鼓の音が、莊重に流れて來た。皆はもう行かうとして、一應誰か[illegible]を受けに行つた。と、

「もう少し居て吳れなければいけない。」

と、葬場係の主任たる松本氏から、又さういふ命令が在つた。が、それを聞いて第一に、黑田が憤慨し出した。

「何だって。もう式が始まってゐるのに受付になんぞ居られるものか。僕たちは何も受付に傭はれて來てゐるんぢやないから、此の大事な葬式に、列席せずになんぞ居られるものか。いゝから、構はない。行かう。行って席につかう。」

受付の人々はすぐ贊成して、凡てを打ちすてて、葬場の方へ赴いた。熱心な事務家も、さういふ點では露骨に藝術家だった。後は日出新聞社から手傳ひに來て呉れた人が、苦笑しながら守って呉れた。

受付に居た人々の後から、柳井と連れ立つやうにして、小野が入って行った時、もう式は疾うに始まって、鎌倉からわざ〱來て呉れた、先生と相識なる有名な禪師が、既に棺前に進んで、莊重に禮拜してゐるところだった。小野は他の弟子たちと一緒に、もう空席もないので、後の壁側に立って、肅然と襟を正しうした。今の先刻の憤慨などは、眼前の正面にある白い祭壇を見、老師の足取りや禮拜に連れて、縫ふやうに時々起る緩やかな鐃聲を聞くと、すぐ鎮まって了った。會葬者の咳の音が、耳につく程彼の心は靜まってゐた。

一通り禮拜を終ったらしく、やがて老師は棺と向ひ合って、正面に置いてある朱塗りの禪榻にゆったり身を下ろしたが、錆を含んだ沈重な音聲で、朗々と偈を下し始めた。そして其終ひを結んだ「喝！」といふ聲は、小野の耳にも居ずまひを正す程凄く響いた。

と、其時、一時途斷えてゐた鐃と笛の音が、咽ぶやうに起り始めた。そしてそれに連れて、並居る僧たちは聲を合せて、緩く靜かな讀經を始めた。それを聞くと先生が死んで以來、今まで繁忙な用務のために、悲しみを忘れた如く紛らせられてゐた小野の心も、すっかり葬場内の靜寂と嚴肅な空氣の中で、感じ易く和ませられて了った。彼の心には初めて泣くのを許されたやうな、一種の宗教的な餘裕が生じて來た。

が、併し彼は泣けなかった。四邊には見知らぬ會葬者や、又見知った文學者などが、一ぱいに充滿してゐた。そして其中で、嚴つい大の男が泣き出したりしては、物笑ひの種になりさうな氣がした。彼は目に正面の白い柩を見、耳に讀經の聲と鐃の響とを聞いて、だん〱いろいろな先生が在った日の、溫容や慈語を思ひ出して、瞼の底が熱くなるのを感じながら、一生懸命に、それを堪へてゐた。

讀經の聲と鼓鐃の響とは、益々急調になって行った。緩やかなゴーンといふ梵鐘と、其間を縫うてカーンと響く澄んだ鉦の響、無慈悲な餘韻のない音と、ホク〱と單調に刻む木魚の音、それらは異様に交響し、旋律を作って、堪へ得ぬ思ひに小野の感動を唆った。が、それでも彼は一生懸命に、それを堪へてゐた。彼の丁度前の椅子には、彼より二三年前に大學を出て、當時創作に從事してゐた、ある非感傷的な作家がゐた。そして其人は平常から、さうした涙を滾す事などを、甘いと言って嘲笑する傾向を持ってゐた。其人は時々振り返っては、友人である小野や柳井を、先刻から顧みてゐた。それで小野は其人の前だけでも、せめてそんな取亂した泣顔などは見せたくなかった。彼はぢっと前にゐる其人の、太い赤みを帶びた健康な頸筋を眺めて、幾らか憎々しい思ひに滿たされながら、なほも堪へなければならなかった。

と、突然、小野たちの一團の、前横の方に立ってゐた浦山といふ人が、急に堪へられないやうな、咽び聲を揚げた。小野は最初殆どそれを、くつくつ笑ひ出したのかと思った。見ると彼は、今迄引堪へてゐた息を、一度に迸らせたやうに、肩を慄はせて歔り上げながら、横を向いて小野たちの方に顏を俯向け、急いで手巾を顏に押當てた。

それを見ると、小野も堪らなくなつた。そして思はず傍に居る柳井と、救ひを求めるやうな顔を見合せた。同時に柳井も黒い清澄な三角日に、一ぱい涙を溢らして、ぢつと此方を見返つてゐた。二人はすぐ互の眼を感じて、外にそらして了つた。が、もう其時は小野の目からも、涙は止度なく溢れてゐた。熱い、押へ得ぬ涙で、正面の柩の白い形も何も、ぼや／＼と溺れて了つてゐた。……彼らは周圍を忘れて泣いた。

其中に讀經は終つて、そして簡單な二三の弔詞が讀まれた。それは故先生の遺志で、凡て辭退する譯になつてゐたが、先生が關係してゐた新聞社の社長から折角來たのが一つあつたため、それと友人總代のと、門弟有志のと三つだけ、質素に捧呈する事になつてゐた。

小野は涙に滿ちた眼で、友人總代の加能氏の後から、自分たち門弟を代表した、フロック姿の大寺氏が、前屈みに歩みを運んで、無言に弔詞を捧呈するのを、感銘深く見て取つた。そして今更ながら此人の光榮と、其謙虚な態度とに、漠然たる尊敬の念を覺えた。

それから、遺族の禮拜が始まつた。氣丈な未亡人はさすがに、泣顔を見せにしなかつた。が、其すぐ後から、長女の人に手を曳かれて、新太郎少年が、導師を怪訝な顔で見返りながら、引つ張られるやうに燒香に進んだ時には、一旦收まりかけた涙が、更に油然と小野には湧いた。少年は柩の前で、長女に敎へられると、殆ど鷲掴みに香を取出して、それからぴよこりと頭を下げた。小野の目はそれと共に、白無垢を着た其人の、割にすらりとした姿に、注視を與へずにはゐられなかつた。彼女もさう泣き伏した跡もなかつた。

其後から、爾餘の令孃や令息たちが燒香した。親戚の方々が續いた。其頃から會葬者は、もう式が終つたので、立上つて歸りかけてゐた。弟子たちの主だつた人や、會葬者中の親しかつた人々などは、順次に列を作つて、進み出て禮拜して行つた。小野も柳井と共に、それまで壁側にぢつとしてゐて、會衆の立去るのを待つてゐたが、もう後は殆ど近親の人ばかりになつたので、連れ立つて進み出ると、其棺前に立つて香を捧げた。

小野は其時、目前に近く、瀧のやうに垂れ下がつた夏目漱石之柩といふ、白い旛を仰ぎ見ると、不思議に又涙が夥しく湧いて來た。一緒に燒香した柳井も、涙をとゞめ敢なかつた。二人は互に手を取り合ふやうにして、薄暗い人目のある齋場を逃れ出ると、其處の横手から裏手へ出て、また殘つてゐる會衆の見てゐないのを幸、思ふまゝに涙を流した。やがてやうやく涙を收めて、氣がついて見ると其處は、齋場の庭續きでもあるらしく、落葉や紙屑に交つて、卵の殼などが白く冬日を照り返してゐた。

二人が再び齋場の入口へ戻つた時、もう凡ての人の禮拜は終つて、柩は再び人夫に依つて、門前の馬車へ擔ぎ送られようとしてゐた。小野たちはそれを見送つて、更に馬車の停つてゐる處まで、後を慕ふやうに從いて行つた。

柩は再び金色の枠を取つた、悲しみの馬車へ載せられた。そしてそれを火葬場まで送るべき、家族の人々や主だつた友人門弟も、それぞれ黒塗の馬車中に打乘つた。

小野は他の弟子たちと一緒に、其處の道傍に立つたまゝ、其葬列を見送らうとしてゐた。

ふと、氣が付いて見ると偶然、彼の正面の目の前にある馬車に、長女の冬子孃が乘つてゐた。その白無垢を着た、淸々しい姿が、黒い馬車の窓枠に仕切られて、恰も額縁へ嵌められた繪のやうに、白く鮮かに見えてゐた。衣裳が純白なために、[illegible]、色[illegible]が黒く、目の下た

どはさすがに擦り赤めて、やゝ黒ずんで見えたが、其呆り恍惚したやうに、ある一點をぢつと眺めてゐる形は、小野の心にある深い同銘を落さずには措かなかつた。

併し、恐らく無意識にではあらうが、彼女のぢつと目を落して、動かさずにゐる視線を辿つて、其方向を見ると、其時には大學の制服を着て、兩手をポケットに突込んだまゝ、藹然と柩車を眺め入つてゐる杉浦の黒い姿が在つた。

小野は其時既に、漠然たる嫉妬と恐怖とを、その薄い冬日を浴びて、陰氣に立つてゐる杉浦の黒い影に覺えた。

やがて馬車の列は火葬場に向つて動き出した。

三

その夜小野は一とまづ下宿へ歸つて、數日來の疲れを休める爲に、ぐつすり眠つた。先生の死後三日の間、勝見家にばかり起居してゐたので、下宿の蒲團は冷たかつた。併し彼は初めて一人になつたので、沁々と色々な事を思ひ出しながら、淋しいが安らかに床に就いた。先生の死、それは勿論悲しかつた。いろ／＼な追憶に連れて、彼はそつと涙ぐむ事もあつた。が併し彼の心の奥には、先生の死を機會にして、何となく彼の世界が廣まり、何物かが芽ぐんで來たやうな、漠然たる幸福感を、時々感ぜざるを得なかつた。そしてその葬式も滯りなく終つた今日、何となく滿ち足りたやうな思ひで、すぐ眠りに就いて了つた。明日の事を思ひながら。……

翌朝眼醒めると、彼はすぐ今日は、勝見家の人々と共に、先生の骨上げに行く約束をした事を、はつきり腦裡に浮ばせた。そして何となく光榮なやうな、嬉しい思ひで飛び起きた。雨戸を繰つてみると、下宿の蔭に滿ちた裏庭にも、輝かしい白い冬の朝日が、斜に外れてさし込んで、枯木と屋裏の間から、蒼い冬空が磨いだやうに見えてゐた。彼はその美しい日影を眺めて、今朝八時迄には必ず勝見家へ行つて、骨上げのお伴をするといふ約束の時間に、もう遲れたのを思つた。そして取り敢ず急いで、冷たい着物を着換へた。

さうしてゐるところへ、女中の足音がばたばたとして、襖を開けて彼の室へ現はれた。

「あら小野さん。」女中は襖を開けると、少し意外な顔付で目を瞬つた。

「もう起きていらしたの、今朝は不思議ね。」

「今起きたばかりだよ。——だが何だい慌てて？」

小野は帶を締めながら、から問ひ返さざるを得なかつた。

「お電話よ。勝見さんから。——それで今、貴方がまだ起きていらつしやらないからと申上げたら、早速起して下さいつて仰有るのよ。だから早く出て下さい。」

「さうか。そんなら早く言へばいゝのに。」小野は勝見家からと聞いて大抵用件に分つてゐるが、そんな風にわざ／＼電話までかけて呉れたことを、恐縮と共に嬉しさを覺えて、駈けるやうに電話口へ出た。

「もし／＼。お待たせしました。僕、小野です。勝見さんですか。」

「えゝさうです。」受話器の中では、少し韆を含んだ樣な、中音ながら和やかな女の聲があつた。「貴方、小野さん！　私、分つて？」

「え？　誰方です。」

小野は思はず問ひ返した。勝見家には、梅やといふ女中があつて、その女中は毎も木曜會にゆく度に、取次に出る馴染でもあり、又その後奧さんが何かの序に話したことに依れば、或る時夏のことだつたが、夫人は一體どんな弟子た

ちが、木曜日に集まつて來るのかと思つて、玄關の正面の簀戸の蔭にゐて、來る人々をひそかに觀察してゐた時、小野が訪ねて來たのを見て、「あれが柳井さんかい。」と尋ねたら、その梅やが言下に、「いゝえ、柳井さんはもつと綺麗な方ですわ。」と答へて夫人に小野の名を教へたので、夫人の方では小野を、昔から少しは知つてゐたとのことだつた。そしてその話を梅の前でしたところが、「あら奥さん、譃でございますわ。そんな失禮なこと、小野さんについて申上げたことはございませんわ。」と辯解したが、その時座にゐた門弟どもから、「そんなら今は小野さんに、十分好意を持つてゐるのだな。」などと冷かされたり、似合ひの夫婦だなどと揶揄はれたり、（それに對して小野は、内心どれ程胸を痛めたことか！）そんな冗談を混雜な用事の間にも言はれて、幾らか馴染になつてゐたために、或ひはその梅やが電話で、そんな親しい口をきくのかと、一時はさう思つたのだつた。それ以外の人からとは、彼はまるで思ひもよらなかつた。

受話器の中では、もう一度低いが甘い聲音が響いた。

「わたしよ、私。――解つて？」

「あ！」小野は突如としてその聲に、忘れ得ぬ調を思ひ出した。そして思はず動悸の高まるのを覺えた。「冬子さんですか。どうも失禮しました。」

「えゝ、さうよ。寢呆けていらつしやるのぢやなくつて。まだお寢みになつてゐたんでせう。」

「いゝえ、もう起きてゐました。それを女中が知らなかつたんですよ。」

小野は少し息の喘むのを、抑へるやうにして言つた。

「譃仰有い。電話に驚いてお起きになつたんでせう。隨分お寢坊さんね。もうお約束の八時よ。」

「どうも濟みません。もう皆さんお出かけになりましたか。」

「いゝえ、皆、もうとうに支度が出來て、貴方が來るのを待つてゐるのよ。それで私電話をかけたのよ。お母さんももうお待ち兼ねよ。早く杉浦さんを誘つていらつしやい。早くいらつしやらないと駄目よ。貴方がたを置いていつて了ふことよ。だからすぐいらつしやい。」

「さうですか。それはどうも濟みませんでした。ではすぐ參りますから、どうかそれ迄是非お待ちになつてゐて下さるやうに、お母さまにお願ひして下さい。是からすぐ參りますから。」

「私もゆくのよ。だからすぐいらつしやらなくちや厭よ。」

「さうですか。すぐ參ります。すぐ……どうも有難うございました。では左樣なら。」

「左樣なら、早くいらつしやい。」

その電話は、小野の心に或る驚きと、深い喜びとを齎すのに、十分だつた。少くとも冬子さんは、まだ知つて日の淺い自分に、直接電話をかけて呉れるだけの、親しみを感じてゐる。それだけで既に彼の心は、先生の骨上げに行くといふ悲しみを忘れて、今日の日のやうに晴々としてゐた。

小野は朝飯もそこ〳〵に、洋服に着換へ終ると、近所の五丁目にゐる杉浦の下宿へ、誘ひに寄つた。

小野は杉浦の顏を見ると、から言はずには居られなかつた。

「今の先刻ね。お嬢さんから直接電話がかゝつてきてね。みんなもう待ち兼ねてゐるから、すぐ來いといふんだ。だから早く支度をし給へ。」

「ふうむ。さうか。ぢやすぐ着物を着換へよう。」

朝寢の杉浦も、まだ起きたばかりらしかつた

が、別に深く氣にもとめずに、例の鬱然たる顔をして、さうして支度にかゝつた。そしてすぐそれは出來上つた。

二人が勝見家へ着いた時、もう自動車は呼んで在つた。彼らが門を入つて行くと、その足音を聞きつけて、冬子孃が離室の口から、急いで迎へるやうに出て來た。

「いらつしやい。――遲いのね。あれからもう三十分も經つてよ。」

「さうですか。どうも濟みませんでした。」

かう言ひながら小野は、昨日の白無垢とは違つて、前々日のやうな黒紋付の上へ、紫紺色の無地の羽織を、簡單に羽織つて、袴を穿いた女學生風の姿を、ひそかに嬉しく見守つた。もう彼の心には、親しみを見せて呉れる嬉しさ以外に、杉浦に對する漠然たる嫉妬の芽などは、それだけでもう在り得なかつた。杉浦と彼女とは、ただ「いらつしやい。」といふやうな挨拶をしたきりだつた。

小野と杉浦とは、靴を脫いで上るまでもなく、その儘、待ち兼ねてゐた夫人と新太郎少年や、大寺氏黒田原田などと共に、自動車に打乘つた。そして直ちに早稻田の町々を過り、幾曲りか曲つた後、郊外の街道をまつしぐらに、落合の火葬場へと向つた。

前の車には、夫人と新太郎少年と冬子孃と、そして大寺氏とが乘り込んだ。後の車には黒田と原田と杉浦とさうして小野と、若い人たちばかりが乘つた。

自動車は街衢を拔けて、並木や生垣の多い、郊外の里道へ出ると、適度の速力を加へて、快く走つた。晴れた冬の朝風は、少しぴり〳〵頬に沁みたが、皆は意ともしなかつた。そしてかなり快活な氣分で、前を行く自動車を追うた。

「惡漢追跡！」

などと畑に添うた一筋道にさしかゝつた時、小野は喜んで言つたりした。

前の自動車からは、新太郎少年と共に、冬子孃の時々後を振返るのが、背ろ窓を通して見えたりした。そして樹木の多い郊外へ出ると、それらの幹を白く輝かしてゐる榛の木が、前の自動車の車體の上へ、更に黒い縞のやうな影を投げた。その縞は瞬くうちに變つた。

やがて自動車は、小高い丘の道を上ると、向うの窪みになつた處に、火葬場が見えた。それは赤い煉瓦造りの、小さな工場といつた形で、日を受けて灰色の煙筒からは、まだ一抹の煙がかすかに漂ひ出てゐた。丘の畑には麥が青々としてゐた。そしてそこら一めんに、南を受けた日を浴びて、如何にも郊外らしく長閑なのが、赤い建物と對照されて、人々に物悲しい思ひをさせた。

門内で自動車を下りると、何となく厭な臭ひが、殆ど氣のせゐかと思はれる位微かだが、小野の鼻をそつと搏つた。そこの休憩所には別に來た先生の親友の中野氏や、一二の弟子たちが待ち受けてゐた。

小憩する間もなく、夫人を先登にして、皆は薄暗い燒場の建物の中へ入つていつた。

そこは内側をセメントで疊んだやうな、陰氣な灰色の室だつた。そしてその一方に、煉瓦で疊んだ竈の口が、赤黒い鐵の扉を見せて、二つ三つ竝んでゐた。そしてその奥の一つにだけ、紫色の幔幕が、唐突と垂れ下げられてあつた。それが特等で、先生の遺骸を入れた悲しみの竈だつた。

夫人はつとその前に進み寄つて、手を合せて禮拜したが、早速その竈の口の封印を改めると、隱亡に鍵を手渡しした。隱亡は、殆ど普通の人と同じやうな表情で、默つてその鍵を受取ると、がちやん〳〵と一二度音をさせて、その鐵の扉を右に開いた。と薄暗い竈の中に、もう

たゞ白いものが堆く、粉々になつて續いてゐた。と、隱亡は今度は竈口の前へ、臺のやうなものを据ゑ、その上へ鐵軌をかけ渡して、再びぐわら〳〵と音を立てたと思ふと、その骨灰を載せた細長い鐵板を、無慈悲にそこへ引張り出した。

堆く、處々灰を被つたまゝ盛り上つて、先生の遺骸はもう形を止めずに骨となつて殘つてゐた。そしてその頭のところには、紛れもない頭蓋骨が、少し形を崩してゐたが、圓くはつきり殘つてゐた。

人々は息を窒らせて、その變り果てた骨灰に見入つた。隱亡はいち早く、その中から頸骨を選び出した。

「是が喉佛です。」

夫人はそこで調へた甕に、まづその骨を取上げて、靜かに納めた。それから頭蓋骨を恭しく拾ひ入れた。と、傍から隱亡が、灰を被つた脊骨や大腿骨などを、それ〴〵取出して見せた。夫人と新太郎少年と冬子孃とは、それをまづ銘々に拾ひ納めた。女人門弟の人たちも、その後から白い木の箸を以て、それ〴〵一つ位づつ大きな骨を、そこの甕の中へ拾つた。と、やがて大きな骨が無くなるのを見て、隱亡は人々を押しのけたがら、

「さあ、後は此方の臺の上へあけますから、此處でよくお拾ひなさい。」

と、一つの卓子のやうな臺の上へ、灰もろとも、ざら〳〵と鐵板からあけた。人々は胸を痛めながら苦笑して、その隱亡の誂へ向な手荒な所業を見てゐたが、忽ちその臺のぐるりに集まつた。そして、離々とした先生の骨を、先を爭ふやうに拾ひ始めた。

小野の位置は、その時偶然冬子孃の、直ぐ隣りに當つてゐた。そして白い箸を持つた彼女の手は、屢々小野のそれと空間を隔てゝ交叉した。

「齒はみんなありますか。冬子さんも新太郎ちやんもよく數へて拾つて下さい。」

夫人はかう言つた。

人々は齒を見つけ出すと、それを家族の人々に知らせて、拾ひ上げさせるやうにした。小野も殆ど幾らか意識的に、それを見出す度に、傍の冬子孃に知らせるやうにした。

「あゝ、又此處にも一枚ありましたよ。」

「さうですか。」

小野の箸と冬子孃の箸とは、互に鳥渡觸れ合ひさうにたつた。

「あ・冬子さん。」夫人が突然傍から言つた。「箸から箸へおかに拾つて貰つてはいけないんですよ。」

「あら、さう？」

冬子は箸を慌てゝ引いた。

小野は自分が叱責されたやうに、心中ひそかに赤くなつた。そしてかういふ際にも、ひそかに卑しい考へ――といふ程でないにしても、他の雜念を持つことを、先生に對しても濟まないと思つた。そして今度は專念に、先生のことのみ思ひながら、骨を見出すやうに努めざるを得なかつた。

人々の手に依つて、骨片は殆ど拾ひ盡された。と、それを待つてゐたやうに、又隱亡は現はれて、

「では、もう後は篩ひませう。」

と言ひながら、それを大きな灰篩に入れた。篩の底にはまだ小さな骨片が、手で掬へる位殘つた。隱亡はそれを甕の中へあけると、少し嵩ばつて蓋が出來ないのを、無理に押し潰して蓋を被せた。もう隱亡の所業には馴れてはゐたが、小野の胸は又少し痛んだ。

それで骨上げは濟んだ。

歸りの自動車には、小野たちの間へ、骨壺を携へた新太郎少年が、割り込んで乘つた。それ

で恰も四天王のやうに、遺骨を護衞してゐる形になつたに拘らず、少年の快活な言動は、車内を往きよりも一層賑かにした。

　強ひて拵へた悲しみの面などを、故先生は喜ぶべき筈もなかつた。併しながら小野には、今日の悲しかるべき骨上げが、何ものかのために、何となく紛いやうな氣がしたのを、道々先生に濟まなく思はない譯にはゆかなかつた。

第六章

一

　葬儀が滯りなく濟んで、表立つた用務も殆ど無くなつたが、併し勝見家と弟子たちとの交渉は、それだけでは切れて了ひはしなかつた。それどころか、殆ど毎日のやうに、小野らは勝見家へ行つて、雜談半分に家用を足したり、未亡人や子供たちの相手をしたりして、益々親しくなつて行つた。殊に未亡人の提言に依つて、先生歿後の勝見家には、二人の少年の外、一人も男の氣がないといふので、弟子の中の差支ない人が、一人づつ宿直として、勝見家へ泊る事になつたので、交渉は益々深くならざるを得なかつた。勿論未亡人の手頼りとする男性としては、先生の長兄に當る長三氏が、――榎町の伯父さんと呼ばれて、――近所にはゐたが、晝間は早くから勝見家へ來てはくれるが、夜になると、必ず歸つて、自家へ泊らねばならぬ人だつた。だから何か萬一の場合に備ふるまでもなく、先生の遺骨を安置した、書齋の間を宿直すべき士が、必ず一人は必要だつた。其上良人を失つた未亡人として、深夜まで位牌を守るに就ては、相手なしには餘りに淋しい事だつた。それに未亡人は、元來からいつても、若い書生を部下に置いて愛護してやるといつたやうな、一種の「姉御」氣性が多量に在つたので、さう言ひ出したのも無理はなかつた。さうしてそれにはもうそれ〴〵一家を持つた、先輩の弟子たちは都合が惡かつた。それでまだ下宿にゐる小野だとか、黑田だとか、林原だとか中山だとか、杉浦なぞが順々に、日を定めて當直することになつた。

　小野は初め葬用が終つて了へば、もうなかなか勝見家へなぞは遊びに來たりすることが出來ないものと思つてゐた。殊に彼は、勝見家の人たちとは、もと〳〵親しくしてゐたのでなくて、先生の死に依つて初めて交ることが出來たのだから、その後の用事さへ濟めば、もう元のやうに、先生の書齋へ時々出入し得る外、家人とは何らの交渉もなくなるだらうと、ひそかにそれを物足りなく思つてゐた。で弟子たちが、先生の死んだ月命日を期して、月に一度遺愛の書齋へ會合することに議決した時、黑田か誰かがそれだけでは物足りないから、先生生前の定めの通り、毎木曜日毎に有志のものだけでも、集まることにしたいと言ひ出した時、第一に贊成したのも彼だつた。さうすれば一日でも多く、勝見家の家庭に、蔭ながらでも近づき得るやうな、ひそかな希望があるからだつた。――高等學校の寄宿舍から、大學以來の下宿住居、その索漠たる數年の生活に、彼は家庭の暖かみといふやうなもの、華やかな夫人令孃の空氣といふやうなものに、飢ゑてゐた。さうして此の怱卒前後の、十數日に垣間見えた勝見家の雰圍氣といふやうなものも、彼にとつてはもう忘れられないものだつた。だから彼はその未亡人が、宿直を提言した時も、恐らく外の誰よりも、一番喜び迎へたに違ひなかつた。

　先生の遺骨を守つて書齋に宿直すべき順番は、さし當つて十二月二十九日の埋骨式當日まで、それ〴〵人々に割當てられて、茶の間の隅に貼り出されてあつた。小野はそれを仰ぎ見て

は、自分が天下晴れて勝見家へ、泊り得る順番の來るのを、ひそかに指折り數へる思ひだつた。併しそれも、さう待ち兼ねる必要はなかつた。何故といふに、その宿直を一人と定めたものの、一人つきりでは淋しからうといふので、誰言ふとなく親しい人の當番の時には、一人二人別な有志の應援が、同じく當直することになつた。泊らないまでも、電車の無くなる頃まで話し耽るのを常とするやうになつた。だから當番の廻つて來るのは、五日か一週間に一度位に當つても、殆ど隔日位には、勝見家へ出入する機會を、小野たちは與へられた譯だつた。卽ち小野は黑田の時も、杉浦の時も遊びに行つて、夜更けまで話し込んだり、時とすると一緒に泊つたりした。殊に親しい杉浦の當番の時、又小野が當番の時は、必ず二人は一緒に行動を共にしてゐた。で、彼は事實、其當座殆ど毎日、勝見家に顏を出さない折とては無い位だつた。

從つて小野等と勝見家の人たちとは、僅かばかりの間に、非常に親しくなつて了つた。知るのが遲かつた代りに、親しむのは急だつた。或意味で彼らは、他の弟子たちの誰よりも、今では勝見家に近しいものになつて了つた。親しいといへば勿論、昔から出入してゐる、先輩の大寺氏などを最とすべきものではあつた。が、併し氏は何といつても、今ではもう大人だつた。そして表だつた重要な用件とか、其他の大問題では其後の勝見家に、殆ど執事めいた親しさで出入してゐたが、併し眞に家族たちにとつて、親しい伴侶ではなかつた。そこへゆくと小野たちは、直ちに未亡人の遠慮なき話相手であり、令孃や令息たちの無邪氣な遊び仲間であつた。「執權職」。彼らは大寺氏を冗談にさう呼んで、少しは敬遠の氣味でさへあつた。さうして自分たちが寧ろ家族の悲愁を慰めるべき眞の親近者のやうにさへ自負するに至つて來た。小野のさう野望を喫る程ではないが、ひそかに希望してゐた境地は、可なり早く來たのだつた。事實彼はまだ、それ以上何ら、目標としてゐたといふ程の、野心なぞは抱いてゐる譯ではなかつた。たゞ先生の遺族に親しみ得る、その一種の光榮の思ひと、又その家庭的な空氣の中に入りうる、仄かな樂しい思ひの外には、まだ求むるものとてはなかつた。で、彼はそれだけで、可なり滿足の日々を暮してゐた。

令孃や令息たちとは、もう冗談を言ひ合つたり、揶揄つたりする位まで、すぐ友達仲間になつて了つた。そして一兩日小野が、勝見家を訪れるのを、少し遠慮してゐたりすると、下宿に電話のある便宜から、小野の處へ來いと促して寄越す程、親しい仲になつて了つた。或時なぞは、又冬子孃からの電話で、ひそかに心を躍らしたことも、一再ならずあつた。勝見家からの電話といふので、まさかと思ひながら出てみると、受話器に掠れたながらに、少し低め勝ちな澁びのある中音が、甘えを交へた抑揚で、愼ましやかに響く。……

「小野さん？——私よ。解つて。私よウ。……」

彼女はいつもさう言ふのだつた。

「あゝさうですか。どうも……」

彼は胸の血が、ふいに高まるのを覺えながら、窒るやうな息を呑み込んで、恐縮して言葉を知らずに答へるのだつた。

「あの、今、何をしていらつしやるの。」

「今ですか。」小野はやつと喉の奥から、聲を筒抜けさせるやうに喘ぐ息を押へて、平靜らしく答へるのだつた。「今、あの、「新文藝」から頼まれた、談話筆記を淸書してゐるんですが、……何か御用ですか。」

彼は其頃、「新文藝」が先生の追悼號を出すに就て、その編輯者から依囑され、先生の學友や知已を訪ねて、傳記的な追憶の談話筆記をとつ

て歩いてゐた。それは「新文藝」の編輯者から、弟子どものうちの閑な若い人に、との依頼だつたのを、誰も其面倒な、さうして雜誌記者の下つ端がするやうな仕事を、喜んで引受けるものがなかつたので、小野は幾らか進んで引受けたのだつた。そのため彼は先輩のうちでも、殊に藝術家的な見識ばつてゐる大寺氏などから、彼奴は將來作家として立つなら、もつとそれに矜りと自信とを持つてゐるべきだのに、あんな屈辱的な仕事をする。あんなことぢや駄目だね。といふやうなことさへ蔭ながら言はれてゐた。けれども小野としては、此際先生の生前の偉さを、出來るだけ正確に世間に傳へて置くやうに努力するのも、故先生に對する一種の御恩報じのやうに感じて、喜んでそれに從事してゐたのだつた。彼にとつては藝術家の誇りなどは、この際問題とするに足りなかつた。何か先生のために盡し得るなら、それで滿足だと思つてゐた。併しその心のうちには、故先生に對する死後の、少し常軌を逸した感激と共に、又勝見家の遺族に對して、心盡しを見せたいためでもあつた。殊にはその傳記的材料に就て、何か疑義を生じた場合、それを聞くのを口實として、何時でも勝見家へ出入しうる事をも、彼は餘德として考へに入れてゐた。非難されるとすれば、寧ろそんな點でなければならなかつた。――今彼は電話で、其事を冬子孃に言つたのだつた。

「さう？　ぢやあそれがお濟みになつたら、遊びにいらつしやいな。今、黑田さんが來ていらつしやるのよ。だからお閑だつたら、お母さんが貴方にいらつしやいつて。――それにね、みんなトラムプをしたいつて貴方が來るのを待つてゐるのよ。だつて黑田さんは、お母さまとお話ばかりしてゐるんですもの。成るたけ早くいらつしやいな。よかつたら杉浦さんもお連れになつて、ね。」

「え、畏まりました。もう二三枚書けばいゝんですから、すぐ參ります。それに先生が四國に居た時代のことで、少しお母さまにお訊ねしたいこともありますから……。」

彼は何か氣がさして、さうした口實のやうなことを、そんな際でも言はずにゐられなかつた。彼の心に潛在してゐる戀の芽は、かうして毎日勝見家を訪問するのを、何ものにか對して、濟まないと感じさせてゐたに違ひない。

「さう？　ぢやあ早くいらつしやい。きつとよ。……さよなら。」

さういふ電話を、彼は何かもつと言ひたけな、併し何も言へないやうな思ひで、殘り惜しく切るのであつた。

そんな風で毎日訪れる勝見家では、子供たちと一緒に、前にも言つた通りよくトラムプをした。

それは令孃と令息が全部集まつて、新太郎淳二の二少年にも出來る二十一銀行といふのをやるのだつた。親の銀行になる人が、子の借方になる人々に、札を二枚づつ撒いて、其札に應じて金――勿論古トラムプを紙幣として、――を賭けさせ、その後に銀行自身の方の札を開いて何方か點數の二十一に近い方が、勝つてその賭金を取るのだつたが、かうして銀行が借方の金をすつかり取りあげて了ふか、借方が銀行の金をすつかり取出して、破産させて了ふか、それが結局の勝敗になるのだつた。だから殆ど手練といふよりも、偶然に支配されるだけ、誰にも出來る遊戲だつた。たゞどうしても銀行になれば、何時かは破産するのが常だつた。が、銀行や借方に、規定の金は無くなつても、何か身につけてゐるものを、一つ抵當として渡せば、最後の身の皮を脫ぐ迄、破産を免れることになつてゐた。

年上の役として、長女の冬子孃と次女の定子

孃とは、よく組んで銀行の方に廻つた。人數が多いので、親は二人づつ組んで銀行になることに定めてゐたのだつた。そして子の借方には、末の二人の令孃や、令姪の智惠子孃や、令息の二人や、小野と杉浦などが控へた。

勝負は全く時の運だつた。が、併し、よからうと思つた時に、思ひ切つて多額の金を賭ければ、もし萬一負ければ素寒貧になる代り、一擧にして銀行の方から金を取ることが出來た。で、其度胸が幾らか勝敗を早めるに役立つた。令孃たちは愼ましく、勝つと定つてゐる時でも、ある安全な少額を賭けるのが常だつた。が、小野と杉浦とは、敗けさうな時でも可なり大きな額を、平氣で賭けて遣り取りしてゐた。それで彼らが當れば、銀行の產は忽ち傾き、又外れれば忽ちにして、何か身につけてゐるものを、抵當に入れなければならないやうになるのが常だつた。が、彼らは結局、强氣で押し通して勝つのだつた。

其時も、小野と杉浦とは、初め五六度やつてゐるうちに、持つてゐた金札はすつかり磨つて了つて、財布を取り出して抵當に入れたり、名刺入から名刺を拔き出して、紙幣の代りに貰つたり、それでも足りなくなつて來て、帶皮を外したり、寒いのにわざと上衣を脫いだりして眞つ裸になるまで止めぬなどと負惜しみを言つてゐたが、其うちに又十度足らずやつてゐると、だん〴〵それらを恢復して來て、今度は逆に銀行の方から抵當物を取るやうになつて來た。

「あら、困るわ。又負けよ。」

自分の方の札を開き終つて、冬子孃が妹を顧みていつた。

「又、、敗けの綱ですか。」と、小野は月並な洒落を言つて揶揄つた。「ぢやあ一つ冬子さんの片腕でも切つて戴きますかな。」

「あら厭アよ。まだ抵當なら澤山あるわ。」

「猾いわねえ。」次女も共に助手として叫ぶのだつた。「さう何度も、二十一が續けて付くなんてことはないわ。きつと猾をするのよ。」

「そんなことがあるものですか。貴女がたの方でわざ〳〵撒いて下すつたんぢやありませんか。」杉浦も此方に味方して、わざと毒々しく言つた。「愚圖々々言はずにその帶止めでも解いて寄越したらどうです。」

「まア待つていらつしやい。今すぐ上げますから――定子さん。貴女鳥渡今のうちにお憚りへ行つていらつしやい。ね。」と、冬子孃は傍の定子孃に何か耳許で小聲に囁いた。「よくつて。」

「ええ、ぢやあ鳥渡行つて來るわ」定子孃はくつ〳〵と笑ひを忍んで、早速から言ひながら立上つた。

「何です、定子さん。何處へいらつしやるんです。貴女がたの方が、よつ程猾いぢやありませんか。抵當を仕入れに行かうなんて。」

「あら、ほんとにお憚りに行くのよ。ほんとよ。」と、まだ無邪氣な快活さの拔けない彼女は、自分の方から先に高らかに笑つて、その自分の思ひつきの言葉に、笑ひ崩れながら言ひ出した。「嘘だと思ふならお憚りまでついていらつしやい！」

「まア……」冬子孃はさすがに、愼みめかして呆れながら微笑んだ。

「よウし。」併し杉浦は、そんなことで敗けてゐなかつた。「そんならほんとに從いて行きますよ。」と本氣らしく立上りさうな氣配をさへ示した。

と、定子孃は、さすがについて來られでもすると思つて、逃げ出しながら言つた。

「あら、厭よ。ほんたうよ。ほんたうだから、ついて來たりなすつちや厭よ。」

と、彼女は急いで部屋を出て行つて了つた。

それを追ひかけて行く程、さすがに彼らも悪戲

ではなかつた。
「さあ、早く拂つて下さい。」
その代り彼らは冬子孃に要求した。
「待つていらつしやい。今、會計係が來ないんぢやないの。すぐだわ。」
其うちに、憚りへ行つた筈の定子孃が、嬉々と笑ひながら其處へ入つて來た。見ると彼女の懷中には、赤い鹽瀨の財布や、金襴の筥迫などが、一ぱいに喰み出して塡められてあつた。手で抑へてゐる袂にも何か入れてゐるらしかつた。さうして兩手の指には、玩具のやうな指環が、指一ぱいに幾つも嵌められてあつた。それには小野も杉浦も、咎めるより何より、非常な愉快を感じて、笑はざるを得なかつた。
「さあ、お姉さま。幾ら拂ふの。もう幾らでも拂つて上げるわよ。」
定子孃は得意になつて言ふのだつた。
「小野さんに百圓、杉浦さんに八十圓よ、みんな澤山賭け過ぎるんですもの。」
「それやあ勝つと定まれば、全財産だつて賭けますよ。是でもまだ可哀さうだから、容赦して上げたんです。が、そんなに抵當を仕入れてきたんなら、今度からはもつと遠慮なんぞしませんよ。」
「いゝことよ。もう敗けやしないから、すぐ取返して上げるわ。」定子孃はいつた。「さあ、拂つて上げてよ。この時計は小野さん。百圓ぢや安い位だわ。それから此の指環が杉浦さん。これでもダイヤ入りよ。いゝでせう。それから新太郞ちやんには、……貴方も二十圓なんて賭けたの、生意氣ね、仕方がないから、この髮針よ。」
から言つて彼女は、袂から時計函を取出して、パチンと開きながら、中から女持の細い鎖のついた、金の小型時計を抓み上げた。
小野はそれを掌に、下から上へ持ち上げるやうに受取つて、そして掌中に振るやうにしながら、金の感觸をしみ〴〵嬉しく覺えて言つた。
「有難う。でも、是、天ぷらでせう。百圓ぢやあちと高いな。」
「あら、謔仰有い。」冬子孃がすぐ抗辯した。
「それ私のよ。去年十八になつた時の誕生日のお祝ひに、お母さんが服部で買つて下すつたのよ。それでもほんたうの金よ。」
「さうですか。そんならまア勘辨しておきませう。」
冬子孃のと聞いて、小野は何となく嬉しさを心の奧に覺えながら、その金時計をそつと握りしめた後、ざら〳〵とわざと內懷へ落し込んだ。
と、杉浦も指環を受取つて、同じやうに言ひ出した。
「小野のは正銘の金でも、此の指環の石は、ダイヤぢやないでせう。」
「ダイヤぢやないけれど、寶石はほんとの寶石よ。硝子ぢやないわ。だからそれだつて、貴方の抵當には高い位だわ。」
「これが、寶石なんぞ入つてゐないで、蒲鉾型のだと、まだ我慢するんですがね。」
杉浦は頷を縦めもせず、只鬱然と微笑して、平氣でそんな冗談を言つた。小野は半ば羨望の思ひで、無關心にそんな冗談を言ひうる杉浦の態度と、それに應ずる令孃の樣子を顧みない譯にはゆかなかつた。
が、冬子孃には其意味が、幸にして解らなかつたらしく、何の反應をも表はさなかつた。
杉浦はその指環を、自分の左の小指へ嵌めた。
そして一座は更に次の勝負に取りかゝつた。……かうして其時はたうとう、令孃たちを破產せしめたのだつた。
かういふ光景は、彼らと令孃令息との間に屢々在つた。さうして益々兩方の仲は、他意な

い親しみを加ふるのであつた。

二

それから又、彼らは二少年の相手をして、よくゴム鞠のボールをやつた。

或時、裏の物置の前の、細長い庭の空地で、小野と杉浦とは、少年たちと交る〴〵、捕球をし合つてゐた。が、受ける掌も小さく、投球の力もない少年たちは、結局彼らの相手にはならなかつた。彼らも初めは、丁寧に手柔かに、二人の少年に教へながら、投げたり受けたりしてゐたが、やがて少年たちは疲れて、そして中止して了ふと、後には小野と杉浦だけが恰もキャッチ・ボールの模範でも示すやうに、二人で技を闘はすやうになつた。

その時丁度九刻から、裏庭での騒ぎを聞きつけて、令嬢たちも其處の臺所から、顔を出して見物してゐた。それで二人の球技は、自ら美姫の前で行ふ闘士の競爭のやうに、更に赤熱せずにはゐなかつた。

二人は高等學校の寄宿舍にゐた時分から、ゴム球のベース・ボールには熟練してゐた。そしていつも二人がバッテリーとなつて、一つの組を作つて、協力して敵に當つてゐた。杉浦は投手で、小野は捕手だつた。そして二人の呼吸は、實にうまく合つてゐた。それで二人はよく、捕球の練習をし合つたものだつた。

今、彼らは其忘れかゝつた技術を、思ひ出すやうに懸命になつて、球のやりとりを始めた。それは決して敵意を含んだ、競爭的意識からばかりではなかつたが、さういふ遊戯にかゝると、彼らは不思議に熱して來た。杉浦も小野も、決して昔の技を忘れてはゐなかつた。肩がやゝ定つて、投球に油が乘つてくると共に、輕いゴム球も可なりな速度で、ピュウ〳〵と鳴る程に、彼らの指端を離れて飛び交うた。さうなつて來ると、捕球も身體が調子に乘つて働くために、少し位高いのや横のや、乃至はバウンドのも凡て、縱横無盡に捕へて逃さなかつた。殊に杉浦は昔から片手で巧みに球を捉へることが、人一倍すぐれて巧みだつた。で、彼は少し高い氣味の球は、殆ど皆片手を伸ばして、跳飛しながら輕業的に受止めるのだつた。小野の投球が或時可なり高かつた。すると彼は忽ち身を躍らして、見事にそれを手中に納めた。それで自信を得た彼は得意になつて其技を濫用し始めた。さう高くないのまで、片手で捕へようとした。そして其度に見事に成功して、見物の令息や令孃たちの、喝采を博し續けた。さうなつて來ると小野の方でも、敗けてはゐられなかつた。それで彼はさう得意でもないに拘らず、やはり一生懸命になつて、球を片手で捉へることに努力しなければならなかつた。併し彼は捕球にかけては、たゞ正確では在り得ても、さういふ離れ技は出來なかつた。小野は片手でよく捕へ損つては、ひそかに令孃たちの前で、心中顔を赧めた。彼は暫くしてそんな輕業はよして了つた。が、杉浦の方は相變らず、輕快に手を伸ばしてはまんまと捉へてゐた。

ふと小野の心に、十度球を往復するうちに、どつちか過失のない方が、令孃たちの好意を餘計得る、といふやうな占を、思ひ浮べた。そしてその回からひそかに十度宛計算して、其統計をとらうと思ひ立つた。――小野はそんな占兆めいたことを試みるのが、元から好きだつた。彼はよく町を歩いてゐても、今度から十五人目に會ふ人が、男か女かに依つて、自分の希つてゐることの吉凶を占つたり、又電車なんぞに乘つてゐる時だと、今度の停留場で乘る人數が、奇數か偶數かに依つて吉凶を判斷したりする癖が在つた。そしてそれを信じてゐる譯ではなかつたが、信じない譯でもなかつた

一つ、二つと小野は心中ひそかに、十度の捕球を數へ始めた。彼だけはひそかに、一生懸命だつた。うつかり外したりしては、一生の吉凶にかゝはる大事だつた。それで決して輕業なんぞせずに、兩手で確と受止めることにしてゐた。三つ、四つ、五つ、と、過失なく進んだ。杉浦の方でも、まだ一つも逃さなかつた。と、六つ目に、眞つ直に來た何でもない球であつたに拘らず、彼は一種の油斷と、又そんなことを妙に考へてゐた一生懸命の餘りに生ずる心の隙のためか、彼は胸の處で受け取つた球を、投げようとしてポロリと離れ落して了つた。彼ははつと思つた。が、まだ一つ位なら、何でもないと思つた。其うちに杉浦の方でも、一つ位は落すに違ひないと思つた。が、七つ、八つ、九つと進んで、小野もそれつきり落さなかつたが、杉浦も不思議に、九つ目まで落さずに了つた。さうして小野は其後すぐに、十の終りの球を受取つた。それも落さずに濟んだ。が、その後で投ずべき十目の球を、杉浦に過失なく受止められては、運勢は小野の方が凶いといふことになる。鳥渡彼は氣が氣でなかつた。が、わざと球を杉浦の取れぬところへ投げて、強ひて外させるのでは、占の神聖も何もなくなる譯だつた。彼は咄嗟に決心して、難球ではあるが、捕へうる範圍內にあるやうな意地の惡い球を、最後に一つ投じようと思つた。そして少し左横に高目な球を、力を籠めて一つピユウと放つた。それは少し陰つた日影の中を、仄白い絲を曳いて、狙つたあたりへ飛んで行つた。

　果然、杉浦はその球の方向を見定めると、身を斜に片手を伸ばして、高く飛び上つた。伸ばした手の空中に伸び切つたのと、球の通過とは同時だつた。小野は投げて了つた姿勢で、「あつ、捕つたな。」と思つた瞬間、受けとめた掌の音がして、球は其處から零れ落ちなかつた。が、杉浦のその飛躍から身を地上に落した時、彼は、餘勢を食つてよろ〳〵と横によろけた。そして其儘踏み止まり得ずに、其處から三尺ほど隔てた處にあつた、臺所の下水溝の中へ、ふら〳〵と片足を踏み入れて了つた。さうして辛うじて手をついて身をとゞめ得た。が、球は本能的に、彼の手から放さなかつた。

　見物してゐた令息や令孃たちは、聲を揚げて喝采した。が、杉浦の足が、泥だらけになつて、引上げられたのを見ると、みんなその方に集まつて行つた。杉浦は少し跛足を引いた。

「どうした、どうした。」

　小野も、自分の意識してやつた投球が、そんな結果になつたのを、ひそかに自責しながら、心配して近づいて行つた。

「何でもない、片足つつ込んだだけさ。洗へば何でもない。」

　かう言つて杉浦は、すぐ裏手の方にあつた井戸端へ、片足飛びをして赴いた。そして其處の洗ひ桶の傍で、汚れた足袋を脫ぎ始めた。

　その樣を見ると、一番先に、又一番近く寄つて來て、かう慰問するやうに言葉をかけたのは、當の冬子孃だつた。

「何處もお怪我はなさらない。大丈夫？」

「えゝ、大丈夫です。」

「あら、さうして足を出していらつしやい。私が水を掛けて上げますわ。私の肩へお捉りになつてもよくつてよ。」

「いえ、大丈夫です。有難う。」

　かう言ひながら彼も、幾らか感謝の意を籠めて、一人立ちに片足をかゝげて、水を掛けて貰つてゐた。

「暴球を投げて惡かつたね。」

　小野もその狀を見ると、かう詫びながら、一種の羨望と嫉妬とで、たゞの深切に過ぎないには違ひないが、杉浦に對するその厚い好意を、

ぢつと見てゐる外はなかつた。

「あら、お袴までこんなよ。早くお脱ぎなさい。私、洗つて差上げますから。」

「さうですか。どうも濟みません。つい、大車輪になつて飛びついたりしたもんですから。……」

彼女は更に彼の後へ廻つて、袴を脱ぐのを何かと手傳つてゐた。……

小野は改めて天意を試みたりしたのを、心から悔いなければならなかつた。さうしてその冬子孃の態度を、只の深切には違ひないと思ひながら、やはり杉浦に對する一種の嫉妬と、強敵意識とを持たざるを得なかつた。

三

かうして頻繁に、勝見家へ出入するにつれて、まだ初めて見た日から、十數日位しか經つてゐないのに、小野の心の中には、冬子孃の姿が、いつしか消え得ないものとなつて殘つてゐた。が、併し彼は、それを全く祕めて、噯にも出さうとしなかつた。さうして彼は其儘祕め通して、押し殺さうとのみ努める外なかつた。

何故とならば彼女は、假りにも恩師の娘だつた。そして先生が在世ならば、迚も近づくのさへ許され得べき人ではなかつた。幾ら彼の方で思つたとて、まだ筆を以て身を立つるにも至らない、貧乏な書生上りの身が、その思ひを遂げうる由などは、到底在るべからざるものと信じた。その諦めに似た心は、彼の謙遜から出たにもせよ、その當時は全く誇張なしに、彼にはさう思はれたのだつた。

その上、彼女に戀したとすれば、それは如何にも早かつた。先生が死んで、その死んだのを機會に、やうやく相知つたものが、その涙の未だ乾かぬうちに、先生の遺骨がまだ埋められぬうちに、その娘なる人に戀する。それでは餘りといへば餘りに早く、かつ死んだ先生の靈に對して、何といふ無躾な非禮であらう。それを考へただけでも、彼は彼女に對する戀心を、思ひ切る外ないと思つた。

さうして最後には、彼の方で幾ら思うたとて、相手の令孃の方で、少しも好意を持つてくれないものなら、初めから問題はないのであつた。彼は到底冬子孃の方から、彼を戀してくるなぞとは、望んでも得られないことと、初めから信じてゐた。

が、併し、それは理性で信じても、彼の感情は、その萬一の場合を庶つてゐたのは事實だつた。そして向うから戀してくれぬまでも、幾らか此方の思慕に應じて、心を動かしてくれるだけの雅量があるならば、それはそれで有難い。そんな風にすらも彼は考へてゐた。

であるから彼は、自分の戀を、一生懸命に、思ひ切らうと企てながらも、まだ其諦めに入り得ず、思ひをすて得ずに、ひそかに冬子孃の自分に對する態度を、觀察してゐなければならなかつた。彼女は果して自分に對して、何らの好意も持つてゐないのであらうか。自分に對しては、少しも心を動かしてはゐないのであらうか。さうだとすれば、すつかり思ひ切る外ない。祕め殺すより外はない。が、もしさうでないとすれば？　さうでないとすれば、それは別問題だ。……そこに一縷の望みがないではない。その一縷の望みが、彼を初めからすつかり思ひ切らせなかつた。

彼は冬子孃の自分に對する態度を、初めから考へてみた。が、併しそれまでの態度では、幾ら自惚れて考へて見ても、先方が自分に戀してゐるとは、どうしても考へ得られなかつた。が、併し又それと同時に、彼女が自分に對して、絕對に好意を持つてゐないとは、幾ら謙遜して考へてみても、どうしても斷定し得られなかつた。さうして結局の所は、まだ雙方の狀態が、其

迄とではつきり解るやうには、進んでゐないのだ、と思ふしかなかつた。さうして更にその上には、彼女が少くとも自分に對して、ある親しみを持つてゐるだけは、明かだと思はない譯にはゆかなかつた。
　彼は思ひ返した。彼が玄關から入つて行くと、いつもその聲を聞きつけて、いそ〳〵と出迎へてくれる彼女を。それから又、彼に接する時のいつも守り續けるやうな態度と、隔意のない笑顔を、——それを思ふと彼も、心の底が仄暖かくなるやうな、まだ此の心を思ひ切るのは早いやうな、中途半端な思慮に陷らざるを得なかつた。
「早く思ひ切れ。」「いや〳〵時期を待て。」さういふ二つの言葉が、同時に彼の心の左右の耳へ、同じやうに囁かれた。が、併し意志の弱い彼には、その儘此の思ひを斷つて、無關心の境に入ることなどは、到底爲しうるところではなかつた。さうして彼の心は何時しかに、後者の囁きに耳を傾けてゐた。
　小野はひそかに戀する人の眼を以て、冬子孃の一擧一動を見守つてゐた。そして幾らかでも自分に對して、好意ある態度を見せられると、ひそかなる喜びに血を湧かせてゐた。が、それとて、まだ親しみ以外の何ものでもなかつた。そしてさういふ親しみならば、彼以外の杉浦にも、又少し下つては黒田にさへ、示してゐるのを發見した。
　時とするとその親しみは、寧ろ杉浦に厚いやうにさへ、思はれる時がないではなかつた。前に言つた補球の際の、深切な介抱も、その一例だつた。そしてその他にも杉浦の後をついて、彼と話ばかりしてゐるやうに、見える時もないではなかつた。で、小野に對しては、寧ろ杉浦の親友であるが故に、好意を懷つてゐるのではないかと、邪推されないこともなかつた。が、併しさうかと思ふと、離れの部屋に一人小野がゐる時などは、わざ〳〵そつと茶を持つて來てくれたり、學校の本で分らなかつたりしたことを、特に彼を選んでたづねたり、彼女自身の性格上の弱點を、——それは心の中でかうと思つても、優柔不斷で甲斐性がないといふやうな月並なことだつたが、それを始終學校の先生にも言はれるといふことを、彼に一人で語つたり、又學校での樣子などを、彼に洩らしてくれたりする樣子を見ると、ずつと小野自身に對する方が親しみも好意も深いやうに、思はれるのであつた。それは實際何れとも、定め難いものであつた。
　事實彼女も、何かの拍子に、こんなことを言つたことがあつた。
「……お孃さまは貴方が、大變お氣に入りなのよ。私たちも貴方がたお二人よりも好きだわ。貴方も杉浦さんも、ほんとにいゝ人ね。黒田なんかに貴方がたから見ると、ほんとに厭な人だわ。」
「おやあ杉浦と僕と、どちらが好きですか。」
　それを聞いた時、小野は冗談らしくかう言つて、ひそかに冬子孃の樣を窺つた。彼の冗談らしく浮べた微笑は、作りつけのやうに頰に動かなかつた。そして彼自身から聞いて了つてから、心の中で何でもないことを、聞いて了つたと一瞬間悔んだ。併し冬子孃は殆どすぐ、別に重大らしくもなくすら〳〵と答へてくれた。
「さうね。どつちも同じ位だわ。」
　その答へを聞くと、小野は再び惡い勇氣を恢復した。そして更に冗談を延長して、厭味交りに揶揄ひ半分反問した。併し彼の言葉は、妙にギゴチない響を帶びてゐた。
「でも、僕の前で兩方同じ位だといふ位なら、杉浦の方がもつと好きなんでせう。」

「あら、そんなことはなわ。ほいんとに同じ位よ。」

冬子孃の答は、割合に無邪氣ですなほだつた。事實彼女とても、さう差別をつけて好惡する程、まだその當時心がはつきりしないに違ひなかつた。

そんなことで小野の心は、まだ去就に迷はざるを得なかつた。そのうちに併し小野の心に、ある強い刺戟を與へるやうな、一つの交渉が冬子孃との間に起つた。

それは實に、先生の遺骨を埋葬する前夜のことだつた。

その夜は先生の遺骨を、遺愛の書齋に置き得る最後の晩だといふので、門弟一同は、通夜の爲に勝見家へ集まつた。

例に依つて未亡人を中心として、書齋の處々に火鉢を擁して、二人三人づつ集まり寄つた連中の間には、先生の生前の追憶や、最近の文壇の諸問題や、色々な自己の經驗談などが、賑やかに語り始められてゐた。

小野はその前日から、當直で勝見家に泊つてゐたので、恰も幹事役のやうに、いろ／＼な斡旋を勤めなければならなかつた。それで遲れて席についたため、彼の割り込むべき適當の座がなかつた。

と、向うの部屋の隅に、一つ炬燵が置いてあつて、其處には新太郎淳二の二少年や、小さい妹たちが、一緒に集まつてゐた。そしてその小さい家族たちは、小野を見ると、すぐから呼びかけてくれた。

「おい、小野さん。此方へおいでよ。そして、何かして遊ばう。」

小野は仕方なしに、否、内心は喜びながら、其方へ寄つて行つた。

「ぢやア一つ惡少年どもの、お相手を勤めませうかな。」

「ふん、自分だつて不良青年の癖に。」

新太郎少年は言ひ返した。

「トラムプをしよう。」

淳二少年はすぐから促した。

「トラムプ？　トラムプは駄目ですよ。今日はいけません。今日はそんな遊戲なんぞしないで、ちやんとしてゐるんです。」

「ぢやアお噺！」

「お噺なら、僕は下手で駄目ですから、今に杉浦が來てからになさい。彼奴はうまいですよ。」

それを少し離れた座で、未亡人は聞き知つて、早速の話題にした。

「お噺つていへば大寺さんは、家の冬子たちが小さい時分、實にうまく噺を拵へて、話して聞かせるのがお上手だつたわね。大寺は天才だつて、先生も褒めてゐましたよ。先生は割りに子供を相手に、そんな噺なんぞするのは面倒がつてゐたし、下手でしたからね。」

「さうでしたね。」大寺氏も、向うで口を曲げるやうにしながら、氣取つた柔しい聲を出して應じてゐた。「先生は大人を相手の座談はうまかつたけれど、何とか彼とか子供を相手に、即席のお伽噺を作るのは私の方が甘うござんしたねえ。けれど今ぢやあ、童話は佐々木の一手專賣になりましたよ。全く佐々木がお伽噺で、血路を開かうなどとは思ひませんでしたがねえ。」

から言つて氏は更に傍にゐる、佐々木氏の方を顧みた。佐々木氏は少し黑光りのする額を上げ、眼を光らせながら微笑んで、フロックにつけたボヘミアン・ネクタイを、搖るやうに言つた。

「ふん。わしももう童話では、大家ぢやからなウ。あれも書いてみると、ずつと小說などよりは面白いし、仕事としても處女地を耕すやうなものだから、やり甲斐があると思つとるよ。」

「さうだね。」と、その先輩の一團の中で最も年

長者めいた思想家の矢部氏が、ゆつくり腕を組むやうにして脂ぎつた温柔な顏に、少し細めた眼を一座に投げながら、結論するやうに言つた。「これからの兒童には、必然的に童話教育の必要があるからね。その點で佐々木君の童話にも、美しい感情的の方面ばかりでなく、もつと新しい道德を盛つたものが出來ると更にいゝんだがね。」

「佐々木にそれを要求するのは無理だよ。」と、もう一人の先輩の、やつぱり同じ峻嚴な評論家として知られてゐる服部氏が、村夫子のやうに朴直で謹嚴な所のある小さい額に、少し凹み勝な澄んだ瞳を光らして、口を出した。「佐々木の小說にしても、昔から纖細極まる感情の動きと、ぶる〳〵するとかいふ、神經の顫動しか書かなかつた男だからね。」

「僕は又お伽噺なぞといふものからは、恐らく誰よりも遠い人間だね。」米田氏も最後に、豐かな顏に微笑を湛へて、快活正直さうに言つた。「書いたらさぞ不道德なものが出來るだらうな。一つ思ひ切つて書いてみようか。

「昔々ある國の王樣が、新しい女護ヶ島のお后と駈落して、[illegible]原の山の中へ道行をしたりするんぢやありませんか。」

黒田が無遠慮に、少し離れた處から揶揄したので、一座は忽ち哄笑に陷つてゐた。

そんなことを弟子たちが話し合つてゐる間に、令孃や令息たちの方では、まだ何とか言つて小野にせがんでゐた。

「ぢやあ、杉浦さんが來るまで、何か話して、よウ。」

「いゝぢやないか。話したつて、何でもいゝからさ。」

少年たちは口を揃へて言つた。

「でも僕は駄目なんですよ。まアもうすぐ來ますから、お待ちなさい。それよりもギャン拳でもしませう。」

「ギャン拳なんて、詰らないわねえ。」と、今度は一番末の令孃までが口添へをし出した。

「どうして家のお兄さんは、まだ來ないの。」

彼女は杉浦に特別に懷いて、常に「お兄樣」などと言つてゐるのだつた。

「今に來ますよ。」と、小野がいつてゐるところへ、丁度杉浦が女中に導かれて、廊下を來るのが分つた。「そら、さう言つてゐるうちに來[illegible]した。

杉浦は例に依つて濃い、黒い、微笑しながら人懷つこい顏を、そこの入口に現はした。

「あら[illegible]ね。お兄さん。」

第四女は無邪氣に叫んだ。

「あ、杉浦さん、此方へおいでよ。」

少年たちも呼んだ。杉浦はその歡迎の言葉の中で、にやり〳〵と笑つて立つてゐた。

「杉浦君。」米田氏もその樣を見て、冷かすやうに言つた。「君は果報者だよ。愛人の出を待つや久し。」

杉浦は苦笑して、先輩の處へやつて來た。

小野は人氣をすつかり奪はれた形で、其處の座を讓らなければならなかつた。が、併し其處の座には、まだ年上の令孃たちが、化粧でもしてゐると見えて、現はれてゐないのが安心だつた。彼等はどちらかといへば、子供の傅などは得手ではなかつたので、結局それに[illegible]でもあつた。

杉浦は直ぐにせがまれて、何か出鱈目なお伽噺を、ぽつり〳〵と話してゐた。

が、其うちに夜が更けてくると、弟子たちの方の談話は、益々榮えてくるに引換へて、子供たちはみんな眠げになつて來た。そして軈て半夜を過ぐる頃になると、令息や小さい令孃たちは、

「さアさ、貴方がたはもうお寢みなさい。これだけお通夜をすれば、もうお父さまもきつと滿[illegible]

山だと仰有るに違ひないから。」
　と快に言はれて、寢室へ退くことになつた。
「おやア杉浦さん、君も一緒に來て、床の中でもつとお話をしておくれよ。」
「さうだ。もつとしてよ。」
　その時杉浦は、から二少年にせがまれて、幾らか迷惑さうだつたが、仕方がなく少年の寢室まで、從いて行くことになつて了つた。
　さうして小野が殘つた後の炬燵には、子供たちが去つた後へ、今度は奧から出て來た冬子孃が、代つて寄つて來た。弟子たちの談話は、決して種の盡きることはなかつた。そして益々色々な方面へ、賑かに榮えていつてゐた。
　その中に在つて、小野は部屋の隅に離れて、偶然冬子孃とさし向ひになつたまゝ、炬燵に倚つてゐるのだつた。さうなると彼はぢつと身が固くなるやうな、息が窒るやうな感じで、しかも表面飽く迄平靜に、何氣ない話をし合つたり、強ひて冗談を言つてみたりして、相手になつてゐる外なかつた。
　夜は更けて來た。二人は其儘炬燵にあたつたきり、別に二人だけで話をし合ふこともないので、聞くともなく一座の人々の談話に、それ〴〵耳を傾けてゐた。やがて彼女は少し眠くなつたのか、炬燵に深く手をさし込んだまゝ、柔かい蒲團に頬を埋めて、顏を炬燵の上へ伏せた。と、思ふと、彼女の差し伸べた手は、偶然のやうに、其處に入れてゐた小野の手へ、つと觸れた。小野はその輕い觸感に、思はず一時手を引いた。何だか觸つてならぬものに、自ら觸りでもした如く、氣が咎めたのだつた。が、冬子孃の方では、別にその手を引きもしないらしかつた。
　で、小野は鳥渡胸を騷がしたが、別に冬子孃の方に、何の反應もなけないのを見てゐると、幾らか安心して、今度は炬燵櫓の端の方へ、成るべく遠く離れたつもりで、恐る〳〵手を差入れてゐた。
　と、冬子孃は顏を伏せながら、炬燵の中へ入れてある手を、何かの拍子でもとるやうな工合に、指だけ動かしてゐたが、だん〳〵それを端の方へずらして來て、又、ふと小野の手へ鳥渡觸つた。
　今度は小野は引込めようと思つたが、ふと圖々しく思ひ直して、その儘にして置いた。ほんの鳥渡した惡戲にもせよ、どうなるかとの興味もないではなかつた。
　すると一旦鳥渡觸れた冬子孃の手は、その儘動かすのを休止した。と思ふ瞬間、小野の手の甲は、ふいに温りのした柔かいもので、ぎゆつと蔽ふやうに握られた。小野の眼は一度に、かつと眩しく明るまるやうな氣がした。と冬子孃の方では、彼女の手の甲を押へた手で、靜にそつと指の方へずらし始めた。そして息も吐かずにぢつと置いてある小野の手の、指の所まで來たと思ふと、小指だけ殘した後の四本を玩ぶやうに握り締めた。快い握力と、纏はるやうな柔かい皮膚の感じと、汗ばむやうな暖かさと、それは小野の指頭を、殆ど一分時間天國に躍らしめた。
　小野はもう、その手を少しも動かし得なかつた。そしてそつと眼を上げて、前に向ひ合つてゐる彼女を、寛分見た。すると彼女は、相變らず顏を蒲團に伏せたまゝ、少しの身動きもしなかつた。彼女の常凡な束髮が崩れて、前髮が押潰されたやうになつてゐるのと、その眞ん中に圏を描いた心持、綺麗な組み目を見せて、大きく彼の眼に映つたきりだつた。漸く僅かに白いさう豐かでない頸が、耳朶の邊に輪郭をちらと仄見せてゐるきり、到底見ることは出來なかつた。
　どういふ心持で、彼女は自分の手を握り締めてゐるのか、小野は彼女の見る由もない表情

で、何ら得る所はなかつた。が、彼の血は湧き立つてゐた。少くともどんな小さな意味にもせよ、彼女が自分の手に意識的に觸れたといふことは、彼の若い血潮を掻き亂さずにはゐなかつた。

暫くすると、彼女はすつとその手を引いた。そしてなほも炬燵櫓の中央で、何かの拍子をとるやうに、微かに動かしてゐる樣子だつた。それは又とりやうに依つては、彼女の手の在處をそつと小野に告げ知らして、觸れるのを誘ふかの如くにも思はれた。

小野は、ふと今度は、自分の方から彼女の指を、押へてみようと思ひ立つた。そして鳥渡暫くの間、色々と逡巡した擧句、思ひ切つて靜に手を辷らすと、二人の手は櫓の眞ん中の邊で、柔かい彈力と共に果して打突かり合うた。小野はまた鳥渡逡巡した。が、彼女の手が、まだその儘に少しも取去られずにあることを知ると、思ひ切つて急に手を動かし、彼女の甲と察するあたりを、輕く惡戲のやうに握つた。が、彼女はその儘何もせず握るに任せて、手も身動きもしなかつた。

やがてすぐ、何とはなしに氣が咎められるので、小野はさりげなくその手を引いた。

彼はもう眼の縁まで、熱くなるやうに感じた。そして彼女を正視し得ないやうな氣持で、同じやうに暫く顏を伏せてゐた。

弟子たちの間の雜談は、益々眠氣を追ひ拂ふために、賑かさを加へてゐるらしかつた。時々黑田の稍高い聲が、一座を壓するやうに響いて、米田氏の無邪氣らしい笑聲が、その間を縫つた。何か米田氏に、その時女に關する失敗談を、機儘めかして面白く話してゐるらしかつた。

杉浦もその座へ、もう子供たちの寢室から歸つて來てゐたが、炬燵へは來ないで、向うの末座のあたりに、獨り澁い微笑を洩らしながら、達觀したやうな顏付で、米田氏のあたりを眺めてゐた。

小野には殆どもうそれらの話は、耳に入らなかつた。そして彼はたゞその賑かな笑聲を何處ともいへないやうな胸奧の喜びで、祝ひの曲ででもあるかのやうに聞いた。

その時以來、彼の決心に自から方向を變へた。

翌日、先生の遺骨は、生前愛してをられた雜司ケ谷の墓地の、黃落し果てた銀杏の下、先生の愛兒が眠つてゐる小さい墓の傍に、改めて埋葬せられた。

その悲しい埋骨式の間、併し、小野は時々前とは違ふ眼を以て、冬子孃を眺め入るやうな瞬間をひそかに樂しんでゐたのであつた。心做しか冬子孃の方でも、時々彼を顧みては、微笑を送るやうに見えた。

先生に濟まない、と、幾ら心で思ひ返しても、彼はその人を見ることに依つて、樂しい埋骨式だつた。

四

その年の正月は他の如何なる年にも増して小野には、樂しい正月だつた。是まで數年の間、彼は樂しかるべき若き日の正月を、高等學校の寄宿舍か、下宿の狹い一室か、又は故鄕へ歸つても、燥け切つた田舍住居の、母一人の淋しい膝許で、索漠と過して來たのであつたが、その年は勝見家の未亡人が勸めてくれるまゝに、彼は大晦日の晩から泊つてゐて、三ケ日を暖かい家庭の空氣の中に、喜びに滿ちて暮すことが出來たのだ。

一夜明けると、令孃たちは既に、美しい新春の粧ひを凝らしてゐた。髮こそ、山の手の家庭のことだから、いつもの束髮のまゝであつたが、着物はいづれも美々しい曠着をつけ、化粧

もいつもより確かに念を入れたらしく、みんな頰を白々と輝かしてゐた。

冬子孃は正式の裾模樣ではなかつたが、年に比較しては割に地味な紫紺地の、紋服らしいものを着てゐた。そして上に錦紗の、その同じ色合の少し紫勝つた浮織の羽織をきつちり纏うてゐた。彼女の顏は、白粉の乘りが少し惡くて、ほんのりボケたやうな感じを與へたが、それが却てしつとりした、陰性な美しさを與へてゐた。その全體の割に地味な、愼ましやかな姿は、二番目の定子孃の、派手な型を置いた友禪模樣と、やつぱり錦紗は錦紗だが、ずつと純紫色に近い色合の、明るい羽織をかけた晴れやかな姿と對照して、それ〴〵年頃の處女の美を代表してゐるやうにもとれた。が、中でも殊に好ましく見られたのは、第三番目の令孃の、すんなりした少女姿だつた。彼女は、まだお下げに結つてゐたが、その厭味のない洋風な編み方と、それから更に高尚な、形こそ大きく派手ではあるが、一面に松葉形を染め出した、紅なし友禪の羽織が、平素から小さい癖につんと澄ました、怜悧な美しい面立ちに、實に楚々たるいゝ調和を覺えさせた。

この令孃たちに、同じく着飾つた令妹を加へると、急に家の中が、明るい色に滿たされるやうだつた。小野はそれと立交つてゐて、鶯に交つた烏の悲哀を覺えながらも、又それらを眺めてゐるだけで、十分幸福なやうな氣がした。

彼は正月の衣裳としては、一張羅の焦茶の洋服を、着換へるべきものを持たなかつた。止むなく彼はネクタイだけを、新しいのに換へることにした。が、その色はやつぱり黑い、普通のネクタイに過ぎなかつた。

すると恰ももう彼の母の如く、いろ〳〵世話をしてくれる未亡人が、目ざとくそれを認めた。そしてもう少し派手なのをなさいと言つて、先生が使つたネクタイの中から、黑地へ白い飛白の雲形を置いたやうな蝶結びのを一枚出してくれた。それは先生が倫敦から買つて來て、愛用された古い品だとかで、古いとはいつても少しも傷んではゐず、又さう派手でもなく地味過ぎもしない、至極高尚なものだつた。

「あまり派手なのも可笑しいから、これが貴方には丁度いゝわ。これになさい。」未亡人はかう言つて、蝶形に鳥渡摘んで小野の襟元へ當ててみたりした。

「でも、これだと僕には一人で結べませんからね。」

小野はその好意に甘えて、そんなことを抗辯した。

「いゝぢやありませんか、結んで貰へば。……冬子、お前小野さんのネクタイを、鳥渡結んでお上げ。」

「あら、私にも結べるかどうか分らないわ。」

冬子孃はさう言つて、併し惡びれずに小野の方へ近寄つた。

「なに、たゞ蝶結びにすればいゝんぢやないか。」

「どうも冬子さんにそんなことをして頂いちや惡いな。」

小野は未亡人のその言葉を、殊に嬉しくは聞いたけれど、何となくそんなことをして貰つてはムヅ痒いやうな面映ゆさを覺えて、少し顏を赧めながら言つた。

「いゝえ、——」

併し冬子孃は、もう立つてゐる彼の傍へ寄つて來て、ちつとも躊躇はずに、彼の襟元に卷きつけたネクタイを、一生懸命に結び始めた。彼女の額は彼の胸許に可なり近く、息づかひをしてゐる。そして目の前に揺れる束髮からは、——それは近くで見ると、黑さの外に赤色の感じがしたが、——かすか〳〵香油の匂ひが鼻

を擦った。小野はそれを注視してはならぬやうに、その線を越えて、彼方の座敷の隅を眺めてゐた。

ネクタイを結び終るには、丁度二三分の時間はとつた。その間彼は文字通りに頸を締めらるるやうな甘い痛さを僭越に覚えてゐたが、やがて彼女は結び終つたと見えて、少し離れて様子を見、更にもう一度歪んだ部分を直したらしく、

「これでよくつて。」

と、初めて小野の顔を仰いだ。

「えゝ、有難うございました。それぢやあ毎朝、貴女のお手を煩はさなくちやなりませんね。」

小野は微笑して、冗談半分に言つた。

「えゝ、そんなことなら毎朝して差上げますわ。」

それで小野は二ヶ月の間、朝起きて洋服をつける度毎に、必ず冬子孃にそのネクタイを結んで貰つた。そしてその度に彼の胸許に、餘りに近くなる彼女の顔を、そつと見ぬふりをしなければならなかつた。

彼女等はよくピアノを鳴らした。が、小野たちが聞いてゐる處では、決して奏かうとはしなかつた。ひとりで稽古してゐるところへ、そつと入つてゆきでもすると、或時は中止して了つたり、或時は「嫌よ。」と言つて追ひ拂はれたりした。冬子孃は指に力があつて、可なり手はいいのだらうであるが、素人耳にもさう上手だとは言へなかつた。上の三人とも、女學會へ稽古に通つてゐるのだが、まだいづれも初歩らしかつた。併し小野にはその彈奏は拙いとも、さういふ樂器に附帶した情調をひそかに享樂して滿足だつた。近くにゐては聞けないが、夕方薄ぼんやりした先生の遺室にゐて、書物の本などを亂雜して讀み散らしてゐたりすると、隣室で起るその響は、いつの間にか彼を甘い空想の中へ誘ひ込んだ。

夜は訪ねて來る門弟や、その他の人々を、悉く網羅して、家中でカルタを取つた。小野にその遊びは不得手だつたが、それでも手先が敏捷なものだから、十枚位の知つてゐる札なら、可なり素早く取れた。そしてこれぞと狙つた札は、可なり敵のでもうまく抜くことが出來た。それで彼は下手の中でも、まあ手早い方の部らしかつた。それで一二回やつて見ると、彼は案外、冬子孃と、好敵手であるのを發見した。彼女もさううまくはなかつた。初め一二回目の時、彼は偶然冬子孃と、相對して敵味方だつた。そして二三枚彼女の札を抜いた。そしたらその次の回には、彼女の方で、口惜しがつて、挑戰して來て二三枚此方のを取つた。が、それでも動もすれば、彼女の方が敗け氣味だつたので、それは小野が自分の知つてゐる僅かな札を、選んででないと持たないせゐでもあつた。——彼女はどこまでも小野に、敵とさへなれば挑戰して來た。

遠く向うの方に離れてゐても、

「私、小野さんをどうしても敗かして上げるのよ。」

と宣言して、必ず向ひ側に座を占めた。

杉浦は稍小野より老練だつた。そしてその一團に在つては、必ず中心に主力として廻されてゐたので、その向かひは又老練な、未亡人だとか近所の裁縫を營みつけの女だとか、又は伯父さんの令息で、地方の高等學校へ行つてゐる甚ちやんといふ人だのが、常に敵手となつてゐた。それで殆んどいつも、小野は氣恥かしくなる位、冬子孃と相對した。或夜は柳井が來て、その中に交つた。

そんなことで、この不得手な遊戯も、小野には割合に樂しかつた。殊に夜更けて食ふ、餅や蜜柑や、切り山椒などの味は、彼には泌々嬉し

──それは、確か建長寺の方だつたが、──さう退屈もしなかつた。途々に寺門や石磴などが多く眺められた。やがて俥は殆ど道の盡くる處の、杉並木の前へ止まつた。見るとそこは圓覺寺の山門の前だつた。

俥を待たして置いて、小野は寺内へ進んだ。そして重さうな屋根を被つた堂宇の、傍らの庫裡らしい處へ立入つて、案内を乞うた。が、そこの廣い土間に、彼の聲は可なり反響したに拘らず、誰も出て來なかつた。彼は二三度大聲に訪れた。が、幾ら待つても答へはなかつた。耳を澄まして奥の樣子を窺つても、咳一つ洩れて來はしなかつた。彼は斷念してそこを立出づると、今度はその庫裡のもつと先の、人のゐさうな方へ行つてみた。するとそこには果して、内玄關めいた入口の柱に、その宗派の事務所といつた風な、筆太な看板がかゝつてゐるのに出會つた。

そこで彼は又大聲を出して、二三度訪れた後に、一人の中年の禪僧が出て來るのを、やつと捉へることが出來た。

「何ですか。」

その僧は入口の處へ出て來て、から打切ら棒に聞き返した。

「釋宗澤……(と、彼は何と尊稱をつけて、呼んだものか一瞬間躊躇したが、素人らしく呼ぶに限ると思ひ直して、)さんにお目にかゝりたいと思つて出ましたものですが、……」

「あゝ、老師ですか。老師ならこゝにはゐませんよ。……」

僧はそれつきり、別に何とも後をつゞけなかつた。

「では、何處にいらつしやるのですか。」

「青林寺です。こゝへ來る途中の、右側にある三つ目の寺です。」

今度は幾らか丁寧に、所在をはつきり教へてくれた。

「さうですか。では失禮しました。有難うございます。」

小野は圓覺寺と聞いて來たのに、ではもう隱居して、別な院に居るのだなと咄嗟に察して、苦笑しながらそこを去つた。そしてそれもこの使命を果す上の、一興であると考へて、俥を再びもとへ返した。

果して、そこらの山腹に多い寺門と、そこまで續く石段との、數へて三つ目の處に、教へられた寺の名が、遠くからながらそれと察しられた。今度こそと思つて、彼は俥をすてて、その高い石段を、急いで上つていつた。

寺門は可なり古びてゐた。そして上へ上つて見ると、石磴を敷いて導いた道の先に、思つたよりも小さい堂が、山を迫る日を浴びて、寂然と立つてゐた。戸を鎖した、禪堂らしいものと、それと廊下で連つてゐるらしい、もつと小さい堂、その横には更に又採堂のやうに庫裡らしいものがついてゐた。

小野はその庫裡の入口の方へ進んだ。と、そこを入つた土間に、玄關の上り框の横手の隅に、小さな鉦が一つ吊つてあつて、所用の方は此の鉦を鳴らされたし、と、傍に貼紙がしてあつた。小野は妙な嬉しさと、その音に對する妙な怖れとを抱きながら、一つ靜かに打つてみた。すると思つたよりも大きな、朗かな音が堂内に籠つて、玄關の中へ響いていつた。

と、傍の控への間らしい、隣室から思つたよりもずつと近い、そして早速の「はい。」といふ返事が在つて、一人の年若い禪僧が、元氣よく立現はれた。

「あの、宗澤老師の──」と彼は今度はさういつた。「──おいでになるのは、此方の寺でございませうか。」

「さうです。何の御用でございますか。」

その若い僧は、寧ろ在俗の書生のやうに、小野の世界と異りない、はつきりした應對ぶりを見せた。

「勝見家から參つたものですが。」と、彼は早い方がいゝと思ひ、すぐ袱紗包と、禮狀を添へたものを差出して、そして言ひ足した。「甚だ失禮ではございますけれど、是を老師に差上げて下さるやうにとのことでございました。」

「あゝ、さうですか。」と、若僧はすぐ吞み込んだらしく、「では鳥渡此方へ上つて、お待ちになつて下さいまし。只今、老師に申上げますから。」

かう言つて彼に、小野をその玄關の次の、彼らの控へてゐる茶の間みたいな狹い處へ通した。見るとそこには、圍爐裡が切つてあつて、大きな茶釜がかゝつてをり、鳥渡した茶道具などが、そこらに置いてあつた。そして向うの楣間を見ると、誰が書いたものか、讀み難い假名交りで、「鐘を毀ちて錢を鑄るの歌」といふ額が、呆けたやうに懸けられて在つた。

小野は老師に會はずとも、受取つたといふ返事さへ聞けば、その儘歸つてもいゝ氣でゐたが、こんな機會に、老師に會つて置けるなら、更にいゝと思つて待つてゐた。と、やがてその若僧は戻つて來て、

「では、どうぞ此方へ、老師がお目にかゝるさうですから。」

と請じてくれた。後からついてゆくと、その廊下の奧の、一段高い中二階みたいな書院の襖を開いた室の中に、どつしりと重い大きな机を前に、佛典や經書らしいものを積み重ねた書架を後にして、葬送の時遠くから見覺えてゐた老師が、虎の皮のやうな敷物の上に、厚い黑い座蒲團を敷いて端然と坐つてゐるのが見えた。

小野は入つて、そしてそこの閾際で、一つ丁寧なお辭儀をした。近くで見ると、別にさほどとは思つてゐなかつた老師も、何だかひどく大きな人のやうに見えた。

「私は勝見家の使で參つたものでございますが、今度は色々とお世話を願ひまして、甚だ失禮ではございますが、お禮の印までに差上りましたやうな次第でございます。どうぞ吳々もよろしくとのことでございました。」

老師はさう畏まつて、小野が堅くも挨拶するのを、別にさう氣にも止めず、聞き流してゐるやうだつた。

「あゝ、さうですか。それは御苦勞でした。まあもつと此方へ寄つて、その座蒲團をお敷きなさい。」

「有難うございます。では、頂きます。」

言葉は丁寧ながら、小野はもう卑て、かういふ老師の前などでは遠慮するのが失禮と考へて、すぐその方に躙り進んで、俗に部屋一ぱいに敷いてある、いろ〳〵な獸の皮の一つへ、更に背すやうに置かれた座蒲團へ、恭しく膝を載せた。さすがに端坐は崩さなかつた。

益々近寄つて見ると、老師は目の大きな、何となく老獪な政治家のやうな感じのする、睨みのきゝさうな顏で、無表情に彼を見据ゑた。が、彼はもう恐怖は感じなかつた。殊にその言葉の調子は、寧ろ禪味とか何とかいふ、脫俗した近づき難いものでなくて、平々淡々としてゐるのが、大變彼に心易い感じを與へた。——これがやつぱり禪の至境なのかなと、彼は、更にひそかに敬服した位だつた。

「貴方は、勝見家とどういふ關係のお方ですな。」

老師はそんなことから聞き始めた。何でも初めに、誰か家人の一人と思つたらしかつた。

「謙石先生の弟子でございます。」

「さうですか。では、どこか學校の先生でもしてゐられるのかな。」

「いえ、まだはつきりさういふ模樣が定つてをりませんので、まあ書けたら、小説を書きたいと存じてをるのでございますが……」

「それはどうも。」と、老師は別に色には見せず、たゞ口でだけいつて、

「わしは又、この間この鎌倉にをる人で、やつぱり若い漱石さんの弟子で、海軍の先生をしてゐる方に會つたものだから。」

「あゝ、では、柳井でございませう。彩さんに作れて來て頂いて、お目にかゝつた話は私も聞きました。」

「うむ。あの人は後で、何かの新聞か雜誌に、わしのことをオコゼに似てゐるといつたさうだ。魚のオコゼにな。」

さういふ老師の顏は、憤つてゐるのかと見たら、そんな氣振は勿論見えないし、さればといつて、微笑んでゐるのでもなかつた。小野はどう答へていゝか解らなかつた。

「はあ、さうですか。」

「その人もやつぱり小説を書くのかな。」

「左樣でございます。私たちとは學校以來の仲間で、もう可なり新進作家としては、有名な男でございます。」

「小説といふものも、あれで、なか／＼六ケしいものだらうな。――漱石さんなぞも、命を縮めて書かれたのだらうが、あの人のものの中では何が一番いゝのかな。」

「さあ、左樣でございますな。色々見る人に依つて違ふやうでございますが、まづ私たちは、『それから』『門』なぞが好きでございます。後の物でも、『路傍』などといふ大分いゝものがございますが、惜しあの最後の作が完成すれば、やつぱり一番傑作ではなかつたかと、皆申して居ります。」

「あの、明暗かな。」と老師は、それをミヤウアンと發音した。「あれは禪家の語に在るが、何かさうしたものが、中に書いてあるのかな。」

「完成してないので、何とも言へませんか、先生のあの題を選んだ裡には、さういふこともあつたかも知れませんが、小説の内容としてはたゞ人事の明暗といつた位の所しか現はれて居りません。」

「本になつたら、わしも一つ讀んで見たいと思つてゐるから、送つて下さるやうに、さう頼んで下さらぬか。」

「畏りました。」

小野は何となく、この老師と、あの小説の内容とが、對照されて微笑させられた。

「あれで漱石さんのは、なか／＼禪のことなぞに觸れて書かれて在るといふ話だが、その外の日本の小説は、やつぱり自然主義などといふ戀愛物なぞが多いのでせうな。」

「一概にさうとも言へませんが、さういふものも、なか／＼多いやうですよ。」

小野は再び心の中で微笑して、拈辯する迄もないと考へて、そんなことを答へる外なかつた。

「この頃は、どうも大變な世の中になりましたな。この間も新聞で見ると、何だといふぢやありませんか、どこか淺草あたりの藝術家といふのが、二人で一人の女を、共同に所有するといふ宣言を、出したといふぢやありませんか。この頃流行の共同生活とかいふのを、更に三人で實行する譯ですな。」

「へゝえ、さうですか。」

小野もその話は、鳥渡聞いてはゐたが、そんなデカダンを衒ふ話は彼らは一笑に付してゐたために、さうよくは知らなかつた。そして老師が、そんなことを深く問題としてゐるのに、却て驚いた位だつた。

「さうなつては、まるで禽獸ですな。さういふのを又、デカダンとか惡魔派とかいつて、讃美

する藝術家もあるさうだけれど。……尤も、貴方がたとは違ひませうがな。」

「はあ。――」小野はそんなことを言はれると、併し何となく自分の心が操つたいやうな、他人事ならず面伏せたい氣だつた。そしてそれを辯解するやうに、心持顏を伏せて言つた。「私どもも、さう道徳堅固といふ譯には參りませんが、まあ幾ら墮落致しましても、他人の女を深く思つて、馬鹿の限りを盡す位でございませうな。」

「それならまあよくあることだから、許せないといつても仕方がないだらうが、共同は困るな。……」

「でも、二人の男が同時に、一人に惚れてゐるとすれば、何方かに一方が奪はれて了ふより、悲劇でないかも知れません。或ひはそれが、最も幸福な解決だつたかも知れません。」

「では貴方も、なか／＼新しい方だな。が、そんなことは、到底貴方がたに出來る譯もなからう。精々貴方がたは、一人で一人を思ひつめる位に、して置いて貰はなくちや困る。」

老師はかう言つて、笑ふのでも嘲るのでも、憤るのでも諭すのでもない、何にもない猶然たる顏付で、書院の窓から見えてゐる、斜に夕日の烟つた裏山の竹林を、眼を上げて見やつてゐた。

「私もさうありたいと思つて居ります。」

小野はその一語で何だか老師に、かすけく自分の心の戀を、是認して貰つたやうに感じて、心からさう應じたのだつた。……

やがて彼は、老師の許を辭して、裏山の日蔭を仰ぎながら、少し俥を待たせ過ぎたと思ひながら、門を出ようとした、と、その時、案内してくれた先刻の寺僧が、下駄を鳴らして追ひかけてきて、途中の郵便函へ入れてくれと、一通の手紙を頼まれた。彼はそれを微笑と共に承知して、その太い厳つい文字をちらと見ながら、何氣なく裏を返して見たら、「釋鐵柵」と署名してあつた。

待たせて置いた俥に乘つて、何となくいゝ心持になり切りながら、彼は歸つていつた。それは何だか彼の心も彼の戀も、すつかり淨化され、祝福されてゐるやうな感じだつた。

第七章

一

或時、何かの序に繁子夫人は、皆のゐるところでかういふ話をしたことがあつた。

「……去年の夏のお彼岸にね。餘り天氣がいゝものですから、子供たちを連れて上野へ遊びに行つたのですよ。するとね、あの池の端の辨天樣の前を通つてゐる時、横合から急に若い洋服の男が飛び出して來ましてね。何をするのかと思ふと、手に持つてゐた黒い寫眞器を、いきなり此方へ向けるんですもの。そして私たちが歩いて行くところを、ぴしやりと寫して了ふと、直ぐ帽子をひよいと取つて、お辭儀の積りなんでせう、鳥渡お辭儀をしたつきり、さつさと行つて了つたんですよ。何處の人か、何の爲に撮つて行つたんだらうと、何だか氣味が惡いとは思ひましたがね、問ひ訊す譯にも行きませんから、その儘になつて了つたんですよ。するとね、暫く經つて、何氣なしに新聞を見ますとね、三面の一番下の處に、それが大きく出てゐるぢやありませんか。誰か、秋晴れ、とか何とか題がついてゐましたが、それやあうまく撮れてゐるんですよ。冬子なんぞは袴を穿いてゐるからいゝやうなものの、こんなに足を踏んばつて――。」

夫人はかう言つて、兩膝でその時撮れた狀を眞似るやうにしながら、自分の[illegible]を[illegible]みた。

「あら、お母さま。そんなでもなかつたわ。」

冬子孃は母の話を面白くするための誇張を、

抗議するやうに答へてゐた。
「兎に角悪いけれど、家のものだつてことは、みんなよく解るんですよ。」
「そんならお宅の人たちを知つてゐる人が見れば、すぐモデルが分つたでせうね、――僕も何だかそんな寫眞は、J新聞で見たやうな覺えはあるが、ちつとも氣がつきませんでしたよ。奥さんも、その通り太つて寫つてゐましたか。」
黒田が傍から、幾らか揶揄ふやうに、かう口を出した。
「えゝ、この通りちやんと寫つてゐましたとも。だから、榎町の伯父さんなどは、すぐに解つたさうですよ。」
夫人は然う答へてゐた。冬子嬢も傍から註釋するやうに言つた。
「私、學校で皆に解つて、何か言はれやしないかと思つて、心配してゐた位だつたわ。」
「それで向うでは、貴女がたが何處の人だつてことは、まるで知らなかつたんですか。」
小野も少し膝を乘り出すやうにして、口を差し挾んだ。
「えゝ、知らないんでせう、新聞にも何とも書いてなかつたから。たゞ、娘と子供を澤山連れて、みんな日傘をさして歩いてゐたものだから、丁度上野の秋景色を撮りに來てゐた、その寫眞師の目についたんでせう。」
「知つてゐたら、更にいゝ材料だつたらうになあ。J新聞の寫眞班も氣がきかない。」
黒田が又さう批評した。
「知らないで仕合せ。あんな用意も何もないところを寫されて、麗々しく勝見漾石の家族だなんて出されちやあ、いゝ恥晒らしですわ。」
「四人のお嬢さんに着飾らして、曉星の制服を着た二人の坊ちやんを引連れて、堂々と奥さんが散歩してゐる圖なら、大抵の寫眞班も目につけるでせうね。」
小野も親しみをもつた冷かし半分に、かう相槌を打ちながら、自分の心の暗箱の中で、まだ色づかぬ鬱もりした上野の杜の下、青い空を映して清く小波立つた不忍池の畔に、澄み切つた暖い秋の日を浴びて、美しい日傘を翳した令嬢たちの姿を、その地に引いたであらう影までくつきりと、ひそかに想像の乾板の上に寫してゐた。そしてそれだけで何となく、麗かな思ひに包まれてゐた。
「私たち、何もそんなに着飾つてなんぞ、ゐやしなかつたわ。ね、お母さま。」
冬子嬢が又辯疏した。が、それはすぐ、皮肉な響をもつた杉浦の言葉に、反噬されて了つた。
「着飾つてゐたつてゐなくたつて、それだけ澤山の人數なら、多數の力だけでも目につきますよ。その上着飾らないでも、天の成せる麗質は止むを得ませんからね。」
彼は默つて聞いてゐて、不意によくそんな皮肉な間の手を入れるのだつた。
「あら、そんなこと知らないわ。――兎に角、私なんぞ隨分變に寫つてゐるのよ。」
小野はそんな問答を聞き、その姿を想像してゐる中に、ふとその寫眞を見たくなつた。
「で、今、その寫眞の載つてゐる新聞は、お宅に取つてないんですか。」
「えゝ、有りません。そんな新聞の寫眞版なんて、取つて置いたつて仕方がないと思ひまして。けれど、今になつて見ると、切り抜いて置けば面白うござんしたわね。」
夫人はかう答へた。
「さうでしたね。でも、さうして偶に新聞に載つたのなら、その原板は、まだ社の方にとつてあるかも知れませんよ。大抵のものは半年か一年取つてあるさうですからね。風景同樣の寫眞だから、或ひはとつてないかも知れませんが、一つあの社にゐる澤田に頼んで、寫眞部で調べ

て貰ひませう。そしてあつたら、一二枚燒いて貰ひませう。——出たのは、確にJ新聞でせうね。」

小野はふと思ひついて、さう言ひ出した。

「えゝ確にJ新聞です。何でも秋の彼岸の翌日ですから、九月二十四日か五日ですよ。」

「若し在つたら、一枚僕も頂きますよ。」

「でも在りますかしら……。」

そんなことで、その場の話は濟んで了つたが、それから二三日經つて、當時J新聞社の記者をしてゐた池田に、杉浦の下宿で落合つたとき、小野はそのことを賴むのを、決して忘れはしなかつた。三人は同じ同人雜誌をやつてゐて、杉浦のところが、その當時編輯局みたいなものになつてゐたので、よくそこへ集まるのが常だつた。

「……實はねえ君、面倒だらうが君に一つ賴みがあるんだがね。」

と、彼は杉浦の手前少し恥かしさうに、から序を見て言ひ出したのだつた。

「何だい。何か祕密な用かい。」

何も知らぬ池田は、強い近眼鏡の後の、奧深い眼を瞬いて、いつになく訝りながら反問した。

「うむ。何でもないんだ。實は君の方の社の、寫眞部を調べて貰ひたいんだがね。」

すると杉浦が、急に橫合から口を出してきた。

「うむ、さう〳〵。何でも去年の九月二十四五日に載つた、「秋晴れ」とか何とかいふ寫眞の、原板なんだよ。そいつが有るかどうか、聞いて見てくれないか。」

それは別に、意地惡とか何とかいふ程のことではなかつたが、さうなると、小野も疊みかけて、賴まざるを得なかつた。

「そしてね。若し原板が在つたら、そいつを二枚燒付けてくれないか。是非必要なんだから。」

「何だい。『秋晴れ』つて？　何が寫つてゐるんだい。」

池田は猶も不審がつた。

「なあに、何でもない、上野の景色なんだよ。女の人が三四人、日傘をさして池の端を步いてゐる寫眞なんだよ。」

「その女つて誰なんだい。」

すると、杉浦が又親しげな意地惡さを以て、はつきり底を割つて了つた。

「なあに勝見先生のお孃さんたちなんだよ。それを持つて行つて、小野の奴、うまく歡心を得ようといふんだ。だから構ふことはない、寫眞が在つたら、僕の方へ持つて來てくれ。」

「馬鹿いへ。」

小野は少し紅くなつて、まじ〳〵と當惑する外はなかつた。

「さうか。それぢやあ小野は誰か、お孃さんに參つてでもゐるんだな。」

池田は短刀直入にからかひ出した。

「馬鹿いへ。」小野は慌てて正直に打消した。

「そんなことがあるものか。たゞ奧さんに在つたら持つて行つて上げるつて、約束したから賴むんぢやないか。」

その辯疏が、子供らしい程眞劍だつたので、二人はさすがにそれ以上揶揄ふのはやめた。

「ぢやあ兎に角、調べて見てやらう。そして若し在つたら、そのときはお禮をタンマリ貰ふぜ。」

「いゝとも。だから兎に角、寫眞部の人に訊いて見てくれ。」

それから一週間ばかり經つた或日、小野は又杉浦のところへ行つた。その日は例の宿直順に依つて、杉浦が勝見家へゆく番に當つてゐたので、小野は杉浦を訪問旁、間がよければ一緒に勝見家へ行つて見ようと思つて、出かけたのだつた。その頃でも彼は、かうして殆ど毎日

のやうに、遊びに出かけてゐた。そして小野は杉浦が一人で、吉見家へ行つてゐる日は、何となく漠然と心が落着かなかつた。それで大抵は一緒に行つて、宿直はしない迄も、遊び更かして歸るのが常だつた。

その日もその積りで、彼は誘ひだか誘はれだか分らぬが、伴れ立つてゆきたい氣持で、杉浦を訪れたのだつた。

すると杉浦は、小野の顏を見て、にや〳〵笑ひながら言ひ出した。

「今日は君がきさうもないから、今出かけようかと思つてゐたところだ。進上物を持つてね。」

さういふ彼は、まつたく袴なぞをつけて、外出の用意を整へてゐた。

「ふうむ。さうかい。だが、進上物つて何だい。」

小野は漠然たる羨望を感じて、さりけなくさら言つた。

「うゝむ、何でもない。たゞいゝものなんだよ。」

杉浦は猶意地惡さうににや〳〵笑つてゐた。

「何だらうな。」

小野は輕い氣持になれないで、杉浦の嘲弄を眞面に受けてゐなければならなかつた。

「君の知つてゐるものだよ。實はもう僕はそれを今日持つて行つて、吉見家の人たちを喜ばしてやらうと思つて、こゝに持つてゐるんだがね。」

杉浦は懐を面白さうに叩いて見せた。

「ふうむ。」咄嗟に、小野は思ひついた。「ぢやあの寫眞か。――池田が持つて來てくれたんだね。」

「うむ。まあさうかも知れないな。だが、池田の言葉ぢやないが、只ぢやあ君に渡されないよ。僕の手へ入つた以上、僕に所有權があるんだからな。これは僕が持つて行くよ。」

杉浦は半分冗談らしく言つてゐたが、半分は眞實の氣持で、さう言つてゐるらしかつた。そして實際小野が來なければ、自分で持つて行く積りには違ひなかつた。それは何方が持つて行つたところで、別にさう大した手柄といふ譯ではないが、小野にとつては、決して些事ではなかつた。彼は前々から、ひそかにその寫眞を持つて行つて、彼女たちを歡ばすときのことを、樂しみにして待つてゐたのだつた。その心持のために、小野は普通の揶揄以上に、鳥渡ぐつと胸を悶へさせた。

「ふうむ。さうかい。池田の奴、人に賴んだのに、何だつて僕に渡してくれなかつたんだらう。」

出來るだけ輕く言つた積りだつたが、彼の言葉につい本音に出た。が、その僕のことで折れる杉浦ではなかつた。彼は更にもつとわざと意地惡に出た。

「それやあ池田だつて、素直に僕になんぞ渡せるものか。實は昨日社の歸りにわざ〳〵來て、寫眞を置いて行つてくれたんだがね。別に君にやつて呉れとも何とも言つて行かなかつたよ。だから僕は今日是からこれを持つて行く積りでゐたんだ。」

さう言はれると、まだ〳〵揶揄されてると知りつゝ、小野はそれに強く抗し得なかつた。

「ぢやあせめてどんな寫眞だか見せろよ。」

「それも只ぢや厭だ。」

「そんなこと言はずに出せよ。」

「いや出さない。見たいんなら向うへ行つて、渡して了つてから見ろよ。」

「そんならもう見ない。」小野は幾らか眞顏になつて言つた。「勝手に君が持つて行き給へ。僕が別に持つて行かなくちやならない譯もないんだから――。」

それは、小野としては出來るだけ、輕く言つ

た積りではあつたが、矢つ張り一種の憤りと恨みを含んで出た。

が併し、その位のことで、むざ〳〵折れて了ふ杉浦では更になかつた。

「うむ。よし。それなら兎に角、今日は僕が持つて行くから、一緒に行つて見ろよ。」

「うむ。行かう。」

そんなことで、「それぢやあ俺は行くのをよす。」とは、小野はどうしても言ひ切れなかつた。さういふ風な性格の強弱では、小野はその他の點で幾ら優つてゐても、元から杉浦の敵ではなかつた。

「ぢやそろ〳〵出掛けようか。」

杉浦はわざと平氣で、――内心は稍まゐつてゐるらしかつたが、強ひて意地を張り通さうと思つたらしく、にや〳〵澁い笑ひを眉間に浮べながら、小野を促した。

小野もさりげなく、立上りは上つたが、それでもひそかなる憤懣に心の底を搔き亂されて、さすがに默り勝だつた。それでも彼は、あゝ杉浦が強くいふものの、向うの家へ着く迄には、きつと自分に渡すに違ひないといふやうな氣持もあり、強ひてそれ以上抗つたりするのは、却て杉浦の意地惡を助長するに過ぎないと考へて、さりげなく抑へに抑へてゐたのだつた。

けれどもたうとう、勝見家へ着く迄、杉浦はそれを渡さうともしなかつた。小野は心中ひそかに、平かでないものがあつたが、併し、「それならばそれでもいゝ。」と決心せざるを得なかつた。

で、二人が玄關から通されて、馨子夫人の前へ出た時、小野は挨拶するのを待ち兼ねるやうにして、かう先を越して言ひ出した。

「奥さん。この間の寫眞ね、J新聞社に在りましたよ。池田に頼んだら、持つてきてくれたさうです。――おい、杉浦、出せよ。」

杉浦はかう言はれると、小野を顧みて苦笑しながら、幾らか親愛的に、「畜生、よくしてやりやがつたな。」といふやうな面持で、懐中から寫眞を澁々と取り出した。それは頼んだ通り二枚あつた。

「なか〳〵よく映つてゐますね。奥さんの『何をするんだ。』といふ風に、横目で咎めてゐるやうな顔つきまで、はつきり撮れてゐますよ。」

彼はそんなことを言つてゐた。

「どれ。」

夫人も乗り出して、それを受取つた。小野もすぐにその一枚を、掠めるやうに素早く取つて、そして初めてその寫眞の面を熟視した。

そこには、丁度東照宮下のあたりと見えて、小野が嘗て想像した通りに、蒼鬱とした杜を少しくボケた背景にして、日傘をさした群像が、横にくつきりした日影を曳いて、竝んで歩いて寫つてゐた。寫眞のことで、日傘の色は解らないが、左端にゐる夫人のだけは、黒くかつちりと濃いが、その他の令孃たちのは、いかにも清澄な日を受けて、白つぽく鮮かに輝いてゐた。中央の日傘の中には、第三番目の令孃と末の令孃が、一つ傘を仲よく翳して、足竝まで揃へて歩いてゐた。そしてそこが丁度寫眞の中心になつてゐるので、咄嗟の撮影にも似ず、ぴつちり焦點も合ひ、又傘の中の日光の餘暉を受けて、仄明るく又仄暗い陰影の中に、端麗な秀子孃のつんと澄ました顔と、悪戯つ子めいた一番末の令孃のくる〳〵した眼まで、不思議さうに睜かれて、はつきり印されてあつた。その横手には、又二人の令息が手をつなぎ合つて、これもカメラの方を不審げに覗いたと見え、少し眩しい日に顰めた顔を、無心に此方へ向けてゐた。そしてその右端には、袴を穿いた通學服めいた姿の冬子孃が、日傘を少し斜にして、それでも少しも顔は隱れずに、足を踏み出した瞬間の態

度を、すつかりと露出してゐた。が、その顔は、寫眞師の方を見ようか、それとも知らぬふりをしようかと迷ひながら、つい横目でそつと窺つた瞬間に、パチリとシャッターを切られたと見えて、妙な眼つきを作つてゐた。そしてその隅のあたりは、やゝ焦點を外れてゐるために少しボケ加減に歪んで、實物よりはずつと惡いが、その代り一種妙な味があつて、取り繕はない親しみを感じさせるやうに、面白く撮れてゐるのだつた。……

「成程ね。」夫人も見入りながら、感嘆の微笑と共に言つてゐた。「みんな變に撮れてゐるのね。ちやんとしてゐるのは、秀子ちやんだけだわね。どうでせう。この冬子の撮れ方つたら。――冬子さん、來て御覽なさい。貴女がたの寫眞が來ましたよ。」

その聲を聞いて、奥から冬子孃と定子孃とが、聞き傳へて出て來た。

「あら、何時かのが?　まア、よく在つたのね。」

冬子孃は寄つて來ながら、まづかう叫ぶやうにいつた。そして母夫人の左側から、爭ふやうに覗き込んだ。定子孃は右へ廻つた。

「冬子さん。」小野は透かさず言ひ出した。「僕が發見したんですから、お約束に從つて、一枚は僕が貰つてゆきますよ。」

「あら、厭よ。」冬子孃は熱心に自分の姿を覗き込みながら、鳥渡此方を睨むやうに見て言つた。「だつて、隨分厭に映つてゐるんですもの。厭だわ。こんな寫眞。まあ！　隨分變ね。」

「變でもないでせう。それが眞實ですよ。」

杉浦は傍から皮肉に冷かした。

「あら、まさか。こんなでもないわ。」

「秀子ちやんが一番よく撮れてるわね。」

二番目の定子孃が、公平な批評の口を出した。

「さう言へば、定子さんは撮れてゐませんね。どうしたんです。」

杉浦は前に見てゐるだけに、すぐ氣づいてゐたと見えて、から言ひ出した。全くその群像の中には、誰か足りないと思つたら、定子孃の姿が見えなかつた。

「私?」と、定子孃は、少し得意さうに、そして浮き〳〵とした笑聲を出して、說明した。「私逃げちやつたのよ。寫眞屋さんが傍からひよいと出てきた時、私すぐさう思つたから、急いで此方へ退いて了つたのよ。よかつたわ。だつて私、いつも惡くばかり撮れるんですもの。」

その派手な顔立ちは、纖細と性質の快活さとで、非常に目立つて見えるに拘らず、寫眞などになると、眼付などが大きいために、妙に均整を失つて、いつも却て姉弟中で見劣りがするのを、嘆いてゐると聞いてゐた定子孃としては、それは當然な早業だつた。

「成程ね。でも、よく逃げたものね。」

母夫人も笑つてゐる。

「ほんとですね。」と、小野もやつと發見權を與へられたやうに、その件について言ひ出した。

「さういへば成程、此方の左手の方から、定子さんのらしい影が、紛れもなく出てゐますよ。此方へ逃げたんですね。」

「さうよ。お母さまの蔭の方へ、すつかり隱れちやつたのよ。――ほんとによかつたわ。」

「私、厭だわ、こんな寫眞。」冬子孃はそれにつけても、猶さう言ひ出すのだつた。「どうしてこんな寫眞、見付けてなんぞいらしつたの。」

「でも兎に角、僕は約束ですから、一枚頂きます。」

小野はさう言ふと、自分の持つてゐた分を、素早く懷中へ入れて了つた。

「あら厭よ。」

「厭だつて仕方がありません。初めつから、是は僕の分として、一枚餘計に燒いて貰つたんですから。――お入用なら、もつと賴んで燒かせ

ます。」
「お母さま、眞實? 眞實に小野さんにやる約束をしたの。」
「あゝ、仕方がないよ。」
「あらア!」冬子孃は困惑したやうな、睨むやうな顔をして、小野の方を顧みたが、「ぢやあ、別な寫眞を上げますから、それを返して頂戴。そんなの厭ですから。隨分變に寫つてるんですもの。」
「眞實ですか。——でも、是でいゝぢやありませんか、自然で……。」
「いけないのよ。もつとちやんとしたのを、眞實に上げますから。ね。それは後生だから返して頂戴よ。」
「ぢやあ眞實ですね。僕は貴女を信用してお返しします。ようござんすか。」
そんなことで、小野のその寫眞を祕藏しようと思つた願ひも、すつかり空になつて了つたが、それだけでも彼は嬉しかつた。そしてその後、ずつと後になつてからであつたが、冬子孃は約を果して、日比谷の丸木で寫した寫眞を、二枚彼に呉れることを忘れなかつた。併しそれは非常によく、端麗に撮れてゐるにも拘らず、すつかり餘所行で親しみがなかつた。そしてそれを出して見る度に、小野はこの新聞社の寫眞と、それに絡る插話を、懷しく想ひ起すのだつた。

二

その頃から、小野は磬子夫人の命を受けて、宿直の暇々に冬子孃の英語の、家庭教師を兼ねることになつた。
當時冬子孃は、目白女學校の四年生だつたが、もう後一二ヶ月經てば、卒業することになつてゐたので、それより上の學校へ行くべきかどうかを、定めなければならない時期に際してゐた。
彼女は漱石先生の娘ではあつたが、先生が元來家庭といふものを、一種文藝化することには嫌ひであり、從つて自分の著書などまで、讀ますことを好まなかつたので、大して文學の方面などに向いた性癖もなかつたので、その儘家庭にゐて家事上の手傳ひでもするか、上の學校へ行くにしても、同じ女子大學の家政科か、乃至は音樂學校へでも入る外なかつた。さうしてその何れにしたものかどうかと、夫人も採擇に苦しんで、弟子たちに相談めいた言葉を洩らしたことさへあつた。
が、結局、夫人の女らしい感傷で、何か一藝を身にさへつけて置けば、萬一彼女の身上が悲境に陷つても、食つて行けるからといふ理由と、又冬子孃は幼い時から、兎に角洋樂だけは多少習得してゐて、現に双葉會のピアノ部に通つて、技倆の上でも幾らか見込みがあるといふ話だつたので、音樂學校に入ることに、一應決定したのだつた。
「冬子のはあれで同じポツン／＼にしても、指先に力があるんで、幾らか本當の音が出るんださうですね。師匠も割合にいゝんですつて。」
そんなことを、夫人は娘の稽古ピアノを聽きながら、小野たちに少し自慢らしく言つたものだつた。
その上、黒田の師事すべき先生の、約婚の人といふのが、その時分音樂學校の、ピアノの三年生だつた。それで彼も、—彼自身は許婚のそんな點に、別に嗜好も何もないらしかつたが、冬子孃の音樂學校志望に、第一に贊成したのだつた。
「さうなさい。それがいゝです。それに何か入學上のことで、詰らないことがあつたら、僕のに色々聽かせませう。さういふ便宜もありますからね。なあにあの平凡な大人しい女でさへ、兎に角入つてやつて行けるんですから、冬子さんなんぞは何でもありませんよ。」

黒田はそんな風に勸めた。

小野も勿論心ひそかに、それには雙手を舉げて贊成だつた。なぜといふに彼は、冬子孃が兎も角何年かの間、この上學校生活を續けるとすれば、その間だけは少くとも、彼女と交遊し得る期間が延びる。それが家庭の人となつて了へば、早晩結婚問題か何か起つて、他へ行くか落着いて了ふかである。到底自分などに、貰へるべき氣遣ひはない、とその頃まだ思つてゐた小野は、それだけでも既に贊成だつた。そして殊に音樂學校といへば、更に幾らかロマンチックな色彩を帶びて、彼の好みからいつても、第一に贊成しなければならないことだつた。

愈々さうと定つて、或る日曜日の午後に、冬子孃は當時音樂學校の寄宿舍にゐた、黒田の許婚の人の所へ訪ねて行つた。それより先に、黒田からは既に電話があつて、その人は待つてゐる筈だつた。それ迄、黒田は嘗て一度も、その人を連れて來たことはないし、平素でも、そんな許婚とよく會ふといふやうなことは、黒田の性癖からいつても殆どなかつたので、勝見家の人々や黒田の友人たちにとつても、殆どその人は未知數だつた。それで冬子孃が會ひに行くといふことは、それ自身小野たちの興味をさへ唆つてゐた。

冬子孃は學校へ行く時のやうな姿で、その午後出かけて行つたが、夕方、薄暗くなる時分に歸つて來た。

「どうだつたえ。」

母夫人は待ちかねるやうに樣子を訊ねた。

「えゝ、向うではもうちやんと待つてゐて、大變深切に、いろ／＼敎へて下すつたわ。」

「黒田の細君になる人つて、一體どんな人でした。」

座にゐた小野も、待ちかねてゐたやうに口を出した。

「いゝ人よ。黒田さんはあんなに仰有つて居るけれど、ほんとにいゝ人だわ。黒田さんには惜しい位よ。」

「へゝえ、そんなに綺麗な人なんですか。」

小野は更に無遠慮に聞いた。

「それはね、そんなでもありませんけれど、色の白い、可愛らしい方よ。それにそれやあ大人しい方なの。私だつて、他の人に會つたりする時は、大人しい方なんですけれど、もつと大人しい位なのよ。」

「それやあさうでせうね。何しろ物干で、卒倒した位なんだから。」

さう小野が言ふと、夫人も思はず笑ひ出した。

「あら、あの方、物干で何うかなすつたの。」

冬子孃は不審がつた。それは不審がるのも尤もだつた。

「およしなさいよ、小野さん。餘計なこと言ふもんぢやありませんよ。」

夫人は窘めた。小野は頭を掻くやうにして、首を引込めた。

それは弟子たちの間にだけ知られた、可なり有名な事實だつた。といふのは、黒田は前にも言つた通り、その許婚の人とさう色つぽい交渉をすることなぞは、決して好まないやうな男だつたし、又その女の人も大人しい人だつたので、嘗て一度も二人だけで、親しく語り合ふといふことさへなかつたが、或時夏休みに、二人が灘の家へ歸つてゐる時、――彼の養家は鳥渡大きい酒造家だつた。――或夜涼みをとるために、偶然二人で物干に上つてゐたが、ふとその場の出來心から、親に許された仲でもあり、何かの序に鳥渡黒田の方が、色つぽい心持を感じて、不意に許婚の人を捉へて、急に接吻しようとしたことが、たつた一度あつたさうである。すると、その女の人の方では、平素大人しい人なものだから、すつかり驚いて了つて、卒倒しかけ

たといふ話を、いつか黒田が皆の前で、面白半分に、又自分の許婚者と自分とが、いかに澹泊な色氣拔きの關係であるかを示すために、告白したことがあつたのだつた。それ以來黒田はよく許婚の話が出ると、その物干事件などに絡んで、皆からひやかされたりしたものだつた。

―それを言ひ出したので、夫人が止めたのも無理はなかつた。そして夫人は更に用事の要點を言ひ出した。

「で、入學試驗のことや何かも、よく聞いて來たかえ。」

「えゝ、聞いて來ました。學科は英語だけで、大抵ナショナル・リーダーの三から出るんですつて。それから後は、譜本を見て唱歌を唱はされるんださうですよ。それにはこの本のを練習して置けばいゝつて、黒田さんの奥さんが貸して下さいましたわ。」

から言つて冬子孃は、紫の袱紗包の中から、小學唱歌とか何とかいふ、黒表紙の大型な教本を、取り出して見せた。

「さうかえ。それはよかつたね。おやあ是から一生懸命それをお復習するんだね。」

「唱歌の方は一人で、譜を見てピアノを合せながらでも、練習が出來ますけれど、私、困つちやつたわ、英語は。――お母さま、どうしませう。迚も獨習なんか出來やしませんわ。」

「いゝおやないか、そんなら、誰かに教へて頂けば。」と、すぐ小野の方を顧みて、「小野さんでも誰でも暇な人に。――ねえ小野さん。貴方だつてその位の本なら、造作なく教へて下さるでせう。丁度貴方が一番暇だし、私たちの方の都合もいゝから……。」

「さうですね。」小野は殆ど思ひがけなく、さういふ機會を與へられたのを、感謝しなければならなかつた。「僕でよかつたら。でも、ナショナルの三にしたところが、僕にとつちや怪しいものだな。たゞ何か小説か戲曲かなんぞを、讀み散らすのはどうにかかうにか誤魔化していけても、教へるとなるとなかなか六ケしいですからね。」

「でも貴方は英文の方の文學士でせう。」

「だから餘計怪しいんです。鳥渡、その任でないですがね。他に人がないんなら、止むを得ませんが。」

小野は見え透いた謙遜をした。

すると、やうやく冬子孃も言ひ出した。

「私も小野さんなら、一番いゝわ。他の人が厭よ。だから教へて下さいな。それとも御迷惑？」

「いゝえ、そんなことありませんけれど。……それおや兎に角、教へて見ませう。が、一體この家庭教師を、幾らで雇つて呉れるんです。」

小野は浮々して、嬉しい心持をそんな冗談に紛らした。

「さアね。」と夫人も冗談らしく、「兎に角冬子が無事に入學できたら、お禮は御希望だけ差上げますよ。その代り英語の成績如何は、みんな貴方の責任ですよ。」

「そいつは困るなア。が、まア仕方がありません。かうなつたら冬子さん、二人で一生懸命やりませう。」

「私、英語はほんとに出來ないのよ。怒らないで教へて頂戴。」

「僕こそ。――」

そんなことで小野は一週の中、殆ど隔々日位に夕食後の暇を見て、冬子孃の英語の教師を勤めることになつたのだつた。

が、讀本の三といへば、小野も口ではあゝ言つたものの、ひそかに多寡を括つてゐたのが、大間違ひだつた。

或時茶の間の奥で、夕飯の食卓をすぐその儘机に直して、教習をしてゐた時、ふと續く言葉の

熟語を、熟語だとは氣がつかずに、その儘迴りくどく譯して、それで濟ましてゐたことがあつた。それでどうにか辛うじて、その言葉の意味はとれるので、その場はそれで濟んで了つた。

が、その時生憎、少し離れた圍爐裡のところに、同じ弟子の原田が、宿直に當つてゐたので、居合せてゐた夫人と雜談をしてゐながら、ひそかに此方の教授ぶりを、觀察してゐたらしかつた。小野もそれを知ると、少しは合羞〳〵では居たが、別に氣にしてはゐなかつた。どうせ夫人と話をしてゐるのだから、細かい處などには、さう氣を付けてゐる筈もないと思つてゐた上に、熟字だとは氣がつかないから、鳥渡變だが、その儘でいゝのだと思つて、さして注意もしなかつた。

するとその次に、教へに行つた時のことだつた。一通り教習が濟んで、――その時はもう別に間違ふ處もなかつたので、――それから後、鳥渡、質問の仕直しをするやうになつた時、冬子孃は鳥渡逡巡した後に、突然こんなことを言ひ出した。

「あの、ね。この前教はつたところね。こゝんとこにかういふ字があるでせう。これね。この儘一々譯したりしないで、一つの熟字になつてゐるんですつて、――……つていふ。――原田さんが教へてくれたのよ。」

あつ、成程、さうですね。」小野は鳥渡、顏から火が出るやうに感じた。彼とても、それを全然知らないのではなく、つい、紛れて了つたのだが、さう言はれると全く恥入る外なかつた。「全く〳〵さうでした。どうも氣がつかないでゐて、申譯ありません。あゝ、ほんとにさうでした。……」

「それをね。」と、冬子孃は續けて、小野を慰める積りか、憎らしいといつた風に、猶も言ひ出すのだつた。「後で貴方が歸つてから、わざ〳〵私ん所へそつと寄つて來て、『冬子さん、小野の譯し方はあれは間違ひですね。念のために辭書を引いて見たら、こゝにも確にかう出てゐます』つて、お書齋の大きな辭書まで持つて來て、さも〳〵得意さうにさう言ふのよ。

「だつて仕方がありません。僕が本當に氣がつかなかつたんですから……。」

さうは言ふものの、小野も原田の誤譯指摘を、心から恨めしいやうに思つた。

「でも、さうと氣がついたんなら、あの時すぐに、貴方にかう〳〵ぢやないかつて、氣さくに言へばそれでいゝでせう。それだのに、そつと注意して聞いてゐて、後からわざ〳〵辭書を持つて私ん所まで來てさも大事さうに告口するんですもの。何だか貴方の信用を、蔭でなくなさうとしてゐるやうで、私、いゝ氣持がしなかつたわ。だから、「さうですか。どうも有難う。」つて言つたきり、さうよく返事もしなかつたのよ。あの人、いつも蔭へ廻つて、あんなことばかりするんですもの。まるで女みたやうだつて、お母さまも仰有つてたわ。私、だからあの人嫌ひよ。」

「併し原田君は深切で、さう言つてたのかも知れません。」

小野はまだそんなことを言ふ外なかつたが、併し心の奧では、冬子孃の言葉以上に、その蔭でのやり方を憎く思ひ、それを拒絶してゐる冬子孃の態度に、恥ぢらひながらも、感謝の念を禁じ得なかつた。

「いえ、あの人貴方が、私に英語を教へたりするのが、羨ましいらしいのよ。それでそんな風に直したりするのよ。自分が教へたいのかも知れないわ。だけどどんなにあの人が英語が上手でも、私、あんな人に習ふのは厭だわ。少し位間違つてゐたつて、貴方に習ふわ。だから、そんなこと氣にしないで、教へて頂戴ね。」

冬子孃はかう言つて、小野を慰めるやうにぢつと見上げた。

「え丶、是からはよく氣をつけます。」と、小野はまだ恥辱に悩みながらも、その誹謗指摘が、却て自分に有利な狀態をさへ生んだのを、心中で感謝しなければならなかつた。さうして、それと同時に、原田に對して憎惡と共に、何となく濟まないやうな氣持が、少なくとも理性的に生じて來るのを、現はさずには居られなかつた。――だが、原田君に惡意はないでせう。どうして貴女がたは、さう原田君を嫌ふのです。」

「それには譯があるのよ。――」

と、冬子孃が話したところに依れば、初め原田は、秀才の好青年だつたので、勝見先生からも愛され、夫人からも十分信用されてゐたので、可なり親しく令孃たちとも近づき、殆ど令息の家庭教師のやうになつて、勝見家に出入してゐたのであつたが、或る夏、それは三四年前のことだつたが、夫人や令孃たちと一緒に、鎌倉の海岸へ避暑に行つてゐた時、或夜、皆が寝靜まつてから、冬子孃が熱く寝苦しいので、ふと眼を覺して見ると、隣室に寝てゐた筈の原田が、眼を見開いた冬子孃の、すぐ目の前へ近々と顔をさしつけて、覗き込んでゐたといふのだつた。……

「……それで私大變吃驚してね。『どうしたの。』つて飛び起きるやうにしたのよ。するとね、原田さんは急に慌てて、『餘り月がよかつたもんだから、今起きて外へ行つてみたんですが、その序に貴女が寝てゐるかどうか、そつと見に來たんです。』つて言ふんですもの。私、何だか怖くなつちやつて、お母さまに後でさう言つたのよ。それでお母さまも大變お怒りになつて、あらはにはさうと言ひませんでしたけれど、それからすつかり信用をなくなして了つたのよ。その上あの人と來たら、何から何まで神經質になつて、うぢ／＼氣を廻してばかりゐるんですもの。皆、嫌ひになるのは當りまへですわ。」

「へエ、さうですか。」

小野もさう聞いて、思ひ當る節々がないではなかつた。何でも誰かから噂に聞いたのであるが、原田が冬子孃に接吻しようとしたとか、何とかいふ話も前に聞いてゐた。そして原田自身の口からも、その後、「僕はあの姉妹の中では、やつぱり冬子さんが一番好きですよ。」と、別に深い意味からではなかつたが、品隲したのを想ひ起した。そして原田も、恐らくは境遇が許すならば、小野と同じやうに、ひそかに冬子孃に熱い思ひを寄せたに違ひなからうし、嘗ては戀したこともあつたに違ひないと、想ひ及ぼさざるを得なかつた。今では彼も、もうある同年輩位の女教師と結婚して、その細君の貢ぐ學資に依つて、大學に通つてゐる身上であつたが、さうなれば少なくとも冬子孃に近づく男性を、嫉妬と羨望なしには見ることが出來ないに違ひないと推察された。さう思ふと、小野はひそかに、原田を憐むやうな、又同情に堪へぬやうな、それで優越を感ずるやうな、妙な感じに囚はれない譯にはゆかなかつた。

兎もあれ、その家庭教師の職は小野と冬子孃とを、益々親しくする仲介となつた。學習そのものに對しては、冬子孃はさう氣が進まなかつたけれども、さうして二人對坐することは、別に嫌つてもゐなかつた。小野にとつては、それは勿論ひそかな喜びであり、待ち遠い樂しみであつた。或時は故先生の書齋で、又或時は彼女たちの勉強部屋になつてゐる離室で、その後は近くに外の人がゐるのを、原田に懲りた例もあつたので、二人とも避けるやうにさへなつた。別に意味のある譯ではなかつたが、かうして二人はよく二人だけで話し合ふ機會を、半ば公然と許されてゐたのである。

冬子孃はよく學校の話や、親友の噂や、自分の性癖などについて、斷片的にだが話した。

「……私、是で心は隨分强情ないけない女なんですけれど、外へ出るとそれや臆病で控へ目なのよ。だから學校の先生になんぞもよく言はれるのよ。貴女に誰か知つてゐる人はつて言はれた時に、知つてゐる癖に、いつも手を擧げないつて。さういふ所は私案外素直でないのよ。」

小野は又小野で口下手ながらに、自分の境遇や友達の噂なぞを、彼女に解る範圍で語つたりした。

かうして小野の心は、いやが上にも彼女の方へ、引寄せられずにはゐなかつた。その點に於て、彼は磐子夫人の信頼を、ひそかに裏切つてゐる譯ではあるが、夫人にしても又ひそかに、二人が何となく近寄つてゆくのを、許してゐるやうな態度もないではなかつた。で、若しこの事に對して、責を負ふべきものとすれば、夫人も亦一半を負はねばならぬ人に、違ひないのであつた。

若い令孃の家庭教師に若い青年、それは又餘りに見え透いた危險なる境遇でなくて何であらう！

悲劇の因は殆どそこに醸されたのだつた。

三

かうして小野の冬子孃に對する戀は、もう摘み取りうべき萌芽でなくして、全く動かし難いものとなりつゝあつた。さうして又一方では、磐子夫人の信任も、今は益々彼の上に重く置かれるやうになつて來た。彼が前に、夫人の特別の使命を帶びて、釋宗澤老師を鎌倉に訪ねたが、今度は又それとは異ふが、それに類した一事件の處理を、祕密に賴まれるやうにさへなつた。

或日、それは先生の七々日を過ぎて、間もない頃だつたが、下宿に居る小野の所へ、突然又勝見家から電話がかゝつて來た。丁度杉浦も遊びに來てゐる時だつた。小野はそれをふと又冬子孃からのではないかと、一瞬間胸を躍らしたが、然しすぐに其後から、冬子孃ならもう其時間には學校へ行つてゐて、居ないことを想ひ起しながら、女中がかけたなんでもない雜用に違ひないと思つて、杉浦を部屋に置いたまゝ、取りあへず電話口へ出て見た。

すると其處の電話口へ出てゐる聲は女中のそれではなかつた。

「もし〳〵、小野さんですか。……私ですよ。磐子ですよ。」

「あゝ！」小野は夫人自らが珍らしく、いきなり其處へ出てゐるのに、驚きかつ恐縮した。

「奥さんですか。失禮しました。――何か御用ですか。」

「えゝ、あのね、貴方鳥渡お話ししたいことがあるの。貴方今お暇ですか。」

「えゝ、暇といふ譯でもありませんが、何もさし當つて用事がありませんから、そんなら是からすぐお伺ひしませうか。」

「さうですか。それならね、少し內密に貴方にだけお賴みしたいことがあるんですが、家では少し都合が惡うございますから、鳥渡外へ出て來て下さらない？」

「えゝ、何處へでも參ります。」

小野は夫人の、特別な願ひといひ、わざ〳〵餘所へ出て來いといふのから、一體用事といふのは何だらうと思つた。何か重大な家庭の事件の處理か、でなければ自分に對して、何か特に委託があるのだ、と考へると、彼の胸は一種の期待にときめくのを感じた。

「ぢやあね。私が貴方の下宿へ行つてもようござんすけれど、それではひよつと人目にたつといけませんから、貴方の方から一つ、赤阪見附の處まで來て下さいな。私、これから丁度、

豊川樣へお詣りに行きますから、すぐ其處で赤阪見附の停留場へ行つて、貴方の來るのを待つてゐますわ。だからすぐ來て下さい。」

「え丶、ぢやあすぐ參ります。」

「それから此の話は、誰にも知らせないで頂戴。私から電話がか丶つたことも。ね。知れると後で又五月蝿から。」

「え丶、畏まりました。が、今丁度僕ん所へ、杉浦が來てゐますから、お宅から電話がか丶つたことだけは知れてゐますよ。」

「あらさう。杉浦さんならかまひませんわ。でも私から直接か丶つたとは言はないでおいた方がようござんすよ。杉浦さんなら、後で知れてもかまひませんけれどね。兎に角今は、貴方一人の胸に收めて置いて頂戴。」

小野は夫人から、さう祕密にするのを要求さ れればされるだけ、事件が何だらうといふ興味と、夫人の特別な信賴に對する喜びとを覺えない譯にはゆかなかつた。

「え丶承知しました。御心配には及びません。」

「では待つてゐますよ。」

夫人はそれで電話を切つた。小野は部屋へ歸るとすぐ、杉浦にはたゞ勝見家から、用があるから來いといふ電話がか丶つたから、是から烏渡出かけて來ると言つて、そして杉浦と一緒に戸外へ出た。

「奥さんが何か内密に用があるんださうだよ。何だらう。」

小野は杉浦に對して、すつかり隱し立をすることが出來ないので、そんな風にだけは知らした。それでないと、又杉浦を置いて一人で行くのが、何となく氣が咎めたからだつた。

「さうかい。何だらうな。まあ行つて來るがいいさ。」

小野は杉浦と別れて、一人で電車に乘つた。彼の心持は、何となく漠然とした期待で、充ち滿ちてゐた。そして何となく祕密に媾曳にでも行くやうに、わく／＼胸を騷がせてゐた。夫人と媾曳。そんなことはまるで兩立しないに拘はらず、彼は自分のひそかに思つてゐる人の母から、又尊敬すべき先師の夫人から、さうまで信賴を受けてゐるといふことだけで、もう何とも言へぬ仄かな嬉しさを覺えてゐるのだつた。

日比谷で乘り換へて、赤阪見附で下りると、もう夫人が先に來て、向うの飯田橋行の停留場のところに、人混みから少し離れて、此方を見ながら立つてゐた。黑つぽい羽織に肥つた身を包んで、夫人の姿はすぐ判然と小野に分つた。

彼は電車線路を橫ぎつて、急いで其方の方へ歩き近づいた。そして一二間前まで來ると、帽子を取つて會釋しながら、

「よほどお待ちになりましたか。」

と言つた。何だか息ぎれがして、胸の動悸はなぜともなく止まらなかつた。

「い丶え、そんなでもありませんでしたよ。十分位なもんでせう。」

「さうですか。どうも濟みませんでした。」

小野は夫人に對しては、親愛と共に恭敬を忘れなかつた。

「い丶え、それより貴方の方こそ。わざ／＼呼び出したりなんぞして、濟みませんでしたね。貴方ほんとにお暇？」

二人は親子ともなく、姉弟ともなく、又勿論戀人ともなく、又夫人と書生といつた形でもなしに、ごく自然に寄り添うて、何處ともなく歩き出してゐた。

「え丶――。」

「そんなら日比谷公園の方へでも、ぶら／＼歩いて行きませうか。貴方歩くのお厭？」

夫人の言葉は、俯しながら親愛に滿ちてゐて、いつもより優しいやうに小野には響いた。

「いえ、何處へでも御一緒に歩きませう。」

「さうですか。ではぶら〳〵一緒に歩きながら、お願ひのことをお話ししませう。家でも、餘所へ行つても、聞かれると五月蠅ござんすからね。」
夫人は又繰り返してさう言つて、人の往來のさう激しくない、三宅坂の道隅の方へ、小野を導くやうに誘つた。
「何ですか。伺ひませう。」
其處のお濠に面した坂道には、片側の櫻の並木が疎に立つてゐた。そして冬にしては穩かな、少し眠たげな水蒸氣に滿ちた日影が、ぼんやり木立の影を敷いてゐた。二人はそれを踏んで、靜に話しながら歩いて行つた。
夫人の話といふのは、かうだつた。それは小野が想像してゐたやうな問題とは、まるで懸離れてはゐる、謂はばもつと輕いが、面白い問題だつた。
……その初めは、先生が死んでから、確か初七日の日だつた。一人の粗末な黑衣を着た、若い二十五六の僧が、腰見家へ訪れて來た。取次に出てみると、それは先生の舊知の者だといふので、早速座敷に通された。
其僧といふのは、何方かといへば敏捷さうな、黑い小柄な顏立で、さう卑しい風體では勿論なかつたし、先生は昔から禪僧を好きで、生前なども神戸のある寺から、二人上京して先生を訪ねた若い禪僧を可愛がつて、幾晩も〳〵泊めてやつたり、その修行の話などを聞いて、喜んでをられた位だつたので、さういふ舊知の僧などといふものは、當然在りさうな話だつたので、誰も疑ふものはなく、喜んで座敷に通したのだつた。
すると、彼の僧は、取りあへず先生の寫眞に對して、恭しく讀經禮拜した後、殆ど問はず語りに、自分の身上を語り出した。それに依ると、彼はもと一個白面の書生だつたが、ある時人生上の問題に煩悶して、日出新聞社の樓上に、先生を訪ねて救ひを求めた。すると先生の言はれるには、それならばまづさし當り、禪の修行に志したらよからうといふので、その上若干の金まで與へて、越前の永平寺へ行けと諭してくれたのださうである。
で、彼はその金を持つて、永平寺に赴き、其處の禪弟子となつて、もう數年修行を積み、兎に角それに依つて一廉の禪僧となつたので、今度は行脚旁、寺を出て東上して來たといふのである。
すると、彼は途中濱松に於て、偶然新聞を見て、先生逝去の報に接した。それで、これは昔大恩になつた先生のことであり、又東京へ出たら、訪ねてお禮の一つも述べようと思つてゐた際なので、非常に驚き嘆き悲しんで、すぐにも飛んで來ようと思つたのであるが、如何せん無一文の雲水の身では、汽車に乘ることも出來ず、止むなくそれから只管道を急いで、やつと今東京まで、辿りつくなり早速伺つたといふのである。
それを聞いてゐたものは、夫人も弟子たちも、一樣に此の思ひがけぬ珍客に、感激して了つた。そして今更ながら故先生の遺德を仰ぐと共に、此の僧の濱松から歩いて來た勞に對して、皆は何を措いても厚く犒はなければならないのを感じた。腹が減つたらうといふので、早速膳部は運ばれた。而して其間にも、尊敬の目を以て、弟子たちは殆ど英雄を迎へるやうに、色々な質問や談話をしかけた。
「先生も、私がお會ひした頃とは、大分お變りになりましたな。」其僧は、經机の上に掲げた先生の寫眞を見ながら、そんな風に懷しげに言つてゐた。「前からこんな髭だつたでせうか。」
「いいえ、違ひます。前にはピンとした髭でした。」

應對に出た弟子たちは、そんな風に應じてゐた。

「さうでしたね。確か。――それにしても隨分お齢をおとりになりましたな。これではまるで、お會ひしても分らなかつたかも知れません。隨分古い話ですからなア。」

「一體、何時、何處でお目にかゝられたのです。」弟子の一人が、決して穿鑿的にではなく、寧ろお世辭で話を進めるために訊いた。

「さあ、私の二十歳前後でしたから、もう彼是、六七年になりますかなア。いや、もつと前かも知れません。何でも先生が、日出新聞へお入りになつた時分でしたよ。場所も確か、日出新聞でだつたと覺えてゐますが……。」

「さうですか。はゝア……。」

そんな話も、先生の遺德に對する感激と、其僧に對する尊敬で、別に怪しまうともしなかつた。

そして勝見家では、鄭重に饗した上、十圓ばかりの布施をさへ包んで、其日感謝して彼を返した。それから其僧は、二七日にも來て、他の、釋宗澤師の世話で、小石川の有名な某寺から來た僧に交り、其末座ながら讀經も勤めれば、禮拜も立派にやつて、終ひにはやはり同じやうに、過分な布施を受けて歸るのだつた。それは三七日にも、埋骨式にもさうだつた。そして殆ど例のやうになつて、厚く待遇されてゐた。

ところが、其年の「太陽」の新年號に、編輯者から賴まれて、門下の米田氏は故先生の追憶といふやうな一文を載せた。そして其中に、いろいろ先生の生前の德行や逸話を連ねた末、先生が禪僧などの生活を好いた例として、又よく他人の世話を見た例として、氏は其僧のことを、插話的に書いて置いた。恰もそれが其文章のヤマでもあるやうに、細かに感激的に書いたのだつた。

すると、それを偶然有馬生氏が讀んだ。有馬氏は、兄弟三人とも、有名な藝術家として立つてゐる人であつて、豫々漱石先生には好意を持つてゐるのだつたが、其追憶文を讀んで、不思議に思つた。といふのは、氏らは其嚴父、――郵船會社の社長などをした有名な實業家、――を、漱石先生の死ぬ少し前に、喪つてゐた。そして其葬式の後、やはりある一人の若い僧が現はれて、自分は嘗て其有馬氏の嚴父に、大變厄介になり、何かの折には佛教の爲めに、多大の寄附をして貰つた者であると言つて、恭しく供養した上、禮を貰つて歸つたものがあつた。そして其際、やはり某禪寺にもゐるものであるが、有馬氏の場合は濱松でなく、靜岡で訃を聞き知つて、やつぱり歩いて來たといふのだつた。

それが餘りに似てゐるので、有馬氏も妙に思つた。そして其旨を、猶詳しく聞き糺さうとして、米田氏に手紙で言つて來た。それで米田氏も、ひそかに驚きかつ怪しんで、有馬氏とも會見し、よく話し合つてみると、どうやら其言行のみならず、人相まで似てゐるらしいといふことになつた。それですてゝ置けないといふので、其僧が果して同一人かどうか、又同一人だとすれば、果して贋物かどうか、よく調べてみなければならなくなつた。そしてもし贋物で、先生の葬式を種に、うまく騙りに來たものとすれば、それにまんまと引つかゝつた一家の人々や、門弟たちこそ馬鹿な役廻りに違ひなかつた。そしてそんな神聖なものを利用して、まんまと詐欺を働いてゐる男こそ、見やうによつては憎んでも猶餘りあるものに違ひなかつた。――米田氏はそのことを、ひそかに夫人に告げて、警告を與へたのだつた。

「……でね。あの坊さんは今度の月命日にも、來るつていふ約束がしてありますから、明日きつと來るに違ひありませんよ。もし贋だとし

ても、まだ現はれてると思はないから、きつとやつて來ると思ひます。だから、そしたら貴方が出て、一つ會つてみて、譃かどうか調べて下さいませんか。私、もう會ふのも何だか氣味が惡くなつて來ましたからね。お賴みといふのは、實はそのことなんですよ。」

夫人はかう言ひ終つて、一まづ言葉を切つた。

「そんなことですか。そんなことなら、いつでもして上げます。」

小野も自分の豫想には外れたが、用件が妙な用件なので、微笑を浮べながら喜んで承知した。

「何だか探偵みたいなことで、貴方だつて嘸お厭でせうけれど、一つ私のたつてのお願ひだと思つて、やつて下さいな。私、こんなことをお願ひ出來るのは、貴方より外にはないんですからね。」

「いえ、何でもありません。奥さんの爲なら、どんなお役にでも立ちたいと思つてゐるんですから。」

小野もさう言はれると、心からそんなことを言つた。

「ほんとに私貴方だけを、賴りにしてゐるんですからね。そしてこのことは、米田さんと大寺さん以外には、少しも知らしてないんですからね。其積りで貴方に任せますから、もしあの坊さんに會つてみて、いよ〳〵贋だと分つたら、後の難儀の起らないやうに、一つうまく片付けて下さいな。貴方一人で祕密にね。でないと又、いろ〳〵他のお弟子たちや、先生の友人の方なぞの口の端に上つて、いろ〳〵うるさいことを言はれますからね。」

「それは私も出來るだけのことを致します。」

「何しろ先生がお亡くなりになつてから、私、一人だもんだから、いろ〳〵先輩の人たちも、此方を心配して下さるんでせうが、何かと口出しをして來て困るんですよ。こんなことがあると、又あの奥さんは馬鹿にされたなぞと、後指をさゝれでもしては厭ですからね。――ほんとに何でも彼でも打ち明けて、內輪に相談が出來るのは、貴方だけなんですもの。」

夫人は幾らかヒステリカルに、そんなことを小野に訴へた。先生の逝去後、いろ〳〵面倒なことを言ふ友人や門弟の間に挾まつて、さすがに氣丈の聲子夫人も、そんな氣持になつてゐるのだつた。小野は其夫人の心持が、幾らかヒステリックであると知りつゝ、其信任の言葉には、涙ぐましい程感激せざるを得なかつた。

「えゝ、畏りました。是からも私で出來ることなら、何でも致します。」

こんなことを話しながら、二人は人通りの少ない濠端を、たうとう日比谷公園の處まで歩いた。夫人も小野も、何となく心を盟ひ合つたやうな輕い興奮で、疲れも時間の經つのも、殆ど知らない位だつた。

かうしてその日は其儘、小野は夫人と別れて、信賴されたる人の喜びを、胸一ぱいに抱き締めながら、冷たい下宿へ歸つた。

その翌日、先生の命日の日には、午前中に例の僧が來るといふので、小野は早くから勝見家へ行つてゐた。そして彼の來るのを、今か〳〵と待ち設けてゐた。ひよつとすると、もう露顯を嗅ぎつけて、來ないのではないかと思つてゐた。

するとやがて、十時頃になると約束通りにその僧は、――片桐といふ名だつたが、勝見家の玄關に現はれた。

「片桐さんがいらつしやいました。」

何も知らない女中は、さう書齋に待ちかまへてゐる小野に通じた。

「あゝさうですか。ではどうぞ通して下さい。」

それを聞くと夫人は、苦笑するやうな眼付で

相圖をして、そつと立つて奥の間へ行つて了つた。

小野は鳥渡居ずまひを正すやうな心持で、少し胸をどき〳〵させながら、一つは探偵の興味に微笑んで、爼上の魚ともいふべきその僧の入つて來るのを待つた。

僧はいつもの通り、黒い粗末な衣をつけ、寧ろ可愛らしい小柄な顏に何の疑念も浮べないで、平氣にひよこ〳〵と入つて來た。

「やあ、よくいらしつて下さいました。」

小野は鳥渡唾を飮んで、出來るだけ平然と迎へた。

「いや、失禮――。」

僧は平氣で設けの座についた。小野には、この男がそんな騙りだとは、――それは見やうに依つては、寧ろ愛すべき騙りかも知れないが――到底思はれなかつた。が、併しさう思つて見ると、禪僧にしては少しきよろ〳〵し過ぎるし、又其手捷さうな小柄の眉宇には、狡猾らしい抜け目なさが潛んでゐるやうにも思へた。が、いきなりその場で、小野は聞き糺すことなぞは、到底出來なかつた。

「其後如何です。」

そんなことを、さし當り彼は僧に向つて言ふ外なかつた。

「いや、相變らずです。寒さは少し緩んだやうですが、東京も隨分寒いですなア。尤も吾れ吾れはさう大して苦にもしませんが。――」

僧の方でもそんなことを言つてゐた。

「……では、兎に角、御經を願ひますかな。」

小野は是が贋物だつたら、先生の靈はそのお經を、何と聽くだらうと思つた。そして贋物ならば一も二もなくすぐ糺命して、お經なんぞ讀ませないやうにするのが、先生に對する禮かとも思つたが、すぐ開き直つて、勝見家の中でそんなことを荒立てては、何も知らぬ家人や女中やの手前もあり、甚だ工合が惡いと考へた上に、又先生の靈も、贋物なら贋物として、苦笑してお許しになるのみか、或ひは寧ろ面白がつて、お聽きになるに違ひないと思つて、さう促したのだつた。

――今日は奥さんは？」

併し僧はすぐ讀經を始めずに、聽かす相手欲しげに、から訊いた。

「奥さんは少しお加減が惡くて、今日は奥に臥せつておいでです。貴方がおいでになつたら、よろしくとのことでした。ですからどうぞ御遠慮なく、お看經をなすつて下さい。それから二人で、お墓の方へお詣りすることにしませう。」

小野はひそかに、さういふ手筈に定めてゐたので、猶もそんな風に勸めた。

「ぢやあ、さう致しませうかな。」

と、僧は衣を正して、そして先生の佛前に坐つて、傍で小野が注意深く聞いてゐるとも知らず、恐らくは奥に居る夫人の耳にも響けといつたやうに、大聲で經を誦し始めた。

併しその經は、もう前に夫人も氣づいてゐたことだが、例の宗澤師の方の世話で、白隱寺から來る僧達のとは違つて、漢音か梵音かの分らないのではなく、和譯された樣な意味の分るのだつた。

「はゝあ、是は鳥渡經を聞き齧つた、眞つ赤な贋物かも知れないな。」

そんな風に小野は思つて、猶もひそかに注意しながら、その經の終るのを待つた。

やがて彼はやうやく誦經を終つた。そしていつもと同じく、殊勝げに禮拜して、もとの座に戻つた。

「御苦勞さまでした。ぢやあ、是から一つお墓の方へ、お伴するとしませうかな。」

小野は待ち兼ねるやうに又促した。

「ぢやあさうしませう。」

僧は此方の氣のせゐか、何となく物足りなげだつたが、さう答へて座を立つた。

かうして小野は、更にその僧を、戸外へ誘き出した。出て見ると日は、風もなく晴れてゐて、途々の早稻田の裏町は、埃もなく澄んでゐた。何だかそんなことをするより、呑氣に話でもしながら、歩くのが相應しい天氣だつた。

途々小野は、どういふところから、ひそかなる訊問を進めようかと、思ひ惱みながら並んで歩いた。彼ら二人とも、取りとめのない世間話なぞを、他意なく交してゐた。

「……東京では貴方は、一體何處にいらつしやるんです。」

彼はやうやく話の序をみつけて、かう氣づかぬやうに質問し始めた。それは勿論、ごく自然だつたので、僧の方でも警戒といふ警戒は少しもしなかつた。

「今ですか。今は向島のある寺に厄介になつてゐます。其處には前から知つてゐる仲間が居ますんでね。」

「あゝ向島ですか。いゝ處に居ますね。あんな處にも禪宗の寺があるんですか。」

その間も更に自然だつた。

「えゝ、在りますとも。あの牛の御前の後の方に、小さな寺があるんですよ。」

「かう見たところ、貴方がたの禪僧の生活も、呑氣でいゝでせうな。」

「いや、此の道へ入つてみると、なか／＼修行は苦しいですよ。でも、私なぞは、もうさういふところはどうにかかうにか、通り過ぎて了ひましたがね。かう晴れて了ふ迄は大變です。ほんとに、何にもない境涯なんですからね。私なぞはその寺に居ると、今でもたつた一枚の蒲團に包まつて寢るんです。そして起きれば、かうして出て歩く外、毎日坐つてゐるんです。その代り呑氣といへば呑氣ですよ。――どうです。貴方がたも一つこの道にお入りになつては。漱石先生なぞも、此道には大變趣味を持たれて、前には坐つたことがあるさうぢやありませんか。貴方はそんなお心持はないんですか。」

僧は小野の問ふに任せて、無邪氣にそんな風に言ふのだつた。

「さあ。僕も禪ならば、鳥渡やつて見たい氣がするんですが、どうも所謂野狐禪的になりでもしては大變ですからね。」

「そんなことはありませんよ。きつと何かの役に立ちますよ。」

小野は心中、少しくすりと笑ひながら、さりげもなく猶も相手にならなければならなかつた。

「それやア僕だつて、禪と東洋の藝術との間には、深い關係のあることも知つてゐますし、是でも又幾らか禪機といふやうなものは、心得てゐるつもりですがね。何しろ今から煩惱を斷つちや詰りませんよ。僕なんぞ是からですからね。」

「それはさうかも知れませんが、まあ一つ面白半分にでも、やつてみて御覽なさい、いつでも手引きはしますよ。」

「ぢやあ貴方のお寺へ、遊びに行つてようござんすか。」

小野はすかさず機を捉へたやうに、かう衝つ込んでみた。

「えゝ、ようござんすとも。いつでもいらつしやい。――尤も今居る寺は、名もない小さな寺ですから、參禪の模樣なぞも、貴方がたには面白くないかも知れませんが、二三日經つと、私も鶴見の總持寺の方へ參りますから、お暇の時にいつでもいらつしやい。」

「總持寺へ行つて、貴方の名をいへば、すぐに分りますか。」

小野は更にもう一歩進んだ　居所を曖昧にするのが、何よりも怪しいと、まづ最初に睨んだ

のだつた。

「えゝ多分解るでせう。けれどそれで分らなかつたら、私は大概彼處へ行けば、焚炊寮に居ることになりませうから、其處へ片桐つてさういつて訪ねておいでなさい。——えゝ、まあ炊事係といつたやうなものを、やらされるんですよ。」

さうと聞けば、滿更謔でもないやうにも思へた。

「さうですか。そんなら是非その中に一度伺ひます。」

そんなことで、早稻田の裏町を通りながら、二人は其處から雜司ケ谷の方へ、目白臺を女子大學の前へ上つて行つた。どうしても、それまでどうもうまく直截に、小野には言ひ出しにくかつた。そしてその坂道にかゝつた時だつた。小野はふと、この上の女學校に、今時分冬子孃は、授業を受けてゐるんだなと想ひ起した。そして、それに勇氣づけられたのではないが、彼は漠然と、夫人から受けてゐる自分の使命を思ひ直した。そして、そんな氣の弱いことをしてゐないで、直截にことを片付けて了へ、その方が自他の爲だ、と初めて其處で意を決する氣になつた。

僧はと見れば、丁度話が途斷れた後で、默つて少し喘ぎ氣味に、あの坂を上りつゝあつた。

「ときにねえ、片桐さん。」小野は突然、思ひ切つて口を切つた。「貴方はあの有馬といふ人を、よく御存じでせうね。」

「有馬？」僧は突然さう言はれて、少し面喰つたらしく、半眼にちよいと此方を窺つたが、小野の樣子が少したゞならないのを見ると、微かに眼の中で慌てた。そしてきよと／＼と急いで目を伏せながら、「有馬つて、誰方でしたつけねえ。」

「この間お亡くなりになつた、有馬毅氏ですよ。番町の——御存じでせう、貴方はあの方に、大變御厄介になつたといふぢやありませんか。」

小野は殆ど確信をもつて、斷乎と強くかう言ひ切つた。

「有馬と、……存じませんねえ。やつぱり漱石先生のやうな方ですか。」

僧はまだ倂しさう白を切つたが、打見やると、さすがに此方は見得なかつた。

「いえ、實業家です。あの、郵船會社の社長か何かしてゐられた人ですよ。知らない筈はないでせう。貴方はあの人の葬式にも、行つてゐたぢやありませんか。僕は、實はあの人の息子さんで、やつぱり小說を書く壬生といふ人と懇意なもんですから、よく貴方のことを聞いて知つてゐるんですよ。」

かうまで言はれると、さすがに僧も少し參つて、誤魔化すやうに言ひ出さなければならなかつた。

「あゝ、あの有馬さんですか。あの方なら知つてゐます、さうですか。はゝア。……」

「それに貴方は有馬さんへ行つても、父漱石先生のお宅へ來ても、同じやうなことを言つてゐますね。あれはみんな譃でせう。貴方が拵へたことでせう。」

小野はもう、その場の僧の樣子で、殆ど紛れもなく見究めがついたので、かう、今度は幾らか語調を柔かく言ひ出した。

「……けれども、有馬さんに御厄介になつたことは、全くなんです。」

「さうですか。いや、それならばそれでもいゝです。だが、貴方も拙いことを言つたものですね。兩方に同じやうなことを言ふなんて。僕は有馬さんから、その話を聞いた時から、さう思つてゐました。倂し兎に角、やつちまつたことは、仕方がありません。が、このことを知つてゐるのは、今いつた有馬さんの息子さんと、僕つきりですから、僕は何とかして是を內分に收

あまつと思つて、貴方お一人の時に申上げようと、それでゐましたノ、今日も、お一人でいらして、丁度來たんです。どうぞ、貴方もいゝ加減に、今やうにあんたの悪戯をおやめになつたら。今までのことは、僕一人の胸の中に、すつかり收めて置きますからね。――」

二人は丁度坂を上りきつてゐた。そこで小野はひとまづ、反應を見るやうに言葉を切つた。彼は僧が、何と言ひ出すか、黙つてゐた。が、なかなか、何とも言はなかつた。そしてたゞ、唇を心持噛むやうにして、前方の在らぬ方角をぼんやり見ながら、僧は少し黒い顔の色を變へて、黙りこくつて歩いてゐた。それ以上、小野も強ひて、自白を強要はしなかつた。事態はもう明白だつた。小野はたゞ僧が、どういふ態度に出るか、衝き倒して逃げてもするかと、少し用心して、待つてゐたのだつた。

二人はその儘黙つて、並んで女子大學の横手を、淋しい生籬の細い徑へと出た。

と、突然、その時まで黙つて、又すつかり伏目にはならずに、さればといつて小野の方も見ないで、正面の方角を、却つて沈んだやうに見てゐた僧は、急に此方を振りむいて、さらして心の底から出たやうに、

「世間つていふものは、廣いやうで狭いもんですなア。」

と、長大息するやうに言つた。それが、彼の、たつた一言の自白だつた。が、その言葉の中には、恐らくは百言を費して、懇に悔い改めたらしく自白する言葉よりも、ずつと無邪氣で、本心から出た響を持つてゐた。「えゝ、ほんとにさうですねえ。」

小野も心から、さう言はれると賛成した。彼にはもうそれ以上、強く咎めることなぞは、到底出來なかつた。而して少しもその男を、憎むやうな氣になれなかつた。「世間つていふものは、廣いやうで狭いもんですなア！」―聞きやうに依つては、この上なく横着に聞えるかも知れぬその一言も、小野には全くそれに違ひないと、心から首肯されたのだつた。

しばらく行つてから、今度は小野が結論するやうに言つた。

「兎に角、このことは前にもいつた通り、僕と君とだけの、内分に濟まして置きませう。だが、兎に角、君の勝見家の人々に對してやつたことは、人間の一番清く高い心持を、うまく悪用したんだから、罪悪には違ひありませんよ。だからその罪だけは、心から先生の墓の前へ行つて、よくお詫をなさい。さうして今後、こんなことを決してしないと御約束なさるなら、僕も是以上何とも言ひません。咎めるどころか、僕は君を面白い人だと思つて、友人になつてもいゝですよ。だからもうそんなに、氣にしなくてもいゝです。さあ早く先生の墓へお詣りして歸りませう。」

から言つて、二人はその訪問者と被訪問者でなく、相並んで雑司ヶ谷の墓地へ入つて行つた。僧も初めはさすがに、物も言はずにゐたが、その中に、又隔意なく色々な話をし出した。小野はそれつきり、もうその問題には觸れなかつた。

僧は、やがて先生の墓の前に立つて、別に悪びれもせずに、朗々と例のお經を上げた。そして心を籠めて、長い禮拜をした。

小野は微笑を以て、それを傍から眺めてゐたが、その終るのを待つて、一緒に墓地を出た。僧とは音羽の通りを歩いて、そして江戸川終點の處で別れた。別れる時、彼は小野に向つて、

「左様なら。どうも済みませんでした。そんならどうかお暇だつたら、納骨寺の方へ遊びに來て下さい。僕炊寮ですよ。」

と言つて、親しげに挨拶して行つた。

に隱れるやうに潛んだりして、表の扉の開く度毎に、柳井の來るのを待つてゐた。戸外は十二月終りのまだ少し強い風が、夕暮の停留場に立つ人々を、黒く寒げに吹き捲くつてゐるらしかつた。

　その中にやうやく、柳井の黒く細長い洋服姿が、つと斜に衝き入るやうに、入口の大きな硝子扉を開いて店の中に入つてきた。彼は鳥渡立佇つて、尖つたやうな鋭い眼を上げ、店内をぐるりと見廻したが、小野をすぐ近くの和書の陳列臺のあたりに見出すと、ひよいと會釋をして、つか／＼近寄つてきた。小野も進み出て、少しは恨むやうに言つた。

「やあ、遲かつたね。」

「うむ。失敬。新橋で下りてから、鳥渡愛宕下へ寄つてきたのでね。遲くなつて濟まなかつた。――ぢやあ鳥渡待つて呉れ給へ。直ぐ用を濟まして來るから……。」

　かういひ棄てると、彼は肩を聳やかしてつかつか奥へ行つたが、例の文學書類を竝べた本棚の前へ立つと、豫々見當を付けて置いたらしく、一冊の本を手早く拔き取り、更に敏く目を走らせて、その邊の本の背の文字を物色してゐたが、一と通りずつと檢べた後、ふいに横手の方に立つてゐた番頭を指で麾いで、そして少し忙しなく訊ねた。

「おい、君、君。この間のルメートルはもうなくなつたのかい。」

「えゝ、千葉さんが持つておいでになりました。」

「さうか。そいつは殘念だつたな。一週間位大丈夫だらうと思つて、この前の週に買はないで置いたんだが、やつぱり賣れつちまつたか。讀みたかつたんだがな。――ぢやあ仕方がない。このフレンチ・ポートレートだけ貰つて行かう。」

「左樣ですか。どうもお氣の毒さまで……」

　小野はその柳井の、讀書慾に滿ちたといふのか、愛書癖に富んでゐるといふのか、兎も角も如何なる際でも、讀書と學問とを忘れない生活狀態を、傍から見てゐて、この頃冬子孃に對する思慕のために、うか／＼と何もせずに過してゐる自分を、顧みない譯にはいかなかつた。柳井はひとり勉強ばかりでなく、その頃もう創作の方でも、精進の態度が目に見えてゐた。そして小野は恐らく思ふやうにならないだらうと思はれる戀の煩悶と、どうにかして創作を以て立ちたい希望に燃えながら、思ふやうに書けない焦慮とで、何時も羨ましく柳井を眺めなければならなかつた。

「相變らず勉強だね、君は。よくそんなに讀書をする暇があるね。」

　小野は後から蹤いて行つて、そんな風に言つた。

「いや、この頃はすつかり不勉強だよ。學校も忙しいし、小說も書かなけれやあならないし、いろんな俗用があるんでね。この間からやつとバルザックの評傳を、一冊讀んだつきりだよ。僕はどんな時でも本を傍に置いてないと、何だか淋しいやうな氣がするんでね。謂はば本が僕の生活の支柱さ。丁度、君に於ける戀の如さものだね。」

　柳井はひよいと頤を上げて、揶揄ふやうにいつた。

「何だつて。――それは兩方とも君だらう。」

　小野は思はず鳥渡赤くなつて反問した。彼には柳井が、もう彼の最近の冬子孃に對する心持を、薄々知つてゐるのかと思つた。が、併しそれは柳井がいつもの、警句に過ぎないのかも知れなかつた。

　果して柳井は、さう深い意味をもたせたのでもないらしく、輕くその反撥を受け止めた。

「さうかも知れないね。兎に角、僕にもいろんなことがあつて困るよ。いづれ後で話すがね。……ぢやあ出ようか。」

「出よう。」

本の包みが出來上つたので、そこで二人は中西屋を出た。戸外へ出て見ると、夕風はさほどでもなく落ちて、冷たいピンとするやうな空氣の中で、街々の燈火は洗はれたやうに、煌々と輝きを逆らせかけてゐた。頰にひりゝとする程寒いが、快くからりとした晩冬の夕暮だつた。まだ西の空は、屋根々々の上にかつと明るく燃えてゐた。

「少し歩かうか。」

「うむ、歩かう。」

二人は蒼茫と暮れかゝつた、灯火の割りに少ない、お茶の水の方へ向つて歩き出した。

「その後どうしたい。何かあつたのかい。」

小野は途中いろ〳〵話の末に問ひかけてみた。柳井が、毎もに似げなく、何か焦々してゐる樣子で、話に纏りや落着きのないのが、小野に鳥渡不審を起させたのだつた。

「うむ。その後少し弱つたことができてね。當然の罰だとは思つてゐるが、心配でならないことがあるんだよ。」

柳井は通り過ぎる人の、もう見定め難いぼんやり白い顏を、鋭く見返すやうにしながら、少しかすめた語調で話し出した。

「ふうむ。何だい。それやあ又、例の『花火』の方の口でかい。」

「いや、さうぢやないんだ。『花火』の先生なんぞの方なら、どつちへ轉んだつて、商賣だから何でもないんだけれどね。君なんぞのまるで知らない、全然違ふ口なんだよ。それで一つには大いに弱つてゐるんだ。」

「へゝえ、そんな口が、まだ外にも在つたのかい。氣の多い奴だな。」

「全くいろんな口が多過ぎるんでね。それでつい間違ひができるんだよ。」

柳井は吾と吾身を嘲笑するやうに、また小野を逆襲的に揶揄するやうに、そんな口をきいた。

「一體何なんだい、その心配つていふのは。何か家へでも知れて、それで面倒でも起きたのかい。」

「うむ。まアさういつたやうなことだがね。家へ知れたんぢやないが知れやしまいかと思つて、それで心配してゐるんだ。そのことが家へ知れて、民子——彼の許婚——の方へでも響くと、僕はそんなでもないが、彼女に可哀さうだからね。」

柳井はまたわざとそんな風にいつて、自身を冷笑するやうに笑つた。

「ふん。成程、君のやうに家の方を、少しも拔目なくうまく取繕つてゐると、さうした悲劇もあるんだね。」

小野はさうはいつたものの、この怜悧な柳井が、嘗て一度も家の人々に對しても、また友人なぞに對しても、積極一つ見せたことのないのに、そんなに自分に弱つた態度を見せるのは、可なり困つたことに違ひないと思つて、心の中では同情してゐた。

「實はね。」と、柳井は思ひ餘つたやうに、たうとう告白し出した。「君にも誰にも知らせはしなかつたけれどね。僕の愛宕下の姉の家に、鳥渡可愛い女中がゐたんでね。まだ僕が大學にゐた時分からだつたが、眞澄目をかけてゐたんだ。それも因はといへば、僕が姉の家を訪問でもすると、向うから頻に僕に好意を見せたからなんだがね。僕が行つてゐると、何とか彼とかいつちやあ、僕に近づいて話しかけたり、臺所や緣側にゐても、頻に唱歌を唄つて聞かせたりしてね。何でも何處かの女學校に中途までゐたと

かで、當人としてはそこらの教育のない普通の女中とは違ふつてことを、僕に示したかつたのだね。そして僕が食べ殘した氷水なんぞを、そつと喜んで飲んだり、僕の脱ぎ棄てた外套に頰擦りしたり、何彼につけちやあ、僕に好意を表はすのでね。僕も、つい相應に可愛い娘でもあるし、さうまでされると、惡い氣はしないものだからね、何時か何うかした拍子に、二人つきりになつた時、その場のハズミで、鳥渡接吻して了つたんだよ。……」

「ふうむ。」

「そしたらね。どうもその女がね。その後も本氣で僕のことを、何とか思つてゐるらしく、姉たちが相應の家へ嫁づけようと思つて、いろいろ緣談を勸めるけれどもね、それを片つぱしからぽん／＼斷つて了ふんださうだ。中には隨分いゝ家から、特に望まれた身に餘るほどの口があつても、どん／＼拒絕して了つたんだつて。……」

「ふうむ。そしてその際、君のことを何かいひでもしたのかい。」

「いや、それは何ともいはなかつたらしいが、僕はそんな話を聞くたんびに、何とか僕のことを、言ひ出されやしないかと、胸がひや／＼してならなかつたんだ。ところが殊に最近になつてね、それが愈々ばれさうな事件が生じてきたんだよ。」

と、柳井は小野の方を見ずに、正面の街の遠い灯を、呆やり眺め棄てながら、告白の言葉を進めていつた。

「と、いふのはね。近頃になつて其女が、僕と民子と、愈々約婚をしたといふことを姉から聞き知つたらしいんだ。そして姉には、何ともいはなかつたらしいが、他でもない今日先刻ね、僕が新橋で下りて、鳥渡用が在つたものだから、愛宕下へ寄つたらね。丁度折惡く姉夫婦が留守で、その女中たつた一人つきりゐたんだ。そして僕の顏を見ると、妙に興奮した調子で、頻に話があるから上れつていふのでね。僕は別に氣も止めず上つたんだよ。……」

「ふうむ、すると？……」

柳井が鳥渡いひ澱んだので、小野は興味をもつとともに、告白を安くする心遣ひで、かう促さずにはをられなかつた。

「するとね。いきなり僕の胸に縋りついてね。約婚した話は本當かつて訊くんだよ。僕もさうなつては仕方がないから、實はもう半年も前から、家と家とで定めて了つて、仕方がないからつてさういつたさ。すると向うでは、やはり僕と結婚し得る位に、初めから思つてゐたらしいんだね。さうとは知らなかつたから、今まで貴方のことを賴りに思つてゐたつて、急に泣き出して了つてね。終ひにはお定まりの誑されたの、弄ばれたのつていふ調子で、この上は僕と其女との中を、有無に拘らず、姉や家の人たちにいひつけるつて泣いひ出すんだ。僕も弱つちやつてね。仕方がないから、そんなことをいひつけられでもしちや大變だから、そんな短氣を決して起してくれるな。決してお前は厭やないんだが、家と家とで定めた約婚で、それにはいろ／＼斷り切れない事情もあるんだから、お前がさうまで思つてゐてくれたことは僕として如何にも氣の毒だが、どうか是までのことと諦めてくれつて、月並だが仕方がないから言葉を盡して謝まつたんだよ。それでまあ、その場はどうやらかうやら納得した樣子だつたから、まア安心して、這々の體で逃げて歸つたんだがね。ほんとに弱つたよ、つい鳥渡したハズミで、餘計な接吻なんぞして了つたものだから、こんな目に會つちまつて。僕は心配でならないんだよ。あの場はあゝして納まつたものの、いつ何時あの女に、姉にでも告げ口されやしまいかと

思ふどね。たつた一度接吻したきりだけれど、そんなことが家へでも判ると、僕はすつかり面目を失つて了ふからなア。……」

柳井はもう四邊に迫つた薄闇の中で、その秀でた眉を顰めた。

「へゝえ、そんなことがあつたのかい。成程それやあ君にとつちやあ、可なり困つた問題だらうね。だが僕からいはせれば、何でもないぢやないか。その位のことは、若き日の咎として、たとひ君の家へ知れたところが、大目に見て呉れるだらう。要するにそれは君が、種んな女に惚れられて困るといふことに過ぎないぢやないか。」

小野は柳井の告白を聞き終ると、から慰めるやうに言つたが、さういふとともに、自ら柳井の惱みと自分の煩悶とが、對照的に考へられた。そして平常決してそんな自分の失敗の告白などをして、弱い尻を友人にでも摑まへさせたことのない柳井が、さすがに一人の胸に收めかねて、自分にから打明けられたのを聞くと、自分のもつてゐる惱みをも、柳井に打明けないではをられないやうな、一種の衝動を心の中に感じた。

柳井は猶ほもいひ續けた。

「それはさうかも知れないけれど、僕の家には君も知つてゐる通り、僕を飽くまで信じてゐる、清教徒の叔母がゐるからねえ。その耳へでも入つたら、全く何といつていゝか解らないからねえ。それに考へやうに依つちやあ、女一人の運命を、全く僕が弄んだことになるからねえ。罪悪に感ぜざるを得ないよ。――あゝあ、考へると、厭だねえ。」

「厭だらうが、當然の罰だと思つて、その位の自責は甘受するさ。さうして堪へてゐれば、事實は案外うまくゆくかも知れんよ。外部的にいへば高がまア、家に知れなければそれで濟むんぢやないか。内部的の君の精神上の苦悶なぞは、要するに心の試錬に過ぎないかも知れないからねえ。」

小野はそんな風に、慰撫するより外に仕方がなかつた。

「さうだねえ。ほんとにさうだ。ゲーテも、何か道徳的な罪を犯しちやあ、その自責の念に逐られて、種々な傑作を書いたんださうだからねえ。」

「さうだ。僕から見れば、君のそんな煩悶なんぞ、寧ろ惚話のやうにしか聞えないよ。僕なんぞに比べると、寧ろ幸福だ。僕なんぞはもつと空漠たる戀に、たゞ一人で焦慮してゐるばかりなんだからねえ。」

小野はそんな風に、柳井の告白に釣られて、自分の胸の中を打明けたくてならなかつた。

「何だい。君にもそんな問題があるのかい。」

柳井も、自分の告白が終ると慰められたともなく幾らか心が落着いたと見えて、聽くも小野の顔色を見てとつた。

「うむ、僕も疾うから君には、第一に打明けて相談しようと思つてゐたんだけれどね、未だに決心が定まらないので、一人そつと心の中に秘めて置いたんだがねえ。この頃ぢやあ何だか、もう一人で秘めて置くに堪へられなくなつてきたんだ。」と、小野は柳井の顔を[illegible]かしげに見ながら、たうとう言ひ出した。「實は勝見先生のお嬢さんに就てなんだがね。」

「ふうむ――。」

柳井は此方を振向いて、ぢつと小野の顔を見た。

「僕は疾うから、あの一番上の冬子さんに、好意を感じてゐたんだがねえ。この頃ではそれが昂じてきて、どうにもならないやうになつて了つたんだ。で、そんなことをするのは、まだ早過ぎるとは思ふけれど、いつそ思ひ切つて打明け

るなり、奥さんに結婚の申込をするなりして、當つて砕けたい位に思ふんだよ。」
小野は少しの恥かしさと、熱情に頰を燃して言つた。
「ふうむ。さうか。——そんなことだらうと、僕も薄々は察してゐたがね。もう、そんな風になつて了つたのか。君は惚れつぽいからね。そしてあゝいふお孃さんのある家庭に、近づき馴れてゐないからね。そんなことになりやしないかと思つて、僕も心配してゐたんだよ。」
柳井は夜目にも、蒼白な冷靜な顔で、かう批評的に言つた。
「だが、もう僕も、思ひ切れない所まで行つちまつたんだから、仕方がない。かうなるまでに、實はこれでも、一生懸命思ひ切らうとして見たんだがね。思ひ切るにしても、いつそ當つて砕ける外ないとさへ思つてゐるんだ。どうだらう客觀的に見て、僕には迚もあのお孃さんと結婚し得る望みはないかしら。」
「そんなことはあるまい。先生の家だつて、僕とさう身分が違ふつてほどのことはないからね。けれども、そんなことよりも、僕から遠慮なくいはせれば、少し時機が早過ぎやしないかい。」
「それは僕もさう思ふ。さう思へばこそ僕も、一生懸命抑制したんだけれどねえ。僕にとつては、もう早過ぎるなんて、いつてゐられないやうになつて了つたんだ。」
「さうか。そいつは仕方がないね。」と、柳井は微笑して、そして更に突き込むやうにいつた。「だがそんならもう一つ遠慮なくいふが、君は冬子さんに、先生のお孃さんだから惚れたんぢやないかい。まさかお孃さんそれ自身といふよりも、先生のお孃さんだからといふ、定冠詞に惚れたんぢやなからうね。——少なくとも世間は、さういふ風にとるかも知れないからね。」
「さうだ。」小野も、幾らか斷乎として答へた。「さう思つたから僕も、その點に就ては、十分自省してみた。お前は先生のお孃さんといふ名にひかされて、または光榮ある先生の家へ入りたいために、こんな野心を起したんぢやないかと。併し、僕はその點に就ては、はつきりいひうる自信をもつたよ。成程、それは先生のお孃さんといふ名や、それに附屬したものに心ひかれないとは絶對にいひ切れないけれどね、僕はあの人が平の娘さんだつて、やつぱり好意を感じただらうと思ふ。といふのは、僕はあの人に會つてゐると、恥かしいが生理的にも、愛の衝動を感じてならないんだ。こんなことを言つたら、君は笑ふだらうと思ふが、さういふ名や光榮に對しては、まさかそんな氣は起さないからね。僕は先生のお孃さんだから、今迄あくまで思ひ切らうとしたり、躊躇したりしたんだ。そして今では、そんな非難に面して立つても、仕方がないと決心してゐるんだ。」
「さうか。成程。」と柳井も少し微笑を堪へて、同感するやうに點頭いた。「さうまで思つてゐるならそれで結構だらう。だがそれは君が、君だけが一人さう思つてゐることで、向うの冬子さんはどう思つてゐるのだい。何か、僕の方に有利な態度でも見せたのかい。問題は、歸着するところ、そこだらうと思ふがね。」
柳井の明晰な頭腦は、順次に問題をかういふ風に解剖していつた。
「うん。それがなければ、僕だつてかうも思ひ詰めはしない。果してどの位、重大にとつていいかは知らないが、その一例として擧げれば、僕は冬子さんに手を握られた。——丁度先生の埋骨式の晩のことだがね。……」
小野はさうして稍詳しく、その夜のことを話つて聞かせた。
柳井は幾らか興味をもつて、「うむ、うむ。」

と聞いてゐたが、聞き終ると、少し考へるやうにしてそして言つた。

「ふうむ。そんなことがあつたかい。處女が若い男の手を握る。考へやうに依つては、可なり重大な問題だね。――冬子さんつて人は、そんな人かね。」

柳井は少し誇張もあつたらうが、闇の中で眉を顰めたらしく、不服さうな語調を加へて言つた。

「ひよつとするとまるで無邪氣で、そんなことをしたのかも知れないが。……」

「いづれにしても僕は好かんね。それは僕がその當人に惚れてゐればそんなことをされたら或ひは嬉しいかも知れんが、少し理性的に批評すると、甚だ性のよくない振舞ひだと思ふね。一種のコケットぢやないか。若し無邪氣でやつたにしても、あの人だつてもう十九だらう。十九にもなつて、そんなことを無意識にするとすれば、何か缺陷があるとしか思へないよ。いづれにもせよ、僕なら不賛成だね。兎に角相手に好意を示したに違ひなからうが、そんな人だとすれば、君も考へ直した方がいゝと思ふね。」

「さうかねえ。」が、小野は柳井の冷酷な一撃に、驚きと共に一種の不快をさへ覺えた。小野には、その事實が彼の希望を最も繋いでゐたものだつただけに、そんな一判斷を受付ける餘裕もなかつたのである。「僕はさうも思はないが。……さうかねえ。僕にはたゞあの人が極めて素直に、さういふ好意を示してくれたものとして、益々あの人のいゝ所を見せてくれたやうに思ふんだがねえ。」

「それはさう見るのが穩當かも知れない。」と、柳井は良友の冷靜を以て、さう深くは立入らないとともに、親愛を以て肯定した。「いづれにもせよ、君に好意をもつてゐる證據としては、まさに確實なんだからね。たゞさういふ批判を加へうる餘地が、冬子さんの人格上に在ることだけは、君も念頭に置いた方が、萬全の策だと思つたからね。」

「有難う。だが、それは君の杞憂だよ。あの人の人格に、そんな悪い所なんぞありはしないよ。」

「さうまで思つてゐるんなら仕方がないさ。まア遣る所まで遣つて見るんだね。さうなれば僕も君のために及ばずながら盡力するよ。」

柳井は問題を笑つて外しながらも、同情ある態度を見せた。

小野はそれに力を得て、更に本論に入り出した。

「どうだらう、僕は近々奥さんに冬子さんを下さるやうに、お願ひして見ようと思ふんだがね。當人に先に打明けて、ひそかに諒解を得たりしては、卑怯な事をすると思ふからね。公明正大に奥さんに打明けて奥さんの許しを受け得られるもんなら受けた方が、僕としてもいゝだらうと思ふがね。」

「するなら、さうするのが一番いゝだらう。僕もそれに賛成だ。だが、それにしても時機の問題だね。時機は十分考へなくちやいけないよ。まア、ゆつくり時機を待つんだね。さうすれば或ひは、奥さんは君を可なり信任してゐるやうだから、或ひは思ひがけなく向うから望んで來れないとも限らない。僕もその中には、適當な時機を見て、奥さんにそれとなく話してもいゝからね。」

「さうかい。どうも有難う。君がさうしてくれれば、實に感謝するよ。僕も出來るだけ時機を待つ積りだからね。」

「さうし給へ。――僕の言つた言葉と違つて、君のは消極的な意見におちてるぢやないか。」

柳井はわざとさうした諷刺めいた感傷的な言葉を使つて、小野に同意してくれた。

「どうだか。――」

二人はもう疾うにお茶の水を過ぎ、暗い順天堂病院の横を拔けて、灯火の賑かな本郷通りへさしかゝつてゐた。

二

小野が杉浦に打明けたのも、それから間もなくだつた。

小野と杉浦とは、常に勝見家に於て、行動を共にしてゐた。どちらかといへば小野の方が、幾らか主となり杉浦の方がそれに蹤いて行く形で、殆ど異心同體のやうに動いてゐた。全く小野なしには杉浦は、さう勝見家の人々たちと親しくなることもできなかつたに違ひないのだ。

――さういふ關係だから、小野は杉浦にこそ第一に、彼の冬子孃に對する戀を打明けるべきだつた。打明けて援けを乞ふべきだつた。が、二人は毎日必ず一度は、訪ねて行くか來るかして、相會うて互に創作の話をしたり、世間話をしたりしてゐる間に、勝見家のことに就ても、必ず何か話し合ふのが常であつたに拘らず、小野は嘗て一度もそれをはつきり杉浦に打明けたことはなかつた。

それは第一に、親し過ぎるほど親しく、日夕顏を合してゐるので、今更らしくこと改めて、そんなことを打明けるのが、何だか妙な氣がしたからでもあつた。それから又第二には、戀するものゝ敏感で、いつか自づと杉浦に、漠然たる敵手意識を感じてゐたせゐでもないとはいはれなかつた。

小野はまづ第一に、杉浦も亦冬子孃に、同じ思ひを抱いてゐるかゐないか、それをひそかに知つた上でなければ、迂闊には打明けられない氣がしてゐた。若し杉浦が同じ思ひを抱いてゐるとすれば、彼を一種の苦惱に陷れるばかりでなく、或ひは競爭の念を生じさせて、此方の邪魔をされないとも計られなかつた。そしてそのために、二人の仲が不和にでもなつては、心弱い小野として堪へ得られないことだと思つた。

だから小野は日常の素振りで、それとなく仄めかしはすることがあつても、はつきり打明けないでゐた。そして時機を待つてゐたのだつた。

が、この頃になつてみると、杉浦も冬子孃と親しむには親しんでも、それ以上積極的な態度に、出たがつてゐる樣子もなかつた。そして冬子孃とても、杉浦に親しみは見せてはゐるが、彼にそれ以上のことを要求してゐるとは見えなかつた。その點の好意は寧ろ小野自身の方へより多く示してゐるやうにさへ思はれてきた。

その上、小野はもう一人思ふに堪へかねて、柳井に打明けて了つた後だつた。からなつてはどうしても、最も親友である杉浦に、打明けない譯にはいかなかつた。もうかうなつてはいづれにもせよ、杉浦に打明けて相談し、お互に意中を話し合つて、杉浦が冬子孃を親愛の念以上に、何とも思つてゐないならば、快く助力をして貰ふやうに賴み、また若し冬子孃をひそかに戀してゐるとすれば、それを諦めて讓つて貰ふなり、または此方で讓つてやるなり、しなければならなかつた。どちらにもせよ杉浦に祕密で、出し拔いて少しでもことを運んでは、平素の友誼に對しても、甚だ濟まないことだつた。若しそれに依つて、杉浦が非常に苦しむやうならば、そのときは自分の思ひを泣いて斷ち切るとも、まづ打明けて相談すべきだと思つた。

柳井に打明けた後、小野は益々その決心を固くした。そしてできるだけ自然に、杉浦にいひ出すべき時機を待つてゐた。

その時機は、それから二三日ならずして來た。

或夜、小野と杉浦とは、杉浦の下宿で、偶に

依つて晩くまで話し合つた。二人は毎日會つてゐながら、少しも話題に窮しはしなかつた。話がなければ、二人とも默つて、てんでに何か考へてゐても、それでもよかつた。話がなければ、困るやうな友人關係ではなかつた。それでその夜も、六時頃から、もう十一時近くまで一緒にゐたのに、別に話し盡して飽いたといふやうなことはなかつた。それに小野には、例の話をいつかは打明けたいと、心の中でひそかに待つてゐるだけに、何だかまだ話し足りなかつた。別れるのが惜しかつた。

が、もう彼是、時間は十一時を過ぎてゐた。で、小野はやうやく尻を上げるやうにして、そして未練らしく言つた。

「ぢやあ、もう歸らうかな。――だが、どうだい。一緒に鳥渡出て見ないか。寢る前に、夜の街を少し散歩するのもいゝぜ。」

「さうだね。出て見てもいゝね。何だか少し鬱屈したから。それに少し腹も減つた。」

杉浦も、冴えない調子ながら、すぐさう應じた。彼も亦、その儘一人ぽつりと下宿に殘されるのが、あんまり氣持がよくないらしかつた。

「ぢやあ出よう。」

「出よう。」

杉浦も立上つた。

「まア今時分また御散歩ですか。」

二人は下宿の婆さんに目を瞬られつゝ、晩い暗夜の中へ出た。戸外は雨氣を含んで闇が濃く、木の葉が重く垂れてゐるやうな、いやに靜かな晩だつた。暗い横町から表通りへ出ても、もう街の商家は大抵戸を下して、數少になりつゝある燈火の影にも、壓迫されたやうな靜けさが澱んでゐた。

二人はその自然の氣配に感じたのか、もうさし當つて話し合はねばならぬこともないのか、兎に角むつつり默つて歩いた。杉浦は夜更けの散歩に相應しい、憂鬱な顏をしてゐた。小野も心の中に憂ひを抱いた人のやうに、思ひ沈んで俯向き勝に歩いてゐた。

『藪』へでも入らうか。」

「うむ。よからう。他は何處ももう駄目だらうからね。」

そんなことで二人は更に暗い薬師の境内を拔けて、そこの鳥渡有名な蕎麥屋へ上つた。夜の雨氣の加減か、そこも靜かだつた。二人は靜かな二階へ上つて、そして一間だけ離れてゐる、小さい別室の方へ通つた。廣い方にも殆ど客はなかつた。

二人はそこで食べ物と少量の酒を命じた。

その中に、小野は靜かな夜氣と、少しの酒精のためか、何だか心が妙に感傷的になつて來た。そして眼の前にぢつと坐つてゐる言葉少の杉浦をとらへて、もう胸にあることをすつかり打明け、彼の身體を搖ぶつて、訴へたいやうな氣持になつた。――先刻から、今夜こそは言つて了はう、と、ひそかに心に思つてゐただけ、その衝動は可なり强かつた。

小野はたうとう、機を見てからいひ出した。

「ねえ杉浦。――僕は君、あの勝見さんの、冬子さんが好きなんだがね。向うでさへ許して吳れれば、僕は結婚したいと思つてゐるんだがどうだらう。」

小野は心の中で、その打明ける言葉を、澤山に種々と考へてゐたけれど、最初は結局それだけでいひ切つて了つた。

杉浦は不意に、小野にさういひ出されたので、細い眼を心持見開くやうにしながら、落着いた調子で反問した。

「どうだらうとは？」

「君はどう思ふ。僕が冬子さんに申込んでも、迚も望みはないだらうかね。」

「そんなことはあるまい。」

杉浦は鳥渡眉根を上げて言つた。
「併し君はどう思ふ。僕がそんなことをするのを不賛成ぢやないかね。」
小野は少し熱して、畳みかけるやうに言つた。が、杉浦は落着いてゐた。
「そんなことはない。どうして？」
「どうしてでもないが、僕は君が、僕と冬子さんとがそんな風になりでもしたら、苦痛ででもあると困るからね。君は萬一僕がそんな風になつても、苦痛ではないかい。君はあの冬子さんのことを、どうか思つてゐるといふやうなことはないかい。」
小野は更に畳みかけて訊いた。
「うむ。それは僕だつて、あの人には親しみを感じてゐる。が、今のところ、それ以上のことは何もない。あの人も僕には、僕相應の好意を示してくれるので、僕は嬉しいとは思つてゐるが、君のやうに結婚までしようとなんぞは思つてゐない。だから、君があの人に結婚を申込んでも、別に苦痛なんぞ更にないよ。」
「ほんとに何でもないかい。」小野は更に膝を進めて、少し憮然としてゐるやうな、併し表情のよく分らない杉浦の顔を見返した。「僕は、君が何でもないんなら、安心してことを運ぶことができるがね。君に少しでも苦痛を與へるとすると、僕は考へ直さなければならないと思つてゐるんだ。」
「今のところ、何でもない。――尤も、これから先のことは、分らないがね。」
杉浦はさういひながら、少し揶揄ふやうに、小野の方をにやりと笑つて威嚇した。
「さうか。そんならまア安心した。ぢやあ頼むから、どうか僕のために、このことが成り立つやうに援けてくれ。ほんとに苦痛でないんなら、ね。」
「うむ。次第に依つては盡力してやらう。が、併しその問題を實行するとなると、種々まだ考へなければあいけないぜ。よく考へてしないと駄目だよ。それやあ僕も盡力はするけれど、君も考へてからにしないといけないよ。」
杉浦は頻にさう勸告した。
「うむ。それは僕も時機を見て、奥さんにお願ひしてみるつもりだがね。兎に角、君がさういつてくれたので、僕も安心した。ぢやあほんとに宜しく頼むよ。」
と、杉浦はまた意地惡く、にやりと笑ひながら、恐るべき冗談でかういつた。
「それやあ盡力はするがね。盡力して、君たちを一緒にして置いて、先生の『そのうちにある臺輔のやうになる』困るからなア。」
その主人公は、自分の盡力で二人を結婚させて置いて、そしてその後、その女に戀をしてゐたのを知り、かつ現在の餘り幸福でない境遇に同情して、自分が盡力して一緒にしてやつた良人から、その女を奪ふことになるに至る……先生の小説の中でも、最傑作のものだつた。
「そんなことになつちやあ大變だ。」
小野も、さりげなくは笑つたが、何だか一抹の暗翳を、自分の運命の前へ投げられたやうに、そのときから惡い感じを受けざるを得なかつた。
そのとき、どや／＼と階段を上つてくる、他の客の足音がしたので二人は默つて了つた。そして思ひ／＼に、その問題を考へてゐるらしく、外の方へ視線を向け合つてゐた。闇の中に靜まり返つた、下の庭の八つ手あいた植込は、灯影を受けて半面てらついてゐたが、後はしんと葉を垂らしてゐた。
「もう出ようかね。」
暫くして杉浦がいつた。
「出よう。」
戸外へ出て見ると、闇の中から冷たい雨が、ぽつーり、ぽつーりと落ちて來た。二人は足を

急がせた。が、小野は何だかその雨が、熱した頬に當るのを、快いと感ずるやうな興奮に囚はれてゐる、自身を發見しなければならなかつた。……

三

もうかうなつては、小野にとつてそれは全く時機の問題だつた。そしてその時機は思ひの外に早く來た。

それには、もう一つ冬子孃の好意が、小野にはつきり解つたやうな事實が、その前にあつたからだつた。その事實といふのは、三月三日の、彼女らの雛祭の晩のことだつた。

その夜は、勝見家の令孃たちの勉強部屋に當てられてゐる、例の離室の一室に、雛段を飾つて祝ふから、それを見に來いといふ招待が、前から冬子孃から小野たちに傳へられてゐた。小野も杉浦も、喜んでその夕を待つてゐた。それで、小野は夕方になるのを待ちかねて、杉浦を誘つて出かけて行かうと思つた。すると杉浦は、何か用事があるとかで、芝の白金にある彼らの友人の、川瀨といふ銀行家の邸へ招ばれて行つてゐなかつた。それで小野は一人で勝見家へ行かねばならなかつた。併し彼は、行つてみて一人で來た幸福を、感謝するやうな事實に出會つた。

小野が行つたとき、冬子孃はもう疾うから待つてゐたらしく、玄關から入つて行くと、彼女の方からも急いで迎へに出て來た。

「あら、やつぱりさうだつた。——貴方を待つてゐたのよ。」

彼女は親しげにそんなことをいつて、座敷の方へ導き入れた。そして小野が、夫人に挨拶を濟ませるか濟ませない中に、

「小野さん。もうちやんと飾つてあるのよ。だから早く見にいらつしやい。」

と、勸めてやまなかつた。

「さうですか。ぢやあ兎に角、貴方がたの秘藏のお雛樣から、まづ一見してきませうかな。」

小野も夫人の手前、さうすぐ立つ譯にも行かず、そんな風にいひ譯しながら、内心は喜んで立上つた。

「さあ、ぢやあ此方から行きませう。早くいらつしやい。」

彼女は雛祭の浮々した氣分と、待ちかねてゐた氣持とで、猶も早く見せたがつた。

小野は冬子孃の勸めるまゝに、そこの臺所口から、庭下駄を突つかけて、離室へ行かうと下り立つた。冬子孃はもう先に立つてゐた。そして二人は相前後して、そこから庭を横切らうとしてゐた。

と、臺所口を少し離れると、冬子孃はふと立佇るやうにして、後の小野を顧みた。そして、もう暮れそめた夕闇の中で、仄白く微笑しながら。

「さ、早く行きませう。」と、また促した。そして、小野が近づくのを待つて、ひたと寄り添ふやうに左へ並びながら、庭下駄を僅か爪先へ突つかけてゐるために、やゝもすれば歩き遲れさうになる小野を、援ける積りかどういふ積りか、不意に小野の脊筋の下へ、彼女の右手を廻した。そして半ばは小野を抱へるやうに、半ばは自分の身をもたせかけるやうにして、離室の方へ運んで行つた。小野はまたこの、思ひがけない動作に、鳥渡氣が轉倒するやうな心持を覺えた。そして喜びに胸を轟かせながら、三四間ある庭の空地を、冬子孃と夕闇の中をもたれ合つたまゝ、默つて歩いて行つた。そして一時の發作的行動にもせよ、またたゞ單なる親しみから出る惡戲にもせよ、さうされたことは、彼女の好意を示すものとして、ひそかに胸を躍らさずにはゐられなかつた。

離室の入口が近づくと彼女は手を放して、先にあたふたと驅け込んだ。入つて見ると、もうそこの奥の離の間には、他の妹たちや弟たちが、もうすつかり集まつてゐるところだつた。

雛段は、そこの床の間から掛けて、五六段高く、緋毛氈を以て飾はれてあつた。そしてその上には、一番上の可なり大きな内裏雛を初め、三人も四人も姉妹があるだけに、夥しい雛の數が、五列に陳んで美しく飾られてあつた。

「成程、これや綺麗ですね。御自慢だけあつて、隨分澤山あるぢやありませんか。これはみんなお父さんやお母さんに買つて頂いたんですか。」

小野は先刻の思ひがけぬ幸福に、まだ胸をときめかせながら、美しく竝んだ雛や、蠟燭をつけた小さな雪洞などを夢のやうに見やりながら、無意味にそんなことを訊いた。

「お母さまに買つて頂いたのも澤山ありますけれど、いろんな人から貰つたのよ。今度は貴方も頂戴な。」

冬子孃は甘えるやうにいつた。

「あゝさうでしたね。今日は一つお土産に持つて來るんでしたね。併し、もう今になつて思ひついたんぢやあ駄目ですね。だから來年はきつと上げますよ。」

「さう。ぢやあきつとね。そしたらこんな人形なんて、」と彼女は下段に置いてあつた可愛い博多人形を指した。「何處かへやつて了ふわ。」

「どうしてです。」

小野は冬子孃の、殆ど無邪氣と媚態との、見分けのつかぬ態度に、まだ判斷を下しかねてから訊ねざるを得なかつた。

「どうしてでも。この人形、私嫌ひよ。それだのに叔父さんが、いつの間にかすつかり飾つて下すつて了ふんですもの。ねえ。」

彼女はかういつて、傍にゐる弟妹たちを顧みた。

「私も原田のくれた人形なんか、大ツ嫌ひよ。」

末の悪戯盛りの娘が、さも憎まれつ子めいた口でさういつたので、小野はすぐそれを了解した。原田は前にもいつた通り、前から勝見家へ出入してゐて、一時夫人の信任も非常に厚かつたのだが、あの鎌倉で冬子孃に接近して以來かどうかは知らぬが、近年はすつかり信任を失墜して、夫人からは神經質な邪推深い男として擯斥され、それにつれて令孃たちからも、夫人の考へ方の影響に依つて、全く憎まれる者のやうになつてゐたのだつた。

「おや〳〵。さうですか。それぢや折角原田君も人形を上げた上、そんなことをいはれちや浮ばれませんね。そしていづれ僕の人形も、そんな目に會ふんぢやないですか。そんな風に扱はれると厭だから、僕は上げませんよ。」

小野は冬子孃の言葉を、內心嬉しくは思ひながら、原田が受けてゐる待遇には、何だか同情を禁じ得なかつた。併し、それは勿論、小野の今の優越な地位から、慈悲的にさう考へたので、そのときはたゞ前後もない嬉しさで、充ち滿ちてゐたに違ひなかつた。

「大丈夫よ、貴方のは。——」

「どうですかね。……」

そんなことをいつてゐるところへ、母屋の方から、女中がお祝ひの白酒を飲ませるから、來いといふ夫人の招きだといふ旨を、小野たちのところへ知らして來た。すると冬子孃はすぐ言つた。

「あゝさう。それぢやあ今すぐ、小野さんと一緒に私も行くわ。」

女中は知らせるとその儘先に歸つて行つた。

「さあ、それぢやあ彼方へ行きませう。」

冬子孃はまた小野を促した。

「えゝ參りませう。」

小野もすぐ應じた。そしてまた母屋まで歸る間、前のやうな狀態になりはしまいかといふ希望が、彼の胸に轟いて湧き上つた。

二人はまた相連れだつて、離室の口を出た。と、今度は、後になつて下駄を穿いた冬子孃を、小野は鳥渡待つやうにして立佇つた。そして立佇りながら、彼は彼女が前のときのやうに、自分に寄り添ふかどうかを、心待ちに待つた。今度又寄り添つて來れば、彼女は必ず自分に好意をもつてくれてるに違ひない。そんなことが咄嗟に頭の中で考へられた。

すると彼女は、又急いで小野に追ひつくと、果してもう一度先刻と同じやうに、彼の背に手を廻した。そして又擁へるやうにして、押しやるやうに道を急がうとした。たゞ違ふところは、今度は何もいはなかつた。

小野は、再び、今度はまた豫期してゐながら、豫期の通りなのに驚き、かつ胸を轟かせた。そして今度は彼も、思ひ切つて片手で、その小野に巻きつけた手首をとつて、その儘引張るやうにしながら、夢心地で先へ駈け出すやうにした。そして臺所口が近づくと、二人は又すぐその手を放した。

それから奥の間で、彼は又冬子孃のお酌で、祝ひの白酒を一二杯と更に清酒を一二合飲ませられたが、何だか味も何も分らなかつた。……

そんなことが在つたので、機さへあればすぐにも、小野は夫人に打明けて、結婚の許しを乞はうといふ決心は、彼の念頭を離れなかつた。

そしてその機を、今か〳〵と待つてゐた。が、さすがに幾ら厚顏の小野でも、強ひてその機會を作つて、いひ出さうと目論む勇氣はなかつた。たゞ彼は、何か夫人の方から、さういふキッカケを、與へられるときを、只管待つより外はなかつた。

併し、たうとうその機會が來た。それは三月末の、或る、小野が勝見家へ宿直に當つた晩のことだつた。

その夜、夫人もどうした加減か、非常に感傷的になつてゐた。二人は毎もの通り、先生の寫眞の安置してある、書齋の奥の机の前で、四方山の話を交しながら、夜の更けるのを知らなかつた。

すると何かの話から、夫人はだん〳〵こんなことをいひ出した。

「……小野さん。貴方は確か御次男だつたわねえ？」

「えゝ、さうです。兄貴が一人をります。」

小野は夫人が、どういふ積りでそんなことを訊ね出したのか、分らぬながらに答へてゐた。

「さう？　ぢや御自由な身分だわね。家の方に何にもしなくたつていゝんでせう。」

「えゝ、まアいゝんです。ひよつとすると、お母位養はなくちやならないかも知れませんが、それも北海道の兄貴の處にゐてくれれば、それでいゝのです。だから自由です。それで一つはこんな文學なんて、危險な仕事を初めたんです。」

「さうですか。そんならまあその自由な身を利用して、一生懸命やつてみるんだわねえ。なあに貴方がたは、勉強次第で物になるんだから、その積りで一生懸命なさいよ。若しお困りのやうなことがあつたら、私だつて及ばずながら、貴方一人位何とか補助して上げますよ。」

夫人は平常から、さういふ義侠的な、姐御といつた風な氣質があつた。だから前にも、度々そんな風な言葉は、小野も聞いたけれど、その夜は殊にさうした、小野に目をかけてくれるやうな、愛護の感情に充ちてゐた。

「さうですか。それは頗る有難うございます。僕も奥さんにさうまで仰有つて頂くと、ほんとにそのお禮の心からだけでも、一生懸命

勉強したいと思つてゐます。なあに奥さんにさうした物質的の御心配をかけなくとも、どうやらかうやら食つて行くだけは、原稿で食つて行けるだらうと思ひますから。……」

「でも、そんなことをしてゐちやあ、十分勉強ができないでせう。だから今の中は、成るべく書くのをよして、みつしり勉強した方がようござんすよ。早くから原稿を書いて、佐々木さんのやうに早く書けなくなると困りますからね。先生も小說を書き始めたのは、四十近くなつてからですよ。貴方なんぞはまだ若いんだから、今の中に勉強して置かないと駄目ですよ。ほんとに少し位のお金なら、私が出して上げてもようござんすから、さうなさい。そしてほんとに偉くなつて頂戴。私、お弟子さんの中でも、貴方に一番……何ていふの……、あの目をかけてゐるんですからね。」

「そのお心は僕にもよく分つて居ります。だから僕も、奥さんのためなら、どんなお役にでも立つて上げたい位に、平常から思つてゐるんです。」

小野は決して空世辭ではなく、この恩師の夫人であり、又愛する人の母である人には、全く「水火をも辭さない」といふ位の、一種の信愛をもつてゐるのだつた。それに今夜は殊に夫人からさういふ愛護の言葉を聞かされて、彼の心はもうたゞ一種の感佩の念に充ちてゐた。

「ほんとに、貴方だけはどんなことがあつても、私の味方になつて頂戴。そしてどうか親身のやうになつて、新太郎や淳二の面倒を見て下さい。私そのことを考へると、ほんとに心細いのよ。私がかうして、ちやんとしてゐる中は、まアいゝでせうけれど、その中に種々なことが起つて來るでせうからねえ。せめて冬子が男ででもあつてくれるとよかつたんだけれど。あれも音樂學校へ入れればようござんすけれど、さうでないともうそろ〳〵、お嫁にやらなくちやならない年頃ですしねえ。……」

冬子嬢の話が出たので、小野は鳥渡唾を飲むやうにした。そして夫人が、そこで言葉を切つて、前に置いた火鉢の中を見凝めてゐるのを見たとき、彼はその機に乘じて、何かいひ出したい衝動に、全身を思はず硬ばらせた。

「冬子さんは、音樂學校へ入れないと、直ぐお嫁におやりになるお積りなんですか。」

「さうでもありませんけれど、いゝ處がありましたらねえ。まあ成るべくならば私も、あの子だけは家へ置いて、新太郎や淳二が大きくなるまで、世話をして貰はうとも思つてゐるんですがねえ」

さう夫人にいはれると、小野は恰も誘ひの手をかけられてもう堪へかねたやうに、思はず顫へ聲でいひ出した。

「若し冬子さんを非常にいゝ家へやるんでなく、普通の人のお嫁にやるやうなら、私に下さる譯には行きませんでせうか。」と、小野は一旦言葉を切つて、下を向いて續けた。「今、こゝでこんなことを申上げては、非常に失禮だとは思ひますけれど、さう願へたらどんなに幸福だらうと、僕はかね〴〵思つてゐたのです。それが許して頂ければ、どんなことをしてでも、僕は決して他の人に劣らず、冬子さんを幸福にして上げられると信じてゐるんです。だから、外の普通の人にやるんでしたら、どうぞ私にください。……」

小野の眼からは、たゞ一種の感情的な涙が、火鉢の中に零れ落ちた。

夫人は暫く默つて、小野の顏を見ずに、下を向いてゐたが、やうやくにして、やはり顏を上げずに、靜かな聲でいひ出した。

「さうですか。貴方も、そんなことを思つてゐらしたのですか。そんなにまで思つておいでだ

とは、私、少しも知りませんでした。」
「奥さんも、さぞ厚顔しい奴だとお思ひでせうけれど、私としてはいつか奥さんに、この心持をお打明けして、お願ひを乞ふより外はないと前から思つてゐたのです。」
「貴方まさか冬子には、そんな話はなさらないでせうね。」
　夫人は母としての威嚴を以て、まづそんな反問を發した。それで小野は夫人が少し憤つたのかと思つて、慌てたやうに辯解しなければならなかつた。
「えゝ、致しません。奥さんに初めてお打明申上げたきりです。そして奥さんが、私の願ひをお許し下さらなければ、それで私は何もその上言はずに、たゞ、今まで通り、お交際を許して頂ければそれでいゝのです。併しどうでせう、到底私のお願ひをお許したすつて下さる譯には參りませんでせうか。——御拒絶下すつても、私は決してお恨みなんぞ致しません。關ひませんからどうぞ奥さんのお心持を、はつきり仰有つて下さい。どうでせう。絶望でございませうか。」
「いゝえ。」夫人は靜に首を振つていつた。「私の考へとしましても、貴方がさうまで思つてゐて下さるなら、冬子も他へ行くより幸福だと存じますわ。そして前に申上げたやうに、家のいろいろなお世話をして頂くとすれば、貴方と冬子とが一緒になつて下さる方が、どんなに好都合だか知れませんわ。——私の考へはさうですけれど、併しかういふことといふものは、さう無造作に、決める譯にも參りませんからね。まづ何より第一に、當人の心持も聞いて見なければなりませんしね。その他いろ／＼な事情をよく考へた上でないと、何とも申上げられませんわ。」
「それはさうです。ですから奥さんのそのお心持を、伺つただけで私は滿足です。有難うございました。ではどうぞよくお考への上、冬子さんのお心持も、奥さんからよく伺つた上で、幸福な御返事が頂ければ、私は何より嬉しうございます。どうぞ何分とも、無躾なことを申上げたのはお許し下すつて、よろしくお願ひ致します。」
　小野は改めて丁寧に頭を下げた。
「さうですね。ではこのことは兎も角も、私と貴方と二人だけの内輪の話にして置いて、よく冬子にも話した上、いづれ、成るべく早く御返事しますわ。たゞ冬子が、何といひますかねえ。——」
「私もそれが心配なんです。」
「けれど冬子も、貴方が嫌ひではないらしいから、大丈夫かも知れませんよ。」
「さうだといゝんですけれど。……」
「私もよく話してはみますが、若しあの子が不服をいつたら、貴方にも諦めて頂かなければなりませんよ。私もよく勸めて見ますから、大概いゝ方だらうと思ひますけれどね。——貴方もまア氣永に待つ氣で私から返事をする迄、默つて待つていらつしやい。その中にはきつといい返事が差上げられると思ひますよ。兎に角、私は贊成なんですからね。——まア今夜は晩いから、さう思つてお寢みなさい。」
「有難うございます。……」
　小野は何よりまづこの夫人が、思ひの外に早く贊成してくれたのを心から感謝しなければならなかつた。
　夜が更けて、硝子戸の外の闇は何の音もなかつた。たゞとき／＼裏の方で夜鳥の啼く聲がした。
　夫人が去つた後、小野も床に就いたが、さすがになか／＼眠りには入らなかつた。襖一つ隔てて隣室では、此方の夫人と小野との談話を

も、少しも知らないで寢入つてゐるらしい、四人の令孃たちの寢息がかすかに／＼洩れて聞えてゐた。小野はそれを聞き入りながら、その中には冬子孃のも交つてゐるのを思ひ、何とはなしに幸福な温かい思ひに包まれつゝ、眠りに入らうと努めてゐた。

四

磬子夫人に、小野が冬子孃に對する求婚の心を、打明けた翌日は、更に輝かしい春の初めの、晴れた日曜日だつた。

小野は昨夜興奮で、よく寢就かれなかつたために、其朝は殊に毎もより少しく遲く、勝見家の書齋の寢床で眼を覺ました。そしてそれを悔いるやうに、慌てて床から飛び起きた。樺色の窓帷を開けて見ると、故先生の所謂「硝子戸の中」まで、午前の仄赤い日ざしが、うつとりと流れ入つた。彼は直ぐ昨夜の事を考へて、そして妙な暖かい幸福感と、頬の底に血が集つて來るやうな羞恥と、それから胸がときめく不安の念を覺えない譯には行かなかつた。

彼は毎ものやうに其儘起きて、直ぐ夫人や令孃たちに顔を合せる事が、非常に恥しく怖かつた。殊に夫人に對しては、此方の心をすつかり打明けて終つた後の、親しみを感ずれば感ずるだけ、何となく面映ゆい心持がした。が、起きた以上、どうせ顔を合せなければならないのは決つてゐた。そしてもう十分朝寢をし過ぎた以上、恥しいからと云つて、其上何時迄床の中に居る事は、猶更出來ない事であつた。――小野は思ひ切つて床を蹴立てるやうに離れた。そして手早く衣服を着換へると、家族の人たちの居る茶の間の方へ出て行つた。

茶の間には、切爐の傍に、果して夫人と令兄の長三氏とが、新聞などを讀んでゐた。當の冬子孃たちの居ないのが、せめてもの心安さだつた。

小野は其處へ行つて、さりげなく無造作に近寄り、鳥渡手を突くやうにしながら、先づ簡單に、

「お早うございます。」

と、挨拶するきりなかつた。何だか鳥渡夫人の顔を、眞面に見られないやうな氣持だつた。

「お早う。」夫人もすぐにさう應じて呉れたが、夫人の方では別に昨夜の事に、こだはつてゐる模樣もなく、遠慮なしに此方を見上げて、微笑と共に言ひ足した。「相變らず遲いのね。――子供たちなんぞもうみんな、何處かへ遊びに出かけて終ひましたよ。新太郎と淳一は、もう代々木へ馬乘りに行きましたし、娘たちもみんな矢來へ遊びに行きましたよ。」

「もうそんなに遲いのですか。」

小野は少し顔を赧くし、頭を掻くやうにして言つた。何だか今朝の遲起きは、昨夜のやうな話のあつた後で、一生の不覺のやうに悔いられた。夫人からさう言はれると、娘の婿たる資格のない「だらしなさ」を、暗に責められてるやうな氣さへした。が、寢つかれなくて、そのため明方になつて寢たため、つい起き忘れたなぞと、辯解めいた事を云ふのは、猶更昨夜の話の後で、わざとらしくて出來ない事であつた。

「もう十時よ。でも、貴方がたとしては早い方でせうね。」

夫人は猶も窘めるやうに、併しながら親愛の微笑を以て、さう云つた。それは口では責めてゐるが、心では許してゐるのだし、親しいからそんな風に言ふのだと云ふ事を、露はに示した態度だつた。

「どうも濟みません。」

小野は頭を掻いて、そんな風に單純に、笑ひながら謝まる事に依つて、それに酬いる外なかつた。又さう云ふ愛嬌のある、子供らしい簡單な

陳謝は、小野が持ち前の防禦法でもあつた。

「いゝお天氣ですね。もうすつかり春になつて。」

其場を取做すやうに、長三氏が傍から云つた。長三氏の白いちよぼ〳〵の上髭が、如何にも好人物の老人であるやうに、そこの明るい障子の反で、鮮かに光つた。戸外は庭の椿葉や植込に、ふら〳〵と著しく紅みを帶びて來た日が、煙るやうに照つてゐた。

「ほんとにいゝ天氣ですね。」

小野も心からさう答へた。何だか恥しいながらに、夫人に打明けて了つた後の心は、何となく祝福されたやうな、幸福感に滿たされてゐる事も拒み得なかつた。

「之からは貴方がたの時候ですね。今日は何處かへお出かけになりますか。」

そんな事も長三氏は言つてゐた。

「いえ、先生の本の校正が、少し溜つてゐますから お留守居がてら今日は此方で、それを片付けようと思つてゐます。丁度お孃さん方が居ないから、あの離室の方で。……」

其頃小野は、先生の「鳥籠」の縮刷本が出るので、其校正を進んで引受けてゐた。それでそれを理由として、もつと勝見家に居たいと思つたのだつた。いつも、每日の夕方から夜までゐて、歸るのが常ではあつたが、今日は何だかそんな理由にならぬ小さな理由でも、ずつとゐる申譯にしたい氣持だつた。

其處へ女中が顏を洗ふ湯を取つて呉れる由を通じて來たので、小野は顏を洗ひ、さうして飯を食つた。其間夫人は、何にも昨夜の話には觸れなかつたが、そして殆ど忘れたやうに、その問題に關心つてゐる樣子もなかつたが、小野は夫人の前に居る事が、何となく氣づまりでならなかつた。その肥つた身體に、縋りついて搖ぶつて見たい程、親愛さを增してゐるにも拘らず、矢つ張り何となく生恥しくてならなかつた。

で、機會を見て彼は、校正刷を見るために、一人で離室の方へ行つた。

其處の一間は、前にも言つた通り、令孃たちの勉強部屋になつてゐた。其處には麗々した一閑張りの机が、二つほど無造作に並べられてあつて、床の間には小さい書架と、切り硝子の一輪插しなどが、簡單に飾られてあるだけだつたが、小野に取つては何處よりも安易な、懷しい部屋に違ひなかつた。彼は今迄もよく、宿直の度に、令孃たちが學校へ行つた留守に、此處へ入り込んでは、校正をしたり本を讀んだりした。そして机の上に置き捨てられた、誰のとも知れないが、硝子の球の中に萬華鏡の如く、色々な結晶形の花模樣を沈澱させた文鎭を、珍らしげに眺め入つたりした。

黑い緣に區切られた、僅かばかりの前庭にも、彼女たちの植ゑた草花の芽が、花壇の上から靑く日に透いてゐた。

其處で彼に自分の手を置いた後が燻るやうな、一閑張りの机に身を凭せかけたまゝ、熱心に校正をすると共に、うつとりと空想に耽る事が多かつた。

殊に今日は、胸の底がときめくやうに覺えて、赤インキに濡した筆を忘れる事が多かつた。うつとりした空想と、夢のやうな幸福感に、全身を任してゐる方が多かつた。女中が何時ものやうに紅茶やカステラの類ひを、母屋から運んで來て呉れた。彼はその紅茶の、冷たくなつた殘りをも、沁々と嬉しい思ひに包まれて啜つた

お午少し前の事だつた。

小野がさうしてゐると、離室の入り口の方で、ことりと云ふ音がして、人が入つて來る氣配がした。小野は空想から覺めて、多分女中か誰かが、茶器でも下げに來たのだらうと、氣にも止めずに振り返つて見た。と、思ひがけなくも其

其處に、冬子孃が何時の間にか歸つたと見えて、平常着のまゝの姿を現はした。
「あら、此方にいらしたのね。」
かう言つて、彼女は座敷の閾の處で、一寸立停るやうにしたが、小野を見て、別に驚いたのではなかつた。彼女は小野が此方に居る事を、前から知つてゐるに違ひなかつた。
驚いたのは、小野の方だつた。
「あ、もうお歸りになつたんですか。」
小野は胸をどきつかせて、鳥渡居ずまひを正しながら、さう言つて迎へた。
「えゝ、私お母さまの御用で、鳥渡淺嘉町へ行つたのよ。だから、直ぐ歸つて來たの。——もう御仕事出來て？」
かう言つて、彼女は殆ど躊躇なく、小野の机の横に、火鉢一つ隔てて、座を占めた。外出から歸つたばかりと見えて、毎もより綺麗にお化粧をしてはゐたが、歩いて來た餘溫のために、いつもはさう冴えない顏色も、ぽつと生々した血の色を底に帶びて、額のあたりは仄かに汗ばんでゐるらしかつた。
「いえ。まだ三臺分位しかやつて居ません。隨分寢坊しちまつて、一時間ばかり前から始めたばかりなんですもの。」
「さう？　おやあまだ澤山あるの。」
冬子孃は、小野の机の端に、置かれた紙の重なりを覘ふやうにした。
「さうですね。此頃怠けちやつて、彼是十臺ばかり溜めたもんですから。……」
「おやあ、私が來ちやあ御邪魔だわね。」
冬子孃はかう言つて、小野の眼を見返した。
「いえ。」小野は少し慌てて、打消さざるを得なかつた。彼に取つては、今日今此處で冬子孃と、二人つきりで話しうる事は、——前からこんな機會は頻繁には在つたが、今日は特に願つてもない好機だつた。「そんな事はありません。僕ももういゝ加減飽きてゐたところです。さう一氣には、迚も出來ませんからね。どうかもう少し居て、話して行つて下さい。丁度いゝんですから。……」
「さう？　おやあ遊んで行くわ。」
されぱと云つて、二人の間には、直ぐ取り上げるべき話題もなかつた。が、小野に取つては、冬子孃に何か言ひたいやうな、打明けたいやうな心持で一ぱいだつた。彼は庭の方を向いて、いろ〳〵と話の緒口を引き出さうと考へた。が、どんな事を言つていゝか、解らなかつた。天氣の事なぞを言ひ出すのも、餘りと云へば月並だつた。
「お母さまは向うで、どうしていらつしやいます。」
先づそんな事を小野は言つてみた。
「何か、お裁縫みたいなものを、開げていらしたやうよ、珍らしく。……」
彼女も、見るともなく庭の方を眺め、そこの黑塀を透して、前の横町を通る午の豆腐屋の喇叭に、聞き入るともなく聞き入つてゐる樣子だつたが、此方を向いて微笑した。
「さうですか。」彼はそこから二の句が繼げなかつた。「それは珍らしいですね。」
二人は又暫く默つてゐた。
「定子さんたちはなか〳〵歸つて來ませんね。」
小野は又そんな問を發して見る外なかつた。
「えゝ。きつとお晝には、歸つて來ないのよ。智イちやんたちと一緒に、文明館の活動でも見てるんだわ、きつと。——」
「どうして貴女は一緒に行かなかつたんです。」
「私？　だつて、つまらないんですもの。私、活動を見てゐると、面白いけれど、頭腦が痛くなつて來るのよ。だから、さう行かないの。それよか、私芝居が一度見たいわ。卒業したら、お母樣が連れてつて下さるつて云ふけれど、ま

だ、私たちバンドマンのオペラつきり、外のものはお父樣がいけないつて、見せて下さらなかつたのよ。」

「芝居なんて、そんなに面白いものぢやありませんよ。けれども、少しは見て知つて置くのも、惡くはないでせう。學校を卒業なすつたら、何處かへ僕が御案內しても、いゝです。」

小野は彼の文學上の專門が、幾らか演劇に亙つてゐただけに、却て謙遜しながら、勿體らしくそんな風に答へてゐた。そして、その後に直ぐ、

「もう直ぐ卒業ですね。」

と、詠嘆するやうに付け加へるのを忘れなかつた。

「えゝ。やつと卒業だけはしさうですわ。けれども其後、私、困つてゐるのよ。」

「どうしてです。」

「私、音樂學校の入學試驗を受けるなんて、何だか厭なのよ。入れさうもありませんし、入つたつて、うまく行きさうもないんですもの。黑田さんの奧さまに伺つたんですけれど、今年は音樂學校の先生の御孃さんで、大變ピアノがお上手で有名な方も入學するんですつて。さう云ふお上手な方と、同級に入る事になると、たとひ競爭するなんて積りはなくても、何かにつけていろんな辛い事があるんですつて、あの大人しい奧さんまで、さう言つていらしたわ。だから私、尚更厭になつたのよ。」

「そんな事はありませんよ。そんな風に、詰らない考へを起さないで、まアやれる處までやつて見るんですね。」

小野はそんな風に、先づ勸める外仕方なかつた。

「私、何だか音樂學校、なんぞ入るより、家に居て何かお稽古でもしてゐた方が、よつぽどいいやうな氣がするのよ。」

「それはさうかも知れませんね。」何かにつけて、小野は人の云ふ事に、さう強く反對などは出來ない性分だつた。殊に自分の戀する人の言ひ分などには。——で、彼は其意を迎へるやうに云ふのだつた。「お母さまなぞも、貴女が音樂學校へ入らなかつたら、家にゐて家事の手傳ひでもして貰ふと云ふやうなお話でしたよ。……」

かう言ひながら彼は、本人の冬子孃に向つては、內密にそんな事を決して言ふまいと思つてゐたに拘らず、何だか自分の求婚の心を、言ひたくて堪らない衝動に囚はれて來た。夫人にあゝ言つて了つた以上、たゞ十歩百歩だとは云ふ氣もしたが、夫人にも本人には直接、そんな事を言はないと宣言めいた事を言つて了つたから、今更こゝで冬子孃にさう云ふ事を打明けるには、夫人に嘘を吐いて先廻りをする事にもなる、と、躊躇されないではなかつた。

「私も其方がいゝわ。貴方はどうお思ひになつて。」

「さあ。……——僕は音樂學校へお入りになつて、藝術を以てお立ちになるのも、前から云つてゐるやうに贊成ですが、又、貴女が極く普通の家庭の婦人として、一生を過すのも却て幸福かとも思ひますよ。」

彼のその言葉の中には、明かに底意が含まれてゐた。彼は彼女の爲よりも殆ど自分の爲に、後の事を贊成してゐるのだつた。

「さうですわねえ。」

冬子孃は考へ込むやうな樣子を示してゐた。

其處迄來ると、小野はもう昨夜の事を、彼女に打明けたい衝動に、もう勝つ事は出來なかつた。この機會に、こゝ迄話が進んだ時、あの事を言ひ出さなければ、もう言ひ出す機會もないやうに思はれた。彼は半ば自分の動悸に、醉つたやうな心持で言ひ出した。

「冬子さん。」かう呼びかけて彼は[illegible]

み込んだ。「貴女にまだ奥さんから、何もお聞きになりはしませんか。」

「えゝ、まだ何にも。」

冬子嬢は小野の語調が、少し變つたのに驚いたか、鳥渡顔を上げて此方を見返した。

其視線を避けるやうにして、小野は熱して言ひ續けた。

「昨夜奥さんに、貴女の事についてお願ひしたんですがね――」

「さう？」彼女にはまだ事情はよく了解しないながらに、重大な問題らしい豫感は感じたと見えて、息を引緊めるやうに、頤を襟の中へ引くやうにして、鳥渡上目使ひに、反問の視線をちらと小野に投げた。そして二人とも其視線を外らした。

小野は下を向いて言ひ續けた。

「實は僕のやうな者でも頂けるんだつたら、貴女を細君に頂きたいつて、さう申上げたんです。僕は長い間、さう思つてゐたので、昨夜たうとう思ひ切つて、奥さんにお願ひ申上げたんです。……そしたら奥さんも、貴女さへ異存がなければ、まア自分としては賛成だつて、幾らか承諾して下さいました。……だから、いづれ奥さんから、貴女にそのお話があるだらうと思ひます。――」

ちらと窺ひ見ると、冬子嬢の横顔は、所々斑な褪紅色に染つて、俯向けられてゐた。彼女の方には何の答もなかつた。

「こんな事を言ふのは、甚だ厚顔だとは思ひますが、僕にどうか聞かして下さい。」小野はそれに關りなく續けた。「もし、奥さんが、もう御伺つたら、貴女はどう答へて下さいます……」

小野は思ひ切つて、顔を上げて彼女の横顔をぢつと覗つた。が、彼女は胸の動悸と、喘む呼吸をぢつと抑へるやうに、更に首を垂れたまゝ、何とも言はなかつた。彼女の眼は、黒塗りの一閑張りの机の一點を、見開いたまゝ見凝めてゐた。

「……お厭ですか。」

小野はもう一歩進んで、更にぢつと覗き込んだ。

が、彼女は節制の努力のためか、前髪を少し顫はせながら、口では勿論、樣子でも示さなかつた。たゞ黙つて、仄かに血を漲らせた片頬を、寧ろ頑固さうに動かさなかつた。が、其樣子は如何にも厭だと云ふ意志を表示する、積極的な態度も見えなかつた。

「……では、お厭ではないんですね。」

小野は更にさう突つ込んで訊ねた。

彼女は項垂れてゐた首を、更に低く俯向けたが、それを肯定と取るべくに、餘りに微かな表現だつた。そして前よりも少し首を垂れたまゝ、彼女は更に頑强に動かなかつた。たゞいづれにもせよ感情が迫つたためか、涙が湧き出て來たらしく、頻に目をしばたゝいてゐた。

かうして、暫くの間、二人は黙つてゐた。

たうとうやがて、小野の方が又取做すやうに言ひ出した。

「僕はもう長い間、その事に就て考へぬいて、たうとうかう言ひ出したんですから、貴女が若しお厭でなかつたら、私の願ひを聞いて下されば、どんなに幸福か解らないと思つてゐます。併し、此處でこんな事を云つたつて、貴女に取つても一生の問題なんですし、又私の方だけが一生懸命思つてゐても、貴女の方にお考へもあるでせうから、若しお母樣がお聞きになつたら、それ迄によく考へて置いて、どちらとも貴女の思ふやうに、正直に御返事なすつて下さい。決して僕は貴女に、强請するんぢやないんですし、又その爲私がどうかうと云ふやうな御心配は、して下さらなくてもいゝんですから、どうぞよくお考へになつた上、御返事をなさる

やうにして下さい。たゞ僕としては飽く迄、貴女に出來るだけの事をする積りですから、其心だけは酌んで下すつて、若し御嫌でさへないなら、御承諾下すつたら、非常に幸福だと思ひます。……」

此時やうやく冬子孃は、かすかながら肯いた。

「それから又、今申上げた事は、お母さまにはどうぞ仰有らないで、貴女一人の胸に收めて置いて下さい。僕は貴女に直接、こんな事を申上げる積りぢやなかつたんですが、此場の都合で、つい言はずに居られなかつたんですから。……」

今度は彼女は更にはつきりした態度で肯いた。小野は兎も角も、冬子孃の態度が、全然否定的に傾いてゐないのを、辛うじてそれらに依つて、確め得たやうに思ふ外なかつた。そして其點頭を見ると、小野は安心と共に、改めてかう言つた。

「……ほんとに失禮しました。」

「いゝえ。——」

彼女はやつと聞える位の聲で、まだ此方は向き得ずに、さう言つた。それも小野には一縷の望みだつた。

かうして二人は又、暫く言葉なしで、又項垂れてゐた。小野は硯用の朱筆を、無意味に指頭で弄んでゐた。

と、暫くして突然、冬子孃が言ひ出した。

「あの、私。……御免なさい。」

かう言ふと共に、つと彼女は立上つて、そして逃げるやうに部屋を出て行つた。が、その態度には、毫も嫌惡から來たらしい樣子は見えなかつた。

小野は其後を見送つたまゝ、ぢつと暫く物思ひに沈んでゐたが、微笑が自ら彼の頰に上つて來るのを、禁ずる事が出來なかつた。

……其晝飯に呼ばれて母屋へ行つた時、小野は冬子孃と一緒に、食卓へ就かねばならなかつた。冬子孃は少しも小野の方を見なかつた。そして小野が殆ど食ひ始めるか始めない位に、食事を濟ませるやうにして卓を立つた。彼女は殆ど一杯も飯を食はない樣子だつた。

小野は微かな苦笑を以て、それをひそかに見送つた。

兎もあれ、冬子孃が自分に對して、さう惡感を抱いて居ないだけは、小野も朧ろげながら解つた。併しそれは、殆ど今迄の豫期以上に、何も加ふる所がない事だつた。

此上はたゞ伯夫人からの正式の答を、小野は只管苦いやうに待る外なかつた。……

春

雛も苞にして便船す南風

弟を征服しつ雛の女王

小箪笥に雛ぽちとある叔母訪へり

町は名古屋城見通しに雛賣りに

雛の日の洗濯や母を淋しうす

須磨の白砂跡つけて雛の落ちゆくや

（『牧唄句抄』春の部より）

破船（後篇）

第九章

一

小野は螢子夫人からの答を、待ち焦れてゐた。が、それから四五日經つても、夫人からは返事はなかつた。勿論その間にも、二三度顏を合せたが、そのことについては、夫人の方からも、一言も話はなかつた。けれども小野の方から、さう性急に催促することもできなかつた。彼としては、螢子夫人がすぐにも、冬子孃の意志を訊ねてくれて、いづれとも一兩日のうちには、何とか返事があるやうに、一人で期待してゐたのであるが、それはもとより無理な話だつた。夫人の方では冬子孃にいひだすにしても、適當な時機を窺つてゐるに違ひないし、又結婚に連れて起る色々な問題を、熟慮してゐるに違ひなかつた。又冬子孃とても、輕率に決すべき問題でないのは知れきつてゐた。

たゞ併し、さうは思つても、小野にとつてはその期間が、長くかゝつた安な思ひに滿たされない譯にゆかなかつた。彼は焦慮してゐた。が、悲觀はしなかつた。夫人は自分の味方である以上、悪くいつても五分位の望みは囑してゐて差支ないといふ、一種の自信を持つてゐたからだつた。そして七八分までは冬子孃が、承諾するに違ひないといふ、自惚さへ持つてゐたからだつた。

併し、それから一週間ばかり經つた或日のことだつた。螢子夫人から突然、小野の下宿へ電話がかゝつてきた。

藤見家からの電話だといふので、飛び立つて出てみると、向うの電話口へは夫人がもう直接に出てゐた。

「あゝもし／＼、小野さんですか。私、螢子ですよ。」

夫人の低いが、はつきりした響のある中音を聞くと、小野はすぐ用件を理解して、胸の動悸を高めた。

「あのね。」向うの電話は響いた。「今日是から少しお話があつて、貴方の所へ行かうと思ふんですけれどね。今、誰方か來てゐますか。」

「いゝえ、誰も居りません。」

小野は畏まつて答へた。

「誰も來ないでせうね、誰か來てゐる所へ、私が出かけて行つたりすると、何だか不思議に思はれるでせうし、困りますからね。誰も來ないでせうね」

「えゝ、來りやしません。ひよつとしたら杉浦が來る位なものです。今夜は帝劇のローヤル館で、日小路氏の音樂一家といふ芝居がありますんで、それを二人で見に行く約束がしてあるもんですからね。但し、それ迄には隨分間がありますから、今いらして下されば、誰も來ないと思ひます。來ても斷つて了ひますから……」

「さうですか。杉浦さんなら、いらしつたつてもかまひませんよ。どうせあの人へは貴方からもお話するでせうし、氣心も知れてゐますからね。で、その芝居は何時からなの。」

「確か六時からだと思ひました。」

「さう？ それぢやまだ十分間がありますわね。ぢやあ私、是から貴方の所へ行つてお話が濟んだら、そしたら一緒に行つてもようございますから、室に待つてゐて下さい。すぐ行きますか

けれど、結婚といふやうな問題は、まるで考へたことが無かつたから少し考へさせてくれつていふのよ。尤もだと思つたから、私も返事の猶豫を與へてやつたんです。するとね、昨日まで何とも返事がないんでせう。餘り長びくと、貴方の方でも待つていらつしやるからと思つて、私、昨日又催促的に訊いてみたのよ。」

「はア。」小野は、「そしたら、何と仰有いました。」と口ではいへずにたゞから受けるばかりだつた。

「すると冬子のいふにはね。彼女も決して貴方を嫌ひぢやないし、寧ろい〻人だとは思つてゐるけれど……何だかまだ、是非結婚しなければならないと思ふ程は、貴方に……何ていふんでせう、つまり……深い愛を感じないといふんだわね。つまりお友達のやうな積りで、今までゐたといふんだわね。で、結婚するとなると、いろいろ又違ふ目で以て、貴方を見なければならないし、色々もつと考へなければならない問題もあるから、是からはさういふ積りで以て、貴方とお交際してみて、愈々結婚してもい〻と思つたら、そのとき改めて御返事することにしたいつていふのよ。——これは勿論、冬子の言葉其儘でもありませんし、又私の考へも交つてゐますけれど、大體まア彼女の意嚮もそんな風なのよ。だから貴方も、これからそんな風に試驗されるのは厭でせうけれど、もう少し時機のくるのを待つて下さい。私も冬子に貴方のことはよくいつてやりましたし、又是からもよく勸める積りですから、そのうちにはきつと貴方のお望み通りになりますよ。もと〳〵貴方を、決して嫌ひではないといふんですからね。たゞ二つ返事で承知するほどでなかつたといふんですからね。」

夫人は幾らか慰撫するやうに、又愛護に滿ちた口調でいつてくれた。

「さうですか。いや、色々と御心配をかけて、ほんとに有難うございました。それだけでも、僕としては嬉しい御返事です。私も今すぐに、承諾して頂かうなどとは、餘り蟲がよ過ぎる希望だと思つてゐました。——が、併し、それなら冬子さんは、外に結婚などといふ問題は、誰とも考へてゐなかつたんでせうか。それとも誰か他の人と、さういふやうなことを考へてゐたんぢやないでせうか」

小野はやつと元氣を回復して、そんなことを訊き返す氣になつた。

「それは、そんなことはないやうですよ。私もその點は、よく訊ひ糺してみましたけれど、あれば杉浦さんに對してですけれどね。杉浦さんに對しても、貴方に對する以上の氣持は、別に持つてゐないさうですよ。で、結婚といふ所まで考へはしないにしても、貴方にはまア一番好意は持つてゐたらしいんです。ですから、その點にはまア御安心なさい。」

「さうですか。それならまア幸福ですけれど。……」

「ですから、貴方も兎に角自重して、餘計なことをしないで待つておいでなさい。冬子が、それでもまだ結婚する氣になれなかつたら、そのときは仕方がありませんが、まだ決して、貴方に惡い方へは向いてゐないんですからね。まア焦らないで、時機のくるのを待つておいでなさい。」

「そんなら今まで通りに、冬子さんとも親しくお交際して、別に差支はないんですか、奧さんも冬子さんも、それを許して下さるんですか。」

小野は少しく希望に輝きながらいつた。

「えゝ、ようござんすとも。間違つたことさへして下さらなければね。それを寧ろ望んでゐるんですよ。だから遠慮しないで、今まで通り遊びにいらつしやい。」

「有難うございます。何だかきまりが惡いけれ

ど。……」

「さういへば今夜は、貴方の泊り番でせう。そんなこと平氣でいらつしやいな。惡びれたりすると、却て冬子の方だつて氣持が惡うござんすからね。」

「えゝ、今夜は晩く、ローヤル館の芝居が濟んでから參る積りでしたが。……」

「あゝさう〱。その芝居へは私も御一緒に行くんでしたわね。丁度暇ですから、連れて行つて下さいな。誰でも入れるんでせう。」

夫人は先刻電話でもさういつたが、又改めてそんなことをいつた。夫人は一つには、良人を失つた後の寂寥を、何かにつけて慰めようとしてゐるのだつたが、又若い書生を伴に連れて、さういふ場所へ行くことも、もと〱嫌ひではないらしかつた。そして今日は殊に小野と行動を共にして慰愛の念を示してくれる心になつてゐたらしく、進んで同行を求めたものに違いなかつた。

「えゝ、入れますとも。僕たちの森本といふ友人が、今度其處でやる芝居の監督をしてゐますんでね。一つは義理で見るんですけれど、出し物も鳥渡ようござんすからね。奥さんがおいでになるなら、喜んでお伴致しませう。そのうちには杉浦も來る約束になつてゐますから、來たら御一緒に出かけませう。」

「杉浦さんには、いづれ貴方からお話しなくちやならないでせうが、今の話はなるべく秘密にした方がようござんすよ。」

「えゝ、畏りました。僕は勿論ほんとの親友以外には、誰にもいひません。」

「……東小路さんの芝居つて面白いの。」

夫人はそんなことから、やうやく話頭を用件から轉じた。

かうしてその後は、普通の雜談を三つ四つ交してゐるところへ、待てゐた杉浦がやつて來た。杉浦は例に依つて、女中の案内も待たずに、廊下の所までどん〱上つて來たらしかつたが、誰か客の居ることを、室外から察したとみえて、それでも、

「おい、小野。入つてもいゝか。」

と聲をかけた。小野は夫人と顏を見合せて、鳥渡微笑を交したが、

「あゝ杉浦か。入れよ。待つてゐたところだ。」

と、いつて迎へるべく立上つた。

「誰かお客さまぢやないか。」

杉浦はかういひながら、障子を開けた。その小野の部屋には、三疊の次の間がついてゐて、其處からは部屋の内にゐる夫人の姿に、まだ杉浦には見えなかつた。

「うむ。君も知つて居る女の人だ。」

小野は微笑しながらいつた。

杉浦は少し逡巡氣味に奥の部屋をそつと窺つたが、夫人の姿を發見すると、意外さうにはつと目を瞠つた。が、すぐに彼は常態に返つた。

「やあ、奥さんですか、僕は又入つて來たとき、ちらつと女の束髮が見えたんで、小野の奴飛んだ年増の情婦か何かを、何處からか引入れたなと思つて、ひそかに驚嘆しながら入つて來たんですがね――奥さんでしたか。」

彼は平常何方かといへば、無口のむつつり屋らしく見える癖に、折に觸れるとかういふ冗談を、平氣でつけ〱いふのだつた。併し、さういふ冗談をいひながら、彼は夫人の來てゐる其場の様子を、もう幾らか察したらしかつた。そしてこの冗談は、その察知し得たことに對する感情を、幾らか蔽ひ隠さうとする努力の結果らしかつた。

「私でお氣の毒さまね。」

夫人もそんな風に應じてゐた。

小野は其場の事情を、諒解するやうにま[illegible]つた。

「僕の來るのを待つてゐたんだよ。奥さんも御一緒に、芝居へ行きたいと仰有るんでね。」
「是から貴方がたと一緒に、何處かで御飯を食べて、それから芝居へ行かうと思ふのよ。貴方も無論つき合つて下さるでせう。」
夫人もかういつた。
「えゝ、それは勿論お伴致しますけれど。……」
杉浦は何となく浮かぬ顔をしてゐた。が、更に冗談らしく甘えていつた。「そんなら少しうまいものを奢つて頂かなくつちや厭だな。」
「えゝ、奢つて上げますよ。――ぢやあもうすぐ出ませうか。何處へ行きませう。」
「交通の便宜上、「風月」がよくはありませんか。」
そんなことで、兎に角三人は、連れ立つて表へ出た。夫人を中央にして、大學の制服を着た杉浦と、焦茶の洋服を着た小野とが、左右に從つて歩いて行つた。
……「風月」で定食を食つて、それから赤阪のローヤル館まで行つたときは、もう開演に間近い頃だつた。
その頃ローヤル館は、ローシーといふ帝劇の舞踏教師が、歌劇を經營してゐる小劇場だつたが、其處を借りて新劇團體のうちでも、有力な舞臺協會の連中が、今度復活的な旗上げをしたのだつた。その舞臺監督には、小野の友人の森本が當つてゐた。森本と小野とは、嘗て高等學校のときから、一緒に演劇に志して、勉勵し合つた仲間だつたが、中途である鳥渡した行き違ひから、暫く友情が疎隔してゐたが、今度彼が舞臺協會を引受けて、開演することになると、やつぱり何を措いても同情的に、見物しなければならない義理があつた。
小野はその劇場の前に立つたとき、自分の戀にすつかり囚へられて久しくさういふ新劇運動なぞの空氣に觸れなかつたのを感じた。が、併し、淋しいとは思はなかつた。かうして前の彼の友人たちが、頻に藝術上の立場を得ようと努力してゐるのを見ると、彼もさうした方面に於ける焦慮を幾らか感じないではなかつたが、併し自分に取つては、何より大事な戀だつた。
彼は、勝見夫人をつれてゐることに、誇りを感じて、得意さうに案内した。そして下の特等席の、中頃の椅子に三人並んで席を取つた。
劇場の中には、文學者や演劇愛好家や、いつもの新劇の廊下を賑はす人々が、澤山來てゐた。作者東小路氏の關係で、その人たちのやつてゐる雜誌の連中も、可なり顔を見せてゐた。さうした中に在つて、小野は、もとより眇たる存在であつたけれど、彼は、勝見先生の夫人を連れて居るといふことに依つて、何となく得意に感ぜざるを得なかつた。
大寺氏や林田氏や矢部氏などの、先輩弟子たちの多くも、殆ど全部招待を受けて、向うのボックスの方に來てゐた。さういふ人たちも、夫人が來てゐるのを見つけると、遠くからお辭儀をしたり、寄つて來て挨拶したりした。
中にも大寺氏などは、すぐ側の前屈みな足どりで、慇懃さうに近づいて來て、そして親しく挨拶するのだつた。
「……奥さん、丁度いゝ所へおいでになりましたね。此次の幕間には御飯を奢つて頂きますよ。」
氏は心安立にそんなことをいつた。
「駄目よ、もう、私は此人たちと一緒に、今「風月」へ寄つて來たばかりなんですもの。」
夫人は笑ひながら小野たちを顧みていひ放つた。
「さうですか。そいつは怪しからんですな。」
大寺氏は冗談らしくさういつたが、横目でじろりと不快げに小野の方を見た。

小野は何か取做し顔にいはずにはゐられなかつた。
「此處にも食堂か何か在つたんですか。そんなら此處で食つてもよかつたんですが。……」
併しそれには大寺氏は、わざとのやうに一顧をも與へなかつた。
「ちやあせめて此次の幕間には、僕たちと一緒にお茶でも飲んで下さい。皆、來てゐますから。」
大寺氏はさういつて、自分の席の方へ去つた。
小野は大寺氏が何となく自分の、夫人を伴うて來たことに對して、反感を持つてゐるらしいのを、感ぜざるを得なかつた。が、併しそんなことは、一種の輕い嫉妬で、一時的のものだとしか思はなかつた。
そのうちに幕は開いた。芝居は戰爭で失明した盲畫家が、今度は窮乏のうちから作家として立たうといふのを、その妹が健氣に助けるといふ筋のものだつた。そしてそれは東小路氏の作中でも、代表的な感動に滿ちたものだつただけに、序幕からしてやつぱり觀客の心を捕ふるものがあつた。俳優も相應に巧みだつた。殊にその妹に扮した女優の、切ぶた眞率な演技は、觀劇擦れのした小野の心にも、幾度か涙ぐましめた。――小野の心は興奮と共に、非常に感じ易くなつてゐたのだつた。
次の幕間には約に從つて、先輩の弟子たちと一緒に、夫人や小野たちは茶を飲んだ。が、小野は夫人を連れて來た得意さに引代へて、先輩たちが何となく自分に、反感を持つてゐるやうな氣配の見えるのを更に漠然と感じない譯にはゆかなかつた。それで彼はできるだけ控へ目にしてゐた。杉浦はさういふ多勢の中へ入つたときの常で、なぜか默つてゐるきりだつた、黑田だけが例に依つて元氣よく、小野を相手にして喋つてゐた。が、黑田の辯舌は、自分一人で熱して相手にはさうかまはない質のものだつた。――小野はその間に在つて、何となく孤立の、捉へ處のない淋しさに陷つてゐた。そしてそれにつけても自分を認めてゐてくれるのは夫人だけだ、といふやうな感謝の氣持に捉はれるのだつた。
やがて又幕が開いたので、皆は席へ歸つた。そして小野は又夫人と杉浦と相竝んで、その一幕を見物し終つた。が、幕間になつても、夫人は便所か何かへ立つたが、小野は席を立たなかつた。すると杉浦もやつぱり立たなかつた。彼もやつぱり立つて行つて、先輩たちと話をしたつて相手にされないと思つてゐるらしかつた。
小野は今更ながら、杉浦だけが自分の心を打明けて、話相手になつてくれる親友であるのを感じた。さう思ふと同時に、自分が今日夫人と一緒に居た事情を、何だか杉浦にまで、打明けずにゐられないやうな心持になつた。どうせ遲かれ早かれ、夫人との例の問題の交渉は、杉浦にだけは打明けねばならなかつた。そして彼の力も借り、彼の考へも聞かうと思つてゐた。そして殊に、今日自分が夫人と一緒にゐたことから、幾らか彼も事態を察したに違ひないから、隱して置いて彼を不快に思はせるやうなことがあつてはならぬやう、猶更早く打明けて、彼に對する信頼と親愛とを披瀝しよう。――小野はさう考へずにはゐられなかつた。
それで彼は折を見て、傍に居る杉浦に向つて、低い聲で云ひ出した。
「ねえ杉浦。實は今日僕奥さんから、例の冬子さんに就いてのお願ひの返事を聞いたんだがね。どうも餘り希望ではないんだ。」
小野は殆ど一息に、それだけの事を云つてのけた。
「ふうむ。」杉浦は、幾らか事情を察してゐたが、其處までは考へてゐなかつたやうに、意外

な顔をした。そして暗鬱な皺を、眉間に刻んで此方を見返したが、暫くして平常の聲で云つた。「併し、奥さんはそれに對して、承諾して居られるんだらう。」

「うむ、まアさうだがね。併し冬子さんが、とても行かないらしいんだ。」

小野は少し悲觀的に主張していつた。

「併し、それなら、心配する必要はないぢやないか。」

杉浦は鳥渡語調激しく、叱咤するやうにいつた。それにそんな問題には、自分は立入りたくないといつた風だつた。それでなければ、今こんな所で、そんな問題を話し合ひたくない、といつた風だつた。

「うむ。それはさうだけれど。……」

それで小野は、かういつたきり、その場で二の句は繼げなかつた。そしてその話題が、杉浦に同情を呼ばなかつた事を、鳥渡後悔したが深くは氣にも止めなかつた。

さうかうするところへ、夫人が席へ歸つて來た。そしてその一幕は聞いた。その次の幕間になつた時、少し退屈なのに飽きてもしたのか、夫人は小野に向つてかう聞いた。

「この芝居はあと幾幕あるの。」

「[illegible]この見物はもう後一幕きりです、が、その後に飜譯物が、もう一つある筈です。」

「さう？　ぢやこの次の幕まで辛抱して、お終ひのは見ないで歸つてもいゝでせう。もういゝ加減晩いから。」

「さうですね。ぢやあさうしませう。」

すると夫人は、今度は杉浦に向つていつた。

「杉浦さん、貴方も今夜小野さんと一緒に、家へ來て泊るんでせう。」

と、突然、杉浦はすつと立上つて、そしていひ出した。

「いえ、僕は何だか頭が痛いから、この幕きりで失禮します。又伺ひます。」

かういふと共に、傍に在つた外套をかゝへて、ぷいと席から離れた。そして夫人と小野に一瞥すると、後をも見ずに出口の方へ出て行つた。

夫人も小野も鳥渡呆氣に取られてその後を見送つた。が、小野は氣がつくと、急いで出口までその後を追つて行つた。

杉浦は外套の襟を掻き合せながら、丁度出口を出ようとするところだつた。

「おい杉浦、どうしたんだ。」

小野は少し大聲で呼び止めた。

「うむ？」と、杉浦は閾の上で振り返つた。「何でもない。頭が痛いから、先に失敬する。」

かう繰り返すやうにいひ棄てて、彼は小野の止める間もない中に、外の闇へ走り出て了つた。割りに背幅の廣い彼の後姿が、表飾の灯を浴びて、ちらりと浮いて見えたきり、忽ち影も形も見えなくなつた。

「どうしたんだらう。可怪しな奴だな。」

小野はかう呟きながら、暫くぼんやりとその表の闇を見送つてゐたが、遲ればせながら杉浦の出ていつた理由が、彼の胸を衝いて察せられた。ひよつとすると、先刻の話に關聯してかも知れない！　併しながら、それにしても杉浦に似げない、奇怪な行動だつた。

小野は考へ込みながら、夫人の居る席へ戻つて來た。

「どうしたんです、杉浦さんは。」

夫人も少し驚いてゐるらしかつた。

「矢つ張り頭が痛くつて、堪へられないから歸るつていつてゐました。」

「さうですか。でも、貴方何か氣に障るやうなことをいひやしなくつて。」

「いゝえ、別に。只鳥渡、今日の話を簡單にしただけですが、ひよつとするとそれで、氣を惡くしたのかも知れません。」

「だつて、そんな事なら、別に氣を惡くする筈がないぢやありませんか。」
「さうです。だから妙だと思ふんです。」
「ぢや矢つ張り頭が痛かつたんでせう。」
夫人はそれほどに氣にはしないらしかつた。併し小野にはなほ〻、あゝして闇の中へ出て行つた杉浦のことが、何となしに氣にかゝつてならなかつた。けれども、別に心配はしなかつた。心配したつてそれは仕方がないことだし、事實また、先刻から浮かぬ顏をしてゐたから、頭痛が堪へ兼ねる程強かつたかも知れぬと、強ひて思ひ直す外なかつた。
その幕が濟むと、小野は夫人と連れ立つて、勝見家へ歸つて行つた。
勝見家では、小野が幾らか恐れてゐたに拘らず、冬子孃が出迎へてゐて、
「いらつしやい。」
と、例もの通り隔意なく迎へてくれた。小野はその笑顏の中に、杉浦のことなぞはもう殆ど忘れ果てなければならなかつた。……

二

ところが翌日、小野は宿直の當番を終つて、勝見家から下宿へ歸つて見ると、可なり慌しい亂れた文字で、黑色のかすれた一葉の葉書を、自分の机の上に發見した。誰からだらうと思つて、急いで文面を讀み下して見ると、それは紛れもない杉浦の筆蹟で、かう大きな文字で走り書きしてあつた。
「少し頭の工合が惡いから、これから旅に出かける。雜誌の用はやつて居られない。君が宜しくやつてくれ。」
その文面を見ると、小野ははつとして立竦むやうに感じた。何だか家出の書置を見るやうな、一種の困惑に打たれたのだつた。そしてそれと同時に、やつぱりさうだつたか、といふやうな考へが、彼の胸に騒がしく起つた。矢つ張り彼は、何か苦しい事があつて、あの儘眞直ぐに、何處かへ出かけたのだ。矢つ張りあのことが、彼に苦痛を與へたのだ！ 小野はさう直覺した。そしてその簡單な葉書の面が、黑々と彼に怨恨を募らせてゐるやうに鳥渡思つた。
何處かへ行つて、自殺でもする！ ふと、そんな風にも、小野には考へられた。杉浦は平常から、自殺なんぞ何でもない、何かの機會さへあれば、この生を斷つなぞは容易な事だ、といつてゐる男だつた。高等學校の時にも、幾日も室に閉ぢ籠つてゐた末、一度さう云ふやうなことをいつて霞ケ浦の方まで出かけて行つたが、志を果さないで歸つて來たことがあつた。だからひよつとすると、この際そんな氣にならないでもない。これは棄てて置けない。今の中に何とかなるものならどうかして行方を探して、そんなことを止めなければならない――小野はすぐ、事件をそんな風に誇大に考へた。
それにしては何故、杉浦はあの時、――小野が冬子孃に求婚しても、杉浦に取つては何でもないかと念を押した時、さう彼は答へてくれなかつたのだらう。さう問はれて、まさか苦痛だとは、他の人との間柄ならすぐいへぬかも知れないが、随分永い間、肝膽相照し合つた親友の間だ。さういつてくれれば小野自身にしたつて、さう杉浦に苦痛を與へないやうな、又別な手段の取りやうもあつたかも知れない。文面が簡單で、頭痛の工合が惡いからとしか書いてないから、或は事實それだけの理由で、小野の思ひ違ひかも知れないが、果して小野の想像が當つてゐるとすれば、杉浦の方にも責はある。――そんな風にも考へられた。
併しいづれにもせよ、この儘さうかといつて見てはゐられない。小野は急に立つやうにその葉書を摑んで再び戸外へ飛び出した。そして杉

浦の下宿へ行つたら、まづ様子が分るだらうと、急いで五丁目の素人下宿へ訪ねて行つた。

すると其處には、果して下の茶の間に婆さんが一人きりで、ぽつんと留守を守つてゐるきりだつた。

「あの、杉浦はどうしました。昨夜歸つて來ましたか。」

小野は少し息せき切つて尋ねた

「杉浦さんですか。杉浦さんは昨夜十時過ぎにお歸りになりましたが、又すぐ二三日何處かへ行つて來るといつて、その儘お出かけになりましたよ……私は又貴方がたの方が、行く先によく御存知だと思つてゐました」

婆さんは早口に、こちや／＼とそんなことを述べ立てた。

「さうですか。僕は又杉浦が、不意に何處かへ出かけるつて葉書を寄越したんで、どうしたのかと心配して來て見たのですけれどね。ぢやア別に變つた處も見えませんでしたか。」

「えア別に變つた樣子も見えませんでしたよ。」

「何處かお友達の所へでもいらしたんぢやアありませんか。」

「部屋の中にも別に變りはありませんね。」

小野は眞面目でそんなことを訊いた。

「いえ、別に變りはありませんよ。どうしてですか。」

「そんならいゝんですけれど。……」

小野はそんなことで、杉浦の下宿では、たゞ杉浦が昨夜兎に角一度歸つたことだけしか、外に知りうる所がなかつた。かう聞いたところでは、別に何も大したことはなささうだつた。が、杉浦が下宿の婆さんなぞに、そんなことを知らしてゆく道理は、素よりないことには違ひなかつた。

で、小野の心は、それだけでは收まらなかつた。彼は下宿を出るとその足ですぐ、J新聞社にゐる、池田を訪ねて聞いて見ようと思つた。杉浦が若しさういふ考へなら、同じ友人仲間の池田にも、何かいひ置いて行つたに違ひないと思つたからだつた。そして其處で分らなくても池田に善後策を相談するのが、一番頼りになるやうに思はれたからだつた。池田は彼らよりは年長だつた。そしてさういふ世事にかけては何に依らず正しい篤實な意見を持つてゐた。――

J新聞社の受付に面會を頼んで、應接室に待つてゐると、やがてすぐ奥の、暗い廊下のやうな所から、池田は近眼の奥の、深い眼をしよぼしよぼ瞬かせながら出て來た。

二人は鳥渡挨拶をすると、連れ立つてすぐ前のパウリスタに赴いた。

「あのね。」と、小野は一隅の片隅を選み、白い大理石の卓子に、向ひ合つて腰を下ろすとすぐいひ出した。「君の所へは杉浦から、何か知らせはなかつたかい。」

「杉浦の處から？　杉浦がどうかしたのか。」池田は小野の樣子が、何となく慌しいのを見て取つてすぐかう訊き返した。

「うむ。杉浦が昨夜、僕ん所へこんな速達を寄越して、何處かへ行つて了つたんだよ。」

かういつて小野は傍の、郵便局か停車場で認めたらしい走り書の、黑い葉書を取出して見せた。

「ふうむ。どれ――」池田は子供のやうな、むつちりした可愛い手をさし伸べて、それを無器用に受取つたが、一と通り文面を讀み終ると、又その言外の意味を取らうとするやうに、もう一度眼をその上に走らせながらからういつた。「だが、この文面に現はれた所を見ると、別に大したことはなささうぢやないか。少し自棄になつてゐるやうだけれど。――」

「うむ。それは其文句を其儘に取れば、決して心配なことはないんだがね。實はその前後の事

情が僕には何だか氣に懸つてならないんだ。」
「一體どんなことがあつたんだい。」池田は眼をしばたゝいて、沈着に反問した。
「實はね。昨日杉浦と一緒に、勝見夫人を連れてローヤル館へ行つたんだがね。その時中途からぷいと僕等二人を殘したまゝ、席を立つて出て行つたきり、その足で何處かへ行つちまつたらしいんだ。尤も一應下宿へは寄つたらしいがね。」
「ふうむ。どうしてそんなことをしたんだらう。」
「それがね、頭腦が痛いから歸るつて、急にいひ出したんだけれどね。後から僕が追ひかけて行つて、出口で呼び止めた時の顏の表情では、どうもそれだけぢやないらしいんだ。何だか嫌に苦痛らしい顏で、僕を振り返つて見たんだが、僕は何だか厭な氣がした位だつたよ。それで僕はどうもそれには別な理由があると思つたんだ。」
「別な理由つて？」
「實はね。」と小野は告白するやうに、下を向いていひ始めた。「君も薄々は知つてゐるだらうが、僕はあの勝見家の、一番目のお孃さんに前から好意を感じてゐたものだからね。最近思ひ切つて奧さんに、求婚を申込んだんだよ。そしてその内諾みたいなものだけは、奧さんから得たんだがね。併しまだ話は、當人にもう少し考へさせてくれといふので具體的には少しも纏まらないけれど、昨日その話の概略を、杉浦にふと僕が話して聞かせたんだよ。そしたら杉浦は、不快さうにそれを聞いてゐたが、その次の幕間になつて、急に頭腦が痛いからつて、飛び出して了つたんだらう。僕としては何だか、その問題が原因のやうに、考へられてならないんだよ。」
　かういつて小野は、池田の奧深い眼を、窺ふやうに見やつた。
「ふうむ。――すると君は杉浦も、そのお孃さんに戀してゐて、苦痛を感じたといふんだね。」
「まアさうだ。だからその前に、僕は自分の心持を、すつかり杉浦に打明けて、冬子さんに求婚するが、君に苦痛を與へないか、つて念を押しさへしたんだがね。その時は杉浦も、別に何とも思つてゐないつて、言下に云ひ切つたものだから、僕はすつかり安心して寧ろ杉浦に喜んで貰へると思つて、ことを其處迄運んだんだがね。今になつてそんなことをする位なら、あの時に正直にいつてくれれば、僕だつて考へやうもあつたんだけれど。……」小野は少し恨むやうにいつた。
「ふうむ。さうかい。そんなこともあつたのかい。併し、さう聞かれて、杉浦の隱忍な性質としては、すぐ苦痛だとはいへ切れないよ。それに、君からさういつた時は、大した感じもしなかつたのかも知れない。が、併しさうして君が夫人の内諾を得たり、色々ことが具體的になりかかつて見ると急に苦痛を自覺して來たのかも知れないからな。」
　池田は池田らしい批判を下した。
「それや大きにさうだ。が、さうだつたとすれば、僕は何だか愈々氣になるんだ、いづれにしても若し萬一のことが杉浦にあつたりすると、僕たちは一生暗い影を背負はなくちやならないからね。――どうしたらいゝだらう。」小野は感傷的にならざるを得なかつた。が、池田は沈着に動じないでいつた。
「どうするつて、仕方がないぢやないか。その儘にして置いて、成行を見るほか。――第一杉浦が果してさう思つて自殺しに行つたのかどうか、それもはつきり分らないぢやないか。又さうにしたところが、どうにもできないぢやないか。たとへ君と杉浦とが、同じお孃さんに戀して、そのため一方が苦痛を感じたつて、それは仕方がないことだよ。一方が苦痛を感じたから

つて、それをやめる譯には行かないしね。」
「併し理解のある友人同志の間で、さういふ苦痛を感じさせないやうにはできるぢやないか。」
「それやアさうだ。が、併し君の今の場合のやうに、無意識に自然苦痛を與へたつて、それは仕方がないことだよ。是が若し君に惡意があつて、競爭者の杉浦を出し拔いたとか、何か陷れたやうなことでもするとか、また奪つたとかいふのならば、君に道德上の責任もあるがね。さうでなくて君の場合は、いつもの開け放しの人の好さで、對手を庇つてさへゐるんぢやないか。その上で、さういふことになつたつて、僕は何もさう心配する必要はないよ。」
「それでも感じだけは惡いからな。」
「大丈夫だよ。第一杉浦がそんな氣で飛び出したにしたところで、自殺なんぞする氣遣ひはないよ。それやア彼奴は昔から、自殺する〱つて、陰鬱な顏をしてゐる男だつたが、さう容易に自殺なんぞできるものぢやないよ。その中にきつと見てゐ給へ、いつかの霞ヶ浦行みたいに、頭腦が直つて歸つて來るから。」池田は直截に明快にさう斷言した。
「さうだといゝがねえ。」
小野は併しまだそんな風にうじ〱考へ込んでゐた。
「とはいつても、此處で杉浦に死なれたら、君は一生呪はれたやうな暗い氣持がするだらうな。」
池田は自分の說を、すつかり吐き盡して了ふと、冗談らしくそんなことを付け加へていつた。
「それやアさうだな。併し又杉浦が冬子さんを想つてゐるなら、いつそ今死んで了つてくれたら、とさう庶ふやうな氣もしないではないよ。」
小野もそんな風にいはれると、かう冗談らしくいつた。が、それは或程度まで、彼の內心の聲だつた。
「それやア矢つ張り、杉浦の存在が邪魔になるだらうね。戀をする人に取つては、どんな無力の競爭者だらうと、氣に懸るものらしいからな。」
「殊に杉浦なぞに苦手だからな。」
かういつて小野は再び冗談に微笑した。
「併し、」池田は又本論に歸つた。「杉浦が悲觀してゐるとすれば、可哀さうだな。それに就いて僕に一つ慰める方法があるんだけれど。……さうと知つたら、早くいつとけばよかつた。」
「何だい。どんなことだい。」
「實はあの川瀬の家でね、杉浦に家庭教師旁、來て貰ひたいと云つてるんだがね。そんなことがあつたら、幾らか紛れたかも知れない。歸つたらすぐ話してやらう。」
川瀬家といふのは、麻布の廣尾にある富豪で、只今亞米利加へ行つてゐる子息とは、小野たちも高等學校時分から友人で、池田なぞは學資の補助を受けてゐた家だつた。そして池田は今でも、その家に寄寓してゐるのだつた。
「さうか、それやアいゝね。併し、君はどうするんだい。」
小野は鳥渡不審に思つて訊いた。
「僕か。僕は今迄誰にもいはなかつたが、今度結婚するよ。それは君のとは違つて、すつかり定めて了つたんだ。來月頃、故鄕へ歸つて式を擧げることになるだらう。」
「へゝえ、さうかい。」小野は落着いて、まじまじ廣い顏を微笑ませてゐる池田を、今更驚いて見守らなければならなかつた。「君がかい、へゝえ。」
「どうだ、驚いたらう。僕も改宗したんだよ。相手は國の方の、極ありまへの人だ。」
「さうかねえ。すると杉浦のことでもなければやア、世はおしなべて[illegible]なんだね。」
小野はそんな風に、わざ〳〵詠嘆的に、感慨を洩らさずにはゐられなかつた。平常から、自分

を飽くまで醜い男と一途に思ひ、誰も相手にしてくれないとのみ信じて、遂に女性に興味を持たなかつたばかりか、結婚生活などには初めから何物をも求めないで、結婚するとすれば、片輪か何かで金がある人と、犠牲的にまた物質的に結婚してもいゝとまで、よくいつてゐた變り者の池田が、さういふことになつたとは、この際がこの際でなかつたら、躍り上つて嬉しがる所だつた。

「なアに俺のなんぞは、君のやうなのとは違ふ。君もさういふことになつたんなら、何より幸福ぢやないか。まア精々成就するやうに努力しろよ。杉浦のことは心配するに及ばない。きつと何でもないから。……」

池田にさういはれると、何でもないやうであつたが、やつぱり小野には、池田に別れて一人になつてからも、あの時暗へ出て行つた杉浦の、後姿がちらついて、氣になつてならなかつた。

杉浦は果して何處へ何しに行つたのだらう。

第十章

一

池田にさういはれたにも係らず、杉浦の行方に就いて、小野は猶まだ心配を去る譯にはいかなかつた。彼はその足ですぐ勝見家を訪れ、磬子夫人に面會して、事情を訴へた方がいゝと考へた。

併し、彼は心の奥で鳥渡躊躇した。若し杉浦が、ほんたうに冬子孃に戀してゐて、そのために家出をしたのだとすれば、その事態を正直に勝見家に知らせることは、杉浦に對する同情を増させるかも知れない。そしてそのために、當人の冬子孃を初め、磬子夫人の小野に對する心も、幾らか動搖するに違ひない。少くとも當分は、小野の求婚に應ずることを、逡巡しないとも限らない。それは小野にとつて、可なり苦痛なことである。だから、池田もあゝして大丈夫だといふのではあるし、この際杉浦の行方に關しての心配などは、小野一人の胸の中に藏つて置いて、勝見家の人たちなぞには、そんなことは聞かせないがよい。そんな餘計な取越苦勞なんぞをするには及ばない。……

が併し、また小野は考へ直した。果して杉浦が自分と冬子孃との問題のために、苦痛を感じて家出したとすれば、――小野は心の底で、飽くまでさう信ぜずにはゐられなかつた。――その當事者である自分は、それはやむを得ぬ事情とはいへ、兎も角も罪があると感じない譯にはいかない。罪は此方にないにしても、少くとも杉浦のために、少しでも苦痛を和らげ、ことなく濟むやうな處置をとるのが、親友としての務めだ。たとひ直接その方法は、とるべき道がないにしても、心配するだけ心配するのでも、此方の心は濟む。親友が自分たちのために苦悶して、萬一のことがあるかも知れないときに、略略その事情を推察してゐながら、安閑としてゐる譯にはいかない。たとひ自分の方の事態が、そのために少しは面白くなくなつても、その位の犠牲は拂ふべきだ。さうだ。是はやつぱり勝見家の人たちに打明けて、向うの裁量を仰いだ方がいゝ。少くともその方が公明正大な道だ。さうしてたとひその結果、自分と冬子孃との婚約に、支障を來すにしても、それは止むを得ない。……

その上、小野はかうも考へた。若しその位のことで、冬子孃と夫人の心に、動搖が起り局面が轉換するならば、それでもいゝ、さういふ薄弱な基礎に立つてゐるならば、寧ろその方がいゝ。だから、この際、勝見家の人たちに杉浦のことを打明けて相談するのは、一つは自分たちの問題の試金石だ。殊に杉浦がふいと家を

飛び出したことを、冬子孃に知らせたなら、若し彼女が杉浦に特別の好意をもつてゐるとすれば、その心配の素振りに依つて、それが明白に解るだらう。それは小野にとつて、觸れるのが恐ろしい問題ではあつたが、かういふ機會に知り得れば却ていゝ。‥‥

そんな風なことを考へながら、小野は家の方へ歸る途中から、眞つ直に勝見家の方へ赴くべき電車に乘り換へた。さう決した彼の心は、何となく緊張して勇んでゐた。彼の心の奥には、事態が思ひがけなくこんな風に切迫して、物語的な方向をとつてきたのを、强ひてまた物語的に考へて、喜んでゐる心がないでもなかつた。そして杉浦の行方を心配してゐながら、何かことがあるのを望んでゐないではなかつた。その上どつちへ轉んでも、小野は苦痛を受くる者ではなくして、その相手を心配し氣遣ふ位置にある。――彼は殆ど今は、杉浦の行方をいろ〳〵と推察して氣遣ふのを、享樂するやうな氣持にすらなつてゐた。

勝見家に着いたときは、もうすつかり夕暮れて了つて、懐しい晩飯時の燈火が、家中に溢れてゐた。一家の夕飯はもう濟んだらしかつた。

夫人は茶の間の方で、長三氏と何か食後の雜談をしてゐた。丁度よく、まだ宿直の人も客もきてゐなかつた。小野は今朝此處から歸つたばかりだのに、またすぐ勝見家を訪ねたことを、何となく家の人々に咎められるやうな氣がして、それですぐ用件をいはずにはゐられなかつた。

「奥さん、鳥渡、――お話したいことがあるんですが。‥‥」

彼はかういつて、少し事件が重大らしく、夫人を客間の方へ招じ出さうとした。

「さう？」

夫人は少し大儀さうではあつたが、何かと思つて蹤いてきてくれた。夫人は何か冬子孃と小野自身との、問題だと思つたらしかつた。

「お話つて何？」

座が定まると夫人は促した。

「實は杉浦のことなんですがね。」小野は座を正しうしたまゝ、さも大事さうにいひ出した。「杉浦の奴昨夜あれから、かういふ葉書を僕に寄越したまゝ、何處かへいつて了つたんです。‥‥」

かういつて彼は、昨夜からの杉浦の行動を、一と通り夫人に物語つた上、正直に思つた通りを告白した。

「‥‥で、僕は何だか杉浦が、どうしても僕と冬子さんとの問題に苦痛を感じて、ふいと下宿を飛び出したとしか思へないんですがね。それで若しさうだとすると、その儘に棄てて置けないやうな氣がしますんで、心配して御相談旁此方へ上つたんです。」

「ふうむ。さう？」夫人は葉書の裏表を、二三度引繰り返して見てゐたが、別にさう動じもしないですぐいひ出した。「でも、ほんとにそんな原因で、何處かへ行つたんでせうか。私何だかさうは信じられないわ。だつて杉浦さんは、そんなことを考へてゐる人のやうぢやないぢやありませんか。」

「いや、併し、あれでなか〳〵色んなことを腹の中で思つてゐる男ですからね。あゝやつて、何となくうつそりしてゐますが、なか〳〵隅には置けないんですからね。」

「それやアさうですわ。でもあの人が冬子のことをそんなに思つてゐるなんて、私考へられませんわ。」

「でも、少くとも僕の方へ取られることは、苦痛だつたかも知れませんからね。」

小野は池田にいつた場合と、同一のことを此處でも論議したのだつた。

「そんならそれで、何もそんな風に家を飛出し

たりしなくたつて、外に仕方があるぢやありませんか。お友達同志の間なら、貴方に打明けたつていゝんだわ。私にいつてくれたつて、いゝぢやありませんか。」

「それやさうですけれど、またそんなことを默つてゐるのが、杉浦なんです。どうしても僕にはさう考へられてならないんです。强ひて小說的に考へるんでなくて、あの時の顏で直覺してゐるのです。」

さう强くいふと、夫人もその問題に就いて、論議するのは止めたが、今度はぢつと小野の方を見返して、結論的にいひ出した。

「でも、そんならそれだからつて、どうもできないぢやありませんか、默つて樣子を見てゐるほか。私は決してあの人は、萬一のことなんぞあるまいと思ひますよ。そしてその中に無事に歸つて來ますよ。またたとひ貴方の心配してゐるやうなことがあつたにしたところで、もう仕方がないぢやありませんか。歸つたらよし、歸らなかつたら、その時のことですわ。……」

かういつて夫人は、更に小野の顏色をぢつと窺つて、性根を見定めるやうにしながら、いひ添へるのだつた。

「だつて貴方は、杉浦さんが若しほんとに冬子のことを思つてゐたとしたら、貴方の方で思ひ切りなさる？」

「さあ。」小野は鳥渡躊躇した。が、すぐまた顏を上げて答へた。「それはできないかも知れません。……いえ、できません。」

「さうでせう。そんならそれでいゝぢやありませんか。杉浦さんのことは杉浦さんのこととして。——仕方がありませんわ。」

その夫人の言葉は、小野にとつて千鈞の重みがあつた。彼は、杉浦の身の上を心配してゐるとはいひ條、やつぱり心の奥で、實はさういふやうな夫人の言葉を、後楯として要求してゐたのだつた。そして杉浦のさうした行動に依つて、夫人が殆ど動かされないのを、何より安心に思はなければならなかつた。

「さうですね。幾ら心配したつて仕方がありませんね。ぢやアまア樣子を見てゐませう。」

小野は元氣づいていつた。

「きつと何でもありませんよ。」

夫人も池田と同じやうに、別に心配してはゐなかつた。

そんなことで、小野は藤見夫人の許を、辭して歸ることになつた。戶外へ出ると、春の淺い夜は晴れて、星がうす寒い空に、一ぱい撒き散らされてゐた。小野はまた杉浦が、何處の空にどうしてゐるだらうと、感傷めいた氣持に襲はれた。が、それは決して、重苦しい心配でなくして、何となく嬉しいやうな、憐憫の滿足感だつた。

……翌日、翌々日と、それでも小野は、何處からか何か杉浦に就いて、凶い知らせでもきはしまいかと思つて、心待ちに待つてゐた。まさかにそんなことはあるまいと思ひながら、何處かの海岸か山中から、彼が不明の死體となつて發見されるといふやうなことを、小野はひそかに期待しながら每日の新聞面を探したりした。が、そんな所には勿論、何の手がかりもなかつた。

と、それから三日目のことだつた。小野はまた宿直で、遊びがてら夕方早くから藤見家へ行くと、夫人が彼の顏を見るなりいひ出した。

「あの小野さん、杉浦さんから貴方の所へ、お手紙がきてゐますよ。早くあけて御覽なさい。茶の間の、簞笥の上にありますから。」

「さうですか。どんな風の手紙です。」

「普通の手紙よ。よつぽど開けて見ようかと思ひましたけれど、何か祕密な用向でも書いてあると惡いから、その儘にして置いたのよ。」

小野は早速自分で、茶の間の箪笥の所へ行くと、そこの手鏡などを置いてある前に、見覺えのある劃の大きい杉浦の字で、自分の宛名を書いた一通の手紙が、重々しく置いてあるのを發見した。

小野はその大きい宛名を見、それから「成田にて、杉浦生」と書いた裏を返して、その可なり嵩のありさうな内容を量つた後、すぐその場で封を切つて見た。何だか別狀はなささうに見えても、何が書いてあるかと思つて胸が少しどきどきした。

中には、やはり大きた角ばつた字で、宿屋のらしい粗末な卷紙に、太々とかう書いてあつた。

「今俺は此處にゐる。一昨夜あれから不意に、銚子へでも行つたら頭腦がなほるだらうと思ひ立つて、取り敢ず兩國の停車場にかけつけて見たら、もう成田行の最終列車しかなかつたので、參詣の連中と一緒に此處へきて、餘り上等でもない宿屋に泊つてゐる。この頃はさう參詣者がないと見えて四邊は靜かだ。俺は例に依つて寢つかれないので、按摩をとつて貰つて寢た。そしたら宿では、女按摩にしませうかといつた。千葉縣は風儀の惡い所と聞いてゐたが、その外には君を喜ばすやうな材料はない。たゞ昨日、君が景色がいゝといつていつも話す三里塚の牧場の方へ行かうと思つて、町外れで道を訊いたら、そこが曖昧宿だつたと見えて、白粉を塗つた女に盛んに遊んで行けと勸められたが、振り拂つて出て了つた。君ならさぞ惜がるところだらう。

成田山へはきた序だから參詣した。が、俺は君と違つて、神佛の前で手を合せたりするのが嫌ひだから、別に前途の幸福も祈らなかつた。たゞ、君のためにと思つて、お神籤をひいてやつたから、有難く頂戴するがいゝ。君のよくひく一錢銅貨を入れて、下の口から出る辻占とは、第一有難味が違ふ。しかも素敵にいゝ籤だ。同封して置いたからお禮をいひ給へ。何か外にお土産をと思ふが、君にはそれだけで澤山だらう。奥さん初め、勝見さんの人々によろしく。皆さんにお土産を買つて行きたいが、銘仙でも要らないといふ人があるんだから、わざと買つて歸らない。君から吳々もよろしくいつてくれ給へ。この手紙は勝見さんの方へ出す。君が多分其方へ行つてる頃だと思ふから。

頭腦も癒つたから、明日か明後日歸る。

小野辰夫殿」

成田にて　杉浦生

そして同封の神籤といふのはかういふのだつた。

「第二十四番吉。

臘木春將至。芳菲喜再新。鯤鯨興巨浪。舉釣祿爲眞。（らふぼくはるまさにいたらんとす。はうひとしてふたたびしんをよろこぶ。こんげいきよらうをおこす。あげてろくをつつてしんとなす。）

ふゆごもりの木春をむかへて、はなさきさかえるごとく、わが身自由になりて、幸を得てよろこびあるべし。」

小野はその呑氣さうな、併しまた少しは自棄を包んだやうな手紙の面を繰り返して讀んだ。初めは「なアんだ。」と思つた。こんなことだつたのかと思つた。人が心配してゐたのに、やつぱり杉浦は、こんな小旅行に出たのだつたか。——さう思つた。が、併しよく文面を見直すと、何となく此方の氣のせゐか、妙な引かゝりがあるやうに感ぜられてならなかつた。第一に、小野の下宿へ寄越さずに、勝見家へ宛てて來たこと、それも底意があると見れば、見られないでは

なかつた。それからまた、冬子孃のことには、ただ僅かに土産一件のところで、微かに觸れたきりなのも、「疑へば疑へないことはなかつた。「銘仙でも要らない人」といふのは、實は冬子孃のことだつた。それは嘗て大寺氏が、故郷へ歸つた土産に、何か銘仙でも一反買つてきて上げませうといつたのに對して、冬子孃が要らないと斷つたといふ話を、彼女が無慾である證據として、夫人から、小野や杉浦は聞かされてゐたからだつた。

「どんなお手紙？　何か祕密なことでも書いてあつて？――」

小野が讀み且つ考へてゐると、向うから夫人が聲をかけた。さういはれて、小野ははつと己に返つた。さうしてこの手紙が、表面上何ら不穩な所のないのを、改めて意識した。

「いゝえ、何でもありません。不氣なことが書いてあります。奧さんの御想像通り、もう明日あたり歸つて來るやうです。……まア烏渡御覽なさい。」

小野はかういつて、夫人に手紙を手渡した。

夫人もそれを一と通り讀んでゐたが、

「まアつまらないことが書いてあるのね。」

と、時々微笑を洩らして、そして卷き返しながら小野にいつた。

「やつぱり何でもなかつたでせう？」

「えゝ、さうでしたね。」

小野も多少の疑念はあつたが、杉浦の失踪が、無事に收まつたことに、兎にも角にも、安堵を覺えたのだつた。と同時に、もつと重大なことを待ち設けてゐたのに、こんなことに終つたのには、何となく不滿足な氣分だつた。何となくその手紙に對して、妙な腹立たしさのやうなものさへ、感じられてならなかつた。けれどもそれは、夫人の前では樣子にも現はさなかつた。

……それから一兩日經つて、やつぱり小野が勝見家へ行つてゐるところへ、杉浦は今旅行から歸つたといつて、心持黑くなつた無事な顏を現はした。

「やア歸つたね、どうだつたい。」

さすがにその顏を見ると、小野は懷しげに聲をかけた。

「うむ、なか〳〵面白かつたよ。」

かういつて杉浦は、非常に快活に話し始めた。そして制服のポケットの中から、土産は買つて來ないといつたに係らず、成田土産らしい木製の小さい瓢簞か何かの、帶へ下げるものを取出した。その顏には、小野の豫期したやうな曇りは少しも見えなかつた。たゞ何故か餘りに快活だつた。快活過ぎる位はしやいでゐた。……

二

併し杉浦の樣子には、それつきり何ら小野たちに對する、不滿な樣子は見えなかつた。それは何ら小野と冬子孃との問題に、小野が取越苦勞をしたやうには、暗影も投げず支障をも來さずに濟んだ。小野ももう少しも、杉浦が苦痛を感じてゐるだらうなぞと思はなかつた。そして嘗てさう信じたのを、今は杉浦に濟まないやうにさへ感じた。杉浦は今や小野の、やつぱり心を打明ける第一の友であり、そして小野の第一の同情者だつた。その方は、小野にはもう、すつかり安心だつた。

が、妨害は別な方面からきた。――

或日、小野は例に依つて、何にも知らずに勝見家を訪ねて、夫人と客間で話してゐると、夫人は何か話の序に、妙に眞面目な態度で、小野にこんなことをいひ出した。

「……小野さん。貴方作家として身をお立てになるお積りなんでせう。」

「えゝ、まアさうです、できれば……」

小野も何の前提に夫人が、そんなことをいひ出したのかと、怪しみながらも兎も角もそんな風に答へた。
「そんならね。今の中にしつかり勉強しておいて、立派な作家になつて下さいよ。」
夫人は前から、小野たちに對しては、子供に對するやうに訓戒を與へるのが常であつたが、この時の語調には、何となく特別なものを含んでゐた。
「えゝ、自分でもしつかり勉強する積りなんですけれど、僕は御存じのやうに、かういふ怠け者ですからね。」
「まアこの二三年は自重して、さう書いたりなんぞしない方がいゝと私思ひますよ。先生なんぞは四十近くまで、書かなかつたぢやありませんか。餘り早く書き出すと、佐々木さんのやうに書けなくなつて了ひますよ。」
「それやア先生は別ですが、僕だつて書かずに、ゆつくり勉強ができれば、さうしたいんですけれど、書かないとまた寂しいし、書くことがまた一種の勉強ですからね。」
小野は辯解的にさう答へた。一體に繋子夫人は、それも無理のないことではあつたが、何ごとにも漱石先生の尺度を凡てに當てはめて、物を律する傾きがあつたので、小野はできるだけ輕く、反抗したのだつた。
「でも、そんなら、人に餘り兎や角ういはれるやうなものは、發表しない方がようござんすよ。私、貴方がつまらないものを、書かないでも濟むやうな補助はして上げますからね。できるなら今の中にみつしり勉強して、ゆく〳〵立派なものを書いて、貴方を惡くいふ人たちに目に物見せてやつて下さい。」
夫人は訓戒的に、かう強くいつた後につけ加へた。
「大寺さんや何か、先輩のお弟子の人たちは、貴方をまるで駄目だつてさういつてますよ。」
「はア、さうですか。」
小野は夫人の訓戒の前には、一言もなく首垂れながらも、先輩の弟子たちがそんな風に、夫人にいつたといふのを聞くと、顏を上げて、「どうしてですか。」といふやうに、夫人の顏を見返した。
夫人は續いて話し出した。
「實はね。――貴方にこんなことをいつていゝかどうか分らないけれど、まア默つてお聞きなさい。――實は昨日、大寺さんが家へ來たのよ。そして貴方のことに就て、私に忠告を與へて行つて下すつたの、有難いことには、ね。」
夫人は鳥渡此方の氣持を庇ふやうに、まづ内容を語るに先だつて、ちらりと冷笑を洩らした。
「どんなことをいつて行つたのです。」
小野は少し坐り直して、訊かざるを得なかつた。
「つまりね。私が貴方を信用し過ぎてゐるのがいけないつていふのよ。そして貴方と冬子とのことも、幾分か氣が付いてゐるらしいのね。それで私が貴方を信用して、冬子の配偶として迎へるやうなことがあつては、勝見家のためばかりでなく、冬子の不幸だからつて、さういふのよ。貴方は人間としては、ごく輕薄才子だし、作家としても、加藤紫内、ね、あの程度の通俗作家にしかなれないつて。――それだのに、貴方は野心を以て私に取入つて、百方阿諛してゐるので、私が餘り信用し過ぎてゐるから、氣を付けろつてさういふのよ。何でも、それが先輩一同の意見なんですつて。」
夫人はかういつて、憤慨と冷笑との餘燼を洩らしてゐた。
「へゝえ、そんなことをいつたのですか。へゝえ？」かうまづさりげなく答へたが、小野け内

心、燃え立つやうな憤慨に囚はれない譯にはいかなかつた。が、心を鎮めて、さうして靜にいつた。

「それやア成程、僕はこんな人間ですし、つい輕い快活な性質から、用もない所へ出しやばつたり、興に乘り過ぎて、脫線したりしますから、輕薄にも見えるでせう。また作家としても、まだ自分ですら自信もなく、海のものとも山のものとも見當がつかない位ですから、或ひは大寺さんのいふ程度まで、行くかどうかすら分りません。――（それは小野の、惡い皮肉な諷刺だつたが。）――が、併し、野心があつて、奥さんに取入つてゐるからとか、また僕と冬子さんとの問題に、そんな意味で反對されるなんて、僕の身の不德から出たこととはいへ、實に心外です。……」

小野は少し淚をさへ湛へて、かう縷々と述べた。

夫人も續けた。

「それでね、貴方と冬子との結婚を、私が許すとしても、先輩一同は擧つて反對するんですつて。これが若し、柳井さんとか、和島さんとかいふやうな人々ならい丶が、貴方ではどうしても反對するんですつて。」

「へ丶え。」小野はさすがに、憤激を抑へることができなかつた。自分を、人及び藝術家として、批判的に物をいつてゐるのは、まア幾らかこの際許せるとしても、柳井や和島ならよくて、自分は飽くまでもいけないと、そんな風に先輩たちの、好惡や世評やに支配されて、人物を見究めもせずにいつてゐると聞いては、たとひそれがさう深い意味でなく、不用意にいつた言葉としても、小野は內心嚇とならずにはをられなかつた。「そんな甲乙を付ける權利は、あの人たちの何處にあるんです。それも甲乙をつけるだけならまだしも、それで以て、僕の私生活にまで、交渉する權利は何處にあるんです。それやア柳井は、秀才でもありまた生活も安定で、文壇でも今賣り出しの新進作家ですから、僕だつてその點は友人ながら尊敬するのに吝かでない積りですが、人物として僕との間に、そんな差別を付けられれば、誰だつてい丶氣持はしません。それに和島さんだつて、今でこそ少壯哲學者然と、鵠沼の細君の家か何處かに收まつてゐますが、前に谷口や、何かと新思想をやつてゐた時分は、赤いトルコ帽を被つたり、また戀愛問題でも、今あの江上といふ人の細君になつてゐる人を、逗子の海岸でいひ寄つて、自分の願ひが容れられなければ自殺するつて、短刀を出して砂の上に倒れたといふ、有名なゴシップさへある人ぢやありませんか。だから先輩の人たちが、そんなことをいふのは、決して正當な批判から出てゐるのぢやないんです。みんな好惡の感情か、僕に對する反感から出てゐるのです。」

「それはさうよ。貴方が私にうまく取入つて、勝見家の實權を左右するかのやうに、一途に思つてゐるのよ。それはさうなのよ。その上、大寺さんにすれば、冬子を外の人にやりたくないのよ。あの人だつて自分に奥さんがなく、事情さへ許せば、冬子を貰つて行きたい位の氣はあるのよ。だからそれも一つはあつて、貴方を排斥するんですよ。」

「で、奥さんはそれに對して、どんな風にお答へなすつたんです。」

小野は夫人の態度を知ると、幾らか氣も鎮まつて、改めてさう訊き返した。

「私？　私、かういつて上げたわ。それやア貴方がたが、勝見家のためを思つて、さういつて下さるのは有難いが、勝見の一家のことに就ては、私にも相當の考へがありますから、私たちでできるだけ致しますつて。だから貴方がた

の御忠告は、御忠告として有難く聽いて置きますつて。——」

「さうですか。では奥さんの僕に對するお心持は、別にそのためにお變りなすつたといふやうなことは決してないんでございますね。」

小野は念を押すやうに訊かざるを得なかつた。

「えゝさうよ。だからかうして、大寺さんたちには惡いけれど、貴方にすつかりお聞かせしたんですわ。」

「有難うございます。」

小野は心から、さうした禮を述べるやうな氣持になつてゐた。

「ですけれども、小野さん。先輩たちがさうして、みんな反對だといふものを、此處でわざとまた此方も、反對には出られませんからね。そこを貴方は辛抱して下さらなくちや駄目よ。だから貴方がたの問題も、もつと時機を待つことにしなくてはなりませんわ。もつと辛抱して、氣長に時機を待つてゐれば、きつと貴方のお望み通りに、して上げられると思ひますからね。そしてその中には先輩たちも、貴方の本當の人間が解るでせうから、この後とも貴方の方でも氣を付けて、自重して勉強なすつて下さい。さうして、誰からも文句がいへないやうに、偉くなつて下さるのが一番大切よ。」

「畏りました。奥さんさへさう信じてゐて下されば、私もできるだけ努めます。そして先輩たちにも、惡く思はれたり反感を買つたりするのは、やつぱりみんな僕の不德の致すところで、先輩に對して、憤るよりは、やつぱり自分で悲しむべきことですから、私も今後は十分愼みます。」

「さうなすつて下さい。私は他の人たちが何といつたつて、貴方を相應に信用してゐる積りですからね。私だつて貴方に就ては黑田さんにもよく訊いてみて相應に知つてゐるつもりなんですから。黑田さんも、貴方は表面少しオッチョコチョイに見えるけれど、素質はいゝ奴だつてさういつてゐましたわ。だから兎に角、呉々も自重して時機の來るのを待つて下さいよ。」

夫人は慈母のやうな愛撫を以て、かういつてくれるのだつた。そしてこのことのために、夫人と小野との間には、前よりももつと信愛の念を、增したやうな心持になつて、猶も心置きなく話し合つた。

夫人は、先輩の弟子たちが、何よりも忠臣顏をして、面を冒して諫めたのに、反感をもつてゐるらしかつた。殊に小野に阿諛されて、欺かれてゐるやうにいはれたのが、如何にも心外らしかつた。小野とてもさうだつた。彼も後で自分自身でかう考へた。成程、自分の夫人に對する態度は、何かにつけて殆ど忠僕のやうに、奉仕的であつたかも知れない。併し、自分の戀人の爲であり、かつまた自分が信頼してゐるのみならず、自分もまた信用されてゐる人に對して、さういふ態度に出るのは、寧ろ自然ではないかと。若し腹黑い野心であればあるだけそんな風に正直には振舞はないかも知れないと。——また後で聞いたところに依ると、先輩たちが集まつて、小野のことを議論した際、あの溫厚を以て知られた矢部太郞氏まで、誰か小野に少し同情をもつてゐた人が「併し小野といふ男は、決してそんなに夫人に取入らうなぞといふ深い野心なんてなく、無意識にやつてゐるんだよ。」といつたら「無意識なら猶惡い。」と論斷したさうである。それを聞いた時、小野は、今迄尊敬してゐたこの倫理學者を、一ぺんに人性を知らぬ僞善者だと反噬することに依つて、酬いるより外に術のないのを知つた。——さういふやうなことで、先輩たちが飽く迄、小野が夫人に取入り、夫人がそれに手もなく乘つてゐると批判し

たのは、二人をして却て反感を起させ、交みに庇ひ合ふ結果になつたのだつた。

兎に角、さうした譯で、先輩たちの反對は、却て小野に有利な結果を齎した。が、併し、小野の胸の中は收まらなかつた。小野は一人ゐるときなぞ、よくそのことを考へて、ひそかに、憤激と憎惡とに燃えた。ある夜なぞは、眠られぬまゝに色々考へて、床の上に起き直つたまゝ、大寺氏のゐる方角を睨んだことすらあつた。さうして心の中では、幾度か誓つた。若し彼らの反對のために、自分の一生を賭してゐる戀が、破られるやうなことがあつたら、自分の方にも覺悟がある。此方は殆ど生命を賭してゐる、いはば一生の幸福を、彼らが彼らの小感情のために、たゝき壞していゝならば、此方も彼らに同じ不幸を以て酬いる權利がある。彼らに、人の運命や幸福に就いて、常に考慮を拂ふべき彼らが、殆ど理由なく、此方の運命に闖與し、それを狂はしていゝならば、彼らに自分を裁くだけの權利があるならば、此方でもそれに正當の復讐をするだけの權利がある。……これが戀敵とか何とかいふもので、其方に排斥の理由があるならば、正當な方法さへとつてゐるなら、それは恕せる。が、冬子孃と自分との問題に、何の發言權を彼らはもつか。第一彼らは、果して自分の眞價が解る程、その點に就いて考慮を拂つたか。……

そんな風に熱して來ると、彼はその實行方法まで考へた。丁度その頃吳市に、自分の長官を恨んで、その子を殺した軍人があつた。自分はそれに倣ふことを思つた。丁度大寺氏に、子煩惱で有名だつた。だから萬一のことがあつたら、大寺氏自身に危害を加へたりするより、その子を殺して悲しみを與へてやる方が、ずつと效果的だと思つたのだつた。彼はその場面を想像しさへした。そして萬一法廷へ出されて、自分は審問の前に立つた時、聲高らかにかう叫んでやる積りだつた。大寺氏は自分を精神的に殺したから、それと同じ苦痛を以て彼に酬いるのは正當だと。

思へばその時大寺氏の故障申立が、夫人に容れられないのは僥倖だつた。そして事件が、そのために毀れたのではないことは、全く自他のために幸福だつた。それにつけても、或る賢ぶつた人々が、他人の生命をかけてゐる事件に、餘計な喙を容れるには、――批評するのは勝手であらうが、――それ相應の考慮と、矢面に立つ覺悟が要る、と小野は自分に引比べて思はない譯にはいかなかつた。

併し、彼は平常は毎ものやうに穩かだつた。先生の月命日を以て、弟子たちが集合することになつてゐる十日會なぞでも、彼は今迄よりも身を愼んで、その上できるだけ心置きなく、彼らに對することに努めた。彼らの方で却て、妙に白けた態度を見せたことはあつても、小野は飽く迄それに逆はなかつた。一つには彼がさうしてゐることが、何となく夫人の信頼に依つて、優越を感じてゐるからでもあつた。

その上先輩たちの反對は、冬子孃の心を刺戟して、却て小野との關係に、油を注いだやうな結果にもなつた。可哀さうだと思つたのか、それともその結果、母の信頼が小野の上に益々固いのを知つてからか、又はさういふ緊張した時局の刺戟に依つて、愈々心が定つてきたのか、兎も角も彼女は、ずつと小野に親しい態度を見せるやうになつた。

冬子孃は、或る時、小野にこんなことを言つた。

「……小野さん。輕薄才子つてけんとにどんなの？　貴方のやうな人をいふの？」

小野はその冗談とも本氣ともつかない質問

を、苦笑を以て受取らねばならなかつた。
「何ですつて。――ぢやア貴女も、奥さんにその話をお聞きになつたんですか。」
「いゝえ、私、自分で聞いたのよ。大寺さんとお母さんの話、私あの次のお居間にゐたもんですから、惡いとは思つたけれど、みんな聞いて了つたの。」
かういつて彼女は、上目遣ひに頤を引いて、微笑を浮べながら小野を見た。
「へゝえ、さうですか。」小野は驚いた。「そしてどう思ひました。矢つ張り大寺さんのいふ通りに、私のことを輕薄才子だとお思ひになつたでせう。」
小野は幾らか自信を以て、反問するやうにいつてみた。
「えゝ、ほんとにさうかしらと思ひましたよ。けれど、貴方を惡い人だとは、どうしても思はれませんでしたわ。」
「さうですか。それだけ思つてゐて下されば、僕としては本望です。輕薄才子は輕薄才子に違ひないかも知れませんからね。」
何とか彼とかいひながら、小野は矢つ張り大寺さんの捺した、「輕薄才子」の極印にこだはらねばならなかつた。
「ほんとにさうよ。熱し易い人は、冷め易いんですもの。貴方はきつとさうよ。」
「さうかも知れませんね。熱してゐる時は、自分でも自分が解りませんから。併しそれだけのことがあれば、多分は瘢になつて殘ると思ふんですけれどね。」
「私、そんなこと存じませんわ。」
話が少し本文になりかゝつたので、女の本能で、彼女は忽ちそこで打切つて了つた。が、小野は嬉しかつた。冬子孃が大寺氏の言葉を直接に聞いてゐながら、猶少しも動かされなかつたこと、動かされないばかりか、それを彼女自身小野に報じて、二重に彼女の態度を明かにしたこと、そのことは寧ろ小野を、ひそかに大寺氏に對して、それ見ろといひたい位、得意な喜びを感ぜしめた。
矢は投げ返された。それは寧ろ小野たちの鎧の、案外固いことを證明するに役立つたばかりだつた。併しそれと同時に、一種の戰鬪は始まつた。さうしてそれが濟まない中は、小野の事件は表立つて運ばないことになつて了つた。

三

その後も、夫人は小野を遇するのに、決して先輩の前で、遠慮するやうなことはなかつた。遠慮しないばかりか、寧ろ宣言的に、親しくして見せる程だつた。或日、九段の能樂堂で、故先生も知つてをられた俳人の明雪翁の、八十の賀か何かがあつて、その祝賀能に席を買つた時などは、九州から來た故先生の弟子なる、或る大學教授の夫人の外には、小野を一人その桝に連れて行つたきりだつた。それも、大寺氏の諫止のあつたすぐ後のことで、小野の氣のせゐかは知らぬが、先輩たちもその夫人の當つけがましい態度を見ると、鳥渡挨拶に來るだけで、苦苦しげに小野を尻目にかけて行つたが、小野はそれに心を痛めながらも、それだけまた此方の氣持は、緊張して、ひそかに痛快なやうにも感じられた。
さうして又かうしてゐる間にも、夫人は冬子孃と小野との間柄に、もつと親近を増すやうな行動をとつてくれた。
その時分、黑田が主としていひ出して、一度四月の帝劇を見物しようといふことが、夫人に提議されてゐた。そしてそれには又、冬子孃も一緒に行くことになつた。席は夫人と冬子孃と、黑田と杉浦と、それから小野の五つが取つて置

かれた。

黒田はその頃から、先輩の弟子たちと反對に、小野の同情者だつた。彼こそ、許婚があり、そんな野心を毛頭もたぬ男とはいへ、若し少しでも競爭意識をもつとすれば、最ももつのが自然な立場にゐる上に、先輩の人たちとも可なり親しいのに係らず、小野の事件を、客觀的に見て贊成してくれてゐる、小野の在來の親友以外の、唯一人だつた。彼は初め、夫人からそれとなく小野のことを諮問された時、「小野はあんな風ですけれど、素質として案外素直で、いゝ人物だと思ひますから、妙な氣持の息子なんぞに冬子さんをおやりになるより、ずつといいでせう。」といつてくれたのだつた。そして彼は又、大義名分の上からいつても、後輩弟子に對する先輩の横暴を、愉快には思つてゐないのだつた。――さういふ意味で、小野は敵も得たが、又黒田に依つて味方も得た。さうしてこの際の味方は、彼にとつて實に百萬人力の思ひがあつた。で、その觀劇も、これらのいはば内輪同志といつた意味の、可なり樂しみ深いものだつた。

定刻になるのを待ち兼ねて、小野は特に夫人と冬子孃とを案内して、帝劇へ赴くために勝見家へ行つた。そして初めての觀劇のために、鳥渡着飾つた彼女達を連れて、定刻近く電車に乘つた。黒田は自分の家から、向うへ行つてゐる筈だつた。そして又杉浦も、――彼は旅から歸つて來ると、例の川瀨家の家庭教師の一件を話したところ、丁度幸ひだといふので、池田に代つて川瀨家へ行くことになり、本郷臺町の素人下宿を引拂つて、又その後へは小野が住むことになつた。――廣尾の向うの邸へ移つて行つてゐたので、これも亦その家の方から、帝劇へ來る手筈になつてゐた。で、小野は自然夫人と令孃と、二人を伴うて行く嬉しい役目を、引受けることになつたのだつた。

電車の中でも、彼女たちと竝んでゐる姿を、人々はじろじろ見た。が、小野はそんなことも、却て嬉しかつた。さう目立つ程美しいのではないが、その適度な均整をもつた處女姿は、矢つ張り人目を惹いた。電車の中では、竝んでゐたが餘り話はしなかつた。それも小野には靜かな滿足の念ひだつた。

向うへ着いたときは、もう殆ど開演時間は迫つてゐて、黒田は既に來て席についてゐた。が、杉浦はまだ來てゐなかつた。

竝んで五つ席を取つてある、その端にゐた黒田が、皆の來たのを見て奥へ順次に移つたので、自然それから夫人、冬子孃、小野といふ順に、竝んで坐ることに定つて了つた。一番入口の端は、杉浦のために明けて置かねばならなかつた。

杉浦は、幕が開いても、なかなか來なかつた。一幕が終つても、まだ來なかつた。それが小野には、又何となく氣になつてならなかつた。杉浦は、又ひよつとすると、今日の觀劇に何となく氣が進まないのではあるまいかと心配した。けれども亦杉浦が來ないことは、冬子孃といろいろ話し合つたり、何かするのに邪魔がなくつていゝ、といふやうな氣もしないではなかつた。來ないなら寧ろいゝとさへ思はれた。が、杉浦は二幕目の中頃になつて、やうやくやつて來た。

「いや、遲くなつて失敬しました。丁度人が來てゐたもんですからね。」彼はかういつてその儘むつつりとした顏を舞臺の方へ向けた。

芝居は、坪内博士の「桐一葉」だつた。場面は何でも神社の前で、腰元が大勢竝んで、誰かの參詣を迎へてゐるあたりだつた。

「どうです冬子さん。なかなか綺麗でせう。」

黒田が母夫人を措いて一軒隣りから、さう低

くない聲で呼びかけた。

「えゝ。――」

冬子孃はさすがに、別にそれ以上の應へもできぬらしく、舞臺にぢつと見惚れてゐた。その腰元たちには、本興行だつたけれど、女優たちが入つて扮してゐた。

「奥さん、どうです。どれが一番お好きです。女から見ると、誰が一番綺麗に見えますかね。」

黒田は、何時もの通り、口を休めないでそんなことを訊き出した。

「さうねえ。――此方から二番目の人はどう？」

夫人も、少しは仕方なしに、相手になつて答へてゐた。

「あゝ、あれですか。あれは初瀬浪子でせう。成程、奥さんらしい好みですね。御自分と反對に、しうツと脊の高いのがいゝんでせう。」

「馬鹿おつしやい。でも、一番女優としては、目鼻立がはつきりしてゐるぢやありませんか。」

「ぢやア冬子さんは？　貴女はどれが一番いゝと思ひます。いつて御覧なさい。」

黒田は更にから試驗的な回答でも採るやうに、興味を以て促した。

「私？　私どの人がいゝんだか、みんな同じやうで分らないわ。けれど……」と彼女は見渡して、恰も祕密を打明けるやうに小聲で、「あの、左から三人目の方がよくはなくつて。」

「へゝえ、さうですか。冬子さんがあんな圓い顏の人が好きとは意外ですな。」黒田は又そんな風に批評してゐた。

小野には、冬子孃の答は、興味を以て聞いてゐたが、向うの黒田の方を、反對に向いて低い聲で答へたので、よく聞き取れなかつた。で、それを機會に、話の中へ割り込む必要もあつて、

「え？　どれですつて？」

と、訊き返さざるを得なかつた。冬子孃は顏を此方へ向けた。そしてそのため、小野と思ひの外近々と顏を寄せるやうになつて了つたまま、もう一度舞臺の方を物色しながら、彼女はいふのだつた。

「あの、ほら左から三番目よ。今、裾のところを鳥渡直したでせう。あの人よ。」

「へゝえ、あれですか。あんなにぽつてりしたのが。――」

小野も黒田と同じく、一應抗議めいたことをいつた。

「だつて可愛いぢやないの。」

「さうですかねえ。――僕は又、貴女とは反對に、その次の、左から四番目の、少し頤のしやくれてゐるのがようござんすけれどね。――杉浦。君はどれがいゝ。」

小野は左にゐる杉浦にも、話題を向けるやうにから問ひかけた。

「うん、俺はみんないゝよ。そしてみんな惡い。」

彼はそんな風に、わざと超然としたことをいつた。……

そんなことをしてゐる間にも、小野は冬子孃と竝んだ地位を、感謝しつゝ享樂するのを忘れなかつた。彼はそんな話をしてゐる拍子に、冬子孃の手が、此方を向くと同時に、椅子の肘掛の上へそつと置かれたのを見てとつた。そして話が濟んで後も、其處にその儘放置されてゐるのを、矢張り殆ど第六官を以て、明かに知つてゐた。で、話が切れて、皆の注意が悉く舞臺に向つた時、思ひ切つてそつとその方に手をやつた。何となく又冬子孃の心を、はつきり摑む試みのやうな積りだつた。で、さう不安はないながらも、恐々ながら差出したのだつた。と、熱した彼の手掌が、思ひの外に冷たい彼女の手掌に重なつた。小野はどき〳〵しながら、そつと重ねて

置いた。が、彼女はそれをすぐには引込めなかつた。その間一二分に過ぎなかつたかも知れないが、小野には五六分位に感ぜられた。それで彼は更に自信を増して、もう許されたかの如く、意識的に掴むやうに、ぎゆつと輕く力を入れて抑へた。と、彼女は前から知つてはゐたと見えて、別に今氣がついた風は見せずに、その儘鳥渡暫く置いておいた後、そつと手を引いて了つた。で、小野はそれつきり、爲すところもなかつたが、それだけでも彼は滿足しなければならなかつた。

けれども、小野は、もう一度さういふ機會を逃さなかつた。それはその幕が濟んで、食堂へ行くために、皆が立つた時だつた。夥しい人の流れは、そこの食堂へ赴く廊下へ出る方の、横の通路に一ぱい詰つてゐた。そして殆ど各人押し合ふ位、間隔を離れずに進んでゐた。と、小野と冬子孃は、夫人を前にして、また二人斜に相並んでゐた。そして初めは偶然、冬子孃の左の手と、小野の右の手とが、混雜の中で相觸れた。小野はふとまた、漫ろ氣を出した。そして一旦放れた彼女の手を、ぴつたり着いてゐる人混みの間に探した。それはすぐに求め得られた。そして彼は、殆ど行進を促すためのやうに、それを押しやる如く握りしめながら、廊下への出口のところまで、まるで人に知らるゝ虞れなく、相觸れて行くことができた。今度は冬子孃の方でも、人に知られる危險がないと見てとつたか、またはすつかり身を接してゐるので、避ける方法がないと觀念したか、決して振り放さうとはしなかつた。

小野は廊下へ出ると、さりげなく一緒に食堂へ入つた。そして母夫人や友人に伍しながら、そんな怪しからぬ所業をして、甚だ惡いとは思ひながらも、ひそかなる喜びに滿たされてゐたのだつた。

「どうです、奥さん。この芝居は面白いですね。」

黒田は食事の間も、そんな風にまた批評めいた無駄口を始めた。

「えゝ、私好きよ、かういふどちらかといへば、武張つた一番目物の方が。――」

「成程ね。それに幸四郎の且元もなか／＼よく演つてゐますよ。第一顏の扮りがいゝ。別に變つた譯ではないけれど、あれでもつと科白が神經質だと、もつと深みがあるんだけれど。……且元の孤忠が、月並だけれど、さういふ道徳觀は、やつぱり悪い氣持はしないですね。」

「さうね。」

夫人も別に厭がりもしないが、また氣乘りがして相手になるといふ程でもなく、穩かに相槌を打つてゐた。黒田は猶も圖に乘つてこんなことをいひ出した。

「どうです奥さん。どうやら先生歿後の勝見家と、この芝居とは似てはゐませんかね。奥さんはさしづめ淀君さ。そして大寺氏の片桐且元といふのはどうですか。」

「そして。」と、杉浦も傍から面白がつて口を入れた。惡口めいたことなら、彼も引込んではゐなかつた。「小野の石田三成は動かない所だね。」

「馬鹿なことおつしやい。」

「馬鹿いへ。」

夫人と小野とが、かういつたのは殆ど同時だつた。そしてその見立は、微苦笑を以て承認された形になつた。

「ところで君の役は何だい。」

小野も面白づくで黒田にいつた。

「俺か。いふまでもなく木村重成さ。」

「役過ぎるわ。」夫人が辛辣にいつた。「黒田さんは、あの裏に隱れてゐて片桐の誠忠を立聞いてゐながら、感心して首をくり抜く間者よ。」

氣の早いところが似てゐるわ。」
「いや、そんなことありませんよ。僕ほどの立役者に、そんな役を振つちやア、芝居になりやしない。」
「僕も三成は柄にない。」小野もいひ出した。「三成は一つ杉浦に廻して小姓銀之丞を買つて出るよ。」
「ふん。」黒田はちらと冬子孃の方を見やりながらわざと蔑すむやうに小野にいつた。「役處は合つてゐるがさぞ可愛くない銀之丞だらうな。」
「冬子さんは蜻蛉で納まりますか。」
杉浦も、親愛と皮肉との例の混合で、からいひ出した。
「知らないわ。」
そんなことで、皆に笑語の中に食事も終つた。
……歸りも、小野は夫人と冬子孃とを、家までまた送り屆けることになつた。と、途中で、冬子孃は今日見た芝居に關する話から、こんな感想をいひ出した。
「……可哀さうね。あの腰元の蜻蛉つていふ女。私、あの銀之丞つていふのが、憎らしくなつちやつたわ。馬鹿の癖に、あんなに付けまとふんですもの。」
「何ですつて。」小野は冗談半分に、併し半ば眞面目で、彼女の顏を見返しながらいつた。「反對ぢやありませんか。あの銀之丞の方が、よつぽど可哀さうですよ。」
「それやア貴方はさうかも知れませんけれど……」
からいつて彼女は、後を濁したまゝ少しくすいいりと笑つた。
「さうですよ。ほんとにさうですよ。」
小野も微笑を以て、さう斷定するやうに繰返したが、何だか鳥渡冗談でないやうな思ひがした。……
兎もあれ、併しさうした狀態は、引くるめて小野には樂しいに違ひなかつた。共同の敵、さうした思ひに對して、彼らの盟はだん〳〵固くなり行く傾向だつた。が、併しその頃、また突然妙な第二の故障が、彼らの前に現はれた。

第十一章

一

からして、先輩たちの放つた第一の反對の矢は、まづ刎ね返された結果になりつゝあつた。けれども、その時突如として、第二の矢は、何處からともなく飛び來つた。眞に何處からともなく、流れ矢のやうに不意に飛び來つたのであつた。
それはまた、一通の無名の怪しい手紙だつた。——
或日、小野は下宿の一室に、ぼんやり屈託しながら、丁度大學生ラスコルニコフのやうに、いろいろ考へ事をしてゐた。彼はその時分は、森川町裏の下宿から、杉浦のゐた臺町の、猫のやうな婆さんが經營してゐる、素人下宿の二階へ移つてゐた。その下宿は、深切で且つ氣樂だつた。婆さんの氣心もよく知れてゐた。そこで小野は、杉浦が川瀬家へ家庭教師となつて行つたのち、喜んでその方へ引移つたのだつた。それと同時に彼は同期に卒業した、やはり勝見先生同門の松村といふ友人の周旋で、神田のある私立中學に、英語の教師を勤めることになつてゐた。戀の不安定と共に、彼には生活の不安定があつた。一方作家として立つ上にも、果して世間が迎へてくれるかどうか、甚だ覺束ない地位に在つた。それで彼は節を屈して、糊口の資たる定收入を得るために、可なり忙しいに係らず、月給の少いその中學に、英語の講師として出ることになつたのだつた。そこでは一週十

五六時間の授業を持たされた。そして參拾圓の給料を貰ふことに定つた。……

　小野はかうして毎日、その下宿の二階から、前庭の柿の木の蟠屈した枝に、日一日濃くなつて行く青身と、それからずつと見渡される、小石川の高臺まで一帶、黑くごみ〱した甍の錯綜の中に、鮮に緑立つて來る木々を眺めて、苦しい生活を思ひ、惱ましい戀を思つて、何となく果敢ない憂鬱に、心を閉されることが多かつた。

　さうした或日曜日のことだつた。彼は下の婆さんに依つて、突然客の來訪を報ぜられた。

「小野さん。あの、勝見さんつて仰有る方と、杉浦さんがおいでになりましたよ。」

「え、勝見さん？　奥さんかい。」

　小野は机の前に、屈託してごろりとなつてゐた身體を、電氣にかゝつたやうに起した。

「えゝ、さうらしうござんすよ。四五十の立派な女の方です。」

　婆さんは早口にいつた。

「さうかい。ぢやアすぐお通ししてお呉れ。」

　かういつて、小野は慌てたやうに、手早くそこらの散らかりを、二三片付けながらも、どうして今時分、夫人が自身でこんな下宿へ現はれたのかと怪しんだ。吉左右かさうでないか、兎に角、何か事件があるに違ひなかつた。が、併し、杉浦と一緒だといふから、何か不意に思ひ立つて、小野の所へ遊びにきたのかも知れなかつた。兎も角、この客を迎へるためには、餘りに亂雜で汚い二階を、小野は恥かしく思ひながら、夫人を招じ上げなければならなかつた。

「さあどうぞ此方へ。よくこんな所へいらして下さいました。」

　小野は夫人の足音が、ぎし〱と安普請の梯子段へかゝると、入口の所でから迎へていつた。

「いゝえ。——」

　夫人は、例の外出をしたときなどの癖で、不機嫌さうな顏をしてゐたが、また決して機嫌がいゝのではないらしく、簡單にかういつて、着てきた黑いコートを室の隅へ脱ぎ棄てた。

　杉浦も、すぐ後から上つてきたが、これも會釋し合つたきり、嵐の前の空のやうに、眼に不安を包んだまゝ、何ともいはなかつた。

　小野は汚いながら、二つだけある客用の座蒲團を、取り敢ず薦めて、夫人たちの顏色を伺ふやうにいひ出した。

「今日はまたどうなすつたんです。わざ〱こんな陋屋へ？」

　座が定まると、夫人は鳥渡杉浦の方を顧みて、そしてまだ不機嫌な面持で答へた。

「今日はね。是から後で上野の帝の展覽會を見に行かうと思つて、杉浦さんを誘つて出かけてきたのよ。須田さんが二三枚出しておいでになるんで、招待狀を頂いたから、鳥渡義理にも見に行つて來なくちやならないもんですからね。」

「あゝさうですか。」小野はその途中に鳥渡寄つて呉れたのかと思ふと一種の安心と共に、何か例の用件でなかつたことに、落膽を感じていつた。「そんなら丁度ようござんした。僕もあの展覽會には、ジャンボール・ローランスの遺作が澤山出てゐるさうですから、是非見に行きたいと思つてたところでしたから。……」

　併し夫人は、不機嫌な、鳥渡嚴肅な面持を更に緩めはしなかつた。そして改めて、鳥渡また杉浦を顧み、小野の方に心持座を正しく向け直して、かういひ出した。

「けれど、今日貴方の處へ、お寄りしたのは、それとは別に、貴方に少し面白くないことを、お聞かせしようと思つてきたのよ。」

「……はア。」小野はやつぱりさうだつたかと

思つた。そして展覧會行の途中と聞いて、少し浮々しかゝつた自分の心を叱られたやうに感じて膝を正しながら、暫くして問ひ返した。「どういふことなんです。」

夫人は杉浦の方を向いて、そして命令するやうにいつた。

「ぢやア杉浦さん。あの、先刻の手紙を出して下さい。」

「はい。」杉浦は大學の制服の、内懷しを探つて、ごく普通な灰色封筒に入れた、一通の書狀を取出した。

「小野さん。この手紙を御覧なさい。かういふ手紙が、今朝家へきたのよ。」

夫人は杉浦から受取つた封書を、突き付けるやうに小野の前へ差置いた。

「はア?」と小野は何の手紙か、何となく胸がどきどきする程、恐怖をその普通な封筒から受けて、手に取らざるを得なかつた。

表書は字形の小さい、下手な女の筆蹟だつた。それには牛込榎町五十九番地と、ちやんと住所を違ひなく書いてあつて、「勝見奥様」、それから「お嬢様」と並べて書いてあつた。そして裏を返して見ると、無名だつた。

「まア中を讀んで御覧なさい。」

夫人は小野が、封筒を兎見かう見して、躊躇してゐるらしいのを見ると、かうきつぱり促すやうにいつた。

「えゝ。――」

小野は中に入つてゐる、一枚の紙片を取出した。それは巻紙ではなくて、それも普通に、商店なぞで使ふやうな、和紙の罫を引いた、書簡箋一枚へ、表書と同じやうに、小さく、拙いが丁寧に、殆ど全面に亙つて何か書き記されてゐた。

小野は不安に驅られて、急いでその文面を讀み下した。

「拜啓。突然見もしらぬ私から、こんな手紙を差上げまして、失禮の段はどうかお許し下さいませ。私は決して怪しいものではありませんが、此の度、貴家のお嬢さまと小野とが、御結婚なさるとかいふ噂を聞きまして、名譽ある貴家のために、是非とも申上げなくてはならないことがございます。奥さまは何も御存じがないでせうが、小野といふ人は、是までいろ／＼な女と關係して來た、信用できない不良な男です。前には大學生の時分に、下宿してゐた家の娘に、ちやんとした許婚の男が外にあるのに、惚れていろ／＼といひ寄つて、毛蟲のやうに嫌はれて、たうとうそこに居られなくなりました。それから或る卑しい女優をだまして、待合へ連れ込んだこともあります。芝居の方の人たちは、あの人があんな汚いニキビ面をしながら、女優とさへ見れば誰でも追つかけ廻すので、蔭ではみんなに佐野治郎左衞門といつて、厭がつてをります。そのほか小野のために、欺されて貞操を破られた女は澤山あります。妾もその一人で、小野に欺されて關係のあつたものです。只今では小野は、今の下宿の女中と、關係してゐるさうです。そして小野はさういふ惡い女から受けた恐ろしい病氣をもつてをります。だから何も知らないお嬢さんを、そんな男におやりになつては、ほんとにお嬢さんのために、お可哀さうでなりません。きつと後でひどい目にあはされます。そしてあんな男を家へ入れたら、名譽ある勝見の家名に、泥を塗るやうなもんです。あんな男を決して信用してはいけません。お嬢さんを決してあんな男

におやりになつてはいけません。呉々も御知らせ申上げます。

×月○○日

知つてゐる女

勝見奥様

御嬢様―

小野は讀み進む中に、憤怒とも恥辱ともつかぬ感情で、顔は赤くなり、胸がわな／＼と慄へる思ひがした。そして明かに自分に對する、多大な惡意を含んだその無名の手紙に向つて、恐怖と狼狽の念から、默つたゞもう一度、文面を器械的に繰り返して讀んでゐるきりだつた。

その狀をぢつと見てゐた夫人は、傍からからいひ出した。

「小野さん。貴方こんな女から、そんな手紙を貰ふやうな覺えがあつて？」

「いゝえ、そんなことはありません。」小野は今は額を蒼ざめさして、そして本氣になつて抗議する外なかつた。「こんなことをされる覺えは絶對にありません。是は明かに誰かの中傷です。」

「では、その中に書いてあるやうなことは、全く譃なんですか。」

夫人は、落着いた押へつけるやうな調子で、きつと糺問の態度を見せた。

「いゝえ、それは全然譃ばかりとはいへません。譃どころか僕のことに關しては、まア確に幾らか知つてゐる方でせう。ずつと前の素人下宿にゐた時分、そこの若い娘に惚れたことも、確にそれに違ひありません。が、それもたゞそれだけの話で、別に恨みを受ける覺えもなければ、惡いことをしたといふ程のこともありませんでした。それは杉浦だつて知つてゐます。それから或る新劇の見習ひの女優と浮名を立てられたことのあるのも事實です。が、その女とも決して關係なんぞはありませんでした。僕が佐野治郎左衛門だの何だのと、いはれてゐるのは知りません。が、そんなことは向うで何といはうと、僕の知つたことぢやありません。僕にはたゞあゝいふ口善惡ない連中の中に、平氣で入つてゐたのがいけないんです。それから前の下宿の女中とのことなんて、捏造も甚だしいことです。それやア僕だつて、少し位平山戯たり冗談をいつたりする位のことはなかつたとはいへません。が、僕は絶對に、そんな種類の女を欺したり、惡いことをしたりしたことはありません。僕は金で買つた女以外には、一人もそんな女はないのです。それは神に誓つてもようございます。だからこんな手紙は、何か僕と奥さんとのことに、妨害を與へようとする者の、事實無根の中傷の手紙です。それに違ひありません。」

小野は熱して、息込みながらから辯解した。

「私もさう思ひますがね。併しまたかういふことをいはれてみると、驚いてすぐ杉浦さんの所へ電話をかけて、來て頂いて事實の有無を正したんです。」

夫人はかういつて、杉浦を顧みた。杉浦は默つて、たゞ眉根に皺を寄せたまゝ、澁然と點頭いたきりだつた。

「さうですか。では、もうすつかり杉浦から、事實の有無はお聞きになつたんですね。――杉浦、君は證明してくれるだらう。こんなことは、少くとも僕がこんな女に、妙な關係があつたなんてことは全然譃だつて。」

「うむ。」杉浦は暗い顔をして點頭いた。「僕の知つてゐる君の過去の事實だけは、すつかり奥さんにお話した。僕として辯解できるだけのことはお話した積りだがね。併し、そんな女との關係の有無に就いては、僕は證明はできないぜ、君の言を信じる外ないだらうつていつたところだ。それで奥さんは、一緒に君の答を聞

きに来られたんだよ。」

「さうか、それは有難う。」小野は杉浦の、少し冷淡めいた憮然たる態度に、不満な感じながらも感謝した。そして改めて夫人に訊いた。「では、奥さんは杉浦から、僕のことを何かお聞きになつたでせうが、僕としても杉浦が申上げた以外に、別に隠し立てをしてゐることも無いと思ひますし、また是からも決して隠さうとは思ひません。たゞ、併しほんとに是だけは信じて下さい。僕は過去に決して、清浄無垢の男だつたとは誰にもいへませんが、奥さんやお嬢さんの顔に泥を塗るやうな、そんな不道徳なことは決してしなかつたんですから。――」

「えゝ、それは私もさう信じてをりますわ。けれどもこんなことをいはれるし、やつぱり気にはなりますからね。でも、貴方がさう仰有る以上、私貴方のお言葉を信じますわ。――けれどねえ、小野さん。こんな手紙の内容は、もう私も決して信じませんけれどね、こんな手紙を寄越すやうな人があるつていふことは十分考へて見なければなりませんよ。こんな卑劣な中傷をしても、貴方のことを邪魔しようつていふのは、余つ程敵意をもつてゐるんでせうからね。」

夫人は結論を下すやうに、かういつてくれた。

「さうですね。さう思ふと僕は、堪らないやうな怖ろしいやうな気がします。――女には、そんな女は一人もありませんが、若しかすると前にいつた習字の女優が、或ひは僕が幸福になるのを嫉んで、こんなことをする気になつたかも知れませんが、それならそれで、もつと前に、何とか執着がありさうなものですし、また僕の芝居のあつた前後一二ケ月は、お互に交通位はしてゐましたが、それつきりいつとなく絶えて了つて、今ぢや、どこかで畫家の細君になつてゐるとか聞きましたから、今更僕の近況を聞き知つて、急にそんな気になることもあるまいと思ひますし、第一冬子さんのことをかう早く聞き知る譯もないと思ひます。ほんとにそこは可怪しいですね。冬子さんと僕とのことは、まアお弟子の連中は略知つてゐるでせうが、その外にはごく狭い範圍の人しか知つてゐる筈はないと思ひますがね。どうもその點から考へると、僕に案外近くにそんな中傷者がをるんぢやなからうかと思ひますよ。第一、僕のことを可なりよく知つてゐますもの。芳川館の女中のことまで、捏造にしろ全然根のないことぢやないんですから、 僕は前に原田君たちの前で、芳川館の話が出たとき、一人綺麗な女中がゐるつて何気なくいつたら、それは大吉さんや原田君なぞのゐた時代からゐる女中で、その時分はまだ小娘で可愛かつたなんぞといつてゐましたからね。――まさか先輩たちが、反對をした後とすると、原田君ぢやないでせうか。何だかそんなことを疑つては済まないけれど。――」

それならば前に述べたやうに、理由がないことはなかつた。ずつと以前鎌倉の一夜、冬子嬢に接吻しようとした位だから、いまだにその心を、彼はもつてゐないとも限らなかつた。そして殊には、最近小野の教へてゐるリーダーの誤謬を、ひそかに冬子嬢に向つて指摘した關係もある。……

「さア。」夫人は併し首を傾けて、それには同意しなかつた。「私も初めちらと、そんなことを思ひましたけれど、原田さんぢやないでせう。あの人はしたくても、気が弱いからまさかこんなことはできやしませんよ。」

「それはさうですね。」さういはれてみると、小野もすぐ原田説は自分で引込めたくもなつた。

「そして又原田君だとすれば、そんなことを思ひ付いたとしても、第一に嫌疑が自分にかゝるのは知れ切つてゐるから、余つ程でなけれやア、

こんなことをする譯はなささうですからね。」

「さうだね。」杉浦もその間、さら言葉を潑しなかつたが、適宜なときを選んで相槌を打つた。「鳥渡原田君にはできさうもない藝當だね。――せめてこの手紙の、差出局でもよく解れば、何か手がかりもあるだらうけれど。……」

それには全く故意のやうに、捺印の字が薄れて見えなかつた。時日の數字の方は、可なり底深く彫れてゐる程だつたが、切手の方にかゝつた局名は、どことなく「下谷」の谷の字が讀めるやうな氣がするだけで、殆ど不分明だつた。

「併しそれだつて、別な所へ持つて行つて投函したかも知れないから、全然手がかりにはならないさ。要するにたゞ、僕がこんな敵意をもたれてゐるさうな、人たちを疑つて見る外ない譯だね。どうも文面といひ何といひ、男が案を立てて、女に書かしたかどうかしたに違ひないから。」

小野は猶も辯解めかしていつた。

「誰か貴方が恨みを受けてる人で、そんな風なことをしさうな人はない？」

夫人は訊ね出した。

「さうですね。そんなに恨みを受けてゐる人なんぞ、私には覺えはありませんけれど、反感をもたれてゐるのは、二三無いといふ譯ではありません。手紙に芝居の方のことが書いてありますから、或ひは新劇團の連中かとも思はれますが、若しさうだとすると、前に谷本と喧嘩をしたことがありますから、或ひは彼奴かも知れません。併し彼奴はそんなことをするやうな男ではなし、最近細君を貰つたばかりで、可なり幸福らしいから、僕のことを嫉む餘裕もないと思ふんですけれど。……まアもとは非常に仲がよかつたのに、鳥渡したモデル問題か何かで、喧嘩別れになつてゐるんですから、僕の過去の內情をよく知つてゐて、しかも敵意をもつてゐるとすれば、谷本に第一嫌疑をかけ得られる譯です。」

谷本といふのは、柳井や池田や杉浦と同じく、高等學校の初年級からの友人で、小野と同じく演劇研究が志望であつたため、同級の同志といふ關係上、殆ど行動を共にしてゐた位親しかつたのだが、小野が小說を書き始めた頃に、「奇術師」といふ短篇を書いて、その中に谷本の當時營んでゐた境遇を、モデルに借りたために、主人公の性格や何かは、悉く小野自身の氣持を書いたに係らず、谷本は自分を惡く書かれたといふやうに思ひ込み、それが因でいさ合ひをして、鳥渡絕交の形になつてゐたのだつた。

「さういへばさうだね。君には大分敵意をもつてゐるらしいから。」

杉浦も相槌を打つた。

「もうその人の外には、誰か心當りはない？」

「さうですね。谷本は併し幾ら敵意をもつたところで、そんなことをするとは考へられませんが、もつと性格的にいつて、こんな卑劣なことをしさうなのが、外にまだないともいへません。二三年前一緒に惡い遊びをした仲間で、その後交際はなくなつて了つたから、僕たちが幾らかでも文壇に顏を出しさうになつてゐるのを、快く思つてゐない連中も二三ゐますからね。或ひはそんな奴等かも知れません。――が、併しそんな連中を、疑つて詮議する譯にも行きませんし、詮議したところで、證據が上る譯でもありませんからね。僕はたゞ是からの事實に依つて、證明する外ないんです。」

「ほんとにさうですよ。だから貴方も、是から十分自重して、變なことをいはれないやうにするんだわね。兎に角こんな反對者があるつていふことは、一應考へなければならない問題ですからね。こんなことをいはれる間は、たとひ

あなたがあんな卑劣な人だつたにしても、貴方の望み通りに、早くことを運ぶ譯には行きませんからね。」

大人は滔りと、戒飭的にいひ進めた。

「さうです、ほんとにさうです。僕もこんな風にきていはれて、邪魔をされてる間は、饒りにお前さんに對して、そんな要求はできやしません。」小野はすつかり打沈んで、かういつた後に大息するやうに付け加へた。「あゝ、どうしてかう僕は、八方から呪はれてゐるんでせう。」

「ほんとにね、貴方も損な性質ね。――そこに私たちも、同情にして上げてゐるんですよ。先刻もその手紙を、叔父さんと一緒に讀んでゐると、後から氣配を察したと見えて、定子がその覗き込んでね、貴方の悪口が書いてあるところを少し讀んだんでせう。『あら、お母様、そんな手紙きつとみんな嘘よ。お姉さまもそんなことを、眞實だと信じちやア小野さんが可哀さうだわ。』つていふのよ。平常そんなことを一度もいつたことのない定子が、そんなことをいふ位ですもの。貴方は家の方では姉ご、この手紙で同情されてゐるんですよ。前には先輩たちのことがあつて、今度にこれでせう。皆は貴方ばかり苛められてゐるやうですからね。」

「ほんとに僕のために、お宅へは下らない心配ばかりかけて、殊に申譯もありません。僕も潔よく、自分のことに就いては考へ直してみます。かうして奥さんたちに御迷惑ばかりかけてゐるやうぢやア、私も自分ながら厭になつて了ひます。――」

小野は改めて詫びるやうに、大人の前へ首を垂れた。

「まアそんなに氣落ちをなさらないでもようござんすよ。ですけれど、どつち道その位に考へて下すつた方が、貴方のためにもいゝかもしれません。――おやア杉浦さん、此の手紙は先刻のお話のやうに、貴方が預かつてゐて下さい。」と、杉浦にいつた後、小野の方を振返つて又いひ足した。「小野さんもそれでいゝでせう。私も持つてゐるのが厭ですからね。」

「えゝどうぞ。――」

「おやア確にお預りしました。」

杉浦はその手紙を取上げて、手早く内懐へ藏つた。

「それぢやアこれで話も濟みましたから、そろそろ上野の方へ出かけませうか。小野さん、貴方も支度をなさい。今日は貴方は自家の留守でせう。だから思ふ存分展覽會を見て、それから遊ばずく自家へ來ることになさい。こんな手紙が來たからつて、急に遠慮なんぞしなくたつてようござんすよ。それとこれとは別ですからね。」

「では、さういふことにいたしませう。」

小野はまだ打沈んだまゝ、さう答へて立上つた。

二

小野は大人と杉浦との後について、殆ど不承不承のやうに、上野の白馬會春期展覽會へ赴いた。

彼は途々、平常に似合はず、黙り勝だつた。餘りに打沈んだ樣子が、大人や杉浦たちに、わざとさうして見せてゐるやうに思はれはしないかと、自身でも氣が付く程、何となく悄氣切つてゐた。併しそれは決して、同情をひくために誇張してゐるのでも、又裝うてゐるのでもなかつた。彼は實際、考へれば考へる程、世の中が怖ろしいやうな、呪はれてゐるやうな氣がした。

四面楚歌。――殆どそんな風にすら彼には考へられた。世間は自分の此の位の希望をすら、容れまいとしてゐるのだ。先輩の反對も彼には痛かつた。が、併し又それには、はつきりした

理由もあり、又はつきりした對抗の方法もあつた。が、此の無名の手紙に對つては、そんなものは意にかける必要がないといつて了へばそれ迄だが、又考へやうによつては、恐るべき氣味の惡い、敵意の表現に違ひなかつた。そしてそれは、全く對手が不分明であるだけに、どうすることもできない、不快な焦立を覺えさせられない譯にはいかなかつた。彼はさう考へると、その漠然たる強い敵意に、全く壓倒される程の思ひだつた。考へるだけでも頭が痛くなるやうな氣がした。

「併し、それにしてもあんなことをする奴は、何處の誰だらう。そいつさへ判つたら、何とか又面詰するなり、對抗するなりする方法もあるんだが。——」

彼は齒嚙みをするやうな思ひで考へた。が、併し、自然と反感をもたれてゐるとすれば格別、それほど惡辣な、卑怯な手段に訴へてまで、中傷する程激しい敵意をもつべき男は、どう考へてもそれと見當の付くべきものもなかつた。

二人は夫人を中央にして、並んで歩いてゐた。杉浦もなぜか默りこくつて、心持眉根に皺を寄せながら、夫人の向う側を歩いてゐた。その暗いやうな、鬱然たる陰氣を藏した顏を何氣なしにちらと見たあるときを、ふと小野は心の底で、

「あつ！　ひよつとすると是は、杉浦がやつたんぢやないかしら。」

と、閃電のやうに疑つた。そして同じく心の底で慌てて、

「馬鹿な！　そんなことがあるものか。」

と打消したが、併しさうした疑念は、先刻夫人から手紙を見せられたときも、ちらりと頭の隅を掠めたのだが、僞りといへば僞りの疑念で、一も二もなく打消したのを、ふと又呼び醒まされたやうに感ぜられた。而して、「馬鹿な。杉浦がそんなことをする筈はない。この當の杉浦が！　お前は假りにもそんな風に、自分に同情してゐる朋友を、少しでも疑ふなんて、杉浦に對して恥づべきだ！」

と、強く打消しながらも、併しながら又心の奧の奧では、もし杉浦から眞に朋友の情誼を除いたなら、誰を措いても一番に、彼が嫌疑を受ける資格を備へてゐるのを、思はない譯にはいかなかつた。第一、まださう廣く知れ渡つてる筈のない、——先輩すらそれと察したに過ぎないところの、——冬子孃との結婚問題を、知つてゐるのはごく近い人に違ひない。そして第二に、大いに誇張はあるにしても、その種だては何なり眞實に、小野のことを聞いて知つてゐるのは、殊に前にゐた素人下宿の娘のことなぞを、あれだけに知つてゐる者は、杉浦小野に近しかつたものに相違ない、杉浦、さういふことを可なり平氣で、底強くやつてのけられる程度胸のあるのは、まア小野の仲間では杉浦位なものだ。……

が、併し杉浦はさうした條件の、殆ど凡てを備へてはゐるが、又それを打消すだけの、打消して餘りあるのみか、疑つては濟まぬと感じさせる程の親近を、小野に對してもつてゐる。彼は第一に嫌疑者であつて、しかも第一に非嫌疑者でなければならない。

「さうだ、杉浦なんぞである筈はない。もし杉浦だつたら、此の世の中は僞りに信ぜられない、怖ろしい世界でなければならない。そんなことは有りうべからざることだ。杉浦を疑ふなんて、此の世の中の、最も尊いものを疑ふことだ」

と小野は結局心の中で、さう自分の疑念を強く叱咤した。そして其後絶對に、そんなことを疑つたりすまいと心を決めた。

……其れは後のことであるが、小野は其後十日ほどして、杉浦に會つたとき、その不如意の中傷の狀に就いて、いろ／＼話をした。するとその手

紙を出した以上の合議に及んだ――と柳井は、例の清透な三角な眼を、急に光らせるやうにしながら、唇邊に少し皮肉な微笑を浮べて、突込むやうにいつた。

――……それやアひよつとすると、杉浦の惡戯ぢやないか。杉浦なら、平氣でやりさうなことだ。彼奴、初めに惡戯半分に、僕達の惡を知らせて困らせてやらう位な考で、そんな手紙を出させたんだが、反應が餘り眞劍だつたんで、今更打消す譯にもいかなくなつたんぢやないかね。

――併し惡戯にしちやア、少し念が入り過ぎてゐる。

――それもさうだね。だが、そんなことア、杉浦のメフィストフェレスでもなければやア、やれさうもないことだぜ。いつかも僕、僕の筆に手紙を書いて、君を品川までおびき出したぢやないか。」

柳井はさう冗談半分にいつて、そして笑つた。

それは、さう重大なものではなかつたけれど、確かその年の正月頃だつたかに、小野は柳井らしい文科大學生を使つて、ある勝氣の女學生にチューリップを見舞に送る位の、小說を書いたことがあつた。そしてそれは確に、柳井のことを少しモデルにしたものだつた。するとそれが發表されて、少しばかり經つたある日、小野は鎌倉の柳井から、激しい抗議の手紙を受取つた。見るとそれには、あの小說を柳井の許婚の人が讀んで、嫉妬を起して家へ告げたため、問題になつて緣談が毀れかゝつてゐるから、君からあれが事實でないといふことを、家の人や許婚の人に辯明して貰ひたい、といふことが可なり怒りを以て、――と小野には感ぜられた。――書き記されてあつた。小野は驚いて早速それを持つて、杉浦の所へ相談に行つた。と杉浦は、飽く迄白ばくれた平氣な顏で「それぢやアすぐ是から鎌倉へ行つて、謝つて來るのが一番だ。」といつて小野に勸めた。そして結局一緒に、小野と鎌倉まで出かけることになつた。小野は全く疑ひもしなかつた。只管柳井のことを心配してゐた。すると品川まで行つたとき、杉浦は急に小野を顧みて、「寒いからもう行くのはよさう。實はあの手紙は、俺が書いたんだよ。」といひ出した。小野は唖然として、怒りもできずに、ひどいことをしやがるなア。と苦笑する外なかつた。後で聞くと杉浦は、鎌倉までほんとに連れて行くつもりのところ、餘り風が寒かつたので、中途で白狀したのだつた。　そのときのことを柳井にいひ出したのだつた。

それでも小野は、まさかに柳井の言を、信じる氣にはなれなかつた。

……兎もあれ、小野はさうした思ひに捉はれて、展覽會場まで蹤いて行つた。

雨催ひの、薄暗く曇つた日で、殊にはもう閉場間近の遲い午後だつたために、場內は見物人も疎らだつた。天井から落ちる灰白い明りの中に、柔かい影の如く人々は動いて、その靜な足音が、三和土の上に懶く反響してゐた。

三人は目錄を貰つて、場內を一巡した。批評的に見るには、少し光が暗過ぎたが、靜に鑑賞するには、却つて落着いていゝやうな日だつた。夫人は須田氏の南畫味を加へた裝飾的な畫の前に、暫く立佇つて眺めた。

それから小野が先導で、此の會の元老たちの師なる、先頃物故したジャンポール・ローランスの遺作を陳列した、特別室の方へ入つて行つた。

ローランスの畫は、そのデッサンまで加へると、可なり澤山、意想外に澤山陳べられてあつた。誰の所有か、隨分大きな油畫も二三點はあつた。美しい小品も、日本にこんなに來てゐるかと思ふ位、數多くあつた。――さすがにその

室に入ると、一種のいひやうのない藝術的雰圍氣が、彼等の周圍をやんはりと包んだ。

それは大小ともに、純粹に佛蘭西の傳統を帶びた、穩かな古典的な畫だつた。紫つぽい陰影を帶びて、滑かに描かれた仄明りに浮ぶ裸體。黃昏のやうに柔かみに滿ちた樹蔭。もの靜な淺綠に匂ふ草原。それを敷いて、あるひは坐し、あるひは寢轉びながら、何事か囁き合ふ婦人。匂やかなる遠近の花卉。――凡ては、晩春のやうな甘い、そして哀愁を帶びた情調に統一されてゐた。

小野はその前に佇立して、暫く眺め入つた。そして平常ならば、寧ろ通俗的とでもいつて謗すであらうところの、甘く、物悲しい紫の陰影の世界を眺めて、急に胸が迫つて來るのを感じた。何だか自分の求めて得られない世界を、此處に描き出されたやうな、「やるせなさ」といふのに近いものを、胸の底に感じたのだつた。彼はそつと滲んでくる淚を堪へて、長く佇んでゐなければならなかつた。――彼の心はすつかり弱く、殉情的な氣分に支配されて了つてゐたのである。

「どうだい。つまらないものに、大分感心してゐるぢやないか。」

杉浦が近寄つて來た。

「うむ。甘いが、さすがに巨匠だね。」

かういつて小野は、さりげなくその前を離れた。

「もうそろ〳〵出ませうか。」

夫人は二人を顧みるやうにしていつた。

「出ませう。」

小野はそれでも何物かに、慰められたやうな思ひで、展覽會場を出た。

會場を出ると戶外は、もう殆ど夕暮がかつてゐた。山內の瓦斯燈の光が、黃色く儚げに點つて、樹下のベンチにゐる人々などは、黝ずんで見える程だつた。山下へ出ると、急に開けた廣小路の街に、燈火は漂ひ殘つた夕明りと爭つて、急がしく瞬きを始めてゐた。……

小野の心は、いやが上にも殉情的になつてゐた。そしていつの間にか彼の心は、弱く、悲觀的に傾いてゐた。かう、先輩や見えざる慾の、可なり激しい反對があつては、到底駄目だ。……そんな風な考へが、途々いつとなく、彼の心の中に起つてきた。

「何處かで御飯を喰べて行きませうか。」

「さうですね。」

「何處にしませう。」

「此處にはどうも適當な家はありませんね。」

「ぢやアもう少し下町の方へ行きませう。」

そんな風な話を、夫人と杉浦とがしてゐるのを聞いても、小野は敢て口を挾まなかつた。彼自身の勝手な考へでいへば、一刻も早く夫人と二人きりになつて、自分の胸の中を聞いて貰ひたいやうな、淡い焦慮に囚はれてゐた。

三

日本橋の方のある鳥料理で、三人一緒に夕飯を認めた後、廣尾の川瀨家へ歸る杉浦と別れて、小野と夫人とが牛込の勝見家へ歸つてきたときは、もう疾うに宵の口は過ぎてゐた。

家の中は靜かだつた。子供たちは日曜で、まだ何處かへ遊びにいつてゐるのか、それとも離室の方へいつてゐるのか、又は恐らく末の男の子どもたちは、寢に就いて了つたのであらう、母屋の茶の間には唯、柳町に住んでゐる先生の兄の長三氏と、冬子孃だけが留守を守つてゐた。冬子孃は例に依つて、女中と一緒に母夫人と小野とを玄關に出迎へた。

「あら、いらつしやい。今まで御一緒だつたの。」

さう彼女にいはれたとき、小野はさすがに嬉

しさを禁じ得なかつたが、それと共に何となく胸が詰つたやうに感じて、
「えゝ。」としか答へることができなかつた。長三氏は、宿直の小野がきたので、挨拶を済ますとやがて、自分の家の方へ歸つていつた。
冬子孃は何か裁縫のやうなものを、再び膝の前に擴げかゝつてゐたが、小野の方を鳥渡見て、微笑みかけながらいつた。
「貴方も今日展覽會へいらしたの。」
「えゝ。一緒にいきました。なか／＼綺麗でしたよ。ローランスといふ人の畫が。」
小野も、そんな風に對手になつて、他意なく答へてゐた。
「さう？ それから何處へいらしたの。」
「それから夕飯を喰べに、『扇家』といふ所へいきました。」
「さう？ お母さまと何處で一緒におなりになつたの。」
冬子孃は少し首を傾げて此方を覗いた。
「少しお話があつたので、僕の下宿へ寄つてくだすつたんです。」それから小野は勇を鼓して、此方から訊ねる氣になつた。「貴女も御存知でせう。今朝何處かから、僕のことに就いて妙な中傷の手紙がきたのを。——」
「えゝ、何だかそんな手紙がきたらしいのは、知つてゐますけれど、何んなことが書いてあるのか、私知りませんわ。讀まなかつたんですもの。——讀まない方がいゝつて、お母さまが仰有いましたから。それに私、そんなもの讀みたくもありませんわ。」
「さうですか。なに、下らない譃が書いてあるんですから、その方が勿論いゝんです。けれども、僕のために貴女までいろ／＼御迷惑をかけて、ほんとに濟みませんね。」
小野は感謝と詫とを合せていつた。
「いえ、そんなことありませんわ。」
「いえ、ほんとに濟みません。だから僕も、何とか今の中に、考へ直さうと思つてゐるんですけれど、……」
併しこの人を捉へて、こんなことをいふべきでないと、小野はその位で口を噤んだ。冬子孃の方では、小野のその時の考へなどは、勿論察し得べくもなかつた。
さうかうしてゐる中に、居間の方から、夫人は平常着に着換へて、太つたゆつたりした身體を現はした。
小野は冬子孃とさうして、二言三言話してゐる中にも、先刻からひそかに、胸の中で考へてゐた哀しい決心を、夫人に一刻も早く訴へずにはゐられないやうな、氣分に捉はれて了つてゐた。で、彼は夫人の姿を見ると、今こそ夫人と二人きりになつて、自分の決心を告げるべき時機だと考へた。
「奥さん。鳥渡、先刻のことに就いて、もう少しお話したいんですが。——」
かういつて小野は、夫人を客間の方へ誘ふやうにした。
「さう？」夫人は鳥渡、怪訝さうな顔付を見せたが、すぐ様子で察したものか、その儘立つて、客間の方へ入つてくれた。冬子孃を一人茶の間に殘して置くのが、鳥渡氣になつたが、併しその外に誰もゐないのが、好機だと小野には思はれた。
客間の方には、毎ものことで、小野たちのためにちやんと座設けがしてあつた。
座が定まると、小野は殆どすぐにいひ出した。
「奥さん。先刻のお話を伺つてから、今迄僕いろいろと考へてゐたんですけれどね。結局、僕はやつぱり決心し直した方がいゝやうに思ひますから、改めてその心持を奥さんにお話しようと思ふんです。何だかひどく氣が弱い、意

氣地のないやうなことをいふやうですが、かう四方八方から、いろ〳〵反對に會つてみると、僕も全く悄氣ずにはゐられません。その上かうやつて、僕のために奥さんのお家へ迷惑をかけて、もし先輩たちを初め、いろんな人々がだんだん見棄てていつて了ふやうなことがあつては、そんな薄情な人たちは去つたつて關はないにしろ、僕としては甚だ氣持がいゝものではありませんし、何といつても僕一人のために、お家に迷惑をかけることになります。その上今日の手紙のやうに、一々僕たちのことが嫉視されたり、呪はれたりしてゐるのでは、僕自身はいくら苦痛を堪へ忍ぶにしても、奥さんたちに心配をかけると思ふと、何といつても濟まないやうな氣がいたします。ですから、僕は考へ直しました。……」

　かういつてゐる間に、小野はいつの間にか涙ぐんで、聲もやゝ顫へてゐた。

「考へ直したつて、どうお考へになつたの。」

　夫人は落着いて、併し冷淡にではなく、確りとかう反問した。

「やつぱり僕は、冬子さんの問題を、今の中に思ひ切らうと思つたのです。諦めようと決心したのです。そしてずつと前の通りに、何のそんな關係もない、一人の弟子として時々お宅へ伺はせて頂ければ、それで澤山だと諦めようと思ふんです。もうあんな問題は無いものとして、奥さんも先輩たちに向つて、さう宣言して下さるやうにお願ひしたいのです。……」

「まあさう？　ほんとにそんなに決心して下すつたの。」

　夫人も、少し黯然としながら、小野の顏を見守つた。

「えゝ、決心しました。僕は今の中に、諦めようと思ひます。」

「でも、貴方さう諦められますか。」

　夫人の問ひは確りしてゐた。

「えゝ、諦めます。少くとも一生懸命諦めようと努力します。今の中なら、まだ諦め得る可能性が幾らかあると思ひますから。」

「さう？　そんならさうしてみて下さい。どつち道私の方では、貴方には何處までも同情してゐるんですけれどもね、事情がこんな風ですから、貴方が決心して下されるなら、さう諦めて下すつて、また改めて時機を待つて下すつた方が、私たちにも都合がいゝばかりでなく、貴方にもきつといゝと思ひますからね。できるならさうして下さい。そして自重して、氣永に勉強して、時機を待つてゐて下されば、先輩たちの反感も解ける時があるでせうし、世間の誤解もなくなつて、きつと貴方の望み通りに、物事が成つてゆくと思ひますよ。ですからできるならさうして下さい。私の方でもお願ひしますわ。」

　夫人も、さすがにさういひながら、感激したらしく眼をしばたゝいた。

「えゝ、さうします。奥さんがさういつてくだされば、僕だつて心丈夫に思つて、一生懸命に諦めます。辛いけれど諦めます。……」

　小野は抑へようとしても溢れ出る涙を、今は抑し止めることもできず下を向いて言葉を途断らした。

「……………」

　夫人も下を向いて端坐してゐた。

　と、その時、次の間のピアノを置いてある邊りで、いゝかたりと蓋を落すやうな音がした。微かだが、それと共に衣擦れの音がした。

「誰れ？」夫人は耳聰く聞きつけて聲をかけた。

「冬子かい？」

　隣室からは何の返事もなかつた。夫人は小野の方を見廻した。

　小野は暫くしても何の返事もないのを見てとると、本能的のやうに素早く、座から立上つた。

そして立つていつて、客間と隣室との間に、壁掛けのやうに掛けた露西亜更紗の垂れ布を、つと排して隣室を覗つた。と、向うの室隅の、真つ黒いピアノを置いてある所に、冬子嬢は弾奏椅子に腰をかけたまま、蓋をした鍵盤の上に、斜に身を投げかけ、重ねたやうに置いた両手の中へ額を埋めて、突つ伏してゐた。

小野は驚いて近寄つた。

「どうしたんです、冬子さん。」

近寄つて見ると、彼女はピアノの上に泣き伏してゐるのだつた。まだ肩上げを取つたばかりの、さう廣くない肩を、時々ひく／＼と揺り上げ、黒光りのする蓋の上に、惜しげもなく押しつけた前髪を、細かに波打たせてゐるのだつた。――彼女は小野の問に、一二度頭を振るやうにした。

「ほんとにどうなすつたんです。どうかなすつたんですか。」

事態は殆ど明白に察せられたに係らず、小野は猶もこんな風に訊かなければならなかつた。

「いゝえ、何でもないのよ。」

冬子嬢はやつと、伏せた顔の下からさういふと、椅子からふいに立上つて、今度は向うの反対の隅の、衣桁の置いてある所へいつた。そして両手を顔に當てたまゝ、立つたまゝで壁に身を凭せるやうに、やはり啜り泣きを止めなかつた。

小野も仕方なしに、思ひ切つて図々しく、その後を追つていつた。そして肩に手を掛けるやうにして、その横顔を覗き込んだ。

「何か今の僕たちの話をお聞きになつたんですか。」

「えゝ。……」

彼女は大きく點頭いた。

「そして何かお氣に障つたんですか。」

「いいえ。」彼女はそこの乏しい燈光の中で、涙に濡れて黒ずんだ眼を、初めてちらと小野に與へた後、また目を伏せて涙に途断れ／＼かういひ出した。

「でも、私、折角貴方好きになつたのに、……好きになつたばかりだのに、……そんなことになるなんて。……」

さういつて彼女はまた両手で顔を蔽うた。

小野はさういはれると、嬉しさと哀しさとに思はずもつと近々と、顔を寄せるやうにしていつた。

「有難う、……それはよく解りました。けれどもまあそんな所に泣いてゐないで、お母さまの所へおいでなさい。……僕だつて、どんなに悲しいか解らないんです。……泣きたいのは僕の方なんです。……」

「冬子。どうしたんだえ。」

母夫人の聲が、後に聞えた。夫人も心配して、客間から立つてきて、冬子嬢の方へ近寄つてきたのだつた。小野は少し冬子嬢から、余まり悪げに遠のいて、道を開けるやうにした。

「お母さま。」

冬子嬢は母を見ると、低いが、更に訴へるやうな叫び聲を上げて、その方に身を寄せていつた。

「だつて、お母さまがあゝ仰有つて下すつたもんですから、私、小野さんを好きにならうと思つて、折角好きになつたばかりだのに、又、そんなことになるなんて、私厭ですわ。……厭ですわ。そんなに早く思ひ切つたり、私できやしませんわ。だつて折角好きになつたところなんですもの。……」

「あゝいゝよ、いゝよ。」夫人は娘を擁へるやうにして、慰める外なかつた。「小野さんだつて決して、思つきりお前を思ひ切つていふんぢやないんだからね。さう迄お前がお思ひなら、今

まで通りでもいゝんだよ。決して心配したり、泣いたりすることはないんだよ。だからこんな所に泣いてゐたりしないで、床をとつてもうお休みなさい。定子さんたちにそんな泣顔を見られでもすると、不思議に思つて嗤はれますよ。彼方へいつて、直しておいでなさい。」

　さういはれると冬子孃は、まだ兩手を顏に當てたまゝ、併し少し恥かしげに、その部屋を出ていつた。

「ほんとに仕方がない子だね。」

　夫人はその後姿を見送つて、そんな風なことを呟いたが、また改めて小野を顧みた。

「でも、ほんとにあゝ思つてゐるんでせうから、貴方もその積りでゐてくださる外仕方がないでせうね。」

「どうも困りましたけれど、冬子さんがさう思つてゐてくだすつたことは、僕は何よりも嬉しいです。それだけでも滿足です。―

　小野は思ひがけない結果に、感激していつた。

「まあ此方へおいでなさい。」夫人は再び小野を、客間の方へ落着くやうに勸めながらいふのだつた。「兎に角、貴方はその積りで、自重して時機を待つて下さるんだわね。是で冬子の心も解つたんですから猶更ね―

「えゝ、さうします。……―

　結果は、かうした思ひがけない喜びを小野に生んだ。そしてこの第二の妨害も、却て彼には幸福を齎した以外、何の效めもなしに濟んだ。そのことに就いては、小野は天に感謝しても足りないやうな思ひだつた。

　併し、その中傷狀の差出人は、結局そのずつと後まで、永久に何處の誰だか、まるで推測だけで分らないで了つた。

　四五日經つた後で杉浦は、小野に會つた時かういつた。

「あの後で冬子さんのとつた態度を、僕は奧さんから聞いたよ。あのために君は却て幸福になつたらしいぢやないか。冬子さんはまたあんな手紙を見たくもないといつていつたさうだね。僕はそれを聞いて感心したよ。」

　彼はそれつきり、その手紙のことに就いては、何事もいはなかつた。確に彼が保管して置いた筈だが、その後どうしたか分らない。

　また後で聞いたところに依ると、それと殆ど同じ文面の手紙が、米田氏の家へ配達されたさうだ。その封筒には米田氏と共に、佐々木重吉氏にも宛ててあつたが、佐々木重樣とだけで、吉の字が無かつたといふ話だつた。それなぞも疑へばいろ／＼疑へる資料にはなつたが、結局何の證據にもならなかつた。先輩たちはそれを受取ると、夫人に見せようと思つたが、一度ああした反撥をした後でまたそんな手紙を曝し首でも取つたやうに見せることは、却て執拗いと思つたので、たゞ笑ひ話にしただけだつた。が、先輩たちは或點まで、眞實それが小野の關係した女から、きたものだと信じてゐる人もあるとの話だつた。

　兎もあれ、小野は當時その手紙の生んでくれた幸福に、ずつと滿足してゐたのだつた。たゞその時の冬子孃の態度を、後に柳井に話したところ、彼は例に依つて淀んだ冷やかな眼を上げ、心もち眉をひそめていつた。

「さうかい。それはまあ君にとつては幸福だつたね。けれども、僕にいはせると、決してケチを付ける譯ぢやないが、どうも冬子さんつていふ人は、無意識かどうか知らないが、芝居氣が多過ぎるやうだね。―勿論こんなことをいつたつて、君は僕の言葉を承認しやしまいが、どうも一種のコケットぢやないかね。さうしてさういふところは僕なら好かんね。」

　勿論、小野はそんな柳井の言葉なぞを、不服でこそあれ、採り上げはしなかつた。そして冬子

懷いてゐた時の態度に、感謝こそすれ決してそんな疑念などを挾む餘裕はなかつた。

第十二章

一

それから二三ヶ月の間は、小野にとつて、最も幸福なる時機ともいふべきものであつた。意想外の反對は、また却つて意想外の好結果を小野に齎した。小野もうその夜から、殆ど冬子孃の内諾を得たと同じやうな、許された狀態になつた。

弟子たちが男つ氣のない勝見家へ、宿直する制度はまだ廢されなかつた。そして小野はその宿直の番を、日曜日の夜にもつてゐた。

彼は日曜になるのを待ちかねて、早くから牛込の勝見家へ出かけて行つた。その外の日にも時々には行つたが、公然と殆ど一人で、夫人や冬子孃と親しく、語り得る日曜日の夜は、彼にとつて地上の天國のやうな思ひだつた。

その頃小野は、神田の或る中學校に講師を務めてゐた。そして安い報酬に係らず、忙しい多くの時間を持たされてゐた。で、日曜日は殊に、彼にとつて樂しい日だつた。そして大抵お晝頃から勝見家へ行つて、或ひは夫人や令孃たちと一緒に、音樂會とか展覽會とかの催しに行つたり、または活動寫眞とか芝居とかの見物に出かけたり、または銀座だとか三越だとかへ、買物に出かけた。大抵の場合、そんなときには黑田か杉浦も一緒だつた。が、最後に、牛込の奧なる勝見家へ、家族と一緒に歸つて來て泊るのは、宿直番の小野一人だつた。

さうした一日の行樂から、歸つて家に落着くと、輕い疲勞と共に人々は、ほつとするやうな落着きと、一種の親しさを互に感じ合ふのが常だつた。そして寢る前の數時間を、熱い茶でも飮みながら、その日の出來事を中心に、四方山の話をし合つて、沁みりと打興じるのが常だつた。家の人々――といつても子供たちだけだが、それらの人々は既にそれ／＼寢て了つて、話に殘るものは大抵夫人と冬子孃たけだつた。三人は殆ど家族のやうに、親しい心持で晩くまで話し込んだ――それはそんな遊興のために外出しない晩でも同じだつた。さういふときにも矢張り、客が去つた後、子供たちが寢靜まつた後、暫くは三人のみで語り合ふのが例のやうになつてゐた。就寢するのは、大抵十二時近くだつた。

しかも、夫人は大抵先に、隣りの寢室に引込んで、小野が宿直すべき書齋には、冬子孃と二人が暫く取殘された。夫人と小野とが「お休みなさい。」と挨拶し合つた後、小野の寢卷に着換へるために脫ぎ捨てた衣類を、冬子孃が疊んで行つてくれるためだつた。或る時小野は、夫人に拵へて貰つた銘仙の揃ひを着てゐると、

「冬子、お前小野さんの着物を、ちやんと疊んで上げてからお休み。折角、新しい袷が皺になるといけないからね。」

と、夫人がいひつけてくれたので、その後ずつと後まで、冬子孃が小野の枕許で、脫ぎ捨てた着物を疊んで行つてくれる例を開くことになつた。夫人はさういつて、粹をきかしてくれた人のやうに、自分はさつさと寢室へ入つて、寢支度にかゝつて了ふのであつた。

小野は寢卷に着換へて了ひながら、そこの傍で丁寧に衣服を疊みつけてゐる冬子孃を、もう二人で家庭を作つた時のことまで豫想して、樂しく享樂することができた。――彼女も、入學試驗の少し前に風邪で熱を出したため、準備が十分できなかつたので、もう音樂學校へ入る希望などは棄てて、卒業後を只管家事の手傳ひをしてゐた。だから他の人々の反對もなく、また

この上故障さへ起らず順當に進めば、遲くも一年位後には、さういふ小野の豫想も實現されさうであつた。しかもかうして殆ど許されたやうに、小野の寢室で二人話し合ふことは、小野の心を漫ろな夢心地にまで湧き立たせるに十分だつた。彼は、

「御免なさい。」

といつて、身體を半ば蒲團の中に入れながら、すぐ枕許の疊の上で頻に疊み直し／＼してゐる、どちらかといへば器用でない冬子孃の手と、俯向き加減になつて、時々前髮にかくれる仄白い額を、沁々と覗き込んだ。心なしか、彼女の疊むのには永い間かゝつた。手を伸ばして丈を展したり、手で叩いて折り目をつけたりする度に、彼女の平常着の八ツ口が、なまめかしいといふよりは、寧ろ清く綺麗に動いてゐるが、それが小野に堪へられないやうな、愛の衝動を起させるに十分だつた。彼女は一つところを疊み終る度に、上目使ひに小野を見やつては、微笑と共に低い聲で話しかけるのだつた。

「……この頃學校の方はどう？　少しはお馴れになつて？」

話はそんな風な所から始まるのだつた。

「いえ、相變らずヘマばかりやつて、生徒に馬鹿にされてゐます。一體僕には先生なんてものは、柄にないことなんですね。是がまア衣食の道だからと思つて、苦しいけれど仕方なくやつてはゐますが、つくづく嫌になる時がありますよ。早く僕もこんな下等な教師なぞはやめて、どうかして立派に食つて行けるやうにならなくちや駄目ですねえ。それでないと、貴女と家庭を持つなんてことは到底望まれることぢや無いんですからねえ。考へると少しは心細くなりますよ。貴女は僕がどんなに貧乏してゐても、僕のところへほんとにきてくれるかしら。……」

「えゝ、それや貧乏なんて、何でもありませんわ。」冬子孃は袖口を疊みかけてゐる手を、その儘止めず此方を見ないで、慰めるやうにいつた。「でもそんな心配はなさらなくてもいゝんでせう。お母さまはさういつていらしたわ。……貴方と若し家庭を持つやうになつたら、貴方が、そんな厭な仕事なんぞしないで落着いて勉強できるやうにして上げるやうにするつて。」

「でも、さう仰有つて下さるのは有難いけれど、それをばかり頼りにする譯にはいきませんからね。僕だつて一人で自活の道をもつて、立派に養ふべき人は養つて行きたいですからねえ。でなければ、ほんとの生活でなく、眞實の幸福は得られないかも知れませんからねえ――まア僕も少し勉強して、貴女を[illegible]と迎へ得るやうに、一刻も早くなりたいと思つてゐますけれど、なかなかさううまく行きさうもありません。貴女もどうかそれまで、氣[illegible]ないやうにして待つてゐて下さい。その中にはきつとその時が來ますから。……」

「えゝ、待つてゐますわ。」彼女はちらと目を上げて、小野を見守つた後いつた。「だから貴方も早く、誰にも何ともいはれないやうに成つて頂戴。……でも、そんなに心配して急くことはないわ。今の中は厭でも我慢して、學校の方だつてお勤めになる方がいゝんだわ。何にしろ經驗だつて、お母さまも仰有つてゐたわ。――貴方、學校では一體何年をお教へになつていらつしやるの。」

彼女は無意識ながら、輕く話頭を轉じた。

「二年と三年と五年。それから他の先生が休むと、その補缺にどこへでも出るんです。だから忙しくて堪りません。僕らの同じ教師でも、漱石先生が松山へ行つてやつてゐたやうなのとは、まるで境遇が違ふんです。」

勝見家の人にとつては、嘗て漱石先生も學校を出たてには、中學教師だつた經驗があるので、すべ

もすると中學教師といふものは、理想化する傾向があるので、小野はさういつたのだつた。
「でも、生徒は可愛いでせう。可愛い子もゐるでせう。」
「さうですね。一年の生徒だと、非常によく懐いてくれて、相應に可愛いと思ひますがね。生意氣ざかりの四五年あたりになると、若いのと語學が怪しいのとで、すつかり馬鹿にされさうなんで、寧ろ不愉快で憎い位です。この間も豫習して行かなかつたら、つい間違つた讀み方をして、まんまと誤譯指摘をやられましてね。一代の面目を失ひましたよ。」
「さう？　生徒にもやつぱり原田さんのやうなのがゐるのね。」
冬子孃は、前に在つた誤譯指摘事件を思ひ出して、そんな冗談をいつた。
「どうして、なか／＼東京の中學生は辛辣ですからね。」
小野は苦笑する外なかつた。
「私、貴方が教授してゐるところを、どんな樣子だか見たいと思ふわ。」
冬子孃はまた話を變へるやうにいつた。
「眞つ平ですよ。そんな所を見られたら、一ぺんに愛想を盡かされて了ひます。尤も見せたいたつて、見せられやしませんがね。だが、教室でもよく僕は、貴女のことを思ひ出すんですよ。」
「あら、どうして？」
彼女は疊み終へた着物の上に、のしかゝるやうに手をついて、鳥渡目に媚を含ませながら、小野の方を窺つた。
「譯讀の時なぞは、そんな餘裕は迚もありませんがね。英作文なぞの時、生徒に問題を出して、それを書かしてゐる間なんぞ、ふいと今貴女は家で何をしてゐるだらうなんぞと思ふことがあるんですよ。すると、向うの薄暗い教室の隅だとか、黒い黒板の奧の方に、ぼんやり貴女の姿を幻出することさへあります。何しろ教室でそんなことを考へるなんて、全く良くない教師ですね。」
「だから馬鹿にされるんですわ。……」
「…………」
二人はそんなことを話し合うて、やがて彼女が着物を疊み終ると、それ／＼寢に就くのだつた。が、その中に、着物を疊んで了つてからも、晩くまで話し合つてゐることもないではなかつた。
彼女は疊み終つた着物を、向うの室の隅の座蒲團の下へ、重したかつて了つた後、小野のもう寢てゐる枕許へ、近々と躙り寄るやうにして、額を眞上から覗かせながら、
「もうお眠い？」
と訊いたりした。
「いゝえ、ちつとも、もつと話して行つて下さい。」
小野はその方に向いて、眼を見開いた顏を、美しいものに見返しながら、幸福に上づつた聲で答へるのだつた。
「私もまだ、ちつとも眠くないのよ。」
かういつて彼女は、少し身體を小野の方へ崩しかけるやうにした。
小野はそつと手を伸ばして、彼女の枕邊に近く疊の上についてゐた手を、默つて靜に取つた。彼女も默つて取るがまゝに任してゐた。その位のことは許されてもいゝ位なことは、二人の間にも了解されてゐた。
「池田さん御夫婦は、隨分仲がいゝんですつてね。池田さんは奧さんを、それや可笑しい位可愛がるんですつてね。杉浦さんがさういつてたわ。」
彼女はやゝあつて、そんなことをいひ出した。
それは謂はゞ時宜に適つた、一つの聯想には違

ひなかつた。

「さうですつてね。僕はまだ會はないから知りませんが、さういふ話ですね。併し何しろまだ新婚後一ケ月と經たないんだから、無理もないですよ。それに池田といふ男は、吾々の仲間でも良人としては、一番いゝ人間かも知れませんよ。何しろ彼奴は、初めから結婚なんてものに、少しも幸福な豫想を抱かないで、謂はばまア世間の義理とか、また物質上の得とか、さういつた動機で貰ふんだと公言してゐた癖に、貰つてみると世にも幸福な、非常に細君を愛する良人になるんだから面白いですね。今度の結婚だつて、人から勸められて、仕方なしに貰ふ氣になつたらしいですがね。」

小野はそんな風に說明した。

池田は彼が前にいつたやうに、四月の末に故郷の方で、土地の鳥渡した豪家の娘と、結婚式を擧げて來た。その頃まだ一介の社會部記者に過ぎなかつた彼は、自分が厄介になつてゐた川瀨氏の古いフロックコートを仕立直して——それは可なりいゝ地のものだつた——生理的にも餘りさうした要求のない自分が、果して結婚生活なぞをする資格があるかどうかを危みながら、西の方へ下つて行つたが、それから一週間ばかりすると、小野は一通の葉書を彼から受取つた。それには例の可なり書きつ放しな字で、萬事はウマク行つた。細君に對しても愛を感じることができた。安心してくれ。と書いてあつた。しかも葉書で！　小野はその文面に見入りながら、自分たちの仲間の中で、恐らく一番結婚生活に興味をもたなかつた彼が、——それは彼は自分の顏を、如何なる女にも愛されることができないものと、謬つて信じてゐた故だつた。——一番先に結婚して、しかもそんな打開けた葉書を寄越したことに對して、涙ぐましい程嬉しいやうな、心からの微笑を禁じ得なかつた。……

「結婚生活つて、きつとさういふ風なのが却つていゝんだわ。」

冬子孃はそれを聞くと、少し揶揄ふやうな心持も交へて、そんな風に感想を述べた。

「いや、そんなことはありませんよ。」小野は自衞のために抗辯しなければならなかつた。「結婚は戀愛の墳墓だとか、戀愛結婚は破れ易いとかいひますが、それも人に依つてのことですからね。池田のやうな男は、あれで今のところ、どこまでも生活に謙遜で、現狀に滿足して行くといふ心掛けをもつてゐるから、あゝいふ風な結婚をしても、それで幸福なんですよ。けれどもあゝいふ結婚生活が、ほんとに何時までも幸福かどうかは解りません。といつて僕たちが、まア假りに家庭を營むことになるとしても、幸福だかどうかは解りませんがね。少くとも僕は幸福ですよ。そしてできるだけ貴女も幸福なやうに努めますよ。」

「小野さん、貴方一生私を倦きない自信がおありになる？」

彼女は突然そんなことをいひ出した。

「えゝ、あります。ある積りですがね。」

「でも、何だかアテにならないわね。私には何だか、その池田さんつて人のやうなのが、一番いゝやうな氣がするわ。」

彼女は幾らかわざと、微笑を含ませていつた。

「さうでもありませんよ。是で僕だつて、良人としては可なり善い良人になつて見せますから。」

「どうだか。——」

彼女は更に挑むやうにいつた。

「そんなことをいふと苛めますよ。」

小野は取つてゐた彼女の手を、力を入れてぐつと引寄せると、向うも強く引込めようとする努力に抑へつけて、その手の甲へ、唇を押し當てた。冬子孃は少し手を藻搔くやうにしたが、

唇を押し當てられると、もう觀念したやうになすがまゝに任せてゐた。……

　こんなことで、二人つきりになつてからも、いつまでも話をしてゐたので、或夜は大人に次の寢室から、から戒められさへした。大人はもう先に、床に就いてゐたらしかつたが、いつまでも二人が起きてゐるので、襖越しに聲をかけたのだつた。

「冬子、何をしてゐるんだい。もうお休み。」

「はい。——」

　彼女は叱られて初めて氣がついたやうに、急にてれて立つて行つた。

「小野さんもいつ迄もそんなに冬子と話してゐて、何か間違つたことをなすつちやいけませんよ。」

　大人は猶そんな注意をさへ、小野に向つて加へた程だつた。

「はア。そんなことは決してしやしません。」

　小野はすつかり赤面して、身を小さくするやうな思ひで、さう答へなければならなかつた。

　しかしかうした樂しい二人きりの密語は、小野が豫見家へ泊る度毎に、許されたやうに續けられた。そして、それは小野の戀の、謂はば絶頂にあるものだつた。

二

　有樂座で、小野の依囑されて書いた結核豫防劇が、上演されたのもその頃だつた。

　それは小野の同じ方の先輩に當る永井氏が、嘗て父君の關係してゐたところから、西里博士や北島博士らがやつてゐる、肺結核豫防協會といふものの依頼を受けて、東京に於て初めて試みた宣傳劇だつた。そしてその舞臺監督には、やつぱり小野の先輩で、その方面の權威である小宮山氏が當り、その劇の作者には小野が手頃であるといふので、永井と小宮山の兩氏から、囑託を頼まれたものだつた。

　勿論小野は、さういふ社會的な宣傳劇などには、もとから多大の興味をもつてゐたので、喜んでそれを引受けた。そして漱石先生門下の、表だけ藝術的操守の固い連中からは、益々通俗劇の作者になるとの嘲笑を受けながらも、熱心にその「通俗劇」の脚色に從事した。協會からは色々な參考書を送つてよこした。小野はそれらを參考にして、兎に角一つの筋を作り上げた。それは宣傳劇の必要上、かなり程度を引下げた代物だつた。が、それでも自分としては、さうした問題劇の無味乾燥に陷るよりは、その方がいゝと信じてゐた。そして更に、その筋の中に採り入れた單純な戀愛問題などが、それを身に沁みて書いた點で、少しは藝術的な滿足もあつた。

　それはかういふ筋だつた。ある實業家に一人の美しい令孃があつて、それに許嫁の醫學士があつた。その醫學士は肺結核の權威たる某醫學博士の門下の秀才だつたが、令孃はその人を捨てて、亞米利加がへりの少壯銀行家で美男の、ある男と戀に陷り、そつちへ行きたいといひだす。父の實業家は、もとより醫學士の才幹を認めてゐるので、娘を百方說諭したが、どうしても肯かないので、仕方なしに内實同樣にして、娘の意志通りにさせる外なくなる。で、仲人役たる醫學博士と、その當の醫學士とを呼んで、事情を話して娘のことは諦めて貰ふやうにいふ。そしてその代り、——といふ譯でもないが、——凡てを忘れて研究に沒頭するやうに二人の後援で獨逸へ留學させるやうに勸める。醫學士は二人の勸めに從ひ、その花のちら〳〵散る夕、失戀の底から涙を振り拂つて、すぐ研究のため獨逸へ行くことに決する。

　そして數年の研究を終へて、歸つて來て博士の下に副院長のやうになつてゐると、そこへ偶

然、前に自分を捨て去つた女が、結核にかゝつて治療を受けに來る。けれども醫學士はその人に對して、決して前の恨みなどは抱くことなく、唯一個の患者として、飽く迄深切に熱心に治療に從事する。そしてその結果、殆ど不治といはれた結核も、たうとう全快して了ふ。一方その女と結婚した銀行家は、すぐ飽きて了つた上に、女が肺病にかゝつたり、色々なことがあつて離縁めいたことになつてゐたのが、悔いて再び復縁を求める。醫學士も喜んで元の鞘に收まるやうに勸める。結局、二人は又もとの平和な家庭へ歸り、醫學士の恩を徳として、數十萬の寄附金を以て、醫學士のために茅海岸へ理想的な療養所を作らす。その盛んな開場式を以て幕を閉ぢる。——

その外にも、色々な傍筋はあるが、骨子はそんな風なものだつた。

それは無名會といふ、東儀一派の新劇團で、五日間有樂座に上演されることになつた。その頃は小野も、さうした特殊な自分の作品でも舞臺にかゝることそれ自身が、既に胸が躍る位嬉しい時期だつた。而して殊には勝見家の人々に、自分の書いた芝居を見せ得るといふことが、その作品の價値如何に係らず、二重の喜びを禁じ得ないものだつた。

その日になるのを待ちかねるやうに、小野は勝見家の人々をその芝居に招待した。

一家の人々は、一度では人數が多すぎるといふので、二日に分れて見物することになつた。第一日目は夫人の外に柳町の伯父さんの長三氏と勝見家の男の子たちと、そして杉浦とが行くことになつた。初日は、どの芝居でも、何となく騷がしい中にも、輝かしいものだつた。だからその日にこそ、小野は冬子孃たちを連れて行きたい氣もしたが、それも止むを得なかつた。

芝居には、可なりよく稽古が積んでゐたので、相應によく見られた。そして小野が巧んだヤマへ來ると、觀客の多くは可なり感動した。泣いてゐるものも、尠くはなかつた。

勝見家の子供たちも、まださうした人情などはよく解してゐないに係らず、副人物として小野が描いた、ある活潑な新時代の女性の擧措や言動には、他の見物と一緒に連れて笑つた。そして自分と同じ位の少年が、ある裏長屋に住んでゐて、療養上の迷信と手遲れのために、父を肺病で失ふところなどへ來ると、さすがに眼に涙を溜めて見てゐた。彼らは少しも退屈はしなかつた。それに小野は一種の安心と嬉しさとを覺えた。

「なか／＼面白い芝居ですね。」

長三氏もお世辭でなく、いつた。

「割りによく出來てゐるわね。」

夫人も相槌を打つてくれた。たゞ杉浦だけが微笑とともに、冷かすやうにいつた。

「相變らず小野式の甘さと、名ゼリフがあるね。それに最近の述懷が隨分澤山あるらしいんでやり切れない。」

しかし小野は可なり滿足してゐた。

第二日目には、また夫人が、令孃たちを引具して、見物に來てくれることになつた。そして一つは冬子孃の望もあつて、池田夫妻を招待することにした。自分たちの戀愛の、謂はば劇外劇の、見物に使ふやうで惡い氣もしたが、かういふ機會に池田夫妻に冬子孃を紹介したい慾望もあつたのだつた。が、池田は、それを察したかどうか、細君を連れては來なかつた。

美しく着飾つた令孃たちが、ずらりと並んで腰を掛けた側に、同じく腰をかけて見てゐる小野は、いふまでもなく可なり幸福だつた。そして得意でもあつた。見物は、協會員たる市内の醫師の家族や何かが主で、可なりいゝ階級に屬してゐた。そして美しい人もなか／＼多かつ

た。が、四五人の令嬢が、年齢は違つても、一團になつてゐる勝見の一家は、可なり人目をひいた。それも小野には、何となく嬉しかつた。

かういふ場所へ來ると、令嬢たちの間でも、殊に派手な顔だちの二番目の定子嬢が、引立つて見えた。それに少女から乙女に移り際の、すんなりした三番目の令嬢の姿も、水際立つて見えた。それに比べると冬子嬢は、寧ろ陰氣に沈んでは見えたが、その内輪な淑からしい容姿は、落着いた姉らしさを以て、やつぱり小野の選擇を誤らせないことを感じさせた。顔だつて、これだけゐる見物の中で、美醜の客觀的比較はいざ知らず、感じは一番い丶、と、そんな風にすら小野はひそかに思はざるを得なかつた。――兎も角も彼は、かうして自分の戀人と竝んで、自分の芝居を見る機會を、この上なく天に感謝したかつた。

芝居が始まると、令嬢たちは熱心に、舞臺から眼を離さなかつた。が、小野は屢々舞臺と令嬢たちとの顔を、等分に見比べて、その反應を心配しなければならなかつた。令嬢たちは割合に、面白がつて見てゐた。そして行儀よく少しも傍見などはしなかつた。たゞ、一二度冬子嬢が、小野の方を顧みて微笑して見せた。それは小野が、特に實際今もつてゐる戀愛に對する感想めいたことを書いたところで彼女も思ひ當つたに相違なかつた。そしてそれを小野に傳へたものらしかつた。

三幕目の世話場へくると、見物に先んじて令嬢たちは手巾を取出した。中にも、まだそんな感情はさう湧かせまいと思つてゐた、一番末の悪戯ざかりの令嬢が一番早く啜り上げ始めた。――それも小野には嬉しいやうに感ぜられた。しかし冬子嬢は、一番遲くつ丶ましやかに涙を拭ひ始めた。それも小野には却て頼もしかつた。

幕間に池田と會つたら、彼は小野にかういつた。

「冬子さんつて、思つた程シャンぢやないが、割りに感じはい丶ぢやないか。」

「さうかい。」小野は少し擽つたいやうな顔をしていつた。「どうして今日は細君を連れて來なかつたんだい。」

「恥しいからつて、どうしても來ないんだよ。僕も強ひて連れて來なかつた。僕の家内なんぞは、一個の家婦に出來てるんだからね。かういふ晴れがましい所へ出て來るのは、向うでも厭なんだらう。」

「さうかい。でも、それは殘念だつたね。僕も今日はお目にか丶れると思つてゐた。」

「僕のは君のなんぞと違つて、得意になつて人に見せたい程の家内ぢやないよ。」

かう池田は、温かい皮肉をいつて、聲のない笑を笑つた。それにも小野は滿足の笑顔を、合せなければならなかつた。

最後の幕が濟んで、皆一緒に家へ歸つてからも、何かと芝居の批評めいたことが出た。

「少し淋しいけれど、でも、隨分よかつたわねえ。」

勝見家の令嬢たちよりも、幾らか芝居とか小說とかに馴れてゐる長三氏の娘の、智惠子嬢がそんな批評を下した。

「私泣くまいと思つてたけれど、やつぱり泣いちやつたわ。」

二番目の定子嬢がいつた。

「博子さん。」と、夫人もその會話の中に入つて、一番末の令嬢の名を呼んでいつた。「貴女が一番早く泣きだしたわねえ。平常きかん坊のくせに、悲しいなんてことが解るの。」

「それやア解るわよ。」末の令嬢は口を尖らして、同意を求めるやうに三番目の令嬢を顧みた。「ねえ。」

「え〵。」と三番目の秀子孃もそれを受けて「だつて、誰にだつて、悲しければ悲しいわ。」

「だけど。」と冬子孃は口を挾んだ。「まだ誰も泣かないうちに、壽子さんが一番先に、大きな聲で泣きだすんですもの。私、皆に見られるやうな氣がして、恥しくなつちやつたわ。」

「それやあ、大きい姉さんはエライわよ。」

末の令孃はまた口を尖らした。

冬子孃はその攻撃にもめげず、更にいつた。

「私、あの幕は、そんなでもなかつたわ。それよりか却て、一幕目の方が可哀さうだと思つたわ。」

「へ〵え、さうですかね。どうしてです。」

小野は受けた。一幕目といふのは、主人公の醫學士が、失戀を宣告されて獨逸へ行く決心を定めるところだつた。

「だつて可哀さうだつたわ。」と、幾らか小野だけに聞えるやうに、低い聲をしていつた。「あの女の人、隨分憎らしいのね。どうしてあんなに惡く、あのお孃さんをお書きになつたの。」

「だつてさうしないと芝居になりませんからね。」

「でも、あのお醫者さん、貴方御自分の積りなんでせう。」

冬子孃は小野に、揶揄ひ半分ながら、半ば眞面目に追究して來た。

「さうでもありませんけれど、……」

小野はわざと曖昧に、微笑で濁した。

「いえ、きつとその積りよ。ですけれど、貴方がもしあ〵いふ目にお遭ひになつたら、やつぱりあのお醫者さんみたいに、一生懸命勉強なさる？」

「さあ、どうですか。意氣地がないから、できないでせう。しかしどつちにしろ、あんな目には遭ひたくないもんですね。」

小野も半分眞面目で答へた。

「それに、あんな女の人はゐないと思ふわ。」

そんなことで、その場の話は濟んで了つたが、その對話が後になつて、讖を成さうとは、小野も、或ひは恐らく冬子孃自身も全く知らなかつたであらう。或ひはまたその頃から既に、冬子孃の心には、潜在的にさういふ心が潜んでゐ、またそれを本能的に豫知して、小野も自分の境遇を、その芝居に擬へてゐたのかもしれない。……

しかし小野としては、その頃は表面の事實上、夢にもそんなことを感じなかつた。幸福な時代だつた。得意な時代だつた。而してまさかにそんなことはあるまいと思へばこそ、そんな芝居を書いて、最惡な場合を想像して、享樂してゐたに過ぎなかつた。兎に角それは小野の戀愛の、黄金時代ともいふべきものだつた。

先輩は蔭ではいざ知らず、もうそれつきり強ひて、小野の問題に就いて反對しようとはしなかつた。曲折を經た小野の戀は、波瀾の後の平衡狀態を以て、その儘ずつと過ぎつ〵あつた。そして猶も順調に進んで行きさうに見えてゐた。

季節の移は、かうしてゐるうちに、いつとはなく過ぎ去つて了つてゐた。が、小野にとつてはその春が、短くしてしかも永いものだつた。彼の心にはいつまでも永く、その春が殘つてゐる思ひがした。

第十三章

一

やがて、重苦しく、甘く、惱ましかつた春は去つた。そして夏は來た。勝見家の庭では、先生が遺愛の芭蕉が、巻いた葉を鞭のやうに伸ばし始め、梧桐が仄黄いろい綠を一面に擴げた。小野の心もいろ〳〵な波瀾を經て幾らか新綠の

やうに明らかになつてゐた。

　七月には、黒田と杉浦とが大學を卒業した、二人は柳井や小野と同期だつたが、中途で怠けて休んだりしたために、一年遲れたのだつた。だから學校を卒業したつて、別に平常と變りはない程だつたが、兎に角目出度く、學士號だけは得た譯だつた。

　黒田は、當時既に侃々諤々の文學論を以て、有名な新進評論家であるに係らず、一方又少なからず政治的方面へも趣味をもつてゐたので、法科に席を置いてゐたのだつた。そして卒業と同時に、瀨戸の養家の方へ歸つて、養父のやつてゐる鳥渡大きな釀造會社の、事務を助けなければならない筈になつてゐた。が、希望と元氣に充ち滿ちた彼に、さうして地方の家へ引込むのを欲しなかつた。それで彼はその儘、養父の意志に反對して、東京に停つて職業を見つけることに決めた。そして幾ら歸れといはれても、決して瀨戸へ歸らうとはしなかつた。それでたうとう養父と喧嘩をして、自分一人で生計を得なければならなかつた。黒田の許婚だつた人も、黒田が養父と衝突して東京にゐることになると、彼女もまたその家を去つて、黒田の許に投じて來た。彼女もその年に音樂學校を卒業してゐた。そして貞淑な一本氣から、親を棄てても飽く迄許婚たる黒田に一生を託したのだつた。さう美しいといふ程ではなかつたが、色白の大人しい感じのいゝ人だつた。黒田はその人を、さう深く愛してゐるといふ譯でもなかつたが、さうして萬事を棄てて自分の所へ來り投じられては、彼も心を動かされずにはゐなかつた。彼等は谷中の閑靜な場所に、妾宅の跡のやうな家を見付けて、そこに樂しい同棲生活を營むことになつた。

「せめてピアノの一臺も置いてやりたいんだけれど、今の狀態では迚もそんなことはできやせん。暫く彈かないでゐると、指が硬ばるさうだから、どうにかしてやりたいと思つてゐるんだがね。」

　黒田は何かの折に、皆の前でそんなことをいつてゐた。彼は當時、Y新聞社の社長を知つてゐたので、その傳に依つてそこの論說記者になつてゐた。そして大學を卒業したばかりの、若い無經驗な記者としては、彼の文藝評論家としての名聲の爲に、地位も收入もかなり優遇されてゐた。

「黒田は、何のかのといつても、幸福だね。」

　小野はそんな話の後で、自分の身と引比べながら、述懷めいていふのだつた。

「さうね。」と、傍にゐた啓子夫人も相槌を打つやうにいひ出した。「結婚生活ではひよつとすると、黒田さんが一番幸福かも知れませんわね。何しろ奧さんは家を棄ててまで、貴方の方へきていらつしやるんですもの。考へて見ると、貴方もなか〳〵色男なのね、これで。」

「何を仰有るんです。」黒田は籣高な調子で、頭を掻くやうにしながらいつた。「そんなことがあるものですか。それやア僕だつて、あゝいふ場合になれやア、人生意氣には感じますがね。併しかうなつて見れやア、幸福どころか、かなり荷厄介ですよ。」

「贅澤仰有い。貴方みたいな人を、たつた一人頼りにしてゐるんだから、よつぽどよくして上げなくちや濟みませんよ。」

　夫人は窘めるやうにいつた。

「さういふ荷厄介なら、僕も背負ひ込んで見たいな。」

　小野は冗談めかして、そんなことをいつたりした。

　兎も角もそんな譯で、黒田は一番先に家庭を作つて、落着いたのだつた。

が、杉浦はさうはいかなかつた。彼の卒業したのは哲學科だつた。彼の家が越後のある寺だつたので、彼の家では長男である彼に、佛教哲學か何かを研究させて、天晴れ一宗の碩學に仕立てて、寺を嗣がせようとする積りらしかつたが、彼も亦黑田と同じく、自分の家の寺へ歸つて、僧侶となることを欲しなかつた。けれども、卒業して了つて見れば、何は兎もあれ歸省しなければならなかつた。彼は暫く愚圖々々はしてゐたが、故鄕の方から頻に歸れといつて來るので、たうとう一とまづ歸鄕することに決めた。

「……何でも故鄕の方ぢやア、細君の候補者まで探してあるらしいんだよ。」

杉浦は愈々歸ると決心した時、小野に會ふとそんなことをいつてゐた。

「さうかい。そいつは困るね。でも、いゝんだつたら、貰つて來てもいゝぢやないか。」

小野もこんな風に答へた。彼は何となく杉浦に濟まないやうな氣持と共に、杉浦に對してまだ淡然たる競爭者意識があつたので、杉浦が兎も角も別な細君を貰ふなら、貰つてくれた方が安心だと思つてゐた。

「うむ。けれども俺には、細君を貰ふなんて興味もない。――貰つたら君も安心するだらうがね。」

杉浦は例の暗いにや〳〵笑を浮べて、冗談らしくさういつた。彼は小野の內心の心持を、幾らか察してゐたのだつた。

「うむ、それはさうだね。」

小野は暖かい苦笑と共に、すぐそれを肯定せざるを得なかつた。

「俺も時々はいつそこの儘故鄕へ歸つて、兩親の言ふ通りの細君でも貰つて、家へ引込んぢまはうかとも思つてゐるよ。そして小學校の先生か何かしてゐる方が、却て幸福かも知れない。」

杉浦は訴へるやうにそんなことをいひ出した。さういはれると小野は、譃にも、さうだね。とは相槌も打てなかつた。そのときの小野の眼には、さういふ杉浦の心持が、幾らか解れば解るだけに、自分の幸福と比べて、この友に濟まないやうな氣がしてならなかつた。

「そんなことはないよ。君だつて東京に踏み止まつて勉強さへすれア何とかなるよ。僕だつてさう思つて、石に齧りついても頑張つてゐるつもりなんだ。今からそんな歸去來の心なんぞ起しちやア駄目だよ。だから君も、一旦まア故鄕へ歸つて、家の方は何とか話をつけて、早くまた東京へ出て來いよ。できることなら僕も、さういふことになるやうに向くまで盡力するから。」

「うむ。なるべく早く出て來よう。僕だつて田舍へ引込むのは厭だからな。いづれ、何分とも宜しく頼むよ。何でも、差し當り食つて行けるやうな口でもあつたら、早速知らせてくれ。すぐにも出て來るから。」

「さうか。」小野は鳥渡言葉を切つて、それから前に思ひついてはゐたことだが、改めていひ出した。「それならどうだい。君さへ差支なければ、勝見さんへ家庭教師に置いて貰つたら。君が嫌でなかつたら、僕から奥さんにさういつて、願つて見てもいゝぜ。きつと奥さんも喜んで承知するよ。向うでも君なら、よく氣心も解つてゐるし、新太郎ちやんも淳二君も懷いてゐるから、雙方都合がいゝだらうと思ふんだ」

「うむ。それやア願つてもない好都合だがね。何なら君から機を見て、一つ奥さんにお願ひしてくれ給へ。それだけでも定れば、一旦家へ歸つて、何とかして出て來るから。」

「承知した。ぢやア機を見て、お願ひして見よう。」

「何分よろしく頼む。」

さういふ話をし合つた後、杉浦は七月半頃

に、越後の家へ歸つて行つた。別に永い別れでもなかつたが、散歩がてらに小野は送つて行つて、停車場前の小さいレストランで、ビールを一杯づつ飲み合つて別れを告げた。

「おやアまた早く上京しろよ。」

「うむ。——」

杉浦は口數少く別れて、改札口を入つて行つた。……

その後影を見送つて、小野は踵を返すと、何とはなしに感傷的な思ひに、だん〴〵包まれて來た。杉浦を、自分の競爭者としては考へない迄も、何となく敗れて歸る人を、見送つたやうな氣がした。自分が彼を犧牲にしたとは、決して考へないまでも、何だか濟まないやうな、氣の毒のやうな思ひが自ら湧いた。と同時に、杉浦には濟まないが、何となく彼を見送つて了ふと、吻と安堵するやうな氣持を覺えたことも、意識せずにはゐられなかつた。その頃は、小野はもう杉浦を、決して競爭相手としては考へてはゐなかつた。寧ろもつとすれば、一種の濟まない感情と、自分でも知らぬ程度の優越意識をもつてゐたに過ぎなかつたらうが、兎も角も彼が去つて、これから當分小野一人で、勝見家の恩寵を獨占し得ると思ふと、何となく邪魔物が去つたやうな氣がしないではなかつた。杉浦に對する氣の毒な感情も感情だつた。が、それと同時に彼は、自分がこれから益々幸福であることを思ふと、やうやく夏らしく輝き初めた白日の下を歩きながら、彼は友と別れた淋しさを越えて、何ともいへず感傷的な祝福の氣持に浸りながら歸つて來た。「杉浦が永久にこの儘故鄕にゐてくれたら。——」その心の底では、ひそかに本能的にかう呟くものがあつた。が、併し心弱い小野は、さう利己本能の命ずるまゝに、強くさうした考へを、高潮する勇氣などは更になかつた。却てすぐに、その利己的な内心の囁きを悔いて、自ら責めるやうな氣持になつてゐた。そしてその償ひとして却て、杉浦のために盡力しなければならないとさへ思つた。——さういふ所が小野の性情の、最もよい所であると同時に、また最も惡い所であつた。

翌日、小野は勝見夫人を訪ねて、早速杉浦の爲に家庭教師として、その家に置いてやつてくれるやう、内意を尋ねた。夫人はもとより喜んで承知してくれた。

「——さうですか。それやア丁度ようござんすわ。今年も新太郎と淳二を、葉山へ海水浴にやる積りで、伯父さんとこの圭之助さんを、——(それは長三氏の長男で、名古屋の高等學校へ行つてゐる靑年だつた)泳ぎの方の目附役に賴むことになつてゐるんですが、その上に杉浦さんが行つて、學科の方なり何なり監督して頂ければ、この上もない好都合ですわ。だから御都合のいゝ時、いつおいでになつてもようござんすわ。」

「有難うございます。お蔭で杉浦も助かります。」

小野は夫人の承諾を得たことを、吾がことのやうに喜んだ。そしてその旨を早速、歸鄕してゐる杉浦の許へ知らしてやつた。

それから一週間ばかり經つと、折り返し杉浦から手紙が來た。それは勝見家方小野宛にしてあつて、かなり長い手紙だつた。

その中には、彼が歸つてからの、不快な故鄕の狀態や、有難迷惑な結婚談や、父母の思惑などが、いろ〳〵と書かれてあつた。そして一刻も早く、さういふ周圍から逃れて、また東京へ出たいと思つてゐたところへ、小野からの手紙が着いたので、救を得たやうな心持で、非常に嬉しかつたことや、いつに變らぬ勝見夫人の同情や、小野の盡力などを非常に感謝する旨を、長々と書き記してあつた。而して更に、ま

た小野の好意に甘えての願ひには、さうした譯で一日も早く出京したいが、まだ歸つてからさう日數も經つてゐないので、どうも家を出難いから、改めて勝見夫人の名で、正式に杉浦に家庭敎師に來て貰ひたい旨をいつて寄越して貰ひ、またその上に手數だが、適當な日に「すぐこい」といふ電報を打つて貰ひたい、といふ用件が記されてあつた。

小野はすぐにそれを、磐子夫人に見せて相談した。

「……奥さん、杉浦からかういつて來てゐるんですが、どうでせう。一つ杉浦のいふやうに、事を運んでやつてくださいますまいか。手紙や電報はお許しさへあれば、僕がうまくやりますから。」

夫人はまづ、杉浦の手紙を兎見かう見して後に、徐ろにいつた。

「さうね、それやア貴方がたのことだから、何とでもお世話はして上げる積りですけれど、そんなことまでして、引止めたがつてゐる親御さんたちを出し拔いちやア惡かない？」

「それやアさうですけれど、かういふやうな事情で、杉浦も家を出たがつてゐるんですから、可哀さうぢやありませんか。どうせ彼奴は家を嗣いで、坊主になんぞ成りやしませんよ。この間も龍讓といふ坊主名を嫌つて、一字に改名した位ですからね。何でも家の方は、末弟に嗣がせるとか何とかいつてゐましたから、關ひやしません。一つ男一人を救つてやる積りで、許してやつてください。今、さういふことでもしてやらないと、つい色々な羈絆が生じて、なかなか出て來られなくなつて了ひますから。お願ひします。どうかさういふ風に取計ふのを許してやつてください。」

小野は友のために、熱心にかう願つた。

「ぢやアさうしてお上げなさい。家でも、どうせ來て頂くんなら、夏中から子供たちを見て貰ひたいと思つてゐたんですから。來たらすぐ葉山へ一緒に行つて貰ひませう。」

さういつて、一應鳥渡躊躇した夫人も、すぐまた承知してくれた。

「有難うございます。それぢやアすぐ、さういふ風に運びませう。」

小野は安心して、夫人の代りに杉浦の所へ召喚の手紙を出した。そしてそれから一兩日後に、期を見て電報を打つた。

彼はそれらのことを、後に思へば自らのために墓を掘るやうなものだつたが、凡て友のために喜んで爲した。

二

八月に入ると、それ〲の學校が休暇になつたので、勝見家の令孃や令息は、悉く避暑に出かけることになつた。そして小野がその留守を守ることに定つた。

上の三人の令孃たちは、避暑といふ譯ではないが、京都にゐる叔母さんの許へ、暫く遊びに行くことになつてゐた。磐子夫人の妹であるその叔母さんの、良人といふのは京都大學の工學部敎授で、洛外に靜な文化生活を營んでゐた。で、そこへ三人の令孃は行儀見習ひ旁、夏中暫く預けられたのだつた。令孃たちは違ふ土地へ行くことには、幾らか興味がないではなかつたが、京都へ行くことを餘り好まない樣子だつた。

「……家にゐるとお母さんばかりで、つい甘えたり我儘ばかりいつたりするから、少しは叔父さんや叔母さんの所へ行つて、叱られておいでなさい。たまには窮屈な思ひもするものよ。」

夫人はかう令孃たちにいつて聞かせてゐた。

八月の二三日頃に、冬子孃と定子孃と秀子孃の三人は、羽二重に薄納戸色の廣い棒縞を染

ゐた、清々しい揃ひの單衣を着て、朝早く特急で京都へ發つた。小野はわざと彼女等を、停車場まで送つては行かなかつた。冬子孃とは家で別れを告げた。その頃から小野は、もう勝見家の留守番として、家に泊り込んでゐた。

‥‥小野さん、ぢやア行つて來るわ。左樣なら。」

冬子孃だけが、用意がすつかり整つて了ふと出立する少し前に、小野のゐる書齋の方へ、特に別れを告げに來た。

「もう時間ですか。——ぢやア行つていらつしやい。向らに行つてゐる間、手紙を上げますよ。」

小野は彼女に近づいて、手を取つて別れを告げたいやうな心を抑へながら、ぢつと見凝めるだけでいつた。

「あら、私厭よ、手紙なんぞくだすつちやア。叔母さんに見つかりでもすると惡いから。」

「おやア解らないやうにしてやればいゝでせう。お友達の名か何かで。——」

「駄目よ、いけないわ。ほんとに何にも寄越さないでね。」

「えゝ、ぢやアなるべく差上げません。でも、淋しかつたら、上げるかも知れませんよ。」

小野は未練がましく、いひ募つた。

「いえ、ほんとにくだすつちや厭よ。」

冬子孃は猶もそんな風にいひ棄てて、皆のゐる方へ行つて了つた。

それつきり小野は、玄關で彼女の妹たちと共だつた別れの挨拶をしただけで、冬子孃の出發するのを、默つて見送らなければならなかつた。

三日四日經つて、令息たちも第四番目の小さな令孃と共に、母夫人に連れられて葉山に赴いた。北之島青年と杉浦も一緒だつた。杉浦は小野の發した手紙と電報で、うまく家の方の重圍を脫け、丁度いゝ時機に上京して來た。勝見家の方の都合からいつても、その招電は決して譃ではなかつた。——皆は嬉々として出かけて行つた。

後には小野一人が、廣い勝見家の中に、ポツリと殘された。晝のうちは長三氏が、矢來町から通つて來て、いろ／＼な家務を見てゐてくれた。が、夜になると氏は、妻子の許へ歸つて行つて、そして勝見家に泊つてゐるのは、小野とさうして避暑地へ連れ殘された二人の炊事女中だけになつた。小野は自ら進んで引受けた留守居役でありながら、さすがに蒼い夏の夜に、しんと靜まつた家の中にゐると、淋しい、人戀しい思ひに捉はれない譯にはゆかなかつた。先生が遺愛の書齋の中や、その廊下に出してある籐椅子の上などで、考へるともなしに考へるのは、やつぱり遠く離れて西に行つてゐる人の俤だつた。戶外は、狹い横町ながらに、さすがに夏の夜の氣分を罩めて、白衣の人のざわめきや、明るい灯影の搖めきが、そこはかとなく漂つてゐた。

「今頃は彼女はどうしてゐるだらう。」

さういふ月並な感傷も、ときには胸を迫る位彼に來た。彼は庭前の暗い芭蕉を仰ぎ、梧桐を透かして、ぼんやり夜空を眺め暮すことも多かつた。而して目はひとりでに地面の、これも小暗く茂つた、木賊の上に落ちた。そこには屋内からの灯が、儚くすつと絲を曳いて走つてゐた。

彼は幾度か手紙を書かうとしたが、よした。別れるときの彼女の言葉が、強くまだ彼の耳に殘つてゐた。餘りに自發することのみ多い戀のために、彼の心はすつかり弱くなつてゐた。彼は彼女の言葉をおし切つて、手紙を書くことなぞは到底できなかつた。彼は遠く淋しく、まだ本體を攫み切れぬ戀の淋しさを胸に抱いて、思ひを走らせてゐるばかりだつた。

それでも月の前半は、「中外公論」や「地球」などといふ雜誌から、依頼された原稿の仕事があつた。小野もやうやく新進の一作家として、少數の雜誌から認められてはゐた。而して磬子夫人が、生活の方から何とか補助するから、雜誌へなんぞ下手な作品を書いて、早くから作家ぶりを汚すな、などといふ勸告を數多度受けたに係らず、彼は書かずにはゐられなかつた。一つには淋しかつたし、また文壇的に認知されることにも、かなり焦慮してゐないではなかつた。そのうへ彼は、誰が何といつても、書かずにはゐられない氣持が、謂はばかなり純粋な藝術的衝動が、その時分は胸に一ぱいだつた。出來上りがどうであらうと、またそれを發表して、作家ぶりが汚れようと、こればかりは仕方がないと思つてゐた。そしてその他のことでは、どんなことでも夫人のいふとほりにならうとしてゐたに拘らず、どうしても書くことだけはやめなかつた。で、そのときもそれらの雜誌の依囑を受けると、喜んでその仕事に從事した。あるときは先生の書齋の一隅で、恰も先生の靈感を頒けてでも貰ふやうなつもりで、一生懸命筆を走らせた。あるときは風通しの涼しい中の間で、誰もゐない疊の上に遠慮なく寢そべりながら、締切に間に合せようと思つて稿を急いだ。――それで晝のうち、あるひはまた夜の一時は紛れた。が、どうかするとその仕事も落着いてできない程、淋しい思ひの募つて來るときもあつた。

殊に、その仕事も二十日近くに濟んで了ふと、ともかく原稿の出來た安心と共に、人戀しい思ひが、矢も楯もたまらず募つて來るのを、小野は感ぜずにはゐられなかつた。そして京都に行つてゐた令孃たちが、もう京都は引上げて、途中から葉山に赴いて、今皆が一緒にゐると聞いてからは、殊に一日でもいゝから、そこへ出かけて行つて暮したい、と、思ふ希ひに燃えてゐた。そしてつくづく一緒に葉山に行つてゐる、杉浦の身の上が羨ましかつた。彼はいろいろとその避暑地の、美しい情景を想像した。大きな海水帽を被つて、波打際に立つてゐる彼女。……夕暮の舟の舳に、腰うちかけた浴衣姿。……蒼い月夜の散歩。……さうした場面が、幻燈のやうに彼の眼前に髣髴と現はれた。が、彼は理由もなしに、家をあけては行かれなかつた。

と、そのとき丁度夫人から、一通の手紙が小野の許へ届いた。開けて見ると中には、かういふ用向が記されてあつた。

それは、夫人の持つて行つた金が、だん〳〵殘り少にもなりかゝつたし、また、もう引上げる時期も十日近くに迫つてゐるから、長三氏にさういつて、銀行から五百圓ばかりを受取り、それを爲替なり、小切手なりにして送つてくれ、もしまた小野が、今都合が惡くないならば、送る途中で間違ひの起つたりする心配がないやうに、自身で葉山まで持參して來てくれ、どつちともよろしく賴む、と、いふことだつた。

小野はそれを見ると、渡りに舟とでもいつたやうな、誂へ向きな事情に雀躍した。そして一も二もなく自身持參することに心で決めながら、長三氏に一應は相談しなければならなかつた。

「ねえ、矢來の伯父さん。――（小野もうその頃は、親しんでさう呼んでゐた。）――奧さんからかういつて來られたんですけれどねえ。どうしませう。明日早速持つて行つて來ませうか。」

人の好い長三氏は、まるで芝居にでもあるやうに、眼鏡をかけ直して文面を讀んだが、すぐそれに贊成してくれた。

「あゝ、さうですか。そんなら明日午前中に、早く銀行へ行つて金を取つて、その足ですぐ向うへいらつしやい。そして少し貴方も遊んでい

らつしやればいゝぢやありませんか。二三日なら私一人で留守居をして上げますよ。」

「さうですか。有難うございます。それなら明日行くことにしませう。そして歸れたらすぐ歸りますが、長くも一晩だけ泊つて、翌日は歸つてまゐりませう。どうぞ何分とも留守をよろしくお願ひ申します。留守居が、から浮腰になつてゐちやア勤まらないんですけれど、丁度仕事も濟んだしますから。……」

小野はそんな餘計な辯解までして、長三氏に感謝しなければならなかつた。

「えゝえゝ、ようござんすとも。ゆつくり行つていらつしやい。」

長三氏は小野が恥しい程、飽くまで此方の心持を察してゐるやうに快諾してくれるのだつた。

三

翌日は、夏の東京によくある、とろりと暑熱にうだつたやうに、白く澱んで晴れた天氣だつた。朝からもうぢつとしてゐても、油汗の出さうな日だつた。が、小野はもうぢきに葉山へ行つて、涼しい海風に當れることを思ふと、勇んで家を立出でた。そして日本橋の方の、ある大きな銀行に寄つた。

銀行ではかなり待たされた。小野には何となく先が急がれて、待ち切れずに、幾度か壁側の椅子を立つたり坐つたりした。預り證代りの、眞鍮の圓い札を持つてゐるに係らず、他人のと間違つたのではあるまいかと、ひそかに心配にさへなつて來た。暑い午前だつたが、人は混んでゐた。三和土を歩く足音が、高い天井に反響して、金網を張つたやうな構の中で、かちかち算盤を弾く音と共に、如何にも氣忙しなく暑かつた。が、やつと「勝見さん。」と支出口から呼ばれたので、小野はほつとして立上つた。

金を受取ると、小野はすぐ東京驛へ駈けつけた。が、そこでもまた、運悪く三十分以上待たなければならなかつた。小野の心は、先へ急ぐ心地で、何となく焦立つた。けれども、やがて汽車に乘つて了ふと、もう二時間と經たぬうちに、樂しい團欒のなかに入れると思つて、一人クッションに頭を凭せながら、喜び迎へてくれるであらう冬子孃の樣子などを、うつらうつらと描いてゐた。

一人旅の汽車は、僅か一時間半足らずの間でも永かつた。而してやうやく逗子に着いた。小野は案内知つてゐるので、驛前から出る乘合自動車で、すぐ葉山に向つた。自動車は矮い逗子の町を抜けて、川添ひの道へ出ると、やがて白い富士見橋のあたりから、静かな海がずつと展開された。そしてその右手の濱には一ぱいに點點と人出が在つて、そこからは海水浴場の賑かなざわめきが、小野の心を自ら躍らせるやうに響いて來た。やがて切通しを過ぎた。

一家の泊つてゐたのは、葉山で有名な長者茶屋といふ宿だつた。そこの玄關に立つたとき、小野はやうやく到りついたやうな思ひと共に胸がときめくのを覺えた。

「勝見さんの人たちはをりますでせうか。私は小野ですが。……」

殺風景な椅子と卓子とを、假りの應接所らしく置いた玄關に立つて、忙しげな女中にから訊ねた。

「えゝ、いらつしやいます。が、只今お食事中ですから、少々お待ちください。」

小野は誰かが出て來るかと思つて、心待ちに待つてゐた。勝見家の家では、その頃小野が行きさへすれば、きつと冬子孃が一番先に出迎へるやうになつてゐた。が、こゝではさうは行くまい、が、誰かが飛んで出て來てくれるだらうと思つてゐた。

が、女中がまた歸つて來たきりだつた。
「ではどうぞ此方へ。」
　さういつて女中は、小野を表二階の梯子段の方へ招じた。
　上つて見ると、一家の人たちは幾つも食臺をつなぎ合せた、細長い食卓について、樂しげに晝食を喫してゐるところだつた。見ると、夫人や、令孃たちの間に挾まれて、京都の叔母さんなる人が、――その人とは先生の葬式のとき、鳥渡顏を合せたきりだつたが、小野の方ではよく記憶えてゐた。――少し取澄ました樣子で、食卓についてゐた。
「いらつしやい。」
　夫人はから言つて、まづ迎へてくれた。
「お金を持つて來る序に、鳥渡一日だけお邪魔に上りました。」
　小野も、京都の夫人がゐたので、改まつてお辭儀をした。その夫人は小野が誰だか解らないらしかつた。
「小野さんよ。やつぱり杉浦さんたちの仲間の。」と夫人が紹介してくれた。
「さうですか。」夫人は少し氣取つたやうな、美しい聲で言つた。「ぢやアやつぱりお口が惡いのね。」
「ですが、」と、杉浦が食卓の向うの端の、令息たちの間から、親しげに口を挾んだ。「迚も小野なんざア奧さんには敵ひませんよ。何しろ僕ですら、やつつけられ通しなんですからね。」
「でも、兎に角貴方の方には味方が增えた譯ね。是でやつと丁度いゝ相手になれますよ。二人束になつていらつしやい。」
　京都の夫人はから快活に言つて、若々しく笑つた。
「どうも小野ぢやア、味方にとつて不足ですからなア。寧ろ餘計な足手纏ひですよ。」
　杉浦は猶も、冗談らしくそんなことを言つてゐた。
　小野は口を挾む餘裕もなく、室の隅に默つてゐた。賑かな、親しい食卓に、突然自分が入つて來て、何だか仲間へ入れないやうな、エトランジエの心持を感じながら、そしてとき〴〵目を走らせて、冬子孃の方を見た。が、冬子孃はなぜか、少しも此方を見ずに、冷淡な顏をして、とき〴〵妹たちと低く話をする外には、目で會釋することすらしてくれなかつた。小野は彼女が、お辭儀をしたかどうかさへ、氣がつかない程だつた。が、それは突然小野が現はれたので、一時的の氣持で、さう餘處行の態度を持してゐるのであらう、いづれ後で、親しみを見せる機會もあるに違ひない、さう思つて小野は、別にそのときは氣にも止めなかつた。
　その中に食事は終つた。それを待つて小野は、持參した金を夫人に手渡した。
「小切手にしてお送りしようかと思つたんですけれど、丁度僕も暇になつたものですから、一日遊びに來たいと思ひまして、自分から勝手に出かけてまゐりました、其方が安全だとも思ひましたので。……」
「有難うござんした。――留守の間に、別に變つたこともありませんでしたか。」
「えゝ、ありませんでした。今日は矢來の伯父さんが一人で、留守居をしてくださると仰有るので、すつかりお願ひしてまゐりました。できたら今夜歸るつもりですが。……」
「まア今日一日位はゆつくりしていらつしやい。今日は丁度是から、皆で鱚釣りに出かけようと思つて、舟を傭つてありますから。」
「さうですか。では僕も仲間に入れて頂きませう。」
　小野はやつと夫人から、さう言はれて救はれたやうに感じた。が、後から割り込んで入つた者の遠慮は、まだ彼の心からなか〳〵脫けなか

つた。
子供たちは、晝飯の濟むのを待ち兼ねたやうに、みな鰺釣りの用意を始めた。彼等は皆水着を着て、杉浦の周りに集まつた。
「小野さん、君は泳げるの。」
新太郎少年が、新來の小野に對して、挨拶のやうに訊ね出した。
「僕ですか、僕は殆ど泳げません。まア犬掻きで五六間位なら、どうかかうか泳げるかも知れませんけれど。」
「なアんだ。それつぽつち……それぢやア駄目だな。僕たちは是から沖へ行つて、少し泳がうと思つてゐるんだのに。ねえ、杉浦さん。」
「ええ、沖へ小野を置いてきぼりにして、泳いで歸つて了ひませう。」
杉浦もそんな風に相槌を打つた。
「ふうむ、そんなに泳げるのかい。」
小野もわざと大仰に、眞顔で訊き返した。
「泳げるとも。來年は江ノ島位泳げるやうになるぞ。」
少年も無邪氣に威張つた。
「それぢやア沖へ置いてきぼりにされに行かうかな。何アに關ひやしない。そしたら奧さんや何かと一緒に、大島へ漂着するばかりだから……」
すると、その話に怖えた譯ではあるまいが、次女の定子孃が、急にいひ出した。
「お母さま。私、一緒に行かなくてもいゝでせう。何だか厭だから。釣なんてちよつとも面白かないんですもの。」
「さうかい、厭ならおよしよ。」
夫人はすぐにそれを許した。と、第三女もいひ出した。
「私も止すわ、母樣。」
「私もよ。」
四番目の博子孃も、一緒になつていひ出した。
この三人の娘は、大抵の場合一緒に、行動を共にしたがる傾向があつた。
「おや〳〵、急に皆よして了つたね。そんなに怖氣がついたのかい。そんならおよしよ。その方が却て、心配がなくていゝ位だから。」
「それぢやア叔母さんも殘つてゐて、留守居の仲間を監督して上げようね。」
京都の夫人まで、またさういひ出した。
「それや卑怯ぢやありませんか、奧さん。」杉浦が傍からいつた。「敵に後を見せるなんて。」
「貴方がたに後を見せるんぢやないのよ。鰺に後を見せるのよ。私、一と鹽位の干物になつたのでなくちやア、鰺は大嫌ひ。」
かう言つて、京都の夫人は鮮かに笑つた。
「ぢやア、さういふ連中は關はない、と。」杉浦はいつた。「ところで、冬子さんはそんなことはないでせうね。貴方が行かなきやア、舟は動かないから。」
「まア、私も行きたくないのよ。」
皆に先を越されて、いひそびれてゐた彼女は、きまり惡げにいひ出した。
「冬子。」併し夫人はいつた。「お前はおいでよ。さうみんなやめちまつちやア、女は私一人になつちまふぢやないか。」
「お母さま一人で澤山よ。」
「澤山ぢやありませんよ。」杉浦はまた冗談半分に勸めるのだつた。「貴女が行かないと、海が荒れでもしたとき、生贄に沈める者がない。」
「お姉さまはおいでなさいよ、私たちの代りに。」と、妹の定子孃もいつて、更に同意を求めるやうに、下の妹たちを顧みた。「ねえ。」
「さうよ。お姉さまは行かなくちや惡いわ。」
「行つてらつしやい。」
妹たちも口を揃へていつた。
小野も、さうなつて來ると、何か一言、勸めないではゐられなかつた。それで、勇を鼓して

いひ出した。

「どうです、おいでなさいよ。是非。――」

と、冬子孃はそれに答へたともなく、冷淡に拒絶した。

「厭よ。私、行かないわ。」

その言葉は小野の耳に、一倍鋭く響いた。

で、行くのは結局、夫人と令息二人と、圭之助君に杉浦小野の六人きりになつて了つた。小野はすつかり張合の拔けたのを感じた。そして彼は彼女が、先刻から何となく自分に強ひて冷淡にしてゐるらしいのを、內心淋しく感ぜずにはゐられなかつた。

舟はもう下の磯に來てゐた。そして一行の出て乘るのを待つて、それは直に漕ぎ出された。二人の船頭が、交る／＼艪を押したり、舵を取つたりした。

やがて小一時間も漕いで、長者ケ鼻の沖へ出ると、舟はゆらりと留められた。見るとそこらには、同じやうな釣舟が、二三艘漂ふやうに碇を下してゐた。

釣は始まつた。小野も勸められるまゝに、船頭の教に從つてやつて見ることになつた。船頭が數多の釣絲を出して、二つづつ鉤のついてゐる先へ、友餌をつけてくれると、それを海中へ少し垂れるか垂れない間に、もうすぐビク／＼手應へがあつた。そして急いで上げて見ると、その絲の先には、間違ひもなくぴち／＼と、手頃な反撥の力を以て、鰺が吊るし上げられる。……それはときとすると、二つの鉤に同時に一尾づつ釣れることもあつた。極めて造作なく、しかも頻繁なものだつた。

少年たちは實に喜んで釣つた。さすがに失敗りも多かつたが、彼等は一尾釣る每に聲を立てて騷いだ。夫人も終ひには釣絲を手に取つて四五尾釣り上げた。圭之助君は一番巧みだつた。杉浦もうまかつた。皆は吾を忘れて釣つた。

が、小野は、暫く釣つてゐる中に、何だか氣持が勝れないのを感じ出した。そして生欠伸が出だした。

日は熱く、薄い雲を透して、とろりと中天に在つた。風はさう無かつた。そして沖の水面は、ゆらり／＼と底搖れがして、その度に鈍い銀色をぎらり／＼と反映させ、深い海水帽の中まで、妙に眩しく照りつけた。

小野は不意に、堪らなく不快になつて來た。それで釣りをやめて、暫く胴の間に橫になつた。そして眩暈をできるだけ押へようと思つたが、舟の搖れは橫になればなるほど、ゆらり／＼と更に氣持惡く彼に感ぜられた。そしてそれと同時に、舟底の方から來る、腐つたやうな魚介の臭ひが、ぷんと強く鼻について來た。と、彼はもう胸苦しく、何ものかが込み上げて來るのを感じて、舷ににじり寄つたまゝ、それを海中に吐き出さねばならなかつた。……

「どうした、おい小野。」

「どうしたの、小野さん。」

人々は驚いて、此方へ寄つて來た。

「何でもない。船に醉つたんだ。もういゝ。」

さうはいつたものの、小野は苦しかつた。さうして人々が、喜んで釣つてゐるのを、妨げたくない痩我慢から、再び顏を上げようとしたが、頭がぐら／＼としてまた突つ伏した。さうしてもできるだけ早く、陸の方へ歸りたいと思つた。そのとき彼はなぜ、冬子孃と一緒に陸に止まらなかつたかと悔いた。

人々は心配して、舟を返すことになつた。小野はもう舟の中に寢たきり、只管陸に漕ぎつくのを待ちかねた。

舟が着いて、陸に上つたときも、小野は眞蒼な顏をしてゐた。さうして、やうやく宿へ歸りつくと、階下の空いてゐる間に、床を取つて貰つて橫にならなければならなかつた。

倂し、さういふ半病人の狀態でゐながら、彼は冬子孃の介抱に來てくれるのを、期待するやうな心持がないではなかつた。

が、冬子孃は何處かへ行つてゐて、すぐ心配して來てくれはしなかつた。そして、夕方になつてから、鳥渡小野の寢てゐる部屋へ、半ば閉てた障子の外から顏を出して、

「どうして？」と覗き込んだだけだつた。

「もう大分氣分も癒りました。――お入んなさい。」

小野は幾らか元氣づいて、待つてゐたやうにさういつて見た。

「厭。――」

彼女の答は簡單だつた。

「どうして？」

「だつて、叔母さんがいらつしやるから、貴方の傍に行くのは厭なの。」

さういつて彼女は、向うへ行つて了つた。そしてそれつきり、小野の寢てゐる所へは顏も見せなかつた。

小野の病所は、やがてすぐ癒つたけれど、冬子孃の冷淡とは、小野が歸京するときまで、どうしても癒らなかつた。小野は失敗に終つたこの葉山行を顧みて、何となく滿たされぬ心を抱きながら、翌日一人淋しく東京へ歸つて行つた。

小野が、冬子孃と自分との間に、隙があるやうに感じたのは、そのときが初めてだつた。けれども彼は、彼女の心を、決してまだ疑はなかつた。そしてそのときの冷淡さを飽くまで、彼女の言葉通り、叔母に對する羞恥から、强ひて執つた態度だとのみ信じた。

その夏は、華やかだつた春の後を受けて、小野にとつては物足りない夏だつた

第十四章

一

秋は來た。季節の秋と共に、小野には何となく自分たちの戀愛關係にも、冷やかなものが忍び込んで來たやうに、感ぜられてならなかつた。が倂し、それはごく僅かな、ほんの肌觸りにも過ぎぬ位のもので、彼が持前の敏感から、又戀するものの本能から、さう無意識に感じたに過ぎなかつた。けれども、それは全然形のないものではなかつた。

勝見の一家が、避暑地から引上げると、それからずつと杉浦は、榎町の宅に泊つてゐることになつた。が、小野はそれを杉浦の生活の安定の爲に、心から喜びこそすれ、決して羨みもしなかつた。彼はすつかり杉浦を信じ、夫人を信じ、冬子孃を疑はなかつた。そして杉浦のやうな勝見家に近しい地位は、それ以上のものをやがて自分も占むべきものであり、又さうなる迄のツナギとして、自分の幸福を彼に頒ち與へてゐるやうな氣さへしてゐた。小野は杉浦に、何の不安をも感じてゐなかつた。寧ろ杉浦が何時行つても、勝見家にゐて呉れることは、小野自身にとつても好都合に違ひないと思つてゐた。彼は杉浦を、敵としてわざ〳〵その故鄕から呼び寄せたのではなかつた。自分の味方として、安心して勝見家へ置いたのだつた。

けれども實際は、日を經るに從つて、それらの形勢が少しづつ變つて來るのを、小野も感じない譯にはゆかなかつた。

冬子孃は小野が訪れれば、毎も變らぬ笑顏で迎へて呉れた。小野を遇する態度に、別に變つたところがある譯ではなかつた。が、それは小野に對しては、少しも變つてゐないだけで、一緒にゐる杉浦に對しては前よりもずつと親しみが深くなつてきたのに、止むを得ないことであつた。

小野が一家の人々と、勿論杉浦をも交へて、何か談笑してゐるとき、杉浦は冬子孃や夫人と共に、小野には通じないことをいつて、笑ひ出すことなぞも間々あつた。それは、小野のゐないときに、勝見の一家中で起つたことで、それが彼等だけの通り言葉になつてをり、それを使ふことに依つて、彼等一團は一種の樂しみを覺える、例へば、かういふことだつた。

「……それはまるでカントの時計だね。」

何かの拍子に、杉浦がそんなことをいひ出して、夫人や冬子孃を顧み、共に笑ひ出したのだつた。

小野にはまるで、その意味があつて分らない言葉を、仕方なしに連れ笑ひだけはしながら、訊き糺さなければならなかつた。

聞いて見るとそれは、その前日に起つたことで、新太郎少年が曉星學校で、先生からカントといふ偉い獨逸の哲學者が、キチンといつも正確に時間を守つて、規則正しい生活をしてゐたといふ訓話を聞いてきて、自分も是から時間をチャンと守りたいが、それには第一時間を見るべき、懐中時計が無くては駄目だから、一つ買つて欲しいといひ出したのだつた。そのいかにもやんちやで利口な少年らしい理窟には、チャンと條理が立つてゐるので、夫人初め家庭教師の杉浦も困つた。と、いつてすぐ眞ものの懐中時計などを、十歳かそこいらの子供に買つて與へることは、贅澤でもあり、躾の上からいつてもできない。止むなく杉浦が、得意の逆說を用ゐて、カントは懐中時計をもつてゐたから、時間を正確に守り得たのではなくて、時間を正確に守る位の人だつたから、懐中時計などは要らなかつた、と、無理遣に說服して了つたとの話だつた。そしてそれ以來、何か子供らしい理窟に出會ふと、カントの時計といひ、またそれを逆にうまく說き伏せて了ふことをも、カントの時計といふ通語で評するのだつた。……

さういふ風な場合に出會つたとき、小野は必然的に何となく、彼等の親しさを見せられ、自分が除外されてゐるやうな、淡い感じを抱かない譯にはいかなかつた。

そればかりでなく、冬子孃は、確に小野よりも杉浦と話してゐる場合の方が、より以上に親しい自由な冗談口を、交してゐるやうに思はれた。それは一つには、杉浦が小野のやうに冬子孃に對して、愛慕の念に囚はれ過ぎてゐる譯でもないので、遠慮なく自由に、どんな冗談でもいへるに違ひなかつた。しかしその親しさは小野にとつて、半ば矢つ張り無關心ではゐられなかつた。小野はあるとき冬子孃に向つて、冗談らしい非難と嫉妬を以て、かういつたことがあつた。

「冬子さん。貴女は僕よりか杉浦と話してゐるときの方が、餘つ程愉快さうに笑つたり喋つたりしてゐますね。」

「さう？」と、彼女は首を傾けて、それから辯解するやうにいつた。

「だつて何だか貴方とは、氣づまりといふんでもないんですけれど、惡山戯たりできないのよ。けれど、杉浦さんだと、何でもないんですもの。」

さういはれると、愚かにも小野は、寧ろ自分の方が彼女から立てられてゐるやうに思つて、滿足しなければならなかつた。

そのうへ、小野は夫人の恩寵が、やうやく自分から移つて、杉浦の方へ傾いてきたのを、漠然と意識せざるを得なかつた。

それらはしかし、是といつてまだ事實に現はれる程ではなかつた。たゞ漠然と、敏感な小野に、さう感ぜられたに過ぎなかつた。そして事實は、決してさう惡化してゐる譯でもなかつた。外形上からいへば、冬子孃も小野に、變らぬ

好意を表白してゐた。或時に、三越か何處かへ行つた土産だといつて、陶器製の小さい西洋人形を送つてきたりした。それは茶色のボール箱に、綿を着せて入れられたまゝ、大切に小野の机の中に秘藏された。そしてとき〳〵彼はそれを取出しては、一人で机の隅に立てて眺めた。髪のところを亞麻色に塗り、青い眼をぱつちり見開き、ぽつと赤過ぎる位赤く頰を染めた人形は、決してその送り主を直接聯想させるやうには出來てゐなかつたが、小野は一人寂しいときなどには、それを出して飽かず眺め入つた。時にはその稍肌目の細かくない陶器を、沁々と頰に押當てて、冷たく甘いやうな感觸を樂しんだりさへもした。

が、しかし、それから數日經つて、勝見家へ行つたとき、何氣なく杉浦の机の上を見ると、それと同じ人形が、彼の持物の中へ交つてゐるのを見て、小野は非常に不快な氣がした。嫉妬とか何とかの氣持よりも、何だか欺かれたやうな氣さへした。

で、それつきり彼は、再びその人形を机の抽斗から、そつと取出して頰擦りするやうな愚は、繰り返すまいと決心した。が、またしかし戀するものの弱味で、彼女が自分に人形を送る必要上、杉浦にも送らなければならないと考へて、序に申譯に杉浦へも送つたのかも知れない、と、さう思つて自ら慰めたが、それでも何となく小野の氣持は、すつかり晴やかにはならなかつた。

無心の西洋人形は、綿に包まれたまゝ、小野の机の抽斗の隅に、暫く日の目を見ないでゐた。……

二

さういふ狀態でゐるところへ、その頃、札幌の農事試驗場に技師をしてゐる小野の兄が、公用を兼ねて上京して來た。

小野は、一體に自分の一身上のことは、なるべく自分の手で始末をつけたいと思つてゐた上に、自分の戀愛問題などは、どうも生恥かしいやうな氣がして、是迄別に兄に打明けたこともなかつたが、今度の問題は、ひよつとすると自分が勝見家へ入つて、たとひ苗字は變へないまでも、謂はば入婿のやうな關係にならなくては不可ないかも知れないので、一應簡單に事實だけを述べて、兄に相談旁報告だけはしておいた。それで兄としては、この際公用と共に、小野の樣子を幾らか見たい心持で、上京して來たのに違ひなかつた。

小野の方でもまた、兄に幾らか事情も知らせ、また事に依つては勝見夫人や冬子孃に、一應紹介して置きたい希望がないではなかつた。

それで、小野は夫人と冬子孃と、三人で上野の院展を見た歸りに、機を見て夫人にいつてみた。

「ねえ奧さん。今度近々の中に、北海道の兄貴が、僕のところへ來るといつてきてゐるんですがねえ。一つ會つてやつてくださる譯にはゆきますまいか。兄貴も私がお宅から、いろ〳〵御世話になつてゐるのを知つてゐるもんですから、お目にかゝつて一言御禮をいひたいつて言つてきてゐますから。……」

「さうですか、それやアいつでもお目にかゝりますよ。」

夫人は早速承諾して呉れた。

「有難うございます。そんなら兄貴がやつて來ましたら、何かさういふ機會を作りますから、是非一度會つてやつてください。丁度今月末には、帝劇にいゝ活動寫眞があるさうですから、何なら御一緒に、それを見物するやうにでもしてくださると、僕の方は大變都合がいゝんですがね。」

一さうね。家へいらしてくださるのより、そんなことの方がいゝわね。」

「いづれ參りましてから、さういふ手筈にいたしますから、どうぞ宜しくお願ひ申します。それに、何なら冬子さんも是非、御一緒においで願へればこの上ないんですがね。」

小野は少し強請がましいやらで身が引けたが、さう思ひ切つて願つた。

「えゝ、ようござんすとも、外に差支さへなければ。ねえ、冬子。」

夫人は思ひの外に、是もまたすぐに承諾して、冬子嬢を顧みた。

「えゝ、何だか小野さんの兄さんなんて、恥かしくて厭ですけれど、お母さまがおいでになるんなら。……」

そんなことで、冬子嬢も兎も角、承諾だけはして呉れた。

「ぢやあ、いづれさういふ手筈にして、その時にお知らせいたしますから。」

小野も喜んで、これだけ承諾を得れば大丈夫だと思つて、その日の來るのを待つた。

やがて兄は、上京して小野の下宿に着いた。そして汚い素人下宿ではあつたが、氣心の知れない宿屋なんぞにゐるより、よつぽど居心地がいゝからといふので、暫くその儘滯在することになつた。兄弟は晝間は、兄は公用でいろいろな役所や會社などに出向き、弟はまた例の私立中學に敎へに出て、顏を合せることはなかつたが、夕方からは一緒になつて、久しぶりで東京の食物を食つたり、また色々な劇場や觀覽物を見廻つたりすることになつた。

小野は矢つ張り、兄と冬子嬢たちを會はせる場所を、帝國劇場の活動寫眞と決めた。それは第一、もう本興行が終つてゐたからでもあつたが、また勝見家の子供たちも一緒に來得る必要上、活動寫眞なら都合がよかつた。小野は夫人と冬子嬢とに、來て貰へばそれでよかつたが、それでは妙に事が改まり過ぎるので、勝見家の弟妹たちも一緒に來て、それとなく只兄に會つて貰ふ方が、自然で都合もいゝので、勝見家の子供たちの爲にも、そこを選んだのだつた。

彼はその前に、兄にもかういつておいた。

「兄さん、明日はね、帝劇で今度貸切をする、活動寫眞を見に行かう。あの勝見家の人たちも、一緒に來る約束になつてゐるから。」

「さうか。ぢやア問題の人にもお目にかゝれる譯だな。」兄は開けつ放しな、蟠まりのない態度で、すぐにいつた。「そいつは願つてもない好機會だが、あんな兄貴ぢやア、なんて、輕蔑されると困るな。」

「大丈夫だよ、そんなこと。そんな人たちぢやアないから。」

小野は笑つて答へた。

勝見家へは、その前日電話で行つて、夫人にも改めて承諾を得ておいた。

「……奥さん。それぢやア今度の土曜日に、お子さん方を引連れて、帝劇へいらしてくださいませんか。僕たちも行きますから。」

と、何かの序に、それと明白に兄と會はせるとはいはなかつたが、先日の承諾もあり、もう解つてゐることと思つて、確にいつた積りだつた。

「えゝ、行きませう。他に差支が無かつたら。」

小野はそれで安心して、ひたすらその日の來るのを待つてゐたのだつた。

その日、小野は定刻の近づくのを待ち兼ねて、兄を促すやうに、下宿を出た。兄は、初めて有名な勝見家の人たちに會ふといふので、いつもより丁寧に髮へ櫛を入れ、新しいネクタイを旅行鞄の中から取出して、一生懸命に形よく結んだ。そして二人は毎もと違つた期待で、帝國劇場へ向つた。

向うへ着いた時は、まだ開演までに鳥渡間があつた。小野は女給に導かれて、定めの席へ就くと、帽子を椅子の下へ入れるなりに、周圍の一等席を見渡した。ひよつとするともう勝見家の人たちは、先に來てゐやしないかと思つて。けれども、ずつと一巡見廻したところ、まだそれらしい顔は、どこにも來てゐる樣子はなかつた。――彼等は小野たちと一緒に、並んで席を取らずに、却つて各々まち／＼に取つて、幕間のやうなときに、會はうと思つてゐたのだつた。即ち勝見家の人たちは、小野たちと別に、切符を買つて入るやうに手筈を決めてあつたのだつた。

それで小野は、席へ着いてからも、絶えず兩側の出入口を注意して、今來るか今來るかと思つて、彼女等の入場するのを待ち構へてゐた。

時間は刻々經つて、もう入りがあるといふ程でもないが、入場者はだん／＼增えてきた。が、彼女らはなか／＼姿を見せなかつた。小野はもう殆ど目を放さず、出入口の方ばかり見てゐたけれど、それと紛ふやうな人々も入つて來なかつた。彼は兄の手前、さうそは／＼することもできず、席には腰を下してゐたが、心はひたすら入つてくる人の物色にのみ奪はれてゐた。

その中に、たうとう開演時間は來た。そして場內は薄暗くなつた。それで止むなく小野は、正面の白い掛布に映る、寫眞物か何かを、無意味に見入つてゐる外なかつた。そしてとき／＼横を見ては、それとなく振り返つて、まだ出入口の方を見つめてゐた。そして兄が何か說明に就て、一二言話しかけるのにも、捗々しい返事ができなかつた。

が、しかし、その間に、この寫眞物が終つて、場內が明るくなる頃には、彼女たちも來てゐるだらう。そんな風に考へて、彼はぢつと待つてゐた。

けれどもその寫眞が終つて、一時にぱつと場內に灯の點いたのを待つて、小野は周圍を見廻したけれど、矢つ張りそこらの一等席には、誰もそれらしい人は來てゐなかつた。彼は階下をずつと見終ると、二階の方も丹念に、ぐる／＼と見渡したけれど、其方には疎らかな人影が散在してゐるだけで、矢つ張り彼女たちの姿に似たものも見えなかつた。

さうしてゐる中に、又前へ插んだ喜劇が始まつた。小野は又その映寫中には、遅くとも彼女等が入場して來るに違ひないと思つて、心待ちに濟むのを待つた。そして傍の兄が、腹のあたりに、聲を立てて笑ふのを聞き流しながら、泣きたいやうな心持で、可笑しな畫面に眺め入つてゐた。

それが濟むと、大急ぎで又彼は向うを見渡した。が、まだ彼女等の姿は見えなかつた。彼は念のために殆ど一々數へるやうに平土間にゐる人々を、ずつと眺め盡した。そして伸び上つて二階をも眺め盡した。

「まだ來ないのかね。」

さすがに兄も、小野がさう後をふり返つて見てゐると、期待を共にするやうな顔を見せて、さういつた。

「えゝ。もう大抵來る時分なんだけれど、……きつとお終ひの大切物に、間に合へばいゝと思つてゆつくりしてゐるのかも知れない。その中にはきつと來るでせう。」

又輕い、人情物の社會劇が始まつた。そしてそれが終つた時、又小野は立上つて、その間に入つて來たであらう人々を、席の後に探した。が、もう殆ど、入場する人もなくなつたと見えて、觀客席には、別に新しい人の入つた樣子もなく、たゞ劇場關係の者らしい人々が、一等席の後の方に、ちらほら腰をかけてゐるだけだつた。

それでも、小野は又一階中を見廻し、二階を

ふり仰いだ。二等へ來てゐる譯はないと思つたが、萬一と思つて、二等の方までずつと見探つた。そしてそれだけで足りなくて、たうとう、
「兄さん。僕、鳥渡見てきます。」
といひ捨てると、急いで席をがたと立つて、出入口から廊下の方へ出た。そして念の爲と思つて、廊下の方から一二等席を、一々精細に調べた後、二階へ上つて同じく檢めた。
廊下を一巡したが、勿論廊下にもゐなかつた。
時計を見ると開演時から、もう二時間近くも經つてゐた。
「どうしたのだらう？」
小野は泣きたいやうな、兄の手前恥しいやうな、恨めしいやうな思ひを籠めて、正面の出入口から、もうすつかり暮れ切つた場外の、お濠に沿うた青い街路を眺めやつた。が、もうそこへ車を寄せる觀客も、切符を買ひに來る人も無かつた。
ふと、彼は廊下の隅の、自動電話を認めて、一應問ひ糺す氣になつた。そして急いで驅け入つて、電話で勝見家の番號を交換手に通じた。が、なか／＼出て來なかつた。その中にやつと通じた。
「あゝもし／＼、勝見さんですか。僕、小野ですが、奧さんはまだお宅にいらつしやいますか。僕は今帝劇にゐるんですが。……」
「鳥渡お待ちください。」
出て來たのは、御飯炊きの女中らしかつた。
と、代つて出て來たのは、杉浦だつた。
「あゝもし／＼、小野かい。」
「うむ、杉浦か。僕はいま帝劇へ來て、待つてゐるんだがね。奧さんたちはもうお宅を出たかい。」
小野は勢ひ込んで訊いた。
と、杉浦の冷嘲を含んだやうな言葉が、受話器の向うで響いた。
「あゝさうか、それはお氣の毒さまだがね、奧さんは今日は頭が痛いとかで、まだ家においでになるよ。今日はいらつしやらないんだらう。」
「さうかい。おやア冬子さんたちもゐるんだね。僕はまた、今日はこゝでお目にかゝるつもりで、今迄待つてゐたんだけれどねえ、餘り遲いんで電話をかけて見たんだ。さうかい。……ふうむ。そいつは殘念だな。」
小野にさうはいつたが、心の中では、何だかくわつと恨めしい思ひが込み上げて來るのを、どうにも禁ずることができなかつた。
「さうか。そいつはお氣の毒さま。一向もの緒で、冷かすやうに杉浦は猶もいつた。「だが、一緒に活動を見ようなんて、さう甘くはゆかないさ。まア偶には、一人でぼんやり見物するのもいゝだらう。」
それは杉浦の、毎もの癖口には違ひなかつたが、場合が場合だけに、小野にはカンと惡意を帶びて響いた。小野は殆ど杉浦に對して、憤怒に近い氣持を覺えざるを得なかつた。が、彼は聲を沈めていつた。
兎に角、それぢやア奧さんに、僕が兄貴と一緒に、お待ちしてゐたと傳へてくれ。」
さういつて、がちやりと彼は電話を切つた。そして何かを叩きつけたいやうな憤怒と、泣きたい程な怨恨とを抱いて、額を白ませながら、再び席へ歸つて來た。
「どうだつた。」
兄もさすがに待ち兼ねてゐて、さう訊ねた。
「いま電話をかけてみたら、奧さんが何だか頭が痛いとかで、今日は來られないといふんだ。……殘念だけれど……」
小野は申譯のやうに、何となく兄に恥しいやうな、嘆きの下に冷淡する思ひで、さう答へた。
「さうか。」兄はすぐ小野の、顔色を幾らか見て

聞いたら、いつた――そんなら、またお目にかゝる機會もあるだらう。いゝさ、今日は默つて來ないかな。――僕もさうこんな所で、お目にかゝりたくもなかつたんだから。……」

と、兄はそんなことをいつた。が、さういはれればいはれる程、小野は返す言葉もなく、默つて譯のわからない氣持に陷つて行つた。

彼はその夜、殆ど活動寫眞などは見てゐなかつた。彼の眼にたゞ白い畫面の幕に、たゞ人や動く映像を無意味に眺めてゐるだけで、おそらく冬子孃に對する怨恨や、杉浦に對する憤慨や、兄に對する恥辱やで、胸が一ぱいだつた。殊に中杉浦の、惡意ある――と小野は思はざるを得なかつた――行爲に對しては、一時は腸も煮える憎惡みと憤りを抱いた。……

……と、翌日、小野の語氣が、電話を通じてあの人たちに傳はつたものか、冬子孃から小野に宛て、一通の手紙が屆いて來た、

それはその前夜、彼處へ來なかつた埋に、彼女が書めたものらしく、から記されてあつた、

「小野さん。

唯今は失禮しました。何時もと違つて、あんまり早くお歸りになつたので、なんだか淋しいやうな、詰らないやうな氣がいたしました。

今夜小野さんと常磐にお出になつたんでございますつてね。お一人でございますの。御兄さまも御一緒でいらつしやいますの。

私、お約束しておきながら參らないなんて、本當に御免遊ばせ。秀子さんも定子さんも、そんなに行きたくなささうでしたし、それにお母様が少し頭がおいたくて寢ておいでになつたもんでございますから、私一人で行くわけにも參りませんでしたので、大變失禮なことをいたしました。どうぞ〳〵御許し下さいませ。けれど本當にあなたにお氣の毒でお氣の毒でたまりません。ですからいらつしやる前に、もう一度お電話をお掛け下さるやうにお願ひいたしましたのに。

でも又今度御一緒に參れによろしうございますわね。――まだ〳〵これから行く間は澤山ございますもの。……

この間聞きました青木英作といふ人の手紙また參りました。が、やつぱり私ではなくて定子さんの間違ひでございました。

それだので杉浦さんが、又からかつた先の手紙で姉の冬子が、大變喜んでをりますから、どうか姉の方で我慢なさつてくださるやうに。」つていつてやるつて、大層笑をいたしました。

お手紙を上げない〳〵と申しましたが、惡いことをいたしましたから、お詫までにさし上げます。

字が下手でさぞお讀みにくいでございませうが、どうぞ我慢遊ばして下さいませ。

九月××日夜　　冬子より

小野旋夫様みもとに」

この手紙は小野にとつては意外だつた。そして繰り返し〳〵讀んで、少し媚びられてるやうにも感じたが、まだ是から行く間は澤山ございますもの。なぞといふ文言には、自ら嬉しい微笑を禁じ得なかつた。併し、かうして小野の心は、この手紙に依つて辛うじて慰められたが、まだ心は平かでなかつた。そして此この手紙で、油を注がれたやうな心持で、一應彼は冬子孃に對して、その時の恨みを述べずにはゐられなかつた。彼はすぐに手紙を書いた。

それには、彼女からの此手紙を貰つて、今ではもう何とも思つてはゐないが、一時大いに

人や冬子孃を恨んだこと、そして同行の兄に對しても、何となく面目を失つたこと。さういふことを先づ書いて、胸の中なる思ひを、晴らさずにはをられなかつた。

それに次いで、彼はその時杉浦が、電話口でとつた態度に對して、更に憤慨を述べずにはゐられなかつた。あの際彼のいつた冷笑的な言葉は、假りにも友達の困惑した場合に、發せらるべきものでないのみか、冬子孃と小野との間に風をいれて、喜ばうとするかの如き惡意をさへ感ずる、といふやうなことを小野は書いた。

書いてゐる中に、杉浦に對する彼の憤慨は、平素漠然と持つてゐた嫉妬、――彼女が杉浦に親しくする傾向のあることまで、言及せずにゐられなかつた。彼は人形のことも書いた。而して最後に、さういふ嫉妬を杉浦に感ずる位、自分の愛は切なるものだと書いた。

それを書いて了ふと、彼は胸中の思ひをすつかり打明けたやうに、心が輕くなるのを感じた。そして早速それを投函した。

どんな反響が冬子孃からあるか、と、それを恐ろしいやうな、樂しいやうな期待を以て、彼は一兩日を過ごした。

と、突然今度は磐子夫人からの來狀に接した。

「その後お目にかゝつたら、お話しようと思つてゐたのですが、手紙で申上げます。この間の帝劇の事ですが、あの時はいろ〳〵用事やら、お客やら、頭の痛いのやら、又子供の都合もまとまらず、お約束を違へて失禮いたしました。然し小野さん、貴方にも落度はありますよ。私は小野さんお一人のことで（それはお兄さんをお連れになるといふことは聞いてゐましたが。）冬子への手紙へ書いておよこしになつたやうな、わざ〳〵私たちに會はせたいといふお考へとは少しも氣が付きませんでしたから、子供は都合が惡いのいゝのと、愚圖々々いふし、それに自分の氣分も惡しするから、お約束だとはいつても他の人ではなし、貴方と私のことですから、失禮だけれどやめにしたのです。それでも何だか氣が濟まないから、冬子によく手紙で譯を話して上げるやうにいひつけて置いたのです。その御返事を見て驚きました。さういふお積りなら何故そのやうに、確と私に仰有らないのです。さういふ事情でお目にかゝる約束をしたのなら、子供など連れずとも私一人でも參ります。又私が行けなければ、冬子だけでもやります。貴方の方では私たちが來るものと思つて、お兄さんには私に逢はせるやうにお話しになつたのでせう。かういふことは外のことと違ひ、曖昧の話では事が間違ひますよ。第一私がお兄さんに對して、人を馬鹿にした失禮なものになり、貴方も信用がなくなる譯ではありませんか。尤もこの間上野の歸りに、兄さんに逢つて呉れないかとのお話もありましたが、確な御返事はいたさなかつた積りです。兎に角、貴方にも理窟はあるでせうけれど、そのことに就いては落度もありますよ。

磐子

小野辰夫樣」

その手紙は、申譯のためのものであつたが、併しその文面の裏には、夫人が少し小野に對して、立腹してゐるらしい樣子が、それとなく現はれてゐた。――反響は、幾分豫期しないではなかつたが、小野にとつて意外に不安な方面から來た。それでなくても夫人からは、殆ど理由も分らずに、少し機嫌を損じられてゐる際だつたので、彼には殊更不安だつた。

そしてその裏には何の署名もしてなかつた。夫人は何氣なしに封を切つた。すると中からは一枚の名刺と、半紙一枚へ亂暴に字を走らせた書狀が出てきた。夫人はすぐそれを押し開いて、ずつと文面に口を通したが、それから怪訝な顏に微笑を浮べて、かう皆の前へ手紙を擴げて見せた。

「鳥渡、これは何でせう。こんなことをいつて來たのよ。」

皆は異常な興味を以て、その文面を覗き込んだ。手紙にはかうあつた。

「拜啓。甚だ率直なる申分ながら、貴家御令孃冬子樣儀、他に御差支等無之候はゞ、小生に御遣し下され度、小生の財産身分等は、何時にても調査に應ずべく候。右突然ながら手紙を以て願上候。敬具。」

さうして名刺の方には、「神人合一論者。牛込區早稻田鶴卷町××番地、正顯閣、齋木善作」としてあつた。

皆は一度その亂暴な字體を推讀して、大體の意味を捕捉すると共に、顏を見合せて噴出して了つた。さうして改めて封筒の裏表や、名刺の活字などを注意して見た。が、それらは單に誰かが惡戯の爲にそんなことをしたとは、どうしても思へない眞實さが現はれてゐた。

「妙なことをいつてくる人があるものね、一體正氣なんでせうか。」

夫人は暫くしてからいつた。

「ちやんと番地入の名刺まで入れてきてゐるのを見ると、滿更唯の惡戯とも見えませんね。」

杉浦がいつた。

「一體こんなことで、すぐ娘一人をやる氣になると思つてるんでせうか。正氣にしても少し可笑しいわね。」

「だから、調査に應ずるから、いつでも調べに來てくれといふんでせう。案外大した金持の息子か何かかも分りませんよ。」

「それにしても全く『率直』だね。率直過ぎるね。」

小野も笑ひながら、口を挾まずにはゐられなかつた。

「どうです奧さん。差支がなかつたら、一つ冬子さんをお遣しになつちやア。」

杉浦はまた例に依つて、得意の揶揄を始めた。

「全く冬子さんには、却てその方が幸福かも知れませんよ。神人合一論者で、自ら財産や身分の調査に應じうる位自信があるんだから、僕たちのやうな輕薄才子とは、自ら選を異にしてゐるかも知れませんからね。」

小野も皮肉を籠めて、そんな冗談をいつた。

「さうね、夫人もそれに應じた。「この人でも確に貴方がたよりは上等らしいわね。」

「どうです冬子さん。」杉浦は猶も、揶揄の筆先を轉じて續けた。「お差支がないこととして、一つ齋木夫人におなんなさい。マダム・サイキ、語呂からいつても、なか／＼いゝぢやありませんか。」

「知らないわ。」冬子孃も苦笑してゐたが、揶揄を受けると眞顏になつていつた。「他人のことだと思つて。——惡戯でも何でも、氣味が惡いぢやないの。ねえ母樣。どんなことされるか分らないから、すぐ何とか斷りの返事を出して頂戴よ。」

「なに、放つてお置きよ。こんな手紙へ正直な返事をやる必要があるものかね。馬鹿々々しい。」

「全くさうですね、相手にしない方がいゝですね。」

そんなことで、最初の手紙は、笑ひ話の中に葬られて了つた。

が、それからまた四五日過ぎると、第二本目

の怪奇狀が來た。それには又た矢張り半紙一ぱいに、この間は手紙を差上げた筈だけれど、未まだに返事のないのはどうした譯だとか、餘り率直だつたのでお怒りかも知れないが、どうか自分の眞情を察して、是非心を容れてくれとか、さうしたことが再び記されてあつた。そして今度は細々と、自分の身分がその中に述べられてあつた。

それに依ると、齋木なる男は、新潟縣の生れで、年は三十四歳であり、家にはちやんとした妻子があるが、その妻にはちやんといひ聞かせてあるので、冬子孃さへ來てくれると定れば、いつでも別れることになつてゐるといふのだつた。そして自分は、今でこそ片手間に藥種商をしてゐるけれど、やがてはそれをやめて了つて自分の主張たる人生一元といふ一種の宗教を樹立し、いまの混沌たる思想界の迷夢から人類を濟ふのが目的だ。そしてそれにはいまの妻ではいけない。もつと立派な教養のある冬子孃のやうな人を、内助者としては必要だ。その冬子孃とは毎日通學の途に、顔を見るにつけ知つてゐるが、いかにも自分の理想の妻たるに相應しい——

さういふことが、半紙數枚に亘つて、亂暴な大きな文字で、しかも心血を以てしたやうな自由奔放な行文を用ひ、俗諺を引用したり、格言を挾んだり、また行と行との間へ割註を入れたりして、頗る奇妙な手紙を形作つてゐた。そしてその行と行との間へ、更に細かく書き入れをするのに、特に熱して精神が昂揚した時、自分のよくする癖であつて、誠に讀み惡いかも知れないが、自分の半生を知つてゐる人には、却つて直接の精神的接觸を感じさせるのだから、その積りで讀んで欲しいとまで書いてあつた。

それを讀んで、勝見家の人々は呆れた。と同時に、その最後の文句に依つて、彼が現に通學中の定子孃と家にゐる冬子孃とを、取り違へてゐるのを知つた。その妙な男に、見初められたのは定子孃だつた。定子孃と冬子孃とはさう歳も違はず、また身體の大きさも殆ど變りない位だつた。それで齋木莊が、定子孃のことを勝見家の令孃と聞くと、一も二もなく長女の冬子孃だと思つて、そんな求婚狀を寄越したに違ひなかつた。一體に定子孃は、目鼻立の派手な、ぱつと目に立つ美人だつた。それで彼女はよく、早稻田の學生や何かに後をつけられたり、また手紙をつけられたりした。中には大膽に電話で呼出したりした者さへあつた。だから齋木莊なるものが、さうした考へを起したのも、定子孃なら無理もないと思はれた。どちらかといへば目立たぬ、大人しい冬子孃が、そんな見知らぬ男から求婚を受けるといふことは、初めから可怪しかつた。——そのことが、冬子孃から小野に宛てた手紙に、書き記されてゐたのだつた。

しかし兎に角勝見家にとつては、定子孃にもせよ冬子孃にもせよ、そんなことをいつて來る男があつては、不安を感ぜざるを得なかつた。狂人だからとばかりに相手にしないでおくと、いつどんなことをされるか解らない懸念もあつた。それで、一つ警察へでも頼んで、巡査に説諭でもして貰ふか、警戒して貰ふより外はないといふことになつた。けれどもまた、事が事だけに、内分で濟むなら濟ましたかつた。それで大人と杉浦と小野とが、いろ／＼相談の結果、兎も角もあゝして、齋木莊の方では身分の調査にも應じるといつてゐるんだから、一應向うへ訪ねて行つて本人にも會つた上、よく此方の事情を話し、きつぱりそんなことはしないでくれと斷つた上、それでも肯きさうもなかつたら、そのときこそ警察の力を藉りるなり何なりして、處置をつけた方がいゝといふことになつた。

そしてその談判には、小野と杉浦とが、一緒に行くことになつた。

秋のある晴れた日の午後、彼等は殆ど面白半分に、鶴巻町といふから散歩がてら、その正聞閣を訪れるために出かけた。

途中、小野は何となく不安な心の中で、いろいろな場合を想像した。彼はまづその男を、場所柄早稲田大學を中途でよした位の、毛色の變つた哲學者か何かのやうに想像した。そして、それが實は隠れたる天才であつて、顔なども病的な畸形美を備へ、爛々たる眼光を放つ男で、行つて見ると彼の書架には、東西古今の哲學書が満ちてをり、その中で彼は孜々として神人合一論の著述に没頭してゐる。……そんな風に想像さへした。そして其の想像は馬鹿げてゐるが、いづれにもせよ齋木といふ人は、きつと説服し難い奇人には違ひないと思はざるを得なかつた。

小野と杉浦とは鶴巻町の通りへ出ると、そこの車夫溜りで番地の所在を尋ねた。

「××番地の正聞閣と。……聞いたことがあるやうですが、鳥渡思ひ出せませんな。けれども××番地ならこゝから一町ほど行つた、少し大きな横町から先ですから、その辺へいつて訊いて御覧なさい。」

車夫はかういつて教へてくれた。

小野は何だか敵地に臨んだときのやうな、一種の不安を心臓のあたりに覺えた。そして正聞閣なるものの存在が遂に不明で、齋木なんて男はゐないでくれればいゝと、ふと思つたりした。が、杉浦は先に立つて、どんどんその方向へ歩いて行つた。

車夫のいつたやうに、一町ばかり行くと、成程左側にそれらしい横町があつた。

「こゝだらう。」

小野はかういつて立止つた。

「うむ、こゝだらう。」

杉浦も繰り返した。そして二人は、改めて四邊を見廻した。と、そのとき二人の眼は同時に、向う側の横町の角にある、小さい藥鋪の中に吸ひつけられた。

「あれだらうか。」

杉浦は自ら聲を潜めていつた。

「あれかも知れない。そつと調べて見よう。」

小野も唾を呑むやうにして答へた。

そこで二人はさりげなくその前を通り過ぎて、藥鋪の名を調べることにした。二人はできるだけゆつくり歩いて、そこの看板を横目に睨んだ。すると黒い中に金で拔いた中將湯の看板や、屋上に掲げた亜鉛張りの店名に、正しく正聞閣、齋木藥鋪の數字を認めた。杉浦は小さな聲で、「此處だ。」といつた。小野はそつと點頭いた。

よく見ると店頭には、もう四十を越したかと見える、頭の禿げかゝつた一人の男が、無精髭に顔の半ばを埋めて、調劑臺に肘を凭せたまゝ、ぼんやり何か考へながら、坐つてゐるのが見えた。

二人は少し行き過ぎて立止つた。

「あれだらうか。」

杉浦は、もうくつくつと笑ひながら、しかしまた聲を潜めていつた。

「あれだらうかね」

小野も、あれがさうだとすれば、その餘りな意外な男なのに、疑ひを抱かざるを得なかつた。

「けれども確に看板にも、齋木といふ名は出てゐるし、あの軒の名札にも、確に齋木眞作と書いてあつたからね。あれだとすると滑稽だね。彼奴が店先にあゝしてゐて、定子さんを見初めたんだとすると、實に可笑しいね。」

「さうだね。あれだとすると、僕はもう今更談判する勇氣も挫けて了つたよ。けれど、ひよつとすると眞作といふ男は、あの二階を借りてゐ

この中の不良少年のやり方とは、結果に於いて同じでも、考へは違ふのでございますから、どうか是からもその點だけは、決して御心配なさらんやうに。——」

「さうですか。さう申しませう。」

杉浦は眉根一つ動かさずに、冷然と答へた。

彼はさうした場合、いつも手強い態度を持してをられる性分だつた。小野は何となく氣の毒なやうな、妙な同情を以て默つてゐる外なかつた。

詩人は續けていつた。

「妻のことも、あゝ申上げましたが、まだ歸さずに置きましたから、御心配下さらないやうに、——あの、只今下にをりましたのが、あれが妻です。妻も決して惡い女ではないのですが、どうも私と性格が合ひませんので、私は今でこそ薬局などをしてをりますが、是からは思想方面の著述をしようと思つてゐるものですから、妻によつて性格の傷けられるのを何より恐れましてな。自分の進む道の爲には、どうしても今の妻と別れて、新しい生活をしなければならんと思つたのです。」

「はあ。それは御勝手ですが、思想上の著述とやらが、さう今迄の生活を犠牲にする程、價値のあるものでせうかな。」

杉浦は猶も冷然として、そんな手強い皮肉をいつてゐた。

「只今、私の著述の一斑を、御參考までにお目にかけませう。さうすれば私の意のあるところも、幾らかお分りになりませうから。——」

と、齋木氏はかういひながら、傍の押入の中から一つの支那鞄を取出した。そしてその雜然と反古めいたものの入つた底から、一綴りの原稿を引出した。

打見たところ、それは三百枚もあらうかと思はれる、半紙に大きく墨で書いた、——あの手紙と同じやうな、——尨大なものだつた。彼はそれを輕蔑と妙な興味とで、默つて眺めてゐる二人の前で、二三十枚ざつと繰つて見せた。そしてところどころの要點を大聲で讀んで聞かせた。それは理路の立つてゐないといふ程ではなかつたが、ひどく國士的な漢文口調の論文だつた。

「……まア是が、私の著述なんでして、此の清書した奴は、只今活版所に廻してあります。前に一部分を印刷したのもありましたが、皆それは私の知友やら、全國の圖書館、報道に關係した人々、思想上の先輩などに送つて了ひましたので、こゝにはさういふ人たちの受取りがございます。これがその大隈さん。それから是が犬養さん、これが杉浦重剛さん。まアざつとこんな工合でして、これらはいづれも始終私の交際してゐる人々なのです。——要するに私の論旨といたしますところは、人間の中に神格といふものを認めまして、それに依つて神壁——神の壁ですな、——神壁の中へ入れば、人間は即ち神と成りうるといふ議論でして、この書の中にも十分に論じ盡してはをりませんが、いづれは生涯の事業として完成する積りでをります。一體私がかういふことを始めました動機は、若い時に大分身體が弱うございましてな。北海道から樺太をかけて遊び廻つたことがございました。その時に自然とかういふことを悟つたのでしたが、その後畏くも明治天皇の御聖徳や、乃木將軍の御性格などをよく調べますにつれて、いよ〳〵自分の考へが間違つてゐないのを知りましたので、先づ家にゐた書生から妻などによく話して聞かせましたところが、さういふ貴い考へなら、是非何かに書き殘して置いたらいゝだらうといふので、妻などに勸められたのが抑もの動機でした。」

「さういふ[illegible]奥さんぢやありませんか、いはば貴方の御著述の産婆でせう。」

杉浦は又さういふやうなことを混ぜつ返した。

「それもさうですが、どうも性格が合ひませんでな。私は性格が縛りつけられるのを何より恐れてゐるものですから。」

齋木氏はもう一度かういつた。彼は性格を傷つけられるといふ言葉が、非常に得意らしかつた。

「もうお暇しようぢやないか。」

小野はもう馬鹿々々しいやら、何だか氣の毒なやうな氣持やらで、杉浦を促した。

「歸らう。」

杉浦も應じた。

「さうですか、どうもわざ／＼おいで下すつて恐縮でした。ではどうぞお歸りになつたら、勝見さんの方にも宜しく申上げて下さい。決して御心配なさらないやうに。以後は決して何も申上げませんから。或ひは年始狀ぐらゐ差上げるかも知れませんが……」

小野はその言葉に、思はず微笑んだ。が。杉浦は、

「承知しました。」

と、相變らず端然と答へた。

すると齋木氏は聲を低めて更にいひ出した。

「それから階下にをります妻には、貴方がたを普通の知人だと申して置きましたから、何分さうお含み置きを。……」

「えゝ承知しました。」

小野は杉浦と顏を見合せながら、快活にさう答へて立上つた。

歸る時も細君は、何も知らない愛想笑ひをしながら、二人を送つて出た。小野はその細君に對して、妙に氣の毒なやうな、滑稽なやうな感じがして、正視するに堪へなかつた。

二人は普通の客のやうに、普通に挨拶して戸外へ出た。そして暫く道を行つて、もう齋木家の館から聞えない位遠ざかると、それまで堪へてゐた後に悲喜劇的な感じから、思はずぷつと噴き出してしまつた。

二人はもう誰に憚ることもなく、街中で聲を立てて笑つた。……

その事件を小野は、雜誌「新聲」記者から寄稿を頼まれた時、他に適當な材料が無かつたのと、少しはその時分の自分の心持を述べたい氣持もあつたために、さう深い考へもなく、筆にしたのだつた。そしてその女主人公を、事實は定子孃の間違ひだつたに拘らず、どこまでも冬子孃自身のことにして、しかもその主人公なる「私」といふ男を、その令孃の許婚として描いた。その許婚なる「私」が、その不思議なる求婚者に對して、抱く感想を描いたのだつた。

そのことが、意外にも非常に大きな波瀾を、小野と勝見家との間に起してしまつた。

四

その小說が「新聲」に發表されると、その翌日のことだつた。小野は突然勝見夫人から、一通の速達便を受取つた。急いで封を切つて見ると、それには、たゞ簡單にかう書いてあつた。

「少しお話したいことがありますから、明日午後三時頃そちらへお訪ねします。どうかよそへ行かずに待つてゐて下さい。

磐

小野辰夫樣」

それを讀むと小野は、さすがに不安な胸轟きを、その嫌に簡單な文言から、どきりとする程激しく受けた。彼はあの小說を書いたものゝ、さすがに勝見家で起つたことを材料としたことだけに、幾らか氣が咎めてゐた。別に勝見家の人たちに、迷惑をかけるやうな惡いことは、少しも書いた積りはなかつたが、それでも一家の私事を材料としたことには、何となく濟まない

やうな氣がしないではなかつたのだ。

そこへ、夫人からその手紙だつたので、彼は、「あ、矢つ張りさうだつたか。」と、大體の事態はすぐに推察した。夫人は怒りに來るに違ひなかつた。――向うから、わざ／＼出向いてくるといふからには、よほど怒つて、何かいひに來るのだ。――さう思ふと彼は、何だかゐても立つてもゐられないやうな、不安な思ひに閉されざるを得なかつた。どんな風に夫人は怒つてゐるだらう。怒つて、どんなことをいふだらう。そしてその結果、自分と勝見家との關係は、どんな風になるだらう。……

併し小野も、さすがに少しは覺悟を決めた。自分のやつたことは、もうやつたことで仕方がない。自分は決して悪意でやつたのでも、また爲にしようと思つてやつたのでもない。だからそれが夫人からどんな怒りを買はうと、それは仕方がないことだ。まア明日夫人が來て、どんな風なことになるか、それは成行に任せる外はない。……と。

併し、さうに覺悟を決めても、不安は矢つ張り不安だつた。殊にその翌日、夫人の來る迄待つ間の不安と焦躁は、殆どぢつとしてゐられない程だつた。

もう冬になりはじめの、薄い赤ちやけた日の光が、傾きかけて下宿の二階の窓にさしこんでゐた。そしてそれが妙に頼りない影を、障子の裡に映してゐた。三時といへば、もう暮れ早な街には、何となく物悲しい騒音が流れて、それが小野のぢつと待つてゐる心を、更に不安と焦躁とに陥れた。彼は幾度か中腰になつて、狹い硝子の嵌つた障子の蔭から、今夫人が下宿の前の狹い路次を、はひつて來るか／＼と待つた。

たうとう夫人の黒い姿が、其處へゆつくり入つて來た時、小野はやつと吻とした思ひと、更に激しい心内の不安とに襲はれざるを得なかつた。

下宿の婆さんの「勝見さんの奥さんがいらつしやいました。」といふ案内を待つか待たずに、急いで梯子段をおりて行つて、

「どうぞ。……どうぞお入り下さい。」

といつた小野の言葉は、妙に乾からびたやうな顫へを帶びてゐた。夫人は、例に依つてむつと默つたまゝ、從容として二階へ通つた。

「わざ／＼よくいらしつて下さいました。汚い部屋ですがどうぞ此方へ。」

「えゝ。」

夫人は下宿の婆さんが、茶器を持つて來て勸めて來るまで、殆ど口數をきかずに、其處にじつとしりと坐つてゐた。小野は又その無言の態度から、更に不安と恐怖とを與へられた。

婆さんがおりてしまふのを待つて、夫人はその結んだやうな口を切つた。

「小野さん、今日私がお訪ねに來た用といふのはね、外でもありませんけれど、あの貴方が新聞に出した小説ね。あれは一體、何ですの？」

夫人の言葉は、もう[illegible]へて來たかのやうに、初めから鋭かつた。

小野は矢つ張りさうだつたかと思ひながら、首を垂れてから答へる外はなかつた。

「あゝ、あれですか。あれは別に何の氣もなしに、書いて出して了つたんですが、何か悪いことでもあつたんですか。もしさうでしたら……」

夫人は皆までいはせず、押つ被せるやうに聲を勵ましていつた。

「何か悪いことどころぢやありませんよ。貴方は一體あんなことを書いて、それでいゝと思つてゐるんですか。第一、貴方はまるで自家の冬子と、もう正式に婚約ができてゐるやうに書いて、それで差支ないと思つてゐるんですか。――貴方はきつとあゝ書いて、早く世間に發表してしまへば、先方たちも默つてしまふし、自家で

ものたとふで、貴方との結婚を、承知しなければならなくなると思つて、もう仕向けたんでせう。」
夫人にかう畳みかけて、激しくいひ出されると、小野は猶おど／＼して、どういひ解いていゝか分らぬ程だつたが、さうまでいはれては、さすがに彼も、顔を上げて答へない譯にはゆかなかつた。
「いゝえ、決してそんなことはありません。そんな故意的な積りで、僕があれを書いたなんて、それは餘りといへば餘りな奥さんの誤解です。僕はたゞ、……それやア[illegible]の中に、さういふ気持は[illegible]あつたかも知れませんが、書く時は只あした方が、主人公の境遇上工合がいゝから、思ひ切つてあゝ書いたに過ぎません。」
「いゝえ、それはさうかも知れませんけれど、私のやうに思はれても、併し仕方がないぢやありませんか。貴方は前にも、まだ正式に何も定りもしないのに、お兄さんと私たちを逢はせて、そして何とかして関係を付けようとなすつたぢやありませんか。――いゝえ、あの時の貴方の心持は、何とか理窟はありませうけれど、矢つ張りさういはれても仕方がありませんよ。」
「それやア、さう邪推有るなら、僕は何とも申上げられません。たゞ自分としては、そんな深い下心があつてやつたのでない積りですが、それがさういふ風に見做されて、お気に障つたとしますと、僕はたゞ自分の考へが至らなかつたことを、お詫びするばかりです。」
小野は危ふく湧きかゝつた熱涙と、何ともいへぬ口惜しさを堪へて、さう頭を下げる外なかつた。
「それやア私だつて何も、貴方がそんなお考へばかりで、あんな小説をお書きになつたとは、思つてはをりませんよ。併し貴方があんなことをなすつて下すつちやア、他人からさういはれたつて、返す言葉もないぢやありませんか。何故貴方は一體、そんなことをなすつて下すつたんです。何故あんな小説を書いて、私たちのことを世間に發表して、迷惑をかけたりなさるんです。」
夫人も自分の言葉に感動して、自ら涙を含んだ聲を出した。さういはれては小野も、全く答ふる術がなかつた。
夫人は又聲を勵まして續けた。
「――貴方は何故、私のいふ通りに、下らない小説なんぞ書くのを、おやめにならないんです。前から私が呉々もいつてるぢやありませんか。生活費位は何とかして補助して上げますから、今から下らない小説なんぞ、決して書かないやうになさいつて。それだのに貴方は背かないで、たうとうあんなことまで書いてしまつて。――一體それからして貴方は間違つてゐるんです。」
「併し奥さん。」小野はやうやく顔を上げていつた。「僕は矢つ張り小説が書きたかつたのです。それやア奥さんが、生活を幾らか保護して下さるから、下らないものを書くなつていつて下すつた心持は、有難く思つてゐるんですけれど、僕は矢つ張り何だか、書かないと淋しくて、書かずにはゐられなかつたんです。」
「そんなら書くにしても、何故もつと立派なものを書かないんです。あんな下らない小説を發表しちやア、第一私たちが先輩に對して、顔向けができないぢやアありませんか。貴方が先月號に出したものなんか、何處でも評判が悪いぢやありませんか。米田さんなぞだつて、一言もあれに就いて批評さへしないぢやありませんか。」
さうまでいはれては、小野も更に黙つてはゐられなかつた。
「併し僕は、僕の今の力だけのものを、書いて

發表してある積りです。そして今に奧さんのおつしやる通り、下らないものばかり書いてをりますが、僕は書きながら自分を成長させてゆく積りです。米田さんの月評などは、寧ろ奧さんが念頭に置く方がをかしい位です。」

さう反噬されると、夫人は更に別な方面から、またから小野を遣り込めずにはゐられないらしかつた。

「それはさうかもしれません。が、書く物の方は別としても、この頃の貴方の爲さる色々なことは成つてゐないぢやありませんか。あの冬子にお寄越しになつた、皮肉交りの手紙は何です。また假りにもお友達で、貴方に一番盡してゐる杉浦さんに對する、あの下らない嫉妬は何です。」

小野はそれには頭を垂れて、呟くやうにかういつた。

「併しあのときは、あゝいはずにはゐられなかつたのです。僕も餘りに輕率なことをしたと、今では悔いてゐます。」

夫人は猶もつけ加へた。

「ほんとに杉浦さんの人格に對して、恥かしいとお思ひなさい。」

「……………」

さう迄いはれても、そのとき小野には返す言葉もなかつた。

夫人は暫く沈默した後、更にまた結論するやうにいつた。

「とに角、これもみんな貴方を思ふから、私はこんないひたくもないことをいふんですよ。だから貴方もよく氣を付けて、自分のしたことをお考へなさい。そして是からは人に後指さゝれないやうに立派な行動をしてください。貴方がまたあんな風なことばかりなさると、私たちは考へ直さなくちやなりませんからね。」

小野もその言葉に、幾らか坐り直すやうにして、何となく溢れくる熱涙を抑へながら、かういつた。

「解りました。以後は決してそんなことはいたしません。そして私のことに就いてはよく考へてみます。」

「ほんとにさうなすつてください。それから是はくれぐれも申上げておきますがね、今日私は何も貴方と冬子とのお話を斷りに來たんぢやないんですよ。たゞ御忠告に上つたんですからね。ほんとによく、貴方が立派にさへなつてくだされば、決して私たちの考へは變らないんですからね。ようござんすか。」

夫人の眼にも、さすがに涙が光つてゐた。

「有難うございます。」

小野ももう頭に傳はる涙を感じながら、さういつて首を下げるほかはなかつた。

やがて、夫人は歸つて行つた。小野はその後姿を見送つて了ふと、口惜しさとも悲しさともつかぬ熱涙が、滂沱と頰を濡らし落つるのを、どうともすることができなかつた。

夕闇はもう部屋の中に忍び込んでゐた。

五

それから三日間、小野は自分の部屋に閉籠つて、そして考へ續けた。考へれば考へる程、凡ての事態が絶望的に思はれた。夫人は最後に、あゝはいつてくれたものの、その態度といひ物いひといひ、凡ては小野にとつて、もう不利に陷つてゐることを、彼は胸に感ぜずにはゐられなかつた。夫人はあゝはいふものの、よく考へろといふのは、自分の方からはいひ出し惡いから、そつちで考へて處置しろと、さういつてゐるやうに思はれた。少くとも事既に此處に及んでは、どうしても小野の方から、進退伺を出さなくてはならぬのを、彼は思はずにはゐられなかつた。

彼は現實に對して、却て自分の方から、進んで離縁を御願ひするとか、適當のところへ、を遁かうと思つた。が、併し、それは彼が冬子孃に對して、まだそれだけ愛と未練がある限り、到底できないのを感じた。

けれども、この際少くとも向うに對して、此方から少くとも向うの意志に任せることを、提議するだけはできると思つた。さうすれば、向うに少しでも眞の愛があるならば、この位の過失はほんの一時の問題として、すぐに許してくれるに違ひない、もしこの位のことが、到底許されないとすれば、そのときは此方から斷念しようと思つたとて、それは寧ろ詮ないことに違ひなかつた。

「さうだ。さうしよう。向うの考へに凡てを任せよう。からなつてはさうするよりほか道はない。」

さう小野は決心した。その上彼は、向うの心一つに任せるやう決心したのは、一縷の希望があつたからだつた。彼はまだその時分まで、少くとも冬子孃の心が、まだ自分を離れてゐるとは思はなかつた。といふのは彼はその一週間ばかり前、彼女と離室の方で會つたとき、彼は思ひ餘つてこんなことを訊ねたことがあつた。

「冬子さん。僕はこの頃奥さんの御機嫌を、大變損じてゐるんですが、もしこんなことが度重なつて、僕が奥さんと喧嘩でもするやうになつた場合、貴女はどうか、ついて來てくれます。」

彼女はおつと考へ込んで答へなかつた。

「そしたら僕について來てくれますか。お母さんをすてても、僕について來てくれるだけの決心がおありですか。——僕は、冗談でいつてるんぢやありませんよ。ほんとにそんな問題は、考へておかなくちやならないことだから、貴女に訊いてゐるんです。——僕について來てくださいますか。」

冬子孃はそのとき、低い聲ではあつたが、かうはつきり答へた。

「それやアさうなれば、仕方がありませんね。」

「僕の方へ來てくださるんですね。」

小野がから念をおすと、彼女は確に點頭いたのだつた。

それが一週間ほど前のことだつた。だから小野は事態が餘程惡くいつても、冬子孃だけは少くとも一應、自分を許容しようとしてくれるに違ひない、そんな反對な望みさへ抱いてゐた。そしてそんな問答が彼女の心を脅かして、却て小野から去らしめたことは、少しも知らなかつたのだつた。

小野はさう決心をきめると、思ひきつて[illegible]子夫人に、かういふ手紙を書くことにした。

「奥様。

この間の御忠告御叱責に就いては、御好意からだとは肝銘してをりましても、餘り激しいお言葉なので、一時は恨みにも存じました。けれども、全く考へてみますれば、私の卑小な行爲から出たこと故、その行爲があの場合不可抗力な衝動からとはいへ、自分に出でて自分に復ることだと思ひました。

私の前途に就いては、私の行き方で勉強するよりほかありませんから、或ひは『學者的になれ』とおつしやる奥さんの期待には背くかもしれません。けれども文學者が皆が哲學者でなければならぬ譯もないでせうから、その中には僕の素質と僕の方針とが締つてくださる機會もあるに違ひないと信じてをります。そしていつでも申上げてゐる通り、私は私だけの仕事をして、それで終るよりほかないのですから、強ひて無理な御期待を作つて頂くことは、私としては甚だ苦痛でございます。

それ以外に、お咎めになつた私の野人的な無作法や、またはあの小説で御迷惑をかけた點などは、たゞ寛大なるお心で許してくださるやう、お詫びするほかありません。
それから、最後にもつと根本的な問題は、あれから三日間考へに考へてみました。そしてその結果は、凡てを改めて奥さんと冬子さんとの御意志に任せるといふ、決心をするに立至りました。どうぞこの際奥さんに於ても、また御當人の冬子様に於ても、改めて御熟考くだすつて、私の一身をお思ひ通りに御決定くださるやう願ひ上げます。そして私を今迄通りに通してくだされば、幸福これに過したことはございませんが、さうでなくとも運命だと思つて諦めます。少々とも諦めようと努力します。呉々も御熟考の上、御決定くださるやう願ひ上げます。

小野辰夫

勝見磬子様」

かうして小野は、思ひきつてそれを投函した。投函して了つてから、彼は再度、何となく取り返しのつかぬことをした、と、ふと思ひもしたが、併しまた仕方がないと思ひ直した。
それから小野は、更に不安と焦念に滿ちた二日を過さねばならなかつた。
三日目に、彼はたうとう思ひきつて、勝見家を訪問しようと決心した。かうして不安の中に、向うからの返事を待つてゐるより、いつそ思ひ切つて、向うの返事に打突かつた方が、寧ろ氣が樂になるとさへ思つたからだつた。
もう日は暮れてゐた。小野は電車を下りて、いつも通り馴れた榎町を歩いて行くとき、彼の足は何となく戰へるやうだつた。
玄關の戸をがらりと開けて、いつもの通り訪うたが、冬子孃は出て來なかつた。彼はいつもなら殆ど案内も待たずに、茶の間の方へ通るのだつたが、何となく今日はそれができなかつた。
「奥さんにどうぞ、僕が來たと申上げてください。」
彼はその儘書齋の方へ通つた。
夫人はなか〳〵出て來なかつた。小野はかうしてゐる間に、ひよつとすると冬子孃が現はれて、再び自分たちの關係が、元どほりであることを告げ知らせてくれるか、杉浦でも出て來て、何とか安心させてくれはしまいかと、ひそかに心待ちに待つてゐたが、そんな氣振りは少しもなかつた。茶の間の方にも、冬子孃はゐないらしかつた。
暫くして、向うの襖の出入口の方から、夫人が靜に現はれた。夫人は何だか妙に顏中を硬ばらせて、いつもより更にむつと默つて入つて來た。
「お待たせしました。」
夫人は座についてから、靜かな聲でさういつた。それから、ちらと小野の方を見返して、
「お手紙は確に拜見しました。」
と、同じ調子で靜にいつた。
それで小野は、もう殆ど凡てを了解した。彼は殆ど機械的に、
「はア。――」
と促すやうにいふほかなかつた。
けれども夫人は、すぐには續けていひ出さなかつた。
「杉浦さん、一寸。」
却て彼女は、何と思つたか、かういつて杉浦を呼んだ。
「何です。」
杉浦は茶の間の方から出て來て、閾の所へ

立つた。
「あゝ、是から小野さんのことで、お話をつけようと思ふんですがねえ。貴方にも居て貰つた方がいゝから、此方へお入んなさい」
夫人はかういつた。杉浦は入つて來て、默つて夫人の横に坐つた。
夫人は鳥渡小野の方を向き直るやうにして、そしていひだした。
「では、小野さんの方から、どつちかにきめてくれとおつしやるから、改めてお話をつけますがねえ。私どももそれから、いろ／＼考へてみました末、改めて小野さんとは、今迄の話は何もなかつたことにして頂かうと思ふんです。だから、どうぞその積りでゐてください。」
小野は鳥渡前から豫期してはゐたが、改めてさう宣告されると共に、悲しいといふのでも苦しいといふのでもないが、何だか急に胸の中が、ぐつと塞るやうに感じた。
「さうですか。ではやつぱり駄目だつたんですね。」
彼は下を向いて、呟くやうに訊き返した。
「ええ、お氣の毒ですが、さう思つて頂きます。——杉浦さんも、どうかさう思つてくださいよ」
小野はまだ何も知らずに、杉浦が何とか一言でも取做すやうなことか、慰めてくれるやうなことでもいつてくれるかと、ぢつと其方を見やつたけれど、彼はたゞ默つて點頭いたきりだつた。
暫く一座は沈默した、と、小野がまた低い嗄れたやうな聲で、もう一度訊き返した。
「で、それは、冬子さんの御意志なんですか。」
「さうです。冬子と相談の結果、さうきめました。」
夫人は靜かな聲でいつた。
「さうですか。——」
小野はもう返す言葉もなかつた。
と、夫人は、やゝあつてかういひだした。
「で、さういふことに話は決りましたが、是で何も貴方と、すつかり縁を斷つといふんぢやありませんから、どうぞそのお積りで、是からも今迄通り、とき／＼家へ遊びに來てください。」
「はア、有難うございます。」
小野は殆ど機械的に、かういつて頭を下げた。
夫人は續けた。
「それから是はまた、貴方に此方からのお願ひなんですけれど、どうぞ今度の事件は、なるべく貴方も小說になんぞ書かないやうにしてください。お互に、いろ／＼迷惑しますからね。」
「はい。——」
小野にとつてはこの際、そんなことは問題ではなかつた。彼はたゞ喘ぎ／＼するやうな胸を堪へて、猶も夫人の言葉を待つた。
「では兎に角、貴方も勉强して、是からは他人に彼此いはれないやうな、立派な人になつてください。今迄のやうぢや迚も駄目ですよ。私のいふことはそれだけです。」
夫人は最後に止めを刺すやうにかういつた。が、小野はそれに對して、もう返す言葉も出なかつた。彼は首を垂れてゐたが、やうやく、
「では、失禮します。どうぞ冬子さんには宜しくおつしやつてください。」
と、いつて立上つた。杉浦は徹頭徹尾默つてゐたが、小野が立上ると、
「おや失敬。」と、初めていつた。
小野は殆ど夢中で、勝見家の玄關を出た。冬の宵の口の風は、もう音を立てて寒く吹いてゐた。彼はその暗い、人通りの少い戸外へ出て、暫くはどつちへといふ當もなく、走るやうに歩いて行つた。……

和靈

一

私は其朝も何時もの通り、遅い朝飯の食卓の傍で、新聞を擴げながら箸を動かしてゐた。と何時氣なしに目を走らせてゐた、讀賣新聞の婦人欄の中ほどで、私の眼はぴたりと止まらざるを得なかつた。「矢つ張り出てゐるな。」心の中でさう思つた。豫て彼らの結婚が、昨日と云ふことに知つてもゐたし、さういふ報道に關しては豫て期してはゐたものの、さすがに胸がどきんとした。それは弱い心臟を持つてゐる私の癖で、精神的に頭へ響くといふよりは、むしろ生理的に肝へ來たやうな氣がした。悲しいとか悔しいとか云ふ感情でなしに、たゞはつと衝撃を與へられて緊張した感じばかりだつた。心は割合に平靜だつたが、心臟の鼓動だけが、傍の火鉢の横にゐる母に、氣付かれやしないかと思ふ程だつた。私は呼吸を緊迫させて、その鼓動を抑へようとした。そして平氣な態度で其新郎新婦の相並んだ、寫眞姿に見入つた。胸騷ぎを他に氣取られまいとする心持と共に、慌てて其記事を伏せたりする慌て方は、母が傍にゐない迄も私は私自身に見せたくなかつた。たゞ見榮と云つたのでは當らない、或る立派に受け應へて立つ姿を、私自身の中なる他人に見せたいと云つたやうな見榮からだつた。

寫眞版が精巧でない爲に、はつきり實物に迫る程ではなかつたが、兎に角私は杉浦が、苦り切つたやうな悲痛な顏をしてゐるのと、冬子が少し俯向き加減にしたために、殆んど他人かと思はれる位面變りがして、さう美しくなく撮れてゐるのをぢつと隅から隅まで認めた。製版職工の失策か何かで、寫眞の右上部の空白が、ひどく白つぽく擦れて了つてゐるのまで見逃さなかつた。而してさういふ裕りが心にあるのを、自分自身に知らして安心させたやうな滿足と共に、其下の活字の報道をも、一字殘らず讀み盡した。そこには事實以外、何事もなかつた。その事實の簡明な記事は向うの家に對するのか、又は自分に對するのか、兎に角その新聞社の、一種の心遣ひがあるやうにさへ感ぜられた。私は冬子がさう美人でなく撮れてゐるのと、その事實以外に何事もない記事に淡い安心の吐息を覺えて、靜かにその頁を伏せて、初めから其處が開いた目的の、文藝欄の方へ目を移した。

次いで今度は少し豫期を以て、時事新聞の社會面を見たが、そこには別に何の記事もなかつた。其社には其頃私や當の敵手である杉浦の友人、池田が記者をしてゐた。その時分の社會部長をしてゐた茅野氏も、自分に同情を寄せてゐて呉れたに違ひなかつた。そして彼らの約婚を發表した際も其池田の心遣ひで、私にも向うの家にもさう損傷を與へないやうな、公平な穩健な記事を出して呉れたのだつた。——私は又淡い感謝の心を以て、安んじて其新聞の文藝欄に目を轉ずる事が出來た。

ふと氣が付くと、そこの讀み棄てて置いた讀賣を、母が取り上げて見てゐた。しかも婦人欄を見てゐるらしかつた。私は少しはつと思つた。併し困つたと思ふ當惑と共に、いつそ早く母も見て了つて呉れた方が、さつぱりしていゝと云ふ考へや、母がそれを見てどんな風な態度を取るだらうといふ興味やらで、不安の中にもひそかに期待せざるを得なかつたが、さすがに

其方を見てゐる譯には行かなかつた。私は風塵を遣り過ごすやうに、心の中で目を瞑つて時の經つのを待つてゐた。出來るならば、默つてゐて貰ひたい氣と、向うが何か云ふ前に、いつそ強ひて此方から切り出さうかと迷ひながら。が、そんな迷ひを決定してゐる間もなく、殆んど直ぐに姑は云ひ出した、

「何だか怖さうな人だね。」

姑は此方を見てゐなかつた。主が劣惡なので、横から見ると寧ろ青つぽさうな老眼鏡で、今下に置いたらしい新聞の上を、わざと見放さないでゐるらしかつた。

「え、誰が？」と、私は直ぐ受け返したが、其時姑が初めてのやうに此方を見たので、何だか其反問のわざとらしさを看破られるやうな氣がして、すぐ取返すやうに續けた。「あゝ、杉浦がかい。」

「いえ、お嫁さんがさ。」

姑はからかつて、殆んど老婆の眼みたいに、眼鏡の上から斜に私をちらつと見た。私は其視線に何となく浮んでゐる、底意に感づかない譯には行かなかつた。それは私の氣を挫けて、と云ふより矢つ張り先刻の私の心持のやうに自分自身に對する見栄で、遠慮しい／＼ではあつたが、それでも正直で素朴な性惡を隱し得なかつたのだ。

「さうかねえ、さうでもないんだけれどねえ。」

私は思はずから辯護的に云つた。而して何と無く恐かしかつた。さう云はずにゐられない自分の倫理的な態度が、面憎いといふよりは、誰かに見透かされるやうな氣がしたのだつた。

「さうかねえ。寫眞で見るとさう見えるけれど……」

と姑は、私の抗辯に遠慮しながら、自說を固執するやうに、もう一度ちらと新聞を見返して、冬子の寫眞の顏が、稍俯向いたためと版の網目の關係で、眉が上あがりになつてゐるため、險が生じた眼のあたりを眺めた。私は其上彼女の顏が、實物より尖つて寫つてゐるのは知つてゐた、が、其上の辯護はもうなし得なかつた。

姑も默つて、其新聞を掛けるやうに傳へやると、別な續き物を讀み始めた。私は少し胸に堪へながら、其樣子を知らないふりで見てゐた。而して何となく苦しくなつたので、丁度喫も終はつたのをしほに、茶をぐつと飲み干して、自分の書齋へ入つた。

書齋で、矢つ張り姑の方が正直だなと思つた。自分の態度には、倫理的な性質に根ざしてゐるものはあつても、矢つ張り努めてゐる所がないとは云へない氣がした、少くとも洞察ある人の眼から見たら、矢つ張り憫れむべき儚い努力と見られるだらうと思つた。立派に持ち堪へてゐるとは、結局平氣を裝ふといふことと、何ら異る所がないやうに思つた。矢つ張りそれではいけない氣がした。如何に性格的とは云へ、中途で激情を抑へて了はずに、もつと正直に、といふよりは正直らしく、露骨に憎惡や苦痛を發展させて、それを端的に表白しなければならぬ。そんな風に考へられた。

併しそれが私の性格から云へば、矢つ張り一種の無理な努力であるのを知らなかつた。

その日の午後近所の下宿にゐた法學士の矢田部が、勤め先の某經濟雜誌社から歸つて來ると、私を訪ねて來た。彼は私を慰める積りか、又は私がどんな顏をしてゐるか、兎に角樣子を見に來たに違ひなかつた。

矢田部は私と二言三言話した後、突然直入に云ひ出した。

「おい。今日の新聞に出をつた、奴等の寫眞見たか。」

纖細な神經を缺くといふのではないが、如何にも舊式の法學生タイプに纏め上げられた、無

鄭重な彼の無遠慮には、私も時々辟易させられた。が今日はそんな所に辟易してはゐられないと思つた。

「あゝ見たよ。すつかり見た。」

私は悪びれずに直ぐから答へた。その問題に關しては、無遠慮な矢田部の事だから、早晩云ひ出すに違ひないから、此方から先廻りをして、云ひ出さうかとさへ、鳥渡考へてゐた位だつたから、さう努力もせず、躊躇もなくさう答へ得た。

「杉浦の奴、勝ち誇つた顔をしてをるかと思つたら、割に曖昧な面をしをつたなあ。」

私は微笑した。そして其微笑が、強ひて作つたもののやうに、矢田部に取られるのを、氣にしながらかう答へざるを得なかつた。

「うん。さうだつたね。だが、あの眉間皺は杉浦のいつもの癖だよ。」

「哲學者ぶつてるんだね。」

矢田部の感想は單純明快だつた。

「いや、實際杉浦だつて悲壯な氣がしたんだらう。」

私はかうは云つたが、直ぐ何となく悔いられた。何故私は、先刻からかういふ風に答ふべき感想として、心の中で取つて置いた事、――いや、彼は世間の[illegible]に對して、あの悲痛さうな顔で答へたんだよ。而して自分自身では、中根家のために犠牲した積りか何かでゐるのだよ。」と、答へ得なかつたらうと思つた。が、今更どうしてもさうは云へなかつた。實際自分は自分の善意から云へば、決して不正直ではないのだが、悪意の方から云へば、正直だとは云へない氣がした。而して此際善意に忠實であるより、悪意に正直である方が、男らしい態度でもあり、立派であるとさへ思はれて來た。そこに卑怯な感じがあつた。而してそれが矢田部に恥しかつた。

が、彼は毫もそんな事には感じないらしかつた。そして暫く別な話へ移つた後、又突然云ひ出した。

「どうだい、何處かへ夕飯を食ひに出ようぢやないか。――實はな、僕は今日悲觀しとりやせんかと思つたから、それで慰めようと思つて、誘ひに寄つたんだが、――したら、割合に元氣なんで安心したよ。だが、兎に角何處かへ行つて、一ぱい飲まうぢやないか。」

「うん。有難う。――ところが僕は元氣でもないでね。それで内心は、[illegible]やうに悲觀してるのかも知れないよ。」

私は苦笑しながら、自分自身にも、[illegible]のやうに、[illegible]的に正直になり得て、かう答へた。

「そんな[illegible]こつちや。」

その單純明快な、こだはりのない矢田部の態度を、私は今更ながら羨まない譯には行かなかつた。

そして一緒に[illegible]に出掛けた。

それから一週間經つて、私は秋山に會つた時も、境遇は別だがそれと同じやうな感想を得た。

秋山は私の親友でもあつたし、又杉浦の友人でもあつた。而して中根家とは、その事件の有無に係らず、不即不離な關係を取つてゐた。彼は私や杉浦と、時々中根家に出入し始めた頃から、東京を少し離れた[illegible]に、[illegible]の教官となつて赴任してゐたので、自ら事件の渦中から離れて、傍觀するといふ冷靜な位置ではなかつたが、[illegible]てゐた。彼は時たま中根家を訪ねて、聞かれれば初めて自分の意見を[illegible]するのだつたし、又屢々私たちと會つたが多くは藝術上の議論ばかりに耽つて――それは實際的に[illegible]んだかの觀があつた。――事件を[illegible]するに過ぎな

かつた、が、私の方から持ち掛ければ、それは他人が容喙すべき事ぢやないが、と云ふやうな前提を置いて、强ひて中へ立入つて來ないで、批評を下すと云つた風だつた。併し彼は其問題に就て、決して回避するとか、冷觀するとか云ふのではなかつた。彼は彼として、色々な意見も持つて居り、批判や感情も持つてゐて、それを池田や谷口やのやうな第三者には、隔てなく論議してゐた。

彼秋山は初めから、私と冬子との問題には、餘り贊成ではなかつた。それは中根家に集つて、中根先生死後の家を後護してゐる積りの、かの先輩の弟子たちとは異つて、私が冬子の配として不服だからといふ向うの家のための意味ではなく、寧ろ反對に、その結婚が附帶して來る境遇が、私に取つて不幸だから、私のために不贊成の意見を持つてゐたのだつた。聰明な彼は、初めから私たちのやうに、中根夫人をも買はなかつた。冬子の價値をも認めなかつた。

「……それやあ君、君があゝいふ令孃階級の女性に、さう接した事がないので、最初が最良でさう思ふだけだよ。」と私の其點に關する主張に際して、彼は抗辯した事さへあつた。が、併し私の心持が、彼にもすつかり解ると、それならばといふので、彼も心に掛けては居現れてゐた。然し同質の一であるならば、それに依つて起る幸不幸は別問題として、同情しながら形勢を傍觀してゐた。

その不即不離の態度は、彼の聰明さからでもあつた。が、又もう一つの理由があつた。それは初め中根家では、故先生の遺志と云ふ程ではないにしても、その門下の最俊秀といふ所から、冥々の間に、冬子の配偶の候補者として、秋山が擧げられてゐた。而して秋山に其當時もあつた約婚の人がなく、又秋山自身冬子を氣に入つてでもゐたならば、私たちが横合ひから飛び出す事もなく、至極無事に圓滿な結果を見たかも知れなかつた。が、秋山の意はもう當時既に房子さんといふ今の細君の方に在つた。(それを私は、はじめに説明したか知れなかつた。)而してその房子さんが、その秋山が第一候補だつたといふ事を漏れ聞いて、自分のやうなものがある爲に、秋山が中根家の良婿といふ、立身出世の道を塞いだといふので、自分の方は關はないから、約束を取消して呉れと迫つたとかで、美しい犠牲振りの世話場さへ在つたのだつた。しかも秋山が、所謂五斗米の爲に、男子の膝を屈しなかつたのは、云ふ迄もなかつた。彼は後で私がその失戀の境遇にある最中に、私には秘密しながら其人と結婚した。だから私はそれらの事を、只秋山に感謝してゐればよかつたのだつた。

それだのに私は、秋山のその隆々たる候補者の聲名を、嫉妬せずにはゐられなかつた。秋山がもう中根家の良婿とならないのは、解り切つてゐながらも、私の事と云へば、口を揃へて反對した弟子たちが、たとひにもせよ秋山ならばと云つたと云ふやうな事を聞くと、一種の嫉妬と羨望と從つて反感とを禁じ得なかつた。其上當時秋山が、文壇へ登場したばかりの名聲は、何と云つても嫉視を禁じ得ざるものがあつた。それと是とが結びついて、私は秋山に、或る敬遠の氣持を持つてゐた。而してそれが秋山に反映した。そして聰明な彼の事だから、すぐ私の心持と共に、自分の地位を察した。而して彼がその問題に觸れて來れば、反對でも贊成でも、どつち道だから妙に底意を探られると思つたらしかつた。つまり彼は私の反照として擧げられたといふ事のために、强ひて其の問題に觸れる事を遠慮したのだつた。

だから凡ての戰鬪が終つて、勝敗が決し、すべて傷つかない者がなかつた中に、彼一人だけ

は觀戰してゐて、何の飛沫をも受けなかつた。彼が此の戰場に於ける、最も公平な觀察者であり、正當な批判者であると思はれた。而して事實彼に、その戰場を平然と眺めながら、遠慮のない講評を下したものだつた。實際私の友人で、此の戰鬪に立會つたものは、彼の外にも二三は在つた。が、齋木は向うの家に近寄り過ぎ、從つて又爭鬪の内部に近接し過ぎてゐた。池田は又向うの家を離れ過ぎ、爭鬪の外部にゐて、たゞよく報告を聞いたに過ぎなかつた。併しそれだけに此二人の同情は、自分に厚くは感ぜられたが、それがどうも感情過重で、秋山ほど公平な見地に立つてゐないやうな氣がした。齋木があれだけ向うの家に接觸してゐながら、餘りに私の敗北が悲慘だつたために、中根家の立場を認めつゝも、私に注いで呉れた同情、又殊に池田が、私に對する純粹な友情から、（杉浦の立場を認めつゝも、）私に示して呉れた同情は、同情それ自身に涙ぐましい程感謝されても、まだ事件の正當な批判から出たと云ふ、公平な根柢を持たない淋しさを私に感じさせた。猶可愛がりといふ可愛がりやうが、被愛者に一種の物足りなさを覺えさせるといふやうな意味で、それはどつちかと云へば、猶同情といふやうなものとさへ私には思はれた。其中に在つて、秋山の評價が、從つて其同情が、私にはひどく重大なもののやうに思はれたのは無理もなかつた。私には秋山の態度がひどく氣になつた。秋山は私に同情してゐるには違ひなかつた。が、それと同時に、どの程度で向うに同情を持つてゐるか、それが鳥渡解らなかつた。彼は私には同情してゐるものの、杉浦から手紙を貰つたり、中根夫人と會食したりしてゐた。で、今度の結婚披露會などにも、出ないとは前に云つてゐたが、出たかも知れないと思つてゐた。その秋山に、それから二三日して、本郷の通りではたと出會つた時は、自ら私の氣持も緊張せざるを得なかつた。彼は例の齋木の書肆へ、漁書に來た歸りらしく、毎もの洋書以外に、新聞に包んだ本包みを持つてゐた。

「今そこの松林堂まで來たんでね。これから君ん所へ寄らうかと思つてゐたんだ。」

「さうかい。そんなら戻らうか。」

併し二人は其儘話しながら散歩することにした。私は彼らの結婚式に關する感想を、秋山に聞きたくもあり、又觸れたくもなかつた。

「……君。君に清鑑を乞ひたい近作が二三句あるんだがねえ。――根を掘れば春雨竹の青さよな、と云ふのはどうだらう。」

秋山はそんな事を云ひ出した。

「さあ。――」私は鳥渡苦笑してゐた。

「駄目かな。――ぢやあ、深川や早取寫眞[illegible]梅は？」

何とか答へなければならなかつた。

「うむ。いゝけれども少し古風だね。」

「さうだらう。これは傘雨宗匠に此間聞かされたんだよ。先生得意らしかつた。ぢやあ、曇天の蛇動かずよ鍋の中は？」

「氣味が惡いね。矢つ張り傘雨先生の御作かい。」

「さうぢやない。僕んだ。鬼氣があるだらう。」

「大いに在るね。在り過ぎていけないね。」私もいつの間にか、少しづつ秋山に調子を合せてゐた。

「それぢや穩な所で、曇天の水動かずよ芹の中、ならいゝだらう。仄かで。――」

實を云ふと私は、其時の少し重い氣分に、幾らか苦しかつた。が、鳥渡でもそんな樣子を見せては、敏感な秋山の調子を直ぐ挫くだらうし、又さういふさし障りのない俳句なんぞの話題にする秋山の心持も、感謝したい程解つてゐたので、努めて應じなければならなかつた。

らぬ、羨ましい心境だね。」

矢つ張り、ふと何氣もなく出て了つた私の心持は、當惑な秋山の口を噤ませて了つた。

薄い日影が、アスファルトの道と、大學の煉瓦塀へかけて、斜に照つてゐた。私は下を向いてアスファルトの繼ぎ目の線を、踏まないやうにして歩いた。門前まで、少し眞直に通つてゐた學生の影が、もうまばらだつた。秋山は切れた話の緒を求め兼ねて、暫く默つて歩いてゐたが、ふと、路樹の幹に肩を當らうとして、くるりと身を躱した。而し一寸其途端に、何か話しかけたさうにして、ちらと此方を眺めたが、何故かよした。私は秋山が、此方の氣持を讀んで遠慮したなと思つた。何だか少し苦しくなつた。秋山は少し急ぎ足に、意地惡く默つて、颯颯と歩むやうにしてゐた。私は何か話しかけたかつた。いつそあの事を云ひ出して了ひたかつた。が、早急にはどうも云ひ出せなかつた。私は暫く向うから來る電車が、通り過ぎて了ふまでには、秋山が何か話すだらうから、それまで自分から話しかけるのを待たうと考へた。が、その電車が割りに新しい車體を浮かすやうに大きくなつて來ても、秋山は珍らしく、喋らなかつた。私は今度は彼が反感を持つたのかと思つた。而してその電車が音を立てて通り過ぎるや否や、

「ねえ君。」と云ひかけずにはゐられなかつた。

「何だい、」秋山は細い顔で此方を見た、

「君は此間の結婚披露會へ行つたかい。」

「いや、行かなかつた。」彼は早口だが斷乎と云つた。「土曜日でなかつたし、わざ／＼出て來るも億劫だつたからね。此の前の土曜日に來た時、お祝ひの品を届けて置いて、僕は失敬した。不純な氣持で出たつて、向うにも失敬だし、此方も不愉快なだけだからな。何しろ皆變だつたさうだよ。」

「ふうむ。――」私はもつと詳しく聞きたい衝動と、聞きたくない氣持とを闘はせながら、矢つ張り結局は促すやうに云つた。「どうして。」

「何しろ何方かの端に集つた、小林だとか薄田と云つたやうな連中の間では、新郎新婦を遠くから眺めながら、誰かが杉浦をオセロだと云つたら、誰かが又否イヤゴーだと云つたんだとさ。そしたら例の瀧木がそれを聞いて、ひどく憤慨したさうだぜ。」

秋山も面白さうに、しかも自分の反感をうまく繕つて、そんな事を云つた。

私は何と答へていゝか解らなかつた。併した つ張り辛うじて、

「ひどい事を云ふ奴らだね。」としか云へなかつた。

私はさう答へながら、又嫌な氣がした。何故その惡口を云つた人たちに、大つぴらに感謝すると云ひ得ないのか、何故その皮肉に、思ひ切つて快哉を叫び得ないのか、さうした方がどんなに男らしくて、正直で、氣持がよい事かと思つた。

秋山はもつと續けて云つた。

「新聞に寫眞が出てゐたね。」

「あゝ出てゐた。杉浦の奴、苦難を一身に背負つて立つたやうな顔をしてたぢやないか。」

私はその位が精々だつた。

「さうだつたかね。僕はよく見なかつたが、――あの寫眞を見てゐるとね。僕の家内の奴何と思つたか、何處かへ持つてつちまつたんだよ。而して後でどうしたのかと思つたら、冬子さんの姿の所を、剪刀で滅茶々々に突き破つてゐた。女性から見ると、あゝいふ事をした者は實きり者のやうに憎いんだね。」

私はあの平素淑しい房子さんが、そんな事をしたかと思ふと、一種妙な暗い感じがした。不思議な事には其瞬間、何だか秋山の細君に好意

を持つては悪いやうな氣がした。有難迷惑と云つたやうな顔をせざるを得なかつた。それで、「女つて、不思議に正義派だからね。」と、から私ははぐらかすやうに云つて了つて、而して又悔いた、何だつて又心から房子夫人に、感謝の意を表し得ないのかと。——

うん、みんなヒステリイに罹つてゐない奴はないからねえ——

秋山は私に賛同するやうに、さう云つたのだつたが、その言葉は却て私を、妙に淋しいものにさせた。私はそれを決して單たる幼稚な正義心、乃至はヒステリイだとしたくなかつた。それならばそれで、何故初めから房子夫人の行爲を、もつと正面から大つぴらに受入れて、有難がらなかつたか。——私は私の卑劣を更に悔いなければならなかつた。

私が妙に黙つたので、秋山は直ぐ話頭を轉じた。そして高等學校の横で別れた。

それと同じやうな事が、それからもつとずつと後にも、もう一度あつた。

牛込のS——社へ、用が在つて行つた歸りだつた。丁度月末の事で、用と云ふのは實は印税の前借りに行つたのだつた。嵌み硝子を嵌めた、雨開きの大きな戸をあけて、玄關へ入ると、其處には私より直ぐ前に訪れたらしい、二人の私たちと同年輩位な來客が、主人が留守だと云ふので、歸らうとしてゐるところだつた。私は丁度出會頭で、少し慌ててゐたのと、場所馴れぬ處へ、借金に來たといふ心配で、少し上つてゐたと見えて、それが誰だかよくも見ず、多分S——社關係の、青年文士には違ひないと思つただけで、又さう深く氣にも留めなかつた。而して主人が居ないからと云つて歸されたのを玄關の隅で、鳥渡佇んでゐて見送ると、自分の方が少々困つたと思つた。

玄關で應接してゐる若い人が、二人の去つた後で、少しもじ〳〵してゐる僕に、

「何か御用でございますか。」と訊ねて呉れた。

そこで僕は勇を鼓して、名を名告つて、主人がゐないならば、代りの人にでも會ひたいと云つた。するとその青年は、

「少々お待ち下さい。」と云つて引込んだが、又改めて出て來て、「主人がお目にかゝりますから。」と上へ請じた。私は不思議に思つたが、すぐ事情を了解した。そしてあの二人が、誰だつたらうと思つた。何だか鳥渡濟まないやうな氣がした。あの二人との位置の懸隔を得意になるべくは、餘りに露骨過ぎる氣がした。が、私は自分の用が足りる事に、何よりも急でなければならなかつた。

私は二階の應接間で、先づ主人の代理に出て來た駒井氏と、僕の談判をしてゐると、階下から先刻の青年が上つて來て、私に電話を取次いだ。誰からだらうと私は疑つた。誰も私が此處にゐる事を知つてゐる者はない筈だつた。

「何でもお出になれば解るからつて、自分では名前を仰有いませんでした。」取次いだ青年は云つてゐた。

駒井氏が傍から薄笑ひを含んで云つた。

「きつと井田さんと上山さんですよ。今貴方と入れ代りに、主人が會はずに返しましたから、其時貴方の居るのを知つてたんでせう。」

駒井氏は別に何とも思つてゐないらしかつた。が、私は妙に悪いやうな引目を感じながら、電話口へ出た。

すると駒井氏の云つた通り、それは矢つ張り井田氏と上山氏からだつた。二人は矢つ張り先刻歸りがけに、私が入るのを認めて、多分さうだらうと思ふから、まだS——社に居たら、是を機會に近付きになつて、一緒に茶でも飲みたいから、歸りに神樂坂の某カフェエへ寄つて呉れといふ用向だつた。私は妙な氣持で、今駒井

氏と會つて、[illegible]斷らずにゐられなかつた。用談中であつたら、用談が濟んだら直ぐ行くといふ、承諾の返事をせざるを得なかつた。

そして主人にも會ひ、用事も足して、それから指定の[illegible]へ行くと、自然に[illegible]されるやうな思ひで、入つて行つた。それは路次の奥にあつたが、鳥渡其處浪漫的な印象を殘した。入つて見ると二人は片隅の卓子に、もうウヰスキーの杯を並べて、少し醉つてゐるらしかつた。

「いゝ、よく直ぐ來て下さいましたね。井田君に若しお離れをなして、來て呉れまいと心配してゐたんですよ。」

上山氏は女のやうな優しい聲でさう言つた。顔も女のやうに色白で、細面の[illegible]に色づいて、眼の周りを淡くほの紅く醉ひで染めてゐた。

「いや、僕たちと交際ふのが、御迷惑なのは解つてゐますけれどね。」

さう云はれた井田氏も、其心持ひしやげたやうな、淺黑い憂鬱な顔に、處女みたいな可愛い含羞を湛へ、眞人間な目瞳を以て、[illegible]に微笑しながら云つた。その二人の言葉は、直ぐ私を心安く思はせた。

「私は中學の時に[illegible]して、その時に聞いた、直ぐ[illegible]に運ばれたが、私はそれを[illegible]になるのが、心苦しい氣がしてならなかつた。

上山氏は、私の其心持を察したものか、又は自分たちの事を、何よりも辯明して置く必要があつたか、直ぐ[illegible]話し出した。

「實はね。私たちも先刻S――社へ遊びに行つたんですよ。ところが主人の奴、私たちがお金でも借りに來たと思つたか、居留守を使つて會はないんでせう。私たちは何も金の事で行つたんぢやないんですけれどね。――さう見られても仕方がないですけれど、ほんとに今日はさうぢやなかつたんで、實に癪に障つたからかうして飲んでるんですよ。だから貴方も遠慮しないで、一緒に付合つて下さいな。」

事の眞相は兎も角、さう云つて呉れたので、私も何となく安心した。而してやがて、心置きなく、S――社での妙な優遇な地位に對する譯をなども忘れて、話し合つてゐた。すると上山氏が何かの序に、私への親愛を表示するためか、こんな事實を語り出した。

「私たちはね、あの後、町の通りや何ぞで、よく杉浦に會ひますよね。二人とも彼奴が大嫌ひなんですよ。殊に此の井田君なんぞは、大人しい癖によほど[illegible]なんだと見えて、此間なんぞも醉つ拂つたまぎれに、あの中[illegible]の門の所までわざ／＼出掛けて行つて、杉浦！ 出て來い！ 杉浦を出せ！ つて怒鳴つたりするんですからね。眞實ですよ。」

「一寸大變怒鳴つたけれど、家の中からは誰も出て來なかつたね。僕はあの時實際、門を引倒してやらうかと思つた。」

あの優しげな聲をかく、大人しい井田氏自身も、少し醉つてそんな相槌を打つた。

「さうだつたね。君はあの時門の扉をどん／＼叩いて、それから身體で押したよ。」

私はそれらの會話を、息を飲んだやうに默つて、苦笑を浮べながら聞いてゐた。どう挨拶していゝか解らなかつた。それで私は默つてゐた傍に、二人は又別な話へ移つた。私は其時寧ろ不興げな顔をして、傍を向いたに違ひなかつた。

後でその二人と別れて、家へ歸る途中、私は何故又あの時、二人の手を取つて私の心持を代辯して貰つた事を、感謝しなかつたかと思つた。而して自分の想像では、屢々音樂坂あたりででも醉つた時に、俥で中根家まで乘り込んで行つて、門を十字に開かせ、中へ躍り入つて面罵

しくなる傾向のあつたのと、又二人の反文壇的な氣分——それは澤田や池田や私などが彼らに先んじて文壇に出たために、立遅れの形で反感を持ち出したらしかつた——で、より近く結び付けられてゐた。そして池田も澤田とは、前に共家に世話になつてゐたりした關係上、時に何のかのと往來してゐたので、池田が誰よりも、直接間接に杉浦に接する事が多い道理だつた。といふよりも彼が一番私に杉浦の事を話していゝ立場にゐたのだつた。

或日私は池田を訪ねて、四方山の雜談に耽つてゐた。主に文壇の話だつたが、其中にふと何かの機會で、池田がこんな事を云ひ出した。

「此間ね、君ももう知つてるか知らんが、昨日澤田が來ての話に、杉浦が流行性感冒に罹つて、大學病院に入院してゐるとさ。」

「へえ？」——私は初耳だつたので、目を瞠いた。

「澤田が見舞に行つてね。其歸りに寄つたんださうだが、大分惡いらしい。入院する位なんだから、よくないには定つてゐるが、何でも肺炎になりかけてゐるんで、ひよつとすると危ないかも知れないさうだ。」

「ふうむ、さうかい。」

私はただそれだけしか答へなかつたが、其時の心の中を、ひら〳〵と行き過ぎた、或る冷たいものの影を、自分でもはつきり感ぜざるを得なかつた。私は息を途斷らしたまゝ、自分の顏の色が變つたやうにさへ感じた。杉浦が死ぬかも知れない！ その事は冷りと頭へ觸れた惡魔の天啓だつた。私は直ぐと心の底で、彼が死んだら、どんなに清々するだらうと思つた。どんなに胸が晴れるだらうと思つた。それ見ろと云つたやうな、天が代つて仇を打つて呉れたやうな氣持と共に、彼の凡てが許し得るに違ひないと思つた。

實際私は、彼の過去の行爲を、決していつ迄も憎んでゐると云ふのではなかつた。寧ろ過去の行爲として、現在彼があゝして立派に存在してゐるのを——或意味に於て榮えてゐるのを、氣にせざるを得なかつたのだ。つまり世俗の言葉と反對に、罪を憎んで人を憎まないのでなく、罪を許して人を憎んでゐるのであつた。私は實際杉浦が、あゝして中根家に引込んでゐてさへ、自分の住む同じ浮世の片隅に存在してゐて、何時自分の眼前に現はれるかも知れぬと云ふ事に、一種不快な感じを催した。私はよく杉浦が、大きな作を提げて、再び文壇に現はれる時の事を豫想した。私はひとく日々の仕事に追はれ、新聞の續き物などに縋つて、苦しく情けない氣持になつてゐる時などは、よくそんな事を連想した。彼はあゝして暇もあり、生活も安定なんだから、必ず長い間に手をかけて、立派な作の一つや二つ出來ない筈はないと思つた。さうしてひそかに書いた大作を、世の中へ——多分その時はあそこの家に關係の深い、岩沼書店から刊行するだらうと云ふやうな事まで想像した。——發表して、一擧にして吾々の文名を覆し、戀愛に於て優者であつたばかりでなく、實際文學の上でも、自分に優る事を事實に於て證明されたら、果して自分はどんな氣持がするだらうと思つた。實際そんな事は、決してないとは限らなかつた。限らないではない、實際あり得べき、在つて然るべき事だと思はれた。自分たちがかうして、小刻みな仕事に追はれて、本氣な大作を大作をと心では望みながら、だん〳〵一生を擦り減してゐる中に、彼は徐ろに蓄つた潛勢力で、盛り返して來る位、尋常の事だつた。實際彼の位置に、私たちを置いて想定すれば必ずさうすると思つた。そして彼の名前には、それに依つて私が得たと同じ位の、否今となつては寧ろそれ以上に、世間の興味が集つてゐるだらうし、又、やゝもすれば惡口を云はれ易い私の地

位から、私に對する反感だけでも杉浦のさうした作物を、妙に世間が認めないとも限らなかつた。――さうなつたらどうだらう、と私はよく考へた。私にはさうなつたとして、それを笑つて過せるだらうか。喜んで認める程寛大でありうるだらうか。私には自信が無かつた。恐らくはさう云ふ窮地に陷つた場合、自分の心にある妙な弱者の聖者性と云つたやうなものが、彼の作を喜んで認めたがるには相違ないと、ひよつと思ふ事もあつたが、併しそれまでに達する苦鬪は、思つて見るだに堪らない氣がした。又或る時はさう云ふ事があつたら、きつと自分も死身になつて、泣血の苦心をした力作を以て、それに對抗するだらうと思つた。そして結局は、自分の幸福だとも考へられた。出て來い！ さうも思つた。が、それでもそれは一種の、自己鞭撻であり、强がりに過ぎなかつた。矢つ張り眞實を云へば、いつ迄もあの片隅に引込んで居れ！ だと云ふのが心の眞の叫びだつた。併し彼が此世に居る以上、而して自分が彼に對して、仇敵意識を持つてゐる以上、彼がいつ何時出て來ないとも限らなかつたし、出て來れば脅かされるに定つてゐた。私は實際よく、「新小說」や、「新潮」などの廣告、新聞の消息などに彼が創作を寄せるといふ報告を讀む度に、心の中でどきりとした。而してさう云ふ氣持を、更にはつきりさせ、卒業して了ふために、[illegible]二つの競爭に、徹頭徹尾敗けて了ふ男の事を、幾度か小說に構想してみた。この使ひ古されたテーマは私の取り扱ひやうに依つては、再び生々となるやうな氣がした。が、幾度か計畫しても、ほんとに自分を伸ばし切つて、そこに到る事が出來なかつた。其時分私は、友人からクープリンの「決鬪」と云ふ小說の話を聞いた。それは殆ど私の計劃と、同じものだつたが、併しその無能の畫家の傑作を聞くといふ其結末は、一應私の實際にぴつたりと來ても、それだけでは何ら私の生活への暗示にはならなかつた。矢つ張りその不安は、一生私に祟るだらうと云ふ氣がした。

その彼の存在が、ひよつとすると無くなるかも知れない！ さう池田から聞いた時、私は思はず心の中で、死んで呉れ！ どうか死んで呉れ！ と願ふやうな心地になつた。それと同時に、因襲的觀念の支配下にある私の他の心は、心弱き卑怯者よ、おまへは自分の力で彼の存在を征服し切れないで、そんなにまで天の力を借りたいのか、と責めてゐた。が併し自分が、悲劇的に扱はないまでも、自然に死んで呉れたらどんなにいゝだらう、と、さういふ考へからは、到底脱する事が出來なかつた。

こんな事を考へて、息さへ緊迫してゐる間に、池田は[illegible]頓着なく、話し續けてゐた。

「何でも纏めさう重くない流行感冒に罹つて、家に寢てゐたんだが、[illegible]癒りかゝつた杉浦を[illegible]にして、冷水で拭いたんだとさ。何でも醫者がさうしろと云つたとか云ふんで、その看護婦の云ふ通り拭かしたら、それから更に病勢をぶり返して、肺炎になりかかつたんださうだ。後でよく聞いて見ると、其看護婦つていふのが、杉浦に惚れてゐて、夜中にそつと杉浦の病床へ入つて來たりしたんださうだ。而してその水浴も、杉浦を綺麗にして拭きたかつたから、そんな嘘をついたんだとさ。誰かほんとか知らないが、杉浦も惚れた奴に惚れられたもんだね。」

から云つて池田は、罪のない笑を笑つたが、私は無理にも笑へなかつた。前のやうな感想にも捉はれてゐたし、たとへ、どういふ女にもせよ、杉浦が女性に對して、そんなにまで魅力を持つてゐるといふ證據になる話は、私に取つて不愉快だつた。

それから話頭を轉じた。そして他意なく、他の話に打ち興じた後夜もかなり晩くなつてから私は家の方に歸つて來た。途中一人になると、私は又しても杉浦の死の事に思ひ及んだ。彼が自分の行手の、自分の家からさう遠く離れてゐない處に、横はつてゐるのだと思ふと、何となく妙な因緣めいた氣がした。私は彼の病床の様を想像した。彼の枕邊に、心配してついてゐるであらう冬子の姿を想像した。そしてそつと大學病院へ寄つて、彼等の様子を見て來ようかと思つた。容體も聞き知りたい氣がした。「大分惡い。」なぞと聞かされたらさぞ安心するだらうと思つた。が、そんな事は想像でなし得ても、迚も實行の出來る私ではなかつた

池田の家から歸る途に、小さな神社があつた。その祠は小さかつたけれど、其近所の緣日の中心でもあり、又何か御利益があるといふので、附近の人々の尊崇を集めてゐた。私の母なぞも、よくお參りに出かけた。私も屢々散步に出た折なぞは、文運隆昌の祈願を籠めながら手を合した。一體私は子供の時から、うちの老母の感化でお祈りとか、お詣りとか願がけとか、お守とかいつたものに、殆ど童話めいた迷信と、尊敬とを持つてゐた。私は半分以上本氣で、この不動さまの守護を信じてゐた。

其前を通りかゝつた時、私はふと立停つて、杉浦の死を祈らうかと思つた。而して祈つてやれと云つたやうな、妙に面白半分な衝動も手傳つて、つか／＼と其境内の方へ入つて行つて、祠の前に立つた。私は手を合せて、祈念した。が、さすがに杉浦の死を眞つ先に祈る事は出來なかつた。私は先づ自分自身の健康を祈つた。それから順に依つて、文運の隆盛を祈つた。而して偖それから、愈々杉浦の死を祈らうとして、自分はぐきりと行き詰つて了つた。何だかひどく恐ろしい事をするやうな心持と共に、人を呪へば穴二つと云ふ喩へが、はつきり思ひ出されたりした。そんな事は譃だと思つても、時々祈つた後で、そんな氣持に惱まされでもしては堪らないと思つた。そして慌てて合掌した手を離すと、そこの暗い堂の前を逃げ出した。――堂は内部に灯一つ點いてゐないで、暗くしんとしてゐた。四邊には誰も見てゐるものはなかつた。

私はその堂の前を去つてから、併しまだ暫くの間は、祈らないでよかつたといふ氣がしてゐた。が、思ひ切つて、自分の身命を賭しても、祈れたら猶よかつたらうとも思つた。併しそれから以後に、改めて祈りに行く勇氣は遂になかつた。

それから二三日の間、私は心待ちに、杉浦が死にはしまいかと思つて待つてゐた。さういふ知らせが、文學消息か雜報かででも出やしまいかと思つて、鳥渡胸を轟かせて每朝の新聞も見た。が、何の事もなかつた。

却てそれから十日ばかり過ぎて、私は杉浦が退院した事を、池田から簡單に聞いた。當が外れたと云ふより、私は吻と息を吐くやうな氣落ちを覺えた。あの晩祈らなかつた事なぞが思ひ出された。そして却て無事でいゝのだといふ氣がした。

併し呪けなくても、穴は一つだつたけ。と云ふのは、其後で私も、杉浦と同じ流行感冒にかかつて了つた。杉浦の罹つたのは、その年の冬の初めの、十一月頃だつたが、感冒はそれから後に、更に其威を逞しくして、翌年の一月、猖獗の絶頂に達した。私は正月の末に芝居の用で大阪へ行き、歸りに底冷えのする京都で病菌を得て歸つたらしかつた。京都では舊友の矢田部が、其時分檢事になつて赴任してゐたが、私を祇園へ連れて行つて呉れた。而して彼が京都大學にゐた時分、行きつけてゐて暫く行かないと云ふ家へ、案内された。そこで、私は銀杏を

寒さうにちら／＼させた舞妓が、襖障子を開け放つた向うの、廣い板敷になつたところで、都踊りの雛型のやうな踊りを踊るのを、火鉢に獅嚙みついて見てゐた。寒さうに黒ずんだ鏡のやうな板敷で、此方の座敷の電燈がよく及ばないやうな中を、舞妓たちのちらりほらりと翻へす袂や袖が、妙に寒い冷たい色を帶びて、見てゐる私の背や腰の下をぞく／＼させた。おまけに座にゐた一人の女が、流行感冒の後の、咳をげほ／＼させてお酌をした。……

東京へ歸つて見ると、身體が妙に懈くて、熱があるやうな氣がした。が、平常風邪を引きつけてゐる私は、さう大した事に思はなかつた。それにもう、それで大阪へ行つた用事の二月にM——座で上演する私の芝居の稽古が、私の歸京後して一座も歸つて來たので、M——座の横の茶屋で始まつてゐた。もう上場間際なので、押しても其處へは行かなければならなかつた。

私は其處へ行つて、もう出來上つた道具も見なければならなかつた。人氣と、篝火と、裝飾のない劇場の中は、吹き晒しのまゝと同じ事で、がらんとして、寒く埃つぽかつた。舞臺は勿論、花道から平土間へかけて、塗り上げられた大道具が、一ぱいに乾してあつた。それが生ながらに、晝間の薄暗い光線の下では、呆けたやうな色を呈して、灰色臭く横はつてゐた。私たちの見るべき道具は、舞臺の奥に立てかけて在つて、さすがに暖い色をしてゐたが、重ねに立てかけた道具の間の通路から、肌に冷たい風が吹いて來て、裾からずつと寒さが沁み入るやうな氣がして、ゆつくり見てもゐられなかつた。平常は生暖い感じのする膠の香さへ、ぞつと鼻の穴を刺戟した。——道具其物には、殆ど異存はなかつたので、私は稽古場である茶屋の二階へ歸つた。

稽古はまだ始まつてゐなかつた。が、人々は集つて、一番目狂言の讀み合せをしてゐた。私は殆ど、正座とも云ふべき所の、與へられた火鉢へ身體を寄せて、ぼんやり皆の讀み合せを聞きながら、待つてゐた。何だか身體を動かすのが大儀で、頭も疲れてゐるやうに底ほてりがしてゐた。私はぼんやり、早く稽古を濟ませたいと思つてゐた。

と、向うの下廻りの人たちが、多勢集つてゐる方で、遠慮しながらではあつたが、急に動搖が起つて、皆がそこの障子を開けて、戸外を眺め出した。讀み合せの聲に氣を取られて、私は少しも氣がつかなかつたけれど、微かな飛行機の爆音が聞えてゐた。丁度スティンソンといふ、[illegible]のやうな[illegible]の女流飛行家が來て、[illegible]で曲乘りをする日だつた。私[illegible]火鉢に[illegible]ついてゐた身體を伸ばして、直ぐ傍の河岸に面した窓の障子を、がらりと開けて見た。[illegible]の薄暗い、[illegible]びかぶさるやうな空が、[illegible]かつてゐた。私は[illegible]なつた[illegible]に、向うの灰色の屋並や、[illegible]を遮蔽に——劇場の[illegible]、帆柱のやうに立つてゐる[illegible]竿の間から、ずつと彼方の鈍色の空を眺めた。[illegible]こは一層に低く[illegible]で[illegible]た處に、なかつた。その中に、中空で、それも濃い鈍色に[illegible]た一艘の飛行機が、小さくくるり／＼と旋轉してゐた。それを見ると私の眼は、濡い不思議な眩暈を感じた。私は疲れのせゐだ、と云ふたうとう思つた。[illegible]も早く家へ歸つて、寝床に直ぐ這入ると思ひ直した。[illegible]な重い空氣が、矢つ張り冷たい風となつて、窓から吹き込んだ。私はスティンソンが、どうなつたかよく見究めもしないで、窓から首を引込めた。

それで稽古場からは、其日は早く歸つたけれど、家へ歸つて見ると、氣分はそんなでもなかつた。それに其日は丁度T——劇場の初日で、私たちの關係のある出し物が出てゐるのを思

ひ出すと、あの場内は十分溫かだし自分も溫かくしてさへ行けば、こんな風邪心地位何でもないと思つた。そして澤山シャツを着て出かけて行つた。中でも外套を脱がないやうにしてゐた。其上抵抗療法の積りで、盛んにウイスキイを飮んだ。が、どうも醉心地が尋常でなかつた。身體中が惡く火照つてゐた。それで友人の久能木君が、何處かへ行かないかと誘ふのをさすがに斷つて眞つ直家へ歸つた。

　その夜明けから苦しくなつた。朝起きられないので熱を測つて見たら、三十九度を越えてゐた。もう流行性感冒に相違なかつた。罹るまでは、いつもの樂天家で自分だけは罹らないやうな氣でゐたが、矢つ張りたうとう罹つたかと思つた。

　それから三四日の間は、同じ位の高熱の中に呻吟してゐた。もう紛れもない流行性感冒の、しかも惡性な奴だつた。醫師は私と同じ中學を一年前に出た橋田と云ふ人が、直ぐ近所の[illegible]町にゐたので、其人に頼つて診て貰つた。

　橋田氏は他人事でない程熱心に診察して呉れたが、狀態が容易でないのを見て取ると、自分の先生株に當るK——博士を招聘して、立會つて診て貰つて呉れた。まだ其時は病勢はさう進んではゐなかつた。

　が、その一兩日後、大雪が降つた日、私は朝の痰に、鮮かな血が交いてゐるのを自ら知つた。そして呼吸が困難なのを感じた。愈々肺炎になつたなと思つた。急いで橋田氏を呼んで診て貰つた。と、右肺がたうとう犯されてゐた。又K——博士が呼ばれた。診察の結果は、矢つ張り橋田氏と同じだつた。博士は色々な注意を與へて去つた。肺炎はまだ右一方だけだからいいやうなものの、左へ傳染つたら大變だ、そんな事を橋田氏は私に聞かせて呉れた。が、私はまだ心配はしなかつた。例の妙な樂天的氣質で、人が隨分此風邪で死ぬのを、毎日新聞や話で知つてゐながら、どうしても自分だけは死なない氣持がしてゐた。罹るまでは自分だけは罹らない氣でゐたが、罹つて了ふと今度は、自分だけ死なない氣でゐたのだつた。

　併し、頭の下には氷枕、額には氷嚢、胸には前後左右に二つづつ、少し大きい氷嚢を抱かされて、火のやうに早い心臓の鼓動と、殆ど呼吸といふ程の間もない位、切迫した呼吸困難の喘ぎを自分が意識すると、矢つ張り自分も死ぬかも知れないとは思つた。カンフルとジガーレンが、三十分置きに注射せられた。それに依つても私は自分が瀕死の狀態にゐるのを知つた。まだ死なない、まだ死なないと思ひながらも……

　此間の正月休みに來て、又日立鑛山へ歸つたばかりの叔父が、不意に現はれたのを見た時は、私もおやと思つた。是は俺は死にかゝつてゐるのだなと思つた。が、その氣持は、割合に平氣なものだつた。のみならず叔父が、殆ど問はず語りのやうに、「丁度又學校が休みになつたものだから鳥渡又來て見た。」と云つたのを、私は子供のやうに信じた。

「惡くすると死ぬな。」それだけは少くとも明白だつた。

　私はうつら〳〵とする高熱と、胸に波打つ鼓動と、淺く喘ぐ呼吸とで、苦しい中に考へた。自分が此儘死んだらどうだらうと。——色々な對人關係が思ひ起された。友人の秋山や池田や鈴木や、其の他の人々がどんな顏をするだらうとか、自分の其後知り合になつた女の人で、誰が泣いて呉れるだらうとか、延いては葬式の事や、後の遺稿の事などまで考へられた。そして、妙な虛榮心のある證據には、私の死の報道が、新聞にどの位の大きさで出るだらうとさへ思つた。

が、何と云つても其際、一番私に早く浮んで、しかも永く心を惱ましたものは、矢つ張り杉浦との問題だつた。

　私はふと杉浦が、嘗て私が、彼の死を願つたやうに、私の死を庶つてゐるに違ひはないと考へた。私の病氣の事はもう新聞にも出ただらうし、又もう何度も見舞に來た齋木も、話したであらうから、中根家でも知つてゐるに違ひなかつた。さうとすれば彼らに取つて、私に取つて彼らが邪魔である以上に、邪魔であり憚りである私の、死を願はない筈はないと思つた。殊にあの強氣な、そんな事を何とも思はない、私のやうに心でふと思つても、すぐ氣が咎める男とは違つて、平氣でその位な事を思ふ杉浦が、心からさう願ふのは明白だと思つた。そしてそれは冬子とても同じだと思つた。彼女は氣を咎められても、ひそかに死んで吳れればいゝと、又これはもつと狹い實感で、女らしい殘酷さで、庶ふに相違ないと思はれた。私はから云ふ場面を、まざ／＼と想像した。そこは小春日のぽか／＼當つた、中根家の緣側だつた。杉浦と冬子とは、二人の間に生れた赤ん坊を間に置いて、一方は新聞でも見ながら、一方は赤ん坊のための赤い布――それがはつきり想像に浮んだ――か何かを仕事でもしながら、睦じく世間話でもしてゐる所へ、齋木が何時も知つた案內で、ずつと入つて來て、丁度池田が私に杉浦の事を知らして吳れた通りに甲ン高い調子で云ふ。

「君たちは知つてるか知らんが、久野が流行性感冒で、大變惡いんださうだよ。ひよつとすると死ぬかも知れない。」

「ふうむ。さうか。」から杉浦は云つて、傍にゐる冬子の方を顧みる。二人の目が合ふ。その目の中には、其時にはつと感じた思ひがはつきり出てゐるのを見合つて、怖ろしいやうに口を噤む。云ふまでもなくその思ひといふのは、「死ねばいゝ！」といふ事だつた。而してそれは齋木の前で、まさかに表現は出來なかつたが、さう思つたには違ひなかつた。事によると齋木の居なくなつた後か、又は寢物語の時にでも、その思ひをお互に云ひ合つたかも知れないと思つた。……まさか口には出さない迄も、さう思つた事に違ひはないと私は信じた。そんな事を考へるのは、自分の卑しい根性から出た、彼らに對する恥づべき邪推だとも思つたが、併しさう邪推する方がずつと正當でもあり、その位な事を思ふ權利が在るやうな氣で、私は憚りもなくそんな場面を想像した。

　彼らに對する想像は、延いて中根夫人にも及んだ。夫人に取つても、私の存在は苦になつてゐるに違ひなかつた。而して夫人も私があの時杉浦の死を神に祈らうかと思つた通りに、平素の信心深い心持から、必ずあの瓦町のお釋迦樣へでも、祈つたであらうと想はれた。夫人は殆ど毎日、彼處へお百度を踏みに行くのを私は知つてゐた。それは願ひの筋があるといふよりも、たゞお釋迦樣がついてゐると思つて、氣強く立派に事を行ひ得るためだと、平素よく話しては居たが、こんな際にはひよつと自分の死を、願をかけはしないだらうかとさへ思はれた。私は薄暗い夕方に、あのお釋迦樣の石疊の上を、夫人が特に茶屋に預けてある自分の度數測りを持つて、一度々々に堂前で押し頂くやうに、緡を一本々々外しながら、往つたり來たりしてゐるさま迄想像した。……而して其呪を消すにはどうしたらいゝだらうと思つた。私は床の中で、それに對抗するために、手を合せて例の不動樣に守護を願つた。

　それほどまでに、私の想像は高熱に浮かされた憎惡の中で育つて行つた。而して私は若し此儘死んだら、實際彼らの處へ化けて出るより外はないと思つた。お互に此世に生きてゐる間

は、此世での運命若しくは因縁として、彼らの存在は或程度まで許して置けても、私だけが肉體を失つて、靈魂のみに歸つて了つたなら、その靈魂に許された力を擧げて、彼らの肉體的存在までも亡ぼさずには置けないと思つた。氷を抱きながら私の胸は火のやうに熱かつた。煮え立つやうな心臟と、高熱でくわッと音を立ててゐるやうな頭痛と、更に困難を極めて來た呼吸とで、その憎惡と怨恨とに喘ぎながら惡寒になつて横はつてゐた。

併しいつの間にか高熱の爲に、呪はれた私の身もうと〳〵と和んで來た。夢とも現ともつかぬ、身體はぎゆつと壓し付けられてゐるが、頭はふら〳〵と浮遊するやうな感じの、とろ〳〵と薄明るい世界だつた。――私は眼を閉いたまゝ、微睡んでゐたに違ひなかつた。

と、其時私は、前に意識的に持つた憎惡とは、まるで反對の事象にぶつつかつた。

……私は矢つ張り同じ病床に寢てゐた。而してもう死ぬのだといふことが、どうしてだかはつきり解つてゐた。解つてゐたが、私はさう驚きもしなければ、悲觀もしてゐなかつた。何だかほんとに死ぬんでなくて、たゞさう宣告されたといふだけの事だと、心の中では思つてゐた。死ぬんだが死にはしない。――まあ其状態を云つて見れば、そんな風な氣だつた。私はそんな氣で病床に横はりながら、誰かの來るのを待つてゐた。

そこへ看護婦が、不意に頭の上から現はれて、「杉浦さんがおいでになりました。」と云つた。私はどきりとして、「さうか。此方へお通し。」とか、何とか口の中で云つた。而して心の中で思つた。「さうか。矢つ張り杉浦が來て呉れたか。」さう思ふと同時に、自分は先刻から、一生懸命で彼の來るのを、待つてゐたのだつた、と思ひ返した。「さうか。矢つ張り來て呉れたか。おやあ、たうとう謝まりに來たんだな。」私は繰返してさう思つた。

私は杉浦の來る方の、障子の方を見守つてゐた。それがもう大分煤けて、切り貼りの痕の目につくのが氣になつた。此間もK――博士が、それを輕蔑的に眺めたやうに思つたが、今日も杉浦に、そんなつまらない所で輕蔑されたくない氣があつた。杉浦が來るんなら、あんな障子も貼りかへさせて、自分の髯も剃つて置くのだつたと思つた。が、もう仕方がなかつた。杉浦がそんな所へ氣がつかないで呉れればいゝと思つた。

さう心配してゐる中に、杉浦がその障子をすつと明けて、中へ入つて來た。這入つて來て、いつの間にかそこへ坐つた。幸ひに障子には目が付かぬらしい。

「やあ。よく來て呉れたね。」私はかう云つて、彼の顔を見返した。

「うむ。今日齋木が來てね。君の話を聞いたものだから、急に思ひ立つてやつて來た。どうだい容體は。」彼は親しげに訊いた。

「うむ。もう駄目らしい。――僕も死ぬ前に一度君に會ひたかつた。」さう云ひながら私は今迄彼に對して、あんなに惡意を持つてゐたのを、心の中で濟まないと思つた。

「僕も是非君に會つて、一言お詫をしたいと思つてね。それでかうして突然來たんだ。――君、どうか許して呉れ給へ。そして元通り交際つて呉れ給へ。冬子も君さへ許して呉れれば、喜んで往來すると云つてるよ。奥さんも非常にそれを望んでゐる。皆は家で僕の歸つて復命するのを待つてゐる。君さへ許して呉れれば、すぐみんな此處へ來ると云つてゐるよ。」

「さうか。僕は許すよ。許すとも。もと〳〵仕方がなかつたんぢやないか。僕だつて惡いんだもの。」

私はかう云つて、ぢつと彼の顔を見返した。嬉しくて、感動して、涙が零れるのを、一生懸命、堪へてゐた。此處で先に泣いては、杉浦に嗤はれる、そんな妙な反省があつたのだつた。

「さうか。有難う。みんなもどんなに喜ぶか知れない。ぢやあ直ぐ連れて來よう。」

かう云つて、杉浦に立つたやうだつたが、夫人や冬子たちが、直ぐそこらにゐると見えて、「おい。早く來い。」と呼ぶやうに云つた。……私が其方を覗くと、向うの横町の電柱の陰に、肥つた夫人と、傘をさした冬子の姿が見えた。彼らは遠くからにや〳〵笑つて近付いて來た。

私は急に胸が躍るのを抑へる事が出來なかつた。……

と、私はその半ば夢幻で、半ば意識的な假睡から、はつと吾に返つた。寢てゐたには違ひないらしい。足の方に入れた湯タンポの熱で、腰から下にべつとり汗をかいてゐた。

「お目がさめましたか。赤酒を上げませうか。」

と看護婦が横合から云つた。

「いや。——」

私は今の事象を、矢つ張り結局夢幻だと知ると、何だか恥しいやうな氣がした。が、更に又殘り惜しいやうな氣がしてならなかつた。

それで其氣分の續きを追ふやうに、喉は渇いてゐたが、さう斷つたまゝ、身動きもしないで眼を閉ぢた。もう、それが一場の幻であつた事は、もうはつきり解つたが、その感動の名殘りが、妙に感傷的な氣持のまゝで、尾を曳いて殘つてゐた。涙が、實際先刻から少し潤んでゐた上に、そーつとこみ上げて來た。

それと同時に私は、前に云つた通り、そんな夢を見た事が恥しかつた。夢といふよりそれは、自分が希望で作り上げた幻影だと云ふ氣がした。さう思ふと、私は何といふ甘い人間だらうと思つた。何て儚い事を望んでゐる奴だらうと思つた。何て弱い男だらうと思つた。實は先刻も、あの憎惡と共に想像した時、私にもかう云ふ想像が、ふと浮び上つて來ないではなかつたのだ。それをたゞ私は、蟲のいゝ、弱い自分を庇ふ、如何にも儚い想像だと思つて、すぐ叱り消したものだつた。

それが少しうと〳〵すると共に、自分にまざ〳〵幻想となつて、浮び上つて來たのだ。

併し私はその幻想を起した事と、それによつて假りにも起された感動を、決して悔いる氣にはならなかつた。それほど私は感動してゐた。それは私に、心弱いと云はれても何でも、兎に角彼らを許すといふ、善意があるのを際立てたやうな氣がした。たとひ幾らか意識が殘つてゐて、多少芝居氣はあつたにもせよ、許すといふ氣持が、私の本心に內在してゐるといふ感じは、矢つ張り私を不快にはさせなかつた。

私は靜に自分を憫れみながら、しかもそれを是認する氣持で、沁々と涙ぐんだ。而して改めて思つた。

「さうだ。ほんとに私が此儘死んで了ふんなら、彼らに會つて一言許すと云つてやらう。矢つ張りその方が、私の取るべき道らしい。

而して向うから、折れて出て來るのを待つてゐた夢幻の中の、あの弱い儚い想望に對しては、それを恥ぢる代りに自ら進んで此方から彼等に、和解を申し出でる事に依つて、卑怯でなくなると思つた。

私は姉を呼んで、杉浦に私が死ぬ前に一度會ひたいから、來て呉れるやうに傳へて貰はうと決心した。が、それはさすがに躊躇された。まだ死なない。まだ呼ぶのは早い。さう思つたからだつた。杉浦に傳へるにしても、愈々となつてからでいゝと思つた。まだ死ぬとはどうしても思はれなかつた。死なない中に、早まつてそんな事をして、又後で生きて人々に嗤はれでも

してはならないと云ふ氣もあつた。許すなら、死――私の此世のすべてが終る時でなければならないと思つた。それで母を一應呼んだが、まだ其事は何にも云はずに了つた。たゞさう決心しただけで、私の心に妙な滿足があつた。

まだ、まだ云ふのは早い、まだ／＼だ、と思つてゐる中に、併し私は生命の危機を乘り越してゐた。熱度四十度三分、脈搏百二十五、呼吸五十を算した時でも、私は、まだ／＼。…と思つてゐた。そしてたうとう、まだだ。で濟んで了つた。私は矢つ張り呼ばれてはゐなかつた。

病は私の思つてゐたより、ずつと重いものだつた。そしてそれが恢復するまでは、又可なり永い間かゝつた。その恢復期の永い間の、高熱で呆やけたやうな無爲な頭腦で、私は時々彩浦の事を考へた。

あの時、たうとうお終ひまで死ぬと思はなかつたので、化物になつて出もせず、又許すと云つて手を取つて泣きもせず、かうして今迄通りに、倶に天を戴いてゐるやうになつたのを、物足りない氣もした。あの時あの決心通りに、少しも後の事なんぞ顧慮せずに、許すと一言向うへ通じて置いたら、どうだつたらうなぞと思ふ事もあつた。そしたらそれが機緣になつて、二人の間がずつと平和に融いてゐたかも知れないと悔まれる時もあつた。が、併し矢つ張り、あの儘でよかつたのだと一番多く思はれた。もう今更になつてどうにもしたい氣は出なかつた。この儘でいゝのだ。此儘が一番自然的なのだ。……そこに淋しい滿足があつた。

けれども其頃の私の心は、何と云つても生き伸びたといふ歡喜や、生命拾ひをした感謝の念で、何に對しても和やかだつた。私は彼等に對して、もう病前の憎惡のやうな、激情を驅り立てる事なんぞ全く出來ないのを感じた。

病氣が癒えて、やう／＼歩行が出來るやうになると、一番先に池田の家を訪ねた。

久しぶりで、もう幾らか袷ではぽか／＼し過ぎる日を浴びながら、足試しの積りか何かで、ゆつくり／＼ではあるが、併し撓まずに富坂を上つて行つた私は、輕く汗ばんだ身體を、暫くで友の家の二階へ運び入れた時、云ひ知れない感情が迫つて、微笑と一緒に涙ぐんだりした。池田もあのしよぼ／＼してはゐるが奧深い、人懷つこい眼をしばたゝいて喜び迎へて呉れた。

「よく來たなあ――もうこんな處まで出られるのかい」

「うん、どの位歩けるかと思つて、試驗的に來て見た。何だか馬鹿に出て見たくなつてね」

私は近くの砲兵工廠で、鐵砲を試射するらしい爆音を、物珍らしく聞き咎めながら、池田といろ／＼な話をした。と何かの機會を捉へて、池田は云はう／＼と思ひながら、躊躇してゐたらしく、又いつかのやうにこんな事を云ひ出した。

「君、實は今まで君の身體に障りでもすると惡いと思つて、少しも云はなかつたけれど、君の病氣の惡い最中にね、突然彩木が僕の處へやつて來て中根家の意志だが、君が金に困つてゐるやうなら、幾らでも出したいと云ふから、取次いで呉れと云ふ話だつたんだがね。」と、彼は目をぱち／＼させて、私の顏を覗き込んだ。

「ふうむ」私は意外な事を云ひ出したので、少し胸を轟かせながら、息を引緊めるやうにかう受ける外なかつた。

池田は持前の少し黄色な、急き込んだ調子で續けた。

「無論僕は斷つたよ。君に云ふまでもないと思つて、きつぱりその申出を斷つたよ。だつて君、失敬ぢやないか。君とあゝいふ關係になつてゐるのに、幾ら君が病中困つてゐるからと云

つて、今更そんな事を云ひ出すのは、君の弱味につけ込んで侮辱的恩惠を施すやうなものだからね。下品な言葉で云へば、金で面を張ると云つたやうなやり方ぢやないか。君だつてまさか敵のやうに思つてゐる家の、そんな恩惠を喜んで受けはしまい。」

　と、彼は少し興奮して、益々目をぱち〳〵させながら、續けるのだつた。

「僕は一體そんな事を中根家が云ひ出すのが、非常にいけないと思ふんだ。よくもそんな事が云ひ出せたもんだと思ふんだ。今更そんな事を云ひ出せる義理ぢやないぢやないか。」

　池田は私が、いろ〳〵な錯綜した感慨で、ただぎゆつと息窒つたまゝ、何とも答へずにゐる私の顏を見つめて、同意を促すやうに云ひ立てた。

　が、私は、さう彼に云はれると、益々妙な氣になつた。彼の憤慨の言葉が、思ひの外に激しいのを聞くと、嬉しいやうな氣もしたが、併し實際心の奧では、その事實に對する池田の態度より何より、中根家が私に金を出さうと云つた、その事實だけが私の胸をぎゆつと摑んだ。好意不好意を穿鑿するよりも、向うが私にそんな風に心を動かして來たと云ふ事が、何だか私を妙に感動させた。矢つ張りさうだつたかと思つた。私は池田の言が終ると、何と答へたらいゝか鳥渡解らぬ氣持で、しかも答を促さるゝまゝに、思はずから答へた。

「併し君はさう憤慨するけれど、先方はさう惡意でやつたんぢやないよ。」

　池田は默つて私の顏を見てゐたが、何とも云はなかつた。そして何故か口を噤んで、不服さうに下を向いて了つた。

　實際私は、池田から初め話を聞いた時から、先方に惡意があるとは、迚も信じられなかつた。却て矢つ張り向うに償罪の意志があるといふ事が、心の底で非常に嬉しかつた。矢つ張り私が夢に見た通り、向うではあゝ云ふ場合どうかして折れて出たい氣持があるのだ。さう私は思つて了つた。で、池田が、續いて憤慨し出した時は、さうかな、成程さうも見られるな、少くとも私が彼らに見せた今迄の敵意に報せて、逆に私を押へ付けるやり方でないとも限らぬと思つた。それとも齋木が使者に立つてゐるので、ひよつとすると齋木のさしがねかも知れぬとも思つた。が、そんな事は問題でなかつた。それほど迄に私にはたゞその償罪の意志の表示が嬉しかつたのだ。殊に池田の憤慨に合はせるのは、彼にさう先を越されてゐては、私の性分として平常の場合でも押切つて益々憤慨する氣にはなれなかつたのだ。……

　暗く寒くならない中と思つて、私は歸途についた。そしてまだ妙に默まらぬ頭の中でその問題に就て考へながら歩いた。

　果して先方では、池田の云ふやうに、惡意で申出たのだらうかと思つた。何だかそこに池田の、短所としての洞察はあるが、考へ過ぎてゐはしまいかと思はれた。あの申出が池田の云ふやうに見える事は事實だつた。此方にさう思はれても仕方がない事も事實だつた。が、併し向うとして見れば、此方がさう取りはしまいか位、考慮を拂つてゐるに違ひないと思はれた。さうまで無反省か、さうまで此方を見縊つてゐる筈はなかつた。寧ろさう取られるのを懼れながら、恐る〳〵何かを企てたとも見れば見られない事はなかつた。假令無神經な彼らとて、惡意でやるとすれば、其點に考慮を拂はない筈はなかつた。却て此方から其點を看破られて、衝き返されでもしては恥の上塗りだ。——さう思はぬ筈はなかつた。果してさうだとすれば、その申出は、向うが此方からの拒絶に依つて、遂に顏を潰される事を犠牲にして迄、衷心

からさう串田たものと見られた。而して池田の拒絶に依つて、向うが一種の侮辱を感じたに違ひない事は、いづれにしてもはつきり考へられた。

　金を返した事、それは今更池田に、何の不服をいふ所もなかつた。それだからそれは現に彼にも感謝した。實際自分がその話を直接聞いても、謂はれもない金を、喜んで受取る事はなかつたらうと思つた。併しその串田に對しては、實際ある感情で受納出來たかも知れないと思つた。さうしたなら、或ひは彼らとの關係も、少しは綴びがついてゐたかも知れないと思つた。少くとも私が病床で、彼らを呼び寄せて和解しようと思つて、それを果さなかつた後で、あの時一時の感激にもせよ、さうしたらよかつたと思つたのと同じ程度で、淡い殘り惜しさの感じがないではなかつた。而して池田の好意は、非常によく解つてゐながら、少々そのきつぱりした態度を、恨むやうな氣さへあつた。

　私は彼が「病氣に障ると思つて默つてゐた。」と云つた言葉を、改めて思ひ返して見た。而してあれだけ人間の心持を解つてゐるべき筈の彼でさへ、矢つ張り人の氣を察する事は出來ないのだと思つた。而して若し私があの病中彼らの事を思ひつゞけてゐる時に、その言葉を聞いたなら、ひそかに淋しく微笑んだらうと思つた。そしてその心の動搖で自分が惡くなるやうな事は少しもなかつたに違ひないとも思はれた。さう云へば池田の考へ方は、あの串田に對する考察にしても、一應深くは入つてゐながら、妙に意地とか男子の體面とかに囚はれた考へのやうに思はれてならなかつた。更に突込んで云へば、其考へ方は、私一個の問題としてではなくて、彼ら友人が、一種の見榮のために、彼等に取つて私が立派であらせたい爲に、さういふ處置を取つて呉れたのだと、少し有難迷惑に考へられないでもなかつた。彼ら友人たちは常に、私が凜として立つてゐる事を、彼らの見よいといふ立場からばかり望んだ。

　秋山も、感激して許し合ふといふやうな事を一種の露西亞小說かぶれのした、アフェクテーションだと思ふやうな所があつた。池田はあんな事があつては、憎んで意地を張り通すのが、人間らしいと信じてゐるやうな所があつた。而していづれも彼らの概念に當て嵌めて、私を律しようとしてゐるやうに感じられてならなかつた。

　私の失戀後の妄動も、たゞ彼らには意氣地なしとしか思はれぬらしかつた。而して自分の和解を欲する心も、又彼らから見れば、見つともない弱い努力と、蔑まれるに違ひなかつた。

　私は淋しかつた。が、其心の奧には、微かな滿足が在つた。矢つ張りそれに、人の好意を信じた報酬だつた。今はたゞそれだけそつと持つてゐる外なかつた。……　病後の心はひそかに涙ぐんでゐた。

三

　澤田の歸朝が、杉浦と會ふ機會を作つて呉れるのを、私は恐れながら待つてゐた。澤田は私たちがまだ仲がよかつた時分、私たちに並んで送られながら、横濱の埠頭を發つた。而して私と杉浦との事件は、恐らく杉浦からの手紙で知つたであらうとは思ふが、併し彼は各々のいづれに對しても、友誼に於て前と變るべき筈はなかつたから、どつちかが避けなければ、又二人は他の友人たちが交つたとしても、同じ埠頭に相並んで澤田を迎へねばならなかつた。――私は杉浦と會ふのを怖れたが、又會つてみたい意志も、可なり心の中で動くのを感じた。それは幾らか怖いもの見たさと云ふ感じにも似てゐた。會へばお互に、硬くなつて睨み合ふ形となる

に違ひなかつた。が、又どんな事かで、和解の道へ導かれないとも限らなかつた。

　それ前に私は杉浦と、偶然に二度ほど顔を合はしてゐた。一度は淺草の或る活動寫眞館でだつた。そこで活動同好會と云つたやうな、映畫見物の會が在つた時、幹事の高部君から案内狀を貰つて行つてみると、高部君は殆ど何も知らずに、大宮といふ矢つ張り故先生の有力な門下で、私に取つては先輩であり、又あの問題の反對者であつた人と、一緒に杉浦をも招いで了つてゐた。私は遲れて行つて、戸外から入つたために、殆ど見えない薄闇の中に例の齋木の顔をやつと認めると、其横へ割り込まして貰つたが、だん／＼眼が暗に馴れて來て、齋木の右にぢつとしてゐた杉浦の顔を、ちか／＼と映寫機からスクリーンへ送る光の反映で、仄白く幻のやうに發見した時、ぎよつと驚いたのだつた。而して其場は、私の彼らに對する感じも生で、そして一緒に活動寫眞を見てゐるのが苦しくなつたし、又齋木や同じく行つてゐた臼田氏などの扱ひで、私だけが先に歸る事になつて息けついた。臼田氏は大宮氏の親友で從つて又中根家の連中とも知り合つて居り、それでゐて又妙な所から、私の知己の一人でもあつた。兎に角私はさういふ人から、矢つ張り敗者として遇せられ、自分も亦自ら敗者として其場を逃げ出したのだつたが、それを後に小説に書いた事もあつた。

　それから暫くたつて、今度は眞に偶然、本郷三丁目から區役所前までの一と停留場間を、同じ電車に乘り合せて行つた事があつた。私が三丁目から、急いで後ろの車掌臺から飛び乘つた電車の、中央の空席へ行かうと思つて、ふと車内へ歩み入らうとした時、私はふと前方の席に腰をかけて、ぢつと窓越しに外を眺めてゐる杉浦を、はつきり直ぐ認めて足を立竦ませて了つた。杉浦の方では、氣がつかぬらしく、たゞ前の窓から外ばかり眺めてゐた。ひよつとすると氣がついても氣がつかないふりをしてゐたのかも知れなかつたが、兎に角私は、その此方を見ないのを幸ひ、彼に背を向けるやうにして、入口の隅へ身を寄せた。動悸が抑へても／＼どきどきした。而して次の停留場で下りて乘り換へようかどうしようかと思つてゐた。又敗けて逃げたりしては見苦しいと云ふ氣がまだ在つた。それで眞面には見ないまでも向うが下りる迄電車に乘つてゐようと思つた。そして吊皮をぎゆつと握りしめてゐた。杉浦が自分を見出したら、どうするだらうと思つた。下りるかも知れないと考へた。さうなるといゝがと思つた。……と區役所前まで來た時、私は矢つ張り考へ直して、餘程自分が下りようかと思つて、そつと杉浦の様子を窺つたら、丁度彼が思ひがけなく立つて、割に廣い洋服の肩を見せながら、前方の運轉手臺の方へ行くところだつた。私は吻としながら、自分の持ち堪へてゐたのを祝福すると共に、杉浦が實際此處で下りるので下りたのか、私を知つて避けたのかと疑つて、そつと窓から彼の姿に注意してゐた。と、彼は後を顧みもせずに、區役所の角を大學病院の方へ曲つて行くのが、此方も遠ざかり行く電車の中から、人蔘色にくつきり見えた。……矢つ張り彼の下りる處だつたのだ。……

　それはみんな可なり前の事だつた。だから今度會つたら……と、どうするともなく、時には寧ろ唾を吐きかけてやらうと思ふ事すらあつてだが、何とはなしに機會が待たれた。

　さういふ點から云つて、迎へに出さへすれば、殆ど杉浦に會ふに定つてゐる澤田の歸朝日は、一兩日に迫つてゐたが、私はまだ行かうかどうしようかと思ひ惑つてゐた。

　すると、前日の夕方、秋山と池田とか、揃つて

私の家に訪ねて來た。何か澤田の歸朝に就ての用件に違ひなかつた。で、暫く別の噂話をした後に、それとなく聞き出さうとした。

「君。澤田の船の着くのは何時だい。」

と、秋山は池田を顧みて、その顏色を窺つてからかう云ひ出した。

「君。實はね、僕たちはその澤田の歸朝の話で來たんだがね。明日の午前十時に着くんだけれど、君は迎へに行かないやうにして呉れないか。こんな事を云つて、君に氣を惡くされちや困るが、今日池田とも相談して、君は横濱へ來なくてもいゝだらうと云ふ事に決めたんだよ。決して止める譯ぢやないが、又杉浦と會つたりすると、君も不愉快だらうし、又僕たちも甚だ處置に窮するからね。」

「ふうむ。さうかい。」私は何となく浮かぬやうな心持ながら、さう答へた。

と、池田も傍から云つた。

「別に君が行かなくつても不愉快ではないだらう。どうせ行つたつて詰らないからな。」

「さうだよ。」秋山も相槌を打つて續けた。「僕も行かないで濟めば濟ましたいと思ふよ——澤田には、よく事情を云つて置くから、決して惡く思はせたりしやしないよ。」

さうなつて來ると、二人の私の心持を劬つて、さう宥めるやうに云つて呉れるのが、少し腹立たしくもあつたが、もう迚も不服なぞは云へなかつた。私は氣を引立てゝ云つた。

「さうだね。僕も明日は失敬して、改めてお祝ひにでも行かうかと思つてゐたんだから、さうして呉れりや丁度いゝ。ぢや、さうして呉れ給へ。」

「その代りと云つてはをかしいが、出迎へには杉浦が出て、それから吾々で歡迎會を開かうと思ふんだが、其時は君に出て貰ふと。——さういふ事にしようぢやないか。」

「さうか。それも異存はないね。」

「ぢや、さうして呉れ給へ。」

「さうしよう。」

そんな事で、事は決つて了つたが、私はそれでよかつたと、何となく安らかな思ひがすると同時に、何となく心待ちにしてゐた機會を、はつきり否定されたやうで、何處かに滿ち足りない思ひがあつた。

明くる日は、冬の事だつたが、うらゝかに晴れてゐると思つて、私は嫉みに似た心で空を仰いだ。而して今時分は、あの青い潮を泡みながら、岸壁に横づけされたであらう澤田の船や、迎へに出た一家の人々、秋山、池田、それから杉浦の姿を思ひ浮べてゐた。そして今日出迎へずとも、いづれ澤田が歸朝すれば、昔の友誼の復活を企てゝ呉れるかも知れない、さうしたら和解出來ない迄も、面白いと呆やり考へたりした。

が、其後も澤田は、矢つ張り二人を近づける事なぞは、決して出來ない事であるのみならず、却て二人を侮辱すると思つたのか、決してそんな仲介の役などには出なかつた。

彼を通して、私は偶に噂を聞く位なものだつた。その中でも、杉浦が魚眼眞珠會社の重役になつたと云ふ話は、私たちを尠からず微笑させた。

私はいつの間にか、澤田の仲介なぞも斷念してゐた。而して今はたゞ、何か自然な機會か、若くは我武者羅な友人か何かが、無意識に、又は否應なしに、二人を會はせてでも呉れなければ、二人は顏を合せる機會もなからうと思つた。又さうまでして貰つて、會ひたくないのも解り切つてゐた。勿論會ひたいと云ふのではなかつた。出來るなら會ひたくないと云ふ方に近いのは當然だつた。が、それでも會つたら……而したらひよつと、……さう云ふやうな氣持が、ひそかな期待を持たせてゐた。刺戟を求むる氣持も、そ

の中にはあつた。併しその機會はもう永く來さうもないのに、私はもう馴れ切つてゐた。

其時分の事だつた。前にも云つた臼田氏が、船舶の研究に、英國へ行く事に決つたのは。而して彼は其秋の末の一日朝早く東京驛を出發する事になつた。

その前晩に、私たちの知合だけで、送別會みたいな事をした時、臼田氏は吳々も云つた。

「君はいつも寢坊なんだから、明後日も決して見送りになんぞ來て吳れちやいかんよ。立つのが八時なんだから、どうせ頼んだつてそんなに早く起きもしまいけれど。――」

「えゝ。」

私は笑つて、さう曖昧に答へて置いたが、起きられたら、見送りに行かうと思つてゐた。深切で氣をきかして、さう辭退するのだとばかり思つたから、一つ思ひ切つて早く起きて、臼田氏を驚かしてやらう位の氣はあつた。

で、其朝七時頃に、ふと眼が醒めると、さうはつきり見送りに行くと定つても居なかつた決心を咄嗟に決めて、私は床を跳ね起きた。而してざつと顏を洗つたきり、もう時間の切迫したのを見ると、飯も食けずに東京驛へ向つた。

海上ビルディングの前で下りると、私はその白煉瓦の全面に、ひんやりした朝の光が當つて、ふと中層頃に、太刀川何とかと書いた金文字を、眩しく射返してゐるのを、眠く腫れぼつたい半眼に窄めて仰ぎながら、足はそれと反對に急いで運んでゐた。と、私の後から同じやうに急ぎ足で、前屈みに步いて行く人が、ふいと横から覗き込んで、

「やあ、久野君ぢやないか。」

と、優しげな聲で呼びかけた。見るとそれは、中根先生の門下の先輩で一番先生の家へ接近しても居り、又私と冬子との問題の最も激しい反對者だつた大宮氏だつた。大宮氏が、今日出發する臼田氏の親友である事は、私も前からよく知つてゐた。而して此頃は大宮氏も、私の眞價だけは知つてゐると云つて、いつか臼田氏が何かの序に、私に話した事さへあつたので、今日此處での偶會は、不思議とは云へ偶然でない氣がした。

私は帽子を取つて挨拶して、それから竝んで停車場の方へ向つた。

「まだ間に合ひませうか。」

「五分位あるでせう。」

二人はそんな位の事しか、別に話しもしなかつた。が、同一の人を送りに來たといふ事が、此頃やゝ反感の薄らいだ此人に、幾らか親しみを感じさせた。

切符を買つて、私の方が先に改札口から入つた。もう人々はみんな步廊の方へ出てゐた。地下道を通りぬけて急いで階段を上つてみると、直ぐそこに人々が一ぱい立つてゐて、臼田氏はどこにゐるのか解らなかつた。私は少し興奮したやうな氣分で、さつさと先に立つて、汽車の窓々を見配りながら、步廊の先の方へとずん〱步いて行つた。勿論窓の前に立つてゐる人々の後ろを。

と、中途まで行きかけると、後ろで、

「おい久野君、久野君、此處だよ。」

と、大宮氏が呼んだので、振り返つて見ると、そこに新聞社關係か何かの知らない人たちに取卷かれて、臼田氏が白いとぼけたやうな顏を、新しい洋服姿の上に浮かして立つてゐた。

「どこへそんなにずん〱行くんだい。」

私は鳥渡赤くなつて、笑ひながら近づいて、それから大宮氏の後から改まつて挨拶した。

「君は到底來ないだらうと思つてゐたよ。ほんとに濟まなかつたね。こんなに早く起きたのは、何年にもない事だらう。」

そんな事を云つて、臼田氏は谷隱してゐた。

挨拶が終ると、私ばかりが見送り人ではないと思つて、二三歩引退つた。而して初めて四邊を見廻した。先程まで氣が付かなかつたが、周圍には私の知つてゐる人が、數多來てゐた。それで一々その顔に、私は笑顔でお辭儀をした。と、三四人先の柱の横にゐたK――新聞の渡瀨君が、私を見つけて、「やあ。」と動いた時、それに答へてお辭儀をした後で、ふと見ると其後方に、茶色の新しい中折帽を被つた、洋服の男が立つてゐるのを發見した。其顔を見た瞬間に、私は見たやうな人だなと思つた。而して其時は既に私の手は、自分の帽子にかゝつてゐた。杉浦だ！とすぐ思ひついた。といふよりも解つた。向うでも此方を見てゐた。けれども私は帽子にかゝつた手を、其儘止める事は出來なかつた。思ひ切つて鳥渡丁寧に會釋した。すると向うでも、鳥渡心持どぎまぎしたらしかつたが、すぐ帽子を脫いで、同じやうな會釋を返した。私はそれを見ると、急に恥しい事をした後のやうに、急いで身を退けて、人混みの間に目を轉じた。何だか胸が又どき〳〵した。が、何だかそれは胸を緊めつけられるやうに妙に快い壓迫だつた。私はそれをぢつと保つて、下を向いてゐた。

「暫くでした。」と、例の活動寫眞の幹事役をしたK――新聞の渡瀨氏が、近づいて來て云つた。「其後どうですか。たまには公園の方へもお出かけですか。臼田君が居なくなつて、一人肝煎が減つた譯ですけれど、又やらうぢやありませんか。何でも今來てゐる『虎の爪痕』といふのが面白さうですよ。」

「さうですか。」私は仕方なしに、内心苦笑しながら應じてゐた。「ぢや又やりませう。その『虎の爪痕』といふのは、連續物ですか。」

私はあの活動寫眞で會つた時の、杉浦の事なぞを思ひ出しながら、胸一ぱいに妙な感慨を以て、口ではそんな事を云つてゐた。

「さうです。ルス・ローランドのです。」

「おや、ユニヴァーサルのぢやないんですね。」

私はかう云ひながら、今胸にある事と少しも係りのない、つまらない事を云つてるなと自ら思つた。何だか妙に苦しいやうな泣きたいやうな思ひだつた。が、又對手にならずにはゐられなかつた。

「さうです。會社は何處ですか知りませんが、……」

私はその映畫の會社なぞは知らないでもいいと思つた。何だか早く何處かへ脫れて、一人で今の妙な杉浦との對面をゆつくり考へたり思ひ返したりしたいと思つた。

其途端に向うの柱につけてある鈴が、鐵の柱を顫はして鳴り渡つた。私はほつとした。臼田氏はもう何時の間にか、汽車に乘り込んで窓から首を出してゐた。そして杉浦の方にも私にも、一緒くたに別れの挨拶をしてゐた。

けたゝましい鈴が間を置いて、又すぐ鳴り續いて、そして止んだ歩廊は鳥渡の間しんとした。

それから、すぐ又そこで、萬歲といふ聲が響いた。一つ處で云ふと、それが小團體へまで傳染つて、錯綜した別辭に交つてその叫びが幾度となく繰り返された。

「それもいゝ、それもいゝ。」私は何ものにとも知れず、そんな呟きを發するやうな心になつてゐた。……

受驗生の手記

一

汽笛ががらんとした構内に響き渡つた。私を乘せた列車は、まだ暗に包まれてゐる、午前三時の若松停車場を離れた。

「ぢや左樣なら。おまへも今年卒業なんだから、しつかり勉强しろよ。俺も今年こそはしつかりやるから。」

私は見送りに來てゐた窓外の弟に、感動に滿ちて云つた。襟に五年の記號のついた、中學の制服を着けて、此頃めつきり大人びた弟は、壓搾した元氣を底に湛へ、たやうな顏付で、むつつり默つて頭を下げた。恐らくは弟も、この腑甲斐ない兄の再度の首途に、何を云つていゝか解らなかつたのであらう。考へて見れば自分は、既に弟に追ひつかれてゐるのだ。上京の時日は、弟より三ケ月先きの今だが、弟もやがて中學の制服を脱ぎすてると、此の四月には上京する身なのだ。私はもう一度妙な感慨を以て、ぢつと立つてゐる弟の姿を見やつた。

私はもう一言何か弟に云ひたかつた。が汽車は既に、ゆつくりと、しかも凡ての物に係りなく、動き出してゐた。そして思はず涙の浮びかかつた私の眼から、ぼんやり明け近い暈をかぶつた燈火と、蝙蝠のやうに驛員たちの立つてゐる步廊が、見る〳〵中に後退つて行つた。

弟の小さくなつた姿が、もう步き出してゐた。そして此方を見てゐないらしかつた。それでも私はもう一聲の別れを投げかけようとしたが、その時暗い物影が、恐らくは積まれた材木ででもあるらしい物影が、私と步廊との間を遮つた。而して再びその暗が豁けた時、汽車は既に故鄕の殘影である燈火の群から遠く駛つてゐた。

私はやうやく窓から首を引込めた。そして何となく首途らしい感慨に打たれて、危く熱くなりかゝつた瞼を抑へ乍ら、かうなる迄の自分の位置を默想し始めた。——

私に取つては、今度のそれは全く決死の首途なのだ。去年の一高の受驗に於ける不面目な失敗、その後を受けた今年こそは、どうしても成功しなくてはならぬ首途なのだ。それにしても何故、去年もつとしつかりやらなかつたらう。それは第一に上京が遲れたからだ。秀才だつた義兄の言に信賴し過ぎて、卒業後の大切な數月を刺戟のない田舍で勉强しようとしたのが間違ひだつた。早くから上京してゐて、切迫した空氣の中にゐたら、或ひは勉强ももつと緊張し、又受驗術も巧妙になつてゐたかも知れない。從つて友人の三島のやうに或ひは及第してゐたかも知れない。なあに三島だつて自分だつて、腦力にさう軒輊が在る譯はないのだ。無いどころか、自分の方が卒業の成績さへよかつたのだ。そして受驗前の問答なぞでも、自分の方がずつと知つてゐたのだ。ところが受驗の結果は彼が見事に入つてゐ乍ら私はすつかり失敗してゐた。一體ほんとに彼と私とに、どこであの差が出來たのだらう。

それは彼と私との單なる英語の單語一つ知る知らぬから生じたらしい。少くとも自分はさう考へる。あの英語の第一問に在つた、呪ふべき Promotion と云ふ單語の譯し方一つに、彼と私との運命の差が生じたのだ。私はこの字を知らなかつた。それで前後の意味から參酌し

て、大體當りさうな譯語をつけて來た。―今考へるのも恥しい。―それがあとから聞いてみると違つてゐた。その他の問題では、どの科目に於ても、いつも彼と歸途に話し合つて、二人が一致したのだつたが、これだけは私が明かに失敗してゐたのだつた。

　其他にも或ひは私の失敗があつたかも知れない。そして二人の間に見えない差異が生じたのかも知れない。併し際どい選拔試驗の及落では、單語一つの識不識は、直ちに運命を支配する事もあり得る。否さうあるべきだと思ふ。聞く所によると及落を分つものは、僅かに五點の差を出でぬと云ふではないか。――兎に角、私の場合に於ては、單語一つにかゝつたと考へて差支ないやうに思ふ。しかも自分はそのために、云ひやうのない屈辱の半歳を過した。父には叱られた。母には泣かれた。義兄、姉弟たちにまで輕蔑の眼を以て見られた。たゞあの私のひそかに思つてゐる、義兄の從妹の澄子さんだけが、同情して慰藉の手紙さへ吳れたが、あの人だつて內心輕蔑したに違ひない。が、それでもあの人の慰めが私の今迄の唯一の光明だつた。

　今度の早い上京だつて、父はなか／＼許しさうにもなかつた。が、自分は今年入らなければ廢すと迄言つたため、やつと許して吳れたのだ。だから、いづれにもせよ、今年入らなければ生きては歸れないのだ。それに弟だ。彼奴ともたうとう受驗期が同じくなつて了つた。それを考へると私は、何となく恥しくてたまらない。

　何しろ、上京したらしつかり勉強しなければならない。さう思ふと胸が躍るやうだ。そしてもう今日の中には上京してゐるのだ。今迄の陰慘な、屈辱な家での蟄居から、あの光りかがやく都會に出て、自由に勉强することが出來るのだ。それに東京には、去年の八月以來半年會はない、慕はしい澄子さんが待つてゐる。私が上京したら、いつもの通りの晴々しい笑顏を持つて、義兄の家へ訪ねて來るに相違ない。それがどんなに自分の勵みになるだらう。それにしても何故去年、自分は一高へ入らなかつたらう。入つてゐたら白線入の帽子を被つて、あの人の前で今時分は大手を振つて會へたのだ。それを考へると私は口惜しくなる。が、何しろ今年だ。今年入つて了へば、すつかりよくなるのだ。――「何しろ今年だ。」と自分はもう一度獨語した。そして其後につれて、「今年だ、今年だ、今年だ。」と呟いてゐるやうな、うす眠い車輪の音にぼんやり聞き入つた。….

　ふと氣がついて見ると、右手の車窓が急に銀いろな明るみを帶びた。汽車はもういつの間にか、幾つかの停車場を越して、今、曉の猪苗代湖に沿うて走つてゐるのだ。

　湖面は一たいに小波が在ると見えて、曉とは云ひ乍ら殊に灰白かつた。そして水がずつと擴がつた向うの、布引あたりの山々は、明け急ぐ雲のけはひに包まれて、空との境を分明にしなかつた。たゞ私の眼には全景の左手を劃る、安積山鼻が際だつてゐるばかり、それで全體の湖水の風景は、いつもより茫漠たる廣さを持つてゐるやうに感ぜられた。

　窓からは冷たい風が入つて來た。それでも私は何ものかに打たれて、ぢつとこの湖景を眺め入つた。何だか云ふことのできぬ暗示が、そこにあるやうな氣がした。ほんとに自分自身の曉が、新しく開ける運命の曉が、そこに暗示されてゐるやうに感ぜられた。私の眼には獨りでに淚が出た。

　山潟で夜が明けた。

　上野へは薄暮にはらぬ中に着く筈だ。汽車は猶も私と私の默想とを載せて、たゆたひながら、しかも只管に焦つて、そこへ急ぎつゝあるのだ。――

二

再び此處の義兄の家の人となつてから、昨日今日で、かれこれ一ト月になる。其間には別に變つたと云ふほどの事もなかつた。此方の目のせゐか、義兄も姉ももう平常の態度と變らなかつた。たゞ何かの拍子に、鳥渡私の去年の失敗へ觸れて、皮肉めいた揶揄をする事はあつても、それは全く即興的な事で、私をさう全人格的に輕蔑してゐるのではないらしい。全く一回位の受驗の失敗は、殆ど當り前の事なのだ。それをさう／＼重視されたのでは、吾々受驗生は堪へられないのだ。

室は去年と同じく、義兄の書齋に隣つた二階の隅の六疊を貸して呉れた。私はそこに去年と同じく、青い机掛をかけた粗末な机を見出した。壁にもまだ、去年自分が額縁に入れた、ミレエの繪の寫眞版が殘つてゐた。私は一度はそれらを慕はしいものに見たが、動もするとそれから去年の失敗を聯想し易いので、机掛も新しい茶褐色のに改め、晩鐘圖はナポレオンの肖像と換へた。これで私の受驗生生活も改まつた譯だ。

併し勉強の方には、上京當座一週間ほど、場所が變つた刺戟で、落着かぬ乍らに心持が張り切つてゐた。が、まだ試驗まで六月もあると思ふと、知らず識らず前途遼遠といふ感じと共に、まだ／＼少し位は怠けてゐても大丈夫だといふ横着氣さへ生じて來た。此頃ではたゞ漫然と參考書などを引繰り返してゐるだけだ。たゞ少し遠大な計畫を立てゝ、過去十年間のあらゆる試驗問題を蒐集して見ようと思ひ立つて、散歩の序によく古本屋などを漁るのが、一番受驗生らしい心持だ。もうそれも七ケ年分は集めた。すつかり集つたら暇にまかせて、その全部に目を通すつもりだ。そしたら問題のコツが、少しは飲み込めるやうになるだらうと思ふからだ。

南日の英文解釋法は、大抵の人が少くとも五回は讀み返すと云ふから、もうそろ／＼讀み始めなければなるまい。去年はあれを一回、それもやつと讀んだだけだつた。

けれども閑暇だから、豫備校へだけは行くことにした。そこでの講義は、實力をつけると云ふよりも、如何に能力を活用すべきかを教へる、what よりも寧ろ how の方に重きを置いた、學校としては實に變則なものだと思つた。併し講義は面白かつた。漫然と聞き流してゐても面白かつた。豫備校は遊び半分に行くべき處だ。それでも十分效用はある。知らず識らず受驗生の頭腦を刺戟する、狡猾にする、そして最もよい事には、動もすれば不規則になり易い受驗生生活に、先づ學校らしい體裁を備へた、一つの規律を與へる機關となる。――兎に角私に取つては、豫備校は一つのいゝ暇潰し場所でなければならなかつた。

私は又暇があるとよく受驗生仲間を訪問した。彼等も亦だら／＼と怠けてゐるらしかつた。淺沼は神田錦町の下宿にゐたが、いつ行つて見ても机の上に、申譯らしく代數の教科書が伏せてあるだけで、本人はきつと誰かと碁を圍んでゐた。根津のある素人下宿に、同鄕の先輩と一緒にゐる佐々木は、度々訪ねて行つたけれど、いつも大抵留守だつた。尤も志望が文科だから呑氣なのだらうが、宿の人の話に依ると、彼は上野の展覽會とか、芝居とか寄席とかへ始終行つてゐるらしかつた。それでも此人のは、怠けるのでもまだ質がよかつた。

遊ぶと云ふ方にかけては、本鄕の[illegible]組町にゐる佐藤が、其尤なるものであつた。彼は惡い遊びをすると云ふ評判が、友達の間に喧しかつた。仲間には彼のためにそれを心配して、忠告をしようと試みるものさへあつた。併しもとも

と受驗を口實に、東京へ遊びに來てゐる彼は・そんな言葉に耳も傾けなかつた。去年も彼は高工に入學を出願してゐ乍ら、試驗の日に二十分許り遲れて行つて、試驗場から入場を拒絕された時、彼は受驗料を拂つてゐるのだから、せめて試驗問題だけは呉れと請求して、それを貰つただけで歸つたと云ふ有名な逸話さへあつた。其時遲れた原因と云ふのは、何でも前の晩酒を飮み過ぎたゝか何とかだと云ふ噂だつた。

私も一度散步の序に訪ねたこともあつた。彼は長い煙管ですぱ／＼白梅を吸つてゐた。そして少しく醉を帶びてゐるらしかつた。

「いよう、珍らしいな。よくやつて來たね。それにしても今日でよかつた。めつたに吾々の處へなんぞ來ない君が、折角來て呉れても留守にしちやあ濟まないからね。なに、今日は金が無いんでね、特別に蟄居してゐたのさ。東京は金がなくちや詰まらない處だよ。金さへあれやあこんな良夜を、下宿の二階になんぞ燻つちやゐないんだ、が今日は燻つてたんで、丁度よかつた。まあゆつくり話して行き給へ。たまには君らだつて一晩位遊んでもいゝんだらう。なにまだ勉强なんぞ始めないつて。そいつは譃だらうが兎に角ゆつくりし給へよ。何か奢らうか。金が無いんで外へ連れ出す譯に行かないから、下宿で取る不味いんでよければあ、何でも云つて呉れ給へ。なに、僕だつて君をダシに使つて、何か食ひたいんだから、遠慮なんぞし給ふなよ。何なら少し酒でも飮まうか。……」

こんな事を立續けに云つて、彼は私を狼狽させた。そして私が眞顏に辭退するのをからかひ顏に、猶もこんな事を云つてゐた。

「いつも乍ら閑過ぎて困つたもんだね。一度試驗を失敗れあ大抵世の中が解るんだが、君は全く特別だよ。まあ折角東京にゐる癖に、君たちはわざと面白い處を避けて通つてゐるんだ。其中に君にも是非一つ面白い處を紹介したいな。併しそれにはもう一二度試驗に失敗つて、自棄になつてからでなくちや駄目だらう。よかつたら何時でも來給へ、さうすれば喜んで案內するよ。――なあにさう眞面目になつて憤慨し給ふな。どつち道人間一度は、さつとそんな處へ行く時が來るよ。僕は只君たちより早く足を踏み込んだだけだ。だからそつちの方面なら、いつでも案內の役をつとめるよ。」

私は初めは幾らか好奇的に、彼の云ふ事を傾聽して居たが、だん／＼不快になつて來た。それで三十分ほど我慢をした末、たうとう暇を告げて立上つた。

「さうかい、もう歸るのかい。早いな。ぢや又來たまへ。何か氣に障つたら勘辨して呉れ給へ。僕もいつでもからではないんだよ。だが、僕もほんとに駄目になつちやつたね。」

さう云つて急に彼は、涙を溜めたりした。私はこゝにも亦受驗界の、最も恐るべき破船者の一人として最も典型的な彼を見た。私は自分の家へ歸り乍ら、彼のやうになつてはお終ひだと思つた。まさかに自分はあゝはなるまいとも思つた。ならぬやうに努力しなくちやならんと思つた。私は何だか恐ろしい氣がした。そして二度と其後は彼を訪れなかつた。

松井はその反對に、仲間でも眞面目な方だつた。彼は小石川小日向のある寺に間借りをしてゐた。西向の陰氣な部屋だつたが、それだけに閑靜でよかつた。松井はいつもその薄暗い障子の下に机を寄せて、片頰にぢつと手を當て乍ら、本を讀むでもなく考へるでもなく、一日を坐り暮してゐるらしかつた。彼は實際は勉强家ではなかつた。頭腦もどちらかと云へば鈍い方だつた。たゞ机に齧りついて、どうにかかうにか受驗の準備を整へようとしてゐるに過ぎなかつた。けれども兎に角彼が一番勤勉だつた。そし

て一番眞面目に、受驗の事を考へてゐた。それで私は一番よく此の松井を訪問した。二人はきつと準備の進行に就いて語り合つた。

「そろ／＼眞劍にやり出してもいゝ時分だね。」

「さうだね。」彼はよく簡單な相槌を打つた。

「何か少しは片付いたかい。」

「いゝや。まだ代數に手を着けた許りだ。代數は苦手でね。僕は去年も代數で失敗つたのだから。」と彼は眉根を寄せた。

「さうかい。僕の苦手は數學では三角だ。だから今からやつて置けばいゝんだが、迚もやる氣はしない。」

二人の會話も動もすれば、こんな物の連續だつた。それでも受驗の事を話し合つてると、何となく活氣づき力付くやうに思はれた。別れる時にはきつとこんな事を云ひ合つた。

「ぢや愈々明日からやらうかな。」

「うん、お互にしつかりやらう。」

けれども其次に二人が會つてみると、お互にさう勉強もしてゐなかつた。そしてお互に對手の不勉強を知つて、私かに安心したりした。

松井は二部が志望だつた。そして今年も高等學校を受ける前に、四月には高工を受驗する筈だつた。四月と云へばもう二ケ月ほどしかない。それだのに彼はさう際だつて、勉強してゐる樣子もなかつた。

「君の方は早いんぢやないか。もうほんとに始めなくちやならないぜ。大丈夫かい。」私はたうとうかう無遠慮に訊いてみた。

「うん。俺もさうは思つてるんだが、どうも頭の調子が惡くて困る。此分ぢや今年も駄目かも知れない。」

「そんな事を云つてないで、しつかりやるさ。」

「まあやれるだけはやる積りだがね。」

かう云つて彼は、薄ぼんやりした眼を、先刻書いた幾何の作圖の上へ落した。

私は彼の狀態が氣の毒だつた。けれども又、他人の準備が進捗しないのを聞くのは、心の中で何となく愉快だつた。競爭者の皆が皆、かうであつて吳れればいゝと思つたりした。

されぱと云つて私の勉強も進まなかつた。これでは、折角早く上京した甲斐もなかつた。

三

澄子さんは相變らず日曜日毎に、義兄の內へ遊びに來た。私はいつの間にか日曜を、心待ちに待つやうになつて了つた。そして彼女が自分の處へ遊びに來るのだと、信ずるやうにさへなつて了つた。

彼女の家は芝の白金にあつた。それは義兄の一番上の兄の家だつた。兄弟五人ある中で、一番上と三番目と五番目とか、丁度一人置きに男だつたが、それがいづれもよく出來て、それ〴〵社會に頭角を現はしてゐた。一番上の兄は古い工學士だつた。そして今はある織物會社の技師長を務めてゐた。澄子さんはその長女だつた。

二番目の兄は農學士だつた。そして今は亞米利加へ行つてゐた。最も末の弟たる私の義兄は、一昨年出たばかりの醫學士で、今猶青山內科の助手をしてゐる。澄子さんは此處へ、即ち千駄木の此の叔父の家へ、殆ど毎日曜に遊びに來るのを常としてゐるのだ。そしてそこには私が寄食してゐるのだ。

澄子さんはさう際立つて、美しいと云ふべき人ではなかつた。顏全體の印象は、整つた乍ら に特長といふものもないが、どことなく活々して、何かの拍子に浮べる表情が、非常に眉のあたりを美しく見せた。殊にそれは眼に於て著しかつた。ふと斜に見上げる時、笑ひ乍ら見据ゑる時、わざとらしく見える迄開いた二重瞼の下から、黑眼勝に澄んだ雙眸が、濡れた雨後の

日光のやうな輝きを弁らせた。

私は今でもまだ、彼女を初めて見た時の事を憶えてゐる。それは去年の六月、受驗のために上京して間もなくだつた。それまで姉の口から、お澄さんと云ふ姪のあることは、いつとはなしに聞き知つてゐたが、その話の上に少女姿さへ聯想させずにゐたのだつた。私に取つては東京の女は、それも美しい都會の少女などは、迚も知己にさへなり得ないと、内心思つてゐたせゐであつたかも知れない。

それは確か上京して一ヶ月位の或る日曜だつた。もう切迫して來た試驗期を前にした私は、室馴れに落着く迄もなく、机に齧りついてゐねばならなかつた。私は其日も朝から不安と焦躁とに襲はれ乍ら、まだ調べ切つてゐない物理の頁を漫々讀してゐた。諳記物はまだ殆ど一つも手を着けてゐなかつた。焦つてゐるのさへ堪らない程、暗澹たる不安に浸つて來た。けれどもどうにもしやうが無かつた。止むを得ず机に向つて、疲れ切つた眼を教科書の上にさらしてゐたのだつた。けれどもそれもすつかり退屈して來た。私はたうとう机の前へ仰向けに身を投げて、やけ半分にぼんやりと、内外の物音に聞入つてゐた。

ふと玄關の戸の開く音がした。續いて癇高い女の子の叫びと混つて、美しい中高音の朗らかな聲が聞えた。軈てそれらの聲々は姉の落着いた挨拶で迎へられたらしい。それで階下の騒ぎは靜まつた。そして其後は際だつて話聲が洩れて來なかつた。それなり私はいつの間にか又、放心的な休止状態に陥つてゐた。

暫くすると、ことん／＼と間を置いて、梯子段を上つて來る人の氣配がした。その間遠な音から察すると、それは子供の所爲だと云ふことがすぐ解つた。私は一種の好奇心で、耳を聳ててゐた。すると突然先刻の喨然とした女の聲で、

「あら秋子さん、どこへいらつしやるの。お惡戲をなすつちやいけないことよ。」

「お二階。」大人ぶつた女の子の聲が應じた。

「お二階の兄さんを見に行くのよ。」

「御勉強のお邪魔になるからいけませんよ。」

「大丈夫よ。」さう云ひ乍ら女の子は、ことんことんと上り續けた。さうすると後から追つて來たらしくつゝましい乍らに速かな足音が、梯子段の邊りに起つた。

私は緊張した興味で、どんな女の子がそこの襖の處へ現はれるかを待つてゐた。何だか胸の中がときめき立つた。私はわざと机の方を向いてゐた。

すうと入口の襖の開く音がした。私は咄嗟に振り返つた。すると其處には五つか六つ位の、髪を切り下げた女の子が、薄暗い閾口に眼をぱつちり見開いて、默つて立つてゐた。其顏には笑つていゝものなら笑ひ度いと云ふやうな表情があつた。

私は向き直つて、「こちらへいらつしやい。」と招いた。初めて他人に使つた東京語が、喉へ支へ乍らも、とにかく滑かに出たのが嬉しかつた。

秋子ちやんはまだもじ／＼してゐた。それは羞恥の感情からよりも、寧ろ都會の女の兒が、本能的に持つ技巧かららしかつた。

「入つていらつしやい。」私はもう一度繰り返した。そして今度は我乍らまづい云ひ方だと思つた。

其途端に女の子の背ろへ、靜かな紫の影が掠めた。そしてそこへお下げに結つた、白い十六七の女の顏が浮び出た。私は面映く思ひ乍らも、その花のやうな顏を見定めた。整つた輪郭を一瞬に見て取つた時、彼女の眼はもう嫣然と笑ひかけてゐた。そして淑かな會釋をした。私も慌てて禮を返した。

「あの、御勉強のお邪魔を致しまして。――さ、秋子ちやん、お兄さんに御挨拶をしなさい。そしてもう彼方へ參りませう。」彼女は鈴を鳴らすやうに滑かに云つた。

秋子さんはもじ〳〵し乍ら、また默つて頭を下げた。そして後ろ向き氣味に姉の片手に縋つて、尻目に私を見返した。

「いゝえ、いゝんです。退屈して遊んでゐたんですから。」私はかう云ひ乍ら秋子さんの方を、もう一度目招きした。「ね、いゝから入つていらつしやい。」

秋子さんはそれには答へないで、姉さんの深紅の帶へ頰を擦りつけ乍ら、「姉ちやん、あちらへ行きませうよ。」と云つた　私は一瞬間この子の技巧が憎らしかつた。

「えゝ行きませう。又お兄さまがお暇な時に來ませうね。――どうも御邪魔しました。」と彼女は妹の身を引寄せ乍ら、襖を靜に閉めた。そして二人の梯子段を下りる、たど〳〵しい足音が遠ざかつた。ぼんやり見送つてゐた私の胸には、何だか春のやうな響が殘つた。――

それが澄子さんと會つた初めだつた。それから彼女は殆ど日曜毎に、いつもの通り遊びに來ると私の室へも訪れた。彼女は私の處に決して長くはゐなかつた。大抵は姉と二人ぎりで、女同志の低い會話をして歸つた。がその短い間でも、私には換へ難く貴い時になつた。そして偶々何かの都合で、一と日曜彼女が來ないと、堪らなく淋しい氣がした。

去年の受驗期は短かつた。そしてそれにすぐ不面目な失敗が結果された。あゝ、それに就ては、もう何も云ふ必要が無い。私はあの時、恥しくて澄子さんにも會はず、急いで故郷へ逃げ歸つたのだつた。あとから澄子さんの手紙が來た。默つて歸つた恨みや、決して一度許りの失敗に落膽するなと云ふやうな事が、妙に大人びた文章で書いてあつた。私はそれに幾度接吻したことか！　どんなに感謝したことか！　そして長い屈辱な家での蟄居の間、幾度それによつて慰められたことか！

何は兎もあれ此頃は、日曜毎には彼女に會へるのだ。

四

今日は三月一日で、一高に記念祭がある日だ。その盛況は兼々話に聞いてゐたが、もとより私は得意な彼等の、得意の絶頂にある有樣を見に行く氣などはなかつた。けれども一高出身である義兄が、どこからか入場券を手に入れて來て、姉や澄子さんが是非行くから、是が非でも私に從いて來いと云ふので、私もやむなく行つて見ることにした。

午後になるとすぐ、白金から澄子さんがやつて來た。彼女は盛裝してゐた。いつもより猶も美しいやうな氣がした。私は嬉しいやうな悲しいやうな氣持で、このきらびやかな彼女の裝飾を見た。彼女をかくまで入念に、化粧さしむる一高と云ふものを、私は讃嘆し乍ら嫉妬しなければならなかつた。

二人は姉の支度が出來るのを待ち乍ら、これから行く記念祭に就ての事を二三話し合つた。澄子さんはこんな事を云つた。

「來年は貴方に案內して頂けるわね。」

私は唾を吞んだ。「さあ、どうですかねえ。あてになりませんね。」

「大丈夫よ。きつと大丈夫だわ。」

私は答へなかつた。そして何だか胸を抑へられるやうな氣がした。つく〴〵去年入つてゐればよかつたと思つた。入つてゐれば、今日なぞは大手を振つて、かう云ふ裝ひを凝らした令孃を案內してやれたのだ。さうすればどんなに、澄子さんも喜ぶだらう。そしてどんなに友人た

ちや、羨望の眼を以て見ただらう。……

姉の支度が出來たので、三人は揃つて出掛ける事にした。初春の太陽は午下りながら、薄ぼけた靄をかぶつて天心に在つた。暫く戸外へ出て見ない中に、春はどこともなく地上に搖れ立つてゐた。記念祭にはお誂への天氣だ。これでは雜混み合つてゐるだらうと豫測された。

校門の前に果して人で一ぱいだつた。しかもその大半は着飾つた女だつた。併し見渡した所、澄子さんに優つてゐるものは餘り無かつた。自分は幾らか得意な氣がした。

腕に青色い布を卷いた委員が、「入れてやる。」と云はん許りの高慢さで、吾々の入場券を檢めた。

私は昨年の受驗以來、自分の受驗番號の出てゐない掲示を見て來て以來、初めて再びこの校門をくゞつた。

寮までの沿道には、教室の壁と云はず物置の上と云はず、あらゆる場所にビラが貼つてあつた。而してそれには色々な漫畫や、奇拔な文句で飾り物の廣告がしてあつた。無邪氣な諧謔を弄してあるのはよかつた。が中に「秀才」とか「健兒」とか云ふ露骨な自負を見ると、私は嘲り乍らも淋しかつた。澄子さんは一々「まあ。」と云つて見てゐた。私はそれを促し立てて寮の方へ歩いた。

南寮の入口で私の肩を叩く者があつた。驚いて振り向いて見ると、それは同じ級の田中だつた。田中はまんまと去年一部甲に無試驗で入つたのだが、メルトンの制服が新しい程似合つてゐた。彼の顏には抑へ切れぬ得意さが動いてゐた。

「よく來たね。一人かい。」彼は訊ねた。

「いや。姉たちと一緒だ。」

「さうか。それぢや僕が案内して上げようか。何なら僕の室で休んで行かないかい。」

「有難う。まあ好い加減に一廻り廻つて見よう。」

「さうかい。おや失敬するよ。もう少しすると西寮の假裝行列が出る筈だから、話の種に見て置いて呉れ給へ。奇拔なのがあるぜ。」

「有難う。ぢや失敬。」

何とはなしに私は彼を不愉快に感じた。それでから云ふと、すぐ待ち合してゐた姉達に追ひつくため急いで彼から立去つた。

「誰方。」と一緒になつた時、澄子さんが訊ねた。

「なあに去年推薦で入つた友達ですがね。あいつ自分で入つたやうに威張つてゐるんですよ。案内して呉れるつて云つたんですが、斷つてやりました。」

「あら、案内して頂いたらいゝぢやないの。」澄子さんの顏にはちらと不審が浮んだ。

「なあに大抵解りますよ。」私はかう云ひ切り乍ら、心では可なり不快だつた。

三人は南寮から見始めた。見物人は丁度出盛つてゐた。藤と櫻の造花を吊つた廊下は、押され乍らにやつと歩く程混み合つた。その中を姉が一番前に立つた。澄子さんが續いた。私は一番後から護衞のやうに從つた。三人は隔てられたり一緒になつたりして進んだ。

室々の裝飾は、豫期したやうな立派なものは少かつた。機智で鋭く手拔いた物なぞに却つて面白いのがあつた。「萬物は流る。」ベルグソン哲學の原理と云ふのに、部屋の障子が懸けてあるのや、「一夜開帝遊り作行」と云ふのに、藥鑵を暗い室の中央に逆にぶら下けて、見物人が索を曳くとスヰッチで豆電燈がつくのなぞが、その代表的なものだつた。又寮生活の實際を、幾らか誇張した飾り物として、汚らしい寢室の萬年床の枕許を、南京豆で山積させたのや、一向陵十二時と云ふ飛んでもない縮卷を、顯々に見せる趣向なぞは、屢々澄子さんに私を顧みて、「まあ。」なる嘆聲を發せしめた。

薔薇の廊下は暗くて見物人がもっと混み合ってゐた。殊にその中程の或る室の前では、その精巧なる飾物のために、人足が殊に停滯してゐた。それは工科生の考案らしく、「運轉手の夢」と題するものであった。小さい玩具の電車が、向ふの隧道の中から出て、そこの花野に敷かれた鐵軌を傳はって走る中、橋のない川に來かゝる。すると水中から突如として鐵橋が都合よくせり上がる。電車はそれを疾走して渡ると、今度は急な山にさしかゝる。けれども遂にその頂上に登り切って、それから更に其上へ出てゐる滿月の口の中へ飛び込むと云ふ仕掛だった。これは實によく出來てゐた。そしてそれは三分毎に發車するのであった爲、それを見るための人が、室前に押し合ひへし合ってゐた。

私たち三人も、そこで前へ進むことができなくなって了った。もう後ろへ退く譯にもゆかなかった。それ處か却て、後ろの人にずん／＼押しつけられて來た。私は澄子さんの直ぐ後にゐた。そしていつの間にか澄子さんに首を餘り近く見た。淡い髮の香りがそっと私の鼻を打った。私はすぐ間近に彼女の苦しさうな呼吸を感じた。

「澄子さん、苦しくはありませんか。」

「隨分混むのね。」彼女は顏だけ廻して答へた。

「はぐれないやうになさい。」

「まさか、でもはぐれちゃ嫌よ。」

私は偶然を裝ったやうにして、出來るだけ無意味に彼女の手を取った。彼女も默って取らせてゐた。私は自分の掌の中に、しっとりと汗ばんだ、彈力のある柔かいものを感じてゐた。人混みに中々動かなかった。彼女は何にも氣付かぬ如く、肩越しに「運轉手の夢」を覗き込んでゐた。そして身を動かす毎に、氣づかぬほど微かに手を握り返した。

さう云ふ中にも見物は、押され／＼て推移した。吾々はやっとその稠密な處を拔け出た。私は先刻と同じく不自然でないやうに、彼女の手を放した。先きに立った姉は、さっさと歩き出した。

一と通り室内を見物して外へ出ると、そこの廣庭には戸山學校の音樂隊が來てゐた。丁度聞き覺えのある「ドナウの流れ」を奏してゐた。三人はその方へ近寄って行った。私の心はいつになく浮立った。何だかすべてが自分のために、進行曲を奏してゐるやうに思はれた。東寮の三階で叩いてゐる相撲の太鼓も、入口の屋根の上に陣取って、傍若無人に蠻聲を發してゐる大學生の一群も、もう私の心には障らなかった。

吾々が歸途についた時には、まだ蕾の固い校庭の櫻の樹に、ぼんやり輝きかゝった春月が漂ひ殘ってゐた。

考へて見ると今日は、興奮と刺戟とを交互に受けた。家へ歸ってからは疲れてぼんやりした。けれども其底にはひそやかな幸福があった。そして興奮が澱のやうに殘ってゐた。

「勉強しなければならない。今年こそはどうしても入らなければならない。」と思った。ほんとに心からさう思った。

机に向ったら、いつもより頭が冴えてゐるやうだった。私は一高の記念祭に行った事を、改めて竊かに感謝したかった。

五

弟から手紙が來た。卒業試驗はもう濟んだから、卒業式が終り次第、すぐにもう上京したいと云って來た。私は何だか慄然とした。弟の卒業するのは知ってゐながらも、もうそんな時期に達したのかと思った。私はそれを若い次の時代の、吾々を壓迫して來る警告のやうに感じた。さうだ、年少氣鋭の弟たちが、此の四月から吾々の恐るべき競爭者として現はれ

るのだ。全く愚圖々々してはゐられない。何だか弟の上京を阻止したいやうな心持が、私の心の底にあつた。けれども返事にはさうは書けなかつた。此方の用意は整へて置くから、いつでも都合のいゝ時に、上京せよと云つてやつた。

弟はたうとう上京して來た。四月の初めで上野は櫻に埋れてゐた。群集はぞろ／＼街を通つた。停車場にもいつもより人が多かつた。中には花見手拭を首に卷いた陽氣な群も交つてゐた。世の中は今駘然と春めき立つてゐる。
――その中で私は着京した弟を迎へた。
薄暗い改札口に近く立つて、今着いた汽車から雜然と溢れ出た乘客の流れの中に、暫くぶりで弟の元氣な顏を見出した時、私は鳥渡の間涙ぐましい氣になつた。私が認めると殆ど同時に、弟の方でも私を見つけた。むつつりした弟の淺黑い頬にも、さすがに嬉しさうな表情があつた。
「どうだ元氣は。家では皆な壯健かい。」私はさう挨拶の代りに云つた。
「えゝ。」弟はから簡單に答へ乍ら夕暮れかゝつた場内の雜沓を、驚いたやうに見てゐた。

私はその田舍者らしい弟の樣子を、初めて兄らしい、先輩らしい感情で見た。
二人は荷物を受取ると、俥を雇つて千駄木の家へ向つた。俥は池の端を通つた。花曇りの空は暮れ早く、不忍池の水面には、花明りの處々した上野の杜からかけて、蒼茫たる色に蔽はれ乍ら、博覽會の裝飾電燈を夢のやうに映してゐた。去年の自分に引比べて、俥上の弟はさぞ心をときめかせてゐるだらうと思つた。
義兄の家では例によつて、初めての上京を祝ふ食卓が待つてゐた。去年は自分のために在つた。今年は弟のために設けられたのだ。私は妙な感慨を以て、眼に痛いほど白い卓布を、特別にかけた餉臺とその中央の花瓶へ、姉が趣味ありげに插した緋桃の小枝をぢつと眺めた。
義兄はいつもの通り快活だつた。姉は姉らしい溫情を、只管弟に見せようとしてゐた。
「健次さん．おまへさんは子供の時分から、きいゝんとんが好きだつたから、西洋料理とはつかないけれどわざ／＼わたしが拵へたのよ。」姉はそんな事を云つて料理を進めた。
兄は麥酒のコップを差出し乍らこんな事を云ひ始めた。「もう中學も出たんですから、一杯やつてもいゝでせう。兄の監督付きなんだから。」

ところが此兄貴至つて無精者でね。監督なんぞ迚も出來やしないんですよ。僕は全く無干渉主義ですからね。その代りあなた方が落第したつて、〈と云ひ乍ら私の方をちらりと見た。〉別に責任は感じません。が、まあ成るたけなら、しつかりやつて吳れるんですな。それは運不運はありますよ。けれども最善さへ盡せば、大抵うまく行くものですからね。さう云ふと少し失禮だが、まあ堪忍して貰ふとして、健吉君の去年の失敗なぞも、一つには運も惡かつたと同時に、力を出し切らなかつたせゐだと僕は解釋してゐるんです。」
私は何だか不快と恥辱から、何とか一言云ひたかつた。それで、「いや、それに元來頭も惡いんですから。」と付け加へた。
「いや、決してそんな事はない。僕の見る所に依れば、君たち兄弟はどちらも頭腦がいゝですよ。――殊に健次さんは何ださうですね、數學が得意だと云ふぢやないですか。」と義兄は再び弟に向つた。
「いゝえ。外のが出來ないんで、さう見えるだけです。」弟は謙遜めかして云つた。
「中學は何番で出たんですか。」
「怠けたので六番でした。」

一高等學校の志願學科は定まつてるんですか。何部です。」

「それが未だどうしていゝか解らないんです。やればどつち道二部か三部なんですが、叔父は家が醫師だから、何人醫者が出來てもいゝから、三部をやれと云ふんです。けれども兄さんも三部なんですからさう兄弟で三部ばかりやるのも妙ですし、どうしようかと迷つてゐるんです。」

「それもさうですね。」義兄は私の方へ相談するやうな視線を向けつゝさう云つた。

私は云つた。「それあおまへが醫者をやつて呉れるのなら、そつちの方はおまへに任して、僕は文科へでも行き度いんだ。さうすれあ僕も助かるよ。一體僕は哲學でもやれあ一番いゝんだからね。」私はいくらか棄鉢の氣味と、もとから若干の趣味を持つてゐる關係上、さう云つてみた。が、さうも出來ない事は解つてゐた。

「でも兄さんは是非三部をやらなくちやならないんですから、僕は別な方をやる積りです。高等學校だつて同じなのは厭でせうから、僕はどこか違ふ處を選ぶつもりでゐます。」

「それもさうだね。」義兄は當らず觸らずに相槌を打つてゐた。「が、まあその問題はいづれ二人で相談するとして、今日はまあ十分食つて呉れ給へ。疲れて腹が減つたでせう。」

「えゝ、澤山頂きます。田舍者ですから遠慮しません。

「その田舍者の中が花ですよ。學生も東京馴れるとお終ひです。――入學試驗を受けるのだつてさうですよ。都の風に染まぬ最初の年が一番緊張するんです。だから最初の年に入るのが肝要ですよ。でないと東京でぶら／＼遊んでゐる中に、都會風に染まるまいと思つても、知らず識らず影響を受けて、心に弛みが出來ますからね。」と私を顧みて、「健吉君なんぞはさうでもありませんがね。」とわざとらしく付け加へた。私はその取つてつけたやうな申譯に、却つて反感を覺えた。それで暫くすると默つて座を立つた。

今宵の歡待が、弟のためにのみ存在した事は、私とてもよく解つてゐた。弟を激勵する言葉が、直ちに僕を叱責する言葉となる、義兄の苦しい立場も解つてゐた。決して皮肉と取る氣はなかつた。けれどもたうとう不快の念には勝てなかつた。

私は一人で二階へ上つた。そしてもう閉てた雨戸を一枚開けた。冷たい夜風が私の額をそつと撫でた。空には薄ぼんやりした星が散らばつて、其下には東京の街明りが、どよめき乍ら映つてゐた。一二町先きで湯屋の煙突であらう、蒼い夜空にしつかり食ひ込んだ暗の直線の端しから、白い煙がとぎれとぎれに流れ消えた。凝つとそれを見詰めてゐる間に、私の頰には涙が流れた。……

弟は私と一緒に此の六疊に起臥する事になつた。二人は向うの隅と此方の隅に机を成るたけ離して据ゑた。夜は電燈の關係上、眞中に机を持ち寄つた。寢床を敷く時には狹いので、室の隅に押しつけた。

弟の机の上にある本と、私の机の上にある本とが、同じである事は淋しかつた。私はなるべく弟と違ふ學科を調べるやうに努めた。

二人は獨りでに競爭の形を取つた。少くとも私はさう感じた。私は自分の本を調べ乍ら、弟の勉強がどの位進捗したかを計つてゐた。そして弟があまり捗らぬ時は、ひそかなる安心をすら覺えた。

併し私自身は、一向勉強が進んではゐなかつた。毎日何となく頭が重くて、根氣が續かなかつた。焦れば焦るほど疲れて來て、終ひには頭腦がぼんやりして了ふ日が多かつた。是では

ならないと自分は覺悟した。そして強いて門に向つてゐたが、少しも頭が上つてゐる譯ではなかつた。夜はよく夢を見た。澄子さんの事を考へまいとしても、餘りに屢々考へさせられた。

　弟は俄に起り、よく勉強した。彼はもう幾何學を一と通り濟ました後、幾何問題集を何處からか見つけて來てやつてゐた。彼の片つ端からそれを征服して行く樣子は、傍から見てゐてもてきぱきしてゐた。私はそれを羨しく思つた。そして漠然たる脅迫を感じ出した。

　弟は私には平氣で自分の勉強をぐん／＼續けてゐる。それを見てゐると、私は嫉妬に似た恐怖さへ感ずる。何だか弟と同じ室にゐるのが、私には嫌で堪らなくなつて來た。

　ひよつとすると私は神經衰弱かも知れない。――

六

　弟と二人でゐるには、義兄の家の六疊は狹かつた。それに絶えず私には、弟と一緒にゐることが苦痛になつて來た。時には私は憎惡をすら感じた。私はたうとう何處かへ宿を換へようと決心した。宿を換へれば澄子さんと、會ふ機會が少くなると云ふ懸念が、幾分か私を躊躇させた。けれども彼女は大抵日曜日に來るのだから、其時に此方から義兄の家へ行けば會へると思つた。それで私はいよ／＼移ることに決めた。其時丁度水道端の西光寺にゐる松井が、隣室が空いたから來ないかと言つた。私はすぐ引移ることにした。義兄は「それもよからう。」と贊成して呉れた。弟は別に何とも云はなかつた。

　私は寺の部屋へ移つたら、いくらか勉強が出來るかと思つてゐた。けれども此處へ移つても、別に心が落着きはしなかつた。併し寺は閑靜だつた。室は南に開いてゐるので、植込の楓や椿の間を洩れて、夕日が障子に影をさした。縁側は廣くていつも冷々としてゐた。そこの自然石の沓脱から下りると、庭は水を打つたやうに濕り氣を帶びてゐた。どうかすると苔の香がした。私は疲れるとそこへ出て、冷たい空氣を吸ひ込んだ。

　偶々に本堂から、我々の世話をして呉れる年老いた寺僧の、讀經の聲が聞えて來た。

　―又ぢいやのおつとめか。―

　さう云つて吾々はそれをいつの間にか勉強時間の通報にした。

「おい、」――私は倦きる毎に、よく隣室へ聲をかけた。すると何時も松井の簡單な答が應じた。「うん――」

「勉強してるのか。」私は重ねて聞くのが常であつた。

「いや、ぼんやりしてるんだ。」

「おい、少し話でもしようか。」

　さう云つて私は隣室への中襖を開けるのだつた。が、話とは云つても、囚はれたやうに試驗の話にからまつてゐた。そして話した後で少しも快感は殘らなかつた。

　松井は高工を又失敗した許りの時だつた。が別に落膽してゐると云ふ樣子もなかつた。彼はもう落膽する氣力が無いのか、若くは慣れて感じる能力が無いやうにさへ見えた。私は彼から何らの刺戟も、何らの脅迫も感じなかつた。

　時には二人で數學の難問なぞを見つけて、競爭的に解いたりする事もあつた。すると大抵、私の方が早く考へついた。そんな時は何となく自信がついたやうな氣がした。併し松井を標準にしてゐる安心が甚だ危險なものである事は私も知つてゐた。知つてゐながら、知らず識らずに私はその自信にすら縋つた。

　或る時かう云ふ事があつた。松井が或る友達

の處へ行つて、幾何の難問を一つ聞いて來た。それは其數學に得意な友人さへ、解き得ずに苦んでゐたものだつた。

「どうだい。君も考へて見ないか。是が出來れば、數學の實力はもう大丈夫だぜ。」松井はかう云つて私を誘つた。彼の其の顏には、私も大方出來ないだらうと云ふ、侮りがあり／＼現はれてゐた。

「それぢや一つやつて見ようか。」私はさう云つて問題を取り上げた。なるほどどこから手を付けていゝか解らないやうな難問だつた。私は一人で自分の室へ來て、其午後中考へぬいた。勿論頭の重いのは癒つてゐなかつたので、久しく思考を費してゐると、たうとうボンヤリして了つた。そこでぶらりと散歩に出た。それでも問題は頭にこびり付いてゐた。一と通り江戸川端を歩いて、水道端から小日向臺へ上らうとした。其時寺へ歸る坂の途中で、ふと其解き方の端緒が浮んだ。自分は小躍りした。そして急いで室へ歸ると、新しい作圖を引いてやつてみた。やう／＼解けた！　私は急いで次の間に居る松井に呼びかけた。

「おい出來たよ。やつと考へついた。」

「さうか。どうやるんだ。」松井は別に驚嘆もしないで、さう云ひ乍ら入つて來た。

私は得意になつて説明してやつた。松井は、「うむ、うむ。」と云つて聞いてゐた。そして解き終つた時、「成程なか／＼面白いね。」と云ひ乍ら、まだよくは飲み込めてゐないらしく、作圖をよく見かう見してゐた。私の氣持はいつになく晴やかだつた。

その二三日後だつた。私は散歩の序に義兄の室に寄つた。弟は相變らずむつつりと、机の前に坐つてゐた。

「どうだ勉強は。盛んにやつてるかい。」私は訊ねて見た。

「えゝ。何だか此頃は少しだれ氣味で困ります。此間から一日十二時間時間割の日課を立てたんですが、なか／＼時間割通りに行かないんで、姉さんに笑はれました。精々やつて十時間ですね。」

「そんなにやれるものか。」私は少なからず驚き乍ら反問した。

「だつて六時に起きて夜の十一時までやつて御覽なさい。飯と散歩の時間をぬいても、正味十五時間はあります。だから十二時間づつやれない譯はないんです。」

「それはさうだね。」其間すつかり感心してやれれば大したものだ。」

「何しろもう十二時間位づつやらなければ、凡ての學科を二回見ることは[illegible]合ひませんね。」

私は又弟の無[illegible]な[illegible]を[illegible]した。彼の机上には[illegible]の本があつた。

「もう[illegible]は済んだのかい。」

「えゝ。」と[illegible]済みました。あとは[illegible]前に、アンダーラインをして置いた問題だけ、ずつとやれば大丈夫だと思つてゐるんです。

私は[illegible]い[illegible]、ほんとにそれだけの實力が弟にあるかどうか試してみたくなつた。其時ふと二三日前の幾何の難問が頭に浮んだ。

「僕は[illegible]二三日前にかう云ふ問題を聞いたがね。お前に解るかい。」

私はかう云つて、問題を説明した。弟は默つて聞いてゐた。そして別な紙へ自分で作圖をすると、鉛筆の端で頭の毛を無意識に叩き乍ら、遠い處を見るやうな眼をして、やつと二三分考へ込んだ。私は彼が出來ないのを望み乍ら、惡意を隱した微笑で待つてゐた。

二三分經つた。私はあく迄弟が、匙を投げて、此次迄に考へて見ませう。とか何とか云ふだらうと多寡を括つて待つた。五分[illegible]ほど經つた。私はもうさりげなく、そこにあつたユニ

すこの間を、見るともなく眺してゐた。すると突然弟は鉛筆を忙しく動かし始めた。そして輝いた眼で急に私の方を振り向いた。

「やつと思ひ付きました。形が變つてるんで解りませんでしたが、これは永澤の問題集に例題がありますね、あれの逆だつたのです。からやればいゝんぢやありませんか。」

から云つて彼は私に説明し出した。それは勿論私が考へたのと大差なかつた。が、もつと簡明で直截だつた。私は内心少からず驚いた。自分が三四時間も考へた處を、弟は五分ばかりで成し遂げた。私はふたたび眼前の實例に壓倒された。

私はすつかり氣消ちがして、弟のところから歸つた。

七

かう云ふ間にも、澄子さんの事は忘れられなかつた。

日曜日には、私もきつと午前から義兄の家へ遊びに行つた。そして午後から澄子さんの來るのを待つた。併しさう繁々、澄子さんの來る日のみ目がけて、千駄木へ行く事は氣がひけた。それで時々は他の日も訪れた。日曜日にも行き度いのを抑へて、三度に一度は我慢した。併しそんな日は家にゐても、少しも勉強が手につかなかつた。どうかするとかけ違つて、二度も續けて澄子さんに會へない事があつた。或る日は私の行き方か遲かつた。

「先刻まで澄子さんがゐたんだけれど、三時からお友達のお宅へ行くんだつて、一時間ばかりゐて歸つて行つたよ。」と姉は私を見て微笑み乍ら低くつけ加へた。「お氣の毒さま。」

「馬鹿な。――」私は紅くなつて物が云へなかつた。

「澄子さんは此頃健吉さんに久しくお目にかゝらないが、どうかしたかつて聞いてたよ。」

姉は私のぼつとなるのを面白がつて追窮するらしかつた。私は内心それが嬉しかつた。

「僕だつて此頃は勉強してゐるんですよ。」私はさう云ひ乍ら、今迄の不勉強を自分で恥しがつた。之からはきつと勉強しようと思つた。

姉は猶も續けて同じ話に固執した。

「だけれど健吉ちやんも氣をお付けなさい。あの子はそれあ無邪氣なんですから、誰とでもすぐお友達になるのよ。健次さんとだつて、もう兄弟のやうに仲がよいつてよ。」

私はどきりとした。姉の警告には私のぼんやり怖れてゐるものがあつたからだ。けれども私はさりげなく答へた。

「僕は別に何とも思つてやしないんですから、大丈夫ですよ。だから姉さんなんぞ、いくら冷かしたつて無駄です。」

姉は眼で笑つて答へなかつた。

實際弟と澄子さんとは、私が寺へ移つて以來、特に親しくなつたやうに、私には感ぜられた。併しそれを私は自分の僻みだと思ひ返してゐた。弟はいつも家にゐるし、私は外にゐるので、會ふ機會が自然弟の方に多くなると云ふ、位置の上からのみ生じた、何でもない親しさだと解釋してゐた。併し想はさう云ふ位置からのみ生ずる、とも思つた。そして少しは不安を感じてゐた。

二人の親しさを妨害する實例には、私も今迄一つ二つ出會つてゐた。

或る日の事だつた。私が義兄の家へ行つた時、澄子さんはもう來てゐた。そして彼女は弟の室に居つた。私が二階へ上つて行つた時、そこからは晴れやかな彼女の笑に混つて、弟の笑に濡れた聲が聞えてゐた。私は一種の嫉妬を感じて、急いで襖をあけた。すると彼等は急に笑を呑んだ。そして意味ありげに顏を見交した。

「何か面白い事があるんですか。」私は二人の間に割り込んで訊ねた。彼女は弟の机の右側に坐つてゐた。

「いゝえ、何でもないの。」彼女の答は素氣なかつた。

「だつて二人で笑つてゐたぢやありませんか。何かあつたんでせう。」私は追窮した。

「笑つてたつて何でもないのよ。ねえ健次さん。何でもないわねえ。」彼女は首を傾げて弟の顏を覗き込んだ。弟の顏には何となく滿悦の狀があつた。

「ほんとに何でもない事なんですよ。」彼は云つた。

「笑つて了つたら何だつたか、もう忘れて了つたわ。」さう云つて彼女は[illegible]と微笑んだ。

打ち見た所二人は、確に私の前で二人だけの秘密を樂しんでるかのやうであつた。私は嫉妬と共に、嫉妬に伴ふ自らの卑劣を意識した。それでそれ以上に追窮する勇氣が無かつた。其日彼女とは餘り多くを語り得なかつた。

又或る時はかう云ふ事もあつた。其日私は午後になるとすぐ千駄木へ出掛けた。彼女の來るのも大抵午過ぎだつたから、今日はゆつくり會へるに違ひないと思つて行つた。すると電車を下りてから、義兄の家の方へ曲る横町で、私は見覺えのある紺の日傘を認めた。それは遠くから此方へ向つて歩いて來た。初めは人違ひかと疑つた。が斜に傾げた日傘の下に、顏は殆ど隱れてゐるが、肩から下へかけての輪郭と、足どりには私の見逃さない彼女の特長があつた。私は遠くからそれを見つけると、動悸の高まるのを意識し乍ら、さりげなく歩き進んだ。五六間の處で向うも自分を認めた。すると彼女はくるりと後ろを振り向いた。そして後ろの誰かに相圖するやうな事をした。其途端に私は彼女の後から弟が困つたやうな顏で從いて來るのを見た。私は咄嗟にはつと思つて立ちすくんだ。全身の血が一度に心臟へ衝いて來た。が其次の瞬間には、强ひて作つた平靜の中に歩み寄つてゐた。三人は——互に向ひ合つて歩きつゝ、間隔を狹めてゐる私と彼女と、一二間遲れて從いて來た弟とは、彼女を中心に道の中央でひたと顏を合せた。初夏の日はひつそりと光を降らして、土には物の影が濃かつた。

「もうお歸りですか。」私は聲を落着けて彼女に訊ねた。唇が獨りでに痙攣つた。

「えゝ、今日は朝から行つてたの。」彼女はいつものやうに平然と答へた。「それに今日は家に用があるのよ。だから歸らうと思つてゐた處へ、健次さんが買物に出ると云ふから、そこまで送つて來て貰つたの。——だけど健次さんは嫌な人よ。わざ〱私を送つて來るつて云ひ乍ら、戸外へ出ると後から離れて歩くんですもの。」

「一緒に歩くのは[illegible]ですよ。知つた人に會ふといけないから。」弟はもつと無邪氣に云ひ譯した。

「どこまで行くんだ。」私は弟に訊ねた。それは思はず詰問するやうな口調だつた。

「そこの通りまで。」

「さうか。ぢや行つておいで。——それぢや澄子さん、左樣なら。」私は胸でわく〱し乍ら、さりげなく二人に一揖した。

「左樣なら、又今度の日曜にね。」澄子さんは鳥渡甘えるやうに傘の中の首を傾げた。

私は二人を後に歩み去つた。が其足どりは性急だつた。眞晝の人通りの多い街中で、胸の中は嫉妬に充ちてゐた。私はかつとした日の光の外、他の何物をも見なかつた。

義兄の家に着いた時は、それでも幾らか氣が靜まつた。そして姉の話を聞くと、すつかり平らかになつて了つた。姉は私の顏を見ると云つ

た。
「今そこで澄子さんたちに會ひやしなくつて。」
「えゝ、會ひました。弟と一緒でしたよ。」
「さう？　ぢやもう健吉さんに言傳をしなくてもいゝわね。澄子さんから聞いたでせう。」
「いゝえ、何も聞きませんでした。道端で會つたんですもの。――一體どんな言傳です。」
「此次の日曜にね、お暇だつたら家庭博覽會へ連れて行つて下さいつて。――今日は會はないで歸らなくちやならないから、是非私にお願ひをして呉れつて事だつたわ。」
「僕にですか。」私は擽られてるやうに感じ乍らも、内心の喜悦を思はず聲に出した。
「えゝ。一日位暇を作つて呉れてもいゝでせう。そんな暇は無くつて。」
「さうですねえ。そんな事をやつちやゐられない大事の場合だけれど、お伴させて貰ふとしようか。」私はすぐに落城してしまつた。
弟はすぐに後から戻つて來た。そしてあの後、別に彼女と意味のある時間を過ごしたらしくも見えなかつた。私は先刻の疑惑を解いた。しかも其姉妹の當の相手が弟であるだけ、心中甚だ恥しいものがあつた。
私は彼女を疑ふまいと歸途に決心した

八

博覽會行きの日が來た。私は理髪店へ行つて髯を剃つた。そのあとは何となく爽かだつた。そして自分乍ら云ふのも恥しい程、自分の顔に信頼を感じた。晝迄の少しの間、本を取り上げてみたが手につかなかつた。
午後になるといつもよりずつと早目に千駄木へ向つた。格子戸をあけるとそこに見覺えのある下駄があつた。澄子さんはもう來てゐた。
「今日行つて下さるんですつてね。有難う。」
彼女は私を見るとさう云つた。何でもない言葉だが、私にはその感謝が心から嬉しかつた。
姉は支度の最中だつた。弟が二階から下りて來た。彼は初めから行かないと云つてゐた。
「健次さんはほんとに頑固なのよ。お姉さまと二人でいくら勸めても、どうしても行かないつて聞かないの。半日位遊んだつて、何でもないんだのに。ねえ、健吉さん。」
「さあ。――」私はわざと首を傾げた。
弟は又澁い顔をした。僕は時間が惜しいんで行き度くないんぢやないんです。行つたつて面白くないから行かないんです。
「どうして面白くないの。」
「どうしてつて、面白くないから面白くないんです。家庭博なんて、女子供をだますだけぢやありませんか。」
「どうせさうよ。だけど面白くない處へだつて、行つて下すつてもいゝと思ふわ。」
「まあ御免を蒙りますね、僕は。――」
弟の言は恰も私を嘲つてるやうにも取れた。私は鳥渡急所に觸れられて、少し癪にも障つたが、それよりも大きな喜悦の手前、何ともなかつた。今日は自分の方が勝利者だと思つてゐたからだ。
そこへ姉は支度が出來上つて出て來た。弟を殘して三人は上野へ出掛けた。天氣がうつすら晴れてゐたので向うまで歩いてゆくことにした。私は若い女の歩調に合せ乍ら、着飾つた姉たちを見て通る行人の視線を一寸樂した。同時に伴者の幸福、私は誰か知つた人が、見て呉れればいゝとすら感じた。
私と澄子さんとの間には姉が入つた。それで道々彼女とは多く話さなかつた。
季節外れではあつたが、晴れた日曜だつたので、會場には可なりの人出があつた。私は彼女らのために、切符を買つてやつた。
會場内はいつもの博覽會の通りだつた。只化

粧品小間物類の陳列棚が、殊に色彩を濃くして並んでゐた。女たちは初めから丹念に、一々硝子戸に觸れる許りにして覗き込んだ。私は後から促し乍ら批評めいた事を云つた。彼女らは人形のある處へ來ると、「まあ。」と云つて立留つた。與眼鏡は殊に彼女らを永く引きとゞめた。私も屢々それらの批評を求められた。私は仕方がないから、一々の品を澄子さんに似合ふか似合はないかで評價した。

場内を半分だけ周つたら、さすがに興味を湧かした女たちも疲れて來た。そこで中庭へ出て、精養軒の出店で紅茶を飲んだ。それから今度は、澄子さんの發議で、餘興館に入つた。

餘興館には活動寫眞と、天洋一座の奇術がかゝつてゐた。吾々が入場した時は、丁度奇術が始まつてゐた。私たちは後ろの方の空席を選んで、腰を下ろした。姉が先きに立つて入つた。私は一番後だつた。それで腰をかけた時、澄子さんと私とは並んで了つた。

舞臺には燕尾服を着た男が、退屈し切つたやうな顔に薄い笑を浮べて、奇術を弄んでゐた。それからお定まりの赤い球を指の間で隠見させた。その後には[illegible]の服を鳥のやうに着込んだ女が、卓の上に空の鉢を載せ、その上に覆ひをしてから、短銃をどんと放つた。鉢の中からは生きた鳩が、眼をきよとつかせ乍ら羽搏き下りた。

澄子さんは短銃の音に大仰な驚きを見せた。そして私の方を振り向いて、嫣然と笑つた。二度目の短銃からは耳を蔽うた。彼女はよく奇術師の片言半語に笑つた。笑ふ毎に彼女の體の動搖がすぐ傍の自分にも傳はるやうであつた。或時は肩がつき當つた。鋭い[illegible]刀を以てそれを撥ね返した私の肩には、夢のやうで疼く氣がした。どうかした拍子に、彼女の髪は可なり私の眼近へ來てゐた。髪の淡いジャスミンの香がそつと私を掠めた。

場内は電燈が光り輝いてゐると云つても、どことなく暗かつた。私はゆくりなくも、記念祭の日の出來事を思ひ出した。私は眼では見なかつたが、私の左手から三寸と離れない處に、彼女の手が置いてあるのを知つてゐた。私はそれにムヅ痒いやうな牽引力を感じた。「不良少年の眞似をするな。」と耳もとで誰かが囁いた。が、「今だ。又とない機會だ。」と何ものかが心の底で囁くのも聞いた。私はもう舞臺を見てゐ乍ら、奇術は見なかつた。たうとう今だ。又とない機會だ。」と云ふ囁きの方が勝つた。私はそつと手をやつて、一二度偶然のやうに彼女の手へ觸れた。そして三度目に思ひ切つて、闇に彼女の甲を緩と握つた。が、彼女の柔かい割合に冷たい手が、私の掌の中に存在してゐたのは、僅か數秒を出なかつた。彼女は舞臺を見てゐた目を、急に咎めるやうに私の方へ振り向けた。私は俄く逆正面を見乍ら、その動作をすつかり感じた。そしておやと思つた。彼女は一寸間憚るやうに私の顔を覗いて、そしてから急に自身の手を引いた。すべては瞬息に消えてゐた。私は云ひやうのない汚辱と、苦痛とで顔が火照てるのを意識した。彼女はそれつきり私の傍へ手をよこさなかつた。私はそれから一刻もゐたゝまれない心持になつた。

暫くすると姉が出ようと云ひ出した。私は贊成した。澄子さんはもう少しゐたいらしかつたが、拒みもせずに立上つた。三人は外へ出た。

私は澄子さんを見ないやうにしてゐた。

姉たちはもう可なり草臥れてゐるので、見物した館内をざつと見て廻ることにした。私は背をそむけて後から從いて行つた。ざつと見ると云ひ乍ら、彼女らの足は、[illegible]しい女[illegible]の前で引き止められた。或る文房具店の出店に在つた。

彼女はそこをちらと見ただけで一旦行き過ぎたが、澄子さんは何と思つたか、「鳥渡待つて頂戴。」と云つて引き返した。

「買ひ物ですか。」私たちもさう事なしにそこの店頭へ戻つた。

「えゝ。健次さんが一人で家にゐるのが可哀さうだから、何かお土産を買つてあげるのよ。姉さん、持つて行つて上げて頂戴。」彼女はかう云つて、煙草模様の燒畫をした、木製の筆入れをあれかこれかと選んでゐた。

私は更に一つの苦痛を受けた。そして此時ばかりは心から弟の存在を呪つた。けれどもそれを押し隱して、おつと平氣を裝はなければならなかつた。

「これがよくはありませんか。」私は手許にあるのを取上げて見たりした。

「こつちの方がよくつてよ。」彼女は私の薦めるのに目も吳れず、自分で選んだのを買ひ取つた。

三人はやうやく歸途についた。

歸途も、私は嘲るやうな彼女の冷たい眼を感じた。私は此上の苦痛に堪へなかつた。それで千駄木の家の前まで來ると、二人が何とか云つて止めるにも拘らず、一人別れを告げて立去つた。私は泣かん許りだつた。

今日の出來事は私に、自身の卑劣な行爲に對する憤慨と共に、云ひやうのない失望を與へた。あの記念祭の日の、樂しい記憶は悉く拭ひ去られて了つた。彼女の私に對する好意に就ての唯一の根據は、全く根底から覆された。この深い悲みを抱いて、一人とぼとぼ寺に歸つた時、私はつくづく行かなかつた弟の幸福を羨んだ。弟の前で筆入れを出し乍ら、快活に今日の話をしてゐる澄子さんと、むつつり微笑を湛へて、嬉しげに聞いてゐる弟の光景が目に見えるやうに心に浮んだ。私は慌ててそれを消さうと頭を振つた。

すつかり銷沈して寺に歸つたら、松井が隣りから聲をかけた。「どうだつたい、今日の首尾は。」松井は幾らか私の口から事情を知つてゐた。

「Bad, worse, worst だ。」と私は嘲るやうに聲を吐き出した。「こんな事なら行くんぢやなかつた。宿で英文法でも見てゐた方がよかつた。」

「兎角戀愛と試驗は兩立しないさ。」柄にもなくそんな事を云ふ松井も、私を嘲つてゐるとしか思へなかつた。私はもう云ひ返す力もなかつた。そして頭をかゝへて机に向つた。

もうかうなつては、いよいよ勉強に沒頭するしかないと決心を固めた。とは云へ此の頭の調子では、これから先きが思ひやられた。あれを思ひこれを思ふと、只暗澹たる前途があるのみだ。――

九

もう六月に入つた。愈々試驗期は近づいて來た。今日は受驗の名票を出しに行く日だ。私は三部の甲を志望した。弟もたうとう一高に決めた。そして相談の結果二部を志望する事になつた。弟は實は三部を受けたいらしかつた。が、それでは私と一緒になるので、高等學校を違へるより外はなかつた。同じ一高に入るとすれば、部を變へるより外はなかつた。そこで彼は遂に、一高を選んで二部に行く事に妥協したのだ。

弟はいくらか不平らしかつた。兄に進路を塞がれたと思つてゐるらしかつた。けれども又私から云はせれば、弟に他の高等學校へ行つて貰ひ度かつた。入るにしても入らないにしても、一高に、東京に、此處にゐて貰ひ度くなかつた。が、まさかに兄の權威を濫用して、さう迄要求する事は出來なかつた。

弟の勉強は着々進んでゐるらしかつた。ひどく自信があるやうだつた。顧みて自分はちつとも自信を持ち得なかつた。

私と弟と別々に名票を出しに行つた。番號の早い方がいゝと云ふので、私の行つたのは朝早くだつた。けれども門衛の處で渡された順番札は、もう二百人を越えてゐた。話によれば夜の明けぬ中から、開門を待つてゐる受驗生もあるとの事だ。私は彼等が如何に死物狂ひであるかを、再び事實に於て知つた。自分なぞはまだ、勵精が足りないとつくづく思つた。

古い煉瓦作りの本館の横に、名票の受附所はあつた。そこには事務員と小使とが、粗末な机を前に控へてゐた。吾々が一生の運命を踏み出す、第一關門の關守にしては、彼等は餘りに貧弱だつた。それにも拘らず彼等は怖ろしく見えた。小使は受驗用の寫眞を取ると、同型に揃へる爲、遠慮なく厚い臺紙の端を截ち落し乍ら、

「はゝあ三部だね。しつかりしなくちや駄目だよ。今年は殊に三部志望が多いから、此分ぢや十五人に一人位の割になるかも知れない。去年は十二人位だつたが――」などと云つた。

私はすつかり此の男に嚇かされて了つた。

受驗番號は一二九番だつた。何だか幸先のいいやうな番號のやうにも考へられた。去年は偶數の番號で失敗した。今年は奇數なのが、その反對である豫示だと思はせた。それに易の方ですべての數の根本とする、3で割り切れるのも緣起がよかつた。

私はぼんやりそんな事を考へ乍ら、歸りかけた。すると後ろで大聲に、「おい久野君！」と呼ぶ人があつた。振り返つてみると、それは遊蕩兒の佐藤だつた。

「やあ、君もか。」私は先日彼を新花町の下宿に訪ねた時の不快なぞは忘れて云つた。こんな人でも何だか同志に會つた時の、賴みになるやうな嬉しさを感じた。

「此間は失敬した。少し出鱈目たつたのでね。が、もう此頃はすつかり改心して、此通りさ。」

「君も此處をやるんだね。」

「どうせ失敗るんなら、一高で落ちたと云ふ方が人聞きがいゝからね。」

「それにしてもよく早く來たものだね。」

「まあ名票を出す位は、人並な事をやつて置かなきやあ。――時に君は何部だい。」

「三部だ。今年は馬鹿に人數が多さうなので參つた。」

「さうか。まあしつかりやるさ。僕はなるべく人數の少い方と思つて、一部丁をやつたのだがね。それでももう三十八番だ。」

「僕の方は百二十九番だ。驚くね。」

「それでも君たちの方では、番號が早い方だらう。――どうだい、是から行つて、湯島天神に居る易者に番號を占つて貰はうぢやないか。よく當るつて話だぜ。」

「厭だ。もし駄目だなんて云はれて見給へ、その氣になつちまふぢやないか。」

「ぢや僕の家へでも來ないか。偶には遊んでもいゝだらう。此間は失敬したから、今日は名譽回復の意味で歡待するよ。[illegible]何集ぢやないが、僕も hospitality itself になるよ。」

「今日はよさう。大切な日なんだから。それに此頃は頭腦が惡くて、少しも勉強が進まないんだ。此分ぢや七月まで徹夜したつて一と通りやれさうもないよ。」

「君のなんざ驀進だらうが、僕は正直正銘に今日から始めるんだ。これで受ける氣になつてるから不思議だよ。」

「僕だつて全く同じさ。」

私はかう云ひ乍らも、こんな人を標準にするのは馬鹿だと知りつゝ、相手が不勉強なのに安心した。そして話してゐる中にいつとなく、氣

晴れやかになつた。
二人はこんな話をし乍ら、校門を出た。佐藤は共に相手がないかして、頻りに私を下宿へ誘はうとした。が、さすがに私も此上行く氣はなかつた。
「まア試験でも濟んだら、一つゆつくりやつて來給へ。約束の面白い所へ案内して貰ふかな。」私はもとより行く氣はないので、皮肉らしくこんな冗談を云つた。
「するとも、喜んで東道する。及第したら祝宴、落第しても自棄酒。どつち道連れて行くから覺悟し給へ。」
彼はかう云つて笑ひ乍ら別れて了つた。
名案を出して了つたからには、もう受験も愈々實戰行爲に入つた譯だ。けれども私は相變らず、はつきりした勉強が出來なかつた。机にだけは確と終日坐つてゐた。が、いら／\と焦つて許りゐて、いくらか進むには進んでも、記憶する傍から忘れて行つた。それでも一と通りは調べなくちやならんので、本の上へ眼だけは走らせてゐた。
澄子さんの事は思ひ出すまいとしても、動もすれば、めいた夢の樣が、本堂の軒に立つ樣な夕方などは、暗澹たる心の中に思ひ出された。思ひ出される毎に、只管勉強で打消さうと努めた。そして未だ絶望はしなかつた。試験さへ過ぎて了へば、待つてゐる中に又どうにかなると思ひ直した。そしてひたすら勉強に沒頭した。
さうかうしてゐる中にやつと、精神の集中が出來だしたやうに感じた。毎日の勉強が累積されて、兎にも角にも落着いたのだ。この頃は此調子ならと思つて氣を取り直した。
けれども、けれども、もう六月も末に近かつた。……

†

豫期はしてゐても、七月の末やらが餘りに早かつた。そして今日では試験までに、もう一週間しかなくなつて了つた。もう泣いても吠えても、追ひつきやうはなかつた。私は觀念した。それでも兎に角一と通り調べ終へたのが心頼みだつた。
同宿の松井は、二三日前に金澤へ出發した。彼は今年は四高を選んだ。彼がたうとう四高を選んだ心持は、私にも涙ぐましい程よく解つた。
「僕も今年は都にゐたゝまれないよ。」
近處の蕎麥屋へ行つて、二人きり心ばかりの訣別をした時、彼は悲哀に滿ちて云つた。「そこへ行くと君はまた、一高を受ける勇氣があるだけでも偉い。」
「僕か。僕のはデスペレートな勇氣さ。」
私はかう吐き出すやうに云ひ乍ら、自分も二高へでも落ち延びればよかつたと思つた。自分を冥々の間に東京へ引き留めたのは、實は全く幻影に過ぎぬかも知れない、澄子さんとの戀だと思つた。そして今更それを悔いたが、かうなつては仕方がなかつた。――かくて都を落ちてゆく松井も、都に踏み止まる私も、互に暗然として二三杯の盃を口にした。二人はちつとも醉はなかつた。
松井が發つた後は淋しかつた。梅雨の前後の穏かな日が四五日續いて、薄黄いろい夕日が窓を斜に染めた。朝夕の寺の看經が、壁を傳うて響いた。寺は丸で深い沈默が在つた。街の音響に、そこの若葉の植込に吸はれて、此方へは入つて來ないやうに思はれた。時々稀でない小鳥が來て、そこらの枝と僅かな空氣を動かし去つた。その後にはたゞ、夏の初めの白墨の粉のやうな日の光が、ちら／＼ちら／＼と降るばかりだつた。

じたよ。」
「そんな呑氣さぢやないんだよ。全く今年は投げてるんだ。」
「君の弟さんも一高だつてね。弟さんも間違ひなからうつて、あの同期生達が云つてるから、兄弟揃つてパスすれあ、ほんとに一門の光榮だね。さぞあの人も喜ぶでせう。」
「馬鹿な！」私の心は暗くなつた。そして惡意とも好意ともつかぬ此男の揶揄に堪へられなかつた。
丁度その時誰かが後ろの方で、
「あゝしまつた。又あの大事な公式を忘れて了つた。」と云つた。見ると中學時代から剽輕者で通つた文科志望の佐々木だつた。
「何だ。どの公式だい。」
「a+bの二乘の公式さ。」澄まして彼は云つた。
皆は哄笑した。
「$a^2+2ab+b^2$ これでいゝんだつたかなあ、何だかさうぢやないやうな氣がするんだ。ほんとにそれでいゝんだつたかなあ。どうもどこか間違つてゐるやうな氣がしてならない。」佐々木は猶も眞顏で云つてゐた。
「全くそんな氣もするな。隨分しつかり覺えた積りでも、何だか覺え違ひのやうな氣がするよ。だから俺は、入學試驗なんて厭だと云ふんだ。」
誰かがこんな相槌を打つてゐた。
そこで又話は試驗の事に移つて、去年やら一昨年やらの失敗談、問題の豫想などが賑しく談話された。私は默つて聞いてゐたが、心には先刻の傷がまだ殘つてゐた。
その中に音頭取りの下岡が時計を見て、「おい、もうあと十五分の壽命だぜ。そろ〳〵教室へ入らうか。」と云つた。
「それぢや屠所に曳かれて行くかな。まさに斷頭臺へ上る思ひだね」佐々木は自棄の快活さで應じた。
私も便所へ行つて、それから指定の教室へ入つた。例に依つて分館の教室は暗く汚かつた。去年で馴れてゐるので、出入にはさう慌てなかつた。ふと私は弟はどうしてるだらうと思つた。
机に坐つてそはだつ心を鎭めてゐると鐘が鳴り響いた。私の心臟は再びどき〳〵打ち始めた。
試驗官が入つて來た。去年も見覺えのある頭の禿げた眼の大きい、人の好ささうな老敎師だつたが、それでも何となく怖かつた。何でも體操の教官らしく、吃驚する位の大聲を出した。去年はそれにひどく脅かされたものだ。
試驗官は例によつて、先づ受驗寫眞と實物とを見比べた。受驗生は見られる時に、誰も妙に緊張した顏を作つた。試驗官は薄笑を浮べ乍ら、さつさとそれを見て通つた。何だか人を見るよりも、物を見ると云つた樣子が、私には可笑しく感ぜられた。
それが濟むと試驗問題が配布された。私は待ち兼ねて受取ると、ずつと問題に目を通した。幾何は大抵既知のものらしかつた。が代數は、心配してゐた代數は、各個に戰へ乍ら問題を讀むと、さあ、一つも知らない物許りのやうな氣がした。私は尠からず慌てた。これではならないと氣を落着けて、もう一度讀み返したが、解りさうも無かつた。その中に時間がどん〳〵經つて行くやうな氣がした。それで先づ幾何の方から取りかゝつた。幾何は幾少の困難にぶつかりつゝも、三題ともやうやく出來た。ほつとして時間を見ると、それはもう半ば近くまで過ぎてゐた。
私は再び代數の問題を取上げた。すると今度はやうやく三番目の問題が形こそ變れ心覺えがあるのを發見した。それで先づそれから手を

つけた。手をつけてみると、緒口から毬が解けるやうに、いつの間にかそれからそれへ出來て了つた。私はそれに氣を取り直した。そしてもう一度一番から熟考し始めた。すると可笑しい事には、一番もふと解法が思ひついた。そして思ひの外簡單に答が出て了つた。二番も、よくよく見ると何でもない二次方程式の應用問題だつた。いくらか計算に狼狽したが、やがてそれも出來かゝつた。私は再びほつとして時計を見た。時間はいつの間にか迫つてゐた。代數はあともう一題あつた。それも難問らしかつた。あと二十分では覺束なかつた。私は慌て切つて最後の努力をそこに集中した。今度はさう容易には行かなかつた。愚圖々々してゐる間に、五分經つた。試驗官はあと十五分と云つた。もうそろ／＼立つて答案を出す人もあつた。私は何かぶつかるだらうと思つて、色々な方面から出鱈目な解き方をやつて見た。ふといつか松井が、これに似た問題を持つて來たのを思ひ出した。がその解法をいくら考へ出さうとしても、うまく浮び出なかつた。五分は瞬く間に過ぎた。私は下腹のあたりが、わく／＼して來るのを感じた。一題、たつた一題の處を白紙で出すのは殘念だ。がいくら焦慮しても、焦慮するだけ駄目だつた。五分は又經つた。試驗官は大聲で「もう答案を出す用意をする。」と注意した。私は無反應にそれを聞いた。もう絶望だ、がもう一度未練を以て見直した。其時不幸にも餘り遲く、私はふいとあれではあるまいかと云ふ解法が浮んだ。急いで式を立てた、式はうまく立つた。更に慌てた喜びの中に、私は急いで計算にかゝつた。すると其中途で、鐘が鳴り渡つた。萬事は休した。私はどうしても未完成のまゝ答案を出さねばならなかつた。

教室を出ると、緊張のあとに來る放心狀態の眼に、外の日が餘りにぎら／＼してゐた。私はすつかり首垂れて歩いた。心の中は殘念で滿ちてゐた。ほんとにもう五分間早ければと思ふと、その五分間が或ひは運命を支配するかも知れんと思ふと、「私の遺憾は胸の中で湧き返つた。が、今となつてはもう仕方がないのだ。

校門を出ようとして、ふと前を見ると、例の遊蕩兒の佐藤が、常の通りに平氣な顏で歩いてゐた。私は誰でもいゝから人を捉へて、自分の殘念を訴へたかつた。

「おい佐藤君。」私は呼んだ。「どうだつたい今日の試驗は。今朝はみんなのゐる處へ見えなかつたぢやないか。」

佐藤はにや／＼と笑つて答へた。「相變らずだ。今朝ももう少しで遅れる處だつた。かう云ふ受驗生も困るよ。早く出たつて仕方がないから、試驗場にだけは時間のある限りゐるがね。當つてゐるゐないは別として、答案もどうかかうか書くがね。僕のやうな受驗生であるとだからなあ。――ところで君はどうした。」

「時間がないので、題は半分を書いただけだ。あとはどうかかうか行つたつもりだが。僕はもうすつかり悄氣て了つたよ。」

「贅澤云つてらあ。一題位で悄氣るなんて。あとが當つてれあ大丈夫ぢやないか。これからさ、うまく行けば、及第疑ひなしだ。前祝ひに僕に奢つて呉れてもいゝ位だよ。」

「馬鹿を云ひ給へ。少くとも數學が全部出來なくちやあ、僕の方は駄目らしいよ。」

「だつて去年山下は一題白紙で出したさうだが、入るには入つたよ。尤も入つてから胃腸になつて、死にさうだと云ふんだから、羨みもしないがね。」

「さうかい。あの山下がかい。」私は病氣の方に事よせて、試驗の方もよく聞きたかつた。

「だから焦つてゐるには及ばないさ。」佐藤はわざと嘯いた。そして前の如く又私を誘つた。

う姉さん、一つあなたから澄子さんのほんとの心持を聞いて、向うへ話して下さる譯には行かないでせうか。——僕は浮氣やいたづらで、こんな事を云つてるんぢやないんです。眞面目で云つてるんです。だからどうか姉さんも、本氣になつて助けて下さい。お願ひします。ほんとにお願ひします。」私は興奮に釣られ乍ら、涙を流して一氣に云つた。

姉は當惑さうな色を浮べて、默つて俛首れて聞いてゐた。そして長い間考へ込んでから顔を上げた。

「その問題はね、健吉さん。」と姉の言葉はなぜか涙聲で濁つた。「それは私も少し前から考へてゐました。決して私も惡いやうにはしない積りでしたよ。今だつてあなたの心持にはほんとに同情してゐます。けれどもねえ健吉さん、わたしも世間並な事を云ふやうだが、いかにもまだあなたの身には早過ぎますよ。これが大學へ入つてからとか何とか云ふんなら、まだしも話ができますけれど、何分まだあなただつて入學試驗を受けてる身ぢやありませんか。でもそんなに思ひつめてゐるんなら、ようござんす。せめて入學試驗の結果が解つて、高等學校へちやんと入つてからになさい。そしたら私も[illegible]て見ませう。でも[illegible]だけ[illegible]力[illegible]——入學試驗の結果[illegible]ば、[illegible]ぢやありませんか。——兎に角[illegible]私の願一つに收め[illegible]して下さい。そ[illegible]いゝでせう。ね、さ[illegible]して下さい。私[illegible]よくつて解て？」姉の言葉に少しも不道[illegible]な[illegible]つた。

から云はれると私は、恥しさ、嬉しさと氣遣はしさの中に、たゞ[illegible]頭くの外はなかつた。二人はその後永い間、兄でも云ひ出した人のやうに、ぢつと默つて坐つてゐた。

義兄の歸りが遲い[illegible]例の日だつた。弟も歸つて來なかつた。家の中を靜に夕暮が滿たして來た。私も歸らうとしたが、姉は特に御馳走すると云つて私を引き止めた。たうとう夕飯を食つてから歸途についた。

戸外へ出てみると、雨催ひの空は暗かつた。[illegible]は何とも云へぬ興奮に燃え立ち乍ら、その暗い中をずん／＼歩いた。いつの間にか雨が落ち始めた。私はこの熱い頭を冷すやうな、眞夏の夜の雨に濡れそぼちつゝ、たうとう寺まで歩いて歸つた。

今はもう恐縮と期待とを以て、只管發表が待たるゝばかりだ。……

十二

待ちに待つたけれども、又間遠かれとも願つた發表の日は來た。朝起きるとから私の心は、希望と危惧とで湧き立つてゐた。動悸が昂つて飯も喉へ通らなかつた。

私はわざ／＼見に出掛けるのが怖かつた。が、見に行かずに居られなかつた。

朝一二時間、愚圖々々してゐた。愚圖々々してゐる中に、誰かが來て結果を知らして呉れさうな氣がした。が、誰も來る樣子はなかつた。たうとうその中に、かうしてどつちともつかず懊惱してゐるのに堪へられなくなつた。それでいつそ一と思ひに、運命の決着を見て了ふ方が、感情の解放を得る唯一の道だと思ひ立つに至つた。

十時頃、思ひ切つて學校へ出かけた。本郷通りを上つて行くと、向うからぞろ／＼受驗生の群がやつて來る。彼等の中の或る者は、抑へ切れぬ嬉しさで、眼の緣をぼつと赤らまし、聲高に話し合ひ、又首を高くもたげて歩いてゐた。そしてその他の大多數は、何かの不正事を發見して來た、憤つた群集のやうな渋面を作つてゐた。中にはわざとらしい快活さで、自嘲の

向つた。

發車までには、折惡しく二時間ほど間があつた。けれどももう私は、何處へも出かける氣力はなかつた。やつと、待合所の一隅に腰を下ろして、俛首れ切つて待つてゐた。……

たうとう私は汽車に乘つた。八ヶ月前私の希望と光明とを乘せて來たその同じ汽車が、今は失意と暗黑とを載せて、北に發つた——

郡山を過ぎる頃から、窓外は蒼茫と暮れかかつた。そして中山あたりの山路にさしかゝると、出たばかりの月がほの明るく車窓を染めた。山潟近くなると、四圍はすつかり夏の匂はしい月夜だつた。猪苗代の湖景がもう畫のやうに想像された。

私はふら〳〵と山潟で下りた。そして暗い驛路をぬけて、湖の方へ歩いて行つた。闇にかたまつた家々が途斷れて、大きな土堤の上に出ると、そこにはもう、音もなく廣い湖水が面を延べてゐた。

月の光は、靜にたゆたひ落ちて、向うの山々の容を消した。水はひたすらに渺漫と湛へて、僅かに岸邊を波立たすばかり。搖れうつる灯もなく、影を曳く舟もない單調な湖面は、涙に曇つた私の眼に、悲しみに滿ちた私の心に、和らぎを與ふる夢だと思はれた。

私は土堤に腰を下して、やつと水面に眺め入つた。ふと氣がついてみると右手にはもとの船着場らしく、突堤が湖中へ長く伸び出てゐた。黒い、眞つ直な、誘ふやうなその姿が、今度は私の眼に離れなかつた。

私はこれから起ち上つて、その突堤を歩いて行くのだ。まつすぐに、どこまでも、どこまでも。

……

(此の遺書めいた手記は、突堤の端に其他の持ち物と共に殘されて在つた。彼の死體は翌朝發見された。急を聞いて走せつけた弟の手に、やがて此の手記は渡された。弟はそれを誰にも見せず、今の今まで匿して居た。がある偶然の話から、私にそれを打明けた。そして一つは死んだ兄の追悼のために、一つはかう云ふ苦しみを兄と共にするであらう幾多受驗生の参考のために、世の中に發表する事を私へ委託した。私は原文に若干の修正を施して、兎にも角にも一篇の讀み物にした。只、ひそかに氣遣ふのは、私の加へた文字上の修飾が、却て簡明素朴な調子を傷けそれがために却つて感銘を薄くしはしまいかと云ふ事である。因に弟は私の友達で、二三級下の大學生である。だから此の話は受驗制度が、今のやうに統一的に改良されない、以前の事であると思つて貰ひ度い。それからも一つ讀者の參考までに、少しく後日譚をしようならば、澄子と弟との戀愛も、その中に破れて了つた事である。どうせ澄子のやうなコケティッシュな女だから、さうあるべきとは想像がつくだらうが、念のため付け加へて置く。——作者附記。大正七年二月)

春

[illegible]ひ唱ふ二児あり家門春日満つ

[illegible]戸辷る疾き鳥に汐干日和なる

蕗咲いて溪[illegible]けたり鳥光る

圖書館の[illegible]し[illegible]む人

離宮ほとり住む伶人や落ち椿

[illegible]鳴けば雲[illegible]し江尻風車臺

汐踏みて貝殼賭博うらゝなる

[illegible]取りの戻り綾[illegible]し春の雨

[illegible]鐘鳴る時茶種[illegible]に入る

[illegible]參らす[illegible]は蛙に鳴かれたり

[illegible]る[illegible]び獨活も二葉芽摘られけり

([illegible]句抄より)

國分　それあ俺だつて行末永くおまへの世話をする譯にも行くまいけれど、決して此儘おつぽり出すやうな事はしやしないよ。ちやんと會社の方から、おまへの怪我に對する正當な療治金と、たとひその片腕が無くなつても、末々一人で暮して行けるだけの、賠償金は十分取つてやるから、それまで安心してゐるがいゝよ。

ひで　でももうあの時三十圓出して貰つたんですもの、社長さんの方ではもう出して呉れないでせう。

國分　おまへもよつぽど馬鹿だなあ。その三十圓ばかりの金が何になつたと云ふんだい。もう疾うの昔費ひ盡してゐるぢやないか。そしてその三十圓の療治金で、おまへの傷がもう癒つたとでも云ふのなら兎も角、まださうして益々惡くなる一方ぢやないか。一體全體三十圓ばかりの端た金で、折れた片腕がもとへ戻るものかどうか、鳥渡でも考へて見るがいゝんだ。

ひで　でも私の不注意で、器械に引かゝつたのですから。……

國分　さうおまへ一人であきらめて、默つて死んで了ひたいと云ふのなら、それもかまひはしないけれども、かう云ふ事はおまへ一人の問題ぢやないんだぜ。吾々職工全體、勞働者一般の問題なんだ。もし此儘おまへが泣寢入りにでもなつて見るがいゝ、それこそ會社側に取つちや、此上もなく都合のいゝ先例を殘す事になるんだ。さうして之から其先例を楯に、どんな事を云ひ出すか解つたものぢやないんだ。片腕は愚か片足をもぎ取られても、三十や四十の端た金で、どん／＼突つ離される事にでもなつたら、どうして俺たちが安心して、何千ボルトとかの電力で調べ革が行つたり來たりする中を、平氣で歩いてゐられるものか。――それあおまへの怪我だつておまへの不注意には違ひないが、三十圓ばかりの包み金で其儘放つて置くなんて、どこの國のどんな工場にもありやしないよ。

ひで　でも私のために皆さんが、仕事を休んでまで懸合つて下さるなんて、あんまり皆さんに濟みませんわ。

國分　おまへも解らない女だなあ。先刻から俺が云つてゐる通り、このストライキは決しておまへ一人の爲ぢやないんだよ。みんな職工自身のためにやつてゐるんだ。それあ成程此の直接の原因は、おまへのその怪我に在る。併し俺たちのストライキの目的は、何もおまへ一人のために會社から金を取つたり、又萬一俺たちが負傷した時の先例を作つて置くばかりぢやないんだ。實はこれを機會にして戰爭以來一度も上げた事の無い工賃を、三割增しにしようと企てゝゐるんだよ。

ひで　ではようございますが、わたしの爲ばかりだとすると、ほんたうに心苦しくて。……

國分　實は俺たちはもう疾うから機會を狙つてゐたんだ。長い年月の間に少しづつ溜めて來た不平が、俺たちの體の中でむら／＼し切つてゐたんだ。さうして其捌け口を求めに求めてゐた所へ、丁度うまくおまへの事件が持ち上つたんだ。おまへは俺たちに其機會を與へて呉れただけなんだよ。

ひで　(少し身を起して傾聽してゐる。)

國分　(興奮した調子で)職工と工場主との間柄は、腹を割つて云つて見れば、丁度睨み合つてる猛獸のやうなものだ。雙方が互に飛びかゝる隙はないか、乘ずる機會は無いかと狙つてゐるんだ。さうして鳥渡でも隙が見えたり、機會が出來たりすると、猛然と襲ひかかるものなんだ。だから俺たちは一刻だつて油斷しちやゐられないんだ。さうして常に彼

かこちら樣へ參つて失禮でもしやしなかつたかと、それで私も心配して參つたんですが。

國分 いゝえ、別に何でもありませんでしたよ。たゞ何にも云はずにふら／＼と入つて來て、私が丁度このおひでちやんに話をしてゐたのを聞くと、何かぶつ／＼口の中で云ひ乍ら、又ふら／＼と出て行つて了ひました。出て行つてからもう十分位は經ちますよ。

つな まあ、さうでしたか。――實は今日空きつ腹に御酒を頂いたんで、すつかり醉つて此方へ參つたのです。何でもストライキを止めさせるやうに云つて來るつて、大變な勢で家を出たんでしたが、ぢやあ此處でお話を伺つてゐる中に、醉が醒めて何とも云へずに歸つたのでせう。ふだんはあの通りおとなしいのですが、酒を飲むと年に似合はず氣が立つて困るんですの。

國分 あゝそれで來たんですか。それぢや何とか云へばいゝのに、たゞ默つて入つて來て、又默つて行つちまつたので、どうしたのかと思つてゐましたよ。

つな 私はほんとに又何か失禮を申上げやしなかつたかと、早速お詫に參つたんですが、それでやつと安心しました。

國分 （輕い吐息をして）ほんとにあなた方のお苦しみもお察しするんですけれど……

つな いゝえ、私共でも決してこちらに對して、そんな不平を申してゐるのぢやないんですけれど、親爺も酒を少々頂き過ぎましたので、ついそんな氣を起したのでございますよ。

國分 お互にいろ／＼云ひ分はあるでせうが、――それも他人の爲ぢやないんですから、――それにもう少しの辛抱です。明日と云はず今夜の中に、向うと協定をする筈になつてゐますから、いづれにもせよ近日中には解決がつくんです。ですからもう少しの間辛抱して下さい。もう少しこらへてゐさへすれば此方の勝利になるんです。もう少しの間です。こゝで弱味を見せちやあ、今迄の苦心が水の泡になります。だからどうかお爺さんにも、苦しいでせうがもう少し辛抱するやうに云つて下さい。

つな はい。よくさう云つて宥めます。そして私共はいつ迄でも辛抱致しますが、親爺はあの通りな舊弊者ですから、又何かと失禮な事を申しに參るか知れませんが、どうぞ惡くお思ひにならないで下さいまし。

國分 惡く思ひなんぞ致しませんが、あんな御老人にまで心配をかけるかと思ふと、何だか濟まないやうな氣が致します。――（低く呟くやうに）併し吾々の將來を思ふと、まだまだこれ以上の犧牲と忍耐とが要ります。ですからまだまだ暫く吾々仲間の辛苦を、[illegible]しなければなりません。――何しろもう少しの間です。もう少しです。

（三人思ひ／＼の無言に陷る。突然戸を開けて工場の給仕入り來る）

給仕 （少し息を切らして）國分さん。おうちですか。

國分 うむ、ゐるよ。――何の用だ。

給仕 社長さんの言傳を云ひに來たんです。

國分 何だつて云ふんだ。

給仕 あのね。社長さんはね、今夜五時に皆さんと會ふ約束だけれど、急に思ふ仔細があつて、今すぐ此處へおいでになるから、あなたに其積りで待つてゐて下さいつて。

國分 今すぐ來るんだつて？ あの社長が自分でかい？

給仕 えゝ、あの若い方の社長さんが。――

國分 社長つたらあの胡麻鹽頭一人ぢやないか。若いも古いもあるもんか。

給仕 おやあの今日東京から來た、息子さんの

方の社長さんです。

國分　さうか。息子が向うから來るつて云ふのか。それから？

給仕　それから、なるたけ職工の頭だつた人を集めて置いて呉れつて。

國分　うむ、よし／＼。それで？

給仕　それつきりです。おやようございますね。（歸らうと身構へる）

國分　鳥渡待て。向うの用向はそれで解つたが、おまへに此方の用を頼みたいんだ。歸る序に待たいが大町裏の町田の所へ寄つて、すぐ來るやうに云つて呉れないか。急用が出來たから直ぐ來るやうにつて。

給仕　えゝ、承知しました。おや左様なら。（と行きかける）

國分　おい、鳥渡待つて呉れ。もう一つ頼みたい事があるんだ。どうせ序だから北町端れの中村の所へも寄つて、皆を呼び合して來るやうに云つて呉れないか。

給仕　だつてあつちは廻り道だから厭だよ。

國分　廻り道だつて一町とないぢやないか。

給仕　行きかけつゝ、厭だよ、厭だよ。（と急いで去る）

國分　おい頼むよ……線香花火の畜生！　たうとう行つちまひやがつた。

つな　（立上つて）國分さん。あの私でよければ中村さんの所へ行つて上げませう。どうせもうお暇しようと思つてゐたんですから、これからすぐ向うへ廻つて、皆さんに來るやうに言傳して上げますわ。（土間に下りる）

國分　さうですか。そいつは濟みませんな。では御厄介ですがさうして下さい。お願ひしますよ。

つな　えゝお安い御用ですとも。では左様なら。おひでさん、御大事になさいよ。

ひで　有難うございます。左様なら。

國分　どうか呉々もお父さんに宜しく。

つな　えゝ、歸つたらよく申しますわ。おや御免なさい。

（おつな退場する。寅治戸を閉めて戻つて來る）

國分　さあいよ／＼おまへの事も俺たちの事も、もう二三十分の中に決まるんだぞ。

ひで　よく行つて呉れるとようございますわねえ。わたしさつき[illegible]さんの事を聞いて、心で泣いてゐましたわ。

國分　甘く行きやあ何もかももう一時間と經たねえ中に解決がつくんだ。何だかさう思ふと俺は心細くなつて來た。

ひで　あら、どうしてですの。

國分　なあにさう思ふだけだよ。

ひで　向うで又何か六ケしい事なんぞ言ひ出しやしないでせうねえ。

國分　それあどうだか解らないが、かうなつてみると俺の今の心持は何だか氣持がいゝやうな悪いやうな、かう大きいものを待つてゐるやうな、一種妙な心持がするよ。何だか神さまがあつたら、縋りたいやうな氣がするよ。

ひで　五六日の間でしたけれど、御心配は容易ぢやありませんでしたからねえ。

國分　（妙に感傷的になつて）ひよつとするとおまへと俺とが、かうして一つ屋根の下にゐるのも、もうあと一時間とは無いかも知れないぜ。妙な縁だつたが、こんな事も忘れられない思ひ出の種となるだらう。ひでちやん、何だか少し殘り惜しいやうな氣がするぢやないか。

ひで　ほんとにねえ、私もさう思ひますわ。

國分　おや、おまへ泣いてゐるね。

ひで　（淋しく笑つて）いゝえ。

國分　さうか。お前、明りの加減で目が光つたん

だらう。まだ三時だつて云ふのに、厭に暗くなつて來やがつたからな。

（と二人は顏をそむけて、暫く沈默に陷る。）

町田　やあ今日は。

（障子を開けて職工町田入り來る）

國分　庄八さんか。さあどうかお上んなさい。急に招んで濟まなかつたな。

町田　なあにね、丁度此方へ樣子を聞きに來ようとしてゐた所だつたから、早速やつて來た譯さ。――おひでさんの工合はどうだい。

國分　うむ、今日は幾らかいゝやうだ。

町田　さうかい。それあいゝね。――それはさうと社長の息子が急に此方へやつて來るつて話だつたが。――

國分　うむ、さうだ。今夜まで待ち切れないと見えるんだ。

町田　一體あやまりに來るのか、小言を云ひに來るのか。

國分　さあ、それはまるつきり解らねえんだ。が、いづれ一と談判しなくちやなるまいから、その前に此方の胆を十分に決めてかゝらうと思つて、急いで君たちを招んだのさ。

町田　うむ、それは此方の出やう一つで、今日の話はどつちにでも決まるんだから、打合せて置かなくちやなるまいが、一體他の連中はどうしたんだい。

國分　中村の所へ云つてやつたから、いづれ三瓶と岩田とを連れて來るだらう。それだけ揃へば頭株はすつかりだから、今日こそ誤魔化されねえやうにしつかりやらう。

町田　一體向うは何人來るだらう。

國分　さうさな。親爺と息子と會計と、此の三人はきつと來るだらう。

町田　息子つて奴に物が解つてゐるといゝが、會計と來ちやあ海千山千だからなあ。

國分　なあに、今度こそ瓢簞鯰は許さねえ。

（職工中村と三瓶入り來る）

中村　やあ今日は。

三瓶　どうしたんだい、急に又。――

國分　うむ。向うからもう直ぐに此處へ來るつて云つて來たんだ。

中村　さうかい。向うから來るつて云ふのは、もう既に七分の弱味が見えてるね。ぢやあ一つうんと強く出てやらうぢやねえか。

町田　それで今どんな態度を取つたものか、皆の胆を決めときたいと思つてるんだ。岩田はどうしたい。

三瓶　すぐあとから來る筈だ。

中村　態度つて今更決める迄もないぢやねえか。此處まで來た以上一歩だつて退かれやしねえ。

三瓶　でも君、そこは向うの樣子次第で、臨機應變に少しは讓歩しなくちやあ。泣き言を云ふ譯ぢやないけれど、職工連中ももう大抵心の底では折合がつくやうに望んでゐるんだからな。

中村　だつて君、此處で烏渡でも弱味を見せちやあ、何時迄たつたつて俺たちの要求は通らないぜ。

三瓶　併し、向うも十分折合をつけたいと云ふ氣合を見せてゐるんだから、此方で穩に出てやれあ、此際何とか收まりがつくと思ふんだ。此方で強く出れあ向うも意地だ。きつと頑固に出るに違ひないよ。どうせこんな爭ひなんてものは、もとを質せば感情づくなんだから、そこを出來るだけ忍ばなくちやあ。……

町田　なあに向うぢや算盤づくなんだ。

中村　たとひ感情づくでも算盤づくでも、此處まで曳いて來た車は後へは曳けねえ。今更弱音を吹くのは意氣地なしだ。

三瓶　と云つて無暗に頑張るのは箆馬鹿だ。

町田　おい〳〵、二人とも下らねえ云ひ合はよ

せよ。見つともない。

國分　（黙つて此樣を見てゐるのみ）

（職工岩田急に入り來る）

岩田　遲くなつて濟まなかつたな。——何だかそれらしい人が向うからやつて來るやうだぜ。

町田　（戸の處へ出て見る）うむ。さうらしいな。——所で今の問題は。

國分　決然と　それは俺に任して見れ。

町田　それあ任せるが、どう云ふ態度を取るのだい。

國分　（力強く）勿論強硬に出るばかりさ。それでいゝだらう。

町田　（鷹揚に）うむ、いゝだらう。

中村　（大きく點頭いて）いゝとも。

岩田　（次いで點頭く）よからう。

三瓶　（力に壓されて仕方なく點頭く）……。

（暫く緊張した期待の沈默に陷る）

町田　いよく來たやうだぜ。

（三浦淳吉、一人の子供に導かれて入口に現はる）

三浦　（導かれて來た子供に）こゝだね。どうも有難う。（と入口の戸を開け、丁寧に帽子を脱いで）御免下さい。國分寅治さんのおたくは此處ですか。

國分　左樣でございますが、あなたは？

三浦　私は三浦です。

國分　あゝ左樣でございますか、お待ちしてゐた所でした。さあどうぞこちらへ。御覧の通り穢苦しい所ですが。——

三浦　では少々御免下さい。（と上つて適當の座につく。職工らも各々適宜な位置に密接して座を占める。暫くは不安なる動搖が見える）

町田　あの、あなたお一人きりですか。他には誰もおいでにならないのですか。

三浦　えゝ、わたし一人きりで上りました。却つて其方がいゝと思ひましたので。（と一度にずつと職工を見渡して後、最後に寅治に向ひ）失禮ですが、あなたが國分さんでございますか。

國分　はあ、私が國分です。以後どうぞ宜しく。（兩人強ひて丁寧なる禮を交す）それからこれが町田で、（と一人々々指し紹介する）中村、三瓶、岩田と云ふ仲間です。集めて置いて貰へといふお話でしたから、重だつた者だけ招んで置きました。

三浦　それはどうも御苦勞樣でした。（皆々に禮をする）

國分　それからこれが倅ひでで。

ひで　（半ば身を起して禮をしようとする）

三浦　はあ。（點頭いて）あゝ、どうか其儘にしてゐて下さい。どうか。——

ひで　ではどうぞ御免下さい。（と打臥して了ふ）

三浦　（少し改まつて）私は御承知でもございませうが、淳吉と申す淳藏の長男で、今迄ずつと東京に居つたものですから、つい皆さんにお近付を願ふ機會がありませんでしたが、これからはどうぞ宜敷お願ひ申上げます。確かどなたとも初對面だと存じますが。——

三瓶　（少し進み出て）あの、わたしは三瓶ですが。——

三浦　三瓶さんと仰有ると、あの中町にあつた陶器店の息子さんの、……（とぢつと顏を見乍ら）あの三瓶清治君ぢやありませんか。

三瓶　えゝ、さうです。昔あなたと御一緒に遊んだ。……

三浦　さうですか。（思ひ出すやうに）確か高等二年まで貴方と一緒でしたつけねえ——あなたも隨分變りましたねえ。

三瓶　何しろあれからすぐ親爺が亡くなつて了ま

ひましたので。……

三浦　さうでしたか。それは又、……で只今は、……何だか大變顏色がお惡いやうですが、どこか御病氣ぢやないんですか。

三瓶　いゝえ、別に。

町田　（皮肉に）なあに飯をたんと食はないからですよ。唯それだけの事なんです。それが病氣だと云やあ、わし共はみんな病氣なんですよ。

中村　これこそほんとの慢性病なんです。

三浦　……。（ぢつと下を向いて默つて了ふ）

（暫く沈默。此時一人の職工らしき男、入口から默つて覗きゐたりしが、以後對話の進むにつれて、一人二人づつ附近の貧しき男女、子供など入口に集り來り、だんだん其數を增し來つて、曲の終る頃には、土間入口は貧しき群集によつて塞がる。此等の人物は互に私語き又は唸るのみにして、對話の中には交涉し來ることなし）

國分　（膝を進めて）で、今日急にこちらへおいでになつた御用向は？

三浦　えゝ、それは只今申上げます。——先づ何よりも前に皆さんにお話し申上げて置きたいのは、私は何も一時的な仲裁に此方へ參つたのでなくて、云はば永久にあなた方と、行動を共にしようと云ふ決心で參つた事でございます。

國分　（少し呆氣に取られて）はあ。……

三浦　私は大學を出て兩三年と云ふもの、東京の方に就職して居りましたので、此方の會社に就ては殆ど知る所がなかつたのです。すると突然此度の同盟罷工が起つたので、初めてそんなに惡い事情があつたのかと、大へん驚いたやうな次第なんですが、何分向うには仕殘した用事があつて、それを片づけぬ中は來る事もならず、一人でやきもきしてゐたのですが、やうやく昨日それも片付いたので、急いで歸つて參りまして、實は今日一と先づ事情を調べて見たのです。

町田　尤も會社の帳簿だけでは、此の事情はよくお解りにならないと思ひますが。——

國分　まあ餘計な事は云はないで、默つてお話だけは聞いて了へよ。

三浦　いや、お說の通り、確に帳簿だけでは解りません。のみならず、あなた方の事情に就ては、私は精神的にも物質的にも、殆ど何も知らないと云つていゝ位です。けれども會社側の方は、果して不當の利得を食つてゐたかどうか、いゝようく調べた積りです。而して其結果は、不幸にして諸君の云つて居られる通りなのを發見しました。私はそれを茲で具體的に申上げる勇氣はありません。たゞ私は今迄父の取つて來た態度を、情なく感じたと諸君に申上げれば足ると思ひます。私は實際皆さんに對して恥しいのです。

（皆々顏を見合せる）

三浦　それは又あの薄情な父に云はせれば、父らしい申譯があります。けれども私は公平に見て私さへ、會社の施設は惡過ぎると思ひます。殊に關口……ひでさんとやらの場合でも、決して正しい賠償をしてゐるとは云へません。ですからそれを根據にして、職工の待遇を改善せよと迫られても、それは全く正當な要求なのです。それで私は今日から斷然、父に向つて今迄の態度を改め、それと同時に責を引いて、父に社長の職を引退するやうに勸めたのです。もう年齢も年齢ですし、場合も場合ですから、世間へ對する手前、又あなた方との折合の上から云つても、父が直接工場の管理にあたる事は遠慮して貰ふやうに勸めたのです。

國分　けれども、社長さんはそれを聞入れまし

たか。

三浦　父も意地でやめたくなかつたやうでしたが、たうとう遂眼して了ひました。

國分　では其後任にはどなたがなりますので？

三浦　それは私が引繼ぎます。甚だ氣を負うてゐるやうな形ですが、あの工場を父から受け繼ぐのは、子たる私の責任だと思ひます。私は御覧の通り年が若くて、實地の經驗とてはありませんが、理想と信念だけは持つて居ります。全力を盡してあの工場をよくして見せます。斷じて私利私慾を營んだり、人道に悖るやうな事は致しません。而して昨日まで埃と血にまみれてゐたあの製絲場を、輝くやうな理想の工場にして見せます。それが私の抱負なんです。

國分　それではもう今日から、あなたが社長さんなのでございますな。

三浦　さうです。此處へも社長の責任を以てやつて來たのです。

國分　では改めて社長さんの口から、はつきりと承りたいのですが、御抱負などは兎も角として、第一手近な私共の問題はどうなるのでございますか。それを何より眞つ先にお伺ひしたいので。——

三浦　それは、私も只今申上げようと思つてゐた所でした。では改めてはつきり申します。——賃金三割増と云ふあなた方の要求は喜んで私の方から應じます。猶其上によく私共の方の利潤を調査して見て、上げられるものならもつと引上げようと思つて居ります。（群集私語し交す）ですからどうでせう、あなた方も明日からすぐに工場へ出て働いて頂けないでせうか。

國分　吾々も元通りの職務についてですか。

三浦　勿論さうです。元通りに一人も洩れなく。——

國分　するとあなたは吾々に對して、少しも含む所がなく、此儘使つて下さると云ふんですな。吾々のやうな所謂危險分子をも。——

三浦　吾々は寧ろあなた方を尊敬したく思つて居ります。さうして先程も申上げた通り、あなた方のやうな自覺した勞働者諸君と共に、相携へて理想の工場を作り上げようと思つてゐるのです。

國分　さうですか。あなたの御心はよく解りました。——おいみんな、此の新らしい社長さんが仰有るには、明日から、賃金は三割上げて下さるし、これ迄通り一人も洩れなく使つて下さると云ふんだ。別に異議はあるまいな。

（皆々點き又は「無い、無い。」などと叫んで同意を表す）

町田　それはいゝが、おひでさんの事はどうなるんだい。

（皆々ひで子を顧みる）

三浦　關口さんの事も惡いやうにはしない積りです。さうして差當り先づ其傷が全癒するまで、私の手で太田病院へ入院して頂かうと思つてゐたのです。あそこなら私の友人の經營でもあり、設備も割合に整つてゐますから。あそこで十分療養させた上、猶其上の御相談に致したいと思ひますが、どうでせう皆さんの御意見は。尤も本人がお厭だと仰有れば又何とか別な方法も御座いますが。——

國分　さうですな。私共はこの人の幸福を願つてるばかりなんですから、それに勿論不服のある筈はございません。——尤も療治さへ行屆けば、入院する程のこともありますまいけれど。——おひでちやん、どうだいおまへの考へは。

ひで　（目を瞑つてゐるのみにて答へず）

三浦　どうです、一と先づ太田病院へ入院して

呉れませんか。（近よつて）まだ餘程痛むんですか。

ひで　それほどでもありませんけれど。——

三浦　（靜にひで子の顔を見乍ら）ひどく衰弱してゐるやうですが、毎日熱でもあるんですか。

ひで　（涙ぐましく）いゝえ。

三浦　（何となく可憐さに引込まれて）痛い方の手と云ふのはこちらですか。

ひで　あら。（低く）よごれて居りますから、お觸りになつちやいけませんわ。

三浦　（ちつと見て）どうです、私の云ふ通りにして下さいますか。

國分　どうだね。それとも此處で療治するかい。

ひで　あのわたし……そんなに迄して頂いていいんでせうか。

三浦　いゝえ、なあに、私の方からお願ひするんですよ。

ひで　ではどうぞ宜しく。……

三浦　さうですか。早速御承知下すつて有難う。ではすぐ入院するやうに取計ひませう。

（國分らに）それで宜しうございますね。

國分　（强ひて冷淡に）えゝ異存はありません。

町田　あゝ、これで一と先づ決まりはついたな。

三浦　さうです。これから初めて、吾々は建設の時代に入るのです。及ばず乍ら私も獻身的に努力しますから、一つお互に信頼し合つて、共同して模範的な工場にしようぢやありませんか。物質的に工場の規模は小さくとも、精神的には立派な大工場にしようぢやありませんか。私は一生懸命模範的な工場主たることに努力します。諸君もどうぞ模範的な職工となつて下さい。さうしてお互に燦然たる模範工場を樹立しようぢやありませんか。

（群集の中で誰かが「アーメン。」と叫ぶ。抑へ切れぬ哄笑）

國分　（群集に向ひ）何を云ひやがるんだ。社長さんは折角模範工場を立てて、縣廳からでも表彰されてえと仰有るんぢやねえか。それを茶化してどうするんだ。馬鹿め！

三浦　（此の暗諷に思はず眉をひそめたが、强ひて不快な心持を抑制して默つてゐる）

（此時、國分の叱咤にやうやく靜まりかけた群集を掻き分けて、先刻のおつなが顔色をかへて入り來る）

つな　國分さん、大變です。うちの親爺が死にました。

町田　何だつて？

つな　親爺が裏の路次で首をくゝつたんです。大變です早く來て下さい。

（群集動揺する）

國分　（寧ろ平然と）さうか。たうとうやつたか。

三浦　一體どうしたんです。誰が死んだんです。

國分　權爺と云ふ老人ですよ。此の結果が待ち切れないで、たうとう死んで了つたんです。此のストライキの唯一の犧牲です。

三浦　（獨り言のやうに）さうか。矢つ張り俺の來やうが遲かつたか。

（皆々無言で、折から赤くさし込む路次口の夕日を氣味惡さうに眺める）　（幕）

第二幕

太田病院の一室。

質素であるが居心地よげなる洋風の病室で、正面には廊下に通ずる戸、右手壁には稍大きな窓がある。室の中央に白い衝立があつて、部屋は二つに割られてゐる。

其右手の方には、窓の下に病床を据ゑて、關口ひでが横はつてゐる。窓からは明るい日光がさし入つて、病床の白いシーツに注いでゐる。

左手の方には一脚の卓子があつて、其周りに椅子が二三脚、病室用の器具などが置いてある。幕あくと看護婦の田村が、病床の傍の椅子に坐つて、雜誌か何かを讀んでゐる。ひで子は病床から默つて雲を見てゐる。

ひで （靜な物倦げな聲で）田村さん、もういゝでせう。まだ不可なくつて。

田村 （雜誌を伏せて時計を見る）さうですね。もう七分過ぎましたからいゝでせう。

（看護婦は立上つて病床に寄り添ひ、ひで子の懷から檢溫器を取出して、明りにすかして度盛りを讀む）

ひで 熱があつて。

田村 いゝえ、六度五分きり。（體溫表に記入して）全く平溫ですわ。

ひで いつになつたら退院できるのでせう。

田村 もうすぐですわ。だからそんなに御心配なさらなくてもよくつてよ。

ひで 別に心配は致しませんけれど。……

田村 もうお體の衰弱の方も、切開した痕も大抵癒つたんですから、安心して退院を待つていらつしやいよ。

ひで お蔭さまでほんたうに有難うございました。

田村 いゝえ。ほんとにお世話が行き届きませんで。……

ひで ほんたうにあなたのやうな御深切な方が、此處にゐて下さらなかつたら、わたしどんなに心細かつたでせう。社長さんは毎日御見舞に來ては下さいますけれど、長くて一時間とは居て下さらないんですものね。

田村 あら私の深切なんて、これが職業ですから何でもありませんけれど、社長さんの御深切なのには私共でさへ感心して居りますのよ。あゝして毎日お見舞に來て下さるなんて、外の方には迚も出來やしませんわ。

ひで あなたはさう思つてゐて下すつて。

田村 えゝ。何故。

ひで でも外の方は、さうばかり取つて下さらないんですつてねえ。

田村 ではどんな風に思つてゐるんでせう。

ひで 外の人々はね、社長さんが私の所へいらつしやるのは何か下心があつての事で、只の深切ばかりではないと云ふんですつて。社長さんと私とがをかしいと云ふんですつて。

田村 まあ、ほんたう。

ひで ほんとに私位不幸な女はありませんわ。一生日陰者になつて了つて、人の御深切を受けるのさへ氣兼ねしなくちやならないんですもの。

田村 隨分ひどい事を云ふ人たちねえ。――でもそんな事をどなたからお聞きになつて。

ひで 社長さんからお聞きしたのよ。昨日おいでになつた時に、さう云つていらつしやつたわ。――あの、自分は今迄毎日のやうに、此處へ訪ねて來たけれども、此頃世間の噂を聞くと、何だか妙に誤解されてゐるやうだから、これから少し來るのを遠慮するが、決して惡く思つて呉れるなつて。呉々もさう仰有つたわ。それあどうせそんな事を云ふのは、ごく僅かな馬鹿者ばかりだらうから、別に氣にしてゐる譯ではないが、そんな所から自分の深切が却て無になつては、お互につまらないからつて、目に涙を溜めて仰有るのよ。わたしも泣いたわ。だつてあんまりなんですもの。そんな事を、……ねえ。あんまりひどい事を

世間の人が云ふんですもの。

田村 ほんとにねえ。お察し申しますわ。では今日から社長さんは、御見舞に來ては下さらないのですか。

ひで えゝ、ですから今日はもうおいでになるまいと思ひますの。わたし、だから先刻から悲しくて悲しくて、心で泣いてゐたんですわ。

田村 ぢや淋しうございますわね。——でも職工長の國分さんて方は、今日あたりおいでになる時分ぢやなくつて。

ひで あの人は忙しい身體ですから、來ても一週間に一度位ですわ。それに見舞に來て下すつても、何だかあの人怖いやうな氣がするんですもの。

田村 さうねえ。男らしい方ですけれどねえ。

ひで あなたは社長さんお好き?

田村 えゝ。——あなたは。

ひで わたし? わたし何とも思つてやしないことよ。

田村 あらさう。だつてそれぢや社長さんに濟まなくはないの。あんなに御深切に面倒を見て下さるんですもの。あなたはほんとに幸福よ。わたしだつてあなたのやうに幸福になれるものなら、いつでもあなたと同じく片腕位切つてもかまはないと思ふわ。

ひで あら、何故。

田村 だつてあなたが苦しんでいらつしやれば、皆さんがすつかり同情して下さるし、今度は又あゝ云ふ深切な社長さんが、かうして病院に入れて、始終見舞に來て下さるんですもの。

ひで それあかうしてゐる中はようございますけれど、もうこんな片輪になつちまつちやあ人さまが相手にもして呉れないでせうから、此の先どうして暮らして行けるか、わたしその事を考へると、いつそ此儘死んで了ひたうございますわ。

田村 だつてそれあ社長さんの方で、又どうにかして下さるんでせう。いくら世間の人は殘酷でも、あなたのやうな素直な氣立と、いゝ御器量とをもつていらつしやれば、きつと捨てては置きませんわ。

ひで いくらさう仰有つて下すつても、私考へると心細くて心細くて。……(と涙を溜める)

田村 まあさう御心配なさらない方がよくつてよ。ね。(傍へ寄つて)もうこんな話はよしませう。——あなたのお髪はほんとにいゝのねえ。御病氣上りの人とは見えませんわ。もうお身體の方は大丈夫なんですから、明日お髪をお上げなすつちやあどう? きつと氣分がせい／＼しますわ。束髪ならわたしにも出來ますけれど、あなた髪は何がお好き。

ひで (少し晴々と) わたし矢つ張り銀杏返しよ。

田村 さう。きつと似合ふわね。

ひで さうでせうか。いつか社長さんも銀杏返しが一番似合ふだらうつて仰有つてよ。男の癖に妙な事を仰有るのね。

田村 きつと丸髷もよく似合ふつて、仰有りたかつたのかも知れませんわ。

ひで まあ厭な田村さん。あなたまでそんな事を仰有るの。

田村 あら御免なさい。怒つちや厭よ。——でもほんとに銀杏返しに結つて御覽なさいな。きつと似合つてよ。

ひで けれどももう今日は遲いから駄目だわね。今日は之から何をしませう。

田村 ぢやあ又聖書でも讀みませうか。

ひで あの本はわたしにはよく解らないんですけれど。

田村　でも折角社長さんが讀むやうにつて、置いて行つて下すつたんですから。
ひで　さうねえ。おやあ少し讀んで下さいな。
（看護婦卓子の上から革表皮の聖書を持ち來り、椅子を病床に近く寄せてヘエジを繰る）
田村　どこまで讀んだのでしたつけねえ。
ひで　わたしも覺えてゐませんわ。
田村　（頁を繰りながら）路加傳第六章と、あゝ此處からだわ。
（形を直して讀み始めようとする。途端に戸を輕く叩く音がする。看護婦は本を伏せて立上る）
田村　あら誰方かしら。（立つてゆきながら振返つて）きつと社長さんよ。（急いで戸を開ける）
（三浦淳吉の從妹とし子入り來る。手に水菓子の籠を携ふ。現代的な美貌、美しき外出着）
田村　（少しどぎまぎして）あの、どなた樣でいらつしやいますか。
とし　わたしは三浦俊子でございます。今日は兄がこちらへ參れなくなつたものですから、かはりに私がお見舞に上つたのでございますが。……
田村　あゝ左樣でございますか。ではどうぞこちらへ。（椅子を薦める）
ひで　私が關口でございます。わざわざどうも有難うございます。
とし　兄から終始お噂は承つて居りました。どうぞ以後はよろしく。（と丁寧に挨拶し合つて後、田村に水菓子の籠を差出し乍ら）あの、これは誠に有りきたりの品ですけれど、御病人には何がお宜しいか解らなかつたものですから、……どうぞそちらへお納めなすつて下さいまし。
田村　左樣でございますか。まあこんなお見舞まで頂戴しては、ほんたうに恐れ入りますわ。（ひでに）あなた、こんな結構な御品を頂いたんですよ。
ひで　まあ、ほんとに濟みませんわ、そんなにまでして頂いては。
とし　いゝえ、決してお禮を仰有るほどの物ぢやないんでございますよ。――今日は何か兄がお用事があつて行かれないから、是非代りに行つて來いつて云ふものですから、急に參ることになりましたので、……却てお邪魔ぢやありませんでしたかしら。
ひで　いゝえ、どう致しまして。
田村　今も二人で退屈し切つてゐたんでございますよ。（椅子を薦めて）まあどうぞお掛け遊ばして。
とし　有難うございます。では失禮いたします。（腰をかけて）あの、御氣分はいかゞでございますの。
ひで　お蔭さまで大變宜しうございます。もう少ししたら退院が出來るかと存じますが、ほんとに何から何までお宅のお世話になりつゞけで。……
とし　いゝえ、そんな御心配は要りませんが、御不自由なお體になりなすつては、嘸お心細くいらつしやいませうねえ。
ひで　でもみんな運とあきらめて居りますの。
とし　ほんとに御不運でしたわねえ。
（しばらく沈默）
ひで　あの、誠に妙な事をお伺ひするやうですが、お宅の皆さま方は私の事を、憎い女だとお思ひになつていらつしやいませうねえ。
とし　まあ、どうしてそんな事をお聞きなさいますの。そんな事がある位なら、かうして兄や私なぞがわざわざ參る譯がないぢやございませんか。

ひで　でも私のためばかりに、いろ／＼な事が起つて、御迷惑を掛けたのですもの。先の社長さんなどはさぞお怒りだらうと存じますわ。

とし　先の社長つて叔父さんの事ですか。叔父さんならあんな人ですから、何と思つてゐるか解りませんが、わたし共はみんなあなたに同情してゐるんですよ。叔父さんは別ですわ。

ひで　叔父さんつて、先の社長さんはあなたのお父さまぢやないんですか。

とし　えゝ、叔父さんですわ。なぜですの？

ひで　だつて、あなたは今の社長さんと御兄妹でいらつしやるんでせう。

とし　あら淳吉さんとはね、ほんとは從兄妹なんですけれど、兄さんと呼んでるんですわ、小さい時からさう云つてるんですもの。

ひで　まあさうですか。わたしはほんとの御兄妹とばかり思つて居りました。――ではあの、小さい時からのお許婚でいらつしやるんでございませう。

とし　（赧くなつて）あら、そんな事知らなくつてよ。決してそんな事はありませんわ。

ひで　まあ、わたし飛んだ失禮な事を申上げて、どうぞ御勘忍なすつて下さいまし。

とし　いいえ。何とも思ひはしませんわ。

（しばらく沈默。此の間に看護婦は水菓子二三個を剝いて皿にのせて持ち來る）

田村　（皿を枕許のサイド・テーブルの上へのせて、先づとし子に向ひ）早速頂いた林檎を剝きました。どうぞ一つ召し上りなすつて。

とし　有難うございます。勝手に頂きますから。

田村　ではどうぞ。（ひで子に）あなたも召し上れ。

ひで　えゝ。

とし　（歸るそぶりを見せて）ではわたしこれで失禮しますわ。あの何か兄に言傳でも御座いましたら、私からさう申しますが、……

ひで　あら、まだお歸りならなくても宜しいぢやございませんか。まだお話もよく承らないんですもの。もう少しいらしつて下さいまし。

田村　ほんにもつとごゆつくりなすつたつて宜しいぢやございませんか。關口さんも退屈し切つてゐるんですから。

とし　でも之からはちよく／＼お邪魔に上りますから、今日はこれで失禮致しますわ。これから琴のお師匠さんの方へ、鳥渡お寄りする事になつて居りますので。

ひで　まあ左様でございますか。ぢやあ又ごゆつくり。

とし　では御免下さいまし。（田村に）左様なら、お大事になさいまし。

田村　さやうなら。どうぞ社長さんに宜しく。（とし子會釋して去る。看護婦見送つて戸口まで行き戸を閉めて歸つてくる）

田村　まだほんの御嬢さんねえ。

ひで　さうねえ。――あの方の締めてゐた帶は、何ていふんでせう。あなた知つてて。

田村　博多織つていふんぢやなくつて。

ひで　さう、いゝわねえ。

田村　わたし共には、呉服屋の店に並べてあるのしか見られないものよ。

ひで　いゝ御器量だわねえ。

田村　さうねえ。でも顔が少し赤うございますわ。

ひで　社長さんはどうして又あの方をお見舞によこしたのでせう。

田村　あなたが淋しがつてると思つてでせう。

ひで　社長さんは今迄に一度も、あの方の事はお話なさらなかつたわ。そして今日不意にお

寄越しになるなんて、どう云ふお積りか解らないわ。

田村　従兄妹同志だつて云ふのに、お顏はさう似ておゐませんわねえ。

ひで　（獨りで）さうだわ。きつとさうだわ。――

田村　あら、何がさうですつて。

ひで　いえ、何でもないのよ。只ね、……きつとあの方は社長さんの奥さんにおなりになるのだわ。きつとさうだわ。

田村　さうでせうか。さうならお似合だわね。お二人とも御立派でいらつしやるから、……ねえ。――でもさつきはさうぢやないつて云つていらしつたわね。だからほんとに従兄妹同志だけなのかも知れませんわ。

ひで　さうねえ。（氣をかへて）もうこんな話はよしませう。他人の事を心配して見たつて詰らなわ。それよりかさつき讀みかけた御本を又讀んで下さらない。

田村　おや少し讀みませうか。

ひで　解らないけれどそれを聞いてるといゝ氣持よ。

田村　（前のやうに席を占めて）ぢや讀みますよ。

（看護婦澄んだ聲で聖書を讀み始める。ひで子は靜に聞いてゐる。しばらく讀む。）

田村　聞き取りにくくはなくつて。

ひで　（やうやうに）いゝえ。

（續いて可なり長い間――實演の際は五分間位――讀みつゞけてゐる。ひで子は何時から眼を瞑つてゐたが、やがて寝入つて了まふ。靜な寝息の音がする。看護婦は餘りに聽者が靜なのに氣付き、讀みやめて靜に一聲「ひで子さん」と呼んでみる。返事がないので近寄つて顏を覗き乍ら「まあ。」と云つて微笑む。そこで彼女は本を伏せてしばらくぢつと寝顏を見てゐる。それから枕許の薬罐を取り、行きがけに音のせぬやうに窓掛を引いて、そつと室から出て行く。長い間。外で戸を輕く叩く音がする。暫く經つても返事がないので、そつと戸を開けて三浦が首を出す。さうしてひで子の寝てゐる外、誰もゐないのを見て入つて來る。先づ病床に近寄つてひで子の顏を覗き込み、しばらくぢつと見凝めてゐたが、惱ましげな吐息を一つして枕許を去り、衝立で仕切られた方の卓子の所へ來て、靜に椅子に腰を下して懐中より煙草を出して點火する。しばらくして太田醫師が戸口から首を出す。）

太田　（覗き込み乍ら）三浦君。こゝかい。

三浦　しつ！　靜に！　御覧の通り寝てゐるんだ。まあ入つたらどうだい。

太田　うむ。（入り來る。而して聲を低めて）よく寝てゐるな。君何なら僕の室へ來ないかい。病室で對話も出來ないぢやないか。

三浦　さうさな。でも何だか此處が一番居心地がよくつてね。まあ眠りの邪魔にならぬ程度で、靜に話をしようぢやないか。僕は其方が話しいゝんだ。

太田　一體君の話つて云ふのは何なんだい。

三浦　まあゆつくり話すから、（ひで子の方を覗き見て）此方の隅の方へ來ないか。

（二人は左手の隅の卓子の傍へ腰を下ろす）

太田　何か込み入つた相談かい。

三浦　まあさう急ぎ給ふな。さう改まつて聞かれると恐縮するんだ。まあ煙草でも一つ取らないか。

太田　有難う。（一本煙草を取る）

三浦　時に――君の方の仕事は呑氣でいゝね。

太田　どうして／＼呑氣どころか。今やつと廻診を濟まして、只今一と骨抜いた所さ。これから又一時間も經つと大忙しだよ。

三浦　まあそれは何より結構だね。

太田 それよりか君の會社の方はどうだい。うまく行つてはゐるらしいが。……

三浦 まあ着々步を進めてゐる。まだ〳〵改良したり、新設しなくちやならぬ事も澤山あるが、初めから迚も完全は望まれないからねえ。何しろ、今迄が謂はば惡德の巢窟とも云ふべき程だつたのだから、僕の理想の實行も容易ぢやないが、それだけ又張り合があると云ふものだ。而してまだいろ〳〵內部に反對はあつても、いつか必ず僕の精神のある所が認められて、僕の思ふやうになる時代が來るに違ひないから、根氣よく少しづつ改革して行つてるのさ。

太田 僕らから見ると君のやり口は、少し淸教徒過ぎるとは思ふが、まあ一つ思ひ通りにやつて見るのもいゝさ。

三浦 いゝさなんて云ふ手緩い事ぢやなくて、實際せずにゐられないのだ。——まあ親爺のやり口なぞを見ると、こんなのは無論一例に過ぎないが、少からず心を寒くするものがあるからねえ。からだ、まあ聞いて吳れ給へ。此處に一人の美しい女工がゐるとするね。さうすると親爺なんぞのやり口では、そいつを數ある女工の中から拔擢して、男工の所へ絲を取り枠を運ばせる役に使ふのだ。すると自然男工の間には、一つでも多く自分の所へ枠を運ばせたい希望から、猛烈な勵精の競爭が始まるんだ。——とまあ云つたやうな事でばかり、工場の能率を增進させようと計るんだからねえ。

太田 ふうむ、中々うまい事を考へるものだねえ。

三浦 ところがそれは何も親爺の妙案ぢやなくて、どこでも普通にやつてゐる手段なんだから驚くねえ。

太田 けれどもそれ丈の事ならば、別に大した罪惡でもないだらうがね。

三浦 それはさうかも知れない。併し其弊の及ぶ先を考へると、由々しい人道問題にもなると思ふんだ。——まあいつまでも枠の數位で競爭してゐれば無事だが、やがてもつと猛烈な裏面の競爭が行はれる。仲間同志が反目する、嫉妬する。時とすると黨に分れて爭ひ合ふ。而して其結果は多くの場合、渦中に立つた可憐なる女工を悲慘な運命に陷れて了ふんだ。

太田 ふうむ成程、それはさうだらうね。

三浦 此處にゐる(とひで子の方を見やつて)關口ひでなぞも、危ふく其一人になる所だつたのだ。今でこそ此處にあゝして白い毛布に包まれて安らかに寢てゐるが、嘗てはあの女の周圍に誘惑が渦を卷いてゐたのだ。怖ろしい惡魔が爪を磨いで待つてゐたのだ。僕は幸にして彼女をさう云ふ狀態から救ひ出すことが出來たのを、今尙一つの誇りにしてゐる。さうして假令會社の方の改革が、どんな反對に遇つて挫折しても、あの女を救ひ得たと云ふ事實は、僕には實に最後の慰めになるのだ。あの女を救ふことが、僕の理想を實現する第一の階段だつたのだ。あの女は謂はば僕の理想主義の象徵なんだ。あの女が再びもとの境遇に落ちたら、身を亡ぼすやうな事があつたら、其時こそ僕の理想は悉く破產したのだ。だから僕は何處までもあの女を守り立てて、決して又もとの悲慘な狀態に歸らせたくないと思つてるんだ。

太田 ふむ、それで。——

三浦 そこで僕が先刻から、君に話さうと思つてゐた問題になるのだが、實は僕この關口と結婚しようかと思つてゐるのだ。結婚して永久にあれを救ひたいと思つてゐるのだ。——君のお蔭で幸に切開の痕も癒り、身體も見

逢へるやうによくなつて來たから、もう近日退院してもいゝ事になるだらうが、退院してもとしあより何處へ行つたらいいんで、かうして僕が行つたらいゝか、それは彼女の重大な問題なんだ。それで今で片付かなくて、あの女の一生の保障になるやうな話を與へてもいゝが、それとても限りのある今の僕では、如な行きつく先きが見えてゐる。堕落した一人の女としては、此の世の荒い世界で、どうして身を売らずに居られようか。堕落は目に見えてゐる。それだのに僕はみすみすあの女をまた他人に汚させるのに忍びないんだ。だから僕は結婚して、彼女を完全に救はうと思つてゐるのだ。

太田 うむ。それは理窟としては僕にも異論はない。が、併し君、君にはその理窟以上に、關口さんに對する愛を感じてゐるかい。それが何よりも第一の問題だと思ふが。

三浦 それは勿論感じてゐる。今僕は心からあの人を愛してゐるのだ。尤も昨日まではそれをはつきりとは感じなかつた。が、偶然ある所である事を聞いてから、我れと我心にも反省してみて、初めてそれに氣が付いたのだ。僕は君も知つてゐる通り、殆ど毎日のやうに此處へ來てゐる。それも初めは幾らか義務的に足を運んだ傾きもあつたが、其中にだんだん來ることが樂しくなつて來て、たうとう今では來ないではゐられなくなつて了つた。無論昨日まではそれほど自覺してはゐなかつたが、昨日偶然あそこの廊下を通り合せた時、君の助手や看護婦たちが、僕の噂をしてゐたのを聞いて以來、改めて自分の身を振り返つて見て、少し恥しい所があつたから、昨日も當人に理由を話して、世間の口が五月蠅いから來るのは遠慮すると云つて置いたのに、今日になつて見ると此處へ來たいと云ふ心が、可なりな強さで湧いて來るのを感じたのだ。而してやつとそれを堪へて、わざと他の用をしたり、とし子を代理に來させたりして見たが、考へれば考へる程、僕にはあれと會ふことが必要になつて來たのだ。僕は今迄無意識にではあつたが、可なり激しい愛を彼女に對して持つてゐたのだ。さう覺つたらもう一刻もぢつとして居られなくなつた。それで急いで此處へやつて來て了つたのだ。

太田 成程、それで一通り君の心持は解つた。理性的にも感情的にも、此結婚は君に取つて合法なんだね。併し君は、……あのとし子さんと結婚する約束になつてゐたのではないのかい。さうだとすると此問題を、も一度考へ直さなくちやならないが。

三浦 家ではさう思つてたか知らんが、僕にはそんな約束は斷じて無かつた。

太田 ふうむ。さうかい。僕は今迄とし子さんと君とは、將來一緒になるものだとばかり思つてゐたが、……で君は今の關口さんの事を、一應家の人たちに相談してみたのかい。

三浦 いや、それはまだだ。するのは君が初めてだよ。

太田 君は家族の反對を豫期しないかい。

三浦 それはきつと在るだらうと思ふ。併し僕はそれを排して、決行するだけの勇氣もあると信じてゐるよ。今の決心はどんな反對に會つても枉げないつもりだ。

太田 うむ。君にそれだけの決心があるなら、僕も不肖ながら君の味方となつて努力しよう。

三浦 君が贊成して呉れたのは、僕に取つて何よりも心丈夫だ。ぢや、どうか宜しく盡力を頼むよ。

太田 それはさうと君はもう、關口さんの意向は確めて見たのかい。

三浦　いや、それもまだだ。實は之から確めようと思つてゐるのだ。

太田　（更に聲を低めて）たゞ僕は凡ての前に、醫師として一應君に警告を與へて置くが、あゝ云ふ階級に屬する女は、あの年までには大概もう處女ではないと云ふ事だけ、はつきり考への中に入れて置き給へよ。

三浦　有難う。併し僕の愛はそんな事位、許すだけの力を持つてゐるつもりだから。――

太田　それはさうだらうが、得てそんな所から結婚後の破綻が起り易いからね。

三浦　もしそんな事が起るやうだつたら、僕の志は全然無になる譯だから、誓つてそんな結果には陷らせないよ。

太田　宜しい。それなら先づ何よりも當人の意志を確め給へ。事はすべてそれからだ。（時計を出して見て）ぢや僕は失敬するよ。（立上る）

三浦　あゝ、ぢや何分宜しく頼む。

（醫師は通りがかりに一度ひで子を見、戸を開けて去つて了ふ。三浦あとの戸を閉めかけて見送つてゐる。突然ヒステリカルな潮泣が、ひで子の病床から起る。三浦驚いて振り向き、急いで病床に近寄る）

三浦　どうした。どうしたんだ。夢にでもうなされたのかい。

ひで　（切れ〲に）いゝえ、いゝえ。わたし、……あの、……いまのお話を聞いてゐましたの。

三浦　えつ。ぢや今の話をすつかり聞いたのかい。

ひで　えゝ、少し、……

三浦　さうかい。それは猶よかつた。僕も實は聞いて貰ひたかつたのだ。（興奮を抑へて）では改めて僕から云ふが、僕はおまへに結婚を申し込むよ。おまへ、それを承知して呉れるかい。それとも何か異存があるかい。

ひで　（かすかに）いゝえ、異存なんぞございませんが、わたしのやうなものが。

三浦　ひでちやん、今はそんな事を云つてる時ぢやないんだよ。僕はおまへを心から愛してゐる。おまへの方でも僕を愛して呉れる事ができないかい。

ひで　いゝえ。わたしとうからお慕ひ申しては居りましたわ、けれども、……けれども、結婚なんて事は、……一度も考へやしませんでしたの。……ですからあんまり急で、……わたし何と申上げていゝか解りませんわ。

三浦　ぢや愛して呉れると云ふのだね。それをはつきり云つてお呉れ。

ひで　えゝ、それは、……愛しますわ。

三浦　それならいゝぢやないか。二人はもう一つの心になつてゐるのだもの、もう結婚するより外に道はないぢやないか。それともおまへは他に約束した人でもあるのかい。

ひで　あら、そんな人はひとりもありやしませんわ。

三浦　ぢや他に君を思つてゐる人でもあるかい。

ひで　（鳥渡躊躇した後）いゝえありやしませんわ。

三浦　そんなら承知して呉れるね、承知して呉れるだらう。ね、ね（と一方の手を取つて打振る）

ひで　（かすかに嬉しさを包んで）えゝ。

三浦　有難う。――これでやつと僕は安心したよ。おまへを全く救ふことが出來たのだからね。

ひで　（黙つて男の手に縋つた儘、喜びに泣き入つてゐる）

（二人はしばらく同じ状態で、歡喜に醉うてゐるやうに見えたが、やがて女は涙に

ぬれた顔を上げて、おつと男を見上げる。男もおつと上から目と目を見合つた。この戀のポーズは暫くつゞく。

三浦　（やうやく我に返つて）大へん顔が涙でぬれてゐるよ。拭いちやあどうだい。

ひで　（僅かに笑つて）さう。汚ないでせう。（拭ふ）まだですか。

三浦　あゝ綺麗になつた。それでいゝ、それでいゝ。――おや又來るからね。静にしてお寝みよ。

ひで　（おとなしく）えゝ。

三浦　いろ〳〵な邪魔は入るだらうが、どこまでも二人は一緒なのだからね。いゝかい。

ひで　えゝ。

三浦　おや左様なら。

ひで　左様なら。

（三浦戸を開けようとする時、急に戸は外から開かれて、職工長國分富治と行き會ふ）

國分　（少し驚いて）あゝ社長さんですか。只今お歸りでございますか。

三浦　えゝ。――君もお見舞ですか。

國分　えゝ、さうです。

三浦　さうですか。それは御苦勞ですね。おや失禮。（去る）

（國分禮を返し、戸を閉ぢて入つてくる）

國分　社長は毎日來るのかい。

ひで　（默つてゐる）……。

國分　社長が毎日來るんなら、俺も毎日來なくちやならないからな。

（と反抗的に三浦の去つた戸の方を眺める）

（幕）

第三幕

三浦淳吉の家。

稍々廣き日本間、正面には右に床の間があつて、違ひ棚など宜しく、左に襖を立てた出入口が奥へ通じてゐる。右手は張り出し窓、障子等にて縁側と限られ、左手は襖が立て切つてあつて、それから玄關口へ通ずるやうになつてゐる。座敷の中央には紫檀の机と、陶器の火鉢とが置いてある。

幕あくと從妹のとし子が、床の間の前で活花を直してゐる。そこへ母のおふさが奥から出て來る。

ふさ　おや、おまへ一人かい。おひでは。

とし　髪結が來ましたので、お部屋で髪を結つてるんでせう。何か御用ですか。

ふさ　いえ、用といふ程でもないんだけれど、お父さんの羽織を頼んで貰ひ度いと思つてね。

とし　そんな事ならわたし致しますわ。こゝは今すぐ濟みますから。鳥渡待つて頂けないこと。

ふさ　あゝ、いつでもいゝのだから、お急ぎでないよ。――よく活かつたねえ。

とし　（活け乍ら）五日も活け放しにして置いて、餘りみつともないんですもの。

ふさ　さうだねえ。

とし　此頃にすつかり怠け癖がついちまつて、何をするのも氣が進まなくて困りますわ。

ふさ　（默つてる）

とし　ねえ叔母さん。

ふさ　なんだね。

とし　わたしあの、叔母さんに御相談しようと思つてた所なんですけれど、今丁度いゝ折ですから、聞いて下さらない。

ふさ　あゝ、聞きますともさ。

とし　あのね。此間兄さんからあつた太田さんへの縁談ね。あれを私お斷りしようかと思つてゐますの。――私もう暫く獨身でゐたいんですもの。

ふさ もう暫くもう暫くつて、いつ迄さうしても居られまいがね。

とし わたしならう事なら、一生獨身でゐたうございますわ。

ふさ さう云ふおまへの心持は、私にもよく解つてゐるんだけれどねえ。おまへにさう云はれると、私はほんとに氣の毒でならないのだよ。わたしの考へでは、おまへも知つての通り、どこまでも淳吉と一緒になつて貰ふつもりだつたのだけれど、あれがあんな我儘を云つて、どうしてもおひでを貰ふつてきかないものだから、たうとうこんな事になつて了つたんだけれど、私はほんとにおまへには濟まなくて濟まなくて。……

とし あら叔母さん。濟むの濟まないのつて、そんな事を仰有つちや困りますわ。

ふさ いゝえ。ほんとに濟まないのだもの。——だから私もあの時一生懸命云ひ張つたのだけれど。……

とし ですから叔母さんの有難いお志は、わたし一生忘れやしませんわ。けれどももうそんな昔の事、云つたつて仕方がありませんし、又兄さんにしました所が、ほんとにお愛しなさる方を奥さんになさるのが當り前ですもの。それを今度のわたしの結婚をお斷りする理由のやうにお取りなすつては、わたし却て心苦しうございますわ。

ふさ それはさうだらうけれど、私としては心に濟まなくてね。

とし それは私にしましたつて、此儘こちらに置いて頂ければ此上もない幸福とは存じますし、おひでさん位のお世話は出來ると思ふんですけれど。……

ふさ ほんとにこれがおまへだつたら、みんな水入らずで暮して行けただらうし、いろんな世話ももつと行屆いただらうがねえ。あゝして片手が無い上に、何にも家の事を知らないんだもの、私は人さまにこれが伜の嫁ですつて、ちやんと引合せる事も出來ないんだよ。

とし でももう仕方がありませんわ。あゝして正式に御結婚なすつて、兄さんが可愛がつておいでなんですもの。

ふさ 私も今ではさうあきらめて、何にも云はないでゐるけれど、あゝ云ふ素性の賤しい女だから、何か家名に障りでもするやうな惡い事でもなければいゝと思つて、ほんとに心配でならないのだよ。

とし ほんたうよ。叔母さん。それだけはよく氣をお付けなさらないと、飛んだ事になりますわ。(急に聲をひそめて)ほんとはね。わたし少しあの人の事で訝しいと思ふ事があるのよ。あの人前に何かあつたんぢやないでせうか。

ふさ 何かつて。

とし 男の人か何かよ。

ふさ それはわたし淳吉にも念を押したのだけれど、……おまへ何かそんな證據でも見たのかい。

とし いえ、證據つて程の事ぢやありませんけれど、少し變ですわ。

ふさ 何が變なのだね。

とし あの、おひでさんは妊娠してますわね。

ふさ あゝそれは私も氣がついてゐたがね。

とし 兄さんと結婚なすつてからまだ三月ですわね。

ふさ あゝさうだね。

とし 三月にしちやあ少しお腹が大きいとはお思ひなさらなくつて。

ふさ さうさねえ。さうかしら。

とし ぢや氣を付けて御覽になるといゝわ。わたしにはどうもさう思はれるのよ。

ふさ 家へ來る早々から、しよつちゆう身體が

惡い〜つて云つてゐたから、ひよつとすると身持ぢやないかと思つてゐたが、ぢやあ矢っ張りさうだつたのかねえ。さうとすれあ此儘ぢや置かれない事だね。

とし　わたしもさう思ひますわ。兄さまの爲にも、お家の爲にも。

ふさ　ぢや私もよく氣を付けて見るからね。

とし　わたしの氣のせゐばかりぢやないと思ひますわ。わたしのお友達にもお嫁に行つて、もう姙娠した人がありますけれど三ケ月位であゝ目立つものぢやありませんわ。

ふさ　さうだねえ。併し肝心の私がうつかりしてゐて、年齒のゆかぬおまへに教へられるなんて、私も年を取つたねえ。

とし　いえ。わたしだつて此間おひでさんと、御一緒にお風呂に入らなかつたら、氣が付かなかつたかも知れませんわ。でも、よく〜調べた上でないと解らない事よ。だから私も今迄幾度か申上げよう〜と思つてたんですけれど、證據もないのにそんな事を云つては、わざとおひでさんを陷れるやうに思はれますから、今迄默つてゐたんですわ。叔母さんも之からよく氣をお付けになつて、御覧になると宜しうございますわ。

ふさ　その外に何か氣付いた事はないかえ。

とし　えゝ、たゞそれだけですの。

ふさ　此後ともよく氣を付けてお呉れよ。――こんな事があるから私は反對だつたのさ。

とし　わたしだつて何も探偵のやうに、あの人の事を彼是目をつけたりしたくないんですけれど、もしそんな事だつたりすると、あんなに愛していらつしやる兄さんが可哀さうでございますからね。

ふさ　もしさうだつたら、淳吉がいくら許すと云つても、わたしが承知しないからいゝ。

（玄關の戸の鈴の音がする）

とし　おや、どなたかいらしつたやうよ。――ぢや今の事は、よく調べた上でないと解りませんから、叔母さんもまだ默つていらつしやる方がいゝと思ひますわ。

ふさ　あゝさうともさ。

（女中左手の襖をあけて登場）

女中　あの、國分さんつて方がいらつしやいました。

ふさ　まだ淳吉は歸らないつてさう云つたのかい。

女中　はい。さうしたら奥さまでも宜しうございますから、お目にかゝりたいと仰有いますので。

とし　國分つて、職工長の國分寅治かい。

女中　左樣でございませう、きつと。……何でも奥樣をよく御存じのやうな口振りでございましたから。

とし　さうかい、それぢやあ（と意味ありげに）ねえ叔母さん。私たちは向うへ參りませうよ。（女中に）そして其方を此處へお通しして、おひでさんにさうお云ひな。

女中　はい。（去る。）

（つゞいて女二人も急いで奥へ去る。やがて國分寅治、女中に案内せられて左手より登場）

女中　只今奥樣に申上げますから、どうぞ暫く。

國分　はあ、御無理を願つて濟みません。

（女中去る。國分あたりを見廻してゐる。女中再び入り來り茶を薦めて去る。しばらくして、初々しい丸髷に結つたひで子が奥の襖をあけて靜に出てくる。さうして二人は顔を見合せる）

ひで　（少し胸を轟かした樣子で、坐り乍ら）あなたでしたか。

國分　えゝ、私です。

ひて （強ひて冷淡に）何か主人に御用がおありになるとかでございますけれど、わたしが代りに承りましても、よくは解らないだらうと存じますが。

國分 いえ。その用も用ですけれど、實はそれはどうでもいゝんです。（聲を低めて）たゞ私は鳥渡あなたにお目にかゝつて、色々お話し申上げたり、お聞きしたりしたいと思つたものだから、思ひ切つて圖々しく上り込んだのです。社長のゐないのは勿怪の幸と思ひましてね。

ひて まあ、では初めつからそんなお積りだつたのですか。

國分 えゝ、少し冒險過ぎましたかね。

ひて では甚だ失禮ですけれど、どうぞ直ぐお歸りなすつて下さいまし。私はあなたとかうして用もないのにお話をしてゐる譯には參りませんわ。

國分 まあ、さうまで仰有らなくたつていゝぢやございませんか。——そんなに御迷惑なんですか。

ひて でも家の人も聞いて居りますから。——

國分 いゝぢやありませんか。別に惡い話をするんぢやなし、昔の友達が偶に訪ねて來て、世間話の一つもして歸らうと云ふだけなんですからね。——それも外の人なら兎も角、あなたと私とは一つ釜の飯を食つて、一つ屋根の下に十日近くも居た間柄なんですからねえ。

ひて どうかもうそんな前の事は仰有らないで下さいまし。そんな事を仰有つて、私を苦しめないで下さいまし。

國分 （皮肉に）はゝあ、するとあなたのやうな女でも矢張り、見捨てた前の仲間の事を考へると、心が苦しくなると見えますね。——資本家の奴隷に身を賣つた罰です。身分不相應な結婚をした酬いです。

ひて わたしもうあなたの仰有ることをお聞きする事は出來ません。どうぞお歸りなすつて下さい。お歸りなすつて下さい。（涙を溜めて）あんまりですわ。あんまりな事を仰有いますわ。

國分 さうまで仰有るなら歸ります。（と立ちかけて）が、どうかそれならもう一言だけ云はして下さい。——今、私はついこんな惡口を申上げましたが、併し、これで何もあなたを苦しめに來た譯ではなかつたのですよ。それどころか私はいつも、あなたの幸福を願つてゐるのです。而してあなたが一刻も早く、かう云ふ奴隷同樣な境遇を脱して、再び故郷の吾々の所へ歸つて來るのを待つてゐるのです。——では左樣なら。（去らうとする）

ひて 國分さん、鳥渡お待ち下さい。

國分 何ですか。

ひて わたし其中にぜひ一つ、あなたにお話しなければならぬ事がございます。いづれ其時お參りしましたら、聞いて頂きたいのでございますが。——

國分 何ですか知りませんが、私に關係のある事ですか。

ひて えゝ、さうです。

國分 ではいつでもお聞き申します。

ひて では左樣なら。（氣を取り直して）おせきさん、おせきさん。

（女中登場）

ひて あのお客樣がお歸りだから。

國分 ではどうか社長さんに宜しく。

（國分女中に導かれて退場。ひで子は暫く後を見送つて、ぢつと物思ひに沈んでゐる。）

（とし子奥から出て來る）

とし あら、もうお客樣はお歸り？

ひて えゝ、あの何ですか、矢つ張りわたしで

は解らない事だつたものですから、又お留守でない時に來て下さるやうに、さう云つて返して了ひましたの。

とし　さう。――あの方は職工長の國分でせう。

ひで　えゝ、さうでございますわ。

とし　あなた前にあの方の家においでなすつたのぢやなくつて。

ひで　えゝ。あのストライキの時分少しばかり。……

とし　あの人お幾つ位？

ひで　わたしよく存じませんわ。

とし　まだお獨りなんでせう。

ひで　さうらしうございますわ。――でも、どうしてそんなにあの人の事をお訊きなさいますの。

とし　だつて、……あの人はストライキの首領だつたのですもの。わたしどんな人かと思つてゐましたの。そんなに怖くもない人ねえ。

ひで　さうでせうか。

とし　さうぢやなくつて。わたしもつと髯の澤山な人かと思つててよ。だけど眼だけは少し怖いわねえ。

ひで　（興味なげに）さうですねえ。

とし　あの人あなたの恩人ですわね。

ひで　……と云ふほどでもないでせうけれど。……

とし　だつてあの人が、さきだちになつて、あなたの爲に色々して下すつたのでせう。（ひで子の顏を讀むやうに）あなたあの人に感謝してゐなくつて。

ひで　それあ有難いと思つて居りますわ。

とし　たゞそれだけ？

ひで　あら、どうして？

とし　いえ、何でもないんですけれど。――

（しばらく不安なる沈默。玄關の方で戸の鈴の鳴る音がする）

ひで　あら、お歸りのやうですわ。（急いで立上る）

とし　さうね。

（二人は急いで玄關の方へ出て行く。「お歸んなさいまし。」と口々に挨拶する聲が聞える。やがて淳吉を先にして、ひで子、とし子、女中ら出で來る）

三浦　（ひで子に外套を渡しながら）今日は歸りに太田の所へ寄つて來た。おまへが毎日工合が惡いやうだから、來て診て呉れるやうに云つて來た。だからもう直ぐ來るだらう。來たら早速一つ診て貰ふがいゝ。

ひで　（少し狼狽して）あら、だつてわたし何でもないんですのに。あれほど何でもないつて申上げてるのに、そんな御心配には及びませんでしたわ。

三浦　何だか毎日顏色がよくないやうだから、まあ見て貰つて置くがいゝよ。

ひで　だつて何でもないんですもの。ほんとにいゝんですもの。（外套を女中に渡す。女中それを持つて退場）

とし　（つゞいて奧へ行かうとする。）

三浦　あゝとしさん、おまへに鳥渡話があるんだがね。

とし　さうですか。

三浦　矢つ張り太田の事だがね。今着物を着換へて來るから、此處に待つてゐて呉れないかい。

とし　その事なら私も申上げたいと思つてた所ですから、お待ちして居りますわ。ではごゆつくりお着換へなすつていらつしやい。

三浦　ぢやそれから寛いで話さう。（ひで子に）今日は之から又鳥渡、町長さんの處へ行かなくちやならないから、いゝ方のを出してお呉れ。

ひで　はい。（行きかけて）あの、わたしどうしても太田さんに診て頂かなくちやなりませんの。

三浦　さうして僕に安心させて呉れるのだよ。（とし子に）ぢやすぐ來るからね。

（二人は奥の間に入る。とし子獨り殘つて呆然と物を考へてゐる。しばらくして玄關の方に俥の來た音がして、つゞいてベルが鳴る。とし子立つて出て行く。「まあよくいらつしやつて下さいました。」と云ふやうな挨拶が聞える。やがてとし子、太田醫師を伴うて登場）

とし　さあ、どうぞこちらへ。

太田　（少しはにかんで）さつき三浦君からお話がありましたので、今丁度手隙だつたものですから、早速こちらへさし上りました。

とし　ほんとにお早々と、有難うございました。兄も只今歸つた所で、奥で着換へをして居りますから、どうぞ暫くお待ち遊ばして。

太田　はあ。――何だかひで子さんがお惡いやうな話でしたが。――

とし　えゝ、少し惡いのかも知れません。

（しばらく沈默。二人は顔を上げて、偶然視線を合せ、あわててそれを外らして了ふ）

太田　（思ひ切つて）あの僕の事はもう三浦君からお話があつたと思ひますが。……

とし　（惡びれずに）えゝ、承つて居りました。

太田　それで……？

とし　それで、……私のやうな不束者でも、それまでに仰有つて下さるのにつけ上つて、我儘を申すやうな譯ではございませんが、わたしも、……わたし相應にいろ〳〵考へたい事がございまして、今迄のび〳〵に御返事も致しませんでしたが、どうぞお心に背くやうな事を申上げても、お許しなすつて下さいまし。

太田　いゝえ。それあなたの一生の大事なんですから、どうぞよく〳〵お考への上、どちらとも御返事下されば、私も彼是思ひ殘しは致しません。それに又實際僕にして見ますと、あなたの良人になる資格があるかどうか怪しいもので、……只もし資格が少しでもあるとすれば、それはあなたを愛する點に於て、どの誰にも劣らないと云ふだけの事なんですから。――

とし　あら、そんな事を仰有つては、私なんぞ何と申していゝか解りませんわ。私なんぞにはほんとに分に過ぎて〳〵ゐるのは解り切つてゐるのですけれど、――あら、御免下さいまし。こゝでこんな事を申上げるのでございませんでしたわ。

太田　僕もこんな話をする積りぢやなかつたのですが、厚顔しい事ばかり申上げて失禮しました。

とし　いゝえ、私こそ。――どうぞ御免遊ばして。

太田　ではあの私にはおかまひなく。

とし　いえ、あの、……兄も直ぐですから。……それにわたし別な話ですけれど少々あなたにお願ひがございますので。……

太田　改つてお願ひと云ふのは何ですか。私で出來る事なら何でも致しますが。……

とし　あの妙なお願ひですけれど、今日あなたはおひでさんを御診察下さるのでせう。

太田　えゝ。そのつもりで上つたのです。

とし　あの、おひでさんは確に御病氣ぢやないと思ひますのよ。わたし確に妊娠だと思ふんですけれど。……

太田　はあ、僕もそんな事だらうと思ひました。
それで？

とし　それであの妙なお願ひですけれど、御診

察なすつた上で、何ヶ月位におなりだか、教へて頂く譯には參りますまいか。

太田 そしてどうなさるんです。

とし わたし叔母さんに賴まれましたの。

太田 あゝさうですか。そんな事ならお易い御用です。尤も診察したばかりでは、確とした所は解りませんから、御本人にお聞きなさるが一番ですよ。

とし えゝ、それもさうですけれど、あなたの方からもお伺ひしたいのですから。どうかほんとの所をお聞かせなすつて下さい。

太田 えゝ、畏りました。

（三浦淳吉、奥より出で來る）

三浦 やあ、もう來て吳れたのかい。知らずに茶を一ぱい飮んでたものだから、待たしてどうも濟まなかつたね。

太田 うむ。丁度手があいてゐたんで、取るものも取り敢ず來た譯さ。……どうだね、御病人は。今とし子さんに伺ふと、さう大した事ではなささうだが。……

三浦 うむ。別に惡いと云ふぢやなからうが、どうも樣子が尋常ぢやないと思ふから、まあ一つ診てやつて吳れ給へ。さうすれば僕も安心するから。

太田 ぢや早速拜見するとしよう。お部屋においでないのかい。

三浦 うむ。今女中に案內させるから待ち給へ。

とし あのわたし御案內しますわ。

太田 それは恐縮ですな。

三浦 だがとしさん。おまへは僕と、……

とし いゝえ、あの事なら今も太田さんとお話したんですけれど、もう少し考へさして頂きたいのよ。いづれ猶お歸りになつてからね。

三浦 さうかい。（太田に）それぢや君どうぞ宜しく。

とし （太田に）ではどうぞこちらへ。

太田 どうも恐れ入ります。

（二人奥へ入る。三浦一人殘つて二人を見送り、少し笑を含んでゐる。そこへ奥から父の淳藏登場）

淳藏 淳吉。おまへ一人か。

三浦 えゝ、さうです。

淳藏 どうだな、近頃會社の方は。相變らず職工に耶蘇教の說教をしてゐるかい。

三浦 （苦笑して答へず）

淳藏 昨日もある處で、倉庫會社の前島さんに會つたが、あの人もから云つて嗤つてゐたぜ。おまへの遣り口はまるで、飼犬を座敷に上げて置くやうなものだつて。犬つて奴は幾ら食つても、滿腹するつて事を知らないから、飼主が吳れれば吳れるだけ食つて了つて、別に有難かつたと云ふ顏もしないんだ。そして終ひにはそれにつけ上つて、ちつとやそつとの事をしたんでは、却て手を嚙むやうになるだらうつてな。

三浦 嗤ふ奴には嗤はして置くがいゝです。どうせそんな頑固な人たちには、僕の考へなんぞ解るもんぢやないんですから。

淳藏 そこだて。わしもさう思つてるんだ。まつたくおまへの考へは高遠過ぎて、俺たちには解らないんだよ。俺たちどころか誰にも、肝心の職工にも解らないんだ。

三浦 それあ今迄職工と工場主の間には、色色な惡い牆壁があつた爲に、僕の赤心から盡してゐる事も、一時は諒解されなかつたでせうけれど、幸に此頃は職工も私に信賴を持ち始めた樣子です。これから私の理想も、着着實現の緖につくに相違ありません。もう大抵今までの惡習で惡い所は除いたし、新しい設備はそろ〳〵効果を擧げて來るし、私は此頃心から嬉しく思つてゐるんです。

淳藏　それあ大變結構だが、どうも收入は餘り思はしくないやうだね。どうせその理想とか何とか云ふやつは、金には緣の遠いものなんだらうが。……

三浦　まあ今に御覽なさい。私の心がすつかり職工に解つて、すべての職工が私と一つになつて、ほんとに精神的に働いて吳れる時が來れば、生產高はきつと今の倍位に上りますから。

淳藏　さうなつて吳れれば俺も文句はないが、それが駄々つ子の夢でなければいゝがね。

三浦　何でも宜しうございます。私の手に社長の權利がある間は、私の好きにさせて頂きます。而して、どうしても私の考へが行はれず、又その爲に惡い結果にでもなつたら、その時改めてお父さんのお指圖を仰ぎます。今そんなケチをつけて頂かなくともようございます。

淳藏　それあ好んで俺も云ひたくはないが、おまへのやり方が子供じみてゐて、先が見えてゐるから心配してゐるのだ。

三浦　子供じみてゐても何でも、私はやるだけやり通して見せます。御心配をして下さるにしても、まだ早過ぎるかと存じます。

淳藏　それあやれるだけやるのはいゝさ。たとひそれが駄目だつたにしても、おまへ一人の修行にはなるんだから。――兎に角おまへももう少し經てば、仁慈一點張りで行かない事が解るよ。

三浦　でもお父さんのやうに暴虐一點張りでは猶更行きますまい。

淳藏　まあさうは云はぬものだて。今にわかるからなあ。(と立上る)

三浦　さうですとも。きつと今に解ります。

(父嘲笑を浮べつゝ退場。入れちがひに太田醫師登場)

三浦　あゝ濟んだかい。どうも御苦勞だつたね。それで樣子は。

太田　(妙な笑を含んで)なに心配することはない。ありや病氣ぢやないよ。却てお芽出度だぜ。

三浦　それあ僕も感づいてはゐたが。……

太田　幸に外には何處も惡くないから、まあ精々大切にし給へ。猶少し君に話したい事があるから、暇だつたら今夜にも來て吳れないか。

三浦　それにとし子の事もあるから、今夜町長の處の歸りに寄らう。あれの返事を齎して行くよ。

太田　どうも色々濟まないね。ぢや是非來給へ。僕はこれで失敬する。

三浦　さうかい、忙しい所を御苦勞だつたね。

太田　ぢや大切にし給へ。あとで健胃劑か何かよこすから、まあそんなものでも服用させときやあ、顏色なんざあ直ぐ癒るよ。ぢや失敬。

(太田醫師玄關の方へ退場　三浦見送つて出る。とし子奧から登場)

とし　(見送つて戾つて來た三浦に)太田さんはもうお歸りになつて。

三浦　あゝ、今歸つたよ。ぢや約束によつて話を聞かうかね。

とし　あの、わたしその前に一つ兄さんに是非伺ひたい事があるんですけれど、聞いて下すつて。

三浦　改つて又何だい。

とし　兄さんは嘸お厭でせうけれど、おひでさんの事に就て、是非お耳に入れとかなくちやならない事があるのよ。

三浦　どうしておまへはさうひでの事ばかり氣にするんだい。

とし　わたし何も氣にする譯ぢやないんですけ

れど、——みんなあなたの事を思ふからばかりですわ。あなたのお身に、悪い事がないやうにと思ふからばかりですわ。

三浦　それなら有難く聴くよ。一體何だい、その話つていふのは。

とし　（改つて）兄さん。あなたは心からおひでさんを愛していらつしやるわねえ？

三浦　それは云ふまでもない事だ。

とし　ではあの方は兄さんを、それだけ深く愛していらつしやるでせうか。

三浦　勿論愛して呉れてゐると思ふ。

とし　ほんとにさうお信じになつて？

三浦　うむ。さう僕は信じてゐる。

とし　どこまでもおひでさんの愛を純潔だと？

三浦　さうだ。

とし　もしこゝに兄さんのその考へを、裏切るやうな事實が在つたらどうします。

三浦　そんな事實は絶對に在り得ないよ。

とし　でもあつたらどうします。あなた以外に愛を注いだ證據があつたらどうします。

三浦　そんなものはあり得ないと云つてるぢやないか。

とし　ぢやあ申しますがね。これは勿論證據と云ふ程のことでないかも知れませんが、私どもにはどうも不思議でならない事があります。聞いたら兄さんもきつとお驚きなさるに違ひありませんわ。

三浦　何だ、云つて御覧。

とし　兄さんがあの方と結婚したのは、やつと三月ばかり前ですわね。

三浦　さうだ。が、それがどうしたのだ。

とし　あのおひでさんは只今妊娠していらつしやるわね。

三浦　それは薄々僕も知つてゐた。

とし　太田さんによくお聞きなすつて？

三浦　別に精しく聞かない。只妊娠だとは云つて行つた。それで？

とし　あのおひでさんの妊娠は、どう見てももう五ツ月位なお腹ですよ。

三浦　五ツ月だつて？

とし　そら御覧なさい。その通りお驚きなすつたでせう。やつと三月前に結婚なすつた方が、五ツ月位なお腹をしていらつしやれば、誰が見たつて不思議ですわ。

三浦　でも確にさうとは解らないぢやないか。

とし　太田さんも其位だつて仰有つてよ。——五ツ月前つて云へば、丁度あのストライキの時分か、遲くてもあの方が病院にいらした時分ですよ。

（しばらくの間。とし子勝誇つたやうに見守る）

三浦　（少し悲痛な聲で）ぢや別に不思議はないぢやないか。

とし　どうして不思議ぢやないんです。

三浦　その頃から僕はあれを愛してゐた。

とし　ではあなたに覺えがあるんですか。

三浦　（低く、併しはつきりと）恥しい話だが、ある。

とし　（意外な答に驚いて）まあさうですか。

三浦　（蒼白な顔を上げて）話はそれだけかい。

とし　えゝ。では、もう申上げる事はありません。

（二人ともしばらく沈默。各々ぢつと考へ込む）

とし　（突然ヒステリカルに）兄さん、疑つて濟みませんでした。どうぞお許し下さい。そして存分に叱つて下さい。わたしほんとに心まで醜い女なんです。手柄顔におひでさんの缺點を探し立てて、それであなたの愛を動かさうなぞと思つたのは、ほんとに何と云ふ淺ましい心根だつたのでせう。わたしには今やつと兄さんのおひでさんに對する深い愛が解

りました。そして私なんぞは到底、兄さんの愛を受ける資格のないのを知りました。私が今まで太田さんの縁談を延び〳〵にして承知しなかつた心の底には、いつかあなたの愛を受ける機會があるのを、ひそかに信じてゐたからでした。併しもうそんな事は思つても恥しうございます。あなたのおひでさんに對する愛は、ずつと〳〵深いんですもの。

三浦 さうおまへが打あけて呉れると、却て僕が恥しい位だ。

とし わたしもう決心しました。そして兄さんのお勸め通り、太田さんの所へ嫁きます。あの人はあれほど迄に仰有つて下さるのですから、私も出來るだけの愛をあの方に獻げます。ですからどうぞ今迄の事はお許し下さい。

三浦 それぢやさう決心して呉れたかい。それで僕もやつと重荷を下したやうな氣がするよ。

とし 兄さん！ お許し下すつて。

三浦 あゝ、僕の方こそ！

（二人は感激の眼を見合せる。しばらく間。奥で母のとし子を呼ぶ聲がする）

とし はい。（立上る）

三浦 ぢや今夜太田へさう云つていゝね。太田もきつと喜ぶよ。

とし （微笑して）どうぞよろしくね。（退場）

（三浦一人になると氣が弛んで、思はず惆しげな吐息をなし面を伏せて思ひに沈む。やがて氣を取り直して、微かに「さうだ。矢つ張り許さなくちやならない。」と獨語する。しばらくして手を叩いて女中を呼ぶ）

女中 （登場）何でございますか。

三浦 あの奥さんにね、これからすぐ出掛けるから、羽織と袴を持つて來るやうに云つてお呉れ。

女中 はい。畏りました。（退場）

（しばらくしてひで子、羽織と袴を持つて靜に登場）

ひで もうお出掛けでございますか。

三浦 あゝ鳥渡行つて來る。

（二人は默つて着せたり着たりする）

ひで （着せ終ると共に、決心した語調で）あのお出掛けになる前にわたし是非お話しなくちやならない事があるんですが。……

三浦 （ある豫期の心持を匿して）何か大切な事でもあるのかい。

ひで えゝ。是非申上げなくちやなりませんの。あの、……私の身に就ての事なんですけれど。

三浦 そんな事なら歸つてからゆつくり話しちやどうだい。

ひで いえいえ、只今是非申上げなくちやなりませんわ。もう此儘一刻でも默つてゐる事は出來ませんわ。――あの、わたしあなたに對してほんとに濟まない事を致しました。（泣きながら）申し譯のない事になつて了ひました。

三浦 （悲痛な面持で）濟まないつて云ふのは、ひで子、おまへの腹の子の事を云つてゐるのかい。

ひで あの、……それをもう……？

三浦 おまへが身持だと云ふ事は、さつきある人から聞いて知つた。

ひで では今日太田さんから、すつかりお聞きなすつて。

三浦 いや、太田からではない。が、とに角おまへの妊娠が、五ケ月位だと云ふ事は聞いて知つた。おまへそれはほんたうかい。

ひで はい。（泣崩れる）どうも濟みませんでした。わたしもとからあなたの妻になれる身體ぢやなかつたのです。

三浦 ぢやあそれが初めから解つてゐたのかい。妊娠してゐるのが解つてゐながら、僕の

所へ來たのかい。

ひで　いゝえ、いゝえ、いくら恥知らずの私でも、まさかそんな事は出來やしませんわ。あの、見えるものは見えませんでしたが、ほんの一時の障りだと思ひまして。そんな事よりもわたし、あなたのお傍へ參れると思ふと、胸が一ぱいだつたものですから。――それだけは眞實でございますわ。

三浦　さうかい。――だがその相手は誰だい。併しこれは何もおまへを咎めるために聞くんぢやないんだよ。たゞ念のために聞いとくだけなんだ。

ひで　國分さんです。

三浦　そしていつ頃。

ひで　あの人の家にゐた時分ですの。ある晩夜中にふと眼をさまして見ますと、いつの間にかあの人の身體が私の傍にゐたんで、わたしはほんたうに吃驚しましたの。わたしそれつきり何も覺えちやゐません。

三浦　さうかい。僕はおまへがさう打あけて哭れたのを感謝するよ。

ひで　いえいえ。どうぞそんな事は仰有らずに下さいまし。から何もかも申上げたからは、わたしもうお家にはゐられないものと決心して居ります。ですからどうぞ御存分にお責めになつて、どこへでも突き出して下さいまし。どうぞお心の癒えるまで、打つとも蹴るともなすつて下さいまし。それがわたしのお願ひでございます。せめてあなたに叱つて叱つて、責めさいなんで頂ければ、この心が幾分でも霽れます。而してどうぞ早速御離緣なすつて下さいまし。

三浦　（決然と）おひで！　おまへは何を云つてゐるのだい。おまへは俺の愛を信じないのか。俺の心がおまへにはまだ解らないのか。

ひで　（男の威嚴に打たれて顏を上げる）

三浦　おひで。おまへは僕が先刻ある人から、お前の妊娠五ケ月にも拘らず、知らずに捨てて置くのかと云はれた時、僕が何と答へたと思ふ。僕は其時卽座に、おまへが病院にゐた頃から、おまへを愛した覺えがあると答へた位だよ。たとひおまへの身の過去に暗い所があつても、僕のおまへを愛する心に變りはないんだ。僕はもとよりおまへの過去をすつかり許してゐるのだ。

ひで　（肩をふるはして泣きつゝ）濟みません。濟みません。

三浦　おひで。考へて見ると僕たちも、初めから幸福な一對ではなかつたねえ。世間の人からは嗤はれ、家の者からは反對されて、やうやう此處まで切り拔けて來ると、又こんな試錬が待つてゐたんだ。が、僕はこんな事に敗けはしないよ。もつと／＼苦しい事でも耐へ忍ぶよ。僕らは既に萬難を排して結婚したのぢやないか。この後とても萬難を排して一緒にゐなければならないんだ。いゝかい。解つたかい。

ひで　はい。――ですけれどもわたし。……

三浦　僕のやうに遠く理想を目ざして、絕えず進まうと云ふ人の道は、どうせ報いられない淋しい道なんだ。僕はもとからそれを覺悟してゐた。併し僕はおまへを得た時、天が僕に僕の覺悟を嘉して、おまへといふ道伴れを授けて下すつたのだと思つた。そしておまへを理想實現の象徵のやうに思つて、どんなに辛い時でも慰められて來たのだ。何に破れ、何に失敗しても僕にはおまへがある、おまへがある中は、僕の理想も破產しないと思つてゐたのだ。――おひで。おまへがさうして僕に離婚を要求するいぢらしい心根は、僕も泣きたいやうな思ひで察してゐる。併しこんな事で二人は離婚なんぞ出來やしないぞ。そんな

風に考へたらおまへは僕の愛を見遁へてるのだ。

ひで それは解つて居りますけれど。……

三浦 おひで。おまへからそんな事を云ひ出さないで、どうか僕と一緒にゐてお呉れ。今おまへに去られたら僕はどうなる。僕の生活は、僕の事業はどうなる。僕の獻身の事業が、僕に最も近い、足許の家庭の破綻から始まつて、すべてが根本から覆へされたらどうなる。おまへは僕の理想の柱石なんだ。中心なんだ。だからどうか居て呉れ。僕にはまだまだこんな事を忍ぶ力があるんだ。まだ〳〵大きな苦しみに堪へる力があるんだ。おまへの心は解つてゐる。だからどうかゐて呉れ。ね。ね。解つたかい。

ひで （微かに）わかりました。

三浦 おや決して捨鉢な心を起しちやいけないよ。いゝかい。その腹の子は飽くまで僕の子なんだからね。

ひで ほんとに、ほんとに濟みません。

三浦 ぢや僕は行つて來るからね。涙を拭いて、安心してゐるんだよ。いゝかい。（時計を見て）あゝ遲くなつた。ぢや行つて來るよ。

ひで では行つていらつしやいまし。

（二人は玄關の方へ出て行く。やがてひで子は獨り涙を拭き乍ら歸つて來る。脫ぎすてた着物を疊みかけて、思ひ出したやうに嗚咽する。夕闇が室内に忍び入つて、隅々はもう物色し難いほど暗い）

ひで （泣き乍らかすれ〳〵に口走る）あゝは云つて下さるけれど、……此儘居ちやあどうしても濟まない。……どうしても濟まない。（と、泣き崩れる。やがて決心したやうに顏を上げて）さうだ。……矢つ張りさうしよう。……此儘居ちやあどうしても濟まない。……

（幕）

第四幕

職工長國分寅治の家。

舞臺は第一幕に同じ。時は前幕より數時間後の夜。——

幕あくと寅治微醺を帶びて、例の如く凝視の姿勢を續けてゐる。其眼は相變らず、反抗に輝いてはゐるが、其姿にはうすら淋しげな影がある。おつながそこへ訪れる。

つな （戸を開ける）今晩は。

國分 あゝ、おつなさんか。丁度淋しがつてた所だ。まあ入つて話して行かないかい。

つな （入り來る）まあ、今夜は珍らしくお酒を飮んでるのね。一體どうしたの。

國分 （二合入の銚子を示して）なあに僅かこれだけよ。鳥渡人眞似をして飮んでみたが、ちつとも面白くなりやしない。

つな 何かお酒でも飮まなくちやならない譯があつたの。——又おひでちやんの事でも思ひ出したんぢやなくつて。

國分 馬鹿あ云ふない。おひでの事なんざあ、何とも思つちやゐないよ。あいつあもう今ぢやあ、立派な社長の奥さんぢやないか。こちとらは人種が異ふんだ。御立派な玉の輿にお乘んなすつたんだからな。

つな 何とも思つちやゐないつて云ひ乍ら、あんな厭味を云つてるよ。そんな廻りくどい事を云はないで、いつそ未練があるならあると、はつきり白狀してお了ひよ。其方がよつぽど胸が霽れるわ。

國分 何を云つてやがるんだ。未練なんぞあつて堪るものか。もう顏を見るのも厭だよ。

つな 顏を見るのも厭だつて、おまへさん其後あの人に會つたの。

國分　うむ。實はな、今日あいつの家へ行つたんだよ。而して鳥渡會つて來たんだよ。

つな　まあ、おまへさんが出かけて行つたの。

國分　なあに社長の所へ用が在つてね。出かけて行つてみると、これが留守なんだ。そこでふいと思ひついてね。留守を幸と、奥さんにお目にかゝり度いと申入れたのさ。

つな　で、おひでさんは出て來て。

國分　うむ。出て來たには出て來たが、いやはや、劒もほろゝの御挨拶さ。さすがに社長の奥さんになつて了ふと、見識が違つたものだと思つてねえ。

つな　まあそんなに高ぶつてゐるの。

國分　當人は高ぶつてゐる積りぢやあるまいけれど、餘りそつけなく歸れ〳〵と吐しやがるんで、俺も少々腹が立つたから、二三言惡口を叩きつけてやつた。

つな　そしたらどうして。

國分　なあにそれだけの事だがね。——さうして歸れ〳〵つて追ひ歸し乍ら、いづれ話さなくちやならぬ事があるから、其中に行くつて御挨拶なんだ。

つな　隨分威張つたものねえ。話つて何があるんでせう。

國分　大方一生俺に來ないで呉れとでも云ふんだらう。でなきやあ昔の事を口止めでもするんだらうよ。——此の俺の口が一つ辷れやあ、大きな面をして社長の奥さんでございと云へなくなるかも知れないんだからな。思へばあの社長つて奴も馬鹿な奴よ。他人のお古を頂いて、有難がつてゐるんだからな。

つな　大さう家では強いのね。さう面と向つて云つておやりになればいゝのに。

國分　ほんとに今考へると云つてやりたいやうな氣もするが、まさか俺だつてさうは云へないからな。

つな　矢つ張り弱味があるからでせう。

國分　何の弱味が？

つな　惚れた弱味さあね。

國分　馬鹿あ云ふない。誰が。——

つな　いゝえ、きつとさうよ。さうに違ひないわ。

國分　何を云つてやがるんだ。

つな　さうだわ。さうだわ。きつとさうだわ。

國分　うるさいなあ。餘り餘計な事を云ふと追出すぞ。

つな　ぢやわたし歸るわ。だけどおまへさん譃をついても駄目よ。ちやんと未練が額に出てるんだから。（立上る）

國分　まだべら〳〵云つてやがるのかい。

つな　もう何にも云はずに歸つてよ。左樣なら。（戸口の處で）だけど國分さん、おまへさん自暴酒だけはおよしよ。見つともないし、體にさはるからね。左樣なら。（戸を急に閉めて去る）

國分　餘計なお世話だ。馬鹿め！（彼は又おつなの言葉に胸中の悶えを大きくして、殘つてゐた酒を續けざまに呷る。さうして又もや例の凝視の姿勢に歸る。長い間。戸の外で女の聲がする）

ひで　（外から）御免下さい。

國分　誰です。お入んなさい。

ひで　（戸を開けて入り來る。蒼白な顏をしてゐる）わたくしでございます。

國分　おやあなたは……あなたでしたか。（強ひて驚きを隱して冷淡に）何か此處に御用があるんですか。

ひで　はい。今日先刻もお話し申上げた通り、少々あなたに聞いて頂かなくちやならぬ事がございまして、それでわざ〳〵參つたのです。いよ〳〵お話しなくちやならぬ時が來たのです。

國分　はゝあ、さうですか。それは又餘りに早く來たものですね。先刻はあんなにまでして追ひ歸した位だから、まだなかなか御光來にはなるまいと思つてゐましたよ。

ひで　私もこんなに早く上らうとは思ひませんでした。けれど、是非がない事だから仕方がありません。

國分　是非がないと仰有るからは、餘程重大な御用だとは思ひますけれど、社長の奧さんともあらう者が、今時分一人でこんな處へおいでになつては、お家に濟まなくはございませんか。幸ひ誰も見てゐるものがございませんから、今の中に、默つてお歸りなすつたら如何です。誰かに見られて知られでもすると、お家の方が不首尾になりやしませんか。

ひで　わたしもう家の事なぞは考へては居りません。たゞ是非一度あなたに聞いて頂きに參つたのですから。

國分　一體あなたが私に用のある筈はないんですがね。

ひで　申上げる前にお斷りして置きますが、わたしはそれをあなたにお話したからつて、別段その償ひをして頂かうとか、後始末をして下さいとか云ふのぢやございませんから、そこは御心配下さらなくても宜しうございます。たゞわたしはそれを申上げないと、どうしても自分の心に濟みませんし、思ひ殘りになるからでございます。

國分　妙に改つた前置なんぞして、一體それは何だと云ふのです。

ひで　（低く、併し明瞭に）わたし妊娠して了ひました。お腹にゐるのはあなたの子です。

國分　何だつて。（急に荒々しい言葉になる）俺の、…俺の子を孕んだつて。馬鹿あ云つちやいけない。そんな話があるものか。いくら天道樣が惡戲好きだつて、そんな筈があるものか。

ひで　でも事實ですから仕方がありません。私のお腹は五ツ月です。あれから丁度五ケ月になります。

國分　併しそれが確かどうか解らんぢやないか。

ひで　いゝえ私が第一さう思ひますし、お醫者樣もさう仰有つたさうです。其上家の人までさう氣付いてゐます。

國分　ふうむ。眞實かい。（と考へ込んでゐたが、突然奇妙な笑聲を擧げて）はゝゝゝ、皮肉な天だなあ！　俺の子を持つて、社長の處へ嫁に行くなんて。勞働階級から資本家に持つて行くにしては、まるで結構過ぎる位結構な持參金だ。はゝゝゝ。

ひで　（顏をそむけて聞いてゐたが）まあ、よくあなたはそんな事を云つて居られますのね。――それは成程あなたのお言葉の眞似をすれば、持つて行く時には結構な持參金でせうけれど、持つて歸る時には猶更結構な手切金でせうからね。

國分　何？　それぢやおまへは離緣されて來たのだな。

ひで　（冷然と）いゝえ。

國分　ぢやあどうしたんだ。家の人は何と云ふんだ。

ひで　あの人は立派に許して下さいました。私が何もかも打明けたのに對して、一言も咎め立なんぞせずに許して下さいました。

國分　ぢやあもう俺の事も云つたのだな。

ひで　えゝ。眞つ先きに云はなくちやならぬ事ですもの。

國分　それで許すと云ふのか。おまへを元のまゝに妻として置くし、俺の子を自分の子として育てると云ふのか。

ひで　えゝ、さう確かに仰有いました。

國分 それぢやおまへは此處へ何しに來たのだ。

ひで ですから先程も申上げた通り、只それだけの事を聞いて頂くためにです。

國分 おまへが此處へ來る事は、家へ云つて來たのか、それとも家では知らないのか。

ひで 家では知りません。默つて出て來ました。

國分 ぢやあ家へ知れたらどうするのだ。そのため折角許されたものを許されなくなつたらどうするのだ。おまへが今時分此處へ來たと知つたら、いくらお人好しの社長でも、二度は許さないかも知れないぢやないか。

ひで ですからそれも先刻申上げた通り、仕方がないと覺悟して居ります。さうなつたら家へ歸らないばかりです。

國分 而して此處にゐようと云ふのか。それで俺の處へ來たのだな。

ひで いゝえ、それも先刻申上げた通り、……

國分 「皆まで聞かずに興奮して」併し俺の處へ尻を持ち込んだつて、今更俺の知つた事ぢやあ無いよ。先刻はおまへの家を出る時、いつでもおまへが歸つて來れあ、喜んで迎へるやうな事を云つたが、あれあ當座の御座なりだよ。誰が一旦他人の妻になつた女を、有難がつて頂戴するものか。俺はあの甘い社長とは違つて、おまへに惚れちやあ居ないんだからな。今更身持のお世話なんざあ、眞つ平御免を蒙るよ。

ひで だからあなたのお世話なんぞお願ひしません。

國分 ぢやあ何處へ行くんだ。

ひで どこへでも參ります。

國分 どこへでもつて?

ひで どこだかわかりません。たゞ行く處までは行くでせう。

國分 おまへどうかしてるね。

ひで どうもしてやしません。

國分 おまへまさか死ぬ氣ぢやあるまいね。

ひで (淋しく笑つて)わたしに死ねますかしら。

國分 そんなら何故家を默つて出たりするのだ。許して呉れたのを何故又壞さうとするのだ。おまへは第一此處へ來るのが間違つてゐる。だから早く家へ歸るがいゝ。許して呉れたものならば、平氣で許されてるがいゝぢやないか。

ひで あの人が幾ら許して下すつても、わたしの心が許して頂けません。あの人の薄い愛の心につけ入つて、わたしはこの汚れた身體を許して頂くに忍びないのです。あの人はそれでなくとも、色々な苦勞が多過ぎるのですもの。わたしは其上に忍ぶことの出來ない苦しみを、持ち込む事は出來ませんわ。

國分 併し、それは當然あゝいふ種類の人間の、背負はなくちやならない重荷なんだ。いゝから苦しむだけ苦しませてやるがいゝ。さう云ふ事ででも苦しまなければ、贅澤すぎる奴らなんだ。いゝから歸れ歸れ。さうして幾らでも苦しませてやれ。俺には今、あれがおまへを許すと云つた苦しい心持がよく解るぞ。苦しがれ、苦しがれ。これがおまへたちの天刑だ。資本家階級に居るものの天罰だ。さあおまへは歸れ。眞つ直に三浦の家へ歸れ。

ひで あなたの只今のお言葉で、あなたのお心はよく解りましたわ。あなたは御自分の主義のためには、どんな酷い事でも平氣でなさるお方なのね。私は勿論歸ります。到底あなたの處になんぞ居られませんわ。そしてお言葉通りに歸りますわ。けれどもあなたのお望み通り、あの人に苦しみを與へるために、歸るかどうかは解りません。(立上つて)では左

樣なら。

國分　あゝ左樣なら。――もう之つきり會はないから、おまへもたつしやでゐるがいゝ。

ひで　有難う。あなたこそ御機嫌よう。

（ひで子影のやうに出て行く。國分しばらく呆然として、閉めて去つたあとの戸口を眺めてゐる）

國分　（一つほつと吐息をして）あゝあ、又酒が醒めちまひやがつた。（と殘つてゐた酒を呷る）

（何となく不安な間。職工中村入り來る）

中村　國分さん、お家かい。

國分　やあおまへさんか。まあ入らないか。

中村　（入つて來て）今あなたの處から出て行つた女の人は誰ですい？

國分　おまへ會つたのか。どつちへ行つたんだい。

中村　そこの處で會つたが、向うの踏切の方へ行きましたよ。

國分　ふうむ。少し訝しいな。

中村　どうしたんですい、一體。

國分　なに、あれあ通りすがりの女なんだがね、今道を聞いたから教へてやつたのだが、……（獨語するやうに）それぢや暗いんで間違へたんだな。

中村　さうですかい。

國分　（凡てを拂ひのけんとする如く盃の滴を切つて）どうだ。一盃やらないか。

中村　やあ、今夜は珍らしい御馳走ですな。ぢやあ一ぺえ頂きませうかな。（盃を取る）

國分　（注ぐ。酒僅かしか無し）やあこいつは濟まなかつたな――ねえおい中村。濟まないが、濟まない序にもう一つ濟まないで呉れないか。

中村　どうするんですい。何を云つてるんですい。

國分　（徳利を振つて見せて）どうかこいつを一と走り頼みたいんだ。少し遠いけれど端れの三河屋まで行つて、俺からだとさう云やあ、通ひで寄越して呉れるんだ。一升ばかり頼む。俺はもう一二合で澤山だから、あとはみんなおまへさんに御馳走するあ。祝ひ酒だか自棄酒だか、弔ひ酒だか知らないが、兎に角一ぱいやらなくちやならない譯があるんだ。

中村　へゝえ。さうですかい。そんなら一つ行つて來て上げやせう。

（中村徳利を下げて出て行く。やゝ長き間。夜のやうやく更け行く氣配がする。暫くして三浦淳吉、蒼ざめたる顏と血走れる眼にて、戸口の所へ急ぎ現はれる）

三浦　失敬。（入つて來て見廻し乍ら）早速だが、此處へ僕の妻が來はしなかつたかね。

國分　あゝ、誰方かと思つたら社長さんですか。まあどうぞお上りなすつて。

三浦　いえ。さうしちや居られません。――あの、ほんとに妻が此方へは來はしませんでしたかね。

國分　（云つたものかどうかと思ひ煩ひ乍ら）奧さんがですか。さうですね。

三浦　（强く）來ませんでしたかね。

國分　いえ、えゝと、もう少し先刻、鳥渡おいでになりました。

三浦　（急き込んで）そしてどうしました。

國分　（もうすつかり決心して）何だか私の子を孕んで、あなたに濟まぬとか何とか云つてゐましたが、私は諭して歸しました。おとなしく歸つて行きましたから、もう彼是お宅へ着いた時分と思ひます。

三浦　いえ併し、確に宅へは戻つて來ません。眞つ直ぐ歸つたならぶつつかる筈ですが、中途でも會ひませんでした。あれはきつと何處か外にゐるのです。

國分　ではひよつとすると、――（と顏を見合せる）

三浦　さうです。多分、さうだらうと思ひます。私もそれを恐れてゐるんです。――ではかうしちや居られません。私は一と通り探してみます。失禮します。（慌しく去らうとする）

國分　（鳥渡考へてゐたが）三浦さん、鳥渡お待ち下さい。

三浦　（振り返つて）何ですか。

國分　私あなたに一言云ひたい事があります。かう云ふ機會を利用するのは、少しく殘酷な態度のやうに見えますが、丁度好い折だから一應お聞き取り下さい。

三浦　何ですか。早く云つて呉れ給へ。

國分　三浦さん、よくお聞き下さい。若しこゝであの關口ひでが、悲慘な結果に陷るやうな事があつたら、それは全くあなたの責任ですよ。あなたのやくざな仁慈と、わざとらしい寛大との罪ですよ。あなたはなまなか彼女を救はうとして、却て彼女を苦しめたのです。强ひて彼女を許さうとして、實は却て彼女を責めてるのです。あなたはまだそれに氣が付かないのですか。こゝでもあなたの仁慈主義は、――温情主義は破綻を起してるのです。

三浦　何ですつて。――

國分　まあお聞きなさい。ひとり此の關口ひでの場合ばかりではありません。あなたはもうとうに、吾々に對するあなたの仁惠的態度から、温情主義から目醒めてゐなければならなかつたのです。あなたは吾々に取つて、ほんとにお情深い工場主でした。常に吾々に對して、温情を以て臨んで呉れました。併しあなたのその態度には、丁度慈善を施す人のやうな、恩惠を與ふる人のやうな、喜びと誇りとが含まれてゐます。工場主の仁慈を只管有難がるのは、封建時代からの遺物です。今日では恥づべき奴隸根性です。吾々覺醒した勞働者は、それを却て侮辱に感じます。吾吾は工場主と自分らとの間を、常に正當な對等關係に置きたいのです。正當に要求するものを、正當に與へて呉れればそれでいゝのです。餘計な「お情」や「御恩」は要らないのです。關口ひでの場合を一例に取つて見れば、彼女の治療代と扶助料とを正當に出して下さればそれでよかつたのです。小說的な結婚なんぞに依つて、「救つて」なんぞ頂かなくてもよかつたんです。どうです、お解りになりましたか。

三浦　（默つてゐる）……。

國分　かう云ふ匆卒の場合ですから、よくお解りにならなかつたら、いづれお宅へお歸りになつてゆつくりお考へなすつて下さい。而してあなたの非をお覺りになつたら、これは甚だ差出がましい忠告ですが、僅かに態度なんぞを改めて下さるよりは、一刻も早く社長をおやめになつて、もとの東京へお歸りなさる事をお勸め致します。あなたが此儘仁慈を施せば施すだけ、職工らは益々反感を持つだらうと思ひます。もうたゞでさへあなたは甘く見られて居ります。ですから此上凌辱を受けない中に、その「理想」とやらの旗を捲いてお歸んなさい。それが何よりもあなたのお爲です。

三浦　（猶も默つてゐる）……。

（此時突然家を搖る汽車の響がして、汽笛がけたゝましく鳴り響く）

三浦　（ある豫感に戰へて）おや。……（と耳を欹てる）

國分　（同じく）何だらう、急に汽笛なんぞ鳴らしやがつて！

（不安なる沈默の中に、兩人眼と眼を見合す。外を駈けてゆく人の足音がする）

行人の壁 轢死だ！ 轢死だ！

近所の人 （戸口から）國分さん、又誰か鐵道往生をしたやうだぜ。（馳せ去る）

三浦 なに、轢死？（急いで出て行く）

國分 （呟く）ぢややつぱり、……やつぱり、……やつて了つたのかな。（行かうか行くまいかと煩悶する體）

（中村息せき切つて現はれる）

中村 國分さん、大變だ。あすこで社長の奥さんが死んだぜ。あのおひでさんが轢死したぜ。今踏切の傍で鐵道の人が、大變騷いでゐるから行つて見たら、おめえ、轢かれてるのはおひでちやんぢやねえか。俺あびつくりしちまつて、いきなり此處まで駈けて來たが、――おい國分さん行つて見よう。おまへに急いで知らせに來たんだ。さ、早く行かう。――あ、酒は此處へ置くよ。おめえ行つて見ねえのか。（國分が默つてゐるので）ぢや俺あ一人で行くぜ。（中村不思議な面持で、併し足早に退場）

國分 （酒を二三杯續けざまに呷つて）俺のせゐぢやないぞ。……ほんとに俺のせゐぢやないぞ。……みんなあいつ等が惡いんだ。……あいつ等が苛め殺したんだ。……（と切れ〴〵に呟く）

（三浦淳吉再び登場。彼の眼は黑くうるみを帶び、顏は嚴肅なるまでに蒼白である）

三浦 （靜な聲音で）國分君、おひではたうとう死んだよ。君の言葉の通り悲慘なる最期を遂げた。而してこれは成程、僕の「やくざな溫情主義」の結果かも知れない。併し、それと同時に君の「反抗のための反抗」も、多分に責任を頒たなければならぬ事を、お互に考へようぢやないか。――兎に角僕は葬式の濟み次第、君の忠告に從つて東京へ歸る。だから最後の敗け惜みかは知らぬが、一言君にも反省を促して置くよ。では左樣なら。僕はこれから、僕らの犧牲に供したあの可哀さうな女の、引ちぎられた死體を運ばなくちやならないから。（靜に退場）

（國分答ふる所なし。三浦の足音とほ〴〵と遠ざかり行く）

（幕）

冬

魚城移るにや寒月の波さゞら

黨人の寒月や此處に悲歌の橋

魚頭會々石ありて廚裡月寒し

千鳥鳴くやかほどの華奢の簞笥鍵

千鳥來るや紅濃うす鳥黨のあり

原本の寫本の更に誤字寒し

牲の牛ひた啼いて時雨瀟山に

犬棄てし子心に雪ひそと積む

雪の中珠や埋め去る狐かな

斯人斯地に避寒して遺稿著作あり

牡蠣船に寄らずの水の關所なる

（「牧唄句抄」より）

地藏教由來（一幕）

人物

彌三郎　漂ひ人。後に教祖。

嘉平
源次　村の博徒。後に使徒。
勘吉

村の人々多勢（跛者、盲者、啞者を交ふ）

時代

今は過去となれる明治の末葉。

場所

東北地方なる山中の僻村。

舞臺——村端れなる小さな廢祠の前。街道を前にし、杉の木立を背にす。祠はもと地藏尊を安置したるものにして、古びたれど戶扉破るゝに至らず。

第一場

（或る村の博徒、嘉平、源次、勘吉の三人は、各々祠の段に腰をかけ、柱に凭りかゝり、及び地上に蹲つて、話をして居る）

嘉平　何しろ飛んだ目に會つたなあ。

源次　此の賭場始つて以來の事だ。

勘吉　考えるだけでも胸糞が惡い。

嘉平　今朝彼奴が行つちまふ時、何故一と思ひに殺つちまはなかつたかなあ。

源次　さうよ。此の××村で名うての博奕打が三人も揃つてる乍ら、名前も知れねえ通りがかりの旅人風情に、さんざつぱら賭場を荒されて、有り金殘らずふん奪られちやあ、賣つた顏が立たねえや。

勘吉　俺も實は口惜しいから、一つ此奴を……と思つたんだが、何しろ向うは得體が知れねえし、餘り手際が甘えもんで、すつかり氣を呑まれて了つたのさ。

嘉平　何しろ箆棒に甘え奴だつた。

源次　賽ころにかけちやあ天狗さま見てえな奴だつた。

勘吉　ことによると地藏さまの生れ返りかも知れねえ。

嘉平　全く人事とも見えねえ奴だつた、かぶせた茶碗の瀨戶を透して中に賽ころの星が見えるつて云ふ俺の目さへ、血走つて見別けがつかなくなる程、彼奴のやり方は素早かつた。

源次　いつも俺の振り上手で、今度こそは丁にと振つた積りでも、彼奴が半と云やあ全く半だ。俺あ一昨年北の國へ行つたが、どの漁場でもあんな奴にあ會はなかつた。

勘吉　今度こそ今度こそと思つて、盛り返さうと焦つてる中に、たうとう裸になつて了つてから、氣が付いて見りあ俺たちの金あ、一文殘らず彼奴の膝許だ。俺あ奴が一氣の毒だ。一とか何とか云ひ乍ら、ざら／＼錢を搔き込むのを、餘りの事でぼんやり見てゐたよ。ことによると口が開いてたかも知れねえ。

嘉平　ぼんつくのお前の事だからその位の事はあつたらうよ。

源次　さう云ふ哥兄の顏も餘り冴えてなかつたぜ。

勘吉　敗けたつて元氣を落した事のねえお前が、まだそんなに落膽してるぢやねえか。

嘉平　實を云ふと俺もちと驚いたよ。——一體

源次 彼奴あ何者だらう。

源次 ほんとになあ――一體彼奴の來たのは午の刻を廻つてゐた。丁度俺のいつもの勝負運が盡きる時刻だつた。此の社の中でやつてゐると、不意に此處の戸を開けた奴がゐる。俺あ又勝負に氣を取られてる暇に、駐在所の手でも入つたか、夜廻りの火の番にでも見つかつたかと、吃驚敗亡して逃げかゝると奴あ厭に落着いた手付で俺達をとめやがつて、その言ひ草がからだつた。「まあ皆さん、さうお驚きになるにや及びやせん。わしは御覽の通り旅の者です。只今此處を通りかゝると、丁度お堂がありますので、ことによつたら軒下で一夜の雨露を凌がうかと、暫く休んで居りますと、何處やらでころ〳〵と賽の音がしますので、わしも元來が大好きな道ですから、思はず入つて來てあなた方をお驚かせ申しました。どうか續けておやんなせえまし。而して見物させて下せえまし。」

嘉平 「そんなに おめえ好きなのか。好きと聞いちやあ賴もしいや。それぢやあどうだい、見てゐるより一つ入んねえ。おめえぢきに面白くなるぜ。」と俺あ直ぐさう云つた。あの時あ一つ甘え鳥が引掛つたつもりだつた。而して一昨日の業賣り見てえに、まんまと捲き上げてやるつもりだつた。

勘吉 つゞいて俺もかう云つた。「勝負は時の運だ。おめえおすつかり勝たねえとも限らねえ、一つやつて見たらどうだ。」俺もあん時アうまく口車に乘せた氣だつた。

源次 すると奴あ、敗けると路用がなくなつちまつて、乞食にならなきあならねえから。」とか、「ひどく皆さんが甘さうだから。」とか、しぶしぶ云つた擧句の果に、やつと仲間入りをしたつけが、三四回勝たしてやつて、又一二回取つちめてやつたと思ふ間に、奴あにやにや笑ひ乍らぐん〳〵勝ち出すと來るぢやねえか。

嘉平 野郎いつか運がぐれるだらうと、一生懸命で突つかゝつたが、たうとう今朝まで勝ち通しよ。

勘吉 餘り馬鹿げた敗けやうなんで、俺あ腹も立たなかつた。

嘉平 全く一體何處の野郎だらう。

源次 ほんとに天狗見てえな奴だ。

勘吉 ことによると此處の地藏尊の使ひかも知れねえぜ。あれ位なら神業と云つても差支はねえ。

源次 さうよなあ。俺達に毎晩お社を荒されるんで、懲らしめの爲にお姿を現はしたのかも知れねえ。

嘉平 馬鹿云ふな。ありあ正銘の人間だよ。高がお賽ころが甘えだけぢやねえか。俺たちだつて素人から見りあ、神業位の事はするらあ。

源次 でも餘り甘すぎたぜ。何だか素人とも魔法にかゝつたやうな敗け方だつたからな。

勘吉 さう云へば眉つきが何處か地藏樣に似てゐたやうだ。

嘉平 譃ら吐け。おめえのぼんつくな眼で見りあ、地藏さまよりあ、町の私窩女に似てゐるだらう。――馬鹿め。ありあ人だ。人に違ひねえぢやねえか。何で地藏尊の生れ代りなんぞがあつて堪るかい。馬鹿も休み休み云へ。

勘吉 兄哥、さう怒るなよ。今なあ冗談だあな。誰も心から地藏樣だとなんざ思つちやゐねえ。

源次 まあ默つてゐろよ勘吉。兄哥アちと[illegible]めなんだ。然しそれも無理あねえや。

嘉平 おめえこそ餘計な事云ふな。默つてゐろ。

源次 おいよ、默つてゐるよ。

（沈默、三人ともしよう事なしに煙草を吸

ふ）

勘吉　何か昨夜の金をとりかへすやうな、甘え事はねえかなあ。

源次　さうよなあ、俺アあれが無けりあ、今日から商賣に出られねえや。

嘉平　默つてゐろ。俺が今考へてる處だ。
（又沈默、勘吉と源次烟草を吸ふ）

勘吉　どうだ哥兄、うめえ考えはねえかな。

源次　ほんとにどうか考へ出して吳れろよ。

嘉平　（ふと顏を上げて）ふむ、さうだ。うめえ事を考へ出した。

勘吉　どんな事だい。

嘉平　おめえ達あ今地藏尊のお遣はしの話をしてゐたな。俺アそれから思ひついたんだ。

源次　ついたつてどう思ひついたんだ。

嘉平　地藏尊のお遣はしを見付け出さうと思ひついたんだ。

勘吉　では昨夜の奴を追ひかけるのか。

嘉平　さうぢやねえ。新しく地藏尊のお遣はしを作るんだ。

源次　どうして作るんだ。

嘉平　此處に待つてゐて、通りすがりの馬の骨をたぶらかして、地藏尊の化身だと祭りあげるんだ。否應なしに地藏樣にして了ふんだ。而して村の人たちに地藏樣の生れ代りが現はれたと云つて布令廻るんだ。さうすりあ馬鹿な百姓共は、有難がつてきつと賽錢を投げるに違えねえ。たとひ賽錢を投げねえとした處が、奴等を一時でも馬鹿にしたと思やあ、いゝ娛みだ。

勘吉　だがどう云ふ風にして見知らぬ男を地藏樣に祭り上げるんだい。もつと詳しく聞かなきあ、どうも腑に落ちねえ。

嘉平　それあ俺が此處に待つてゐて、よささうな奴が通りかゝつたら、かう云つて其奴を誑かすんだ。昨晚俺が此堂にお籠りしたら、此處の地藏が夢枕に立つて、今日己の化身が前を通るから、その人に村のいろ〳〵な難儀を救つて貰へつて云つたつて、どうしても拜み倒して了ふのさ。

勘吉　併し其奴が自分でさうだと思ふかね。

嘉平　さうかも知れねえ位に思ひ込ませるのさ。先づ俺が僞盲目になつてゐて、其奴に撫でて貰ふと忽ち癒つたふりでもすりあ、奴あ自分にそんな力があるのかとやつと思ひ込まねえ事もあるめえ。そこらは俺がうまくやるよ。

源次　して村の人に信用させるにはどうするんだ。

嘉平　それにあおめえ達の手を借りなくちやならねえ。なに造作もねえ事なんだ。先づ俺がうまく男を地藏尊にして了つたら、急いで村中を布令廻るから、おめえ達も其時全く知らねえ振をして皆の後からついて來ねえ、而するりあ俺が皆集つた所で、御利益を述べ立てるから、其時になあ源次、おめえ急に、「譃だ、譃だ。」と叫び出すんだ。すると俺は神樣に云ひ含めて置いて、「そんな事を云ふ奴は神罰立どころに下つて啞となるぞ。」と云はせるのだ。そしたらおめえは急に啞になつた振をしなくちやいけねえ。いゝか、解つたか。而して先づ神樣の靈驗を示すんだ。

源次　うむ。そいつは面白い。宜しい。引受けた。

嘉平　それからな勘吉公。おめえは又暫くして、「詐欺だ、騙りだ。警察樣へ行つて云ひつけて來る。」つて駈け出すんだ。すると又俺は神樣に「そんな事を云ひ付けに行く奴の足は跛になれ。」と云はせるから、其時おめえは急に躄になつた振をするんだ。さうすりあもう村の奴等あ驚いて了つて、僞神樣が何を云はうと、きつと信用するに違えねえ。而して

信用しちまへば、俺が賽錢を上げろと云へば、神様が欲しくてならねえ連中のこつたから、きつとばら／＼と來らあ。さら來りあ占めたもんぢやねえか。僞神様にあその中僅かのお供へをして、あとは俺達が着服するさ。

勸吉　成程、そいつは面白さうだ。餘りよくねえ役廻りだけれど、どつちへ轉んでも損はねえ。一つやつて見るとしようか。

嘉平　さうと定まつたら、早速仕事に取かゝるとしようぜ。愚圖つくなあ俺あ大嫌えだからな。

源次　よし來た、合點だ。

勸吉　哥兄、先づおめえ甘くやつて呉れろよ。

嘉平　俺あ大丈夫だ。細工は粒々仕上げを見るがいゝ。鎌で燈心草を刈るやうにうまくやつて見せるから。

源次　（下手の方を見て）あれ、さう云ふ中に向うから一人やつて來たやうだぜ。

勸吉　何だか林の中を縫つて來るんでよく見えねえが、ちらと見えた頭と手の邊りが、朝日で金色に光つたぜ。

源次　今から後光がさす譯でもあるめえが、神様にはいゝかも知れねえ。

嘉平　兎に角おめえ達は見つけられちやあ、工合が惡い。社の後ろに隱れてゐて、俺の手際がうまく行きさうだつたら、何食はぬ顏で村へ歸つてゐな。いゝか。

源次　よし來た。

勸吉　うまく賴むぜ。

（二人は社の後ろへ入る。嘉平眼がつぶれた振をなし、そこの祠前につくばひて、人の通りかゝるのを待つて居る。間。遠くから手風琴を鳴す音が近づいて來る。やがて賣藥商登場。金モール付の帽子と洋服を着て、手風琴を肩から下げてゐる）

藥賣　（ゆるやかに手風琴をひき、且つ唱ふ）「濟生藥館目藥は、一たびさせば跡もなく、……オイチニ……」（嘉平に一瞥を與へて）やれやれ、盲目さんか、おまへさん早く俺の目藥で癒しやあ、さうはならなかつたらうが、可哀さうに。……（行き過ぎる。嘉平何もせずに嘲笑ふ。やがて藥屋は唱ひつゝ去つて了ふ）「逆上目爛れ目トラホーム一夜に潰れる風眼も……オイチニ……」

（唱聲遠ざかり行く。嘉平くつ／＼笑ひ出す。二人社の後ろから出て來る）

源次　哥兄、どうした。

勸吉　何故笑つてるんだ。

嘉平　だつてあんな金モールの藥屋を神様にするなあ、土龍を豚にするより六ケしいや。あいつ等の藥で、この俺様の眼が癒つて堪るかい。

源次　さう云へば彼奴の顏からして、僞の憲兵にもなれさうがねえ。神様にしても、まあ貧乏神位だ。外の神様になるにや、柄があんまり土手の芒だ。

勸吉　（下手を見て）さう云ふ中に又一人やつて來たぜ。何だかひどく草疲れた歩きつきだなあ。

源次　さうよなあ、丁度おめえが首をくゝられに行く時見てえだ。

勸吉　緣起の惡い事あ云ふなよ。俺あこの上惡くなつても、躄になるだけの事だからな。まさかに首はくゝられめえよ。

源次　まあ俺も直ぐ啞になるんだから、今の中に減らず口を叩いて置くのさ。

嘉平　餘計な事を云はねえで、さつさと隱れろよ、もう愚圖々々してると見付かるぢやねえか。

源次　よし來た。行くよ。

勸吉　こん度こそうまく賴んだぜ。

（二人は又社の後ろに隱れる。嘉平も亦僞

盲目となり、社前に這ひつくばふ。間。日が陰つてくる。やがて一人の漂泊者（彌三郎）、重たい足を曳きずり乍ら、やつて來る。一癖ありげな顏付のそのくせ何處となくオヅオヅした所のある若い男、通りかゝつて祠を見、嘉平には目も呉れず、その段の所へさも疲れたと云ふ風に腰を下す）

彌三郎 （ほつと息を吐いて）あゝ疲れた、疲れた。それも其の筈だ、今朝から一粒の飯も食はないで、十里近く歩いたんだもの。もう此先き一足も歩けやしない。

嘉平 （進み寄つて）もし／＼、あなた樣。

彌三郎 何だ、盲目か。何用があるのだ。

嘉平 あなた樣は只今南の方からおいでになつたのでございますか。

彌三郎 うむ、さうだ。わしは南から來た。

嘉平 それから只今は朝の辰の刻でございませうな。

彌三郎 わしは知らん。辰の刻と云ふと今の時間にして何時頃の事だ。

嘉平 左樣でござります、今の時の十時で。

彌三郎 ではまあそんなものだらう。

嘉平 さやうでござりますか。では、あのあなた樣が、辰の刻にお一人で南から此の社の前をお通りになつた方でございますな。

彌三郎 左樣、わしの外にはないやうだな。

嘉平 それでは貴方さまは紺の盲縞の御衣裝を纏うておいででせうな。私は御覽の通り盲目で、少しも見えないんでございますが。

彌三郎 （苦笑して自分を顧み）ふむ、いかにも紺の盲縞の襤褸を着てゐる。

嘉平 お年の頃は三十位でございませうか。

彌三郎 まあそんな所だが、厭に精しく問ひ訊すね。まるで仙臺の控訴院さま見たいだ。

嘉平 （急に飛びすさつて平伏する）では貴方さまに間違ひございません。どうぞ實をお知らせ下さいまし。貴方さまは私の待つてゐた御地藏樣の御化身でござりませう。どうぞさう仰有つて下さいまし。

彌三郎 わしが地藏尊の化身？ 妙な事を云ふね。どこからそんな事を考へるのか、わしにはさつぱり譯が解らん。大方小松原に生えた夢茸でも食つて、醒め乍ら夢でも見てるのだらう。

嘉平 いえ／＼どう致しまして。貴方樣は全くそれに相違ございません。

彌三郎 何を云つてるんだ。お前は今朝蓴菜沼の濁り水で顏を洗つたんで、まだ昨夜の夢の殘りが醒めないんだよ。

嘉平 いえ／＼、昨夜見た夢は夢で、夢に違ひありませんが、今此處においでの貴方樣は貴方樣で、御地藏樣に違ひありません。

彌三郎 益々妙な事を云ふね。おまへは向ひ山の白狐にでも憑されてるんだよ。でなきあほんとの氣狂ひだ。

嘉平 いえ／＼、憑されてもゐなければ、氣狂ひでもありません。私の申す事はすつかり筋道が立つて居ります。

彌三郎 ちつとも立つちやゐないぢやないか。人を捉へていきなり地藏だの何だのつて、地藏樣に雀がとまりあ、十八島田が花嫁になるつて云ふが、鍛冶屋の息子が草臥れたからつて、石塔が睡くなるて云ふ話は扇屋の小さまにも聞いた事はないよ。

嘉平 まあお聞き下さいまし。（間）私はもと此近在きつてのあぶれ者で、此間迄あ神佛のかの字も云つた事はなし、今考へりあ勿體ねえ話ですが、此處の地藏だつて石ころ同然に考へてゐたものですから二三日前ふと此處を通りがかりに面白半分お地藏樣へ小便をおひつかけ申しやした。すると其晩から不思議にも急に其處へ熱が出やして、七轉八倒の苦し

みをした末、眼迄がこんなに潰れました。それでこりあきつと地藏樣の罰が當つたに違えねえと、急に神罰が恐しくなり、それから七日と云ふもの、此の堂にお籠りしてお詫びを致しやした。すると昨夜と云ふ滿願の晩でござります。

彌三郎 （話に非常な興味を感じて）ふむ。滿願の晩に。――何かあつたかな。

嘉平 はい。ござりました。私は腹が減つたのと疲れたので、此處の柱に凭れたまゝ、ついうと〳〵と寢入つたものと見えます。すると眞夜中頃頭の上にぼんやり明りがさすので、驚いて眼を擧げて見ますとその綠とも白ともつかぬ後光の中に、一人の眉毛の白い老人が立つて居りました。而して私を見ると急に進み寄り乍ら右手に持つてゐた通草の杖で、したゝか打ち据ゑるのです。私は一目でそれが御地藏樣だと解りましたから、平らに恐れ入つてお打ちになる儘にお罰を受けて居りました。只不思議な事にはあれ程打たれても、少しも痛くないのです。で暫く打たれて居りますと、その老人が仰有るのです。

彌三郎 ふむ。――

嘉平 「嘉平、おまへは眞に悔悟したと見ゆるな。善哉々々、おまへの心榮えに愛でゝ、わしは罪を許して遣はす。おまへの眼も、明日わしの身代りをやつて癒してやるぞよ。その身代りと云ふは年の頃三十前後で、盲縞の衣を纏ひ、辰の刻に御堂の前を南から北へ通る筈ぢや。その人に賴んで、眼を撫でて貰へば、今迄の盲目は九月の沼の霧のやうに散るは必ずぢや。その人或ひは言を他に外して、わしの身代りぢやとはえ云ふまい。されど心をとめて欺かるゝな、その人には誠に神の力が在つて數々の不思議を現はすぞよ。何事もみ心の儘ぢや、何事も見透しぢや。而しておまへの眼を癒すばかりか、村の難儀も救うて下さらうぞ。よくお賴み申せ。ゆめ〳〵怠つて見失ふな。」と云つたかと思ふと、老人の姿は夕方に飛ぶ五位鷺のやうに、ふは〳〵と中空へ消えて了ひました。ふと我に返つて見ますと、私は矢つ張りお堂の中に寢てゐて、老人の消えた方には、もう明け近いと見える節穴が仄やり白く見えました。それで私は起き上るなり、今か〳〵と貴方樣のお通りを待つて居りました。どうぞお本身をお明しになつて私の眼をお癒し下さいますやう、どうぞお願ひ申上げまする。

彌三郎 はゝゝ。馬鹿を云つては困る。わしにお前さんの眼を癒す力なぞがあつて堪るものか。そんな力があるなら、今朝からからして空腹をかゝへて、當てもなくほつつき歩いてなぞ居りはしないよ。私は地藏樣の身代りなぞではないよ。私は此處から三十里西南の、柳津から來たものだ。

嘉平 さう〳〵、夢の老人もさう仰有いました。

彌三郎 しかも貧乏な鑄掛屋の息子だ。

嘉平 それも夢知らせの通りでございます。

彌三郎 昨日親父と喧嘩をして家を飛び出した野良息子だよ。

嘉平 その親父樣と云ふのが、氣の荒い盧遮那佛さまで、貴方樣を此處にお寄越しになるため、わざと辛くなすつたのでございます。それもみんな貴方をお遣はしになつて、村を救つて下さる有難い思召なのでござります。

彌三郎 俺あ毎日居酒屋に入り浸つてゐる佛樣の話は聞いた事がないよ。

嘉平 いえ滅相な。ちやんと三世相にも書いてあります。そんな事をなさるのは、すべて凡夫と見せかける上邊だけの事で、あなた樣の父御樣もそれなのでござりました。それも夢知らせに御座りました。

彌三郎　もつと何か無かつたかな。

嘉平　貴方さまに仰有られると思ひ出しますので、へえそれからと‥‥え丶‥‥ございました。何でも、思ひ違ひかは知りませんが、その居酒屋と云ふのは、村端れの椎の木の傍にございませう。而してそこにまだ水氣のある後家さんが確おいでゞせう。

彌三郎　（少し驚いて）へ丶え。それぢやその夢知らせつて奴も、本當だと見えるな。成程その通りだ。

嘉平　それに貴方さまも、へ丶え、あの、お惚れなすつた筈ですがな。

彌三郎　まあそんな所だつた。こいつよく知つてやがるな。

嘉平　それから又盧遮那佛さまもお惚れでございましたな。それが親子喧嘩の基でございませう。

彌三郎　おまへそこ迄聞いたのか。そいつは益益やり切れないな。（頭を掻く）

嘉平　さうお恥ぢなさるには及びません。あの女の方は、あれで又、觀音樣でございますよ。

彌三郎　どうだか知らねえが、全く觀音樣と云はれても恥しくないやうな女だつた。

嘉平　それもみんな貴方樣を此處へ救ひにお遣はしになるためだつたのでござりまする。

彌三郎　何だか知らねえが、餘計な事を知らして歩く奴がゐると見える。何だか少し薄氣味が惡くなつて來た。こんな處にあ長く居られない。さつさと行つて了ふとしよう。（立上る）併し腹は減るし、足は痛えし、もう一足も歩けさうもねえ。おい、お前さん何か食ふ物は無いかね。

嘉平　今ぢきに差上げますでございます。が、どうかそれ前に鳥渡私の眼をお癒し下さるやう、偏へにお願ひ致しまする。

彌三郎　そんな力は俺には無いよ。

嘉平　いえ、只觸つた丈で宜しいんでございますから。

彌三郎　ぢや觸つてだけはやるが、癒らうが癒るまいが私は知らないよ。い丶かい。

嘉平　はい。結構でございます。

彌三郎　其代り觸つたお禮には何か食ふ物を持つて來て呉れないか。握飯でい丶。

嘉平　はい。畏りました。いくらでも差上げます。

彌三郎　そんなに澤山はいらねえが、二つ三つ。――い丶かい、それは眼が明かなくたつて持つて來て呉れるんだぜ。

嘉平　宜しうございます。

彌三郎　よし、その約束は濟んだと。（近よつて）ぢや觸るよ。い丶かい、ほら之が私の手だ。

嘉平　（手を押し頂き）へえ、有難うございます。まるで鬼ケ嶽の谷間にある水晶のやうに涼しいお手でござりまするな。

彌三郎　水晶だとすりあ、餘り出來のよくねえ、罅入り水晶だ。――い丶かい、さあ觸るよ。（彌三郎何氣なしに嘉平の眼に手を觸れる。間）

嘉平　（突然眼を開く。而して立上つて四邊を見廻す。大歡喜）あ、開いた。あ、開いた。すつかり見える。何でもかんでも見える。（急に彌三郎の前に跪いて）有難うございます。有難うございます。活神樣、活佛樣。

彌三郎　（呆然と見とれて）ほんとに開いたか。（自分の手を見る）變りはない。不思議だなあ。

嘉平　（尙も四邊を見廻し乍ら）すつかり見える。あれ、村長さまの白壁から、向ひ山の杉の穗先まで見える。遠くは南に晴れ渡つた那須の烟も見える。近くはお種婆が作つた、十六提豆の蔓まで見える。（再び跪いて）有難うございます。有難うございます。

彌三郎 (猶も考へ込んで) 俺はいつこんな力を得たのだらう。不思議だ。不思議だが事實に違ひない。夢でもない。狐に憑されてるのでもない。して見ると事實、俺には不思議な力が在るのかしら。それを今迄氣がつかず、使つて見もしなかつたのかしら。

嘉平 活神樣、ではお約束通り、早速御禮に差上げます。どうぞ暫くお待ち下さいまし。村の人たちにも知らしてあげます。而して活神樣の御來迎を拜ませてやります。どうぞこの御堂の中で、暫くお休息下さいまし。そこの御地藏樣には、白い衣が着せてある筈でございます。夢知らせではそれを着せ申せとの事でございました。どうぞお召しなすつて下さいまし。では行つて參ります。他へいらしては困ります。

彌三郎 行きたくても、このすき腹では行かれぬわ。ぢや待つてゐるぞよ。

嘉平 (堂扉をあけ) さあどうぞ此の中で。

彌三郎 何でもいゝから握飯を早くして呉れ。

(堂内に入る)

嘉平 畏りました。では御免下さいまし。(堂扉を閉める。而して恭しく一拜して、立上る。後ろを向いて赤い舌をべろりと出す)

源次・勘吉 (堂の後ろから出て小聲に) 哥兄! 甘く行つたな。

嘉平 (二人を制して、猶も小聲に) まだゐたのか。それぢや早く。いゝか。

源次・勘吉 よし來た。賴むぜ。

(三人急いで其場を去る。長い間。閑古鳥啼く)

彌三郎 (戸を開けて、身を現はす) 俺はほんとに神樣になつたかしら。

(それに答ふるやうに閑古鳥の聲) (幕)

第二場

(同じ場面 一二時間後のことなり。嘉平先頭に立ち村人多勢を引連れ來る)

嘉平 (皆を顧み) さあ、活神樣のいらつしやるのは此のお堂の中だ。先刻わしが御休息をお願ひ申して置いた筈だから、確においでになるだらう。今、嘉平が皆の衆に拜ませ申すから、そこに跪かつしやい。

(皆々跪く)

嘉平 (堂の前扉にて) もし〱活神樣、中においでございますか。嘉平只今戻りました。

彌三郎 (中にて) おゝ歸つたか。して約束の物は忘れまいな。

嘉平 へえ〱、忘れる段ではございませぬが、村の婆たちに話した處、さう云ふ靈驗な神樣に上げるのでは、普通の米では不可めえから、お祓ひをした新穗を拔いて搗き、鎭守樣の御神木を伐つた薪で炊いて、やがて持つて來る筈でございます。どうぞ少々お待ち下さいまし。

彌三郎 (中にて) それには及ばなかつたぞ。

嘉平 でももう少しの御辛抱でございまする。で、どうかそれ迄の間に、もう一度村の人達の前で、御奇蹟をお見せ下さるやう、改めて私からお願ひ致します。

彌三郎 わしはもうその不思議を現はしたくない。今日は許して呉れ。

嘉平 いえ、ほんの鳥渡で宜しうございまする。先刻のやうにして下されば大丈夫でございまする。嘉平が身を以て請合ひまする。決して御迷惑をお掛けしません。

彌三郎 (中にて) ではどうともお前の好きにするがいゝ。

嘉平 有難うございまする。(皆を顧み) さて

皆の衆。神様は今日はお力を見せるのに氣が進まぬと仰有るが、嘉平がたつてのお願ひで、三つだけ見せて下さるとの仰せだ。その一つはもう嘉平の風眼を癒したによつて、あとたつた二つだ。氣をとめてよく拜み見なされ。

人々 （口々に）有難うござりまする。

嘉平 では活神様、只今お扉をお開き申上げます。皆の衆頭を下げさつしやい。

（人々低頭する。嘉平扉を開く。堂内より白き衣を纏ひて、出來るだけ威儀を整へたる彌三郎、しづ／＼と現はれる。皆は仰ぎ見る）

源次 （群集の中より突然進み出でて）はゝゝゝ。これあ何の事だい。嘉平おめえ冗談も大概にしろよ。神様々々ちふから、どんな偉い物が出る事かと思へば、高が只の人間でねえか。これで身體が金色だとか、額が夜光の石見たいにでも光つてりあ格別、それと俺達の相違は白い衣を着てるだけぢやねえか。

嘉平 馬鹿を云へ。神様が凡夫の姿でお現はれになつたのだ。そこが活神樣の活神樣たる所なのだ。馬鹿を云ふと神樣にお願ひして、おまへの減らず口を唖にして見せるぞ。

源次 これあ面白い。さあするならして見ろ。村一番の口達者で、喧嘩口論揚足取りで、町の議員樣さへ敗かした俺だ。その口が塞がるものだか、やれるものならやつて見ろい。

嘉平 神さま、彼奴めあんな事を云うて居ります。どうか神樣のお力で、一つ懲らしめて唖にして下さいまし。

彌三郎 神は人を唖にするやうな事は好まない。神の力はいつも善に働く。

嘉平 いえ、惡を懲らしめるのは、即ち善ではござりませぬか、お躊躇なくお罰し下さい。

源次 やい。間抜神、糞神、あんぽん神。貴樣の通力では出來めえ。今の世の中にそんな事があつて堪るか。やれるものならやつて見ろ。（喚く／＼）

彌三郎 （試しにやつて見ると云ふ風で）神を疑ふ不屆者、まだ喚き居るか。おまへの口は唖にならうぞ。

源次 （今迄喚いてゐたのが、急に聲を呑み、只管唸くのみ）うゝゝゝゝ。

嘉平 それ見ろ、神罰思ひ知つたか。どうだな、皆の衆こんなに靈驗あらたかなのだ。

皆々 （驚嘆する）神樣有難うござりまする。

彌三郎 （おのが力に驚きて、呆然うなづくのみ）

嘉平 （源次に）どうだ恐れ入つたか。

源次 （跪坐低頭、手を合して頻に許しを乞ふ）

嘉平 悔悟の實が見えたら、俺からお願ひして許してやる。それ迄はそこで拜んで居ろ。おまへは毎も賽ころの振り方を誤魔化すから、そんな目に會ふのだ。何なら一生さうしてるがいゝ。村中がすつかり靜にならあ。

勘吉 （急に群集の中から叫び出す）飛んでもねえ奴等だ。魔法使ひだ。それに違えねえ。やたらな魔法は御法度だ。俺は警察さまさ行つて訴へてやる。兄弟を唖にされて默つちやゐられねえ。さうだ。すぐ驅けてつて云ひつけてやる。（走り出す。皆々其の方を見る）

嘉平 又あんな事を云ふ奴があります。どうぞ早速御罰しなされて、走つて行く處を躄になすつて下さいまし。

彌三郎 （今度は遲疑せず）そこに走りゆく者走ることならぬ。躄にならうぞよ。

村の人々 （口々に）躄になつた。ほんとに躄になつた。神罰だ、ざまあ見ろ、今になつて頻にあやまつてゐる。やあ／＼此方へ這つて來るぞ。

勘吉 （這ひ乍ら入り來る）どうぞお許し下さいまし。もう決してお疑ひ申しやせん。心を

入れかへました。どうぞお許し下さいまし。

（手を合せて頼む）

嘉平　おまへも源次と同じく、暫くそこに拜んで居れ。悔悟の實が見えたら、俺から許しを願つてやる。おまへは一體平常から町の私窩女を張る癖がある。その罰としては少し永く聾でゐてもいゝ位なんだ。

勘吉　飛んでもねえ、あれあ皆さん譃でございますよ。神樣、これから心を入れ替へますから、どうかお許し下さいまし。

嘉平　いゝから默つて神妙にしてゐろ。でねえとおめえも啞にして貰ふぞ。

勘吉　へえ〱。（皆に向ひ）全く神樣に違えねえ。私がいゝ例だ。うつかり疑つちや不可ませんぜ。

嘉平　全くだ。貴樣達二人が餘計な疑ひを起したんで、神樣をお下しになるたあ、今日の奇蹟は三つ濟んで了つた。折角此處へ集つた皆さんの中にあ、ほんの盲目や聾がゐて、嘸癒して貰ひたかつたらうが、おめえ達が横合からそれを奪ひ取つたやうなもんだ。皆さんにもお詫び申すがいゝ。

源次　（手眞似で詫びる樣子をする）

勘吉　全く濟みやせんでした。

嘉平　では活神樣、今日はこれだけでございましたな。

彌三郎　おまへの心通りに致せ。

嘉平　はツ、では御疲れで御座りませうから、これだけに致しまする。（皆に）さあ皆の衆。今日の御靈驗はこれだけだ。でも神樣の力があらたかでいらせられる事は解つたらう。明日お祈りをして貰ひたい人、後生を賴む人などは、今から賽錢を上げてゆかつしやい。今日の集りはこれきりぢや。

少女　（一人の盲目の老婆の手を曳いて、群をかき分けそこへ出る）あのもし嘉平樣、どうぞお願ひでござります。神樣にお賴みして、私の婆さまだけ特別に目をお癒し下さいまし。

嘉平　いや。駄目ぢや。明日にさつしやい。

少女　いえ、どうぞお願ひでござります。婆さまはお年ぢやから、明日と云はずに今夜にでも、一目此世をお見せ申したうござりまする。さあお婆さま、活神さまぢや、あなたからもお願ひなされ。

盲婆　どうぞ神樣、わしは外に望みはねえだ。やつと育つた此の娘の顏が一と目見て死にてえでござりますだ。赤ん坊の時見たつきり、十五年見た事がありましねえだ。どうぞ一と目見せて下されや。

嘉平　（當惑して）いくら云うても今日は駄目ぢやよ。

少女　いえ〱、神さまぢやなら、お力が限りがある譯はござりますまい。又出し惜みなさる譯はござりますまい。お願ひ申しまする。どうぞなう嘉平さま、もう一度ぢや。

嘉平　駄目ぢやと云うたら駄目ぢやと云ふに。

彌三郎　（既に大なる自信を得た態度で）これこれ嘉平。見れば可哀さうな親子ではないか。折角の賴みぢや。きいて遣はせ。わしが癒して進ぜる。

嘉平　えツ、それあ貴方さま大丈夫でござりますか。

彌三郎　おゝ大丈夫とも。（低く獨語のやうに）三人まで力が及んだからには、わしに備はる何かがあるのぢや。わしはわしの力を信じ出した。大丈夫ぢやとも。さゝ娘、婆御を此處へ連れて來るがよい。

少女　有難うございます。婆さま、神さまのお前でござりますぞい。

老婆　（彌三郎の前に額く）南無阿彌陀佛……

彌三郎　（老婆の眼に手をふれ）可哀さうに昔亭主を亡くした時、餘り泣き過ぎて瞼が付い

たのぢやらう。わしが手で撫でたからには、もう涼しうなつた筈ぢや、さあよいか。わしが此の手を三つ叩くと、三つ目に眼があくぞよ。さあ、一イ二ウ三ツ！（手を叩く）

老婆　（急に目開く。呆然として四邊を見廻すのみ）

少女　婆さま。あれ目がお開きなされた。そのやうにぱち〳〵して、私が見えまするか。私の顔が見えまするか。

老婆　おゝ見える。おゝ見える。そなたの美しい木槿のやうな顔が見える。これが目ぢや。澄んだ清水に木欒樹實を落したやうな目ぢや。これが鼻ぢや。雪の岡に兎が蹲つたやうな小高い鼻ぢや。これが脣ぢや。古り沼の隅に咲く睡蓮の花片のやうな脣ぢや。おゝおゝ娘や。わしはもういつ死んでもいゝぞや。

少女　婆さま。（縋りつく〳〵）嬉しい。

老婆　わしもぢや。皆んな神様のお蔭ぢや。

二人　有難うござりまする。（皆々感動する）

嘉平　（驚嘆してゐたが、やつと吾に歸り）さあさあこれで濟んだ。もうお終ひだ。あとは誰が來たつて駄目だぞよ。

白癡女　（愛らしき乳呑兒を擁へて、群集を掻き分け掻き分け出で來る）どいた、どいた、どいた。

其母　（あとから止めるやうについて來る）これどこへ行く。見境もなくどこへ行くのぢや。

白癡女　（彌三郎の前へ進み出で）いゝ子だろ。誰の子だ。わしの子だ。いゝ子だろ。

嘉平　これ〳〵何で出て來るんだ。こゝは神様の前だぞ。おつ母あ、早くつれて行け。

其母　はい。さあ叱られるから、こつちへ來いよ。その子をそんなに見せんでもいゝわ。

白癡女　（何も兒をつきつけて）いゝ子だろ、いい子だろ。

彌三郎　一體これはどうしたのぢや。

嘉平　どうしたのでも御座いません。かまはず置いて下さいまし。

彌三郎　かまはうとて、白癡はわしにもどうもならん。白癡は患ひではないのぢや。神の惠みぢやからな。白癡が一番幸せぢや。わしも是より此の女を幸にする事は出來ん。

其母　それは私も望みませぬが、只神様のお力によつて、此の子の父親が知りたうござります。この娘に聞いても解らず、子供に似よりの男は澤山あつて、どこの誰やら解りませぬ。白癡にもせよ子が出來たのは、大方誰かのいたづらと思ひまするが、一體誰でござりませう。

嘉平　（又心配して）これ〳〵そんな事を神様に伺ふのではない。

其母　でもあなたは神様が、村一統の六ケしい事は、何でも知らして下さると云つたでないか。神様が知らんお筈はない。

嘉平　でももう今日は時間外だと云ふに。

彌三郎　（すつかり自信を以て）これ〳〵嘉平、よいわ〳〵。わしが代つて詮議して遣はす。（間。瞑目して後）先づ其男と云ふのは、此處に集つた人の中に居る。（顔見合す）其人はもう既に心の中でひどく苦しめられてゐる筈ぢや。名を指すは容易いが、罪を輕うするために、わしは其人の名乘り出るのを待たう。さあ早う出ぬか。（皆顔を見合すのみ）では其人に就ての事柄を少しづつ云はう。先づ其男の家は西の方にあつて、南を向いてゐる。而して八輪ばらの方に松の木がある。親はないが、若い男ぢや。さあこれ迄云うたらもう出ぬか。出ねば名を云はうか。云はれた後の罪は重からうぞ。

嘉平　（そつと傍に蹲つた勘吉に）誰もなけれあ、おめえ出ろよ。

勘吉 （同じく小聲で）おら厭だ。もうこんな役目をしてるんだからな。おめえ出ろ。おめえが罪を背負ふ番だ。

彌三郎 さあ出ぬか。出ぬのは耳が聞えぬふりをするのぢやな。ほんとに聾にするぞよ。

嘉平 （愈々となれば自分が出る氣で）誰もないか。無けりあ。……

若者 （群集の中から轉び出て、彌三郎の前に手をつく）濟みませんでした。

彌三郎 お前だと云ふのは、先刻から解つてゐた。後悔したか。後悔したら改めて此の女に詫びて、子を引取れ。白癡にからかふなぞは惡いぞよ。其上默つて知らぬふりをするとは猶の事ぢや。

若者 全く申譯ござりません。醉つぱらつた紛れについ、その、からかつたので。

嘉平 おめえがそんな事やつたたあ思はなかつた。役場の書記もやり、青年會の幹事もやると云ふおめえが。――一體どこでどうしたんだ。

彌三郎 場所は南北の低い所だらう。

若者 はい。さう見透されちやあ、敵ひません。いかにも村端れの屠殺場裏の窪地でした。高槻の親類へお通夜に行つた歸りの事です。私はぐでんぐでんに醉つぱらつてゐました。何から何まで酒の爲です。丁度薄ぼんやりした月が出てゐました。わつしは街道を何氣なくぶらぶらやつて來ますと、窪地の藁塚の陰で女の唄ふ聲がするぢやありませんか。時節は春で、榛の木の芽の匂ひがして、穴蟲も出るちふ土がむつと蒸れるやうな晩だつたのでつい誘はれて行つて見ますと、――

嘉平 それからどうした。

若者 なあに、それだけの話ですよ、それつきりなんです。

白癡女 （谺のやうに）なあに、それだけの話なんだよ。それつきりなんだ。

嘉平 ぢや兎に角おまへは神樣の云ふ通り、罪亡ぼしに其子を引取れ。子まで白癡とは限るまい。引取つて育ててやれ。

若者 はい。（白癡に）おい、其子を俺に渡さねえか。

白癡女 厭だよ。厭だよ。私の子だよ。（逃げる）

其母 どこへ行くんだ。お淺、お淺つ子。

（母と若者と女の後を追うて退場する）

嘉平 （彌三郎に）いや、色々と有難うござりました。では今日はこれ丈に致しまするで御座いませう。

彌三郎 さうか。ではわしは堂に入るぞよ。

嘉平 はツ。（平伏する）

（皆も嘉平にならつて、平伏する。其間に彌三郎は飽く迄自信ある態度で、堂内に入る。嘉平扉を閉づ）

嘉平 さあ、皆の衆、賽錢を上げたら退散するがよい。後生を願ふ人は、決して喜捨を忘れまいぞ。

（村の人々、口々に念佛を唱へ、賽錢を投げて去る。遂に嘉平、源次、勘吉のみとなる）

嘉平 さあもう皆行つて了つた。うまく行つたものだなあ、おい。が、もう芝居をやめてもいゝぞ、二人とも。誰も見てゐる者あねえ。源次も云へ、勘吉も立て。賽錢集めでもしようぢやあねえか。

源次 （口をむぐむぐさせるのみ）うゝゝ。

勘吉 哥兄、立てねえ。どうしても立てねえ。

嘉平 何だ。どうしたんだ。巫山戲るなよ。

勘吉 ふざけてるんぢやねえ。全く立てねえんだ。

源次 （頻に手眞似をし、地面に字を書く）

嘉平 （讀む）何だと、どうしてもくちがきけねえ。ほんとにきけねえのか。

源次 (淚をこぼして點頭くのみ)

勘吉 (泣きさうな聲で) 哥兄、俺あどうなるんだ。どうしても立てねえや。おめえどうかして呉んねえ。

嘉平 ふゝむ。さうすると彼奴あ、ほんとの神樣かも知れねえ。これや飛んだ事をしたぞ。

勘吉 ほんとの神樣なら、俺あもう一生立てねえだらう。哥兄、どうかお願ひだ。早く神樣にお願ひしてもう一度もとへ返して呉れ。

源次 (嘉平の裾を捉へ頻に手眞似に訴ふ)

勘吉 神樣がゐなくならねえ中に、早くお願ひ申して呉れ。俺あほんとに心から後悔しただ。もう決してこんな眞似はしねえだ。

嘉平 (急に社の扉を開き、其前にひれ伏す) 神樣、惡うございました。全くお見外れ申しやした。どうぞ其罪は御勘辨下さいまし。而してあの通り悔い改めてゐるのですから、二人をもとにお返し下さいまし。お願ひ申上げまする。

彌三郎 (靜に立現はれ) やつと私の本體がわかつたか。

嘉平 はい。わかりました。(平伏する)

彌三郎 では心から悔悟したと云ふのぢやな。

嘉平 あの通り手を合せて拜んで居ります。

彌三郎 では以後その方どもはわしの弟子となつて、わしの爲に盡すと誓ふか。

嘉平 何でも致しまする。

彌三郎 では許し遣はす。源次も云へ。勘吉も立て

源次 (急に喋り出す) あゝあゝ、飛んだ目に會つた。天罰たあ全くこの事だ。自分の方で計つた積りが、神樣に會つちやあ敵はねえ。神さうつかりこんな事をやるもんぢやねえ。しかもどこにもゐるまはほんとにゐるんだ。と見える。

勘吉 (一二度跳ね上つて) もと通りの足だ。これなら縣知事さまの人力車と駈けつくらだつて出來る。東京まで十日で繭賣りに出掛ける事も出來さうだ。俺あやつと安心した。

(三人よろこぶ。間)

嘉平 (急に手をついて) 神樣にお伺ひ申上げます。貴方さまはもとからお生れ代りで、あんな奇蹟をなさる御力があつたのですか。

彌三郎 わしは昨日まで、いや、先刻までそれを知らなんだ。けれども先刻から、自分で自分を信ずるやうになつた。おまへ達がさう信じさせて呉れた。信ずる事を教へて呉れたのぢや。今わしはわしに力があると信じて居る。即ち力がある所以ぢや。人々も又わしに力があると信じて居る。即ちそこにも又在る所以ぢや信ずる事は在ることと同じぢや。わしは神ぢや。おまへ達の言葉に從へば地藏尊ぢや。明日からわしはわしの力を以て世を教へ又救ふのぢや。わしに其教へを、此處の地藏に因んで地藏教と名付ける。わしは其地藏教の教祖ぢや。さあみんな來て、この新しい教への主、救ひの主を拜むがいゝ。わしは神の子ぢや。佛の子ぢや。あらゆるもののおん主ぢや。救ひを求むるものは來て、わしに聞け。わしを信ずるあらゆるものにわしは祝福をさづけてやる。わしは今こそ其力を得たのだ。さあ來れあらゆるもの! 來りてわしを拜せよ。

(三人威に打たれて跪拜す。舞臺一面快き緑の光に包まれ、百鳥急に鳴き頻る。一旦歸途に就きたる村人は、握飯を恭しく捧げたる老婆を先頭として再び登場し、堂前にひれ伏す。老婆握飯を神前に供ふ。皆々禮拜。彌三郎その間に握飯を一つ取つて頰張り、後ろを向きて靜々と堂内に入る。雉、山鳩、閑古鳥、其他百鳥の囀りの中に)

(靜に幕)

阿武隈心中（農民劇三幕）

人物

阿久津留藏　農夫。五十歳。
同　留吉　その長男。二十六歳。
同　留二　その次男。二十三歳。
お　豐　その姪。十九歳。
今泉猪八　その兄弟。博勞。三十五歳。
高橋七造　留吉の友。村役場。書記。二十五六歳。
伊東作太郎　隣村の人。農夫。四十歳位。
三瓶久作　阿久津家の作男。六十歳前後。
僧侶。隣人。村の娘。郵便夫。葬儀屋の人夫。村人等。

時代

現代。事件の起れるは或る年の秋の末。

場所

東北地方の或る農村。

第一幕

阿久津留藏の家。薄く暗い百姓家の内部である。左半は土間で、そこの壁側には色々な農具類、筵、臼なぞが置かれてある。その正面に出入口があつて、そこからは庭の薬鶏頭や鳳仙花なぞの、秋の日を浴びてゐるのが見える。

右半は一段高い筵を敷いた板敷で、その上り端には、大きな爐が切つてある。而してそのあたりに廚具類が散在してゐる。庭に面した正面は暗い障子で立て切つてある。右手は鏡戸で劃られてゐて、奥の座敷へ通ずる。

凡べては、煤けた乍らに、田舍の舊家である。

幕あくと、此家の息子たちには従妹にあたるお豐が、正面の出入口から明りを取り乍ら、觀客に背中を向け、繭を煮て、絲を繰つてゐる。

繭釜からはゆるい煙がのぼつてゐる。傾い紡車の音と共に、程近い阿武隈の瀬鳴りが聞える。

そこへ更に一里ほど離れた町の、紡績の汽笛が鳴る。丁度十二時である。

彼女はそれを聞くと、立つて爐に火を焚きつけ、その鍵木に鍋を掛ける。而して戻つて來て、又繭の絲を取らうとする。

そこへ役場の書記の高橋が、古びた紋付に髪を分けた所謂田舍の青年會員顔で入つて來る。

高橋　やあお豐ちやん。おめえ一人かい。

お豐　あい。皆畑さ行つてるわい。何か用があんのかい。

高橋　いんにや。用なんて何にもねえけんちよ、あの、留吉つあんが歸つたちふから、會ふべと思つて來たんだわい。歸つたつてほんたうかい。

お豐　ほんたうだわい。昨日の晩げ歸つて來たの。

高橋　さうかい。そんぢや矢つ張り歸つて來たんだなあ。俺あもうあの人は東京さ行つた切りで、死ぬ迄歸つて來めえと思つて、心配し

てたんだ。ほんとに佳つく歸つて來たなあ！　お豐ちやん、おめえも嬉しかんべな。（少しからかふやうに覗き込む）死ぬほど待つてゐたんだもの、な。

お豐　（赤くなつて）やんだおら。知んねえぞい、そんな事！

高橋　滿更さうでもあんめえ。留吉つあんが出て行つたのもおめえの爲、歸つて來たのもおめえの爲だべからな。

お豐　なんでそんな事あつぺ。留吉兄にやは早あおらの事なんど、忘れてゐつぺもの。東京にやなんぼ愛んげえ人がゐつか、解んねえもの。

高橋　なあにそんな事あつぺ。今度歸つて來たんだつて、おめえを思ひ出したから、歸つたんだべからな。

お豐　何でそんな事あつぺ。おらなんて見向きもしねえんだもの。

高橋　そんぢや、何だつて歸つて來たんだべな。おらあ留吉つあんも身が定まつたもんで、嫁探しに來たんだと思つた。

お豐　東京で何してたんだか、何しに戻つたんだか、ちつとも云はねえんだもの。昨日から只默つて、下ばつかし向いてるんだぞい。

高橋　ふうむ。父にも何も云はねえのか。

お豐　あい。それに叔父さんはあゝ云ふ默りんぼだもんで、きゝもしねえし、糺しもしねえで、二人ともしんねりむつつりと坐つてるばかりなんだわい。

高橋　そんぢや親父は怒つてるんかい。

お豐　さうでもねえやうだげんぢよ、別に悦んでもゐねえやうだない。

高橋　一體歸つて來た時あ、どんな風だつたい。

お豐　おら丁度町さ行つてて、わかんなかつたげんぢよ、久作爺やに聞くと、晩方人の顏が見えなくなる頃、ひよつくら若え人が入つて來て、「父、今歸つた。どうか今迄の事は何にも云はねえで、堪忍して呉んちえゝ。」つて云つたんだとい。

高橋　そしたら父は何て云つたい。

お豐　暗くなりしなだつたもんで、叔父さんも誰ぢやか、ちよつくらわかんなかつたつけが、留吉つあんだとわかると、只「留吉か。まあ入れ。」つて云つたきりだつたとい。

高橋　ふうむ。それからどうした。

お豐　默つてそこに出してあつた飯を食つたんだとい。

高橋　さうして？

お豐　それつきりだわい。

高橋　留二さんにも何とも云はねえのかい。

お豐　さうだわい。

高橋　おめえさんにも何とも云はねえのかい。

お豐　（少しは嬌態を見せて）あい。

高橋　おめえが此處にゐたんで吃驚したつぺなあ。

お豐　はじめおらが誰ぢやか解んなかつたやうだつたわい。

高橋　さうだんべとも。おめえも三年前とは變つてつし、此の家さ來てつぺとは、夢にも思ふめえからな。

お豐　おらだつて父とおつ母あとが、去年の夏赤痢で死なねえければ、こゝへ一生來なかつたべにない！

高橋　ほんたうだ、ほんとに世の中て解んねえもんだない！　あん時あ、留吉つあんがおめえを嫁に欲しいつて云つたら、親父がたつた一言で刎ねつけつちまつて、「一人前の働きも出來ねえ中に、嫁どころであつか。」つて怒つたつけが、あれが原因で留吉つあんは家出をしつし、三年經つ中にあ、おめえの兩親が死んでおめえは此處さ引取られつし、ほんとに

緣ちふもんは奇體なもんだなあ！　どらせおめえをかうやつて引取つて置くんだら、あん時留吉つあんの嫁に貰つたらよかつたべに。

お豐　さうも行かねえんだわい。

高橋　それに何だちふでねえか。父はおめえを今では留二さんの嫁にしつぺと思つてるちふでねえか。

お豐　（伏目になつて）留二さんが此間そんなこと云つてたけんぢよ。……

高橋　今になつて留二さんの嫁にする氣があんなら、あん時なあ！

お豐　おら何だか留二さんなんか。——

高橋　厭だと云ふんかい。

お豐　いんや。さうでもねえけんぢよ。……

高橋　留吉つあんが歸つて來たからにあ、そつちの方がいゝつて云ふんかい。

お豐　……（點頭く）

高橋　でもおめえは留吉つあんがゐねえ間は、留二さんの嫁になるつもりだつたんだに。

お豐　そんぢやつて、仕方がねえもの。

高橋　何だ仕方がねえもんだ。さういふ事を云ふ女あつ子の方が、よつぽど仕方がねえ。（間）どうだい、留吉つあんは立派になつて歸つて來たかい。

お豐　米澤縞とか何とかいふんだべで、ぴかぴかする着物を着て來たわい。もとよつかずつと顏が白くなつて。——

高橋　東下りだもん、色男にもなつぺえよ。そんぢや又村の女あつ子が騷ぐこんだべ。おめえに若え衆が騷ぐやうにな。

お豐　（怒つたやうに）あらら又、知んねえぞい！

高橋　知んねえこともあんめえ。この罪作りが。（近よつて）この顏で！（頰ぺたをつゝからとする）

お豐　やんだつてば。

高橋　あ、誰か歸つて來たやうだ。留吉つあんかな。（出入口から外を見る）留吉つあんぢやねえ。皆が畑から歸つたんだ。

お豐　さうかい。（納車の處を去つて、爐にかけたる鍋を見る）

（久留吉、留二、雇人の老爺た久作と共に入り來る）

高橋　今日は。いゝお天氣だない。

留藏　（挨拶をするのをちつと見やり乍ら）何か用かい。

留二　（傍から）何か役場の用でもあんですかい。

高橋　いゝや、留吉つあんに會ひに來たんだ[illegible]い。歸つたちふ話を聞いたから。

留二　（或る皮肉を以て）そして玄關に　お豐ちやんでもおらあはらつて[illegible]

久作　事によつと、そつちの方が[illegible]知んねえな。

高橋　馬鹿な事云つちやあいけねえよ。[illegible]でそんな眞似しつぺ。お豐ちやんに聞いて見れあ解るわい、なあお豐ちやん。

お豐　（まるで知らないふりをしてゐる）

留二　ほら、見つせえ。

久作　かう云ふ處を見ると、女子の方が割りに正直だで。

高橋　へえ、とんでも[illegible]ちふもんだ、

久作　そんぢやから庄屋の爺さまは云つたんで。人間は一度惡い事をしつと、しよしねえ二度目のも背負ひ込まなくてなんねえつてな。

高橋　おらおめえ達に[illegible]やうな事は、一ぺんもしたことあねえよ。

留二　しなけれあ猶のこつた　どらかこれからはお願えだから、お豐ちやん一人ん處へ、[illegible]

高橋　（一種の反抗を以て）みんなにお豐[illegible]が心配なのかい。大丈夫だよ、お豐ちやん

は。昔から留吉つあんのものと定まつてるんだもの。側からどんな手出しをしたつて、ちよつくらでも靡くもんぢやねえわい。

お豐 (怒つて)何云ふんだべ、此人は。もう澤山だぞい、そんな事!

高橋 だつておめえ先刻云つたでねえか。留吉つあんの外は誰でも厭だつて。留二さんなんて、死んでも厭だつて。

留二 (蒼くなつてお豐の方を見る)

お豐 (泣きさうになつて)譃! 譃! なんぼ何だつて、あんまりな事云ふもんでねえわい。

久作 (頭をふり乍ら)かうなつちや老人は傍さ退いてべえ。

留藏 (今迄むつつりと樣子を見てゐたが急に高橋を捉へて、入口の方へ突きやる)高橋さん。又來て貰ふべ。

高橋 (出て行き乍ら入口の處で惡口半分に)いや、お邪魔しました。(留二に向つて)もう一度、お豐ちやんは御心配には及びやせんよ。

(去る)

留二 (默つて高橋の去つた後を睨んでゐたが、つかくくとお豐の方へ進みよつて)お豐ちやん、先刻高橋の云つた事あ、あれあ譃だべな。

お豐 (泣いてゐる。點頭く)

留二 きつと譃か。え、え、え。

留藏 留二、よせ! 何馬鹿を訊くんだ!

留二 はい。(離れる)

留藏 お豐。早く晩飯だ。

お豐 はい。(爐の方へ來て、鍋を下ろし、膳などを揃へる)

留二 ほんに仕方がねえ野郎だ。あの野郎がゐるために、何ぼ村の若え衆が惡くなつか、解つたもんでねえ。兄にやだつて、あいつが付つ突いたもんだから家を飛び出したんだ。鍬も手に持てねえ癖しやがつて。

久作 あいつばつかしぢやねえ。今の若え衆と云ふ若え衆は、大概あゝだ。おらあ見てえに、土の上さ生れて、土と縁がきれねえやうに育てられたもなあ一人もゐねえ、ほんとの百姓つてもんは、おら等が代でお終ひだんべ。

留二 おれが立派な百姓になつて見せる。そして兄にやが棄てた此家で、立派に父の後を繼いで見せるわい。

留藏 (爐の向うに坐つて、むつと聞いてゐる)

久作 おめえさん一人位[illegible]、時世には勝てねえ。留吉つあんたつて、もとくゝ此家が[illegible]なんちやねえんだ。みんな時世の故なんだわい。何と云つても時世がかうなつて行くんだもの。土に齧りついて永い間かかし食つてゐるよりか、町へ出れあ煙草專賣所で一日八十錢取れる時世だもの。ちよつくら東京さ行つて來れば、お蠶ぐるみの着物で歸つて來られる時世だもの。かうなつて來れあ、俺なんざあ默つて引込んでゐるより外あねえんだ。默つてどうなつてゆくか、見てゐるより外はねえんだ。時世をとめるの何のたつて仕方がねえ。

留藏 そんな愚痴を云ふな。

(皆默る)

お豐 さあお膳ができたぞい。

(皆默つて、爐端に置いた黑い古風な腰高膳につく)

留藏 (お豐に)留吉はまだか。

お豐 今朝出たきりですわい。

留藏 それぢや始めろ。

(皆々飯を食ひ始める)

留二 それはさうと兄にやは、歸つて來てどうするつもりなんたべ。(答なし)なあ、[illegible]

留藏 俺らあ知らねえ。おめえ聞きたけれあ聞いて見ろ。

留二 はい。

おら今迄黙つてゐたけんちよ、おめえさんにや云ひてえ言分もあるんだぞい。おらばつかりやねえ。何も云はねえが、父だつて、おめえにや云ひてえことも沢山あつぺと思ふんだ。

留藏　留二、よけいなことを云ふな。

留吉　（沈み込んで）それあ俺の身勝手なことは俺だつて知つてる。お父つあんだつて、おめえだつて云ひ分はあらう。そして俺の悪い所は幾重にも詫る。詫るからどうか堪忍して呉れ。

留二　（少しくてれて）おら何も兄にやに詫らせてえつて云ふんぢやねえんだよ。

留吉　（改めて父に）それからお父さんも、どうか許して下さいまし。

留藏　そんなことはどうでもいゝがな。留吉、一體おまへこれからどうする心算なんだ。

留二　さうだ、それを先づ聞かして下せえよ。

留吉　かうなつた以上は、どの道申上げずにはゐられません。實は僕、改めてお父さんにも、留二にもお願ひがあるんです。

久作　ぢやア了つて、おら帰つて行つてべ。（一人てさつさと下りて出て行く）

留吉　お願ひと云ふのは他では御座いませんが、私お金を少々拝借が願ひたいと思つて、それで歸つて來たんです。一體よし成功でもしてからでなくちや顔向けも出來ないんでございませうが、拠ん處ない用事で、是非三百圓ほど入用に迫られたものですから、此處へ來てお願ひするより外に道がなかつたんです。

留二　三百圓！

留藏　三百圓と云へば大金だ。

留吉　はい。それが是非商賣上必要なんでして、それさへあれば此際十分商賣の方も見込みがつくんですから。

留藏　商賣つて何だ。

留吉　あの……呉服屋をやつて居ります。

留藏　その資金にいると云ふのか。

留吉　はい。いゝ品物を見つけましたので、それさへ仕入れとけば、賣込みの方は確實なんですから。

留藏　それは解つた。が、おまへ此家さへ歸つて來れあ、三百圓なんて金がそこらにごろごろ轉がつてると思つてるのか。

留吉　いゝえ、決してそんなことは思ひやしません。

留藏　ではどうするんだ。

留吉　お願ひと云ふのは實はそこなんですが、一時此家屋敷を私に貸して下さると思つて、抵當にするのを許して下さい。どうかお願ひです。（父答へず）留二。どうかおまへにも願む。兄さんを助けると思つて許して呉れ。

留二　おら厭だ、そんぢや餘り勝手過ぎるでねえかい。おら等が折角からやつて汗水垂らして働いてる土地を、いくらなんだつて抵當に入れるなんて、俺あ厭だ。誰がなんちゆつたつて厭だ。父！おめえさうやつて默つてんのは、兄にやの願ひを承知するつもりなんか。そんぢや餘りひどかんべぞ。父だつておら等があんなに一生懸命稼いで來たのが、何のためだか忘れはしめえ。みんな此家をもと通りにしつぺと思ふ一心ばかりでねえか。よ、父！

留藏　（沈鬱に）抵當にしたくも、する土地が無えよ。留吉。おめえはまだ子供の時の夢を見てるんのか知んねえけんぢよ、もう此家についてる田地と云ふのは、たつた百歩ばかりになつて了つたんだぞ。

留二　その百歩だつて、食ひとめたのは誰の力だ。

留吉　（必死になつて）せめてそれだけでもよろしうございますから、どうかお願ひです、お願ひ

ひです。

留藏　（それを耳にもかけず立上る。留吉、久作が待つてる。畑さ行くべえ。

留吉　待つて下さい。お父さん。

お豐　（思はずとめるやうに）叔父さん！

留藏　（支度をし乍ら）何だ。

お豐　……（てれる）

留二　（お豐にやさしく）おめえなんぞ心配することあ無えよ。

（留吉下を向いてる。二人は出て行かうとする。出合頭に隣村の人、伊東作太郎入り來る）

伊東　今日は。（二人立止まる）丁度ゐてよかつた。烏渡くら待つて吳んちえゝ。

留藏　（不機嫌に）何か用かな。

伊東　何か用かつて、留藏さん、おめえ解つてるでねえか。俺の顏を見てる乍ら、さう白ばくれなくつてもよかつペえ。

留藏　だから何だ。

伊東　いつかの桑の代金よ。返す返すつて云つて、一體何時返して吳れるんだ。さあ今日はきつぱりした返事を聞くべえ。

留藏　錢なら今日ねえよ。

伊東　おめえの方でさう出るんなら、俺の方でも云はなくちやなんねえ。一體おめえは川向ひのお定婆あ家さ、ちやんと桑の代を拂つたちふでねえか。

留藏　あつたから拂つた。

伊東　そんぢやなんで俺の方を後廻しにしたんだ。

留藏　廻りきらなかつたんだ。あつたら拂ふよ。

伊東　そんなこと云はねえで、たつた十圓ばつかりでねえか。困つてんのはおめえばつかりでねえ。俺だつて馬喰市さ行つて、一儲けしなくてなんねえちふに、錢が足りねえくつて困つてんだ。返して吳んちえゝよ。

留藏　留吉、聞いたか。（留吉顏を伏せる）

伊東　（留吉の方をちらと尻目にかけて）それに東京から息子さんが歸つて來たちふでねえか。俺は今日はどうしてもとるつもりで來たんだから、愚圖々々しねえで渡して吳んちえよ。

留藏　無え！

伊東　そんぢや出來るまで此處で待つてらあ。俺あ今日は覺悟をきめて來たんだ。貰はねえ中あ、一歩も此處あ退かねえんだ。（腰をかける）

留二　伊東さん、今日はね、父が少し機嫌が惡いんだし、ほんとに錢もねえんだから、さう云はずに歸つて吳んちえゝ。おらが賴む。遠えことは云はねえ、もう五日待つて吳んちえ。

伊東　聞き飽きたよ。五日待つんだら、此處さ坐り込んで待つてらあ。これが水呑百姓ぢやあんめえし、立派な阿久津の大盡さまでねえか。十圓位の金はねえ筈はねえ。出さねえんだ。

留藏　おめえ、いつまでもそこにゐる氣か。

伊東　さうとも。

留藏　（沈鬱に）出て行け。

伊東　そんぢや錢をよこせ。

留藏　出て行かねえか。

伊東　受取るまでは出て行かねえよ。

留藏　出ろ。（答なし）出ねえな。よし、出ねえたつて、貴樣を出さずに置くもんか。（近よつて襟首をつかまへる）出て行け。

伊東　（振りもぎる）何をするんだ。

留藏　野郎出て行かねえと……と云ひ乍ら壁側にあつた鎌をとりあげる。而して沈鬱に近づかうとする。留二、お豐ら急いでそれをとどめる　[illegible]、[illegible]つたら　伊東は[illegible]な[illegible]

て讀む）

伊東 打つんだら、打つて見ろ、[illegible]るもんか。

留藏 野郎、まだぬかすな。（猛然として留二を振りほどいて、飛びかゝらうとする。留吉も急いで中へ入る）

（此の騷ぎの中に叔父の猪八が入つて來る。博勞で、田舍の遊び人らしいなりをしてゐる）

猪八 何だ。大變賑かだな。どうしたんだ。

留二 あ、叔父つあん。いゝ處さ來た。今伊東さんが貸金を促りに來たもんで、父が怒つて手がつけられねえんだ。

猪八 さうか。哥兄、何だつてさう怒るんだ。おめえにも似合はねえぢやねえか。

留藏 うむ。（又沈鬱に返つて、薪を留二のとる儘にまかす）

猪八 一體何だつてこんな事になつたんだ。留藏兄にやの怒るつてからにや、よつぽどの事があつたんだべな。

留吉 いゝえ、叔父さん、かう云ふ譯なんです。

猪八 留吉か。だつて振り離つたちふのはほんたうだな。うむ、それで。……

留吉 實は私が面白くない事を父に云つて、[illegible]癇が惡い時に、此人が來て、金を返さなければいつ迄も坐り込んでると云つたもんだから、それで父が怒つたんですよ。

猪八 さうか。（伊東に）ぢやあ伊東さん、おめえ坐り込んだんだな。

伊東 こんぢやつて、俺も、猪八つあんの前だが、堪忍袋の緒が切れたんだわい。

猪八 一體貸つて云ふのは幾何だ。

伊東 十兩だわい。

猪八 十兩か。——ちつとおめえに吳れてやるにあ高えが、よし、俺が出してやらあ。（皮財布から金をざら〳〵と出して）今日は俺あ金持なんだぞ。これから馬鑼市さ行くんで、資本をちつと持つてるんだ。さあ、十兩だ。取つてつて貰ふべ。

伊東 いや。これあ有難うござりやす。これせえ貰へば文句なしだ。ではこれあ受取りです。

猪八 おやさつ〳〵と行つたらよかつぺ。

伊東 （金を收めて）いや、大きにお喧しうござりやした。（去る）

お豐 伊東の叔父さん。とうとう行[illegible]。おらやつと安心したわい。

猪八 （お豐をちつと見乍ら）おめえかさう云つて禮を云つて吳れれあ、俺あ[illegible]の好色な眼で、おめえいつ見ても[illegible]なあ！

お豐 あら厭だ、叔父さん。

留二 ほんとに叔父つあん、あんなに出しこいいんですかい。

猪八 なあに、鑼市さ行けば、五兩や十兩どうにでもならあ。

留二 さうですかい。

留吉 でもほんとに濟みませんでした。

留二 （默つて立つてゐる留藏に）父さも一言お禮を云つて吳んちえゝな。

留藏 （默つてゐる）

猪八 なあに、そんなことあ云ふにや及ばねえや、俺あ哥兄の氣性は呑み込んでるんだ。哥兄はこれで、俺が餘計なことをしたと思つてるんだ。でも、俺が金を出すのを止めなかつただけ、今日は穩かだよ、はゝゝ。

留藏 （突然に）留二。畑さ行かう。

留二 はい。

猪八 ぢや行つて稼ぎなんしよ。俺あ鳥渡くら留吉が歸つた顏を見て、馬市さ行くんだから。明日は又寄らあ。

留二 そんぢや一と稼ぎして來べえ。

（留藏と留二は行く。お豐は膳などの後片付をする）

猪八　どうだ吉、久しぶりだつたなあ。

留吉　御無沙汰して申譯ありません。

猪八　おめえも俺も、眞當な百姓が出來ねえんで、お互に困んたもんよ、なあ。そんでもおめえは、立派になつてよかつた。

留吉　立派どころですか。失敗して歸つたも同樣です。

猪八　そんなことはあんめえ。おめえが失敗る譯がねえよ。東京では何をしてたんだ。

留吉　あの、株屋の番頭をしてゐました。

お豐　（ふと顏をあげて、不審な顏する）

猪八　さうか。あれあ面白いもんだつてな。俺も一生に一度はさう云ふ事がして見てえ。田舍で馬を率いて歩いたつて、根つから始まんねえからな。

留吉　（話頭を轉じようとして）糶つて云へば、昔と變りはありませんかねえ。

猪八　うむ。厩が縣の費用で立派なのになつたきりだ。それをぬかして、變つたことあねえ。

留吉　さうですか。僕も子供の時あ、よく行つたもんでした。埒の内を持主がぐる〳〵と引張り廻すと、四方に見てゐる博勞が、てんでに「五兩と云ふが——」「十兩は如何に——」なぞと値を糶り上げたものでした。

猪八　さうだ。叔父さんなぞもあれをやるんだ。

留吉　而して夕方になると、博勞が買ひ取つた馬を十四も一緒につないで、今迄の飼ひ主を慕つて嘶くのを、すかし〳〵連れて行つたものでした。

猪八　馬つて奴はあれで可愛い奴よ、なあ。親馬と仔馬が買ひ離される時なんぞ、ほんに人間みてえに嘶きやがる。

留吉　叔父さん、儲かりますか。

猪八　うむ。ちつたあ儲けなくては好きな酒も呑めねえかんな。（煙草入れを收めて）どれ、そんぢや一と儲け目論んで來べえかな。

留吉　もう行くんですか。

お豐　あら叔父さん。まだゆつくりしたらよかんばい。

猪八　おめえにさう云はれると、千年でもゐてえが、さうすれあ商賣がすたらあな。おや歸りに又その愛んけえ顏を見に寄つぺえかな。左樣なら。

留吉　左樣なら、行つていらつしやい。

猪八　あばよ。（お豐の顏を鳥渡つゝいて）留吉、この子をおめえに預けて置くのは、猫に鰹節みてえなもんだな。

留吉　冗談いつちやいけません。

（猪八、笑ひ乍ら去る。二人も顏を見合せて笑ふ）

留吉　お豐ちやん、叔父さんの今云つた事を聞いてたかい。

お豐　はい。いつでも今泉の叔父さんは冗談ばかし云ふんだもの。

留吉　それも悪いことぢやないよ。冗談から駒がでるつていふぢやないか。ね。だからおまへもそんなに遠くにゐないで、鳥渡此處へおいでよ。

お豐　はい。（從順に近く坐る）

留吉　歸つてもまだおまへさんと沁々話もしなかつたなあ。此三年間どうしてゐたい。俺の事も時々あ思ひ出したかい。

お豐　それどころでねえぞい。一生懸命で待つてゐたわい。

留吉　でも三年の間にあ、誰か他の男に、何度か此顏べたを見られたらうなあ。

お豐　そんな事。——

留吉　おや留二には何度も顏あ見て貰つたらう。

お豐　あら、あんな事云つて。おら一遍も無え

ざい。一遍もねえざい。

留吉　噓だら。だつて二年も同じ家にゐて、留二がこんな可愛い人を放つておくもんか。

お豐　だつて眞實だもの。眞實に無えだもの。誰が留二さんなんかと。――

留吉　噓をついたつて駄目だ。ちやんと顏に書いてある。

お豐　どこに書いてあるい。有りもしねえ。

留吉　だつて留二はさう云つたぜ。

お豐　噓。噓。そんぢやあの人いゝ加減な事云つたんだ。

留吉　ほんとに無いのかい。

お豐　そんなに疑んだら、どうでもして見つさんしよ。

留吉　眼をお見せ。やましく無ければ、ちやんと僕の方が見てゐられる筈だ。

お豐　（眞面目になつて見る）

留吉　（ぢつと見合つてゐたが、急に）ね、お豐ちやん、どこか二人きりで會へるやうな處はないかい。

お豐　あの裏の納屋がいゝわい。

留吉　おまへ見つけて置いたのか。

お豐　はい。

留吉　そこで今迄留二が話かと。…

お豐　おれ又――

留吉　もうからかふのはよさうな。（間）併しおめえほんとに納屋に行く氣かい。

お豐　（がつくりとうなづいて、男の顏を盜み見る）

留吉　さうだ。忘れよう。忘れよう。おまへの顏を眺めてゐてすつかり何でも忘れよう。今の分ぢやそれが唯一の逃げ道だ。

（お豐は何の意味だか分らず、猶もぼんやり留吉の顏に浮んだ歡喜と苦痛の表情を眺めてゐる）

（幕）

第二幕

納屋の前。正面には低い納屋の入口が見える。そこらには大小の藁塊が所狭きまでに積まれてある。而してそれを統べてゐるかの如く柿の木が一本。――前幕の翌日、同じく秋の日の夕暮。前庭は一面に赤い夕日を浴びてゐる。渡り鳥が啼いて過ぎる。阿武隈川の瀬鳴りが聞える。

幕あくと、舞臺はしばらく空虚。やがて右手から、今洗つたばかりの鍬を擔いで、父の留藏と久作とが歸つて來る。彼等は默つて通り過ぎる。（間）。左手から留吉、思ひに沈み乍ら出てくる。同時に右手から留二が、同じく二三の農具を肩にして、出て來る、二人は舞臺の中央で出會ふ。

留二　あ、兄にや、何處さ行くんだい。

留吉　なに、そこらを鳥渡歩いて來ようかと思つて。――

留二　別に用があるつて譯でもねえんだない。

留吉　うむ。あると云ふ程の事は無い。

留二　そんぢや丁度いゝ。おら兄にやに鳥渡話があるんだけんぢよ、今聞いて貰へめえか。

留吉　（少し逡巡してゐたが）うむ、聞いても差支ないが。――

留二　丁度誰も居ねえから、是非聞いて貰ひてえよ。まあ、手間は取らせねえ。鳥渡くら、そこの藁の上へ、腰を下ろして呉んちえゝ。

留吉　（適宜な藁の上に腰をかける）それで話と云ふのは。――

留二　（同じく腰を下ろして）實は弟の口から、こんなことを云へることぢやあんめえけんぢよ、そんぢや又何時まで經つたつて果て

しが無えから、今日は思ひ切つておらあ云ふ。話つて云ふのは外でも無え。おめえ……その、一日も早く東京さ歸つて貰へめえか。

留吉 うむ。それあ俺ゝ歸る氣だが。――

留二 歸つて來て一日か二日にしかなんねえのに、こんな追ひ立てるやうなことを云ふのは、何ぼ何でも餘り非道いとおめえも思ふべげんぢよ、ちつとは先づ俺たちの身にもなつて呉んちえゝ。さう云つちや氣を惡くするかも知んねえげんぢよ、此家のことにして見れあ、おめえが來てから面白くねえ事ばつかしだ。父は父で昨日から一言も口を聞かねえ。おめえはおめえで嘆息ばかり吐いてゐる。此頃ぢやお豐ちやんまで妙にそはそはと落着かねえし、お喋りの久作まで默り込んでゐる。折角一日稼いで家さ歸つても、お互に他人みてえに向ひ合つて、まるで砂を嚙むやうに飯を食ふ。――それはつて云ふのもみんな、兄にや、おめえが來てからの事なんだぞい。

留吉 それあ俺も濟まないとは思つてる。これで內心どれだけおめえ達に謝罪つてゐるか。

留二 おらあ何もおめえが謝罪るの謝罪らねえのつて、そんな事を云ふんぢやねえ。おめえに全くそれだけの心があるんだら、お願ひだ。もう一足だけその心持を進めて、東京さ歸つて呉んちえゝ。賴む。おらが賴む。此上齢取つた父やおら等に累えを掛けねえで、此家は此家の儘で置かして呉んちえゝ。それあおめえも折角資本を探しに來たんだべから、それが出來ねえ中は歸らねえつもりかも知んねえげんぢよ、此家を抵當にするなんてことは、先祖樣に對しても迚も出來た義理ぢやねえよ。それに父があゝ一旦不承知を云ひ出したからにあ、何て云つたつて駄目だ。だからそいつは諦めて、早く東京さ歸つた方が、おらおめえの爲だと思ふんだ。

留吉 それはおまへの指圖を受ける迄もなく、俺もとうから考へてはゐるんだ。

留二 そんなら何故さうして毎日〻圖々してんだ。

留吉 いろいろ口で云へない譯もあるから、一日延ばし一日延ばしてはゐるんだが、さう云はれて見れば、思ひ切るより外には仕方がない。おまへの云ふ通り、俺は歸るよ。

留二 そんぢや何時歸つて呉れる。

留吉 明日。

留二 明日の何時。

留吉 夕方まで待つて呉れ。俺もまだ會つて行きたい人や、話したい人もあるんだから。

留二 (間)おめえ、それほど迄にお豐ちやんが思ひ切れねえのか。

留吉 (立上つて)何を下らない!

留二 お豐ちやんの事なら、改めておらおめえに斷つて置くが、あの子は俺が貰ふことになつてんだから、ちつとは氣を付けて呉んちええよ。

留吉 (强ひて冷靜に)ふうむ。おまへの嫁と定まつてるのか。いつ、誰が定めたんだ。

留二 親父も俺も疾うからさう定めてるんだ。

留吉 そして本人は。

留二 本人も無論承知してるとも。

留吉 ほんとに承知してるんだな。

留二 譃なんて云ふもんか。(間)言葉ばかりぢやねえ。兄にやの前だけんぢよ、あの子はとつくにおらが物なんだからな。

留吉 おまへの云ふ事を聞いたことがあると云ふのか。

留二 (間まつたやうな薄ら笑ひを浮べて)まあ、そんな事だな。永い間一つ家にゐれば、その位當り前ぢやねえか。何もそんなに目の色を變へて驚くにも當るめえよ。

留吉 ふうむ。さうか。(間)併しおまへとそ

んな關係になつた更に以前に、俺と關係があつたとしたら、おまへはどうする。

留二　どうもからもねえ。おらけどんな事があつたつて、お豐ちやんを貰ふことに定めてる。

留吉　併し問題はおまへとか俺とかの心にあるんぢやない。おまへがいくらさうと決めたつて、あの子が不承知なら仕方もないぢやないか。前にあつた關係とか何とかは、少しだつて此場合、あの子の所有權を定める問題にはならない。あの子がおまへのものになるか、俺のものになるかは、現在のお豐ちやんの心一つで定まるんだ。

留二　ぢや兄にやは、あの子がおめえに惚れてるとしたら、此處から連れてゆくつもりか。

留吉　あの子にその決心さへあれば勿論連れてゆくかも知れない。併しまだ眞にあの子の心を聞いて見た事はないんだから、おまへがそれ程まで云ひ張るんなら、どうだい、一つ此處へ呼んで聞いて見ようぢやないか。おまへを取るか、俺を取るか。

留二　兄にや！　おめえもうお豐ちやんと懸れて約束でもしたな。そしてお豐ちやんと二人で俺に恥を掻かせようと云ふんだな。おめえは自分の勝つのが解つてるもんだから、それでそんな事を云ふんだべ。

留吉　ぢや一體どうすればいゝんだ。

留二（泣きさうな聲で）これほど云つても兄にや、おめえは聞いて吳れねえのか。おめえだつてそれぢや餘り非道かんべぞ！　おめえだつてまさか　の幸福と云ふ幸福を、みんな叩き壞さうと思つて、歸つて來たんでもあんめえ。（殆ど泣いて）どうか賴む。賴むから大人しく此儘歸つて吳んちえゝ。おめえが行つてさへ吳れれあ、お豐ちやんだつて、もと通り俺が嫁になるのを、否とは決して云はねえんだ。こんなことを云ふのは男らしくねえ、身勝手な事かも知んねえけんぢよ、俺あかうして手をついて賴むよ。

留吉（長い間默つてゐる。ふと閃電の如く）留二。それぢや俺の望みも聞いて吳れるか。

留二　おめえの望みとは。

留吉　家を貸して吳れ。（留二呆然として語なし）それあこんな際どい談判で、殊に自分の女との交換條件に出すなんて、俺も考へれば恥しい話だ。けれども俺だつて、どうしても金が要る必死の場合なんだ。おまへの生活にお豐ちやんが要る以上に、俺の生活には金が要るんだ。俺は女を賣るやうな事はしたくはない。けれども、おまへも俺の心持を、少しは察してかなへて吳れ。兄さんも賴む。な、な。

留二（沈鬱に）それぢや、お豐ちやんを俺に吳れるから、家を抵當に貸して吳れと云ふんだない。

留吉　さうだ。おまへ先刻俺がおまへの幸福をみんな壞すと云つたな。併し今俺が此儘歸つたとしたら、どうだらう。俺は俺の希望を二つとも壞されて、生きてゆく空は無いんだぜ。だからどうか承知して吳れ。賴む、賴む。

留二（顏をあげて）兄にや、おめえ眞實に、商賣にや見込があんのか。

留吉（悲しげに）うむ。きつとどうにかなると思ふんだ。

留二　さうすれあ、借金の方は直ぐ返せるんだな。

留吉　さうだ。だから諾いて吳れ。

留二　ぢや間違ひのねえやうに、きつと返して吳れるんだな。

留吉　うむ。潰すやうな事は決してしない。

留二　兄にや、仕方がねえ。おらおめえに家を任せべえ。

留吉　貸して吳れるか。有難う。有難う。兄さ

んは此通り拜むよ。それでやつと助かつた。有難う。有難う！

留二　おめえはそんなに嬉しいべけんぢよ、俺あ餘り心持がよくねえ。兄にや、おらこんなことまでして、お豊ちやんを貰ふのかと思ふと、おめえを恨まずにやゐられねえよ。

留吉　堪忍して呉れ、なあ留二。此償ひはきつとするぞ。

留二　（立上つて）そんぢやあ、早く父處さ行つてその事を相談して見べえ。

留吉　さうして呉れるか。おまへも一緒に願つたら、お父さんだつて貸して呉れないこともあるまい。ぢや賴む。（立上る）

留二　一緒に行つて賴んで見べえ。併しお豊ちやんの方は大丈夫だべな。

留吉　うむ。大丈夫、おまへのものにする。

（二人は左手へ退場する。しばらく舞臺空虛となる。渡り鳥頻に啼き、瀨音の夕鳴りが其間にはつきり聞える）

（やがて左手から久作爺が首を振り乍ら出て來る。彼は何かとつぶやき乍ら、柿の木の下に干した豆類を片付け始める）

（そこへ隣人登場。三十歲を越した實直さうな農夫である）

隣人　やあ久作さん。お稼ぎだない。

久作　あんまり稼えでもゐねえよ。

隣人　どうだい。旦那は、機嫌がいゝかい。

久作　餘りよくねえ。よくねえつたつて、俺あ馴れてつからかまあねえけんぢよ、馴れねえ人にあ何だか怖かなかつぺな。

隣人　そんぢや今日は行かねえ方がよかんべか。

久作　何か會はなくてなんねえ、用でもあんのかい。

隣人　用つちふ程の事あねえ。只、今日糶市であの博勞の猪八さんから言傳と賴まれただ。

久作　さうか。そんな事だら、おらが聞いとくべえ。今丁度母屋では、內輪の相談みてえなものがある模樣だつたから、それで俺も此處さ逃げてゐるのよ。うん。今日はおめえ糶はどうだつたい。

隣人　每年變りもねえけんぢよ、今年は一匹すてきもねえいゝ馬が出た。あゝ云ふのをアラビア馬つてでも云ふんだべて。あんな馬あ、御料地の牧場でも出來めえつて、評判だつた。その値がよ、三千兩たあ、魂消るでねえか。

久作　他人の馬に魂消たつてしようねえ。三千兩が五千兩でも、俺たちあ係りのねえこつた。

隣人　さうおめえ一概に云つちめえば、世の中にあ俺たちの面白えものあ、無くなつちまふべ。おめえみてえに、何でもかんでも、見てえとか聞きてえつちふ氣を起さなくなるのは、あんまりいゝ事でもあんめえがな。

久作　それあさうだ。おらだつてそいつあ解つてるんだ。けんぢよも仕方がねえ。日にち每日、のんべんだらりと成るやうになつて行くのよ。此頃あ糶だなんて、見る氣もしねえ。

隣人　每年同じやうなもんだけんぢよ、あれで俺たちにあ面白えよ。今年は馬の數も澤山出た。儲けた博勞もあつたんべ。此方の猪八つあんも、大した景氣だつた。

久作　さうかな。してその言傳ちふのは。

隣人　今日はもうすぐ歸つから、此家さ泊めて呉れるやうに、お豊ちやんに賴んで置いて貰ふべえちふ事だつた。

久作　なんだ、わざ／＼そんなことかい。

隣人　あの端れの田中屋で、べろん／＼に醉つぱらひ乍ら、云つたんだから、當にもなるめえけんぢよ、俺あ賴まれただから、云はなくてなるめえと思つて。——

久作　いや、さうかい。それあ御苦勞だつたな

い。そんぢや言傳は確に聞いときやすから。

隣人 そんぢや何分お頼み申しやす。左樣なら。お稼ぎなんしよ。

久作 左樣なら。有難うごわした。

（隣人退場する。間。やがて父久作も片付け終つて、そこを去る。長い間。夕日がだんだん薄れる）

お豐、そーつと出て來る。四邊を見廻して柿の木へ藁を結びつけ、そつと納屋の中へ入る。長い間。しばらくして、留吉、以前よりもつと物思ひに沈み乍ら、出てくる。而して柿の木の下まで來て、ふと相圖の藁屑に目をとめる。悲しげに微笑む。それから輕く二つほど咳をする。納屋の戸口にお豐あらはれそつとさし招く。留吉、行かうとして、一應あたりを見廻す。ふと何かを認めて、急いでお豐に隱れるやうな相圖をする）

（書記の高橋、右手から出てくる）

高橋 あ、留吉つあん。いゝ處にゐて呉れた。おらおめえさん家さ來つと、きつと父何か云はれつぺと思つて、家の人にわかんねえやうに、どうかしておめえさんに話ができる法はねえかと、そればかり工夫してたわい。

留吉 僕あ今鳥渡用事があるんだがね。一體話つて何なんだい。何なら、又晩にでも僕が君ん處へ行くから、そん時にして呉れないかい。

高橋 いや、すぐ解ることなんだ。實は、昨晩の君の話だがない。高利でも出來るんならいつちふ譯だつたが、俺の知つてる金貸が、今日ふいと役場さ登記に寄つてない、それから話してみたら、模樣に依つて相談に乘らうちふんだ。それで向うでも一應あんたに會ひてえちふもんだから、そこまで連れて來たんだがない。出來る出來ねえに拘らず、鳥渡くら會つて見ねえかい。

留吉 併し君高利でも抵當か何かは要るんだらう。

高橋 それあ有るに越した事はあんめえけんぢよ、表向き無くつても、長男なら親か誰かの連判があればいゝんだとか云ふ話だぞい。

留吉 高橋君、僕あもう絶望だ。抵當も無ければ、何にも無いんだよ。親爺が到底許さないんだ。いや、許さないのぢやない許したくても無いんだ。もう去年の養蠶の大失敗の時、農工銀行から借りた金の抵當に大半入つてゐるんだとさ。

高橋 まあさう氣を落しなさんな。さうならそれで亦覺悟の極めやうがあつぺでねえかい。まあ兎に角會つて見なせえよ。今日は只會つとくだけでもよかんべ。どんな時のたしになるかも知れねえから。

留 さうだねえ。

高橋 鳥渡顏を合せてだけ呉れ給へよ。でねえと、俺がいゝ加減な譃を云つたやうで、惡いから。ほんとに鳥渡くらでもいゝから。

留吉 ぢや兎に角お目にかゝるだけかゝらう。どこにゐるんだい。

高橋 あの土橋の處に待つてるんだから、すぐだわい。

（二人右手へ急いで去る。長い間。お豐入口からそつと現はれて戸外の樣子を見送る。しばらくぢつと立つてゐる。やがて遠くから醉つぱらひの聲が聞えてくる。だんだん近くなるとそれが猪八叔父の叫び聲であるのがわかる。お豐急いで姿をかくす）

（博勞猪八、泥醉して右手より入り來る）

猪八 （舌のまはらぬ大聲で）さあ歸つたぞ……お豐！……出て來い、……女ろつ子！……水持つて來い……叔父さんのお歸りだ。……約

束通り寄つたんだ……お豐！　出て來い……出て來ねえな女！……（藁の上に倒れたまま喚いてゐる）

（其時納屋の中にゐたお豐は、あまりの見幕に恐れをなして、内から納屋の板戸をそつと閉める）

猪八　（ふと納屋の戸の動くのを見つける）おや、獨りでにあの戸が閉りやがつたぞ！　不思議なこともあればあつたもんだなあ。誰だ、そこにゐるのは。誰だ。（答なし）誰だ！

（猪八猛然と起き上つて納屋の方に走り寄り、戸をあけようとする。あかず。更に力をこめてぐつと半ば開ける。そこから覗き込んで）やあ、お豐か。何だつてこんな處にゐるんだ。

（身をひるがへして、全く中に入る。而して一瞬の間に戸を閉める）

（夕日は全く影を收めて、薄闇が蒼茫と漂つてくる。しばらくして留吉、左手より現はれ、又四方を見廻す。而して又誰かを見出して、立佇つて、心急き乍ら待つてゐる）

（郵便夫、同じく左手より入り來る）

留吉　手紙ですか。

脚夫　阿久津留吉殿、あなたですか。

留吉　さうです。（受取る）御苦勞さま。

（郵便夫退場する。留吉急いで裏を返して見、慌てて封を切る。讀む。讀み進むに從つて彼の動作には明かに驚愕の樣子が現はれる。絶望の表情をする。彼は殆ど叫びを發せんばかりになつて、手紙を握りつぶしたまゝ、頭髮をかきむしる）

（その時、納屋の戸を押し開いて、猪八お豐を捉へたまゝ出て來る。留吉それを見ると、驚いて藁塒の陰に隱れ、樣子を窺ふ）

猪八　さあ來い、一緒に來い、一緒に來て俺の嚊になれ。約束でねえか。おめえまさかあの八朔一日の晩の事を、まだ忘れはしめえな。あん時から、もうおめえは俺のものなんだぞ。だから俺ん處さ來て嚊になれ。……何、厭だ、厭だつてしようがねえ。俺あどうしてもおめえを嚊にするんだから、何でも彼でも一緒に來い。留吉になんぞやつて堪るものか。さあ來い。來い。（と猶も引立てようとする）

（留吉堪らなくなつてつか／＼と進み出る）

留吉　叔父さん、何をしてゐるんです。何を云つてゐるんです。

猪八　（驚いて手を放す）む。おめえ、そんな處にゐたのか。さうか。俺あ何にもしてねえ。何にもしてねえよ。（とぶつ／＼云ひながら、逃れる如く退場する）

（留吉呆然その後を見送つてゐたが、直ぐ氣づいて、處に泣き伏してゐるお豐に近寄り、引起すやうにする）

留吉　（きつとなつて）お豐ちやん、おまへ何してゐた。（答なし）叔父さんと何してゐたんだ。何を云はれてゐたんだ。（答なし、泣くのみ）泣いてたつてわからないぢやないか。何をしてたか訊いてるんだよ。（急に狂ほしく）何をしてた。云へ、云へ、云へ。（襟を捉へて突き倒す）賣女！　云ひたくつても云へめえ、どの口でおめえは昨日譃を吐いた。どの口で男を知らねえなんて吐かしたんだ。どの口で留二とは何の關係もねえと白ばくれたんだ。叔父さんの云つた事は、あれやあみんな本當だらう。さあ返事をしろ。云ひ譯があるんなら云つて見ろ。

お豐　（泣き乍ら）留吉さん、それあ餘りひどい……いくら何だつて、そんな事はねえ、そんな事はねえぞい！

留吉　駄目だ、駄目だ。口で打消したつて。現在の證據があるから駄目だ。俺あおまへのやうな淫賣婦に、今までからしてかゝり合つて

たかと思ふと情けなくなるよ。おめえのやうな獣に、今の今まで心を引かれて、恥を忍び乍ら此處におめ／＼と殘つてゐた俺は、何と云ふ馬鹿だつたんだ。（泣き聲で）かう云ふのも未練のやうなけれどもな、お豐、俺はたつた今まで何を失くしてもおまへだけはまだ殘つてゐると思つてゐたんだ。それがどうだ。俺にはもう何もない。全く何の希望もなくなつて了つた。（ふと聲を低めて）俺はもう行くんだ。此家にも、穢れたおまへにも用はない。（行かうとする）

お豐　留吉さん、待つて下さい。

留吉　何を云ふんだ。

お豐　おらが心はきつとあんたにお目にかけます。きつとこの申譯は致します。

留吉　そんなことは聞きたくもないよ。そんな必要はどこにあるんだ。俺はもう行つて二度とは歸つちや來ないんだ。おめえは留二の嫁になるなり、猪八叔父の嬶になるなりして、立派に暮して行つたら、それでいゝぢやないか。俺はおまへに思ひ殘りも無い。おまへだつて俺に思ひ殘しをして呉れるな。ぢやほんとに俺は行くからな。おまへから皆に宜しく云つて呉れ。左樣なら。

（お豐泣き伏す。留吉思ひ切つて行きかゝる。而して舞臺鼻の所まで來て立佇る。ぢつと遠方の空を眺めるやうな眼で、眞向うを見る。それから靜に又お豐の泣き倒れてゐる所へ歸る）

留吉　お豐ちやん、俺はおまへにだけ云つて置くがね。俺は到底東京へは歸れないんだよ。俺はな、ほんとは此處へ資金を調達に來たんぢやないんだ。實は主人の金で株へ手を出して、三百圓ほどすつて了つたんだ。そして其才覺に來た譯なんだ。だから其金が手に入らない中は、東京へ歸る譯には行かないんだよ。（間）殊に今來た手紙で見れあ、どうやら主人も感づいたらしい。だから愈々外で金を才覺しなくちや歸れないんだ。

お豐　では東京さ歸らなければどこさ行くの。

留吉　解らないんだ。どこか友人でもたよつて探して見るんだ。（間）でも大方、行きつく所へ行くだらうよ。ぢや左樣なら。俺のことを時々は思ひ出してお呉れよ。

お豐　では、おたつしやでゐて下さい。此お詫はきつとしますぞい。

（留吉右手へ退場する。お豐一人殘つて泣いてゐる）

（四邊には闇が迫つてくる。阿武隈の瀬音がはつきり聞える。長い間。母屋の方で留二が「お豐ちやん、お豐ちやん。」と呼ぶ聲が聞える。その聲を聞くとお豐はきつと立上る。而してぢつと耳を澄ます。それから四邊を見廻して、同じく右手へ去る）

（留二の「お豐ちやん、お豐ちやん。」と呼ぶ聲。——）

（つゞいて留二、左手よりあらはれる）

留二　（納屋の中や又四邊を見廻し）お豐ちやん！　兄にや！　二人とも一體何處さ行つたんだらう。

（彼は不安の面持でぢつと耳を澄ます）　（幕）

第三幕

再び阿久津が家の内部。舞臺は第一幕に同じ。只上手に壇を設けて、白布を掛けた二個の棺が飾られてある。その邊香華の諸具よろしくある。

前幕の翌晩で、暗い家の中には、煤けた洋燈が二つ三つ點されてある。

家には留藏、留二を初め、隣人、村人、村の

娘などが四五人、通夜に集つてゐる。幕のあいた時、佛前には僧侶が禮拜してゐる。丁度今枕經を終つた所なのである。

僧侶 （禮拜を終ると佛前を退き、皆に鳥渡會釋して座につく）

留藏 （沈鬱に）御苦勞さんでした。

僧侶 いゝや。から云ふ佛は近頃珍らしい事で、儂も功德だと思ひやすから、念入れにお經を上げやした。

留藏 有難うござりやした。

僧侶 留藏さん。あんたもかう一度に二人お取られなすつちや、淋しうござせうな。

留藏 いや。別に。――腹が立つ位なものですよ。死んだ不所存者は何にも知らずに往生しやせうが、後に殘つたわし共は、これから下らねえ噂話を聞かされるんですからな。死に恥を晒すなんて、考へて見れあ馬鹿な奴等です。

僧侶 死なずに濟まなかつたんでせうかな。

留藏 それができさあ、何も死んで恥を晒さなくちやなんねえ譯が解んねえんでがすよ。尤もあの野郎の心持は、もとから少とも解んなかつたんですけんぢよもな。

僧侶 矢つ張り若氣の過失かな。ほんに若え人たちには困つたもんだ。（娘たちを顧みて微笑する）

留藏 （娘たちに）さあ〳〵、おめえさん達、折角來て呉つちやんだから、線香でも一本づつ上げて行つて呉んちえゝ。而しておめえさん達も、よくおら家のお豐を見せしめにするがいゝ。

僧侶 さうだ。全くだ。そして平生のお豐ちやんを見習つて、みんなおとなしくするんだ。

娘一 でもおら等だつて、一緒に死んで呉れる人があるんなら、死んでもいゝと思ふわない。

娘二 さうだわ。ほんとだわない。（互にうなづき合ふ）

娘三 だけんぢよ、死ななくては、一緒になれないなんて、何て因果なんだべない。ほんとに可哀さうだない。

留藏 さあ〳〵、いくらそんな事云つたつて始まんねえ。それよつか早く線香でも上げて呉んちえゝよ。

娘一 ではおら等が先に線香を上げてもいゝんですかい。

僧侶 さあ〳〵遠慮しねえで上げなんしよ。

（娘ら點頭き合つて、交る〳〵佛前へ進み、禮拜する）

僧侶 どれ、そんなら出掛けべえか。

留藏 もうお出掛けですか、留二、提灯をつけてあげろ。

僧侶 では皆さん。お先きへ左様なら。（默つて留二が差出す提灯を受取つて、）いや、どうも有難う。留二さん、おめえも力を落しなさんなよ。人それ〳〵の壽命てえものは仕方がねえもんなんだからな。いゝかな。（留二默つてうなづく。それを見て出入口から外へ出る）ほう。天の川が眞つ白だ。だん〳〵秋も深くなるて。左様なら。（去る）

（沈默。――）

（やがて娘たちもめい〳〵に挨拶して歸つてゆく。）

（留二、默つたまゝ佛前に坐り、長い間瞑目してゐる。久作、歸り來る。）

久作 只今戻りやした。

留藏 あゝ久作か。どうした用は。

久作 すつかり足して來やした。あの町の葬具屋では、丁度出來てた花があつたから、今夜の中に屆けるちふ事でがした。それから、此方の墓地のことも、お豐ちやんの墓地のことも、よつく役場さ頼んで來やした。

留藏　掘り人も賴んで呉れたか。

久作　爲哥兄に萬事賴んだから、心配ありやせんわい。

留藏　さうか。御苦勞だつたな。まあ早く上つて飯でも食へ。

隣人　久作さん、御苦勞さまだつたなあ。

久作　やあ、新吉つあんか。三次郎さんもよく來て呉つちやなあ。お通夜は賑かな程いゝて。

村人　所が無口な俺達ばつかしでは、淋しくなつちまふだけのこつた。

隣人　時に今話してた墓掘りだがなあ、俺等も明日はそつちの方さ手傳ひに廻つぺ。二つの棺を入れるにや、墓穴も大きく掘らざなるめえからな。

村人　俺もそつちを手傳ふべ。

久作　いや、そつちの手は澤山なんだから、矢つ張りおめえさん達あ此處で色々な用をして呉んちえゝ。墓穴は別に二つ掘るんで、一つ一つ人を賴んで來たんだから。

隣人　そんぢや別々に埋めんのかい。

久作　お豐ちやんはあの人の兩親の埋まつた墓場さ埋めんだとい。

隣人　ふうむ。留藏さん、ほんとにさうするんですかい。

留藏　うむ。それが當り前だかんな。

隣人　それあ可哀さうだよ、留藏さん。一緒に埋めてやんなせえな。ちつたあ死んだ佛の心持も酌んでやんなせえよ。

留藏　おまへさんに死人の志が解るのかい。

隣人　だつて心中する位でねえか。

留藏　どうしておめえに心中だと解るんだい。

隣人　だつて一緒に死骸が上つたでねえかい。

留藏　あの小泉の堰は、どんな水死人だつて、あそこで上るんだ。一緒に上つたつて、一緒に死んだとは云へめえ。

隣人　ぢや留藏さんは心中でねえと云ふのかい。

留藏　ねえとは云はねえ。が心中だとも云へねえ。俺には何だか此事にあ譯がありさうに思ふんだ。心中にしても、何か變つた譯があつたに違えねえ。餘り樣子が變だものな。

隣人　さう云へばさうだげんぢよ、二人が惚れ合つてたのは紛れもねえ眞實だもの。矢つ張りさうと見てやるのが尋常だよ。だから一緒に埋めてやんなせえ。其方が功德だよ。

留藏　いや、たとひ心中にしても、家にはそれぞれの墓があんのだからな。

留二　此時まで佛前に瞑目してゐたが突然）父！　お願ひだ、おらも賴む。どうか兄にやとお豐ちやんを一緒に埋めてやつて呉んちえ。それでねえとおらあどうして、氣が濟まねえだ。一緒に埋めてやつて呉んちえゝ。賴む。な、父！

留藏　おまへまで何でそんなことを云ふんだ。

留二　父、おめえは何も解んねえから、心中でねえのかんのつて云ふけんぢよ、俺あ二人の心持はようつく解つてんだぞ。心中に違えねえ。きつと此世で一緒になれねえと思つて、一緒に死んだに違ひねえんだ。（泣いて）父、今だから俺云ふがな、あの二人の仲を邪魔したものは此の俺だ。俺あ兄にやがこれほどまでに思ひつめてるとは思はねえから、お豐ちやんに横戀慕をして、無理々々に兄にやから奪つぺと思つたんだ。そして兄にやを追ひ出すべと思つたんだ。それで兄にやは死んだんだ。お豐ちやんを殺したのは俺だ。俺あ今更何ちうて佛樣に詫びたらいゝか解んねえ。せめて二人の死骸を一緒にしてやるより外はねえだ。父、賴む。どうか一緒に埋めて呉んちえゝ。賴む、賴む。おら一生のお願ひだ。さうして呉んねえとおらどうしても氣が濟まね

えだ。

留藏　（默然としてゐる。皆々も沈默）

留二　父！　ほんとに俺どうすれあいゝんだらう。俺あ二人を殺したも同樣なんだ。（身を悶えて）濟まねえ、濟まねえ。

留藏　（靜に）おまへはおまへとしてさうするより外なかつたんぢやないか。なつたことは仕方がない。心配するな。

（一座は又痛ましげな沈默にかへる。此時遠くから誰やらの喚く聲が聞えてくる。やがて猪八が、さきのやうに泥醉して喚き乍ら入り來る）

猪八　さあ誰だ。出て來い。お豐を殺したのは誰だ。出て來やがれ。一と叩きに叩き殺して吳れつぞ！　お豐を殺したなあ、誰だ。畜生！　出て來い。（上り框に腰を下ろす）

留二　（血相を變へてつめよる）叔父さん、それは俺の事ですか。その殺したのは俺だと云ふんですか。俺に出て來いと云ふんですか。

猪八　なに、おめえが殺した？　馬鹿野郞。殺した奴あ神樣が御存じだ。ふん。面白え。おめえが殺したのか。面白え、殺したと云ふんだな。畜生。さあ何だつてあの子を殺した。云ひ譯が立つなら云つて見ろ！

留藏　猪八！　何だ、そんなに醉ひ狂ひやがつて。

猪八　醉ひ狂つた？　ふん、今朝からの葬ひ酒だ。醉ふなあ、あたりめえよ。醉つて惡いのか。

留藏　皆さんも來てゐて下さるんだ。ちつと靜にしろい。此處を何處だと思つてるんだ。貴樣の目にや、二つの棺が見えねえのか。

猪八　ふん。棺が二つか。解つてらあ、吉公とお豐坊とのよ。洒落くせえ、心中なんぞしやがつて。馬鹿な野郞だ。（間）併しこれにや何か譯があんだべ。さあ出せ。から人間がぼかぼか死んで溜るか。一體誰が殺したんだ。どこのどいつが殺したんだ。（皆々沈默、叔父吾れと吾が聲の反響におびえる。低く）みんな神樣が御存じだぞ。

留二　（進み出で）叔父さん。濟みませんでした。勘忍して吳んちえゝ。俺が惡かつたんです。俺が側からお豐ちやんに惚れてゐたのが惡かつたんです。お豐ちやんを兄にやの手からとつて、自分のものにしつぺと思つたのがわるかつたんです。

猪八　ふうむ。そんぢやおめえもお豐を取らうとしたんだな。ふうむ。而してそれが惡かつたと解つたのか。（叱るやうに）惡いに違えねえ。惡いと解つたか。

留二　えゝ解りやした。全くそれがなけれあ兄にやもこんな事に、ならなかつたかも知れねえんです。

猪八　さうか。よし、さう男らしく後悔すれあ俺だつて許してやる。もう一度あやまれ。

留二　（眞面目に手をついて）濟みやせんでした。

猪八　（ぢつと其樣を見てゐたが、急に狂ほしく笑ひ出す）はゝゝゝ。おまへ眞面目であやまつてるのか。馬鹿め。はゝゝ。これつぱかしの事に、何をさうくよ〳〵してるんだ、それつぱかしの事情で、何を詫らうてんだ。なあ、おい。奴等の死んだのは、奴等のせゐで、誰の惡い爲でもねえ。てめえが惡いの、俺が惡いのつて、そんなことはねえんだぞ。世の中には惡人はゐねえや。なあ、みんないゝ人ばかりだ。惡いことをするのは、何にも知らねえで、ついうつかりやるんだ。だから心配することあねえ。なあ留二。決して心配する事あねえぞ。

留二　いくらさうは思ひなほしても、心の苛責はぬけねえんです。

猪八　はゝゝゝ。おめえみてえに氣の弱え奴にあ、何よりも藥は酒だ酒だ。おい久作。酒を出せ。酒を持つて來い。お通夜に酒は付きものでねえか。愚圖々々しねえで持つて來い。

留藏　おい猪八、おまへもうい丶加減にしてよこの臆病者に飲ませるんだ。

猪八　哥兒。おめえ酒も飲ませねえと云ふのか。

留藏　もう澤山だ。大抵にして歸れ。

猪八　あいよ。歸るよ。歸るなつて云つても歸らあ。併しなあ、歸る前に一言恨みを云ふからよく覺えて置け。一體あいつら二人を添はせめえとしたのは誰なんだ。仲を裂いた親玉は誰なんだ。死なして了つた張本人は誰なんだ。

留藏　俺だと云ふのか。

猪八　さうよ。今やつと氣が付いたのか。

留藏　（沈鬱に）おめえがさう思ふんなら、さうでもいゝ。恨みを云ふならいくらでも云へ。併しあとで正氣になつたら、誰が惡いか考へて見ろよ。

猪八　何云つてやがるんでえ、老耄れ！　正氣になつて考へたつて、惡い奴はちやんと定まつてるんだ。神樣がすつかり御存じだあ！

留藏　さうとも。神樣も許して下さらあ。

留二　（無意識に）神さまも許して……下さる……

猪八　（急に）おい久作。濟まねえが水を一杯吳れろ。

久作　はい。水だら何んぼ飲んでもよかんべ。

猪八　（受取つてぐつと飲む）それでは俺も愈行くかな。

留二　（叫ぶ）あゝほんとに俺はどうすれあいいんだ！

猪八　どうもからもねえ。生き度けれあ生きる、死にたけれあ死ぬのよ。（立上つて）さあ、俺あ行くぞ。（蹌踉と出てゆく）

留藏　（あと見送つて）醉ふと仕方がねえ奴だ。

隣人　ほんとに今夜はどうしたんですかない。

留藏　氣の知れねえ奴ばかりゐて困つて了ふ。

留二　併し叔父さんの云つた事あ、あれやみんなほんたうだ。

留藏　馬鹿を云へ。あんな醉つぱらひの云ふ事を聞いてたまるものか。人にあ一人づつ生きてゆく道があるんだ。そして其道でてんでに生きてゆかなくちやなんねえんだ。留二、もうい丶加減にしてお豐の事は忘れて了へ。すつかり忘れて働けば、明日から又お天道樣が照らあ。なあ久作。

久作　さうですとも。おめえさんはまだ若いんだもの。まだ〳〵い丶日は續くべえ。

留二　さうだ、働くべえ。そして淋しくても生きてゐべえ。

（葬儀屋の人夫ら白い葬用の造花を擔いで入り來る）

人夫　へい。今晚は。葬儀屋でござりやす。花を持つて參りやした。

留藏　あゝさうかい。御苦勞だつたな。ちや休んで一服つけて行きなさんしよ。

人夫　へい。これで御注文の二對です。（皆々花を受取つて、飾りつける。舞臺には急に白く、寂しい色調が漂ふ。沈默）

人夫　（ふと阿武隈の瀨音を聞きつけて）あの音は何ですかい。

久作　あれあ阿武隈川の音だわい。

人夫　へゝえ。（煙草を吸ふ）

（皆々沈默して、瀨音に聞き入る。この時突然一人の村人入り來る）

村人　御免なんしよ。又大變なことが出來やした。何だか此の猪八さん見てえな人が、川は

さ陷つて了つたぞな！

留藏　何、猪八が？　そいつは醉つぱらつてゐたか。

村人　にい。わしが投網を打つべと思つて、すぐそこの川縁にゐると、何だか猪八さんみてえな人が、高聲で何か云ひ乍ら土堤の所まで來たつけが、其儘眞つ直に川ん中さ落ちて了つたんだわい。

留二　それで。——

村人　可怪しいと思つたから、急いで行つて見たけんぢよ、闇をすかして見ても、はあ水の上には浮きてゐなかつたわい。

留藏　ふうむ。さうか。——

村人　あれあ何でも過失で陷つたんであんめえて。何しろ、早く行つて見てお呉んなんしよ。早く。おらこれから警察つ樣さ行つて來つから。

留藏　…………。

留二　よしすぐ行く。おい皆行かう。飛んでもねえことになつたなあ。人違えであれあいいが。——

（皆々急いで出てゆく。後には只留藏と久作と葬儀人夫だけが殘る）

人夫　どうしたんですい。一體。——

久作　又一人川で死んだのよ。どう云ふつもりなんだか俺あ知らねえ。これも時世のせゐだんべ。此頃のやうに軋み合つては、生きてられねえ人も出來て來るんだべえよ。

（靜に幕）

秋

朝顔に煤が降る月島に住む

鷗鳴きぬ朝顔に滋き雨となり

屋臺鮓もすゑ早やに歸る河燕

瀑に對す簀戸や初秋の日の光り

戰袍裕かなり秋雲は野を泳ぐ

堤走る人數あり秋晴るゝ里

軍用に伐る竹かほど秋晴れて

田園に自畫像成りぬ秋晴れて

女客もある日の茶器が秋晴れて

笑めばかほど童顔の君に秋晴るゝ

隅作りゆく鶴や牧の小屋々々に

霧に明けて轍らも軋る湯宿の戸

泣木頭雲飛べり驛に鳩鳴いて

雙棲の年火難あり秋扇

橋畔居鳶に鳴かるゝや蚊帳仕舞

蚊帳は秋にして佛具磨ぐ美妙音

遲來るや白きは摘める料理菊

史蹟說くに背くは紅葉見に立つや

貝搗く音夜長の汐に響きけり

（『牧唄句抄』より）

年譜

明治二十四年

十一月二十三日、新嘗祭の日に、長野縣小縣郡上田町で生れた。父は名を由太郎と云ひ、東京府の士族で、高等師範の前身を出た教育家だつた。母は幸子、米澤藩士、立岩一郎の女だ。一姉靜子、一兄哲夫の同胞があつた。

明治三十一年

三月、八歳の時、父の職を奉じてゐた小學校が火を失したので、責を帶びて自殺するに會ひ、一家は退いて母方の實家の所在地、福島縣安積郡桑野村開成山に移つた。

四月、遲れて同村の小學校に入學。

七月、姉を失つた。少年時の文學的感化は、此の姉と祖母よのに負ふ所が多い。

明治三十五年

四月、試驗を受けて、近傍なる郡山町の高等小學、金透學校に入學。成績良好。

明治三十八年

四月、日露戰爭の後半期に際し、高等三年を卒へて、當時居村に所在してゐる縣立安積中學校に入學。成績良好。二年生の頃より、叔父助三郎が齎らした『水彩畫階梯』を讀んで、繪畫に熱中、又運動を好んで、初め庭球をやつたが、三年生の時から野球選手となつた。技は、近眼のせゐか甚だ下手だつた。五年生の時、一度東京に遠征して、敗けて歸つた事がある。

それから、四年生の頃から、同級の同好を集めて、ふとした事から俳句を作り始め、五年生の後半頃は、學業や運動をも廢して、作句に熱中した。中學の教頭に故西村雪人先生が居て、教導して吳れたために、當時の俳壇では殆ど麒麟兒を以て目せられた。作風は當時隆盛を極めた新傾向で、河東碧梧桐氏を師と仰いだ。俳號は三汀と云つた。

明治四十五年　大正元年

四月、中學卒業。推薦により運よく無試驗にて、第一高等學校一部乙（英文科）に入學。同級に、芥川龍之介、菊池寛、成瀨正一、松岡讓、及び山本有三、土屋文明、石田幹之助、恒藤恭の諸君が居、一寸教室違ひの獨文には、倉田百三、藤森成吉、[illegible]豐吉などが居た。それから一級上の英文には、山宮允、皆川行人、佛文には豐島與志雄、新城和一、更に其上には柳澤健らが居て、一個搖籃期の觀があつた。

其頃、東京俳句會などに入り、作句に專念、一題百句を越え、碧門下の日本派俳人として、頗る有望視せられたが、一年生の頃から、當時勃興して來た新劇熱により、劇作家たらんと志し始め、遂に俳句を廢するに至つた。それ迄は大須賀乙字、荻原井泉水ら諸先輩の後を追うて俳人たらんと志してゐたのだ。

夏、萬朝報社の催しに應じ、學生徒歩旅行選手として、盛岡から東京までの紀行を物した事がある。

大正二年

九月、東京帝國大學英文科に入學。學業を馬鹿にして、聽講する事甚だ尠かつた。

大正三年

二月、山宮允、豐島與志雄、山本有三、土屋文明、柳川隆之介（芥川）、草田杜太郎（菊池）、成瀨正一らと、第三次「新思潮」を創刊。

三月、「新思潮」第二號に處女社會劇『牛乳屋

の兄弟』を掲載した。ところがそれを新時代劇協會の桝本清氏に認められ、九月、有樂座に上演されて、多大の好評を博した。二十四歳、大學二年生の秋だつた。第三次「新思潮」は、豐島與志雄を文壇に送り出して、やがて廢刊した　其後、後藤末雄氏らと共に、暫く「帝國文學」の同人だつた事がある。

大正四年

十二月、林原耕三君の紹介で、芥川龍之介を語らひ、初めて夏目漱石先生の門に入つた。そして其處で同門の諸先輩と知り、赤木桁平らの友人を得た。

大正五年

二月、芥川、菊池、成瀬、松岡ら、同期の純創作を以て起たうとする者のみを語らひ、作品を以て世に問はうとの野望に燃えて、第四次「新思潮」を創刊。初めて小說「父の死」を初號に發表した。次で「手品師」「競漕」「阿武隈心中」等をものし、やゝ好評を得た。同人の努力はそれぐ\酬いられた。

七月、大學を卒業。ハムレットに關する小論を卒業論文とした。それでも成績は中位だつた。

十一月、「新潮」に「銀貨」を發表。原稿料を得て、商賣雜誌に執筆した初めである。さう好評ではなかつた。が、其頃からだんぐ\、さうした途が開けては來た。

十二月、漱石先生を失つた。以後、暫く此の恩師の家の知遇を受けて居たが、翌年十月頃、事があつて出入を止められ、一旦鄕里へ歸つた。其間に、友人松浦嘉一氏の紹介で神田なる錦城中學に教鞭を取つた事がある。

大正六年

七月、「地藏教由來」を「中央公論」に發表した。

大正七年

初頭、再び捲土重來の志を固めて、直ちに上京。

二月、「受驗生の手記」をものし「黑潮」に發表した。

三月、母を呼び、本郷五丁目四十三番地に居を定め、作家生活を始めた。

四月、當時の時事新報社會部長千葉龜雄氏の囑に依り、菊池に薦められて、同紙上に連載小說「螢草」を掲け始め、頗る好評を博した。――且之が緣となり、後年ずつと時事新報社の客員として、「不死鳥」「赤光」「冷火」「晴夜」等を順次に連載した。

五月、初めて短篇集「學生時代」を新潮社から出版した。

大正八年

一月、小村欣一、長崎英造、大島直道、三宅周太郎の諸氏、及び小山内薰、吉井勇、久保田万太郎、長田秀雄、里見弴、田中純らの演劇愛好者と共に、國民文藝會を起し、演劇改善運動の盟を結んだ。

二月、激烈なる流行感冒に罹り、生死の間を彷徨してやうやく癒えた。此の豫後は永く、靜思の機會を與へた爲か、此頃からやゝ藝術にも生活にも落着を見出すやうになつた。――快癒後「山」等の作があつた。

七月、「三浦製絲場主」を「中央公論」に發表した。

十一月、里見弴、吉井勇、田中純らと共に同人となり、雜誌「人間」を發刊。是ら同人との交遊は、藝術及び人生觀に、善悪共に與へられる所甚だ多かつた。此頃、「良友悪友」「大人の喧嘩」等を作つた。

又此年九月より「婦人公論」に長篇「空華」を連載し始めた。婦人雜誌へ長篇を載せた初めである。

大正十年

三月、「和靈」をものして四月の「改造」に發

表した。此頃から、やうやく藝術の上でも人生の上でも、三十而立の感を覺えた。

大正十一年

正月より十二月迄の『主婦之友』誌上に、自傳的長篇小說『破船』を載せた。作者青春の大半を掩うてゐた思ひを、割り合に穩な心持で、藝術的記錄に止めらる餘裕を生じたからだ。是は好評だつた。

大正十二年

九月、鎌倉長谷に於て大震に會つたが、災害激甚の中にあつて幸ひに無事。十一月、奧野艶子と帝都復興の煙塵裡に結婚した。

大正十四年

正月、『墓參』其他の作を發表した。『墓參』は『敗者』『破船』其他すべての決算で、是で半生の迷夢から脫離し得た觀がある。

二月、一家を擧げて鎌倉大町藏屋敷に移つた。一身の健康上からではあつたが、四圍の風物時候、なか／＼意に適つたものが多いので、以來此處を墳墓の地と定めた。又此月より、友人田中純が許にて偶然知己となつた一飛行將校の、淒慘な人生記錄を材料とせる長篇『天と地と』を『婦女界』に連載し始めた。

大正十五年　昭和元年

十二月、約二年に亙つた『天と地と』を完成。

昭和二年

二月、鎌倉雪ノ下なる偶居に移る。

五月末日、長男昭二を擧げた。

六月、『天と地と』を文藝春秋社より、短篇集『木靴』を改造社より出版。後者には作者最近の短篇多きを以て、本集の讀者が併讀の榮を得ば幸甚。

七月、親友芥川龍之介の冷乎として自裁するに逢ひ、發すべき言葉も無いのを感じた。

昭和三年

依然として筆を執る傍ら、時事新報社客員、東京中央放送局顧問等の職を兼ねて居る。

夏

運河却つて國を亡ぼしぬ雲の峯

樂屋團欒して鮓壓せり夏朧

利根へ七つ運河の茶屋の帆掛鮓

薫風に紫蘇摘みしよりの恙なる

送ろ灯に君が履明し時鳥

時鳥衣架辷る風の白き夜や

非人頭住む松高し蚊喰鳥

蝙蝠や出水明りに書く手紙

蝙蝠や囚屋にもかゝる時計臺

泳ぎ出て日本遠し不二の山

（『牧唄句抄』より）

昭和三年三月二十五日印刷
昭和三年四月一日發行

現代日本文學全集　第三十二篇

著者　近松秋江
著者　久米正雄
發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番　一一二二番　一一二三番　一一二四番

株式會社秀英舍印刷